†デジモン エクシード†～Novus Vinculum～

トリプルミーミング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
†デジモン　エクシード†～Ｎｏｖｕｓ　Ｖｉｎｃｕｌｕｍ～

【Ｎコード】
Ｎ７４３１Ｒ

【作者名】
トリプルミーミング

【あらすじ】
アドベンチャー、０２、テイマーズ、フロンティア、セイバーズ、クロスウォーズ、そしてエグザ。これまでの選ばれし子供達の活躍によってデジタルワールドは何度も平和を取り戻した。

しかし、２０ＸＸ年。平和になったデジタルワールドを再び闇に染めようと企む黒影がいた…。

※この作品はオリジナルデジモンが登場します（一部イラスト有）。

予めご了承の上、ご理解ください。

†Ｐｒｏｌｏｇｕｅ†（前書き）

どうも、作者のトリプルミーミングです！！

ついに待望の新作来ちゃいました！！

本日から『デジモン　クロスウォーズ、新章突入！！』なので、いっその事同時に連載しました！！

精一杯頑張りますので応援よろしくお願いします！！

それでは、†Ｐｒｏｌｏｇｕｅ†スタート！！

†Prologue†

～???～

暗闇の中、正体不明の黒い影が潜んでいた…。

???「ククククク…。ようやく復活した…。私をコケにした哀れな人間と愚かなデジモン…。ついに、私の復讐が始まる!!」

黒い影は手を広げて高らかに笑う。

???「さぁ、私の研究成果、『心を邪悪にする者　イビルス』よ…。デジタルワールドを支配するのだ!!」

イビルスと呼ばれる人間でもなくデジモンでもない、謎の生物はニヤリと笑いながら姿を消した。

???「見ていろよ憎き人間とデジモンめ…、私が全て引き裂いてくれる!!このアナログマンがな!!!!」

アナログマンと名乗る男は高らかに笑うのであった。

～東京都　新宿区～

今宵の満月、辺りはすっかり暗く、街は闇に染まっていた。

???「う、う～ん…。」

幼い少年はゆっくりと目を開けると、目の前は車が横倒れで火事に

なっていた。

少年（か、身体が…動かない…。）

どうやら幼い少年は、事故により車から落ちて、瀕死の重傷を負ったのであろう。

幼い少年は虚ろな目で回りを見渡すと、金髪の男が倒れていた。

少年「と、父さん…。！？」

すると、幼い少年の父親の側に、謎の男が後ろ姿で立っていた。

少年（誰…？）

すると、謎の男は高笑いする。

？？？「ク、ククク…。フハハハハ…！！」

少年（父…さん…。）

すると、幼い少年はそのまま気を失うのであった。

そう、それが全ての始まりだった…。

＞ｉ２３３７２―１２９８＜

【絵：トリプルミーミング】

†Ｐｒｏｌｏｇｕｅ†（後書き）

デジモンワールドに出てきたアナログマンが復活！？

そして少年の父親を殺した謎の男の正体は！？

ついにＥｐ０１スタートです！！

Ｅｐ０１　～冒険の始まり～（前書き）

ついにＥｐ０１です！！

新たなる冒険がついに幕を開ける！！

因みに、『Ｎｏｖｕｓ　Ｖｉｎｃｕｌｕｍ』とはラテン語で『新たなる絆』です！！

それでは、Ｅｐ０１スタート！！

ＥＰ０１　～冒険の始まり～

～兵庫県　神戸市～

春の新学期。満開に咲く桜はやがて舞い散り、この神戸の街へと降り注ぐ。

＞ｉ２０８９０―１２９８＜
【写真：トリプルミーミング】

とあるマンションで目覚まし時計がなり響く。

＞ｉ２０８９１―１２９８＜
【写真：トリプルミーミング】

（ジリリリリ～！！）

？？？「う～ん…。」

青年は目覚まし時計を止めると、ゆっくりと起き上がる。

青年「ふぁ～…。よく寝た×２…。」

青年はアクビをした後、頭をポリポリとかく。

？？？「リュウギ、早くしないと遅刻するわよ！！」

すると、ドアの奥から母親の声が聞こえてくる。

リュウギ「はいよ～。ふぁ～…。」

リュウギと呼ぶ青年はアクビをしながらリビングへと向かった。

母親「入学早々遅刻なんてしたらダメよ！」

リュウギ「分かってる×2。」

彼の名は御縞（みしま）　龍義（りゅうぎ）。ごく普通の中…ではなく今日から高校生。

リュウギは寝ぼけながら食パンを食べる。

（ピロピロピロ…♪）

すると、テーブルの上に置いてあるリュウギの携帯電話が鳴る。

リュウギ「メールか…。」

リュウギはメールの内容を読むと、こう書いてあった。

『遅刻するんじゃないわよ！！遅刻したら承知しないから！！』

すると、リュウギは頭をポリポリとかき、小さくため息をつく。

リュウギ（母さんと一緒の事言ってやがる…？）

リュウギは心の中でツッコんだ後、『了解～。』と返信した。

リュウギ「ったく…。俺は子供じゃないっつぅの…。」

リュウギはブツブツ言いながら紅茶を飲もうとした瞬間だった。

（ピロピロピロ…♪）

リュウギ「ん？」

紅茶を飲むリュウギはメールの内容を読むと、こう書いてあった。

『もう広場にいるから急いでよね…。』

リュウギ「ブッ！？」

突然、リュウギは飲んでいた紅茶を吐き出す。

リュウギ「ゲホッゲホッ！！」

母親「ちょっとリュウギ、どうしたのよ！？」

すると、リュウギは慌てて学校に行く支度をする。

リュウギ「学校に行ってくる！！行ってきまーす！！」

リュウギは超特急で広場へと向かった。

母親「これで、遅刻はなさそうね…。」

母親は小さくホッとするのであった。

～広場～

＞i20892—1298＜
【写真：トリプルミーミング】

リュウギの住むマンションから降りてすぐそこに広場があった。

？？？「遅いわねリュウギ…。」

そこに、橙色の髪をした少女がイラ立ちながらリュウギを待っていた。

リュウギ「ミソラ～！！」

すると、リュウギが慌てた様子でマンションから出てくる。

ミソラと呼ぶ少女は膨れっ面になる。

ミソラ「遅い！！」

リュウギ「朝メシ食ってたんだから仕方ねぇだろうが！」

彼女の名前は足立（あだち）　美空（みそら）。リュウギとは古くからの幼馴染みであり、小学４年生から中学まで奇跡的に同じクラスだった。

ミソラ「だったら朝早く起きたらいいじゃないの！！」

リュウギ「俺の朝の起床は7時！！それが俺の流儀なんだよ！！」

ミソラ「もう、アンタの流儀は分かったから早く学校に行くわよ！！」

ミソラはリュウギの手を掴んで無理矢理にでも連れていく。

リュウギ「ってうぉーい!?」

～通学路～

マンションから学校に繋がる桜のアーチを通るリュウギとミソラ。

リュウギ「ちゃんと俺の流儀を聞けよな!!人がちゃんと解るまで言うのも俺の流儀だ!!」

ミソラ「ハイハイ、アンタの流儀はもう飽き飽きなのよ…。」

ミソラは飽きれた顔をする。

リュウギ「だからなんだってんだよ!!俺はなぁ…」

ミソラ「うるさーい?」

その時、ミソラは握り拳を作って思いきりリュウギに殴りに掛かった。

リュウギ「ゲッ!?」

リュウギは素早くしゃがんで緊急回避すると、ミソラの拳は桜の木に直撃した。

リュウギ「ちょ、ミソラ…。」

すると、リュウギの真上から大量の桜が落ちてきてリュウギは生き

埋めになってしまった。

リュウギ「どわぁぁぁぁ！？」

ミソラ「しつこいわよ…？」

リュウギ「ワ、ワリィ…？」

（そうだった…。ミソラは空手をしていたんだった…？）

因みに、ミソラの父親は警察官で空手を教えている。ミソラは幼い頃、父親から空手を教わり、中学時代空手部の主将を務めており、県大会で優勝経験もある。

それにより幼馴染みであるリュウギは毎日震え上がっているのであった。

ミソラ「分かればよろしい…。さ、早く行くわよ！」

リュウギ「あ、あぁ…？」

リュウギは歩きだそうとすると、何かに気付いて思わず足をピタリと止めた。

リュウギ「ん？」

リュウギはよく見ると、草陰から小さな光が見える。

リュウギ（なんだ？）

リュウギは小さな光を拾うと、腕時計だった。

リュウギ「なんだこれ？時計か…？」

腕時計とは言っても、もう何も動いておらず既に壊れていた。

リュウギ「……。」

すると、リュウギは壊れた腕時計をポケットの中に入れる。

リュウギ「ったく、ここでポイ捨てするなんて常識のない奴だ…。ゴミならちゃんとゴミ箱に捨てろよな…。後でちゃんと学校で捨てるとしようか…。」

ミソラ「リュウギ、早くしないと遅刻するわよ！！」

遠くからミソラが叫ぶと、リュウギは急いで学校へと向かった。

～有野北高等学校～

＞ｉ２０８９３―１２９８＜

【写真：トリプルミーミング】

入学式を終え、リュウギとミソラは教室へと向かった。

ミソラ「また一緒のクラスだね！」

リュウギ「マジかよ…。」

（先が思いやられる…？）

リュウギは心の中でため息をつくのであった。

リュウギ「ん？」

すると、リュウギはヘアバンドした青髪の男と偶然目が合った。

？？？「何を見ている…？」

リュウギ「いや、別に…。」

すると、青髪の男はフンと鼻を鳴らす。

リュウギ「……。」

（感じ悪いなぁ…。）

リュウギはまぁいいかと適当に流した。

ミソラ「それよりリュウギ、さっき何をしていたの？」

ミソラはさっきの事が気になっていたらしい。

リュウギ「あぁ…、実はなぁ…」

リュウギはそう言いながらスボンのポケットから壊れた腕時計を取り出そうとする。

リュウギ「あれ、ねぇぞ…？」

ミソラ「どうしたの？」

リュウギ「ない…。おかしいなぁ…？」

ミソラ「捨てたんじゃないの？」

リュウギ「バカ言うな。俺は絶対にポイ捨てなんてしない！何せ、それが俺の…」

ミソラ「流儀。でしょ？」

リュウギ「ま、結局ゴミ箱に捨てる予定だったから、いいか…。」

ミソラ「そこはいいのかい…？」

（キーンコーンカーンコーン…）

チャイムが鳴ると、担任の先生が入ってくる。

担任「今からホームルーム始めるぞ。入学式が終わって…」

リュウギ（確かにポケットの中に入れたんだけどなぁ…。どっかで落としたのかな…？）

？？？「こっちだ…。」

その時、何処からか声が聞こえてくる。

リュウギ（誰だ！？）

リュウギは回りを見渡す。しかし、回りの人達は先生の話を聞いていた。

すると…。

？？？「胸ポケットだよ…。」

リュウギ「？」

リュウギは胸ポケットを調べると、探していた腕時計が見つかったのだ。

リュウギ「あった！！！！」

リュウギは思わず声を上げながら立ち上がる。すると、回りの人達はリュウギに注目する。

リュウギ「あ…？」

担任「御縞、何をやっているのだ？」

すると、リュウギは顔を赤らめてゆっくりと席に座る。

リュウギ「す、すいません…？」

すると、回りの人達はクスクスと笑いだす。

ミソラ（何をやっているのよリュウギったら…？）

ミソラは小さくため息をつく。

リュウギ（は、恥ずかしい…？）

すると、ヘアバンドをした青髪の青年は呆れてフンと鼻を鳴らす。

？？？「フン…。」

そして…。

担任「これでホームルームは終わりだ…。帰っていいぞ！」

すると、生徒達は教室を出て帰宅していく。

リュウギ「はぁ～…？」

リュウギは先程の事で深くため息をつく。

ミソラ「こっちがため息つきたいくらいだわ…。」

リュウギ「ミソラ…。」

ミソラ「それで、何を見つけたのよ？」

リュウギ「あ、そうだ。これなんだよ。」

すると、リュウギは胸ポケットから先程の腕時計を取り出した。

ミソラ「何…それ？」

リュウギ「何って、さっき拾ったんだよ。」

ミソラ「まさか、そのガラクタが見つかって思わず声出しちゃったの？バッカみたい。」

ミソラは呆れてため息をつく。

リュウギ「バカで悪かったな…？ずっと探していたら、誰かがこの時計の在り処を教えてくれたんだ。」

ミソラ「一体誰なのよ？」

リュウギ「そんなもん知るわけねぇだろ…。もしかしたら…」

すると、リュウギとミソラは腕時計をじっと見つめる。

リュウギ・ミソラ「……。」

ミソラ「ま、まさかねぇ？」

リュウギ「だ、だよなぁ？」

ハヤテとミソラは冗談気に笑いだした。

その時だった。

？？？「伏せろ！！」

リュウギ「！？」

すると、リュウギは謎の声に言われた通りに、ミソラと一緒に伏せた。

ミソラ「ちょ、ちょっとリュウギ！？」

その時、野球ボールが教室の窓に直撃して窓が割れた。

ミソラ「キャッ！？」

野球部員「すいませーん！！大丈夫ですか！？」

すると、外から野球部員が謝る。

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

（危なかった…。あともう一歩遅かったら、直撃していたぞ…。）

ミソラ「リュウギ…？」

リュウギ「ミソラ、大丈夫か…？」

ミソラ「うん、私は大丈夫…。それよりリュウギ、よく気付いたわね…。私でも分からなかったわ…。」

すると、リュウギは小さく呟く。

リュウギ「同じだ…。」

ミソラ「え？」

すると、リュウギは立ち上がって回りを見渡す。

リュウギ「誰だ！？」

ミソラ「ちょっとどうしたのよリュウギ！？」

リュウギ「さっき、時計の在り処を教えてくれたのも、伏せろって教えてくれたのも同じ声だったんだ！」

ミソラ「ひょっとして、幽霊！？」

すると、ミソラは震え上がる。

リュウギ「何処だ、出てこい！？」

すると、何処からか謎の声が聞こえてくる。

？？？「こんなに反応良い奴はお前が初めてだぜ…♪」

リュウギ「誰なんだお前は！？」

ミソラ「え、なになに！？私には聞こえないわよ～？」

？？？「お前みたいなＣＯＯＬな奴はオレのパートナーに相応しいぜ♪そんなに知りてぇなら最上階まで来な！！」

謎の声は静かに消えていった。

リュウギ「最上階？学校の屋上か！！」

リュウギは感付き、急いで屋上へと向かった。

ミソラ「ちょっと待ってよリュウギ！？」

ミソラは慌ててリュウギの後を追い掛ける。

～屋上～

屋上まで上がるリュウギとミソラ。しかし、屋上には誰もいなかった。

リュウギ「何処なんだ…？」

ミソラ「リュウギ、あれを見て！？」

ミソラは空に向けて指を差した。リュウギは空を見上げると、青空ではなく、オーロラのごとく美しく輝いていた。

リュウギ「な、なんだ！？」

すると、リュウギの胸ポケットから聖なる輝きが満ち溢れる。

ミソラ「え！？」

リュウギは胸ポケットを調べると、腕時計が聖なる輝きに満ち溢れていた。

すると、腕時計はやがて姿を変えた。

リュウギ「こ、これは…？」

？？？「そのＤ－アクセルを空に翳しな！」

リュウギ「何をするつもりだ！？」

？？？「こっからは究極の選択だ！！世界を救うか？それとも尻尾巻いて逃げるか？」

すると、謎の声の言葉にムッとくるリュウギ。

リュウギ「上等だ…。尻尾巻いて逃げるなんてそんなの男じゃねぇ…。お前が何者なのか知らねぇが、正々堂々立ち向かう！！それが俺の流儀だ！！」

？？？「決まりだな…♪」

すると、姿を変えた腕時計が更に光に満ち溢れ、リュウギとミソラは光の閃光に包まれた。

リュウギ「うわぁぁぁ

リュウギ「学校…じゃない？何処なんだよここは？ってうわ、服が変わってる！？」

リュウギは何がなんだか頭の中で混乱する。

その時、ミソラの悲鳴が聞こえてくる。

ミソラ「きゃやややややややややややややややや！？」

リュウギ「ミソラ！？」

リュウギは急いでミソラの悲鳴が聞こえた所へと向かった。

とある森の中、ミソラは緑ナメクジのような生物に追い掛けられていた。

リュウギ「な、なんだあれは！？ナメクジ！？」

よくよく見ると、緑ナメクジはメロメロになりながらミソラを追い掛けていた。

ミソラ「近寄らないでよ～！？」

リュウギ「もしかしてあの緑ナメクジ、ミソラの事が…？」

すると、緑ナメクジは勢いつけてミソラに飛び付いた。

リュウギ「ミソラ！？」

その時だった。

ミソラ「近寄るなって言ってるでしょうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

すると、ミソラの怒りが爆発して緑ナメクジを思いきり殴り飛ばした。

緑ナメクジ「ひぎゃん！？」

リュウギ「あ…？」

すると、緑ナメクジは何処かへと逃げていった。

リュウギ「さ、流石は空手部主将の事だけはあるな…？」

ミソラ「リュウギ、何なのよアレは！？」

リュウギ「知らねぇよ！！むしろ俺が知りてぇよ！！」

すると、何か聞こえてくる。

リュウギ「おい、何か聞こえないか？」

ミソラは耳を済ますと、確かに何か聞こえてくる。何かが迫り来るような音が…。

ミソラ「ほ、本当だ…？」

すると、森の奥から大量の緑ナメクジが迫ってくる。

リュウギ・ミソラ「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

リュウギとミソラは慌てて逃げる。

ミソラ「ちょっと、何とかしてよリュウギ！！」

リュウギ「何だよその無茶ぶり、もとあと言えばお前から始まったんだろうがぁぁぁ！！」

すると、大量の緑ナメクジはう◯ちを投げてきた。

リュウギ「おい、何投げてんだお前ら？」

ミソラ「イヤァァァァ？」

ひたすら逃げるリュウギとミソラ。すると、何かにぶつかった。

リュウギ「いたっ！？」

ミソラ「きゃっ！？」

リュウギとミソラは尻餅を付く。すると、大量の緑ナメクジは突然逃げていった。

ミソラ「助かったわ…。」

ミソラは安心してホッとする。

リュウギ「おい、安心してる場合じゃないぞ…？」

ミソラ「え？」

リュウギとミソラはゆっくりと振り向くと、赤い体をしたティラノサウルスがいた。

リュウギ「おい、アレってまさか…？」

ミソラ「ウ、ウソ…？」

すると、リュウギとミソラは全力疾走で逃げ出した。ティラノサウルスは咆哮を上げながら2人に襲い掛かる。

リュウギ「何なんだよアレは！？ナメクジといい恐竜といい！？」

ミソラ「何とかしてよリュウギ！？」

リュウギ「だから俺に振るなよ？」

すると、リュウギは謎の声に言われた事を思い出す。

？？？『こっからは究極の選択だ！！世界を救うか？それとも尻尾巻いて逃げるか？』

その時、リュウギの目付きがキリッと変わり、足を止めて振り向いた。

ミソラ「ちょっとリュウギ！？」

リュウギ「そうだよなぁ…。尻尾巻いて逃げるなんて男じゃねぇ…。」

すると、リュウギは拳を握り締めて闘う体勢に入る。

ミソラ「リュウギ！？」

リュウギの意外な行動にミソラは叫ぶ。

リュウギ「コイツが何者なのか知らねぇが、正々堂々立ち向かう！！それが俺の流儀だ！！」

すると、リュウギの胸ポケットから聖なる輝きが満ち溢れる。

リュウギ「！？」

？？？「そうだリュウギ…。それでこそＣＯＯＬだぜ！！」

リュウギは胸ポケットを取り出そうとすると、光はリュウギの左手を包んだ。

リュウギ「こ、これは！？」

リュウギの左手には姿を変えた腕時計が装着されていた。

？？？「オレを呼べ、リロードってな！！」

リュウギは謎の声に言われた通りに叫んだ。

リュウギ「リロード！！」

すると、腕時計から聖なる輝きが満ち溢れ、黒い影が現れる。

???「ヒャッホウ!!!!」

すると、リュウギ達の前に黒い小竜のような生物が現れた。

???「オレ、参上!!」

リュウギ「な、なんだ!?」

すると、黒い小竜のような生物は口を開く。

???「オレはナルガモン。いずれ最強になるデジモンの中のデジモンだ!!」

ナルガモンと名乗るデジモンはティラノサウルスの前に立ちはだかる。

ミソラ「あの恐竜とやりあうつもりだわ!?」

リュウギ「お、おい!?」

すると、ナルガモンはニヤリと笑う。

ナルガモン「オレに任せときな…。デケェからってオレより目立ちやがって、覚悟しな、ティラノモン!!」

（ニヤリ…）

すると、ティラノモンは口から灼熱の炎を吐く。

ティラノモン「『ファイヤーブレス!!』」

ミソラ「ティラノサウルスが火吐いた～？」

すると、ナルガモンは素早く炎を交わした。

リュウギ「早い！？」

ナルガモン「遅すぎるんだよデカブツが！！」

すると、ナルガモンは目にも止まらぬ早さでティラノモンの背後に回る。

ナルガモン「喰らいな！！『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から強力な黒炎弾を吐いてティラノモンに直撃した。

ティラノモン「グォォォォォォォォ！？」

ティラノモンは力尽きて倒れると、体内から謎の物体が現れる。

ミソラ「見て、ティラノサウルスから何か出てきたわ！？」

ナルガモン「逃がすかよ！！『ヒドゥンブレイド！！』」

ナルガモンは両肘のブレイドで謎の物体を切り刻んだ。

？？？「ギャャャャャャャャャャ！？」

謎の物体は跡形もなく消え去った。

ナルガモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

ナルガモンはそう言ってフィニッシュを決めた。

すると、ティラノモンは起き上がり、何処かへと行ってしまった。

リュウギ「す、すげぇ…。」

ミソラ「た、助かったわ…。」

すると、ミソラは力が抜けて地面に座り込む。

ナルガモン「ナッハハハ！！どうだ、この最強のデジモン、ナルガモンがいるからにはもう安心だぜぃ！！」

ナルガモンは高らかに笑う。

リュウギ「え、え～とナルガモン…？」

ナルガモン「ん？なんだぁ？」

リュウギ「助けてくれてありがとな…。」

ナルガモン「たりめぇだろ？なんたってオレは、リュウギのパートナーであり、デジタルワールドの救世主『エクセリオン』の一員だからな！！」

リュウギ「はぁ！？」

ミソラ「ちょっとアンタ、一体何者なのよ！？デジタルワールドっ

て何なのよ!?」

ナルガモン「なんだ知らねぇのかぁ?オレ達はデジタルモンスター!!そんでここはオレ達の住むデジタルワールドだ!!」

リュウギ・ミソラ「な、なんだってぇぇぇ

ＥｐＯ１　～冒険の始まり～（後書き）

～キャラクター紹介　その１～

名前：御縞（みしま）　龍義（りゅうぎ）

性別：男

パートナーデジモン：ナルガモン

一人称：俺

趣味：自分の流儀を語る事、

解説：今作の主人公。かなりの熱血漢で、自分の流儀で貫き通す強い心を持つ。しかし自分の流儀を貫き通すためなら自分の身も省みない性格なため無茶をする。彼は辛い過去を背負っているが未だに不明。自己チューであるナルガモンのツッコミ担当でもある。

＞ｉ２０９８４―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

ＥｐＯ１どうでしたか？

感想または質問お待ちしています！！

それでは、次回もお楽しみに！！

ＥｐＯ２　～誕生の絆！闇をも切り裂く剣銃　アルカナム～（前書き）

デジタルワールドに迷い込んだリュウギとミソラは果たしてどうなる！？

ＥｐＯ２スタート！！

ＥＰ０２　～誕生の絆！闇をも切り裂く剣銃　アルカナム～

～デジタル　ワールド～

リュウギ「デ、デジタルワールドって…。一体どういう事なんだよ！？」

ナルガモン「まぁそんな事より、オレの伝説を聞きたいかぁ？」

ミソラ「ちょっと、ちゃんと質問に答えなさいよ？」

ナルガモン「んだよぅるせぇな…。だったらジジイの所に来るか？」

リュウギ・ミソラ「ジジイ？」

すると、リュウギとミソラは陰でヒソヒソ話をする。

ミソラ「どうするのよリュウギ？」

（ヒソヒソ…）

リュウギ「取り合えずここは神戸じゃないって事は確かだ…。もしかしたら、この世界にも人間が…？」

（ヒソヒソ…）

ミソラ「取り合えず会って見ましょうよ…。」

（ヒソヒソ…）

ナルガモン「おい、何をコソコソしてんだよ？」

ミソラ「べ、別に？」

ナルガモン「所でお前ら、カップルか？」

すると、リュウギとミソラは顔を赤らめて否定する。

リュウギ「チ、チゲェよ！？」

ミソラ「ただの幼馴染みよ！？」

ナルガモン「そうなんだ…。」

リュウギ「ナルガモン、取り合えずそこへ案内してくれないかな？」

ナルガモン「おう、任せときな！！」

リュウギ達はナルガモンに案内して貰い、目的地へと向かった。

～？？？～

ナルガモン「ここだ！！」

辿り着いた場所は、小さな一軒家だった。

リュウギ「ここがそうなのか…？」

ナルガモン「おう、この家でオレとジジイが住んでんだ！！」

ミソラ（私達以外の人間が居たのね…？）

リュウギ「取り合えず、入ってみようよ。」

リュウギはゴクリと息を呑み、引き戸を引いた。

ナルガモン「ようジジイ、帰って来たぜ♪」

？？？「お～う、ようやく帰って来たようじゃな～。」

その姿は、人間ではなくお爺さんの姿をしたデジモンだった。

リュウギ・ミソラ「え…？」

リュウギとミソラは思わず目が丸くなる。

？？？「ようこそデジタルワールドへ…。ワシの名はジジモン。このスレッド大陸に住む、物知りデジモンじゃ！」

ナルガモン「自称、物知りのデジモンだけどな♪」

すると、ジジモンは杖でナルガモンの頭を叩いた。

ナルガモン「いだっ！？」

ジジモン「自称は余計じゃ…？所でお主らは…」

すると、ミソラは首を横に激しく振る。

ミソラ「有り得ないわ。きっとこれは夢なのよ！？そうに違いない！！」

ジジモン「ここは夢でも現実でもない世界。デジモンの世界なのじゃ！」

リュウギ「確かにそう言われると、夢にしてはリアルすぎだよな…。」

ジジモン「そうじゃろ？リュウギよ、ワシはこの日を待ち望んでいた。お主はデジタルワールドを救う救世主なんだ！！」

リュウギ「き、急にそんな事言われても…？ていうかなんで俺なんだよ！？」

ミソラ「そうよ！！他にいたハズよ！！」

ナルガモン「オレが選んだんだよ！あの反射神経、超ＣＯＯＬで真っ直ぐとした心。だからオレはお前を選んだんだ！！」

リュウギ「マジかよ…。」

（とんでもない事に巻き込まれたな…？）

ミソラ「救世主って、一体何が起こったって言うのよ？」

ジジモン「実はのぅ、ここはデジタルワールドの島の１つ、スレッド大陸じゃ。昔、デジモン達は平和に暮らしていた…。」

リュウギ「？」

ジジモン「じゃが、このデジタルワールドにイビルスが現れて事情が変わったのじゃ…。」

リュウギ「いびるす？」

ナルガモン「ほら、さっきティラノモンの体内から出てきた黒い物体のような者だよ。」

ジジモン「心を邪悪にする謎のウイルス。それがイビルスなのじゃ…。そのせいで、デジモン達の心はイビルスに邪悪な心にされ、暴れているのじゃ…。」

リュウギ「……。」

ミソラ「なんだか、大変だね…。」

ジジモン「うむ。このままでは危険なのじゃ。言い伝えではデジモン達の危機はデジタルワールドの危機じゃと言われておる。お主ならデジタルワールドの危機を救ってくれるハズじゃ！！ワシらにはもう、お主しかおらん。」

リュウギ「上等だ…。やってやるぜ…。」

ナルガモン「おぉ！？流石リュウギだぜ！！オレの目に狂いはない！！」

リュウギの発言により、ミソラは驚く。

ミソラ「ちょっとリュウギ！？」

リュウギ「他に誰がやるんだよ？それに困ってる奴らを放っておく訳にはいかねぇ、それが俺の流儀だ！！」

ミソラ「あ～あ、また始まったわ…？」

ミソラは呆れて深くため息をつく。

リュウギ「それで、どうすればいいんだ？」

ジジモン「お主はこれから、ナルガモンと共にスレッド大陸を廻り、イビルスに支配されたデジモン達を解放していくのじゃ！！」

リュウギ「でもさぁ、解放するのはいいけど、再びイビルスに支配されちゃ、キリがないんじゃないのか…？」

ジジモン「それなら大丈夫じゃ。Ｄ－アクセルを見るのじゃ。」

リュウギ「でぃーあくせる？」

ナルガモン「リュウギの左手首にはめてあるそれさ。」

リュウギは左手首にはまってあるＤ－アクセルを見る。すると、Ｄ－アクセルの画面から紋章が浮かび上がる。

リュウギ「なんだ、これは？」

ジジモン「それは、デジタルワールドの救世主『エクセリオン』の紋章じゃ。その紋章を持つ者、又はパートナーデジモンがイビルスを倒すと、イビルスに支配されたデジモンはイビルスに支配されないのじゃ！」

ミソラ「それじゃ、さっきのティラノサウルスはもうイビルスに支配されないって事？」

ジジモン「そうじゃ！」

すると、ミソラは不安気な顔になる。

リュウギ「どうしたんだよミソラ？」

ミソラ「リュウギ1人で大丈夫かしら…？」

ナルガモン「安心しな！！この最強のデジモンであるこのオレが居る限り大丈夫だぜ！！」

リュウギ「たぶんそこじゃねぇと思うぞ…？」

ジジモン「心配ない。エクセリオンの紋章を持つ選ばれし者がこのスレッド大陸におる。」

リュウギ「俺の他にも仲間がいるのか！？」

ジジモン「そうじゃ！じゃが、何処にいるのかワシには分からぬ…。」

ナルガモン「だったら徹底的に捜すまでよ！！そうだろリュウギ？」

リュウギ「おい、優先順位忘れてねぇか…？」

リュウギは小さくツッコム。

すると、地面が激しく揺れ始める。

一同「!?」

ミソラ「地震!?」

リュウギ「とにかく外に出よう!!」

ナルガモン「おう!!」

~ジジモンの家　周辺~

???「だぁーはっはっは!!イビルス共よ、デジモン達の心を邪悪な心に染めるんだ!!」

イビルスを操る3つの影がデジモン達に襲い掛かる。

イビルス達「ギィィィィィィィィ!!」

すると、イビルスに取り込まれたデジモンは紅い眼光を光らせて凄まじい咆哮を上げる。

???「いいぞ×2派手に暴れろ!!だぁーはっはっは!!」

???「やりましたぜあんちゃん、あとこの地を支配すればアナログマン様からの褒美が貰えますぜ♪」

???「そうだな弟よ♪」

???「兄じゃこそアナログマン様の後継ぎに相応しい!!」

???「照れるではないか二番目の弟よ♪だぁーはっはっは!!」

リュウギ「やめろお前ら!!」

すると、怪しい3兄弟の前にリュウギ達が立ちはだかる。

???「なんだお前らは?」

リュウギ「俺達は、デジ…」

ナルガモン「オレは最強のデジモンと呼ばれたデジモンの中のデジモン、ナルガモンだ!!」

ナルガモンは指を真上に突き立て、先陣をきって前に踏み出した。

リュウギ「んな!?人が話してる最中なのに!?」

ミソラ「なんて自己チューなデジモン…?」

???「兄じゃ、人間がいる!?まさかあいつらは…!?」

???「うむ、アナログマン様がおっしゃっていたエクセリオンかもしれぬ…。」

ミソラ「あなろぐまん?」

ナルガモン「やいやいテメェら!!一体何者だ!?」

すると、巨漢の男は静かに笑う。

???「フフフ…。聞いて驚け、見て喚け…。」

リュウギ「いや、見て笑えだろ…？」

リュウギは小さくツッコム。

すると、二番目の弟が人差し指を真上に突き立てる。

？？？「我々はアナログマン様の配下の１人、ドギヌス！！」

次に、一番目の痩せっぽい男がポーズを決める。

？？？「そしてオイラがアラン！！」

そして巨漢の男がポーズを決める。

？？？「そしてこの俺様はバンディッツ！！３人揃って…」

？？？×３「アナログマン様の最凶トリオ　ＢＡＤ特戦隊！！」

一同「……。」

バンディッツ（フッ、決まった…。）

アラン（やりやしたねあんちゃん♪）

ドギヌス（このポーズはアドリブだが…？まぁいい、成功すればＯＫだ。）

リュウギ「お前ら兄弟なのか…？」

ミソラ「ハッキリ言って全然似てない…。というよりかウザい…。」

バンディッツ「どうだ?ビビって声が出ないだろ?」

リュウギ「いや、強いて言えばあまりにも似てなさすぎて声が出ない…?」

ナルガモン「くっ…、テメェら…。よくも…」

すると、ナルガモンの怒りが込み上げてくる。

リュウギ「ナルガモン…。」

(そうか…。アイツ、デジモン達がイビルスに支配された事がそんなに悔しかったんだ…。)

ナルガモン「オレより百倍目立ちやがって?ぜってぇに許さねぇぇぇぇぇ?」

リュウギ「ってそっちかよ!?」

ミソラ「バカね…?というよりか何処が目立ってるのよ?」

ナルガモン「まず、激デブ(=バンディッツ)!!それで超ガリガリ(=アラン)、そして最後に……普通(=ドギヌス)。」

ドギヌス「んな!?なんでオレだけ普通!?」

ナルガモン「兄弟揃って似てない上にバランスのワリィ体格…。かなり目立つじゃねぇかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ?」

ミソラ「アンタ、バカでしょ…？」

リュウギ「ミソラ、どうツッコめば…。」

ミソラ「ツッコまなくていい？」

ナルガモン「とにかく、オレの前から消え失せな！！」

バンディッツ「失せろだと？笑わせるな！」

ドギヌス「兄じゃに命令するとは、いい度胸しているな…。」

バンディッツ「よ～しイビルス共よ…」

アラン「そいつらを倒せ！！」

すると、バンディッツはアランを殴り飛ばす。

バンディッツ「バカヤロが！！それ、俺様の台詞だろうが？」

アラン「ごめんちゃい、あんちゃん？」

ミソラ「アイツら、ホントバカね…。」

リュウギ「行くぞ、ナルガモン！！」

ナルガモン「言われなくても分かってるぜ！！」

すると、イビルスに取り込まれた鎧竜型デジモン、モノクロモンが突進してくる。

ナルガモン「遅ぇよ！！」

ナルガモンは目にも止まらない早さでモノクロモンの突進を交わした。

ナルガモン「『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から強力な黒炎弾を放ち、モノクロモンの身体に直撃した。

ミソラ「やったわ！？」

しかし、モノクロモンには全く効いていなかった。

リュウギ「効いてない！？」

バンディッツ「モノクロモンはダイヤモンド並みの硬度を持つ巨大なツノと装甲だ！！そんなショボい攻撃、モノクロモンには通用しない！！」

アラン「よっ、流石あんちゃん♪」

バンディッツ「だろ？」

リュウギ「ってお前ら何もしてねぇだろうが？」

ナルガモン「うわぁぁぁぁぁぁぁ！？」

その間に、ナルガモンはモノクロモンの突進により、飛ばされる。

リュウギ「ナルガモン！？」

ミソラ「どうしたらいいのよ、リュウギ！？」

リュウギ「クソッ！！」

（俺は、ナルガモンがやられている所をただ黙って見ているだけなのか！？どうすれば…！？）

バンディッツ「トドメだ！！殺れ！！」

モノクロモン「『ヴォルケーノストライク！！』」

すると、モノクロモンは口から強力な火炎弾を放った。

リュウギ「ナルガモン！！」

すると、リュウギは身体を張ってナルガモンを庇う。

ナルガモン「リュウギ！？」

リュウギ「お前と一緒にデジタルワールドを救うんだ！！だからこんな所でやられる訳にはいかねぇんだろうが！！」

ミソラ「逃げて、リュウギ！！」

しかし、リュウギは全く逃げる様子はなかった。

リュウギ「お前は言ったハズだ…。デジタルワールドを救うか、尻尾巻いて逃げるかって…。俺は初っぱなから尻尾巻いて逃げるのは

嫌いだ…。けど、途中で逃げるのはもっと嫌いだ！！例えどんな相手だろうが、最後まで諦めずに真っ直ぐ立ち向かう！！それが俺の流儀だ！！」

その時、リュウギのＤ－アクセルから聖なる光が宿る。

リュウギ「！？」

ナルガモン「な、なんだ！？」

ミソラ「リュウギ！？」

その時、ヴォルケーノストライクが直撃して大爆発する。

バンディッツ「だぁーはっはっは！！口ほどにもないわ！！」

アラン「呆気ないなぁ♪」

ミソラ「そんな…。リュウギ…。」

すると、爆煙の中から2つの黒い影が見えてくる。

ドギヌス「んなッ、兄じゃ！？」

爆煙が去ると、リュウギとナルガモンの姿があった。

ミソラ「リュウギ、ナルガモン！！」

バンディッツ「そ、そんなアホな！？」

アラン「なんだ、あのガキの持っている剣は!?」

リュウギは右手に持っている剣を見て驚く。

リュウギ「こ、これは…?」

その剣は、剣の柄の部分が拳銃の形になっていた。剣が光ると、リュウギの心の中から声が聞こえてくる。

『リュウギよ、このガンブレード、アルカナムを使ってナルガモンと共に戦うのだ!!』

リュウギ「アルカ…ナム…。」

すると、リュウギの目付きがキリッと変わって戦う体勢に入る。

リュウギ「これで戦える!!行くぞ、ナルガモン!!」

ナルガモン「おう!!」

ナルガモンは気合いを入れて立ち上がる。

バンディッツ「雑魚が増えただけだ!!殺れ、モノクロモン!!」

モノクロモンは唸り声を上げた後、リュウギ達に向かって突進する。

リュウギ「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

リュウギはガンブレード、アルカナムで斬りに掛かろうとすると、モノクロモンの角と鍔競り合う。

リュウギ「くっ！？」

ミソラ「リュウギ！？」

すると、アルカナムが光ると、リュウギの心の中から声が聞こえてくる。

『トリガー（引き金）を引け！！』

リュウギ「！？」

リュウギは言われた通りにアルカナムのトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発する。

リュウギ「うわっ！？」

リュウギは衝撃で尻餅をつく。

モノクロモン「グォォォォォォォォ！？」

すると、モノクロモンの角が粉々に砕けた。

ＢＡＤ特戦隊「はぁッ！？」

思わずあんぐりするＢＡＤ特戦隊。

ミソラ「凄い…！？」

？？？「ほ～う、言い伝えは本当のようじゃったな…。」

すると、ミソラの背後からジジモンが現れる。

ミソラ「言い伝えって？」

ジジモン「数年前、デジタルワールドが闇に支配されそうになった時、闇をも切り裂く伝説の剣を持った選ばれし者達が現れよったのじゃ。」

ミソラ「え！？昔、私達の他に居たの！？」

ジジモン「うむ…。その選ばれし者達のお陰で、今のデジタルワールドがあるのじゃ…。」

ミソラ「それとリュウギの持っている剣とどういう関係があるのよ？」

ジジモン「言い伝えによると、パートナーとの絆、そして大切な物を護りたい心によって生み出されるらしい…。」

ミソラ「そうなんだ…。」

ナルガモン「ＣＯＯＬに反撃開始だぜ！！『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から強力な黒炎弾を吐いてモノクロモンにダメージを与える。

モノクロモン「グォォォォォォォォ！？」

ナルガモン「終わりだ！！『ヒドゥンブレイド！！』」

ナルガモンは両肘のブレイドで目にも止まらぬ早さでモノクロモンを切り刻んだ。

モノクロモン「グォォォォォォォォ！？」

モノクロモンは力尽きて倒れ、体内からイビルスが現れる。

ミソラ「リュウギ、イビルスよ！！」

リュウギ「逃がしはしねぇ！！」

リュウギはイビルスを追撃し、アルカナムでイビルスを斬った瞬間にトリガーを引いて内部から爆発してイビルスは跡形もなく消滅した。

イビルス「ギィィィィィィィ…！？」

リュウギは地面に着地すると、ナルガモンは人差し指を真上に突き立ててフィニッシュを決める。

ナルガモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

アラン「あ、あんちゃん…！？」

ドギヌス「モノクロモンがやられたぞ！？」

バンディッツ「こんな事が有り得ん！？」

ナルガモン「それが有り得るんだよ！！」

リュウギ「俺達は、デジタルワールドの救世主、エクセリオンだ！！」

バンディッツ「く…、これで勝ったと思うなよ！！退却だ！！」

バンディッツはそう言ってＢＡＤ特戦隊は何処かへと去って行った。

リュウギ「これで安心だな…。」

すると、アルカナムは光に包まれてＤ－アクセルの中へと入った。

リュウギ「アルカナムが！？」

ジジモン「安心せい、必要になればいつでも呼び出せる。」

リュウギ「そ、そうか…。」

ナルガモン「ま、これで一件着陸だな♪ナッハハハハ！！」

リュウギ「一件落着の間違いだぞ…？」

その時、Ｄ－アクセルから光が生じる。

リュウギ「な、何だ！？」

ジジモン「この地にイビルスがいなくなると、自動的にデジエクスフィールドが発動されるのじゃ！」

ミソラ「でじえくすふぃーるどって何よ？」

ジジモン「要するに結界みたいなものじゃ！」

リュウギ「なるほどな、俺達でイビルスを倒していって結界を広くしていけば…」

ジジモン「無論、結界におるデジモン達はイビルスに支配される事はなかろう。」

すると、モノクロモンは正気を取り戻した。

モノクロモン「う、う～ん。」

ミソラ「あ、気が付いたわよ！」

モノクロモン「僕は一体…？ってなんだこりゃ！？」

モノクロモンは自慢の角が粉々に砕けてかなりのショックを受けてしまう。

リュウギ「ご、ごめん…？」

ジジモン「大丈夫じゃ、Ｄ－アクセルを使ってリカバリー機能を使うのじゃ。Ｄ－アクセルでモノクロモンを翳してみろ。」

リュウギ「え？こう？」

リュウギはＤ－アクセルをモノクロモンに翳すと、モノクロモンはＤ－アクセルの画面に吸い込まれた。

ミソラ「吸い込まれたわよ!?」

ジジモン「そして先ほどD－アクセルの中に入ったモノクロモンを呼び出すのじゃ。『リカバリー、モノクロモン』とな。」

リュウギ「リカバリー、モノクロモン！」

リュウギは叫ぶと、D－アクセルからモノクロモンが現れる。すると、モノクロモンの角が綺麗に治っていた。

モノクロモン「僕の角が治った♪」

リュウギ「スゲェ…。」

ジジモン「リカバリー機能とははイビルスに解放されたデジモンの傷を治す便利な機能じゃ。」

モノクロモン「助けてくれてありがとう！何かお礼させてください！！」

リュウギ「お礼って言われても…？」

リュウギは困った顔をして頭をポリポリとかく。

ジジモン「ならば、デジサモンすればよい！」

ミソラ「でじさもん？」

リュウギ「何だそれは？」

ジジモン「そもそもデジサモンとは、コントラクト（契約）したデジモンを召喚し、パートナーデジモンと共に戦わせる特殊な機能の事じゃ。」

リュウギ「デジモンを召喚できるのか！？」

ナルガモン「おいジジイ、そんな事したらオレが目立たなくなっちまうだろうが？」

ジジモン「そう言うでない。しかし、デジサモンで召喚できるデジモンは１体のみで長時間保つ事はできず、それに加えて発動してから２４時間経たないと再び発動する事ができないというデメリットがあるのじゃ。」

ミソラ「つまり、一か八かの賭けって事？」

ジジモン「そうじゃ！」

リュウギ「どうしたらいいんだ？」

ジジモン「召喚するには、まずデジモンとのコントラクトが必要となるのじゃ。『コントラクト、モノクロモン』とな。」

リュウギ「分かった。」

すると、リュウギはＤ－アクセルをモノクロモンに翳した。

リュウギ「コントラクト、モノクロモン！」

すると、モノクロモンの身体から赤いオーラが纏う。

ジジモン「コントラクト完了じゃ。これでデジサモン、モノクロモンを呼び出せるぞ。」

モノクロモン「必要になったらいつでも呼んでね！」

リュウギ「あぁ、よろしくな！！」

モノクロモンはそう言って何処かへと去って行った。

ナルガモン「何だかオレ、疲れちゃったぜ…。」

ミソラ「私も…。」

リュウギ「色々あったからな…。」

ジジモン「ご苦労じゃったな。今日はワシの家でゆっくりと休むがいい。」

リュウギ「あぁ。頼むよ。」

すると、ミソラは不安げな顔になる。

ナルガモン「どうしたんだミソラ？」

ミソラ「ねぇジジモン。現実世界に帰ることはできないの？」

ジジモン「残念じゃが、現実世界に繋がるゲートが閉ざされてしまっておる。」

ミソラ「そんな…。」

ミソラは現実世界に帰れない事がショックでうつ向く。

ジジモン「すまぬ、お主まで巻き込んでしまって…。」

リュウギ「心配すんなよミソラ。必ずお前を現実世界に還してやる。約束だ…。」

ミソラ「リュウギ…。」

リュウギ「約束は死んでも守る!!それが俺の流儀だからな!!」

ミソラ「うん…。」

ナルガモン「んじゃ、早くジジイの家に戻ろうぜ♪」

ナルガモンはそう言ってジジモンの家へと向かった。

リュウギ（それにしても、アルカナムが出てきた時に聞こえたあの声…。一体誰だったんだ…？）

ナルガモン「おいリュウギ、早くしねぇと置いて行くぞ!!」

すると、リュウギはハッとする。

リュウギ「お、おう!!すぐに行く!!」

（俺の思い込みか…？ま、いいか…。）

リュウギは適当に流し、ジジモンの家へと向かい、一時休息をとるのであった。

――To Be Continued….

ＥＰ０２　～誕生の絆！闇をも切り裂く剣銃　アルカナム～（後書き）

リュウギが新しく手にした武器、ガンブレードのアルカナムです！！

これからもデジモンだけでなく、武器も描いていきたいと思います！！

＞ｉ２１３１４―１２９８＜

【写真：トリプルミーミング】

次回からイビルスに支配されたデジモン達を助ける、摩訶不思議な冒険が始まる！！

果たして、どんな試練が待ち構えているのか！？

次回もお楽しみに！！

ＥｐＯ３　～結ばれた絆！！疾風の金色狐　レナモン～（前書き）

ジジモンの家で一休みし、いよいよ冒険の旅へ！！

ＥｐＯ３スタート！！

ＥＰ０３　～結ばれた絆！！疾風の金色狐　レナモン～

～ジジモンの家～

夜が明け、リュウギは昨日の出来事をジジモンに詳しく話した。

ジジモン「そうかぁ…。Ｇａｃｋｔ特戦隊がアナログマンの配下だったとは…。」

リュウギ「いや、ＢＡＤ特戦隊だから…？俺の話ちゃんと聞いてたか…？」

ナルガモン「ま、仕方ねぇさ。これがジジイのつまらねぇギャグだから…。」

すると、ジジモンは杖でナルガモンの頭を殴った。

ナルガモン「いだっ！？」

ジジモン「つまらないとは失敬じゃ？ワシのギャグはどんなデジモンでも笑えたんじゃぞ！！」

リュウギ（本当かよ…？）

ミソラ（なんか胡散臭い…？）

リュウギは咳払いをして一旦話を戻す。

リュウギ「それより、アナログマンって一体何なんだ？」

ミソラ「というよりか、アナログ放送ってかなり古くない？今は地上デジタル放送の時代なのよ？」

リュウギ「ミソラ、たぶんテレビの話じゃないと思うぞ…？」

リュウギは小さくツッコム。

ジジモン「アナログマンとは、遥か昔にデジタルワールドを闇に染めようとした悪者じゃ…。確かに倒したハズなんじゃが…。」

ナルガモン「でも、あの３バカトリオ（ＢＡＤ特戦隊）がいるって事は、そいつがいるって事だろ？『アナログマンの配下！！』って言ってたし…。」

ジジモン「イビルスを造り出したのはそのアナログマンかもしれぬ…。リュウギよ、イビルスに支配されたデジモンを助けながら、アナログマンに関する情報を集めるのじゃ！」

リュウギ「分かった。」

ジジモン「ミソラよ、お主もリュウギと共に行動し、現実世界に繋がるゲートを探すのじゃ。」

ミソラ「分かったわ！！」

ナルガモン「よし、そうと決まれば早速行くぜ！！」

ナルガモンはそう言っていきなりジジモンの家を飛び出していった。

リュウギ「アイツ、やる気満々だな…？」

ミソラ「先が思いやられるわ…？」

リュウギとミソラは同時にため息をつくのであった。

～タハラガ森～

ジジモンの家から少し離れたとある小さな森。

リュウギ「なぁナルガモン。デジタルワールドって一体どんだけ広いんだ？」

ナルガモン「知らねぇ！！」

ナルガモンの即答により、ミソラはズッコケる。

ミソラ「デジタルワールドの住民なのに知らないの？」

ナルガモン「ま、デジタルワールドは広いからなぁ。ジジイが言っていた通り、このデジタルワールドには色んな島が浮かんでいるんだ。」

リュウギ・ミソラ「ふ～ん…。」

ナルガモン「中でも、イビルスに支配されている島や、イビルスに侵入されないようにセキュリティされている島もあるんだ。」

リュウギ「詳しいんだな…。」

ナルガモン「だろ?なんたってオレは最強と呼ばれるデジモンの中のデジモン、ナルガモンだからな☆」

ミソラ「はいはい…?」

リュウギ（自分大好きなんだな、ナルガモン…。）

すると、草陰から物音が聞こえてくる。

一同「!?」

ナルガモン「誰だ、そこに隠れているのは!?」

すると、草陰から幼年期デジモン、トコモンが現れる。

ミソラ「か、可愛い?」

リュウギ「ナルガモン、コイツは!?」

ナルガモン「安心しな、コイツは生まれたばかりの子供、トコモンだ。」

すると、トコモンは何やら慌てた様子だった。

ミソラ「どうしたの?」

トコモン「この森の奥でデジモン同士で戦っているんです!!助けてください!!」

リュウギ「何だって!?」

ナルガモン「オレの出番だな！！今行くぜ！！」

ナルガモンは全力疾走でデジモン同士で戦っている方へと向かった。

リュウギ「お、おい！？」

ミソラ「なんて自己チューなの…？」

リュウギ「とにかく追い掛けよう！！」

ミソラ「うん！！」

リュウギとミソラは急いでナルガモンの後を追うのであった。

ナルガモンは全力疾走で探していた。

ナルガモン「何処だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

？？？「お前が悪いんじゃないか！！」

？？？「そういうお前こそ！！」

ナルガモンは急ブレーキすると、タネモンとピョコモンが喧嘩していた。

ナルガモン「はぁ…？」

リュウギ「ナルガモーーン！！」

すると、リュウギはナルガモンに追い付いた。

リュウギ「あれ?デジモン同士で戦っているって…?」

トコモン「これです。」

すると、リュウギとナルガモンはズッコケる。

ナルガモン「な~んだ。ただの喧嘩かよ…。」

ナルガモンは呆れて深くため息をつく。

タネモン・ピョコモン「何処がだ?」

リュウギ「それで、一体何で喧嘩なんかしているんだ?」

トコモン「実は…」

タネモン「ボクの方が大きいやい!!」

ピョコモン「違う、私の方が大きいわよ!!」

どうやら、タネモンとピョコモンは身長比べしてどっちが大きいかお互いに譲れず、知らない内に喧嘩が始まっていたのだ。

トコモン「――と言うわけです…。」

ナルガモン「な、なんだそりゃ…?」

リュウギ「でも、ここで放っておいたら回りのデジモン達が迷惑だ

しなぁ…。なぁ、ミソラ？」

リュウギはミソラに問うと、ミソラの姿がなかった。

リュウギ「あれ、ミソラ？」

ナルガモン「何処行ったんだよアイツ？」

リュウギ「ミソラを探してくるよ！！ナルガモン、そっちは頼んだぞ！！」

リュウギは喧嘩の件をナルガモンに任せて、ミソラを探しに行った。

ナルガモン「っておい、リュウギ！？」

一方、ミソラは…。

ミソラ「何処行ったのよリュウギ、ナルガモン…？」

小さな森の中で迷っていた。因みに、ミソラはかなりの方向音痴である。

ミソラ「悪かったわね方向音痴でッ？」

すみません…？

ミソラ「リュウギ～？」

すると、ミソラはピタリと足を止めた。ミソラの足元には崖になっていた。

ミソラ「あ、危なかったわ…？ここにリュウギ達は居なさそうだね…。別の所に…」

その時、足場が崩れてミソラは崖の下に落下した。

ミソラ「きゃゃゃゃゃ！？」

すると黒い影が現れ、崩れた落石を足場にし、素早い動きでミソラを助けた。

ミソラ「！？」

ミソラを助けた黒い影は安全な場所でミソラを降ろした。

ミソラ「あ、ありがとう…。」

その正体は、狐の姿をした獣人型デジモンだった。

？？？「大丈夫か…？」

ミソラ「え、えぇ…。もしかして、あなたもデジモン？」

？？？「あぁ…。名はレナモンと申す…。」

ミソラ「わ、私は足立　ミソラ…。」

（か、カッコいい…？）

レナモン「ここは危険だ…。速やかにここから離れるんだ…。」

ミソラ「え、どうして？」

すると、レナモンは何か異変に気付いたのか、ミソラを抱っこして素早く木の上に隠れる。

ミソラ「どうしたのよ！？」

レナモン「静かに…。」

すると、森の奥からＢＡＤ特戦隊の姿が見えてくる。

ミソラ（あ、アイツらは！？）

アラン「あの狐、何処にもいやせんねぇ、あんちゃん。」

バンディッツ「逃げ足だけは早いなぁ…。」

ドギヌス「あの狐をしもべにすれば、エクセリオンに勝てるというのに…。」

バンディッツ「弟よ、すぐにあの狐を探し出せ！！なんとしてでも、俺様のしもべにするのだ！！」

アラン「アイアイサー！！」

ドギヌス「了解…。」

ＢＡＤ特戦隊は３つに散らばってレナモンを探す。

レナモン「行ったな…。」

ミソラ「相変わらずウザいわね…。」

レナモン「知っているのか…？」

ミソラ「知っているも何も、あの３バカトリオのお陰で昨日散々な目にあったわ…。」

レナモン「３バカトリオ…？」

レナモンは頭の上には「？」が浮かんでいた。

ミソラ「それはそうとレナモン、もしかしてアイツらから逃げているの…？」

レナモン「あぁ…。」

ミソラ「う～ん…。」

（何とかできないかしら…？助けてくれたんだし…。）

ミソラは考えると、良いことを思い浮かんだ。

ミソラ「そうだ！！リュウギとコントラクトすればいいわ！！」

レナモン「リュウギとコントラクト？何だそれは？」

ミソラ「リュウギと契約すれば、あんな奴らに追われなくて済むわよ！！」

レナモン「しかし、そのリュウギとやらは何処にいるのだ…？」

ミソラ「それは…。ごめん、途中でリュウギとはぐれちゃったから分からないの…。」

レナモン「気持ちだけ有難く戴くよ…。ありがとう…。」

ミソラ「レナモン…。」

レナモン「君を巻き込む訳にはいかない…。だから私はこれで失礼するよ…。」

レナモンは軽くお辞儀をすると、レナモンはミソラを抱っこして木から飛び降りる。

レナモン「また何処かで会おう、ミソラ…。」

レナモンはそう言って何処かへと去って行った。

ミソラ「あぁ…、行っちゃった…。」

（お礼したかったのに…。）

ミソラは残念そうな表情をする。

その時、何者かがミソラの口を無理矢理押さえる。

ミソラ「!?」

バンディッツ「まさかこんな所で会うとは奇遇だなぁ♪」

アラン「あんちゃん、コイツがいるって事はつまりエクセリオンの

ガキも…。」

バンディッツ「みたいだな…♪」

ミソラ（助けて、リュウギ…！！）

一方、リュウギ達は…。

リュウギ「ミソラ！！いたら返事しろ！！」

リュウギは必死になってミソラを探す。

ナルガモン「リュウギ！！」

すると、ナルガモンが後を追い掛けてくる。

リュウギ「ナルガモン！？幼年期デジモン達は！？」

ナルガモン「アイツらなら心配ないぜ！！」

――――――――――――――――

喧嘩していたタネモンとピョコモンはナルガモンの提案で木に身長線を書いて白黒つけた。結果は同じだったのだ。

タネモン「同じだね…。」

ピョコモン「そうね…。」

――――――――――――――――

ナルガモン「…と言うわけだ！！」

リュウギ「奇跡的に同じだったんだ…？」

ナルガモン「それより、見つかったか？」

リュウギ「何処にもいないんだ…。」

？？？「探し物はこれかな？」

すると、リュウギ達の前にＢＡＤ特戦隊が現れる。

ナルガモン「あっ、お前らは！？」

バンディッツ「フフフ…。」

ナルガモン「え～と…、Ｇａｃｋｔ特戦隊！！」

その時、ＢＡＤ特戦隊はズッコケる。

リュウギ「ナルガモン、ＢＡＤ特戦隊だ…？」

ナルガモン「ワリィ、ジジイのボケが頭に残っててつい…？」

すると、バンディッツがわざとらしく大きな咳払いをする。

バンディッツ「ウオッホン！！！！」

アラン「お前ら、これが見えねぇのかぁ？」

すると、リュウギはミソラが捕らわれていた事に気付く。

リュウギ「ミソラ!?」

ミソラ「リュウギ、ごめん…。」

バンディッツ「だぁーはっはっは!!どうだ、びっくりして声が出ないだろ!!」

ドギヌス「我々の名前を忘れるとはいい度胸してるな?」

ナルガモン「うるせぇ!!大体なんでそんなコンビ名なんだよ!?」

リュウギ「お～い、芸人じゃねぇんだぞ～…?」

リュウギはツッコミを入れる。

ミソラ「私も一応気になる…。」

リュウギ「ってお前も興味あるのかよッ!?」

バンディッツ「フフフ…。聞いて驚くなよ…。それは、我々3兄弟の頭文字を取って組み合わせたのだ。名付けて…」

すると、ＢＡＤ特戦隊はアドリブなポーズを決めた。

ＢＡＤ特戦隊「アナログマン様の最凶トリオ　ＢＡＤ特戦隊!!」

ナルガモン「あっそ…。」

ミソラ「ウザッ…。」

リュウギ「…で？」

バンディッツ「聞いておいてなんだそのリアクションはッ？」

ナルガモン「あぁワリィ×2、もっと凄い意味があるのかなぁって期待してたんだけど…。」

リュウギ「激が付くほど普通だな…。」

ミソラ「というよりか超が付くほどウザい…。」

リュウギ「それはさておき、ミソラを返して貰おうか？」

ドギヌス「バカだろ？それで返してくれるバカが何処にいるんでぃ？」

ナルガモン「だったら力ずくで！！」

バンディッツ「おっと！！バカな事はやめるんだな。さもねぇとお嬢ちゃんの命がないぜ？」

リュウギ・ナルガモン「くっ！？」

ミソラ「お嬢ちゃんって馴れ馴れしいわよ、ハッキリ言ってウザい…？」

バンディッツ「テメェ、自分の立場解ってんのかぁ？」

リュウギ・ナルガモン「……？」

ドギヌス「だったらこれでどうかな？」

すると、背後から昆虫型デジモン、スナイモンが現れて両腕の大鎌でミソラの首に突き付ける。

ミソラ「！？」

リュウギ「ミソラ！？」

アラン「さぁどうする？大人しくＤ－アクセルをこっちに渡しな！」

ナルガモン「くっ、なんて卑怯なんだ…。」

バンディッツ「何度でも言え！！それが俺様のモットーだからな♪だぁーはっはっは！！」

？？？「『狐葉楔！！』」

すると、上空から無数の木の葉の手裏剣がスナイモンに直撃する。

一同「！？」

リュウギ「なんだ！？」

すると、黒い影がリュウギ達の前に着地する。

レナモン「ミソラを返して貰おうか…。」

ミソラ「レナモン！！」

ナルガモン「なんだあの華麗な登場？かなり目立つじゃねぇかぁぁ？」

リュウギ「ってそっちかよ！？」

アラン「あんちゃん、アイツだ！？」

バンディッツ「まさか、自分から現れてくれるとは意外だなぁ…。」

ミソラ「リュウギ、早くレナモンとコントラクトして！！この３バカトリオはレナモンを狙っているの！！」

ＢＡＤ特戦隊「誰が３バカトリオだッ？」

リュウギ「なんだって！？」

ナルガモン「まさか、オレより目立つからか！？」

リュウギ「いい加減にしろ…？」

バンディッツ「スナイモン、レナモンを生け捕りにしろ！！」

スナイモン「『シャドウシックル！！』」

スナイモンは目にも止まらない超音速の一刀を放った。

レナモン「くっ！？」

レナモンは木を足場にして素早く交わすと、木は真っ二つに切れた。

リュウギ「ナルガモン、あのデジモンを助けるぞ！！」

リュウギはそう言うと、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、右手を前に差し出すと、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ナルガモン「任せとけ！！」

ナルガモンは目にも止まらぬ早さで木を足場にして高く飛び上がる。

ナルガモン「喰らえ！！『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から強力な黒炎弾を吐き出し、スナイモンを打ち落とした。

ナルガモン「ひゃっほーう！！オレこそ、最強だぜ☆」

ナルガモンはそう言って華麗に着地した。

スナイモン「シャャャャャャ？」

スナイモンは両腕の大鎌でナルガモンを切り刻もうとする。

リュウギ「させるか！！」

リュウギはアルカナムでスナイモンの大鎌を受け止めた瞬間にトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発する。

スナイモン「シャャャャャ！？」

スナイモンの右腕の大鎌は粉々に砕けた。

レナモン「凄い…！？」

ナルガモン「フィニッシュと行くぜ！！」

ナルガモンは両腕のブレイドでスナイモンに向かって突進する。

ナルガモン「終わりだ！！『ヒドゥンブレ…』」

バンディッツ「掛かったな！！」

（ニヤッ！！）

すると、森の奥から赤い体をした昆虫型デジモン、クワガーモンが現れる。

リュウギ「ナルガモン、危ない！！」

ナルガモン「！？」

リュウギの叫びに気が付くナルガモン。しかし、クワガーモンは巨大なハサミでナルガモンを薙ぎ払った。

ナルガモン「うわっ！？」

ナルガモンは避けきれず、木に叩き付かれた。

リュウギ「ナルガモン！？」

リュウギはアルカナムでナルガモンを助けに行こうとする。

アラン「おっと、動かない方がいいですぜぃ！！」

リュウギは振り向くと、スナイモンのもう片方の大鎌でレナモンを人質にとっていた。

ドギヌス「このデジモンの命がないぞ…。」

リュウギ「くっ…。」

バンディッツ「だぁーはっはっは！！切り札は最後にとっておくものだ！！よく覚えとけよガキ♪」

リュウギ（くっ、どうすれば…？）

ドギヌス「さて、イビルスでこのデジモンを我がしもべにしようか…。」

ミソラ「やめなさい！！レナモンにそんな事したら私が許さないから！！」

レナモン「ミソラ…。」

アラン「お前は大人しくしてくだせぇ！！」

アランは暴れるミソラを押さえつける。

バンディッツ「よぉし、やれ。」

ドギヌス「了解。」

ドギヌスはイビルスを呼び出すと、上空からイビルスが現れる。

ミソラ「やめてぇぇぇ！！」

イビルスはレナモンの体内に入り込んだ。

レナモン「うわぁぁぁ

ンがイビルスを倒すと、イビルスに支配されたデジモンはイビルスに支配されないのじゃ！』

リュウギ「まさか…！？」

ナルガモン「隙ありだ！！」

すると、隙を読んだナルガモンは目にも止まらぬ早さでスナイモンを殴り飛ばした。

スナイモン「シャャャャャ！？」

ナルガモン「リュウギ、ＣＯＯＬに反撃だ！！」

リュウギ「あ、あぁ！！」

アラン「待て、それ以上動けばこのガキの命が…」

すると、ミソラの怒りが爆発してアランを背負い投げをした。

ミソラ「何処触ってんのよぉぉぉぉ？」

アラン「ぐはっ！？」

バンディッツ・ドギヌス「えぇ！？」

（背負い投げ！？）

ミソラは急いでレナモンの元へと走り出した。

バンディッツ「させるか！！クワガーモン！！」

クワガーモンは巨大なハサミでミソラに襲い掛かる。

その時、リュウギはアルカナムでハサミを受け止め、ナルガモンは片腕のブレイドでクワガーモンのハサミを受け止めた。

リュウギ「これ以上ミソラに手出しさせない！！」

ナルガモン「おいおい、このオレを無視するとは、いい度胸してるぜ！！」

リュウギは力で押し返すと同時にトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発する。

クワガーモン「シャャャャャ！？」

リュウギ「ナルガモン！！」

ナルガモン「分かってるぜ！！」

すると、ナルガモンは低く構え、クワガーモンに踏み込んで近づいた後、思いきりアッパーをした。

ナルガモン「おらぁぁぁぁぁ！！」

クワガーモンは力尽きて倒れた。すると、クワガーモンの体内からイビルスが現れる。

リュウギ「逃がすか！！」

リュウギはイビルスに向かって追撃し、アルカナムでイビルスを切り刻んだ。

イビルス「ギィィィィィィィ！？」

イビルスは跡形もなく消え去った。

リュウギ「よしっ！！」

ナルガモン「オレこそ、最強だぜ！！」

ミソラ「リュウギ、ナルガモン！？」

リュウギとナルガモンは振り向くと、レナモンを手当てしようとするミソラにスナイモンが襲い掛かる。

ナルガモン「ミソラ！？」

（このままだと間に合わねぇ！？）

リュウギ（こうなったら一か八かだ！！）

すると、リュウギはアルカナムを地面に突き刺して叫んだ。

リュウギ「デジサモン、発動！！」

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、アルカナムを突き刺した地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

リュウギ「頼む、モノクロモン！！」

すると、魔法陣からモノクロモンが実体化され、猛スピードでスナイモンに突進した。

スナイモン「シャャャャャ！？」

モノクロモン「喰らえ！！『ヴォルケーノストライク！！』」

モノクロモンは口から強力な火炎弾を放ち、スナイモンに大ダメージを与えた。

スナイモン「シャャャャャ！？」

スナイモンは力尽きて倒れると、体内からイビルスが現れる。

リュウギ「ナルガモン！！」

ナルガモン「フィニッシュだぜ！！」

ナルガモンは高く飛び上がってイビルスに向かって追撃し、両腕のブレイドでイビルスを切り刻んだ。

ナルガモン「『ヒドゥンブレイド！！』」

イビルス「ギィィィィィィィ！？」

イビルスは跡形もなく消え去った。

ナルガモンは華麗に着地すると、人差し指を前に突き立ててフィニッシュを決める。

ナルガモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

バンディッツ「くっ、覚えてろよ！！」

バンディッツはそう言ってＢＡＤ特戦隊は退却した。

リュウギ「やったな、ナルガモン！！」

ナルガモン「おう、超ＣＯＯＬに決まったぜ♪」

リュウギ「それと、ありがとうモノクロモン！」

モノクロモン「困った時は御互い様だ！！じゃ、またね！！」

すると、デジサモンの効果が消えてしまい、モノクロモンは消えてしまう。

次に、リュウギのＤ－アクセルから光が生じ、自動的にデジエクスフィールドが発動される。

リュウギ「これで、この森は安全だな！」

そして…。

スナイモンとクワガーモンはリカバリー機能で傷を癒して、元の場所へと帰っていった。

そして、レナモンは…。

ミソラ「レナモン、大丈夫？」

すると、レナモンはゆっくりと目を開けた。

リュウギ「気が付いたようだな。」

レナモン「わ、私は…？」

ミソラ「安心してレナモン。あの３バカトリオならリュウギ達が追い払ったわ。」

レナモン「そうか…。」

すると、レナモンはゆっくりと立ち上がってリュウギ達に背を向ける。

リュウギ「おい、何処行くんだ！？」

ミソラ「待ってレナモン！！」

すると、レナモンはピタリと足を止める。

ミソラ「私達と一緒に行かない…？」

すると、レナモンは振り向きもせずに答える。

レナモン「私は、君達の足を引っ張った…。だから私が居ても足手まといにしかならない…。」

すると、ミソラがゆっくりとレナモンに近付く。

レナモン「？」

ミソラ「そんな事ないわレナモン…。私をを助けようとしたその心が、大きな力だよ！」

レナモン「！？」

すると、ミソラはレナモンの手を握る。

ミソラ「自分の力を信じなさい。あなたは決して足手まといじゃないから！私はそう信じてる…。」

レナモン「ミソラ…。」

その時、ミソラの手から聖なる光が生じる。

一同「！？」

ミソラは目を開けると、左手首に緑色のＤ－アクセルがはめてあった。

ミソラ「え！？これって…！？」

ナルガモン「Ｄ－アクセルだ！？」

すると、レナモンの左腕にエクセリオンの紋章が刻まれた。

レナモン「これは！？」

ミソラ「エクセリオンの紋章…！？」

ナルガモン「ってことは、ミソラもエクセリオンの1人なのか！？」

リュウギ「ミソラのパートナーデジモンは、レナモンみたいだな…。」

すると、ミソラは嬉しさの余りにレナモンに抱き着いた。

レナモン「ミ、ミソラ？」

ミソラ「これからもよろしくね、レナモン！！」

すると、レナモンはフッと静かに笑った。

レナモン「あぁ…。」

リュウギ「さて、仲間が増えた事だし、早くこの森から抜けようぜ！！」

ナルガモン「おう！！」

ミソラ「行きましょ、レナモン！」

レナモン「あぁ…。」

こうしてレナモンが仲間に加わり、リュウギ達は森を抜け出すため、前に進むのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ０３　～結ばれた絆！！疾風の金色狐　レナモン～（後書き）

～キャラクター紹介　その２～

名前：足立（あだち）　美空（みそら）

性別：女

年齢：１６歳（高校１年生）

パートナーデジモン：レナモン

一人称：私

趣味：空手、料理

説明：今作のヒロイン。リュウギの幼馴染みであり、高校までずっと同じクラスである。彼女は幼い頃から、警察官を勤めている父親から空手を教わり、中学の時に県大会優勝を誇るかなり実力者。根は素直で優しいが、幽霊がかなり苦手でかなりの方向音痴。すぐにパニックに陥りやすい事を本人は自覚しているのだが一向に改善されていないのが傷。怒るとかなり暴力的になる。

＞ｉ２１５２４―１２９８＜

【絵：トリプルミーミング】

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ０４　～パワー炸裂！！解き放て、ＥＸモード！！～（前書き）

いい忘れていましたが、私が作った小説、『エグザ』『エグザ０２』『Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｓｔｏｒｙ』（全て完結済）がありますので、まだ見てない方は是非見てください！！

それでば、Ｅｐ０４スタート！！

ＥＰ０４　～パワー炸裂！！解き放て、ＥＸモード！！～

タハラガ森を抜けると、広大な平原へと広がっていた。

ミソラ「広～い！？」

レナモン「ここは、スレッド平原。スレッド平原とは、森、山、湖、谷など豊かな自然に囲まれているんだ…。」

リュウギ「ふ～ん…。」

ナルガモン「なるほどな…。」

リュウギ「ってお前も知らねぇのかよ！？」

ナルガモン「だってジジイの家でずっと暮らしていたんだもん。」

ミソラ「アンタ、どんだけ夢がないのよ…？もっとなんかこう、『世界をこの目で見たい！！』とか…？」

ナルガモン「全く興味ねぇな。悪いかぁ？」

ミソラ「呆れたわ…？」

レナモン「変わったデジモンだな…？」

リュウギ「それよりレナモン、１つ聞きたい事があるんだ。」

レナモン「？」

リュウギ「お前ってさぁ、一度イビルスに支配された事があるだろ？」

ミソラ・ナルガモン「えぇぇぇぇぇッ！？」

リュウギの言葉に、ミソラとナルガモンは驚く。

ミソラ「そ、そうなの！？」

ナルガモン「なんで分かるんだよ！？」

リュウギ「ジジモンが言っていた事をふと思い出してな…。レナモン、俺達の他にこのデジタルワールドに人間が居たのか？」

レナモン「あぁ…。しかし、あの時私は気を失いかけていたからハッキリとは言えない…。」

リュウギ「何か特徴的な物は？」

レナモン「金色の髪をし、左目に傷を持った男だ…。」

ミソラ「金色の髪をした…」

リュウギ「左目に傷を持った男…。」

レナモン「あぁ…。」

ナルガモン「つまり、そいつがオレ達エクセリオンの仲間だな？」

レナモン「そうかもしれない…。」

ナルガモン「んじゃまぁ、その金髪男を探そうぜ！！」

リュウギ「おい待てよナルガモン。その前にイビルスに支配されたデジモン達を解放させる事が先決だ！」

ナルガモン「あ、そうだった？んじゃ、金髪男を探すのはそのついでって事で…。」

ミソラ「決まりね！まず何処に行けばいいのかな…？」

レナモン「ここからだと南にあるミハノ村が近いな…。」

リュウギ「よし、まずはミハノ村から行こうか！！」

ナルガモン「…っとその前に！！」

リュウギ「どうしたんだナルガモン？」

ミソラ「また自分大好き宣言しないわよね…？」

ナルガモン「一番大事な事を忘れていた…。」

リュウギ「な、なんだ…？」

（ゴクリ…）

リュウギは息を呑む。

ナルガモン「それは、リーダーがまだ誰なのか決まっていない！！」

するとリュウギとミソラはズッコケる。

ミソラ「そんな事だと思ったわ…？」

リュウギ「それ、今必要か…？」

ナルガモン「ったりめぇだろ？どんな小説でもリーダー的存在が必ずいるんだよ！！」

リュウギ「そ、そうかなぁ…？」

ミソラ「それってアンタの思い込みでしょ？」

ナルガモン「イヤだ！この作品もリーダー的存在が欲しいよ～！！」

リュウギ「『欲しいよ～！！』って、駄々っ子か？」

ミソラ「仕方ないわね…。それじゃ、誰がリーダーやるの？」

ナルガモン「勿論、オレがやる？」

リュウギ「結局自分がやりたいだけじゃねぇか！？」

ミソラ「私はレナモンが良いと思うなぁ…。」

レナモン「わ、私が…？私はこういうの苦手だ…。」

ミソラ「そうなの…。じゃあ、誰が良いと思う？」

レナモン「私的にリュウギが良いと思う…。」

リュウギ「え、俺!?」

ミソラ「リュウギはどう思うの?」

リュウギ「え、え〜と…?」

その時、南の方から爆撃が鳴り響く。

一同「!?」

ミソラ「え、なになに!?」

レナモン「ミハノ村からだ!!」

リュウギ「行こう!!」

リュウギ達は急いで南にあるミハノ村へと向かった。

ナルガモン「っておい、リーダーはどうするんだよ!?」

〜ミハノ村〜

村のデジモン達は逃げ惑う。その理由は、恐竜型デジモン、タスクモンが暴れていたのだ。

デジモン「逃げろ、タスクモンが暴れ出したぞ!?」

タスクモン「ぐぉぉぉぉぉぉ!!」

暴れるタスクモンは両肩から生えている巨大な角で次々と家を破壊していく。

リュウギ「あれは！？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル『タスクモン、ウィルス種、成熟期、必殺技はパンツァーナックル。』

リュウギ「きっとイビルスが支配しているに違いない！」

ナルガモン「行くぜ、リュウギ！！」

リュウギ「あぁ！！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

レナモン「ミソラ、下がってて…。」

ミソラ「分かったわ！」

タスクモン「ぐぉぉぉぉぉぉ！！」

するとタスクモンはリュウギ達に向かって突進を仕掛ける。

リュウギ達はすぐに交わすと、それぞれの必殺技を放った。

レナモン「『孤葉楔！！』」

ナルガモン「『アートルムフレイム！！』」

しかし、タスクモンには全く効かなかった。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁ！！」

リュウギは高く飛び上がり、アルカナムを振り下ろしてタスクモンの巨大な角に攻撃した。

リュウギ（今だ！！）

リュウギはトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発する。

タスクモン「ぐぉぉぉぉぉぉ！！」

するとタスクモンは怒り狂い、リュウギを殴り飛ばした。

リュウギ「ぐはっ！？」

リュウギは勢いよく家の壁に叩き付かれた。

ミソラ「リュウギ！？」

ナルガモン「よくもリュウギをやりやがったな！！『ヒドゥンブレイド！！』」

レナモン「『孤葉楔！！』」

ナルガモンとレナモンはそれぞれの必殺技をタスクモンにぶつける。

タスクモン「『パンツァーナックル！！』」

タスクモンはナルガモン達の技を受けつつも超弩級のパンチでナルガモンとレナモンを殴り飛ばした。

ナルガモン「ぐはっ！？」

レナモン「うわっ！？」

ミソラ「ナルガモン、レナモン！？」

すると、タスクモンは唸り声を上げる。

ミソラ「なんて強さなの…！？」

（どうすればいいの…！？私は、みんなを守りたい！！）

すると、ミソラのＤ－アクセルが反応して聖なる輝きが満ち溢れる。

タスクモン「ぐぉぉぉぉぉぉ！？」

タスクモンは光の閃光を浴びて目が眩んだ。

ミソラ「え！？なに！？」

すると、ミソラの心の中から声が聞こえてくる。

『ミソラよ、目を閉じてデジモンをディスティングハーツするのだ…。』

ミソラ「ディスティングハーツ…？」

ミソラは言われた通りにゆっくりと目を閉じた。

すると、タスクモンの身体には正常な状態であり、イビルスに支配されていなかった。

ミソラ「イビルスがいない！？じゃあ、なんで暴れているの…！？」

『目を閉じたまま、デジモンの心を読むのだ…。』

ミソラ「！？」

ミソラはもう一度ゆっくりと目を閉じると、タスクモンの心を読み取る。

ミソラ「分かったわ！！みんな、タスクモンの右足の裏に何かあるわ！！」

リュウギ「右足の裏…？」

ナルガモン「分かったぜ！！」

ナルガモンは低く構え、タスクモンに踏み込んで近づいた後、思いきりアッパーをした。

リュウギ（足の裏を見せるには、これだ！！）

リュウギはタスクモンの足元にアルカナムを突き刺してトリガーを

引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発する。

タスクモン「ぐおおおおおお!?」

すると、タスクモンは爆発の衝撃により、仰向けになって勢いよく倒れた。その時、タスクモンの右足の裏に金色の小さな物が輝いていた。

ミソラ「レナモン、アレよ!!」

レナモン「分かった!!」

レナモンは疾風のごとく、目にも止まらない早さでタスクモンの右足の裏に付いてある金色の小さな物を取った。

すると、タスクモンの動きが止まりだした。

リュウギ「と、止まった…。」

ナルガモン「ヒャッホウ!!オレの大勝利だぜ!!」

ミソラ「ところでレナモン、一体何だったの?」

リュウギ「原因はイビルスじゃなかったのか…?」

レナモン「これは…。」

すると、レナモンは金色に輝く小さな物をリュウギ達に見せる。

レナモン「画鋲だ…。」

すると、リュウギ達は思いきりズッコケた。

リュウギ「画鋲かよッ！？」

ナルガモン「もしかしてコイツ、画鋲の痛さで暴れていたのか…？」

レナモン「どうやら、そうらしい…。」

ミソラ「これって喜ぶべきかな…？」

リュウギ「それにしてもミソラ、よく気付いたなぁ？」

ミソラ「うん、実は…」

タスクモン「う、うぅ…。」

すると、タスクモンはゆっくりと起き上がる。

ナルガモン「お、気付いたみてぇだ。」

タスクモン「あ～痛かった…。お前さんが助けてくれたのか？」

リュウギ「え？あ、まぁ…。」

タスクモン「助かったぜ！ポスターを貼り付けようとしたらうっかりと画鋲に踏んじまってさぁ～。痛すぎて痛すぎて思わず暴れちゃったんだよ～？」

リュウギ「思わず暴れちゃったって…？」

ミソラ「もう、崩壊寸前なんだけど…？」

タスクモン「恩にきる。オレはミハノ村の村長、タスクモンだ。」

リュウギ「村長が村破壊してどうするんだよ！？」

ミソラ「もっとまともな村長はいなかったの…？」

タスクモン「すまねぇなぁ…。まぁ、これも何かの縁だ。オレの家に来ないか？せめてお礼がしたくてな…。」

ミソラ（こんなごっついデジモンといたらロクな事にはならないわ…。ここは遠慮しておこう…。）

「私達はちょっと…」

リュウギ「あぁ、頼むよ。」

ミソラ「ちょっとリュウギ！？」

リュウギ「せっかくのお礼を遠慮しちゃ相手に悪いからな。だから俺はどんなお礼でも有難く頂戴する！それが俺の流儀だ。」

ミソラ（始まったわ…？こうなるとリュウギは止まらないから…？）

「分かったわよ…？」

タスクモン「んじゃ、着いて来な！！」

リュウギ「行こうぜ、みんな！」

ナルガモン「おう！！」

ミソラ「お～ぅ…？」

リュウギ達はタスクモンの後を着いていった。

その時、物陰から何者かがリュウギ達の戦いの様子を伺っていた。

？？？「見つけたぜ…♪」

～ミハノ村　タスクモンの家～

タスクモン「ささっ、遠慮なさらずにどんどん喰ってくれ♪」

リュウギ達の前に大量のキノコが乗った皿を置く。

リュウギ・ミソラ（キ、キノコ！？）

ナルガモン「ウォッホー！！オレの大好物のデジタケだぜ♪」

ナルガモンは喜びながらデジタケと呼ぶキノコを食べまくる。

レナモン「う…？」

レナモンはデジタケが嫌いだと言えず、黙々とデジタケを食べる。

ミソラ「レナモン、まさかこのキノコ食べられないの…？」

レナモン「い、いや？私は大丈夫だ…。」

リュウギ（痩せ我慢してる…？）

ミソラ（嫌いなのね…？気持ちは分かるわよ、レナモン…？）

ナルガモン「おいリュウギ、食べろよ！美味いぜ♪」

リュウギ「あ、あぁ…？」

リュウギは少し抵抗するが、自分の流儀を曲げない性格なため仕方なくデジタケを食べた。

リュウギ「おっ！？これ結構イケるぞ！？」

ナルガモン「だろ？」

ミソラ（ウ、ウソッ？）

リュウギとナルガモンはひたすらデジタケを食べまくる。

タスクモン「気に入ってくれて嬉しいよ♪」

ミソラ（あぁ…、エクレアが食べたい…。）

ミソラは小さくため息をつく。

レナモン「ミソラ、どうしてあの時、タスクモンの体内にイビルスがいないって事に気付いたんだ…？」

ミソラ「実はね、誰かが私に囁いてたの…。それで、言われた通りにしたら、タスクモンの体内にイビルスの姿がなくて…、そしたら

デジモンの心の中が読み取れたの…。」

レナモン「不思議な力だな…。」

ミソラ「これがエクセリオンの力…？もしかしたら、ジジモンが言っていた、大切な物を護りたい心に反応したのかもしれない…。」

レナモン「エクセリオン…。噂で聞いたことがある。デジタルワールドが何度も闇に呑まれかけた時、伝説の剣を持った選ばれし者がこの地に現れた…。」

ミソラ「そう。その人のお陰で、今のデジタルワールドがある…。」

レナモン「それからもう1つ。四聖獣と呼ばれる伝説のデジモン達は、デジタルワールドを救った英雄にこう名付けた…。『デジタルワールドの救世主　エクセリオン』と…。なるほど…。リュウギの持つあの剣も、エクセリオンの力だったのか…。」

ミソラ「四聖獣？四聖獣って、中国の伝説に出てくるあの？」

レナモン「そうだ…。」

ミソラ「四聖獣かぁ…。」

ナルガモン「おかわり～！！」

すると、皿の上にたっぷりと置いてあったデジタケが一瞬にしてなくなった。

ミソラ「早ッ！？」

タスクモン「分かったぜ！！今からデジタケ集めてくるからここで待ってな！」

タスクモンはそう言って家を出た。

リュウギ「結構美味かったな！」

ナルガモン「デジタケ最高だぜッ☆」

ミソラ（どんだけハマってんのよ…？）

１０分後…。

ミソラ「遅いね…。」

その時、村の住民が慌てたて家に入ってくる。

ガジモン「大変だ、村長が外で暴れているぞ！？」

ナルガモン「また画鋲かよ…？」

リュウギ「早く助けないと、村のデジモン達が危ない！」

ミソラ「一体どうなってんのよこの村は…？」

タスクモンの家を出ると、タスクモンはかなり暴れていた。

リュウギ「派手に暴れているぞ…？今度は２個刺さったのか…？」

レナモン「ミソラ…。」

ミソラ「うん、やってみるわ…。」

ミソラはゆっくりと目を閉じると、タスクモンの体内にイビルスが入っていた。

ミソラ「リュウギ、イビルスがタスクモンの体内にいるわ!!」

リュウギ「なんだって!?」

ナルガモン「くっ、だと思ったぜ…。」

リュウギ「ウソつけ…?」

???「だぁーはっはっは!!現れよったなエクセリオンのガキ共!!」

リュウギ「この高笑い…。」

レナモン「この声は…。」

すると、リュウギ達のまえに3つの黒い影が現れる。

???「とう!!バンディッツ!!」

???「アランですぜぃ!!」

???「ドギヌス…。3人揃って…」

ＢＡＤ特戦隊「ＢＡＤ特戦隊！！！！」

リュウギ「またお前らか…。」

ナルガモン「相変わらずダセェなぁ…。」

ミソラ「ウザッ…。」

レナモン「……。」

バンディッツ「だから何なんだそのリアクションはッ？」

リュウギ「本当の事を言っただけだ。悪いか…？」

ナルガモン「何だよＢＡＤ特戦隊って？なんならいっその事、名前変えてやろうぜ♪」

リュウギ「例えば？」

ミソラ「だったら、３バカトリオが言いやすいわ！」

バンディッツ「おい、勝手に名前を変えるなッ？」

ナルガモン「シンプル過ぎ…。意味を込めて、ＢＡＤ（バカでホ変メな）トリオってのはどう？」

レナモン「うむ、その方が言いやすい…。」

ミソラ「賛成！！」

ナルガモン「んじゃ、改めて…。一体何しに来やがったんだＢＡＤトリオ！！」

ＢＡＤトリオ「やめんかぁぁぁぁぁぁぁぁぁいッ？そして書くなぁぁぁぁぁぁッ？」

リュウギ「タスクモンを解放するんだ！！」

バンディッツ「バカめ、誰が解放するかよ！！タスクモンを俺様のしもべにすれば、勝利間違いなしだぜ！」

ナルガモン「なんだとッ？」

リュウギ「まさか、さっきの戦いを見ていたのか！？」

アラン「その通りですぜぃ。タスクモンをあんちゃんの手に渡れば勝利間違いなしっていう作戦でさぁ。」

すると、バンディッツはアランにゲンコツをかました。

バンディッツ「それ、今俺様が言ったところじゃねぇか？」

アラン「いでっ！？」

ミソラ「ホントにバカね…。」

リュウギ「とにかく、早くタスクモンを助けるぞ、ナルガモン！！」

ナルガモン「ＯＫ！！」

リュウギは右手を差し出すと、ガンブレード、アルカナムが現れて構える。

すると、ナルガモンとレナモンは戦う体勢に入る。

アラン「行け、タスクモン！！」

バンディッツ「なに勝手に仕切ってんだよッ？」

バンディッツはもう一度アランにゲンコツをかました。

アラン「いでっ！？」

タスクモン「グオォォォォォォォォ！！」

タスクモンは勢いをつけてリュウギ達に突進を仕掛ける。

リュウギ達は素早く交わすと、レナモンは家の壁を足場にして高く飛び上がる。

レナモン「『狐葉楔！！』」

レナモンは手を広げると、木の葉で出来た無数の手裏剣の雨がタスクモンに降り注ぐ。

タスクモン「グオォォォォォォォォ！？」

ナルガモン「リュウギ、あの角を何とかするぞ！！」

リュウギ「分かった！！」

ナルガモンはタスクモンの背中を足場にして飛び上がり、両腕のブレイドでタスクモンの角に攻撃した。

ナルガモン「『ヒドゥンブレイド！！』」

リュウギ「まだだ！！」

リュウギは踏み込んでタスクモンに近づいた後、アルカナムを振り上げるようにして振って角に攻撃した。

リュウギ（今だ！！）

リュウギはトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発する。

リュウギとナルガモンは素早く体勢を立て直した。

リュウギ「やったか！？」

すると、タスクモンは唸り声を上げながら爆煙を切り開いて超弩級のパンチを繰り出した。

タスクモン「『パンツァーナックル！！』」

レナモンは素早く交わすが、リュウギとナルガモンはまともに喰らい、家の壁に叩き付かれる。

ミソラ「リュウギ、ナルガモン！？」

リュウギ「くっ…。」

ナルガモン「なんてバカ力なんだ…。」

すると、タスクモンはリュウギ達に矛先を向ける。

ミソラ「リュウギ、デジサモンよ！！」

リュウギはＤ－アクセルでデジサモンを発動しようとする。

Ｄ－アクセル「デジサモン不可…。」

リュウギ（そうか、発動して２４時間経ってないから発動できないんだ…！？）

「ダメだミソラ、デジサモンが使えない！！」

ミソラ「そんな…。」

レナモン「くっ、どうすれば…。」

バンディッツ「だぁーはっはっは！！今日こそ終わらせてやるぜ！！タスクモン、トドメを刺せ！！」

すると、タスクモンは勢いをつけてリュウギ達に向かって突進をする。

ミソラ「リュウギ！？」

ナルガモン「ち、畜生…。」

リュウギ（こんな所で、諦める訳にはいかないんだ！！）

すると、時間が止まったかのように動かなくなる。

リュウギ（な、なんだ！？）

すると、Ｄ－アクセルから声が聞こえてくる。

『仲間を助けたいか…？』

リュウギ（！？）

ナルガモン（お前は誰だ！？）

『仲間を助けたいのならば、己の力の限界を越すのだ！今こそ解き放て、ＥＸモードを！！』

ナルガモン（ＥＸモードだと…？）

すると、リュウギの目付きがキリッと変わった。

リュウギ（分かった…。俺達はどんな状況に陥っても、最後まで諦めない！それが俺の流儀だ！！行くぞ、ナルガモン！！）

ナルガモン（上等だ、やってやるぜッ！！！！）

すると、リュウギは左拳をを前に着き出して叫んだ。

リュウギ「ＥＸモード、発動！！」

時が動き出したその時、ナルガモンの回りに激しい突風が舞う。

バンディッツ「な、なんだ!?」

ミソラ「!?」

突風が去ると、ナルガモンの身体から光のオーラが纏う。

リュウギ「ナルガ…モン?」

ナルガモン「力が湧いてくるぜ…。ＣＯＯＬに反撃と行こうぜ!!」

すると、タスクモンは勢いよくナルガモンに突進する。

ナルガモン「うおぉぉぉぉぉぉぉ!!」

ナルガモンは握り拳を作り、タスクモンの角に思いきりアッパーをかますと、タスクモンの角をへし折ったのだ。

タスクモン「グオォォォォォォォォ!?」

ＢＡＤトリオ「はぁっ!?」

ＢＡＤトリオは思いきりあんぐりする。

ナルガモン「トドメだ!!『ヒドゥンブレイド!!』」

ナルガモンは両肘にあるブレイドを構え、３倍の力でタスクモンの腹を殴り飛ばした。

タスクモン「グオォォォォォォォォ！？」

タスクモンは力尽きて倒れると、タスクモンの体内からイビルスが現れる。

リュウギ「終わりだ！！」

リュウギはイビルスにアルカナムを向けてトリガーを引くと、銃弾がイビルスに直撃して跡形もなく消滅した。

イビルス「ギィィィィィィィィィィ！？」

ナルガモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

ナルガモンはフィニッシュを決めると、ＥＸモードが解けた。

リュウギ「これが、ＥＸモード…。」

レナモン「凄い…。」

バンディッツ「くそぉ、覚えておきやがれ！！」

バンディッツはそう言ってＢＡＤトリオは去って行った。

すると、リュウギのＤ－アクセルから光が生じ、自動的にデジエクスフィールドが発動される。

リュウギ「これで、この村は安全だな！」

ミソラ「そうだ、今の内にタスクモンをリカバリーしなきゃ！！」

ミソラは急いで致命傷を負うタスクモンをリカバリーした。

そして…。

タスクモン「いやぁ、二度も助けられるとは、本当に感謝するぜ！」

ナルガモン「当然だ、最強と呼ばれるデジモンの中のデジモン、このナルガモンだからな☆ナッハハハハハ…」

ミソラ「また始まったわ…。」

レナモン「いつもなのか…？」

リュウギ・ミソラ「うん、うん。」

リュウギとミソラは同時に頷いた。

（ギュルルル～…）

その時、ナルガモンは腹の虫が鳴ってばったりと倒れる。

ナルガモン「ハッ、はっ、はぁ～……。」

リュウギ「おい、どうしたんだよ！？」

ナルガモン「なんか…、ＣＯＯＬに暴れ過ぎて、腹減っ…た…。」

ミソラ「ホンット、世話が焼けるわね…？」

リュウギ（ＥＸモードを使えば、こんなにパワーを使うんだ…。）

タスクモン「だったらアレだ。デジタケでも食うか？」

ミソラ・レナモン（え…？）

すると、ナルガモンは目を輝かせる。

ナルガモン「マジでか！？」

タスクモン「二度も助けてくれたからな。たっぷり食いな！」

ナルガモン「ヒャッホウ！！」

ナルガモンは嬉しさのあまりに高く飛び上がる。

リュウギ「これにて、一件落着だな…。」

ミソラ「何処が一件落着よ？」

レナモン（う…、またしても…。）

こうしてリュウギ達はミハノ村を救い、村長タスクモンからお礼に大量のデジタケをご馳走して貰うのであった。（二度目）

ミソラ（はぁ～、エクレアが食べたい…。）

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

ＥＰ０４　～パワー炸裂！！解き放て、ＥＸモード！！～（後書き）

～アイナ山～

ここは、スレッド平原の北にある山。そこにヘアバンドをした青髪の青年がいた。

？？？「……。」

すると、イビルスに支配された岩石型デジモン、ゴーレモンが現れる。

ゴーレモン「ゴォォォォォォォ！！」

青髪の青年は右手にはめてある青のＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ゴーレモン、成熟期、岩石型、ウィルス種、必殺技は、カースクリムゾン。」

？？？「成熟期か…。くだらない…。」

すると、Ｄ－アクセルから声が聞こえてくる。

？？？「ここは私が…。」

？？？「いや、俺一人で十分だ…。」

？？？「分かりました。全ては我が主のために…。」

すると、青髪の青年は左手を広げると光が生じ、４重に重なった刃が現れる。

青髪の青年は４重に重なる刃を構えると、手裏剣のような形へと変形した。

？？？「ギルガメッシュの力、思い知るがいい…。」

青髪の青年は一体！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ０５　～リーダー争奪戦？羽ばたけ、コカトリモン！！～（前書き）

今回はちょっとした笑いあり（？）の話。

リュウギとナルガモンのリーダー争奪戦が始まる！？

Ｅｐ０５スタート！！

ＥＰ０５　～リーダー争奪戦？羽ばたけ、ココトリモン！！～

ミハノ村を救い、リュウギ達は次なる目的地へと向かう。

ナルガモン「さて、次の何処の目的地は……何処だ？」

すると、リュウギとミソラはズッコケる。

リュウギ「いきなりかよ…？」

レナモン「ここからだと、ウォルス海岸が一番近い…。」

ナルガモン「よぉし、ウォルス海岸に向かって突き進むぜ！！」

ミソラ「目的地すら分からなかったアンタに言う権利ないでしょ…？」

ナルガモン「細かい事は気にすんなって！リーダーの言う事は絶対な！！」

ミソラ「全然細かくないわよッ？」

リュウギ「ちょっと待てよ、お前いつの間にリーダーになったんだよ！？」

ナルガモン「問題ないだろ？」

ミソラ「大ありよッ？」

リュウギ「そもそも、なんでリーダーにこだわるんだよ？」

ナルガモン「リーダーになると出番が増えて目立つじゃん！だからだ！！」

リュウギ・ミソラ「……。」

リュウギとミソラは思った。コイツに任せたらロクな事がない。っと…。

リュウギ「よし、ここは公平に多数決だ。」

ナルガモン「はぁ！？何だよそれ！？」

リュウギ「リーダーはみんなに任されてこそ本当のリーダーなんだ。リーダーになれば目立つだなんて、そんな甘いポジションじゃないぞ。」

ナルガモン「よぉし、だったら多数決じゃなく、今回の話で活躍した奴がリーダーになるってのはどうだ？」

リュウギ「いいだろう。正々堂々、受けて立つぜ！」

ナルガモン「ぜってぇに勝って、リーダーの座はオレが貰うぜ！」

リュウギとナルガモンのリーダー争奪戦が開始され、火花が激しくぶつかり合う。

レナモン「止めなくていいのか、ミソラ？」

ミソラ「止めても無駄よ…？」

レナモン「そ、そうか…？」

歩いて１０分…。

レナモン「そろそろ着く頃だ…。」

すると、見えてきたのはウォルス海岸に繋がる一本の橋だった。

リュウギ「橋か…。」

ナルガモン「ここを渡ればウォルス海岸か、行こうぜ！！」

すると、黒い影がリュウギ達の行く手を阻む。

？？？「通せんぼう！！」

リュウギ「！？」

リュウギはＤ－アクセルで行く手を阻むデジモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「コカトリモン、成熟期、巨鳥型、データ種、必殺技はペトラファイアー。」

ナルガモン「おいお前！こっちは急いでるんだから退け！」

コカトリモン「通せんぼう！！」

ミソラ「通せんぼうしか言ってないわよ…？」

コカトリモン「……。通せんぼう！！コケッ！！」

リュウギ「ほぼ変わってねぇぞ！！」

レナモン「どうやら、力ずくで退かさないといけないようだな…。」

すると、ナルガモンとレナモンは戦う体勢に入る。その時、コカトリモンは慌てて首を振る。

コカトリモン「ま、待て？お前らと争うつもりはない？」

リュウギ「なんだ、喋れるんだ…。」

ミソラ「痛い目に合いたくなかったら、四の五の言わずに通しなさいよ！！」

コカトリモン「そいつはできねぇ相談だ。」

ナルガモン「はぁ？どういう事だよ？」

レナモン「どうやら、何か事情があるらしいな…。」

コカトリモン「その通り！！アレを見てみろ。」

コカトリモンは羽を広げて橋に差すと、橋に繋がっているロープが今にも切れそうな状態だった。

一同「！？」

コカトリモン「ご覧の通り、橋はこの有り様だ…。ウォルス村の村長に頼まれてオレはずっとここで見張っているんだ。」

リュウギ「どうやったら、ウォルス海岸に行けるんだ?」

コカトリモン「答えは1つ、諦める事だ。さ、帰った×2。」

レナモン「……。」

ミソラ「そもそも、アンタ鳥じゃないの?私達を乗せてウォルス海岸まで運んでいってよ!!」

コカトリモン「そいつもできねぇ相談だ…。」

リュウギ「何でなんだ…?」

コカトリモン「……。」

すると、コカトリモンは黙りになる。

ミソラ「ちょっと、何で黙ってるのよ…?」

ナルガモン「分かった!お前、飛べないんだろ!!」

ナルガモンの言葉のナイフが、コカトリモンの胸に深く突き刺さった。

コカトリモン「ガハッ!?」

リュウギ「あ、急所にヒットした…。」

コカトリモン「人が気にしている事をよくもーーッ?プライバシーの侵害で訴えてやるコケェーーーッ?」

リュウギ「いや、そいつもできねぇ相談だって言ったからじゃねぇか…?」

ミソラ「デジタルワールドってどうしてこうマトモな奴がいないのよ…?」

ミソラはため息をつくと、レナモンは落ち込む。

レナモン「私も、マトモな…。」

（ブツブツ…）

ミソラ「違うわよレナモン?レナモンは別だからそう落ち込まないで?」

コカトリモン「マトモじゃなくて悪かったなッ?」

リュウギ「どうするんだ…?」

コカトリモン「だから諦めろってさっきから言ってるだろうがッ?」

ナルガモン（チャンス!!ここでオレが活躍すればリーダーの座はオレの物!!）

「オレはぜってぇに諦めねぇ!!」

リュウギ「ナルガモン!?」

ナルガモン「不可能を可能にするのがオレのモットー！！このオレに任せな！！」

コカトリモン「なにぃ！？」

ミソラ「また始まったわ…。」

リュウギ「それで、どうするつもりだ…？橋でも作るつもりか…？」

ナルガモン「橋なんか作ったら日が暮れちまうだろ？」

リュウギ「いや、それどころか1年以上掛かるぞ…？」

リュウギは小さくツッコム。

ナルガモン「そこでだ！！オレはこの先にあるウォルス海岸に行く方法を思い付いた！！」

レナモン「それはなんだ…？」

ナルガモン「コカトリモン、お前を飛べるようにしてやる！！！！」

一同「はぁ！？」

コカトリモン「オ、オレを飛べるようにだと！？」

ナルガモン「そうだ！どうだリュウギ、思い付きもしなかっただろお？」

ナルガモンは勝ち誇って人差し指を真上に突き立てる。

リュウギ「思い付きもしなかったって言われても…？」

ミソラ「ホントバカね…？」

コカトリモン「オレを飛べるようにって言われても…。世間じゃオレは飛べないって言われてるから…。どうせ…」

ナルガモン「バカ野郎！！世間がなんだ！！そんなんだからお前はいつまで経っても飛べないんだ！！」

コカトリモン「！？」

ナルガモン「お前の夢はなんだ！？空を飛びたいんじゃないのか！？」

コカトリモン「空を…飛びたい…。」

リュウギ「良いこと言ってるけど、人の夢勝手に作っちゃったぞ…？」

ミソラ「もういい、私はツッコまないわ…。」

コカトリモン「そうか…。最初から諦めてたら何も始まらねぇよなぁ…。よし、オレやってみるよ！！」

ナルガモン「その意気だ！頑張ろうぜ！！」

ナルガモンはそう言ってコカトリモンの手をガッチリと握手をする。

すると、コカトリモンは感動の余りに号泣する。

コカトリモン「ナルガモン、お前っていい奴だなぁ～（泣）」

ナルガモン「泣くなよ。涙を流すなら、飛べるようになってから流そうぜ！！」

コカトリモン「うお～、一生着いて行くぜ師匠（号泣）」

ナルガモンはコカトリモンとの間に深い友情が芽生えた。

リュウギ「なんか知らない内に友情が芽生えたぞ…？」

ミソラ「バカによる奇跡的のコンビ誕生ね…？」

そして…。

ナルガモン「今からオレ直伝の飛行訓練を開始する！！」

コカトリモン「よっ、師匠！！」

リュウギ（直伝って…？）

ミソラ（それ以前にアンタ、飛んだ事あるの…？）

ナルガモン「まず始めに、自分が飛んでいる姿を『イメージ』するのだ！！」

コカトリモン「イメージかぁ。なるほど！！」

ナルガモン「よし、早速やってみろ！！」

コカトリモン「コケェーーー！！」

コカトリモンは懸命に翼を羽ばたかせる。

すると…。

コカトリモン「飛んだ！？ついにオレの夢が叶ったんだ！！コケェーーー！！」

ナルガモン「な？だから言っただろ？ナッハハハハ！！」

よくよく見ると、ほんの１ｃｍしか飛んでいなかった。

リュウギ・ミソラ・レナモン「……。」

コカトリモンのプライバシーを傷付けないため、あえてツッコまない２人であった。

コカトリモン「でも、この高さじゃなくてもっと大空に羽ばたきたい…。」

ミソラ（そこ突かれたわよ…。）

すると、ナルガモンの額に汗が見えるリュウギ。

リュウギ（アイツ、冷や汗出てるぞ…？どうするつもりなんだ…？）

ナルガモン「よ、よしっ、これで第１関門はクリアだ！」

コカトリモン「おぉ！！次は何でありますか、師匠！！」

リュウギ（アイツ、突き通したぞ！？）

ナルガモン「次の第２関門は…。」

コカトリモン「第２関門は…？」

（ゴクリ…）

ナルガモン「火事場のバカ力だ！！」

コカトリモン「…と言いますと…？」

ナルガモン「こんな話を知っているか？少し昔の話だが、実際に火事のときにか弱い幼年期デジモン、トコモンが怪我しているティラノモンを１人で持ち上げたという伝説となった話があるのだ！」

コカトリモン「なに、そんな話があったのか！？」

ミソラ「胡散臭そう…？」

レナモン「だが、意味としては合っている…。」

コカトリモン「それで、オレはどうすればいいのだ！？」

ナルガモン「なぁに、簡単な事だ…。この崖から飛び降りろ。」

コカトリモン「はいいいいいいいいいい！？」

ミソラ（あのバカ、ついに血迷ったわ…？）

コカトリモン「そ、それはいくらなんでもムチャクチャだぞ！？」

ナルガモン「ムチャクチャなのはオレでも解っている。トコモンだってそう思っていたさ…。しかしトコモンはふと思った…。」

『まだやりもしてないのに始めから無理だと思うから無理なんだ…。最善を尽くしてから諦めよう！』

ナルガモン「力のないトコモンは最後まで諦めなかった。それが火事場のバカ力を生んだのさ…。コカトリモン、お前はどっちのタチだ…？」

ミソラ（ますます胡散臭いわ…？）

すると、コカトリモンは号泣する。

コカトリモン「オレはバカだ！やりもしねぇで始めから諦めるなんてオレはとんでもない大バカ野郎だ～（号泣）」

リュウギ（完全に信じ込んでるぞ、アイツ…？）

コカトリモン「オレ、やってみる！！最善を尽くすよ！！」

ナルガモン「解ればいいんだよ…。夢に向かって前に突き進もうぜ、オレの弟子よ！！」

コカトリモン「師匠～（号泣）」

リュウギ（こうなった以上、もう誰も止められないな…？）

すると、コカトリモンは懸命に羽ばたかせる。

ナルガモン「行け！！夢に向かって羽ばたくんだ！！」

コカトリモン「コケェーーーーー！！」

コカトリモンは勢いつけて崖から飛び立った。

ナルガモン「行けぇぇぇぇぇぇ！！」

リュウギ「ところでナルガモン、アイツ命綱してるのか？」

すると、ナルガモンはピタッと止まる。

ナルガモン「あ…、忘れてた…？」

すると案の定、コカトリモンは崖の下へと落っこちた。

コカトリモン「コケェェェ

リュウギ「笑って誤魔化すな！？」

そして…。

コカトリモン「どうしてくれんだッ？本当にに死にかけたんだぞッ？」

御覧の通り、コカトリモンは激怒だった。

リュウギ「やっぱり…？」

ミソラ「ちょっとナルガモン、どうするのよ…？」

ナルガモン「……。」

しかし、ナルガモンは黙りだった。

コカトリモン「おい、何とか言ったらどうなんだッ？」

すると、ナルガモンの目付きがキリッと変わる。

ナルガモン「こんな話を知っているか…？」

コカトリモン「？」

ナルガモン「さっきのトコモンの話だが、実は裏話があったんだ…。」

コカトリモン「なに！？」

ナルガモン「実は、トコモンはティラノモンを一度持ち上げようとしたが、ビクともしなかったんだ…。」

コカトリモン「だったら、どうして持ち上げたんだよ!?」

ナルガモン「友情と夢さ…。」

コカトリモン「!?」

ナルガモン「それはだな…」

―――――――――――――――

トコモン「ダメだ…。持ち上がらないよ～…。」

すると、致命傷を負っていたティラノモンは虚ろな目でトコモンを見つめる。

ティラノモン「トコモン、俺の事はいい…。お前だけ逃げろ…。」

トコモン「イヤだ!!ティラノモンは僕の一番大切な友達であって初めての友達なんだ!!」

ティラノモン「トコモン…。」

トコモン「僕は絶対に諦めない!!僕はティラノモンと一緒に世界を見るって約束したんだ!!」

ティラノモン「なぜそこまでして約束にこだわるんだ…?」

トコモン「それは…、それは僕の夢だからだ！！」

―――――――――――――――

ナルガモン「とまぁ、それでトコモンは火事場のバカ力を生んでティラノモンを助けたのさ…。友との友情。そして自分の夢のために…。コカトリモン、お前はどっちのタチだ…？」

ミソラ（そんなの、私は絶対に信じないわ…？）

リュウギ（嘘丸出しだからな…。と言うよりかそんな話ないだろ…？自分の仕出かした事を避けるために作った作り話だろ…？）

すると、コカトリモンは先程よりかなり号泣していた。

コカトリモン「まさか…、まさかそんな裏話があったとは…。オ、オデはじらながっだ～（号泣）。」

ミソラ（バカだわ…。完全なるバカだわ…？）

コカトリモン「オレ、やるよ！！」

コカトリモンは涙を拭いて覚悟を決めた。

ナルガモン「よし、万が一のために足に命綱を着けておくから安心しな！！」

リュウギ「万が一のためにって、さっき起きただろッ！？」

ミソラ「素直に認めないようね…？」

コカトリモン「よしっ！！コカトリモン、行きまーす！！」

コカトリモンは懸命に翼を羽ばたかせる。

コカトリモン「コケェーーーー！！」

コカトリモンは勢いつけて崖から飛び立った。

ナルガモン「行けぇぇぇぇぇぇ！！」

リュウギ「ところでナルガモン、いつの間に命綱用意してたんだ…？」

ナルガモン「そこら辺のツタを使った！」

リュウギ「っておいいいいいいいいいいいい！？」

コカトリモンの足に縛られたツタは案の定ぶち切れてしまい、崖の下へと落っこちた。

コカトリモン「コケェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！？」

そして…。

コカトリモン「奇跡は起きなかった…。マジで死にかけた…（死）」

リュウギ「いや、二度も崖に落っこちて帰ってこれたのも、ある意

味奇跡だぞ…？」

コカトリモン「おい、どうしてくれんだテメェ？二度も死にかけたんじゃねぇかよ！？」

ナルガモン「ま、こういう時もあるさ？失敗は成功のもとってよく言うだろ？」

リュウギ「この期に及んでまだ言うか！？」

ミソラ「呆れたにも程があるわ…？」

コカトリモン「何が師匠だッ？こんなのやってやれるかコケェ？」

ナルガモン「実はなぁ、あの裏話には更に秘められた裏話があるんだ…。」

コカトリモン「騙されねぇぞッ？」

ミソラ「リュウギ、どうするのよ？このままじゃキリがないわよ？」

リュウギ「う～ん…。コカトリモン、１つ聞いていいか？」

コカトリモン「ん、なんだ？」

リュウギ「ふと思ったんだが、お前ってウォルス海岸に住んでるんだよな？」

コカトリモン「そうだ。」

リュウギ「それじゃ、なんでここにいるんだ？」

コカトリモン「あ……。」

ミソラ「でも、橋があるじゃないの？」

レナモン「コカトリモンの重さはツタが切れる程重い…。つまり、今にも切れそうな橋を渡るのは不可能だ…。」

コカトリモン「ギクッ！？」

ナルガモン「お前、何か隠してるな！？」

コカトリモン「な、何も隠してねぇよ！？」

リュウギ「だったらどうやってここに来たんだ？」

コカトリモン「それはぁ……飛んできた。」

リュウギ「ウソつけッ？さっきの訓練は何だったんだよッ？」

ナルガモン「オレを騙しやがって…、許さねぇ？」

リュウギ「おい、散々人を騙しといた奴に言う権利ねぇだろ…？」

コカトリモン「もうこうなったらヤケだ！！石にしてやる！！『ペトラファイアー！！』」

ヤケくそになったコカトリモンは口から火を吐く。

リュウギ達は素早く交わすと背後にある木に直撃した。
すると、木が石になってしまった。
リュウギ「石になったぞ!?」
レナモン「気を付けろ、あの技を受けたら、石になる!」
ミソラ「そうなの!?」
コカトリモン「喰らえ!!『ペトラファイアー!!』」
コカトリモンは容赦なく火を吐く。
リュウギ「とにかく、コカトリモンを何とか止めるぞ!!」
リュウギは右手を前に差し出すと、ガンブレード、アルカナムが現れる。
ナルガモン「『アートルムフレイム!!』」
レナモン「『弧葉楔!!』」
ナルガモンとレナモンはそれぞれの必殺技でコカトリモンにぶつけた。
コカトリモン「ムダムダ!!そんな技、オレには通用しねぇ!!『フェザーカッター!!』」
コカトリモンは翼を羽ばたかせると、無数の羽がリュウギ達に襲い

掛かる。

一同「うわっ!?」

リュウギ「くっ、何て強さなんだ!?」

レナモン「ミソラ、コカトリモンの中にイビルスはいるか?」

ミソラ「やってみるわ…。」

ミソラはゆっくりと目を閉じて、コカトリモンの体内を調べる。

ミソラ「ディスティングハーツ!!」

しかし、コカトリモンの身体には正常な状態であり、イビルスに支配されていなかった。

ミソラ「いないわ!」

リュウギ「イビルスいないのにこんなに強いのか!?」

レナモン「コカトリモンは成熟期…。私達成長期では倒すのは難しい…。」

ナルガモン「だったらなんだ?力を合わせればあんな奴、倒せるぜ!!」

レナモン「待て、無闇に戦えば返り討ちにされるだけだ!!」

ナルガモン「だったら返り討ちにされなきゃいいんだよ!!」

ナルガモンは勝手な行動でコカトリモンに攻撃を仕掛ける。

ミソラ「ホントに自己チューなんだからッ？」

ナルガモン「喰らえ、『ヒドゥンブレイド！！』」

ナルガモンは両肘のブレイドでコカトリモンに攻撃する。

コカトリモン「『フェザーカッター！！』」

コカトリモンは翼を羽ばたかせて無数の羽を放った。

ナルガモン「くっ！？」

ナルガモンはまともに直撃し、怯んでしまった。

コカトリモン「コケェーーー！！」

コカトリモンは勢いつけて走りだし、ナルガモンに突進した。

ナルガモン「うわぁぁぁぁぁぁ！？」

ナルガモンは激しく木に叩き付かれた。

リュウギ「ナルガモン！？」

レナモン「くっ、どうすれば…？」

リュウギ「こうなったら、ＥＸモードだ！！」

リュウギは最後の手段、ＥＸモードを発動させようとする。しかし、Ｄ－アクセルは何も反応しない。

リュウギ「なんで発動しないんだ！？」

ミソラ「リュウギ、早くしないとナルガモンが！？」

その間に、ココトリモンは怒りの矛先をナルガモンに向けていた。

ココトリモン「さっきやられた分、１０倍にして返してやるッ？」

すると、ココトリモンは大きく息を吸い込む。

レナモン（奴が飛べないのなら…。）

すると、レナモンは目にも止まらない早さで崖から飛び降りた。

ミソラ「レナモン！？」

リュウギ「アイツ、一体何をするつもりなんだ！？」

ココトリモン「くたばれ！！」

すると、宙に舞うレナモンは両手を合わした。

レナモン「間に合え！『狐変虚！！』」

その時、レナモンとココトリモンは木の葉に包まれた。

すると、レナモンとココトリモンの位置が入れ替わっていた。

ミソラ「スゴいわレナモン！！」

レナモン「間に合ったようだな…。」

ココトリモン「『ペトラ……』ってあれ？」

入れ替わったココトリモンはそのまま崖へと落っこちた。

ココトリモン「コケェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！？」

リュウギ「ナルガモン、大丈夫か…？」

ナルガモン「良いトコ取りされちまったぜ…。」

レナモン「とんだ無駄足だったな…。」

リュウギ「この様子じゃ、ウォルス海岸は無理だな…。」

ナルガモン「クソッ、あのニワトリ野郎のせいでッ？」

ナルガモンは腹いせで地面に転がっていた小石を崖に向かって蹴り飛ばした。

その時だった。

（カツン！）

リュウギ「あれ?崖なのに何か音しなかったか?」

ミソラ「だよね…。私も聞こえたわ。」

レナモン「まさか…。」

レナモンはゆっくりと崖に向かって歩き出した。

ミソラ「レナモン、危ないわよ!?」

その時、レナモンは何もないハズの崖の上を歩いていた。

一同「!?」

リュウギ「一体どうなってんだよ…!?」

レナモン「なるほど…。これは『見えない橋』だ。つまり、あの橋はただの偽りに過ぎない…。」

リュウギ「そうだったのか…。」

ミソラ「デジタルワールドってよく解らないわ…?」

リュウギ「でも、これならウォルス海岸まで行けるな!」

ナルガモン「ま、オレのお陰だな♪」

リュウギ「ウソつけ、明らかに自分もビックリしてたじゃねぇか…?」

ナルガモン「アレはオレの猿芝居だ!!よし、これでリーダーはオレで決まりだな♪」

ミソラ「何言ってんのよ?リーダーはリュウギで決まりよ!」

ナルガモン「はぁ!?」

レナモン「私もミソラに賛成だ…。理由は単純。コカトリモンが何か企んでいる事に気付いたのはリュウギだ…。」

ミソラ「アンタの胡散臭い話をしていたら、それこそ1年以上掛かるわ…?」

ナルガモン「そ、そんなぁ〜?」

リュウギ「ま、そういう訳で俺の勝ちだな。」

ナルガモン「クソーーーー!!」

ナルガモンはリュウギに負けて非常に悔しがる。

リュウギ「それじゃ、行こうぜウォルス海岸へ!」

リュウギは先陣をきって、ウォルス海岸へと続く見えない橋を渡るのであった。

――To Be Continued….

ＥＰ０５　～リーダー争奪戦？羽ばたけ、コカトリモン！！～（後書き）

次回はついにウォルス海岸に到着！！

そこに待ち受けていたものとは…？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ０６　～海賊来襲！？ウォルス村を守れ！！～（前書き）

ついにウォルス海岸に到着！

しかしそこに待ち受けていたものはなんと海賊！？

Ｅｐ０６スタート！！

ＥＰ０６　～海賊来襲！？ウォルス村を守れ！！～

～ウォルス海岸～

リュウギ達は見えない橋を渡り、ついにウォルス海岸へと辿り着いた。

ナルガモン「ヒャッホウ！！着いたぜウォルス海岸！！」

広大な海は太陽に照らされ、海は宝石のように美しく輝いていた。

ミソラ「綺麗ね…。」

レナモン「ウォルス海はネットの海（デジモンが誕生した、ネットワークの大海）に繋がる海だ。」

リュウギ「つまり、日本で言う瀬戸内海とか日本海みたいなものか…。」

ナルガモン「それで、これからどうするんだ？」

リュウギ「取り合えず、この海岸にイビルスがいないかどうか確認しなきゃな…。」

ミソラ「確か、ウォルス村っていう村があったんだよね？」

ナルガモン「そう言えばあのニワトリ野郎（＝コカトリモン）が言ってたな！」

リュウギ「よし、ウォルス村に行ってみるか！」

その時、地面が激しく揺れた。

一同「！？」

リュウギ「地震！？」

すると、地震は止まった。

ミソラ「止まったわ…。」

ナルガモン「何だったんだ…？」

レナモン「ミソラ、アレを！？」

レナモンはあるものに指を差す。それは、ウォルス村の港湾に巨大な船が止まっていた。

リュウギ「船？」

ミソラ「もしかして、海賊船！？」

レナモン「かもしれない…。」

ナルガモン「事件かぁ？だったらオレの出番だぜぃ！！」

ナルガモンはそう言ってウォルス村に向かって全力で走って行った。

リュウギ「行っちゃった…？」

ミソラ「もう、ホントに自己チューなんだからッ？」

リュウギ「とにかく急ごう！！」

リュウギ達は急いでウォルス村へと向かった。

～ウォルス村～

？？？「野郎共、この村の食料を全部奪い取るのだ！！」

タコの姿をしたデジモンが叫ぶと、クルー達はウォルス村を襲う。

逃げ惑う村のデジモン達。そこへ、勇敢に戦おうとする一体のデジモンが現れる。

？？？「おい、オイラの村に好き放題してんじゃねぇ！！」

クルーであるセピックモンは嘲笑う。

セピックモン「なんだコイツ？成長期のゴマモンがオレ達に何かようか？」

勇敢に戦うゴマモンは、バカにされて怒り出す。

ゴマモン「オイラを甘くみていたら、痛い目見るぞッ？」

セピックモン「是非やって欲しいもんだ！！ウキャキャキャキャキャ♪」

ゴマモン「バカにしやがってッ？」

ゴマモンは勢いつけてセピックモンの腹に頭突きをかました。

セピックモン「ムキーーーッ?嘗めた真似しやがってッ?」

セピックモンは左手に持つブーメランを振りかぶった。

ゴマモン「!?」

その時だった。

???「うおりゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ!!」

遠くから黒い影が現れてセピックモンを蹴り飛ばした。

セピックモン「ウキャーーーーーー!?」

セピックモンは激しく壁に叩き付かれて気絶する。

セピックモンを蹴り飛ばしたのはナルガモンだった。ナルガモンは人差し指を真上に突き立てた。

ナルガモン「オレ、参上!!」

ゴマモン「……。」

すると、セピックモンがやれた事を知ったクルー達はナルガモンを囲む。

クルーA「テメェ、よくもやりやがったな…ッ?」

クルーB「やっちまえッ？」

？？？「『狐葉楔！！』」

すると、上空から無数の木の葉の手裏剣がクルー達に浴びせる。

クルー達「うわっ！？」

するとナルガモンの前にリュウギ達が地面に着地する。

リュウギ「大丈夫か？」

ゴマモン「あ、あぁ…。」

ナルガモン「ケッ、これからが良いトコなのによッ？」

レナモン「お前は自分勝手すぎる…。もう少し回りの事を考えろ…。」

ナルガモン「何だとッ？オレより背がデカイからって偉そうに？」

リュウギ「ってそこは関係ねぇだろ！？」

ミソラ「ホントにバカね…。」

クルーA「なんだテメェらはッ？」

クルーB「何者だッ？」

リュウギ「俺達はデジタルワールドを救うためにやってきた、エクセリオンだ！！」

リュウギは声を発すると同時にガンブレード、アルカナムを取り出した。

ミソラ「ディスティングハーツ！！」

ミソラは目を閉じてクルー達の体内を調べると、クルー達の体内にイビルスはいなかった。

ミソラ「リュウギ、イビルスはいないみたいだよ！」

リュウギ「だったら、少し凝らしめなきゃな…。」

ナルガモン「来やがれ、オレが相手になってやる！！」

クルーB「生意気な…？」

クルーA「全員で掛かれ！！」

クルー達は一斉にリュウギ達に襲い掛かる。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ナルガモン「『ヒドゥンブレイド！！』」

レナモン「『狐葉楔！！』」

リュウギ達は次々とクルー達を倒していく。

ゴマモン「スゲェ…。」

すると、5分も経たない内に、あっという間にクルー達を片付けた。

クルーA「な、なんて強さだ…!?」

??「野郎共、何をしておる?」

クルー達「オクタモン様!?」

すると、リュウギ達の前にタコの姿をした軟体型デジモン、オクタモンが現れる。

リュウギ「アイツは!?」

リュウギはD一アクセルでデータを読み取る。

D一アクセル「オクタモン、成熟期、軟体型、ウィルス種、必殺技は海鳴墨銃(かいめいぼくじゅう)」

ナルガモン「テメェが親玉か?」

オクタモン「フッフッフ…。残念だがオデは幹部だ!!船長は船内におられる!!」

リュウギ「何でこの村を襲うんだ?」

オクタモン「んなもん、食料の調達に決まってるだろ?ここに来れば大量の食い物が手に入る!」

ゴマモン「ふざけるな！！オイラ達は生活のために食料を蓄えてるんだ！！」

オクタモン「お前らの物はオデ達ディープ海賊団の物！！オデ達の物はディープ海賊団の物だ！！」

ミソラ「最低ね…。」

ナルガモン「理由はともあれ、オレより目立つ奴らはオレがブッ倒す！！」

オクタモン「面白い、だったらオデが遊んでやろう！」

ナルガモン「来やがれ！！」

オクタモン「『海鳴墨銃（かいめいぼくじゅう）！！』」

オクタモンは墨のつまった弾を発射する。

ナルガモン「当たるかよ！！」

ナルガモンは壁を足場にして高く飛び上がる。

すると、墨のつまった弾は壁に直撃した。

ナルガモン「『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から強力な黒炎弾を放ち、オクタモンにダメージを与えた。

オクタモン「ぐはっ!?」

ナルガモン「へへーンだ!!幹部の割りには全然大した事ねぇじゃねぇかよ♪なぁリュウギ?」

すると、リュウギ達は苦しみに膝が折れる。

ミソラ「く、苦しい…。」

リュウギ「な、なんだこれは…?」

ナルガモン「リュウギ、お前ら!?どうしたんだ!?」

オクタモン「引っ掛かったな!オデの技は、毒性たっぷり入ってんだよ!!」

ナルガモン「テメェ、それが狙いだったのか!?」

レナモン「くっ、このままでは…。」

オクタモン「さぁどうする?素直に土下座すれば、助けてやってもいいぞ?」

ナルガモン「くっ…。」

リュウギ「土下座なんてすんじゃねぇぞ…。」

ナルガモン「リュウギ!?」

リュウギ「お前は最強のデジモンじゃねぇのかよ…？だから土下座なんて絶対にすんじゃねぇぞ…。」

ナルガモン「けどよ！！」

リュウギ「自分の言葉を曲げねぇ流儀はねぇのかよ！！」

ナルガモン「！？」

リュウギ「こっちは俺に任せろ…。」

リュウギはそう言うと、ナルガモンの目付きがキリッと変わる。

ナルガモン「そうだ…。オレは最強のデジモンだ！！誰がテメェらなんかに土下座するかよ！！」

オクタモン「ほぅ、土下座するつもりはなさそうだな…？」

ナルガモン「オレはリュウギを、アイツらを信じる！！」

リュウギ「そうだ…、それでこそお前だ…。」

（とは言うものの、一体どうすれば…？）

リュウギ達の意識は朦朧となっていたその時だった。

？？？「『癒しの光！！』」

優しい光がリュウギ達を照らした。

ミソラ「なに、この優しい光は…？」

レナモン「毒が抜けていく…。」

？？？「私が助太刀致します！！」

すれと、リュウギ達の前に妖精の姿をしたデジモンが現れた。

ゴマモン「マリンエンジェモン！？」

リュウギはＤ－アクセルでマリンエンジェモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「マリンエンジェモン、究極体、妖精型、ワクチン種、必殺技はオーシャンラブ。」

リュウギ「お前が治してくれたのか？」

ミソラ「可愛らしいデジモンね♪」

マリンエンジェモン「私はウォルス村の主、マリンエンジェモンと申します。私の癒しの光で、みなさんの毒を治しました。」

リュウギ「恩にきるぜ！！」

すると、リュウギのＤ－アクセルから反応する。リュウギはＤ－アクセルの画面を見ると、『ＥＸモード発動可』と書いてあった。

リュウギ「ナルガモン、ＥＸモードだ！！」

ナルガモン「よっしゃ、ＣＯＯＬに反撃と行こうぜ！！」

リュウギは左手を前に突き出して叫ぶ。

リュウギ「ＥＸモード、発動！！」

すると、ナルガモンの回りに激しい突風が舞う。

オクタモン「な、なに！？」

突風が去ると、ナルガモンの身体から光のオーラが纏う。

ナルガモン「どうしたぁ、さっきの余裕ヅラは？」

オクタモン「ハッタリに過ぎねぇ！喰らえ『海鳴墨銃！！』」

オクタモンは毒性たっぷりつまった墨の弾を発射する。

ナルガモン「『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から強力な黒炎弾を吐いてオクタモンの放った砲弾を無力化した。

オクタモン「なに！？」

ナルガモン「１０倍にして返してやるぜ！！『ヒドゥンブレイド！！』」

ナルガモンは目にも止まらぬ早さで両腕のブレイドでオクタモンの被る壺を叩き割った。

オクタモン「ひぎゃゃゃゃ！？」

オクタモンは壺を割られた衝撃で気絶する。

クルーA「幹部のオクタモン様がやられたぞ!?」

セピックモン「ヤベェぞコイツら!?一旦ズラかるぞ!!」

クルー達は気絶したオクタモンを連れて逃げていった。

戦闘を終えたナルガモンは、EXモードが解ける。

ナルガモン「ヘッ、一昨日来やがれ!!」

すると、マリンエンジェモンはトントンとナルガモンの肩を叩く。

ナルガモン「?」

マリンエンジェモン「あのぅ、どうやって一昨日に行くんですか…?」

すると、リュウギとミソラはズッコケた。

ミソラ「そう言う意味じゃないから?」

リュウギ「と、取り合えず助けてくれてありがとな。」

マリンエンジェモン「いえいえ、困った時は御互い様です♪」

レナモン「ま、あの海賊団が逃げるのは無理もない…。」

ミソラ「どうして？」

レナモン「マリンエンジェモンは究極体だからだ…。」

リュウギ「何だよ、究極体って？」

レナモン「デジモンには進化の段階があり、基本的に誕生から順に幼年期（それぞれ幼年期前期、幼年期後期ともいう）、そして次に成長期、成熟期、完全体、最後に究極体という六段階に分類されている。」

ミソラ「それじゃ、レナモンは何なの？」

レナモン「私達は成長期だ…。」

リュウギ「ナルガモンが成熟期に進化した姿って一体何だろうな…？」

ナルガモン「きっとＣＯＯＬだぜ♪」

ミソラ「どうかしら…？」

リュウギ「待てよ！つまり、この中で一番強いのは、マリンエンジェモンって事なのか！？」

レナモン「そうだ…。」

すると、リュウギは苦笑いする。

リュウギ「人は…じゃなくて、デジモンは見掛けによらずってこの

事なんだな…？」

マリンエンジェモン「とんでもないです！？私は戦うのが嫌いなんです？」

リュウギ「そ、そうか…？」

ゴマモン「どうしよう…。何か対策を立てないと…。」

リュウギ「もしかして、またさっきの奴らが襲ってくるのか？」

ゴマモン「うん。幹部であるオクタモンがやられたから、もしかしたらディープ海賊団の船長が出てくるかもしれない！」

ミソラ「船長がこの村に！？」

マリンエンジェモン「ディープ海賊団の船長はネット海を渡る海賊の中の海賊だという噂が聞いたことがあります…。例えどんな手を使ってでも目的のためなら手段を選ばないと言う事も…。」

リュウギ「だから何だよ？」

すると、リュウギは自らの拳と拳をぶつけた。

リュウギ「奴らがどんな手を使っていようが、俺は正々堂々、真っ向勝負する！！それが俺の流儀だ！！」

マリンエンジェモン「心強いです♪」

ミソラ「もう、また始まったわ…？」

ミソラは呆れて深くため息をつく。

ナルガモン「向こうが海賊の中の海賊なら、オレはデジモンの中のデジモンだ！！」

リュウギ「よく言ったぜナルガモン！」

ナルガモン「たりめぇだろ？」

レナモン「似た者同士だな…。」

（フッ…）

レナモンは2人の姿を見て静かに笑う。

ミソラ「とにかくゴマモンの言う通り、何か対策を立てないとね！」

ナルガモン「対策？んなもんなくたって正面からぶつけりゃいいんだよ！！」

リュウギ「いや、そうすれば相手の思う壺だ…。がむしゃらだけで戦いを乗り越えるのは難しい。その気持ちは大切だが、冷静さも必要だ。」

ナルガモン「わ、分かった！」

リュウギ「よし、そうと決まれば早速…」

（ギュルルルル～…）

すると、リュウギとナルガモンの腹の虫が鳴る。

リュウギ・ナルガモン「あ…。」

マリンエンジェモン「お腹空いてるみたいですね…？それなら、私の家に来てください！！」

ナルガモン「そ、そうだな？腹が空っては如何様はできねぇってよく言うしな？」

リュウギ「いや、如何様じゃなくて戦だろ…？」

リュウギは小さくツッコム。

ミソラ「マリンエンジェモン、よろしく頼むわ！」

リュウギ達は腹ごしらえ、そして今後の対策を立てるため、マリンエンジェモンの家へと向かった。

～ディープセイバー号～

ウォルス村の港湾から少し離れた所に、一隻の巨大な船が浮かんでいた。

オクタモン「船長！！大変です！！」

？？？「何だ騒々しい…。大量の食料でも手に入れたのか？」

オクタモン「いやぁ…、それがですね…？そんな事より、ウォルス村で…」

すると、船長は左手と一体化した大砲をオクタモンに向けた。

オクタモン「ひぃ！？」

？？？「おい、いつからオレの質問に答えなくていいと許可したのだ？」

オクタモン「も、申し訳ありません船長？食料はある奴らのせいで奪い取れなかったです？」

？？？「役立たずめ…。そいつらは一体何者だ？」

セピックモン「デジタルワールドを救うためにやってきた、エクセリオンだ！！と、おっしゃっていました！！」

？？？「ならば俺様達に任せろ！！」

すると、船長の前に３つの影が現れる。

？？？「とぅ！！バンディッツ！！」

？？？「そしてアランでさぁ！！」

？？？「ドギヌス！！三人揃って…」

ＢＡＤ特戦隊「ＢＡＤ特戦隊！！」

？？？「ん？なんだお前達は？」

バンディッツ「俺様はそのガキ共に困っている。と言うわけで、ここは同じ目標である俺様達と協力しないか？」

？？？「船長であるオレに協力しろだと？オレに何の特があると言うのだ？」

アラン「そりゃ勿論、大量の報酬を差し上げますぜぃ。」

ドギヌス「あのガキ共を排除すれば、あの村はお前達の物になる。悪くない話だろ？」

？？？「うむ…。ならば引き受けよう！その代わり、報酬はたっぷり貰うぞ！！フハハハハハ！！」

船長はそう言って高らかに笑うのであった。

バンディッツ「フフフ…。」

バンディッツは陰で小さくほくそ笑むのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ０６　～海賊来襲！？ウォルス村を守れ！！～（後書き）

次回はエクセリオンｖｓディープ海賊団！！

何を企むかＢＡＤトリオ！！

ＢＡＤトリオ「その名前で呼ぶんじゃねぇッ？」

気にせず次回もお楽しみに！！

ＥＰ０７　～ディープ海賊団を倒せ！！ナルガモン、進化！！～（前書き）

ついにナルガモンが進化しちゃいます！！

ご安心を、イメージしやすいようにちゃんと挿絵用意しています！！

では、ＥＰ０７スタート！！

ＥＰ０７　～ディープ海賊団を倒せ！！ナルガモン、進化！！～

～ウォルス海岸～

？？？「野郎共、ウォルス村の全てを奪い、エクセリオンの奴等を亡き者にするぞ！！！！」

船長はカギづめを掲げると、クルー達は雄叫びを上げる。

クルー達「おぉぉぉぉぉぉぉうッ！！」

それを見ていたバンディッツはニヤリと笑う。

アラン「あんちゃん、いつアレをやるんでさぁ？」
（ヒソヒソ…）

バンディッツ「ジャック・ス○ロウ曰く、『ここぞという瞬間を待て！！』だ。」
（ヒソヒソ…）

アラン「はは～ん、なるほど…♪」
（ヒソヒソ…）

船長に気付かれないようにヒソヒソ話するＢＡＤ特戦隊は不気味に笑うのであった。

～ウォルス村～

ナルガモン「ふぁ～…。よく寝たしよく喰った…♪」

リュウギ「お前、いつ敵が襲ってくるか分からねぇのに、よく寝ていられるなぁ？」

ミソラ「緊張感の欠片もないわね…？」

ナルガモン「でも肝心な奴等が来てねぇからいいじゃねぇかよ♪」

ミソラ「もう、呆れたわ…？」

ミソラは呆れて深くため息をつく。

ナルガモン「ため息ばっかしていると、幸せが逃げていくぞ～！」

ミソラ「アンタのせいでしょうがッ？」

ミソラは怒ってナルガモンの頭にゲンコツをかました。

ナルガモン「いだっ！？」

ゴマモン「よっ、お前ら！よく眠れたか？」

マリンエンジェモン「私はよく眠りましたわ～…。」

そこへ、ゴマモンとマリンエンジェモンが欠伸をしながらやってくる。

リュウギ「って、お前らも寝てたのかよ！？」

ミソラ「ホントにデジタルワールドってマトモな奴がいないわよね

…？」

ミソラはため息をつくと、レナモンは落ち込む。

レナモン「私も、マトモな…。」

（ブツブツ…）

ミソラ「だからそうじゃないってレナモン？」

すると、ウォルス村に一発の銃声が鳴り響く。

ミソラ「銃声！？」

リュウギ「どうやら、来たようだな…。」

すると、大量のクルー達がウォルス村を囲い、完全に逃げ場をなくした。

レナモン「くっ、囲まれた！？」

？？？「お前達か、オレの可愛い部下を可愛がってくれたのは…？」

すると、大量のクルー達が道を開くと、ディープ海賊団の船長が現れる。

ミソラはＤ－アクセルで船長のデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「フックモン、成熟期、ミュータント型、ウィルス種、必殺技はキャプテンキャノン。」

ナルガモン「どうやら、テメェが親玉のようだな？」

フックモン「いかにも…。オレはあらゆる海を渡ってきた海賊の中の海賊…。その名も、ディープ海賊団だ！！」

ナルガモン「野郎…、何だかかなり目立つじゃねぇか…？」

ナルガモンは自分より他人が目立つ事を非常に嫌うため、闘志が燃え上がる。

リュウギ「フックモン、もう村を襲うのはやめるんだ！」

フックモン「オレに命令するとはいい度胸しているな…？貴様こそ、ケガしたくなかったら、ここから立ち去るんだな？」

リュウギ「そいつはできねぇ…。敵に背中を見せるのは俺の流儀に反する！正々堂々、真っ向勝負してやる！！」

フックモン「そうか…。ならば野郎共、コイツらを血祭りに上げろ！！」

クルー達「うおぉぉぉぉぉぉう！！」

クルー達は雄叫びを上げると、一斉にリュウギ達に襲い掛かる。

リュウギ「行くぞ、みんな！！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ナルガモン「言われなくても分かってらぁ！！」

レナモン「ミソラ、下がってて！」

ミソラ「あら、何言ってるの？私も戦うわよ！」

レナモン「え！？」

すると、ミソラの背後からクルーが襲い掛かってくる。

レナモン「危ない！！」

ミソラ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ミソラは背後から襲い掛かってくるクルーを蹴り飛ばした。

レナモン「！？」

ナルガモン「はぁ！？」

リュウギ「あ～あ、とうとう目覚めちまった…？」

ミソラ「私を女だと思って甘く見ないでよね！『自分の身は自分で護る！』お父さんからそう教わったらんだから！！」

レナモン「そ、そうか…？」

リュウギ「ま、いいか…？」

フックモン「怯むな、殺れ！！」

フックモンは叫ぶと、怯むクルー達はリュウギ達に襲い掛かる。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

リュウギはアルカナムでクルー達を薙ぎ倒していく。

フックモン「『リキッドバレット！！』」

すると、背後からフックモンが現れ、右腕と一体化したカギづめでリュウギに襲う。

リュウギ「くっ！？」

リュウギはアルカナムでカギづめを受け止めて鍔競り合う。

フックモン「そんな人数でオレ達ディープ海賊団に勝つつもりか？無謀にも程がある！」

リュウギ「やってみなきゃ分かんねぇだろう…？無理、無茶、無謀。どんな状況に陥っても、俺は背を向けねぇ！！それが俺の流儀だ！！」

フックモン「フッ、笑わせてくれるわ…。そんな流儀、へし折ってやる！！『キャプテンキャノン！！』」

フックモンは左腕と一体化した大砲の砲口をリュウギに向けて放ち、大爆発が起きる。

リュウギ「ぐはっ！？」

ミソラ・ナルガモン「リュウギ!?」

レナモン「あんな近距離でまともに喰らったらマズイ!?」

爆撃で吹っ飛んだリュウギは激しく壁に叩き付かれた。

フックモン「ククク…。口ほどにもないわ…。」

すると、フックモンは大砲の砲口をリュウギに向けてトドメを刺そうとする。

その時だった。

ゴマモン「この野郎!!」

ゴマモンはフックモンに飛び付いて頭をかじる。

フックモン「くっ、邪魔だ!?」

リュウギ「ゴマモン…。」

ナルガモン「喰らいやがれ!!『ヒドゥンブレイド!!』」

ナルガモンは両肘のブレイドでフックモンに大ダメージを与えた。

フックモン「ぐはっ!?」

クルー達「せ、船長!?」

レナモン「今だ!!」

レナモンは壁を足場にして高く飛び上がり、上空から無数の木の葉の手裏剣がクルー達に浴びせる。

レナモン「『狐葉楔!!』」

クルー達「ぐあぁぁぁぁぁぁぁ!?」

ナルガモン達の逆転の反撃により、ディープ海賊団は全滅となった。

リュウギ「や、やった…。」

ナルガモン「ヒャッホウ!!オレこそ最強だぜ!!」

ナルガモンは人差し指を真上に突き立ててフィニッシュを決めた。

フックモン「くっ、油断したか…。」

その時だった。上空からイビルスが現れてクルー達を支配していく。

クルー達「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

フックモン「なに!?」

ミソラ「イビルス!?って事は…!?」

???「だぁーはっはっは!!その通りだ!!」

すると、リュウギ達の前に3つの黒い影か現れる。

？？？「とぅ！！バンディッツ！！」

？？？「アランでさぁ！！」

？？？「そしてドギヌス！！３人揃って…」

ナルガモン「テメェらはＢＡＤトリオ！！」

すると、ＢＡＤトリオはズッコケた。

バンディッツ「おいテメェ！！俺様のカッコいい登場シーンを邪魔すんじゃねぇッ？」

ミソラ「何がカッコいい登場シーンよ…。ウザッ…。」

ミソラは嫌な顔をしてフンと鼻を鳴らす。

フックモン「貴様ら、オレを裏切るつもりか！？」

バンディッツ「裏切る？これも協力の内だ。少し利用させて貰うぜ…。」

（ニヤリ…）

すると、一匹のイビルスがフックモンの体内に入り込んだ。

フックモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

なんとディープ海賊団はイビルスに支配されてしまい、紅い眼光を光らせる。

リュウギ「それがお前らの狙いだったのか？」

アラン「その通りでさぁ！覚悟するんだな！！行け、野郎共！！」

バンディッツ「だ～か～ら～、勝手に仕切ってんじゃねぇッ？」

バンディッツはアランに一発ゲンコツをかました。

アラン「いだっ！？」

リュウギ「そんな事させねぇ！！くっ！？」

リュウギは立ち上がろうとするが、フックモンから受けたダメージにより立ち上がるだけでも精一杯だった。

すると、イビルスに支配されてディープ海賊団はリュウギに襲い掛かる。

ミソラ「リュウギ、危ない！？」

リュウギ（くっ、ここで負ける訳には…）

その時、ナルガモンが身体を張ってリュウギを護る。

リュウギ「ナ、ナルガモン！？」

ナルガモン「テメェら、オレを無視するとはいい度胸してるな…。」

ドギヌス「何をしている！さっさとその人間を始末しろ！！」

ナルガモン「始末だと？やれるもんならやってみやがれ…。だけどオレは絶対にそんな事させねぇ…。リュウギは、オレが選んだ唯一最高のパートナーなんだよッ！！」

その時、ナルガモンの叫びによりリュウギのＤ－アクセルが反応する。

リュウギ「な、なんだ！？」

ナルガモン「力がみなぎってくるぜ！！うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

その時、ナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

ミソラ「どうなってるのよ！？ナルガモンの姿が変わったわ！？」

レナモン「ナルガモンは、成熟期に進化したんだ！」

ミソラ「成熟期に！？」

リュウギはＤ－アクセルでソニックドラモンのデータを読み取る。

＞ｉ２１８２３―１２９８＜

【絵：トリプルミーミング】

Ｄ－アクセル「ソニックドラモン、成熟期、迅竜型、ワクチン種、

必殺技はヒドゥンスラッシュ。」

リュウギ「これが、成熟期…。」

リュウギ達はソニックドラモンの姿を見て驚く。

アラン「ど、どうるんでさぁあんちゃん!?アイツ、成熟期に進化しやしたでぃ!?」

バンディッツ「せ、成熟期に進化しただけだ?全員で掛かれば楽々だっつうの!!殺れ!!」

バンディッツは唇を震わせながら叫ぶと、ディープ海賊団は一斉にソニックドラモンに襲い掛かる。

ソニックドラモン「ＣＯＯＬに反撃だ!!」

ソニックドラモンは両肘の鋭いブレイドを構えると、ブレイドから漆黒の炎に包まれ、ディープ海賊団を次々と薙ぎ倒していく。

ソニックドラモン「『ヒドゥンスラッシュ!!』」

リュウギ「ス、スゴい…!?」

ミソラ「ウソ…、あれがナルガモンなの!?」

ドギヌス「ひ、怯むな!!全員で掛かれ!!」

次々とソニックドラモンに襲い掛かるディープ海賊団。

すると、ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、口から漆黒に包まれた灼熱の炎を吐いた。

ソニックドラモン「『アートルムバースト！！』」

漆黒に包まれた灼熱の炎で焼き払われたディープ海賊団は倒れ、ディープ海賊団達の体内から大量のイビルスが現れる。

ソニックドラモン「レナモン、頼む！！」

レナモン「分かった！！『狐葉楔！！』」

レナモンは高く飛び上がり、木の葉の手裏剣で大量のイビルスを切り刻んだ。

イビルス達「ギィィィィィィィィィィィ！？」

バンディッツ「なにぃ！？」

ソニックドラモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

ソニックドラモンはフィニッシュを決めた。

ミソラ「やったわ！！」

ソニックドラモン「おいテメェら、まだやるつもりか？」

ＢＡＤトリオ「お、覚えてろぉぉぉぉぉぉぉ！！」

ＢＡＤトリオは一目散に逃げていった。

すると、リュウギのD－アクセルから光が生じ、自動的にデジエクスフィールドが発動される。

リュウギ「これで、この村は安全だな！ミソラ、今の内にディープ海賊団をリカバリーするぞ！！」

ミソラ「えぇ！！」

リュウギとミソラは急いで致命傷を負うディープ海賊団をリカバリーした。

そして…。

フックモン「この度は深く反省しております…？」

クルー達「反省しております…？」

ミソラ「海を支配する海賊の中の海賊でも、デジタルワールドはみんなの物！！いいわね？」

ディープ海賊団「はい…？」

ミソラ「今度このような事があったら…」

ミソラは握り拳を作って思いきり壁を殴った。すると、壁は激しくヒビ割れて粉々に砕けた。

ミソラ「理解できた？」

ディープ海賊団「はい、解りましたお嬢様ッ？」

ミソラ「解ればよろしい♪」

ミソラはニッコリと笑う。その光景を目にしたリュウギ達は息をゴクリと呑む。

ナルガモン「お、おっかねぇ～…？」

リュウギ「解ったかナルガモン…？ミソラの前ではバカな事はやめるんだぞ…？」

ナルガモン「あぁ…。充分に理解した…？」

レナモン「これがミソラの本性かぁ…。何とも恐ろしい…？」

ミソラ「アンタ達、何か言った？」

一同「いえ、何も！？」

ミソラ「さぁ、解ればさっさと海に帰りなさい！！」

ディープ海賊団「は、はいぃぃぃぃ！！」

ディープ海賊団は一瞬にして姿を消した。

ナルガモン「早ッ！？」

レナモン「海賊の中の海賊と呼ばれるディープ海賊団を一瞬にして…？」

リュウギ「ミソラなら、ネット海を支配する海賊王になれるかもな…？」

すると、ミソラはいきなりリュウギに殴りに掛かる。

リュウギ「どわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

リュウギは素早く伏せると、ミソラの拳は背後の壁にめり込む。

ミソラ「聞こえてるわよ…？」

リュウギ「は、はい…。すいません…？」

（あ、あっぶねぇ…？）

マリンエンジェモン「みなさ～ん、お待たせしました！」

そこへ、マリンエンジェモンとゴマモンがリュウギ達の元へとやってくる。

ミソラ「あら、マリンエンジェモンにゴマモン？」

マリンエンジェモン「皆さんのお陰で、ウォルス村は救われました♪本当にありがとうございました♪」

ミソラ「いえいえ、困った時は御互い様でしょ♪」

ミソラは先程の不気味な顔からさわやかな顔に変わる。

リュウギ・ナルガモン（き、切り替え早ッ！？）

リュウギ「それより何だよ、その大量の荷物？」

ゴマモン「その事なんだけど、リュウギ達に何かお礼したいとマリンエンジェモンと相談したんだ！」

マリンエンジェモン「相談した結果、私達は皆さんの冒険をサポートしたいと思います♪」

リュウギ「それならコントラクトだな！コントラクトすればお前達はここに居ても大丈夫だ！村を護らなきゃいけないしな…。」

ゴマモン「ホントか！？それなら安心だな♪」

リュウギ「それじゃ…」

ミソラ「行くわよ！」

リュウギとミソラはＤ－アクセルをゴマモンとマリンエンジェモンに翳した。

リュウギ・ミソラ「コントラクト、」

リュウギ「ゴマモン！」

ミソラ「マリンエンジェモン！」

すると、ゴマモンの身体から赤いオーラが纏う。

次に、マリンエンジェモンの身体から緑のオーラが纏う。

リュウギ「コントラクト完了だな！」

ゴマモン「必要になったら、オイラを呼んでくれよな！」

マリンエンジェモン「私は皆さんを治療する役目です！何度も言うようですけど、私は戦うのが嫌いなので？」

リュウギ「じゃあ何で着いて行こうとしたんだよ…？」

マリンエンジェモン「え～と…、何ででしょう…？」

マリンエンジェモンの天然さに、リュウギ達はズッコケる。

ミソラ「やれやれ…？さて、次の目的地は？」

マリンエンジェモン「ここからウォルス海岸に沿って北に歩けば、ソルマシティです！」

ミソラ「ソルマシティね。ありがとう！」

ナルガモン「よっしゃ！！ソルマシティに向かってレッツゴー☆」

ナルガモンはそう言って人差し指を真上に突き立てて先陣をきる。

リュウギ「行くぞ、みんな！！」

こうしてリュウギ達はウォルス村を救い、ウォルス村から北にあるソルマシティに向かうのであった。

ゴマモン「じゃあな～！」

ゴマモンはリュウギ達の姿が見えなくなるまで手を振った。

マリンエンジェモン「う～ん…。」

すると、マリンエンジェモンは腕を組んで何か考え事をしていた。

ゴマモン「どうしたの？」

マリンエンジェモン「リュウギさん達に何か言い忘れていたような…？」

ゴマモン「気のせいなんじゃないの？」

マリンエンジェモン「そうですね♪ではゴマモン、村の復興作業しましょ♪」

ゴマモン「りょうか～い♪」

マリンエンジェモンは気のせいだと思い、ゴマモンと共にウォルス村の復興作業へと取り掛かるのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ０７　～ディープ海賊団を倒せ！！ナルガモン、進化！！～（後書き）

次回はソルマシティに向かうリュウギ達。しかし、向かう最中にとんでもない事件が巻き込まれてしまう！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ０８　～リュウギの謎？迷いの森　ミストフォレス～（前書き）

ソルマシティに向かうリュウギ達。しかし、、思わぬトラブルが発生する！？

Ｅｐ０８スタート！！

ＥＰ０８　～リュウギの謎？迷いの森　ミストフォレス～

リュウギ達の活躍により、ウォルス村を救う事ができた。次は、北の方角にあるソルマシティを目指す。

しかし…。

ナルガモン「着いたぜソルマシティ！！」

リュウギ達は思わず立ち止まる。そこは街ではなく、ごく普通の森だった。

リュウギ「いや、１００％違うだろ！？」

ミソラ「おかしいわね…。マリンエンジェモンの言われた通り北に進んだんだけど…？」

リュウギ「もしかしたら、この森を抜けたらソルマシティかもしれねぇぞ？」

レナモン「……。」

レナモンは森をジッと見つめながら考え事をする。

ミソラ「どうしたのレナモン？」

レナモン「いや、何でもない…。」

ナルガモン「こんな所で立ち止まってねぇで早く入ろうぜ！！」

ナルガモンは待ちきれず、先に森の中へと入っていく。

リュウギ「そうだな…。行こう。」

リュウギ達はナルガモンに続いて森の中へと入って行った。

森に入って１０分が経った…　。

ナルガモン「いつになったらソルマシティに着くんだぁ？」

ミソラ「何だか薄気味悪くなってきたわ…？」

ミソラは密かにレナモンの後ろに隠れる。

すると、辺りは紫色の霧に包まれていく。

レナモンはピタリと足を止めた。

ミソラ「ど、どうしたの！？」

ミソラはただ止まっただけなのにパニック状態になる。

レナモン「マズイ…。この霧は…。」

ナルガモン「おい、この霧がどうかしたのかよ？」

レナモン「間違いない。ここはミストフォレスだ…。私から離れるな…。」

ミソラ「な、何かマズイ事でも起きたの!?」

レナモン「噂で耳をしたが、この霧に入るとこの森から抜け出す事は困難だと言われている。」

ミソラ「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?」

その時、ミソラはありったけの声で叫んだ。

レナモン「まさか、この森がそうだったなんて…。」

ナルガモン「そう慌てんなよ…。」

ミソラ「な、なんでアンタはそんなに余裕なのよ!?抜け出す事が困難なのよ!?」

ナルガモン「ここはリーダーの出番だ!な、リュウギ?」

(シ〜〜〜〜〜〜〜ン)

ナルガモン「あれ?リュウギ?」

ナルガモンは回りを見渡すと、リュウギの姿はなかった。

ミソラ「リュウギがいなくなったわぁぁぁぁぁ!?」

ミソラは更にパニックに陥る。

ナルガモン「お、お、落ち、落ち、落ち着けって!?」

ミソラ「アンタが一番落ち着きなさいよ！？」

レナモン「リュウギは何処に…？」

一方、リュウギは…。

リュウギ「アレがソルマシティかぁ…。意外と早く着いたなミソラ？」

リュウギは振り向くと、ミソラの姿はなかった。

リュウギ「あれ？ミソラ、ナルガモン、レナモン？」

すると、リュウギの額から大量の冷や汗が流れてくる。

リュウギ「マジかよ…？」

―――――――――――――

ミソラ達はこの霧から抜け出すまでさ迷い続ける。

ミソラ「どうしよう～？肝心なリュウギが居ないし、このまま私達、一生この森でさ迷い続けるの～？」

レナモン「ミソラ、気持ちは解るが、とにかくこのミストフォレスから抜け出す事だけに専念しよう…。」

ナルガモン「リュウギはどうするんだよ？」

レナモン「それは…。」

すると突然、ミソラのＤ－アクセルが鳴る

ミソラ「Ｄ－アクセルが！？」

すると、Ｄ－アクセルからリュウギの声が聞こえてくる。

リュウギ『ミソラ、聞こえるか？』

ミソラ「リュウギ！？」

ナルガモン「おいリュウギ、今何処にいるんだ！？」

リュウギ『それはこっちの台詞だ！！』

レナモン「私達は森にいる…。」

リュウギ『森？こんな短い距離なのにもう道に迷ったのか？』

レナモン「短い距離？まさか、森の外にいるのか？」

リュウギ『あぁ。だったらそっちに行こうか？』

ミソラ「ダメよ！この森は霧に包まれたら、抜け出す事が困難なのよ！」

リュウギ『本当か！？』

レナモン「とにかく、私達は一刻も早く森から抜け出す道を探す。その間にリュウギはそこで待っていてくれ。」

リュウギ『分かった。気を付けろよ！』

ミソラ「うん！」

ミソラはそう言ってＤ－アクセルの通信を切る。

ミソラ「無事で良かったわ～…。」

ミソラは安心してホッとする。

レナモン「さぁ、私達も早くこの森を抜け出そう。」

更に１０分後…。

ミソラ「出口何処なの～？」

レナモン「落ち着くんだミソラ。」

ナルガモン「そうだぜ。急げば転ぶってよく言うだろ？」

ミソラ「急がば回れでしょ…。それにアンタに言われると、ものスッゴい腹立つわ…？」

レナモン「さぁ、急ごう。」

ミソラ達は歩き出すと、ナルガモンはミソラにある事について問う。

ナルガモン「なぁミソラ？」

ミソラ「何よ？」

ナルガモン「リュウギってさぁ、何であーいう性格なんだ？」

ミソラ「あーいう性格って？」

ナルガモン「『それが俺の流儀だ！！』とか、『約束は死んでも必ず守る！！』って。」

ミソラ「アンタ、この状況でよく聞けるわね…？」

ナルガモン「だって気になるんだからしょうがねぇだろ？」

レナモン「私も聞きたい…。どうしてリュウギはいつも流儀に拘るのかを…。」

ミソラ「レナモンまで！？」

すると、ミソラは小さくため息をする。

ミソラ「まぁいいわ…。まず始めに、リュウギの名付け親は父親なのよ。」

ナルガモン「ふ～ん…。」

ミソラ「『どんな事があっても自分の流儀で貫き通せ。』リュウギにそう口酸っぱく言って教育していたらしいわ…。時にはすごく厳しいけど、時にはすごく優しい父親だったってリュウギが言ってたわ…。」

ナルガモン「でも、拘り過ぎなんじゃねぇの？」

ミソラ「私も当時のリュウギもそう思ったわ…。あの事件が起きるまで…。」

レナモン「あの事件？」

ミソラ「ある日、リュウギがまだ幼い頃、父親は交通事故で亡くなったの…。」

ナルガモン・レナモン「！？」

ミソラ「と言うより、誰かに殺されたの…。」

レナモン「誰かに殺された？」

ミソラ「その時リュウギはまだ意識があったの。すると、倒れていた父親の隣で謎の男が高らかに笑っていたわ…。」

ナルガモン「それからどうなったんだよ？」

ミソラ「リュウギはそのまま意識を失い、最終的にリュウギだけ命は助かったの。それからリュウギは、現場を目撃した事を色々な人達に話したんだけど、『あれはよくある事故だ』って結局誰も信じてくれなかったの…。」

ナルガモン・レナモン「……。」

ミソラ「リュウギにとって、父親はかけがえのない存在だって言っていたわ…。だからリュウギは、あーいう性格になったのかな…。

前の性格はどうなのか知らないけど…。」

ナルガモン「え？お前ら幼馴染みじゃなかったのかよ？」

ミソラ「私は神戸で生まれだけど、リュウギは東京で生まれたのよ。その事件が起きた後、リュウギは両親の親友に預けられて神戸に来たのよ。」

レナモン「母親はどうしたのだ？」

ミソラ「母親はあの事件の切っ掛けで行方不明になったわ…。置き手紙にこう書いてあったわ。」

『私は大切な物を取り戻しに行きます…。心配なさらずにいつか必ず戻ります…。勝手な私を、どうか許してください…。』

ミソラ「結局母親は帰ってこれず、リュウギはそのまま成長して高校生になったわ…。『母親はとんでもない嘘つきだ…。』だからリュウギは嘘を嫌い、そして約束は死んでも必ず守る性格になったのよ…。」

レナモン「まさか、リュウギにこんな隠された秘密があったなんて…。」

ナルガモン「リュウギ…。」

すると、霧の奥から呻き声が聞こえてくる。

？？？「う～～～～～…。」

ミソラ「え、なに!?何なの!?」

レナモン「誰かいる…。」

ナルガモン「誰だ!?」

すると、霧の奥から謎の巨木が現れる。

ミソラ「デ、デジモン?」

ミソラのD－アクセルで謎の巨木のデータを読み取る。

D－アクセル「ジュレイモン、完全体、植物型、ウィルス種、必殺技はチェリーボム。」

ミソラ「ねぇレナモン。だ、大丈夫なの…?」

ナルガモン「イビルスいるかどうか見てみたらいいんじゃねぇの?」

ミソラ「そ、そうね…。ディスティングハーツ!」

ミソラは目を閉じてジュレイモンの体内を調べると、イビルスが居たのだ。

ミソラ「みんな、気を付けて!イビルスが居るわ!!」

ナルガモン「何だと!?」

ジュレイモン「う～～～～～…。」

すると、ジュレイモンは紅い眼光を光らせてミソラ達に襲い掛かる。

ジュレイモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

レナモン「くっ！！」

レナモンは素早くミソラを抱き抱え、ナルガモンと共に素早く交わした。

ナルガモン「この野郎！『アートルムフレイム！！』」

レナモン「『狐葉楔！！』」

ナルガモンとレナモンはそれぞれの必殺技でジュレイモンに反撃した。

ジュレイモン「『チェリーボム！！』」

ジュレイモンはチェリー型の爆弾を投げ付けると、ナルガモン達の技をかき消した。

ナルガモン「クソッ！」

レナモン「ダメだ。完全体であるジュレイモンには全く通用しない…。」

ナルガモン「リュウギさえ居れば進化できるのに…。」

レナモン「くっ…。」

（私じゃどうする事もできないのか…。）

ミソラ「きゃやややややややややややや！？」

その時、ミソラはジュレイモンのツタに捕われてしまった。

レナモン「ミソラ！？」

ナルガモン「ミソラを放しやがれ！！『ヒドゥンブレイド！！』」

ナルガモンは両肘のブレイドでツタを切ろうとする。

ジュレイモン「『チェリーボム！！』」

しかし、ジュレイモンはチェリー型の爆弾をナルガモンにぶつけて攻撃を阻止した。次に、ツタでナルガモンを捕えて思いきり地面に叩き付けた。

ナルガモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

レナモン「ナルガモン！？」

レナモンは目にも止まらない早さでナルガモンとミソラを助けようとする。

ジュレイモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ジュレイモンはツタでレナモンを叩き落とした。

レナモン「うわっ！？」

ミソラ「レナモン！？」

すると、ジュレイモンはツタを鞭のようにしてひたすらレナモンを叩く。

ミソラ「レナモン、逃げて！」

レナモン「私はあの時に誓った…。これ以上みんなの足手まといになりたくないと…。私の力で、みんなを守りたい！！」

すると、ミソラのＤ－アクセルから聖なる光が生じる。

ミソラ「こ、これは！？」

ナルガモン「レナモンの心がミソラに届いたんだ！ミソラ、ＥＸモードだ！！」

すると、ミソラの目付きがキリッと変わる。

ミソラ「レナモン、私はあなたを信じるわ！！」

ミソラは左拳をレナモンに差し出して叫んだ。

ミソラ「ＥＸモード、発動！！」

その時、レナモンの回りに激しい突風が舞う。

ジュレイモン「！？」

突風が去ると、レナモンの身体から光のオーラが纏う。

レナモン「ミソラとナルガモンを放すんだ…。」

すると、ジュレイモンはツタでレナモンに襲い掛かる。

レナモンは片手でジュレイモンのツタを受け止めた。

レナモン「遅い…。」

レナモンは通常より１０倍のスピードでジュレイモンのツタを切り刻んだ。

ジュレイモン「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

すると、捕らわれたミソラとナルガモンは解放された。

レナモン「終わりだ！！『狐葉楔！！』」

レナモンは木を足場にして高く飛び上がり、無数の木の葉の手裏剣でジュレイモンに浴びせた。

ジュレイモン「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ジュレイモンは力尽きて倒れると、ジュレイモンの体内からイビルスが現れる。

ミソラ「レナモン、イビルスよ！！」

その瞬間、レナモンは鋭い爪で疾風のごとく、イビルスを切り裂いた。

イビルス「ギィィィィィィィィ！？」

イビルスは跡形もなく消え去った。

ミソラ「やったわ！」

戦闘を終えると、レナモンはＥＸモードが解ける。

レナモン「くっ、これがＥＸモードの力か…。」

ミソラ「ご苦労様、レナモン。」

すると、ミソラのＤ－アクセルからデジエクスフィールドを展開し、ミストフォレスを囲った。

ミソラ「これでこの森はもう安心ね！早くジュレイモンをリカバリーしなきゃ！」

ミソラは急いでジュレイモンにリカバリー機能を使った。

そして…。

ジュレイモン「助けてくれて大変感謝する…。」

ミソラ「気にしないで！困った時は御互い様だから！」

ナルガモン「この霧はお前の仕業だったのか？」

ジュレイモン「そうだ…。自分の身を守るために霧を出していたん

だが、ワシが休んでいる間に、イビルスに襲われたんだ…。」

ミソラ「でも、これからはもうイビルスに襲われないから安心してね！」

ジュレイモン「忝ない…。では、霧を消すとしようか…。」

ジュレイモンは両手を広げると、紫の霧が去っていった。

ナルガモン「おっ！？霧が消えた！」

レナモン「ソルマシティに行きたいのだが、知らないか？」

ジュレイモン「ここから真っ直ぐに行けば、ソルマシティに着くハズだ…。」

ミソラ「ありがとう！さ、行きましょ！」

レナモンのＥＸモードによりミストフォレスは救われた。リュウギと合流するため、ミソラ達はミストフォレスを抜け出すのであった。

歩いて５分後…。

ナルガモン「ヒャッホウ！ついに抜け出せたぜぃ！！」

ナルガモンは嬉しさの余りに高く飛び上がる。

レナモン「リュウギの姿がない…。」

ミソラ「もう、待っててって言ったのに…。」

その時、ミソラは道端にリュウギが倒れている事に気付く。

一同「リュウギ！？」

ミソラ達は慌ててリュウギの元へ走る。

ナルガモン「リュウギ、しっかりしろ！！おいリュウギ！！」

リュウギの身体には誰かにやられた形跡が残されていた。

ミソラ「きっと誰かにやられたんだわ…。」

レナモン「しかし、一体誰に…？」

ミソラ「そうだわ！」

すると、ミソラは手を組む。

ミソラ「デジサモン、発動！」

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、ミソラは地面に手を当てると、地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

ミソラ「出てきて、マリンエンジェモン！！」

すると、魔法陣からマリンエンジェモンが実体化され、癒しの光でリュウギの体を治療した。

マリンエンジェモン「はい、これでもう大丈夫ですよ！」

ミソラ「ありがとう、マリンエンジェモン！」

デジサモンの効果が切れてしまい、マリンエンジェモンは静かに消えていった。

リュウギ「う、う～ん…。」

レナモン「気が付いたぞ。」

ナルガモン「リュウギ、大丈夫か？」

すると、リュウギは自らの拳で思いきり地面を殴る。

一同「！？」

ミソラ「リ、リュウギ…？」

リュウギ「クソッ…。あんな奴に手も足も出せなかった…。結局口先だけじゃねぇかよ…。」

ナルガモン「リュウギ、一体誰にやられたんだよ？」

リュウギ「名前は渡里（わたり）　甲斐（かい）。アイツは俺達と同様、エクセリオンだ…。」

一同「！？」

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ０８　～リュウギの謎？迷いの森　ミストフォレス～（後書き）

リュウギを襲ったエクセリオンの１人、渡里　カイとは一体！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ０９　～最強を目指す男！！渡里　カイ～（前書き）

リュウギが敗れた渡里　カイとは一体！？

その強さがついに明かされる！！

Ｅｐ０９スタート！！

ＥＰ０９　～最強を目指す男！！渡里　カイ～

～ソルマシティ～

ナルガモン「ヒャッホウ！今度こそ着いたぜソルマシティ！」

ナルガモンは嬉しさの余りに高く飛び上がる。

ミソラ「ホント元気ね…？」

レナモン「まぁ、それがナルガモンの良い所だ…。」

レナモンは腕を組んで頷く。

ミソラ「ここ、納得する所なの…？全く、先が思いやられるわよねリュウギ？」

リュウギ「……。」

ミソラはリュウギに聞くと、リュウギは深刻な顔をしていた。

ミソラ「リュウギ…。」

（一体誰なんだろう…、渡里　カイって…。）

レナモン「みんな疲れているだろう…。何処か宿があればいいのだが…。」

ナルガモン「けどその前に腹減ったぜ！」

ミソラ「そ、そうね…。見たところ、色々ありそうだから探してみようよ。」

ナルガモン「決まりだな！だったら早く行こうぜ♪」

ナルガモンはそう言って先頭に立った。

リュウギ「……。」

ミソラ「リュウギ、まだ痛むの…。」

リュウギ「いや、俺は大丈夫だ…。」

ミソラ「その割りには顔色が悪いわよ…？リュウギ、一体何が合ったのか私達に話してよ…。」

リュウギ「……。」

すると、リュウギは黙りになる。

ミソラ「リュウギ、悩み事があれば私達に相談…。ずっと前からの約束でしょ…？」

リュウギ「そうだったな…。約束を破るのは俺の流儀に反するからな…。」

すると、レナモンとナルガモンはピタリと足を止めて、リュウギの話を聞く。

リュウギ「それは、Ｄ－アクセルでミソラと連絡した後だ…。」

～ミストフォレス　出口付近～

リュウギ「分かった。気を付けろよ！」

ミソラ『うん！』

リュウギはそう言ってＤ－アクセルの通信を切る。

リュウギ「さて、どうしようか…？」

すると、遠くから手裏剣のような物がリュウギに向かって飛んできた。

リュウギ「！？」

リュウギは素早く交わすと、手裏剣は地面に突き刺さった。

リュウギ「だ、誰だ！？」

すると、リュウギの前にヘアバンドをした青髪の青年が現れた。

リュウギ「？」

（アイツ、何処かで…？）

？？？「お前が御縞　リュウギか…？」

リュウギ「人の名前を聞く前に、まず自分から名乗るんだな…。」

すると、ヘアバンドをした青髪の青年はフンと鼻を鳴らす。

??「いいだろう…。俺の名は渡里　カイ…。御縞　リュウギ、俺と勝負しろ！」

カイは地面に突き刺さる手裏剣を抜き取って、刃先をリュウギに向けた。

リュウギ「ちょっと待てよ！？何で俺と戦う必要があるんだよ！？」

カイ「理由は簡単だ…。俺は最強のテイマーを目指している…。近頃、このスレッド大陸でお前の噂を耳にしてな…。つまり、デジタルワールドに最強のテイマーは俺1人で十分だ！！」

リュウギ「だから俺と勝負するのか…。悪いが、今はお前と相手してるヒマがないんだ…。」

カイ「なに？」

リュウギ「俺は今、仲間を待っている。勝負はそれからにしてくれないか…？」

すると、カイは静かに笑う。

カイ「フン、お前はそうやって尻尾巻いて逃げるつもりか…？」

すると、リュウギはカイの言葉にムッとなる。

カイ「これはとんだ期待外れだ…。噂を聞いてどんな奴かと思えば、

敵に背を向けるただの負け犬か…。」

すると、リュウギは鋭い目でカイを睨み付ける。

リュウギ「おもしれぇ…。敵に背中を見せるのは俺の流儀に反する！正々堂々、真っ向勝負だ！！」

リュウギはやる気になり、右手を広げるとガンブレード、アルカナムが現れる。

カイは左拳を前に突き出すと、カイの左手首には青いＤ－アクセルがはめていた事に気付くリュウギ。

リュウギ「Ｄ－アクセル！？それじゃ、お前もエクセリオンなのか！？」

カイ「リロード！！」

すると、カイのＤ－アクセルから光が生じ、青い毛皮をした獣型デジモンが姿を現す。

？？？「御呼びでしょうか、カイ？」

カイ「あぁ…。」

リュウギはＤ－アクセルで獣型デジモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ガオモン、成長期、獣型、データ種、必殺技はローリングアッパー。」

リュウギ「そいつが、お前のパートナーデジモンなのか？」

すると、ガオモンはリュウギに威嚇をする。

ガオモン「おいお前、我が主に向かってお前とは馴れ馴れしいぞ…。」

カイ「仕方ないさガオモン…。俺達の強さを奴に思い知らせてやる…。」

カイは巨大な手裏剣、ギルガメッシュを構える。

カイ「来い、御縞　リュウギ！！」

リュウギはアルカナムを構えてカイに向かって突っ込む。

カイはギルガメッシュでアルカナムを受け止めた。

リュウギ（今だ！！）

リュウギはトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発する。

カイ「！？」

カイは爆発に巻き込まれる。

ガオモン「……。」

リュウギ（やったか！？）

爆煙が去ると、リュウギはとんでもないものを目にする。
それは、カイはあの大爆発をもろに受け止めていた。
リュウギ「なに!?」
カイ「所詮、その程度か…?α（アルファ）!!」
カイは叫ぶと、ギルガメッシュは、刃が四重に重なり、手裏剣から鎌へと変形する。
リュウギ「変形した!?」
カイ「驚いてる場合か?」
カイは力でアルカナムを押し返した後、勢いつけてリュウギに切りに掛かる。
リュウギ「!?」
リュウギはとっさの判断で交わすと、腹に掠り傷を負ってしまう。
カイ（思ったより反応がいいな…。）
リュウギ「くっ!!」
（こうなったら…。）
リュウギはリュウギはアルカナムを地面に突き刺して叫んだ。

リュウギ「デジサモン、発動！！」

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、アルカナムを突き刺した地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

リュウギ「頼む、モノクロモン！！」

すると、魔法陣からモノクロモンが実体化される。

モノクロモン「任せて！！」

カイ「デジサモンか…。」

ガオモン「カイ、ここは私が…。」

カイ「その必要はない。奴に本当のデジサモンの使い方を教えてやる…。」

ガオモン「分かりました。全ては我が主のために…。」

すると、カイはギルガメッシュを地面に突き刺して叫んだ。

カイ「デジサモン、発動！！」

すると、カイのＤ－アクセルの画面から光が生じ、ギルガメッシュを突き刺した地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

カイ「来い、サンダーバーモン！！」

すると、魔法陣からサンダーバーモンが実体化される。

サンダーバーモン「呼んだか、カイ？」

リュウギはＤ－アクセルでサンダーバーモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「サンダーバーモン、アーマー体、巨鳥型、データ種、必殺技はサンダーストーム。」

カイ「協力して貰うぞ、サンダーバーモン。」

カイはギルガメッシュを抜き取り、サンダーバーモンの背中に飛び乗る。

モノクロモン「負けるもんか！！『ヴォルケーノストライク！！』」

モノクロモンは口から強力な火炎弾を放った。

しかし、サンダーバーモンは素早く交わした。

リュウギ「！？」

カイ「くだらん…。サンダーバーモン！！」

サンダーバーモン「『スパークウィング！！』」

サンダーバーモンは電撃を帯びた無数の羽を雨のように撃ち出した。

モノクロモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

カイ「トドメだ、サンダーバーモン…。」

サンダーバーモン「終わりだ。『サンダーストーム！！』」

サンダーバーモンは電撃をまとった翼を羽ばたかせ、稲妻の嵐を巻き起こした。

リュウギ「！？」

モノクロモン「リュウギ！！」

モノクロモンは体を張ってリュウギを守った。

リュウギ「モノクロモン！？」

稲妻の嵐が去ると、モノクロモンは力尽きて倒れる。

リュウギ「モノクロモン、大丈夫か！？」

モノクロモン「無事で良かった…。ごめん、力になれなくて…。」

すると、デジサモンの効果が切れてしまい、モノクロモンは静かに消え去った。

カイ「ご苦労だったな、サンダーバーモン。」

サンダーバーモン「容易い事だ…。」

サンダーバーモンはデジサモンの効果が切れてしまったため、静かに消え去った。

カイ「フン、結局足手まといに過ぎなかったな…。」

すると、リュウギは鋭い目でカイを睨み付ける。

リュウギ「足手まといだと…？モノクロモンは体を張って俺を守ってくれた仲間だ！」

カイ「仲間とは笑わせてくれるな…。それはただの友情ごっこに過ぎん…。」

リュウギ「ふざけるな！！」

怒り爆発したリュウギはアルカナムを抜き取ってカイに切りに掛かる。

カイ「β（ベータ）。」

次に、ギルガメッシュは小型鎌から2つに分裂し、分裂した2つの刃を両手に持つ。

カイ「遅い…。」

カイは目にも止まらない早さでリュウギを切り刻んだ。

リュウギ「ぐはっ！？」

リュウギは地面に向かって倒れた。

カイ「口ほどにもない…。行くぞ、ガオモン…。」

ガオモン「はい。全ては我が主のために…。」

その時だった。

リュウギ「待てよ…。」

すると、カイはピタリと足を止めた。

リュウギ「まだ終わっちゃいねぇ…。勝負はまだまだこれからだ…。」

カイ「まだまだこれからだと？勝負はもう終わっている…。何度やっても同じだ…。」

リュウギ「勝負は最後までやってみなきゃ分からねぇだろ…？それに、途中で諦めるなんて俺の流儀に反する…。」

カイ「根性の良さだけは認めてやる…。」

リュウギ「俺はただ、自分の流儀を貫き通すだけだ！！」

リュウギは力を振り絞って立ち上がり、アルカナムでカイに切りに掛かる。

カイ「γ（ガンマ）…。」

カイは2つの刃を1つにし、やがて巨大な手裏剣へと変形して、アルカナムを受け止めた。

リュウギ「！？」

カイ「口先だけで俺に勝てると思うなよ…。」

カイは力でアルカナムを押し返した後、リュウギの腹に思いきり腹を殴った。

リュウギ「かはっ！？」

リュウギの意識が朦朧となり、やがて気を失って地面に倒れた。

――――――――――――

リュウギ「――と言うわけだ…。」

ミソラ「そうだったんだ…。」

リュウギ「あんな奴に負けた上に、俺の流儀は口先だって言われた…。俺は悔しい…。」

ミソラ「リュウギ…。」

ナルガモン「だったら負けねぇように強くなりゃいいんだよ…。オレも協力してやるからよ！！」

リュウギ「ナルガモン、お前…。」

ナルガモン「ま、方舟に乗ったつもりで任せとけって♪ナッハハハハ♪」

リュウギ「ナルガモン、大船の間違いだぞ…？」

ミソラ「レナモン、このバカに任せても大丈夫かしら…？」

レナモン「たぶん、大丈夫だろう…？」

ナルガモン「ま、取り合えずメシでも食おうぜ♪」

ナルガモンはそう言ってレストランへと向かった。

ミソラ「本当に大丈夫かしら…？行こうよリュウギ！」

リュウギ「あ、あぁ…。」

すると、リュウギはふとカイの事が気にかかる。

リュウギ（アイツ、なんで俺と戦いたかったんだ…？まぁ理由はともあれ、次は絶対に負けねぇ…。）

リュウギは心の中でそう誓ったのであった。

～スレッド大陸　東側～

カイ「あんな奴がエクセリオンとは笑わせる…。とんだ期待外れだ…。」

ガオモン「カイ、あの男の言っていた事は本当なのでしょうか…？」

カイ「左目に傷を持った男の事か…。アイツの言っていた意味が今でも理解不能だ…。」

それは、数日前まで遡る…。

～アイナ山～

※Ｅｐ０４（後書き）の続きです。

ゴーレモン「ぐぉぉぉぉぉぉぉ！？」

ゴーレモンは力尽きて倒れると、体内からイビルスが現れる。

カイ「消え失せろ…。」

カイは巨大手裏剣、ギルガメッシュを投げてイビルスを真っ二つに切った。

イビルス「ギィィィィィィィィィ！？」

イビルスは跡形もなく消滅した。すると、カイはギルガメッシュを掴み取ってＤ－アクセルに納める。

カイ「リカバリー、ゴーレモン。」

カイはリカバリー機能を使ってゴーレモンを治療した。

ゴーレモン「う…。」

すると、カイはフンと鼻を鳴らして背中を向けて歩き出す。

すると、カイのＤ－アクセルの中にいるガオモンがカイに問う。

ガオモン「カイ、ゴーレモンとコントラクトしなくて宜しいのですか？」

カイ「あんな素質のない奴は足手まといになるだけだ…。俺には必要ない…。」

すると、カイは何か気配を感じたのかピタリと足を止める。

ガオモン「どうしましたか！？」

カイは振り向くと、岩山の上に黒い影がいた。

カイ「誰だ？」

すると、黒い影は岩山から飛び降りて地面に着地する。その正体は、左目に傷を持ち、金髪をした男だった。

？？？「……。」

すると、カイはフンと鼻を鳴らす。

カイ「無口は嫌いなんだよ…。」

カイは右手を広げると、巨大な手裏剣、ギルガメッシュが現れる。

すると、金髪の男はニヤリと笑うと、背中に背負ってある大剣を取り出して構える。

カイは金髪の男の左手首に黒色のＤ－アクセルがはめてある事に気付く。

カイ（Ｄ－アクセル…。コイツもエクセリオンか…。）
「リロード！！」

カイは叫ぶと、Ｄ－アクセルからガオモンが現れる。

カイ「気を付けろガオモン…。」

ガオモン「承知しております。立っているだけなのになんて威圧なんだ…。」

すると、金髪の男は目にも止まらない早さで大剣を振り下ろした。

カイ・ガオモン（来た！！）

カイとガオモンはふたてに分かれて斬撃を交わした。

カイは体勢を立て直し、ギルガメッシュを金髪の男に投げ付けた。

すると、金髪の男はすぐに交わした。

ガオモン「こっちだ！！『ローリングアッパー！！』」

反対側から攻めるガオモンは強靭な脚力を生かし、金髪の男の懐に転がり込んでアッパーを放った。

？？？「……。」

しかし、金髪の男はガオモンのパンチを受け止めた。

ガオモン「！？」

ガオモンは危険を察知したのか、素早く金髪の男から離れて体勢を立て直す。

カイ「少しはやるようだな…。だったらこれでどうだ！！」

すると、カイはギルガメッシュを地面に突き刺して叫んだ。

カイ「デジサモン、発動！！」

すると、カイのＤ－アクセルの画面から光が生じ、ギルガメッシュを突き刺した地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

カイ「来い、サジタリモン！！」

すると、魔法陣からサジタリモンが実体化される。

カイ「手を貸せ、サジタリモン。」

サジタリモン「承知した！」

すると、金髪の男は大剣を地面に突き刺すと、大剣は分裂して二刀流になる。

カイ「二刀流か…。一気に畳み込むぞ！！」

ガオモン・サジタリモン「おう！！」

カイは手裏剣、ギルガメッシュを金髪の男に投げ付けた。

金髪の男は1本の剣を抜き取ってギルガメッシュを弾き返した。

サジタリモン「『ジャッジメントアロー!!』」

隙を見たサジタリモンは超金属クロンデジゾイド製の矢を放った。

???「……。」

金髪の男はもう1本の剣を抜き取り、二刀流でジャッジメントアローを切り刻んで無力化にする。

ガオモン「ここだ!!『ガオラッシュ!!』」

ガオモンは素早く動いて高速連打パンチを放った。

???「……。」

しかし、金髪の男は全てのパンチを交わしていく。

すると、ガオモンは金髪の男の持つ剣を叩き落とした。

???「!?」

ガオモン「カイ!!」

カイ「α!!」

その時、上空へと弾き返したギルガメッシュの刃が四重に重なり、手裏剣から小型鎌へと変形した。

カイ「終わりだ！！」

カイは空中に舞う小型鎌、ギルガメッシュを掴み取って、勢いよく金髪の男に切りに掛かった。

金髪の男「くっ！！」

その時、丸腰になった金髪の男は腰にかけてある拳銃を取り出してカイの斬撃を受け止めた。

カイ「なに！？」

すると、金髪の男は口を開く。

？？？「いい戦法だ…。だが、俺には効かん！！」

金髪の男は力で押し返した後、更にもう一挺の拳銃を取り出してカイを狙い撃つ。

カイ「くっ！？」

ガオモン「カイ！？」

すると、金髪の男はポケットからマガジンを二挺拳銃に装着し、ガオモンとサジタリモンを狙い撃つ。

ガオモン・サジタリモン「ぐはっ！？」

カイ「ガオモン、サジタリモン！？」

その時、金髪の男は銃口をカイの頭に突き付けた。

???「この期に及んで仲間の心配とは、随分と余裕たっぷりだな…？」

カイ「くっ…。」

すると、ガオモンとサジタリモンは地面に膝が着く。

ガオモン「か、体が…。」

サジタリモン「む、無念だ…。」

すると、デジサモンの効果が切れてしまい、サジタリモンは静かに消え去った。

カイ「アイツらに何をした…？」

???「そう焦んなよ…。余りにもすばしっこいから奴等の体に麻痺弾を撃ち込んだんだよ…。」

すると、金髪の男は拳銃を回転させながらしまう。

カイ「どういうつもりだ…？」

???「そう睨むなよ…。何処までやれるかちょいとした腕試ししたかっただけだ…。」

すると、金髪の男は2本の剣を拾って合体させると大剣となり、そ

の大剣を背中に背負う。

カイ「腕試しだと…？」

？？？「ほらよ…。」

すると、金髪の男は懐から小瓶を取り出してカイに投げ渡すと、カイは小型を受け取る。

カイ「何だこれは…？」

？？？「麻痺を消す薬だ…。そいつに呑ませてやりな…。」

カイ「目的は何だ…？」

？？？「そいつは言えねぇなぁ…。」

すると、金髪の男は背中を向けて歩き出す。

カイ「待てよ！！」

カイは呼び止めると、金髪の男は足を止めた。

？？？「御縞　リュウギに会え…。そいつに会えば、お前の求めている物がすぐに見つかるハズだ…。」

カイ「御縞　リュウギだと…？」

すると、金髪の男は何処かへと去っていった。

カイ「……。」

――――――――――

カイ「俺は、アイツを倒せば最強のテイマーになるのかと思って奴に挑んだ…。だが、あんな様だったとはな…。」

ガオモン「もしかしたら、あの男の言うカイの求めている物は他の意味なのでは…？」

カイ「最強のテイマーになる以外何があるんだ！」

カイは怒鳴ると、ガオモンは詫びを入れる。

ガオモン「そうでしたね…。どうか御許しを…。」

すると、カイはフンと鼻を鳴らす。

カイ「行くぞガオモン。このスレッド大陸にいるゴミ共（イビルス）を片付けに行くぞ…。」

ガオモン「はい。全ては我が主のために…。」

カイはそう言ってガオモンと共に何処かへと去って行った。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ０９　～最強を目指す男！！渡里　カイ～（後書き）

～キャラクター紹介　その３～

名前：渡里（わたり）　甲斐（かい）

性別：男

年齢：１６歳（高校１年生）

パートナーデジモン：ガオモン

一人称：俺

趣味：強者を探すこと、散歩

説明：突如、リュウギに勝負を仕掛けた謎のクラスメイト。常に最強を求め、弱者には全く興味がない。最近、彼の前に突如現れた金髪した謎の男に気に掛けている。冷静で判断力に優れており、プライドが人一倍高い。パートナーに優しさな一面も持つ。冷徹な性格を持つ。自分の考えを他人に否定されると怒る。甘いものが嫌い。リュウギと同様、辛い過去を背負っているが不明。

＞ｉ２１９７５―１２９８＜

【絵：トリプルミーミング】

～ギルガメッシュ～

＞ｉ２１９７７―１２９８＜

【絵：トリプルミーミング】

カイの前に現れた金髪の男とは一体？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ１０　～暴走を止めろ?二重人格の悪魔　キャンドモン～（前書き）

今回はソルマシティにてちょっとした笑いありのトラブルが?

Ｅｐ１０スタート！！

ＥＰ１０　～暴走を止めろ？二重人格の悪魔　キャンドモン～

～ソルマシティ～

ご飯を食べて一旦休息し、リュウギ達はソルマシティの中を歩き回る。

リュウギ「それにしても、広い街だなぁ…。」

ミソラ「本当だね…。」

レナモン「ここは私の故郷だ…。」

ミソラ「え、レナモンの故郷なの！？」

ナルガモン「何で今まで黙ってたんだよ？」

レナモン「色々と訳があってな…。」

リュウギ・ミソラ・ナルガモン「訳？」

すると、遠くからロウソクのような姿をしたデジモンがフワフワと飛んでくる。

？？？「レナモ～ン！」

ミソラ「え、ロウソクが喋ってる！？」

リュウギ「アイツもデジモンか？」

リュウギはD－アクセルでロウソクの姿をしたデジモンのデータを読み取る。

D－アクセル『キャンドモン、成長期、火炎型、データ種、必殺技はボンファイア。』

キャンドモン「あっひゃー♪ひっさしぶりだねレナモ～ン♪再会を祝してボクを強く抱き締めて～？」

キャンドモンは勢いをつけてレナモンに急接近する。

レナモン「やめろ…。暑苦しいだけだ…。」

すると、キャンドモンは思いきりズッコケる。

リュウギ「あ、ヘッドスライディング…。」

すると、キャンドモンはゆっくりと起き上がる。

キャンドモン「ひ、ひっさしぶりに再会したのに酷いじゃないのレナモ～ン？あなたのキャンドモンなのに～？」

すると、キャンドモンはミソラと目が合う。

ミソラ「な、何…？」

キャンドモン「な、なんとも美しいねぇ～？ボクと一緒にウォルス海岸を眺めながらお茶でもどうですかマドモワゼ～ル？」

ミソラ（ウザッ…？）

リュウギ「よく喋るヤツだなぁ…？レナモン、お前の知り合いか…？」

すると、キャンドモンはギロリとリュウギを睨み、激怒する。

キャンドモン「コルァァァァァァ？いま、なんつったそこのアンタ、愛しいレナモンに向かってお前とは誰に口聞いてんじゃワレぇ！？レナモンに馴れ馴れしくするのは幼馴染みであるこのキャンドモン様の専売特許なんだよぉ！勝手にポジション横取りすんじゃねぇッ？」

リュウギ「い、愛しい…？」

レナモン「キャンドモンは単なる顔馴染みだ…。普段は大人しいが、ミソラのような女性に絡むと、リミッターが外れて暴走するんだ…。」

ミソラ「いわゆる、二重人格ってヤツね…？」

ナルガモン「厄介な性格だなぁ～？」

リュウギ・ミソラ「いや、お前も人の事言えないだろ！？」

リュウギとミソラは声を揃えてツッコンだ。

ナルガモン「んで、そのキャンドモンが何でお前を見て暴走するんだよ？」

レナモン「私はこう見えても一応、女だ…。」

一同「へぇ〜〜……ってえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?」

リュウギ達の叫びはソルマシティ内に響き渡る。

リュウギ「し、知らなかった…?」

ミソラ「私もてっきり男だと思ったわ…?」

ナルガモン「俺も一応、女だ…。」

リュウギ・ミソラ「ウソつけッ!!」

キャンドモン「おい、無視してんじゃねぇぞテメェらッ?さてはこのボクチンを差し置いて愛しのマドモワゼル達と仲良くなるつもりかこのエロ共めッ?」

リュウギ「レナモン、何とかできねぇのか…?」

ミソラ「ハッキリ言ってウザい…?」

レナモン「キャンドモンを静めさせるには、1つだけ方法がある…。それは…」

キャンドモン「待っててね愛しのマドモワゼル達よ!このエロ共達をこの手で沈めさせてやるからね〜♪」

リュウギ「エロ共って俺達の事かよ!?」

ナルガモン「毒舌で目立とうってか？上等だぜ！！」

リュウギとナルガモンは戦う体勢に入る。

キャンドモン「覚悟しやがれこのエロ共が！！『ボンファイア！！』」

キャンドモンは口から小さな火球を放った。

すると、リュウギとナルガモンは素早く交わした。

レナモン「頭の上にある火を消せば正気が戻る！」

キャンドモン「燃えるぜ燃えるぜベイベー！！ヒャッホ～ウ！！」

暴走するキャンドモンは頭の上にある火が激しく燃え上がる。

ナルガモン「あの野郎、炎が増してきやがったぞ！？」

レナモン「気を付けろ。キャンドモンは炎が増していく毎にパワーが上がっていく。」

リュウギ「なんだって！？」

ナルガモン「それを先に言えよ？」

キャンドモン「喰らいやがれ腐れ外道がッ？『ボンメガファイア！！』」

暴走するキャンドモンは口から１０倍の威力を持つ火炎弾を放った。

リュウギ・ナルガモン「んなっ！？」

リュウギとナルガモンは間一髪で交わした。

リュウギ「早くアイツをなんとかしねぇと…。」

ナルガモン「そうだな！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ナルガモン「『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から強力な黒炎弾を放った。

キャンドモン「ヴァカめ！！喰らうかよ！！『ボンメガファイア！！』」

キャンドモンは口から１０倍の威力を持つ火炎弾を放った。

ナルガモン「ぐはっ！？」

リュウギ「ナルガモン！？」

キャンドモン「なんだなんだショボいなテメェらぁ？そんなもんでオレ様に勝てるとでも思ってんのかぁ？あん？」

リュウギ「くっ…。」

（どうすれば…？）

キャンドモン「やっぱ口先だけだなぁテメェはＹＯ～？」

その時、リュウギはキャンドモンの言葉に段々と怒りが込み上げてくる。

リュウギ「口先…だと…？」

ミソラ「一番言ってはいけない事言っちゃったよ…？」

リュウギ「覚悟はできてるんだろうな…？俺は嘘と口先って言われるのが一番大嫌いなんだよ！！」

リュウギはアルカナムを横一閃に振った瞬間、トリガーを引くと、剣風によって生み出された衝撃波が放つ。

一同「！？」

キャンドモン「ぬぅわにぃぃぃぃぃ！？」

すると、衝撃波はキャンドモンの頭の上にある火を切った。

ミソラ「やったわ！！」

すると、キャンドモンは正気を取り戻した。

キャンドモン「あれ、ボクは一体何を…？」

レナモン「正気を取り戻したみたいだな…。」

キャンドモン「あ、レナモン久しぶりだね♪」

ミソラ「ホントに二重人格なんだ…？」

リュウギ「レナモン、コイツに説明してやってくれ。」

レナモン「分かった。キャンドモン、かくかくしかじかで…」

キャンドモン「なるほどなるほど！ってかくかくしかじかじゃ分かんない～？」

その間に、リュウギはナルガモンの心配をする。

リュウギ「ナルガモン、大丈夫か？」

ナルガモン「オレを誰だと思ってんだぁ？この通り、ピンピンしてるぜ！それよりリュウギこそ大丈夫かぁ？」

リュウギ「え？あ、あぁ…。」

すると、リュウギは静かに笑う。

ナルガモン「な、なんだよ？」

リュウギ「いつも自己チューなお前が初めて俺の事心配したな…？」

すると、ナルガモンは顔を赤らめる。

ナルガモン「な、なに言ってんだよ？仲間なんだから心配するのはあたりめぇだろ？」

リュウギ「俺は大丈夫だ…。ありがとな…。」

ナルガモン「リュウギ、もっと強くなってそのカイってヤツをブッ倒そうぜ!!」

ナルガモンはそう言って手を差し出した。

リュウギ「ナルガモン…。あぁ、勿論だ!!」

リュウギはニヤッと笑い、ナルガモンの手をギュッと握り締めた。

ミソラとレナモンはその光景を見て安心する。

キャンドモン「熱いですねぇ…。これぞ青春ですね♪」

キャンドモンは青春に感動したのか、涙を流す。

そして…。

キャンドモン「皆さんはじめまして。ボク、キャンドモンと申します!」

キャンドモンが自己紹介すると、リュウギ達も簡単に自己紹介する。

レナモン「キャンドモン、街の様子はどうだ…?」

キャンドモン「今の所問題ありません!あの御方のお陰でソルマシティは平和です♪」

リュウギ「あの御方?」

レナモン「左目に傷を持った金髪の男の事だ…。ここはもう既にデジエクスフィールドが展開されてソルマシティ全体を守っている。」

ミソラ「それなら、もうこの街はイビルスに襲われないわね♪」

レナモン「あぁ。」

リュウギ「そんなに凄いのか…？」

キャンドモン「凄いてもんじゃないですよ！？あの御方の強さは半端ないんですから。完全体のデジモンでも片手で一捻りですよ！？」

リュウギ「一捻りか…。どんな奴か戦ってみてぇ…。」

ミソラ「またそうやってカッコつけちゃって…？」

キャンドモン「そうですよ！いくらリュウギさんでも無茶にも程がありますよ？」

リュウギ「無理、無茶、無謀、それに怯えてたら前に進まねぇだろ？それに、どんな奴だろうが正々堂々、立ち向かう！それが俺の流儀だ！！」

ナルガモン「それこそリュウギだぜ！！」

ミソラ「また始まったわ…？」

レナモン「でも、それがリュウギの一番良いところだ…。」

レナモンはそう言って静かに笑う。

リュウギ「さて、この街はもう安心だし、次の目的地はどうする？」

キャンドモン「ここからだと、北東にあるアイナ山です！そのためにはクラサ沼を抜けないとダメです！」

ミソラ「沼なの～？」

ミソラは勘弁して欲しいという顔をする。

キャンドモン「ボクが案内しますので御安心を！」

ナルガモン「おっ、頼もしいじゃねぇか♪」

リュウギ「とか言って、ホントは一緒に行きたいんじゃねぇのか…？」

キャンドモン「……とんでもないです～？」

リュウギ「なんだ、今の間は…？」

キャンドモン「皆さんが森で迷わないようにサポートするだけですよ？」

ミソラ「ホントに…？」

キャンドモン「本気と書いてマジです！……たぶん。」

リュウギ「今、たぶんって言ったぞ？ホントに大丈夫かよ！？」

レナモン「万が一暴走すれば、頭の火を消せばいい…。」

キャンドモン「と言うわけで、これからもよろしくお願いします～♪」

リュウギ「ま、いいか…。」

キャンドモン（ムフフフ…。これで愛しいマドモワゼル達と一緒に行ける～♪ハーレムな冒険をするにはまず、あのエロ共を始末すればオールＯＫ！！）

キャンドモンは心の中で不気味に笑うのであった。

ナルガモン「おい、なにニヤニヤしてんだよ…？」

キャンドモン「な、何でもありましぇんよ旦那～？」

レナモン「……。」

キャンドモン「それでは、クラサ沼へと御案内しま～す♪」

キャンドモンはそう言ってフワフワと飛んでいく。

ミソラ「リュウギ、大丈夫なの、あのスケベロウソクなんか信じて…？」

リュウギ「信じなきゃ何も始まらねぇだろ？さぁ、行こうぜ！」

リュウギはそう言って先陣をきってクラサ沼へと向かうのであった。

～クラサ沼～

クラサ沼とは、森とは違って草道が少なく、木々があちらこちらに生えていた。そして、辺りはすっかりと暗くなっていた。

ミソラ「うぅ…、何か出てきそう…？」

ミソラはまたもやレナモンの後ろに隠れて歩く。

ナルガモン「キャンドモン、ホントに大丈夫なんだろうなぁ？」

キャンドモン「大丈夫です！！このボクに任せてください！！」

リュウギ「そう言わずに、キャンドモンを信じようぜ！！」

キャンドモン（この沼に入ればボクの勝利間違いなし！！さてと、まず手始めに…）

すると、キャンドモンはピタリと止まる。

リュウギ「どうしたんだ？」

すると、遠くから巨大な丸太がリュウギとナルガモンに襲い掛かる。

リュウギ・ナルガモン「どわぁぁぁぁぁぁぁ！？」

リュウギとナルガモンは間一髪で丸太を交わした。

ミソラ「リュウギ！？」

レナモン「大丈夫か！？」

リュウギ「だ、大丈夫だ…？」

ナルガモン「あ、あぶねぇ～…？」

キャンドモン「ここは罠がたっぷり仕掛けられてますから気を付けてください！」

ナルガモン「それを先に言えッ？」

キャンドモン「すみません、うっかりちゃっかりしていたもので？では、先へ進みましょう？」

（チッ…）

キャンドモンは心の中で舌打ちをする。

クラサ沼に入って１０分…。

ミソラ「ちょっと、まだ抜けないの～？」

キャンドモン「もう少しですよ♪」

（そろそろだな…）

すると、先頭で歩くリュウギとナルガモンがパッと消えた。

ミソラ「え、リュウギ！？」

レナモン「これは…！？」

レナモンは地面を調べると、沼があったのだ。リュウギとナルガモンは消えたのではなく、沼に落ちたのだ。

キャンドモン「いけません!?この沼の水深は１０ｍもあるんです!?」

ミソラ「そんな!?」

キャンドモン「今思えば、いい人達でしたねぇ…。どうか安らかに眠ってくだされ…。南無南無南無南無南無…。」

キャンドモンはそう言って念仏を唱える。

ミソラ「ちょっと、勝手に殺さないでよッ?」

レナモン「仕方ない…。私が助けに…」

??『マーチングフィッシーズ!!』

すると、沼から大量の魚達が現れる。

一同「!?」

すると、リュウギとナルガモンが沼から飛び出してくる。

ミソラ「リュウギ!!」

ナルガモン「ダメ…、じぬがとおもっだ（死ぬかと思った）…。」

どうやらナルガモンは泳げないらしい。

リュウギ「危なかったぜ…。サンキューな、ゴマモン！」

すると、沼からゴマモンが顔を出す。どうやら、リュウギは沼の中でデジサモンを発動してゴマモンを召喚したのだ。

ゴマモン「へへッ、いいって事よ♪んじゃ、必要になったらまた呼んでくれよな！」

リュウギ「あぁ！」

すると、デジサモンの効果が切れてしまい、ゴマモンは静かに消え去った。

ミソラ「良かった…。私はてっきり…」

リュウギ「ちゃんとお前を現実世界に返すという約束を果たすまで、俺は絶対に死なねぇ…。そうだろ？」

ミソラ「うん…。」

リュウギ「ていうかナルガモン、お前泳げなかったのかよ…？」

ナルガモン「仕方ねぇだろ？オレは泳ぐの嫌いなんだからよぅ？つうかテメェ、あるならあるって先に言えよッ？」

キャンドモン「あったなら始めからそう言ってますよ。」

リュウギ「ま、そりゃそうだな…。」

ナルガモン「って納得してんじゃねぇよッ？」

レナモン「私もそう思う。先へ進もう。」

ナルガモン「チッ、わーったよッ？」

キャンドモン「ささっ、行きましょう。」

（チッ、しぶとい奴らだ…？）

キャンドモンは心の中で舌打ちをする。

キャンドモン（まぁいい。こうなりゃ最後の切り札と行きましょうか♪うしししししし…♪）

更に１０分後…。

ミソラ「ちょっと、もう少しとか言っておきながら、いつになったら抜けるのよッ？」

キャンドモン「お、おかしいですねぇ～…。」

（確かここらへんで落とし穴があったハズ…？）

すると、レナモンは何か気配を感じる。

レナモン「しっ！何か聞こえる…。」

リュウギ達は耳を澄ますと、何か話し声が聞こえてくる。

リュウギ「ホントだ…。あっちだ…。」

リュウギ達はコッソリと覗くと、二匹のデジモンが会話をしていた。

ガジモン「次の作戦は、落とし穴作戦だな？」

ギザモン「二度失敗したが、次成功すればキャンドモンからの褒美が貰えるぜ♪」

ガジモン「そうそう、アイツが隠し撮りしたこの写真の子を紹介してくれるんだぜ？高価買取りした甲斐があったぜ♪」

ガジモンが取り出したのは、一枚の写真だった。その写真には、ミソラが写っていた。

キャンドモン（んなっ！？）

一同「……。」

ミソラ「ふ～ん…。キャンドモン、アンタってなかなかの商売上手なんだね…？」

キャンドモン「ご、誤解ですよミソラさん？あれは鉄壁であるボクらのチームワークを乱そうとするための罠ですよ？」

レナモン「確か、前にもこんな事があったような…。」

すると、ナルガモンとミソラの怒りが爆発した。

ナルガモン・ミソラ「騙したなぁぁぁぁぁぁッ？」

キャンドモン「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！？」

キャンドモンは慌てて逃げ出す。

レナモン「やはりそうだったか…？」

レナモンは呆れてため息をつく。

リュウギ「とにかく、追い掛けるか…。」

リュウギとレナモンは急いでミソラ達の後を追う。

キャンドモン「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ？お助けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

ミソラ「待ちなさいこのスケベロウソクッ？」

ナルガモン「血祭りだコラァァァァァァッ？」

すると、キャンドモンは何かにぶつかった。

キャンドモン「ひぎゃん！？」

ナルガモン「やっと捕まえたぞッ？」

ミソラ「覚悟はできてるんでしょうねッ？」

すると、キャンドモンは大量の冷や汗が流れる。ミソラとナルガモンは振り向くと、巨大な水棲型デジモンが咆哮を上げる。

キャンドモン「で、でたぁぁぁ

シードラモン「キシャャャャャャ！！」

シードラモンは口から吐いた水の息を吹き付ける。

ナルガモン「あぶねぇ！！」

ナルガモンは素早くミソラとキャンドモンを助けた。

キャンドモン「ナルガモン…。」

ナルガモン「勘違いすんじゃねぇぞ。あの野郎をブッ倒したら次はお前だから！！」

ナルガモンはそう言って戦う体勢に入る。

ナルガモン「喰らえ！！『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から強力な黒炎弾を放った。

対するシードラモンは水面を尻尾で叩き付けて、氷の壁を作った。

すると、アートルムフレイムは水の壁によってかき消された。

ナルガモン「くっ！！」

すると、シードラモンは尻尾でナルガモンを薙ぎ払った。

ナルガモン「うわっ！？」

ミソラ「ナルガモン！？きゃっ！？」

すると、シードラモンは尻尾でミソラを巻き付けて締め付ける。

キャンドモン「ミソラさん！？」

すると、リュウギとレナモンが現れる。

レナモン「ミソラ！？」

レナモンは急いで助けに行こうとすると、リュウギはレナモンを止める。

レナモン「何のつもりだ、リュウギ！？」

リュウギ「キャンドモン、こっからはお前次第だ…。」

キャンドモン「な、何を言ってるんです！？仲間を見殺しにするのですか！？」

リュウギ「男なら、テメェでまいたタネぐらい、テメェで刈るんだな…。」

キャンドモン「……。」

キャンドモンは頭を抱えて悩む。その時だった。

キャンドモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

キャンドモンは口から小さな火球をシードラモンの顔に当てた。

すると、シードラモンは怒りの矛先をキャンドモンに向け、締め付けていたミソラを解放した。

シードラモン「キシャャャャャャャャッ？」

キャンドモン「あわわわ…？」

シードラモン「『アイスアロー！！』」

シードラモンは口から鋭い氷の矢を吐き出した。

キャンドモン「うわっ！？」

（ボクの手で愛しのマドモワゼルを助けたんだ！！悔いはない！！）

キャンドモンは覚悟を決めて目を閉じたその時、リュウギはガンブレード、アルカナムでアイスアローをぶった切る。

シードラモン「！？」

キャンドモン「リ、リュウギさん…！？」

リュウギ「いい覚悟だ…。俺達を騙したのは許さねぇが、その覚悟気に入った！！後は俺達に任せろ！！行くぞナルガモン！！」

ナルガモン「あぁ！！」

すると、リュウギのＤ－アクセルから聖なる光が輝き始める。すると、ナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

ソニックドラモン「ＣＯＯＬに反撃と行こうぜ！！」

リュウギ「あぁ！！」

リュウギはアルカナムを構える。

シードラモン「キシャャャャャャャャ！！」

シードラモンは口から吐いた水の息を吹き付ける。

ソニックドラモン「当たるかよ！！」

リュウギとソニックドラモンは素早く交わすと、リュウギはアルカナムを横一閃に振ると同時にトリガーを引くと、剣風によって生み出された衝撃波を放ってシードラモンにダメージを与えた。

シードラモン「キシャャャャャャャャ！？」

ソニックドラモン「トドメだ！！『アートルムバースト！！』」

ソニックドラモンは口から漆黒に包まれた灼熱の炎でシードラモンを焼き付くした。

シードラモン「キシャャャャャャャャ！？」

シードラモンは力尽きて倒れると、体内からイビルスが現れる。

ソニックドラモン「リュウギ！！」

リュウギ「逃がすかよ！！」

リュウギは逃げるイビルスに狙いを定めてトリガーを引くと、銃弾がイビルスに直撃して消滅させた。

イビルス「ギィィィィィィィィ！？」

ソニックドラモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

ソニックドラモンはフィニッシュを決めた。

ミソラ「やったわ！！」

キャンドモン「す、スゲェ…。」

すると、リュウギのＤ－アクセルから光が生じ、自動的にデジエクスフィールドが発動されてクラサ沼を包み込んだ。

リュウギ「これで、この地は安全だな。さて、シードラモンをリカバリーするか…。」

リュウギは致命傷を負うシードラモンをリカバリーした。

そして…。

シードラモン「助かりました！ありがとうございます！」

リュウギ「この様子だと、あの３バカトリオはいなさそうだな…？」

ミソラ「ねぇシードラモン、黒いタイツを来たバカっぽい3人兄弟に襲われたの？」

シードラモン「実は、私が教われたのはそんな奴等ではありませんでした…。」

レナモン「まさか、他の奴か…？」

シードラモン「微かですが、巨大な剣を持ち、全身に鎧を纏ったデジモンが大量のイビルスを引き連れて襲われました…。」

リュウギ「巨大な剣に鎧を纏ったデジモン…？」

すると、キャンドモンは急に体が震えあがり、怯え始める。

レナモン「どうした、キャンドモン？」

ナルガモン「腹でも壊したのかぁ？」

キャンドモン「巨大な剣に全身鎧を纏ったデジモン…。まさか、あのデジモンがスレッド大陸に現れたのですか！？」

リュウギ「キャンドモン、知ってるのか？」

ミソラ「またウソつくんじゃないでしょうね…？」

キャンドモン「間違いありません…。そのデジモンの名前は、闇を纏いし邪悪な刺客　スレイヤードラモンです！！」

—To Be Continued….

ＥＰ１０　～暴走を止めろ?二重人格の悪魔　キャンドモン～（後書き）

～???～

ここは、イビルスを支配するアナログマンの本拠地。

???「ＢＡＤ特戦隊、また失敗したようだな…?」

すると、黒い影はバンディッツを鋭く睨む。

バンディッツ「も、申し訳ありませんスレイヤードラモン様?」

黒い影の正体は、スレイヤードラモンだった。

アラン「でも、２人のエクセリオンがとんでもなく強いんでさぁ…。」

スレイヤードラモン「フン、２人の子供なんてただのゴミに過ぎん…。ならば貴様らはゴミ以下だな…。」

すると、スレイヤードラモンは大剣、フラガラッハの刃先をＢＡＤ特戦隊に向ける。

スレイヤードラモン「ゴミ以下はここにいる資格なんてない…。ここで切り捨てるとしようか…。」

アナログマン「そう恐い顔するな、スレイヤードラモン。」

すると、スレイヤードラモンの背後にアナログマンが現れる。

スレイヤードラモン「アナログマン様…。」

アナログマン「スレイヤードラモン、お前の力を見せてやれ…。」

スレイヤードラモン「はっ…。アナログマン様の仰せのままに…。」

スレイヤードラモンは闇の中へと消えていった。

アナログマン「ククク…。私の研究は完璧だ…。これでエクセリオンはお仕舞いだ!!」

アナログマンはそう言って高らかに笑うのであった。

なんと、スレイヤードラモンがアナログマンの手下に!?

次回もお楽しみに!!

Ｅｐ１１　～仲間を守る力を！！金色の妖狐　キュウビモン～（前書き）

今回はついにレナモンが！？

そして最後はとんでもない事に！？

Ｅｐ１１スタート！！

ＥＰ１１　～仲間を守る力を！！金色の妖狐　キュウビモン～

～クラサ沼～

リュウギ「すれいやーどらもん…？」

キャンドモン「竜人型最強という究極体デジモンです！！アイツが現れると、スレッド大陸はもうお仕舞いです！！」

ナルガモン「そんなにヤバイ奴なのか？」

キャンドモン「ヤバイどころじゃないですよ！？強さは半端ないんですから。完全体のデジモンでも片手で一捻りなんですよ！！」

リュウギ「それ、前回と同じ事言ってなかったか…？」

ミソラ「アンタのヤバさってイマイチ分からないわ…？」

ナルガモン「なぁに！最強と呼ばれるデジモンの中のデジモン、このオレに任せなって！！ナッハハハ♪」

ナルガモンはそう言って人差し指を突き立てて高らかに笑う。

シードラモン「戦うなんて無謀だ…。アイツと戦って生き残ったデジモンはこの世にいない…。」

リュウギ「だったら意地でも生き残ってやるさ…。無謀から逃げていたら、俺の流儀に反するからな！！」

ミソラ「また始まったわ…？」

リュウギ「それに、アイツがイビルスの仲間なら、いずれ戦わなきゃならねぇしな！！」」

レナモン「確かにそうだな…。」

ナルガモン「よぉし！！んじゃ早速そのスレイヤードラモンてやらをブッ…」

キャンドモン「Ｈｅｙちょっとストップ、ストップ！！」

ナルガモン「んだよキャンドモン？」

キャンドモン「あんなバケモンと戦うのですか？気は確かなのですか！？」

ナルガモン「オレ達の力が信用できないのかぁ？」

リュウギ「まぁコイツの優先順位はずれているが…？もしスレイヤードラモンが現れたら正々堂々、真っ向勝負してやる！それが俺の流儀だ！」

キャンドモン「は…はは…。」

キャンドモンはあんぐり状態になり、目を丸くする。

レナモン「そういう事だキャンドモン。まだ私達と一緒に来るつもりか…？」

すると、キャンドモンの頭の上にある火が燃え上がって暴走する。

キャンドモン「気ぃ狂ってんだろお前ら?お前らと一緒にいたら命がいくつあっても足んねぇぞチキショーッ?」

ミソラ「ぼ、暴走しちゃったわ…?」

キャンドモン「こんなのやってやれるかッ?お前らなんかと居るより、帰ってクソして寝た方がよっぽどマシじゃコルァァァァァァァァァッ?」

キャンドモンはそう言って逃げていった。

ミソラ「散々言いたい放題言って逃げていったわ…?アイツそれでも男かしら…?」

レナモン「まぁ、キャンドモンは昔からそういうヤツだったからな…。」

リュウギ「……。」

ナルガモン「さて、あんなヤツほっといて、アイナ山まで行こうぜ!」

シードラモン「くれぐれも気を付けろよ…。アイナ山に行くなら、この先に行けばいい。」

リュウギ「分かった。ありがとな。」

ミソラ「さ、行きましょ!」

リュウギ達はシードラモンに別れを告げると、アイナ山へと向かった。

～アイナ山　山の麓～

ナルガモン「うひゃ～…、近くで見るとすんごい高ぇなぁ～…。」

ナルガモンはアイナ山を見て驚く。

レナモン「アイナ山はスレッド大陸の中で一番高いといわれる山だ…。」

ミソラ「まさか、今からこれを登るの…？」

リュウギ「当たり前に行くだろ！それ以外何があるんだよ？」

ミソラ「そんなぁ～？」

すると、レナモンはアイナ山を見て静かに笑う。

レナモン「どうやら、その必要はなさそうだ…。」

ナルガモン「何でだよレナモン？」

すると、リュウギとミソラのＤ－アクセルが反応する。

Ｄ－アクセル「デジエクスフィールド設置済み。」

リュウギ「デジエクスフィールド設置済み？つまり、アイナ山はも

う大丈夫って事なのか？」

ミソラ「ウソ！？ラッキー♪」

ナルガモン「一体誰がやりやがったんだ？」

レナモン「恐らく、左目に傷を持った金髪の男か…。」

リュウギ「……。」

（それとも、カイのヤツがやったのか…？）

意外な出来事でリュウギ達は目的を失い、ただ立ちすくむ。

その時だった。

ミソラ「みんな、アレを見て！？」

アイナ山の山頂から闇の空間が現れる。

リュウギ「なんだ、アレは？」

すると、闇の空間から黒い影が現れ、張られたデジエクスフィールドを破壊した。

一同「！？」

すると、黒い影はそのままアイナ山の頂上へと降りていった。

ミソラ「そんな…。デジエクスフィールドが破壊されるなんて…。」

ナルガモン「一体何者なんだ!?」

リュウギ「行くぞ!!」

リュウギ達はデジエクスフィールドを破壊した黒い影の正体を探るため、急いでアイナ山の頂上へと向かった。

～アイナ山　中層～

ミソラ「いつになったら着くの～?」

レナモン「もう少しだ…。」

すると、リュウギ達の前に亀の姿をした爬虫類型デジモンが立ちはだかる。

リュウギ「コイツは!?」

リュウギはD－アクセルでデータを読み取る。

D－アクセル「トータモン、成熟期、爬虫類型、ワクチン種、必殺技はシェルファランクス。」

ミソラ「ディスティングハーツ!!」

ミソラはディスティングハーツをすると、トータモンの体内にはイビルスがいた。

ミソラ「イビルスがいるわ!」

ナルガモン「クソッ、こっちは急いでるってのによ！！」

レナモン「リュウギ、ナルガモン。ここは私達に任せて先に行け。」

リュウギ「でも…。」

ミソラ「いいから早く！逃げられちゃうわよ！」

すると、リュウギはゆっくりと頷く。

リュウギ「分かった。ここは頼む！行くぞナルガモン！」

ナルガモン「おう！！」

リュウギとナルガモンは先に頂上へと向かった。

トータモン「グオォォォォォォ！！」

レナモン「お前の相手は私だ…。」

ミソラ「行くわよ、レナモン！！」

ミソラとレナモンは戦う体勢に入る。

トータモン「『シェルファランクス！！』」

トータモンはするどい刃物がいくつも生えた甲羅から刃物を飛ばして攻撃する。

レナモンはミソラを抱いて素早く交わした。

レナモンはミソラを安全な場所へと避難させる。

レナモン「ここに居て…。」

ミソラ「私も戦うわ！」

レナモン「大丈夫だ…。私を信じて…。」

レナモンはそう言ってトータモンに矛先を向ける。

ミソラ「レナモン…。」

レナモン「『狐葉楔！！』」

レナモンは岩山を足場にして高く飛び上がり、木の葉の手裏剣を放った。

すると、トータモンは殻にこもって防御した。

ミソラ「効いてないわ！？」

トータモン「グオォォォォォォ！！」

トータモンは勢いつけてレナモンに突進攻撃をした。

レナモン「うわっ！？」

レナモンは岩山に激しく叩き付かれる。

ミソラ「レナモン！？」

ミソラは急いで助けに行こうとすると、レナモンは叫ぶ。

レナモン「来ちゃダメだ！？」

ミソラ「で、でも…。」

レナモン「私は大丈夫だ…。だから、ミソラは隠れてて…。」

（私は、みんなの足を引っ張ってばかりだ…。だからここで強くなるんだ、私自身を！！）

レナモンは力を振り絞って立ち上がり、戦う体勢に入る。

トータモン「グオォォォォォォ！！」

すると、トータモンはレナモンに向かってもう一度突進攻撃を仕掛ける。

レナモン「くっ！！」

ミソラ「レナモン！！」

？？？「『ボンファイヤ！！』」

その時、遠くから小さな火球がトータモンの顔面に直撃して突進を阻止した。

すると、ミソラ達の前に逃げ出したハズのキャンドモンがいた。

ミソラ「キャンドモン！？」

キャンドモン「お、お、おオレ様だって男だ！！愛しいマドモワゼル達を見殺しにするヤツは男じゃねぇってんだチキショーッ？」

レナモン「キャンドモン…。」

ミソラ「アンタ、まだ暴走してたの…？」

キャンドモン「おい掛かって来やがれってんだこのクソガメ野郎がッ？マドモワゼルに傷付けるヤツはこのキャンドモン様が許さねぇぞコルァァァァァァァァァッ？」

すると、トータモンは怒りの矛先をキャンドモンに向け、勢いつけて突進攻撃を仕掛けた。

キャンドモン「ひぎゃん！？」

ミソラ「え、あっさり！？」

キャンドモンは岩山に激しく叩き付かれる。

キャンドモン「がはっ…、あっさりやられちゃいました…。」

レナモン「どうして助けに来たのだ？」

キャンドモン「リュウギさんの言葉が頭から離れなくてさぁ…。だから体が勝手に動いちまったのかなぁ…。」

レナモン「キャンドモン…。」

キャンドモン「やってみたらこの有り様だ…。はは…、やっても無駄だったんだな…。」

トータモン「グオォォォォォォォ！！」

トータモンは勢いをつけてレナモン達に突進攻撃を仕掛ける。

すると、レナモンは手を広げてキャンドモンを守る体勢に入る。

キャンドモン「レナモン…！？」

レナモン「無駄なんかじゃない…。お前の気持ち、ちゃんと私の心に届いたよ…。」

すると、ミソラのＤ－アクセルが反応する。

ミソラ「Ｄ－アクセルが反応してる！？」

レナモン「力がみなぎってくる…。私に仲間を守る力を！！」

その時、レナモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

レナモン「レナモン、進化！！」

『キュウビモン！！』

ミソラはＤ－アクセルでキュウビモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「キュウビモン、成熟期、妖獣型、データ種、必殺技

は鬼火玉。」

ミソラ「レナモンがついに成熟期に進化したわ！？」

トータモン「グオォォォォォォォ！！」

トータモンは止まる事なく、キュウビモンに襲い掛かる。

キュウビモン「キャンドモン、下がってて…。」

キュウビモンはそう言って尾の先に集めた炎をいっせいに放つ。

キュウビモン「『鬼火玉！！』」

トータモンはまともに直撃した。

トータモン「グオォォォォォォォ！？」

すると、トータモンは反撃体勢に入り、するどい刃物がいくつも生えた甲羅から刃物を飛ばして攻撃する。。

トータモン「『シェルファランクス！！』」

キュウビモンは素早く交わした。

キュウビモン「終わりだ！！」

キュウビモンは素早い動きで岩山を足場にして高く飛び上がると、全身に炎が纏い、龍のごとくトータモンにぶつけた。

キュウビモン「『狐炎龍！！』」

トータモン「グオォォォォォォ！？」

トータモンは力尽きて倒れると、体内からイビルスが現れる。

キュウビモン「逃がしはせん！！」

キュウビモンは素早い動きでイビルスを噛み砕いて消滅させた。

イビルス「ギィィィィィィィィィ！？」

ミソラ「やったわキュウビモン！！」

ミソラは嬉しさの余りにキュウビモンに抱き着いた。

キャンドモン「その流れでボクチンも抱いてミソラさーん？」

すると、ミソラは握り拳を作ってキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ぐえっ！？」

ミソラ「寄るな、スケベロウソク…？」

キュウビモン「……？」

キュウビモンは力を使い果たし、レナモンへと退化した。そして、ミソラは致命傷を負うトータモンをリカバリーした。

トータモン「いやぁ、助かっただぁ～。感謝しますだぁ～。」

ミソラ「困った時は御互い様よ！」

レナモン「トータモン、頂上で一体何が起こったのだ…？」

トータモン「ついに現れただよ…。闇を纏いし邪悪な刺客　スレイヤードラモンが…。」

ミソラ・レナモン「！？」

キャンドモン「やっぱり来ちゃったぁぁぁぁぁぁぁ！？もうスレッド大陸は終わりだぁぁぁぁぁぁぁ！？」

すると、レナモンは素早い動きで暴走するキャンドモンの頭の上にある火を消した。

キャンドモン「あれ？ボクは一体何を…？」

ミソラ「アンタは黙ってて…？ウザい…？」

トータモン「早いとこ逃げた方がいいぞ…。」

レナモン「私達は引き下がるつもりはない…。」

ミソラ「リュウギ達が頂上に向かったのよ…。早く呼び戻さなきゃ…。」

キャンドモン「え、マジで行くのマドモワゼル！？ボク、ちょっとお腹の調子が…。助太刀したいのはやまやまなんだけど…」

キャンドモンはわざとらしく腹を抱えて痛がる。

ミソラ「一生やってろこのスケベロウソク…？」

レナモン「急ごう、ミソラ。」

ミソラ「うん！」

すると、レナモンは寂しげな顔をして振り向く。

レナモン「キャンドモン、ありがとう…。」

キャンドモン「！？」

ミソラ達はリュウギ達を止めるため、急いで頂上へと向かった。

トータモン「気を付けるんだぞ～！あれ、お前さんは行かないのかぁ？」

すると、キャンドモンはブルブルと体が震える。

トータモン「お前さん、大丈夫かぁ…？」

キャンドモン「だぁぁぁぁぁぁ！！あんな顔されたら、ほっとけるかってんだチキショー！！待ってよ愛しのマドモワゼーーール！！」

キャンドモンはヤケになり、ミソラ達の後を追う。

トータモン「か、変わったヤツだなぁ…？」

～アイナ山　頂上～

一方、リュウギ達はアイナ山の頂上に到着していた。

ナルガモン「やっと着いたぜ…。」

リュウギ「ここで一体何が…？黒い影は何処に…？」

すると、リュウギとナルガモンは何か異変を感じる。

リュウギ「ナルガモン…。」

ナルガモン「あぁ…。感じるぜこの威圧感…。出てきやがれ！！」

すると、上空からデジエクスフィールドを破壊した黒い影が降りてくる。

？？？「貴様らか、アナログマン様の計画を邪魔するエクセリオンというのは？」

黒い影の正体は、全身にクロンデジゾイド製の鎧を纏い、片手には大剣を持っていた。

リュウギ「鎧に大剣！？お前まさか…！？」

？？？「いかにも…。俺こそ闇を纏いし邪悪な刺客　スレイヤードラモンだ…。」

スレイヤードラモンは漆黒のマントを広げると、闇の波動を放つ。

リュウギ「くっ！！」
（とてつもない闇を感じる…！？今まで戦ってきた奴らとは桁違いだ！？）
スレイヤードラモン「どうした？怖じ気づいたか？」
すると、リュウギは自らの拳と拳をぶつけた。
リュウギ「怖じ気づいただと？笑わせんな！！敵に背中を見せるのは俺の流儀に反する！正々堂々、真っ向勝負だ！！」
ナルガモン「おいテメェ！！オレよりかなり目立ちやがって！！今すぐブッ飛ばしてやる！！」
スレイヤードラモン「貴様のような雑魚が俺をブッ倒すだと？片腹痛いわ！！」
ナルガモン「なんだとッ？」
スレイヤードラモン「まぁいい…。アナログマン様の命令により、貴様らを始末してやる…。」
すると、スレイヤードラモンは大剣、フラガラッハを構える。
リュウギ「ナルガモン、進化だ！！」
すると、リュウギのＤ－アクセルから聖なる光が輝き始め、ナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

リュウギ「行くぞ、ソニックドラモン！！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ソニックドラモン「上等だぜ！！」

リュウギとソニックドラモンは戦う体勢に入る。

スレイヤードラモン「来い…。」

（ニヤリ…）

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ１１　～仲間を守る力を！！金色の妖狐　キュウビモン～（後書き）

ついにリュウギ達が闇を纏いし邪悪な刺客　スレイヤードラモンと対峙！！

リュウギとナルガモンはどう立ち向かうのか！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ１２　～エクセリオンｖｓ闇を纏いし邪悪な刺客　スレイヤードラモン！！～

ついにスレイヤードラモンと対決！！

果たしてリュウギ達に勝ち目はあるのか！？

Ｅｐ１２スタート！！

ＥＰ１２　～エクセリオンｖｓ闇を纏いし邪悪な刺客　スレイヤードラモン！！～

～アイナ山　頂上～

スレイヤードラモン「来い…。」

（ニヤリ…）

リュウギ・ソニックドラモン「うおおおおおおおおおおおおお！！」

リュウギとソニックドラモンは先制攻撃を仕掛ける。

ソニックドラモン「『アートルムバースト！！』」

ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、口から漆黒に包まれた灼熱の炎を吐いた。

スレイヤードラモン「フッ…。」

スレイヤードラモンは大剣、フラガラッハで簡単に炎を払った。

ソニックドラモン「なに！？」

リュウギ「こっちだ！！」

リュウギはアルカナムでスレイヤードラモンに切りに掛かる。

スレイヤードラモンはフラガラッハでアルカナムを受け止める。

リュウギ（今だ！！）

リュウギはアルカナムのトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発して爆煙が舞い上がる。

リュウギ（やったか!?）

爆煙が去ると、スレイヤードラモンの身体には1つも傷が付いていなかった。

スレイヤードラモン「どうした、貴様の力はその程度なのか…?」

リュウギ「なに!?」

スレイヤードラモン「『咬竜斬刃!!』」

スレイヤードラモンは至近の間合いまで踏み込み、フラガラッハをリュウギに巻きつけた。

リュウギ「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

ソニックドラモン「この野郎、リュウギを放しやがれ!!『ヒドゥンスラッシュ!!』」

ソニックドラモンは両肘の鋭いブレイドを構えると、ブレイドから漆黒の炎に包まれ、スレイヤードラモンに切りにかかる。

スレイヤードラモン「フッ…。」

スレイヤードラモンはリュウギを巻き付けたフラガラッハでリュウギを投げ飛ばした。

ソニックドラモン「んな！？」

ソニックドラモンは攻撃を止めて、飛んできたリュウギをキャッチする。

スレイヤードラモン「フハハハ…。」

ソニックドラモン「あの野郎、遊んでやがる…？」

リュウギ「でも、奴はとんでもなく強いぜ…。気を抜くなよ、ソニックドラモン。」

ソニックドラモン「オレは最初から全力だぜ！！『アートルムバースト！！』」

ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、口から漆黒に包まれた灼熱の炎を吐いた。

スレイヤードラモン「同じ攻撃しかできんのか？小賢しい真似を！！」

スレイヤードラモンはフラガラッハで振り払おうとすると、灼熱の炎からリュウギが切り開いて現れる。

スレイヤードラモン「なに！？」

リュウギ「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

リュウギはアルカナムで油断したスレイヤードラモンを切り裂いた。

スレイヤードラモン「ぐはっ！？」

リュウギ（よしっ！！）

その時、スレイヤードラモンの怒りが爆発した。

スレイヤードラモン「嘗めるなぁぁぁぁぁぁ！！」

スレイヤードラモンはリュウギの足を掴んで思いきり叩き付けた。

リュウギ「ぐはっ！？」

ソニックドラモン「リュウギ！！」

すると、スレイヤードラモンはソニックドラモンの背後にまわっていた。

スレイヤードラモン「貴様もだぁぁぁぁぁぁ！！」

スレイヤードラモンは握り拳を作ってソニックドラモンを思いきり殴り飛ばした。

ソニックドラモン「ぐはっ！？」

リュウギ「くっ…、ソニックドラモン…。」

スレイヤードラモン「俺の顔に傷を付けた事は誉めてやる…。その意味、分かっているんだろうな…？」

すると、リュウギはゆっくりと立ち上がる。

リュウギ「あぁ…。お前に勝てるって事をな…。」

スレイヤードラモン「この死に損ないがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

スレイヤードラモンはフラガラッハでリュウギを切りに掛かった。

その時、ソニックドラモンは両手でフラガラッハを受け止めた。

リュウギ「ソニックドラモン！？」

ソニックドラモン「リュウギの言う通りだぜ…。何せオレは最強と呼ばれるデジモンだからな！！テメェをブッ倒すなんざ簡単なんだよ！！」

リュウギ「ソニックドラモン…。」

スレイヤードラモン「ハッタリに過ぎん…。貴様ら仲良く、このフラガラッハの餌食となるがいい！！」

スレイヤードラモンは力を入れていくと、フラガラッハを受け止めているソニックドラモンの両足が段々と地面にめり込んでいく。

リュウギ「ソニックドラモン！？」

ソニックドラモン「相手が誰だろうがオレはぜってぇに最後まで諦めねぇ！！リュウギと一緒に流儀を貫き通すんだ！！」

その時、リュウギのＤ－アクセルから聖なる光が宿る。

リュウギ「これは！？」

スレイヤードラモン「なんだこの光は、眩しい！？」

リュウギはＤ－アクセルを見ると、画面には『ＥＸモード発動可』と書かれていた。

リュウギ（デジサモンは発動できないが、一か八かだ！！）

「お前に賭けるぞ、ソニックドラモン！！」

リュウギは左手を前に突き出して叫ぶ。

リュウギ「ＥＸモード、発動！！」

すると、ソニックドラモンの回りに激しい突風が舞う。

スレイヤードラモン「な、なんだと！？」

突風が去ると、ソニックドラモンの身体から光のオーラが纏う。

ソニックドラモン「さて…、ＣＯＯＬに反撃と行こうぜ！！」

（ニヤリ…）

スレイヤードラモン（理由はともあれ、目付きが変わった…。）

すると、ソニックドラモンは一瞬にして姿を消した。

スレイヤードラモン「なに、消えた！？」

ソニックドラモン「こっちだ！！」

すると、背後からソニックドラモンが現れ、漆黒の炎に包まれた両肘の鋭いブレイドでスレイヤードラモンを切り刻んだ。

スレイヤードラモン「ぐはっ！？」

リュウギ「まだだ！！」

リュウギはアルカナムでスレイヤードラモンに切りに掛かる。

スレイヤードラモン「くっ！？」

スレイヤードラモンはフラガラッハでアルカナムを受け止めた。

スレイヤードラモン「図に乗るな！！」

スレイヤードラモンはフラガラッハを構えて体を回転させた。すると、巨大な竜巻を発生させる。

リュウギ「くっ！？」

ソニックドラモン「まだだ！！」

ソニックドラモンは目にも止まらない早さで両肘のブレイドで竜巻を振り払った。

ソニックドラモン「喰らいやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

ソニックドラモンはその勢いでスレイヤードラモンに切りに掛かった。

その時だった。

ソニックドラモンの体を纏っていた光のオーラが消えた。

ソニックドラモン「え？」

リュウギ「ＥＸモードが解けた！？」

スレイヤードラモン「不発か？脅かしやがって！！」

スレイヤードラモンは握り拳を作ってソニックドラモンを思いきり殴り飛ばした。

ソニックドラモン「ぐはっ！？」

リュウギ「ソニックドラモン！？」

ソニックドラモンは力を使い果たし、ナルガモンへと退化した。

ナルガモン「チ、チクショウ…。」

スレイヤードラモン「どうやら、最後の切り札は御仕舞いのようだな…？」

すると、リュウギはナルガモンの前に立ち、アルカナムを構える。

ナルガモン「リュウギ…。」

リュウギ「なに勝った気になってんだよ…。勝負はまだまだこれからだ…。」

スレイヤードラモン「理解できん…。素直に逃げれば良いものの…。なぜそこまでして立ち向かうのだ…？」

リュウギ「別に理解して欲しいとは思わねぇよ。俺はただ、自分の流儀を貫き通すだけだ！！」

リュウギはそう言ってアルカナムを横一閃に振ると同時にトリガーを引くと、剣風によって生み出された衝撃波を放った。

スレイヤードラモンはフラガラッハで軽く衝撃波を弾き返した。

リュウギ「くっ…。」

スレイヤードラモン「何度やっても結果は同じだ！！」

スレイヤードラモンは目にも止まらない早さでリュウギを殴り飛ばして岩山に叩き付けた。

リュウギ「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

リュウギは力尽きて地面に倒れる。

ナルガモン「リュウギ！？」

リュウギ（くそっ…。ここで負ける訳にはいかないんだ…。絶対に…。ダメだ…、体が言うこと聞かねぇ…段々と…意識が…）

リュウギは最後の力を振り絞って立ち上がろうとするが、体が拒絶する。やがて、リュウギは気を失ってしまう。

ナルガモン「おいリュウギ、しっかりしろ!!リュウギ!!」

スレイヤードラモン「さぁどうする?後はお前だけだ…。」

ナルガモン「くっ!!」

ナルガモンは手を広げ、体を張ってリュウギを守る体勢に入る。

ナルガモン「リュウギはまだ戦ってる!!体が拒絶していても、魂はオレと一緒に戦っているんだよ!!」

スレイヤードラモン「言いたい事はそれだけか?くだらん…。」

スレイヤードラモンはそう言ってフラガラッハを振り上げた。

ナルガモン「!?」

スレイヤードラモン「終わりだ、エクセリオン!!」

スレイヤードラモンはフラガラッハを振り下ろした。ナルガモンは逃げず、思わず目を閉じた。

ナルガモン（すまねぇ、リュウギ…。）

その時だった。

ガキィーンッ!!

剣と剣がぶつかり合ったような金属音がアイナ山に響き渡った。

ナルガモンは目を開けると、黒い影が大剣でフラガラッハを受け止めていた。

スレイヤードラモン「くっ!?誰だ貴様は!?」

フラガラッハを受け止める黒い影の正体は、左目に傷を持つ金髪の男だった。

???「……。」

ナルガモン「お、お前は確か…。」

すると、金髪の男は口を開く。

???「ようやく見つけたぞ、スレイヤードラモン…。」

スレイヤードラモン「くっ、邪魔だ!!部外者には用はない!!」

スレイヤードラモンは力で押し返そうとする。しかし、ビクともしなかった。

スレイヤードラモン（なに!?）

???「果たしてそうかな…?」

すると、スレイヤードラモンは金髪の男の左手首に黒いＤ－アクセ

ルが目に映る。

スレイヤードラモン「それは!?まさか貴様も…!?」

??「そうだ…。俺の名はエグザ…。このデジタルワールドを変えるエクセリオンの一員だ…。」

スレイヤードラモン「ならば貴様も、そいつらと一緒に始末してやる!!」

エグザ「果たしてできるかな…?」

スレイヤードラモン「くっ、人間ごときがッ!!」

スレイヤードラモンは後方に下がり、フラガラッハでエグザに切りに掛かった。

エグザ「……。」

エグザは大剣を地面に突き刺すと、2つに分裂して二刀流となってフラガラッハを受け止めた。

スレイヤードラモン「くっ!?」

エグザ「どうした、その程度の力なのか?」

エグザは力で押し返した後、二刀流をクロスさせて剣風によって生み出された衝撃波を放った。

スレイヤードラモン「くっ!?」

スレイヤードラモンは避けきれず、まともに直撃した。

ナルガモン「す、スゲェ…！？」

エグザ「スレイヤードラモン、目を覚ませ…。」

スレイヤードラモンは鋭い目付きでエグザを睨み付ける。

スレイヤードラモン「なんだと…？俺はアイツのパートナーだ…。貴様ごときに邪魔されてたまるか！！」

エグザ「まさか、そんなヤツだったとはなぁ…。情けねぇぜ…。」

スレイヤードラモン「黙れぇぇぇぇぇぇぇ！！」

スレイヤードラモンは剣風によって生み出された衝撃波を放った。

すると、エグザは2つの剣を1つに合体し、大剣で衝撃波を弾き返した。

エグザ「スレイヤードラモン、今ならまだ間に合うぞ…。」

スレイヤードラモン「俺が戻れば何になる…？俺はアイツと共に進むッ！！邪魔だッ！！『昇竜斬波！！』」

スレイヤードラモンはフラガラッハで練った竜波動を下方から上方に向けて剣圧を解き放った。

エグザ「くっ…。」

エグザは大剣で防御して昇竜斬波を受け止めた。

スレイヤードラモン「俺は生まれ変わったのだ…。アナログマン様、そしてアイツと共にこのくだらない世界を潰す！！」

エグザ「それがお前の答えか…。なら仕方ねぇ…。」

すると、エグザの目付きがキリッと変わり、大剣を地面に突き刺した。

ナルガモン「アイツ、一体何をするつもりなんだ…？」

エグザ「ＥＸモード、発動！！」

エグザは叫ぶと、身の回りに激しい突風が舞う。

ナルガモン「ＥＸモードだと！？」

スレイヤードラモン「なに！？」

突風が去ると、エグザの体から光のオーラが纏っていた。

エグザ「お前のその腐りきった根性、今すぐぶった切ってやる！！」

エグザは目にも止まらない早さでスレイヤードラモンに斬りに掛かる。

スレイヤードラモン「くっ！！」

スレイヤードラモンはフラガラッハで斬撃を受け止めた。その時、エグザは一瞬にして姿を消した。

スレイヤードラモン「消えた！？」

エグザ「こっちだ…。」

スレイヤードラモンは振り向くと、岩山の上にエグザが居た。

スレイヤードラモン（いつの間に…！？）

すると、エグザは大剣を地面に突き刺して高らかに叫ぶ。

エグザ「デジサモン、発動！！」

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、大剣を突き刺した地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

エグザ「来い、ミスティモン…。」

すると、魔法陣から魔法戦士型デジモン、ミスティモンが実体化された。

エグザ「ミスティモン、俺は遠距離から援護する。頼むぞ。」

ミスティモン「御意！！」

ミスティモンは炎の剣でスレイヤードラモンに斬りに掛かる。

スレイヤードラモン「くっ！！」

刃と刃が激しくぶつかり合う。

スレイヤードラモン「くっ、嘗めるな！！」

スレイヤードラモンはフラガラッハで反撃体勢に入った。

エグザ「させるかよ！！」

エグザは腰から二挺拳銃を取り出してスレイヤードラモンを狙い撃つ。

スレイヤードラモン「くっ！？」

ミスティモン「ここだ！！『コアダート！！』」

ミスティモンは炎の剣で下から切り上げるようにしてスレイヤードラモンにダメージを与えた。

スレイヤードラモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ナルガモン「アイツら、なんてコンビネーションなんだ…！？」

スレイヤードラモン「ハァ…ハァ…。何故だ…。何故勝てんのだ…。」

エグザ「スレイヤードラモン、お前は持っていたハズの大切な物がいつの間にか無くしている…。忘れたのか…？」

スレイヤードラモン「黙れ…。大切な物など、最初から失ってなど

ない…。」

エグザ「何度言っても、無駄みたいだな…。」

すると、エグザは二挺拳銃をしまい、大剣を地面から抜き取る。

エグザ「覚悟はできているか、スレイヤードラモン？」

スレイヤードラモン「くっ、俺はまだ…」

すると、エグザとミスティモンは低く構える。

エグザ「お前が闇に染まってしまったのは俺の責任だ…。行くぞ、ミスティモン。」

ミスティモン「御意…。」

すると、エグザとミスティモンは同時に動きだし、スレイヤードラモンにトドメを刺そうとする。

その時だった。

上空から雷撃が地面に直撃、エグザとミスティモンは思わず足を止める。

エグザ・ミスティモン「！？」

？？？「無事か、スレイヤードラモン。」

すると、上空から闇の空間が現れ、闇の空間から黒い影が現れる。

ナルガモン「な、なんだ!?」

すると、スレイヤードラモンは黒い影の名前を叫ぶ。

スレイヤードラモン「ストラティクモン!!」

ストラティクモンと呼ばれるデジモンは天から舞い降りてくる。

エグザはD－アクセルでストラティクモンのデータを読み取る。

D－アクセル「ストラティクモン、究極体、魔人型、必殺技は風林火山。」

エグザ「チッ、新手か…。」

スレイヤードラモン「何しに来たのだ?」

ストラティクモン「解らぬか?助けに来てやったのだ…。余りにもピンチそうだったからな…。」

スレイヤードラモン「くっ…。」

すると、スレイヤードラモンは上空へと舞い上がる。

エグザ「待て、スレイヤードラモン!!」

ストラティクモン「邪魔をしないでくれるか…?『風林火山!!』」

ストラティクモンは手を広げると、巨大な火の玉でエグザを足止め

する。

エグザ「くっ！！」

ストラティクモン「命拾いしたな、愚かなエクセリオン。次合うときは、最期だ！！」

ストラティクモンはそう言ってスレイヤードラモンと共に闇の空間へと消えていった。

ナルガモン「いっちゃった…。」

ミスティモン「エグザ殿、お役に立てなくて申し訳ない…。」

エグザ「いや、いいんだ…。ご苦労だったな、ミスティモン。」

デジサモンの効果が切れてしまい、ミスティモンは静かに消えていった。

エグザ「……。」

ナルガモン「おい、お前…。」

ナルガモンは話しかけると、エグザは無視して立ち去ろうとする。

ナルガモン「おい、待てよ！！」

すると、エグザは振り向きもせずに、そっとナルガモンに告げた。

エグザ「リュウギを頼んだぞ…。」

ナルガモン「え…？」

すると、エグザは何処かへと去っていった。

ナルガモン「おい！？」

ミソラ「リュウギ～！！」

すると、ミソラとレナモンが駆け付けてくる。

ナルガモン「あのエグザとか言うヤツ、なんでリュウギの事知ってんだ…？それに、ストラティクモンって…。」

ナルガモンはミソラ達の事は全く気付かず、先程の事をただ深く考え込むのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ１２　～エクセリオンｖｓ闇を纏いし邪悪な刺客　スレイヤードラモン！！～

～アナログマン本拠地～

ストラティクモン「全く、無茶をしおって…。」

スレイヤードラモン「昔からの生まれつきだ…。ほっといてくれ…。」

？？？「おいおい、新メンバー早々、あんな奴らに倒されたらシャレになんねぇぞこりゃ～♪」

ストラティクモンとは別の黒い影が冗談気に笑う。

？？？「貴様、我々ダークスだけでなく、アナログマン様の顔に泥を塗るところだったのだぞ？分を弁えろ！！」

スレイヤードラモン「チッ…。」

アナログマン「まぁまぁ…、失敗は成功のもとってよく言うだろ…？」

すると、スレイヤードラモン達の前にアナログマンが現れる。

一同「アナログマン様！？」

アナログマン「スレイヤードラモン、君にチャンスをくれてやる。スレッド大陸にあるマヤルシティにて、マルスモンが主催するコロシアムに出場しろ…。それに優勝すれば、今の事は水に流してやる

…。」

スレイヤードラモン「はっ、アナログマン様の仰せのままに…。アナログマン様、アイツは…？」

アナログマン「心配ない。アイツならもうすぐ蘇る…。待っているがよい…。」

スレイヤードラモン「はっ！！」

スレイヤードラモンはそう言って闇の中へと消えていった。

ストラティクモン「アナログマン様、よろしいのですか…？」

アナログマン「いいのさ…。ゲームは楽しまなきゃ面白くないだろ？フハハハハハ…！！」

アナログマンはそう言って高らかに笑うのであった。

果たして、リュウギ達はどうなったのか？

次回もお楽しみに！！

ＥＰ１３　～立ち上がれリュウギ！！目指せ最強道専門学校？～（前書き）

リュウギは目を開けると、真っ暗な闇の中にいた。

リュウギ「あれ？俺は一体…？」

すると、リュウギの前に見に覚えのある人物が現れる。

リュウギ「と、父さん…？」

リュウギの父親らしき者は口を開く。

？？？「――に――っている…。」

リュウギ「何だよ、聞こえねぇよ父さん！？」

すると、リュウギの父親らしき者は静かに笑い、背を向ける。

リュウギ「待てよ父さん！？父さん！？」

リュウギはひたすら父親の名前を叫び続けるのであった。

それは夢の中である事をリュウギが認識できたかどうかは定かではない…。

父親は一体何を伝えたかったのか…？

それは未だに謎に包まれるままであった。

Ｅｐ１３スタート！！

ＥＰ１３　～立ち上がれリュウギ！！目指せ最強道専門学校？～

～アイナ山　頂上～

リュウギ「父さん！！」

リュウギはガバッと起き上がった。

リュウギ「ハァ…ハァ…。ゆ、夢か…。」

リュウギは回りを見渡すと、辺りは真っ暗に染まり、ミソラ達は眠っていた。

ナルガモン「起きたか…。」

リュウギは振り向くと、ナルガモンが岩山に座っていた。

リュウギ「ナルガモン…。俺は確か…？そうだ、スレイヤードラモンは！？」

ナルガモン「アイツなら逃げて行ったぜ…。」

すると、リュウギはナルガモンの様子がおかしいと気付く。

リュウギ「ナルガモン、一体何があったんだ…？」

すると、ナルガモンは黙りになる。

リュウギ「ナルガモン！！」

ナルガモン「話すと長くなるぜ…。」

ナルガモンはリュウギが気絶してからの話をリュウギに全て話した。

リュウギ「そうだったのか…。クソッ!!」

その時、リュウギは握り拳を作り、地面に思いきり悔しさをぶつけた。

ナルガモン「リュウギ…。」

リュウギ「俺は結局、仲間誰1人も助けられねぇんだ…。そして家族も…。」

ナルガモン「親父の事か…?」

リュウギ「な、なんでそれを…?」

ナルガモン「ミソラから聞いたんだよ…。」

リュウギ「あの時、俺は何もできなかった…。父さんが死んだ後、俺にもっと力があればって何度も悔やんだ…。」

ナルガモン「それからお前は、自分の流儀を貫き通す性格になったんだろ…?」

リュウギ「でも、またしても負けた…。あんな奴に…。俺は口先だけの男なんだ…。」

すると、リュウギは何度も地面を殴る。

ナルガモン「リュウギ、気持ちは解るけど、今は生きている事に素直になって喜べよ!!一歩間違えれば、オレ達は確実に死んでいたんだぞ…。」

リュウギ「ナルガモン…。」

ナルガモン「オレ達は生きている…。例え自分の流儀で貫き通したとしても、あのまま死んでいたら、一生後悔することになるし、親父も喜ばねぇとオレは思うぞ!!」

すると、リュウギは昔、父親に言われた事を思い出した。

『リュウギ、何でもかんでも流儀で貫き通すという曖昧な流儀は決して流儀とは言わない…。自分の信じる道、自分の心を曲げない道が真の流儀に繋がる道なんだ…。覚えとけよ…。』

リュウギ「父さん…。」

ナルガモン「リュウギ、前に進もうぜ!!後ろばかり向くのは、オレらの流儀に反するからな!!」

ナルガモンはそう言って手を差し出した。

リュウギ「あぁ…。」

リュウギは小さく笑い、ナルガモンの手をギュッと握手した。

すると、岩陰から2人の様子を見ていたレナモンが静かに笑う。

レナモン（良きパートナーだ…。）

すると、夜空に散らばる星が無くなり、夜が明け始める。

ナルガモン「さて、あんな奴等に負けないように強くなろうぜ、リュウギ！！」

リュウギ「あぁ！！」

日の出を見るリュウギ。すると、リュウギはふと思った。

リュウギ（左目に傷を持つ金髪の男、エグザ…。なんで俺達を助けたんだ…？それにスレイヤードラモンとは一体どういう関係なんだ…？）

そして…。

ミソラ「もうケガは大丈夫のようね？」

リュウギ「あぁ…。心配かけてすまなかったな…。」

レナモン「気にするな…。大体予想はついていた…。」

リュウギ「ところで、何でお前がいるんだよ…？」

リュウギとナルガモンは同時にキャンドモンを見つめる。

キャンドモン「か、勘違いすんじゃねぇよお前ら？男として、愛しいマドモワゼル達をほっとく訳にはいかねぇからな！？」

ナルガモン「あっそ…？」

ミソラ「ところでリュウギ、次はどうするの？」

リュウギ「俺はとにかく、自分の腕を試したい…。」

レナモン「それならば、マヤルシティにて年に一度行われる、コロシアムに出てみたらどうだ…？」

リュウギ「コロシアムだって？」

キャンドモン「マヤルシティのコロシアムって、オリンポス十二神の1人、マルスモンが主催するあのコロシアムの事ですか？」

リュウギ「自分の腕を試すには持ってこいだな…。行ってみようぜ！！」

ナルガモン「そのためには修行しなきゃな！！」

リュウギ「とは言うものの、どうやって修行するんだよ…？」

すると、ナルガモンは冗談気に笑う。

ナルガモン「お、オレに任せなって？ナッハハハハ？」

リュウギ（ノープランかよ…？）

レナモン「噂を耳にしたが、このスレッド大陸の何処かに修行ができる場所がある…。」

リュウギ「そんな場所があるのか…？」

ミソラ「でも何処かにでしょ？探すヒマなんてないと思うわよ？それに、あのスレイヤードラモンがいつ襲ってくるかも分からないし…。」

リュウギ「確かにな…。」

ナルガモン「おい、探す必要はなさそうみたいだぜ…？」

リュウギ「はぁ？」

ミソラ「どういう事よ？」

ナルガモン「だって、彼処に看板があるぞ。」

ナルガモンは指を指すと、看板が立っていた。

看板「最強を目指せ！！そして集え、我が修行の場『最強道専門学校』へ！！強くなりたければ探してみよ！！」

リュウギ「な、なんだこれ？」

ミソラ「専門学校って…？なんだか胡散臭さ１００％ね…？」

レナモン「私もそう思う…。こんな山のど真ん中に看板が立ててあるのは不自然だ…？」

キャンドモン「あれれ？まだ何か書いてありますよ？」

リュウギ達はよく見ると、看板の右端に小さく何か書いてあった。

看板「ヒント!!アイナ山を下って2キロ先に専門学校があります…。」

リュウギ「ヒントというよりか…。」

ミソラ「完全な答えじゃないの…。もっと胡散臭くなってきたわ…？」

ナルガモン「行ってみる価値はありそうだな!!行こうぜ!!」

リュウギ「ま、待てよ!?明らかに怪しいだろッ!?」

ナルガモン「だったら、背を向けるか？」

すると、リュウギは眉を寄せる。

リュウギ「何言ってんだよ…。敵に背中を見せるのは俺の流儀に反する!専門学校だろうがなんだろうが正々堂々、真っ向勝負してやる!!」

ミソラ「ま、また始まったわ…？」

レナモン「その上にあの場面で流儀を利用するとは…？成長したな、ナルガモン…？」

リュウギ「よし、早速その道場へ殴り込みだ!!」

ナルガモン「よっしゃ！！」

ミソラ「あのバカ…？」

ミソラは呆れて深くため息をつく。

キャンドモン「だったらミソラさん、こんな宇宙級のバカ共なんかほっといてボクチンと一緒にスレッド大陸一周の旅をしま…」

キャンドモンは勢いよくミソラに飛び付くと、ミソラは握り拳を作ってキャンドモンを思いきり殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん？」

ミソラ「近寄るな、このスケベロウソク…？」

レナモン「……？」

リュウギ達は当てにならない看板を頼りに、謎の専門学校へと向かった。

～最強道専門学校　入口付近～

リュウギ「ホ、ホントにあったぞ…？」

ミソラ「ウ、ウソ…？」

ナルガモン「なぁ、だから言っただろ？んじゃ、早速入ろうぜ！！」

ナルガモンは先陣きって巨大な門を強引に開ける。

キャンドモン「ちょっとちょっとナルガモン。門を開ける前にノックが先でしょうが？」

ミソラ「常識ないわねアンタ…。」

ナルガモン「チワーッス！！どなたかいませんかーー？」

ミソラ「あ、あのねぇ…？」

リュウギ「順序思いっきり間違えてるぞ…？」

門をくぐるリュウギ達。すると、専門学校から大量の影が現れる。

ミソラ「え！？なにか出てきたわよ！？」

大量のアグモ…ではなく、サイボーグを纏った大量のメカアグモンだった。

メカアグモン達「ダギャ、ダギャ、ダギャ…。」

リュウギ「ロ、ロボット！？」

ミソラ「しかもこんなにたくさん…？」

メカアグモン「ワレワレハ、センモンガッコウノモンヲマモルモンバンダギャ。【我々は、専門学校の門を守る門番だギャ。】」

ミソラ「門番って、アンタ達意味解ってんの…？私達、思いっきり門をくぐったわよ…？」

メカアグモン「シンニュウシャハッケン、シンニュウシャハッケン。コウゲキタイセイニハイル。【侵入者発見、侵入者発見。攻撃体勢に入る。】」

すると、メカアグモン達は一斉に口を開き、口からマシンガンが現れる。

リュウギ「マ、マシンガン!?」

キャンドモン「ギィヤャャャャャャャャャャ!?ボクチン蜂の巣にされるぅぅぅぅぅぅ!?」

リュウギ「どうやら、この学校の入門テストのようだな…。」

ナルガモン「おっしゃ!!やってやろうぜリュウギ!!」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れ、戦う体勢に入る。

ミソラ「ねぇレナモン、見学はないの…?」

レナモン「どうやらなさそうだ…。」

ミソラ「え、つまり私達も戦うって事…?」

レナモン「どうやらそのようだ…。」

ミソラ「ウソ〜〜?」

メカアグモン「コウゲキ、カイシダギャ！【攻撃、開始だギャ！】」

メカアグモン達は一斉にマシンガンを乱射する。

リュウギ「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！」

ナルガモン「『アートルムフレイム！！』」

レナモン「『狐葉楔！！』」

ミソラ「こうなったらヤケよ！！せいやぁぁぁぁ！！」

キャンドモン「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」↑逃げている

リュウギ達は目にも止まらない早さでメカアグモン達を次々と倒していく。

ナルガモン「『ヒドゥンブレイド！！』」

リュウギ「喰らえ！！」

リュウギはアルカナムのトリガーを引いて銃弾を放った。

メカアグモン「キカナイダギャ！【効かないだギャ！】」

リュウギ「そうか…。相手はサイボーグだから弾丸が効かないのか…。」

すると、ナルガモンは前回の時エグザがＥＸモード発動した事を思い出す。

ナルガモン「リュウギ、自分の力を解放するんだ!!自分にＥＸモードを発動するんだ!!」

リュウギ「なんだって!?」

レナモン「人間にＥＸモードが使えるというのか!?」

ナルガモン「オレは見たんだよ…。金髪の男、エグザが自分自身にＥＸモード発動させた事を!!リュウギ、お前ならできるハズだ!!」

すると、リュウギはゆっくりと頷き、アルカナムを地面に突き刺した。

リュウギ「ＥＸモード、発動!!」

リュウギは叫ぶと、身の回りに激しい突風が舞う。

ナルガモン「行け、リュウギ!!」

ミソラ「ウソ、できるの!?」

突風が去ると、リュウギではなくナルガモンの体から光のオーラが纏っていた。

リュウギ「あれ…?」

ナルガモン「ってあれ?おいリュウギ、何でオレに発動させたんだよ!?」

リュウギ「知らねぇよ！！大体、どうやってやるか分からねぇよ！？」

メカアグモン「ヤッチマエダギャ！！【やっちまえだギャ！！】」

すると、メカアグモン達は一斉にマシンガンを乱射する。

一同「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギ達は焦って弾丸を交わす。

ミソラ「ちょっと、ナルガモンッ？」

ナルガモン「まぁいいや…。とにかくＣＯＯＬに暴れまくるぜ！！」

ＥＸモード化したナルガモンは目にも止まらない早さでメカアグモン達を次々と薙ぎ倒していく。

そして…。

リュウギ「な、何とか倒したな…？」

ナルガモンはＥＸモードの効果が切れる。

ナルガモン「ナッハハハハ！！超ＣＯＯＬに決まったぜ☆」

リュウギ「何が『超ＣＯＯＬに決まったぜ☆』だよ！？こっちは真剣に焦ったんだぞ！？」

ナルガモン「いいじゃねぇかよ！こうしてポンコツ共を片づけたんだからよ！！結果オーライってヤツだ！！」

ナルガモンは人差し指を真上に突き立ててニヤリと笑う。

リュウギ「あ、あのなぁ…？」

＞ｉ２２２０５―１２９８＜

【絵：トリプルミーミング】

ミソラ「リュウギの言うとおりよッ？アンタのガセネタつかませたせいでこっちは死にかけたんだからッ？」

ナルガモン「ウソじゃないって！？マジでエグザって奴がＥＸモード発動したんだから！？」

ミソラ「だったら何でリュウギはＥＸモードにならなかったのよッ？」

ナルガモン「知らねぇよ！！むしろオレが知りてぇし！！」

リュウギ「……。」

（おかしい…。いつものナルガモンなら笑って誤魔化すのに…。ひょっとして本当なのか？でも、何で俺は発動できなかったんだ…？）

リュウギは腕を組んで考える。

キャンドモン「ま、取り敢えず第１関門は突破ですね♪楽勝楽勝♪」

リュウギ「おい、散々逃げてた奴に言う資格あると思ってるのか…

？」

ミソラ「ホントに…？」

レナモン「取り敢えず、中へ入ってみよう…。」

リュウギ（この学校の中に一体誰が…？）

リュウギ達は最強道専門学校へと入っていくのであった。

～最強道専門学校　上層部～

？？？「あ～あ…。なんか面白い事ねぇかなぁ～…。」

学校の上層部にて、黒い影が退屈そうに巨大な椅子に座っていた。

メカアグモン「センセイ、アヤシイシュウダンガワレワレノガッコウニシノビコンデキタダギャ！！【師匠、怪しい集団が我々の学校に忍び込んできただギャ！！】」

？？？「仲良く集団登校かぁ？だが、退屈しのぎにはなりそうだな…。クソッ、よりによってアイツは何処かへと消えちまうし、アイツの造った何処でも飛べるポンコツはすぐ壊れるし…。最近ついてねぇよなぁ～…。」

メカアグモン「ドウスルダギャカ？【どうするだギャか？】」

？？？「第２関門の用意しろ！！新入生の実力、拝見させて貰う…。」

（ニヤリ…）

||To Be Continued....

ＥＰ１３　～立ち上がれリュウギ！！目指せ最強道専門学校？～（後書き）

～おまけ～

ヒマだったのでイラスト描きました♪

＞ｉ２２２０９―１２９８＜

【絵：トリプルミーミング】

銀○のエンディング、『ＤＯＳＥ　修羅』のワンシーンから取り上げてアレンジしました。（本当は新八です…。）

思いっきりパクリですが、自分はＤＯＳＥの修羅が好きですので思わず描いちゃいました…（笑）

どうかイラストの感想をお願いします…。（自分的に苦労しましたし、かなりの力作なので…。）

以上！！

メカアグモンを操る謎の男…。

その正体はまさかのヤツが！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ１４　～最強の騎士　ナイトモン！！…かもしれない？～（前書き）

リュウギ達は最強になるため、上層部へと向かう！！

Ｅｐ１４スタート！！

ＥＰ１４　～最強の騎士　ナイトモン！！…かもしれない？～

～最強道専門学校　中層部～

リュウギ達は強くなるため、上層部へと向かっていた。

リュウギ「専門学校の割りには、全く人気がないなぁ…。」

ミソラ「確かにね…。入った時からずっと胡散臭そうなんだけど…？」

ミソラは怪しい目で周りを見渡す。

レナモン「因みに、ここは最近建てられたばかりらしい…。」

リュウギ「そんなに新しいのか！？」

キャンドモン「でもこの有り様じゃ、すぐに潰れちゃいそうですね♪」

キャンドモンは冗談気に笑う。

廊下を歩いていると、一枚の張り紙が壁に張ってあった。

ナルガモン「なんだぁ？」

張り紙『上層部はあちらです→』

リュウギ「って早ッ！？」

ミソラ「ますます胡散臭くなってきたわ…？」

ナルガモン「ま、取り合えず行ってみようぜ♪」

リュウギ達は奥に進むと、上層部へと続く階段を発見した。

リュウギ「ホントにあったぞ…？」

ミソラ「ウ、ウソ…？」

ナルガモン「この階段を上がれば、強くなれるんだな！意外と楽チンだなぁ？」

レナモン「しかし、油断大敵だ…。」

？？？「その通りだ！！」

その時、上層部の階段から誰かが降りてくる。

リュウギ「誰だ！？」

その姿は重量級のクロンデジゾイド製の甲冑に身を包んだ巨体な戦士型デジモンだった。

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ナイトモン、完全体、戦士型、データ種、必殺技はベルセルクソード。」

リュウギ「くっ、なんだか手強そうだな…。」

ナイトモン「いかにも、我輩はこの最強道専門学校の主、デジタルワールド史上最強と呼ばれる師匠の弟子だ!!」

ナルガモン「デジタルワールド史上最強の師匠…!?」

（ゴクリ…）

ナイトモン「……とか呼ばれないとか…。」

すると、リュウギ達はズッコケる。

リュウギ「な、なんだよそれ…？」

ナイトモン「上層部に行きたいのなら、この第2関門を突破するのだな!!」

ナルガモン「第2関門の相手か…。腕がなるぜ!!」

すると、ナイトモンは背中に背負う大剣、ベルセルクソードを振り回すと、とてつもない風圧が舞う。

レナモン「凄い…。なんて威圧なんだ…。」

ナイトモン「フフフ…。いかにも、このベルセルクソードは空間をも切り裂き、大地も真っ二つに一刀両断する!!」

リュウギ「そんなに凄い剣なのか…!?」

（ゴクリ…）

ナイトモン「……かもしれない…。」

リュウギ達はまたまたズッコケる。

ナルガモン「どっちなんだよ!?」

ミソラ「ちょ、調子が狂うわね…?」

キャンドモン「ハッキリしないデジモンですねぇ…?」

ミソラ「リュウギ、もしかして私達、最初から騙されてたんじゃないの…?」

リュウギ「探すことが困難って言われてもすぐに見つかったしな…?親切に行き方も書いてあったし…?」

ナルガモン「まぁいいじゃねぇかよ!さっさとコイツをブッ倒して上層部に行くぜ!!」

リュウギ「そうだな…。それに、ここまで来て背を向けるのは俺の流儀に反するからな!」

リュウギはそう言って握り拳を作って自らの手の平に打ち込む。

ミソラ「え、行くつもりなの!?このまま行ったら、嫌な予感しかしないわよ!?」

レナモン「ミソラ、リュウギに何度言っても無駄だと思うぞ…。」

ミソラ「た、確かにそうね…?それじゃ、私達は見学という事で…。

」

リュウギ「よし、早速第2関門始めようぜ！！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ナイトモン「いざ、参る！！」

ナイトモンはベルセルクソードでリュウギに斬りに掛かる。

リュウギ「くっ！！」

リュウギはアルカナムでベルセルクソードを受け止め、鍔競り合う。

リュウギ「くっ！！」

（なんて力だ…。）

ナルガモン「『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から強力な黒炎弾をナイトモンにぶつけた。しかし、ナイトモンには全く効いていなかった。

ナイトモン「その程度か…？フンッ！！」

ナイトモンは力で押し返すと、リュウギは飛ばされてしまう。

リュウギ「くっ！！これならどうだ！！」

リュウギはアルカナムのトリガーを引き、ナイトモンを狙い撃つ。

すると、ナイトモンは盾で銃弾を防いだ。

リュウギ「銃弾も効かないのか…。」

ナイトモン「いかにも、この盾は究極体の攻撃でも受け止める最強の盾！！」

ナルガモン「そうなのか…！？」

ナイトモン「……かもしれない…。」

リュウギ達はまたまたズッコケる。

リュウギ「結局どっちなんだよ…？」

ナルガモン「でもあの野郎、強いぞ…。」

ナイトモン「どうした？もはや打つ手なしか…？」

リュウギ「くっ…。」

（どうすれば…。）

すると、リュウギは何か言い事を思い付いた。

リュウギ「ナルガモン、進化だ！！」

ナルガモン「おう！！」

リュウギはＤ－アクセルでナルガモンに翳した。すると、ナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿を変える。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

キャンドモン「あひゃ～～、進化しても成熟期対完全体だよ～？無謀過ぎだろうがよ～？」

ミソラ「リュウギ、一体何を…？」

レナモン「あの眼、どうやら作戦があるみたいだな…。」

リュウギ「ソニックドラモン、俺の合図でアートルムバーストを放つんだ…。」

（ヒソヒソ…）

ソニックドラモン「ＯＫ！！」

ナイトモン「何をコソコソしている？この最強の矛と盾がある限り、我輩の体には傷１つ付かない！！」

レナモン「確かにそうだな…。」

ナイトモン「……かもしれない…。」

ミソラ「って、自信ないのね…？」

リュウギ「行くぞ！！」

リュウギはナイトモンに向かって全力で走りだし、高く飛び上がる。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

リュウギはナイトモンに向かって急降下し、アルカナムを振り下ろした。

ナイトモン「甘い！！」

ナイトモンはベルセルクソードを構えてアルカナムを受け止めた後、力で押し返した。

すると、リュウギはナイトモンの背後へと飛ばされてしまった。

リュウギ「今だ、ソニックドラモン！！」

ソニックドラモン「おう！！『アートルムバースト！！』」

ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、口から漆黒に包まれた灼熱の炎を吐いた。

ナイトモン「そんなもの、我輩には効かん！！」

ナイトモンは盾で灼熱の炎を受け止めた。

ナイトモン「どうした？これで御仕舞いなのか？」

リュウギ「モノクロモン！！」

すると、背後からモノクロモンがナイトモンに向かって突進した。

ナイトモン「ぐはっ！！」

突き飛ばされたナイトモンは何とか踏ん張る。

リュウギ「作戦通りだな…。」

ナイトモン「な、何だと…！？」

あの時、リュウギはナイトモンに飛ばされた後、素早く体勢を立て直し、デジサモンを発動してモノクロモンを召喚したのだ。ソニックドラモンの攻撃は、リュウギがデジサモン発動中、ナイトモンに注意を反らすための陽動作戦であった。

ナイトモン「くっ…！？そういう事だったのか…！？」

リュウギ「行くぞ、モノクロモン！！」

モノクロモン「任せて！！」

リュウギはモノクロモンの背中に乗ると、モノクロモンはもう一度突進攻撃をする。

ナイトモン「そうはさせん！！」

ソニックドラモン「それはこっちのセリフだぁぁぁぁぁぁ！！」

ソニックドラモンは口から吐く灼熱の炎を更にパワーを上げた。

ナイトモン「くっ！！」

（ダメだ！？強力すぎて切り替える事が…！？）

モノクロモン「喰らえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

モノクロモンは勢いよくナイトモンに突進した。

ナイトモン「ぐはっ！！」

ナイトモンはバランスを崩した。

ソニックドラモン「今だリュウギ！！」

ソニックドラモンは両肘の鋭いブレイドを構えると、ブレイドから漆黒の炎に包まれ、ナイトモンに急接近する。

同時にリュウギはアルカナムを構えてモノクロモンの背中から高く飛び上がりナイトモンに向かって急降下する。

ソニックドラモン「『ヒドゥンスラッシュ！！』」

リュウギ「これで決める！！」

ソニックドラモンとリュウギは同時にナイトモンを挟み撃ちにして切り刻んだ。

ナイトモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ナイトモンは力尽きて倒れた。

ミソラ「やったわ！！」

リュウギ「よしっ！！」

ソニックドラモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

ソニックドラモンは力を使い果たし、ナルガモンへと退化した。

ナイトモン「くっ…。不覚…。まさか、第２関門をクリアするとはな…。」

リュウギ「強くなるためだ…。俺はどんな相手でも最後まで諦めねぇ…。」

すると、リュウギはゆっくりと手を差し出した。

リュウギ「いい勝負だったぜ…。」

ナイトモン「うむ…。我輩も久しぶりに楽しませてもらった…。」

ナイトモンはリュウギの手をガッチリと握手をした。

ナイトモン「さて、我輩はこれからどうするか…。」

リュウギ「行くトコないのか…？」

ナイトモン「うむ…。最近、手応えのない相手ばかりでつまらなくてな…。」

リュウギ「だったら、俺と一緒に戦わないか？俺達はイビルスに支配されたデジタルワールドを救うためにやってきたエクセリオンなんだ。」

ナイトモン「それは誠か！？」

ナイトモンは腕を組んで考えると、決心した。

ナイトモン「御主、名は何と申す？」

リュウギ「リュウギ。御縞　リュウギだ。」

ナイトモン「リュウギ殿か…。我輩、只今からリュウギ殿の忠実なるしもべになる事を決めた…。」

リュウギ「分かった。」

リュウギはＤ－アクセルをナイトモンに翳した。

リュウギ「コントラクト、ナイトモン！」

すると、ナイトモンの身体から赤いオーラが纏う。

リュウギ「コントラクト完了！これからもよろしくな、ナイトモン。」

ナイトモン「うむ…。」

ナルガモン「さて、殴り込みと行こうぜ！！」

ナイトモン「気を付けるのだぞ…。師匠の強さは半端ではない…。」

キャンドモン「マジですか！？」

ナイトモン「……かもしれない…。」

リュウギ達はまたまたズッコケる。

ミソラ「だと思ったわ…？」

リュウギ「ナイトモン、師匠の弱点を知らないか？」

ナイトモン「残念だが、師匠の弱点はない…。」

リュウギ「そうか…。」

ナイトモン「……かもしれない…。」

リュウギ達はまたまたズッコケる。

リュウギ「どうなんだよ…？」

ナルガモン「取り合えず、上層部に行こうぜ！！」

リュウギ「そうだな…。」

リュウギ達は上層部へと繋がる階段を上っていった。

～最強道専門学校　上層部～

リュウギ達は上層部に辿り着くと、大広間へと広がっていた。

ミソラ「広いわね…。」

その時、大量のメカアグモンが現れてリュウギ達を囲んで逃げ場をなくした。

一同「!?」

リュウギ「罠か…?」

???「よく来たな、新入生の諸君…。」

メカアグモン達は道を開けると、黒い影が現れる。リュウギ達はとんでもない物を目にする。

リュウギ「に、人間!?」

???「ほぅ、誰かと思えば、まさかこんなガキだったとはな…。」

ナルガモン「テメェがデジタルワールド史上最強と呼ばれる師匠なのか!?」

???「正解だ…。俺の名は亥崎(いざき)　勝(しょう)だ!!」

ショウと名乗る男は背中に背負ってある大剣、デジブレイカーを取り出した。

リュウギ「くっ…、なんて威圧なんだ…!?」

ナルガモン「さすがデジタルワールド史上最強と呼ばれる師匠の事だけはあるな…。」

レナモン「弱点はない…。どう戦うつもりだ…？」

ショウ「さて…、まず誰からだ……おぉッ！？」

すると、ショウはミソラと目が合う。

ミソラ「え！？ちょっとなによ！？」

すると、ショウは電光石火のごとく、ミソラの手を握る。

一同「！？」

ショウ「可愛いね…。君、名前なんて言うんだい…？」

ミソラ（ウ、ウザッ…？）

ナルガモン「な…、なんて早さなんだ…！？」

リュウギ「驚くトコそこかよ！？」

すると、キャンドモンはリミッターが外れて暴走する。

キャンドモン「コルァァァァァァァッ？ちょいとアンタ？ミソラさんに馴れ馴れしくするのは、既に愛の契約済みしたこのキャンドモン様の専売特許なんだよッ？勝手にポジション横取りしてんじゃねぇぞテメェェェェェェッ？」

リュウギ「いや、そもそもお前契約してないだろ…？」

リュウギは小さくツッコム。

ショウ「ミソラちゃんって言うんだ…。ヨロシクね？」

ショウは爽やかな顔でニッコリと笑う。

ミソラ（その爽やかな顔でちゃん付け…。３バカトリオ並みにウザいわ…？）

リュウギ「弱点丸出しだな…？っておい、無視するなよ！」

ショウ「あん？俺は今忙しいんだよ…？ミソラちゃん、今度ご一緒にお茶でも…。」

リュウギ「おい、余りミソラに近づいたら…？」

すると、ミソラの怒りが爆発してショウを投げ飛ばした。

ミソラ「寄るなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ？」

ショウ「どわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

すると、投げ飛ばされたショウはバク転して華麗に着地した。

ショウ「おらよっと！冗談だ…、相手を油断させるために仕組んだ罠さ…。」

ショウはまさか投げ飛ばされるとは思わず、額から大量の冷や汗が出ていた。

ミソラ「何が罠よ、ウザッ…？」

リュウギ「とか言っておきながら今完全に油断してたよな…？冷や汗たらたらだぞ…？」

ナルガモン「変な奴だなぁ…。」

キャンドモン「ホントだぜッ？生意気なヤツが…？」

リュウギ「おい、お前らも言えないぞ…？」

ミソラ「ほら、やっぱり言ったじゃないの！！入る前から胡散臭そうだって！！そもそも、なんで専門学校なのよ！？」

ショウ「この学校は、さらなる向上心を磨きあげるためにあるのだ！！」

ナルガモン「その割りには、全く人がいねぇぞ？」

キャンドモン「これは完全に騙されちゃいましたね…。」

すると、ショウは隣にいるメカアグモンを殴り飛ばすと、メカアグモンは宇宙の果てまで飛んでいった。

一同「！？」

ショウ「信じる気になったかぁ…？」

すると、キャンドモンは暴走する。

キャンドモン「あひゃゃゃゃゃゃ！？なんだいこの馬鹿力は！？

私は、あなた様の忠実なるしもべでございます…。どうか家来を…。」

リュウギ「切り替え早いなオイ!?プライドってもんはねぇのかよ!?」

リュウギはありったけの声でツッコム。

リュウギ「でも、力は本物みたいだな…。さすが最強と呼ばれる事だけは……ん?」

すると、リュウギは壁に掛かってある掛け軸の文字を見て首を傾げる。

リュウギ「あれ、なんか漢字おかしくないか…?」

掛け軸には、『最脇道専門学校　脇役脱出!!』と書いてあった。

リュウギ「あのさぁ、この学校って最強になるために、さらなる向上心を磨きあげるんだよな…?」

ショウ「ちょいと違うな…。最脇、つまり脇役から脱出するため、さらなる向上心を磨きあげるのだ!!」

リュウギ「って全然違うじゃねぇかぁぁぁぁッ!?」

『最強道専門学校』→×

『最脇道専門学校』→○

ショウ「これが正解だ。ちゃんと理解したか？」

レナモン「なるほど…。道理で人が少ないわけだ…。納得できる…。」

ミソラ「私もー。」

リュウギ「ここまで来た俺達は一体…？」

ナルガモン「オレより目立とうとする奴は気に食わねぇが、脇役で目立とうとする奴は、流石に抵抗するぜ…？」

リュウギ「帰るぞ…。」

リュウギ達は呆れて帰ろうとする。

ショウ「って待たんかいいいいいいッ？」

一同「？」

ショウ「ここまで来たのに帰るのかよ！？どんだけ向上心ねぇんだよ！？」

リュウギ「いや、俺達は別に脇役でも何でもないから…。俺、主人公だから…。」

すると、ショウは眉をひそめる。

ショウ「なに…？お前、主人公なのか…？」

リュウギ「あ、あぁ…。」

ショウ「だったら帰らす訳にはいかねぇな…。俺は前作、あまり活躍できず、脇役ランキングトップになってしまった…。」

ミソラ「何か語り出したわよ…？ていうか何、脇役ランキングって…？」

ショウ「しかぁぁぁし！！ここで貴様を倒せば、俺は主役となり、脇役は永遠に葬り去られるのだ！！」

ミソラ「なに言ってるの、あのオッサン…？」

レナモン「と言うよりか、本編中に全く関係のない話をして大丈夫なのか…？」

ショウ「関係ないだと？こっちは大有りで超マジなんだよぉぉぉぉぉ！！」

すると、ショウの体から凄まじいオーラを放つ。

リュウギ「な、なんてオーラなんだ…！？」

ミソラ「脇役のオーラでしょ…？」

ショウ「来いよ…。今すぐ奪い取ってやるぜ…。」

（ニヤリ…）

ナルガモン「どうすんだよリュウギ…？」

リュウギ「相手はその気なんだ…。敵に背中を見せるのは俺の流儀に反する！正々堂々、真っ向勝負してやるさ！！」

リュウギはそう言って戦う体勢に入る。

ナルガモン「しょうがねぇなぁ…。」

ナルガモンは仕方なく戦う体勢に入る。

ショウ（あの眼、なんか見ているだけで腹が立つぜ…？さっさと片付けて主役の座を奪ってやる！！）

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ１４　～最強の騎士　ナイトモン！！…かもしれない？～（後書き）

なんと前作で微妙に活躍したショウが登場！！

ショウ「微妙とはどういう事だテメェ？」

次回、リュウギ＆ナルガモンＶＳショウ！！

果たして勝ち目はあるのか！？

ショウ「おい！無視してんじゃねぇぞコラァ！！」

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ１５　～大剣を操る男、再臨！！～（前書き）

前作から登場したショウと戦うリュウギとナルガモン！！

では、Ｅｐ１５スタート！！

ＥＰ１５　～大剣を操る男、再臨！！～

～最脇道専門学校　上層部～

リュウギ「行くぞ、ナルガモン！！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ナルガモン「おう！！」

リュウギとナルガモンは同時に動き出してショウに急接近する。

ショウ「来な！！」

ナルガモン「『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から強力な黒炎弾を吐き出す。

ショウ「フッ…。」

ショウは大剣、デジブレイカーで黒炎弾を真っ二つに切る。

リュウギ「こっちだ！！」

リュウギはアルカナムを振り下ろすと、ショウはデジブレイカーで受け止められてしまう。

リュウギ（今だ！！）

リュウギはアルカナムのトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発して爆煙が舞い上がる。

ショウ「うわっ！？」

ナルガモン「いいぞリュウギ！！」

リュウギ「やったか！？」

その時、爆煙の中から拳が現れてリュウギの腹を殴った。

リュウギ「ぐはっ！？」

ナルガモン「リュウギ！？」

リュウギは飛ばされて地面に激しく叩き付かれる。

ショウ「な～んてな…。これが不屈の精神だ…。」

リュウギ「効いてないだと…。」

リュウギはゆっくりと立ち上がり、アルカナムを構える。

ショウ「さて、反撃タイムと行こうか…。」

ショウはデジブレイカーを振り回して肩に担いだ。

レナモン「リュウギ、あの巨大な剣なら隙が生まれる！！反撃のチャンスを待つんだ！！」

リュウギ「そうか…。」
（あんなデカイ剣を振り回すのはかなりの力が必要だ…。レナモンの言う通り、様子を見て反撃のチャンスを待つ！）
ショウ「果たしてそうかな…？」
（ニヤリ…）
すると、ショウは目にも止まらぬ早さでリュウギに急接近する。
リュウギ・ナルガモン「早い！？」
ショウ「そらよっ！！」
ショウはデジブレイカーで薙ぎ払うように振った。
リュウギ「くっ！？」
リュウギはアルカナムで斬撃を防ぐ、しかし、力負けしてしまい飛ばされてしまう。
リュウギ「うわっ！？」
ナルガモン「この野郎、脇役だからってイイ気になってんじゃねぇ！！『ヒドゥンブレイド！！』」
ナルガモンは両肘のブレイドてショウに斬りに掛かる。
しかし、ショウは既に見切っており、デジブレイカーでブレイドを受け止めた。

ナルガモン「なに！？」

ショウ「誰が脇役だぁ！！」

ショウは握り拳を作り、ナルガモンを思いきり殴り飛ばした。

ナルガモン「ぐはっ！？」

ミソラ「リュウギ、ナルガモン！？」

キャンドモン「めっさ強ぇよあの御方！？アイツら手も足も出せねぇし！？」

レナモン「あのショウとやら、かなりの実力者だな…。」

ショウ「どうしたぁ？もう終わりかぁ？」

リュウギ「ク、クソ…。」

ナルガモン「まだまだ！！」

リュウギとナルガモンは立ち上がり、がむしゃらに攻撃する。

ナルガモン「オラァァァァァァ！！」

ナルガモンは両肘のブレイドで斬りに掛かる。

しかし、ショウはデジブレイカーで簡単にブレイドを受け止める。

ショウ「何度やっても無駄なんだよ！！」

リュウギ「だったらこれでどうだ！！」

リュウギはアルカナムのトリガーを引いて、デジブレイカーを狙い撃つ。

すると、デジブレイカーは弾かれて上空へと舞い上がり、地面に突き刺さる。

リュウギ「ナルガモン！！」

ナルガモン「おう！！」

リュウギとナルガモンは丸腰になったショウを挟み撃ち体勢に入った。

リュウギ・ナルガモン「喰らえぇぇぇぇぇぇ！！」

リュウギはアルカナムを、そしてナルガモンは両肘のブレイドでショウを挟み撃ちにした。

ショウ「フッ…。」

ショウは両手でアルカナムを白刃取りした。

リュウギ「なに！？」

次に、ショウは受け止めたアルカナムを地面に叩き付け、凄まじい蹴りをリュウギの横っ腹にかました。

リュウギ「ぐはっ！？」

ナルガモン「この野郎！！『ヒドゥンブレイド！！』」

背後から攻撃するナルガモン。しかし、ショウは既に見切っており、片手でブレイドを受け止める。

ナルガモン「なに！？」

ショウ「俺には通用しねぇんだよ…。」

ショウはそのまま地面に叩き付けた。

ナルガモン「ぐはっ！？」

ミソラ「リュウギ、ナルガモン！？」

ナルガモン「クソが…。なんて…強さなんだよ…。」

ショウ「冗談？俺はまだ本気の『ほ』の字も出しちゃいないぜ…。さて、潔く諦めて主役の座を渡すんだな…。」

リュウギ「待てよ…。なに勝った気になってんだよ…。勝負はまだまだこれからだぜ…。」

すると、リュウギは力を振り絞ってゆっくりと立ち上がる。

ナルガモン「その通りだ…。オレ達にはまだ奥の手があるんだよ…。」

次に、ナルガモンも力を振り絞ってゆっくりと立ち上がる。

ミソラ「リュウギ、ナルガモン…。」

ショウ「しつけぇなぁお前ら…。もうゲームセットなんだよ…。しかもコールドでな…。」

ショウは地面に突き刺さるデジブレイカーを抜き取って背中に背負い、背中を向けて歩き出す。

リュウギ「待てって言ってんだよ!!」

すると、ショウはピタリと足を止める。

ショウ「……。」

リュウギは地面に落ちているアルカナムを拾って構える。

ナルガモン「まだ終わってねぇって言ってんだよ!!」

リュウギとナルガモンの目付きはキリッと変わっていた。

ショウ「そもそも、俺に挑もうなんざ無謀にも程があるだろうが…。」

ナルガモン「無謀だぁ？無謀なんかに逃げていたら何も始まらねぇだろうが…。」

リュウギ「俺達はどんな事があっても絶対に諦めねぇ…。それが俺の流儀だ!!」

すると、リュウギのＤ－アクセルが反応する。画面には『ＥＸモード、発動可』と書いてあった。

リュウギ「ナルガモン、進化だ！！」

ナルガモン「おう！！」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。すると、ナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

ショウ「進化したか…。」

リュウギ「見せてやる…。これが俺達の流儀だ！！」

リュウギは左手を前に突き出して叫ぶ。

リュウギ「ＥＸモード、発動！！」

すると、ソニックドラモンの回りに激しい突風が舞う。

ショウ「！？」

（な、なんだ！？）

突風が去ると、ソニックドラモンの身体から光のオーラが纏う。

リュウギ「行くぞ、ソニックドラモン！！」

ソニックドラモン「あぁ…、ＣＯＯＬに反撃と行こうぜ！！」

ソニックドラモンは両肘のブレイドで目にも止まらぬ早さでショウに切りに掛かる。

ショウ（早い！？）

ショウはとっさの判断でデジブレイカーを取り出してブレイドを防ぐ。

ショウ（コイツ、さっきの奴なのか…！？なんてパワーなんだ…！？）

リュウギ「こっちだ！！」

リュウギはアルカナムを構えて踏み込み、切り上げるように振った。

ショウ「くっ！？」

ショウは素早くバク転して交わした。

ソニックドラモン「逃がすかよ！！『アートルムバースト！！』」

ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、口から漆黒に包まれた数十倍の灼熱の炎を吐いた。

ショウ「くっ！！」

宙に舞うショウはデジブレイカーを回転させて灼熱の炎を防ぐ。

リュウギ「喰らえ！！」

リュウギはアルカナムを横一閃に振った瞬間、トリガーを引くと、剣風によって生み出された衝撃波を放つ。

すると、デジブレイカーを弾き返して宙に舞い、やがて地面に突き刺さる。

ショウ「しまっ…！？」

リュウギ「行け、ソニックドラモン！！」

ソニックドラモン「トドメだ！！」

ソニックドラモンは両肘の鋭いブレイドを構えると、ブレイドから漆黒の炎に包む。そして、ショウに向かって高く飛び上がり、急接近した。

ソニックドラモン「喰らいやがれ！！『ヒドゥンスラッシュ！！』」

ショウ「ぐはっ！？」

（バカな…。この俺が、負けた…。）

ショウは力尽きて地面に落下した。

ソニックドラモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

ソニックドラモンは全ての力を使い果たし、ＥＸモードは解け、ナ

ルガモンへと退化した。

ミソラ「やったわ…。リュウギが勝ったわ！！」

ミソラは嬉しさの余りに隣にいるレナモンに抱き着いた。

キャンドモン「そしてボクチンも抱き着いてミソラさ～ん？」

キャンドモンはミソラに飛び付くと、ミソラはキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん！？」

ミソラ「寄るな、スケベロウソク…？」

レナモン「……？」

リュウギとナルガモンは疲れ果てて、バッタリと倒れた。

ナルガモン「見たか…。オレ達の流儀をよ…。」

リュウギ「やったな、ナルガモン…。」

リュウギは親指をピシッと立てると、ナルガモンも親指をピシッと立てた。

ミソラ「もう2人とも、無茶するんだから…。」

ミソラはリュウギとナルガモンを手当てしようとすると、リュウギはミソラに頼み事をする。

リュウギ「ミソラ、頼みがあるんだ…。」

ミソラ「なに？」

そして…。

ショウ「う、う～ん…。」

ショウはゆっくりと目を開けた。

マリンエンジェモン「あ！気がつきましたよ！」

ショウ「あれ？俺は一体…？」

ショウは起き上がり、周りを見渡すとリュウギ達がいた。

ショウ「まさかミソラちゃんが俺を手当てしてくれたのか！？ミソラちゃ～ん？」

ショウはミソラに飛び付くと、ミソラは思いきりショウを殴り飛ばした。

ミソラ「寄るなこのヘンタイッ？」

ショウ「がはっ！？」

ショウは再び瀕死状態に陥る。

一同「……？」

マリンエンジェモン「もう、せっかく手当てしたのに～？」

マリンエンジェモンは慌ててショウを手当てする。

ミソラ「リュウギ、なんでこんなヘンタイを助ける必要があるのよ…？」

リュウギ「無益の殺生は俺の流儀じゃねぇ。それに、倒れた奴を見捨てるのも俺の流儀に反する…。」

ショウ「ケッ、カッコつけやがって…。たまたま勝ったからってイイ気になるなよ…。」

キャンドモン「それ、敗者がよく言うセリフですよぉ～（笑）」

すると、ショウは鋭い目付きでキャンドモンに睨み付ける。

ショウ「テメェ、フルボッコリスト３２番目に登録しとくから、覚えてろよ…？」

キャンドモン「きぃぃぃぃぃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？」

キャンドモンは恐ろしさの余りに頭を抱えて絶望に陥る。

ナルガモン「ふ～ん。因みに、１番目は誰なんだよ？」

ショウ「何度ブッ飛ばしても、ブッ飛ばし足りない奴だよ…。」

ミソラ「どんな奴よ…？もしかして、アンタと同じ脇役じゃないわ

よね…？」

ショウ「違うよミソラちゃん？」

ミソラ「ちゃん付けしないでよッ？マジで腹立つから？」

ショウ「ソイツは、ガキの頃から奇跡的にずっと同じクラスだった…。毎日が嫌になるぜ…。」

リュウギ「それ、何となく分かる…？」

（ボソッ…）

リュウギはチラッとミソラを見る。

ミソラ「それ、どういう意味…？」

ミソラはギロリと睨むと、リュウギは目を反らす。

リュウギ「べ、別に何も…？」

ナルガモン「でさぁ、名前は何て言うんだよ？」

ショウ「ソイツの名は、小関（おぜき）　龍（りゅう）だ…。」

リュウギ「！？」

レナモン（何処かで聞いた事が…？）

ショウ「嫌になっちゃうぜ全くよぅ…。」

リュウギ「…さん。」

突然、リュウギは唇を震わせる。

ミソラ「どうしたのリュウギ？」

ナルガモン「腹でも壊したのかぁ？」

すると、リュウギは意外な事を口にする。

リュウギ「アンタ、父さんを知っているのか…？」

ショウ「あぁ、お前の父さんはホントに迷わ……って、はぁ！？」

一同「えぇぇぇぇぇぇ！？」

ミソラ「え、リュウって言う人、リュウギのお父さんなの！？」

リュウギ「あぁ…。御縞って言う名前は俺の両親の親友の名前。俺の本当の名前は小関　リュウギなんだ…。」

ミソラ「どうして今まで…。」

リュウギ「俺を捨てた母親が気に入らなかっただけさ…。だから名前を捨てた…。」

ショウ「マジかよ…。アイツの息子だったのかよ…！？じゃあ、母親の名前は何だよ！？」

すると、リュウギはうつ向く。

リュウギ「母さんの名前は小関（おぜき）　詩織（しおり）だ…。」

ショウ「ぬぅわにいいいいいいいいいいいいいいいいいい！？」

すると、ショウは絶望に陥ってしまい、ガックリと項垂れる。

ショウ「まさか…、まさかシオリちゃんがあんなヤツと結婚して産んじゃうなんて～（泣）」

ナルガモン「なに泣いてんだ、アイツ？」

ミソラ「分かってないわねアンタ。これは完全なる失恋よ。ま、この性格じゃ到底無理だろうけどね…。」

ショウ「なるほどな…。道理でお前の顔を見ただけで腹が立つと思ってたぜ…。グスン…。んで、あのボケリュウとシオリちゃんは今どうしてんだよ…？」

リュウギ「先程言った通り、母さんは俺を捨てて何処かへと消えた…。父さんは、殺された…。」

ショウ「！？」

ミソラ「ちょっとリュウギ、言っちゃっていいの…？」

リュウギ「事実を言ったまでだ…。」

すると、ショウは静かに笑う。

ショウ「んなもん、ただの偽りだな…。」

一同「!?」

リュウギ「なんだと…?」

すると、リュウギは怒り爆発してショウの胸ぐらを掴む。

リュウギ「母さんは帰ってくると言って結局帰ってこなかった!!何ヵ月、何年経っても帰ってこなかったんだ!!俺は信じていたのに、母さんは俺を捨てた!!それを偽りとでも言うのか!!」

ミソラ「リュウギ、落ち着いてよ…。」

レナモン（あんなリュウギ、初めて見た…。）

ショウ「そうカッカするなよ…。俺の話を聞け…。」

すると、リュウギは冷静になり、ショウの胸ぐらを放した。

ショウ「リュウとシオリちゃんは一緒に冒険してきた選ばれし子供だ…。俺が言うのもなんだが、シオリちゃんは絶対に家族を見捨てるような子じゃねぇ…。」

リュウギ「だったら、なんで何年経っても帰ってこなかったんだよ!?」

ショウ「何か深い訳があるんじゃないのか…?」

リュウギ「……。」

ショウ「それに、リュウが死ぬなんて疑わしいな…。」

ミソラ「どういう事よ？」

ショウ「アイツはそう簡単にやられるようなヤワな奴じゃねぇ…。なにせ、しぶとさが取り柄だからな…。よし、少し昔話をしてやる…。」

一同「？」

ショウはこれまでの事を全てリュウギ達に話した。

数年前、闇の支配者　カオスが現れ、デジタルワールドを闇に染めようと企んでいた。そこへ、頼まれたら何でもやるよろず屋、デジモン　ＪＥＴの活躍により何とかカオスの野望を打ち砕くことができた。

しかし、カオスはまだ生きており、カオスを倒すには伝説の武器を持つ継承者が必要だった。継承者の手によってカオスは完全に消滅した。しかし、リュウは過去にカオスの手によって失った仲間達の家族を取り戻すため、タイムマシンを使って過去の世界に向かい、カオスを倒した。

過去のカオスを倒した事によって仲間達の家族は無事となり、デジタルワールドは平和となった。しかし、それを代償に今までの記憶は全て眠りにつかなければならなかったのだ。リュウとその仲間達は再会を誓ってそれぞれのパートナーデジモンに別れを告げたのだ。

ショウ「と言うわけだ…。俺は眠っていた記憶を何とか叩き起こして、今こうしてここにいるってな訳だ…。」

リュウギ「父さんと母さんがそんな事を…。」

ミソラ「リュウギ、あなたの両親、ひょっとしたら…」

リュウギ「例え母さんはそうだとしても、父さんは殺された…。俺はこの目で見たんだ…。」

ナルガモン「リュウギ…。」

ショウ「ま、信じるか信じねぇかはお前の自由だ…。でもこれだけは言っておく。お前が生まれる前、リュウ達は必死でカオスと戦った。デジタルワールドを助けるためにな…。」

リュウギ「……。」

ミソラ「リュウギ…。」

リュウギ「もう過ぎた事だ…。俺は後ろなんて振り向かねぇ!!」

リュウギは気合いを入れて、拳で自らの手のひらに打ち込む。

ナルガモン「そうだ!それでこそリュウギだぜ!」

ショウ（その真っ直ぐな心。ホントにリュウそのものだな…。）

「んで、お前らは何をしにここに来たんだぁ?脇役になるためか?」

ミソラ「違うわよッ?」

リュウギ「俺達はコロシアムに出るため、修行しに来たんだ。」

ショウ「修行かぁ…。ま、今のままじゃお前は一回戦敗退だな…。」

リュウギ「そんなに手強い奴が出場するのか…。」

ナルガモン「腕がなるぜ!!」

ショウ「コロシアムは明後日開催する…。つうわけでこの2日間、お前らをみっちり鍛えてやるぜ…。」

ナルガモン「マジでか!?」

ショウ「その代わり、かなりキツいぜ…?逃げるなら今の内だぞ…。」

リュウギ「逃げる?敵に背中を見せるのは俺の流儀に反する!正々堂々、真っ向勝負してやるさ!!」

レナモン「私もやる…。私も強くなってみんなを守りたい…。」

ミソラ「レナモン…。」

キャンドモン「ボクチンは遠慮しときます…?」

ミソラ「弱虫…?」

ショウ（コイツらいい眼してやがる…。）

「んじゃ、コロシアムに向けて特別訓練だ!!ちゃんと着いて来るんだぞ!!」

一同「はい!!」

こうしてリュウギ達は、コロシアムに向けて厳しい修行が始まった。

――To Be Continued….

ＥＰ１５　～大剣を操る男、再臨！！～（後書き）

～キャラクター紹介　その４～

名前：亥崎（いざき）　勝（しょう）

性別：男

パートナーデジモン：アグモン博士（現在行方不明）

一人称：俺

趣味：彼女探し、空手

長所：大剣と格闘を軽々と使いこなす。脇役とは裏腹に、今作も再登場。

短所：前作とは相変わらずとんでもない女好き、主役の座を狙う、大の虫嫌い。

＞ｉ２２２６３―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

リュウギの両親はリュウとシオリ！？

しかし、原因不明の失踪と謎の男に殺された原因は謎に包まれたままである。

『第１章　～救世主　エクセリオン誕生篇～』は終了し、次回から

は新章『第2章　～激闘！！コロシアム篇～』をお送りします！！

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ１６　～マヤルコロシアム開催！！～（前書き）

コロシアムに出場するため、最脇道専門学校にて修行するリュウギ達。

では、Ｅｐ１６スタート！！

ＥＰ１６　～マヤルコロシアム開催！！～

リュウギ達はコロシアムに向けて、ショウの元で修行をする。

それから2日が経った…。

～最脇道専門学校～

ショウ「テメェらに教える事はもうねぇ…。」

ナルガモン「世話になったな！」

リュウギ「ありがとう、ショウさん…。」

ミソラ「私は清々したわ…ッ？」

ショウ「そんな事言わないでよミソラちゃ～ん？」

すると、ショウはミソラに飛び付こうとすると、ミソラは肘鉄を喰らわし、ショウの顔面はめり込む。

ミソラ「寄るな、オッサンッ？」

レナモン「……？」

キャンドモン「これだから大人ってヤツは…。」

（フッ…）

リュウギ「おい、お前も人の事言えねぇぞ…？」

リュウギは小さくツッコム。

ショウ「よくここまで耐えたな…。コロシアムに出たら思いっきり暴れろよな…。俺は応援してるからな…。」

（鼻血）

リュウギ「ショウさん、良いこと言ってるけど、鼻血思いっきり出てるぞ…？」

リュウギはツッコムと、ショウは鼻血を拭く。

ショウ「マヤルシティはここから北に向かえば着くハズだ…。せいぜい気をつけるんだな…。」

リュウギ「分かった。世話になったな…。」

ナルガモン「じゃあな！」

リュウギ達は、ショウと別れを告げ、北にあるマヤルシティへと向かった。

ショウ「コロシアムかぁ…。彼処は強者共が集まるっていう噂を耳にしたことがあるな…。」

メカアグモン「コレカラドウスルダギャカ？【これからどうするだギャか？】」

ショウ「一刻も早く、デバイス島に戻らなきゃな…。アイツも探さなきゃならねぇし…。ポンコツ共、船でもジェット機でもいいから

早く造りやがれ！」

メカアグモン達「ラジャー！！」

ショウはそう言って専門学校へと戻るのであった。

～スレッド大陸　東側～

一方、もう1人のエクセリオン、カイは…。

カイ「チッ、ここにもゴミ共がいたか…。」

イビルスに支配されたデジモンをカイはD－アクセルでデータを読み取る。

D－アクセル「アロモン、成熟期、アーマー体、データ種、必殺技はディノバースト。」

アロモン「グォォォォォォ！！」

すると、アロモンはカイに襲い掛かる。

ガオモン「カイ！！」

カイ「あぁ…。行くぞ！！」

カイは右手を広げると、巨大手裏剣、ギルガメッシュが現れる。

カイ「はぁぁぁぁぁぁ！！」

カイはギルガメッシュをアロモンに投げ付けた。しかし、強靭な脚力を持つアロモンは簡単に交わされた。

カイ「素早いな…。α！！」

ギルガメッシュを掴んだ後、巨大手裏剣から小型鎌へと変形した。

アロモン「グォォォォォォ！！」

アロモンは強靭な爪でカイを襲う。

カイ「くっ！！」

カイはギルガメッシュで攻撃を受け止めた。

ガオモン「『ガオラッシュ！！』」

ガオモンは素早く動いて高速連打パンチを放った。

アロモン「グォォォォォォ！？」

まともに直撃したアロモンは素早くその場から離れて体勢を立て直し、口から超高熱の熱風を吐き出す。

アロモン「『ディノバースト！！』」

カイとガオモンは素早く交わした。

すると、ガオモンは強靭な脚力を生かし、素早い動きでアロモンに急接近し、懐に転がり込んでアッパーを放った。

ガオモン「『ローリングアッパー！！』」

アロモン「ガハッ！？」

カイ「β！！」

カイはギルガメッシュを真上に放り投げると、小型鎌から分裂して2つの短剣へと変形した。

カイ「終わりだ…。」

カイは目にも止まらない早さでアロモンを切り刻んだ。

アロモン「グォォォォォォ！？」

アロモンは力尽きて倒れ、体内からイビルスが現れた。

カイ「逃がさん。γ！！」

カイは2つの短剣を合体して巨大手裏剣へと変わり、投げ付けてイビルスを切り刻んだ。

イビルス「ギィィィィィィィィィ！？」

イビルスは跡形もなく消滅した。

ガオモン「やりましたね…。」

カイ「あぁ…。だが、デジエクスフィールドは展開していない…。つまり、まだイビルスに支配されたデジモンがこの近くにいるハズだ…。」

カイはＤ－アクセルで致命傷を負うアロモンをリカバリーした。

アロモン「俺は一体…？」

カイ「イビルスに支配されていたんだ。」

アロモン「お前が助けてくれたのか？」

ガオモン「貴様、我が主に向かってお前呼ばわりするとは、少し言葉を慎んでもらおうか…。」

ガオモンは鋭い目でアロモンに威嚇をする。

カイ「そう怒るな、ガオモン。」

ガオモン「すいません…。どうか御許しを…。」

アロモン「助けてくれたんだ。せめてお礼をさせてくれないか…？」

カイ「ならばイビルス共をこのスレッド大陸から追い出すため、俺に協力して貰おうか？」

アロモン「協力しよう！！」

カイはＤ－アクセルをアロモンに翳した。

カイ「コントラクト、アロモン。」

すると、アロモンの身体から青いオーラが纏う。

カイ「コントラクト完了。よろしく頼むぞ、アロモン。」

アロモン「任せときな。」

アロモンはそう言って何処かへと去っていった。

カイ「この地にいる残りのイビルスを探すぞ、ガオモン。」

ガオモン「はい…。全ては我が主のために…。」

カイは歩き始めると、何か気配を感じたのか、ピタリと足を止める。

ガオモン「カイ?」

??「俺の気配を感じとるとは流石だ…。」

すると、カイとガオモンの前に左目に傷を持つ男、エグザが現れる。

ガオモン「お前はあの時の!?」

カイ「そう言えば、まだ名前を聞いていなかったな…。俺は渡里カイ…。アンタは…?」

エグザ「俺はエグザだ…。」

カイ「エグザ、アンタの言う通り、御縞　リュウギに会った。」

エグザ「そうか…。それで、どうだったんだ？」

カイ「俺の求めている物がすぐに見つかると聞いて戦ってみたんだが、とんだ期待外れだ…。」

すると、エグザは静かに笑う。

カイ「何がおかしい…？」

エグザ「何か勘違いしてねぇか…？お前の求めている物は強さじゃねぇんだよ…。」

カイ「なに？」

ガオモン「じゃあ、他に何があると言うのだ！？」

エグザ「それはお前らで見つけるんだな…。」

すると、エグザは懐から紙切れ取り出してをカイに投げ渡した。

カイ「なんだ、これは…？」

カイは紙切れを広げると、マヤルシティによって開催されるコロシアムだった。

カイ「コロシアム…？」

エグザ「スレッド大陸中にいる強者達がマヤルシティに集結し、スレッド大陸の頂点を決める大会だ。お前の求めている物がすぐに見

つかる…。ま、お前次第だけどな…。」

カイ「お前の目的はなんだ…？なぜ俺にコロシアムを出場させようとする…？」

エグザ「言ったハズだ…。そいつは言えねぇってな…。その大会にはきっと、御縞　リュウギが現れる。勿論、俺もな…。」

エグザは背を向けて歩き出す。

カイ「待てよ！！」

カイは呼び止めると、エグザは足を止める。

カイ「出てやろうじゃないか、そのコロシアム。」

エグザ「やけに今日は素直だな…？」

カイ「勘違いするな…。御縞　リュウギなんて最初から興味はない…。俺の目的は、エグザ、お前を倒す事だ！」

カイは右手を広げると、巨大手裏剣、ギルガメッシュが現れ、刃をエグザに向けた。

エグザ「俺を倒すか…。コイツは楽しめそうだな…。ま、せいぜいコロシアムで頑張るんだな…。」

エグザはそう言って何処かへと去っていった。

カイ「エグザ…。お前を倒し、最強のテイマーになってやる…。そ

うすれば、失った物を取り戻せるんだ…。」

カイは懐からペンダントを取り出してジッと見つめる。

カイ「待っててくれ、リエナ…。」

カイはそう言ってペンダントをギュッと握り締めた。

～マヤルシティ～

ナルガモン「マヤルシティに着いたぜ！ヒャッホウ！」

リュウギ達はついにマヤルシティへとたどり着いた。ナルガモンは嬉しさの余りに思いっきり飛び上がる。

リュウギ達は周りを見渡すと、強そうなデジモン達がいた。

ミソラ「マヤルシティって広いわね～！？」

レナモン「ここは、スレッド大陸中にいる強力なデジモン達が集まる…。」

リュウギ「腕がなるぜ！！修行の成果、見せてやろうぜナルガモン！」

ナルガモン「おうよ！！」

キャンドモン「戦闘オタクですねぇ～。サ○ヤ人ですかあなた達は？（笑）」

リュウギ「う、うるせぇ？」

ナルガモン「ところでレナモン、コロシアムって何処にあるんだ？」

レナモン「あれだ…。」

レナモンは指を差すと、巨大なドームが建てられていた。

リュウギ「デッケェな…！？」

ナルガモン「うぉほーー！！何だか燃えて来たぜ！！」

ナルガモンは段々とテンションが上がり、闘魂に激しい炎が燃え上がる。

その時、背後から誰かに押されたかのようにナルガモンは前にブッ倒れた。

ナルガモン「いでっ！？」

？？？「邪魔だ、チビ…。」

リュウギ「コイツは…！？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「グレイドモン、完全体、戦士型、ワクチン種、必殺技はクロスブレード。」

ミソラ「な、なんか強そう…？」

キャンドモン「強いってもんじゃないですよ？グレイドモンの剣技はロイヤルナイツの1人、ロードナイトモンをも凌ぐんですから？」

すると、ナルガモンは起き上がり、鋭い目でグレイドモンを睨む。

ナルガモン「テメェ、何しやがるんだッ？」

グレイドモン「邪魔だから邪魔と言ったのだ…。チビ…。」

ナルガモン「この野郎、オレよりデカイし目立ちやがってッ？」

リュウギ「って、怒るトコそこかよ！？」

グレイドモン「お前と遊んでるヒマはない…。早く大会のエントリーをしなくてはならないのだからな…。」

ナルガモン「マジかよ！？リュウギ、オレ達も早くエントリーするぞ！！」

グレイドモン「なに？お前も大会に出るのか…？」

ナルガモン「おうよ！！オレはこの大会を制するデジモンの中のデジモン、ナルガモンだ！！」

すると、グレイドモンは高らかに笑う。

グレイドモン「フハハハハハ！！」

ナルガモン「な、何が可笑しいんだよッ？」

グレイドモン「貴様のような弱者が大会を制する？片腹痛いわ…。」

ナルガモン「この野郎…？言わせておけば調子に乗りやがって…？」

すると、リュウギはグレイドモンの前に立つ。

リュウギ「笑うのは自由だ…。でも、俺達は本気だぞ…。」

グレイドモン「無駄だ…。この大会は強力なデジモン達が集う場所…。貴様らのような奴がエントリーした所で、恥をかくだけに過ぎん…。」

リュウギ「そんなのやってみなきゃ分からねぇだろうが…。」

すると、グレイドモンはフッと鼻で笑い、背中を向ける。

グレイドモン「フッ、精々生き残れるように頑張るんだな…。」

グレイドモンはそう言ってコロシアムへと向かった。

ナルガモン「あの野郎、ぜってぇにブッ飛ばしてやるッ？」

キャンドモン「でも、グレイドモンみたいな強力なデジモン達が大会に出ますからね…。リュウギさん、ここは一旦退いた方がいいのでは…？」

リュウギ「退く？俺は逃げようなんてこれっぽっちも思っちゃいないぜ…。」

キャンドモン「えぇ!?まさか、エントリーしちゃうのですか!?」

ナルガモン「たりめぇだろ?何のために修行して来たんだよ?」

リュウギ「それに、敵に背を向けるのは俺の流儀に反するからな!どんな相手だろうが正々堂々、真っ向勝負してやる!!」

キャンドモン「で、でもリュウギさん…?」

ミソラ「キャンドモン、何度言っても無駄よ。リュウギはそういう性格だから。」

キャンドモン「うそ~ん?」

レナモン「それより、早く大会のエントリーを…。」

リュウギ「そうだな…。締め切る前に早く行こうぜ!」

リュウギ達は大会のエントリーをしに、急いで受付へと向かった。

~マヤルコロシアム~

マヤルコロシアム本部。そこには大会の主催者、マルスモンがいた。

マルスモン「今回はたくさんのエントリーがいるな…。」

マルスモンは窓から外をエントリーするデジモン達を眺めていた。

するとそこへ、大会の関係者、エンジェモンがマルスモンに訊ねる。

エンジェモン「マルスモン様、あなたに御会いしたいという者がおりまして…。」

マルスモン「構わん。入れろ…。」

エンジェモン「はっ…。入れ…。」

すると、エグザが本部に入ってくる。

マルスモン「人間？」

エグザ「ただの人間ではない…。」

エグザは黒いＤ－アクセルをマルスモンに見せた。

マルスモン「エクセリオンか…。それで、そのエクセリオンが俺に何の用だ…？」

エグザ「マルスモン。お前の力が必要だ。俺に力を貸してくれないか…？」

マルスモン「なに？なぜだ？」

エグザ「お前も知っての通り、スレッド大陸はイビルスがウヨウヨいる…。そいつらを操るダークスを倒すためだ…。」

マルスモン「人間に何ができるというのだ？」

エグザ「言ったハズだ…。俺はただの人間ではないと…。」

その時、エグザは背中に背負う大剣を取り出してマルスモンに斬りに掛かる。

エンジェモン「マルスモン様！？」

すると、エグザは斬る直前にピタッと大剣を止めた。

マルスモンは避ける素振りを見せなかった。

エグザ「なぜ避けなかった？」

マルスモン「殺気を感じなかったからだ…。」

エグザ「流石だ…。ますます仲間にしたい…。」

エグザはフッと笑い、大剣を背中に背負う。

マルスモン「しかし、この大会で人間が出る事は禁止されている。御存じないか…？」

エグザ「そいつは残念だ…。俺の他に、２人のエクセリオンがこの大会にエントリーしようとしているのにな…。」

マルスモン「なに？貴様の他にエクセリオンが…？」

エグザ「必ずアンタを楽しませてくれる…。保障はする…。」

すると、マルスモンは高らかに笑う。

マルスモン「フハハハハハ！！いいだろう…。貴様に力を貸してや

ろう。ただし、条件がある…。」

エグザ「条件だと…？」

～コロシアム　受付～

リュウギ「えぇ！？何でだよ！？」

リュウギは驚く。それは、この大会で人間が出る事は禁止されているからだ。

プッチーモン「はい。これはコロシアムのルールですから。」

リュウギ「マジかよ…。」

リュウギはショックを受ける。

ミソラ「仕方ないわよ…。この大会のルールなんだから…。」

ナルガモン「心配すんなよリュウギ！お前の代わりに、あの野郎をブッ飛ばしてやるからよ！！」

リュウギ「ナルガモン…。」

プッチーモン「では、そちらのデジモン達が大会に出場するのですね？」

ナルガモン「おうよ！！」

レナモン「あぁ…。」

キャンドモン「いえいえ、ボクチンはリュウギさんとミソラさんと御一緒に見学ですぅ～。ボクチンはか弱いデジモンなので～。」

リュウギ「何がか弱いデジモンだッ！お前も戦えよッ！」

キャンドモン「無理無理無理！！あんなヤベェ奴らと相手するなら死んだ方がマシだっつうの！！あ、でも死ぬならミソラさんの膝元で死にた～い！！」

キャンドモンそう言ってミソラに飛び付いた。すると、ミソラは握り拳を作り、思いきりキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん？」

ミソラ「ウザいから寄るなッ？」

プッチーモン「ですが、今大会は3体1チームというルールなので…。」

キャンドモン「え！？って事はボクチンも参加…！？」

リュウギ「そういう事になるな…。」

ミソラ「ま、日頃の行いが悪いって事ね…。」

キャンドモン「うそ～～～ん！？」

キャンドモンはガックリと項垂れる。

プッチーモン「では、ナルガモンとレナモンとキャンドモン。エントリーしま…」

すると、大会関係者のデジモンがプッチーモンに何か伝える。

プッチーモン「え？マルスモン様が？」

リュウギ「どうしたんだ？」

プッチーモン「急遽大会ルールの変更です！人間も参加可能となりました！」

リュウギ「マジかよ！？」

ナルガモン「やったじゃねぇかよリュウギ♪」

キャンドモン「良かった…。」

（ホッ…）

キャンドモンは安心してホッとする。

リュウギ「よし、キャンドモンに代わって俺が出る！」

プッチーモン「分かりました。では、リュウギさん、ナルガモン、レナモン。エントリーしました。チーム名はどうしましょうか？」

ナルガモン「名前なら決まってるぜ！！『ブレイブエクセリオン（命名オレ）』だ！！」

ミソラ「ちょっと、いつの間に決めていたのよ！？」

リュウギ「ブレイブエクセリオン（勇敢なる救世主）か…。悪くないな…。」

ミソラ「アンタ、意外とネーミングセンスあるのね…？」

ナルガモン「だろ？なんたってオレはこの大会を制する最強のデジモンだからな♪ナッハハハハ♪」

ナルガモンはそう言って人差し指を真上に突き立てながら高らかに笑う。

ミソラ「あっそ…。」

プッチーモン「では、関係者の方が案内しますので、どうぞこちらへ！」

ミソラ「頑張ってね、みんな！！」

リュウギ「あぁ！」

ナルガモン「オレの活躍に注目しとけよ♪」

レナモン「行ってくる…。」

リュウギ達はエントリーが決まり、コロシアムの控え室へと向かった。

そして…。

コロシアムの審判を務めるサイボーグ型デジモン、リンクモンがマイクを持って喋る。

リンクモン「皆さん、大変長らくお待たせしました！！只今より、マヤルコロシアムを開催します！！」

デジモン達「ワァァァァァァ！！」

すると、観客席からデジモン達の歓声が沸き上がる。

こうして、スレッド大陸の頂点を争うマヤルコロシアムは開催された。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ１６　～マヤルコロシアム開催！！～（後書き）

ついにコロシアム開催！！

ブレイブエクセリオンの初戦の相手は一体？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ１７　～完全無敵チーム！？１回戦ｖｓ無敵軍団！！～（前書き）

ついにコロシアム開始！！

無敵軍団相手にどう立ち向かうのか！？

Ｅｐ１７スタート！！

ＥＰ１７　～完全無敵チーム！？１回戦ｖｓ無敵軍団！！～

～マヤルコロシアム～

リンクモン「ではまず始めに、１回戦を開始したいと思います！」

デジモン達「ワァァァァァァ！！」

デジモン達の開催の中、ミソラは驚く。

ミソラ「スゴい歓声ね…？」

キャンドモン「まぁスレッド大陸中のデジモン達が集まってますからね～。」

？？？「あれ？お前も来ていたのか？」

ミソラは隣を見ると、ミハノ村の村長、タスクモンだった。

ミソラ「タスクモン！？久しぶりね！また足の裏に画鋲刺さってないわよね…？」

タスクモン「ハッハッハ！そんな訳ないだろうが♪ところで、リュウギは何処だ？」

ミソラ「リュウギ達なら大会に出てるのよ！それで私は観戦！」

キャンドモン「私！？私達じゃないのミソラさん？」

キャンドモンは抱き着こうとすると、ミソラは押し退ける。

ミソラ「ウザいから寄るな…？」

タスクモン「変わったヤツだな…？」

ミソラ「ところでタスクモン、大会に出ないの？」

タスクモン「無理に決まってるだろ！オレなんかが出たら片手で一捻りされるのがオチさ…。」

ミソラ「そうなの…？」

タスクモン「ま、オレも観戦ってな訳だ！ヨロシクな♪」

そうしている間に1回戦は始まっており、デジモン達の凄まじい戦いを繰り広げる。

ミソラ「凄い迫力ね…。」

タスクモン「この大会に出場している奴等はみんな強者ばかりだ…。リュウギ達は大丈夫なのか？」

ミソラ「大丈夫よ！…たぶん？」

タスクモン「自信ないんだ…？」

リンクモン「続いて1回戦！！なんと人間が出場しています！！ブレイブエクセリオンの登場です！！」

すると、リュウギ達がバトルフィールドに上がってくる。

ミソラ「リュウギだわ！」

キャンドモン「頑張れレナモ～ン？Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ、ＬＯＶＥ…」

すると、ミソラはキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん？」

ミソラ「恥ずかしいから黙ってて…？」

～バトルフィールド～

ナルガモン「ミソラ達あんな所にいるぞ！お～い♪」

ナルガモンはミソラに手を振る。

リュウギ「レナモン、キャンドモンのヤツ、お前に何か言おうとしていなかったか？」

レナモン「知ってる…。だが聞いてなかった事にしておく…？」

リンクモン「ルールは知っての通り、１対１でバトルをし、先に３勝した方のチームが勝利となります！！どんな手を使ってもＯＫです！！」

リュウギ「堅苦しいルールが来るのかと思えば、何でもありなのかよ…？」

ナルガモン「上等だぜ！んで、オレ達の相手は誰なんだ？」

リンクモン「ブレイブエクセリオンと対戦するチームは、完全無敵チームの無敵軍団です！！」

リュウギ「完全無敵チームだと！？」

すると、無敵軍団が入場してバトルフィールドに上がり込む。

リュウギはＤ－アクセルで無敵軍団のデジモン達のデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ポンチョモン、成熟期、アーマー体、ウィルス種、必殺技はテキーラナックル。

ディノヒューモン、成熟期、竜人型、データ種、必殺技はリザードダンス。

ゴリモン、成熟期、獣人型、データ種、必殺技はパワーアタック。」

レナモン「コイツらが無敵軍団…。」

ディノヒューモン「いかにも！！我々は完全無敵チーム、無敵軍団だ！！」

ナルガモン「腕がなるぜ…。よし、まずオレから行かせて貰うぜ！！」

ナルガモンはそう言ってバトルフィールドに立つ。

ポンチョモン「ならばオラから行くぜ♪」

対する無敵軍団は、ポンチョモンがバトルフィールドに立つ。

リンクモン「では、１戦目！ナルガモンｖｓポンチョモン！！」

リュウギ「ナルガモン、頑張れよ！！」

ナルガモン「おう任せときな！！」

リンクモン「それじゃ行くぜ！！レディーファイト！！」

（カーン！！）

ゴングが鳴ると、ナルガモンは素早い動きで先制攻撃を仕掛ける。

ポンチョモン「早い！？」

ナルガモン「喰らいやがれ！！『ヒドゥンブレイド！！』」

ナルガモンは両肘のブレイドでポンチョモンを切り刻む。

ポンチョモン「ぐえ！？」

ポンチョモンは地面に激しく叩き付かれる。

リュウギ「いいぞ、ナルガモン！！」

ナルガモン「おらおらどうしたぁ？まだ本気の『ほ』の字も出しちゃいないぜ♪」

（カンカンカーン！！）

すると、ゴングが鳴り響く。

ナルガモン「え…？」

リンクモン「ポンチョモン、ダウン！！よって1戦目はナルガモンの勝利！！」

リュウギ・ナルガモン「早ッ！？」

ミソラ・キャンドモン「っていうか弱ッ！？」

ポンチョモン「無敵であるオラを倒すとは、流石だな…。」

（ガクリ…）

ポンチョモンはそう言って気絶した。

ディノヒューモン・ゴリモン「ポンチョモン！？」

ナルガモン「なぁリュウギ、コイツらホントに無敵なのか…？」

リュウギ「ハッタリかもしれないな…？」

レナモン「しかし、まだ油断できない…。次は私が行こう…。」

レナモンはそう言ってバトルフィールドに上がる。

リンクモン「続いて2戦目、ブレイブエクセリオンはレナモンです

！！」

ゴリモン「この野郎…。ポンチョモンの仇とってやるだッ？」

ゴリモンはそう言ってバトルフィールドに上がる。

リンクモン「対する無敵軍団はゴリモンです！！では、レディーファイト！！」

（カーン！！）

ゴリモン「『パワーアタック！！』」

ゴリモンは右手と一体化したキャノン砲で砲撃する。

すると、レナモンは素早く交わし、ゴリモンの懐に入り、目にも止まらない早さでパンチを繰り出した。

ゴリモン「ゴホッ！？」

最後に、レナモンはゴリモンの胸部付近を蹴って後方に宙返りした。

ゴリモン「ぐおおおおおおおおお！？」

ゴリモンは勢いよく地面に激しく叩き付かれ、やがて気絶した。

（カンカンカーン！！）

リンクモン「ゴリモン、ダウン！！よって2戦目はレナモンの勝利！！」

ミソラ「よくやったわレナモン！！」

タスクモン「無敵軍団をこうもあっさりと…。リュウギ達、成長したな…。」

リュウギ「やったなレナモン！」

レナモン「あぁ…。」

（さっきのポンチョモンといい、ゴリモンも動きが鈍かった…。一体どういう事だ…？）

レナモンはそう言って、バトルフィールドから下りてくる。

リュウギ「よし、最後は俺だな…。」

リュウギはそう言ってバトルフィールドに上がった。

リンクモン「ついに3戦目！！ブレイブエクセリオンはリュウギが登場です！！対する無敵軍団はディノヒューモンです！！」

ディノヒューモン「……。」

ディノヒューモンは黙ったままバトルフィールドに上がってくる。

リュウギ「よし、早く始めようぜ！！」

リンクモン「ブレイブエクセリオン、リュウギは準備万全ですけど、そちらはいいですか、ディノヒューモン？」

ディノヒューモン「待て…。」

ディノヒューモンは手を広げて止めた。すると、観客席はざわめく。

リュウギ「どうしたんだよ…？」

ディノヒューモン「まさかここまで来るとは思わなかった…。ここまで来る以上、奥の手を使うしかない！！」

ナルガモン「奥の手だと！？」

ミソラ「なんだか胡散臭そう…？」

リュウギ「いいぜ…。奥の手が来ようと知ったこっちゃねぇ…。全力で掛かってこい！！」

ディノヒューモン「では…。」

その時、ディノヒューモンは突然土下座をした。

リュウギ「え…？おい、何してるんだよ…？」

ディノヒューモン「参った！！降伏します！！」

すると、観客達はズッコケた。

リュウギ「冗談じゃねぇ！まだ戦ってねぇのに降参なんて！？そもそも、お前ら無敵軍団じゃなかったのかよ！？」

ディノヒューモン「確かに我々は正真正銘、無敵軍団だ。しかしな

ぜこれほど弱いか分かるか？」

リュウギ「何でなんだよ…？」

ディノヒューモン「我々無敵軍団は、今日がデビュー戦だからだ！！」

（シ～～～～～～ン…）

リュウギ「はぁ…？」

レナモン「なるほど…。今まで戦った事がないから無敵と言うのか…。」

ナルガモン「な、なんだそりゃ…？」

ディノヒューモン「我々はこのデビュー戦を、そして君達の事は一生忘れない！！」

リュウギ「いや、忘れてくれ…？恥ずかしいから…？」

ディノヒューモン「と言うわけでリンクモン、我々はこれで失礼する！さらば！！」

ディノヒューモンはそう言ってポンチョモンとゴリモンを連れて去っていった。

リンクモン「えーと…？無敵軍団は降参したという事で、ブレイブエクセリオンは2回戦に進出しました…？おめでと～う…？」

リュウギ「何なんだアイツらは…？」

ナルガモン「まぁいいじゃねぇかよ♪2回戦進出だぜ♪」

レナモン「これ、喜ぶべきなのか…？」

リュウギとレナモンは深いため息をつく。その裏腹に、ナルガモンは高らかに笑う。

ミソラ「だと思ったわ…？」

ミソラは深くため息をつく。

キャンドモン「ボクチン1人でも倒せましたよ♪」

ミソラ「よく言うわ…。散々嫌がってたクセに…？」

タスクモン「運良く2回戦に進出したみたいなもんだな…？」

リンクモン「では、ブレイブエクセリオンは控え室で休んでてください！1回戦が終わり次第、お知らせするので…。」

リュウギ「あぁ、分かった。」

リュウギ達はコロシアムの控え室へと向かった。

リンクモン「では次の1回戦を開始します。これもまた人間が出場しています！！サイレントナイツの登場です！！」

すると、カイとガオモンがバトルフィールドに上がってくる。

キャンドモン「ミソラさん、アレ！？」

ミソラ「人間だわ！？」

リンクモン「サイレントナイツと対戦するチームは、悪魔と呼ばれしチーム、ブラッディデビルの登場です！！」

すると、ブラッディデビルが入場してバトルフィールドに上がり込む。

カイはＤ－アクセルでチームブラッディデビルのデジモン達のデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「デビモン、成熟期、堕天使型、ウィルス種、必殺技はデスクロウ。

デビドラモン、成熟期、邪竜型、ウィルス種、必殺技はクリムゾンネイル。

アイスデビモン、成熟期、堕天使型、ウィルス種、必殺技はフロストクロー。」

ミソラ「強力なデジモンばかりだわ…！？」

キャンドモン「それより、なんであの人間とあの犬のようなデジモンしかいないの？３体が出場条件じゃないの？」

タスクモン「３人以下でもいいと急遽ルール変更したらしいぜ。３

勝先取、または相手を全滅させるのどちらかが満たしていたら勝利だとよ…。」

キャンドモン「何その急なルール変更!?危うくボクチンが出場して半殺しにされてた所だったんだＹＯ!?」

ミソラ「やっぱりビビってるじゃないの…?」

リンクモン「では、両者バトルフィールドへ…。」

ガオモン「カイ、ここは私が…。」

カイ「いや、俺が行く…。」

すると、カイはバトルフィールドに上がる。

リンクモン「ではブラッディデビル、バトルフィー…」

カイ「待て…。」

すると、カイはリンクモンを呼び止める。

カイ「この大会は何でもありだよな…?」

リンクモン「そうですが…。」

カイ「ならば、１体だけじゃ時間の無駄だ…。３体纏めて掛かってこい…。」

ブラッディデビル「なんだとッ?」

すると、ブラッディデビルのデジモン達は一斉にバトルフィールドに上がる。

デビモン「小僧、いい度胸しているな…？」

アイスデビモン「一生後悔する事になるぜ？」

カイ「生憎、お前らと遊んでる暇はないのでね…。」

デビドラモン「殺す…？」

リンクモン「前代未聞の3対1のバトル、レディーファイト！！」

（カーン！！）

ブラッディデビル「死にさらせ！！」

ブラッディデビルはいきなりカイに襲い掛かる。

カイ「フッ…。」

カイは右手を出すと、巨大手裏剣、ギルガメッシュが現れた。

ミソラ「あれは、リュウギと同じ武器！？」

キャンドモン「てことは、アイツもエクセリオン！？」

カイはギルガメッシュで全ての攻撃を受け止めた。

ブラッディデビル「！？」

カイ「どうした…？そんなものか…？α！！」

すると、ギルガメッシュは巨大手裏剣からは小型鎌へと変形し、デビモン達を薙ぎ払った。

デビモン「くっ！？」

アイスデビモン「なんてガキだ！？」

カイ「ガキだと思って甘く見たら、死ぬぞ…？」

デビドラモン「ぐおぉぉぉぉぉぉ！！」

デビドラモンの怒りが爆発し、巨大な爪でカイに切りに掛かる。

カイ「焦るなよ…。」

カイはギルガメッシュで巨大な爪を受け止めた。

デビドラモン「！？」

カイ「まずはお前からだ…。」

カイはギルガメッシュでデビドラモンを切り刻んだ。

デビドラモン「ぐおぉぉぉぉぉぉ！？」

デビドラモンは力尽きて倒れた。

デビモン「一気に攻めるぞ『デスクロウ！！』」

アイスデビモン「『フロストクロー！！』」

デビモンとアイスデビモンはそれぞれの必殺技を放った。

カイ「β！！」

カイはギルガメッシュを真上に放り投げると、小型鎌から分裂し、2つの短剣へと変形した。

カイは2つの短剣を掴み取り、目にも止まらない早さでデビモンとアイスデビモンを切り刻んだ。

デビモン・アイスデビモン「ぎゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ！？」

デビモンとアイスデビモンは力尽きて倒れた。

（カンカンカ～ン！！）

リンクモン「ブラッディデビル、ダウン！！よってサイレントナイツ、2回戦に進出！！」

デジモン達「ワァァァァァァァァ！！」

すると、観客席から歓声が沸き上がる。

キャンドモン「なんだアイツ！？3人相手に1人で楽勝に料理しちゃったＹＯ！？」

ミソラ「もしかして、アイツがリュウギを倒した渡里　カイ…？」

タスクモン「大したヤツだなぁ…。アイツもお前らの仲間なのか？」

ミソラ「仲間…、と言ってもいいのかしら…？」

キャンドモン「冗談はストップだよミソラさん？あんな戦闘オタクのようなヤツを仲間だなんて？ボクチン考えただけでもゾッとしちゃいますよ？」

ミソラ「そうよねぇ…。それにリュウギを襲ったのもアイツだし…。」

キャンドモン「マジッスか！？もしかしたらボクチンもそのうち背後から…グサリ。きぃぃぃぃゃゃゃゃゃ！？」

すると、キャンドモンは恐怖の余りに暴走し始めた。

ミソラ「うるさいッ？」

ミソラは握り拳を作ってキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ぶべらっ！？」

ミソラ「周りのデジモン達が迷惑してるのよ…？大人しくしてなさい…？」

キャンドモン「は、はい…（死）」

タスクモン「ミソラ、大変だなぁ…？」

一方、カイはフンと鼻を鳴らし、バトルフィールドから降りる。

ガオモン「やりましたね…。」

カイ「何が強者が集結するコロシアムだ…。くだらん…。行くぞガオモン…。」

ガオモン「はい。全ては我が主のために…。」

カイとガオモンは、コロシアム控え室へと向かった。

～コロシアム　控え室～

一方、リュウギ達は…。

ナルガモン「いやぁ～、超楽勝だったぜ♪このままいけば、スレッド大陸の頂点なんざ楽勝かもな♪」

レナモン「しかし、まだ油断できない…。」

リュウギ「そうだな…。出場者はザッと１２８チームいる…。」

ナルガモン「残りの奴らがさっきみたいなハッタリチームだったりしてな…♪」

？？？「運良く勝ったチームの分際でありながら、随分と嘗められたもんだな…？」

すると、カイとガオモンが控え室に入ってくる。

リュウギ「カイ！？」

ナルガモン「なんだとコラァ？」

すると、レナモンはカイの左手首にはめてある青いＤ－アクセルが目に映った。

レナモン「Ｄ－アクセル！？ということは、エクセリオンなのか…？」

ナルガモン「リュウギ、まさかこんな奴にやられたのかぁ？」

すると、ガオモンは威嚇をする。

ガオモン「おいお前、我が主に向かってコイツとは口を慎め…。」

ナルガモン「なんでテメェの指図に従わなきゃなんねぇんだよ？この犬がッ？」

ガオモン「俺は犬じゃないッ？」

ナルガモン「どっからどうみても犬だろうがッ？」

ガオモン「うるさいッ？」

ナルガモンとガオモンはお互いに睨み合い、激しく火花が散る。

カイ「ガオモン、こんな口先だけのヤツらなんかに相手するな…。」

リュウギ「!?」

ガオモン「はい…。すいません…。」

カイ「行くぞ…。」

カイは歩き出すと、リュウギは呼び止める。

リュウギ「待てよカイ…。」

すると、カイはピタリと足を止めた。

リュウギ「これだけは言っておく…。俺はこの間の俺とは違う…。だから次こそは絶対に負けねぇ!!」

リュウギはそういって握り拳を作って自らの手のひらに打ち込んだ。

カイ「最初からお前などに興味はない…。俺がこのコロシアムに出た理由は、エグザを倒す事だ…。」

ナルガモン「なに!?」

リュウギ「エグザがこの大会に!?」

カイ「これだけは覚えておけ…。エグザを倒すのはこの俺だ…。それを邪魔をする奴は、同じエクセリオンであろうが潰す…。」

リュウギ「……。」

カイ「行くぞ、ガオモン。」

ガオモン「はい…。全ては我が主のために…。」

カイとガオモンはそのまま控え室から出ていった。

ナルガモン「まさか、エグザがこのコロシアムに出てたなんて…。」

リュウギ「最初から俺達の事は眼中にないって事か…。クソッ！！」

すると、リュウギは自らの拳で壁を殴った。

レナモン「リュウギ…。」

ナルガモン「リュウギ、お前らしくないぞ！！あんな奴がどう思っていようが勝手じゃねぇかよ！！お前はお前らしく、自分の流儀で貫き通せよ！！」

リュウギ「ナルガモン…。」

すると、リュウギは冷静になる。

リュウギ「そうだったな…。ありがとう、ナルガモン。」

ナルガモン「へへッ、どうって事ねぇぜ♪」

その時、場内アナウンスが放送される。

アナウンス「それでは最後の1回戦を始めます！！なんとチームはたった1人！？エグザウィンコルムの登場です！！」

ナルガモン「おい、聞いたかリュウギ！？」

リュウギ「あぁ。もしかしたらエグザかもしれない！観に行くぞ！！」

～バトルフィールド～

デジモン達「ワァァァァァァァァ！！」

歓声が沸き上がる中、リュウギ達が観客席に出てきた。

ナルガモン「なんだなんだ！？」

リンクモン「試合終了！！勝者、エグザウィンコルム！！よってエグザウィンコルムは２回戦進出！！」

デジモン達「ワァァァァァァァァ！！」

試合は既に終わっていたのだ。すると、リュウギは観客席にいるデジモンに聞く。

リュウギ「おい、一体何が合ったんだ！？」

ガジモン「あのエグザとか言う人間が、開始から１分も経たない内に相手を全滅にしちまったんだよ！！それも、３対１でな！！」

リュウギ「何だって！？」

ナルガモン「なんて野郎だ…。」

レナモン「カイだけではなく、エグザも強敵だな…。」

すると、リュウギは急に背伸びをする。

ナルガモン「なにやってんだよリュウギ？」

リュウギ「クソッ、どんな顔してるか見たいけど、観客が邪魔で見えねぇ？」

ナルガモン「そっか、知ってるのはオレだけだったよな…。」

（アイツ、何の目的でこの大会に出場してんだぁ？）

リンクモン「それでは、只今より2回戦を始めたいと思います！！2回戦に勝ち上がったチームは控え室に集まってください！！」

リュウギ「いけねっ！？早く控え室に戻るぞ！！」

ナルガモン「おう！」

リュウギ達は急いで控え室へと向かうのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

Ｅｐ１７　～完全無敵チーム！？１回戦ｖｓ無敵軍団！！～（後書き）

次回は２回戦！！

果たして、ブレイブエクセリオンの相手は？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ１８　～脇役打開！？２回戦ｖｓ脇役チーム？～（前書き）

脇役チーム？

まさかの奴らが登場！？

Ｅｐ１８スタート！！

Ｅｐ１８　～脇役打開！？２回戦ｖｓ脇役チーム？～

～マヤルコロシアム～

リンクモン「それでは、２回戦を開始したいと思います！」

デジモン達「ワァァァァァァ！！」

リンクモン「１回戦、運良く勝ち残ったブレイブエクセリオンの登場です！！」

すると、リュウギ達がバトルフィールドに上がってくる。

ナルガモン「おい、そこまで言わなくてもいいだろうがッ？」

レナモン「怒っていても仕方ない…。２回戦で挽回すればいい…。」

すると、リュウギは握り拳を作り、自らの手のひらに打ち込んだ。

リュウギ「そういう事だ！！２回戦の相手は誰だ？」

？？？「だぁーはっはっは！！俺様だッ！！」

ミソラ「この高笑い…。もしかして…？」

？？？「とうッ！！」

すると、３つの影がバトルフィールドに現れる。

？？？「バンディッツ！！」

？？？「アランでさぁ！！」

？？？「ドギヌス！！３人揃って…」

ＢＡＤ特戦隊「ＢＡＤ特戦隊！！」

（シ～～～～～～～ン）

リュウギ「２回戦の相手はお前らかよ…。」

レナモン「ハァ～…。」

リュウギとレナモンは深くため息をつく。ナルガモンは…。

ナルガモン「よく考えたら久しぶりだな、ＢＡＤトリオ？」

ＢＡＤトリオ「トリオじゃねぇ！！特戦隊だぁぁぁぁぁ？」

ミソラ「ウザッ…？」

観客席で見ていたミソラはフンと鼻を鳴らす。

バンディッツ「おいそこッ！！聞こえてんだよッ？」

キャンドモン「ミソラさん、誰なんですかあのアホそうな３人組は？」

ミソラ「見ての通り、３バカトリオよ…？」

リュウギ「それで、今回は何を企んでいるんだ…？っていうか、1回戦はどうしたんだよ…？」

バンディッツ「だぁーはっはっは！！俺達は運良く不戦勝だったのさ！！どうだいいだろう…？」

リュウギ・ナルガモン「あっそ…？」

アラン「お前ら、今の内にそうやって笑っておくんでさぁ！」

リュウギ「いや、笑ってるどころか、呆れてるんだけど…？」

ドギヌス「我々にはとっておきの助っ人を用意しているのだ！！」

レナモン「助っ人だと…？」

すると、バンディッツはニヤリと笑う。

バンディッツ「出てこい、助っ人達よ！！」

すると、更に3つの影がバトルフィールドに現れる。

???「とぅ！！オーガモン！！」

???「フーガモン！！」

???「ヒョーガモン！！3人合わせて…」

???×3「オーガ3兄弟！！」

リュウギはＤ－アクセルでオーガモン達のデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「オーガモン、成熟期、鬼人型、ウィルス種、必殺技は覇王拳。

フーガモン、成熟期、鬼人型、ウィルス種、必殺技はヘビースイング。

ヒョーガモン、成熟期、氷雪型、ウィルス種、必殺技は氷丸投げ。」

リュウギ「また面倒な奴が現れたぜ…？」

ナルガモン「お前らの新しい兄弟かぁ？だったらオーガ３バカトリオにしようぜ♪」

ＢＡＤトリオ・オーガ３バカトリオ「違うわぁぁぁぁぁぁぁッ？そして書くなぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ？」

キャンドモン「な、何でしょうかアイツらは…？」

ミソラ「色々言いたい事があるけど、一言にまとめるわ…。ウザいッ？」

リュウギ「ミソラ、もしかしたらコイツら、イビルスに操られているのかもしれない…。」

ミソラ「助ける必要ないんじゃないの…？まぁいいわ、ディスティングハーツ…？」

ミソラはめんどくさそうにディスティングハーツする。オーガ3バカトリオの体内にはイビルスがいなかった。

ミソラ「リュウギ、いないわよ…？」

リュウギ「え？」

ナルガモン「んじゃ、何で普通のデジモンがイビルスの味方についたんだよ？」

オーガモン「チッチッチ…。オレ達はある野望を打ち砕くために助っ人になったんだよ！！」

リュウギ「野望…？」

ヒョーガモン「そう、オレ達の野望は…」

オーガモン「脇役から撤回する事だ！！」

（シ～～～～～～ン）

リュウギ「はぁ？」

ナルガモン「脇役って、お前ら初登場じゃねぇのかよ？」

オーガモン「つまり、お前らを倒せばオレ達兄弟は主役になる！！」

リュウギ「どっかで聞いたことのあるセリフだな…。しかもかなり最近…？」

ヒョーガモン「前作では脇役ランキングに入ってしまった。まぁトップにならなくて良かったのだが…。」

フーガモン「そして、ここで名誉挽回する！！」

ナルガモン「あのよぅ…、そんなのどうでもいいからさっさと始めようぜ～。」

オーガモン「どうでもよくねぇんだよッ？」

ヒョーガモン「オレ達の野望をどうでもいいという一言で片付けるなッ？」

観客「ナルガモンの言う通りだーー！！」
（ブーブー）

観客「さっさと戦えこの脇役共ーー！！」
（ブーブー）

観客「前作の話するなら他所でやれーー！！」
（ブーブー）

すると、観客席からブーイングが溢れ出す。

オーガモン「うるせぇんだよテメェらッ？」

フーガモン「気持ちは解るけどオレ達の不満を聞けーーー！！」

オーガモン「バカッ、お前は黙っとけッ？」

すると、オーガモンは棍棒でフーガモンの頭を叩いた。

フーガモン「いだっ！？」

リュウギ「ま、みんなの意見に賛成だ…。さっさと始めようぜ、脇役なら脇役らしくここから退場してもらうぜ！！」

ＢＡＤトリオ・オーガ３バカトリオ「誰が脇役じゃやややややややッ？」

リンクモン「それでは、１戦目を始めたいと思います！両者、バトルフィールドへ！」

レナモン「私から行かせて貰う…。」

ナルガモン「頼むぜレナモン！」

リュウギ「気を付けろよ…、相手はアナログマンの手下だ。何をしてくるか分からない…。」

レナモン「そんなことは百の承知している…。では、行ってくる…。」

レナモンはそう行ってバトルフィールドに上がる。

リンクモン「それでは脇役チーム、バトルフィールドへ…。」

脇役チーム「誰が脇役チームだッ？」

バンディッツ「よしオーガモン、お前から行って来い！」

オーガモン「オレに指図するなッ？言っとくけどなぁ、誰もお前らの部下になろうなんざこれっぽっちもねぇからなッ？」

バンディッツ「なんだとッ？」

アラン「あんちゃんの命令に従えコノヤロゥ？」

フーガモン「最初はオレから行かせて貰う！！」↑無視

ヒョーガモン「よし、頼むぞ弟よ！」↑無視

ＢＡＤトリオ「おい、無視してんじゃねぇッ？」

フーガモンは無視をしてバトルフィールドに上がる。

リンクモン「では、１戦目！レナモンｖｓフーガモン！！レディーファイト！！」

（カーン！！）

ゴングが鳴った瞬間、レナモンは素早い動きで先制攻撃を仕掛ける。

フーガモン「早ッ！！」

レナモンは目にも止まらないようなパンチを繰り出した。

フーガモン「くっ！！」

フーガモンは棍棒で攻撃を防ぐ。

フーガモン「喰らえ！『ヘビースイング！！』」

フーガモンは棍棒を思いきり振り下ろした。

レナモン「くっ！！」

レナモンは後方へと高く飛んで交わした。そして、レナモンは大きく手を広げた。

レナモン「『狐葉楔！！』」

無数の木の葉の手裏剣がフーガモンに襲う。

フーガモン「いでででで！？」

ミソラ「その調子よレナモン！！」

オーガモン「なにやってんだよテメェッ？もっと攻めろよ？」

フーガモン「この野郎、『ヘビースイング！！』」

フーガモンはレナモンへと急接近し、棍棒を振り下ろした。

レナモン「遅い！」

レナモンは素早く交わし、フーガモンの懐に入った。

フーガモン「しまっ…！？」

レナモンはフーガモンの胸部付近を蹴って後方に宙返りした。

フーガモン「ぐぁぁぁぁぁぁぁ！？」

フーガモンは宙に浮き、地面に激しく叩き付かれた。

リュウギ「いいぞレナモン！！」

レナモンは華麗に着地する。

レナモン「もうお仕舞いか…？」

フーガモン「クソッ、成長期だからって嘗めやがって…？こうなったら奥の手発動！！」

ナルガモン「奥の手だと！？」

すると、フーガモンは低くかまえ、雄叫びを上げる。

フーガモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

アラン「おぉ！？これならいけるんでさぁ！？」

フーガモン「…っと思わせといてバトンタッチ！！」

リュウギ達は思いきりズッコケた。

リュウギ「交代かよ！？っていうかそんなのアリかよ！？」

リンクモン「はい、一応何でもアリなので…。」

ナルガモン「だったらレナモン、オレとチェンジだ!!」

ナルガモンはバトルフィールドに上がろうとすると、レナモンは止める。

レナモン「いや、私ならまだ戦える…。」

リュウギ「そうか。なら頼むよレナモン!」

ナルガモン「ちぇっ、分かったよ…。」

ナルガモンは小さく舌打ちをする。

リンクモン「では脇役チーム、バトルフィールドへ!!」

脇役チーム「だからそう呼ぶんじゃねぇッ?」

オーガモン「オレが行く!!」

オーガモンはバトルフィールドに上がり、棍棒を振り回す。

オーガモン「オレは弟とは違うという事、分からせてやるぜ…。」

レナモン「……。」

(何を企んでいるのか分からないが、先手必勝!!)

レナモンは素早い動きで先制攻撃を仕掛ける。

オーガモン「『覇王拳！！』」

オーガモンは握り拳を作り、地面に向かって思いきり殴った。すると、バトルフィールド全体がヒビ割れた。

レナモン「なに！？」

レナモンは高く飛び、着地しようとすると、足場が悪いためバランスが崩れた。

レナモン「しまった！？」

オーガモン「貰った！！『覇王拳！！』」

オーガモンは強力なパンチを放った。

レナモン「うわっ！？」

レナモンは激しく地面に叩き付かれる。

ミソラ「レナモン！？」

オーガモン「オラオラどうしたぁ？」

バンディッツ「なかなかやるじゃないか！！」

オーガモン「まぁな！！」

レナモン「くっ…。」

レナモンはゆっくりと立ち上がる。

ナルガモン「レナモン、無理するな!!オレと交代しろ!!」

レナモン「大丈夫だ…。私はまだ戦える…。」

リュウギ「レナモン…。」

オーガモン「どんどん行くぜ!!」

オーガモンは棍棒を振り回し、レナモンに襲い掛かる。

レナモンは交わそうとするとバランスが崩れてしまい、まともに喰らってしまった。

レナモン「うわぁぁぁ!?」

オーガモン「オラオラ、降参するなら今の内だぜ?」

レナモン「くっ…、誰が…、降参するものか…。」

レナモンは力を振り絞って立ち上がる。

ナルガモン「クソッ!早く交代すればいいのによぅ…。リュウギ、何とかできねぇのかよ!?」

リュウギ「アイツはアイツなりのプライドがあるんだ…。俺はアイツのプライドを信じる…。」

ナルガモン「でも、あのままじゃやられちまうぞ!?」

レナモン「くっ…。」
（ここで倒れてしまえば、今までの修行は無駄になる…。私は誓ったんだ…。強くなってみんなを護ると…。）

ミソラ「……。」
（頑張ってレナモン…。）

すると、レナモンは戦う体勢に入った。

オーガモン「交代する気ねぇみたいだな…。だったらお望み通り、ノックアウトしてやるぜ！！」

オーガモンはもう一度棍棒を振り回してレナモンに襲い掛かる。

レナモン（負ける訳には…！！）

すると、観客席にいたミソラは叫んだ。

ミソラ「レナモーーーーン！！」

ミソラのＤ－アクセルから聖なる光が生じる。すると、レナモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

レナモン「レナモン、進化！！」

『キュウビモン！！』

ＢＡＤトリオ「なにぃ！？」

キュウビモンは高く飛んで交わし、尾の先に集めた炎をいっせいに放つ。

キュウビモン「『鬼火玉！！』」

オーガモンは顔面に直撃した。

オーガモン「アチチチチチ！？」

フーガモン「兄貴、オレと交代だ！！」

オーガモン「お、おう？」

オーガモンは逃げようとすると、キュウビモンが行く手を阻む。

キュウビモン「逃がしはしない！！『狐炎龍！！』」

キュウビモンは高く飛び、全身に炎が纏い、龍のごとくオーガモンにぶつけた。

オーガモン「ぎゃゃゃゃゃゃ！？」

オーガモンは黒焦げになって倒れた。

（カンカンカーン！！）

リンクモン「オーガモン、ダウン！！よって1戦目はキュウビモンの勝利！！」

デジモン達「ワァァァァァァ！！」

すると、観客席から歓声が沸き上がる。

ミソラ「やったわキュウビモン！！」

キャンドモン「流石幼馴染み…。ボクチン感激…？」

タクスモン「前よりも成長したな！」

すると、キュウビモンはレナモンへと退化した。

リュウギ「よくやったなレナモン！」

ナルガモン「ＣＯＯＬだったぜ♪」

レナモン「あぁ…。私は少し休ませて貰う…。」

ナルガモン「後はオレ達に任せな！！」

リンクモン「ではブレイブエクセリオン、バトルフィールドへ！！」

リュウギ「よし、今度は俺が行く！」

リュウギはバトルフィールドへと上がった。

フーガモン「お、手ぶらだぞあのガキ！？はいはーい！オレ行きます！！」

フーガモンは小学生のように挙手してバトルフィールドに上がった。

バンディッツ「おい待て！？そのガキは…！？」

フーガモン「オレがガキに負けるとでも思ってるのか？こんなガキ、一捻りだぜ♪」

リンクモン「では行くぜ！！レディーファイト！！」

（カーン！！）

フーガモン「丸腰のガキでラッキーだぜ♪」

フーガモンは棍棒を振り回してリュウギに襲い掛かる。

リュウギ「行くぜ！！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れた。

フーガモン「はぁ！？」

バンディッツ「あのバカ、だから言ったのに…？」

リュウギはアルカナムで棍棒を斬った瞬間トリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発して棍棒は粉々に砕けた。

フーガモン「ひゃゃゃゃゃ！？」

フーガモンは尻餅ついて汗だくになる。

フーガモン「ちょ、ちょっとタンマ？お願いだからタンマ？」

リュウギ「悪いが、真剣勝負に情けをかけるのは俺の流儀じゃねぇ…。」

リュウギはそう言ってアルカナムを構えた。

フーガモン「兄貴、交代!!チェンジチェンジ!!」

リンクモン「いい忘れていましたが、選手交代は1人1度限りですよ…。」

フーガモン「なにぃぃぃぃぃぃぃ!?」

リュウギ「これで決める!!」

リュウギはアルカナムを振りかぶった瞬間、フーガモンは土下座をした。

フーガモン「降参します?」

リュウギ「はぁ?」

フーガモン「降参しますから命だけは?」

リンクモン「え〜、フーガモンは降参しましたので、2戦目はリュウギの勝利!!」

デジモン達「ワァァァァァァァ!!」

リュウギ「また降参かよ…?」

ナルガモン「成熟期のクセに情けねぇなぁ～？」

ミソラ「カッコわる…。」

ヒョーガモン「なにしてんだよッ？」

フーガモン「だって怖かったんだもん？リアルにおしっこチビる所だったも～ん？（泣）」

リンクモン「ブレイブエクセリオン、あと一勝すれば3回戦進出です！！両者、バトルフィールドへ！！」

ナルガモン「よっしゃ、最後はオレが決めてやるぜ！！」

ナルガモンはそう言ってバトルフィールドに上がる。

ヒョーガモン「こうなったら、ここで挽回してやる！！」

ヒョーガモンはそう言ってバトルフィールドに上がる。

リンクモン「最終戦、ナルガモンｖｓヒョーガモン！！レディーファイト！！」

（カーン！！）

ゴングが鳴ると、ナルガモンは両肘のブレイドを構えて先制攻撃を仕掛けた。

ナルガモン「喰らえ！！『ヒドゥンブレイド！！』」

すると、ヒョーガモンは両手を広げると、巨大氷柱が現れてブレイドを受け止めた。

ナルガモン「なに！？」

ヒョーガモン「ムダだ！！フンッ！！」

ヒョーガモンは力で押し返すと、ナルガモンは飛ばされてしまう。
そしてヒョーガモンは両手に持つ氷柱をナルガモンに投げ付けた。

ナルガモン「くっ！？」

ナルガモンは受け身を取って素早く交わした。

ナルガモン「あっぶねぇなぁ…。」

リュウギ「ナルガモン、進化だ！！」

ナルガモン「おう！！」

リュウギはＤ－アクセルでナルガモンに翳した。すると、ナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

ヒョーガモン「くっ、進化しやがったか…。」

ソニックドラモン「さて、ＣＯＯＬに反撃だぜ！！」

ソニックドラモンは両肘の鋭いブレイドを構えると、ブレイドから漆黒の炎に包まれる。

ヒョーガモン「させるかよ!!『氷丸投げ!!』」

ヒョーガモンは両手を真上に上げると、巨大な雪玉が現れてソニックドラモンに投げ付けた。

ソニックドラモン「喰らうかよ!!」

ソニックドラモンは漆黒の炎に包まれたブレイドで巨大な雪玉を粉々に砕けた。

ヒョーガモン「なに!?」

ソニックドラモン「喰らいやがれ!!『ヒドゥンスラッシュ!!』」

ソニックドラモンは漆黒の炎に包まれたブレイドでヒョーガモンを切り刻んだ。

ヒョーガモン「ぐぁぁぁぁぁぁぁ!!」

ヒョーガモンは力尽きて倒れた。

ＢＡＤトリオ「うそ～ん?」

ソニックドラモン「Ｊａｃｋｐｏｔ!!」

（カンカンカーン!!）

リンクモン「ヒョーガモン、ダウン！！ソニックドラモンの勝利！！よってブレイブエクセリオン、３回戦進出です！！」

デジモン達「ワァァァァァァァ！！」

すると、観客席から歓声が沸き上がる。

ミソラ「やったわ！！」

タクスモン「やるじゃねぇかアイツら！！」

ソニックドラモンはナルガモンへと退化した。

リュウギ「やったなナルガモン！」

ナルガモン「おうよ、こんなの朝飯前だぜ♪」

（パシィーン！！）

リュウギとナルガモンはハイタッチをした。

ＢＡＤトリオ「……？」

アラン「ど、どうするんでさぁあんちゃん…？」

（ヒソヒソ…）

バンディッツ「こ、こうなったらイビルスで観客全員を…」

（ヒソヒソ…）

リュウギ「おい、今度は何企んでいるんだ？」

ＢＡＤトリオ「ギクリッ！？」

ドギヌス「な、何でもない？」

ナルガモン「お前ら負けたんだから、さっさと失せな！！」

バンディッツ「ぐぬぬ…。こうなったらヤケだ！！いでよイビ…」

バンディッツはイビルスを呼び出そうとすると、何処からか空きカンが飛んできてバンディッツの頭に直撃した。

バンディッツ「いでっ！？」

観客「脇役さっさと帰れーー！！」

（ブーブー）

観客「帰れ！！帰れ！！帰れ！！帰れ！！…」

観客席に座るデジモン達のブーイングがＢＡＤトリオに浴びせる。

ＢＡＤトリオ「……。」

（な、なにこれ…？イジメですか…？）

ＢＡＤトリオの顔色は段々と真っ青になっていく。

ＢＡＤトリオ「チキショウ、覚えてろーーー！！」

ＢＡＤトリオは全力疾走で退場した。

リュウギ「よし、これでもう大丈夫だな！」

リンクモン「では、ブレイブエクセリオンは控え室で休んでてください！2回戦が終わり次第、お知らせします。」

リュウギ「分かった。控え室に戻ろう。」

リュウギ達は控え室へと戻るのであった。

ミソラ「3回戦進出ね♪」

キャンドモン「いやぁ～、正直ヒヤッとしましたよ～？」

タクスモン「2回戦までは何とかなったが、段々と戦いが厳しくなっていくぞ…。」

ミソラ「そうね…。」

～マヤルコロシアム　通路～

エグザ「……。」

マヤルコロシアムのとある通路を歩いていたエグザ。

すると、エグザはピタリと足を止めた。

エグザ「そろそろ出てきたらどうなんだ…？居るのは分かっている…。」

すると、背後から黒い影が現れる。黒い影の正体は邪悪な刺客　スレイヤードラモンだった。

エグザ「お前もこの大会に出場していたのか…。どういう魂胆なんだ？」

スレイヤードラモン「勘違いするな…。アナログマン様の命令でこの大会に出場した。そしてエグザ、貴様の息の根を止める！！」

エグザ「倒すだの息の根を止めるだの…。随分と人気だなぁ俺…。んじゃ、今から試合だから行くわ…。」

エグザはそう言って背中を向けて歩き出した。

スレイヤードラモン「待て、エグザ。」

すると、エグザはピタリと足を止めた。

エグザ「まだ何かあるのか…？」

スレイヤードラモン「アイツの仇を取るまで、お前を必ず殺す…。この手でな…。」

エグザ「仇か…。そいつは楽しみだ…。もしお前と戦う事になったら、その時は全力でお前をブッた切るからな…。覚えとけよ…。」

エグザはその場から立ち去った。

エグザ「……。」

エグザはある言葉を思い出した。それはある男に言われた言葉だった。

『このまま行けば、お前は後悔する事になるぞ…。』

エグザ（お前の言っていたあの言葉の意味、ようやく理解したよ…。これが俺の運命だったのだな…。）

エグザは深刻な顔をしながら、コロシアムのバトルフィールドへと向かったのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

Ｅｐ１８　～脇役打開！？２回戦ｖｓ脇役チーム？～（後書き）

エグザとスレイヤードラモンの関係は一体？

次回は３回戦！！

お楽しみに！！

Ｅｐ１９　～誘惑に惑わされるな！！３回戦ｖｓテンプティーガールズ！！～

今回はちょっとした笑いありのバトル？

Ｅｐ１９スタート！！

Ｅｐ１９　～誘惑に惑わされるな！！３回戦ｖｓテンプティーガールズ！！～

～バトルフィールド～

マヤルコロシアム第３回戦、サイレントナイツｖｓロストオーシャンズ。

カイ「これで終わらせる。α！！」

カイが叫ぶと、巨大手裏剣から小型鎌へと変形し、ハンギョモンを切り刻んだ。

ハンギョモン「ぎゃゃゃゃゃゃゃゃゃ！？」

ハンギョモンは力尽きて倒れると、ゴングが鳴り響く。

（カンカンカーン！！）

リンクモン「ハンギョモン、ダウン！！最終戦はカイの勝利！！よってサイレントナイツは第４試合進出決定！！」

デジモン達「ワァァァァァァァ！！」

歓声が沸き上がる中、ミソラ達は驚く。

ミソラ「凄いわ…。完全体相手なのに平然と倒しちゃったわ…。」

タクスモン「あの小僧、かなり手強いなぁ…。」

キャンドモン「あのぅ、ボクチンそろそろ帰りたいなぁ～ていうかなんていうか…。」

ミソラ「あっそ…。アンタだけ帰れば？」

ミソラは相変わらず冷たい態度をとる。

キャンドモン「なんてウソですよマドモワゼル？1人じゃ寂しいから一緒に帰りましょうよミソ…ぶべらッ！？」

キャンドモンは飛び付こうとした瞬間、ミソラの拳が飛んできて顔面に直撃する。

ミソラ「アンタが飛んで来るの、大体予想していたわ…？」

タクスモン（す、鋭いな…？）

リンクモン「では3回戦、ブレイブエクセリオンの登場です！！」

デジモン達「ワァァァァァァ！！」

リュウギ達がバトルフィールドに現れる。

ミソラ「あ、リュウギ達だわ！」

タクスモン「頑張れよお前ら！！」

～バトルフィールド～

リュウギ（ミソラ、タクスモン…。）

リュウギはミソラに向かって親指をピシッと立てた。

リンクモン「対するブレイブエクセリオンの相手は、テンプティーガールズの登場です！！」

すると、テンプティーガールズと呼ばれたチームがバトルフィールドに現れる。

リュウギはＤ－アクセルでテンプティーガールズのデジモン達のデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「バステモン、完全体、獣人型、ウィルス種、必殺技はヘルタースケルター。

ライラモン、完全体、妖精型、データ種、必殺技はライラシャワー。

リリモン、完全体、妖精型、データ種、必殺技はフラウカノン。」

リュウギ「コイツら全員、完全体なのか…！？」

ナルガモン「しかも、女だし…。」

すると、観客席にいたキャンドモンがリミッターが外れてしまい、暴走する。

キャンドモン「あひゃゃゃゃゃゃゃゃ！？なんだムチムチなお姉さん達は！？リュウギ、今すぐボクチンと交代しろコルァァァァァァァァ！！待っててねテンプティーガールちゃん、今ボクチンが行くからたっぷりと誘惑してぇぇぇぇん？」

ミソラ「あらそう…、そんなに行きたいなら…」

すると、ミソラは片手でキャンドモンを掴んだ。

キャンドモン「え?ちょ、ちょっとミソラさん?」

ミソラ「行ってこぉおおおいッ?」

ミソラはテンプティーガールズに向かって思いきり投げ飛ばした。

キャンドモン「きぃいいいいやややややや!?今すぐボクチンを受け止めてぇえええ!?」

すると、テンプティーガールズはヒラリと交わした。

キャンドモン「うそぉおおおん!?」

キャンドモンはそのまま地面に直撃して地面にめり込む。

ライラモン「あらあら、大丈夫かしら…?」

リュウギ「たぶん大丈夫じゃないと思うぞ…?ま、それは置いといて、さっさと始めようぜ!!」

リュウギは拳を作って自らの手のひらに打ち込んだ。

ライラモン「ウフフ、やる気満々だねボウヤ…?」

リュウギ「う…?」

すると、リュウギは顔が赤くなる。

ナルガモン「おいリュウギ、なに赤くなってんだよ？」

リュウギ「べ、別に何でもねぇよ？」

ミソラ「チッ…？」

それを見てミソラは焼きもち焼いているのか、小さく舌打ちする。

リンクモン「そ、それでは1戦目始めたいと思います…。」
（鼻血）

ナルガモン「おい審判、鼻血出てるぞッ？」

リンクモンは慌てて鼻血を拭く。

リンクモン「ヤベッ、つい興奮しちゃった…？」

ナルガモン「もっと真面目にやりやがれッ？」

リンクモン「ではブレイブエクセリオン、バトルフィールドへ！」

リュウギ「お、俺が行く…。」

リュウギは顔を赤らめたままバトルフィールドへと上がる。

ナルガモン「頼んだぜリュウギ！！」

レナモン「……。」

ナルガモン「ん？どうしたんだレナモン？」

レナモン「べ、別に何でもない…？」

すると、レナモンは顔を赤らめる。

ナルガモン「変なヤツだなぁ…。」

レナモン（す、少し羨ましかったりして…。）

レナモンはテンプティーガールズに少し嫉妬を抱いていた。

リンクモン「ではテンプティーガールズ、バトルフィールドへ！！」

ライラモン「私から行くわ。」

ライラモンはそう言ってバトルフィールドに上がる。

リュウギ「相手が女だからって、手加減はしねぇぜ！！」

ライラモン「お手柔らかにね、ボウヤ…？」

ライラモンはウィンクをすると、リュウギの顔が赤くなる。

リュウギ「んなッ？」

ミソラ「チッ…？」

ミソラは段々と嫉妬の炎が燃え上がる。

キャンドモン「ボ、ボクチン、ジュース買って来まーす？」↑いつの間にか戻っていた

キャンドモンはヤバイと感じたのだろうか、慌ててジュースを買いに行った。

リンクモン「それでは第１戦目、リュウギｖｓライラモン。レディーファイト！！」

（カーン！）

リュウギ「い、行くぜ！！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ライラモン「いらっしゃい！！」

リュウギはアルカナムを構えてライラモンに向かって接近する。

リュウギ「喰らえ！！」

リュウギはアルカナムを振り下ろした瞬間、ライラモンはヒラリと交わされた。

リュウギ（くっ、素早い！？）

ライラモン「キャッ！？」

しかし、ライラモンはバタリと地面に座り込んだ。

リュウギ「え？」

（当たったの…？）

ライラモン「いたたた～…。」

リュウギ「お、おい、大丈夫か…？」

ライラモン「あら？敵同士なのに優しいのね…。私なら大丈夫よ…。」

ライラモンは目をキラキラと輝かせながらチラッとリュウギを見つめた。

リュウギ（ドキッ！？）

リュウギは顔を赤らめて、目を反らした。

ナルガモン「何やってんだよリュウギ！！チャンスだろうが！！」

リュウギ「あ、あぁ…。」

（そ、そうだ…。これはコロシアムなんだ！！）

リュウギの目付きがキリッと変わり、アルカナムを振りかぶった。

ライラモン「そうだよね…。これは戦い…。私も本気で戦うわ…。」

ライラモンは立ち上がり、リュウギに接近する。

リュウギ「うおぉぉぉぉぉ！！」

その時だった。リュウギは石に躓いてバランスを崩した。

リュウギ「！？」

ライラモン「危ない！！」

ライラモンは転けかけたリュウギをキャッチしようとするその時だった。

（チュッ…）

リュウギ・ライラモン「！？」

ミソラ「はぁ！？」

観客は長い沈黙になった。

ナルガモン「何やってんだよリュウギ！！敵に助けて貰うなんてお前らしくないぞ！！」

リュウギ「い、いま、ファーストキス…。いや、何でもない…。」

リュウギは完全に顔を赤らめている。

ナルガモン「はぁ？」

リュウギ「き、気を取り直して行こう…。」

ライラモン「その、リュウギさん…。」

リュウギ「？」

すると、ライラモンも顔を赤らめる。

ライラモン「私も、初めてだった…。」

リュウギ「え！？」

リンクモン「おーっと、これは思わぬハプニング！？偶然にも、ライラモンとハプニングキスを交わしてしまったようです！？」

デジモン達「ヒューヒュー！！」

ミソラ「どうでもいいから早くしなさいよッ？何がヒュー！？早くやりなさいよッ？」

キャンドモン「ミソラさーん、ジュース買って来ましたー？」

キャンドモンは空きカンジュースをミソラに手渡した。

キャンドモン「あれ？どうしたのですかミソラさん？」

タスクモン「あまり話し掛けないほうがいいぞ…？」

キャンドモン「はい？」

リュウギ「ワ、ワリィ？そんなつもりじゃなかったんだ？ごめん、大切な初めて奪っちゃって…。」

ライラモン「別に、気にしてないから…。」

リュウギ「!?」

すると、リュウギの顔がかなり赤くなる。

ミソラ「なにこのフワフワした空気!?何でコロシアムでこんな空気になるのよ!?」

リュウギ（な、なんだよハプニングキスしちゃったくらいで…。こんなデジモン、別に関係ねぇよキスくらい…。そもそもあれはキスっていうか、事故みたいなものだったし…。別にライラモンが好き込んで俺とキスしたわけじゃないし…。つうかそんな事、別に関係ないし…。）

すると、リュウギは心臓の鼓動が聞こえてくる。

リュウギ（あれ?おかしいな…。何でこんなにドキドキしてんだ…?ライラモンってこんなに可愛かったっけ…?マズイ!?なんかどんどん戦いづらくなっていく!?）

ナルガモン「だから何やってんだよリュウギ!?早くやれよ!!」

リュウギ「え?あ、うん…。」

リュウギはアルカナムを構えると、少し躊躇う。

リュウギ（いいのか…?俺はこれで…?）

ライラモン「何を躊躇っているの…？私とあなたは敵同士なのよ…？」

ライラモンは目をうるうるしながらリュウギを見つめる。すると、リュウギの心臓の鼓動が激しくなってくる。

リュウギ「やめろぉぉぉぉ！？ドキドキが止まらないぃぃぃぃ！？」

ミソラ「バカなの！？アイツバカなの！？」

ミソラは動揺してキャンドモンの体を掴んで激しく揺らす。

キャンドモン「ボ、ボクチン知らないですって！？うぇ、気持ちわるぃ…？」

リュウギ（どんどん戦いづらくなっていく…。どんどん君に、引かれていく…。）

ミソラ「いい加減にしなさいよ！？なんで対戦相手との恋が始まろうとしてるのよ！？」

ライラモン「遠慮しないでいいのよ…。どうぞ、私と戦って…。」

リュウギ「やめろぉぉぉぉ！？もう余計な事喋るなぁぁぁぁぁ！？」

ライラモン「初めてだったけど、私にとっては最高のキスだった…。もう心残りはないわ…。ありがとう、最後に私を女の子にしてくれて…。」

ライラモンはそう言って笑顔を見せた。すると、愛の矢がリュウギの胸に突き刺さり、膝が折れる。

リュウギ（む、無理だ…。いくら流儀とはいえ、こんな素敵な子、戦う事なんてできない…。）

ナルガモン「さっきから何やってんだぁ？あのバカ…？」

ライラモン「早く私を倒してください！戦うなら、あなたがいいです！」

ナルガモン「リュウギ、あんな事言ってるんだから早くやれよ！！」

リュウギ「そういう問題じゃない…。どんな状況になっても手加減はしないのが俺の流儀…。でも、こんな優しい子を戦うのは俺の流儀に反する！！！！」

ミソラ「バカだわ…？正真正銘のバカだわ…？」

ミソラは怒りの余りに飲み掛けの空きカンを握り潰した。

キャンドモン・タスクモン（恐ッ！？）

ミソラ（これはきっと罠だわ…。何とかできないかしら…。そうだ！！ディスティングハーツでライラモンの心を読めばいいんだわ！！）

「ディスティングハーツ！」

ミソラはディスティングハーツでライラモンの心を読んだ。

『やっとだわ…。やっと私に、初めての恋人ができたわ…。とても嬉しい…。』

ミソラ（え?あの子、ホントにリュウギの事が好きなの!?リュウギを誘惑するための罠じゃないの!?）

ミソラは何かの間違いだと思い、もう一度ライラモンの心をよく調べる。その時、とんでもない物が聞こえてくる。

『お互い愛し合えば、私が×××でも問題なんてないわ!!』

※イメージが崩れるので、あえて隠します。

それを聞いたミソラは目の前が真っ白になった。

ミソラ「は…?え、ウソ…?あの子ってまさか…?」

～バトルフィールド～

一方、リュウギは恋に落ちてしまい、戦闘力は0となっていた。

リンクモン「あのぅ、どうしますか?戦いたくなかったら、ギブアップしてもいいですよ…?」

リュウギ「はい…。ギブアップし…」

その時だった。リュウギのDーアクセルから通信が入る。

リュウギ「ん?誰だ?ちょっと審判タイム?」

リュウギはDーアクセルの通信をキャッチすると、相手はミソラだった。

ミソラ『リュウギ、聞こえる?』

リュウギ「なんだミソラか…。ワリィが、俺にはあの子を倒す事ができねぇ…。今からギブアップするよ…。」

(ヒソヒソ…)

ミソラ『あらそう?相手が×××でも…?』

すると、リュウギはピタッと止まる。

リュウギ「え?はい?ワ、ワリィ、耳が遠くてハッキリ聞き取れなかったわ…。もう一回言ってくれ…。」

ミソラ『あの子は…いや、あのチームは×××よ!!×・×・×!!分かる!?』

それを聞いたリュウギの気持ちはお花畑の世界がまるでガラスのように砕け散ったような気分だった。

リュウギ「ウソだ…。こんなハズが…。有り得ない!!」

ミソラ『ウソじゃないわ…?ディスティングハーツでハッキリ聞こえたわ…。だからいい加減に目を覚ましなさいよッ?じゃ、切るわよ!』

ミソラはそう言ってDーアクセルの通信を切った。

リュウギ「……。」

リンクモン「あ、あのぅ、ギブアップするんですか…？」

リュウギ「ギブアップだと…？ふざけるな…？」

すると、リュウギの闘志が激しく燃え上がる。

リュウギ「気が変わった…？3人纏めて掛かってこい…？」

ライラモン「な、何を言っているのですかリュウギさん！？私は本気であなたを愛し…」

リュウギ「例え相手が誰だろうが正々堂々、真っ向勝負する…。それが俺の流儀だ！！いいか、審判？」

リュウギの目付きが変わり、アルカナムを肩に担いだ。

リンクモン「は、はい。私は構いませんが…？」

ミソラ「よく言うわ…？×××相手に思いっきり恋に落ちたクセに…？」

バステモン「チッ、バレたか…。」

リリモン「体は×××でも、心は×××なのよ！！」

ライラモン「よくも私の初恋を踏みにじったわね！！」

テンプティーガールズは怒り出してバトルフィールドに上がり込む。

ナルガモン「おいリュウギ、相手は完全体だぞ!!オレ達も手を貸すぜ!!」

レナモン「その心配はなさそうだ…。」

ナルガモン「何でだよ?」

レナモン「リュウギの眼を見てみろ…。」

リュウギの眼は灼熱の炎のごとく燃えていた。

レナモン「この通りだ…。」

ナルガモン「どうやら、手を貸す必要はなさそうだな…?」

リュウギ「俺を騙した事を後悔させてやる…?」

テンプティーガールズ「覚悟なさい!!」

テンプティーガールズは一斉にリュウギに襲いかかった。

リュウギ「×××は…」

リュウギは目にも止まらない電光石火のごとくテンプティーガールズを切り刻んだ。

リュウギ「ショー◯ブで働いとけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」

テンプティーガールズ「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

テンプティーガールズは力尽きて倒れた。

（カンカンカーン！！）

リンクモン「テンプティーガールズ、ダウン！！勝者、リュウギ！！よってブレイブエクセリオン、４回戦進出決定！！」

デジモン達「ワァァァァァァァ！！」

ナルガモン「やったぜリュウギ！！」

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

ライラモン「どうしてなの…？私は心から愛しているのに…。」

リュウギ「一度失恋したくらいでメソメソするな…。恋をして恋を失った方が、一度も恋をしなかったよりマシだろ？」

ライラモン「リュウギさん…。」

リュウギ「終わりのある愛は悲劇じゃない。終わりのない愛こそ悲劇なんだよ…。」

リュウギはそう言ってコロシアムの控え室へと向かった。

ライラモン「……。」

～コロシアム控え室～

ナルガモン「しかしまぁ危なかったなぁリュウギ！」

リュウギ「心配かけて悪かったな…。これもミソラのお陰だ…。」

ナルガモン「ミソラ？ミソラが何かやったのか？」

リュウギ「あ、いや別に…？」

ナルガモン・レナモン「？」

ミソラ「リュウギ！！」

すると、ミソラが控え室に入ってくる。

リュウギ「ミソラ！？なんでここに…どわぁ！？」

すると、ミソラはリュウギの胸ぐらを掴んで激しく揺らす。

ミソラ「アンタって人はねぇッ？」

リュウギ「落ち着けってミソラ！？」

ナルガモン「どうしたんだよミソラ？顔赤くなっちゃってよぅ？」

ミソラはピタリと止まってリュウギを放した。

リュウギ「わ、悪かったよミソラ？」

ミソラはフンと鼻を鳴らした。

ミソラ「それで、大丈夫なの…？」

リュウギ「え？何が？」

ミソラ「キスしたんでしょ？××と…。」

すると、リュウギの顔が段々と真っ青になり、トイレへと駆け込んだ。

リュウギ「うぇえええええええええええええ！？」

ナルガモン「なぁミソラ、どうしたんだよアイツ？」

ミソラ「直接本人に聞きなさい…？」

レナモン「ミソラ、どうして怒っているのだ？」

ミソラ「わ、私は別に怒ってないって？」

ミソラは顔を赤らめながら必死に否定する。

※ヤバイのでしばらくお待ちくださいｍ（＿）ｍ

リュウギ「よ、よし…。次は４回戦だ…。」

ナルガモン「リュウギ、大丈夫かぁ？」

リュウギ「お、俺は大丈夫だ…？」

ミソラ「キス…。」

（ボソッ…）

すると、リュウギの顔が真っ青になる。

リュウギ「や、やめろよミソラ？」

ナルガモン・レナモン「？」

ナルガモン「まぁいいや。さて、４回戦の相手は誰なのか気になるぜ！！」

？？？「次の相手は俺だ…。」

すると、黒い影が控え室に入ってくる。

ナルガモン「テメェはグレイドモン！？」

グレイドモン「まさか４回戦の相手がお前らだったとはな…。ただのチビではない事はしかと見受けた。」

ナルガモン「４回戦の相手はテメェだったのか…。おもしれぇ、テメェをブッ飛ばしてやるぜ！！精々首でも洗って待っときな！！」

グレイドモン「フッ、楽しみにしているぞ…。」

グレイドモンはそう言って控え室から去っていった。

リュウギ「ナルガモン、頑張ろうぜ!!」

ナルガモン「おうよ!!」

リュウギとナルガモンはお互いに拳と拳をぶつけ合うのであった。

――To Be Continued….

ＥＰ１９　～誘惑に惑わされるな！！３回戦ｖｓテンプティーガールズ！！～

次回はグレイドモンと対決！！

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ２０　～必死の猛攻！！４回戦ｖｓメテオナイツ！！（前編）～（前書き）

ついにグレイドモンとの対決！！

今回の４回戦は前編と後編あるのでご了承ください。

Ｅｐ２０スタート！！

ＥＰ２０　～必死の猛攻！！４回戦ｖｓメテオナイツ！！（前編）～

～マヤルコロシアム～

リンクモン「皆さん、大変長らくお待たせしました！！ついに４回戦の始まりです！！ブレイブエクセリオンの登場です！！」

デジモン達「ワァァァァァァ！！」

すると、リュウギ達がバトルフィールドに上がる。

ミソラ「ついに始まったわね、４回戦…。」

キャンドモン「相手は例のアイツですね…。」

タスクモン「例のアイツだと…？」

ミソラ「もうすぐ登場するわ…。」

リンクモン「対するブレイブエクセリオンの相手は、金色の流星と呼ばれた騎士、メテオナイツの登場です！！」

メテオナイツと呼ばれたグレイドモンがバトルフィールドに上がってくる。

リュウギ「来たか…。」

ナルガモン「待ってたぜグレイドモン！！」

レナモン「しかし妙だ…。メテオナイツにはグレイドモン1人だけしかいない…。」

グレイドモン「そんなもの必要ない…。今まで1人で戦ったのだからな…。」

ナルガモン「今まで1人で戦っただと…!?」

レナモン「このコロシアムに出場した目的は一体なんだ?」

グレイドモン「目的は特にない…。俺はただ、マルスモンに会うためだ…。」

ナルガモン「会ってどうすんだよ!?」

グレイドモン「お前らには関係のない事だ…。無駄話はここまでだ…。さっさと始めるぞ…。無論、この試合は全て俺が出る。」

リンクモン「では、ブレイブエクセリオン!!バトルフィールドへ!」

ナルガモン「あの野郎、嘗めた真似しやがって…?始めはオレから…」

レナモン「いや、私から行く…。」

すると、レナモンがバトルフィールドに上がる。

ナルガモン「お、おいレナモン!?」

レナモン「心配ないナルガモン…。私を信じてくれ…。」

レナモンは振り向いて小さく笑った。

リュウギ（レナモン…。）

「分かった…。頼んだぞ、レナモン。」

レナモン「ありがとう、リュウギ…。」

レナモンはそう言ってバトルフィールドの中央へと立つ。

リンクモン「では第1戦目、レナモンｖｓグレイドモン！レディーファイト！！」

（カーン！！）

リュウギは急いでＤ－アクセルでミソラと通信をとる。

～観客席～

リュウギ『ミソラ、レナモンを進化させるんだ！！』

ミソラ「分かったわ！！」

――――――――――――

ミソラはＤ－アクセルをレナモンに翳した。すると、レナモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

レナモン「レナモン、進化！！」

『キュウビモン！！』

グレイドモン「進化か…。いいだろう、掛かってくるがいい…。」

キュウビモンは尾の先に集めた炎をいっせいに放つ。

キュウビモン「『鬼火玉！！』」

グレイドモン「無駄だ…。」

グレイドモンは双剣グレイダルファーで鬼火玉をかき消した。

キュウビモン「やはりそう上手くいかないか…。」

グレイドモン「では、こちらの番だ！！」

グレイドモンはキュウビモンに向かって急接近する。

キュウビモン（早い！？）

キュウビモンは高く飛んで交わそうとする。

グレイドモン「遅い！！『クロスブレード！！』」

グレイドモンはすぐに追い付き、双剣グレイダルファーでキュウビモンを十字に切り裂いた。

キュウビモン「ぐあぁぁぁぁぁっ！？」

ミソラ「キュウビモン！？」

キュウビモンは地面へと落下した。

ナルガモン「あの野郎、なんて早さなんだ…！？」

リュウギ「キュウビモン、あまり無茶をするな！！俺と交代するんだ！！」

キュウビモン「私は…大丈夫だ…。」

キュウビモンはそう言って力を振り絞り、ゆっくりと立ち上がった。

グレイドモン「まさか、俺の技を受けてまで立つとはな…。あまりガッカリさせるなよ…。」

グレイドモンはそう言って双剣グレイダルファーを構える。

キュウビモン「くっ…！！」

（考えろ…。一体どうすれば…？）

グレイドモン「何度やっても同じだ！俺の早さは光のごとく素早いのだ！！」

グレイドモンはキュウビモンに向かって急接近し、同じ技を繰り出そうとする。

キュウビモン（光…？光と影…。そうか！！）

グレイドモン「終わりだ！！」

グレイドモンは斬りに掛かると、キュウビモンは素早く上空へと飛び上がって交わした。

飛び上がったと同時にキュウビモンは尾の先に集めた9つの炎を上空へとばら蒔いた。

グレイドモン（何をするつもりだ?）

キュウビモン「こちらの番だ!!」

すると、上空にばら蒔く鬼火はキュウビモンを照らし、地面から9つの影が実体化した。実体化した9つの影はグレイドモンを押さえ付けた。

グレイドモン「くっ!!邪魔だ!!」

グレイドモンは必死で逃げようとすると、実体化した影に押さえ付けられているため、身動きが取れない。

キュウビモン「これでお前は逃げられない!!」

上空に舞うキュウビモンは全身に炎を纏った。

キュウビモン「『狐炎帝!!』」

上空へとばら蒔いた9つの鬼火と全身に炎を纏ったキュウビモンは拘束したグレイドモンに全てをぶつけて爆発した。

グレイドモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

ナルガモン「スゲェぜキュウビモン！！」

ミソラ「やったわ！！」

観客席で見ていたミソラは嬉しさの余りにキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん？」

（ミソラさん、酷い？）

爆煙の中からキュウビモンが現れる。

キュウビモン「ハァ…ハァ…。」

（やったか…？）

その時、爆煙の中からグレイドモンが切り開き、キュウビモンを蹴り飛ばした。

キュウビモン「うわっ！？」

一同「！？」

ミソラ「キュウビモン！？」

キュウビモンは激しく地面に叩き付かれた。

グレイドモン「いい戦法だった。そこだけは誉めてやろう…。しかし、あまり調子に乗るなよ…。」

キュウビモン「くっ…！！」
（やはりダメだったか…。）
グレイドモン「フンッ！！」
グレイドモンは双剣グレイダルファーでキュウビモンを切り刻んだ。
キュウビモン「うわぁぁぁぁぁぁ！？」
リュウギ「キュウビモン！？」
グレイドモン「まだだ…。」
グレイドモンは躊躇いもなくキュウビモンを切り刻む。
キュウビモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
ナルガモン「あの野郎ッ？もう我慢できねぇッ？」
ナルガモンは参戦しようとすると、リュウギはナルガモンを止める。
ナルガモン「放せよリュウギ！！」
リュウギ「ナルガモン、気持ちは分かるが、今は堪えるんだ！！」
ナルガモン「仲間がやられている所を、ただ黙って指加えてられるかよ！！」
リュウギ「俺達のやるべき事は、キュウビモンを信じる事だ…。」

ナルガモン「くっ…。」

観客席にいるミソラは、キュウビモンを見守る。

ミソラ「キュウビモン…。」

キャンドモン「あわわわ？どうしたらいいんだＹＯ？」

すると、ミソラの目付きが変わり、観客席から立ち上がって何処かへと走り出した。

キャンドモン「ちょっとミソラさん！？」

一方、キュウビモンは反撃できず、双剣グレイダルファーの餌食となっていた。

キュウビモン「ぐはっ！？」

キュウビモンは勢いよく地面に倒れる。

グレイドモン「諦めて降参しろ！！そうすれば命だけは助かる…。」

すると、キュウビモンはボロボロになりながらも力を振り絞って立ち上がる。

グレイドモン「まだやるつもりなのか？」

キュウビモン「私は負ける訳にはいかないのだ…。」

グレイドモン「本当はやりたくなかったが、仕方ない…。」

すると、グレイドモンは双剣グレイダルファーを構えて高く飛び上がった。

キュウビモン「!?」

グレイドモン「終わりだ!!『グレイドスラッシュ!!』」

グレイドモンは上段より二刀をキュウビモンの頭上に叩き落とそうとする。

キュウビモン「くっ…。」
（すまない、ミソラ…。）

その時だった。ミソラがバトルフィールドに現れて叫んだ。

ミソラ「キュウビモーーーーーーン!!」

キュウビモン「!?」

すると、キュウビモンは素早く襲い掛かる双剣グレイダルファーを交わした。

グレイドモン「なに!?」

キュウビモン「ハァ…ハァ…。」

リュウギ・ナルガモン「ミソラ!?」

係員（ヌメモンA）「コラコラ、ここは関係者以外立ち入り禁止な

んだじょ！？」

係員（ヌメモンＢ）「早く連れ出すじょ！！」

係員はミソラを取り押さえた。

ミソラ「私は立派な関係者よッ？放しなさい？」

ミソラはそう言って係員を投げ飛ばした。

係員「ひゃ～？」

ミソラ「キュウビモン、あなたは１人じゃないわよ！！私達ブレイブエクセリオンがついてるわ！！」

キュウビモン「ミソラ…。」

ミソラ「キュウビモン、私は信じてるわ…。だから頑張って！！」

すると、ミソラのＤ－アクセルから聖なる光が宿る。

ミソラ「え、何なの！？」

リュウギ「この光は！？」

ミソラはＤ－アクセルを見ると、画面には『ＥＸモード発動可』と書かれていた。

ナルガモン「ミソラ、ＥＸモードだ！！」

ミソラはコクりと頷き、Ｄ－アクセルをキュウビモンに翳した。

ミソラ「ＥＸモード、発動！！」

すると、キュウビモンの回りに激しい突風が舞う。

グレイドモン「な、なんだと！？」

突風が去ると、キュウビモンの身体から光のオーラが纏う。

キュウビモン「私はここで負ける訳にはいかない…。行くぞ、グレイドモン！」

キュウビモンは一瞬にして姿を消した。

グレイドモン「消えた！？」

グレイドモンは回りを見渡すと、背後からキュウビモンが現れる。

キュウビモン「こっちだ！！『鬼火玉！！』」

キュウビモンは尾の先に集めた巨大な炎をいっせいに放った。

グレイドモン「くっ！？」

グレイドモンは双剣グレイダルファーで全て鬼火玉を切り刻む。すると、キュウビモンの姿はなかった。

グレイドモン「何処だ！！」

キュウビモン「これで終わりだ!!」

グレイドモンは上を向くと、キュウビモンは全身に炎を纏っていた。

キュウビモン（体力が限界だ…。この一撃に懸ける!!）

「『狐炎龍!!』」

キュウビモンは全ての力を使ってグレイドモンにぶつけた。

グレイドモン「そうはさせん!!『クロスブレード!!』」

グレイドモンは双剣グレイダルファーを構え、キュウビモンに対抗した。

キュウビモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

グレイドモン「うおぉぉぉぉぉぉぉ!!」

お互いの技と技がぶつかり合うと大爆発し、爆煙が舞い上がる。

ミソラ「キュウビモン!?」

爆煙が去ると、キュウビモンとグレイドモンは立っていた。

リュウギ「やったのか…?」

グレイドモン「ハァ…ハァ…。」

キュウビモン「ハァ…ハァ…。くっ…。」

その時、キュウビモンは力尽きて倒れてしまった。

一同「!?」

（カンカンカーン!!）

リンクモン「キュウビモン、ダウン!!第1戦目はグレイドモンの勝ち!!」

デジモン達「ワァァァァァァァァ!!」

観客席から歓声が沸き上がる。

ミソラ「キュウビモン!!」

ミソラは急いでキュウビモンの元へと駆け付けた。

キュウビモンのEXモードは解けたと同時に、レナモンへと退化した。

レナモン「ミソ…ラ…。すまない…。」

ミソラ「いいのよレナモン…。よく頑張ったわ…。」

ミソラは涙をグッと堪えながらレナモンを撫でる。

ミソラ「でも、どうしてあんな無茶を…?」

レナモン「私は、リュウギとナルガモンにグレイドモンの実力を見せるため、1戦目に出た…。少しグレイドモンの体力を奪った…。

これなら勝てるかもしれない…。」

ナルガモン「レナモン、お前…。」

リュウギ（やっぱりな…。）

すると、グレイドモンは不気味に笑う。

ナルガモン「この野郎、何が可笑しいんだッ？」

グレイドモン「まさか、ここまで俺を追い詰めた事は誉めてやろう…。しかし、俺はまだ本気を出していない！！」

一同「！？」

デジモン達（ザワザワ…）

すると、観客達はざわめく。

レナモン「そんな…！？」

グレイドモン「残念だったな…。お前の努力は無駄に終わったのだ…。」

すると、レナモンは自分の無力さに悔しがる。

レナモン「すまない皆…。私の努力は…」

その時だった。

リュウギ「無駄なんかじゃない…。」

ナルガモン「その通りだ…。レナモンはオレ達ブレイブエクセリオンのために、命懸けで戦ってくれた！！」

すると、リュウギとナルガモンはバトルフィールドに上がる。

ミソラ「リュウギ、ナルガモン…。」

リュウギ「レナモン、ありがとな…。後は俺達に任せろ…。」

ナルガモン「レナモンの努力、ぜってぇに無駄にはしねぇ！！そしてグレイドモン、テメェをブッ飛ばす！！」

リンクモン「メテオナイツのグレイドモン、相手は2人ですがよろしいですか？」

グレイドモン「構わん…。1人ずつ倒すより2人で掛かって来れば楽だ…。こんな茶番、さっさと終わらせてやる！！」

リンクモン「それでは、リュウギ＆ナルガモンｖｓグレイドモン！！どちらかが勝てば準々決勝に進出です！！それでは、レディーファイト！！」

（カーン！！）

４回戦、最終決戦のゴングがコロシアム内に鳴り響くのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

ＥＰ２０　～必死の猛攻！！４回戦ｖｓメテオナイツ！！（前編）～（後書き）

自分が考えたキュウビモンオリジナル必殺技、狐炎帝！！

よく戦いましたキュウビモン…（感）

次回はリュウギ＆ナルガモンｖｓグレイドモン！！

お楽しみに！！

Ｅｐ２１　～必死の猛攻！！４回戦ｖｓメテオナイツ！！（後編）～（前書き）

ついに後編！！

果たしてリュウギとナルガモンはどう立ち向かうのか！？

Ｅｐ２１スタート！！

Ｅｐ２１　～必死の猛攻！！４回戦ｖｓメテオナイツ！！（後編）～

～バトルフィールド～

リンクモン「それでは、レディーファイト！！」

（カーン！！）

ゴングが鳴り響くと、リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。

リュウギ「ナルガモン、進化だ！！」

ナルガモン「おうよ！！」

すると、ナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

リュウギ「行くぞ、ソニックドラモン！！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ソニックドラモン「分かってるぜ！！」

リュウギとソニックドラモンはグレイドモンに接近し、先制攻撃する。

グレイドモン「フッ…。」

グレイドモンは高く飛び上がり、双剣グレイダルファーを構える。

リュウギ「なに!?」

グレイドモン「散れ!!」

グレイドモンは双剣グレイダルファーを振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放った。

ソニックドラモン「危ないリュウギ!!」

ソニックドラモンは危険を感じ、リュウギを投げ飛ばし身代わりになった。

ソニックドラモン「ぐはっ!?」

リュウギは素早く受け身をとった。

リュウギ「ソニックドラモン!?」

ソニックドラモン「こんなのヘッチャラだぜ…。」

グレイドモン「その余裕、いつまで持つのかな?」

地面に着地した後、グレイドモンは双剣グレイダルファーを構えてソニックドラモンに襲い掛かる。

グレイドモン「まずは貴様から倒す！！」

すると、リュウギが立ちはだかり、アルカナムで双剣グレイダルファーを受け止めた。

リュウギ「させるか！うおぉぉぉぉぉ！！」

リュウギは力でグレイドモンを押し返した。

グレイドモン「くっ！」

リュウギ「まだだ！！」

リュウギは素早くアルカナムのトリガーを引いて、グレイドモンを狙い撃つ。

グレイドモンは双剣グレイダルファーで全ての銃弾を弾き返す。

ソニックドラモン「まだまだ！！『アートルムバースト！！』」

ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、口から漆黒に包まれた灼熱の炎を吐き、グレイドモンを焼き払った。

グレイドモン「くっ！！」

ソニックドラモン「ざまぁみやがれ！！」

炎が消えると、グレイドモンはロイヤルブルーのマントで身を守っていたのだ。

リュウギ・ソニックドラモン「！？」

グレイドモン「その程度か…？では、反撃と行こうか…。」

グレイドモンは双剣グレイダルファーを構えて、剣風によって生み出された無数の衝撃波を放った。

ソニックドラモン「くっ！！」

ソニックドラモンはリュウギを連れて素早く交わした。

リュウギ「ソニックドラモン、後ろだ！！」

ソニックドラモン「なに！？」

すると、背後からグレイドモンが現れて双剣グレイダルファーを構える。

グレイドモン「遅い…。『グレイドスラッシュ！！』」

上段より二刀をソニックドラモンの背中に叩き落す豪快な剣を放った。

ソニックドラモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

無防備であるソニックドラモンは地面に激しく叩き付かれる。

ミソラ「リュウギ、ソニックドラモン！？」

一方、観客席で見守るキャンドモンとタスクモンは驚愕する。

キャンドモン「あひゃゃゃゃゃゃゃ！？なんて強さなんだよアイツ！？メッタ打ちにされてるってヤバイって！？」

タスクモン「このままじゃマズイぞ…。」
（頑張れリュウギ、ソニックドラモン…。）

―――――――――――

ソニックドラモン「チクショウ…。」

ソニックドラモンはゆっくりと起き上がると、リュウギはソニックドラモンの心配をする。

リュウギ「ソニックドラモン、大丈夫か…？」

ソニックドラモン「あぁ…。オレは大丈夫だ…。」

グレイドモン「フフフ…。やはりその程度の力か…。ここまで勝ち残ったのはマグレに過ぎん…。」

ソニックドラモン「何だとッ？」

リュウギ（どうしたらいい…？ここから一気に逆転できる方法が必ずあるハズだ…。）

リュウギは逆転できる作戦を考える。

グレイドモン「所詮、このグレイダルファーの足元には及ばないのだ！！」

グレイドモンは双剣グレイダルファーの刃先をリュウギ達に向けた。
その時、リュウギは作戦を思い付いた。
リュウギ（そうだ、アイツの持ってる剣を何とかすれば！！）
グレイドモン「何度やっても結果は同じ…。潔く降参しろ…。」
ソニックドラモン「誰が降参するかよ…。」
リュウギ「例えどんな状況に陥っても俺達は最後まで諦めない…。
それに、敵に背中を見せるのは俺の流儀に反する！」
ソニックドラモン「ここで背を向けたら、レナモンに合わせる顔がないからな！！」
すると、リュウギのＤ－アクセルが反応する。
リュウギ「！？」
リュウギはＤ－アクセルを見ると、画面には『ＥＸモード発動可』と書かれていた。
リュウギ「ソニックドラモン、ＥＸモードだ！！」
ソニックドラモン「おうよ！！」
リュウギはＤ－アクセルをソニックドラモンに翳して叫ぶ。
リュウギ「ＥＸモード、発動！！」

すると、ソニックドラモンの回りに激しい突風が舞う。

グレイドモン「またか…。」

突風が去ると、ソニックドラモンの身体から光のオーラが纏う。

ソニックドラモン「さて、ＣＯＯＬに反撃と行こうぜ！！」

リュウギ「ソニックドラモン、アートルムバーストだ。」

ソニックドラモン「了解！『アートルムバースト！！』」

ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、口から漆黒に包まれた灼熱の炎を吐いた。

グレイドモン「何度やっても同じだ！！」

グレイドモンはロイヤルブルーのマントを広げて身を守る。

リュウギ「ソニックドラモン、これは賭けだ…。俺の合図が出るまでアートルムバーストを止めるなよ。」

ソニックドラモン「！？」

リュウギはアルカナムを地面に突き刺して叫ぶ。

リュウギ「デジサモン、発動！！」

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、アルカナムを突き刺し

た地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

リュウギ「頼む、ゴマモン！！」

すると、魔法陣からゴマモンが実体化される。

ゴマモン「呼んだか、リュウギ？」

リュウギ「ゴマモン、俺に水をぶっかけてくれ！」

ゴマモン「任せとけ！」

ゴマモンは口から水を吐いて、リュウギをびしょ濡れにした。

リュウギ「ありがとな！」

リュウギはそう言って炎の中へと入っていった。

ソニックドラモン（！？）

ゴマモン「リュウギ！？」

一方、グレイドモンはマントで身を守っていた。

グレイドモン（いつまで続くのだ？まぁいい、体力を消耗するだけだ…。攻撃を止めた瞬間に決める！！）

その時だった。リュウギが炎の中から現れる。

グレイドモン「なに！？」

リュウギはアルカナムを構えてグレイドモンに踏み込んで近づいた後、上空に斬り上げるように振った。

グレイドモン「くっ！！」

グレイドモンはとっさの判断で双剣グレイダルファーをクロスにしてアルカナムを受け止めた。

リュウギ（今だ！！）

リュウギはアルカナムのトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発する。

するとグレイドモンは力負けし、双剣グレイダルファーを弾き返して地面に突き刺さった。

グレイドモン「しまった！？」

リュウギ「今だ、ソニックドラモン！！」

ソニックドラモン「待ってたぜ！！」

ソニックドラモンはアートルムバーストを止め、両肘の鋭いブレイドを構えると、ブレイドから漆黒の炎に包まれる。

ソニックドラモン「喰らいやがれ！！」

ソニックドラモンは目にも止まらない早さで丸腰となったグレイドモンを追撃する。

グレイドモン「!?」

ソニックドラモン「『ヒドゥンスラッシュ!!』」

ソニックドラモンは全ての力を使いきり、グレイドモンを切り刻んだ。

グレイドモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

（バカな…!?この俺が…負け…た。）

すると、グレイドモンは力尽きて倒れた。

（カンカンカーン!!）

リンクモン「グレイドモン、ダウン!!最終戦はリュウギ&ソニックドラモンの勝ち!!よって勝者、ブレイブエクセリオン!!」

デジモン達「ワァァァァァァァァ!!」

その時、観客席から巨大な歓声がコロシアム内に響き渡る。

ミソラ・ゴマモン「やった!!」

レナモン「よくやったよリュウギ、ソニックドラモン…。」

ソニックドラモンはＥＸモードが解けたと同時に、ナルガモンへと退化した。

ナルガモン「Ｊａｃｋｐｏｔ!!」

リュウギ「やったなナルガモン！」

ナルガモン「おうよ！！」

（パシィーン！）

リュウギとナルガモンはハイタッチをした。

ミソラ「それよりリュウギ、どうしてあんな無茶を…！？」

リュウギ「これしか方法はなかったんだ。だからゴマモンを呼び出して水をぶっかけて貰ったんだ。ありがとな、ゴマモン。」

ゴマモン「へへへ…、いいって事よ♪ほんじゃ、必要になったらまた呼んでくれよな♪」

デジサモンの効果が切れ、ゴマモンは静かに消えていった。

ナルガモン「よっしゃ！！これで準々決勝に進出だぜ♪」

ナルガモンは嬉しさの余りに高く飛び上がる。

リュウギ「……。」

すると、リュウギはグレイドモンに近づく。

グレイドモン「くっ…。ここで敗れるとはな…。」

リュウギ「グレイドモン…。」

グレイドモン「何の用だ…?笑いに来たのか…?」

すると、リュウギはゆっくりと手を差し伸べた。

リュウギ「違うよ…。いいバトルだったぜ…。またやろうな…。」

グレイドモン「……あぁ。」

すると、グレイドモンはリュウギの手をガッチリと握手をした。

すると、観客席から歓声や拍手が沸き上がるのであった。

リンクモン「本日のコロシアムはこれにて終了します!決勝トーナメントは明日行う予定です!!尚、決勝トーナメントに進出したチームは試合開始前に抽選を行います!!それでは!!」

リンクモンはそう言ってバトルフィールドから退場した。

そして…。

～コロシアム控え室～

リュウギ「決勝トーナメントかぁ…。」

キャンドモン「やりましたねリュウギさん♪ボクチン、ずっと勝つと信じていましたよ♪」

ミソラ「ウソつけ…?」

ナルガモン「次はどんな奴なのか楽しみだぜ♪」

？？？「俺に勝ったからってイイ気になるなよ…。」

すると、グレイドモンが控え室に入ってくる。

リュウギ「グレイドモン！？」

ナルガモン「この野郎、何の用だ！？」

グレイドモン「俺に勝ったのは運が良いと思え…。」

ナルガモン「なんだとッ？」

グレイドモン「それより、お前達に頼みたい事があってな…。」

ミソラ「頼みたい事？」

グレイドモン「俺の代わりに優勝し、マルスモンに会って欲しい…。」

ナルガモン「テメェに言われなくても優勝するっつうのッ？」

リュウギ「そう言えば、マルスモンに会ってどうするつもりだったんだ？」

グレイドモン「俺は別にマルスモンなんて興味はない。それは、ある人に借りを返すためだ…。」

リュウギ「ある人…？」

グレイドモン「あぁ…。ある日、俺はイビルスに操られてしまった。そんな時、そいつから助けて貰ったんだ…。そいつに借りを返すため、俺はこの大会に出場して優勝し、助けてくれた奴らにマルスモンに会わせる事が唯一の目的だった。」

リュウギ「でも、俺達に敗れた…。」

ミソラ「でもさぁ、わざわざグレイドモンに頼まなくても自分達で出場すればいいのに…。」

グレイドモン「俺もそう言った…。しかし、アイツは俺にこう言った…。」

『オレ達はまだやるべき事があるんだ…。失った絆を取り戻すためにね…。だから先にコロシアムに出場しといてよ…。後で必ず駆け付けるから…。』

リュウギ「失った絆を取り戻す…？」

グレイドモン「それから奴らは俺にコロシアムを任された…。本来なら、奴らと共に出場していたのだが、間に合わなかったのだ。」

リュウギ「なるほどな…。」

グレイドモン「だから頼む…。」

リュウギ「事情は分かった…。俺達に任せな…。」

グレイドモン「いいのか…？」

リュウギ「あぁ。それに、俺達は優勝を目指すためにここに来たんだからな！」

グレイドモン「感謝する…。奴らが来たら説明しておく…。」

リュウギ「あぁ、頼むよ。」

すると、グレイドモンは背を向けて控え室から出ようとする。

グレイドモン「リュウギ、そしてナルガモン、次戦う時は、絶対に負けないからな…。」

ナルガモン「おう、いつでも相手になってやるぜ！！」

グレイドモン「あぁ…。」

グレイドモンは小さく笑い、控え室から出ていった。

リュウギ「ナルガモン、お前の力、やっと認めてくれたようだな…。」

ナルガモン「あぁ…。」

レナモン「良きライバルだな…。」

ミソラ「それよりみんな、早く宿でも探して明日に備えて休みましょ！！レナモンの傷を治さなきゃいけないし…。」

リュウギ「そうだな…。」

ナルガモン「オレ、疲れたぜ～？」

キャンドモン「それではボクチン、ミソラと一緒に愛のスィートルームで…」

すると、ミソラはキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん？」

ミソラ「却下…？」

リュウギ「さ、行こうぜ！」

こうしてリュウギ達はマヤルシティにある宿を探しに行くのであった。

～マヤルコロシアム　受け付け～

謎の人物はトーナメント表を眺めていた。

？？？「一足遅かったな…。やっぱりグレイドモンだけじゃ厳しかったんだ…。」

すると、謎の人物の肩に乗るパートナーデジモンが謎の人物に話し掛ける。

？？？「どうするんだよ？もうちょっと早かったら、オレも出場して、ブレイブエクセリオンなんか楽勝だったのによ…。せっかくの手掛かりを台無しにたんだぞ…？」

？？？「う～ん…。」

謎の人物は腕を組んで考えると、町の住民の会話が聞こえてくる。

ピヨモン「ねぇ観た、さっきの戦い？」

フローラモン「観た観た！ブレイブエクセリオンとメテオナイツでしょ？人間とデジモンのコンビネーション！素晴らしかったねぇ♪」

すると、謎の人物のパートナーデジモンと謎の人物はお互いに目を見合わせる。

？？？「おい、まさか…？」

？？？「そのまさかだね…。明日の決勝トーナメント、観てみよう…。」

謎の人物はトーナメント表に載っているブレイブエクセリオンをジッと見つめる。

？？？「ブレイブエクセリオンか…。」

（もしかしたら、このチームにアイツがいるのかもしれないな…。）

謎の人物はそう思って受け付けを後にし、宿を探しにいくのであった。

そして、次の日…。

～マヤルコロシアム～

リンクモン「皆さん、大変長らくお待たせしました！！只今から、決勝トーナメントの抽選を行います！！」

デジモン達「ワァァァァァァァァァ！！」

リュウギ「ついに来たか…。」

ナルガモン「もう待ちきれねぇぜ～！！」

リンクモン「では、決勝トーナメントの対戦相手を発表します！！こちらです！！」

すると、決勝トーナメント表が巨大スクリーンに映し出された。

＞ｉ２３０１６―１２９８＜

【絵、トリプルミーミング】

リュウギ「サイレントナイツ…？まさか！？」

？？？「準々決勝の相手がまさかお前達とはなぁ…。」

リュウギは振り向くと、ブレイブエクセリオンの相手はカイ率いるサイレントナイツだったのだ。

リュウギ「カイ！？」

カイ「驚くのはまだ早い…。次の相手を見ろ…。」

リュウギ達は巨大スクリーンを見ると、次の対戦相手はエグザ率い

るエグザウィンコルムだった。

ナルガモン「なるほどな…。つまり、お前らに勝てばエグザと戦えるんだな…？」

カイ「俺に勝つだと？笑わせるな…。エグザと戦うのはこの俺だ…。」

ガオモン「メテオナイツにで勝ったからと言って、あまりイイ気になるなよ…。所詮、マグレに過ぎないのだからな…。」

ナルガモン「やかましいんだよこの犬ッコロがッ？」

ガオモン「俺は犬じゃないッ？」

ナルガモンとガオモンは睨み合い、火花が激しく散る。

カイ「やめろガオモン…。みっともない…。」

ガオモン「すいません…。」

リュウギ「これも何かの縁だ…。今度こそ決着を着けてやるぜ、カイ！！」

リュウギはそう言って拳を作って自らの手のひらに打ち込んだ。

カイ「御縞　リュウギ…。その無駄口、二度と叩かないようにしてやる…。」

リンクモン「それでは、決勝トーナメントに出場したチームはそれ

ぞれの控え室で準備をお願いします！！」

決勝トーナメントに出場したチームはそれぞれの控え室へと向かった。

こうして、スレッド大陸の頂点が決まる決勝トーナメントが開幕されるのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

Ｅｐ２１　～必死の猛攻！！４回戦ｖｓメテオナイツ！！（後編）～（後書き）

そしてグレイドモンと共に出場しようとした謎の人物とは？

次回は準々決勝！！なんと相手はサイレントナイツ！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ２２　～準々決勝ｖｓサイレントナイツ！！爆裂進化　ドラグナモン！！～

ＧＷ（ゴールデンウィーク）スペシャル！！

今回は豪華２本立てです！！

ついに準々決勝！！

ついにナルガモンが完全体に進化する！？

Ｅｐ２２スタート！！

ＥＰ２２　～準々決勝ｖｓサイレントナイツ！！爆裂進化　ドラグナモン！！～

～マヤルコロシアム～

準々決勝、エグザウィンコルムｖｓビッグダイノス。

トリケラモン「う…。」

ブラキモン「くっ…、強い…。」

ビッグダイノスのメンバー、トリケラモンとブラキモンはやられ、残るはメタルティラノモンだけだった。

メタルティラノモン「ここまで来たことは誉めてやる…。だが、俺様には勝てん！！」

エグザ「フッ…。」

リンクモン「どちらかが倒れれば、準決勝に進出です！！では、レディーファイト！！」

（カーン！！）

ゴングが鳴ると、メタルティラノモンは右腕からミサイルが発射される。

メタルティラノモン「喰らえ！！『ギガデストロイヤー？！！』」

すると、エグザは背中に背負ってある大剣を取り出し、ミサイルを

真っ二つに斬った。

メタルティラノモン「なに!?」

エグザ「どうしたぁ、もうお仕舞いか?だったら、こちらから行くぞ…。」

エグザは大剣を地面に突き刺すと、分裂して二刀流となった。

メタルティラノモン「くっ!!『ヌークリアレーザー!!』」

メタルティラノモンは左腕からエネルギー弾を発射した。

エグザ「無駄だ…。」

エグザは素早く交わし、二刀流をクロスして構え、メタルティラノモンをX状にして切り刻んだ。

メタルティラノモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

メタルティラノモンは力尽きて倒れた。

(カンカンカーン!!)

リンクモン「メタルティラノモン、ダウン!!エグザの勝利!!よってエグザウィンコルム、準決勝に進出!!」

デジモン達「ワァァァァァァァァ!!」

観客席から歓声が沸き上がる。

エグザ「フン…。」

エグザはフンと鼻を鳴らし、コロシアムの控え室へと向かった。

～マヤルコロシアム　通路～

エグザ「あと2勝か…。だが…」

すると、カイとガオモンが控え室から出てきた。

エグザ「次か…。ま、精々頑張れよ…。」

カイ「あんな口先だけの奴、すぐに潰してやる…。」

カイとエグザがすれ違うと、エグザは口を開く。

エグザ「アドバイスだ…。あまりアイツを侮っていると、痛い目にあうぞ…。」

カイ「全く役に立たないアドバイスだな…。首洗って待っていろ、エグザ…。」

カイはそう言ってバトルフィールドへと向かった。

すると、エグザは小さく笑う。

エグザ「年長者に従わねぇとは、生意気なガキだな…。頑張れよ、リュウギ…。」

エグザはそう言って何処かへと去っていった。

～バトルフィールド～

リンクモン「ついに来ました！！人間同士の対決！！これは前代未聞の戦いです！！ではまず始めに、メテオナイツを見事倒したブレイブエクセリオンの登場です！！」

すると、リュウギ達がバトルフィールドに現れる。

キャンドモン「頑張ってくださいみなさーん！！」

ミソラ（リュウギ…。）

ミソラはゴクリと息を呑んで、リュウギ達を見守る。

リンクモン「対するブレイブエクセリオンの相手は、サイレントナイツの登場です！！」

すると、カイ達がバトルフィールドに現れる。

デジモン達「ワァァァァァァァァァ！！」

両チームがバトルフィールドに上がると、観客席からとてつもない歓声が沸き上がる。

？？？「あれがグレイドモンを倒したブレイブエクセリオンかぁ…。どうやら、アイツとは全く無関係だな…。」

観客席にいる謎の人物のパートナーデジモンは謎の人物に話し掛け

る。

？？？「みたいだな…。でも、見て損はないと思うよ…。」

―――――――――――――

リンクモン「それでは第1戦目、両チームバトルフィールドへ！！」

カイ「ガオモン、いけるか…？」

ガオモン「私はいつでもいけます…。」

ガオモンはお辞儀した後、バトルフィールドに上がる。

ナルガモン「あの犬ッコロかぁ…。よし、ここは…」

ナルガモンはバトルフィールドに上がろうとすると、レナモンが先にバトルフィールドに上がる。

レナモン「私が行こう…。」

ナルガモン「っておい？」

レナモン「その間にナルガモンは相手の動きをしっかりと見ておくんだ…。」

ナルガモン「わ、分かったよ…。」

リュウギ「レナモン、あまり無茶をするなよ…。」

レナモン「あぁ…。言ってくる…。」

レナモンとガオモンはバトルフィールドの中央へと立つ。

レナモン「1つ聞こう…。お前の目的はなんだ…?」

ガオモン「俺は我が主の忠実なるパートナーデジモン…。例え我が主がどう考えていようが、俺はただ我が主に従うまでだ…。」

レナモン「そうか…。」

リンクモン「では、第1戦目はレナモンvsガオモン!レディーファイト!!」

ゴングが鳴った瞬間、観客席にいるミソラはD-アクセルでレナモンに翳した。

すると、レナモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

レナモン「レナモン、進化!!」

『キュウビモン!!』

カイ「進化か…。ガオモン…。」

ガオモン「はい!」

カイはD-アクセルでガオモンに翳した。すると、ガオモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ガオモン「ガオモン、進化！！」

『ガオガモン！！』

ナルガモン「アイツ、進化しやがった！？」

リュウギはＤ－アクセルでガオガモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル『ガオガモン、成熟期、獣型、データ種、必殺技はスパイラルブロー。』

リュウギ「キュウビモン、油断するなよ！」

キュウビモン「分かっている…。」

ガオガモン「『ダッシュダブルクロー！！』」

ガオガモンは見えないスピードで接近して放つ。

キュウビモンは素早く交わし、尾の先に集めた炎をいっせいに放つ。

キュウビモン「『鬼火玉！！』」

ガオガモン「くっ！！」

ガオガモンは素早く交わした。

リュウギ「スピードはほぼ互角か…。」

カイ「ガオガモン、お前の力を見せてやれ…。」

ガオガモン「『スパイラルブロー！！』」

ガオガモンは口から渦巻状の強力な風を一気に放つ。

キュウビモン「！？」

キュウビモンは交わそうとする。しかし交わしきれず、まともに喰らってしまった。

キュウビモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ミソラ「キュウビモン！？」

カイ「まだだ…。」

ガオガモン「『ガオガハウンド！！』」

すると、ガオガモンはキュウビモンに接近し、強靭な歯で噛み付いた。

キュウビモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ナルガモン「マズイ！？このままじゃやられちまうぞ！？」

キュウビモン「くっ！！」

キュウビモンは力を振り絞って尾の先に集めた炎をガオガモンにぶつけた。

ガオガモン「チッ！！」

ガオガモンは素早く交わし、キュウビモンは解放された。

キュウビモン「ハァ…ハァ…。」

カイ「終わらせろ…。」

ガオガモン「はぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ガオガモンはキュウビモンに接近する。

キュウビモン（こうなれば…。）

キュウビモンは素早く上空へと飛び上がって交わした。そして飛び上がったと同時にキュウビモンは尾の先に集めた９つの炎を上空へとばら蒔いた。

ガオガモン「なに！？」

すると、上空にばら蒔く鬼火はキュウビモンを照らし、地面から９つの影が実体化した。実体化した９つの影はガオガモンを押さえ付けて身動きを取れなくする。

ガオガモン「くっ！？」

上空に舞うキュウビモンは全身に炎を纏った。

キュウビモン「終わりだ！！『狐炎帝！！』」

上空へとばら蒔いた9つの鬼火と全身に炎を纏ったキュウビモンは拘束したガオガモンに全てをぶつけて爆発した。

爆煙の中からキュウビモンが現れる。

リュウギ「よしっ!!」

ナルガモン「いいぞキュウビモン!!」

カイ「フッ…。」

すると、カイはガオガモンがやられたにも関わらず、不気味に笑う。

リュウギ「!?」

（アイツ、なんで笑ってるんだ…?）

カイ「ガオガモン、完全体に進化だ…。」

一同「!?」

キュウビモン「完全体だと!?」

カイはD-アクセルでガオガモンに翳した。すると、ガオガモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ガオガモン「ガオガモン、超進化!!」

『マッハガオガモン!!』

完全体に進化したマッハガオガモンは爆煙を切り開いた。

キュウビモン「バ、バカな…！？」

リュウギはＤ－アクセルでマッハガオガモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「マッハガオガモン、完全体、サイボーグ型、データ種、必殺技はガオガトルネード。」

マッハガオガモン「終わらせてやる…。」

すると、マッハガオガモンは最大推力でキュウビモンを包囲し超高速連打を放った。

マッハガオガモン「『ガオガトルネード！！』」

キュウビモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

キュウビモンは地面に激しく叩き付かれ、やがて力尽きてしまった。

（カンカンカーン！！）

リンクモン「キュウビモン、ダウン！！第１戦目はマッハガオガモンの勝利！！」

デジモン達「ワァァァァァァァァァ！！」

観客席から歓声が沸き上がる。

リュウギ「キュウビモン！？」

リュウギとナルガモンは慌ててキュウビモンの元へと駆け付ける。

すると、キュウビモンはレナモンへと退化した。

ナルガモン「レナモン、しっかりしろ！！」

レナモン「すまない…。」

リュウギ「いや、よくやったよレナモン…。後は俺達に任せろ…。」

すると、係員が担架を持って現れた。リュウギとナルガモンはレナモンを担架に乗せた。

係員（ヌメモン）「レナモンは医務室へ運びますじょ！」

リュウギ「あぁ、頼む。」

係員はレナモンを医務室へと運び込まれた。

リュウギはＤ－アクセルでミソラと通信する。

リュウギ「ミソラ、悪いがレナモンを頼む。」

ミソラ『分かったわ…。リュウギ…。』

リュウギ「？」

ミソラ『負けないでね…。』

リュウギ「あぁ、任せろ…。」

リュウギはそう言ってＤ－アクセルの通信を切る。

カイ「さっさとしてくれないか…？こっちは早く終わらせたいのでな…。」

リュウギ「くっ…。」

リンクモン「それではブレイブエクセリオン、バトルフィールドへ！！」

ナルガモン「リュウギ、行かせてくれ…。」

リュウギ「ナルガモン…。」

ナルガモン「あの野郎（カイ）をブッ飛ばしたい所だけど、レナモンを倒したあの犬ッコロも気に食わねぇ…。だから行かせてくれ…。」

リュウギ「分かった…。任せたぞナルガモン。」

ナルガモン「任せとけ！！」

ナルガモンはバトルフィールドに上がる。

リュウギ「ナルガモン、進化だ！！」

リュウギはＤ－アクセルでナルガモンに翳した。

すると、ナルガモンのデータは上書きされ、姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

マッハガオガモン「フン、貴様のような奴に何ができるというのだ…？」

ソニックドラモン「そうやって犬みたいにワンワン吠えてな！！って犬だったな？」

マッハガオガモン「何だと…？」

すると、マッハガオガモンは鋭い目付きで睨む。

リンクモン「第2戦目、ソニックドラモンｖｓマッハガオガモン！！レディーファイト！！」

（カーン！！）

ゴングが鳴ると、マッハガオガモンは背中に背負う莫大な推進力をもつロケットエンジンを使い、接近戦に持ち込む。

ソニックドラモン（早い！？）

マッハガオガモン「『ウィニングナックル！！』」

マッハガオガモンは超打撃力を誇る拳の一撃を放った。

ソニックドラモン「かはっ！？」

そして、マッハガオガモンは目にも止まらない早さで連続パンチを繰り出した。

ソニックドラモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

リュウギ「ソニックドラモン！？」

マッハガオガモンはソニックドラモンを蹴り飛ばし、フィニッシュを決めた。

ソニックドラモン「ぐはっ！？」

ソニックドラモンは地面に激しく叩き付かれた。

リュウギ「ソニックドラモン、大丈夫か！？」

ソニックドラモン「ク、クソッ…。」

ソニックドラモンは立ち上がろうとするが、かなりのダメージを受けたため、立ち上がるだけでもやっとであった。

マッハガオガモン「所詮、その程度か…。負け犬は潔くギブアップしろ…。」

ソニックドラモン「へへっ…。犬ッコロのテメェに言われたかねぇんだよ…。」

（ニヤリ…）

マッハガオガモン「すぐに終わらせてやる…。『ガオガトルネード！！』」

ガオガモンは最大推力でソニックドラモンを包囲し超高速連打を放った。

ソニックドラモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ソニックドラモンはボロボロになり、地面に激しく叩き付かれた。

リュウギ「ソニックドラモン！！」

リュウギは応戦しようと右手を広げてアルカナムを取り出す。

ソニックドラモン「来るんじゃねぇ！！！！」

その時、ソニックドラモンは大声でリュウギを止める。

リュウギ「！？」

ソニックドラモン「これはオレの戦いだ…。最後までやらせてくれ…。」

リュウギ「ソニックドラモン…。」

ソニックドラモン「時化た面するヒマがあるなら…、オレを信じろ…。」

リュウギ「……。」

マッハガオガモン「自分の立場が全く解っていないようだな…？全く哀れだ…。」

ソニックドラモン「解ってなくて悪かったな…。言っとくけど、オレは引き下がるつもりなんてハナッからねぇんだよ！！」

マッハガオガモン「減らず口はそれまでだ！！」

マッハガオガモンは超高速なパンチを繰り出した。

ソニックドラモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

マッハガオガモンの戦いを見てカイは静かに笑う。

カイ「フッ…、終わったな…。」

リュウギはマッハガオガモンに勝つための方法を考える。

リュウギ（そうだ、ＥＸモードだ！！そうすればマッハガオガモンと互角に戦えるハズだ！！）

リュウギはＤ－アクセルの画面を見ると、『ＥＸモード、不可』と書いてあった。

リュウギ「ＥＸモードが発動できない！？」

（クソッ、どうしたらいいんだ！？）

ＥＸモードが発動できない理由は、リュウギの迷いのある心とソニックドラモンの心が片寄っていたからだ。

その間に、ソニックドラモンはマッハガオガモンの超高速パンチを受けていた。

ソニックドラモンは必死でガードをする。

ソニックドラモン「くっ！！」

リュウギ「ソニックドラモン、耐えてくれ…。」

マッハガオガモン「何がエクセリオンだ？お前達のような奴が口先でエクセリオンを語るなぁぁぁぁぁぁッ！！」

マッハガオガモンは握り拳を作ってフィニッシュを決めようとする。

リュウギ「ソニックドラモーーーン！！」

ソニックドラモン「！！」

その時だった。ソニックドラモンは片手でパンチを受け止めた。

カイ「！？」

マッハガオガモン「なに！？」

ソニックドラモン「黙って聞いてりゃ、言いたい放題言いやがって…。解ったような口聞いてんじゃねぇぞテメェ…。」

リュウギ「ソニックドラモン…。」

ソニックドラモン「テメェに口先だろうが負け犬だろうが何て言おうが勝手にしてな…。でもなぁ、オレ達ブレイブエクセリオンのプライド、そして絆という糸…。テメェらごときに切られてたまるか

ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

その時、リュウギのＤ－アクセルから聖なる光が生じる。

リュウギ「Ｄ－アクセルが！？」

カイ「なに！？」

観客席で見ていた謎の人物のパートナーデジモンは驚愕する。

？？？「あの光は…！？」

すると、謎の人物は呟く。

？？？「どうやら、あのデジモンの叫びが心を解き放ったみたいだな…。」

すると、ソニックドラモンの身体から聖なる光が生じる。

ソニックドラモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

すると、ソニックドラモンのデータは上書きされ、姿が変わる。

ソニックドラモン「ソニックドラモン、超進化！！」

『ドラグナモン！！』

カイはＤ－アクセルでドラグナモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ドラグナモン、完全体、サイボーグ型、ワクチン種、

必殺技はデッドリーアートルム。」

＞i２３１００―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

リュウギ「ソニックドラモンが完全体に進化した…！？」

ドラグナモン「さて、ＣＯＯＬに反撃だぜ！！」

マッハガオガモン「返り討ちにしてやる！！『ウィニングナックル！！』」

マッハガオガモンは超打撃力を誇る拳の一撃を放った。

ドラグナモン「行くぜ！！『」

ドラグナモンは両腕の鋭い刃、ヒドゥンアサルトを構え、背中に背負うロケットエンジンを使ってマッハガオガモンに急接近する。

マッハガオガモン「なに！？」

ドラグナモン「『ヒドゥンセイバー！！』」

ドラグナモンはマッハガオガモンが必殺技を放つ前に切り裂いた。

マッハガオガモン「がはっ！？」

リュウギ「効いてる！！」

ドラグナモン「オレより目立とうなんざ、百万年早ぇんだよ！！」

ドラグナモンはロケットエンジンを発射させ、勢いつけてマッハガオガモンに急接近する。

マッハガオガモン「くっ！！『ガオガトルネード！！』」

マッハガオガモンは超高速連打を放つ。すると、ドラグナモンとマッハガオガモンはスピード同士の打ち合いが始まる。

ドラグナモン「オラァァァァァァ！！」

マッハガオガモン「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！」

リュウギ「凄い…。」

カイ「何をしてる！！早く終わらせるんだ！！」

マッハガオガモン「『ウィニングナックル！！』」

ドラグナモン「『ヒドゥンセイバー！！』」

お互いの技がぶつかり合うと、ドラグナモンとマッハガオガモンはお互いに後方へ下がって体勢を立て直す。

ドラグナモン・マッハガオガモン「ハァ…ハァ…。」

ドラグナモン「へへっ…。やるじゃねぇかよ…。」

マッハガオガモン「お前もな…。」

すると、観客席で見ていた謎の人物は小さく呟く。

???「お互いの体力はほぼ限界だ…。恐らく、次で決まる…。」

マッハガオガモン「これで決める!!」

すると、マッハガオガモンはロケットエンジンを発射させてドラグナモンに接近する。

ドラグナモン「来な!!」

マッハガオガモン「『ウィニングナックル!!』」

マッハガオガモンはありったけの力で拳に込め、超打撃力を誇る拳の一撃を放った。

ドラグナモン「くっ!!」

すると、ドラグナモンはマッハガオガモンの拳をまともに喰らった。

リュウギ「ドラグナモン!?」

マッハガオガモン（勝った…。）

ドラグナモン「捕まえたぜ…。」

（ニヤリ…）

ドラグナモンは喰らったのではなく、体全体でマッハガオガモンの拳を受け止めていたのだ。

マッハガオガモン「なに！？」

ドラグナモン「とっておきを見せてやるぜ！！」

ドラグナモンは背中に背負うロケットエンジンを上空へと打ち上げた。すると、ロケットエンジンに仕込まれた大量の追尾型ミサイルを一斉に発射される。大量の追尾型ミサイルはマッハガオガモンに向かっていく。

マッハガオガモン「くっ！！放せ！！」

ドラグナモン「そんなに放して欲しいか？だったらお望み通り、放してやるよ！！」

ドラグナモンは受け止めたマッハガオガモンの拳を放したとたん、思いきり地面に叩き付け、直ぐ様後方へと下がった。

マッハガオガモン「なに！？」

ドラグナモン「喰らいやがれぇ！！」

ドラグナモンは両胸の砲門から漆黒のミサイルをマッハガオガモンに目掛けて発射する。

ドラグナモン「『デッドリーアートルム！！』」

すると、全てのミサイルはマッハガオガモンに命中して大爆発する。

マッハガオガモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

カイ「マッハガオガモン！？」

爆煙が去ると、マッハガオガモンは力尽きて倒れていた。

ドラグナモン「Ｊａｃｋｐｏｔ…。」

（ニヤリ…）

（カンカンカーン！！）

リンクモン「マッハガオガモン、ダウン！！第２戦目はドラグナモンの勝ち！！」

デジモン達「ワァァァァァァァァァァ！！」

観客席から歓声が沸き上がる。

リュウギ「よくやった、ドラグナモン！！」

ドラグナモンは全ての力を使い果たし、幼年期デジモン、ナナモンへと退化する。

ナナモン「へへっ、どんなもんだい♪」

対するマッハガオガモンも全ての力を使い果たし、ワニャモンへと退化した。

ワニャモン「すみません…。私が不甲斐ないばかりに…。」

カイ「よく戦った…。後は俺がやる…。」

カイはそう言ってバトルフィールドに上がる。

ナナモン「頼んだぜリュウギ、あとアイツをブッ倒せば準決勝進出だぜ!!」

リュウギ「あぁ。後は俺に任せろ…。」

リュウギはそう言ってバトルフィールドに上がる。

リュウギとカイはバトルフィールドの中心に立ち、お互い睨み合う。

カイ「最初に忠告したが、俺の目的はエグザを倒す事だ…。それを邪魔をする奴は、例え同じエクセリオンであろうが潰す…。引き下がるつもりはないか…?」

リュウギ「誰が引き下がるかよ…。みんなの力があるからここまで来れたんだ…。それに、敵に背中を見せるのは俺の流儀に反する!正々堂々、真っ向勝負だ!!」

カイ「また口先だけか…。いいだろう…。そんなくだらない友情ごっこ…、この手で捻り潰してやる!!」

カイはそう言って右手を広げると、巨大手裏剣、ギルガメッシュが現れる。

対するリュウギも右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

リンクモン「ついに最終決戦!!ブレイブエクセリオンのリュウギ

ｖｓサイレントナイツのカイ！！エグザと戦うのは果たしてどちらか！？では、レディーファイト！！」

（カーン！！）

準々決勝、最終決戦のゴングがコロシアム内に鳴り響くのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ２２　～準々決勝ｖｓサイレントナイツ！！爆裂進化　ドラグナモン！！～

次回は宿命の対決！！

リュウギｖｓカイ！！！！！

続く！！

Ｅｐ２３　～リュウギｖｓカイ！！受け継がれし力、キズナドライブ炸裂！！～

ついに宿命の対決！！

果たしてどちらが勝つのか！？

Ｅｐ２３スタート！！

EP23　～リュウギvsカイ！！受け継がれし力、キズナドライブ炸裂！！～

～バトルフィールド～

準々決勝最終決戦。リュウギvsカイ。どちらかが勝てばエグザ率いるエグザウィンコルムと戦う事ができる。

リンクモン「では、レディーファイト！！」

（カーン！！）

最終決戦のゴングが鳴り響いた。

カイ「はぁ！！」

カイは巨大手裏剣、ギルガメッシュをリュウギに投げ付けた。

リュウギ（修行の成果、見せてやる！！）

リュウギはアルカナムでギルガメッシュを弾き返した後、接近戦に持ち込む。

カイ（接近戦に持ち込んだか…。）

「β！！」

すると、弾き返されたギルガメッシュは巨大手裏剣から分裂して、2つの刃へと変形した。

カイは素早くギルガメッシュを掴み取ってアルカナムの斬撃を受け

止めた。

リュウギ（今だ！！）

リュウギはトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発する。

カイは爆発に巻き込まれ、爆煙が舞い上がる。

キャンドモン「よし！これでアイツは木っ端みじんです！！」

すると、カイは爆煙を切り開き、ギルガメッシュで反撃をする。

キャンドモン「うそーん！？」

リュウギはアルカナムで斬撃を防ぎ、素早く後方へ下がった。

リュウギ「やっぱりな…。」

（ショウさんと同様、不屈の精神の持ち主だな…。）

カイ「そんなもの、俺には通用しない…。α！！」

カイは2つの刃を上空へと放り投げた。すると、2つ刃から小型鎌へと変形し、掴み取る。

リュウギ（小型鎌に変形したか…。）

カイ「どうした？さっきの威勢は何処へ行ったんだ…？来ないのならこっち行かせて貰う！！」

カイはリュウギに向かって接近し、ギルガメッシュを振り回す。

リュウギ「くっ！！」

リュウギはアルカナムで斬撃を受け止め、反撃する。するとカイはギルガメッシュを構えて反撃して打ち合いが始まる。お互いの刃と刃がぶつかりあい、激しく火花が散る。それは一切、気を抜けない打ち合いだった。

ナナモン「ス、スゲェ…！？」

ワニャモン「カイ…。」

リュウギ・カイ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

刃と刃がぶつかり合った瞬間、リュウギとカイの周りに強い衝撃波が生じる。すると、衝撃によってお互いに後方へと下がる。

打ち合いが終わり、リュウギとカイの額に汗が流れる。

カイ「ハァ…ハァ…。」

（どうなっているのだ…！？この間のアイツとはまるで別人だ…！？ここは…）

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

（カイのスピードに着いてきてる…。でもまだだ…。まだこれで満足しちゃダメだ…。ここは…）

すると、リュウギとカイはお互いの武器を同時に地面に刺して叫んだ。

リュウギ・カイ「デジサモン、発動！！」

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

リュウギ「頼む、ナイトモン！！」

カイ「来い、サンダーバーモン！！」

リュウギはナイトモンを呼び出すと、魔法陣からナイトモンが実体化される。

ナイトモン「呼んだでありますか、リュウギ殿？」

リュウギ「力を貸してくれ、ナイトモン。」

ナイトモン「御意！」

対するカイは魔法陣からサンダーバーモンが実体化される。

サンダーバーモン「呼んだか、カイ？」

カイ「協力しろ、サンダーバーモン。」

カイはギルガメッシュを抜き取り、サンダーバーモンの背中に飛び乗る。

サンダーバーモン「『スパークウィング！！』」

サンダーバーモンは電撃を帯びた無数の羽を雨のように撃ち出した。

ナイトモン「リュウギ殿、我輩の後ろへ!!」

ナイトモンは盾を構えて電撃を帯びた無数の羽を弾き返した。

ナイトモン「どうだ、この盾はどんな技でも防ぐことができる!!」

リュウギ「流石だな、ナイトモン!」

ナイトモン「……かもしれない。」

すると、リュウギはズッコケる。

リュウギ「ってどうなんだよ?」

カイ（アイツ、完全体とコントラクトしたのか…?）

「サンダーバーモン!!」

サンダーバーモン「『サンダーストーム!!』」

サンダーバーモンは電撃をまとった翼を羽ばたかせ、稲妻の嵐を巻き起こした。

リュウギ「ナイトモン、気を付けろ!モノクロモンはあの技にやられた!!」

ナイトモン「なるほど…。ならば、このベルセルクソードであんなもの、真っ二つに一刀両断してやる!!」

すると、ナイトモンは背中に背負う大剣、ベルセルクソードを取り出す。

リュウギ「おぉ!?」

ナイトモン「……かもしれない。」

リュウギ「本当に大丈夫かよ…?」

ナイトモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

ナイトモンはベルセルクソードを思いきり振り回すと、剣風によってサンダーストームを振り払った。

カイ・サンダーバーモン「!?」

リュウギ「やるじゃないかナイトモン!」

ナイトモン「当然だ…。我輩はリュウギ殿の忠実なるしもべ!!…かもしれない。」

リュウギはズッコケなかった。

リュウギ「そう言うと思った…?」

ナイトモン「しかしどうするのだリュウギ殿?我輩は見ての通り空中戦は得意ではない…。」

リュウギ「そうだな…。」

(どうする…?何か手は…?)

リュウギは考えると、次の作戦を思い付き、ナイトモンに作戦を伝える。

カイ（アイツ、次は何をするつもりだ？）

「サンダーバーモン、もう一度だ…。」

サンダーバーモン「『サンダーストーム！！』」

サンダーバーモンは電撃をまとった翼を羽ばたかせ、稲妻の嵐を巻き起こした。

リュウギ「そう言う事だ、分かったか？」

ナイトモン「御意！では、参る！！」

ナイトモンはベルセルクソードを思いきり振り回すと、剣風によってサンダーストームを振り払った。

ナイトモン「リュウギ殿！！」

ナイトモンは手を組んで低く構える。

リュウギ「あぁ！！」

リュウギはナイトモンに向かって勢いをつけ、ナイトモンの手に片足を乗せる。

リュウギ「頼むナイトモン！」

ナイトモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ナイトモンは組んだ手を思いきり振り上げると、リュウギは高く飛び上がり、サンダーバーモンに接近する。

サンダーバーモン「なに！？」

カイ「何をするかと思えば子供騙しだ！γ！！」

カイは叫ぶと、ギルガメッシュは小型鎌から巨大手裏剣へと変形し、リュウギに投げ付けた。

カイ（空中なら交わせない…。終わったな…。）

その時、リュウギはニヤリとほくそ笑んだ。

カイ「！？」

リュウギ「ナイトモン！！」

ナイトモン「御意！！」

ナイトモンはベルセルクソードを思いきり上空へ投げつけると、リュウギに襲い掛かるギルガメッシュを弾き返し、やがて地面に突き刺さる。

カイ「なに！？」

リュウギ「これで決める！！」

リュウギはアルカナムで目にも止まらない早さでサンダーバーモンを切り刻んだ。

サンダーバーモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

サンダーバーモンは力尽きて静かに消え去った。

ワニャモン「カイ、サンダーバーモン！？」

リュウギとカイは落下し、同時に着地する。

ナイトモン「見事な作戦だったな、リュウギ殿。」

リュウギ「あぁ！」

カイ「チッ…。」

（油断したか…。）

リュウギ「ありがとなナイトモン。後は俺1人で大丈夫だ。」

ナイトモン「承知した。必要になったら、また我輩を呼んでください。」

すると、ナイトモンは静かに消え去った。

カイ「どういうつもりだ…？デジサモンの効果はまだ切れてないハズだ…？」

リュウギ「俺はやられたらやり返さないと落ち着かない性分でな…。この間やられたモノクロモンの分、ここで返させて貰ったぜ…。」

カイ「随分と嘗められたもんだ…。」

リュウギ「さて、ここから1対1だ…。正々堂々、真っ向勝負だ！！」

カイ「いいだろう…。」

カイは地面に突き刺さるギルガメッシュを抜き取る。

リュウギ「行くぜ！！」

リュウギは走り出し、接近戦に持ち込んだ。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

リュウギはアルカナムを振り下ろすと、カイは巨大手裏剣、ギルガメッシュで斬撃を防ぐ。

カイ（γじゃこっちが不利だ…。ここはβで…）

リュウギ（見えた！！）

隙を読んだリュウギはアルカナムを構えてカイに踏み込んで近づいた後、上空に斬り上げるように振った。

するとギルガメッシュは弾き返し、上空へと舞い上がる。

カイ「しまった！？

リュウギ「貰った!!」

リュウギはアルカナムで丸腰になったカイに切りに掛かる。

すると、カイはとっさの判断でバク転して斬撃を交わし、叫んだ。

カイ「β!!」

すると、宙に舞うギルガメッシュは巨大手裏剣から2つの刃へと分裂して落下し、カイは2つの刃を掴み取る。

ナナモン「惜しい、あともうちょっとだったのに!?」

カイ「ハァ…ハァ…。」

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

（クソッ、あと一歩だったのに…。流石だなカイ…。）

一方、観客席で見ていた謎の人物は2人の戦いを見て感心する。

???「なかなかいい勝負だね…。」

すると、謎の人物の肩に乗るパートナーデジモンはツッコム。

???「って感心してる場合じゃないだろ?結局どうするんだよ?」

???「手掛かりは全部水の泡だしね…。」

謎の人物はそう言って眼鏡をずり上げる。すると、謎の人物は何かを発見する。

？？？「ん？」

？？？「どうしたんだよ？」

？？？「いや、向かい側の観客席に見たことあるデジモンがいてさぁ…。ほら、彼処に…ってあれ？」

謎の人物は指を指すと、観客席にいたデジモンの姿がなかった。

？？？「気のせいなんじゃないの？」

？？？「おかしいなぁ…？」

？？？「それより試合見ようぜ、今イイトコなんだからさ！」

？？？「あ、あぁ…。」

――――――――――――――――

リュウギ（あのギルガメッシュを何とかしなきゃな…。でもどうしたらいい…？）

カイ「ハァ…ハァ…。」

するとカイは、試合始まる前のエグザの言葉を思い出す。

エグザ『アドバイスだ…。あまりアイツを侮っていると、痛い目にあうぞ…。』

カイ「チッ…。」
（エグザの奴、御縞　リュウギの成長を見ていたのか…？俺は認めない…。俺があんな口先な奴に負けるなんて断じて認めない！！）
すると、カイの目付きがキリッと変わった。
リュウギ「！？」
（カイの奴、急に目付きが変わったぞ…！？）
カイ「俺はこんな所で負ける訳にはいかない…。最強のテイマーになるんだ…。リエナのためにも…。」
リュウギ「リエナ…？」
カイ「見せてやる…。ギルガメッシュの最終形態を…。」
リュウギ「最終形態だと！？」
（まだ変形するのか！？）
カイ「Σ（シグマ）！！」
カイは2つの刃、ギルガメッシュを1つにし、大剣へと変形した。
＞i231101―1298＜
【デザイン：トリプルミーミング】
リュウギ（大剣！？）
カイ「本気で行くぞ…。」

カイは目にも止まらない早さでリュウギに接近し、ギルガメッシュを振り回す。

リュウギはアルカナムで斬撃を受け止める。しかし、威力が絶大なため、リュウギは押される。

リュウギ「くっ！？」

（なんて力してやがるんだ！？）

カイ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

カイは力で押し返すと、アルカナムは弾き返されてしまい、やがて地面に突き刺さる。

リュウギ「しまった！？」

リュウギは急いでアルカナムを取りに行こうとする。

カイ「させるか！！」

カイはギルガメッシュを振り回すと、剣風によって生み出された衝撃波を放ち、リュウギを襲う。

リュウギ「くっ！？」

リュウギは間一髪で交わした。

カイ「これで丸腰だ、御縞　リュウギ…。さぁ、潔く諦めてギブアップしろ！」

リュウギ「言ったろ…？敵に背中を見せるのは俺の流儀に反するってな…。」

カイ「理解できん…。この期に及んでまだ流儀を貫き通すか？」

リュウギ「別に理解して欲しいとは思わねぇよ。俺はただ、自分の流儀を貫き通すだけだ。」

カイ「まぁいい。その流儀もここまでだ…。終わりだ！！」

カイは大剣、ギルガメッシュを振り下ろした。

その時だった。リュウギの心の中から声が聞こえてくる。

『鍛え上げた力を解放しろ、リュウギ！！』

リュウギ「！！」

その時、リュウギはとっさの判断で両手を使ってギルガメッシュを受け止めた。

カイ「なに！？」

リュウギ「師匠（せんせい）直伝、真剣白刃取り！！」

リュウギはギルガメッシュを無理矢理地面に叩き付け、素早く後方へと下がった。

カイ「くっ…！？」

リュウギ「俺はお前を倒すため臥薪嘗胆になり、修行をした…。」

臥薪嘗胆…目的を遂げるために苦心し、努力を重ねること。

リュウギは地面に突き刺さっているアルカナムを抜き取り、刃先をカイに向けた。

カイ「!?」

（なんだ、この威圧は…!?）

リュウギ「今ここで、修行の成果を見せてやる!!はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

リュウギは唸り声を上げると、身体中から光のオーラが溢れ出す。

すると、観客席で見ていた謎の男は驚愕する。

???「あれは!?」

カイ「なんだこの力は!?」

リュウギ「師匠が教えてくれたんだ…。これは…」

それは最脇道専門学校にてショウと修行していた頃まで遡る。

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

ショウ「こうも簡単に白刃取りをマスターするなんてな…。流石はリュウの息子だけのことはある。」

リュウギ「真剣白刃取りって意外と簡単なもんだな…。」

ショウ（もしかしたら、アレもできるかもしれねぇかもな…。）

「よし、修行はこれでラストだ…。」

リュウギ「？」

ショウ「リュウは今まで、どんな困難に陥っても立ち向かって乗り越えてきた…。それは、リュウにしかない秘められた力だ…。」

リュウギ「父さんにしかない秘められた力…？」

ショウ「絆だ…。」

リュウギ「絆…。」

ショウ「それもただの絆じゃない。俺達は絆という糸に永遠と結ばれ、そして決して断ち切る事ができない絆という糸…。失った大切な者を取り戻すと代償に、今までの記憶は眠りについてしまったが、その絆があるから眠っていた記憶が蘇ったんだ…。」

リュウギ「……。」

ショウ「それがアイツの絆の力だ…。お前が正真正銘のアイツの息子なら、秘められた力を使えるハズだ…。」

リュウギ「俺が父さんのように秘められた力が使えるというのか…？」

ショウ「あぁ…、その秘められた力を俺はこう呼んだ…。」

―――――――――――

リュウギ「キズナドライブだ！！」

カイ「なんだと…！？」

リュウギ「俺達ブレイブエクセリオンはお前の言うくだらない友情ごっこなんかで結ばれてない…。どんなに遠くに離れていていても、俺達の心は絆という糸で結ばれている！俺達の絆は絶ち切れないんだ！！」

すると、アルカナムから聖なる光が生じる。

カイ「戯れ言を…。そんな糸、すぐに切ってやる！！」

カイは急接近し、ギルガメッシュを思いきり振り下ろした。

リュウギはアルカナムでギルガメッシュを受け止めると、リュウギの両足が段々と地面にめり込んでいく。

ナナモン「リュウギ！？」

カイ「所詮、お前の絆はその程度なんだよ！！」

カイは更に力を入れようとすると、ギルガメッシュは動かない。

カイ（なに！？）

リュウギ「どうしたカイ…？その程度じゃ、俺達の絆は切れないぜ

…。」

？？？「！？」

すると、観客席に座っていた謎の人物は突然と立ち上がった。

？？？「おい、どうしたんだよ急に！？」

？？？「いや、何でもない…。」

謎の人物は眼鏡をずり上げながら座る。

？？？（今、あの少年からリュウの面影が…？気のせいなのか…？）

――――――――――――

リュウギ「その程度の力なら見せてやるよ…。俺達の絆を！！」

リュウギは力で押し返してカイを押し飛ばした。

カイ「くっ！？」

カイは素早く体勢を立て直した。

カイ「俺はこんな所で負ける訳にはいかない！！」

カイはギルガメッシュを構えて走り出す。

リュウギ「これで決める！！！！」

対するリュウギもアルカナムを構えて走り出す。

ナナモン「行けリュウギ！！」

ワニャモン「勝ってくださいカイ！！」

リュウギ・カイ「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

リュウギとカイは同時に剣を振ると、刃と刃がぶつかりあった。すると、会場全体は光の閃光に包まれた。

一同「！？」

ナナモン「リュウギ…？」

ナナモンは目を開けると、リュウギとカイはお互いに背を向けたまま立っていた。会場全体は長い沈黙となっていた。

？？？「どっちだ…？」

一方、観客席の出口で見ていたエグザは小さく笑う。まるで勝敗が分かったかのように。

エグザ「決まったな…。」

リュウギ「くっ…。」

すると、最初に膝がついたのはリュウギだった。

カイ「フッ…。」

カイは小さく笑ったその時、地面に向かって倒れた。

（カンカンカーン！！）

リンクモン「カイ、ダウン！！最終決戦はリュウギの勝ち！！よってブレイブエクセリオン、準決勝に進出！！」

デジモン達「ワァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」

その時、観客席から盛大な拍手や歓声が沸き上がる。

ナナモン「よっしゃ！！やったぜリュウギ！！」

ナナモンはピョンピョンと跳び跳ねてリュウギに飛び付いた。

リュウギ「あぁ…。やった…ぜ…。」

リュウギは疲れ果ててしまい、そのまま気を失ってしまった。

ナナモン「おいリュウギ！？」

リンクモン「とにかく、２人を早く医務室に運ぶんだ！！」

こうしてリュウギとカイは医務室へと運ばれるのであった。

一方、謎の人物は…。

？？？「アイツ、勝っちまったな♪」

???「実に面白い子だ…。」

すると、謎の人物は観客席から立ち上がる。

???「何処行くんだ?」

謎の人物は眼鏡をずり上げながら答える。

???「あの子に託そうと思ってね…。行くよ…。」

???「分かったよ。」

パートナーデジモンは謎の人物の肩に乗り、謎の人物はとある場所へと向かった。

~マヤルコロシアム　控え室~

準々決勝を終え、見事準決勝に進出したブレイブエクセリオン。しかし、リュウギは重傷のため、医務室にて治療中だった。

ミソラ「リュウギ、大丈夫かしら…。」

ミソラは深刻な顔をすると、ナルガモンは励ます。

ナルガモン「大丈夫だって!アイツならすぐに復活するって!」

ミソラ「そうね…。レナモン、あなたは大丈夫?」

レナモン「あぁ…。マリンエンジェモンの治療のお陰で私はもう大

丈夫だ…。だが、もうすぐしたら準決勝が始まる…。リュウギが回復するまで、何とか持ちこたえてくれないだろうか…？」

ナルガモン「だったらオレに任せろって！！何たってオレはカイと犬ッコロをブッ倒したんだからな♪ナッハハハハ♪」

ナルガモンはそう言って高らかに笑う。

ミソラ「でも、リュウギがいなかったら成熟期すら進化できないんじゃないの…？」

ナルガモン「あ…？」

ミソラがツッコムと、ナルガモンの高笑いはピタッと止まる。

キャンドモン「正しく、リュウギさんがいなきゃナルガモンは無能ですねぇ…。」

ナルガモン「うるせぇッ？」

ナルガモンはそう言ってキャンドモンを蹴り飛ばした。

キャンドモン「ぐえっ！？」

すると、場内アナウンスが流れる。

アナウンス「まもなく、準決勝を開始したいと思います！！ブレイブエクセリオン、そしてエグザウィンコルムはバトルスタンバイしてください！！」

レナモン「マズイ、もう時間がない！？」

ナルガモン「こうなったら、オレ達で何とか時間稼ぐっきゃねぇな！！」

ミソラ「無茶よ！？相手はかなり強いんでしょ！？それに、リュウギがいなかったらアンタは進化できないし！？」

ナルガモン「やりもしねぇで最初から諦めるのは簡単だ！リュウギがバトルフィールドに出てくる事をオレは信じるぜ！！」

ミソラ「ナルガモン…。」

レナモン「私も賛成だ…。ここで立ち止まっていては何も始まらない…。」

ミソラ「レナモン…。」

すると、ミソラは確信した。

ミソラ「分かったわ！だったら私も一緒に行くわ！！」

キャンドモン「ミ、ミミ、ミソラさんが行くなら、ボ、ボボ、ボクチンも行きます？（激汗）」

キャンドモンの体はかなり震えていた。

ミソラ「アンタ、かなり震えてるわよ…？」

ミソラは小さくツッコム。

ナルガモン「決まりだな！んじゃ、行こうぜ！！」

リュウギの再起を信じて、ナルガモンはバトルフィールドへと向かった。

そして…。

～医務室～

リュウギ「う、う～ん…。」

リュウギは目を覚まし、ベッドからノソリと起き上がる。

リュウギ「あれ…？俺は確かカイと戦っていたような…？ひょっとして、俺は負けたのか？」

？？？「いや、君が勝ったんだよ…。リュウギ君。」

リュウギ「誰だ！？」

リュウギは慌ててカーテンを開くと、眼鏡をかけた謎の人物とそのパートナーデジモンがいた。

リュウギ「あ、あんたは…？」

？？？「オレはレオルモンだ！ヨロシクな！」

？？？「はじめまして、僕はレオルモンのパートナー、池崎（いけざき）　浩司（こうじ）だ。」

コウジと名乗る謎の人物は中指で眼鏡をずり上げ、小さく笑うのであった。

――To Be Continued…

ＥＰ２３　～リュウギｖｓカイ！！受け継がれし力、キズナドライブ炸裂！！～

～バトルフィールド～

準決勝、ダークスレイヤーｖｓファイナルアームズ

スレイヤードラモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

スレイヤードラモンはフラガラッハを振り回し、相手チームのボルケーモンを切り刻んだ。

ボルケーモン「ぐはっ！？」

ボルケーモンは力尽きて倒れた。

（カンカンカーン）

リンクモン「ボルケーモン、ダウン！！スレイヤードラモンの勝ち！！よってダークスレイヤー、決勝戦に進出！！」

デジモン達「ワァァァァァァァァァァ！！」

スレイヤードラモン「フンッ…、くだらん…。」

スレイヤードラモンはフンッと鼻を鳴らし、バトルフィールドから退場した。

～マヤルコロシアム　通路～

スレイヤードラモンは通路を歩いていると、ピタリと足を止める。
その理由は、目の前にエグザがいたからだ。

エグザ「決勝戦進出、おめでとさん…。」

スレイヤードラモン「何の用だ…？」

エグザ「ちょっと確認をな…。準々決勝のエクセリオンの試合、見たか…？」

スレイヤードラモン「生憎、貴様以外興味はないのでな…。」

エグザ「そっか…。そいつは残念だ…。なかなか面白い試合だったけどな…。」

エグザはそう言ってバトルフィールドへと向かい、スレイヤードラモンとすれ違う。

スレイヤードラモン「必ず決勝戦に上がってこい…。この手で貴様を葬り去らないと、わざわざこんなくだらない大会に出場した意味がないからな…。」

エグザ「分かってる…。首でも洗って待ってな…。」
（あの試合を見れば、目が覚めると思ったんだが、やっぱり無駄だったようだな…。やっぱりやるしかないのか…。）

エグザは心の中で微かに悔やみ、苦しむ。まるで何者かに締め付けられたかのように…。

なんと前作で活躍したコウジが登場!!

果たしてコウジの目的は一体?

次回はついにエグザとの対決!!

お楽しみに!!

Ｅｐ２４　～解放されし闇の力！？準決勝ｖｓエグザウィンコルム！！～（前書

ついに、エグザとの対決！？

しかし、思わぬ事態が起きてしまう！？

Ｅｐ２４スタート！！

ＥＰ２４　～解放されし闇の力！？準決勝ｖｓエグザウィンコルム！！～

～マヤルコロシアム　医務室～

リュウギ「池崎　コウジ…？」

コウジ「そう、よろしくね。」

コウジはそう言って手を差し伸べる。

リュウギ「あぁ。よろしく…。」

リュウギはそう言ってコウジの手をギュッと握手をする。

リュウギ「なぜ俺の名前を知っているんだ…？」

コウジ「さっきの戦い、観させてもらったよ…。なかなか迫力のある戦いだったよ…。」

レオルモン「さすがグレイドモンを倒しただけの事はあるな…。」

リュウギ「グレイドモン！？って事は、アンタ達がメテオナイツのメンバー！？」

レオルモン「そうだよ！でも、コウジが道に迷ったせいで遅刻した…？」

コウジ「仕方ないじゃないか？スレッド大陸に来たの初めてなんだから？」

リュウギ「そうだったんだ…？ところでコウジさん、マルスモンに会ってどうするつもりだったんだ？」

コウジ「マルスモンとはちょっとした知り合いでね。マルスモンに会えば手掛かりが分かるかもしれないと思ってスレッド大陸に来たんだ。」

リュウギ「グレイドモンから聞いたんだけど、『失った絆を取り戻すため。』って、一体どういう事なんだ？」

コウジ「ちょっとした人探しをしていてね…。レオルモンと一緒に探しているんだ…。」

リュウギ「誰を…？」

コウジ「それは…」

すると、レオルモンはハッとする。

レオルモン「コウジ、試合だ試合！？」

コウジ「そうだった！？」

リュウギ「試合？…そうだ！？ナルガモンやみんなは！？」

コウジ「君の仲間なら、今エグザと戦っている！急いで！！」

リュウギ「あぁ！！」

リュウギはベッドから降りると、何か感じる。

リュウギ「あれ？体が軽い…？」

コウジ「君の体を治療させて貰ったよ。以前のように戦える。」

リュウギ「ありがとな！」

リュウギは急いでバトルフィールドへと向かおうとすると、コウジはリュウギを呼び止める。

コウジ「リュウギ君、必ず優勝してくれ。頼んだよ。」

リュウ「あぁ！！じゃ、行ってくる！！」

リュウギはそう言ってバトルフィールドへと向かった。

レオルモン「行っちゃったな。」

コウジ「本来なら、少ししか回復しないのだが、リュウギ君の回復力に驚いたよ。」

コウジはそう言って眼鏡をずり上げる。

レオルモン「オレ達も行こうぜ！！」

コウジ「そうだな。」

コウジとレオルモンは急いでリュウギの後を追う。

～バトルフィールド入り口～

リュウギ（何とか間に合ってくれ！！）

全力疾走で会場に入ると、リュウギはとんでもない物を目にした。

ナルガモン「クソッ…。」

ナルガモンは力尽きて倒れた。

（カンカンカーン！！）

リンクモン「ナルガモン、ダウン！！第2戦目はエグザの勝ち！！」

デジモン達「ワァァァァァァァ！！」

リュウギ「そん…な…。」

リュウギはこの光景を見て思わず言葉を失った。

ミソラ「とうとうナルガモンまでやられちゃったわ…。レナモンもやられたし、一体どうしたらいいのよ！？」

エグザ「潔くギブアップしな…。」

エグザはそう言って大剣を背中に背負って背を向ける。

ナルガモン「誰がギブアップするかよ…。」

レナモン「必ずリュウギは来る…。」

ミソラ「そうよ！！私達は絶対に諦めないんだから！！」

リュウギ（お前ら…。）

リュウギは歯をギリッと食い縛り、叫んだ。

リュウギ「俺ならここに居る！！」

一同「！？」

会場全体は一斉にリュウギに注目した。

リンクモン「ここでブレイブエクセリオンのメンバー、リュウギが復活しました！！」

デジモン達「ワァァァァァァァ！！」

すると、観客席からとてつもない歓声が沸き上がる。

一同「リュウギ！！」

エグザ「来たか…。」

リュウギはミソラの元へと走り出す。

ミソラ「リュウギ…。もう、心配したんだから！！」

ミソラは涙を堪えながら怒る。

リュウギ「すまないみんな…。俺が不甲斐ないばかりに…。」

レナモン「気にするな…。」

ナルガモン「こんだけ待たせたんだ…。負けたら承知しねぇからな…。」

（ニヤリ…）

ナルガモンはそう言って親指をピシッと立てる。

リュウギ「あぁ…。行ってくる…。」

リュウギはそう言ってバトルフィールドへと上がり込む。

すると、コウジとレオルモンが会場に入ってくる。

レオルモン「どうやら、間に合ったみたいだな…。」

ミソラ「あなたは…？」

コウジ「通りすがりの医者…とでも呼んで貰おうか。」

ミソラ「はぁ…？」

一方、リュウギは鋭い目で背中を向けるエグザを睨む。

エグザ「１０分遅刻だ…。お陰さまで待ちくたびれたぞ…。」

リュウギ「そいつは悪かったな…。でも、全力でぶつからねぇとアンタは面白くないだろ…？」

エグザはそう言って背を向けたまま静かに笑う。

エグザ「その通りだ…。」

（フッ…）

リュウギ「スレイヤードラモンの事は感謝する…。でも、ここはコロシアムだ…。全力で行かせて貰うぜ…。」

リュウギはそう言って右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

エグザ「楽しませてくれよ…。」

エグザは振り向くと、リュウギはエグザの顔を見たとたん驚愕する。

リュウギ「!?」

（アイツは!?）

それは、リュウギの父親、リュウを殺した謎の男と顔が一致していたのだった。リュウギにとってはとても辛い過去だった。

『ク、ククク…。フハハハハ…!!』

『父…さん…。』

――――――――――――

リンクモン「それでは最終決戦、リュウギＶＳエグ……」

リュウギ「――つけた…。」

リンクモン「はい？」

エグザ「？」

ナルガモン「リュウギのヤツ、なんか様子が変だぞ…？」

リュウギ「やっと見つけた…。」

すると、リュウギ表情は段々と憎しみへと変わっていく。

ミソラ「リュウギ…？」

コウジ（リュウギ君の目付きが変わった…？）

すると、リュウギはとんでもない事を口にした。

リュウギ「数年前、東京で俺の父さん、小関　リュウを殺した！！違うか！？」

エグザ「！？」

コウジ（なんだって！？）

一同「！？」

ミソラ「ウソ…。それじゃ、リュウギのお父さんを殺したのはエグザなの…？」

エグザ「……。」

リュウギ「その顔、俺は憶えている…。」

エグザ「あの現場を目撃していたのか…。」

リュウギ「それじゃあ…！？」

すると、エグザは小さく笑い、とんでもない事を口にした。

エグザ「全く、哀れな男だったよ…。」

すると、リュウギの感情の鎖が切れてしまい、突然エグザに襲い掛かる。

リュウギ「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ミソラ「リュウギ！？」

リュウギはアルカナムを振り下ろすと、エグザは素早く大剣で斬撃を防ぎ、鍔競り合う。

リュウギ「よくも…、よくも父さんを殺したなッ！！！！」

エグザ「……。」

（抑制が効かなくなり理性も失った…。コイツ、とうとう暴走しちまったか…。）

リュウギ「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

自我を失い、暴走するリュウギはひたすらアルカナムを振り回す。

エグザ「くっ…。」

（こりゃ、セイクリッド・レインティアだけじゃ厳しいな…。）

エグザはセイクリッド・レインティアを地面に突き刺すと、セイクリッド・レインティアは2つに分裂し、二刀流となった。

リュウギ「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

リュウギはアルカナムを振り回す。

エグザは二刀流を抜き取り、リュウギの斬撃を全て受け止める。

ナルガモン「スゲェ、リュウギのヤツ押してるぞ！！」

すると、ナルガモンはミソラの深刻な顔に気付く。

ナルガモン「どうしたんだよミソラ？」

ミソラ「恐い…。」

すると、ミソラの体が震える。

ミソラ「あれ…、本当にリュウギ…？私達の知っているリュウギなの…？」

リュウギ「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

エグザは素早く交わし、セイクリッド・レインティアを振り上げるように振ると、アルカナムを弾き返し、やがて地面に突き刺さる。

リュウギ「!?」

エグザ「大人しくしてろ!」

エグザはセイクリッド・レインティアを振り下ろすと、リュウギは左手で斬撃を受け止めた。

＞i23229—1298＜

【デザイン：トリプルミーミング】

一同「!?」

受け止めた左手からは大量に出血をしていた。

コウジ「素手で剣を受け止めた!?」

エグザ「マジかよ…。」

（理性だけでなく、知性も吹っ飛びやがったか…。）

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

リュウギは握り拳を作ってエグザを思いきり殴り飛ばそうとすると、エグザはセイクリッド・レインティアで防御した。

しかし、威力が絶大なため、力負けして吹っ飛んでしまう。

エグザ「くっ!?」

エグザは素早く受け身を取ろうとすると、リュウギはエグザの片足を掴んでエグザの腹を思いきり殴り、地面に叩き付けた。

エグザ「ぐはっ！？」

（何て早さなんだ！？）

すると、リュウギはエグザの胸ぐらを掴みながら、顔面を殴る。

ナルガモン「ホントにリュウギかよ…！？」

コウジ「あの眼は、復讐に取り付かれた眼…。」

ナルガモン「え…！？」

すると、コウジは叫ぶ。

コウジ「今すぐ彼をやめさせるんだ！！このままだと彼が彼でなくなる！！」

ナルガモン「何だって！？」

レナモン「今すぐ止めなければ…くっ。」

レナモンは立ち上がろうとするが、エグザとの戦闘により、傷が痛む。

ナルガモン「無理すんじゃねぇ！！オレが何とかする。」

ナルガモンはそう言ってバトルフィールドに上がり、リュウギを止

めに行く。

リュウギ「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

暴走するリュウギ。すると、ナルガモンが必死になってリュウギを止めに掛かる。

ナルガモン「やめるんだリュウギ！？」

リュウギ「邪魔をするな！！！！」

リュウギは血に染まった左手でナルガモンを殴り飛ばした。

ナルガモン「ぐはっ！？」

レナモン「ナルガモン！？」

ナルガモン「リュウギ、やめろって言ってるのが分かんねぇのかよ！！このままだとお前がお前じゃなくなっちまうんだぞ！！」

リュウギ「だから何だ…？俺はこの男に復讐さえすれば、後の事はどうでもいい…。例え、この身が闇に染まったとしてもな…。」

ナルガモン「リュウギ…。」

すると、リュウギの体から黒いオーラが溢れ出る。

ナルガモン「何だ！？リュウギの体から黒い奴が出てるぞ！？」

コウジ「マズイ！？リュウギ君の心が闇に染まりかかっている！？」

一同「!?」

ミソラ「やめてよ…、リュウギ…。」

ミソラは唇を振るわせながら小さく呟く。

リュウギ「エグザ…、貴様を殺したいと俺の血が騒いでいるんだよ…。貴様を倒せば、俺の復讐は終わる…。」

エグザ「生憎だが、俺はここで死ぬ訳にはいかないのでな!!」

エグザは言葉を発すると同時にリュウギを押し飛ばした。

リュウギ「チッ!!」

リュウギは素早く受け身を取り、体勢を立て直す。

エグザ「仕方ねぇな…。」

エグザは2つの剣を1つに合体させ、セイクリッド・レインティアを地面に突き刺した。

エグザ「EXモード、発動!」

エグザは叫ぶと、身の回りに激しい突風が舞う。

リュウギ「なに!?」

レナモン「人間がEXモードだと!?」

突風が去ると、エグザの体から光のオーラが纏っていた。

エグザ「悪いが、すぐに終わらせてやる…。」

すると、リュウギはニヤリと不気味に笑う。

リュウギ「面白い…。その方が殺し甲斐がある…。」

（ニヤリ…）

エグザ「……。」

エグザは一瞬にして姿を消した。

リュウギ「……。」

すると、背後からエグザが現れる。

エグザ「こっちだ!!」

エグザはリュウギの顔面を掴み、地面に思いきり押さえ付けた。

ナルガモン「リュウギ!?」

エグザ「暴れるのも大概にしろよ…。」

リュウギ「クククク…。」

しかし、リュウギはニヤリと笑う。まるで何ともなかったかのように。

エグザ「おいおい、今のは結構マジだったんだぞ…？」

すると、リュウギはエグザの手を退かし、頭突きをかました。

エグザ「くっ！？」

エグザは素早く体勢を立て直す。

すると、リュウギは地面に突き刺さっているアルカナムを抜き取る。

リュウギ「どうした…？それが貴様の本気か…？」

エグザ（奴の眼は、もはや人間の眼なんかじゃねぇ…。復讐に取り付かれたバケモノの眼だ…。）

リュウギ「ククククク…。」

すると、アルカナムの刃から闇の力が生じ、闇を纏った刃へと変わった。

エグザ（マズイな…。本当にアイツの心が闇に支配されちまうぞ…。早くケリ着けねぇと…。）

リュウギは闇を纏ったアルカナムを構える。

リュウギ「死ね、エグザ…。」

リュウギは目にも止まらない早さでエグザに切りに掛かる。

エグザ「くっ！？」

エグザは必死で斬撃を受け止める。

エグザ「喰らえ！！」

エグザは剣風によって生み出された衝撃波を放つと、リュウギは素早く交わす。

リュウギ「あの日、父さんは貴様に殺された後、母さんは突然といなくなった…。貴様は俺の人生を奪ったんだよッ！！！！」

すると、リュウギの体から邪悪なる闇が溢れ出す。

エグザ「さっきよりもパワーが上がりやがった！？」

リュウギ「許さない…。貴様だけは絶対に許さない！！」

リュウギは憎しみを力に変え、アルカナムを振り下ろした。

エグザ「！？」

エグザは素早くセイクリッド・レインティアで斬撃を受け止める。しかし、力負けしてしまってセイクリッド・レインティアは弾き返され、やがて地面に突き刺さった。

リュウギ「クククク…。これで貴様は丸腰だ…。」

（ニヤリ…）

レオルモン「マズイぞコウジ！？」

コウジ「こうなったら力ずくで…」

コウジはポケットからD－アクセルとは違ったデジヴァイス、デジドライブを取り出した。

その時、ミソラがバトルフィールドの中へと入る。

レナモン「ミソラ！？」

コウジ「ダメだ！？リュウギ君に近づいてはいけない！？」

一方、リュウギは闇を纏ったアルカナムを振りかぶる。

リュウギ「終わりだ、エグザ…。」

（ニヤリ…）

エグザ「くっ！！」

リュウギはアルカナムを振り下ろしたと同時にエグザは懐から銃を取り出して構えた。

その時だった。

ミソラ「やめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

エグザ「！？」

すると、エグザは銃の引き金を引かなかった。

対するリュウギはそのままアルカナムを振り下ろしていた。しかし、エグザは切られていなかった。その理由は、ミソラが必死になってリュウギに抱き着いて止めていたからだ。

リュウギ「くっ！！放せ！！」

リュウギは暴れる。しかし、ミソラは放そうとしない。

ミソラ「目を覚ましてよリュウギ…。復讐なんてやめてよ！！私はイヤだよ！！」

エグザ「……。」
（コイツ…。）

リュウギ「放しやがれ！！うあぁぁぁぁぁぁ！！」

しかし、リュウギはまだ暴れる。すると、ミソラの目には涙が溢れていた。

ミソラ「リュウギがリュウギでなくなったら、約束はどうなるのよ…？私を現実世界に還すって約束は…。」

レナモン「ミソラ…。」

ミソラ「私は復讐なんかのためにリュウギの手は汚させはしない…。だからお願い、お願いだから目を覚ましてよ…リュウギィィィィィィィィィ！！！！」

リュウギ「！？」

すると、リュウギの復讐に取り付かれた眼は、やがて正常へと戻っていく。

リュウギ「ミソ…ラ…。」

ミソラ「!?」

すると、リュウギの体を纏う邪悪なる闇のオーラは静かに消えていき、正気に戻った。

レオルモン「コウジ!?」

コウジ「どうやら、彼女のお陰で闇の力は治まったみたいだ!」

エグザ「……。」

すると、リュウギはアルカナムを手放し、血にまみれた自分の手を見つめる。

リュウギ「ミソラ…、俺は…何をしていたんだ…?」

ミソラ「もう大丈夫よ、リュウギ…。」

すると、リュウギはそのまま気を失ってしまった。

ミソラ「リュウギ!?」

コウジ「急いで担架を持ってきてくれ!?」

コウジは叫ぶと、係員が担架を持ってきてリュウギを担架に乗せ、

医務室へと運ばれた。

リンクモン「あ、あのぅ…、試合は…？」

コウジ「ギブアップする…。」

ナルガモン「な、なに言ってんだよテメェ！！なんでギブアップしなきゃなんねぇんだよ！？オレとリュウギはまだ戦える？」

ナルガモンは激怒する。

コウジ「お前はリュウギ君のパートナーなのに、彼の気持ちが解らないのか…？」

ナルガモン「！？」

コウジ「彼はもう戦える状態じゃない…。あの有り様だと、精神的にもやられているハズだ…。これ以上戦えば、彼は完全に壊れてしまう…。だからギブアップする…。」

ナルガモン「そんな…。」

すると、コウジは中指で眼鏡をずり上げながら、エグザを睨む。

コウジ「勘違いしないでくれ…。僕は決して君を許した訳じゃない…。それだけは覚えておくんだね…。」

コウジはそう言って医務室へと向かった。

エグザ「アイツは確か…？」

リンクモン「と、とにかく、エグザは決勝戦に進出決定です！」

しかし、観客席は長い沈黙となっていた。

すると、観客席の出口でカイは試合を見ていた。

カイ「あれが…、あれが御縞　リュウギなのか…？」

ガオモン「まるで別人でしたね…。」

カイ「まさか、御縞　リュウギとエグザにそういう関係があったとはな…。」

ガオモン「これからどうしますか…？」

カイ「俺には関係ない…。俺は1日も早く、最強のテイマーにならなければならない…。行くぞ、ガオモン…。」

ガオモン「はい、全ては我が主のために…。」

カイとガオモンはコロシアムから姿を消すのであった。

～医務室～

一方、リュウギは医務室にて怪我を治療をする。

コウジ「これでよし。しばらく眠らせておけば、たぶん以前のように元気なるさ…。」

ナルガモン「たぶん…？」

コウジ「あぁ…。命に別状はないが、彼の精神は大丈夫なのか保障できない…。」

キャンドモン「そ、そんなぁ…。」

レナモン「それより、あなた達は一体？」

レオルモン「自己紹介がまだだったな…。オレはレオルモンだ。」

コウジ「僕はレオルモンのパートナー、池崎　コウジだ。リュウギ君の父、リュウと一緒に冒険をしていたんだ…。」

一同「！？」

ナルガモン「マジかよ！？それじゃ、ショウも知っているのか？」

コウジ「ショウだって？彼もこのスレッド大陸に来ているのかい？」

レナモン「あぁ。だが、今はどうなのか分からない…。」

レオルモン「コウジ、デジドライブで連絡してみたらどうだ？」

コウジ「そうだね。」

コウジは頷き、デジドライブを取り出してショウと連絡を取る。

（ツー…ツー…）

しかし、繋がらなかった。

コウジ「やはりダメだったか…。恐らく、何処か別の島に向かったんだろう…。」

キャンドモン「やっぱり知っていたのですか？」

レオルモン「ま、色々と悩まされてな…。特に女好きな所がな…？」

ナルガモン「昔もそうだったんだ、アイツ…？」

レオルモン「昔も？って事は今もそうなのか！？」

ナルガモン・レナモン・キャンドモン「うん。」

レオルモン「やれやれ、いい大人が情けないぜ…？」

レオルモンは呆れてため息をつく。

すると、リュウギの側でを看病するミソラに気付くコウジ。

ミソラ「リュウギ…。」

コウジはミソラの肩にそっと手を置いて優しく声を掛ける。

コウジ「大丈夫さ…。彼の回復力は凄い…。だからすぐに元気になるさ…。」

ミソラ「うん…。でもまさか、リュウギがあんな事になるなんて思わなかった…。あんなリュウギ、初めて見た…。幼馴染みなのに、

私はリュウギに何もできなかった…。」

ミソラは無力さを感じたのか、涙がこぼれ落ちる。

レナモン「ミソラ…。」

コウジ「そんな事ないよ…。君は彼を助けたんだ。」

ミソラ「でも、私は…。」

コウジ「君のその優しさがあるから彼は闇に染まらずに救われたんだ…。これからも、彼を護ってあげるんだよ…。幼馴染みとしてね…。」

ミソラ「コウジさん…。はい！」

すると、ミソラは涙を拭く。

コウジ「そう、それでいいんだよ。」

レオルモン「カッコいい事言うじゃねぇか、コウジよ…。」

すると、コウジの顔が赤くなり、眼鏡をずり上げる。。

コウジ「べ、別に僕は彼女にフォローしただけだよ？」

レオルモン「隠すなよ♪」

レオルモンは笑うと、ナルガモン達もつられて笑う。そしてミソラも…。

コウジ「彼の事は僕に任せて、君達は決勝戦を観に行きなよ。」

ナルガモン「あぁ、頼んだぜ♪」

ナルガモン達は医務室から出ようとすると、ミソラはリュウギに小さく呟く。

ミソラ「リュウギ、信じてるわよ…。」

コウジ「きっと大丈夫さ…。」

ミソラ「では、リュウギをお願いします。」

ミソラは頭を下げて、医務室を退室した。

レオルモン「いい仲間だな…。」

コウジ「そうだね…。」

すると、コウジはうつ向く。

レオルモン「どうしたんだよ…？」

コウジ「リュウが殺されたなんて、未だに信じられない…。僕は夢でも見ているのか…？」

レオルモン「コウジ…。」

コウジ「僕らの絆は、断ち切られてしまったんだな…。」

コウジはそう言うと、自然に涙が頬に流れていた。

コウジ「リュウ…。僕はどうしたらいいんだ…。教えてくれよ、リュウ…。」

レオルモン「……。」

（それじゃあ、ドラコモンは一体何処へ…？）

コウジの涙は、リュウギの頬へと落ちるのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ２４　～解放されし闇の力！？準決勝ｖｓエグザウィンコルム！！～（後書き）

一方、スレイヤードラモンは先程の戦いを見て不気味に笑う。

スレイヤードラモン「ククククク…。まさか、アイツがリュウの息子だったとはなぁ…。コイツは好都合だな…。御縞　リュウギ…いや、小関　リュウギ…。」

（ニヤリ…）

スレイヤードラモンは不気味に笑いながら闇の中へと去っていった。

～キャラクター紹介　その５～

名前：池崎（いけざき）　浩司（こうじ）

性別：男

パートナーデジモン：レオルモン

趣味：景色を眺める、サッカー

一人称：僕

解説：ショウと同様、リュウと共に冒険した男。彼はリュウとの絆が深まっているため記憶という名の眠りが覚め、レオルモンと共にリュウを探す。彼は仲間想いであり几帳面。医者を勤めているため治療ができる。しかし恥ずかしがり屋なため、レオルモンによくからかわれる。

＞i23102―1298＜
【デザイン：トリプルミーミング】

次回は決勝戦、エグザｖｓスレイヤードラモン！！

果たしてどうなるか？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ２５　～マヤルコロシアム決勝戦！！エグザｖｓスレイヤードラモン！！～

ついにマヤルコロシアム決勝戦！！

エグザｖｓスレイヤードラモン！！

果たして結末は！？

Ｅｐ２５スタート！！

ＥＰ２５　～マヤルコロシアム決勝戦！！エグザｖｓスレイヤードラモン！！～

～マヤルコロシアム～

リンクモン「さぁ、大変長らくお待たせしました！！只今より、マヤルコロシアム決勝戦を行います！！」

デジモン達「ワァァァァァァァァ！！」

観客席からとてつもない歓声が沸き上がる。

ナルガモン「ついに始まったな…。」

キャンドモン「なんかボクチン、オシッコチビりそうですぅ～？」

ミソラ「ちょっと、もらさないでよね？」

ミソラは無理矢理キャンドモンを押し退ける。

タスクモン「お互いの力は最凶と呼ばれる程の実力者だ…。果たしてどんな戦いになるのか見物だな…。」

ミソラ「……。」

ナルガモン「おいミソラ、まだリュウギの事心配してるのか…？」

ミソラ「べ、別に心配なんて……してないもん…。」

レナモン「顔に出ているよ…。余程リュウギの事が心配なんだな…。」

ミソラ「もう、レナモンったら？」

一方、リュウギは…。

～医務室～

リュウギ「ＺＺＺ…。」

レオルモン「コウジ、回復は順調だよ！」

コウジ「本当に凄い回復力だね、リュウギ君は…。しかし、妙だな…。」

すると、コウジは腕を組んで考え事をする。

レオルモン「何がだ？」

コウジ「スレッド大陸に着いた時、リュウと同じ光を感じたんだ…。」

レオルモン「リュウと同じ光を…？それってもしかしたらリュウギの事なんじゃないの？」

コウジ「そうかもしれない…。何せリュウの息子だからな…。」

すると、コウジとレオルモンは異変を感じる。

レオルモン「コウジ…。」

コウジ「あぁ…。僕も感じた…。懐かしい光を感じる…。行こう！！」

コウジとレオルモンは急いでバトルフィールドへと向かった。

～観客席～

リンクモン「では、エグザウィンコルムの登場です！！」

すると、エグザがバトルフィールドに現れる。

デジモン達「ワァァァァァァァァァ！！」

ナルガモン「あの野郎…？」

ミソラ「……。」

リンクモン「エグザウィンコルムの対戦相手、ダークスレイヤーの登場です！！」

すると、スレイヤードラモンがバトルフィールドに現れる。

デジモン達「ワァァァァァァァァァ！！」

ナルガモン「アイツはスレイヤードラモン！？」

キャンドモン「ウソーン！？なんでこんなトコにいるんだＹＯ！？」

ミソラ「あれがスレイヤードラモン…！？」

レナモン「ミソラ、もしかしたらイビルスが…？」

ミソラ「そうね。ディスティングハーツ！！」

ミソラはスレイヤードラモンの体内を調べると、イビルスはいなかった。

ミソラ「イビルスはいないわ…。」

ナルガモン「じゃあ、何でアナログマンの手下になってんだよ！？」

ミソラ「けど…。」

レナモン「どうした、ミソラ？」

ミソラ「邪悪な闇を感じる…。リュウギと同じ憎しみの闇が…。」

ナルガモン「つうか、何でイビルス引き連れてないんだ？」

タスクモン「このマヤルシティには結界が張ってあるから安心しな♪」

キャンドモン「なんだぁ～、だったら安心ですねぇ♪」

～バトルフィールド～

エグザとスレイヤードラモンはバトルフィールドの中心に立ち、お互いに睨み合う。

エグザ「何を企んでいるんだ…？お前程の力なら、このコロシアムごと支配できるだろうが…？」

スレイヤードラモン「言ったハズだ…。俺の目的を果たせば、後の事はどうでもいい…。それに、厄介者がいるしな…。」

スレイヤードラモンはチラッと見ると、その目線の先にはマルスモンがいた。

エグザ「らしくないなぁ…？マルスモンに怯えてるのかぁ…？」

スレイヤードラモン「黙れ…。今の内にそうやって調子に乗っているがいい…。」

リンクモン「で、では、どちらかが勝てば優勝となります！！よろしいですか？」

エグザ「あぁ…。」

スレイヤードラモン「さっさと始めろ…。」

リンクモン「では、レディーファイト！！」

（カーン！！）

ゴングが鳴ると、エグザは懐から二挺の拳銃、デジガンを取り出した。

エグザ「喰らいな！！」

エグザは二挺のデジガンでスレイヤードラモンを狙い撃つ。

スレイヤードラモン「くっ！！」

スレイヤードラモンは大剣、フラガラッハで弾丸を弾き返す。

スレイヤードラモン「『昇竜斬波！！』」

スレイヤードラモンは大剣、フラガラッハを構え、剣で練った竜波動を下方から上方に向けて解き放ち、剣圧を放った。

エグザ「そう来たか…。」

エグザは二挺のデジガンをしまい、背中に背負う大剣、セイクリッド・レインティアを取り出し、セイクリッド・レインティアは二刀流にして昇竜斬波を上空へと弾き返した。

スレイヤードラモン「チッ…。」

すると、弾き返された昇竜斬波はコロシアムの天井へと直撃する。

ナルガモン「あの野郎、なんてパワーしてやがるんだ！？」

スレイヤードラモン「『昇竜斬波！！』」

スレイヤードラモンは大剣、フラガラッハを構え、剣で練った竜波動を下方から上方に向けて解き放ち、もう一度剣圧を放った。

エグザ「何度やっても無駄だ！！」

エグザはセイクリッド・レインティアで昇竜斬波を弾き返した。

ナルガモン「あの野郎、コロシアムを潰す気か！？」

しかし、スレイヤードラモンは何度も昇竜斬波を放つ。

エグザ「懲りないヤツだな…。」

エグザはセイクリッド・レインティアで次々と昇竜斬波を上空へと弾き返す。

すると、コロシアムの天井に巨大な穴が空いた。

キャンドモン「巨大な穴が空きましたよ？弁償されても知らないよ～？」

エグザ（妙だ…。なぜアイツは昇竜斬波を何度もするんだ…？）

エグザは考えながら昇竜斬波を上空へと弾き返す。

昇竜斬波は外へと出たその時、エグザは感付いた。

エグザ（そうだったのか！？）

「皆、逃げるんだ！？」

すると、マヤルシティに張られた結界が粉々に砕けてしまった。

一同「！？」

すると、上空から大量のイビルスが現れ、次々とデジモン達を支配していく。

デジモン達「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

エグザ「そうか…。これがお前の作戦だったのか、スレイヤードラモン！！」

スレイヤードラモン「言ったハズだ…。目的を果たせば、後の事はどうでもいいと…。イビルス共よ、マヤルシティにいるデジモン達を支配するのだ！！」

マルスモン「皆の者、早く避難するのだ！！」

スレイヤードラモン「無駄だ…。さぁ、次は貴様の番だ。エグザ！！」

スレイヤードラモンはフラガラッハを構え、エグザに襲い掛かる。

エグザ「くっ！！」

その時だった。黒い影がスレイヤードラモンの前に立ちはだかり、フラガラッハを受け止める。

スレイヤードラモン「くっ、誰だ！？」

すると、黒い影は口を開く。

？？？「久しぶりだな、スレイヤードラモン…。」

スレイヤードラモン「貴様は、バンチョーレオモン!?」

ミソラはD－アクセルでバンチョーレオモンのデータを読み取る。

D－アクセル「バンチョーレオモン、究極体、獣人型、ワクチン種、必殺技は獅子羅王斬。」

ミソラ「凄い…!?」

スレイヤードラモン「なぜ貴様がここにいるのだ…!?まさか…!?」

??「そのまさかさ…。」

すると、コウジが現れる。

コウジ「久しぶりだね、スレイヤードラモン…。」

スレイヤードラモン「コウジ!?」

ミソラ「コウジさん!?」

ナルガモン「じゃあ、あのバンチョーレオモンってヤツは…!?」

レオモン「レオルモンが究極体に進化した姿なのか…!?」

コウジ「みんな、イビルスに支配されたデジモン達を助けるんだ!!」

ミソラ「はい!!」

ミソラ達は急いでイビルスに支配されたデジモン達を助けに行く。

スレイヤードラモン「邪魔だ、バンチョーレオモン!!邪魔をするなら、例え仲間でも容赦しない?」

バンチョーレオモン「なぜなのだ…?なぜお前がこんなバカな真似をするのだ!?」

スレイヤードラモン「お前には関係のない事だ…。だから退け!!」

コウジ「大有りだ…。スレイヤードラモン、自分が何をやっているのか解ってやっているのか!?」

スレイヤードラモン「気休めを言うな!!俺はこんなくだらない世界を変えてやる!!」

コウジ「お前は間違っている!!」

スレイヤードラモン「誰のせいでこうなったか考えてみろ!!」

コウジ・バンチョーレオモン「!?」

エグザ「くっ…。」

スレイヤードラモン「そう、エグザのせいでリュウはもうこの世にいないのだ…。全てエグザのせいなのだ!!」

コウジ「エグザ…。」

スレイヤードラモン「コウジ、バンチョーレオモン。俺と協力してエグザを倒さないか…？」

コウジ「……。」

バンチョーレオモン「それは…。」

コウジとバンチョーレオモンはお互いに目を合わせる。

スレイヤードラモン「そいつに肩を持つのか…？リュウを殺したヤツが目の前にいるのだぞ？それをお前達は野放しにしていいのか…？」

エグザ「やれ…。」

すると、エグザはセイクリッド・レインティアを背中に背負う。

コウジ「……。」

？？？「『コロナサンクションズ！！』」

その時、上空から黒い影が現れ、炎をまとった華麗な空中殺法を放つ。

スレイヤードラモン「くっ！！」

スレイヤードラモンは素早く交わした。

バンチョーレオモン「お前は…？」

マルスモン「久しぶりだなバンチョーレオモン、コウジ。」

コウジ・バンチョーレオモン「マルスモン！？」

エグザ「マルスモン…。」

スレイヤードラモン「どういうつもりだ…？」

マルスモン「この男を殺すのは、俺は反対だ…。」

コウジ「どういう事だ、マルスモン！？」

マルスモン「あれは、大会始まる前の事だ…。」

――――――――――――――――

※Ｅｐ１６の続きです。

エグザ「条件だと…？」

マルスモン「あぁ…。この大会に優勝すれば、お前と契約する事を約束しよう…。」

エグザ「分かった…。マルスモン、頼みがあるんだが。」

マルスモン「なんだ？」

エグザ「ダークスの一人、スレイヤードラモンがこの大会に現れる。スレイヤードラモンがこのコロシアムに入場した後、結界を張って欲しいんだ…。」

マルスモン「なに?」

エグザ「無茶な頼みなのは解っている…。だが、俺は全力でスレイヤードラモンと戦いたい…。闇に堕ちたアイツの心を救いたい…。」

すると、マルスモンはジッとエグザの眼を見つめる。

マルスモン（エグザの眼、微かな光を感じる…。）

「分かった…。しかし、万が一の場合…」

エグザ「解っている…。責任は必ず俺が取る…。」

マルスモン「うむ…。頼んだぞ…。」

―――――――――――――――

コウジ「エグザが…!?」

エグザ「……。」

マルスモン「この男から、微かな光を感じる…。俺は過去の事は詳しくよく分からないが、これだけはハッキリと言わせて貰う。この男はデジタルワールドの救世主、エクセリオンだ…。」

エグザ「マルスモン…。」

スレイヤードラモン「エクセリオンだから全ては許されるというのか?勝手な事を言うな!!」

マルスモン「エグザ、スレイヤードラモンと戦え…。まだ決勝戦は終わってなどない…。」

エグザ「分かった…。」

エグザは背中に背負うセイクリッド・レインティアを取り出す。

エグザ「続きを始めるぞ、スレイヤードラモン。」

スレイヤードラモン「すぐに貴様を倒してやる!!」

エグザとスレイヤードラモンは同時に飛び上がり、戦いを再開する。

コウジ「待てエグザ!!」

コウジは追い掛けようとすると、マルスモンは手を広げてコウジを止める。

コウジ「なぜ止めるんだ、マルスモン!?」

マルスモン「コウジ、見逃してやってくれとは言わない…。俺の顔に免じて、エグザの件は少し待っていてくれないか…?」

バンチョーレオモン「しかし…。」

マルスモン「それが本当の真実だと思うのか…?」

コウジ「真実だって…?」

バンチョーレオモン「エグザに何か秘密があるというのか…?」

マルスモン「恐らくな…。奴の眼には、真実が隠されている…。」

バンチョーレオモン「……。」

コウジ「エグザ…。」

一方、ミソラ達は…。

ナルガモン「『アートルムフレイム！！』」

レナモン「『狐葉楔！！』」

キャンドモン「『ボンファイア！！』」

ナルガモン達はそれぞれの技でイビルスに支配されたデジモン達を解放する。

ミソラ「ダメだわ、これじゃキリがないわ…！？」

ナルガモン「スレイヤードラモンの野郎、ぜってぇに許さねぇ！！」

キャンドモン「きぃぃぃぃぃぃやゃゃゃゃゃゃゃ！？助けて皆さ～ん？」

キャンドモンは今にもイビルスに支配される寸前だった。

レナモン「キャンドモン！？」

タスクモン「『パンツァーナックル！！』」

すると、タスクモンが現れ、超弩級のパンチでイビルスを殴り飛ばした。

イビルス「ギィィィィィィィィィィ!?」

ミソラ「タスクモン!!」

タスクモン「怪我はないか?」

キャンドモン「た、助かった…?」

ナルガモン「俺達なら大丈夫だ!!」

すると、イビルスに支配されたデジモン達がミソラ達を囲む。

レナモン「くっ、囲まれたか…。」

タスクモン「おい、リュウギはどうしたのだ?」

すると、ミソラはハッとする。

ミソラ「医務室だわ!?急がなきゃ!?」

レナモン「ミソラ!!」

ミソラ「うん!!」

ミソラはD－アクセルをレナモンに翳した。すると、レナモンのデータは上書きされ、姿が変わる。

レナモン「レナモン、進化!!」

『キュウビモン!!』

キュウビモン「ミソラ、乗って!!」

ミソラ「えぇ!!」

ミソラは頷いてキュウビモンの背中に乗る。

タスクモン「医務室はどっちだ?」

ミソラ「あっちよ!!」

ミソラは医務室がある方へと指を差すとタスクモンはコクりと頷く。

タスクモン「分かった!!『パンツァーナックル!!』」

タスクモンは超弩級のパンチでデジモン達を殴り飛ばし、道を開ける。

ナルガモン「ここはオレ達に任せろ!!ミソラはリュウギを頼む!!」

ミソラ「分かったわ!!」

キュウビモン「しっかり掴まってて…。」

キュウビモンは急いでリュウギのいる医務室へと向かう。

一方、エグザは…。

エグザ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

スレイヤードラモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

エグザのセイクリッド・レインティアとスレイヤードラモンのフラガラッハがぶつかり合うと、エグザとスレイヤードラモンの周りに強い衝撃波が生じる。

エグザ・スレイヤードラモン「くっ！？」

すると、衝撃によってエグザとスレイヤードラモンはお互いに後方へと下がる。

エグザ「スレイヤードラモン、なぜお前はリュウが死んだ事を知っていたんだ！？」

スレイヤードラモン「黙れ！！俺は見たんだ…。リュウが倒れていた所を、お前は高らかに笑っていた！！違うか！？俺は忘れはしない、あの日の事を…」

それは、数年前に遡る…。

～東京都　新宿区～

？？？「ここは、現実世界…？どうしてここに…？」

リュウのパートナーデジモン、ドラコモンはとある森の中で迷って

いた。

ドラコモン「リュウは何処行ったんだ?」

すると、森の奥が少し明るい事に気付くドラコモン。

ドラコモン「あの奥に、一体何が…?」

ドラコモンは明るい所へと辿って行った。すると、ドラコモンは目を疑った。

そう、それはリュウギと同じ光景だった。

ドラコモン「リ、リュ……!?」

思わず言葉を失うドラコモン。すると、倒れているリュウの側にエグザらしき人物が後ろ姿で立っていた。

ドラコモン（アイツは一体…?）

エグザ（?）「ク、ククク…。」

ドラコモン「え…?」

すると、エグザらしき人物は高らかに笑う。

エグザ（?）「フハハハハ…!!」

ドラコモン「!?」

（あの男がリュウを…!?）

ドラコモンの目には涙が溢れていた。すると、ドラコモンはエグザらしき人物の顔をハッキリと見えた。左目に傷がある事を。

ドラコモン（許さない…。復讐してやる…。いつか必ずヤツを…。）

ドラコモンの眼は復讐に取り付かれた眼となり、何処かへと去っていった。

――――――――――――――――

エグザ「まさか、お前もあの現場にいたとはな…。」

スレイヤードラモン「だから俺は誓った！！貴様を必ず殺し、リュウの仇を取るとなッ！！」

エグザ「俺を殺せば、お前は満足なのか…？それでリュウは喜ぶとでも思うのか…？」

すると、スレイヤードラモンの目付きが変わった。

スレイヤードラモン「黙れ！！貴様に何が解る！？リュウは俺にとって、かけがえのない存在だった…。俺達の絆は永遠に結ばれていた…。なのに、貴様が俺達の絆を断ち切った！！全て貴様のせいだッ！！」

エグザ「スレイヤードラモン…。」

スレイヤードラモンはフラガラッハを激しく振り回す。

エグザはセイクリッド・レインティアで斬撃を防ぐ。

エグザ「くっ!?」

エグザは素早く受け身を取る。

スレイヤードラモン「覚悟はできているか、エグザ?」

エグザ「お前はまだ、本当の真実を知らない…。」

スレイヤードラモン「なに?」

エグザ「それは…」

その時、上空から闇の空間が現れる。

エグザ・スレイヤードラモン「!?」

すると、闇の空間からダークスの1人、ストラティクモンが現れる。

スレイヤードラモン「ストラティクモン!?」

エグザ「またお前か…?」

ストラティクモン「スレイヤードラモン、その男に耳を貸す必要はない…。アナログマン様から退却命令が出た。退くぞ…。」

エグザ「逃がすかよ!!」

エグザはデジガンを取り出して引き金を引く。

ストラティクモン「無駄だ。『風林火山!!』」

ストラティクモンは手を広げると、巨大な火の玉で弾丸を無力化にする。

エグザ「チッ…。」

ストラティクモン「そんなにスレイヤードラモンが心配か?だがその前に、あの少年の心配したらどうなんだ…?」

すると、エグザはハッとする。

エグザ「まさか、リュウギ!?」

すると、エグザはコウジに指示をする。

エグザ「コウジ、今すぐ医務室に行ってリュウギを助けるんだ!!」

コウジ「え!?それってどういう…」

エグザ「早くしろ!!リュウギの命が危ない!!」

コウジはコクりと頷き、急いで医務室へと向かった。

ストラティクモン「我々はこれから忙しいのでな…。今すぐ消し炭にしたい所だが、見逃してやる…。また会おう…。」

ストラティクモンはそう言って闇の中へと去っていった。

スレイヤードラモン「くっ…。」

スレイヤードラモンもストラティクモンの後を追うのであった。

エグザ「待て、スレイヤードラモン！？」

マルスモン「エグザ、早くコウジの後を追うのだ！！」

エグザ「あぁ！！」

エグザは急いでコウジの後を追う。

～医務室～

リュウギ「ＺＺＺ…。」

この騒動は勿論リュウギは何も知らない。すると、イビルスがリュウギに迫り来る。

イビルス達「キィィィィィィィィ！！」

イビルス達は一斉にリュウギを襲いに掛かる。

コウジ「バンチョーレオモン！！」

バンチョーレオモン「『バーンバンチョーパンチ！！』」

バンチョーレオモンは正義の熱い拳でイビルスを焼き尽くす。

イビルス達「ギィィィィィィィィィィ！？」

イビルス達は跡形もなく消滅した。

コウジ「何とか間に合ったね…。」

バンチョーレオモン「しかし、あのストラティクモンは一体…？」

すると、背後からイビルスが現れ、バンチョーレオモンに襲い掛かる。

コウジ「バンチョーレオモン、危ない！？」

バンチョーレオモン「！？」

その時だった。銃声が鳴り響くと同時にイビルスは消滅した。

イビルス「ギィィィィィィィィィィ！？」

エグザ「怪我はないか…？」

すると、コウジはエグザの背後からリュウの面影が映る。

コウジ「！？」

（リュウ！？）

バンチョーレオモン「なぜ助けた…？」

エグザ「さぁな…。じゃあ逆に聞こう…。スレイヤードラモンがお前らと協力しようって言われた時、なぜ躊躇った…？」

バンチョーレオモン「それは…。」

コウジ「僕らはただ、復讐が嫌いなだけだ…。」

エグザ「そうか…。なら、安心だ…。」

すると、エグザはデジガンを懐にしまいリュウギに近付く。

バンチョーレオモン「リュウギに何をするつもりだ!!」

エグザ「そう焦るなよ…。俺はただ、コイツの顔が見たいだけだ…。」

コウジ「？」

エグザはじっとリュウギの寝顔を見つめる。すると、小さく呟いた。

エグザ「リュウギとスレイヤードラモンが復讐に取り付かれてしまったのは俺の責任だ…。すまないな…。」

すると、エグザは背中を向けて退室しようとする。

コウジ「待てよエグザ!!」

すると、エグザは振り向きもせず、口を開く。

エグザ「リュウギを頼むぞ、コウジ…。」

エグザはそう言い残して何処かへと去っていった。

バンチョーレオモン「アイツ…。」

コウジ「エグザ…。」

（どうしてオレの名前を…？）

ミソラ「リュウギ！！」

すると、ミソラとキュウビモンが医務室に入ってくる。

コウジ「リュウギ君なら大丈夫だ…。」

ミソラ「そうですか…。」

ミソラはホッとして力が抜ける。

キュウビモンはレナモンへと退化する。

レナモン「無事で何よりだ…。」

すると、後にナルガモン達が医務室に入ってくる。

ナルガモン「リュウギは！？」

（ゼェ…ゼェ…）

ミソラ「大丈夫よ…。」

ナルガモン「良かったぁ～…。」

ナルガモン達もホッとして力が抜ける。

コウジ「ところで、イビルスはどうなったんだい…？」

ナルガモン「心配ねぇ、オレ達が全部片付けたぜ…。」

バンチョーレオモン「それなら安心だな…。」

安心したバンチョーレオモンはレオルモンへと退化する。

ミソラ「コウジさん、一体何が合ったのですか…？エグザはスレイヤードラモンと何か関係があるのですか…？」

コウジ「話せば長くなるよ…。」

コウジは先程起きた事をミソラ達に話した。すると、ミソラ達は長い沈黙となる。

ナルガモン「冗談だろ…！？それじゃ、スレイヤードラモンは…！？」

コウジ「そうだ…。スレイヤードラモンはリュウギの父親、リュウのパートナーデジモンだ…。」

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

EP25　～マヤルコロシアム決勝戦！！エグザvsスレイヤードラモン！！～

～マヤルシティ～

エグザ「……。」

エグザは無言のまま、マヤルシティを後にしてとある場所へと向かおうとしていた。

？？？「待て、エグザ…。」

エグザは振り向くと、マルスモンだった。

エグザ「マルスモン…。」

マルスモン「何処へ行くつもりだ…？」

エグザ「スレイヤードラモンを止めるのは俺しかいない…。だから、力になってくれるデジモンを探しに行く…。」

マルスモン「俺の事は諦めたのか…？」

エグザ「あぁ…。結局コロシアムは中止になった…。俺のせいでな…。」

マルスモン「確かにお前のお陰で、コロシアムは中止になり、スレッド大陸の頂点が誰なのかも分からなくなった…。」

エグザ「……。」

マルスモン「だが、これまでの戦いを見て俺は満足だ…。エグザよ…、力だけでは勝てない事を俺に見せたかったのだな…？」

エグザ「言っただろ…？必ずアンタを楽しませてくれるってな…。」

すると、マルスモンは高らかに笑う。

マルスモン「気に入った…。エグザよ、力を貸してやる！」

エグザ「いいのか…？」

マルスモン「ただし、条件がある。」

エグザ「また条件か…。」

マルスモン「近頃、手応えのない奴らばかりだからな…。俺を楽しませるのが唯一の条件だ…。契約成立か？」

マルスモンは手を差し伸べて握手を求める。すると、エグザは静かに笑う。

エグザ「御安いご用だ…。」

エグザはそう言ってマルスモンの手をギュッと握手をした。

エグザ「コントラクト、マルスモン！」

すると、マルスモンの身体から黒いオーラが纏う。

エグザ「コントラクト、完了…。必要になったら呼ぶ…。じゃあな…。」

エグザはそう言ってマヤルシティから去っていくのであった。

～キャラクター紹介　その６～

名前：エグザ（本名は不明）

性別：男

パートナーデジモン：？？？

一人称：俺

解説：リュウギの父、リュウを殺した張本人。リュウのパートナー、スレイヤードラモンに何度も手を差し伸べようとしているが、スレイヤードラモンとの関係は全く不明であり、全て謎に包まれている。彼はエクセリオンの１人であり、自分自身にＥＸモードを発動させる事ができる。

＞ｉ２３２２８―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

～セイクリッド・レインティア＆デジガン　ライト＆ダーク～

＞ｉ２３２３０―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

何とかトラブルは防いだが、コロシアムは中止になってしまった。
果たして、リュウギ達はどうなったのか…？

次回もお楽しみに！！

EP26　～繋ぎ合わせろ！！記憶のピース～（前書き）

～？？？～

リュウギは周りを見渡すと、真っ暗で何も見えなかった。

リュウギ「俺は一体…？コロシアムはどうなったんだ…？」

すると、奥から小さな光が見えてくる。

リュウギ「光…？」

リュウギは光に向かって走り出すと、ピカッと光の閃光を放った。

リュウギ「くっ！？」

リュウギは思わず目を閉じる。やがて目を開けると、リュウギは目を疑った。

リュウギ「ここは…！？あの時の…！？」

そう、リュウギの見た景色はリュウギの父親、リュウが死んだ現場だった。

リュウギ「くっ！？」

リュウギは頭を抱えて呻き声を上げる。

リュウギ「う…うあぁぁ…!?やめろ…、もう思い出したくない…!?」

すると、リュウが倒れている事に気付くリュウギ。

リュウギ「父さん!?」

リュウギはリュウの元へ駆け付けようとする。しかし、全く前に進まない。

リュウギ「なんでだよ…!?なんで進まないんだよ!?」

すると、リュウの側に黒影が現れる。

リュウギ「エグザ!?」

すると、エグザは高らかに笑う。

エグザ「ク、ククク…。フハハハハ…!!」

リュウギ「よくも…、よくも父さんを!!エグザァァァァァァァァ!!」

しかし、段々と遠ざかっていく。

リュウギ「何処へ行くんだ!!逃げるな、エグザ!!」

その時、エグザの頬に一筋の涙が流れている所を、リュウギは見えた。

リュウギ「え…！？」

すると、リュウギは再び光の閃光に包まれた。

果たして、リュウギはどうなったのか？

Ｅｐ２６スタート！！

EP26　～繋ぎ合わせろ！！記憶のピース～

リュウギ「父さん！？」

リュウギはガバッと起き上がる。

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

リュウギは周りを見渡すと、コロシアムの医務室ではなく、古くさい部屋にいた。

リュウギ「夢…だったのか…。」

リュウギは安心してホッとし、左手で顔を覆う。

リュウギ「！？」

すると、リュウギは左手の平に包帯が巻かれていた。

リュウギ「包帯…？」

リュウギは恐る恐る包帯をほどくと、左手の平に大きな傷が刻まれていた。

リュウギ「なんだよ…、この傷は…！？」

すると、リュウギはエグザの剣が振った時、左手で受け止めた事を思い出す。

リュウギ「何だよこの記憶は…！？夢だ…。夢に決まってる！？」

リュウギの頭は混乱し、は頭を抱える。

すると、足音が聞こえてくる。

リュウギ「誰…だ…？もしかして…！？」

足音は段々と近付いてくると同時に、リュウギは段々と恐怖心になる。

すると、ドアが開かれる。

リュウギ「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

リュウギは右手を広げると、アルカナムが現れ、刃先を向けた。

コウジ「リュウギ君…！？」

リュウギ「コウジ…さん…。」

リュウギは安心したのか、力が抜けてアルカナムを手放した。

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

コウジ「まぁ無理もないよ…。君はずっと魘（うな）されていたからね…。もしこれが僕じゃなく、彼女だったら大変だよ…？」

リュウギ「コウジさん、一体何が合ったんだ…？コロシアムは…？準決勝は一体どうなったんだ…？」

コウジ「コロシアムは決勝戦の最中に中止になったよ…。スレイヤードラモンの襲撃によってね…。」

リュウギ「決勝戦の最中…？それじゃ、俺は負けたのか！？」

コウジ「その様子だと、何も憶えてないみたいだね…。」

すると、リュウギはコウジの胸ぐらを掴んで問い詰める。

リュウギ「教えてくれコウジさん！！一体何が合ったんだ！？」

コウジ「いいよ。でも真実を話す前に、１つ君に確認したい…。」

リュウギ「確認…？」

コウジ「真実を知るには、それなりの覚悟が必要…。君にその覚悟はあるかい…？」

リュウギ「！？」

（ゾクッ）

リュウギはコウジの言葉を聞いて背筋が凍り付いた。つまり、先程の流れてきた記憶は偽りではなく本当だったのか。リュウギは段々と恐怖心に陥り、自然と手が震えていた。

コウジ「……。」

（ダメだ…。リュウギ君はまだ恐れている…。）

すると、コウジは背を向ける。

コウジ「無理に聞く必要はないよ…。覚悟を決めたら、いつでも言ってくれ…。」

コウジはそう言って、部屋から退室した。

リュウギ「……。」

リュウギは傷が刻まれた左手の平をじっと見つめる。

リュウギ「真実…。」

～マヤルシティ～

タクスモン「んじゃ、オレはミハノ村に帰るぜ…。」

タクスモンはそう言って、ミハノ村へと帰って行った。

ナルガモン「おう、またな！」

ミソラ「……。」

レナモン「ミソラ、大丈夫か…？」

ミソラ「う、うん…。」

ナルガモン「心配なら、見に行ったらどうなんだ？」

ミソラ「そ、それは…。」

コウジ「今はやめといた方がいいよ…。」

すると、宿屋からコウジが出てくる。

ミソラ「コウジさん…。」

ナルガモン「どういう事だよ…？」

コウジ「身体の方はもう大丈夫だが、彼は精神的にかなりきている…。」

レナモン「原因はやはりエグザか…。」

コウジ「あぁ…。」

ミソラ「リュウギ…。」

ミソラはうつ向く。

キャンドモン「心配ないですよマドモワゼル♪元に戻るまでマヤルシティの観光でも…」

キャンドモンは飛び付くと、ミソラは殴り飛ばすのかと思いきや、何処かへと行ってしまう。

キャンドモン「ぐえっ！？別に避けなくても…？待ってくださいよミソラさ～ん！」

キャンドモンは追い掛けようとすると、レナモンはキャンドモンを止める。

レナモン「1人にさせてあげて…。何せ一番ショックなのはミソラだから…。」

コウジ「そうだね…。だがレナモン、彼女をしっかりと見張っておくんだよ…。」

レナモン「あぁ…。」

レナモンはコクりと頷いて姿を消した。

キャンドモン「どういう事ですか…？」

ナルガモン「おいおい、解るだろ普通？」

レオルモン「KY…。」

キャンドモン「んだよチキショォォォォォッ？KYで悪うござんしたねッ？さてはミソラさんのポジションを横取りしようっていう戦法だなぁ？テメェらの戦法見破ったりぃぃぃぃぃぃ！！」

キャンドモンは怒り出して暴走する。

レオルモン「な、なんだコイツ…？」

ナルガモン「こういう性格だから気にすんな…。」

キャンドモン「コルァァァァァァァァッ？聞こえてんぞテメェッ？ボクチンの耳は地獄耳なんだよッ？誰が最低な性格なんだコルァァァァァァァァッ？」

レオルモン「ハッキリ言ってたし、しかも全然チゲェよ！？何処が地獄耳なんだよッ！？」

レオルモンはありったけの声でツッコム。

コウジ「やれやれ…？」

一方、リュウギは…。

～マヤルシティ　宿屋～

リュウギ「……。」

リュウギは考えると、コウジの言葉が頭の中に響く。

コウジ『真実を知るには、それなりの覚悟が必要…。君にその覚悟はあるかい…？』

リュウギ「俺が気絶している間に、一体何が合ったんだ…？」

すると、あの時の記憶が流れてくる。

『邪魔をするな！！！！』

リュウギ「！？」

『リュウギ、やめろって言ってるのが分かんねぇのかよ！！このままだとお前がお前じゃなくなっちまうんだぞ！！』

リュウギ「ナルガ…モン…？」

『だから何だ…？俺はこの男に復讐さえすれば、後の事はどうでもいい…。例え、この身が闇に染まったとしてもな…。』

リュウギ「俺…なのか…？」

すると、リュウギは段々と恐怖心に陥ってしまう。

リュウギ「嘘だ…。あれが俺だなんて…。偽りの記憶に過ぎない！！」

リュウギは握り拳を作って思いきり床を殴った。すると更に、あの時の記憶が流れてくる。

『あの日、父さんは貴様に殺された後、母さんは突然といなくなった…。貴様は俺の人生を奪ったんだよッ！！！！』

リュウギ「やめろぉぉぉぉぉぉぉ！？」

？？？「目を覚ませ、リュウギ！！」

リュウギ「！？」

リュウギは我に返ると、側にナルガモンがいた。

リュウギ「ナルガ…モン…？」

ナルガモン「大丈夫か、リュウギ？」

リュウギ「あ、あぁ…。」

しかし、リュウギの額には大量の汗が流れていた。

ナルガモン「リュウギ、どうしちまったんだよ…？お前らしくないぞ…？」

リュウギ「ナルガモン、俺の記憶はどうなっているんだ…？俺じゃない姿が見えるんだ…。まるで、闇に染まった俺が…。」

ナルガモン「リュウギ、実はな…。」

リュウギ「やっぱり、偽りの夢じゃなかったんだ…。」

ナルガモン「リュウギ…？」

リュウギ「言わないでくれ…。もう思い出したくない…。いっその事、忘れ去りたい気分だ…。でも無駄だよな…。どんなに逃げても、過去は変えられないんだ…。」

ナルガモン「くっ！！」

その時、ナルガモンはリュウギを殴り飛ばした。

リュウギ「何をするんだ、ナルガモン！？」

ナルガモン「リュウギ、テメェはいつからそんな負け犬な事を言うようになったんだよ！？」

リュウギ「負け犬…だと…？」

ナルガモン「あぁそうだ!!今のお前は負け犬だ!!こんな負け犬がパートナーだなんて、恥ずかしくて涙が出ちまうぜ…。」

リュウギ「黙って聞いてたら、言いたい放題言ってくれるじゃねぇか!!」

ナルガモン「言いたい放題言わせて貰うよ!!自分の流儀を貫き通す真っ直ぐな心は何処行っちまったんだよ、リュウギ!?」

リュウギ「!?」

ナルガモン「もう付き合ってらんねぇよ…。短い付き合いだったな…。テメェはそこで、負け犬のように一生吠えてな!!」

ナルガモンはそう言って、部屋から退室した。

リュウギ「俺の流儀…。」

リュウギは心の中で自問自答する。自分は今まで何をやっていたのか?自分はどうしてデジタルワールドで冒険しているのか?そして、どうして自分はリュウギなのか?を…。

リュウギ「俺は…、俺は…。!?」

すると、リュウギは突然と気を失った。

〜???〜

リュウギは目を開けると、見知らぬ場所に居た。

リュウギ「ここは…？」

すると、何処からか声が聞こえてくる。

？？？「ここは、お前の心の中だ…。」

リュウギ「誰だ！？姿を見せろ！！」

しかし、謎の声は姿を現せない。

？？？「心配ない。私はお前の味方だ…。リュウギよ、これからの話をしっかりと聞くのだ…。」

リュウギ「？」

？？？「まず、下を見ろ…。」

リュウギは下を見ると、ガラスが飛び散ったように記憶のピースがバラバラになっていた。

リュウギ「これってまさか、俺の記憶なのか…？」

？？？「いかにも、お前の記憶がバラバラになったのは他でもない…。エグザと戦った時、感情の鎖が契れたと同時に記憶のピースもバラバラになったのだ…。」

リュウギ「何とかできないのか…？」

？？？「バラバラになったピースを繋ぎ合わせて完全な記憶にする

…。勿論、お前がな…。」

リュウギ「俺が…？」

？？？「このバラバラになったピースの中には2種類のピースがある。1つは善のピース、2つ目は悪のピース…。」

リュウギ「悪のピース？」

？？？「無論、エグザと戦った時の記憶だ…。」

すると、リュウギは深刻な顔で悩む。

？？？「決めろリュウギ…。世界を救うか？それとも尻尾巻いて逃げるのか？全てはお前次第だ…。」

リュウギ「！？」

すると、飛び散った一枚の記憶のピースが光る。

『こっからは究極の選択だ！！世界を救うか？それとも尻尾巻いて逃げるか？』

すると、リュウギの目付きがキリッと変わる。

リュウギ「尻尾巻いて逃げるのは俺の流儀に反する…。やってやる！」

リュウギはバラバラになった記憶という名のピースを懸命に繋げていく。

???「いい覚悟だ…。タイムリミットは一時間だ…。健闘を祈るぞ、リュウギ…。」

すると、謎の声は何処かへと消え去った。

リュウギ「タイムリミット？まぁいい…。この記憶は…？」

リュウギは記憶のピースを拾うと、光が生じる。

『お前は言ったハズだ…。デジタルワールドを救うか、尻尾巻いて逃げるかって…。俺は初っぱなから尻尾巻いて逃げるのは嫌いだ…。けど、途中で逃げるのはもっと嫌いだ!!例えどんな相手だろうが、最後まで諦めずに真っ直ぐ立ち向かう!!それが俺の流儀だ!!』

リュウギ「これは、初めてＢＡＤトリオと戦った時だ。たしか、モノクロモンを利用して襲い掛かってきたをだよな…。善のピースだな…。」

リュウギは善のピースを繋ぎ合わせる。

リュウギ「これは…？」

リュウギは次のピースを拾うと、光が生じる。

『分かった…。俺達はどんな状況に陥っても、最後まで諦めない！それが俺の流儀だ!!行くぞ、ナルガモン!!』

『上等だ、やってやるぜッ!!!!』

リュウギ「これは、初めてＥＸモードが発動した時だ…。」

リュウギは手に取ったピースを次々と繋ぎ合わせる。

リュウギ「これは…？」

リュウギは次のピースを手に取った。

『エグザ…、貴様を殺したいと俺の血が騒いでいるんだよ…。貴様を倒せば、俺の復讐は終わる…。』

リュウギ「！？」

（ゾクッ）

リュウギの背筋が凍り付き、ピースを手放した。

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

（これが、悪のピース…。）

リュウギは気を取り直して次のピースを拾う。

『許さない…。貴様だけは絶対に許さない！！』

リュウギ「くっ！？これもか！？」

リュウギは悪のピースを手放した。

リュウギ「次だ…。」

リュウギは次のピースを拾おうとすると、手を止める。

リュウギ（まさか、コイツも悪のピースなのか…？）

リュウギは戸惑い、拾おうとするピースを諦めた。

リュウギ「！？」

リュウギは回りを見渡すと、バラバラになった記憶のピースが全て悪のピースに見える。そう、リュウギは先程の悪のピースの影響で恐怖心になり、幻覚に囚われてしまったのだ。

リュウギ「何処だ…？何処だよ善のピースは！？」

（分からない…。全部が悪のピースに見えてしまう…。）

すると、リュウギは頭を抱える。

リュウギ「俺は…、俺はどうしたらいいんだよ…！？」

リュウギは記憶のピースを取るのを恐れてしまった。

その時だった。

？？？「恐れないで…。」

さっきの謎の声とは全く違う声が聞こえてくる。

リュウギ「！？」

？？？「あなたは決して1人じゃない…。あなたを支えてくれる仲間がいるわ…。」

リュウギ「仲…間…？でも、ここには俺だけしかいない…。」

？？？「大丈夫…。例えどんなに離れていても、あなたは皆との絆が繋がっている…。」

リュウギ「絆…。」

すると、リュウギの視界に映る幻覚は解放されていく。

？？？「仲間との絆、お互いの信じる心があれば、ピースはきっと応えてくれる…。」

すると、謎の声は何処かへと消え去った。

リュウギ「仲間との絆か…。」

すると、リュウギの目付きはキリッと変わり、ピースを繋ぎ合わせる。

～マヤルシティ　宿屋～

ミソラ「リュウギ、身体の方は…」

ミソラはなんとか心を落ち着かせ、部屋に入ってくると、リュウギが床に倒れている事に気付く。

ミソラ「リュウギ！？」

ミソラは慌ててリュウギの側に駆け付けると、リュウギは魘されて

いた。

コウジ「どうした!?」

コウジはミソラの声に反応し、慌てて部屋に入ってくる。

ミソラ「コウジさん、リュウギが…!?」

コウジ「落ち着いて、取り合えず彼をベッドに…。」

コウジはリュウギをベッドに移動させる。

リュウギ「う…、うぅ…。」

すると、リュウギの身体が徐々にデータ化していく。

コウジ「マズイ…。このままでは彼はデータ化となって完全に消滅してしまう…。」

ミソラ「そんな…!?何とかできないんですか!?」

コウジ「どうする事もできない…。彼の心を信じるしかない…。」

ミソラ「リュウギ…。」

～リュウギの心～

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

リュウギは記憶のピースを繋ぎ合わせていくと、あと1枚繋ぎ合わ

せれば完成する。

リュウギ「あと1枚だ…。何処だ…？」

リュウギは辺りを見回すが、どれが善のピースなのか分からない。

リュウギ「ダメだ…。見つからない…。どうしたら…。」

リュウギは拳を地面に殴る。すると、リュウギの身体が消えかけていく。

リュウギ「身体が…！？どうして…！？」

リュウギは謎の声が言っていた言葉を思い出す。

？？？『タイムリミットは一時間だ…。』

リュウギ「つまり、タイムリミットになれば、俺は消滅するって事なのか…！？クソッ！！」

リュウギは急いで最後の一枚を探す。

リュウギ「どれだ！？どれなんだ！？」

「――――ギ…。」

リュウギ「誰だ！？」

それは、聞き覚えのある声だった。

「――ユウギ…。」

リュウギ「ミソラか…!?何処だミソラ!?」

リュウギは回りを見渡すと、一枚のピースが光り輝いていた。

リュウギ「これか!!」

リュウギは光り輝くピースを手にした。

『心配すんなよミソラ。必ずお前を現実世界に還してやる。約束だ…。』

『リュウギ…。』

『約束は死んでも守る!!それが俺の流儀だからな!!』

リュウギ「約束…。そうだ…。俺はまだやらなきゃならない事があるんだ!!」

リュウギは手にした善のピースを急いで繋ぎ合わせに行く。

リュウギ「ミソラを現実世界に還すまで、俺はこんな所で死ね訳にはいかないんだぁぁぁぁぁぁぁ!!」

リュウギは懸命に記憶のピースを繋ぎ合わせると、記憶のピースは完成した。

リュウギ「間に合ったぜ…。そうだ…、俺は1人じゃない…。皆との絆が繋がっているんだ…。」

???「よくやった、リュウギよ…。」

すると、始めに出てきた謎の声が聞こえてくる。

リュウギ「あぁ…。」

???「では、すぐに元の場所へ還してやる…。」

リュウギ「待ってくれ…。」

???「なんだ…？」

リュウギはバラバラに散らばる悪のピースを見つめる。

リュウギ「少し時間をくれないか…？」

???「まさか、悪のピースを…？」

リュウギ「ここは俺の心だ…。綺麗に掃除しなきゃ気分が悪いからな…。それに…」

???「？」

リュウギ「過去から逃げてたら、俺の流儀に反する…。正々堂々、過去に向き合ってやるさ！！！！」

～マヤルシティ　宿屋～

一方、ミソラ達はリュウギを見守る。

すると、リュウギの身体の消滅は防げた。

コウジ「何とか、彼は消滅せずに済んだみたいだ…。」

レオルモン「そうか…。」

ミソラ「良かった…。」

ミソラはホッとしたその時だった。

リュウギ「う…、うぅ…。」

ナルガモン「リュウギ…？」

すると、リュウギの身体から黒い闇のオーラが溢れ出す。

ミソラ「リュウギ！？」

コウジ「これは…、闇の力が溢れ出ている！？一体どういう事なんだ！？」

ナルガモン「もう大丈夫じゃなかったのかよ！！」

リュウギ「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

リュウギは雄叫びを上げると、闇の力が爆発するように溢れ出す。

ナルガモン「冗談じゃねぇ…。ここでアイツを闇に堕ちてたまるか！！」

ナルガモンはリュウギの側で必死に叫ぶ。

ナルガモン「リュウギ、お前はこんな所で闇に堕ちるような奴じゃないだろうが！！」

ミソラ「ナルガモン…。」

ナルガモン「お前はオレのパートナーだろうがぁぁぁッ！！」

リュウギ「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ミソラ「リュウギィィィィィ！！」

すると、リュウギは徐々に治まる。

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

すると、リュウギはゆっくりと起き上がる。

ミソラ「リュウ…ギ…？」

すると、リュウギは口を開く。

リュウギ「心配かけてすまなかったな、みんな…。」

ミソラ「リュウギ…。」

ミソラは思いきりリュウギを抱き締めた。

リュウギ「ごめん…。」

コウジ「無事で良かったよ、リュウギ君…。」

リュウギ「コウジさん…。」

コウジ「もう、身体の方は大丈夫なのかい…？」

リュウギ「あぁ…。ん？」

すると、ナルガモンはレナモンの後ろに隠れる。

リュウギ「なに隠れてんだよ、ナルガモン？」

ナルガモン「べ、別に心配になって来たんじゃねぇからな…。」

リュウギ「ふ～ん、その割りには、『お前はオレのパートナーだろうがぁぁぁッ！！』って叫んでたクセに…。」

ナルガモン「な、なんで知ってんだよ！？」

リュウギ「お陰さまで目が覚めたぜ…。ありがとな、ナルガモン…。」

ナルガモン「べ、別に大した事してねぇよ…？何せ…」

リュウギ「俺とお前はパートナー…。だろ？」

ナルガモン「へへッ…。」

コウジ「ところでリュウギ君、一体何が合ったんだい…？」

リュウギ「実は…」

リュウギは先程起こっていた事をコウジ達に話した。

コウジ「なるほど…。つまり、君の身体から闇が溢れ出たのは悪のピースを消すために向き合った…。」

ミソラ「どうしてそんな無茶を…！？」

リュウギ「過去から逃げてたら、俺の流儀に反するからな…。」

ミソラ「またそうやって無茶を…。」

レナモン「だが、リュウギらしい…。」

ナルガモン「ま、それがリュウギの良いところだからな♪」

リュウギ「俺はもう大丈夫だ…。」

コウジはリュウギの眼を見て安心する。

コウジ（流石は、リュウの息子だよ…。）

ミソラ「でも、これからどうするの…？」

コウジ「噂で耳をしたんだが、このスレッド大陸の他にも、イビルスに支配されている大陸や島がある…。」

一同「!?」

コウジ「エグザや君と対決したカイ君も他の場所へ移動している…。何せエクセリオンにしかできない使命だからね…。」

リュウギ「行こう!!デジタルワールドは俺達を必要としている!!」

一同「うん!」

キャンドモン「でも、どうやって移動するのですかぁ…?」

キャンドモンの言葉により、リュウギ達はピタッと止まる。

レオルモン「確かにそうだな…?」

リュウギ「アイツらはどうやって移動してるんだろう…?」

レナモン「カイにはサンダーバーモンがいる…。エグザはどうか解らないがな…。」

リュウギ「でも、この人数じゃ厳しいな…。」

コウジ「だったら、メカルクタウンに行けばいいんじゃないのか?」

ミソラ「めかるくたうん?」

レナモン「メカルクタウンはマシーン型デジモンが生息する巨大工場だ…。」

リュウギ「そうか、彼処なら移動できる乗り物が見つかるハズだ！」

ナルガモン「よし、そうと決まれば早速メカルクタウンに行こうぜ！！」

コウジ「僕も一緒に同行させて貰うよ。メカルクタウンはマヤルシティから南西にある。」

リュウギはすぐに着替えて支度をする。

リュウギ「よし、メカルクタウンに行こう！！」

こうしてリュウギ達はマヤルシティから南西の方角にあるメカルクタウンへと向かうのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

Ｅｐ２６　～繋ぎ合わせろ！！記憶のピース～（後書き）

ＳＡＩでリュウギとミソラを描きました♪

ＳＡＩって最高…（感）

＞ｉ２３５３９―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

移動できる乗り物を探すため、メカルクタウンへと向かうリュウギ達。

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ２７　～スレッド大陸、超危険渓谷　ウルクバレー！！～（前書き）

メカルクタウンへと向かうリュウギ達。しかし、ちょっとした出来事が訪れてしまう！

では、Ｅｐ２７スタート！！

EP27　～スレッド大陸、超危険渓谷　ウルクバレー！！～

コウジとレオルモンが仲間に加わり、メカルクタウンへと目指すリュウギ達。

ナルガモン「まだ着かねぇのかよ～？」

レナモン「メカルクタウンへ行くには、ウルクバレーを越えなきゃならない…。」

ナルガモン「うるくばれー？」

レナモン「ウルクバレーは落石がよく落ちてくる。スレッド大陸では有名な谷だ…。」

ミソラ「だからこの周辺にデジモン達がいないんだね…。」

レナモン「あぁ…。」

キャンドモン「ヤバイじゃないですか！？一歩でも間違えたら御陀仏じゃん！？」

レオルモン「確かにそうだな…？」

リュウギ「でも、このまま引き下がる訳にはいかない…。１日も早く、メカルクタウンに着かなきゃな…。」

ナルガモン「そういう事だ！！」

キャンドモン「ボクチン、帰っていいですか…？」

すると、リュウギ達は足を止める。

コウジ「どうやら、ここがそうみたいだね…。」

リュウギ達は崖を見下ろすと、下が全く見えない程の高さだった。

キャンドモン「きぃぃぃぃぃぃやゃゃゃゃゃゃゃゃゃ！？無理無理無理無理！？こんなヤベェの越えなきゃならねぇの！？見てよアレ、下が全く見えねぇよ！？御陀仏どころじゃ済まねぇＹＯ！？」

キャンドモンは崖を見下ろした瞬間、暴走する。

レオルモン「コイツうるせぇなぁ…？」

コウジ「確かに、落ちたら無事では済まないな…。」

リュウギ「さて、どうするか…。」

リュウギは腕を組んで考える。

ナルガモン「なぁリュウギ、あそこにタクシーがあるぞ…？」

ミソラ「タクシー？そんなのあるわけないじゃな…い…」

ミソラはツッコミながら見ると、思わず言葉を失う。

そこには小屋があり、看板に『スカイタクシー』と書いてあった。

リュウギ「ホントだ…？」

ミソラ「なんか、胡散臭そう…？」

コウジ「ここで考えていても背に腹は変えられない…。行ってみようよ…。」

リュウギ達はスカイタクシーという小屋へと向かった。

（コンコン！）

リュウギはノックをする。

リュウギ「誰かいないのか？」

ミソラ「返事ないわね…？」

すると、小屋から誰かが出てくる。

？？？「はいはーい…。」

ナルガモン「お、やっと出てきた！」

リュウギはＤ－アクセルで小屋から出てくるデジモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「カラテンモン、完全体、魔人型、ウィルス種、必殺技は衝撃羽。」

コウジ「あの看板を見てここに来たんだ。」

レオルモン「ここってスカイタクシーなのか？」

カラテンモン「いかにも、ここは向こうの丘まで運ぶスカイタクシーだ…。」

ナルガモン「だったらよぉ、向こうの丘まで運んでくれよ♪」

カラテンモン「無理だ。」

レオルモン「何でだよ！？」

カラテンモン「看板をよく見てこい…。」

一同「？」

リュウギ達は看板を見てくると、右端に小さな文字が書いてあった。

『女性限定です。』

一同「はぁ！？」

カラテンモン「これで解ったかぁ？オレは女性しか受け付けねぇ。」

すると、上空からカラテンモンが舞い降りてくる。

ナルガモン「おいテメェ、何で女性限定なんだよ？」

カラテンモン「理由は簡単。か弱い女の子を危ない目に合わせる訳にはいかないからだ…。」

レオルモン「それだけか？」

カラテンモン「あともう1つ、女が好きだからだ…。」

リュウギ「マジかよ…？」

ミソラ「最低ね…？」

すると、ミソラはチラッとキャンドモンを見る。

キャンドモン「な、なんでボクチンを見るんですか！？」

レナモン「当然だ…。」

ミソラ「性格が正しく、アンタそのものだからよ…？」

ナルガモン「だったら、オレ達はどうすりゃいいんだよッ？」

カラテンモン「心配ない！谷間に向こうにある丘へと繋がる橋がある。その橋を渡って登るがいい。」

ナルガモン「なるほどなぁって誰が納得するかぁぁぁぁぁぁぁぁッ？」

ナルガモンはノリツッコミをする。

コウジ「仕方ない…。メカルクタウンへ行くにはこうするしかないよ…。」

キャンドモン「え！？まさか渡るの！？」

リュウギ「当たり前だろ?さ、行こうぜ。」

キャンドモン「うそーん!?」

ミソラ「気を付けてね…。」

リュウギ「心配するな、お前との約束を果たすまで死んでたまるかよ…。」

リュウギはそう言ってコウジ達と共に向こうの丘に繋がる橋へと向かった。

ミソラ「ところで、ホントに向こうの丘まで運んでくれるんでしょうね…?」

ミソラは怪しい目でカラテンモンを見つめる。

カラテンモン「当然だ!では、向こうの丘まで運んでしんぜよう!!」

カラテンモンは翼を広げ、ミソラとレナモンを向こうの丘まで運んでいった。

ミソラ「あっという間に着いたわ♪」

レナモン「感謝する…。」

カラテンモン「アイツらにもヨロシク伝えといてください。では!」

カラテンモンはそう言って元の場所へと帰って行った。

ミソラ「待っときましょうよ、レナモン！」

ミソラは背筋を伸ばして岩に座る。

レナモン「……。」

～ウルクバレー～

キャンドモン「怖ぇぇぇぇぇ！？もう落ちそうなんスけど！？」

レオルモン「うるせぇよ？黙って進めよ？」

一方、リュウギ達は橋を目指して谷を降りる。

リュウギ「コウジさん…。」

コウジ「どうしたんだい？」

リュウギ「父さんって、どんな人だったんだ…？父さんの事、あまり分からなくてさ…。」

コウジ「僕らは昔、よろず屋で働いていたんだ…。」

ナルガモン「よろず屋？なんだそれ？」

リュウギ「頼まれたら何でもする何でも屋の事だ。」

コウジ「リュウはそのよろず屋に営んでいたんだ。でも、自分勝手

でいつも仕事サボってたよ。」

レオルモン「ま、要するにチャランポランだな！」

リュウギ「そ、そうなんだ…？」

レオルモン「でもなぁ、いざという時に凄い力を発揮するんだぜ！」

リュウギ「凄い力か…。」

（ショウさんが言っていたキズナドライブの事だな…。）

コウジ「それに、リュウがいたから今の僕らがいる…。僕らはリュウにとって、かけがえのない存在だったよ…。」

リュウギ「……。」

リュウギはコウジの話を聞いて嬉しかった。

キャンドモン「落ちる、落ちるぅぅぅぅ！？」

レオルモン「だからうるせぇって？」

ナルガモン「て言うかキャンドモン、最初から浮いてるから落ちねぇんじゃねぇのか…？」

すると、暴走するキャンドモンはピタッと止まる。

キャンドモン「な～るほど♪流石ナルガモンですぅ♪」

すると、リュウギ達はズッコケる。

レオルモン「調子狂うなぁ…？」

コウジ「あははは…？」

コウジは苦笑いする。すると、リュウギは何か発見する。

リュウギ「コウジさん、彼処に橋が！」

コウジ「行こう！」

そして…。

橋の前まで来たリュウギ達。

ナルガモン「よし、早く渡ろうぜ♪」

コウジ「待ってナルガモン！」

コウジはペロッと指を舐めて風向きを確かめ、橋を詳しく調べる。

コウジ「渡れそうだし、風向きも大丈夫だ…。早く渡ろう。」

コウジは確認した後、リュウギ達は橋を渡る。

ナルガモン「ひぇ～、落ちたらヤバイぞこれ…？」

リュウギ「あまり下を見るなよナルガモン。」

コウジ「あともう少しだ。」

すると、上空から強風が襲い掛かる。

一同「!?」

ナルガモン「おいおい、風向きは大丈夫って言わなかったか!?」

コウジ「違う、誰かが風を起こしてるんだ!!」

その時、橋を支えるロープが契れてしまった。

コウジ「マズイ!?みんな、走るんだ!?橋が崩れる!?」

リュウギ達は全力で走り抜けて向こうの丘まで辿り着いた。

すると、橋は崩れてしまった。

ナルガモン「あ、危なかったぜ…?」

レオルモン「ったく、誰がこんな事をッ?」

コウジ「何とか渡れたんだ。早く上に登ろう。」

リュウギ達は急いで頂上へと向かう。この時、橋を壊した犯人が小さく舌打ちをする。

???「チッ…。」

登って10分が経つ…。

ナルガモン「おっ！？頂上が見えてきたぜ！！」

コウジ「あともう少しだから！！」

すると、地面が激しく揺れる。

キャンドモン「そう言えばレナモン、何で有名な谷って言ってましたか…？」

キャンドモンは恐る恐る聞く。

レオルモン「確か…、落石のような…？」

すると、巨大な落石がリュウギ達に襲い掛かる。

キャンドモン「出たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？（泣）」

ナルガモン「リュウギ、オレが進化して…」

リュウギ「ダメだ！！ここで進化したら、重量で俺達も落ちてしまう！！」

ナルガモン「だったらどうすりゃいいんだよ！？」

コウジ「レオルモン！！」

レオルモン「オレの出番だな！！」

コウジはデジドライブを取り出してレオルモンに翳した。すると、

レオルモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

レオルモン「レオルモン、究極進化！！」

『バンチョーレオモン！！』

リュウギ「レオルモンが究極に進化した！？」

コウジ「頼むよ、バンチョーレオモン！！」

バンチョーレオモン「任せろ！！『バーンバンチョーパンチ！！』」

バンチョーレオモンは正義の熱い拳で巨大な岩を粉々に砕いた。

ナルガモン「スゲェ…！？」

リュウギ「あれが、究極体の力…！？」

バンチョーレオモンは華麗に着地する。

コウジ「ご苦労様、バンチョーレオモン。」

バンチョーレオモン「こんなの容易い事だ…。」

リュウギ（もしあの時、コウジさん達がコロシアムに間に合っていたら、負けていたのかもしれないな…。）

リュウギはゴクリと息を呑み込む。

ナルガモン「なぁリュウギ…。」

リュウギ「どうしたんだ？」

ナルガモン「オレの究極体って、一体何になるんだろう…？」

リュウギ「さぁな…。」

キャンドモン「もしかして、ウルトラナルガモンだったりして…？」

リュウギ「お前、ネーミングセンス無さすぎだろ…？」

ナルガモン「だったらあれだな…。オレの究極体はエクシードモンだな！！」

リュウギ「えくしーどもん？」

コウジ「Ｅｘｃｅｅｄを日本語に訳すと、『予想を越える』か…。良い名前だね…。」

リュウギ「お前って意外とネーミングセンス良いんだよなぁ…？ブレイブエクセリオンといい…。」

ナルガモン「まぁな♪」

キャンドモン「絶対にウルトラナルガモンですって！」

リュウギ「有り得ないな…。断じて…？」

バンチョーレオモン「グズグズしてるヒマはない。急ごう…。」

リュウギ「そうだな…。」

すると、三個の巨大な落石がリュウギ達に襲い掛かる。

キャンドモン「ゲッ!?またぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

バンチョーレオモン「下がってろ!!」

ナルガモン「オレに任せな!!リュウギ、完全体だ!!」

リュウギ「っておい!?」

ナルガモン「心配すんなって、オレだって飛べるんだからよ!!」

リュウギ「分かったよ…?」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。

すると、ナルガモンのデータは上書きされ、姿へと変わる。

ナルガモン「ナルガモン、超進化!!」

『ドラグナモン!!』

ドラグナモンは背中に背負うロケットエンジンを使って上空へと飛翔し、両腕の鋭い刃、ヒドゥンアサルトで巨大な岩を切り刻んでいく。

キャンドモン「よっ、流石ドラグナモン♪」

バンチョーレオモン「ほぅ、なかなかやるじゃないか…。」

ドラグナモン「どんどん行くぜ！！」

すると、身体が巨大な過ぎて、ドラグナモンは谷間に挟まってしまう。

ドラグナモン「んがッ！？」

一同「へ…？」

ドラグナモン「は、挟まっちまった～？」

すると、リュウギ達はズッコケる。

コウジ「やれやれ…？」

一方、ミソラ達は…。

ミソラ「遅いわねリュウギ達…？」

レナモン「私が見に行こう…。」

？？？「ご心配なく！」

すると、カラテンモンが現れる。

カラテンモン「アイツらは崖に落ちてしまったのです…。」

レナモン「なに！？」

ミソラ「嘘よ！！リュウギ達が落石なんかでやられはしないわ！！」

カラテンモン「このウルクバレーは落石が多いとスレッド大陸では有名…。つまり、このウルクバレーに降りた者は生きて帰ってこれない…。」

レナモン「くっ！！」

レナモンは助けに行こうとする。

カラテンモン「死にに行くのか…？ウルクバレーに降りたら最後だぞ…？」

レナモン「くっ…。」

ミソラ「あなたの目的はなによ！？」

カラテンモン「オレの目的はただ１つ…。」

ミソラ「……。」

（ゴクリ…。）

カラテンモン「お前達と一緒に、あ～んな事したりこ～んな事したりするの…♪」

すると、ミソラとレナモンはポカンとなる。

＞ｉ２３６４５―１２９８＜

【挿絵：トリプルミーミング】

ミソラ「それだけ…なの…？」

カラテンモン「それだけだ…。」

ミソラ「最低ね…。」

レナモン「同感だ…。」

カラテンモン「何度でも言うがいい！！アイツらはもう奈落の底だからな！！」

？？？「誰が奈落の底だって？」

すると、リュウギ達が頂上へと辿り着いたのだ。

カラテンモン「んなッ！？」

ミソラ「リュウギ！！」

レナモン「お前の思い通りにはならなかったな、カラテンモン…。」

ミソラ「ところで、アンタ何で幼年期なの…？」

ドラグナモンはちょっとしたトラブルで力を使い果たし、ナナモンへと退化していた。

バンチョーレオモン「ま、色々とワケありだ…。」

ナナモン「ワリィ、リュウギ…？」

リュウギの頭に乗って謝るナナモン。

リュウギ「二度とこんなアホな事するなよ…？」

ナナモン「お～う…？」

ナナモンは深く反省をする。

コウジ「僕達を崖に落とそうとしても無駄だよ、カラテンモン…。」

一同「なんだって！？」

カラテンモン「な、何を言う！？何処に証拠があるというんだ！？」

コウジ「これさ…。」

すると、コウジはポケットから黒い羽根を取り出した。

コウジ「橋が壊れた後、上から落ちてきたんだよ…。黒い羽根は君しか持っていないからね…。」

カラテンモン「くっ！？」

キャンドモン「このカラス野郎ッ？ボクチンを奈落の底に突き落としてミソラさん達と一緒にあ～んな事したりこ～んな事したりするつもりだったのかぁぁぁぁぁぁぁッ！？」

カラテンモン「な、なぜ分かったのだ！？」

（ギクリッ！？）

ミソラ「解るわよ…？何せアンタとキャンドモンの思考は同じだからね…ッ？」

リュウギ「観念しろ、カラテンモン！！」

カラテンモン「そうはいかぬ！！」

すると、カラテンモンはレナモンを殴り飛ばし、ミソラを人質にする。

レナモン「ミソラ！？」

カラテンモン「動くな！！動くとこの娘の命はない！！」

コウジ「待てカラテンモン！！彼女を放すんだ！！」

一同「……。」

すると、バンチョーレオモンは何も動じないリュウギ達に気付く。

バンチョーレオモン「何をしてるんだお前ら！？仲間が人質に取られたんだぞ！？」

ナナモン「人質って言われてもなぁ…？」

リュウギ「あ、あぁ…？」

キャンドモン「あのぅカラテンモン、早くミソラさんを放した方が身のためですよ…。」

カラテンモン「甘いな！そう言ってオレを注意を反らすつもりだな？」

キャンドモン「いや、そうじゃなくて？危ないですよ～？」

カラテンモン「バカめ！！そんな小賢しい作戦、オレには通用…」

ミソラ「ちょっとアンタ…。」

カラテンモン「ん？なんだ？」

ミソラ「どこ…触ってんのよぉぉぉぉぉぉッ？」

ミソラは肘でカラテンモンの腹を打ち込んだ。

カラテンモン「ぐえッ！？」

カラテンモンは思わず手を放してしまい、ミソラは解放される。

ミソラ「然り気無く人のケツ触ってんじゃないわよぉぉぉぉぉぉぉッ？」

ミソラの怒りが爆発し、目にも見えない超高速なパンチでカラテンモンに打ち込んだ。

カラテンモン「ぐはっ！？ちょ、ちょっと待っ…」

ミソラ「この、ヘンタイカラスがぁぁぁぁぁぁぁッ？」

ミソラは回し蹴りでカラテンモンを蹴り飛ばし、即ＫＯした。

カラテンモン「う、うそん…。」←完全ＫＯ

ミソラ「フンッ…？」

ミソラは膨れっ面になりながら手をパンパンと叩いた。

ナナモン「あ～あ…？」

キャンドモン「だから言ったのにぃ…？南無南無南無南無南無…。」

キャンドモンは合掌して念仏を唱える。

コウジ「え…？」

リュウギ「ミソラは中学時代、空手の県大会で優勝する程の実力者なんだ…？」

コウジ「そ、そうなんだ…？」

バンチョーレオモン「完全体相手なのに、何て女だ…？」

それを聞いたコウジとバンチョーレオモンの目が丸くなっていた。

そして…。

レオルモン「さて、コイツどうするんだ…？」

カラテンモンは縄に縛られていた。

カラテンモン「……。」

ミソラ「殴り足りないわ…ッ？もっとやっちゃっていい…？」

リュウギ「まぁまぁ…？」

ナナモン「おい、何でこんな事したんだ…？」

カラテンモン「答えは単純…。女の子と一緒に居たいから！！」

すると、ミソラの怒りが爆発し、急に暴れだした。

ミソラ「アンタねぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ？」

リュウギとキャンドモンは慌ててミソラを取り押さえる。

リュウギ「頭を冷やせってミソラ？」

ミソラ「今すぐこのヘンタイカラスをボッコボコにしてやるわぁぁぁぁぁッ？」

レオルモン（ひぇ～、おっかねぇ～？）

コウジ（凄い子だね…？）

コウジとレオルモンは苦笑いをする。

リュウギ「落ち着けよミソラ？暴力だけじゃ解決はできないって？」

ミソラ「フンッ？」

カラテンモン「そう慌てるな…。あれは冗談だ…。実は言うと、メカルクタウンに近付かせないようにするためだ…。」

（鼻血）

ミソラ「何が冗談よッ？鼻血思いっきり出してんじゃないのッ？」

レオモン「メカルクタウンに近付かせないってどういう事だ…？」

カラテンモン「メカルクタウンには、メカ達が暴走している危険区域だ…。だから近付かせないように、このウルクバレーで見張っていたんだ…。」

ミソラ「じゃあ、何でもっと早く教えなかったのよッ？私を人質までしてッ？」

カラテンモン「お前達を引き返させるには、そうするしかないって言われてな…。」

コウジ「言われた…？」

すると、カラテンモンは慌てて口を塞ぐ。

ミソラ「誰に言われたのよ…？」

カラテンモン「それは言ってはいけない掟なので…？」

すると、ミソラは笑顔を保ちながら自らの拳をパキパキと鳴らす。

カラテンモン「言います?言いますから殴らないで?」

リュウギ（怖ぇ…?）

ミソラ「それで、誰よ…?」

カラテンモン「左目に傷を持った男に言われたんだよ?」

一同「!?」

リュウギ「エグザがここに!?」

ミソラ「エグザがアンタに、メカルクタウンに近付かせないようにって言われたのぉ?」

ミソラはカラテンモンの胸ぐらを掴んで問い詰める。

カラテンモン「はいぃぃぃ?そうですぅぅぅ?」

レオルモン「エグザのヤツ、一体何のために…?」

レナモン「カラテンモン、それからエグザは何処へ行ったのだ…?」

カラテンモン「え〜と…?」

ミソラ「何処へ行ったか言いなさいよッ?」

ミソラは胸ぐらを掴むカラテンモンを激しく揺らして問い詰める。

カラテンモン「メカルクタウンへ向かいました〜?」

ナナモン「なんだって!?」

リュウギ「エグザがメカルクタウンに…?もしかして、メカ達を暴走させたのはエグザ…?」

ミソラ「有り得るわね…。」

レナモン「しかし不自然だ…。仮にエグザがメカ達を暴走させたら、わざわざカラテンモンに指示しないのが正当だ…。」

コウジ「確かにレナモンの言う通りだ…。」

ミソラ「他に何か言われなかったの?どうなのよアンタッ?」

ミソラはカラテンモンを激しく揺らす。

カラテンモン「言ってません?言ってませんから放してください~?」

リュウギ「ミソラ、いい加減放してやれよ…?」

ミソラ「フンッ?」

ミソラは膨れっ面になりながらカラテンモンを放した。

カラテンモン「あの男に言われたのはそれだけだ…?」

リュウギ「そうか…。」

ナナモン「どうするんだリュウギ？」

リュウギ「俺達の目的はメカルクタウンだ…。背に腹は変えられない…。それに、背を向けるのは俺の流儀に反する！！」

コウジ「君ならそう言うと思ったよ…。」

ナナモン「決まりだな♪」

ミソラ「上等よ！」

キャンドモン「し、仕方ないですねぇ…？ヤバイメカ共なんて…」

すると、キャンドモンの体が震えていた。

レナモン「体が震えているぞ…？」

キャンドモン「決してビビってる訳じゃないですよ？これはただ、オシッコがチビりそうなだけなんですよ？」

レオルモン「それをビビってるって言うんだよ…？」

レオルモンは小さくツッコム。

リュウギ「よし、そうと決まればメカルクタウンに行こう！」

カラテンモン「引き返した方が…？」

リュウギ「生憎、俺達は引き返すつもりはない…。教えてくれてサンキューな…。」

ナナモン「じゃあな！」

こうして、リュウギ達はカラテンモンに別れを告げて、メカルクタウンへと向かうのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ２７　～スレッド大陸、超危険渓谷　ウルクバレー！！～（後書き）

～ウルクバレー～

一方、カラテンモンはリュウギ達を見送る。

カラテンモン「アンタの思った通りだったな…。エグザの旦那…。」

すると、岩陰からエグザが現れる。

エグザ「なかなかの芝居だった…。だが、お前の女好き、どうにかならねぇのかよ…？」

カラテンモン「生憎、この女好きはオレの生まれつきの性格でな…？で、これでいいのか…？」

エグザ「あぁ…。俺は昔から機械が嫌いなんでね…。」

すると、エグザはメカルクタウンを見つめる。

エグザ（お前達の絆、何処まで通用するか試させて貰うぜ…。）

「デジサモン、発動！！」

エグザは背中に背負うセイクリッド・レインティアを地面に突き刺して叫んだ。

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

エグザ「来い、アクィラモン！」

すると、魔法陣からアクィラモンが実体化される。

アクィラモン「呼んだか、エグザ？」

エグザ「ちょいとひとっ飛び、頼むぞ…。」

エグザはそう言ってアクィラモンの背中に乗る。

カラテンモン「イビルスから助けてくれた事は礼を言う。これで、お前に借りは返したぞ…。」

エグザ「あぁ、またな…。」

すると、アクィラモンは翼を広げ、エグザはスレッド大陸から去っていくのであった。

次回はついにメカルクタウンに突入！！

しかし、リュウギ達に思わぬトラブルが！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ２８　～自分の力を信じろ！！金色の陰陽師　タオモン！！～（前書き）

ついにメカルクタウンへと辿り着いたリュウギ達！！

しかし、思わぬトラブルと出逢いが！？

Ｅｐ２８スタート！！

ＥＰ２８　～自分の力を信じろ！！金色の陰陽師　タオモン！！～

～メカルクタウン　入り口～

ナルガモン「ヒャッホウ！！やっと着いたぜメカルクタウン！」

リュウギ達はようやくメカルクタウンに辿り着いたのだ。

そこには、鉄が削られる音と振動や、動いている機械の音、機械油の匂いなどが充満していた。

ミソラ「臭いわねぇ…？」

コウジ「何せ、ここは機械工場だからね…。」

キャンドモン「デンジャラスな臭いがプンプンしてるんですけど…？帰りませんか…？」

キャンドモンは帰る気満々だった。しかし、リュウギ達は無視をする。

リュウギ「ここなら移動できる乗り物があるかもな…。行こうぜ！」

キャンドモン「ちょっと～？」

リュウギ達はメカルクタウンへと入って行く。すると、物陰から鋭い眼光でリュウギ達を見つめていた。

～メカルクタウン～

リュウギ「何処にあるんだ…？」

キャンドモン「ねぇ、帰りましょうよ～？」

ミソラ「そんなに帰りたかったら、１人で帰りなさい…？」

キャンドモン「そんな事言わないでよミソラさ～ん？」

（カタン…）

すると、物音が工場内に響く。

リュウギ「誰だ…？」

すると、機械が動いたような音でこちらに近づいてくる。

レナモン「こっちに近づいてくる…。」

リュウギ達は戦う体勢に入って警戒する。

すると、物陰からグレイモンが現れる。

ナルガモン「あれって、グレイモン！？」

コウジ「違う…。あれはメカだ！」

メカグレイモン「シンニュウシャ…。シンニュウシャ…。【侵入者…。侵入者…。】」

リュウギ「待てよ！俺達は別に…」

メカグレイモン「シンニュウシャハハイジョスル…。【侵入者は排除する…。】」

すると、メカグレイモンの体からガトリングガンや火炎放射機などが出てくる。

一同「!?」

リュウギ「んなッ!?」

キャンドモン「きいいいいいいいいやややややややややや!?ボクチン、ミンチにされちゃうぅぅぅぅぅ!?」

ナルガモン「このポンコツを何とかしなきゃな!行くぜリュウギ!!」

リュウギ「あぁ!!」

コウジ「リュウギ君、ここは無駄な力を使わせちゃダメだよ!」

リュウギ「分かった!」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。

コウジ「行くよ、レオルモン!!」

レオルモン「おう!!」

コウジもデジドライブを取り出してレオルモンに翳した。

ナルガモンとレオルモンのデータは上書きされ、姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

レオルモン「レオルモン、超進化！！」

『ローダーレオモン！！』

ミソラ「あれは！？」

ミソラはＤ－アクセルでローダーレオモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ローダーレオモン、完全体、マシーン型、ワクチン種、必殺技はローダーモーニングスター。」

レナモン「レオルモンの完全体か…。」

メカグレイモン「ハイジョスル！！【排除する！！】」

メカグレイモンはガトリングガンを乱射する。

ソニックドラモンとローダーレオモンは素早く交わす。

ソニックドラモン「『ヒドゥンスラッシュ！！』」

ソニックドラモンは両肘のブレイドから漆黒の炎が包まれ、メカグレイモンを切り刻む。

ローダーレオモン「『ローダーモーニングスター！！』」
そしてローダーレオモンは尻尾の鉄球でメカグレイモンを叩き付けた。
リュウギ「よし！！」
メカグレイモン「ピガッ、ピガガ…！？」
ミソラ「様子が変よ…？」
メカグレイモン「バクハツマデ、アト１０ビョウ…。【爆発まで、あと１０秒…。】」
コウジ「自爆するつもりだ！！みんな逃げるんだ！！」
リュウギ達は急いでメカグレイモンから離れる。
メカグレイモン「…３、２、１、０。」
すると、メカグレイモンは自爆し、爆風がリュウギ達を襲う。
一同「うわっ！？」
爆風が止むと、機械の山からリュウギ達が顔を出す。
リュウギ「危なかったな…？」
ナルガモン「あの野郎、自爆しやがって…？」

コウジ「みんな、無事か？」

レオルモン「オレは平気～？」

キャンドモン「あれ？ミソラさんは？」

リュウギ「！？」

リュウギはひたすらミソラを連呼する。

コウジ「どうやら、さっきの爆風で飛ばされてしまったようだね…。」

リュウギ「そうだ！Ｄ－アクセルでミソラと連絡すれば…」

リュウギは早速Ｄ－アクセルでミソラと連絡を取る。

一方、ミソラは…。

？？？「――ラ、ミソラ…。」

ミソラは目を開けると、レナモンがいた。

ミソラ「レナモン…。私は一体…？」

レナモン「恐らく、爆風に飛ばされたみたいだ…。」

ミソラ「リュウギやみんなは？」

レナモンはゆっくりと首を横に振る。

すると、ミソラのD－アクセルが鳴る。

リュウギ『ミソラ、無事か！？』

すると、D－アクセルからリュウギの声が聞こえてくる。

ミソラ「私なら大丈夫よ！」

リュウギ『そうか…。すぐそっちに行くから待ってろよ！！』

ミソラ「えぇ、気を付け…」

すると、巨大なメカが現る。

ミソラ「！？」

レナモン「ミソラ、危ない！？」

巨大メカは巨大な手でミソラを薙ぎ払おうとすると、レナモンは素早くミソラを抱っこして交わした。

レナモン「危なかったわ…。」

ミソラ「まだいたなんて…！？」

巨大メカ「ココハオレサマノアジト…。シンニュウシャハハイジョスル…。【ここは、俺様のアジト…。侵入者は排除する…。】」

レナモン「お前のアジトだと…？」

？？？「なんだギャ、お前らは…？」

すると、巨大メカの中から黒い体をした爬虫類型デジモンが現れる。

ミソラ「デジモン！？」

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ニセアグモン博士、成長期、爬虫類型、ウィルス種、必殺技はニセハカセボウ。」

ミソラ「このポンコツメカは、アンタの仕業だったのね！！」

ニセアグモン博士「ポンコツじゃねぇだギャッ？俺様のメカは世界最強と呼ばれるんだギャ！！」

レナモン「しかしその割りには、リュウギ達があっさりと倒したぞ…？」

ミソラ「おまけに自爆しちゃったし…。」

ニセアグモン博士「何だと！？貴様ら、よくも俺様のメカグレイモンをやっただギャな…？覚悟するだギャ！！」

ニセアグモン博士は怒り出し、巨大メカを操縦する。

ミソラ「行くわよ、レナモン！」

レナモン「あぁ。」

ミソラはＤ－アクセルをレナモンに翳した。すると、レナモンのデータは上書きされ、姿が変わる。

レナモン「レナモン、進化！！」

『キュウビモン！！』

巨大メカ「クタバレダギャ！！【くたばれだギャ！！】」

巨大メカは握り拳を作り、キュウビモンに襲い掛かる。

キュウビモン「くっ！！」

キュウビモンは素早く交わし、尾の先に集めた巨大な炎をいっせいに放った。

キュウビモン「『鬼火玉！！』」

しかし、頑丈なボディなため、巨大メカには効かなかった。

巨大メカ「ムダダギャ×２！！【無駄だギャ×２！！】」

巨大メカは口から火炎放射を放った。

キュウビモン「うわっ！？」

ミソラ「キュウビモン！？」

巨大メカ「マダオワラナイダギャ！『まだ終わらないだギャ！』」

巨大メカは巨大な手でキュウビモンを捕まえ、徐々に力を入れる。

キュウビモン「うわぁぁぁぁぁぁ！？」

巨大メカ「オソレイッタカ！メカグレイモンヲコワシタバツダギャ！【恐れ入ったか！メカグレイモンを壊した罰だギャ！】」

ミソラ「キュウビモンを放しなさい！！」

ミソラは地面に落ちているスパナを拾って巨大メカに投げ付けた。

すると、ガラスで出来た巨大メカの目に直撃し、そのまま操縦席のニセアグモンにゴチンと直撃した。

ニセアグモン博士「いだっ！？」

すると、キュウビモンは解放される。

ニセアグモン博士「痛いだギャ～？」

ミソラ「今だわ！！」

ミソラは隙を読み、手を組む。

ミソラ「デジサモン、発動！」

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、ミソラは地面に手を当てると、地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

ミソラ「出てきて、マリンエンジェモン！！」

すると、魔法陣からマリンエンジェモンが実体化された。

マリンエンジェモン「呼びましたかミソラさん？」

ミソラ「あなたの力でキュウビモンの傷を治して！」

マリンエンジェモン「分かりました！『癒しの光！』」

マリンエンジェモンは癒しの光でキュウビモンの傷を癒した。

キュウビモン「すまないミソラ、マリンエンジェモン。」

マリンエンジェモン「いえいえ♪」

すると、巨大メカは巨大な手でミソラを捕まえた。

ミソラ「いやっ！？」

キュウビモン「ミソラ！？」

マリンエンジェモン「ミソラさん！？」

ニセアグモン博士「よくもやっただギャな…？握り潰してやるだギャ…？」

巨大メカは徐々に力を入れてミソラを苦しめる。

ミソラ「う…。キュウビ…モン…。」

キュウビモン「ミソラを放せ！！」

キュウビモンは巨大メカの手に飛び付いてミソラを助けようとする。

ニセアグモン博士「邪魔だギャ！！」

巨大メカはキュウビモンを払い、もう片方の巨大な手でキュウビモンを押し潰した。

巨大な手を退けると、キュウビモンは力尽きてしまっていた。

ミソラ「キュウビ…モン…！？」

マリンエンジェモン「あわわ～？どうしましょう？」

ニセアグモン博士「呆気ないだギャな♪さて、次はお前だギャ！！」

巨大メカは徐々に力を入れてミソラを更に苦しむ。

ミソラ「うぅ…、助…けて…！？」

キュウビモン「ミソ…ラ…。」

（私のせいだ…。私が不甲斐ないからこんな事に…。）

キュウビモンは悔しくなり、歯をギリッと食い縛る。

マリンエンジェモン「どうしましょうキュウビモン？」

キュウビモン「私に、もっと力があれば…。ミソラやみんなを守れる力さえあれば…。」

ミソラ「そんな事…ないわ…。」

すると、ミソラは途切れ途切れになりながら話す。

キュウビモン「ミソラ！？」

ミソラ「あなたは…決して弱く…ない…。それに、あなたなら…守れる力が…ある…。だから、自分の力を…信じて…。」

キュウビモン「ミソラ…。」

ニセアグモン博士「無駄話はそこまでだギャ！！握り潰してやるだギャ！！」

すると、ニセアグモン博士はミソラを握り潰す。

ミソラ「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

キュウビモン「ミソラァァァァァァァァ！！」

キュウビモンの叫びにより、ミソラのＤ－アクセルが反応する。

マリンエンジェモン「Ｄ－アクセルが反応していますわ！？」

キュウビモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

その時、キュウビモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

キュウビモン「キュウビモン、超進化！！」

『タオモン！！』

タオモン「これ以上、ミソラを苦しませはしない！！『狐封札（こふうさつ）！！』」

完全体へ進化したタオモンは、霊符をミソラを捕らえた巨大な手に巻きつけて爆発させた。

ニセアグモン博士「だギャ！？」

ミソラは解放されると、タオモンは急いでミソラを助けた。

タオモン「ミソラ、しっかりしろ！ミソラ！」

すると、ミソラはゆっくりと目を開ける。

ミソラ「キュウビ…モン…？」

タオモン「私はタオモン…。ミソラや皆を守るために進化した…。」

ミソラ「タオ…モン…。」

ミソラは安心したのか、笑顔を見せた後にそのまま気を失った。

マリンエンジェモン「ミソラさん！？」

タオモン「マリンエンジェモン、ミソラを頼む…。」

タオモンはそう言って上空へと高く飛び上がる。

タオモン「ミソラを苦しめるとどうなるか、思い知るがいい…。」

タオモンは巨大な筆で呪文を唱えながら梵字を空中に描き巨大メカに飛ばす。

タオモン「『梵・筆・閃（ぼん・ひつ・せん）!!』」

すると、梵筆閃を受けた巨大メカは大爆発を起こした。

ニセアグモン博士「だギャャャャャャャャャャ!?」

すると、ニセアグモン博士は吹っ飛び、地面に叩き付かれて気絶する。

すると、ニセアグモン博士の体内からイビルスが現れる。

タオモン「イビルス!?逃がさない!!『狐封札!!』」

タオモンは霊符をイビルスに巻きつけて爆発させる。

イビルス「ギィィィィィィィィィィ!?」

イビルスは跡形もなく消滅する。

タオモン「なるほど…。暴走の原因はイビルスだったのか…。」

???「ミソラー!!」

すると、リュウギ達が駆け付けてくる。

マリンエンジェモン「リュウギさんだ!!」

リュウギ「ミソラ、しっかりしろ!!ミソラ!!」

タオモン「心配ない。気を失っているだけだ…。」

ナルガモン「ところでお前、誰だ?」

タオモン「私はタオモンだ…。」

リュウギはD一アクセルでタオモンのデータを読み取る。

D一アクセル「タオモン、完全体、魔人型、データ種、必殺技は梵筆閃。」

リュウギ「完全体?って事はお前…」

コウジ「どうやら、レナモンが完全体に進化したみたいだな…。」

キャンドモン「うひゃゃゃゃゃゃ!?何とも美すぃぃぃぃぃぃぃぃ!?」

ナルガモン「やるじゃねぇかタオモン!!」

キャンドモンの両目にはハートが浮かんでいた。

タオモン「あぁ…。これも皆のお陰だ…。ありがとう…。」

ナルガモン「はぁ？リュウギ、オレ達何かしたっけ…？」

キャンドモン「さぁ…？」

リュウギ「ま、アイツなりに色々と合ったんだよ…。」

リュウギは解っていた。仲間との絆の力によって進化したって事を。

すると、タオモンは力を使い果たし、幼年期のポコモンへと退化した。

ナルガモン「コイツがメカルクタウンの親玉かぁ？どうすんだコイツ？」

レオルモン「どれどれ？」

コウジとレオルモンは親玉の顔を見ると、驚愕して思わず叫ぶ。

コウジ・レオルモン「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ナルガモン「な、何だよ急に！？」

キャンドモン「びっくりするじゃないですか！？どうしたんですかぁ？お漏らしでもしたんですかぁ？」

リュウギ「お前じゃあるまいし…？」

リュウギは小さくツッコム。

レオルモン「コイツは博士だよ！」

ナルガモン「まぁどう見ても博士だな…？」

コウジ「違うよナルガモン。アグモン博士は僕らの仲間。つまり、ショウのパートナーデジモンだ。」

ナルガモン「んな！？」

リュウギ「な！？」

一同「なにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ！？」

リュウギ達はありったけの声で叫んだ。

そして…。

博士「う、う～ん…。」

アグモン博士はゆっくりと目を開ける。

博士「だギャ？ボクは一体何を…？」

コウジ「久しぶりだね、博士。」

博士「懐かしいような顔が…？まさか…？」

レオルモン「そのまさかさ！」

すると、アグモン博士は目をパッチリと開けた。

博士「レオルモン!!コウジ!!久しぶりだギャ!!」

レオルモン「相変わらずだあなぁ博士は!」

博士「もしかして、コウジ達が助けただギャか…?」

コウジ「生憎、君を助けたのは僕らじゃないんだ…。」

博士「え?」

レオルモン「お前を助けたのはリュウギ達さ!」

博士「リュウギ?」

リュウギ「俺は御縞　リュウギだ。」

ナルガモン「ナルガモンだ!!よろしくな♪」

ポコモン「私はポコモンだ…。それでこっちはミソラだ…。」

キャンドモン「キャンドモンですぅ♪」

リュウギ「ところで、こんな所で何をしていたんだ?」

博士「実は言うと、ボクはデジシップ修理のためにこの工場に来たんだギャ…。そしたら…」

リュウギ「イビルスに襲われたって事か…。」

博士「助けてくれてありがとうだギャ！！」

リュウギ「いや、俺よりかポコモンだ…。自分の力を信じたからこそ助けられたんだ…。」

博士「そうだギャか…。ありがとうだギャポコモン！」

ポコモン「困った時は御互い様さ…。」

ナルガモン「ところで、デジシップって何だよ？」

博士「ボクはショウと一緒に、失った物を取り戻すためにデジシップを造ってスレッド大陸に来たんだギャ！」

コウジ「つまり、デバイス島から飛んできたって事か…。」

博士「そうだギャ！」

ナルガモン「よっしゃ！！これなら自由に飛び回れるぜ♪」

博士「え？どういう事だギャ？」

リュウギ「話せば長くなる…。」

リュウギはアグモン博士に一通り説明した。

博士「分かっただギャ！ショウはもうスレッド大陸にはいないし、1人じゃ心細いから了解だギャ！」

リュウギ「よし！」

博士「だギャその前に、デジシップを修理する部品を工場から集めて欲しいだギャ！」

ナルガモン「おう、任せとけ！！」

コウジ「その前に博士、左目に傷を持った男に会わなかったか？」

博士「左目に傷？知らないだギャ。」

コウジ「そうか…。」

（エグザはここに来ていなかったのか…。）

レオルモン「早く使えそうな部品を探そうぜ！！」

一同「おう！！」

リュウギ達はデジシップの修理をするため、工場中の部品を集めるのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ２８　～自分の力を信じろ！！金色の陰陽師　タオモン！！～（後書き）

ついにショウのパートナーデジモン、アグモン博士と再会！！

次回、リュウギ達はデジシップの修理をする！！

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ２９　～さらば、スレッド大陸！！舞い上がれ、ブレイブエクセリオン！！

メカルクタウンにて、リュウギ達はデジシップの修理をするが、思わぬ事態が起こる？

Ｅｐ２９スタート！！

ＥＰ２９　～さらば、スレッド大陸！！舞い上がれ、ブレイブエクセリオン！！

～メカルクタウン～

ミソラ「う、う～ん…。」

ミソラはゆっくりと目を開けると、レナモンがいた。

レナモン「ミソラ、大丈夫か…？」

ミソラ「あれ？私は一体？みんなは？」

レナモン「みんななら、博士が造った船の部品を探している。」

ミソラ「博士？船？どういう事…？」

ミソラの頭の上から幾つもの「？」が浮かんでいた。

レナモンは一通りミソラに説明した。

ミソラ「そうなんだ…。私も手伝うわ！」

レナモン「余り無理しない方がいい…。修理ならリュウギ達に任せよう…。」

ミソラ「平気×２！早く行きましょ！」

ミソラはそう言ってデジシップの修理を手伝う。

レナモン「仕方ないな…。」

レナモンは小さく笑い、デジシップの修理を手伝う。

一方、リュウギ達は…。

リュウギ「博士、これなんかどうだ？」

リュウギはデジシップの修理に使えそうな部品を見せる。

博士「使えそうだギャね！」

ミソラ「リュウギー！」

すると、ミソラとレナモンが駆け付けてくる。

リュウギ「ミソラ！？」

ナルガモン「お、やっと起きたかミソラ！」

キャンドモン「待ってました愛しのマドモワゼ～ル！！」

キャンドモンは嬉しさの余りにミソラに飛び付いた。すると、ミソラは肘鉄を喰らわし、キャンドモンの顔面はめり込む。

キャンドモン「ぐえっ！？」

ミソラ「ウザいから寄るな…？」

コウジ・レオルモン「……？」

リュウギ「その様子だと、もう大丈夫みたいだな…？」

リュウギはそう言って苦笑いする。

博士（こ、怖いだギャ…？）

ミソラ「私も手伝うわ！」

レナモン「私も協力する…。」

リュウギ「そうだな…。」

コウジ「あともう少しでデジシップは直る。頑張ろう！」

一同「おーう！！」

リュウギ「！？」

すると、リュウギは何か視線を感じたのか、周りを見渡す。

ナルガモン「どうしたんだよリュウギ？」

リュウギ「あ、いや、別に何でもない…。」

（誰かに見られているような…？気のせいか…。）

リュウギは気のせいだと思い、デジシップの部品を探す。しかし、リュウギの感じた視線は気のせいではなかった。

？？？「ウフフ…、やっと見つけましたわ…。」

そして…。

博士「完成だギャ！！」

ついに、デジシップの修理を終えたのだ。

ナルガモン「しかしまぁ、カッコええなぁ♪」

リュウギ「これで、別の島までひとっ飛びできるな…。」

博士「だギャその前に、燃料を補給しなきゃならないだギャ！！」

コウジ「燃料は何処にあるんだい？」

博士「このメカルクタウンの地下にあるだギャ！！」

リュウギ「だったら、俺が取りに行くよ。」

ナルガモン「行こうぜリュウギ！」

ミソラ「私も行くわ！」

しかし、リュウギはミソラを止める。

リュウギ「ミソラは休んどけよ。起きたばかりだからあまり無理しない方がいい…。」

ミソラ「わ、分かったわ…。」

ミソラは素直になり、頷く。

コウジさん、ミソラを頼むよ。」

コウジ「任せて。君達も気を付けるんだよ。」

リュウギ「あぁ、行ってくる。」

リュウギとナルガモンはデジシップの燃料タンクを取りに行くため、メカルクタウンの地下室へと向かった。

～メカルクタウン　地下室～

ナルガモン「臭ぇなぁ…。」

リュウギ「何せここは工場だからな…。」

リュウギとナルガモンは鼻を押さえながら燃料タンクを探す。

？？？「うぉ～～～…。」

すると、奥から呻き声が聞こえてくる。

ナルガモン「なんだ！？」

リュウギ「さぁな…。行こう！」

リュウギとナルガモンは呻き声が聞こえてくる方へと走る。

すると、リュウギとナルガモンは呻き声の正体を見て思わず足を止

める。

？？？「うぉ～～～…。」

リュウギ「デジモンか…？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「レアモン、成熟期、アンデッド型、ウィルス種、必殺技はヘドロ。」

レアモン「『ヘドロ！』」

すると、レアモンはとても臭いヘドロを放った。

リュウギ・ナルガモン「！？」

リュウギとナルガモンは素早く交わした。

ナルガモン「臭ぇ！？なんだこの臭いは！？」

リュウギ「まさか、中にイビルスが！？」

すると、レアモンは口を開く。

レアモン「ここは…オレの縄張り…。出ていけ…。」

ナルガモン「どうやらそのようだな…。」

リュウギ「クソッ、この先に燃料タンクがあるのに…。」

ナルガモン「意地でも退かせてやる！！『アートルム…』」

ナルガモンは口から黒炎弾を放とうとすると、リュウギはナルガモンを止める。

リュウギ「ダメだナルガモン！！ここで炎なんて吐いたら爆発する！！」

ナルガモン「そうだったな…。」

ナルガモンはそう言って攻撃を止める。

レアモン「『ヘドロ！』」

レアモンはとても臭いヘドロを放った。

リュウギ・ナルガモン「！？」

リュウギとナルガモンは素早く交わした。

ナルガモン「どうするんだよリュウギ！？」

リュウギは右手を広げてガンブレード、アルカナムを取り出し、レアモンに狙いを定めて銃撃を放った。

しかし、レアモンには全く効かなかった。

リュウギ「ダメだ、全く効いてない！」

レアモン「出ていけ…。ここはオレの…縄張り…。」

ナルガモン「燃料タンクが目の前にあるのに引き下がるかっつうの！！」

リュウギ（考えろ…。何か手はあるハズ…。）

ナルガモン「リュウギ、デジサモンで奴を対抗するしかないぜ…。」

リュウギ「そうか！」

リュウギはアルカナムを地面に突き刺して叫ぶ。

リュウギ「デジサモン、発動！！」

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

リュウギ「頼む、ナイトモン！！」

リュウギはナイトモンを呼び出すと、魔法陣からナイトモンが実体化される。

ナイトモン「呼んだでありますか、リュウギ殿？」

ナルガモン「俺に作戦がある！」

リュウギ「珍しいなナルガモン！？んで、どんな作戦なんだ！？」

ナルガモン「誰かが奴の囮（おとり）になり、その隙に燃料タンクを取る！！」

リュウギ「で、誰が囮になるんだよ…？」

ナルガモン「ジャンケン…。」

リュウギ・ナイトモン「はぁ！？」

ナルガモン「その方が公平だろ？」

ナイトモン「我輩は別に構わないが…？」

リュウギ「四の五の言ってるヒマはないよな…。しょうがねぇ…？」

リュウギは仕方なくジャンケンをする。

ナルガモン「ジャン…」

リュウギ「ケン…」

ナイトモン「ポン！」

リュウギはグー（？）。ナルガモンとナイトモンはパー（？）だった。

リュウギ「んなっ！？」

ナルガモン「よっしゃ！！」

ナイトモン「ホッ…。」

リュウギ「し、しょうがねぇなぁ…？俺が囮になるから早く済ませろよ…？」

ナルガモン「おう！！」

ナイトモン「御意！！」

リュウギはアルカナムを構えてレアモンの前に立ちはだかる。

リュウギ「こっちだ！！」

リュウギはアルカナムで銃撃を行い、レアモンを誘い込む。

ナルガモン「よし、今の内に行くぞ！」

ナイトモン「うむ！！」

ナルガモンとナイトモンはリュウギが囮になっていれ内に燃料タンクを運ぶ。

リュウギ「喰らえ！！」

リュウギはアルカナムを振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放った。

レアモン「ぐおぉぉぉ…！？」

リュウギ「よし、効いてる！」

レアモン「出ていけ…。『くさいガス！』」

レアモンは口から強力なガスを吐き出す。

リュウギ「くっ、なんて臭いだ…。段々と力が抜けていく…。」

リュウギは臭さの余りに地面に膝が着く。

ナルガモン「リュウギ!?」

リュウギ「俺は大丈夫だ…。早く燃料タンクを…。」

ナイトモン「しかし…。」

リュウギ「早く!!」

ナルガモンとナイトモンは頷き、燃料タンクをデジシップの所へと運びに向かった。

レアモン「出ていかないなら、ここで…死んで貰う…。」

リュウギ「くっ…。」

（この臭いさえ消えれば…。）

レアモン「終わりだ…。『ヘドロ!』」

レアモンはとても臭いヘドロを放とうと口を開けたその時だった。

??「『ライラシャワー!!』」

遠くから無数の細いビームを放ち、レアモンの攻撃を阻止した。

レアモン「がぁぁぁぁ…！？」

リュウギ「なんだ！？」

すると、黒い影がリュウギの前に現れる。

？？？「ようやく見つけましたわ、リュウギ様！」

その正体は、コロシアムで戦ったテンプティーガールズの１人、ライラモンだった。

リュウギ「んなッ！？お前はライラモン！？なんでここに！？」

ライラモン「ウフフ…。なんでここにって、目的はただ１つ！私はリュウギ様を助けに来たのですわ！！」

リュウギ「はぁ…？」

リュウギは目を丸くする。

レアモン「邪魔をするな…。コイツはこの手で葬り去る…。」

ライラモン「やってみなさいよ！私のリュウギ様に手を出したらどうなるか分かってるんでしょうね？リュウギ様は私の物よ！！」

リュウギ「おい、いつからお前の物になったんだよ…？」

リュウギは小さくツッコム。

ライラモン「喰らいなさい！！『アン・ドゥ・ポラン！！』」

ライラモンは素敵な香りのする花粉をまき散らしてレアモンを幻惑する。

レアモン「な、なんだ…これは…！？」

ライラモン「トドメよ！！『ライラシャワー！！』」

ライラモンは葉の様な手先から無数の細いビームを放ち、トドメを刺した。

レアモン「うぁぁぁぁ…！？」

レアモンは力尽きて倒れ、体内からイビルスが現れる。

リュウギ「逃がすか！！」

リュウギはアルカナムを構えて追撃し、イビルスを切り刻んだ。

イビルス「ギィィィィィィィィィィィ！？」

イビルスは跡形もなく消え去った。

リュウギ「よし！！」

ライラモン「やりましたねリュウギ様～♪」

ライラモンは嬉しさの余りにリュウギに抱き着いた。

リュウギ「バ、バカッ!?引っ付くな!?」

リュウギは慌ててライラモンを引き離す。

すると、リュウギのD－アクセルから光が生じ、自動的にデジエクスフィールドが発動される。

一方、レアモンは正気を取り戻し、何処かへと去って行った。

リュウギ「これで、メカルクタウンは安全だな…。」

ライラモン「私とリュウギ様の愛の勝利ですわ♪」

ライラモンはまたまたリュウギに抱き着いた。

リュウギ「だから引っ付くなって?」

???「リュウギー!!」

すると、奥からミソラ達がやってくる。

リュウギ「ヤベッ!?」

リュウギの額から冷や汗が流れ、慌ててライラモンを引き離そうとするが、ライラモンはなかなか離れてくれない。

ミソラ「リュウギ、大丈…夫…。」

すると、ミソラは目撃してしまい、思わず言葉を失った。

ミソラ「は…？」

ナルガモン「お前はテンプティーガールズのライラモン！？なんでこんな所にいるんだよ！？」

リュウギ「違うんだミソラ、ナルガモン！？コイツが勝手に…！？」

ライラモン「私、一生リュウギ様を離さないわぁ～♪」

すると、ミソラの眉がピクピクと動いていた。

ミソラ「なるほどねぇ…。ナルガモン、私にこれを見せるために騙したのね…？」

すると、ナルガモンは慌てて否定する。

ナルガモン「えッ！？違うってミソラ！？オレは知らなかったんだって！？」

リュウギ「誤解だってミソラ！？俺も知らなか…」

（パシィーーーーンッ！！×2）

すると、2発のビンタの音が地下室に響き渡るのであった。

そして…。

～メカルクタウン～

リュウギ・ナルガモン「ただいま～…。」

ナイトモンはリュウギとナルガモンの様子がおかしいと気付く。

ナイトモン「どうしたのだリュウギ殿、ナルガモン？」

リュウギとナルガモンの左頬には大きな手形が残っていた。

リュウギ・ナルガモン「別に…。」

ミソラ「さて、燃料はこれでＯＫだよ！」

博士「これでデジシップは飛べるだギャ！」

レナモン「ところで、ライラモンはどうするのだ…？」

ライラモン「私はリュウギ様の後を追ってきたの！！だから私も一緒に連れていって！！」

リュウギ「大体、コロシアムの時にキッパリと断っただろうが！！」

ライラモン「そうよ…。でも、リュウギ様は私に言ったよね…？」

リュウギ『終わりのある愛は悲劇じゃない。終わりのない愛こそ悲劇なんだよ…。』

ライラモン「あの言葉を聞いて思ったの…。私の愛はあのコロシアムの日から始まったばかりだと！！」

一同「……？」

リュウギ「俺、そんな事言ったっけ…？」

リュウギは皆に問うと、ナルガモンとレナモンはコクりと頷いた。
すると、リュウギはハッとする。

リュウギ「じゃあ、さっきの視線はお前だったのか！？」

ライラモン「そうよ…。だからリュウギ様、私も一緒に連れていって…。お願い…。」

ライラモンはそう言って涙目になる。

リュウギ「うっ…？何とかしてくれよミソラ？」

ミソラ「アンタだけスレッド大陸に残ればいいんじゃないの…？」

ミソラは呆れた目をしながら冷たい態度を取る。

リュウギ「酷ッ！？」

博士「リュウギはどうしてそんなに嫌がるだギャか…？」

コウジ「確かにそうだね…。」

レオルモン「同感だな…。」

キャンドモン「ボクチンなら大歓迎ですけどね♪」

因みに、この４人はライラモンの本当の正体を知らない。

ミソラ「実はね…、ゴニョゴニョゴニョゴニョ…」

ミソラは４人にライラモンの本当の正体を教えた。

すると、コウジ達は頭をペコリと下げた。

キャンドモン「ボクチン、前言撤回します…。」

コウジ・レオルモン「末永くお幸せに…。」

博士「だギャ…。」

リュウギ「ってうおぉぉぉぉぉぉぉぉい！？」

リュウギはありったけの声でツッコム。

ナルガモン「リュウギよぉ、だったらいっその事、ライラモンとコントラクトしたどうなんだ？」

すると、リュウギは深くため息をつく。

リュウギ「仕方ないなぁ…？ライラモン…。」

ライラモン「何ですかリュウギ様？」

リュウギ「連れて行くことは無理だけど、コントラクトしてやる…。一応助けてくれたしな…。」

ライラモン「コントラクトですか！？もしかして私とリュウギ様の愛の契約ですか！？」

リュウギ「だから違うって…？」

ライラモン「リュウギ様がそこまで言うのなら、愛の契約してあげてもいいわ…。」

ライラモンはそう言って顔を赤らめる。

ライラモン「あらやだぁ～！私ったらつい？」

リュウギ「人の話聞けよ…？んじゃ、始めるぞ…。」

リュウギはＤ－アクセルをライラモンに翳した。

リュウギ「コントラクト、ライラモン！」

すると、ライラモンの身体から赤いオーラが纏う。

リュウギ「コントラクト完了…。」

ミソラ「良かったわねぇリュウギ。ファーストキスした子と契約ができて…。」

ミソラは嫌らしい目でリュウギを見つめる。

リュウギ「だから違うって？」

ライラモン「これで私は、リュウギ様との赤い糸が結ばれたわ♪」

リュウギ「だれが赤い糸だ…？つうかその様付けやめろ…？」

ミソラ「ところでリュウギ、デジエクスフィールドは張ったの？」

リュウギ「それなら大丈夫だ…。」

すると、リュウギとミソラのＤ－アクセルが光り出した。

リュウギ・ミソラ「！？」

リュウギとミソラはＤ－アクセルの画面を見ると、自動的にマップが表示される。

ミソラ「マップ？」

すると、黒くなった所が白へと変わった。

リュウギ「白に変わった…？」

コウジ「もしかすると、白に変わったのはスレッド大陸じゃないかい？」

リュウギ「そうか！スレッド大陸にはもうイビルスがいなくなったから、黒から白に変わったのか！」

ミソラ「つまり、スレッド大陸は平和になったのね！」

ナルガモン「やったな！」

レナモン「喜ぶのはまだ早い…。」

コウジ「そうだね…。デジタルワールドにはまだイビルスに支配されている島がたくさんあるからね…。」

リュウギ「デジタルワールドは俺達に助けを求めてるんだ…。早く助けに行こう！」

ナルガモン「そんで、アナログマンをブッ飛ばす！！」

レオルモン「そうと決まれば、早く行こうぜ！！博士、頼むぜ！」

博士「だギャ！みんな、デジシップに乗るだギャ！」

一同「おう！！」

リュウギ達はデジシップに乗り込む。

博士「準備はいいだギャか？それじゃ…」

アグモン博士はスイッチを押そうとすると、突然ナルガモンが叫びながらスイッチを押す。

ナルガモン「ブレイブエクセリオン、出撃！！」

（ポチッ！）

すると、デジシップは動き出し、上空へと飛び上がった。

博士「あわわ？勝手に押すなだギャャャャ？」

ナルガモン「細かい事は気にすんなって♪飛べたんだからＯＫ！ナ

ッハハハ♪」

ナルガモンはそう言って高らかに笑う。

コウジ「やれやれ…？」

ミソラ「先が思いやられるわ…？」

リュウギ達は深くため息をつく。

こうしてスレッド大陸は平和となり、デジタルワールドを救うため、
リュウギ達は次なる島へと向かうのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

EP29　～さらば、スレッド大陸！！舞い上がれ、ブレイブエクセリオン！！

～アナログマン本拠地～

ストラティクモン「アナログマン様、エクセリオン共がスレッド大陸を占領しました…。」

アナログマン「いいんだよ。あんな大陸、最初からどうでも良かったからさ…。私にはまだたくさんのコレクション（島）を支配しているのだからな！」

アナログマンはそう言って高らかに笑う。

スレイヤードラモン「アナログマン様、なぜ退却命令を…？」

アナログマン「あの男、エグザがいると厄介だからねぇ…。それに、お前を失えば友との感動の再会ができないから退却させたんだよ…。不満か…？」

すると、スレイヤードラモンはうつ向く。

スレイヤードラモン「いえ…不満ではありません…。」

アナログマン「分かればいいんだよ。」

すると、ストラティクモンとは違った黒影がアナログマンに問う。

？？？「アナログマン様、新たなイビルスをどうすれば…？」

アナログマン「良いこと思いついた…。新たなイビルスを送り込むのだ！」

？？？「送り込む…？どちらへ…？」

アナログマン「過去のデジタルワールドにだ…。」

（ニヤリ…）

『第２章～激闘！！コロシアム篇～』は完結し、次回から新章突入！！

……と言いたい所だが、新章始まる前にとある事件が発生！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ３０　～リュウギ、過去へ！？デジタルワールド２００２！！～（前書き）

今回は今作初めてのタイムスリップネタ来ちゃいました！！

２００２って事は…？

Ｅｐ３０スタート！！

ＥＰ３０　～リュウギ、過去へ！？デジタルワールド２００２！！～

～デジシップ～

ナルガモン「うぉほーーーー！！飛んでるぜ♪」

ナルガモンは窓からの景色を見てはしゃぐ。

博士「余り暴れないで欲しいだギャ？」

ミソラ「デジタルワールドって凄い広いわねぇ…。」

コウジ「何せデジタルワールドは僕らの済む地球と同じなんだ…。」

ミソラ「え？つまり例えるなら、スレッド大陸は日本列島みたいなもの？」

コウジ「簡単に言えばそうだね…。」

リュウギ「コウジさんは何処から来たんだ？」

レオルモン「オレ達はデバイス島さ！」

ナルガモン「だったら、どうやってスレッド大陸に来たんだ？」

コウジ「現実世界からゲートを開いて、そこからスレッド大陸に来たんだ。」

すると、リュウギとミソラはピタッと止まる。

ミソラ「コウジさん、今なんて…？」

コウジ「え？だから現実世界からゲートを開いてスレッド大陸に来たんだ…。それが何か…？」

すると、リュウギとミソラは顔をお互いに見合わせる。

リュウギ・ミソラ「帰れるーーー！！」

博士「だから余り暴れないで欲しいだギャッ？」

コウジ「ど、どうしたんだい２人とも…？」

ミソラ「実はね…」

ミソラはどうやってデジタルワールドに来たのか、コウジに話した。

コウジ「そうだったんだ…。事情は大体分かったよ。でも、このデジドライブを持つ者じゃないと、現実世界に帰る事はできないんだ…。」

リュウギ・ミソラ「……。」

すると、リュウギとミソラのテンションがガタ落ちになる。

リュウギ・ミソラ「はぁ～～～…。」

キャンドモン「あ、一気にテンション下がりましたよ…。」

コウジ「ごめん、期待させちゃって…？」

リュウギ「いや、いいんだ…。」

ミソラ「そう簡単に上手くいかないわよね…？」

リュウギとミソラは深くため息をつく。

レオルモン「コウジがあんな事言うからだよ？」

コウジ「やっぱり僕のせい…だよね…？」

コウジはそう言って苦笑いする。

ナルガモン「ヒマだなぁ～、ちょいと探検でもするか…。」

ナルガモンはアクビをしながら、1人でデジシップを探検する。

ミソラ「久しぶりにお父さんとお母さんに会えると思ったのに…。
あれから何日経ったのかしら…？」

リュウギ「心配してるだろうなぁ…。」

レナモン「その心配はない…。」

ミソラ「どういう事なの、レナモン？」

レナモン「デジタルワールドは以前、現実世界に比べて時間の流れが速く、現実世界での数分の間にデジタルワールドでは何日も経過しているんだ…。」

リュウギ「そっか…。だったら安心だな…。」

ミソラ「以前ってどういう事…？」

コウジ「何者かが、デジタルワールドのデータが流れ込む際の破損や欠落したんだ…。」

リュウギ「アナログマンか…。」

レオルモン「あの野郎のせいで、デジタルゲートは閉ざされたんだ。」

コウジ「つまり、僕も現実世界に帰る事ができないんだ…。」

ミソラ「やっぱり、アナログマンの仕業だったんだね！」

コウジ「アナログマンを倒さない限り、僕らは永遠にデジタルワールドの中だ…。」

ミソラ「だったらボンヤリしてるヒマはないわね！急いで次の島に行きましょ！！」

キャンドモン「あれ？肝心なナルガモンは何処行ったんですぅ？」

リュウギ「確かにそうだな…？しょうがねぇなぁ…。探してくるよ。」

リュウギはそう言ってナルガモンを探しに行った。

コウジ「さて、僕らはその間に準備でもしようか…。」

レナモン「そうだな…。」

～デジシップ　???室～

リュウギ「おーい、ナルガモーン！」

リュウギはデジシップのとある部屋に入る。

ナルガモン「おうリュウギ！おもしれぇもん見つけたぜ♪」

ナルガモンは自分よりも大きな機械をバンバンと叩く。

機械「キドウテイシチュウ…。【起動停止中…。】」

リュウギ「何だよそれ？」

ナルガモン「さぁな？これも博士が造ったヤツなんかなぁ？さっきと同じ事しか言わねぇぞコイツ？」

機械「キドウテイシチュウ…。【起動停止中…。】」

ナルガモンはそう言って機械をバンバンと叩く。

リュウギ「おいおい、余り叩くなよ？」

機械「ピガッ、ピガガ…！！」

リュウギ「おい、壊してどうするんだよ！？」

ナルガモン「壊してねぇって？」

リュウギ「って、思いっきり叩いてたじゃねぇかッ？」

機械「タイムマシン、キドウ。【タイムマシン、起動。】」

ナルガモン「おっ、喋った×2♪」

リュウギ「今、タイムマシンって言わなかったか？」

機械「ヘルメットヲソウチャクシテクダサイ。【ヘルメットを装着してください。】」

リュウギ「ヘルメット？」

すると、機械の上に2つのヘルメットが置かれていた。

ナルガモン「これか！」

ナルガモンはヘルメットを頭に装着する。

リュウギ「おいおい、勝手に装着したら…？」

ナルガモン「お前も被れって♪」

ナルガモンはリュウギに無理矢理ヘルメットを被らせた。

リュウギ「っておい！何やってるんだよ！？」

機械「テンソウサキハ、２００２ネンノデジタルワールド…。ナオ、ホカノセカイカラキタコトハダレニモイッテハイケマセン…。【転送先は、２００２年のデジタルワールド…。尚、他の世界から来た事は誰にも言ってはいけません…。】」

リュウギ「え!?ちょっと待…!?」

機械「デハ、テンソウシマス…。【では、転送します…。】」

すると、リュウギとナルガモンは意識を失い、バタリと倒れた。

すると、ミソラとアグモン博士が部屋に入ってくる。

ミソラ「リュウギ、ナルガモン!?」

博士「遅いと思ったら、やっぱりこの部屋にいただギャか…?」

アグモン博士は呆れてため息をつく。

ミソラ「どういう事?」

博士「ここは転送の部屋だギャ。この機械はタイムマシンと言って、過去の世界にいけるだギャ!」

ミソラ「え、それって凄いじゃないの!?」

博士「だギャしかし、ボクじゃ全く動かなかったのに、リュウギはどうやって動かしたんだギャ…?」

ミソラ「それで、どうするのよ!?」

アグモン博士は腕を組んで考える。

博士「どうする事もできないだギャ…。２人の目が覚めるまで待つしかないだギャ…。」

一方、リュウギ達は…。

～２００２年　デジタルワールド～

？？？「――丈夫…？」

リュウギ（誰だ…？ミソラか…？）

リュウギはゆっくりと目を開けると、見知らぬ女の子とそのパートナーデジモンが心配そうな表情をしていた。

？？？「良かった…。気が付いたわ…。」

女の子のパートナーデジモンはホッとする。

？？？「あのぅ、大丈夫ですか…？」

リュウギ「あ、あぁ…。」

リュウギはそう言ってノソリと起き上がる。

リュウギ「ここは何処だ…？」

？？？「ここはファイル島よ。」

？？？「どうやら、現実世界から迷い込んだみたいだね…。」

リュウギ「ファイル島？お前達は一体…？」

？？？「私は八神（やがみ）　ヒカリよ。」

？？？「私はテイルモン。よろしく。」

リュウギ「俺は御縞　リュウギだ…。」

ヒカリ「あなたは何処から来たの？」

リュウギ「あぁ、俺は…」

すると、リュウギはタイムマシンに言われた事を思い出し、ハッとする。

リュウギ（確か、他の世界から来た事は誰にも言ってはいけないって言ってたな…。そう言えば、２００２年って言ってたよな…。つまり、ここは過去のデジタルワールドなのか！？）

ヒカリ「どうしたの、リュウギ君？」

リュウギはどうやって説明するか必死に考える。

リュウギ「え、え～と…。」

すると、リュウギはコウジの言葉を思い出す。

コウジ『何せデジタルワールドは僕らの済む地球と同じなんだ…。』

ミソラ『え？つまり例えるなら、スレッド大陸は日本列島みたいなもの？』

コウジ『簡単に言えばそうだね…。』

リュウギ（ここがデジタルワールドなら、きっと大丈夫だな…。）

「俺はスレッド大陸から来たんだ。」

ヒカリ「スレッド大陸？」

テイルモン「聞いた事あるような、ないような…？」

リュウギはとにかく、話を変える。

リュウギ「それより、ナルガモンを知らないか？」

ヒカリ・テイルモン「ナルガモン？」

すると、ヒカリとテイルモンは首を横に振る。

リュウギ「そうか…。」

テイルモン「タケル達に知らせて探させてもらいましょうよ！」

ヒカリ「そうね！待っててねリュウギ君！」

ヒカリはそう言ってＤ－ターミナルを取り出し、メールを送る。

リュウギ「なんかすまないな…。」

ヒカリ「気にしなくていいのよ！」

テイルモン「困った時は御互い様よ！」

すると、ヒカリのDターミナルにメールが返ってくる。

（ピコーン♪）

ヒカリ「なになに…？」

『分かったよ！そのナルガモンの特徴は？』

ヒカリ「リュウギ君、ナルガモンの特徴はなに？」

リュウギ「え～と…、黒い体をして、目がつり上がってて、『ナッハハハ♪』って笑うんだ。」

ヒカリ・テイルモン「……？」

ヒカリとテイルモンは首を傾げる。どうやら、上手く伝わっていないらしい。

リュウギ「ごめん、分かりにくいよなぁ…？」

ヒカリ「と、取り合えず頼んでみるわ…？」

ヒカリはそう言ってメールを送った。

一方、ナルガモンは…。

???「――～い…。」

ナルガモン（なんだ…？リュウギか…？）

ナルガモンはゆっくりと目を開けると、見知らぬ男の子とそのパートナーデジモンが心配そうな表情をしていた。

???「おっ！？気が付いたぜ！」

ナルガモン「あれ…？オレは一体…？」

ナルガモンはノソリと起き上がる。

???「大丈夫か…？」

ナルガモン「あぁ、オレは大丈夫だぜ！なんたってオレは、最強と呼ばれるデジモンの中のデジモン、このナルガモンだからな♪ナッハハハハ♪」

ナルガモンはそう言って高らかに笑う。しかし、男の子とそのパートナーデジモンは首を傾げる。

???「なんだコイツ…？」

???「ナルガモンか…。オレ、ブイモンって言うんだ！ヨロシクな♪」

???「オレは、本宮（もとみや）　大輔（だいすけ）だ！ヨロシクな♪」

大輔とブイモンは簡単に自己紹介をする。

ナルガモン「ところでさぁ、リュウギ知らねぇか？」

大輔・ブイモン「リュウギ？」

大輔とブイモンは首を横に振る。

ナルガモン「そっかぁ…。ったく、しょうがねぇなぁ…。」

ブイモン「そのリュウギって、ナルガモンのパートナーなのか？」

大輔「だったら、一緒に探してやるよ！」

ナルガモン「え！？いいのか！？ありがとよ♪」

（ピコーン♪）

すると、大輔のＤ－ターミナルにメールが届く。

大輔「メールだ！」

大輔はＤ－ターミナルを開くと、ヒカリからだった。

大輔「あ！ヒカリちゃんからだ！なになに？」

『新しい選ばれし子供がデジタルワールドにやってきたけど、パートナーデジモンとはぐれたの。ナルガモンを探して欲しい。』

ブイモン「大輔、ナルガモンってまさか…？」

大輔「だよなぁ…？」

（ピコーン♪）

すると、また一通のメールが届く。ヒカリからだった。

『特徴は黒い体をして、目がつり上がってて、『ナッハハハ♪』って笑うんだって。』

ブイモン「黒い体で…」

大輔「目がつり上がってて…」

ナルガモン「ナッハハハハ♪」

大輔とブイモンはＤ－ターミナルに書いてあった特徴とナルガモンを見比べ、突然と叫んだ。

大輔・ブイモン「いたーーーーーーーー！！」

ナルガモン「ん？どうしたんだよお前ら？」

――――――――――――――

（ピコーン♪）

すると、ヒカリのＤ－ターミナルにメールが届く。

ヒカリ「大輔君からだわ！」

『ナルガモンを見つけた！何処にいるんだ？』

ヒカリ「リュウギ君、見つかったわ！」

リュウギ「本当か！？」

テイルモン「良かったね！」

ヒカリ「すぐに場所を教えなきゃね！」

ヒカリはそう言って大輔にメールを送った。

リュウギ「これでひと安心だ…。それより、こんな所で一体何をやっていたんだ？」

ヒカリ「私達はデジタルワールドの復旧作業をしていたのよ！」

リュウギ「復旧作業を…？」

テイルモン「数日前、デジモンカイザーがこの地に現れ、デジモンを道具のように扱った悪い人間なんだ！でも、みんなと力を合わせて倒したんだけどね！」

リュウギ「ふ～ん、それで復旧作業をしていたんだ…。！？」

すると、リュウギは何か異変を感じる。

ヒカリ「どうしたの？」

リュウギ「何か来る…。」

テイルモン「私も感じる…。邪悪な闇が…。」

すると、リュウギ達の前に現れたのはイビルスだった。

リュウギ「イビルス!?」

ヒカリ「デジモン!?」

リュウギ「違う。イビルスはデジモンの体を支配するウィルスだ。なんでここに?」

テイルモン「ひょっとして、デジモンカイザーの仕業!?」

リュウギ「いや、コイツらは俺の世…」

すると、リュウギはハッとして口を閉じる。

リュウギ（あっぶねぇ…、他の世界って言い掛けた…?）

ヒカリ・テイルモン「?」

リュウギは言い換えるように考える。

リュウギ（そうだ!）

「俺はイビルスを追ってこの島に来たんだ…?」

すると、森の奥から眼光を光らせるデジモン達が現れ、リュウギ達

を囲む。

リュウギ「クソッ、コイツらもイビルスに支配されたのか…。」

テイルモン「囲まれたわ!?ヒカリ!」

ヒカリ「えぇ!!」

ヒカリはＤ－３を取り出してテイルモンに翳した。

ヒカリ「デジメンタルアップ!!」

テイルモン「テイルモン、アーマー進化!!」

『微笑みの光、ネフェルティモン!!』

リュウギ「アーマー進化…?」

リュウギはＤ－アクセルでネフェルティモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ネフェルティモン、アーマー体、聖獣型、ワクチン種、必殺技はカースオブクイーン。」

ヒカリはネフェルティモンの背中に乗り、手を差し伸べる。

ヒカリ「さぁ、乗ってリュウギ君!ここから逃げるわよ!」

リュウギ「逃げる?そいつは御断りだな…。」

ヒカリ「え!?」

ネフェルティモン「この数じゃ無茶よ！！早く乗って！！」

リュウギ「無茶から逃げてちゃ何も始まらねぇ…。それに、敵に背を向けたら俺の流儀に反する！」

リュウギはそう言って右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ヒカリ・ネフェルティモン「！？」

リュウギ「例えどんな相手だろうが逃げも隠れもしない。それが俺の流儀だ！！」

リュウギはそう言ってアルカナムを振り回し、イビルスに支配されたデジモン達を切り刻んでいく。

ヒカリ「酷い…。どうして罪のないデジモン達を攻撃するの…？」

ヒカリは深刻な顔で小さく呟く。

ネフェルティモン「ヒカリ、私の思い込みかもしれないが、リュウギから光を感じる…。」

ヒカリ「本当に…？」

ネフェルティモン「えぇ…。もしかしたら、彼は彼なりの考えがあるかもしれない。だからヒカリ、私達も戦いましょう！」

すると、ヒカリはコクりと頷いた。

ヒカリ「リュウギ君！みんなを助けたい！何か方法はないの！？」

リュウギ「デジモン達を気絶させればイビルスが現れる！その隙にイビルスを倒すんだ！」

ネフェルティモン「分かったわ！」

ネフェルティモンは額の飾りから高熱の赤い光線を出す。

ネフェルティモン「『カースオブクイーン！！』」

すると、イビルスに支配されたデジモン達に直撃し、体内からイビルスが現れる。

リュウギ「逃がすか！！」

リュウギはアルカナムのトリガーを引いて銃撃を行い、イビルス達を撃ち落とした。

イビルス達「ギィィィィィィィィィ！？」

ネフェルティモン「『ロゼッタストーン！！』」

ネフェルティモンはデジ文字が刻まれた古代碑文の巨石を召還してイビルスに支配されたデジモンにぶつけた。すると、イビルスが現れる。

ヒカリ「これで最後よ！」

リュウギ「これで決める！！」

リュウギはイビルスに追撃し、アルカナムで切り刻んだ。

イビルス「ギィィィィィィィィィ！？」

イビルスは跡形もなく消滅すると、イビルスに支配されていたデジモン達は解放された。

リュウギ「これで完了だな…。さて、次は…」

リュウギはＤ－アクセルを解放されたデジモン達に翳した。

リュウギ「リカバリー！」

すると、解放されたデジモン達の傷は癒された。

リュウギ「リカバリー、完了！」

すると、解放されたデジモン達は正気を取り戻す。

「あれ？ボクは一体何を…？」

「なんでここにいるんだ？」

リュウギ「もう大丈夫だ…。お前らを助けるにはこうするしかなかったんだ…。すまないな…。」

「君が助けてくれたの？」

「何だかよくわからねぇが、ありがとよ！」

すると、解放されたデジモン達はそれぞれの場所へと帰っていった。

ネフェルティモンは地面に降り、ヒカリを降ろす。

ネフェルティモン「やはりね…。ヒカリ、リュウギは悪い人じゃないよ…。」

ヒカリ「そうね…。リュウギ君、あなたを疑ってごめんなさい…。」

リュウギ「気にするな…。誰だって勘違いはある…。それに、無益の殺生は俺の流儀じゃねぇしな…。」

ネフェルティモン「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

すると、ネフェルティモンが突然と悲鳴を上げる。

ヒカリ「どうしたのネフェルティモン！？」

すると、リュウギはネフェルティモンの体内にイビルスが入っていくのを目撃する。

リュウギ「ヒカリ、ネフェルティモンから離れるんだ！！」

ヒカリ「え！？」

すると、ネフェルティモンはイビルスに支配されてしまい、ヒカリに襲い掛かる。

リュウギ「くっ！！」

リュウギはヒカリを押し飛ばし、アルカナムで攻撃を受け止める。

ヒカリ「ネフェルティモン！？」

リュウギ「心配するな、ネフェルティモンはイビルスに支配されたんだ！！待ってろ、今すぐ助けるからな！！」

リュウギはそう言って力で押し返す。

ネフェルティモン「『カースオブクイーン！！』」

すると、ネフェルティモンは額の飾りから高熱の赤い光線を出す。

リュウギ「うわっ！？」

ヒカリ「やめて、ネフェルティモン！！」

ヒカリは自我を失い、ネフェルティモンを止めようとする。

ネフェルティモン「『ロゼッタストーン！！』」

すると、ネフェルティモンはデジ文字が刻まれた古代碑文の巨石を召還し、容赦なくヒカリに襲い掛かる。

ヒカリ「！？」

リュウギ「くっ！！」

リュウギは体を張って、ヒカリを庇った。

リュウギ「ぐはっ！？」

ヒカリ「リュウギ君！？」

リュウギ「俺は大丈夫だ…。それより早く助けねぇと…。」

すると、ネフェルティモンは翼を広げて高く飛び上がり、リュウギに向かって急降下して突進する。

リュウギ「くっ！！」

リュウギは側にある木を足場にして高く飛び上がった。

リュウギ「これで決める！！」

リュウギはアルカナムでネフェルティモンを切り刻んだ。

ネフェルティモン「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

すると、ネフェルティモンは地面に落ち、体内からイビルスが現れた。

リュウギ「喰らえ！！」

リュウギはアルカナムで銃撃を行い、イビルスを撃ち落とした。

イビルス「ギィィィィィィィィィィ！？」

イビルスは跡形もなく消滅した。

ネフェルティモンは解放され、テイルモンへと退化した。

ヒカリ「テイルモン、テイルモン！？」

リュウギ「大丈夫だ…。今からリカバリーする。」

リュウギはそう言ってＤ－アクセルをテイルモンに翳した。

リュウギ「リカバリー、テイルモン。」

すると、テイルモンの傷は癒され、やがて目を開ける。

テイルモン「私は一体…？何かやってはいけない事をしたような…？」

ヒカリ「良かったわ…。」

ヒカリは涙目になり、テイルモンをギュッと抱き締める。

リュウギ「イビルスに支配されたんだ…。」

テイルモン「そうか…。心配かけてごめんね、ヒカリ…。」

ヒカリ「いいのよ…。」

ヒカリは涙を拭いて、笑顔になる。

テイルモン「それから、ありがとうリュウギ…。」

リュウギ「困った時は御互い様…だろ？」

リュウギはそういって静かに笑う。

すると、遠くから声が聞こえてくる。

？？？「おーい！！」

ヒカリ「大輔君の声だわ！？」

すると、森の奥から大輔とブイモン、ナルガモンが現れる。

ナルガモン「リュウギ！！こんな所に居たのか！！」

リュウギ「ナルガモン！！」

ヒカリ「良かったねリュウギ君！」

大輔「！？」

すると、大輔は気絶しているテイルモンを見る。

大輔「ヒカリちゃん、テイルモンに何かあったのか！？」

ヒカリ「実は、リュウギ君がイビルスに操られたテイルモンを助けたのよ！」

ブイモン「そうだったのかぁ、ありがとな！え～と…。」

リュウギ「リュウギ。御縞　リュウギだ…。」

リュウギはそう言って手を差し出した。

ブイモン「オレ、ブイモン！ヨロシクなリュウギ！」

ブイモンはリュウギの手をギュッと握手をした。

リュウギ「大輔だったっけな？よろしくな。」

リュウギは手を差し出すが、大輔はフンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。

大輔「余計な事しやがって！オレとブイモンで充分だったのによ！」

ヒカリ「ちょっと大輔君！」

リュウギ（なんだコイツ…？）

リュウギの眉がピクピクと動いていた。

大輔「それよりヒカリちゃん、大丈夫？」

ヒカリ「私なら大丈夫よ。リュウギ君が助けてくれたから！」

大輔「リュウギ…だと…？」

すると、大輔はギロリとリュウギを睨む。

リュウギ「な、何だよ…？」

大輔「おい、お前！」

ヒカリ「お前じゃなくてリュウギ君！」

ヒカリは怒ると、大輔は言い直す。

大輔「リュウギ！！オレと勝負しろ！！」

大輔は人差し指をリュウギに差して叫ぶのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ３０　～リュウギ、過去へ！？デジタルワールド２００２！！～（後書き）

ＹｏｕＴｕｂｅで０２を見ていたら、思わず書きたくなりました♪

大輔が喧嘩腰になった理由は一体…？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ３１　～リュウギｖｓ大輔！？　男と男のプライドを賭けた戦い？～（前書き）

いきなりリュウギに戦いを挑んできた大輔！？

果たして勝負になったきっかけは一体…？

Ｅｐ３１スタート！！

Ｅｐ３１　～リュウギｖｓ大輔！？　男と男のプライドを賭けた戦い？～

～２００２年　ファイル島～

大輔「リュウギ！！オレと勝負しろ！！」

一同「……。」

リュウギ「はぁ…？」

ブイモン「何言ってるんだよ大輔！？」

リュウギ「ちょっと待てよ…？なんで急にそうなるんだよ…？」

大輔「オレはただ、お前が気に食わないだけだ！！」

リュウギ「マジかよ…？」

リュウギはまた面倒な事に巻き込まれたなぁ～、という顔をする。

大輔「どうするんだ！勝負するのか、それとも逃げるのか？」

すると、リュウギは逃げるという単語に反応する。

リュウギ「いいだろう…。その勝負、受けて立つぜ！何せ敵に背を向けるのは俺の流儀に反するからな！」

リュウギはそう言って拳を作って自らの手の平に打ち込んだ。

ヒカリ「ちょっと待ってよ?どうして2人とも喧嘩腰になるのよ?やめてよ?」

ナルガモン「言っても無駄だぜ…。何せ、リュウギは逃げるっていう言葉が嫌いだからな。」

ブイモン「大輔も負けず嫌いだからなぁ…。」

テイルモン「つまり、どちらとも白黒ハッキリ着けないと気が済まない性格って事ね…。」

ナルガモン・ブイモン「そのとおーり。」

リュウギ「で、一体何をするんだ…?」

大輔「今すぐ用意するから待ってろ!!」

大輔はそう言って何処かへと行ってしまった。

ブイモン「行っちゃった…?」

ヒカリ「大輔君ったら、何をするつもりかしら…?」

???「おーい!!」

すると、森の奥からタケル達が出てくる。

ヒカリ「あ、タケル達が来たわ!!」

???「すみませんヒカリさん、剣道の稽古で遅れてしまって?」

少年はそう言って頭を下げる。

???「ありゃ?おみゃーらは誰だギャか?」

テイルモン「紹介するわ。リュウギとそのパートナーデジモンのナルガモンよ。」

リュウギ・ナルガモン「よろしく!」

???「見つかったんだね!僕は高石(たかいし)　タケル。それで僕のパートナー、パタモンだよ。」

パタモン「ヨロシクね♪」

???「はじめまして。僕は火田(ひだ)　伊織(いおり)と申します。それでこっちはアルマジモンです。」

アルマジモン「よろしくだギャ～♪」

すると、少女は目を輝かせながら自己紹介する。

???「私は井ノ上(いのうえ)　京(みやこ)と言います!!双子座生まれでＡＢ型で…」

???「京さん?誰も聞いてないですって?」

京のパートナーデジモンは慌てて京を止める。

???「お気になさらないで?私は京さんのパートナー、ホークモンです…。どうぞよろしく…。」

リュウギ「あ、あぁ…。よろしくな…？」

リュウギは京の紹介に驚いたのか、苦笑いする。

ナルガモン「こんなにエクセリオンがいるんだな…。頼もしいぜ♪」

一同「えくせりおん…？」

すると、リュウギは慌ててナルガモンの口を塞ぐ。

ナルガモン「ふごっ…ふごっ？」

リュウギ「ナルガモン、あの機械の言った事、覚えてるか！？」

（ヒソヒソ…）

ナルガモン「な、なんだっけ…？」

（ヒソヒソ…）

リュウギ「バカッ！？他の世界から来た事は誰にも言うなって言ってただろうが？」

（ヒソヒソ…）

ナルガモン「そうだったっけ…？」

（ヒソヒソ…）

リュウギ「とにかく話を合わせろ！いいな？」

（ヒソヒソ…）

ナルガモン「分かったよ？」

（ヒソヒソ…）

タケル「どうしたんだい、リュウギ君？エクセリオンってなんだい…？」

タケルは問うと、リュウギとナルガモンは慌てて誤魔化す。

リュウギ「これはアレだよ？お前らでいう選ばれし子供みたいなヤツさ？俺達は選ばれし子供の事をエクセリオンって言うんだ？」

京「つまり、業界用語のような事？」

リュウギ「そう、それだ？」

何とか誤魔化しきれたリュウギ。

タケル「ところで、大輔君は？」

ヒカリ「それが…」

大輔「おーい！！」

すると、大輔が何かを持って駆け付けてくる。

ナルガモン「おっ、帰って来た！」

大輔「なんだぁ、みんな来てたのか。」

ブイモン「何処行ってたんだよ大輔？」

大輔「へへッ、これさ！」

すると、大輔はポケットから空き缶を取り出した。

リュウギ「空き缶…？これをどうするんだ…？」

すると、大輔は２０メートル先に空き缶を置いて帰ってくる。

大輔「ここから、あの２０メートル先にある空き缶を当てたら勝ちだ！やり方は自由だ！いいな？」

リュウギ「分かった。それで、お前はどうするんだ？」

大輔「オレは勿論、これだ！！」

大輔はバッグからサッカーボールを取り出した。

伊織「大輔さん、何をしているのですか？」

アルマジモン「リュウギと遊ぶだギャか？だったらオイラもやるだギャ♪」

すると、大輔の眼は灼熱の炎のごとく、燃えていた。

大輔「違う！！これはオレとリュウギの…。男と男の戦いだ！！」

タケル「た、戦い…？」

京「ははーん読めたわ…。ヒカリちゃんにイイトコ取りされて、焼きもち焼いてるのよきっと♪」

すると、大輔は顔を赤らめる。

大輔「べ、別にそんなんじゃねぇよ？」↑図星

リュウギ「図星って書いてるぞ…？」

（コイツ、何処かの誰かに似てるなぁ…？）

大輔「うるせぇ！！とにかく勝負だリュウギ！！負けたら勝った奴の言う事を聞く！！いいな？」

リュウギ「あぁ…。受けて立つぜ…。」

リュウギはそう言って拳を作って自らの手の平に打ち込んだ。

大輔（フフフ…。この間学校で、２０メートル先の空き缶を当てちゃったもんね…♪悪いがリュウギ、この勝負はオレが貰う！）

そして…。

ナルガモン「何だかよく分からねぇが、頑張れよリュウギ♪」

ヒカリ・テイルモン「頑張ってね２人とも！！」

京「大輔なんてやっつけなさい、リュウギくぅーん！！」

ホークモン「京さん？」

タケル・パタモン・伊織・アルマジモン「……。」

大輔「おい、なにボーッとしてるんだよ?ボーッとしてるヒマがあるなら応援しろよな!!」

すると、タケル達は首を傾げる。

タケル「応援って言われてもねぇ…?」

伊織「僕はどちらでもいいでもいいです…?」

アルマジモン「その通りだギャ!」

パタモン「僕もそう思うな!」

大輔「お前らなぁ〜ッ?」

リュウギ「さぁ、先攻はどうするんだ?」

大輔「勿論オレから行くぜ!」

大輔はそう言ってリフティングをしてウォーミングアップをする。

ブイモン「流石大輔だな!」

大輔「へへッ、まぁな♪それじゃ、行くぜ!!」

大輔はボールを高く上げ、空き缶に目掛けてシュートした。

(カランコロン!)

パタモン「当たった!?」

伊織「あの距離で当てるなんて、凄いです大輔さん！？」

大輔「まぁ、当然だって♪」

すると、大輔の鼻が伸びて行く事に気付くリュウギ。

リュウギ（あ、鼻が伸びてる…？）

大輔「さ、次はリュウギの番だぜ♪」

（ま、どんな奴か知らねぇが、野球だろうがサッカーだろうが、オレには勝て…）

（カランコロン！）

大輔「へ？」

リュウギはガンブレード、アルカナムで空き缶を撃ち落とした。

ヒカリ「凄いわリュウギ君！？」

京「さっすがリュウギ君！！素敵よーッ？」

リュウギ「こんなの朝飯前だ。」

大輔「ちょっと待て！？銃を使うなんて反則だぞ！？」

リュウギ「『やり方は自由だ！』ってさっき自分で言ってなかったか…？」

一同「言った…。」

タケル達は異口同音に言った。

伊織「男に二言はないってよく言いますけど…」

アルマジモン「大輔は二言ありだギャ♪」

京「だってデリカシーをテレパシーと間違えるくらいだもの～。」

ナルガモン「そうなのか？おもしれぇな大輔って♪」

大輔「う、うるせぇ？まだ１対１だ！！今度は３０メートルで勝負だ！！」

リュウギ「あぁ…。勝負はまだまだこれだ…。」

そして…。

距離を１０メートル伸ばし、大輔は準備をする。

大輔（まさか当てちまうなんてなぁ…？しかも３０メートルなんてやった事ないぞオレ…？）

ブイモン「大輔、顔色が悪いぞ…？」

大輔「だ、大丈夫だ？」

（こうなったら根性でやるっきゃない！！）

大輔は勢いをつけてボールを蹴った。

大輔「おりゃゃゃゃゃゃ！！」

（チッ！）

すると、ボールは空き缶に掠った。

大輔（頼む～？）

すると、空き缶はパタッと倒れる。

ナルガモン「おっ、当たったぞ！？」

大輔「あ、あはは～？こんなの朝飯前だからよ～？」

リュウギ（その割りには、冷や汗だらだらだぞ…？）

リュウギは心の中でツッコム。

大輔「ど、どうだリュウギ？潔く降…」

（カランコロン！）

大輔「え…、ウソ…？」

大輔はあんぐりと口を開けた。

リュウギ「降…なんだって…？」

リュウギはそう言ってアルカナムを肩に担いだ。

大輔「こ、今度は４０メートルだ！！」

タケル「大輔君、無理してるの見え見えだよ？」

パタモン「もう諦めたら？」

大輔「うるせぇ？オレは諦めるのが一番嫌いなんだよ？」

リュウギ「……。」

そして…。

更に１０メートルを伸ばし、大輔は準備をする。

リュウギ「先攻は俺から行く。いいか？」

大輔「い、いいぜ？」

（さぁ、今度こそ…）

（カランコロン）

リュウギ「当てたぞ…。」

リュウギはそう言ってアルカナムを肩に担いだ。

大輔「ウソ…？」

リュウギ「さ、次は大輔の番だ。」

すると、大輔は立ちすくむ。

ブイモン「大輔…。」

大輔「やってやろうじゃないか！！」

と思いきや、大輔はやる気になって低く構えて勢いを付ける。

大輔「おりゃやややややややや！！」

大輔はボールを蹴ると、ボールは空き缶を越えて遠くへと飛んでいってしまった。

大輔「あ…？」

リュウギ「俺の勝ちだな、大輔…。」

すると、大輔は悔しさの余りに空き缶を蹴っ飛ばした。

大輔「クソッ！！」

リュウギ「！！」

すると、リュウギはアルカナムで銃撃を行い、宙に舞う空き缶を撃ち落とした。

タケル「凄い…！？」

京「カッコいいわリュウギ君？」

京の目はキラキラと輝いていた。

リュウギ「さて、負けた奴は勝った奴の言うこと聞くんだよなぁ？」

大輔「まだだ！！まだ負けちゃいない！！勝負はまだまだこれからだ！！」

すると、大輔は人差し指を突き出した。

ヒカリ「もう、大輔君ったら…？」

テイルモン「往生際が悪いんだから…？」

テイルモンはそう言って小さくため息をつく。

リュウギ「しょうがないなぁ…？それで、次は何をするんだよ…？」

大輔「ブイモン、頼むぜ！」

ブイモン「って、何でオレなんだよ！？」

リュウギ「あ、あのなぁ…？」

ナルガモン「お！？だったらオレと勝負しようぜ♪」

ナルガモンはそう言って戦う体勢に入る。

大輔「ほら、ナルガモンも戦う気満々なんだから相手しろよブイモン！」

ブイモン「大輔が言い出したからじゃないかッ？」

京「ちょっと大輔！自分から売った喧嘩なのにデジモンに押し付けないでよ！」

ホークモン「そうですよ！」

伊織「でも僕は、ナルガモンの実力を見てみたいと思います…。」

アルマジモン「オイラも見てみたいだギャ！」

ナルガモン「アイツらもそう言ってんだからやろうぜ♪」

ブイモン「う～ん…、分かったよ？」

ブイモンはそう言って戦う体勢に入る。

リュウギ（ていうかコレ、何の勝負になってるんだよ…？）

リュウギは心の中でツッコム。

大輔「よしブイモン！早速成熟期に…」

すると、地面が激しく揺れる。

一同「！？」

大輔「なんだ！？」

すると、森の奥から複数のティラノモンが現れた。

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ティラノモン、成熟期、恐竜型、データ種、必殺技はファイアーブレス。」

伊織「囲まれました！？」

タケル「どうしてティラノモン達が！？」

テイルモン「リュウギ、ティラノモン達から闇を感じるわ！」

リュウギ「だったら、イビルスの仕業だな…。」

ナルガモン「ホントか！？」

大輔「なんだよイビルスって！？」

ヒカリ「みんな気を付けて！！イビルスはデジモンの心を支配するウィルスよ！？」

一同「！？」

リュウギ「コイツらを救い出す方法はティラノモンを気絶させ、イビルスを倒す事だ！！行くぞナルガモン！」

ナルガモン「おうよ！！」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。すると、ナルガモンのデータは上書きされ、姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

大輔「何だかよく分かんねぇけど、行くぞみんな！！」

一同「デジメンタルアップ！！！！」

ブイモン「ブイモン、アーマー進化！！」

『燃え上がる勇気、フレイドラモン！！』

ホークモン「ホークモン、アーマー進化！！」

『羽ばたく愛情、ホルスモン！！』

アルマジモン「アルマジモン、アーマー進化！！」

『鋼の知識、ディグモン！！』

パタモン「パタモン、アーマー進化！！」

『天翔る希望、ペガスモン！！』

テイルモン「テイルモン、アーマー進化！！」

『微笑みの光、ネフェルティモン！！』

ティラノモン達「『ファイアーブレス！！』」

ティラノモン達は口から灼熱の炎を吐く。

リュウギ達は素早く交わすと、反撃する。

フレイドラモン「『ナックルファイア！！』」

ホルスモン「『マッハインパルス！！』」

ディグモン「『ゴールドラッシュ！！』」

ペガスモン「『シューティングスター！！』」

ネフェルティモン「『ロゼッタストーン！！』」

それぞれの技でティラノモン達に直撃し、力尽きて倒れた。すると、ティラノモン達の体内からイビルスが現れる。

リュウギ・ソニックドラモン「逃がすか！！」

リュウギとソニックドラモンは高く飛び上がって追撃した。

ソニックドラモン「『ヒドゥンスラッシュ！！』」

ソニックドラモンは両肘のブレイドから漆黒の炎を纏い、イビルス達を切り刻んだ。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そしてリュウギはアルカナムでイビルス達を切り刻んだ。

イビルス達「ギィィィィィィィィ！？」

イビルス達は跡形もなく消滅し、ティラノモン達は解放された。

リュウギとソニックドラモンは地面に着地した。

リュウギ「これで大丈夫だな…。」

ソニックドラモン「ＣＯＯＬに決まったぜ！」

戦闘を終えると、フレイドラモン達は成長期へと退化した。

ブイモン「やったな大輔！」

大輔「カッコよかったぜブイモン♪」

すると、背後からイビルスが現れる。

一同「！？」

ヒカリ「危ない大輔君！？」

大輔「？」

大輔は振り向くと、イビルスは大輔に襲い掛かる。

ブイモン「大輔！！」

ブイモンは大輔を押し飛ばすと、身代わりになった。

ブイモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

ソニックドラモン「ブイモン!?」

リュウギ「まだイビルスがいたのか…!?」

すると、イビルスは口を開く。

イビルス（?）「ククク…。オレはイビルスではない…。」

リュウギ「なに!?」

ソニックドラモン「アイツ、喋れるのかよ!?」

イビルス（?）「オレの名前はイビルガ…。イビルスより更に力を得たウィルスさ…。」

リュウギ「イビルスより更に力を得たウィルスだと…!?」

大輔「おいお前、ブイモンを放せ!!」

イビルガ「残念だがコイツの身体はオレが頂いた…。」

リュウギ「心配するな大輔!イビルガに支配されたとはいえ、相手は成長期だ。すぐに助けてやる!」

大輔「リュウギ…。」

すると、イビルガは静かに笑う。

イビルガ「教えてやろう…。イビルスより更に力を得た力を！！」

すると、イビルガはそう言ってブイモンの体に入り込む。

ブイモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

すると、ブイモンは眼光を光らせる。

大輔「ブイモン！？」

すると、ブイモンの姿が変わる。

？？？「グォォォォォォォォ！！」

タケル「あれは、エクスブイモン！？」

リュウギ「エクスブイモンだと…？」

リュウギはＤ－アクセルでエクスブイモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「エクスブイモン、成熟期、幻竜型、ワクチン種、必殺技はエクスレイザー。」

リュウギ「そうか、これがイビルガの能力なのか…！？」

エクスブイモン「グォォォォォォォ！！」

すると、イビルガに支配されたエクスブイモンは容赦なくソニック

ドラモンに襲い掛かる。

ソニックドラモン「くっ!?」

ソニックドラモンは素早く交わした。

大輔「そんな…、エクスブイモン…。」

大輔は絶望に落ち、やがて膝が折れる。

パタモン「どうしよう、タケル!?」

タケル「どうしようって言われても…。」

リュウギ「気を失わせてでもやるしかない…。」

テイルモン「そうね…。それしか方法はないわ!」

大輔「待てよ!?そんな事したらブイモンが…!?」

リュウギ「だったらあのまま放置していいのか?そうすれば、俺達がやられる事になるぞ?」

大輔「……。」

すると、リュウギは大輔の肩にポンと手を置く。

リュウギ「心配するな…。ブイモンは必ず助けてやる。約束だ…。」

大輔「リュウギ…。分かった…。」

すると、大輔はコクりと頷いた。

リュウギ「よし…。約束は必ず守る！！ソニックドラモン、ブイモンを助けるぞ！！」

ソニックドラモン「おう！！」

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

Ｅｐ３１　～リュウギｖｓ大輔！？　男と男のプライドを賭けた戦い？～（後書き）

ブイモンが支配されてエクスブイモンに！？

果たしてエクスブイモンを助け出す事ができるのか！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ３２　～結ばれた絆！！エクスブイモンを救え！！～（前書き）

デジモンアドベンチャー０２もいよいよ大詰めです！！

果たしてイビルガに支配されたエクスブイモンを助ける事ができるのか！？

Ｅｐ３２スタート！！

ＥＰ３２　～結ばれた絆！！エクスブイモンを救え！！～

～２００２年　ファイル島～

イビルガに支配されたエクスブイモンを助けるため、リュウギとソニックドラモンは必死に立ち向かう。

エクスブイモン「グォォォォォォォ！！」

エクスブイモンは咆哮を上げながらソニックドラモンに襲い掛かる。

ソニックドラモン「目を覚ませエクスブイモン！！」

ソニックドラモンは両肘のブレイドでエクスブイモンを切り裂いた。

エクスブイモン「グォォォォォォォ！！」

しかし、エクスブイモンには全く効いていなかった。

リュウギ「ダメだ、全く効いてない！？」

エクスブイモン「『エクスレイザー！！』」

エクスブイモンは胸のＸ字の模様から放射されるエネルギー波を放った。

ソニックドラモン「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

リュウギはガンブレード、アルカナムでエクスブイモンに切りに掛かる。

しかし、エクスブイモンは両手でアルカナムを受け止めた。

リュウギ「なに！？」

エクスブイモン「グォォォォォォォォ！！」

エクスブイモンは握り拳を作り、リュウギを殴り飛ばした。

リュウギ「ぐはっ！？」

リュウギは木に激しく叩き付かれた。

ヒカリ「リュウギ君、ソニックドラモン！？」

テイルモン「ヒカリ、私達も戦いましょう！！」

ヒカリ「だけど…。」

ヒカリは躊躇う。

タケル「やるしかないよヒカリちゃん！このままだとみんな共倒れになっちゃうよ！構わないだろ大輔君？」

大輔「待ってくれタケル…。」

すると、大輔はタケルの腕を掴む。

大輔「それだけはやめてくれ…。頼む…。」

タケル「大輔君…。」

一方、リュウギは腹を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

リュウギ「ゲホッ、ゲホッ…。何てパワーしてやがるんだ…。」

ソニックドラモン「どうするんだリュウギ…？」

リュウギはエクスブイモンを助ける方法を考える。すると、エクスブイモンは容赦なくリュウギに襲い掛かる。

リュウギ「！？」

ソニックドラモン「させるかよ！！」

ソニックドラモンは体でエクスブイモンを取り押さえる。

エクスブイモン「グォォォォォォォォ！！」

すると、エクスブイモンは力でソニックドラモンを押し飛ばした。

ソニックドラモン「くっ！！」

すると、エクスブイモンは何処かへと去って行った。

リュウギ「クソッ、逃げられたか…。」

リュウギはそう言って舌打ちをする。

ソニックドラモン「追うぞ！！」

ソニックドラモンは追い掛けようとすると、リュウギは止める。

リュウギ「待てソニックドラモン。ここは作戦を考えよう…。」

ソニックドラモン「分かったよ…。」

すると、ソニックドラモンはナルガモンへと退化した。

ナルガモン「つうかよぅ、何でお前らは見ているだけだったんだよ？」

ナルガモンはそう言って大輔達に問う。

パタモン「僕らは好きで見ていたんじゃないよ！」

タケル「大輔君が…。」

大輔「分かってたよ…。でもオレは、みんなを巻き込みたくなかったんだ…。」

リュウギ「それで、これからどうするんだよ…？」

大輔「オレ1人でブイモンを助けに行く…。」

ヒカリ「無茶よ大輔君！？」

先に言葉が飛んで来たのはヒカリだった。

大輔「オレのせいでブイモンはあんな風になっちゃったんだ…。これ以上みんなに迷惑かけられねぇ…。」

伊織「大輔さん…。」

リュウギ「いい覚悟だ…。でも、今のお前じゃブイモンは救われねぇぞ…。」

大輔「なんだと!!」

大輔は目付きが変わり、リュウギに睨み付ける。

リュウギ「1人で抱え込むなよ…。みんなに頼れよ…。仲間じゃないのか?」

大輔「!?」

リュウギ「お前にとって仲間はなんだ?傷を舐め合うためにある集団か?お互いに傷付けないようにするための仲良し集団か?違う。共に笑い、共に泣いたり、共に戦い、そして共に助け合う…。それが絆で結ばれた仲間だ…。」

大輔「絆で結ばれた仲間…。」

すると、大輔はふと思い出した。デジモンカイザーの手によってパタモンがイービルスパイラルをはめられそうになった時、タケルは自分を危険にさらしてまでパタモンを守ろうとした時の事を…。

大輔『タケルは自分を危険にさらしてまでパタモンを守ろうとした…。』

フレイドラモン『大輔、オレに何か合ったら守ってくれるか？』

大輔『え？あぁ…たぶん…。』

大輔は自信無さげに答える。

フレイドラモン『たぶん？たぶんなのか？絶対って言ってくれ！！』

※『デジモンアドベンチャー０２　第１１話より』

――――――――――――

タケル「そうだよ大輔君！」

ヒカリ「私達は１つなんだから！」

大輔「ヒカリちゃん…。でもオレ…」

すると、リュウギは大輔の肩にポンと手を置く。

リュウギ「自信喪失するとはらしくないなぁ…。オレやみんなを信じろ…。それと、お前自身もな…。」

すると、大輔の目にはリュウギの背後からリュウの面影が写る。

大輔「は、はい…。」

（リュウ…さん…？）

リュウギ「よし、早くエクスブイモンを助けに行くか…。」

ナルガモン「作戦ならオレに任せな♪いい作戦があるぜ♪」

一同「？」

リュウギ（だ、大丈夫かなぁ…？）

そして…。

エクスブイモン「グォォォォォォォォ！！」

エクスブイモンは森の中でひたすら暴れる。

？？？「ヒャッホゥ！！」

すると、草陰からナルガモンとリュウギが登場する。

ナルガモン「オレ、参上！！」

リュウギ「っておい…？」

一方、大輔達は草の裏で隠れて様子を見ていた。

ヒカリ「大丈夫かしらあの2人…？」

テイルモン「合図が来たら一斉に攻撃って言ってたけど…？」

アルマジモン「作戦の内容さえ聞かされてないし、漠然すぎるだギ

ヤ…？」

タケル「とにかく、あの２人に任せるしかないよ…。」

―――――――――――――

リュウギ「おい…、本当に大丈夫かよ…？」

実は、リュウギもナルガモンから何も聞かされてなかったのだ。

ナルガモン「実はな、船の倉庫に置いてあったのを持ってきたんだ♪なんとそれは…」

リュウギ「それは…？」

タラリラッタラ～♪

ナルガモン「携帯落とし穴～！！」

リュウギ「モン○ン！？どっから出したんだよ携帯落とし穴！？うか何、さっきのＢＧＭ！？ドラ○もんっぽいＢＧＭ流れてきたぞ！？」

リュウギはひたすらツッコミを入れる。

ナルガモン「狩りなんだから細かい事は気にすんなって♪」

リュウギ「エクスブイモン狩るつもり！？目的が違うだろッ！？」

ナルガモン「気にすんなって♪この時代（２００２年）はモン○ン

の時代じゃねぇだろ？だからアイツらもモン◯ンなんて知らねぇって♪」

リュウギ「いや、そういう問題じゃないだろ？」

ナルガモン「捕獲用麻酔玉で眠らせるかぁ？それとも大タル爆弾でヤツを木っ端微塵にするかぁ？それとも…」

リュウギ「言うなッ？頼むからそれ以上言うなッ？つうか何でやり方知ってるんだよ？」

ナルガモン「倉庫に説明書が置いてあった！」

リュウギ「マジかよ…？」

そうしている内にエクスブイモンはリュウギ達に襲い掛かる。

エクスブイモン「グォォォォォォォォ！！」

ナルガモン「来な！！このまま真っ直ぐ来れば落とし穴でドボンだぜ♪ナッハハハハ♪」

リュウギ「じゃあ、その手に持ってる物はなんだよ…？いつ設置したんだ…？」

すると、高らかに笑うナルガモンはピタッと止まる。

ナルガモン「あ…？」

リュウギ「おい…、何の『あ…？』だ…？まさか…？」

ナルガモン「設置し忘れた☆」

リュウギ「ってうぉぉぉぉぉぉぉぉぉい！？」

リュウギとナルガモンはひたすら逃げる。

リュウギ「どうするんだよ！？作戦台無しじゃねぇかッ！？」

ナルガモン「チッ…、こうなったら殺るしか…」

リュウギ「だから違うだろッ？つうかお前、ホントにデジモンなのかッ！？」

リュウギは逃げながらツッコミを入れる。

ナルガモン「だったらどうするんだよッ！？」

リュウギ「その携帯落とし穴を貸せ！俺が設置するからその間にエクスブイモンを引き付けてくれ！」

ナルガモン「お前って罠師なのかぁ？高速設置できるのかぁ？」

リュウギ「何の話ッ！？つうかねぇよそんなスキルッ？いいから貸せ！」

リュウギはそう言って携帯落とし穴を取り上げた。

ナルガモン「しょうがねぇなぁ…。こっちだエクスブイモン！！」

ナルガモンはそう言ってエクスブイモンを誘う。

エクスブイモン「グォォォォォォォォ！！」

リュウギ（よし、今の内に…。）

その間にリュウギは、地面に携帯落とし穴を設置する。

ナルガモン「おい、ただ置くんじゃなくてちゃんと地面掘ってから設置しろよ！面倒なら地面掘って設置するフリだけでもいいから！」

リュウギ「それ、やる必要あるのッ！？んな事言ってる場合じゃねぇだろッ！？」

すると、小型装置からネットが広がり、落とし穴は自動的に設置された。

リュウギ「出来たぞ！！」

ナルガモン「ＯＫ！！こっちだ！！」

ナルガモンはエクスブイモンを誘う。

エクスブイモン「グォォォォォォォォ！！」

何も知らずに追いかけるエクスブイモン。

ナルガモン「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

ナルガモンは落とし穴を越えて思いきり飛び込んだ。

すると、エクスブイモンは落とし穴にはまった。

エクスブイモン「!?」

リュウギ「やった!!」

ナルガモン「今だみんな!!捕獲用麻酔玉を投げるんだ!!」

リュウギ「って、いい加減頭からモン○ン離れろッ?」

すると、草陰から大輔達が現れる。

ヒカリ「行くわよテイルモン!!」

タケル「行くよパタモン!!」

ヒカリ達はD－3をそれぞれのパートナーデジモンに翳した。

ヒカリ・タケル・京・伊織「デジメンタルアップ!!」

ホークモン「ホークモン、アーマー進化!!」

『羽ばたく愛情、ホルスモン!!』

アルマジモン「アルマジモン、アーマー進化!!」

『鋼の知識、ディグモン!!』

パタモン「パタモン、アーマー進化!!」

『天翔る希望、ペガスモン！！』

テイルモン「テイルモン、アーマー進化！！」

『微笑みの光、ネフェルティモン！！』

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

大輔「みんな、頼む！！」

一同「うぉおおおおおおおおお！！」

ソニックドラモン達はそれぞれの技でエクスブイモンにぶつけた。

エクスブイモン「グォォォォォォォォ！！」

子供達は必死になって叫び続ける。

一同「目を覚まして、エクスブイモン！！」

大輔「エクスブイモーーーーン！！」

すると、大輔のＤ－３から光が生じた。

エクスブイモン「グォォォォォォォォ！？」

すると、エクスブイモンはもがき苦しむ。

リュウギ「この光は…？」

ヒカリ「暖かい…。」

すると、エクスブイモンの体内からイビルガが現れた。エクスブイモンは解放され、ブイモンへと退化した。

大輔「ブイモン！？」

イビルガ「クソッ…、こうなったら別のヤツを支配して……！？」

イビルガはとんでもない物を目にしたのか、思わず言葉を失った。

それは、リュウギがガンブレード、アルカナムを構えていた。

リュウギ「お前は俺達の絆を踏みにじった…。覚悟は出来てるんだろうな…？」

すると、リュウギの身体中から光のオーラが溢れ出す。

ソニックドラモン「来た！！リュウギのキズナドライブだぜッ！！」

リュウギは光りを纏いしアルカナムを構えてイビルガに接近する。

イビルガ「やめろ…！？助けてくれ…！？」

イビルガは命乞いをする。しかし、リュウギはアルカナムを振りかぶる。

リュウギ「絆を踏みにじった奴を許す訳にはいかない！！それが俺の流儀だッ！！！！」

リュウギはアルカナムでイビルガを一刀両断にした。

イビルガ「ギャャャャャャャャャャャャ！？」

イビルガは跡形もなく消え去った。

一同「やった！！！！」

リュウギは着地すると、光のオーラは消えた。

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

戦闘を終えると、ソニックドラモン達は成長期へと退化した。

ナルガモン「やったなリュウギ♪やっぱオレの作戦が上手くいったようだな♪ナッハハハ♪」

ナルガモンはそう言って高らかに笑う。

リュウギ「上手くいってねぇよ…？結果オーライだろ…？」

リュウギは眉をピクピクと動かしながら小さくツッコム。

大輔「ブイモン、しっかりしろ！！ブイモン！！」

何度も呼び掛ける大輔。

リュウギ「大輔、今から手当てするから安心しろ。」

リュウギはそう言ってＤ－アクセルをブイモンに翳した。

リュウギ「リカバリー、ブイモン。」

すると、ブイモンの傷は癒され、やがて目を開ける。

ブイモン「う、う～ん…。」

大輔「ブイモン！！」

ブイモン「大…輔…？オレ、みんなに傷付けたよ…。」

リュウギ「お前は何も悪くない…。悪いのはイビルガだ…。」

すると、大輔は思いきりブイモンを抱き締めた。

ブイモン「苦しいよ大輔～？」

大輔「良かった…。ホントに良かった…。」

すると、ブイモンはふと気付く。

ブイモン「大輔？泣いてるの？」

大輔「べ、別に泣いてなんかねぇよ？ただ目にゴミが入っただけだ…。」

大輔はそう言って涙を吹く。

タケル「大輔君、まだやることがあるよ。」

大輔「え？」

伊織「勝負の事ですよ、大輔さん。」

リュウギ「そうだったな…。負けたら勝った奴の言う事を聞くんだったよな…？」

大輔「な、なにをするつもりなんだよ…？」

すると、リュウギはゆっくりと手を差し伸べた。

リュウギ「仲直りの握手だ…。」

大輔「リュウギ…さん…。」

すると、大輔は頬を赤らめながら言う。

リュウギ「リュウギでいいぜ…。」

リュウギは小さく笑うと、大輔は笑顔になり、リュウギの手をギュッと握手した。

ブイモン「リュウギ？」

リュウギ「どうしたんだブイモン？」

ブイモン「助けてくれてありがとう！せめて何かお礼させてくれよ

！」

リュウギ「お礼って言われてもなぁ…？」
（過去のデジタルワールドだしなぁ…？）

すると、ナルガモンはコッソリとリュウギに耳打ちをする。

ナルガモン「ブイモンとコントラクトしたらどうなんだ？」
（ヒソヒソ…）

リュウギ「ここでコントラクトなんてできるのかなぁ…？」
（ヒソヒソ…）

ナルガモン「試してみろよ！」
（ヒソヒソ…）

リュウギ「わ、分かった…？」

リュウギは試しにブイモンとコントラクトする前に、リュウギは何とか自分の世界を避けようと話をし、リュウギはブイモンに耳打ちをする。

リュウギ「今からおまじないを言う…。俺達は絆で繋がっている…。必要になったら力を貸してくれないか…？」
（ヒソヒソ…）

リュウギはそう言って手を差し伸べた。

ブイモン「おまじないかぁ…。わかった！」

ブイモンはそう言ってリュウギの手をギュッと握手した。

リュウギ「コントラクト、ブイモン！」

すると、ブイモンの身体から赤いオーラが纏う。しかし、いつものオーラではなく、光と赤が混じった優しい光のオーラだった。

リュウギ「！？」

（成功した！？それに、いつもと違う！？）

ブイモン「今のがおまじないなのか？」

ブイモンの頭の上には「？」が浮かんでいた。

リュウギ「あぁ…。でも、みんなには内緒だぞ…。せっかくのおまじないが解けてしまうからな…。」

（ヒソヒソ…）

ブイモン「わかった！みんなには言わない！」

大輔「何をヒソヒソ話してんだよブイモン？」

ブイモン「へへッ、内緒！」

大輔達の頭の上には「？」が幾つも浮かんでいた。

リュウギ「さて、行くかナルガモン！」

ナルガモン「そうだな♪」

タケル「もう行くのかい？」

リュウギ「あぁ、世話になったな…。」

大輔「リュウギ、また会えるか？」

リュウギ「さぁな…。でも、また会えそうな気がする…。俺達はもう絆に結ばれた仲間だからな…。」

ナルガモン「そーいう事♪」

リュウギ「じゃあな…。」

リュウギとナルガモンは別れを告げ、この場から立ち去った。

大輔はニコッと笑い、手を振った。

大輔「またなーーッ!!」

ブイモン「また会おうぜリュウギ、ナルガモン!!」

ヒカリ「行っちゃったね…。」

大輔「不思議だな…。」

伊織「何がですか…？」

大輔「リュウギを見ていたら、リュウさんの事を思い出したぜ…。」

大輔「もしかして、リュウギってリュウさんと何か関係があるじゃ

…？」

京「そうかしら？気のせいじゃないの…？」

大輔「そ、そうだよなぁ…？」

大輔はそう言って冗談毛に笑う。

ヒカリ「さ、私達も帰りましょう！」

タケル「そうだね！」

アルマジモン「早く帰っておはぎ食べるだギャ♪」

ホークモン「私もおはぎ食べたいです♪」

大輔「んじゃ、伊織の家でおはぎ食べようぜ！」

一同「おーう！！」

大輔はそう言って先頭に立ち、現実世界へと帰って行く。

こうして２００２年のファイル島は無事、守る抜く事が出来たリュウギとナルガモンであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ３２　～結ばれた絆！！エクスブイモンを救え！！～（後書き）

それから、リュウギ達は…。

リュウギ「結局、どうやったら元の世界に戻るんだ…？」

ナルガモン「さぁ…？」

すると、リュウギのＤ－アクセルから通信が入る。

リュウギ「！？」

ミソラ『――ウギ…？リュウギ？』

すると、Ｄ－アクセルからミソラの声が聞こえてくる。

リュウギ「ミソラ！！」

ミソラ『やっと繋がったわ！そっちは大丈夫なの？』

リュウギ「俺達は大丈夫だ。」

すると次に、アグモン博士の声が聞こえてくる。

博士「よく聞くだギャ！元の世界に帰るなら、Ｄ－アクセルのメニューを開いて「リターン機能」を使うだギャ！」

リュウギ「リターン機能かぁ…。分かった。」

リュウギはＤ－アクセルの通信を切り、リターン機能を使う。

ナルガモン「元の世界に帰れるんだな？」

リュウギ「あぁ！行くぞナルガモン。リターン！！」

すると、リュウギとナルガモンは光に包まれ、静かに消えていった。

リュウギとナルガモンは何とか元の世界に帰る事ができた。

次回から新章突入！！

＞ｉ２４２５９―１２９８＜

【イラスト：トリプルミーミング】

お楽しみに！！

Ｅｐ３３　～カイツ島上陸！！ヒーローマニアな幼虫　ワームモン！！～（前書

ついに新章、『第３章　～冒険！！ファイル島篇～』突入！！

今回はちょっとした笑いありのお話…。

Ｅｐ３３スタート！！

EP33　～カイツ島上陸!!ヒーローマニアな幼虫　ワームモン!!～

～デジシップ～

過去のデジタルワールドから無事に戻ってきたリュウギとナルガモン。リュウギ達は過去のデジタルワールドに起きた事をミソラ達に話した。

ミソラ「へぇ…、3話にも渡ってそんな事が合ったんだ…。」

レナモン「実に興味深いな…。」

コウジ「イビルガ…。アナログマンの奴、とんでもない物を作ったね…。」

レオルモン「過去のデジタルワールドまで支配するなんて、絶対に許さねぇ!」

キャンドモン「ねぇリュウギさん、ヒカリちゃんってどんな子でしたかぁ～?是非とも、会ってみたいですぅ～♪」

一同「……。」

ミソラ「なにどさくさに紛れて聞いてんのよアンタはぁぁぁぁぁぁッ?」

すると、ミソラは握り拳を作り、キャンドモンを思いきり殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃんッ？」

リュウギ「アホは放っとこう…？」

すると、ナルガモン達は同時に頷く。

博士「う～ん…。」

ミソラ「どうしたの博士？」

博士「全然動かなかったタイムマシンが、なんで急に動いたんだギャか…？」

コウジ「もしかしたら…？」

リュウギ「心当たりあるのか、コウジさん？」

コウジ「昔、リュウから聞いたんだけど、過去のデジタルワールドから指令を送っているのは四聖獣の1人、チンロンモンらしいよ…。」

リュウギ「チンロンモン…？」

ミソラ「中国に出てくる聖獣の事だよね！」

レナモン「そうだ…。」

レオルモン「北方を守護する玄武、シェンウーモン。西方を守護する白虎、バイフーモン。南方を守護する朱雀、スーツェーモン。そして東方を守護する青龍、チンロンモンだ。」

ナルガモン「詳しいなぁレオルモン？」

レオルモン「ま、オレ達はそいつらと会った事もあるし、戦った事もあるんだぜ♪」

ナルガモン「マジでか！？戦いてぇ～！！」

ナルガモンは目をキラキラと輝かせる。

コウジ「四聖獣はデバイス島にいるんだ…。けど…」

リュウギ「何か合ったのか？」

コウジ「デジタルワールドにイビルスが現れたせいで、四聖獣達は身を守るために散らばった。勿論、何処にいるのかは分からない…。」

リュウギ「そうか…。」

博士「もしかしたら、タイムマシンが動いたのはチンロンモンって事なのだギャ？」

コウジ「恐らくね…。」

リュウギ「とにもかくにも、デジタルワールドにいるイビルスを倒さなきゃな…。」

コウジ「もしかしたら、散らばった四聖獣達もいるかもしれないしね…。」

博士「みんな、そろそろ次の島に到着するだギャ！」

ミソラは窓から覗くと、小さな島だった。

ミソラ「スレッド大陸より小さいわね…。」

博士「みんな、しっかり捕まるだギャ！」

博士はデジシップを操作し、とある島へと着陸した。

着陸すると、リュウギ達はデジシップから降りる。

リュウギ「ここもイビルスに支配されている島か…。」

リュウギはＤ－アクセルでマップを見ると、黒いマークになっていた。つまり、この島もイビルスに支配されているのだ。

ナルガモン「どうやら、そうみたいだな！」

コウジ「リュウギ君、君達はイビルスを任せるよ。」

リュウギ「コウジさんは…？」

コウジ「僕らはこの島に四聖獣が居るか調べるよ。何かあったら知らせるよ。」

リュウギ「分かった。」

ミソラ「気を付けてね！」

レオルモン「あぁ。お前らもな！」

こうしてコウジてレオルモンは四聖獣を調べるため、別行動をとるのであった。

リュウギ「それで、博士はどうするんだ？」

博士「ボクはデジシップを見張っておくだギャ！それと、旅先のために新たに発明するだギャ！」

ナルガモン「博士、あの落とし穴みたいに発明してくれよな♪」

すると、アグモン博士は驚愕する。

博士「まさか、あれ使ったのナルガモンだったんだギャか！？」

ナルガモン「おう♪」

すると、アグモン博士はガックリと項垂れる。

博士「せっかくの力作だったのに…。（泣）」

ミソラ「落とし穴？何の話？」

リュウギ「いや、こっちの話だ？早く行くぞ？」

リュウギはこれ以上話が広まらないように先頭に立って歩き出した。

ミソラ「変なの…？」

リュウギ達はイビルスを退治するため、森の中へ入る。

ミソラ「ここって一体どういう島なんだろう…？分かるレナモン？」

レナモン「私にも分からない…。」

ナルガモン「ま、ちっちゃい島なんだからパッパと片付けちまおうぜ♪」

キャンドモン「やけにノリノリですねぇナルガモン…？」

ナルガモン「まぁな♪」

リュウギ「それにしても静かすぎる…。この島に本当にイビルスがいるのか…？」

すると、森の中がざわめく。

ミソラ「なに、なんなの！？」

ミソラはビクッと反応し、パニック状態になる。

レナモン「何か来る…。」

ナルガモン「ＣＯＯＬに暴れるぜ♪」

ナルガモンとレナモンは戦う体勢に入る。

？？？「あ～～ぁ～～…。」

ミソラ「な、何か聞こえてくるよ？」

ミソラは怖くなり、レナモンの後ろに隠れる。

すると、謎の声は段々と近づいてきた。

？？？「あ～～あ～～！！」

すると、森の奥から緑色の身体をした昆虫型デジモンが現れた。まるでターザンのように…。

ナルガモン「な、なんだありゃ！？」

？？？「とう！！」

すると、謎の昆虫型デジモンは口から吐き出す糸を噛み切り、華麗に着地する。

？？？「シュタッ！華麗に着地…。」

すると、頭上から折れた枝が落ちてきて謎の昆虫型デジモンの頭に直撃した。

？？？「いでっ？」

一同「……？」

リュウギ達はポカンとする。

リュウギ「な、なんだ…？」

ミソラ「かっこ悪…？」

すると、ミソラの言葉に反応したのか、謎の昆虫型デジモンは怒りだす。

？？？「誰だ！オラの華麗な登場を侮辱した奴はッ？」

ミソラはＤ－アクセルで謎の昆虫型デジモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ワームモン、成長期、幼虫型、ウィルス種、必殺技はネバネバネット。」

リュウギ「何か怒ってるぞアイツ…？」

ミソラ「私よ。」

ミソラは軽く手を挙げる。

ワームモン「読めたぞ…。さてはオラを蹴落とすための作戦だなぁ？で、どいつがやったんだ？」

ミソラ「アンタ聞いてるの…？私って言ってるじゃない？」

聞く耳を持たず、ワームモンはうろちょろ動き回る。

すると、ピタッと止まった。

ワームモン「分かったぞ…。犯人はお前だな！！」

ミソラ「だから私ってさっきから言ってるじゃないのッ？」

キャンドモン「また変なのが出てきましたねぇ～。」

リュウギ「おい、お前も人の事言えねぇぞ…？」

リュウギは小さくツッコム。

ワームモン「よくもやったな！喰らえ、オラの必殺…ぐはっ！？」

すると、ミソラはワームモンを殴り飛ばした。

ミソラ「無視してんじゃないわよッ？」

ワームモン「見ましたか皆さん！？あの人がオラを殴りました！？立派な暴行罪ですよー！？」

ミソラ「アンタが訳の分からない事言うからでしょうがッ？」

ミソラはもう一発お見舞いしようとすると、リュウギとナルガモンは取り押さえる。

リュウギ「少しは頭を冷やせってミソラ？」

ナルガモン「短気は損気って習わなかったか？」

ワームモン「これだから子供は困るのよねぇ…。」

ワームモンはそう言ってため息をつく。

ミソラ「アンタも子供でしょうがッ？幼虫のクセにッ？」

リュウギ「だから落ち着けって？」

そして…。

リュウギ「カイツ島…？」

ワームモン「そっ、ここはオラの住む島、カイツ島なんだ！」

ナルガモン「なぁワームモン、この島にイビルス来なかったか？」

ワームモン「やっぱりイビルスだったのかぁ…。」

リュウギ「やっぱり来てたんだな…。」

ワームモン「この島の住民達はそのイビルスに支配されたんだ…。それでオラはイビルスに支配されないように逃げてたんだ。」

ミソラ「その割りには、逃げてる感じじゃなかったじゃない？むしろ遊んでたじゃないの？」

ワームモン「遊んでたんじゃないッ？アレはカッコよく逃げてたんだッ？」

リュウギ「か、カッコよくって…？」

ワームモン「ス〇イダーマンみたいにカッコよかったでしょ？」

一同「いや、全然…？」

リュウギ達は同時に首を横に振る。

リュウギ（っていうかなんでコイツ、ス○イダーマン知ってるんだよ…？）

リュウギは心の中でツッコム。

ワームモン「オラはこう見えても、ヒーローマニアです♪」

リュウギ「変わったヤツだな…？」

ミソラ「ホントにね…？」

レナモン「事情は分かった。ここは私達が何とかする…。」

ワームモン「ホントか！？」

ミソラ「言っとくけど、アンタのためじゃないわよ…？あくまでもデジタルワールドのためだからね？」

ワームモン「素直じゃないなぁ…。」

（ボソ…）

ミソラ「何か言ったぁ？」

ワームモン「何も。」

ワームモンはプイッとそっぽ向いた。

リュウギ「よし、取り合えずそこへ案内してくれ！」

ワームモン「ラジャー！！」

リュウギ達はイビルスに支配されたデジモンの元へと向かおうとする。

レナモン「！？」

レナモンは何か感じたのか、ミソラを抱いてその場から離れたその時、地面からネットが出てきてリュウギとナルガモンは捕らわれてしまった。

ナルガモン「うわっ！？な、なんだ！？」

リュウギ「くっ、罠か！？」

キャンドモン「うそぉぉぉぉぉぉん？」

ミソラ「助かった…。ありがとうレナモン。」

レナモン「あぁ…。」

リュウギはアルカナムを取り出してネットを切ろうとするが切れない。

リュウギ「ダメだ…！？レナモン、コイツを切ってくれ！」

レナモン「分かった。」

レナモンはミソラを降ろし、助けに行こうとする。

？？？「『メテオダンス！！』」

すると、上空から隕石群が現れ、レナモンの行く手を阻む。

レナモン「くっ！？誰だ！？」

すると、森の奥から正体を現す。

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「バロモン、アーマー体、魔人型、ウィルス種、必殺技はメテオダンス。」

ワームモン「やっぱり村長だ？」

リュウギ「なに！？」

すると、バロモンの背後から島の住民達が現れる。

Ｄ－アクセル「フローラモン、成長期、植物型、データ種、必殺技はアレルギーシャワー。」

レナモン「ミソラ！」

ミソラ「うん。ディスティングハーツ！！」

ミソラはディスティングハーツをすると、バロモンとフローラモン達の体内を調べる。

ミソラ「やっぱり…。フローラモン達はイビルスに支配されてるわ！」

リュウギ「バロモンは!?」

ミソラはじっとバロモンを見ると、バロモンの体内には闇のオーラが溢れていた。

ミソラ「イビルスはいるけど、フローラモンとは違うわ…。」

リュウギ「気を付けろミソラ！そいつはイビルガだ!!」

ミソラ「!?」

レナモン「ミソラ、下がってて…。」

バロモン「いかにも、我の身体にはイビルガがいる！」

キャンドモン「アイツ、暴走してないし喋ってる!?どうなってんだＹＯ!?」

バロモン「我々イビルガを侮るな…。イビルガはイビルスとは違うのだからな…。フローラモン達よ!!」

フローラモン「キシャャャャャャ!!」

イビルスに支配されたフローラモン達は回りを囲い、逃げ場をなくす。

ミソラ「囲まれたわ!!どうしようレナモン!?」

レナモン「くっ…!!」

すると、リュウギは叫ぶ。

リュウギ「レナモン、ミソラとワームモンを連れて逃げるんだ!!」

レナモン「しかし…!?」

ミソラ「な、何を言ってるのよリュウギ!?」

リュウギ「このままだとみんな捕まってしまう!!だから早く逃げろ!!」

レナモンはリュウギの眼を見て、コクりと頷いた。

レナモン「分かった。」

レナモンはミソラを抱いて逃げようとする。

バロモン「逃げられるとでも思っているのか?やれ、フローラモン達よ!!」

フローラモン達「『アレルギー…』」

リュウギ「させるか!!」

リュウギは狭い中、アルカナムで銃弾を放ち、フローラモン達を足止めする。

リュウギ「今だ！！」

レナモン「すまない！」

レナモン達は何とか逃げ切れた。

リュウギ「よし、何とか逃げ切れたな…。」

ナルガモン「安心してるけど、こっからどうするんだよ…？」

バロモン「邪魔をしよって…。コイツらを縛りあげ、火あぶりの刑にする！」

ナルガモン「なに！？」

キャンドモン「うそぉぉぉぉぉぉん！？ボクチン大ピィィィィィンチ！？」

リュウギ「くっ…。」

（ミソラ、レナモン頼んだぞ…。）

リュウギはミソラ達が助けに来る事を信じるのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ３３　～カイツ島上陸！！ヒーローマニアな幼虫　ワームモン！！～（後書き）

まさかの大ピンチな展開に！？

果たしてリュウギ達の運命は！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ３４　～リュウギ達を救い出せ！！ワームモンの救出大作戦！！～（前書き）

笑いありのお話、後編！！

何とか逃げ切れたミソラ達はある行動に出る！！

Ｅｐ３４スタート！！

ＥＰ３４　～リュウギ達を救い出せ！！ワームモンの救出大作戦！！～

～カイツ島～

一方、逃げ切れたミソラ達は…。

ミソラ「ここまで来れば大丈夫ね…。」

ワームモン「アイツら、捕まっちゃったよ…。どうするんだよ？」

レナモン「聞くまでもない…。助けに行くまでだ…。」

ワームモン「でも、あんなにいたらキリがないよ！？」

ミソラ「コウジさんに知らせたいんだけど、私のＤ－アクセルじゃ連絡取れないし…。」

ミソラは腕を組んで考える。

レナモン「何とかしてリュウギ達を助けなければ…。」

レナモンも一緒になって腕を組んで考える。

ワームモン「村長はきっとアイツらを火あぶりの刑にするハズだよ！？」

レナモン「だったら急がなければ…。今からコウジに知らせても間に合わないのは一目瞭然…。」

ミソラ「火あぶりの刑だと厄介ね…。コッソリと忍び込んでリュウギ達を助けるなんて私にはできないし…。それにレナモンだって身長も高いし目立つし…。」

すると、ミソラの言葉のナイフはレナモンの胸に突き刺さる。

レナモン「う…？なんか傷付く…？」

ミソラ「ちっちゃくてすばしっこいデジモンがいたら…。」

すると、ミソラとレナモンはお互いに目を合わせ、次にワームモンを見つめる。

ワームモン「え…？まさかオラ…？」

ミソラ「リュウギ達を助けるのは、アンタしかいないわね…。」

レナモン「そうだな…。ワームモンなら私達よりこの島の事が詳しいし、体格が小さくてすばしっこい…。」

ワームモン「だ、だからってオラじゃなくても…？」

ワームモンは慌てて拒否する。すると、ミソラは小さくてため息をつき、ワームモンにある事を言う。

ミソラ「ワームモン、これってどういう状況なのか分かる？仲間が大ピンチの時こそ、ヒーローの出番なのよ！」

すると、ワームモンはピタッと止まる。

ワームモン「ヒ、ヒーロー…。」

ミソラ「そうよ！ヒーローであるあなたが逃げてどうするのよ？もっと自分に自信持ちなさいよ！ス○イダーマンみたいにカッコよくなりたいんでしょ？」

そう言われると、ワームモンは自分がリュウギ達を救った所を想像する。

ワームモン「ス○イダーマンみたいにカッコよく…。分かった！オラ、やってみるよ！」

ミソラ「よく言ったわワームモン！それでこそヒーローよ！！」

レナモン（これで大丈夫なのか…？）

少々不安を抱くレナモンであった。

ワームモン「よし！これこそアレを着る時が来た！！待ってて！」

ワームモンはそう言って草陰に入る。

ミソラ・レナモン「？」

ワームモン「お待たせ！！」

すると、草陰から出てきたのはス○イダーマンのコスチュームを着たワームモンだった。

ミソラとレナモンの目は丸くなる。

ミソラ「な、なにそれ…？」

ワームモン「なにって、ス〇イダーマンだよ♪カッコいいでしょ♪」

ス〇イダーマンのコスチュームはワームモンのサイズに合わせて上手に仕上げていた。

レナモン（まさか、自分で作ったのか…？）

ミソラ（なんて器用なデジモン…？けど…）

「それじゃかえって目立つじゃないの！」

ワームモン「えぇ～？だって～？」

ミソラ「だってじゃないッ？私がヒーローっぽいカッコをしてあげるわ！ほら、脱ぎなさい！」

ミソラはそう言って強引に脱がす。

ワームモン「え！？そんな事したらせっかくのコスチュームが…？」

ミソラ「リュウギ達の命はアンタに懸かってるんだからマジメにやりなさいッ？もっとシックな感じでいきましょう！！」

ワームモン「ちょっと待って？あ～～～れ～～～？」

そして…。

ミソラ「よし、完璧ね♪」

ワームモンは自分の姿を見ると、黒地の忍び装束と併せのほっかむりをした姿だった。

ワームモン「ねぇ、なんか違うよね…？」

ミソラ「いや、シックな感じでいいわよ。やっぱり赤よりも黒の方がしまって見えるわ。落ち着いた印象を受け、そして何故だかソワソワするってね♪」

ワームモン「それって泥棒じゃん！？明らかに泥棒じゃん！？」

レナモン（ミソラ…、さっきの事で怒ってるな…？）

ワームモン「オラ、何で悪い事してる訳でもないのに、こんなにドキドキしなきゃならないの…？」

ミソラ「いいのよそれで！それじゃ、作戦プランを教えるわ！耳を貸して…。」

ミソラは作戦をレナモンとワームモンに伝える。

ミソラ「それじゃ、作戦開始よ！！」

レナモン「わかった。」

ワームモン「ラジャー！！」

一方、リュウギ達は…。

火あぶりの刑を準備をするバロモン達。

バロモン「フフフ…。いよいよお前らの死は近いぞ？」

リュウギ達は柱に輪竹で縛られ、薪（たきぎ）の上の立たされていた。

リュウギ「クソッ…。」

キャンドモン「ボクチンまだ死にたくない～？死ぬならミソラさんの膝枕で死にたい～？」

ナルガモン「クソッ…、ミソラ達はまだかよ？」

バロモン「さぁ、火あぶりの刑の前に宴だぁぁぁぁ！！」

フローラモン達「おーーーーーう♪」

すると、バロモン達は宴を始める。

リュウギ「宴会が始まったぞ…、アイツら…？」

ナルガモン「呑気な奴らだなぁ…？」

キャンドモン「きぃぃぃぃぃぃぃぃやゃゃゃゃゃゃゃゃ！？ボクチン嫌だぁぁぁぁぁぁ？」

ナルガモン「だぁぁもう、うるせぇんだよッ？」

リュウギ（一体どうすれば…？）

「ん？」

その時、背後から気配を感じる。

？？？「みんな、助けに来たよ！」

（小声）

一同「ワームモン！？」

（小声）

ワームモン「シィ～～…。今、縄ほどくから…。」

（小声）

ナルガモン「助かったぜ♪つうか何、その格好…？コソ泥か…？」

（小声）

ワームモン「失礼なッ？これでもオラはヒーローなんだぞッ？」

（小声）

小声で怒りながら縄をほどくワームモン。

ナルガモン「ワリィ×2？」

（小声）

リュウギ「ワームモン、ミソラは…？」

（小声）

ワームモン「大丈夫、いま作戦通りだから。」

（小声）

リュウギ「作戦…？」
（小声）

ワームモン「この島は何か行う前に必ず宴が始まるんだ。だからその間にリュウギ達を助けようって事。」（小声）

ナルガモン「やるじゃねぇかワームモン！」
（小声）

ワームモン「へへッ、なんかヒーローっぽい感じになってきたよ♪」
（小声）

ワームモンはニコニコと笑いながら縄をほどく。

リュウギ「お前、自分の姿見ろよ…？コソ泥以外何者でもないぞ…？」
（小声）

リュウギは小声でツッコムと、ワームモンは突然怒り出す。

ワームモン「だからコソ泥じゃないってッ？」

バロモン「ん？誰だ、そこにいるのは！！」

すると、バロモンに感付かれてしまった。

ワームモン「しまった、気付かれた！？」

バロモン「フローラモン、そのコソ泥を捕らえろ！！」

ワームモン「だからコソ泥じゃないっつうのッ？」

ナルガモン「おい、キレるヒマがあるなら早くほどいてくれ？」

フローラモン達「『アレルギー…』」

ミソラ「今よ、キュウビモン！！」

すると、上空から火の玉が降り注ぐ。

フローラモン達「うわぁぁぁぁぁ！？」

すると、上空からキュウビモンが現れる。キュウビモンの背中にはミソラが乗っていた。

キュウビモン「みんな、無事か？」

ミソラ「助けに来たわよ！」

リュウギ・ナルガモン「ミソラ、キュウビモン！！」

キャンドモン「愛しのマドモワゼル達よ、ボクチンを助けに来たのね！！逢いたかったわミソラさーん！！」

ミソラ「ワームモン、そのヘンタイロウソクはそのまま放置ね…？後で火あぶりの刑にするから…？」

ワームモン「ラジャー！」

キャンドモン「ウソウソウソぴょん！？冗談って分かってますよね

ミソラさん!?」

その間にワームモンはリュウギとナルガモンの縄をほどいた。

リュウギ「よし、サンキューなワームモン!」

ナルガモン「よくもオレ達を火あぶりの刑にしようとしやがったなテメェッ?」

キャンドモン「ちょっとぉぉぉぉぉ!?ボクチンはぁぁぁぁぁぁ!?」↑放置

ワームモン「うるさいから黙っててくれない…?」

ミソラ「あら、分かってるじゃないのワームモン♪」

キャンドモン「なにそのコンビ結成みたいな空気!?解りましたからどうかボクチンをほどいてくたさぁぁぁぁい!?」

バロモン「ぐぬぬ…、こうなったら纏めて地獄に送ってやる!!」

ナルガモン「その台詞、そっくりそのまま返してやるぜ!!」

ミソラ「さぁ、覚悟なさい!!」

キャンドモン「おい聞け話をーーーーッ!?」

リュウギとミソラはD－アクセルをナルガモンとキュウビモンに翳した。すると、ナルガモンとキュウビモンのデータは上書きされ、姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、超進化！！」

『ドラグナモン！！』

キュウビモン「キュウビモン、超進化！！」

『タオモン！！』

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

リュウギ「行くぞ、みんな！！」

一同「おう！！」

ドラグナモン「『ヒドゥンセイバー！！』」

ドラグナモンは両腕の鋭い刃、ヒドゥンアサルトで次々と敵を切り刻んでいく。

フローラモン達「うわぁぁぁぁぁ！？」

すると、フローラモン達の体内からイビルスが現れる。

タオモン「逃がさん！！『狐封札！！』」

タオモンは逃げ惑うイビルス達に霊符を張り付けて爆発させる。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そしてリュウギもアルカナムでイビルス達を次々と切り刻んでいく。

イビルス達「ギィィィィィィィィィ!?」

ワームモン「スゴい…!?」

バロモン「そんなバカな…!?全滅だと…!?」

リュウギ「さぁ、残りはお前だけだ…。」

ドラグナモン「今の内に降参するなら見逃してやるぜ!」

バロモン「ふざけるなッ!!見せてやる、真の闇の力を!!はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

すると、バロモンの身体から闇のオーラが溢れ出す。

ミソラ「闇の力が溢れ出てるわ!?」

バロモン「くたばれ!!『メテオダンス!!』」

バロモンは両手を上げると、上空から巨大な隕石群が降り注ぐ。

キャンドモン「きぃぃぃぃぃぃぃぃぃやゃゃゃゃゃゃゃゃ!?あんなの喰らったらマジで死んじゃうって!?」

ドラグナモン「だったら喰らわなきゃいいんだろ?」

すると、ドラグナモンは背中に背負うロケットエンジンを上空へと打ち上げた。すると、ロケットエンジンに仕込まれた大量の追尾型

ミサイルを一斉に発射される。大量の追尾型ミサイルは巨大な隕石群に向かっていく。

ドラグナモン「消え失せろ!!」

ドラグナモンは両胸の砲門から漆黒のミサイルを巨大な隕石群に目掛けて発射する。

ドラグナモン「『デッドリーアートルム!!』」

すると、全てのミサイルは隕石群に直撃し、全て消滅させた。

バロモン「なに!?」

タオモン「これで終わりだ!!」

タオモンは巨大な筆で呪文を唱えながら梵字を空中に描き、バロモンに飛ばす。

タオモン「『梵・筆・閃(ぼん・ひつ・せん)!!』」

すると、梵筆閃を受けたバロモンは大爆発を起こした。

バロモン「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

バロモンは力尽きて倒れると、体内からイビルガが現れる。

イビルガ「クソッ、覚えてろ!!」

ワームモン「逃がさない!『ネバネバネット!!』」

ワームモンは口から粘着力の強い網状の糸を吐出しイビルガを捕まえた。

イビルガ「なに!?」

ミソラ「よくやったわワームモン!!」

ワームモン「これもヒーローの仕事だからね…。」

（フッ…）

キャンドモン「あのぅ、カッコよく言ってますけど、あなたは今、コソ泥ですよ～?」

ワームモン「だからコソ泥じゃないっての?」

イビルガ「こんなもの、すぐに…。」

イビルガはネバネバネットをちぎろうとする。

すると、リュウギはアルカナムを構えてイビルガを追撃する。

リュウギ「これで決める!!」

リュウギはアルカナムでイビルガを一刀両断にした。

イビルガ「ギャャャャャャャャャャ!?」

イビルガは跡形もなく消滅した。

ミソラ「やったわ！！」

ドラグナモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

そして…。

イビルガ達に支配された島の住民達をリカバリーし、そしてデジエクスフィールドを展開してカイツ島を包んだ。

すると、マップに映る黒いマークが白へと変わった。

リュウギ「これでもうカイツ島は大丈夫だな…。」

ワームモン「ありがとうミソラ！何かお礼させてよ！」

ミソラ「それじゃ、デジタルワールドを救うために力を貸してよ！」

ワームモン「ラジャー！」

ミソラはＤ－アクセルをワームモンに翳した。

ミソラ「コントラクト、ワームモン！」

すると、ワームモンの身体から緑のオーラが纏う。

ミソラ「コントラクト完了！」

すると、リュウギのＤ－アクセルから通信が入る。

コウジ『リュウギ君、イビルス達を退治したかい？』

リュウギ「あぁ…。情報は？」

コウジ『残念だが収穫はなしだ…。デジシップで待ってるよ。』

リュウギ「あぁ、すぐに行く。」

リュウギはそう言って通信を切った。

リュウギ「さて、そろそろ行くか…。」

ワームモン「ミソラ、必要になったらオラを呼んでよ！」

ミソラ「分かったわ。」

ナナモン「じゃあな！」

リュウギ達はカイツ島の住民達と別れを告げ、デジシップへと向かった。

～デジシップ～

レオルモン「よっ、お帰り！」

コウジ「ご苦労様。」

コウジ達はリュウギの帰りを待っていた。

リュウギ「この島はもう大丈夫だ。早く次の島に行こう。」

博士「それじゃ、デジシップに乗るだギャ！！」

リュウギ達はデジシップに乗り、アグモン博士は操縦する。

博士「準備はいいだギャか？」

リュウギ「ふと思ったんだけど、何か忘れているような…？」

レオルモン「忘れ物か？」

ポコモン「確かに言われてみれば…。」

ミソラ「そうかしら…？」

ナナモン「気のせいだって♪早く行こうぜ♪」

リュウギ「いや待て…。ホントに何か忘れてるぞ…？気のせいなんかじゃない…？」

リュウギ達は腕を組んで考える。

レオルモン「あれ？あのやかましい奴は…？」

すると、リュウギ達はピタッと止まる。

一同「あ……？」

～カイツ島～

一方、キャンドモンはまだ柱に輪竹で縛られ、薪（たきぎ）の上の立たされていた。

ワームモン「ありゃ？アンタまだいたの？」

キャンドモン「いつかグレてやる…（泣）」

置き去りにされたキャンドモンは眉をピクピクと動かしながら号泣していた。

後に、リュウギ達は忘れ物を取りに戻り、何とかキャンドモンを置き去りにせず、デジシップに乗せる。

～デジシップ～

キャンドモン「コルァァァァァァァァッ？なに肝心なボクチンを忘れとんじゃワレェッ？さてはボクチンを差し置いて、愛しいマドモワゼル達にあ～んな事したりこ～んな事するつもりだったんだろこのエロ共がぁぁぁぁぁぁぁッ？」

リュウギ「す、すまないな…？」

ナナモン「ワリィ×2♪」

キャンドモン「ナナモン、謝る気ないでしょ…？」

ポコモン「すまない…？」

ミソラ「惜しい…。」

（ボソッ…）

キャンドモン「ミソラさん!?今ものごっつい不吉な事言いませんでしたかッ!?」

とまぁ、めでたし×2…？

キャンドモン「ちっともめでたくねぇんだＹＯッ？」

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ３４　～リュウギ達を救い出せ！！ワームモンの救出大作戦！！～（後書き）

～デジシップ～

リュウギ「博士、次の島は一体何処なんだ？」

博士「彼処だギャ！！」

リュウギ達は窓から覗くと、スレッド大陸と同じくらいの島だった。
島の中央には巨大な山がそびえていた。

ミソラ「大きい山ね…。」

レナモン「あれはムゲンマウンテン…。博士、つまり…」

博士「そうだギャ！！次の島はファイル島だギャ！！」

リュウギ「！？」

次回はついにファイル島に到着！！

こうして、リュウギ達の新たなる冒険の幕が上がる！！

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ３５　～ファイル島到着！！冒険の幕開け　はじまりの街～（前書き）

ついにファイル島に到着！！

果たして、リュウギ達に待ち受けていたものとは！？

Ｅｐ３５スタート！！

EP35　～ファイル島到着！！冒険の幕開け　はじまりの街～

～ファイル島～

デジシップはファイル島に上陸すると、リュウギ達はデジシップから降りる。

ミソラ「やっと着いたわ！」

ミソラはそう言って背筋を思いっきり伸ばす。

リュウギ「……。」

リュウギはファイル島の中央にそびえているムゲンマウンテンをジッと見つめる。

コウジ「どうしたんだいリュウギ君？」

リュウギ「あ、いや別に…。」

リュウギはふと思った。ここで大輔達と出逢った島だと。

レナモン「妙だ…。人気（ひとけ）が全くない…。」

キャンドモン「そうですねぇ～。まさか、ここはもう大丈夫だったりして♪」

フワフワと浮かぶキャンドモンは冗談気に笑う。

リュウギ「だと良いけどな…。」

リュウギはＤ－アクセルでマップを見ると、ファイル島は黒いマークが印されていた。

リュウギ「やっぱり、ここもイビルスに支配されているか…。」

ミソラ「何だか喉が渇いたわ…。博士、デジシップにまだ水残ってる？」

博士「待つだギャミソラ！彼処に自動販売機があるだギャ！」

博士は指を差すと、自動販売機が置いてあった。

ミソラ「本当だわ！ラッキー♪」

ミソラは自動販売機へと駆け付け、どれか選ぶ。

ミソラ「コーラがあるわ♪久しぶりに飲むのよねぇ…。」

ミソラはルンルン気分にコーラを選んだその時だった。

コウジ「僕らは、この島の事を調べるよ。君達は引き続きイビルスの退治を…」

ミソラ「いやゃゃゃゃゃゃゃ！？」

突然、ミソラの悲鳴が聞こえてくる。

一同「！？」

リュウギ「どうしたんだミソラ！？」

レナモン「まさか、イビルス！？」

リュウギ達は振り向くと、ミソラはヌメモンの大群に囲まれていた。

ミソラ「なんなのよ～？」

一同「……？」

レオルモン「なんだヌメモンかよ…？人騒がせな奴だなぁ…？」

ミソラ「そんな事言ってないで早く助けてよ～？」

キャンドモン「分かりましたミソラさん！！ボクチンが今すぐ助けにいきまーッす！！」

キャンドモンは猛スピードでミソラに接近する。

キャンドモン「ミソラさーーーん♪」

ミソラはグーでキャンドモンを殴ると、キャンドモンの顔面がめり込む。

キャンドモン「ふぎっ！？」

ミソラ「アンタに助けを求めた覚えはないわよ…？」

一同（酷ッ…？）

その光景を目にしたヌメモンの大群はミソラから数メートル離れた。

ミソラ「あら、なんだかよく分からないけど助かったわ…。」

リュウギ（いや、それアンタの威圧だから…？）

リュウギはツッコもうとするがあえて心の中でツッコム。

コウジ「どうやら、このヌメモン達はイビルスに支配されてないみたいだね…。」

ヌメモンA「アンタら、まさかこの島に用があるのか？」

リュウギ「あ、あぁ…。」

ヌメモンB「悪い事は言わねぇ、やめておいた方がいいべ…。」

ナルガモン「何でだよ？」

ヌメモンC「突如、あのムゲンマウンテンから大量のイビルスが現れて、このファイル島に住むデジモン達はみんなイビルスに支配されたんだ…。」

コウジ「ムゲンマウンテンからだって！？」

ヌメモンB「オイラ達はイビルスに支配されないように、ずっと自動販売機で隠れていたんだべ…。」

レナモン「他に生き残りはいないのか…？」

ヌメモンD「それはどうかわからないが、取り合えず『はじまりの街』に行ってみればどうだ？」

リュウギ「そのはじまりの街へ行くにはどうやって行けばいいんだ…？」

ヌメモンB「ここから北東に行けば着けるハズだべ！」

ナルガモン「分かった。ありがとな。」

コウジ「それじゃ、僕らはこの島に四聖獣がいるかどうか調べてくるよ。」

リュウギ「分かった。」

コウジはそう言ってレオルモンと一緒にファイル島の調査へと向かった。

ミソラ「それじゃ、私達も行きましょ！」

ヌメモンA「なぁ、アンタらは一体…？」

リュウギ「俺達はデジタルワールドを救うためにやってきたブレイブエクセリオンだ…。」

リュウギはそう言って北東にあるはじまりの街へと向かった。

～迷わずの森～

広がる広大な森へと入るリュウギ達。すると、看板には『迷わずの森』と書いてあった。

リュウギ「『迷わずの森』かぁ…。」

ミソラ「みて、地面に文字が書いてあるわ！」

リュウギ達は地面を見ると、『?デジモンタウン』と書いてあった。

ナルガモン「親切に書いてあるぜ?」

レナモン「その名の通り、迷うことがないほどの簡単な森なんだな…。」

キャンドモン「これならすぐにそのはじまりの街に着きますね♪」

するとその時、リュウギ達の前に数体のデジモンが現れた。

???「グォォォォォォォォ！！」

キャンドモン「で、出たぁぁぁぁぁぁぁぁ！?」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「デルタモン、成熟期、合成型、ウィルス種、必殺技はトリプレックスフォース。
ガジモン、成長期、哺乳類型、ウィルス種、必殺技パラライズブレス。」

ナルガモン「来やがったな！」

レナモン「ミソラ、下がってて…。」

ナルガモンとレナモンは戦う体勢に入る。

キャンドモン「早くやっちゃって下さい？」

キャンドモンはそう言ってミソラの背後に隠れる。

ミソラ「アンタもデジモンなんだから行きなさいよ…？」

ミソラは肘鉄でキャンドモンを地面に叩き付けた。

キャンドモン「ぐえっ！？」

リュウギ「奴らは恐らく、イビルスに支配されているな…。早く助けなきゃな…。」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

リュウギ「行くぞ！」

ナルガモン「ＯＫ！！」

ミソラ「行くわよレナモン！」

レナモン「あぁ！」

リュウギとミソラはＤ－アクセルをナルガモンとレナモンに翳した。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

レナモン「レナモン、進化！！」

『キュウビモン！！』

デルタモン「『トリプレックスフォース！！』」

デルタモンは３つの口から出るエネルギーを合わせて発射する。

リュウギとソニックドラモンは素早く交わす。

ソニックドラモン「ＣＯＯＬに反撃だぜ！！『アートルムバースト！！』」

ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、口から漆黒に包まれた灼熱の炎を吐いた。

デルタモン「グォォォォォォォォ！？」

一方、キュウビモンは尾の先に集めた炎をいっせいに放つ。

キュウビモン「『鬼火玉！！』」

ガジモン達「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ガジモン達は力尽きて倒れ、体内からイビルスが現れる。

キュウビモン「逃がさん！『鬼火玉！！』」

キュウビモンはもう一度、尾の先に集めた炎をいっせいに放ち、イビルス達を消滅させる。

イビルス達「ギィィィィィィィィ！！」

すると、背後からまだ支配されていたガジモンがキュウビモンに襲う。

キュウビモン「しまった！？」

ミソラ「はぁぁぁぁぁぁぁ！！」

すると、ミソラは回し蹴りでガジモンを蹴り飛ばした。

すると、ガジモンの体内からイビルスが現れる。

キュウビモンは目にも止まらない早さでイビルスを噛み砕いた。

イビルス「ギィィィィィィィィ！？」

キュウビモン「すまない、ミソラ。」

ミソラ「あら、私だって戦えるんだから♪それに比べてあの臆病者は…？」

キャンドモン「いいですよみなさーん？」↑臆病者

臆病者は木陰に隠れて応援していた。

一方、リュウギとソニックドラモンは…。

ソニックドラモン「へへッ、どうだぁ？」

すると、デルタモンは灼熱の炎を切り開き、左腕の口でソニックドラモンを捕まえる。

ソニックドラモン「なに！？」

デルタモン「『スカルファング！！』」

捕らえた口を徐々に力を入れてソニックドラモンを苦しめる。

ソニックドラモン「うわぁぁぁぁぁぁ！？」

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁ！！」

リュウギはアルカナムで左腕を切り刻む。

デルタモン「グォォォォォォォォ！？」

すると、捕らわれたソニックドラモンは解放された。

ソニックドラモン「よくもやりやがったなッ？『ヒドゥンスラッシュ！！』」

ソニックドラモンは両肘の鋭いブレイドを構えると、ブレイドから漆黒の炎に包まれ、デルタモンを切り刻んだ。

デルタモン「グォォォォォォォォ！？」

デルタモンは力尽きて倒れると、体内からイビルスが現れる。

リュウギ「逃がすか！！」

リュウギはアルカナムで銃撃するとイビルスに直撃し、やがて消滅する。

イビルス「ギィィィィィィィィ！？」

リュウギ「よしっ！」

ソニックドラモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

戦闘を終えると、ソニックドラモンとキュウビモンは成長期へと退化した。

リュウギ「さて、リカバリーするか…。」

ミソラ「そうね！」

リュウギとミソラはＤ－アクセルでリカバリー機能を使い、デルタモン達の傷を癒した。

リュウギ「リカバリー完了。」

すると、Ｄ－アクセルからデジエクスフィールドが展開され、迷わずの森に結界が張られた。

リュウギ「これで迷わずの森は大丈夫だな…。」

デルタモン「助けてくれてありがとな…。」

ガジモン達「ありがとうございます！」

ミソラ「困った時は御互い様よ♪」

デルタモン「それにしても、お前らは何をしにファイル島に来たんだ？」

リュウギ「俺達はデジタルワールドにいるイビルス達を倒すために来たエクセリオンだ。」

デルタモン「そうなのか…。」

すると、デルタモン達はうつ向く。

ミソラ「どうしたのよ？」

ガジモンA「悪い事は言わねぇ、やめといたいいぞ…。」

リュウギ「？」

（さっきヌメモンと同じ事言ってたなぁ…。）

ナルガモン「心配すんなって！この最強の中の最強と呼ばれたオレが来たからにはもう安心だぜ♪ナッハハハ♪」

ミソラ「また始まったわ…？」

ガジモンB「早くこのファイル島から離れた方が身のためだぞ…。」

リュウギ「そいつは御断りだ…。何せ敵に背を向けるのは俺の流儀に反するからな！」

ミソラ「こっちも始まったわ…？」

リュウギとナルガモンのいつもの癖でミソラは呆れてため息をつく。

レナモン「ま、それがあの2人の良い所だ…。」

レナモンはそう言って小さく笑う。

リュウギ「それに、ここで諦めたら、未来は切り開かねぇからな…。俺達を信じろよ…。」

すると、リュウギの言葉にデルタモン達は少し希望を持った。

デルタモン「そうか…。そこまで言うのなら、お前らを信じてみるよ…。」

リュウギ「あぁ、任せろ。」

ミソラ「それじゃ、早くはじまりの町に行きましょ！」

ナルガモン「…だな♪お前らも気を付けろよ！」

デルタモン「あぁ、頑張れよ！」

リュウギ達はデルタモン達と別れを告げ、はじまりの街へと向かった。

～はじまりの街～

ファイル島の中心部、ムゲンマウンテンのふもとにある小さな街。

リュウギ「ここがはじまりの街かぁ…。」

リュウギ達は周りを見渡すと、様々な店があるが、全く人の気配はなかった。

ナルガモン「誰もいねぇみたいだな…。」

レナモン「恐らく、イビルスに衝撃されたのだろう…。」

？？？「その通りじゃ…。」

すると、古びた家からデジモンが現れる。

リュウギ・ミソラ「ジジモン！？」

ナルガモン「ジジイ！？」

そう、古びた家から出てきたのは、ジジモンだった。

ジジモン「ようこそ、ファイル島へ…。ワシがこのはじまりの街の長、ジジモンじゃ…。」

ナルガモン「ジジイ、何でこんな所にいるんだよ！？」

すると、ジジモンは杖でナルガモンの頭を叩いた。

ナルガモン「いだっ！？」

ジジモン「初対面の相手にジジイとは、無礼なデジモンじゃ…？」

リュウギ「初対面だって？スレッド大陸で会ったじゃないか？」

ジジモン「スレッド大陸じゃと？まさかお主、弟を知っておるのか？」

リュウギ「弟！？それじゃ…」

ジジモン「いかにも、ワシはスレッド大陸にいりジジモンの兄のジジモンじゃ！その証拠にホレ、右足の裏にホクロがあるじゃろ？弟は左足の裏にあるんじゃ。」

ミソラ「知らないわよ？っていうかややこしいし？」

リュウギ「ジジモン、他のデジモン達はイビルスに支配されたのか…？」

ジジモン「そうじゃ…。ワシの力で何とか結界を張り、ワシだけ支配されずに済んだのじゃが…。ファイル島全体がイビルスに支配されたのじゃ…。」

ミソラ「ヌメモンから聞いたんだけど、あのムゲンマウンテンからイビルスが出てきたって本当？」

ジジモン「左様…。何せイビルス達が生まれたのは、このファイル島じゃからな…。」

一同「!?」

リュウギ「そうか…。だからみんなは、あんな事言ってたのか…。」

ミソラ「つまり、あのムゲンマウンテンでイビルスを作ってる工場みたいな所って事なの?」

ジジモン「そうじゃ…。」

ナルガモン「だったら、滅茶滅茶にしてやろうぜ!!ジジイ、ムゲンマウンテンの入り口は何処だ?」

ジジモン「アレじゃ。」

ジジモンは杖で差すと、目の前に入り口があった。

一同「近ッ!?」

ジジモン「あれがムゲンマウンテンの入り口じゃ…。」

ナルガモン「よっしゃ!!殴り込みだぜ!!」

ジジモン「待つのじゃ、それは…?」

ナルガモンは全く聞く耳を持たずムゲンマウンテンの入り口に向かって突進する。

ナルガモン「うぉぉぉぉぉ……ぐえっ！？」

すると、ナルガモンはムゲンマウンテンの入り口に激突した。

リュウギ「んな！？壁なんて何処にもないのに…！？」

ジジモン「ムゲンマウンテンには闇の結界が張られているのじゃ…。だからそう簡単に入る事ができないのじゃ…。」

すると、結界に激突したナルガモンはバッタリと倒れた。

ナルガモン「そ、それを先に言えよ…？」

レナモン「では、どうすればムゲンマウンテンの中に入る事ができるのだ…？」

ジジモン「ムゲンマウンテンの結界は7つの闇の柱によって支えられておる…。その7つの闇の柱を壊せばムゲンマウンテンの結界は破られる…。」

リュウギ「よし、早速その柱を壊しに行こう。」

すると、ジジモンはリュウギ達を呼び止める。

ジジモン「待つのじゃ。お主ら、エクセリオンじゃな？」

リュウギ「なんでそれを…？」

ジジモン「お主らの腕に装着しているＤ－アクセルを見れば分かるわい…。この間、青髪をした1人のエクセリオンがこの街に尋ねて

来てのぅ…。」

一同「!?」

リュウギ「カイもこの島に来ていたのか!?」

ジジモン「7つの闇の柱を聞いたとたん、何も言わずにすぐに何処かへと行ってしまったんじゃ…。全く、無礼なエクセリオンじゃわい…。」

ナルガモン「あの野郎…、一体何をするつもりなんだ…?」

リュウギ「アイツがどう考えようが、アイツと俺達の目的は同じだ。よし、早く7つの闇の柱を壊しに行こう。」

ミソラ「そうね!」

キャンドモン「ボ、ボクチンはやめといた方がいいかなぁ〜って言うかそんな感じみたいなぁ〜。アハハハ〜?」

体を震わせながら愛想笑いするキャンドモン。

ミソラ「あっそ…。だったらアンタは一生そこにいてなさい…?」

キャンドモン「冗談ですよミソラさん?ボクチンも一緒にオトモしますよ?」

ナルガモン「オトモと言うよりか、オジャマとしか言いようがないけどな…。」

キャンドモン「いやだなぁ～？ボクチンだって戦えるんですよ？」

キャンドモンの体はかなり震えていた。

ミソラ「アンタ、かなり震えてるわよ…？それにさっきの戦い、思いっきり逃げてたじゃないの…？」

ミソラは小さくツッコム。

ジジモン「闇の柱を壊しに行くのもいいんじゃが、その前にお主ら疲れているじゃろ？きっとこの先は酷しい戦いになるハズじゃ。ワシの家でひと休みしたらどうじゃ？」

ナルガモン「確かにそうだな…。それに腹減ってるしな。」

（ギュルルル～…）

リュウギ「腹が減っては戦はできないってよく言うしな…。それじゃ、頼むよジジモン。」

ミソラ「お言葉に甘えてお願いするわ！」

ジジモン「よかろう。それじゃ、中へ入りなさい…。」

リュウギ達はしばらくの間、ジジモンの家で休息するのであった。

一方、カイは…。

～マングローブ域～

マッハガオガモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

マッハガオガモンは目に止まらない早さでイビルスに支配されたデジモンを薙ぎ倒した。

すると、デジモンは気絶し、体内からイビルスが現れる。

カイ「フン…。」

カイは巨大手裏剣、ギルガメッシュを投げ付けてイビルスを真っ二つに切った。

イビルス「ギィィィィィィィィィ!?」

カイ「これで全滅だな…。」

すると、カイのD－アクセルから自動的にデジエクスフィールドが展開され、マングローブに結界が張られた。

マッハガオガモンはガオモンへと退化した。

ガオモン「どうやらここではなさそうですね…。」

カイ「7つの闇の柱か…。一体何処にあるんだ…?」

???「随分とお困りのようだな…。」

すると、カイ達の前に左目に傷を持った男、エグザが現れた。

カイ「エグザ!?」

エグザ「よぅ…。」

ガオモン「何故お前がここに!?」

エグザ「ちょっとした探索だ…。悪いか…?」

カイ「俺に何の用だ…?」

エグザ「1つアドバイスしてやる…。ここから北にあるダイノ古代境に怪しい柱がある…。」

カイ「!?」

ガオモン「まさか、闇の柱か!?」

カイ「何故俺に教える…?アンタが壊せば済む話じゃないのか…?」

エグザ「言ったろ?ちょっとした探索だってな…。じゃ、俺は忙しいから失礼するわ…。」

エグザはそう言って背中を向けて歩き出した。

カイ「待てエグザ!!」

すると、エグザは振り向きもせずに口を開く。

エグザ「警告という名のアドバイスだ…。あまりファイル島を彷徨くな…。命が惜しければな…。」

カイ・ガオモン「!?」

エグザ「じゃあな…。」

エグザはそう言い残して去って行った。

ガオモン「どうしますか、カイ…？」

カイ「命が惜しければだと…？嘗めた事を…。」

カイの目付きは怒りの目付きへと変わり、劣等感が溢れ出す。

カイ「そうか…。コロシアムの戦いで御縞　リュウギに負けたからあんな事が言えるのか…。」

ガオモン「それは違います…。エグザはきっと、カイの事が…」

カイ「心配してるとでも言うのか…？俺はいずれ最強のテイマーになるんだ…。同情なんていらない…。」

カイはギロリと睨むと、ガオモンは冷静に詫びを入れる。

ガオモン「そうでしたね…。どうか御許しを…。」

カイ「こんな所で無駄話してる時間はない…。急ぐぞ…。」

ガオモン「はい。全ては我が主のために…。」

ガオモンはお辞儀をし、カイと共にダイノ古代境へと向かうのであった。

—To Be Continued….

ＥＰ３５　～ファイル島到着！！冒険の幕開け　はじまりの街～（後書き）

次回はファイル島を巡り、７つの闇の柱を壊す冒険が始まる！！

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ３６　～ドリルトンネルでの戦い！鋼の大地　ディグモン！！～（前書き）

リュウギ達の新たなる冒険が始まる！！

Ｅｐ３６スタート！！

EP36　～ドリルトンネルでの戦い！鋼の大地　ディグモン！！～

～はじまりの街～

ナルガモン「いやぁ～、食った×2♪流石デジタケだな♪」↑大量に平らげた

リュウギ「まさか、この島にもデジタケが生えていたなんて…？」↑そこそこ食べた

キャンドモン「う～…。」↑ナルガモンに取られたため、少ししか食べていない

レナモン「……？」↑あまり食べていない

ミソラ「エクレアが食べた～い…？」↑一口も食べたいない

ジジモン「ホッホッホ♪お主ら、十分休んだようじゃの。」

リュウギ「ありがとなジジモン。ところで、闇の柱について何か情報はないか？」

ジジモン「すまぬがワシには分からぬ…。イビルスに支配されたデジモン達を助けて、情報を探るしか方法はないのぅ…。」

リュウギ「分かった。世話になったな。」

ジジモン「ではエクセリオンの諸君、健闘を祈る…。」

リュウギ達はジジモンと別れを告げ、迷わずの森へと向かった。

～迷わずの森～

ナルガモン「さて、何処から探すんだ？」

レナモン「ファイル島の広さはスレッド大陸並みの広さだ…。」

ミソラ「ジジモンの言うように、デジモン達を助けて情報を聞くしかないのかしら…？」

リュウギ「そうだな…。」

リュウギは腕を組んで頷く。

キャンドモン「あれれ～？地面に何か書いてありますよ？」

リュウギ達は地面を見ると、『？ミハラシヤマ』と書いあり、次に『？ドリルトンネル』と書いてあった。

ナルガモン「親切なこった…？」

リュウギ「『ミハラシ山』か…。でも…」

リュウギ達はミハラシ山を見ると、岩山のせいで道が塞がれていた。

ミソラ「塞がれて通れないわね…。」

レナモン「『ドリルトンネル』だな…。」

ナルガモン「そうだな！早いとこ行こうぜ♪」

ナルガモンは先頭に立って南西にあるドリルトンネルへと向かった。

～ドリルトンネル　入り口～

リュウギ達は見上げると、看板に大きく『ドリルトンネル』と書いてあった。

ナルガモン「ここがそうみたいだな…。」

リュウギ「みんな、気を付けろよ…。」

リュウギ達は警戒しながらドリルトンネルの中へと入っていった。

～ドリルトンネル～

中に入ると、自然に形成された土木構造物であり、鉱物の採掘跡があちらこちらに残っていた。

リュウギ「よく掘れてるなぁ…。」

ミソラ「誰もいなさそうだね…？」

するとその時、微かだがドリルの音が聞こえてくる。

レナモン「いや、誰かいる…。」

ナルガモン「あっちだな！」

ナルガモンはそう言って勝手に走り出した。

リュウギ「おい、ナルガモン！？」

ミソラ「ホンットに自己チューなんだから…？」

キャンドモン「あーいうデジモンはホント迷惑ですねぇミソラさ～ん、アハハハ♪」

キャンドモンは冗談気に笑うと、ミソラの肘鉄が飛んできて顔面に直撃する。

キャンドモン「ふぎっ！？」

ミソラ「アンタの方がもっと迷惑よ…？」

リュウギ「とにかく追いかけるぞ！」

リュウギ達はナルガモンの後を追う。

一方、ナルガモンは…。

（ガガガガガガ…）

ドリルの音が段々と聞こえてくる。誰かいる事を確信したナルガモンは声を掛ける。

ナルガモン「おい！そこに誰かいるのか？」

すると、ドリルの音が止まった。

ナルガモン「そこにいるのか？出てこいよ！」

しかし、返事が返ってこない。

ナルガモン「オレは別に怪しい奴じゃねぇからよ！出てこいよ！」

（シ～～～～～～ン…）

それでも返事が返って来ない。

ナルガモン「よし分かった！だったらこうしよう！オレが今から質問するからＹＥＳだったらドリルを１回鳴らしてくれ！ＮＯだったらドリルを２回鳴らして！いいな？」

すると…。

（ガガガ！）

ドリルの音で返事が返ってきた。

ナルガモン「よし！お前、オレが何者か知りたいだろ？」

（ガガガ！）

ナルガモン「聞いて驚くなよ？オレは最強と呼ばれるデジモンの中のデジモン、ナルガモンだぜ♪ナッハハハ♪」

？？？「……？」

ナルガモン「何でノーリアクションなんだよ?まさか、疑ってるのか?」

（ガガガ！）

答えはＹＥＳだった。

ナルガモン「んじゃ、次の質問だ！お前はイビルスに支配されてるのか?」

（ガガ、ガガ！）

答えはＮＯだった。

ナルガモン「だったら心配ないな！オレもイビルスに支配されてねぇんだよ！」

（シ～～～～～～ン…）

ナルガモン「ん?まさか疑ってるのか?」

（ガガガ！）

ナルガモン「嘘じゃねぇって！マジなんだって！よーし、だったらこれでどうだ?デジタケ好きか?」

すると背後からミソラの蹴りが飛んでくる。

ナルガモン「ふぎっ！?」

ミソラ「なに訳の分からない事聞いてんのよアンタはッ？」

（ガガガ！）

ミソラ「って、アンタもいちいち答えんでいいわよッ？」

ナルガモン「いってなぁ…、なにすんだよいきなりッ？」

ミソラ「アンタってホントに自己チューなんだからッ？自覚してんのッ？」

ナルガモン「だってよぅ、考える前にまず行動だろ？それに慎重なんてオレには合わねぇし！」

ミソラ「合うとか合わないとか、そういう問題じゃないわよッ？」

リュウギ「あ、あのなぁ…？」

リュウギは呆れて深くため息をつく。

キャンドモン「ところでナルガモン、一体誰とトークしてたんですかぁ？」

ナルガモン「あそこに誰かいるんだけどなぁ、ちっとも出てこねぇんだよ！」

キャンドモン「余程の恥ずかしがり屋なんですねぇ～。ならば、ボクチンにお任せを！」

ナルガモン「おっ！？やけに珍しいなキャンドモン！？」

キャンドモン「珍しいは余計ですッ？」

キャンドモンは一度咳払いをし、ある質問をする。

キャンドモン「オッホン、アンタに聞いておきたいんだけど、ミソラさんみたいなピチピチタイプはお好きですか？」

すると、背後からミソラの拳が飛んできた。

ミソラ「なに聞いてんのよこのヘンタイロウソクがぁぁぁぁぁぁぁッ？」

殴り飛ばされたキャンドモンは壁に激しく叩き付かれた。

キャンドモン「ぶべらッ！？」

リュウギ「そんな事だと思ったぜ…？」

（ガガ、ガガ！）

答えはＮＯだった。

リュウギ「って、わざわざ答えなくてもいいから？」

リュウギはツッコンだ。

リュウギ「これじゃ、キリがないなぁ…？話をしたいんだ。出てきてくれないか？」

リュウギはこれ以上任せられないと思い、説得をする。

（ガガ、ガガ！）

答えはＮＯだった。

リュウギ「大丈夫だ。出てきても襲ったりはしない。約束する。」

すると、ドリルではなく言葉が返ってきた。

???「……ホントに？」

リュウギ「あぁ…。約束は死んでも守る。それが俺の流儀だからな…。」

???「……分かった。」

すると、岩陰から姿を現す。

ミソラ「あれは…？」

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ディグモン、アーマー体、昆虫型、ワクチン種、必殺技はゴールドラッシュ。」

リュウギ「俺は御縞　リュウギだ。よろしくな。」

ディグモン「ボク、ディグモン。よろしく。」

ナルガモン「リュウギが出来てなんでオレは出来ないんだ…。くっ

…。」

ナルガモンは情けなさを感じたのか、1人で悔やむ。

ミソラ「『くっ…。』じゃないわよッ?全く説得力ナシだったじゃないッ?」

キャンドモン「ボクチンもそう…」

ミソラ「アンタは論外…?」

キャンドモンが言う前にミソラがバッサリと話を両断した。

キャンドモン「そんな~…(泣)」

レナモン「……?」

レナモンは呆れて深くため息をつくのであった。

ディグモン「ねぇ、君達は本当にイビルスに操られてないの?」

リュウギ「心配するな。俺達はイビルスを退治するためにやってきたエクセリオンだ。」

ディグモン「ホントに!?ごめん、君達を疑って…。」

リュウギ「気にするなよ…。それより、この辺に黒い柱を見なかったか?」

ディグモン「黒い柱…?確か『ギアサバンナ』で見たような…?」

ミソラ「ギアサバンナ？それって何処にあるの？」

ディグモン「このドリルトンネルを抜けたらミハラシ山だけど、それを更に奥に行けばギアサバンナに辿り着けるよ！でも…」

レナモン「何か合ったのか…？」

ディグモン「ボクの仲間がイビルスに支配されて、ミハラシ山に繋がる道が塞いじゃったんだ…。だからボクはこうして新たにトンネルを掘ってるんだ。」

ナルガモン「だったらオレ達の出番だな♪」

リュウギ「ここで引き返すのは俺の流儀に反する。お前の仲間は俺達が何とかしてやる！」

ディグモン「ありがとう！」

レナモン「それで、イビルスに操られた仲間は何処にいるのだ…？」

ディグモン「地下通路にいます！でも、地下通路には強力なデジモンがボクの仲間を指示しています。くれぐれも気を付けてください…。」

リュウギ「分かった。地下通路に行くぞ。」

リュウギ達はディグモンの仲間を助けに行くため、ドリルトンネルの地下通路へと向かった。

ディグモン（大丈夫かなぁ…？）

～ドリルトンネル　地下通路～

地下通路へと続く階段を降り、リュウギ達は奥へと進む。

ミソラ「何だか暑くなってきたわ…？」

キャンドモン「ホントですねぇ…？このままだと、ボクチン溶けちゃいます…？」

ミソラ「それはそれで丁度いいんじゃない…？」

キャンドモン「ミソラさん！？今の冗談ですよね！？冗談ですよねミソラさん！？」

キャンドモンは暴走してミソラに抱き着く。

ミソラ「ちょっと、寄らないでよッ？暑苦しいッ？」

ミソラはキャンドモンの顔面を押さえて激しく拒絶する。

リュウギ「おい…、敵はもうすぐそこにいるんだから静かにしろよ…？」

リュウギはツッコムが、２人は全くリュウギの話を聞いていなかった。

リュウギ「ダメだ、全然聞いてねぇぞ…？」

ナルガモン「ほっとけ×2！オレ達だけでも片付けるぞ！」

すると、ドリルの音が聞こえてくる。

レナモン「何か聞こえてくる…。」

リュウギ「きっと奴等だ…。」

リュウギ達は慎重に行動をし、岩陰から様子を伺う。すると、鼻先のドリルでトンネルを掘っているデジモンの大群がいた。

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ドリモゲモン、成熟期、獣型、データ種、必殺技はドリルスピン。」

レナモン「あれがディグモンの仲間みたいだな…。」

（小声）

ナルガモン「アイツら何のために掘ってるんだ？」

（小声）

すると、ドリモゲモン達を仕切るデジモンが指示をする。

？？？「もっと掘れ！あともう少しでマグマが開通するぞ！！」

一同「！？」

リュウギ「マグマだって…！？」

（小声）

リュウギはD－アクセルでデータを読み取る。

D－アクセル「デスメラモン、完全体、火炎型、ウィルス種、必殺技はヘヴィーメタルファイアー。」

ミソラ「マグマなんて開通させたら、ここにいるデジモン達が危ないわ！？」

（小声）

リュウギ「何とかしなきゃな…。ナルガモン、ここは…」

（小声）

リュウギはチラッとナルガモンを見ると、ナルガモンの姿はなかった。

ナルガモン「オレ、参上！！」

ナルガモンはいつもの単独行動でデスメラモン達の前に立ちはだかっていた。

ミソラ「あのバカ…？」

リュウギ「さ、最悪だ…？」

リュウギ達は顔に手を当てて深くため息をつく。

ナルガモン「おいテメェら！！マグマを開通させようなんてバカげた事はやめろ！！」

デスメラモン「うるさいヤツだ…。俺様は忙しいからあっち行ってな。」

ナルガモン「…って、なにシカトしてんだコラァ？」

ミソラ「普通そうなるわよ、あのバカ…？」

岩陰で呆れるミソラ。

リュウギ「仕方ない…。行くぞ、レナモン！」

リュウギとレナモンは仕方なく岩陰から姿を現す。

デスメラモン「貴様らはエクセリオン！？」

リュウギ「お前の野望もこれまでだ。観念しろ！」

デスメラモン「チッ、お前らやっちまえ！！」

ドリモゲモンの大群の矛先はリュウギ達に向けて威嚇する。

ナルガモン「よし、ＣＯＯＬに片付けるぜ♪」

リュウギ「お前、反省の欠片もないだろ…？」

ナルガモン「正面突破も立派な戦術だってよく言うだろ？」

ミソラ「言わないわよ？それ、アンタのバカな妄想なだけッ？」

ナルガモン「リュウギ、いつもの頼むぜ！」

レナモン「ミソラ、頼む！」

リュウギ「ったく…？」

リュウギとミソラはＤ－アクセルでナルガモンとレナモンに翳した。

すると、データが上書きされ姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

レナモン「レナモン、進化！！」

『キュウビモン！！』

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ドリモゲモン達「『ドリルスピン！！』」

ドリモゲモン達は鼻先のドリルでリュウギ達に襲い掛かる。

リュウギ「ソニックドラモン、キュウビモン！ドリモゲモン達を解放する事が先決だ！」

キュウビモン「分かった。」

ソニックドラモン「言われなくても分かってるぜ！！」

リュウギ達は素早く交わし、それぞれの技でドリモゲモン達に攻撃

をする。

ソニックドラモン「『ヒドゥンスラッシュ！！』」

キュウビモン「『鬼火玉！！』」

ドリモゲモン達「グォォォォォォォォ！？」

ドリモゲモン達は力尽きて倒れると、体内からイビルスが現れる。

リュウギ「逃がすか！！」

リュウギはアルカナムで銃撃しようとしたその時だった。

デスメラモン「させるかよ！！『ヒートチェーン！！』」

デスメラモンは体に巻き付けている鎖を振り回し、リュウギの背中を打つ。

リュウギ「ぐはっ！？」

ミソラ「リュウギ！？」

ソニックドラモン「オレ達に任せろ！！」

デスメラモン「『ヘヴィーメタルファイアー！！』」

続いて口から体内の重金属を溶かし、灼熱の炎を吐き、ソニックドラモン達の行く手を阻む。

キュウビモン「くっ!?」

ソニックドラモン「なに!?」

デスメラモン「邪魔されてたまるかよ…。イビルス達よ!俺様に力を貸せ!!」

すると、イビルス達はデスメラモンの体内に入り込む。

デスメラモン「ヒャーハッハッハ!!力が!!闇の力が湧いてくるぜ!!」

ソニックドラモン「あの野郎、更にパワーアップしやがったぞ!?」

リュウギ「ソニックドラモン、完全体に進化だ!!」

ソニックドラモン「おう!!」

デスメラモン「させるかよ!!『ヒートチェーン!!』」

更にパワーアップしたデスメラモンは鎖でソニックドラモンに攻撃した。

ソニックドラモン「ぐはっ!?」

リュウギ「アイツ、なんて早さなんだ!?」

ミソラ「キュウビモン!!完全体に進化よ!!」

すると、デスメラモンはミソラに襲い掛かる。

デスメラモン「『ヘヴィーメタルファイアー！！』」

ミソラ・キャンドモン「！？」

キュウビモン「ミソラ！？」

その時、ミソラとキャンドモンは一瞬にして姿を消した。

リュウギ「ミソラ！？」

キュウビモン「そん…な…！？」

デスメラモン「ヒャーハッハッハ！！消し炭にしてやったぜ♪」

？？？「残念だけど消し炭にはなってないよ！」

すると、地面から姿を現す。

リュウギ「お前はディグモン！？」

ディグモンの腕にはミソラとキャンドモンが抱えていた。

キュウビモン「良かった…。無事だったんだなミソラ…。」

キャンドモン「いやぁ～、超ヒヤヒヤしましたよ～？」

ミソラ「助かったわ！ありがとうディグモン！」

ディグモン「いえいえ♪」

デスメラモン「チッ、邪魔しやがって…？」

すると、リュウギの目付きがキリッと変わった。

リュウギ「よくもミソラに手を出したな…。覚悟はできてるんだろうな？」

ソニックドラモン「この野郎、ブッ飛ばしてやる！！」

デスメラモン「やれるもんならやってみやがれ！！全員纏めて消し炭にしてやる！！『ヘヴィーメタルファイアー！！』」

デスメラモンは口から体内の重金属を溶かし、灼熱の炎を吐いた。

リュウギはアルカナムを地面に突き刺して叫んだ。

リュウギ「デジサモン、発動！！」

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

リュウギ「頼む、ナイトモン！！」

リュウギはナイトモンを呼び出すと、魔法陣からナイトモンが実体化される。

ナイトモン「リュウギ殿、我輩の後ろへ！！」

ナイトモンは盾を構えて灼熱の炎を防ぐ。

リュウギ「よし、今の内に完全体に進化だ、ソニックドラモン！！」

ソニックドラモン「おう！！」

リュウギはＤ－アクセルでソニックドラモンに翳した。すると、データが上書きされ、姿が変わる。

ソニックドラモン「ソニックドラモン、超進化！！」

『ドラグナモン！！』

ミソラ「キュウビモン！！」

キュウビモン「分かった！！」

ミソラもＤ－アクセルでキュウビモンに翳した。

キュウビモン「キュウビモン、超進化！！」

『タオモン！！』

リュウギ「タオモン、何とか奴の攻撃を阻止するんだ！！」

タオモン「分かった！！『狐封札！！』」

タオモンは霊符をデスメラモンに巻き付けて爆発させた。

デスメラモン「ぐあッ！！」

すると、デスメラモンは怯んだ。

ナイトモン（隙あり！！）
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ナイトモンは大剣、ベルセルクソードで切り上げるように振ると、デスメラモンは体に巻き付けている鎖でベルセルクソードを受け止めた。

デスメラモン「ヒヒヒ、惜しかったなぁ？」
（ニヤリ…）

ナイトモン「笑止！！」

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

すると、ナイトモンの背後からリュウギが現れ、アルカナムを振り下ろした。

デスメラモン「なに！？」

デスメラモンはとっさの判断で鎖でアルカナムを受け止めた。

リュウギ（ここだ！！）

リュウギはアルカナムのトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して爆発した。

その時、デスメラモンの鎖が耐えきれず、粉々に砕けた。

デスメラモン「なんだと！？」

リュウギ「ドラグナモン！！」

すると、ドラグナモンは両腕の鋭い刃、ヒドゥンアサルトを構え、背中に背負うロケットエンジンを使ってデスメラモンに急接近する。

デスメラモン「くっ、『ヘヴィーメタル…』」

ドラグナモン「『ヒドゥンセイバー！！』」

ドラグナモンはデスメラモンが必殺技を放つ前に切り裂いた。

デスメラモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

デスメラモンは力尽きて倒れると、体内からイビルガが現れた。

リュウギ「これで決める！！」

リュウギはイビルガに追撃し、アルカナムで切り刻んだ。

イビルガ「ギャャャャャャャャャャ！？」

イビルガは跡形もなく消滅した。

ドラグナモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

ドラグナモンとタオモンは力を使い果たし、幼年期へと退化した。

リュウギ「全く、単独行動は大概にしろよ…？」

ナナモン「勝ったんだから結果オーライだろ♪」

ミソラ「何が『結果オーライだろ♪』よ？ホントにアンタは自己チューなんだから？」

ポコモン「同感…？」

ナイトモン「では、我輩はこれで失礼する！」

ナイトモンはそう言うと、デジサモンの効果が切れてしまい、静かに消えていった。

リュウギ「ありがとな、ナイトモン。」

すると、デスメラモンは闇の力から解放され、メラモンへと退化した。

ミソラ「リュウギ、デスメラモンが退化しちゃったよ…？」

リュウギ「イビルガは、支配したデジモンを進化させてしまうんだ…。恐らく、これが本来の姿なんだろうな…。」

ミソラ「そうなんだ…。それよりリュウギ、早くリカバリーを！」

リュウギ「そうだな。」

リュウギとミソラはＤ－アクセルでリカバリー機能を使い、メラモン達の傷を癒した。

リュウギ「リカバリー完了。」

それから、Ｄ－アクセルからデジエクスフィールドが展開され、ドリルトンネルに結界が張られた。

リュウギ「これでドリルトンネルはもう大丈夫だな…。」

メラモン「すまないなぁ…。オレのせいでお前達は…」

リュウギ「悪いのはイビルガ達だ…。気にするなよ。」

ディグモン「みんな、無事に帰ってきて良かったよ♪」

ドリモゲモンＡ「これもアンタのお陰だ。ありがとな！」

ドリモゲモンＢ「是非、何かお礼させてくれないか？」

ミソラ「それなら、ミハラシ山へと続く通路を開通してくれない？道が塞がってて通れないの。」

ドリモゲモン達「了解！」
ドリモゲモン達は鼻先のドリルで壁を削り始める。

ミソラ「それとディグモン、本当にありがとう！」

ディグモン「困った時はお互い様だよ♪」

ミソラ「ねぇディグモン、私はあなたが必要なの。これからも私に力を貸してくれないかしら…？」

ディグモン「こんなボクでよろしければ！」

ミソラ「決まりね！それじゃ、始めるわよ！」

ミソラはＤ－アクセルをディグモンに翳した。

ミソラ「コントラクト、ディグモン！」

すると、ディグモンの身体から緑のオーラが纏う。

ミソラ「コントラクト完了！」

ディグモン「また必要になったらボクを呼んでね！」

ミソラ「分かったわ！」

すると、ミハラシ山への通路が開通された。

ドリモグモンＡ「終わったよ！」

キャンドモン「やりますねぇ♪あっという間でしたよ♪」

リュウギ「それじゃ、行こうか！」

メラモン「気を付けろお前ら！」

ディグモン「じゃあね！」

ドリモグモン達「さよ～なら～！」

リュウギ達はドリルトンネルの住人と別れを告げ、ミハラシ山へと

向かう。

こうしてドリルトンネルはリュウギ達の活躍によって救われたのであった。

――To Be Continued….

ＥＰ３６　～ドリルトンネルでの戦い！鋼の大地　ディグモン！！～（後書き）

次回はミハラシ山にてちょっとしたトラブルが！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ３７　～闇を纏いし獅子　マッドレオモン！！～（前書き）

ドリルトンネルを後にし、ようやくミハラシ山へと辿り着いたリュウギ達。

しかし、そこへトラブルが！？

Ｅｐ３７スタート！！

EP37　～闇を纏いし獅子　マッドレオモン！！～

～ミハラシすそ野～

ナナモン「ようやく抜け出したぜぃ♪」

ナナモンはリュウギの頭の上でピョンピョンと飛び跳ねる。

ミソラ「こっからギアサバンナってどう行けばいいのかしら？」

一同「う～ん…？」

リュウギ達は腕を組んで考える。

？？？「あれ？奇遇だね！」

すると、偶然にもコウジ達と再会した。

リュウギ「コウジさん！？」

レオルモン「みんな揃って考え事しちゃってさぁ…。道に迷ったのか？」

ミソラ「そうなのよ。コウジさん、ギアサバンナへ行くにはどうやって行くか分かります？」

コウジ「ギアサバンナって言われても、僕らはこの島に来るのは初めてだから分からないよ…？」

リュウギ「そうか…。ところで、四聖獣はどうだ？」

すると、コウジは首を横に振る。

コウジ「こっちは全く手掛かりなしだよ…。もう少しこの島を探るつもりなんだけど、君達もどうだい？」

リュウギ「悪いけど、俺達はやらなきゃならない事があってさ。黒い柱を壊さなきゃならないからさ。」

レオルモン「黒い柱？黒い柱なら見たぞ。」

一同「どこ！？」

リュウギ達は急に顔をしかめてレオルモンに聞く。

レオルモン「な、なんだよ急に？黒い柱ならここから北西に行ったらあったぞ！それがどうかしたのか？」

リュウギ「実は…」

リュウギ達はファイル島の異変、闇の柱についてコウジ達に話した。

コウジ「事情は分かったよ…。四聖獣の事情を探りつつ、黒い柱が見つかったら君達のＤ－アクセルに知らせるよ！」

リュウギ「あぁ、頼む。」

レオルモン「気を付けていけよ！」

ナナモン「あぁ、そっちもな！」

リュウギ達はコウジ達と別れを告げ、北西に向かって歩き出した。

レオルモン「黒い柱かぁ…。」

コウジ「なんだか昔の事を思い出すよ…。七大魔王を倒すためにデバイス島を冒険した事をさ…。」

コウジはリュウギ達の背中を見てふと思い出す。

レオルモン「アレはアレで、かなり大変だったけどな…？」

コウジ「みんな、元気してるかなぁ…？」

コウジはそう言って青い空を見上げる。

レオルモン「なぁコウジ？」

コウジ「ん？」

レオルモン「リュウとシオリの息子がリュウギなら、シオリは今どうしてるのかなぁ？」

コウジ「確か、行方不明ってリュウギ君から聞いたな…。」

レオルモン「まさか、デジタルワールドに…？」

コウジ「有り得るかもしれないね…。もしそうだとしたら、一体何処に…？デジドライブで連絡しても出ないし…。」

レオルモン「プロットモンが一緒なら大丈夫だろ?」

コウジ「そうだといいんだけどね…。さ、僕らは一刻も早く、四聖獣を探そう!」

コウジは中指で眼鏡をずり上げた後、リュウギ達とは逆の方向へと歩き出した。

レオルモン「おう!」

一方、リュウギ達は…。

~ギアサバンナ~

ミハラシ山を抜けると、そこは広大な草原が広がっていた。

リュウギ「ここがギアサバンナかぁ…。」

ミソラ「まるでアフリカに来たみたい…?」

ナナモン「広いな~!?」

ポコモン「あれを見て!」

ポコモンは指を差すと、その先には巨大な工場のような物が建てており、その中心に黒い柱が建っていた。

リュウギ「あれがそうみたいだな…。」

ナナモン「よっしゃ！！早速ぶっ壊しに…」

ナナモンはいつもの自己チューモードに入ろうとすると、リュウギはナナモンをガッチリと捕まえた。

リュウギ「ナナモン、気持ちは分かるけど少しは落ち着けよ…？」

キャンドモン「そうですよ！あなた達は今幼年期なんですから！その状態で戦おうなんてムリですよ！」

リュウギ「と言うよりか、何もしてないお前が言うな…？」

ミソラ「言えてる…。」

リュウギは小さくツッコムと、ミソラは納得するように頷く。

キャンドモン「せっかく良いこと言ったのに…（泣）」

キャンドモンはリュウギ達の言葉のナイフが突き刺さったせいか、陰でメソメソする。

リュウギ「ところで、いつになったらナルガモンに進化するんだ？」

ナナモン「う～ん…。知らない！」

ポコモン「イビルスと出くわすに、早く進化しないと…。」

すると、いきなり地震が発生し、ギアサバンナ全体が揺れる。

ナナモン「なんだ×２！？」

ミソラ「なに、地震!?」

???「グオォォォォォォォォォ!!」

すると、凄まじい咆哮がギアサバンナに響き渡る。

ポコモン「地震じゃない!何かが近付いてくるわ!」

すると、巨大な黒い影がリュウギ達の前に立ちはだかる。

???「グオォォォォォォォォォ!!」

リュウギ「コイツは…!?」

リュウギはD－アクセルでデータを読み取る。

D－アクセル「マッドレオモン、完全体、アンデッド型、ウィルス種、必殺技は獣王堕拳。」

ポコモン「ミソラ!」

ミソラ「任せて!ディスティングハーツ!!」

ミソラはマッドレオモンの体内を調べると、イビルガがいた。

ミソラ「イビルガがいるわ!」

リュウギ「クソッ、よりによってイビルガと出くわすなんてな…。」

リュウギはそう言って右手を広げ、ガンブレード、アルカナムを取り出す。

リュウギ「ミソラ、みんなを頼む！」

ミソラ「無茶よリュウギ！？1人であんな凶暴そうなデジモンと戦うなんて！？」

リュウギ「確かに無茶だ…。でも、ここで背を向けたら、俺の流儀に反する！！」

ミソラ「リュウギ…。」

リュウギ「来い！！」

マッドレオモン「グオォォォォォォォォォォ！！」

マッドレオモンは握り拳を作り、リュウギに襲い掛かる。

リュウギは素早く交わし、アルカナムのトリガーを引いて銃撃を放つ。

マッドレオモン「グオォォォォォォォォォォ！！」

マッドレオモンは片手で銃弾を防いだ。

リュウギ「クソッ、効いてないか…。」

マッドレオモン「グオォォォォォォォォォォ！！」

すると、マッドレオモンはミソラ達を見つめる。

リュウギ「ミソラ、早く逃げろ！！」

ミソラ達は逃げようとすると、マッドレオモンは素早い動きで行く手を阻む。

一同「！？」

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

リュウギは高く飛び上がり、アルカナムを振りかぶった。

すると、マッドレオモンは巨大な手でリュウギを薙ぎ払った。

リュウギ「ぐはっ！？」

リュウギは激しく木に叩き付かれた。

ミソラ「リュウギ！？」

すると、マッドレオモンは巨大な手でミソラ達を捕まえる。

ナナモン「なにするんだ！？放しやがれ？」

ミソラ「リュウギ！？」

リュウギ「ミソ…ラ…。」

すると、マッドレオモンはミソラ達を連れ拐い、そのまま何処かへ

と去って行った。

リュウギ「クソッ…。」

リュウギはそのまま気を失った。

―――――――――――――

???「――夫…？、しっかりして…。」

すると、遠くから声が聞こえてくる。

リュウギはゆっくりと、目を開けると、全く見知らぬ場所だった。

リュウギ「あれ？俺は一体…？」

リュウギはノソリと起き上がろうとすると、マッドレオモンにやられた傷が痛む。

リュウギ「痛つッ！？そうか…、俺はマッドレオモンにやられたんだ…。」

???「良かった。もう目が覚めないのかと思ったわ。」

リュウギは隣を見ると、たくさんのデジモンが看病していた。

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ピヨモン、成長期、雛鳥型、ワクチン種、必殺技はマジカルファイアー。」

リュウギ「お前達が俺を助けてくれたのか…？」

ピヨモン「そうよ。私はピヨモン。よろしくね！」

リュウギ「リュウギだ…。助けてくれてありがとな…。ところで、ここは一体…？」

ピヨモン「ここはギアサバンナの隠れ家よ…。マッドレオモンが去ってから、様子を見に行ったらあなたが倒れてて…。その怪我、まさかマッドレオモンにやられたの…？」

リュウギ「あぁ…。それだけじゃない…。マッドレオモンは俺の仲間を連れ去らった…。一刻も早く…」

リュウギは起き上がろうとすると、更に傷が痛む。

リュウギ「うっ！？」

ピヨモン「無理しちゃダメだよ！？」

リュウギ「無理、無茶、無謀。そいつらから逃げてたら俺の流儀に反する…。」

リュウギは力を振り絞って立ち上がろうとするが、膝が地面に着く。

リュウギ「クソッ、体が全く言うこと聞かねぇ…。」

ピヨモン「リュウギ、仲間を助けたい気持ちは解るけど、とにかく安静にしてなきゃダメだよ！」

すると、たくさんの幼年期デジモン達がピョンピョンと飛び跳ねながらリュウギを止める。

ボタモン「安静にして！」

プニモン「ピヨモンの言う通りだよ！」

リュウギ「……。」

リュウギは小さくため息をつき、胡座をかいた。

リュウギ「分かった…。」

（助けに行った所で、この怪我じゃまたやられる一方だ…。安静にするか…。）

ピヨモン「ありがとう！」

リュウギ「でも、こうしている間にミソラ達が…。」

リュウギは心配になり、うつ向く。

ピヨモン「きっと大丈夫だよ！」

ボタモン「マッドレオモンはそんな事しない！」

プニモン「しない×２！」

トコモン「僕らを助けてくれた！」

リュウギ「どういう事だ…？」

ピヨモン「実は…」

一方、ミソラ達は…。

～？？？～

とある森の中、マッドレオモンは拐ったミソラ達を地面に降ろした。

キャンドモン「いだっ！？」

ナナモン「おい、もっと優しく降ろせよ？」

マッドレオモンは全く話を聞かず、何処かへと去って行った。

ナナモン「無視するなテメェッ？」

ミソラ「それにしても、ここは一体…？」

すると、森の奥からたくさんの黒影が現れ、眼光鋭くミソラ達を睨んでいた。

ポコモン「下がっててミソラ！」

キャンドモン「ま、まま、まさかイビルス？」

ナナモン「クソッ、リュウギさえ居れば…。」

すると、ミソラはナナモン達を止める。

ミソラ「待って！」

ナナモン「なんだよ急に？オレ達は今大ピンチだって時によぅ？」

ミソラ「この子達、イビルスじゃないわ…。」

一同「！？」

黒影の正体は、たくさんの幼年期デジモン達だった。

ユラモン「人間だ×２♪」

ユキミボタモン「わーい♪」

たくさんの幼年期デジモンはピョンピョンと飛び跳ねながらミソラ達を囲む。

ナナモン「ど、どうなってんだよ…？」

ミソラ「可愛いーッ？」

ポコモン「でも、どうして幼年期デジモン達が…？ここは一体…？」

？？？「ここはギアサバンナの隠れ家なんだ。」

すると、赤い体をした四足歩行のデジモンが姿を現す。

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

D－アクセル「エレキモン、成長期、哺乳類型、データ種、必殺技はスパークリングサンダー。」

ミソラ「ところでエレキモン、あなた達はどうしてイビルスに支配されていないの…？」

エレキモン「ここは秘密の隠れ家だからな！ここにいるとイビルスはやって来ないってマッドレオモンが言ってたんだ！」

一同「マッドレオモンが！？」

ミソラ達は驚愕する。

ユキミボタモン「マッドレオモンは私達がイビルスに支配されないように、ここまで連れて来てくれたんだ！」

ミソラ「でも、マッドレオモンはイビルガに支配されてるわよ！私、この目でハッキリと見たんだから！」

ポコモン「でもミソラ、この子達はイビルスに支配されていない…。」

ナナモン「罠じゃねぇの？」

すると、幼年期デジモン達は怒り出し、ナナモンに向けて泡を吐く。

ユラモン「マッドレオモンはそんな事しない？」

タネモン「しない×2？」

ナナモン「分かった？オレが悪かったからやめろって？」

エレキモン「マッドレオモンは昔、ギアサバンナの平和を守ってた…。いわゆる、オレ達のヒーローみたいな存在だった…。」

ミソラ「エレキモン、詳しく聞かせてくれない？」

―――――――――――――

リュウギ「なるほどな…。つまり、ギアサバンナにいるデジモン達を危険な目に合わせないように、マッドレオモンはこの場所に避難させたのか…。」

ピヨモン「たぶん、あなたの仲間は他の隠れ家に要ると思うよ。」

ボタモン「マッドレオモンは良いデジモン！」

トコモン「そうだ×２！」

リュウギ「……。」

（でも、なんでイビルガに支配されたのになぜこんな事を…？）

すると突然、リュウギのＤ－アクセルが鳴る

ミソラ『リュウギ？聞こえる？』

すると、Ｄ－アクセルからミソラの声が聞こえてくる。

リュウギ「ミソラ、俺だ。」

ミソラ『良かった。何とか無事だったみたいだね…。』

リュウギ「あぁ、ピヨモン達に助けて貰って、今ギアサバンナの隠れ家に居る。そっちは？」

ミソラ『私もギアサバンナの隠れ家に居るわ！』

リュウギ「それなら安心だな…。それよりミソラ、マッドレオモンの事なんだが…」

ミソラ『マッドレオモンの事ならエレキモンから聞いたわ。』

リュウギ「そうか…。ミソラ、マッドレオモンは本当にイビルガに支配されているのか…？」

ミソラ『確かに居たわよ…。でも…』

リュウギ「でも…なんだ？」

ミソラ『小さな光を感じた…。マッドレオモンの体内からイビルガと一緒に…。』

ミソラ『うん…。』

リュウギ「分かった…。ミソラ、今から助けに行きたいがもう夜だ…。しばらくの間だけ辛抱してくれ…。」

ミソラ『でも…。』

リュウギ「心配するな…。約束は必ず守る…。俺を信じろ…。」

しばらくすると、ミソラは返事をする。

ミソラ『分かったわ…。』

リュウギ「あぁ…。」

リュウギはそう言ってＤ－アクセルの通信を切った。

リュウギ「……。」

（イビルガはデジモンを支配するウィルス…。なのに小さな光を感じるなんておかしすぎる…。ミソラの勘違いなのか…？）

リュウギは腕を組んで考えると、マッドレオモンにやられた傷が痛む。

リュウギ「痛つッ！？」

（あの時危なかったな…。あと少しずれていたら肋骨が何本かいかれていた…。）

その時、リュウギは顔をしかめる。

リュウギ（待てよ、ひょっとしたら…？）

ピヨモン「リュウギ、お願いがあるの…。」

リュウギ「？」

ピヨモン「マッドレオモン…いや、レオモンを助けてあげて！」

ボタモン「レオモンは僕たちのために体を張って守ってくれたんだ！」

トコモン「お願い、レオモンを助けてあげてよ！」

リュウギ「……。」

すると、リュウギは笑顔で明るく振る舞う。

リュウギ「大丈夫だ…。レオモンは必ず助けてやる…。」

一同「ホントに！？」

リュウギ「あぁ、約束だ…。」

すると、幼年期デジモン達は嬉しくなり、ピョンピョンと飛び跳ねた。

リュウギ「ピヨモン、この隠れ家で少し休ませて貰うよ。」

ピヨモン「分かった。ゆっくりしていってね。」

リュウギはそう言ってしばらくの休息をとるのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

ＥＰ３７　～闇を纏いし獅子　マッドレオモン！！～（後書き）

次回はマッドレオモンを救うため、リベンジをする！！

しかし、マッドレオモンにはとある秘密が隠されていた！？

次回もお楽しみに！！

Ｅｐ３８　～感情を持つ希少種型ウィルス　イビルガ～（前書き）

果たしてリュウギ達は、マッドレオモンを救い出せるのか！？

Ｅｐ３８スタート！！

EP38　～感情を持つ希少種型ウィルス　イビルガ～

リュウギ達は、それぞれの隠れ家にて休息をとる。そして、すっかりと夜が明けた…。

ピヨモン「気を付けてね…。」

リュウギ「心配するな。約束は必ず守る…。じゃあな。」

リュウギはそう言ってギアサバンナへと向かった。

～ギアサバンナ～

リュウギは広大な草原に入ると、森の中から巨大な人影が姿を現す。

マッドレオモン「グォォォォォォォォ！！」

リュウギ「来たか…。」

リュウギは右手を差し出すと、ガンブレード、アルカナムが現れる。

マッドレオモン「グォォォォォォォォ！！」

マッドレオモンは巨大な拳でリュウギに襲い掛かる。

リュウギ「くっ！！」

リュウギは素早く交わし、アルカナムのトリガーを引いて銃撃を放つ。

しかし、マッドレオモンには全く効いてない。

リュウギ（やっぱりダメか…。）

マッドレオモン「『獣王堕拳』」

マッドレオモンは獅子の顔の形をした邪悪な気を放つ。

リュウギは交わそうとするが、昨日マッドレオモンにやられた傷が急に痛み、交わしきれずまともに喰らってしまった。

リュウギ「ぐはっ！？」

リュウギは衝撃で木に激しく叩き付かれた。

リュウギ「ゲホッ…。」

（クソッ、まだ傷が…。）

リュウギは傷を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

その間に、マッドレオモンは段々とリュウギに接近する。

リュウギはデジサモンを発動しようとしたが、まだ発動してから２４時間経っていなかったので、発動不可だった。

リュウギ「クソッ…。！？」

マッドレオモン「グォォォォォォォォ！！」

マッドレオモンはリュウギを叩き潰そうと巨大な手を振り上げたその時だった。

???「『狐葉楔!!』」

無数の木の葉の手裏剣がマッドレオモンに直撃し、攻撃を阻止した。

リュウギ「ミソラ、それにお前ら!?」

キャンドモン「リュウギさん、助けに来ましたよ!!」

ミソラ「何とか間に合ったみたいだね!!」

ナナモン「リュウギ!」

ナナモンはリュウギの元へピョンピョンと飛び跳ねる。

リュウギ「ナナモン!」

リュウギはD－アクセルでナナモンに翳すと、データが上書きされ、姿が変わる。

ナナモン「ナナモン、進化!!」

『ナルガモン!!』

ナルガモン「ヒャッホウ!!やっと進化したぜ!!リュウギ、あまり無茶するんじゃねぇぞ!」

ナルガモンはそう言って手を差し伸べた。

リュウギ「ワリィな…。」

リュウギは小さく笑い、ナルガモンの手を掴んで起き上がる。

キャンドモン「感動の友情シーンなんかしてないで、早くやっちゃってくださいよ？」

キャンドモンは木陰に隠れながら怒る。

リュウギ・ナルガモン「って、お前も戦えよ？」

ミソラ「ホンットにウザい…？」

レナモン「……？」

マッドレオモン「『獣王堕拳！！』」

すると、マッドレオモンは獅子の顔の形をした邪悪な気を放つ。

リュウギ達は素早く交わした。

ミソラ「リュウギ、早くマッドレオモンを解放してあげなきゃ！？」

リュウギ「分かってる。けど、ただ闇雲に近付けばやられる一方だ…。奴の動きさえ封じれば…。」

すると、ミソラはハッとした。

ミソラ「それなら私に任せて！！」

ミソラ「レナモン、成熟期に進化よ！！」

レナモン「分かった。」

ナルガモン「オレ達も行くぜ！！」

リュウギ「あぁ！！」

リュウギとミソラはＤ－アクセルを翳し、ナルガモンとレナモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化！！」

『ソニックドラモン！！』

レナモン「レナモン、進化！！」

『キュウビモン！！』

ミソラ「みんな、マッドレオモンの足止めを頼むわ！」

一同「あぁ！！」

リュウギ達は遠距離からの攻撃で、マッドレオモンの足止めに掛かる。

キュウビモン「『鬼火玉！！』」

ソニックドラモン「『アートルムバースト！！』」

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

マッドレオモン「グォォォォォォォォォ！？」

ダメージを受けると、マッドレオモンは怯んだ。

ミソラ「ここだわ！！」

隙を読んだミソラは手を組んで叫ぶ。

ミソラ「デジサモン、発動！」

すると、Ｄ－アクセルの画面から光が生じ、ミソラは地面に手を当てると、地面からデジ文字の魔法陣を展開する。

ミソラ「出てきて、ディグモン！！」

すると、魔法陣からディグモンが実体化された。

ディグモン「呼んだかミソラ？」

ミソラ「ディグモン、マッドレオモンの動きを封じて！」

ディグモン「任せて！！『ビッグクラック！！』」

ディグモンは回転するドリルで地面に衝撃を与え、地割れを起こす。

すると、地割れにより、マッドレオモンの動きを完全に封じ込めた。

ミソラ「みんな、今よ！！」

キュウビモン「『狐炎龍！！』」

ソニックドラモン「『ヒドゥンスラッシュ！！』」

ソニックドラモンとキュウビモンはそれぞれの必殺技でマッドレオモンにぶつけた。

マッドレオモンは力尽きて倒れると、体内からイビルガが現れた。

ミソラ「リュウギ、チャンスよ！！」

その時、リュウギはアルカナムを地面に突き刺した。

一同「！？」

ソニックドラモン「お、おいどうしたんだよリュウギ！？早くしないとイビルガが…」

リュウギ「心配ない…。コイツは逃げない…。」

一同「！？」

リュウギ「そうなんだろ、イビルガ？」

すると、イビルガは口を開く。

イビルガ「いつから気付いていたんだ？」

リュウギ「昨日、お前はわざと急所を外した。そして俺をギアサバンナに置き去りにしたのは、避難させたデジモン達が助けると計算に入れいた。だからギアサバンナにいるデジモン達を危険な目に合わさないように安全な場所へ避難させた。」

ミソラ「なるほど…。」

キュウビモン「しかし、なぜそこまでして…？」

リュウギ「他の仲間に気付かれないように、然り気無く俺達に助けを求めていたんだ…。違うか？」

イビルガ「君の言う通りだ…。」

ミソラ「こんなイビルガがいるなんて…。」

イビルガ「私は特別だ…。いや、失敗作と言った方がいいな…。」

リュウギ「失敗作？」

イビルガ「私達イビルガは、アナログマンの手によって造り出されたウィルス…。でも、本当はある電脳核の憎しみ、悲しみなどのマイナスパワーによって生み出されたウィルスなんだ…。本来のイビルガ達は、怒りによって生み出されたが、私は１０００体に１体に生まれる電脳核の悲しみによって生み出された希少種型ウィルスだ…。」

キュウビモン「感情を持つウィルスか…。」

ミソラ「そうか…。だからディスティングハーツした時に、光を感

じたのね…。」

イビルガ「追われている身になった私は、正義に満ち溢れたデジモン、レオモンの身体を借りた…。レオモンには本当に申し訳ない事をした…。」

リュウギ「ところで、ある電脳核ってなんだよ…？」

イビルガ「分からない…。でも、その電脳核はこのムゲンマウンテンの最上階にある…。私達はそこで生まれた…。お願いです、ムゲンマウンテンにある電脳核を壊してください…。これ以上、罪のないデジモン達を苦しませたくない…。」

リュウギ「分かった…。必ずその電脳核を壊す…。」

イビルガ「ありがとうございます…。それでは、私を裁いてください…。」

リュウギ「それは御断りだ…。」

ミソラ「あなたが裁かれる必要なんてないわ…。」

イビルガ「でも…」

ソニックドラモン「命を粗末にすんじゃねぇよ！」

キュウビモン「私達は罪のないデジモン達を苦しめる奴等を裁くまでだ…。」

イビルガ「……。」

リュウギ「だから生きろ…。ここで命を粗末にしたら、お前を生んでくれた電脳核はきっと悲しむぞ…。」

イビルガ「ありがとうございます…。それでは皆さん、健闘を祈っています…。」

イビルガはそういって何処かへと去って行った。

すると、ソニックドラモンとキュウビモンは成長期へと退化した。

ミソラ「イビルガでも、命があるんだね…。」

レナモン「あぁ…。」

キャンドモン「いや～、よく頑張りましたよみなさん？」

木陰からノコノコと現れたキャンドモン。すると、リュウギ達は呆れた目でキャンドモンを見つめる。

キャンドモン「な、何ですかみなさん？」

リュウギ「何が『何ですかみなさん？』だよ…？」

ナルガモン「弱虫…？」

ミソラ「最ッ低…？」

レナモン「……。」

（コクり…）

キャンドモン「やだなぁ～？これはあくまでもボクチンは、奥の手を用意していたんですよ～アハッ、アハハハ～？」

ディグモン「かなり胡散臭いな…。」

一同「うん…。」

ディグモンがツッコムと、リュウギ達は同時に頷いた。

キャンドモン「酷いッ？」

すると、イビルガから解放されたマッドレオモンは、レオモンへと退化した。

ミソラ「さ、バカはほっといて、早くレオモンをリカバリーしましょ…？」

リュウギ「そうだな…。リカバリー、レオモン。」

リュウギはＤ－アクセルをレオモンに翳すと、傷は癒される。

リュウギ「リカバリー、完了だな…。」

すると、ミソラのＤ－アクセルから自動的にデジエクスフィールドが展開され、ギアサバンナに結界が張られた。

ミソラ「これでギアサバンナはもう大丈夫ね！ディグモン、ありがとう！」

ディグモン「どういたしまして♪それじゃ！」

デジサモンの効果が切れ、ディグモンは静かに消え去った。

レオモン「う、う～ん…。」

すると、レオモンはゆっくりと目を開けた。

リュウギ「気が付いたみたいだな。」

レオモン「俺は一体何をしていたんだ…？」

？？？「レオモーン！！」

すると、森の奥からギアサバンナのデジモン達が駆け付けてくる。

レオモン「お前達！？」

ボタモン「レオモンが元に戻った♪」

トコモン「戻った×２♪」

レオモン「どうやら、ケガはなさそうだな…。良かった…。それより、俺は一体…？」

レオモンはイビルガに支配されてから、あまり覚えていなかった。

ピヨモン「レオモンはね、リュウギ達が助けてくれたんだよ♪」

レオモン「そうか…。感謝する…。」

エレキモン「オレ達も礼を言うよ！ありがとな！」

ミソラ「困った時は御互い様だよ♪」

リュウギ「ま、今回もミソラの作戦が見事だったな。」

レナモン「そうだな…。」

ナルガモン「戦う気ナシの奴とは大違いだな…。」

すると、リュウギ達は呆れた目でキャンドモンを見つめる。

キャンドモン「ちょっとッ！？さっきから何ですかッ！？」

レオモン「本当に感謝する。ファイル島の救世主達よ…。」

ミソラ「私達はファイル島の救世主じゃないわ。」

レオモン「？」

リュウギ「俺達はデジタルワールドを救うためにやってきた…」

ナルガモン「ブレイブエクセリオンだぜ♪」

レオモン「ブレイブエクセリオンか…。ならばブレイブエクセリオンよ、お前達の力になりたい…。俺はこのデジタルワールドを救いたい…。」

ミソラ「いいわ。私はミソラ！」

ミソラは頷くと、ゆっくりと手を差し伸べた。

レオモン「これからもよろしく頼む…。」

レオモンはミソラの手をギュッと握手をする。

ミソラ「コントラクト、レオモン！」

すると、レオモンの身体から緑のオーラが纏う。

ミソラ「コントラクト完了！」

レオモン「必要になったら、呼んでくれ。」

ミソラ「分かったわ。よろしくね！」

リュウギ「ピヨモン、彼処へ行くにはどうしたらいいんだ？」

リュウギは北にある巨大な工場に指を差す。

ピヨモン「『ファクトリアルタウン』のこと？」

ミソラ「ファクトリアルタウン？」

レオモン「ファクトリアルタウンに入るのは不可能だ。あそこは巨大な門がかたく閉ざされている。」

レナモン「どうすれば…？」

エレキモン「確か、この近くにファクトリアルタウンへ繋がる下水道があったような…？」

リュウギ「よし、それだな…。」

すると、ミソラは激しく首を横に振って拒絶する。

ミソラ「え！？私は嫌だよ！？」

ナルガモン「何でだよ？」

ミソラ「だって、下水道って臭いし汚いし…。」

（ブツブツ…）

リュウギ「確かに嫌だけど、これしか方法はないぞ…。」

ミソラ「そんな～？」

キャンドモン「大丈夫ですよミソラさん♪ボクチンが側にいてあげますから～♪」

キャンドモンはミソラに引っ付こうとすると、肘鉄が飛んできて顔面に直撃する。

キャンドモン「ふごっ！？」

ミソラ「アンタが側にいたら暑苦しいだけよ、このヘンタイロウソクが…？」

一同「……？」

レナモン「仕方ないよミソラ…。ファクトリアルタウンへ行くには、背に腹は代えられない…。」

ミソラ「わ、分かったわよ…？」

ミソラは深くため息をつく。

リュウギ「エレキモン、その下水道まで案内してくれないか？」

エレキモン「任せな！」

～下水道　入り口～

ギアサバンナから少し離れた場所に小さなマンホールがあった。

リュウギ「これがそうか…。」

ミソラ「ねぇリュウギ、やっぱり入らなきゃ…」

リュウギ「ダメだ。」

即答だった。ミソラはカクッと肩が落ちる。

エレキモン「気を付けろよ！下水道でもイビルスに支配されたデジモンが住み着いているからな。」

リュウギ「分かった。ありがとな。」

リュウギはマンホールを開けて、順番に下水道へと繋がる梯子を使

って降りていく。

ナルガモン「おいミソラ！早くしろよ！」

残るはミソラだけだった。するとヤケになり、急に叫ぶ。

ミソラ「分かったわよッ？入ればいいんでしょ入ればッ？」

ミソラはそう言って下水道へと繋がる梯子を使って降りた。

こうしてリュウギ達は、ファクトリアルタウンへ繋がる下水道へと入るのであった。

一方、感情を持つイビルガは…。

～ミハラシ山～

イビルガ「きっとやってくれると信じてるよ、エクセリオン…。」

？？？「裏切り者…発見…。」

すると、イビルガは振り向くと、巨大なサイボーグ型デジモンが現れる。

イビルガ「お前は…！？」

すると、巨大なサイボーグ型デジモンは巨大な手でイビルガを捕まえた。

イビルガ「くっ！？」

???「やっと見つけた…。お前…排除する…。」

イビルガ（すまないエクセリオン…。後は頼む…。）

すると、巨大なサイボーグ型デジモンは捕まえたイビルガを握り潰した。

イビルガ「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

???「裏切り者…排除した…。」

???「ご苦労だったなギーゴモン…。」

すると、背後から闇の空間が現れ、闇の空間からダークスの1人、ストラティクモンが現れる。

ギーゴモン「ストラティクモン…。裏切り者…排除した…。仕事…終わりか?」

ストラティクモン「いや、まだ終わってない。複数のネズミ共がファクトリアルタウンに入り込む。ネズミ共の排除はお前に任せるぞ、ギーゴモン…。私はアレの様子を見てくる…。」

ギーゴモン「分かった…。ギーゴモン…ネズミ共を排除する…。」

ストラティクモンは闇の中へと消え去り、ギーゴモンはファクトリアルタウンへと向かうのであった。

—To Be Continued….

ＥＰ３８　～感情を持つ希少種型ウィルス　イビルガ～（後書き）

ダークスの１人、ギーゴモン登場！！

※因みに、ダークスと言われるアナログマンの幹部デジモンは支配者さんが考えたオリジナルデジモンです。

次回はファクトリアルタウンに向かって下水道を通るリュウギ達だが、またもやトラブルが！？

お楽しみに！！

Ｅｐ３９　～最凶の悪臭！？ダストキングダム　スカモン大王！？～（前書き）

６月入りましたねぇ…。

まだ連載してから１年も経ってないのに５年以上書いてる気分なのは自分だけ…？

それは置いといて、今月から３日に１話更新することにしました！

そろそろネタギレで超ヤバイので…？

では、Ｅｐ３９スタート！！

EP39　～最凶の悪臭!?ダストキングダム　スカモン大王!?～

～下水道～

落ちてくる水滴の音。地下水道に漂う悪臭。リュウギ達は、ファクトリアルタウンを目指して地下水道を通る。

ナルガモン「それにしても臭ぇなぁ…？」

リュウギ「流石は地下水道だな…？ところでミソラ、いつの間に装備していたんだよ…それ？」

ミソラの鼻に洗濯バサミを装備していた。

ミソラ「だって臭い所イヤだもん…？」

リュウギ「馴れたら大した事ないぞ…。外したらどうだ？」

ミソラ「絶対にイヤッ？」

ミソラは首を激しく横に振り、意地を張る。

キャンドモン「かなりの意地っ張りですねぇ…？」

リュウギ「仕方ないさ…？ミソラは昔から、かなりの綺麗好きだからな…？」

ミソラ「リュウギ、いつになったらファクトリアルタウンに着くのよ～？」

ミソラは早く抜け出したくて涙目になる。

レナモン「もう少しの辛抱だ…。このまま何も起こらなきゃいいんだが…？」

すると、奥から声が聞こえてくる。

リュウギ「何か聞こえてくる…。」

ミソラ「まさか、イビルガ！？」

ナルガモン「行くぞ！」

リュウギ達は声が聞こえてくる方へと走り出すと、段々と声が聞こえてくる。

リュウギ「出口だ！！」

ミソラ「やったわ！！これで地下水道とはおさらばだわ♪」

ミソラは地下水道から抜け出せた事が嬉しくなり、鼻に装備していた洗濯バサミを外した。

地下水道から抜けると、そこは大量のゴミの山だった。

一同「はぁ！？」

リュウギ達は驚きの余りに、口をあんぐりする。

ミソラ「何処よここ!?」

リュウギ「まさか、ここがファクトリアルタウンなのか…?」

リュウギ達は辺りを見回すと、あちらこちらにゴミが散乱していた。

ミソラ「臭い～?」

すると、ゴミの山から黒い影が数体現れる。

一同「!?」

レナモン「囲まれた!?」

リュウギはＤ－アクセルで黒影達のデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「スカモン、成熟期、ミュータント型、ウィルス種、必殺技はウ◯チ。」

ナルガモン「まさか、こいつらイビルスに操られているのか…?」

すると、スカモンは口を開く。

スカモンＡ「違う!!オイラ達はイビルスなんかに支配されてない!!」

キャンドモン「それなら戦う必要ナッシングですね♪僕らは決して怪しい者じゃありませんよ?」

キャンドモンは必死で説得する。

スカモンB「例えそうだとしても、侮辱した！」

ミソラ「私達が何をしたって言うのよ？」

すると、リュウギはハッとした。

リュウギ「ミソラ、たぶんお前だと思うぞ…？」

ミソラ「え…？」

原因はミソラだった。この場所を『臭い』という単語を口にしたからだ。

スカモンC「それに、見るからにかなり怪しいじょ…。」

ナルガモン「お前らに言われたかねぇよッ？」

スカモンA「あっ！？また侮辱しよったぞッ？」

スカモンB「奴等を捕まえるんだじょ？」

リュウギ「おい、ちょっと待てって！？」

リュウギは慌てて説得しようとするがスカモン達は容赦なく襲い掛かる。

ナルガモン「言って悪いかよッ？『アートルムフレイム！！』」

ナルガモンは口から黒炎弾を放ち、スカモンに攻撃した。

スカモンA「ぐはっ？」

スカモンB「よくもやりやがったな？『ウ◯チ！！』」

スカモンはウ◯チを投げ付けた。

ナルガモン「汚ぇもん投げやがって？『ヒドゥンブレイド！！』」

ナルガモンは両肘のブレイドでスカモン達を切り刻んだ。

スカモンB・C「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

スカモン達はあっさりと負けた。

ナルガモン「Ｊａｃｋｐｏｔ！！」

ミソラ「弱ッ…？」

スカモン達「逃げろ～？」

スカモン達はナルガモンに怯え、退散した。

リュウギ「おい、ちょっと待てよ！？」

ナルガモン「へへッ、一昨日来やがれ♪ナッハハハ♪」

ナルガモンは人差し指を真上に突き出して高らかに笑う。

レナモン「あっさりだったな…？」

リュウギ「あ～ぁ…、せっかくの手掛かりが…？」

リュウギ達は顔に手を当てて深くため息をつく。

キャンドモン「あんな奴ら、ボクチンだけでも倒せましたよ♪」

ミソラ「よく言うわ…？まともに戦った事ないクセに…？」

ナルガモン「それでさぁ、ここってファクトリアルタウンなのか？」

リュウギ「あのなぁ、奴等から聞こうとしたのにお前があっさりと倒したから聞けなかっただろうが…？」

リュウギは眉をピクピクと動かしながらツッコム。

ナルガモン「ドンマイ♪」

リュウギ「ドンマイじゃねぇよッ？」

すると、レナモンは何か異変を感じる。

ミソラ「どうしたの？」

レナモン「何か来る…。」

一同「？」

？？？「誰じゃゃゃゃゃゃゃッ？ワシの可愛い子分達をいじめたヤツは？」

すると、ゴミの山から巨大なスカモンが現れた。

一同「!?」

キャンドモン「出たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?親玉登場しちゃったよ!?」

リュウギ「デカっ!?」

???「お前らか?ワシの可愛い子分達をいじめたヤツは?」

巨大なスカモンはギロリと睨む。

キャンドモン「違いますよお代官様?いじめたのはコイツですよ?」

キャンドモンは冷や汗かきながらナルガモンに指を差す。

ナルガモン「おい…?」

(後でブッ飛ばす…?)

???「とんだ命知らずじゃのぅ。このスカモン大王を怒らせるとは、覚悟は出来てるんじゃろうな?」

スカモン大王は巨大なウ◯チが現れる。

リュウギ「おい、ちょっと待て?」

ナルガモン「上等だコラァ?オレより目立とうなんざ1億年早いんだよ?」

ナルガモンは全く引き下がらず、むしろやる気満々だった。

スカモン大王「覚悟せいいいいいいいいい？」

スカモン大王は巨大なウ○チを投げ付けようとすると、ピタッと止まる。

一同「？」

ナルガモン「なんだ？」

スカモン大王「か弱い女の子にウ○チを投げるなんてワシには出来ねぇ？」

リュウギ達は思いきりズッコケた。

ミソラ「な、何よコイツ…？」

リュウギ（と、取り合えず助かった…？）

スカモンA「そんなぁ～？見逃すんですか大王様？」

スカモン大王「お前らは黙っとれ…？」

スカモン大王はギロリと睨むと、スカモン達は怯えてちっちゃくなる。

スカモン大王「お詫びを入れよう…。ワシはか弱い女の子にウ○チを投げ付けるのは主義じゃないのでな…。」

ミソラ「一応助かったけど、なんかムカつくのは私だけ…？」
（ブツブツ…）
ミソラは陰でブツブツと呟きながら握り拳を作る。
リュウギ「ミソラ、それはきっと気のせいだって…？それよりスカモン大王だっけ…？ここってファクトリアルタウンなのか？」
スカモン大王「生意気なガキじゃ…？誰に口聞いとるんじゃ…？」
すると、リュウギもイラッときた。
リュウギ「ミソラ、やっぱり気のせいじゃないな…？」
（ブツブツ…）
ミソラ「でしょ？今すぐコイツをボッコボコにして、それから…」
（ブツブツ…）
レナモン「2人共、一旦落ち着こう…？」
レナモンは慌てて2人を落ち着かせる。
そして…。
ナルガモン「ゴミの山？デジタルワールドにこんな汚いトコがあるのかぁ？」
スカモン大王「やかましわッ？ここはワシらのマイホームじゃ？」

リュウギ「それより、ファクトリアルタウンへ行くには、どうやって行けばいいんだ?」

スカモン大王「やめておけ…。彼処は非常に危険な場所で、誰も入ってはいけない区域じゃ…。」

リュウギ「それで引き返せってか?そいつは御断りだな…。」

ミソラ「そうよ!私達は引き返すつもりなんてないから!」

キャンドモン「ミソラさん、余計な口を挟んじゃいますが、ただ地下水道を通るのがイヤなだけでしょ…?」

珍しくキャンドモンがツッコムと、ミソラの拳が飛んできた。

キャンドモン「ぐえっ!?」

リュウギ「それに、ここまで来たのに引き返したら俺の流儀に反する!どんな奴が現れようが正々堂々、真っ向勝負するだけだ!」

リュウギはそう言って拳を作り、自らの手のひらに打ち込む。

ミソラ「良い事言ったわリュウギ!それでこそリュウギよ!」

ミソラは珍しくリュウギのクセに感心する。

キャンドモン「やっぱり戻るのがイヤなだけじゃないですか…?」

キャンドモンはツッコムと、ミソラはギロリと睨む。すると、キャンドモンは口を塞ぐ。

キャンドモン「何でもありましぇん？」

スカモン大王「ならば仕方ない…。ファクトリアルタウンへ通じる道を教えてやろう…。ただし、条件がある！」

リュウギ「条件…？」

スカモン大王「ワシをミソラちゃんの花嫁に…」

ミソラ「はぁッ！！」

すると、ミソラはそこら辺に転がってるテレビを片手一本で粉々に叩き割った。

スカモン大王「え…？」

ミソラ「ごめんね、アナタの声が小さくて全く聞き取れなかったわ…。もう一回言ってくれる…？」

ミソラはそう言って笑顔を保ちながら拳をパキパキと鳴らす。

スカモン大王「ワ、ワシの子分が案内させる…？気を付けるのじゃぞ…？」

スカモン大王は慌てて言葉を訂正した。

リュウギ（あっさりと…？）

ナルガモン（おっかねぇ…？）

レナモン「ミソラ…？」

リュウギ達は思わず愛想笑いをする。

そして…。

スカモンはファクトリアルタウンへと繋がる秘密の通路を案内する。

スカモン「ここがファクトリアルタウンへと繋がる通路だじょ！」

リュウギ「ここがそうか…。すまないな。」

スカモン「いえいえ、大王様に言われた事をしたまでですから…。では、お気をつけて…。」

ミソラ「さっきから気になってたんだけど、ここってイビルス達がいないわよね？」

スカモン「イビルスはこういう汚い所が嫌いですから♪襲ってこないんですよ♪」

ミソラ「そうなんだ…？」

リュウギ「と言うよりか、今自分で汚いって言ったぞ…？いいのか…？」

リュウギは小さくツッコム。

スカモン「…こ、細かい事は気にしない？」

ナルガモン「誤魔化したぞ…？」

スカモン「それでは皆さん、お気をつけて～！」

リュウギ達はスカモンと別れを告げ、ファクトリアルタウンへと向かうのであった。

～ダイノ古代境～

一方、カイ達は…。

カイ「ようやく見つけた…。」

カイ達は立ち止まると、闇の柱がそびえていた。

ガオモン「カイ、早速壊しましょう。」

？？？「それは困るなぁ…。」

すると、闇の柱の前にストラティクモンが現れる。

ストラティクモン「はじめまして、私の名前はストラティクモン…。」

カイ「誰だか知らないが、そこを退け…。」

カイは手を広げると、巨大手裏剣、ギルガメッシュが現れる。

ストラティクモン「それが人に物を頼む言い方かね…？私は1つ、君にアドバイスを送りたいと思ってね…。」

カイ「俺は今機嫌が悪いんだ…。早く退かないと腕が飛ぶぞ…。」

ストラティクモン「ほう、エグザの言葉にイラだっているのか…？」

すると、カイはピタリと手を止めて眉を潜める。

カイ「なに…？」

ストラティクモン「力が欲しいと思わないか…？エグザよりも…。そして御縞　リュウギよりも…。」

ガオモン「騙されちゃダメですカイ！敵の罠に違いありません！！」

ストラティクモン「信じるか信じないかはお前の自由だ…。しかし、このチャンスを逃せばお前は一生負け犬のままになるぞ…？」

カイ「！？」

ストラティクモンの言葉にカイは戸惑い始める。

ガオモン「カイ…。」

ストラティクモン「さぁどうする？永遠の勝利を得るか、それとも永遠の敗北のまま朽ち果てるのか…。」

すると、カイはギュッと拳を握り締めた。

ガオモン「カイ？」

すると、カイの表情が険しくなっていき、いきなり怒鳴り声を上げた。

カイ「どいつもこいつも俺を見くびやがって…。嘗めるのも大概にしろッ！！」

ストラティクモン「永遠の敗北を選んだか…。実に哀れだな…。」

カイ「いや、俺は永遠の勝利を選んだ…。俺を見くびった事をたっぷり後悔させてやる！！行くぞ、ガオモン！！」

ガオモン「はい！！」

カイはＤ－アクセルをガオモンに翳した。すると、ガオモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ガオモン「ガオモン、超進化！！」

『マッハガオガモン！！』

ストラティクモン「果たしてできるかな…？負け犬のお前達に…？」

すると、カイとマッハガオガモンは一斉に攻撃を仕掛けた。

カイ・マッハガオガモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

EP39　～最凶の悪臭!?ダストキングダム　スカモン大王!?～（後書き）

オリデジの名前募集、御協力ありがとうございました!!

どれもこれも良い名前ばかりなのでかなり迷っています…?

結果は見事当選した人にメッセージ&特別なおまけを送ります!!

楽しみにしていてください!!

ＥＰ４０　～ファクトリアルタウンで大パニック？殺戮兵器　ギーゴモン？（前編）

ファクトリアルタウンで一体何が？

そしてミソラがアレになりきる？

ＥＰ４０スタート？

ＥＰ４０　～ファクトリアルタウンで大パニック？殺戮兵器　ギーゴモン？

～ファクトリアルタウン～

ここはゴミの山の隣にしてファイル島西岸部に構えられた巨大工場地帯。

リュウギ「ここがファクトリアルタウンか…。」

メカルクタウンと同様、鉄が削られる音と振動や、動いている機械の音、機械油の匂いなどが充満していた。

ミソラ「リュウギ、まさかアレじゃない？」

ミソラは指を差すと、その先にファクトリアルタウンの中心に闇の柱がそびえていた。

レナモン「どうやらそのようだな…。」

ナルガモン「よっしゃ！早速ブッ壊してやるぜ！！」

ナルガモンはやる気満々だった。すると、キャンドモンはそっと声を掛ける。

キャンドモン「あのぅ、今はそれ所じゃないですよぉ…？」

ナルガモン「あん？なんでだよ？」

キャンドモン「ボクら、囲まれてるんですよ…？」

ナルガモンは気が付くと、回りにはマシーン型デジモン達に包囲されていた。

ナルガモン「なんじゃこりゃ！？」

ミソラ「囲まれたわ！？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ギロモン、完全体、機雷型、ワクチン種、必殺技はデッドリーボム。

メカノリモン、成熟期、マシーン型、ウィルス種、必殺技はジャイロブレイク。」

ミソラ「ディスティングハーツ！！」

ミソラはギロモン達の体内を調べる。

ミソラ「メカノリモン達はイビルス。ギロモンはイビルガだわ！」

リュウギ「分かった！行くぞナルガモン！！」

ナルガモン「おう！！」

リュウギ達は戦う体勢に入ると、ギロモン達は慌てて退却した。

キャンドモン「あれれ…？みんな逃げちゃいましたよ…？」

ミソラ「レナモン、あなた何かしたの？」

レナモンは首を横に振る。

レナモン「私は何もしていない…。」

ナルガモン「これはアレだな！オレの迫力に怖じ気付いて逃げたんだなきっと♪ナッハハハ♪」

ナルガモンはそう言って高らかに笑う。

リュウギ「だといいんだが…？」

すると、背後から巨大な物影が迫ってくる。リュウギはドキッとする。

リュウギ「ミソラ…、前にもこんな事があったような…？」

ミソラ「確かに…？」

リュウギ達は同時に振り向くと、巨大なデジモンが唸り声を上げる。そのデカさは２０メートル近くもあった。

？？？「うぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

ミソラ「やっぱりいいいいいいい！？」

キャンドモン「きいいいいいいやゃゃゃゃゃゃゃゃゃ！？出たぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

すると、巨大なデジモンは巨大な手でリュウギ達に襲い掛かってくる。

リュウギ「くっ！！」

リュウギ達は素早く交わした。

ミソラ「何なのよあのデジモンは！？」

ミソラはＤ－アクセルで巨大なデジモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ギーゴモン、究極体、マシーン型、ウィルス種、必殺技はフォートレス・デストロイヤー。」

キャンドモン「きゅきゅきゅきゅきゅきゅ究極体！？ヤバイですって！？あんなバカデカイ奴と戦ったら瞬殺されちいますよ！？」

ギーゴモン「オレはダークスの１人…ギーゴモン。エクセリオン…ただちに抹殺する…。」

ナルガモン「ダークス！？って事はストラティクモンの仲間か！！」

キャンドモン「抹殺って言ってますよ！？超ヤバイって！？ごっさヤバイって！？早く逃げましょうよリュウギさん！？」

リュウギ「逃げる？悪いが俺は逃げようなんてこれっぽっちもねぇよ…。そもそも敵に背中を向けたら、俺の流儀に反するからな！」

キャンドモン「うそん！？ナルガモン、この戦闘オタクに何か言っ

てやってくださいよ？」

ナルガモン「リュウギの言う通りだぜ…。こんなバカデカイ奴をブッ飛ばして、ダークスの情報を聞き出そうぜ！あと、オレよりデカさで目立とうとしているアイツが超気に食わねぇッ？」

リュウギだけではなく、ナルガモンも戦う気満々だった。

キャンドモン「ダメだこりゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ！？」

ミソラ「そうよ！ここまで来たんだから後には退けないわ！！」

レナモン「同感だ…。」

キャンドモン「ちょっとぉぉぉぉぉぉぉぉ！？みなさんどうしちゃったんですかぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ギーゴモン「エクセリオン…抹殺する…。」

ナルガモン「やれるもんならやってみやがれ！！」

レナモン「ミソラ、頼む！」

リュウギとミソラはＤ－アクセルをナルガモンとレナモンに翳した。
データが上書きされ、姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、超進化！！」

『ドラグナモン！！』

レナモン「レナモン、超進化!!」

『タオモン!!』

リュウギ「一気に決めるぞ!!」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れた。

ドラグナモンは両腕の鋭い刃、ヒドゥンアサルトを構え、背中に背負うロケットエンジンを使ってギーゴモンに急接近した。

ドラグナモン「喰らいやがれ!!『ヒドゥンセイバー!!』」

鋭い刃でギーゴモンを切り刻んだ。

ギーゴモン「!?」

タオモン「まだだ!!」

タオモンは巨大な筆で呪文を唱えながら梵字を空中に描きギーゴモンに飛ばす。

タオモン「『梵・筆・閃!!』」

すると、梵筆閃を受けたギーゴモンは大爆発を起こした。

ギーゴモン「がはっ!?」

そして、リュウギはアルカナムを振りかぶる。

リュウギ「これで決める!!」

リュウギはアルカナムを振り下ろした瞬間、トリガーを引いて振動により斬撃の威力が増大して大爆発する。

ギーゴモン「!?」

爆煙が舞い上がる。リュウギは華麗に着地した。

タオモン「やったか…?」

ドラグナモン「なぁんだ、大した事ねぇじゃねぇかよ?」

リュウギ「だといいんだが…。」

すると、ギーゴモンは爆煙を切り開いてリュウギ達を薙ぎ払った。

一同「うわっ!?」

ミソラ「みんな!?」

爆煙が去ると、ギーゴモンは無傷だったのだ。

キャンドモン「うそん!?あんなに攻撃受けておきながらもヘッチャラかよ!?」

ギーゴモン「その程度か…?」

リュウギ「クソッ…。」

（なんて身体しているんだ…。）

ギーゴモンは手を広げてリュウギを捕まえようとする。

ドラグナモン「くっ、リュウギ!?」

タオモン「マズイ!?」

すると、ミソラが身体を張ってリュウギを守る。

ミソラ「待ちなさいよ!!これ以上リュウギに手出ししたら、私が許さないんだから!!」

リュウギ「バカッ!!逃げろミソラ!?」

その時、ギーゴモンの手がピタッと止まった。

一同「!?」

リュウギ（今だ!!）

隙を読んだリュウギはアルカナムでギーゴモンの手を壁に叩き付けた。

ギーゴモン「!?」

タオモン「ここは一旦逃げよう!!」

リュウギ「あぁ…。」

リュウギは止むを得なくその場からギーゴモンから離れた。

ギーゴモン「待て、エクセリオン…。」

リュウギ達は何とかギーゴモンから逃げ切れた。

ミソラ「ここまで来ればもう大丈夫ね…。」

ドラグナモンとタオモンは成長期へと退化した。

ナルガモン「あの野郎、どんだけ馬鹿力なんだよ…？」

レナモン「私達の攻撃が全く効いていなかった…。奴を倒すのは困難だ…。どうする、リュウギ…？」

すると、リュウギは腕を組んで考えていた。

リュウギ（あの時、なぜギーゴモンは止まったんだ…？）

ミソラ「リュウギ…？」

すると、リュウギはミソラを見つめる。すると、リュウギはハッした。

リュウギ「もしかしたら…。」

ミソラ「え？」

ナルガモン「何か良い事思い付いたのか！？」

リュウギ「あぁ…。ハッキリ言って、今の状況でギーゴモンを倒す

のは、レナモンの言う通り非常に困難だ…。」

リュウギのまさかの発言に、ミソラ達の目が丸くなる。

リュウギ「おい、どうしたんだよお前ら…？」

ミソラ「い、いや…？」

レナモン「リュウギがこんな事言うの、余りにも珍しいから…？」

キャンドモン「リュウギさん、成長しましたね…。ボクチン感激です…（泣）」

リュウギ「あのなぁ…？」

ナルガモン「んで、どうするんだよ？」

リュウギ「アイツを倒したいのは山々だが、俺達の目的は闇を柱を壊す事だ…。」

ミソラ「でも、ギーゴモンが居る限り、闇の柱には近づけないわよ…？」

リュウギ「俺の推測が正しければ、この状況を一気に逆転できるかもしれない…。」

一同「え！？」

リュウギ「みんな、耳を貸してくれ…。」

リュウギはみんなに作戦を伝える。

ミソラ「それ、正気なの…？」

リュウギ「あぁ…。」

ナルガモン「良い作戦だな！」

レナモン「私も賛成だ…。」

キャンドモン「ボクチンも賛成です！！ミソラさんの…」

すると、ミソラはキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ぐへっ！？」

ミソラ「冗談じゃないわ？何で私がこんな恥ずかしい事しなきゃならないのよッ？」

すると、リュウギはミソラの肩にポンと手を置く。

リュウギ「頼むミソラ…。これはお前に懸かっているんだ…。」

すると、ミソラは顔を赤らめる。

ミソラ「わ、分かったわよ…？けど、これっきりだからね…？」

リュウギ「よし、作戦開始だ！」

一方、ギーゴモンは…。

ギーゴモン「何処だ…エクセリオン…。」

すると、遠くから音楽が聞こえてくる。

ギーゴモン「？」

ギーゴモンは音楽に反応して確かめに行く。

ギーゴモン「！？」

ギーゴモンが見たものは、ミソラとライラモンのメイド服姿だった。

ミソラ・ライラモン「お帰りなさいませ、御主人様～♪」

ギーゴモン「……。」

ライラモン（リュウギ様のために精一杯やりますわ！！）

ミソラ（やっぱり断ればよかった…？）

ミソラは笑顔を保ちながら眉をピクピクと動かす。因みに、メイド服の衣装はワームモンの手作りである。

ライラモン（あ～、この姿をリュウギ様に御見せしたいわ～？）

ミソラ（ちっとも反応しないじゃない…？本当に大丈夫なの…？）

ギーゴモン「うぉぉぉぉぉぉぉぉ！？」

すると、ギーゴモンは興奮してオーバーヒートした。

ミソラ（うそ…？）

ライラモン（大成功ですわ♪どうしますミソラさん？『へ○ーローテーション』でも歌います？）

ミソラ（え？私、A○BよりもK○RAの方が…？っていうか何でアンタA○B知ってるのよ！？）

ギーゴモン「へ○ーローテーション…。」

ミソラ「って、なんでアンタも知ってるのよッ！？こうなったらヤケよ。行くわよライラモン！」

ライラモン「分かりました！！」

ミソラとライラモンはへ○ーローテーションを熱唱するのであった。

一方、リュウギ達は…。

ミソラ・ライラモン「Ｉ　ｗａｎｔ　ｙｏｕ！Ｉ　ｎｅｅｄ　ｙｏｕ！Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ！…」

リュウギ「やっぱり思った通りだったな。」

タオモン「まさか、ショウと同じく女に弱いとは…？」

キャンドモン「見たかったなぁ～、ミソラさんのメイド服姿…。」

（グスン…）

リュウギ「お前が居たら作戦が台無しになるからな…？みんな、今の内に闇の柱を壊すぞ！」

一同「おう！！」

闇の柱に辿り着くと、先程のギロモン達が待ち伏せていた。

タオモン「やはり思い通りにはいかないか…。」

ドラグナモン「邪魔だ！！」

ドラグナモンは両肘に装備しているヒドゥンアサルトで敵を次々と倒していく。

メカノリモン達「ギャャャャャャャャ！？」

ギロモン「喰らいやがれ！！『デッドリーボム！！』」

ギロモンは巨大なボムを投げ付けた。

タオモン「させない！『孤封札？』

タオモンは霊札を投げ付けて巨大なボムを無力化にした。

ギロモン「なに？」

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギはアルカナムでギロモンを切り刻んだ。

ギロモン「ギャャャャャャャャャャャャ？」

ギロモンは力付きて倒れ、体内からイビルガが現れた。

イビルガ「クソッタレが…。こうなったら貴様をのっとってやる！」

すると、イビルガはキャンドモンに襲い掛かる。

タオモンは巨大な筆で文字を描いて飛ばした。

タオモン「喰らえ？『梵・筆・閃？』」

イビルガに直撃し、大爆発を巻き起こした。

イビルガ「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

イビルガは完全に消滅した。

リュウギ「ドラグナモン、気付かれたのかもしれないぞ！」

ドラグナモン「言われなくても分かってるぜ？ＣＯＯＬに決めてやるぜ？」」

ドラグナモンは背中に背負うロケットエンジンを上空へと打ち上げた。すると、ロケットエンジンに仕込まれた大量の追尾型ミサイルを一斉に発射される。大量の追尾型ミサイルは闇の柱に向かっていく。

そして、ドラグナモンは両胸の砲門から漆黒のミサイルを発射する。

ドラグナモン「喰らいやがれ？『デッドリーアートルム！！』」

全てのミサイルは闇の柱に直撃し、闇の柱は粉々に粉砕した。

キャンドモン「やりました！」

ドラグナモン「Ｊａｃｋ　ｐｏｔ？」

すると、闇の柱を壊した場所から光が溢れ出した。

一同「？」

すると、リュウギのＤ－アクセルが反応した。

リュウギ「Ｄ－アクセルが反応して？」

すると、Ｄ－アクセルから聖なる輝きに満ち溢れたデジエクスフィールドが展開され、ファクトリアルタウンを包んだ。

タオモン「これは一体…？」

一方、ミソラとライラモンは…。

ミソラ「上手くいったみたいね！」

ライラモン「流石は私のリュウギ様？」

ギーゴモン「？」

すると、ギーゴモンの様子がおかしくなる。

ミソラ（ギーゴモンの様子がおかしいわ？）

ギーゴモン「ギーゴモン…光、嫌い…。撤退だ…。」

ギーゴモンはそう言って闇の中へと消えていった。

ミソラ「行っちゃった…。」

リュウギ「ミソラーー！」

すると、リュウギ達が駆け付けてくる。すると先に飛んできたのは、やはりキャンドモンだった。

キャンドモン「ミソラすぁ～～～ん？『お帰りなさいませ御主人様？』ってボクチンを迎えてぇぇぇぇぇぇぇ？」

？ミソラは読めたのか、素早く交わしてカウンターパンチングを繰り出した。

キャンドモン「ひぎゃんッ？」

ミソラ「死んでも言うか…。」

リュウギ達は愛想笑いする。

リュウギ「だ、大丈夫か…？」

ミソラ「上手くいったみただね！よかっ…」

ライラモン「リュウギ様～？」

その時、ライラモンがリュウギに飛び付いて思いっきり抱き締めた。

リュウギ「んなッ？バカッ、離れろ？」

リュウギは引き離そうとするが、ライラモンは全く離れようとしない。

ライラモン「私とリュウギ様の愛の大勝利ですわ～？」

ミソラ「リュウギ、あんたねぇ…。私がどれだけ恥ずかしい思いをしたか解ってるの…？」

ミソラはそう言って拳を握り締める。

リュウギ「待てミソラ？こいつが勝手に…」

ミソラ「バカァァァァァァァ？」

（パシィーーーーン？）

ビンタの音がファクトリアルタウンに響き渡った。

そして…。

ギロモン「すまなかったなぁ…。ケガはなかったか？」

ミソラ「私達なら大丈夫よ！」

ギロモン「いやでも、アンタの後ろの人達、エラい事になってるんだけど…。」

リュウギの右頬にデカい手形が残り、そしてキャンドモンの顔面がボロボロになっていた。

ギロモン「まさか、オレ達がやったのか…?」

ミソラ「違うわよ!ね、リュウギ?」

リュウギ・キャンドモン「はい、ごもっともです…。」

ナナモン「幼馴染みって大変だなぁ…。」

ポコモン「そうだね…。」

ミソラ「ギロモン、この近くに怪しい柱を見なかった?」

ギロモン「オレには分からないが、ダイオン郷にいるトノサマゲコモンに会ったらどうだ?」

リュウギ「トノサマゲコモン?そいつもデジモンなのか?」

ギロモン「トノサマゲコモンはジジモンとの仲が良いからな…。」

ナナモン「よっしゃ、早速いってみようぜ!」

ギロモン「ダイオン郷なら、ここから北東にあるぜ!」

リュウギ「分かった。ありがとな!」

ギロモン「出口は開けといた。武運を祈るぜ！」

こうしてリュウギ達は、ファクトリアルタウンの住人と別れを告げ、北東にあるダイオン郷へと向かうのであった。

ｌｌＴｏ　？Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

ＥＰ４０　～ファクトリアルタウンで大パニック？殺戮兵器　ギーゴモン？（後

次回はダイオン郷！

またしてもトラブルが…。

次回もお楽しみに？

Ｅｐ４１　～心に届け？デジモン歌合戦？～（前書き）

今回は歌合戦？

なんとブレイブエクセリオンが熱唱する？

Ｅｐ４１スタート？

ＥＰ４１　～心に届け？デジモン歌合戦？～

～ゲッコー湿地～

ここは小さな沼地。そこにはカエルの鳴き声が聞こえてくる。

リュウギ「ダイオン郷って一体何処にあるんだ？」

ナルガモン「本当はないんじゃないの？」

レナモン「なら、みんなの言う事は嘘になるぞ…？」

それは、数分前に遡る…。

～ギアサバンナ～

リュウギ「ようやくでれたな…。」

すると、ギアサバンナのデジモン達が迎えてくれた。

ピヨモン「お帰りなさい！」

ミソラ「みんな？」

レオモン「どうやら、上手くいったみたいだな…。」

リュウギ「あぁ。ファクトリアルタウンはもう大丈夫だ。」

エレキモン「それで、これからどうするんだ？」

ポコモン「ダイオン郷に行きたいんだけど、どうやっていくか分からないか…？」

ピヨモン「ダイオン郷ならここから北東に向かえばあるよ！」

レオモン「ダイオン郷ならすぐに見つかる。心配ない。」

リュウギ「分かった。ありがとな。」

ーーーーーーーーーーーーーーー

ナルガモン「確かにそうだよなぁ…。でも、何処にもないんだぜ？」

リュウギ「う～ん…。」

リュウギは腕を組んで考える。

ミソラ「ねぇ、あそこに誰かいるよ。」

ミソラは指をさすと、その先に青色の身体をしたデジモンがいた。

リュウギ「アイツは…？」

リュウギはＤ－アクセルでデーターを読み取る。

Ｄ　－アクセル「オタマモン、成長期、両生類型、ウィルス種、必殺技はララバイバブル。」

ミソラ「あら、可愛らしいデジモンね。」

ナルガモン「おい、ちょっと聴きたい事があんだけど…。」

オタマモンは振り向くと、眼光鋭く光らせる。

オタマモン「きしゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？」

一同「？」

ミソラ「気を付けて、イビルスに操られているわ？」

ナルガモン「だったら任せな！『ヒドゥンブレイド？』」

ナルガモンは両肘のブレイドでオタマモンを切り刻んだ。

オタマモン「ギャャャャャャャャャャャャ？」

すると、オタマモンの体内からイビルスが現れ、慌てて奥へと逃げ込む。

キャンドモン「逃げましたよ？」

ナルガモン「逃がすか？」

ナルガモンは追い掛けようとすると、思わず脚を止めた。

ナルガモン「んなッ？」

森の奥からデジモンの大群が姿を現す。

ミソラ「何でこんなにいるの？」

Ｄ－　アクセル「ゲコモン、成熟期、両生類型、ウィルス種、必殺技はクラッシュシンフォニー。」

ゲコモン達「ゲコゲコゲコゲコ…。」

すると、ゲコモン達はリュウギ達を囲み、完全に逃げ場をなくした。

レナモン「くっ、囲まれたか…。」

ミソラ「どうする、リュウギ？」

リュウギ「どうするもこうするも、戦うしかねぇだろ？行くぞ、ナルガモン？」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳そうとしたその時、ゲコモン達は一斉に超音波を放った。

ゲコモン達「『クラッシュシンフォニー？』」

一同「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギ達は超音波に苦しみ、やがて気を失った。

ーーーーーーーーーーーーーー

リュウギ「う、う～ん…。」

リュウギは目を覚ますと、全く見知らぬ場所だった。

リュウギ「ここは一体…？」

リュウギは辺りを見回すと、広い和室だった。まるで、時代劇に出てくる城のように…。そしてその広い和室にはリュウギ１人だけだった。

？？？「ようやく目が覚めたゲコか？」

リュウギは振り向くと、ゲコモンより巨大なデジモンが座っていた。

リュウギ「？」

（なんだコイツは？）

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「トノサマゲコモン、完全体、両生類型、ウィルス種、必殺技はコブシトーン。」

トノサマゲコモン「ようこそ、ダイオン郷へ？ワシはダイオン城の殿様、トノサマゲコモンじゃ？」

リュウギは気が付くと、イビルスに支配されたゲコモンに囲まれていた。

リュウギ「なるほど…。お前、イビルガだな…？」

トノサマゲコモン「ご名答！ストラティクモン様に任されて、このダイオン郷を支配しているのじゃ！」

リュウギ「ミソラ達をどこへやった？」

トノサマゲコモン「心配ない。あやつらは別の部屋に閉じ込めておる。お主に用があってこの部屋に連れて来たのじゃ。」

リュウギ「何が目的だ…？」

トノサマゲコモン「ここで始末したい所じゃが、それじゃ面白くない…。どうじゃ、ワシと勝負しないか…？」

リュウギ「勝負だと…？」

トノサマゲコモン「ワシと音楽対決するのじゃ！」

すると、部屋全体に長い沈黙が流れる。

リュウギ「……はぁ？」

トノサマゲコモン「最近退屈でのぅ…。というわけで、今からワシと勝負しろ。」

リュウギ「それ、理由になってないぞ…。」

リュウギは小さくツッコム。

トノサマゲコモン「お主が勝てば潔くここから去ってやろう。だがお主が負けた場合、お主らの仲間含め、全員この場で切腹をしてもらう！」

リュウギ「なに？」

トノサマゲコモン「勝負は3時間後に行う！おい、こやつを部屋に閉じ込めろ！」

ゲコモン達「ゲコ？」

一方、ミソラ達は…。

ミソラ「リュウギ、何処にいったのかしら…？」

キャンドモン「まさか、殿様に打ち首獄門されたんじゃ……きぃぃぃぃぃぃぃやぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

すると、ナルガモンとミソラはキャンドモンを袋叩きにする。

ナルガモン「勝手にリュウギを殺してんじゃねぇよ？」

ミソラ「ホンッとに最低ね？」

キャンドモン「冗談ですって、ほんのアメリカンジョークですって？」

ナルガモン・ミソラ「やかましわぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

レナモン（はぁ～…。）

レナモンは呆れてため息をたつく。

すると、襖が開かれて、そこからリュウギが飛んでくる。

リュウギ「うわっ？」

投げ飛ばされたリュウギは尻を強打する。

一同「リュウギ？」

ゲコモン「3時間後にくるからな！」

ゲコモンはそう言って襖を閉めた。

リュウギ「いっつ～…。」

ミソラ「良かった…。無事だったみたいだね。」

キャンドモン「僕はてっきり打ち首獄門されたのかと…」

ナルガモン「うりゃ？」

ナルガモンは両肘のブレイドでキャンドモンを切り刻んだ。

キャンドモン「ぐへっ？」

ミソラ「いい加減にしないと、打ち首獄門するわよ…。」

レナモン「ミソラ、一旦落ち着こうよ…。」

リュウギ「それよりみんな、とんでもない事になった…。」

一同「え？」

リュウギは先程の事をミソラ達に話した。

ミソラ「トノサマゲコモンと音楽対決ですって？」

リュウギ「あぁ…。」

レナモン「私、歌は苦手だ…。」

ナルガモン「面白そうじゃん♪」

ミソラ「アンタねぇ…。状況分かってるの？」

ナルガモン「心配すんなって！ＣＯＯＬに目立ってやろからよ♪」

すると、ミソラは握り拳を作り、ナルガモンにゲンコツをかました。

ナルガモン「いってぇぇぇぇぇぇ？」

ミソラ「誰も期待してないわよ…。それで、肝心な歌はどうするのよ？」

リュウギ「心配ない。歌はこれから決める。」

ミソラ「どうやって？」

リュウギ「これさ。」

リュウギはポケットからｉＰｏｄ　ｔｏｕｃｈを取り出した。

ミソラ「ｉＰｏｄ　ｔｏｕｃｈ？いつの間に持っていたのよ？」

リュウギ「ま、まぁ細かい事は気にするな…。」

ミソラ「気にするわよ？ここまできてなにその急な設定？」

リュウギ「気が付いたらポケットの中に入っていたっていう設定で…。ここから曲を探そう。」

リュウギはｉＰｏｄ　ｔｏｕｃｈで曲を探す。すると、ｉＰｏｄｔｏｕｃｈからロック的な曲が流れる。

『街角は色めく　？少女らの縄張り　寂しがりなおさげ　？つむじ風にゆれて…♪』

ナルガモン「おっ？いいねこれ♪
心が揺さぶるぜ♪リュウギ、なんなんだこれは？」

リュウギ「Ｄ○ＳＥの修羅さ。俺的には悪くないけど…」

ミソラ「私は却下。歌にはやっぱ意味がこもってなきゃダメよ！」

リュウギ「だったらＡ○Ｂか？」

ミソラ「イヤ。」

即答だった。

リュウギ「それじゃどうするんだよ？」

ナルガモン「えぇ？修羅にしようぜ♪」

ミソラ「あれ？これって確か…。」

ミソラはｉＰｏｄ　ｔｏｕｃｈを操作をして曲を選択をする。

『タフなハート何度でも戦うと　？決めた時から止まらないマイロード　？小さなプライド背負って　拳を握って　？また一歩一歩ゴールを目指し全力疾走…♪』

ミソラ「あら、いいじゃないのこれ♪何だか元気が湧いてくるわ♪これって、ソナー○ケットのネバギバじゃない♪」

リュウギ「これ、何かのＯＰでやっていたような…。」

キャンドモン「そんな事よりミソラさんのメイド服姿の方が…」

すると、ミソラは思いっきりキャンドモンん蹴り飛ばした。

ミソラ「却下って言ってるでしょうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

キャンドモン「ひぎゃんッ？」

キャンドモンは果てしなく飛んでいった。

リュウギ「なぁ、せっかくだから俺達にピッタリな曲を探さないか？」

ナルガモン「だったら修羅だろ？オレには修羅しかないぜ♪」

ミソラ「ネバギバでしょ？」

リュウギ「う～ん…。」

すると、曲が流れてくる。

リュウギ「あれ？」

ミソラ「良い曲じゃないの？」

ナルガモン「悪くねぇじゃん♪誰だよこの曲チョイスしたのは？」

キャンドモン「ボクじゃないですよ…。」

リュウギ達はチラッと後ろを見ると、この曲をチョイスしたのはレナモンだった。

レナモン「わ、私はただ何となく…。」

リュウギ「歌が苦手の割には、意外とセンスあるんだな…。」

ミソラ「やるじゃないのレナモン♪」

レナモン「……。」

リュウギ達に褒められたのか、レナモンの顔が赤くなる。

リュウギ「よし、この曲に問題ないか？」

一同「賛成♪」

リュウギ「よし、早速練習するぞ？」

リュウギ達はレナモンがチョイスした曲で練習を始める。

それから、あっという間に3時間が経った。

～ダイオン城　殿の間～

ゲコモン「只今より、殿ｖｓエクセリオンの歌合戦を始めるゲコ？」

すると、ゲコモン達の歓声が沸き上がる。

ミソラ「ついに来たわね…。」

キャンドモン「なんか緊張してオシッコが…。」

ミソラ「ちょっと、近寄らないでよね？」

トノサマゲコモン「先攻はワシから歌わせて貰う！」

トノサマゲコモンはそう言ってマイクを持って舞台に立つ。

リュウギ「一体、何を歌うんだ…？」

ミソラ「どうせ、カエルのうたじゃないの？」

レナモン「だと良いんだが…。」

ゲコモン「では、殿の天城越えです！」

すると、リュウギとミソラはズッコケた。

ミソラ「って演歌かよ？」

リュウギ「ていうかなんでアイツ、天城越え知ってるんだよ…。」

リュウギは小さくツッコム。

トノサマゲコモンは熱唱すると、ゲコモン達の歓声が沸き上がる。

トノサマゲコモン「決まったゲコ…。」

リュウギ「どんだけ上手いんだよ…？」

ミソラ「アイツ、かなりの演歌マニアね…。」

トノサマゲコモン「どうだ、ワシの完璧なる歌は？潔く降参じゃな♪」

リュウギ「降参だと？悪いが俺達は引き下がるつもりはない！」

ミソラ「そうよ！私達は声じゃなく、ハートで勝つんだから！」

キャンドモン「そうです！ボクチンとミソラさんの愛の歌で…」

すると、ミソラは肘鉄を喰らわした。

キャンドモン「ぐへッ？」

ミソラ「アンタは黙ってなさい…。」

キャンドモン「はい…（泣）」

トノサマゲコモン「お主らの番じゃぞ。」

ナルガモン「言われなくても分かってるぜ！」

リュウギ「よし、行くぞみんな！」

ゲコモン「それでは、エクセリオンの青空です。」

熱唱するブレイブエクセリオン。その歌には元気が、湧いて来る勇気の歌だった。

トノサマゲコモン達「う、うぅ、うおぉぉぉぉぉぉぉ？」

すると、トノサマゲコモン達の体内からイビルガ達が現れた。

イビルガ「くそっ、なんて暑苦しいんだ…。」

ミソラ「リュウギ！イビルガ達よ！」

リュウギ「チャンスだ！行くぞナルガモン！」

ナルガモン「おう！」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。ナルガモンのデータは上書きされ、姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化？」

『ソニックドラモン？』

ソニックドラモン「見せてやるぜ、オレ達の絆を？」

すると、リュウギのＤ－アクセルから更に光が生じる。

リュウギ「久しぶりに行くぜソニックドラモン？ＥＸモード、発動？」

すると、ソニックドラモンの回りに激しい突風が舞う。

突風が去ると、ソニックドラモンの身体から光のオーラが纏う。

イビルガ「なに？」

ソニックドラモン「ＣＯＯＬに反撃だぜ？」

ソニックドラモンは目にも止まらない早さでイビルガを殴り飛ばした。

イビルガ「ぐはっ？」

イビルガは壁に激しく叩きつかれた。

イビルガ「くっ、イビルス達よ、オレに力を貸せ？」

イビルス達はイビルガなの体内にはいろうとする。

ソニックドラモン「させるかよ？『ヒドゥンスラッシュ？』」

両肘のブレイドから漆黒の炎に包まれ、目にも止まらない早さでイビルス達を切り刻んだ。

イビルス達「ギィィィィィィィィィ？」

イビルス達は跡形も無く消滅した。

イビルガ「なに？」

ソニックドラモン「喰らいやがれ？『アートルムバースト？』」

ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、口から漆黒に包まれた灼熱の炎を吐いてイビルガを焼き尽くした。

イビルガ「ギャャャャャャャャャ？」

イビルガは跡形も無く消滅した。

リュウギ「よし！」

ミソラ「やったわ！」

ソニックドラモン「Ｊａｃｋ　ｐｏｔ？」

そして…。

デジエクスファールドを展開し、ダイオン郷は平和となった。

トノサマゲコモン「いやぁ、大変すまなかったゲコ…。」

リュウギ「謝らなくてもいいさ。」

ミソラ「そうよ、悪いのはイビルガなんだから。それに、今回は楽しかったわ♪」

トノサマゲコモン「いやぁ、お主達の歌は何と言っても素晴らしい♪」

ゲコモン「そうゲコ♪聞いてたら元気が湧いてくるゲコ♪」

ナルガモン「よし、だったらオレ達のテーマ曲にしようぜ♪」

ミソラ「よく言うわ…。さっきまで修羅にこだわってたクセに…。」

ミソラは呆れてため息をつく。

トノサマゲコモン「これからどうするのじゃ？」

リュウギ「そうだ！この辺りに闇の柱を見なかったか？」

トノサマゲコモン「闇の柱なら、ここから北にある『おもちゃのまち』で見たぞ！」

ミソラ「おもちゃのまち？このデジタルワールドにそんな場所があるの…？」

ナルガモン「よし、早速行こうぜ♪」

ゲコモン「けど、そこへ行くには『ミスティツリーズ』を通らなきゃならないゲコ！彼処は霧がかかって簡単に迷っちゃうゲコ！」

ミソラ「え？また霧なの？」

トノサマゲコモン「心配ないゲコ！ワシの術で迷わないようにしてやろう！」

すると、トノサマゲコモンは扇子を取り出し、急に踊り出した。

リュウギ（だ、大丈夫かよ…。）

すこし不安になるリュウギ。すると、紫色の粉がリュウギ達に降り掛かった。

トノサマゲコモン「これでもう安心だゲコ！」

ミソラ「ありがとう！」

リュウギ「よし、おもちゃのまちに向かって出発するぞ！」

一同「おーう？」

トノサマゲコモン「気を付けるのじゃゲコ！」

こうしてリュウギ達は、トノサマゲコモン達と別れをつげ、ミスティツリーズへと向かうのであった。

——To Be Continued……

Ｅｐ４１　～心に届け？デジモン歌合戦？～（後書き）

テーマ曲はソナーポケットの『青空』です♪

自分なりに好きだったのでチョイスしました！皆さんも是非、聞いてみてくださいね♪

『青空』はソナーポケットのアルバム、ソナポケイズム２に収録しています！あとクロスウォーズのＯＰ、『ネバギバ！』も収録しています！

話は急に変わりますが、『†デジモン　エグザ０２†　～Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ～』にて、人気投票を行っています？

〆切は６月１５日です！

アンケートのご協力をお願い致します！

それでは次回もお楽しみに？

Ｅｐ４２　～時計仕掛けのおもちゃのまち？リュウギｖｓカイ？～（前書き）

今回はまさかのリュウギｖｓカイ？

戦う訳とは一体…？

Ｅｐ４２スタート？

ＥＰ４２　～時計仕掛けのおもちゃのまち？リュウギｖｓカイ？～

～ミスティツリーズ～

ここは、ゲッコー湿地から少し離れたところにある森。そこには霧に包まれていた。

リュウギ「どうやら、ここがミスティツリーズみたいだな…。」

ミソラ「私、霧苦手なのよねぇ…。」

その理由は、前にもスレッド大陸のミストフォレストで迷い込んだからだ。

レナモン「心配ない。トノサマゲコモンの術のお陰で、私達は迷う事はない…。」

ナルガモン「ところで、おもちゃのまちって一体何処にあるんだよ？」

キャンドモン「全く道が見えないんですけど、本当に大丈夫なんですかぁ？」

リュウギ「ここで立ち止まっていても何も始まらない…。先へ進もう。」

リュウギ達は先に進もうとすると、霧の中から黒い人影が見えてくる。

レナモン「誰かいる？」

一同「？」

リュウギ達は戦う大勢に入って警戒する。

黒い人影は全く動じない。リュウギ達はゆっくりと近づいていくと、とんでもない者と出会った。

リュウギ「カ、カイ…？」

そう、黒い人影の正体はかつてコロシアムで激闘を繰り広げた男、カイだった。

カイ「……。」

ナルガモン「テメェ、なんでこんな所にいるんだよ！」

カイ「……。」

しかし、カイは何も答えない。

ナルガモン「おい、無視してんじゃねぇよ？」

リュウギ「カイ、まさかお前もおもちゃのまちを探しているのか…？」

カイ「クククク…。」

すると、カイは突然と笑いだした。

ナルガモン「何が可笑しいんだよテメェ！」

ミソラ「カイ…？」

すると、カイは背中を向けて走り出した。

リュウギ「カイ？」

レナモン「マズイ、カイは術が掛かっていない！」

ミソラ「早く止めなきゃマズイわよ？」

リュウギ「追うぞ！」

リュウギ達は急いでカイの後を追う。

ナルガモン「何なんだよアイツ、急に笑いだしたり、急に走り出したりしてよぉ？」

キャンドモン「知りませんよ？」

リュウギ（アイツ、本当にカイなのか…？）

すると、霧が段々と晴れてくる。

ミソラ「霧が消えたわ？」

ナルガモン「まさか、オレ達森から抜けたのか？」

すると、リュウギ達は足を止めた。リュウギ達が見たものは、たくさんのぬいぐるみや様々なおもちゃがあった。そこはまるでおもちゃの国に来たかのように…。

ミソラ「リュウギ、ここってひょっとして…？」

リュウギ「間違いない…。ここがおもちゃのまちのようだな…。」

ナルガモン「それよりあの野郎、一体何処へ行ったんだぁ？」

するとリュウギは腕を組んで小さく呟く。

リュウギ「まさか、カイが案内してくれたのか…？」

レナモン「しかし、カイは術が掛かっていない…。この場所を知っているなんて、余りにも不自然すぎる…。」

ミソラ「確かにそうだよね…。」

ミソラは腕を組んで納得する。

キャンドモン「ボクチンの予想外なんですけど、カイってまさかリュウギさん達に闇の柱を壊す手伝いをして欲しいんじゃないんですか？」

リュウギ「アイツに限ってそれはない…。なんと言っても、アイツはアイツなりのプライドがあるからな…。それより一番気になるのは、さっきの行動だ…。まるで、俺達をこの場所に誘い込むような感じがした…。」

すると、ぬいぐるみの陰からカイが現れる。

一同「カイ？」

カイ「御縞　リュウギ…。もう一度俺と勝負しろ…。」

リュウギ「なに？」

ミソラ「いきなり何言ってるのよアンタ！私達はやる事があるんだから！」

カイ「黙れ…。今すぐ俺と勝負しろ…。」

カイはそう言って右手を広げ、巨大手裏剣、ギルガメッシュが現れる。

リュウギ「カイ、今はお前と争ってる暇はないんだ！デジタルワールドは俺達エクセリオンに託されてるんだ？」

？？？「そいつに何度言っても無駄だ…。」

すると、カイの背後からダークスの１人、ストラティクモンがあ現れる。

ナルガモン「テメェはストラティクモン？」

ストラティクモン「まさかあの殺戮兵器　？ギーゴモンから逃げ切れるとはなぁ…。褒めてやろう…。」

リュウギ「カイに何をした？」

ストラティクモン「そう熱くなるな…。この少年は私に力を求めて来た…。だから私はこの少年の手助けをしてやったのだ…。」

リュウギ「なんだと？」

ストラティクモン「さぁカイよ、新たに手に入れた力でリュウギを倒すのだ！」

カイ「言われなくてもそのつもりだ…。」

カイの身体から闇のオーラが溢れ出す。

リュウギ「カイ…。」

カイはギルガメッシュを構え、目にも止まらない早さでリュウギに襲いかかる。

リュウギ「？」
（早い？）

リュウギはとっさの判断でガンブレード、アルカナムを取り出して斬撃を受け止めた。

ミソラ「リュウギ？」

ナルガモン「この野郎！」

ナルガモンとレナモンは助太刀しようとする。

ストラティクモン「そうはさせん！」

ストラティクモンは手を広げると、リュウギとカイの周辺に闇の結界が張られた。

レナモン「なに？」

ナルガモン「だったら壊すまでだ？『ヒドゥンブレイド？』」

ナルガモンは両肘のブレイドで攻撃する。しかし、全くビクともしない。

ナルガモン「クソッ、なんて頑丈なんだよ…。」

キャンドモン「ちょっと、これってリュウギさんピンチじゃないですか？」

ミソラ「リュウギ…。」

～闇の結界～

リュウギ「クソッ…。」

カイ「これで邪魔者は消えた…。来い、御縞　リュウギ…。」

リュウギ「待てよカイ！これはストラティクモンの罠なんだ！だからここで争ってる場合じゃ…」

すると、カイはその場でバック転し、ギルガメッシュを投げた。

リュウギ「くっ！」

リュウギはアルカナムでギルガメッシュをはじき返した。

カイ「アイツの罠だろうが、俺には関係ない…。俺の目的はただ1つ…。デジタルワールド最強のテイマーになる事…。そのためには御縞　リュウギ、貴様を倒さなければならないのだ？」

リュウギ「何でだよ…？何でそこまでして強さに拘るんだ？」

カイ「貴様には関係のない事だ…。さっさと構えろ…。それとも怖じ気づいたのか…？」

カイは弾き返したギルガメッシュを掴み取り、低く構える。
すると、リュウギの目付きが変わった。

リュウギ「分かった…。口で言っても解らないのなら、身体で解らせてやる！」

リュウギはそう言ってアルカナムのトリガーを引いて銃弾を放つ。

カイ「フッ…。」

カイは小さく笑うと、素早く銃弾を交わす。

リュウギ「？」
（コロシアムの時より早くなってる？）

カイ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カイはギルガメッシュで振り上げるように振ると、剣風によって生み出された闇の衝撃波を放つ。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

対するリュウギもアルカナムんを振り下ろして剣風によって生み出された衝撃波を放つ。

すると、お互いの衝撃波がぶつかり合い、大爆発した。

リュウギ「どうなっているんだ…？まるで別人だ…。」

カイ「それはなぁ…」

すると、カイが爆煙を切り開き、リュウギを蹴り飛ばして闇の結界に叩き付けた。

リュウギ「ぐはっ？」

次に、カイは片手でリュウギの首を押さえ付けて首を絞める。

リュウギ「かはっ？」

カイ「ストラティクモンから貰った新たなる力、闇の力なんだよ…。」

リュウギ「な…に…？」

カイ「最高だ…。この力さえあれば、お前の敵じゃない…。」

リュウギ「カイ…、闇に囚われるな…。」

すると、カイは徐々にチカラを入れてリュウギを苦しめる。

カイ「よく言うなぁ…。お前だって闇の力を利用していたクセに…。」

リュウギ「？」

カイ「コロシアムの準決勝、エグザとの戦い…。あの時のお前はもはやお前じゃなかった…。憎しみと悲しみに囚われたバケモノだったんだよ？」

すると、リュウギは当時の頃の記憶が頭の中に遮る。

リュウギ「そ、それ…は…。」

カイ「なぜ俺に勝てないのか教えてやる…。お前は闇を恐れ、闇を受け入れないからだ…。」

すると、リュウギの目付きがキリッと変わり、カイに押さえ付けられた手を掴む。

カイ「？」

リュウギ「それは違う…。俺は闇に恐れてなんかいない…。俺はただ、大切な者を傷付けたくないからだ？」

リュウギはそう言ってカイを押し飛ばした。

カイ（コイツ、何処にそんな力が残っていたんだ…？）

リュウギ「俺は決して闇を受け入れない…。俺は仲間と共に、闇と戦う？」

すると、リュウギの身体から光りのオーラが溢れ出す。

カイ「これは、あの時の…？」

リュウギ「見せてやる…。俺達の絆を…。」

リュウギはアルカナムを構え、目にも止まらない早さでカイに切りにかかる。

カイ「くっ！Σ？」

カイは2つの刃、ギルガメッシュを1つにし、大剣へと変形してアルカナムを受け止めた。

カイ（ここだ！）

「β？」

カイは受け止めたギルガメッシュを2つ刃に分裂にして、片方の刃でリュウギに襲いかかる。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギは身体を回転させると、光の突風を放つ。

カイ「なに？」

突風に飛ばされ、カイは態勢を立て直した。

リュウギ「前にも言ったハズだ、カイ…。その程度じゃ、俺達の絆は切れないぜ…。」

カイ「くっ、嘗めるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ?」

カイの怒りが爆発し、2つの刃から剣風によって生み出された無数の闇の衝撃波を放った。

リュウギ「カイ、闇の力を使ってまで最強のテイマーになりたいのか…?それがお前の流儀なのか…?」

カイ「?」

リュウギ「最強のテイマーを目指すなら、闇に頼らず正々堂々掛かって来い?カイ、お前はまだ本気じゃないハズだ!見せてみろ、お前の本気を?」

すると、カイは頭を抱えながら呻き声を上げる。

カイ「うわぁぁぁぁぁ?」

すると、カイの体内からイビルガが現れた。

リュウギ「やっぱりイビルガの仕業だったか…。」

イビルガ「この野郎、コイツがダメなら次は……ぎゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ??」

すると、イビルガは切り刻まれて消滅した。

リュウギ「？」

カイ「ハァ…ハァ…。」

なんとイビルガを消したのはカイだった。

カイ「笑わせるな…。俺はまだ本気すら出していない…。」
（ニヤッ…）

カイは正気を取り戻した。するとリュウギは安心したのか、ニヤッと笑った。

リュウギ「だと思ったぜ…。」
（ニヤッ…）

カイ「お前を倒したいのは山々だが、俺を利用したアイツを見過ごす訳にはいかない…。」

すると、カイの目つきが変わった。

リュウギ「だったら、早いとこ終わらせるぞ…。」

カイ「リロード！」

カイはＤ－アクセルを構えると、ガオモンが現れる。

ガオモン「カイ、大丈夫ですか？」

カイ「俺は大丈夫だ…。」

リュウギ「ガオモン？一体何が合ったんだ…？」

ガオモン「実は…。」

それは、数時間前まで遡るーー。

※Ｅｐ３９の引き続きです

カイ・マッハガオガモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

カイとマッハガオガモンは同時に攻撃を仕掛けると、ストラティクモンは素早く交わした。

カイ「なに？」

ストラティクモン「遅い…。」

ストラティクモンはマッハガオガモンを殴り飛ばした。

マッハガオガモン「ぐはっ？」

カイ「マッハガオガモン？」

ストラティクモン「人の心配事してる場合か…？」

すると、ストラティクモンはカイの頭を掴む。

カイ「？」

ストラティクモン「そんなに拒むのなら、教えてやろう…。」

すると、掴んだ手から闇の波動を流し込む。

カイ「うわぁぁぁぁぁぁぁ？」

マッハガオガモン「カイ？」

カイは致命傷を負ってしまう。

ストラティクモン「さて、来いイビルガ。」

ストラティクモンはイビルガを呼び出した。

カイ「何を…するつもりだ…？」

ストラティクモン「お前の身体にイビルガを入れ、私の手駒となるのさ…。」

マッハガオガモン「そんな事させるか？」

マッハガオガモンは背中のロケットを噴射させて急接近する。

ストラティクモン「ふっ…。」

ストラティクモンは姿を消し、マッハガオガモンを薙ぎ倒した。

マッハガオガモン「ぐは？」

カイ「くっ…、マッハガオガモン…。」

カイはとっさの判断でマッハガオガモンをＤ－アクセルに納めた。

ストラティクモン「さて、私の手駒になって貰おうか…。」

カイ「くっ…？」

ーーーーーーーーーーーーーー

ガオモン「カイはイビルガから守るためにオレをＤ－アクセルに収めたんだ…。」

リュウギ「そうだったのか…。」

リュウギはカイを見つめると、カイはフンと鼻を鳴らす。

カイ「当然だ…。ガオモンは俺のパートナーだからな…。」

リュウギ「……。」

するとリュウギはクスッと笑い出した。

カイ「な、何が可笑しい？」

リュウギ「カイ、お前ならなれるぜ…、最強のテイマー…。」

カイ「余計な御世話だ…。言われなくてもなってやる…。」

リュウギ「行くぜ、カイ…。」

カイ「あぁ…。」

一方、ミソラ達は…。

ミソラ「リュウギ、大丈夫かしら…？」

ストラティクモン「人の心配してる場合かな？」

ストラティクモンは手を広げると、上空からイビルガの大群が表れる。

一同「？」

キャンドモン「どひゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？イビルガがこんなにぃぃぃぃぃぃぃ？」

レナモン「ミソラ、下がってて！」

レナモンとナルガモンは戦う態勢に入る。

ストラティクモン「まさか、このイビルガ達を倒すつもりか…？」

ナルガモン「たりめぇだ！」

ストラティクモン「流石はエクセリオンだ…。しかし、この闇の柱に特殊な爆弾が仕掛けられている。あと１０分でこの町は消し飛ぶ…。さぁどうする？リュウギ達を置いて逃げるか？それとも全員揃ってあの世に行くか…？２つに１つだ…。」

一同「？」

レナモン「仲間まで巻き沿いにするつもりなのか？

ミソラ「最低ね…。」

ナルガモン「リュウギを置いて逃げるかよ？」

ストラティクモン「決まりだな…。さぁイビルガ達よ、エクセリオン達を消すのだ！」

イビルガ達「おう？」

すると、イビルガ達は一斉にミソラ達を襲いかかろうとしたその時、闇の結界が破れた。

ストラティクモン「なに？」

すると、闇の結界から3つの影が現れる。

？？？「答えは1つだ…。」

？？？「無論、貴様をこの世界から葬り去るまでだ！」

その3つの影の正体は、リュウギとカイとマッハガオガモンだった。

ミソラ「リュウギ？」

ナルガモン「犬ッコロ？」

マッハガオガモン「だから犬って言うな…。」

マッハガオガモンは眉をピクピクと動かしながらツッコム。

ストラティクモン「やはり、イビルガじゃ支配しきれなかったか…。」

カイ「よくも利用してくれたな…。１０倍にして返してやる…。」

ストラティクモン「この状況でどうやって出来るのかな…？」

イビルガの大群に囲まれ、完全に逃げ場をなくした。

リュウギ達は背中合わせになり、戦う態勢に入る。

レナモン「くっ、完全に囲まれたか…。」

ナルガモン「どうするんだリュウギ？あと１０分で爆発するんだぞ？」

カイ「退くぞ…。」

一同「？」

ナルガモン「はぁ？お前何言って…」

カイ「この町はもう誰もいない…。闇の柱が爆発するなら、好都合だ…。」

リュウギ「ここで全滅するよりかはマシだな…。」

イビルガ「させるか！エクセリオン達を消せ！」

イビルガ達先制攻撃を仕掛ける。すると、リュウギとカイはそれぞれの武器でイビルガを切り刻んだ。

リュウギとカイは背中合わせになってそれぞれの武器を構える。

リュウギ「ここは俺達に任せろ…。」

カイ「頼む、マッハガオガモン…。」

ミソラ「だけどリュウギ？」

マッハガオガモン「はい、全ては我が主のために。」

すると、マッハガオガモンはミソラ達を連れて逃げる。

ミソラ「放してよ？リュウギがまだなのよ？リュウギィィィィィィ？」

おもちゃのまちに残ったリュウギとカイは戦う態勢に入る。

イビルガ達「怯むな！相手は2人だ！一気に掛かれ？」

イビルガ達は一斉襲いかかると、リュウギとカイは目にも止まらない早さでイビルガ達を切り刻んでいく。

リュウギ・カイ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

すると、背後から3体のイビルガがリュウギに襲いかかる。

リュウギ「？」

カイ「伏せろ！」

カイは巨大手裏剣、ギルガメッシュを投げつけて、リュウギの背後にいるイビルガ達を切り刻んだ。

カイ「よそ見してる場合か？」

カイはそう言ってギルガメッシュを掴み取る。

リュウギ「すまない！」

すると、イビルガ達はリュウギ達を囲い、一斉に襲いかかる。

リュウギとカイはそれぞれの武器を構えて、横一閃に振った。

すると、剣風によって生み出された衝撃波を放ち、周りのイビルガ達を消し飛ばす。

すると、何者かが、リュウギ達の戦いを見物していた。

エグザ「なかなか良いコンビじゃねぇか…。どうやら、俺の出る幕じゃなさそうだな…。」

エグザは小さく笑い、何処かへと去って行った。

?リュウギ・カイ「ハァ…ハァ…。」

すると高見の見物をするストラティクモンは静かに笑う。

ストラティクモン「なかなかやるではないか…。しかし、もうタイムリミットだ…。あと2分でお前達はあの世行きだ…。」

カイ「今の内にそうやって浮かれているがいい…。」

リュウギ「ストラティクモン、次会った時は必ず…」

リュウギとカイはそれぞれの武器の刃先をストラティクモンに向けた。

リュウギ・カイ「全力で、お前をねじ伏せる?」

カイ「精々俺達に会わないよう、気を付ける事だな!」

カイはそう言ってギルガメッシュを地面に突き刺した。

カイ「デジサモン、発動?」

カイは叫ぶと、地面からデジ文字が書かれた魔法陣が展開する。

カイ「来い、ガルルモン?」

すると、魔法陣からガルルモンが実体化されて姿を現す。

カイはガルルモンの背中に乗る。

カイ「乗れ、御縞　リュウギ？」

リュウギ「あぁ？」

リュウギは頷き、ガルルモンの背中に飛び乗った。

カイ「ガルルモン、このまま強行突破するぞ！」

ガルルモン「まかせろ！」

ガルルモンは素早い動きで出口を目指す。

ストラティクモン「逃がしはせん！『風林火山？』」

ストラティクモンは手を広げて、強力な火炎弾を放ち、ガルルモンに襲いかかる。

ガルルモン「くっ、このままでは巻き沿い喰らう？」

リュウギ「カイ、俺の身体を支えてくれ。」

リュウギは後ろへ振り向き、立ち上がる。

カイ「何をするつもりだ？」

リュウギ「早くしろ！このままじゃ全滅するぞ！」

リュウギは叫ぶと、カイは舌打ちをし、リュウギの身体を支えた。

リュウギ「ストラティクモン、お前が何をしようと俺達エクセリオ

ンの絆は断ち切れはしない…。」

リュウギはアルカナムを振りかぶると、剣先から聖なる光が生じる。

リュウギ「この絆、切れるものなら切ってみやがれぇぇぇぇぇぇぇ？」

リュウギは聖なる光に包まれたアルカナムを振り下ろすと、剣風によって生み出された光の衝撃波を放った。

すると、光の衝撃波は風林火山を真っ二つに切り裂き、ストラティクモンの右腕を切り落とした。

ストラティクモン「なに？」

カイ「究極体の技を真っ二つにした…？」

リュウギ達を乗せたガルルモンはそのままおもちゃのまちの出口を駆け抜け、無事に脱出した。

ストラティクモン「くっ、ひとまず撤退だ…。」

ストラティクモンは右肩を押さえながら闇の中へと消え去った。

すると、闇の柱に仕掛けられた爆発装置が爆発し、おもちゃのまちごと消し飛んだ。

そして…。

～ミスティツリーズ～

リュウギ「何とか逃げ切れたな…。」

カイ「ご苦労だったな、ガルルモン。」

ガルルモン「あぁ、必要があればまた呼んでくれ。」

ガルルモンはそう言って静かに消え去った。

？？？「リュウギーーーー！」

すると、先に避難をしていたミソラ達が駆けつけてくる。

リュウギ「ミソラ、それにみんな！」

ナルガモン「ったく、心配かけさせやがって…。」

ガオモン「カイ、無事でしたね…。」

カイ「当然だ…。いくぞガオモン…。」

ガオモン「はい、全ては我が主のために…。」

すると、カイは背を向けて歩き出す。

リュウギ「待てよカイ！」

リュウギは慌ててカイを呼び止めと、カイは足を止める。

カイ「何の用だ…？」

リュウギ「カイ、一緒に行かないか…？闇の柱を壊すなら、目的は同じハズだ…。」

すると、カイはフンと鼻を鳴らす。

カイ「お前達のくだらない友情ごっこに付き合ってるヒマはない…。」

リュウギ「……。」

カイ「それに、これ以上お前に借りを作るのは御免だ…。」

リュウギ「え…？」

カイ「覚えておけ御縞　リュウギ。借りは必ず返す…。」

カイのはそう言い残して歩き出す。

リュウギ「カイ…。」

すると、ガオモンはリュウギに頭を下げてお礼を言う。

ガオモン「リュウギ、カイを助けてくれて感謝する…。では…。」

ガオモンはそう言ってカイと共にミスティツリーズから去って行った。

ナルガモン「けっ、んだよアイツかっこつけやがって…。」

ミソラ「リュウギ、大丈夫なの？」

リュウギ「あぁ、俺は大丈夫だ…。ミソラ達は大丈夫か…？」

レナモン「私達なら問題ない…。」

キャンドモン「リュウギさん、闇の柱はどうなったんですか？」

リュウギ「闇の柱なら爆発した…。ストラティクモンは逃げて行った…。」

ミソラはそれを聞いてホッとする。すると、ナルガモンはリュウギの肩に乗りに掛かる。

ナルガモン「全くよぅ、相変わらず無茶しやがってよ！」

レナモン「とにかく、無事で何よりだ…。」

ミソラ「そうよ…。私達は心配したんだから…。」

リュウギ「みんな…。心配かけてすまなかったな…」

リュウギは謝ると、ミソラ達は明るく振る舞う。

ナルガモン「ま、それがリュウギの良いところだからな♪無茶するのは大体予想してたからな♪」

キャンドモン「ナルガモン、あなたも人の事言えませんよ…。」

キャンドモンは小さくツッコム。

リュウギ「さて、残りの柱を壊しに行くぞ。」

ミソラ「でも、次の柱は一体何処にあるの？」

すると、レナモンが何か異変を感じる。

レナモン「風が冷たい…。」

ミソラ「本当に、レナモン？」

ナルガモン「言われてみれば確かに寒いなぁ…。」

リュウギ「あっちから来てる…。行くぞ。」

こうしてリュウギ達は2本目の闇の柱を壊し、次なる新天地へと向かうのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ４２　～時計仕掛けのおもちゃのまち？リュウギｖｓカイ？～（後書き）

～アナログマン本拠地～

ストラティクモン「くっ…。油断したか…。」

？？？「無様な姿ね、ストラティクモン…。」

すると、ダークスの仲間がクスクスと笑う。

ストラティクモン「黙っておれ…。魔界の妖魔　スクロモン…。」

スクロモンと呼ばれるデジモンが姿を現すと、その姿は魔女のような姿をしていた。

スクロモン「魔界の妖精とでも呼んでもらいたいわ…。大体、あんな所で油断するなんて、アンタらしくないわね…？情けでもかけたのかしら…？」

すると、ストラティクモンはフッと鼻で笑った。

ストラティクモン「あそこで消せば面白くもない…。アナログマン様曰く、ゲームはもっと楽しまなければな…。」

スクロモン「あらそう…。アンタといい、あの役立たずなオタクデカブツといい…。先が思いやられるったらありゃしないわ…。」

ストラティクモン「スクロモン、ギーゴモンは究極体とはいえ、まだ成熟期なのだ…。」

スクロモン「言ってる意味がさっぱりだわ…。もう少し分かりやすいように説明さてくださる？」

ストラティクモン「殺戮の兵器　ギーゴモン…。お前はまだ完全なる殺戮兵器を知らないのだ…。」

すると、スクロモンはフンと鼻を鳴らし、何処かへと言ってしまう。

スクロモン「だったらさっさと見せて貰いたいわ…。その殺戮の兵器とやらを…。アタシはその間に遊んで来るわ…。」

ストラティクモン「壊すでないぞ…。」

スクロモン「あら、アンタとは違って乱暴に扱わないわ…。おもちゃは大切に扱わないとね…♪」

スクロモンはそう言って闇の中へと消えていった。

次回、リュウギ達の向かった先は一体？

次回もお楽しみに！

Ｅｐ４３　～突然の危機？白銀の世界　フリーズランド～（前書き）

今回はフリーズランド？

しかし、まさかのとんでもない事に…？

Ｅｐ４３スタート？

ＥＰ４３　～突然の危機？白銀の世界　フリーズランド～

ミスティツリーズから抜け出すと、そこは真っ白な雪景色だった。

ミソラ「雪だ？」

ミソラは手を広げると、雪が落ちてジワーッと溶ける。

リュウギ「一体どういう気候なんだよこの島は…？」

キャンドモン「ボクチンにも分かりませんよ～。」

すると、レナモンはミソラの様子が可笑しい事に気付く。

レナモン「どうした、ミソラ？」

ミソラ「何でもないわよ…。気にしないで…。」

すると、リュウギは上着を脱いで、ミソラの身体を被せる。

ミソラ「リュウギ…。」

リュウギ「それでも着てな…。少しはマシになるだろう。」

ミソラ「で、でもリュウギ…。あなたは大丈夫なの？」

よくよく見るとリュウギは半袖だった。すると、リュウギはミソラの頭を撫でる。

リュウギ「俺の事は心配すんな…。これくらいの寒さなら平気だ…。」

リュウギは笑顔を見せると、ミソラは顔を赤らめながら小さく呟く。

ミソラ「あ、ありがとう…。」

すると、雪山の中から数体のデジモンが現れる。

一同「？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「モジャモン、成熟期、獣型、データ種、必殺技はホネホネブーメラン。」

レナモン「ミソラ！」

ミソラ「任せて、ディスティングハーツ？」

ミソラはディスティングハーツをすると、モジャモン達の体内を調べると、イビルス達に支配されていた。

ミソラ「イビルスがいるわ？」

リュウギ「分かった。レナモン、ミソラを頼む！」

レナモン「分かった！」

キャンドモン「あれ？ボクチンは…？」

ナルガモン「お前も戦うんだよ！」

キャンドモン「えぇ？ボクチン無理ですって？あんな雪男を倒すなんて無理ですって？」

リュウギ達は全く聞く耳持たず、戦う態勢に入る。

リュウギ「行くぞ！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ナルガモン「おう？」

キャンドモン「っておい、無視してんじゃねぇよ？」

リュウギ「はあぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ナルガモン「喰らいやがれ？『アートルムフレイム？』

キャンドモン「どうにでもなれ～？『ボンファイア？』」

リュウギ達はそれぞれの技でモジャモン達を薙ぎ倒す。

モジャモン「『ホネホネブーメラン？』

モジャモンは骨をミソラに向けて投げ付けた。

ミソラ「？」

レナモン「くっ？」

レナモンはミソラを抱っこして素早く交わした。

ミソラ「レナモン、後ろ？」

レナモンは振り向くと、背後からもう一体のモジャモンが両手を組んで振りかぶっていた。

レナモン「しまった？」

モジャモンは両手を思いっきり振り下ろしてレナモンを地面に叩きつけた。

レナモン「うわっ？」

ミソラ「きゃっ？」

リュウギ「ミソラ、レナモン？」

すると、背後からモジャモンがリュウギに襲い掛かる。

リュウギ「くっ、邪魔だ？」

リュウギは身体を回転させて蹴り飛ばす。しかし、モジャモンがゾロゾロと出て来る。

ナルガモン「クソッ、これじゃキリがねぇぞ？」

リュウギ「ナルガモン、進化だ？」

ナルガモン「おう？」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。すると、ナルガモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化？」

『ソニックドラモン？』

ミソラ「レナモン、大丈夫？」

レナモン「私は大丈夫だ…。」

すると、３体のモジャモンが一斉に襲い掛かる。

ミソラ「？」

ソニックドラモン「オラァァァァァ？」

すると、ソニックドラモンは両肘のブレイドで３体のモジャモンを薙ぎ倒した。

ミソラ「ソニックドラモン？」

レナモン「すまない…。」

ソニックドラモン「レナモン、ＣＯＯＬに反撃と行こうぜ？」

レナモン「あぁ。」

ミソラ「頼むわ、レナモン！」

ミソラはＤ－アクセルを例に翳した。すると、レナモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

レナモン「レナモン、進化？」

『キュウビモン？』

モジャモン達「『ホネホネブーメラン？』」

モジャモン達は骨を一斉に投げ付けた。

リュウギ「喰らうか？」

リュウギはアルカナムのトリガーを引いて銃撃し、骨を撃ち落とした。

リュウギ「今だ？」

ソニックドラモン「おう？」

ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、口から漆黒に包まれた灼熱の炎を吐いた。

ソニックドラモン「『アートルムバースト？』」

モジャモン達はまともに喰らい、力尽きて倒れると、体内からイビルス達が現れる。

キュウビモン「逃がさん？『鬼火玉？』」

そして、キュウビモンは高く飛び上がり、尾先から火の玉を繰り出し、イビルス達を焼き尽くした。

イビルス「ギィィィィィィィ？」

イビルス達は跡形も無く消滅した。

ソニックドラモン「Ｊａｃｋ　ｐｏｔ？」

リュウギ「よし、すぐにモジャモン達をリカバリーするぞ！」

ミソラ「え、えぇ。リカバリー、モジャ…」

すると突然、ミソラが倒れた。

一同「ミソラ？」

リュウギ「おい、しっかりしろミソラ！」

リュウギはミソラの肩に触ると、肌が熱かった。

リュウギ「ミソラ、まさかお前？」

リュウギはミソラの額にそっと手を当てるとかなりの高熱だった。

リュウギ「ひどい熱だ…。」

ソニックドラモン「おい、ミソラは大丈夫なのか…？」

リュウギ「大丈夫だ…。おれが何とかする。取り敢えず何処か安全な所で寝かさなきゃな…。」

ミソラ「…メよ…。」

すると、ミソラが途切れ途切れに声を出す。

キュウビモン「ミソラ？」

ミソラ「私の事は…気にしないで…。早く先へ…進みましょう…。」

キュウビモン「ミソラ…。」

キャンドモン「いくらなんでも無茶ですよミソラさん？」

ミソラ「でも…、私…。」

（コホッ…）

リュウギ「仲間がこんな状態なのに平気な顔でいられるかよ…。心配するな…。俺に任せろ…。」

ミソラ「ごめん…。」

リュウギ「謝ってどうするんだよ…？仲間だろ…？」

リュウギはそう言って、ミソラをおんぶする。

リュウギ（早く町を見つけなきゃ、ミソラが危ない…。）

リュウギは心の中で不安を抱くのであった。すると、リュウギはハッとした。

リュウギ「そうだ！キュウビモン、ミソラを頼む！」

キュウビモン「分かった。」

リュウギはミソラをキュウビモンの背中に乗せる。

リュウギ「リカバリー、モジャモン！」

リュウギはモジャモン達をリカバリーした。

モジャモンA「あれ？オイラは一体…？」

モジャモンB「お前ら、俺たちを助けてくれたのか？」

リュウギ「あぁ。モジャモン、早速だけどかまくらを作ってくれないか…？病人がいるんだ…。」

モジャモンC「何だかよくわからないが、助けてくれたんだ。急いでかまくら作るぞ！」

モジャモン達「オオーッ？」

モジャモン達は超特急でかまくらを作り始めた。それから5分が経った。

モジャモンC「よし、完成したぞ？」

リュウギ「ありがとな！」

リュウギ達は急いで巨大かまくらの中へと入る。

ナルガモン「よく出来てるなぁ…。」

レナモン「お陰で助かった…。礼を言う。」

モジャモンA「礼など及ばんよ。」

リュウギ「モジャモン、この近くに町はないのか…？」

モジャモンB「残念だが、このフリーズランドには町なんてないよ…。」

リュウギ「くっ…。どうすれば…。」

モジャモンA「待てよ…？『アイスサンクチュアリ』の倉庫なら薬があるかもしれない！」

ナルガモン「よし、そのアイスサンクチュアリまで案内してくれよ！」

レナモン「ならば、私はここでミソラの看病しておく…。」

リュウギ「分かった。ミソラを頼んだぞ。」

モジャモンC「オレが案内する。こっちだ！」

モジャモンはそう言ってアイスサンクチュアリへの道案内をする。

リュウギ「よし、行くぞナルガモン、キャンドモン！」

ナルガモン「おう！」

キャンドモン「ミソラさんを助けるなら、何処まで行きますよ？」

リュウギはアイスサンクチュアリへと向かおうとする。

ミソラ「リュウ…ギ…。」

リュウギ「？」

すると、ミソラは笑顔で見送る。

ミソラ「いって…らっしゃい…。」

リュウギ「あぁ、行ってくる…。」

リュウギは頷き、アイスサンクチュアリへと向かうのであった。

～アイスサンクチュアリ　？入口～

アイスサンクチュアリへと辿り着いたリュウギ達。それは、氷でできた宮殿だった。

ナルガモン「うっひゃ～？デッケェなぁ～？」

モジャモン「倉庫は地下室にあります！お気をつけて。」

リュウギ「分かった。ありがとな…。」

ナルガモン「よっしゃ、行くぜ！」

リュウギ達は急いでアイスサンクチュアリへと入っていくのであった。

～アイスサンクチュアリ～

リュウギ「ここがアイスサンクチュアリか…。」

ナルガモン「それで、地下室は何処なんだ…？」

リュウギ「とにかく、早いとこ地下室を探すぞ！」

すると、地面からデジモンが沸いて出てきた。

キャンドモン「出たぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ブルーメラモン、完全体、火炎型、データ種、必殺技はアイスファントム。」

ブルーメラモン「ここから先は通さん！」

リュウギ「くっ？」

（イビルガか…。）

ナルガモン「ワリィが、オレ達は引き下がるつもりなんてねぇからな？」

ブルーメラモン「ならば、ここで消え去るがいい？『アイスファントム？』」

ブルーメラモンは口から超低温の冷気を吐く。

？

リュウギ達は素早く交わした。

ナルガモン「リュウギ、反撃するぜ！」

リュウギ「あぁ！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れて闘う態勢に入る。

ナルガモン「『アートルムフレイム？』」

ナルガモンは口から黒炎弾を吐いて先制攻撃をする。しかし、ブルーメラモンは片手でアートルムフレイムを弾き返す。

ブルーメラモン「喰らうかよ？」

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギはアルカナムで切り上げるように振る。

ブルーメラモン「くっ？」

ブルーメラモンは素早く交わし、口から超低温の冷気を吐く。

リュウギ「くっ？」

リュウギは間一髪で交わすが、肩に掠ってしまった。

ナルガモン「リュウギ？」

リュウギ「大丈夫だ、少し掠っただけだ…。」

キャンドモン「どないしようどないしよう？こんな所にイビルガなんていたら、倉庫に行けないじゃんかＹＯ？」

キャンドモンは完全にパニック状態に陥る。すると、ブルーメラモンはピタッと止まる。

ブルーメラモン「なに？お前たちはイビルスじゃないのか…？」

一同「は…？」

すると、リュウギ達の目が丸くなる。

ナルガモン「そういうお前こそ、イビルガに支配されてねぇのかよ？」

ブルーメラモン「違う！オレはアイスサンクチュアリにイビルスを侵入させないように見張っていただけだ！」

リュウギ「そうだったのか…。勘違いしてすまない…。」

ブルーメラモン「いや、こちらこそ悪かった…。ところで、何をしにアイスサンクチュアリへ来たのだ…？」

リュウギ「そうだ！ブルーメラモン、仲間が病気で倒れているんだ…。その病気を薬を俺達に分けてくれないか…？頼む…。」

ブルーメラモン「事情は分かった…。ついて来い。」

リュウギ「分かった…。」

『ーーーちゃダメ…。』

リュウギ「？」

リュウギは何か聞こえたのか、辺りを見回す。

ナルガモン「どうしたんだよリュウギ？キョロキョロなんかしちゃってさぁ？」

リュウギ「あ、いや…。何でもない…。」

（何か聞こえたような…？気のせいか…。）

リュウギはまぁいいかと軽く流し、ブルーメラモンの後をついて行くのあった。

一方、ミソラ達は…。

～フリーズランド～

ミソラ「ハァ…ハァ…。」

レナモンはそっとミソラの額に手を当てる。

レナモン「ダメだ…。熱が全く治まらない…。」

ミソラ「レナ…モン…。」

レナモン「心配ない…。リュウギ達はもうすぐ戻ってくる…。」

ミソラは途切れ途切れに声を出す。

ミソラ「私は…リュウギを…信じてる…。」

レナモン「ミソラ…。？」

すると、レナモンは何か異変を感じる。

ミソラ「どう…したの…？」

レナモンは何も答えず、ゆっくりと背を向ける。

レナモン「くっ…。」

なんと、2体のデジモンがかまくらの前にいた。

？？？「グォォォォォォォ？」

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ズドモン、完全体、海獣型、ワクチン種、必殺技は

ハンマースパーク。
アノマロカリモン、完全体、古代甲殻類型、データ種、必殺技はスティンガーサプライズ。」

ミソラ「レナ…モン…。」

レナモン「リュウギ達はいない…。だから、私がミソラを守る！」

レナモンはそう言って、戦う態勢に入る。

レナモン「私が相手だ！」

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ４３　～突然の危機？白銀の世界　フリーズランド～（後書き）

ようやく、デジモン小説書いて１周年になりました…。

１周年になったからって別に特別な事はしませんが…。

１周年記念として画像を描きたいと思います！お楽しみに！

ミソラは高熱、そしてイビルガに支配された完全体２体ｖｓレナモン？

果たして、レナモンに勝ち目はあるのか？

そして、リュウギ達は間に合うのか？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ４４　～ダークス来襲？魔界の妖精　スクロモン？～　（前書き）

レナモンは果たしてミソラを守る事ができるのか？

そして間に合うのかリュウギ？

Ｅｐ４４スタート？

ＥＰ４４　～ダークス来襲？魔界の妖精　スクロモン？～

～アイスサンクチュアリ～

リュウギ達はミソラの熱を治すため、アイスサンクチュアリにて薬を探す。

ブルーメラモン「ここだ。」

ブルーメラモンは足を止めると、リュウギ達も足を止める。それは、氷でできた扉だった。

ナルガモン「この奥に薬があるのか…？」

ブルーメラモン「あぁ。少し待ってろ…。」

ブルーメラモンは氷でできた扉の鍵を外す。すると、リュウギは深刻な顔になる。

ナルガモン「どうしたんだよリュウギ？らしくねぇぞ？」

リュウギ「何だか、胸騒ぎがするんだ…。」

キャンドモン「大丈夫ですって！レナモンが着いてるんですから♪」

リュウギ「そうだよな…。」

（ミソラ…。何も起こらなきゃいいんだが…。）

～フリーズランド～

レナモン「私が相手だ…。」

レナモンは戦う態勢に入る。すると、ミソラは呼び止める。

ミソラ「ダメ…レナモン…。」

レナモン「私だって戦える…。だって私は、ミソラのパートナーだから…。」

ミソラ「レナ…モン…。」

ミソラはコクリと頷き、Ｄ－アクセルをレナモンに翳した。

レナモン「レナモン、超進化？」

『タオモン？』

ズドモン・アノマロカリモン「グォォォォォォォォ？」

ズドモンとアノマロカリモンは襲い掛かると、タオモンは霊札を地面に張り付け、印を唱える。

すると、設置した霊札から結界が張られた。

ズドモン・アノマロカリモン「？」

ズドモンとアノマロカリモンは

滅茶苦茶に攻撃をして結界を破ろうとする。

タオモン「くっ、これじゃ持ち堪えられない…。」

ズドモン「砕けろ！『ハンマースパーク？』」

ズドモンは片手に持つ強力なハンマーを構えると雷が生じ、結界を打ち破った。

タオモン「なに？」

アノマロカリモン「喰らえ？『スティンガーサプライズ？』」

アノマロカリモンは鋭い刃でタオモンに襲い掛かる。

タオモン「くっ？」

タオモンは素早く交わし、霊札を投げ付け、ズドモン達の身体に張り付けた。

タオモン「『狐封札？』

タオモンは印を唱えると、霊札を爆発させた。

ズドモン・アノマロカリモン「ぐはっ？」

ミソラ「タオ…モン…。」

（私も…戦わなきゃ…。）

ミソラは立ち上がろうとするが、フラついてまともに立つ事ができない。

ミソラ「ハァ…ハァ…。」

タオモン「やったか…？」

すると、ズドモンが爆煙を切り開き、タオモンに突進した。

タオモン「うわッ？」

突き飛ばされたタオモンは、勢いで木に叩きつかれた。

アノマロカリモン「おまけだ？」

すると、アノマロカリモンは鋭い刃から無数の衝撃波を放ち、タオモンに襲い掛かる。

タオモン「うわぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラ「タオ…モン…。」

タオモンは体力を奪われ、地面に手がつく。

アノマロカリモン「その程度か…？対した事ないなぁ…？」

ズドモン「後は、エクセリオンを排除するだけだ…。」

ズドモンとアノマロカリモンの矛先は、ミソラへとむけた。

タオモン「くっ？」

タオモンは霊札を投げ付けると、霊札はかまくらに張り付いた。す

ると、結界が展開され、かまくらを包んだ。

タオモン「ミソラには…指一本触れさせない…。」

ズドモン「早くくたばりたいようだな…。諦めれば痛い思いをせずに済むのに…。」

タオモン「私は…、もう負ける訳にはいかない…。この命が朽ち果てるまで、ミソラを守る？」

すると、ミソラのＤ－アクセルから光が生じる。

ミソラ「負けないで…、タオ…モン…。」

ミソラはゆっくりと立ち上がった。

ミソラ「ＥＸモード…、発動…。」

タオモン「私は、私の力を信じて突き進む…。」

すると、タオモンは突然と姿を消した。

ズドモン「なに？」

アノマロカリモン「消えた？」

タオモン「こっちだ？」

すると、背後からタオモンが現れ、霊札を投げ付けて爆発させた。

タオモン「『狐封札？』」

ズドモン・アノマロカリモン「ぐはっ？」

タオモン「まだだ…。」

ズドモンとアノマロカリモンは上を向くと、タオモンは巨大な筆で呪文を唱えながら梵字描きズドモン達に飛ばす。

タオモン「『梵・筆・閃！！』」

すると、梵筆閃を受けたズドモン達は大爆発を起こした。

ズドモン・アノマロカリモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ズドモンとアノマロカリモンは力付きて倒れると、体内からイビルガが現れる。

タオモン「逃がさん？『狐封札？』」

タオモンは霊札をイビルガに投げ付けて爆発させた。

イビルガ達「ギャャャャャャャャャャ？」

イビルガ達は跡形も無く消滅した。

タオモン「終わったか…。」

ミソラ「やったわ…。タオ…モン…。」

その時、遠くから闇の衝撃波が飛んで来てタオモンに直撃する。

タオモン「うわぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラ「タオモン？」

？？？「それで勝ったつもりかい…？笑わせるんじゃないわよ…。」

すると、ミソラ達の前に闇の空間が現れる。

ミソラ「タオモン、大…丈夫…？」

タオモン「あぁ…、私は大丈夫だ…。それより…。」

？？？「誰だ？とでも言いたい訳…？」

すると、闇の空間から魔王型デジモンが現れる。

？？？「はじめまして、私はダークスの1人、魔界の妖精　スクロモンとでも呼んで貰おうかしら…。」

ミソラはD－アクセルでデータを読み取る。

D－アクセル「スクロモン、究極体、魔王型、ウィルス種、必殺技はエンプレス・デス・ブレイザー。」

ミソラ「ダー…クス…ですって…？」

スクロモン「あらあら、せっかくイビルガを倒したのにまさかの展開に驚いちゃったのかしら…？」

スクロモンはそう言って高らかに嘲笑う。

タオモン「クソ…。『狐封…」

タオモンは霊札を投げ付けようとすると、スクロモンは右手から闇の衝撃波を放ち、タオモンを吹き飛ばした。

タオモン「ぐあッ？」

スクロモン「人が話ししてる最中に攻撃するのやめてくださらない？」

タオモンは全ての力を使い果たし、ポコモンへと退化した。

ミソラ「ポコ…モン…。」

（コホッ…）

ミソラはポコモンを抱きつく。

ポコモン「ごめん、ミソラ…。」

スクロモン「泣けるわねぇ…。これって感動の青春かしら…？」

スクロモンはわざとらしく嘘泣きをしながらミソラに近付く。

ミソラ「ポコモンには…、手を…出さないで…。」

スクロモン「私が用あるのは、リュウギの方よ…。リュウギは何処へ行ったのかしら…？」

ミソラ「誰が…アンタなんかに…。」

スクロモン「仲間を庇おうってワケ？場所さえ教えてくれたら、特別に見逃してあげるわ♪」

ミソラ「ふざけないで…。あなたが…どうしようと、リュウギ達の…居場所なんて教えないんだから…。」

ポコモン「ミソラ…。」

スクロモン「せっかく逃がしてあげるチャンスを与えたのに、バカな小娘ね…♪」

スクロモンはまた高らかに嘲笑う。

ミソラ「笑っていられるのも…今の内よ…、この…ペチャパイオバサン…。」

すると、スクロモンはピタリと止まった。

スクロモン「い、いま何て言ったの？」

ミソラ「ペチャパイオバサンって、言ったのよ…。」

すると、スクロモンの怒りが頂点に達した。

スクロモン「この女
あま
がぁぁぁぁぁぁぁ？」

スクロモンは目にも見えない早さで近付き、ミソラの頬を思いきり引っ叩いた。

ミソラ「きゃッ？」

スクロモン「アンタ、私を嘗めているようね…。死にたいのかしら…？」

ミソラ「コホッ…コホッ…。」

ミソラは咳をしながらゆっくりと立ち上がる。

ミソラ（ダメ…、目が霞んで前が…）

すると、ポコモンはスクロモンの前に立ちはだかる。

ポコモン「ミソラには手を出さないで！」

ミソラ「ポコモン…ダメ…よ…。」

スクロモン「アンタらの友情ごっこはもう見飽きたわ…。２人仲良く、あの世へ行きなさい？」

怒りが治まらないスクロモンは右手を振り上げてトドメを刺そうとする。

ポコモン「？」

その時、上空から大剣が飛んで来て地面に突き刺さった。スクロモ

ンは驚いたのか、攻撃をやめた。

???「誰だ?とでも言いたいのか…?」

すると、スクロモンの前に黒い影が現れる。

ミソラは虚ろな目で黒い影の背中を見つめる。

ミソラ「だ…れ…?リュウ…ギ…?」

一方、リュウギ達は…。

~アイスサンクチュアリ~

ブルーメラモン「これだ…。」

ブルーメラモンは倉庫から薬を取り出し、リュウギ達に手渡した。

リュウギ「ありがとな…。」

ブルーメラモン「気をつけるのだぞ…。」

ナルガモン「よし、早く戻ろうぜ!」

リュウギ「あぁ!」

リュウギは歩き出すと、リュウギは思わず足を止めた。

『来ちゃダメ…。』

リュウギ「？」

キャンドモン「どうしたんですかリュウギさん？」

リュウギ「いや…、なんでもない…。」

（まただ…。）

すると、謎の声はリュウギの頭に響く。

『これ以上、先を進んじゃいけない…。このまま進めば、絶望へと堕ちてしまう…。』

リュウギ「例え絶望に堕ちる事があっても、俺は立ち向かうまでだ…。」

ナルガモン「おい、何を言ってるんだよリュウギ…？」

ナルガモン達には謎の声が聞こえない。

すると、リュウギは急に頭を抱え込む。

ナルガモン「リュウギ？」

リュウギ「俺は、絶望から逃げも隠れもしない…。それが俺の流儀だ…。」

『……止めても無駄のようね…。でも、分かっていたわ…。それが、あなただもの…。』

すると、謎の声は消え去った。

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

キャンドモン「あのぅ、大事ですかぁ～？」

リュウギ「あぁ、もう大丈夫だ…。急ごう…。」

（俺の事を知っていた…？一体、何者なんだ…？）

リュウギは妙な思いを抱き、フリーズランドへと向かった。

～フリーズランド～

ミソラ「だ…れ…？リュウ…ギ…？」

すると、黒い影は振り向く。

？？？「残念だが、俺はリュウギじゃない…。」

黒い影の正体は、左目に傷を持った男、エグザだったのだ。

ポコモン「お前は、エグザ？」

スクロモン「エグザ、あなたの事はストラティクモンから聞いたわ…。」

エグザ「そいつは光栄だな…。それで、そっちはなんでリュウギを狙うんだ…？」

スクロモン「当然よ…。アイツの息子だからよ…。」

エグザ「ほぅ、リュウに恨みがあるのか…？」

スクロモン「恨みですって…？それ以上よ…。何せリュウは、私の妹を可愛がった張本人だからね…。」

ポコモン「どういう事…？」

スクロモン「私の妹の名前はリリスモン…。七大魔王の1人なのよ！」

ポコモン「七大魔王ですって？」

ミソラ「なによ…それ…？」

（コホッ…）

ポコモン「七大魔王とは、悪魔・暗黒系デジモンの頂点に君臨する七体の魔王型デジモン達の事よ…。でも、何年か前に倒されたって聞いたわ…。」

エグザ「ほぅ、そのお姉さんが妹の敵討ちってなワケか…？随分と仲の良い姉妹な事だ…。」

スクロモン「でも、アンタはリュウを始末した…。だから私は、アイツの息子であるリュウギを狙うのよ…。そしてたっぷりと苦痛を味わせてやるのよ！さぁ、そこを退きなさい！」

エグザ「悪いが、そいつは無理な相談だな…。」

スクロモン「なに…？」

すると、エグザは地面に突き刺さったセイクリッド・レインティアを抜き取る。

エグザ「全力でお前を食い止めるからだ…。」

ミソラ・ポコモン「？」

スクロモン「なにそれ？まさかアンタ、リュウを殺したからリュウギに罪滅ぼししようとしてるのかしら？」

エグザ「そんなもの、最初
ハナ
っから思っちゃいねぇよ…。俺はただ、同じエクセリオンを助けるまでだ…。」

すると、スクロモンは高らかに嘲笑う。

スクロモン「意味不明よアンタ！アンタの言ってる事が全く理解不能だわ！」

エグザ「別に理解して欲しいとは思っちゃいねぇよ…。俺はただ、俺のルールで貫き通すだけだ…。」

その時、ミソラはエグザの姿からリュウギの面影が見える。

ミソラ「？」
（リュウ…ギ…？）

スクロモン「まぁいいわ…。みんな纏めて消してあげるわ…。」

エグザ「消せるもんなら消してみな、このペチャパイオバサンが…。」

エグザが挑発すると、スクロモンの怒りが爆発し、目にも止まらない早さでエグザに襲い掛かる。

スクロモン「ブッ殺す?」

エグザはセイクリッド・レインティアで攻撃を防いだ。

エグザ「遅ぇよ…。」

エグザは身体を回転させてスクロモンを押し飛ばした。

スクロモン「くっ?」

エグザは懐からデジガン、ライトを取り出してスクロモンを狙い撃つ。

スクロモン「このクソ野郎が?」

スクロモンは右手の鋭い爪で弾丸を弾き返す。

エグザ「チッ…。」

すると、ポコモンが叫ぶ。

ポコモン「ミソラ?しっかりして?」

ミソラの熱が段々と上昇し、苦しみだす。

ミソラ「ハァ…ハァ…。」

エグザ「……。」

スクロモン「よそ見してんじゃないわよ？」

スクロモンは右手の鋭い爪でエグザに襲い掛かる。すると、エグザはセイクリッド・レインティアを構え、振り上げるように振った。

スクロモン「くっ？」

スクロモンは素早く交わし、態勢を立て直す。

エグザはセイクリッド・レインティアを地面に突き刺して叫ぶ。

エグザ「デジサモン、発動？」

すると、地面からデジ文字が書かれた魔法陣が展開する。

エグザ「いでよ、エンジェモン？」

すると、魔法陣からエンジェモンが実体化されて姿を現す。

エンジェモン「呼んだか？」

エグザ「エンジェモン、アイツの治療を頼む。」

エンジェモン「分かった。」

エンジェモンは急いでミソラの元へ駆け寄った。

エンジェモン「酷い熱だ…。ジッとしていてくれ…。」

エンジェモンは手を広げてミソラの額に当てると、ミソラの身体に光が包まれる。

スクロモン「させるか？」

すると、エグザはセイクリッド・レインティアを抜き取り、そのまま構える。

エグザ「ＥＸモード、発動！」

すると、エグザの回りに激しい突風が舞う。

スクロモン「なに？」

突風が去ると、エグザの身体から光のオーラが纏う。

エグザ「悪いが、さっさと終わらせるぞ…。」

すると、エグザは突然と姿を消した。

スクロモン「くっ？何処へ行った？」

エグザ「こっちだ…。」

エグザは背後へとまわり、セイクリッド・レインティアを振り下ろした。

スクロモン「くっ？『カオスネイル？』

スクロモンは間一髪で交わし、右腕の巨大な毒爪で反撃をする。

エグザ「遅ぇよ…！」

エグザは一瞬にして姿を消して交わした。すると、上空からエグザが現れ、2挺拳銃、ライトとダークでスクロモンを狙い撃つ。

スクロモンは身体を回転させて弾丸を交わした。

スクロモン「なかなかやるじゃない…。まぁいいわ、今日の所は見逃してあげる…。けど、次会った時には今度こそ息の根を止めてあげるわ！」

スクロモンは高らかに嘲笑いながら闇の中へと消えていった。

エグザ「チッ、尻尾巻いて逃げやがったか…。」

エグザは舌打ちをし、ライトとダークを懐にしまった。

エンジェモン「エグザ、治療は終わったぞ…。」

エグザ「ご苦労だったな…。」

すると、エンジェモンはデジサモンの効果が切れ、静かに消え去った。

エグザ「これで少しはマシになった…。後はリュウギ達に任せたぞ

…。」

エグザはそう言って背中を向けて歩き出す。

ミソラ「待っ…て…。」

すると、ミソラはゆっくりと立ち上がる。

エグザ「あまり動くな…。エンジェモンに治療させたのは、ほんの応急処置にすぎない…。」

ミソラ「どうして…、リュウギのお父さんを殺したの…？」

すると、エグザは黙りになる。

ポコモン「私も気になる…。どうしてなの…？」

すると、エグザは口を開く。

エグザ「ワリィが、その質問に答えることはできない…。」

ポコモン「どうして…？」

エグザ「俺の罪はまだ完全に消えていない…。それどころか、もう二度と消えないだろうな…。」

ミソラ・ポコモン「？」

エグザはそう言い残して歩き出した。

ミソラ「待って…。」

すると、エグザは振り向きもせず、口を開く。

エグザ「さっさとこの島から離れな…。これは忠告だ…。」

エグザはそう言ってこの場から去って行った。

ミソラ「エグザ…。」

リュウギ「ミソラーー？」

すると、リュウギ達が駆け付けてくる。

ミソラ「リュウギ！」

ナルガモン「熱は大丈夫なのか？」

ミソラ「えぇ、少しマシになったわ…。」

すると、ミソラは急にフラつく。

リュウギ「おっと！」

リュウギは慌ててミソラを支える。

リュウギ「あまり無理するなよ…。ほら、薬だ…。」

リュウギはそう言って、ブルーメラモンから貰った薬をミソラに渡した。

ミソラ「ありがとう…。」

キャンドモン「それより、このデジモン達はなんですか…？」

リュウギ達は振り向くと、イビルガに支配されていたズドモンとアノマロカリモンが倒れていた。

リュウギ「まさか、イビルガに襲われたのか？」

ポコモン「そう…。でも、何とかイビルガを倒せたよ…。」

ミソラ「リュウギ、リカバリーを頼むわ。」

リュウギ「分かった。リカバリー！」

リュウギはＤ－アクセルでズドモン達の身体を癒した。

ズドモン「あれ？俺は一体…？」

アノマロカリモン「ここは…？」

リュウギ「リカバリー完了だな…。」

すると、自動的にデジエクスフィールドが展開され、フリーズランド全体を包んだ。

ナルガモン「よぉし、これでここはもう大丈夫だな♪」

ズドモン「なんかすまないなぁ…。」

アノマロカリモン「すみません…。」

リュウギ「気にするな…。悪いのはイビルガだ…。それより、この近くに闇の柱を見なかったか？」

アノマロカリモン「闇の柱ですか…？」

ズドモン「あぁ！それならここから、南東にあるグレートキャニオンなら見たぞ！」

リュウギ「グレートキャニオンかぁ…。とにかく、早くここから抜け出す事が先決だ…。」

ナルガモン「よっしゃ！早く行こうぜ♪」

リュウギ「歩けるか？」

ミソラ「え、えぇ…。」

すると、リュウギはミソラの前に座り込む。

リュウギ「無茶するな…。俺がおぶってやるから乗れ…。」

ミソラ「ごめん…。」

ミソラは顔を赤らめながら、リュウギの背中に乗る。

ズドモン「気を付けていけよ！」

リュウギ「あぁ、世話になったな！」

ナルガモン「じゃあな！」

こうしてリュウギ達はズドモン達と別れを告げ、南東にあるグレートキャニオンへと向かうのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ４４　～ダークス来襲？魔界の妖精　スクロモン？～　（後書き）

グレートキャニオンへと向かうリュウギ達、すると、ミソラは深刻な顔をしていた。

リュウギ「どうしたミソラ？まだシンドイのか…？」

ミソラ「ううん、さっき薬飲んだお陰で、少しマシになったから大丈夫よ！」

リュウギ「そ、そうか…。」

リュウギはまぁいいかと軽く流した。

ミソラ「……。」

すると、ミソラはエグザの言葉を思い出す。

エグザ『俺の罪はまだ完全に消えていない…。それどころか、もう二度と消えないだろうな…。』

ミソラ（エグザ…。）

ミソラは２つの疑問を抱くようになった。１つは、彼は本当にリュウを殺したのか？そしてもう１つはなぜ彼はエクセリオンに選ばれたのか？でも、ここで先程起きた事をリュウギに話せば、またコロシアムのように暴走になり兼ねないと思い、ミソラは自分の心の中にしまうのであった。

次回はグレートキャニオン？

そこでちょっとしたハプニングが…？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ４５　?～リアル鬼ごっこ?巨大渓谷　グレートキャニオン?～（前書き）

今回はちょっとした笑いありのお話？

リアル鬼ごっこって…？

Ｅｐ４５スタート？

ＥＰ４５　?～リアル鬼ごっこ?巨大渓谷　グレートキャニオン?～

～グレートキャニオン～

ここは、ファイル島の東部に広がる渓谷地帯。崖の上と谷底でかなりの高低差がある地形。

リュウギ「ここがグレートキャニオンかぁ…。」

すると、ミソラが不思議そうな目でグレートキャニオンを眺めていた。

ミソラ「なんだか、アメリカ合衆国にあるグランド・キャニオンみたいだね…。」

レナモン「ところで、闇の柱は一体何処にあるんだ…?」

リュウギ「とりあえず、探してみるか…。」

リュウギは歩き出すと、リュウギのＤ－アクセルから通信が入る。

リュウギ「なんだ?」

リュウギはＤ－アクセルの電源を入れて通信を取る。

???『ーギ君?リュウギ君?』

Ｄ－アクセルから聴こえてくる声を聞くと、ミソラが叫ぶ。

ミソラ「コウジさんだわ！

リュウギ「コウジさん！俺だ！」

リュウギは返事をすると、応答する。

コウジ『やっと繋がったみたいだね！どうだいそっちは？』

リュウギ「こっちは順調だ！残りの闇の柱はあと5つだ…。そっちはどうだ…？」

コウジ『残念ながら、こっちは手掛かりなしさ…。』

リュウギ「そうか…。」

ミソラ「ところでコウジさん、いったい何があったの？」

ミソラが問うと、コウジはハッとする。

コウジ『そうだった！そっちは今何処にいるんだい？』

リュウギ「俺達は今グレートキャニオンにいる。」

コウジ『だったら丁度いい。デジモン達の話しによると、グレートキャニオンに闇の柱が2つ建てられているんだ。』

一同「？」

リュウギ「何処にあるか分かるか？」

コウジ『残念ながら僕には何も分からない…。これだけは君達に伝えようと思ってね…。』

リュウギ「分かった。ありがとな…。」

コウジ『それじゃ、僕とレオルモンは引き続き、調査を続けるよ…。気をつけるんだぞ。』

コウジはそう言って通信を切った。

レナモン「このエリアに2つの闇の柱があるのか…。」

ナルガモン「オレにとっちゃ好都合だぜ♪纏めてぶっ壊してやろうぜ♪ナッハハハ♪」

ナルガモンはそう言って高らかに笑う。

キャンドモン「そういう心意気もいいかもしれませんが、程々にしてくださいよ～？」

ナルガモン「分かってる×2♪この最強と呼ばれるデジモンの中のデジモン、このナルガモンに任せとけって♪ナッハハハ♪」

ミソラ「ちっとも分かってないじゃないの…。」

ミソラは呆れてため息をつく。

？？？「ちっがーう？」

すると、何処からか声が聞こえてくる。

リュウギ「誰だ…？」

ミソラ「というよりか、何が違うのよ…？」

すると、谷の頂上から姿を現す。

？？？「最強と呼ばれるデジモンの中のデジモン…、すなわちキング・オブ・デジモンなのは、このアチシよ～んッ？とうッ？」

正体不明のデジモンは頂上から高く飛び上がった。

リュウギ「おい、そんなトコから飛び降りたら危ないぞ…？」

すると、正体不明のデジモンは華麗に着地した。

？？？「ハーハッハッハッ？見たか、アチシの華麗なる着地を？」

一同「……。」

リュウギ達は全くのノーリアクションだった。すると、正体不明のデジモンは怒り出す。

？？？「ムキィィィィィ？何よその腑抜けたリアクション？ムカツくったらありゃしないわ？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「エテモン、完全体、パペット型、ウィルス種、必殺技はラブ・セレナーデ。」

キャンドモン「ありゃりゃ、また変なのが出てきましたねぇ～。」

リュウギ「おい、何度も言うようだけど、お前も人の事言えないぞ…。」

リュウギは小さくツッコム。

エテモン「変な奴とは失礼ね？アチシはどっからどう見ても一般デジモンだわよッ？」

リュウギ・ミソラ「いや、見えない見えない…。」

リュウギとミソラは同時にツッコム。

ナルガモン「さっきから黙って聞いてりゃ調子に乗りやがって？最強のデジモンはオレだっつうの？」

ナルガモンはエテモンの言葉に激怒した。

エテモン「バカおっしゃい！キング・オブ・デジモンはこのアチシよ？」

ナルガモン「んだとコルァァァァ？」

エテモン「ムキィィィィィィ？」

ナルガモンとエテモンは睨み合うと、火花が激しく散る。

キャンドモン「これってなんていうか…」

レナモン「醜い争いだ…。」

リュウギ・ミソラ「言えてる…。」

ナルガモン「っるせぇ？よっしゃ、だったらどっちが最強のデジモンに相応しいか勝負しようじゃねぁか？」

エテモン「面白い…。やってやろうじゃないの？」

ミソラ「勝手に勝負しようとしてるわよ、あのバカ…。」

リュウギ「ったく…、また面倒な事になりそうだな…。」

リュウギとミソラは呆れて深くため息つくのであたった。

キャンドモン「勝負するのもいいんですけど、一体どうやってシロクロつけるんですか？」

ナルガモン・エテモン「そりゃ勿論？」

リュウギ「勿論…？」

ナルガモン・エテモン「何だろう…？」

すると、リュウギ達は思いきりズッコケた。

リュウギ「な、なんだよそれ…。」

ミソラ「あの２人、何かしら似てない…？」

レナモン「同感だな…。」

ミソラ「分かったわ！だったら私が決めるわ！」

ナルガモン・エテモン「えぇ～？」

その時、ミソラは握り拳を作って思いきり岩を殴った。すると、岩は真っ二つに割れた。

ミソラ「なにか文句ある…？」

それを見たナルガモンとエテモンの背筋が凍り付き、首を激しく横に振る。

ナルガモン・エテモン「ありません…。」

ミソラ「それじゃ、あなた達2人で今からジャンケンしなさい！」

ナルガモン・エテモン「はぁ？なんで？」

ミソラ「運も実力の内でしょ？だから公平にジャンケンしなさい！」

リュウギ「ま、その方が手っ取り早いからな…。」

ナルガモン・エテモン「えぇ～？」

ミソラ「なに…？もしかして私の意見に不満があるの…？」

ミソラは笑顔を保ちながら拳をパキパキと鳴らす。

ナルガモン・エテモン「賛成しますッ？」

キャンドモン「こうなった以上、ミソラさんには逆らえませんねぇ…。」

リュウギ「もう、風邪は大丈夫みたいだな…。」

リュウギは苦笑いする。

ナルガモン「仕方ねぇ…、んじゃ…」

エテモン「尋常に…」

ナルガモンとエテモンは低く構える。まるで何処ぞの西部劇のように。

ナルガモン・エテモン「最初はグー？」

ナルガモン「ジャン…？」

エテモン「ケン…？」

ナルガモン・エテモン「ポンッ？」

ナルガモンはチョキ、対するエテモンもチョキだった。

エテモン「やるじゃないの…。」

（ニヤリ…）

ナルガモン「だが、次は貰うぜ…。」
（ニヤリ…）

エテモン「あい…？」

ナルガモン「こで…？」

ナルガモン・エテモン「しょッ？

ナルガモンはパーで、対するエテモンもパーだった。

エテモン「「なかなかしぶといじゃないの…？」

ナルガモン「勝負はまだまだこれからだぜ？あい…？」

エテモン「こで…？」

ナルガモン・エテモン「しょッ？」

今度はお互いグーだった。

リュウギ「おい、早く決めろよ…。」

ナルガモン「分かってるって！次で決めてやるって！」

エテモン「それはこっちのセリフよ？行くわよ？あい…？」

ナルガモン「こで…？」

ナルガモン・エテモン「しょッ？」

グー同士のあいこだった。

ナルガモン「まだまだ？あい…？」

エテモン「こで…？」

ナルガモン・エテモン「しょッ？」

またもやチョキ同士のあいこだった。

エテモン「まだまだこれからよ？あい…？」

ナルガモン「こで…？

ナルガモン・エテモン「しょッ？」

またもやパー同士のあいこだった。

ナルガモン「なんのこれしき？」

エテモン「ムキィィィィィ？」

それから、２０分後…。

ナルガモン「ハァ…ハァ…、俺をここまで本気にさせるとは、テメェなかなかやるじゃねぇか…。」

エテモン「ゼェ…ゼェ…、次こそ決めてやるわ…。あい…？」

ナルガモン「こで…？」

ミソラ「もういいわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

怒り爆発したミソラは思いきり2人を蹴り飛ばした。

ナルガモン・エテモン「しょーーーーーーーッ？」

蹴り飛ばされたナルガモンとエテモンは岩山に顔面強打した。

ミソラ「どんだけジャンケンするのよッ？どんだけ時間掛かってるのよッ？どんだけ接戦してるのよッ？どんだけ無駄なページ使ってるのよッ？」

ミソラはありったけの声でツッコム。

レナモン「ミソラ、最後のツッコミはちょっと…。」

レナモンもミソラの言葉に対して小さくツッコム。

キャンドモン「次で３４８６回目ですよ～？３４８６回連続であいこってアンタらスゴすぎでしょ…。」

リュウギ「いや、それ以前に３４８６回数えてるお前の方がスゴいぞ…。」

リュウギは苦笑いしながら小さくツッコム。

ナルガモンはよろめきながらゆっくりと立ち上がる。

ナルガモン「こ、この際さぁ、何処まであいこを連続で出せるか試してみないか…？」

エテモン「お、それいいかも！ギネス記録出るかもしれないね？」

ミソラ「アホかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラはありったけの声でツッコミながらもう一発お見舞いした。

そして…。

リュウギ「どうするんだよミソラ…？」

ミソラ「ほっといて先に行きましょ…。私達の目的は、このバカ猿を倒す事じゃないんだから…。」

エテモン「ムキィィィィィ？誰がバカ猿ですって？」

リュウギ「とにかく、早く闇の柱を探しに行くぞ。」

すると、エテモンは静かに笑いだす。

ナルガモン「なにが可笑しい？」

エテモン「闇の柱ですって？アチシは知ってるわよ♪」

キャンドモン「マジですか？それって一体何処にあるのですか？」

エテモン「知りたい？どうしようかな～？」

すると、エテモンは高く飛び上がって岩山に乗る。

エテモン「ならばアチシを捕まえなさい！捕まえたらアンタ達の勝ちで、捕まえられなかったらアチシの勝ちだから！」

エテモンはそう言って何処かへと行ってしまった。

リュウギ「行っちゃったぞ…。」

ミソラ「いいんじゃない？なんだか胡散臭いし…。あんなバカ猿と鬼ごっこしてないで、闇の柱を探しに…」

ナルガモン「あの猿野郎がッ？調子に乗りやがってッ？ブッ飛ばすッ？」

ナルガモンの怒りが爆発し、全力疾走でエテモンを追いかけた。

ナルガモン「待ちやがれコルァァァ？」

リュウギ「おい、ナルガモン？」

キャンドモン「行っちゃいましたね…。」

ミソラ「あの自己チューバカ…。また悪いクセだわ…。」

ミソラは呆れて深くため息をつく。

レナモン「こうなった以上止むを得ない…。追いかけよう。」

リュウギ「そうだな。行こう！」

リュウギ達は急いでナルガモンの後を追う。

キャンドモン「ちょっと待ってくださいよ～？」

～グレ大橋～

エテモン「ムキャキャキャ♪捕まえるもんなら捕まえてみなさい♪」

挑発しながら逃げるエテモン。

ナルガモン「喰らえ？『アートルムフレイム？』」

ナルガモンは口から黒炎弾を放った。しかし、エテモンは軽く交わした。

エテモン「もっと狙いを定めなさいよ、おバカさん♪」

ナルガモン「かぁぁぁぁぁぁ腹立つぅぅぅぅぅッ？アイツぜってぇにブッ飛ばすッ？」

段々と怒りのボルテージが上がって行くナルガモン。

エテモン「喰らいなさい！『ダークスピリッツ？』」

エテモンは手を広げると、黒い塊が生じ、投げ付けた。すると、ダークスピリッツは岩山に直撃した。

ナルガモン「何処狙ってんだよバーカ！」

エテモン「アンタこそ、何処見てんのよ？」

すると、岩山が崩れ、ナルガモンに向かって落ちてくる。

ナルガモン「なに？」

エテモン「ムキャキャキャ♪これでお終いね♪」

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

すると、リュウギがガンブレード、アルカナムを取り出して、落ちてくる落石を真っ二つに切った。

エテモン「なに？」

ナルガモン「リュウギ！」

エテモン「チッ、とりあえずここから離れるっきゃないわ！」

エテモンはそう言って何処かへと行ってしまった。

リュウギ「ったく、相変わらず無茶で勝手なんだからお前は…。」

リュウギは小さくため息をつきながらアルカナムを肩に担ぐ。

ナルガモン「うるせぇ、オレはどうしてもあの猿野郎をブッ飛ばすッ？あそこまでコケにされると腹立ってしょうがねぇんだよ？」

リュウギ「だったら、1人で勝手に行くなよ。俺がいるだろ…？」

ナルガモン「リュウギ、お前…。」

ミソラ「私達…でしょ？何せ、闇の柱の場所を知ってるなら、力づくであのバカ猿を捕まえるまでよ！」

レナモン「その方が、唯一の近道だからな…。」

ナルガモン「ミソラ、レナモン…。」

リュウギ「さて、アイツを捕まえる唯一の方法を考えないとな…。」

レナモン「ただ闇雲に追い掛けては、体力を奪われるだけだ…。」

リュウギ達は腕を組んで考え始める。

ミソラ「だったら、私に任せなさい！」

リュウギ「何か作戦があるみたいだな…？」

ミソラ「えぇ。でもやるからには徹底的にやるわよ…。」

その言葉を聞いてリュウギは苦笑いする。

リュウギ（うわぁ…、なんかスゴい事考えてるぞ…。）

一方、エテモンは…。

エテモン「ちっとも追い掛けて来ないわね…？ムキャキャキャ♪潔く諦めたのかしら♪」

エテモンは高らかに笑う。すると、岩山に謎の紙が貼り付けていた。

エテモン「ん？何これ？」

エテモンは不思議そうに紙をはがしたその時、紙が大爆発した。

エテモン「ウキャャャャャャャャ？」

エテモンは飛んで行き、地面に叩きつかれる。

エテモン「いたたたた…。何なのよもうッ？」

？？？「見つけたぜ？」

エテモンは見上げると、岩山の上にドラグナモンが攻撃態勢に入っていた。

エテモン「え？ちょっと何なのよアンタ…？」

ドラグナモン「オレはナルガモンから完全体に進化した、ドラグナモンだコルァァァァァ？」

ドラグナモンは叫ぶと、胸のハッチからビーム砲を放つ。

エテモン「ウキャャャャャャャャ？」

エテモンは間一髪交わした。すると、岩陰からリュウギが現れ、アルカナムを構える。

リュウギ「こっちだ？」

リュウギはアルカナムのトリガーを引いてエテモンを狙い撃つ。

エテモン「どひゃゃゃゃゃゃゃ？」

エテモンはひたすら逃げ続けるが、行き止まりとなり、完全に逃げ場を失った。

ドラグナモン「鬼ごっこはお終いだ！」

リュウギ「さて、闇の柱の場所を教えて貰おうか？」

エテモン「フフフ…。それで勝ったつもりかしら？アチシは逃げまくり、華麗に去るのよ！サルだけに？」

リュウギ「全然上手くねぇよ…。」

リュウギは小さくツッコム。

ドラグナモン「テメェはもう袋のネズミなんだよ！観念しやがれ？」

エテモン「そうはいかないわ！」

すると、エテモンは懐から丸い物を取り出して地面に叩きつけた。

すると、丸い物は爆発して煙が舞い上がる。

リュウギ「煙玉か？」

ドラグナモン「何処だ、見えねぇ？」

煙が去ると、エテモンの姿はなかった。

リュウギ「クソ、逃げられたか…。」

すると、リュウギはＤ－アクセルでミソラと連絡を取る。

一方、エテモンは…。

エテモン「ハァ…ハァ…。意外とやるじゃないの…。でもここまで来ればもう大丈夫だわ…。」

エテモンはホッとすると、地面に先程の紙が貼り付けていた。

エテモン「え？これってまさか…？」

すると、紙がエテモンに反応し、突然爆発した。

エテモン「ウキャャャャャャャャ？」

エテモンはまたもや吹っ飛んで岩山に激突する。

エテモン「なんなのよさっきからッ？」

すると、エテモンはハッとする。

エテモン「まさか、奴らの仕業？」

ミソラ「どうやら上手くいってるみたいだよ、タオモン。」

すると、岩陰からミソラとタオモンが覗き込み、エテモンの様子を

伺う。

タオモン「あの狐封札は標的が近くに寄ると反応して爆発する仕組みになっている…。」

そう、あの紙はタオモンが仕掛けた狐封札だったのだ。

気が付くと、たくさんの狐封札があっちこちに貼り付けていた。

エテモン「うそぉぉぉぉぉぉぉん?」

すると、たくさんの狐封札が反応し、次々と爆発していく。

エテモン「ウキャャャャャャャ?」

エテモンは必死に逃げまくる。何処までも…。

一方、リュウギ達は先程の爆発に反応する。

リュウギ「あそこだな…。ドラグナモン、あそこに集中砲火だ?」

ドラグナモン「任せとけ?」

すると、ドラグナモンは背中に装着しているロケットエンジンの外側がパカッと開き、小型ミサイルが数弾発射される。

一方、狐封札から逃げまくるエテモンは逃げ切り、一時休息する。

エテモン「ゼェ…ゼェ…。ここまで来ればもう…」

すると、上空から何か飛んでくる事に気付く。

エテモン「ん？何か飛んでくる…？」

段々とエテモンに接近する。その正体は、先程ドラグナモンが発射した数弾の小型ミサイルだった。

エテモン「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？」

エテモンは全力疾走で小型ミサイルから逃げる。

一方、ミソラとタオモンは先回りをしてエテモンの様子を伺う。

ミソラ「タオモン、こっちに来るわよ？」

タオモン「分かった。『狐封札？』」

タオモンは数枚の霊札を岩山に仕掛けた。

エテモン「お助けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？

ミサイルから逃げるエテモンは狐封札ゾーンに入ると、仕掛けた数枚の狐封札が反応して大爆発した。

エテモン「あぁぁぁ

デジモンはアチシの自称でして…、はい…。」

エテモンはリュウギ達に捕まえられてしまい、縄に縛り上げられて逆さ吊りにされていた。

ナルガモン「謝って済むなら警察はいらねぇんだよ！」

ミソラ「それで、闇の柱をは何処にあるのよ…？」

エテモン「闇の柱ならグレートキャニオンの谷底にあります…。はい…。」

ミソラ「あとは…？」

ミソラは笑顔を見せながら拳をパキパキと鳴らす。

エテモン「それしか知りません？本当なんですから？神に誓います？だから殴らないでください？」

リュウギ「あの言い方にすれば本当みたいだな…。ミソラ、いい加減に開放してやれよ…。」

ナルガモン「オレはまだ殴り足りねぇ…。このバカ猿のせいで手間掛けさせやがったからな…。」

ミソラ「そうよ、まだまだ足りないわ…。もしかしたらまだ隠してるかもしれないわよ…？」

リュウギ「お前ら鬼かッ？」

リュウギはありったけの声でツッコム。

キャンドモン「なんか史上最強のドSコンビが誕生しましたよあの2人？」

レナモン「ミソラ…。」

レナモンは小さくため息をつく。

ナルガモン「おいイビルガ！さっさとそのバカ猿から出てこいよ！」

すると、エテモンはピタッと止まる。

エテモン「はい？アチシはイビルガに支配されいませんよ。」

一同「はぁ？」

キャンドモン「じゃあ、どうしてあんな事を？」

エテモン「最強のデジモンだって名乗ってたから、ちょっと遊んでやろうかなぁ～って思っちゃってね♪……あれ？どうしたのアンタ達…？」

理由を聞いたナルガモンとミソラは、とうとう怒りＭＡＸとなった。

ナルガモン・ミソラ「このバカ猿がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ？」

ナルガモンとミソラは激怒し、エテモンを袋叩きにした。

エテモン「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ぁぁぁ

ＥＰ４５　?～リアル鬼ごっこ?巨大渓谷　グレートキャニオン?～（後書き）

次回はもう１つの闇の柱を探すリュウギ達?

なんと、久しぶりに奴らが登場しちゃいます！

次回もお楽しみに?

Ｅｐ４６　～謎の基地　オーガトリデ？さらば、ＢＡＤ特戦隊？～（前書き）

なんと、久しぶりにＢＡＤ特戦隊が、登場？

しかし、思いがけない展開に？

Ｅｐ４６スタート？

ＥＰ４６　～謎の基地　オーガトリデ？さらば、ＢＡＤ特戦隊？～

～グレートキャニオン～

３つ目の闇の柱を壊し、もう１つの闇の柱を探すリュウギ達。

ナルガモン「何処だぁ？あと１つは？」

キャンドモン「こんなに広がったら、探すの大変ですよぉ？」

リュウギ「確かにな…。でも、ここで引き返す訳にいかないからな。」

すると、ミソラは何かを発見したのか、指を何かに差す。

ミソラ「ねぇ、アレ見てよ！」

リュウギ達は見ると、その先にはエレベーターがあったのだ。

リュウギ「エレベーターだ…。」

ミソラ「なんでこんな所にエレベーターがあるの？変なの…。」

ミソラは不思議そうにエレベーターを見る。

ナルガモン「ん？何だボタンは？」

ナルガモンは無警戒でボタンを押す。

リュウギ「おい？罠だったらどうするんだよ？」

ナルガモン「心配すんなって！何か合ったらオレに任せとけって！」

ミソラ「アンタが言うと、よけいに心配よッ？」

（シ～～～～～～～ン…）

しかし、エレベーターは何も反応しない。

レナモン「何も起こらないぞ…。」

リュウギ「壊れてて動かないのか…。」

ナルガモン「何だよ脅かしやがってよ！」

ナルガモンは怒ってエレベーターを蹴った。

リュウギ「っておい？」

すると…。

（チン♪）

なんと、エレベーターの扉が開いたのだ。

ナルガモン「おっ、開いたぞ？何だよ壊れてねぇじゃねぇかよ！」

ミソラ「ウソ…。」

リュウギ「結果オーライってヤツだな…。」

レナモン「同感だ…。」

リュウギ達は目を細めてナルガモンを見つめる。

ナルガモン「んだよその言い方？オレにビビってエレベーターが作動したんだって？」

キャンドモン「果たしてそうなんですかねぇ？」

ナルガモン「うるせぇ！とりあえず入ろうぜ！」

ナルガモンはそう言って先にエレベーターの中へと入る。

ミソラ「なんも警戒なしで入ったわよ？どうするのよ？」

リュウギ「もしかしたら、闇の柱に辿り着くしれないな…。入ってみよう。」

リュウギ達はゴクリと息を呑み込み、エレベーターの中へと入った。

ミソラ「だ、大丈夫そうね…。」

ナルガモン「な？だから言っただろ？」

ミソラ「アンタ何も言ってないじゃないの！」

ミソラはすかさずツッコミをかました。

リュウギ「あれ？このエレベーター、下しか行かないぞ？」

レナモン「下へ行ってみよう。」

リュウギ「そうだな…。」

リュウギは頷き、下行きのボタンを押した。

エレベーター「下へ参ります…。」

すると、エレベーターは下へと降りて行く。

リュウギ「ちゃんと動いてるな…。」

ミソラ「このまま、何も起こらなきゃいいんだけど…。」

（チン♪）

すると、エレベーターは止まり、扉が開いた。

キャンドモン「もう着いたみたいですね…。」

リュウギ達は恐る恐る外に出ると、そこはグレートキャニオンの谷底だった。

キャンドモン「リュウギさん、あそこ！」

リュウギ達は見ると、その先には、ボロボロの建物が建っていた。

ミソラ「何あれ…？」

レナモン「見た所、倉庫みたいだな…。」

リュウギ「何かありそうだな…。調べてみよう。」

リュウギ達はボロボロの建物の中に入っていった。

〜???〜

謎の建物に入ると、中はかなり散らかっていた。

ミソラ「汚いわねぇ…、見てるこっちが気分悪いわ…。」

キャンドモン「誰かいるんですかねぇ？」

すると、ナルガモンは大きく息を吸い込む。

リュウギ「バカッ？」

リュウギとミソラは慌ててナルガモンの口を塞ぎ込む。

ナルガモン「フゴッ？フゴフゴ…？」

ミソラ「アンタ、ちょっとは空気読みなさいよね？」
（小声）

リュウギ「敵がいるかもしれねぇんだぞ？」
（小声）

ナルガモン「いけね、忘れてた。」

（小声）

リュウギ「あのなぁ…。」

すると、レナモンが何か気配を感じる。

レナモン「シッ！誰か来る？」

（小声）

リュウギ達は慌てて物陰に隠れる。

すると、足跡が段々とと近付いてき、２つの人影が見えてくる。

？？？「さっきの爆発といい、一体外で何が合ったんでさぁ？」

リュウギ（でさぁ？待てよ、この喋り方って確か…？）

？？？「気にするな…。このオーガトリデに居れば安心だ。」

２つの人影は姿を現さず、何処かへと去って行った。

キャンドモン「行ったみたいですね…。」

リュウギ達は確認し、誰もいないので物陰から出てくる。

ミソラ「今のって一体誰だったんだろう？」

レナモン「オーガトリデ…。聞いただけでも怪しい所だな…。」

すると、リュウギはうでを組んで考えていた。

ナルガモン「どうしたんだよリュウギ？」

リュウギ「今の声、どっかで聞いたことあるようなないような…？」

リュウギは思い出そうとするが、心当たりはない。

ナルガモン「気のせいなんじゃねぇの？」

リュウギ「そうかな…。とりあえず、奥へ行って見るぞ。」

リュウギ達は慎重にオーガトリデの奥へと進んで行く。

～オーガトリデ～

奥へと進んで行くと、別の声が聞こえてくる。

ミソラ「誰かいるみたいだね…。」

（小声）

リュウギ「俺が様子を見てくる。ここで待っているんだぞ。」

（小声）

一同「了解。」

（小声）

リュウギは隠れながら慎重に行動し、匍匐前進（ほふくぜんしん）する。

？？？「おい、本当に大丈夫なんだろうなぁ？こんなオンボロトリデでよぉ？」

？？？「誰がオンボロトリデじゃッ？ここに暮らせるだけでありがたく思いやがれッ？この３バカトリオが？」

すると、別の声がツッコミをかました。

リュウギ（何を揉めてるんだ…？）

リュウギはバレないように物陰からコッソリと覗くと、思わず目を丸くした。

？？？「３バカトリオじゃねぇ？オレ様はバンディッツ？」

？？？「アランでさぁ？」

？？？「ドギヌス？３人揃って…」

『ＢＡＤ特戦隊？』

リュウギ（コイツらかよ…。）

リュウギは呆れて深くため息をつく。

バンディッツ「よく覚えときやがれ、オーガ３バカトリオが？」

？？？「何度も言わせんじゃねぇッ？オレはオーガモンだ！」

？？？「同じくヒョーガモンだ！」

？？？「フーガモン！３人揃って…」

『最強オーガトリオ？』

なんと、ＢＡＤ特戦隊と揉めていたのはオーガ３バカトリオだった。

リュウギ「……。」

リュウギは黙ったまま、ミソラの元へと戻る。

キャンドモン「あ！帰って来ましたよ！」

（小声）

ミソラ「どうだった？」

（小声）

リュウギ「行かない方がいいぞ…。バカが移るだけだから…。」

一同「？」

ミソラは何が何だかさっぱりだった。

ミソラ「何が言いたいのよ？わかんないわよ？」

リュウギ「見れば分かる…。」

今度、ミソラ達が様子を見てくる。すると、すぐに帰って来た。

ミソラ「時間の無駄だから行きましょ…。」

レナモン「同感だ…。」

ナルガモン「アイツらに関わると、超面倒だからな…。」

キャンドモン「全くその通りです…。」

リュウギ「よし、さっさとここから出よう。」

すると、防犯のサイレンが鳴る。

リュウギ「しまった？」

バンディッツ「誰かそこにいるのか？」

フーガモン「みんな落ち着け？とりあえず机の下に隠れるんだ？」

フーガモンは慌てて机の下に隠れる。何を勘違いしてるのやら…。

オーガモン・ヒョーガモン「お前が1番落ち着けッ？」

オーガモンとヒョーガモンはありったけの声でツッコム。

アラン「そこにいるのは分かってるんでさぁ！出てこい！」

すると、リュウギ達は素直に出てくる。

オーガ3バカトリオ・ＢＡＤ特戦隊「んなッ？お前らは？」

キャンドモン「とうとうバレちゃいましたねぇ…。」

ミソラ「1番会いたくない奴らと出くわしちゃったわ…。最悪…。」

リュウギ「また面倒な事になりそうだな…。」

ナルガモン「よぅ、３バカトリオ。」

オーガ３バカトリオ・ＢＡＤ特戦隊「だから３バカトリオじゃねぇッ？」

バンディッツ「お前ら、こんな所で何してやがんだぁ？」

リュウギ「その台詞、そっくりそのまま返すぞ…。それで、今回は何を企んでいるんだ…？」

すると、ＢＡＤ特戦隊は黙りになる。

ミソラ「なんで黙ってるのよ？」

ドギヌス「実は言うと…」

バンディッツ「コロシアムの後、アナログマンの所に戻ると…。」

アナログマン『お前らはもう用済みだ…。さっさと消えたまえ、脇役戦隊…。』

ナルガモン「要するにクビになっちゃったのか？」

ＢＡＤ特戦隊「はい、そうです。」

キャンドモン「色んな人達に言われ放題ですねぇ～。同情しますよ。」

バンディッツ「なぜだ？最初は結構登場したのに、なぜにこんな脇役扱いされにゃならんのだぁ？」

ミソラ「まぁ、見た感じかなりの悪党ヅラだからねぇ…。無理もないわよ。それとかなりウザいし…。」

ナルガモン「ま、簡単に言えば使い捨てカメラみたいなもんだな♪待てよ？ティッシュの方が例えやすいか？」

リュウギ「お前ら、言ってる事残酷すぎだぞ…。」

リュウギは小さくツッコム。

ナルガモン「ところで、テメェらは？」

リュウギ達は同時にオーガモン達を見つめる。

オーガモン「コロシアム以来だなぁテメェら？」

すると、リュウギ達は同時に首を傾げる。

一同「だれ？」

オーガ３バカトリオ「っておい？」

キャンドモン「というよりか、コロシアムに居ましたっけ？」

ヒョーガモン「居たから普通にッ？お前らとやりあったから？」

すると、ナルガモンはハッとしてポンと手を叩く。

ナルガモン「あ～？確か、コロシアム以来だったよなぁ？観客から大ブーイングされた挙げ句の果てに、途中退場した…」

オーガモン「やめて？恥ずかしいからやめてちょうだい？つうか何でそこだけ覚えてるんだよ？」

リュウギ「そんな事より、お前達に聞きたい事があるんだ。」

ヒョーガモン「おい？肝心な所を『そんな事より』の一言で片付けるな？」

ヒョーガモンはありったけの声でツッコムが、リュウギ達はスルーする。

レナモン「この辺りに、闇の柱を見なかったか？」

ヒョーガモン「無視してんじゃねぇぞコルぁ？」

すると、バンディッツはそっぽ向いて口笛を吹く。

バンディッツ「闇の柱なんてオレ様は知らねぇぞ～…♪」

一同「知ってるだろ…。」

リュウギ達は一瞬で見抜いた。

アラン「なに？なぜバレたんでさぁ？」

リュウギ「隠しても見え見えだ…。というよりか自分でバレたって言ってるし…。」

アラン「べ、別にこのトリデの奥に行ってもないからなぁ！断言するでさぁ！」

ミソラ「親切に場所まで教えてくれたわよ…。」

キャンドモン「全く府抜けた連中ですねぇ～、アハハハ♪」

オーガモン「とにかく、ここから先は一歩も通さないぜ！」

ミソラ「アンタ達、アナログマンと何も関係ないじゃないの？」

フーガモン「理由はただ何となくだ！」

理由を聞いたナルガモンはため息をつく。

ナルガモン「根本的にバカだなコイツら…。」

レナモン「確かに…。」

ヒョーガモン「うるせぇ！コロシアムでやられた借り、ここで返させてもらう！行くぞ弟？」

オーガモン・フーガモン「おう？」

オーガモン達は一斉に襲い掛かる。

リュウギ「ナルガモン！」

ナルガモン「おう！」

ミソラ「行くわよ、レナモン！」

レナモン「あぁ。」

リュウギとミソラはＤ－アクセルをナルガモン達に翳した。すると、データは上書きされ、姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、超進化？」

『ドラグナモン？』

レナモン「レナモン、超進化？」

『タオモン？』

オーガ３バカトリオ「ってえぇぇぇぇぇ？」

オーガ３バカトリオはドラグナモンとタオモンの姿を見て思わずあんぐりする。

ドラグナモン「さて、ＣＯＯＬに決めるぜ！」

タオモン「覚悟！」

オーガ３バカトリオ「え？ちょっと待って？」

ドラグナモン・タオモン「問答無用？」

ドラグナモンとタオモンはそれぞれの技でオーガモ３バカトリオを吹っ飛ばした。

吹っ飛ばされたオーガ３バカトリオはオーガトリデの天井を突き破って果てしなく飛んで行った。

オーガ３バカトリオ「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ…？」

キャンドモン「た～まや～。」

リュウギ「さて、残るはお前達だけだぞ？」

バンディッツ「お前らと戦う理由なんて何処にもない…。オレ様はもうアナログマンの手下じゃないからな…。」

アラン「あんちゃん…。」

ドギヌス「足が震えてるぞ兄者…。」

よくよく見ると、バンディッツの足がかなり震えていた。

ミソラ（ビビり丸出しじゃないの…。）

「とか言って、何か企んでるんじゃないの？」

ミソラは疑うと、バンディッツは首を激しく横に振る。

バンディッツ「めっそうもない？」

リュウギ「それじゃ、闇の柱まで案内してくれないか？」

ドギヌス「いいだろう…。こっちだ…。」

～オーガトリデ　？最深部～

更に奥へと進むリュウギ達。するとそこに闇の柱が建てられていた。

リュウギ「見つけたぜ。」

ミソラ「早く壊しましょ！」

ドラグナモン・タオモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ドラグナモンとタオモンはそれぞれの技で闇の柱を壊した。

ミソラ「やったわ！」

ドラグナモン「Ｊａｃｋ　ｐｏｔ？」

戦闘を終えると、ドラグナモンとタオモンは成長期へと退化した。

リュウギ「よし、残りはあと３つだな…。ありがとな、ＢＡＤ特戦隊。」

バンディッツ「あ、あぁ。」

アラン「なんだか、お礼言われるの生まれて初めてでさぁ。」

ドギヌス「確かにな…。」

ミソラ「ところで、アンタ達はこれからどうするのよ?」

バンディッツ「あそこに戻るのはもう御免だ。オレ達はオレ達なりの生き方を見つけるさ。それと常々思ってたんだが、このままで本当にいいのかってな…。」

ナルガモン「案外良いヤツじゃねぇかよ♪」

リュウギ「そうか…。頑張れよ…。」

バンディッツ「そっちこそ、頑張れよ。何とかアナログマンの野望を打ち砕いてくれよ。」

リュウギとバンディッツはお互いに握手をした。

ドギヌス「外へ出るなら、このエレベーターを使え。」

リュウギ「分かった…。」

リュウギ達はエレベーターに乗り、上行きのボタンを押した。

バンディッツ「また会おうぜ!」

リュウギ「じゃあな!」

リュウギ達はＢＡＤ特戦隊と別れを告げ、次なる場所へと向かった。

ＢＡＤ特戦隊「……。」

バンディッツ「さて、これからどうするかな…？」

アラン「あんちゃん、これでオレ達は脇役じゃなくなるよなぁ？」

バンディッツ「バカッ？そんなこと言ったら、読者の奴らが変な目で見られるだろうが？」

アラン「おっと、そうでしたぁ…。」

ドギヌス「それより兄者、あの男の言う事を信用してもいいのか？」

バンディッツ「エグザの旦那の事か？当然だ。なんたって、アナログマンに捨てられたオレ達を助けてくれたのは、あのエグザの旦那だ…。」

それは、ほんの数日前の事だった。

アラン「あんちゃん…、とうとう捨てられちゃいやしたねぇ…。」

バンディッツ「言うな…。分かっている。」

ドギヌス「これからどうするんだ？」

エグザ「だったら、エクセリオンに手を貸したらどうなんだ？」

すると突然、バンディッツ達の前に左目に傷つけを持った男、エグザが現れる。

バンディッツ「エクセリオンに手を貸すだと？」

エグザ「不満かぁ？」

アラン「不満も何も、エクセリオンとは敵同士なんでさぁ！」

エグザ「元…敵同士だろ？心配すんな…。気を改めたらアイツらだって分かってくれるハズだ…。」

バンディッツ「お前…。どうしてそこまでしてオレ達を…？こんな落ちこぼれのデータを…？」

エグザ「データだろうが生きてるからには変わりない…。どうだ？ダマされたと思ってアイツらに託してみたらどうなんだ…？」

アラン「託すって何を託すんでさぁ？」

エグザ「お前らの全てをさ…。」

ーーーーーーーーーーーーーー

バンディッツ「エグザの旦那は、この事が言いたかったんだろうな…。」

アラン「データの塊であるオレ達でも、力になれるんだよな…。」

バンディッツ「よし、オレ達はオレ達なりにやるべき事をやるぞ！」

？？？「そいつは困るなぁ…。」

すると、バンディッツ達の前に幻獣型デジモンがすがたを現す。

ドギヌス「な?お前は幻獣の魔神　ヴルグモン?」

ヴルグモン「反逆者の分際が…。覚悟はできてるんだろうな…?」

バンディッツ「よく言うぜ。オレ達を追い出したクソ野郎が…。」

ヴルグモン「口を慎んで貰おうか?所詮、データの塊に過ぎないクズ共が…。」

アラン「クズでも、オレ達はオレ達の生き方を貫くだけでさぁ!」

ドギヌス「エグザがそう教えてくれたのだからな…。」

すると、ヴルグモンは高らかに嘲笑う。

ヴルグモン「片腹痛いわ…。貴様らの生き方などこの世に存在しない!無論、ここが貴様らの墓場だ…。」

バンディッツ「あぁそうかよ…。だが、今の内にそうやって浮かれてな…。いつか必ず、エクセリオンはお前らをぶっ潰しに行くからな!」

ヴルグモン「クズ共が?『ヘルウイングショット?』」

ヴルグモンは背中に生えてる黒い翼から無数の羽を発射してバンディッツ達を串刺しにした。

一同「ぐはっ?」

バンディッツ達は力尽きて倒れ、身体が段々と消滅していく。

ヴルグモン「他愛も無い…。そこで朽ち果てるがいい…。」

ヴルグモンは高らかに嘲笑いながら闇の中へと消えていった。

アラン「あんちゃん、これで良かったんでぃ？」

バンディッツ「あぁ…。所詮、これがオレ達兄弟の運命なんだ…。」

ドギヌス「けど、オレは後悔していない…。」

バンディッツ「あぁ、オレ達はやれるだけの事を精一杯やった。悔いはない…。」

すると、バンディッツは小さく笑う。

バンディッツ「感謝するぜ、エグザの旦那…。それと、後は頼むぜ、エクセリオン…。」

バンディッツはそう言って高らかに笑う。それにつられてアランもドギヌスも笑う。

バンディッツ「バンディッツ…。」

アラン「アランでさぁ…。」

ドギヌス「ドギヌス…。３人揃って…。」

『エクセリオンに託す最強トリオ、ＢＡＤ特戦隊！』

ＢＡＤ特戦隊はリュウギ達に全てを託し、そのまま静かに消え去るのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ４６　～謎の基地　オーガトリデ？さらば、ＢＡＤ特戦隊？～（後書き）

～グレートキャニオン～

一方、リュウギ達は次なる目的に向かっていた。

ミソラ「なんだかんだ言って、あの３バカトリオ、良い所あるじゃない♪」

レナモン「悪い奴らでも、分かってくれるんだな…。」

リュウギ「そうだな…。きっと、父さんのパートナー、スレイヤードラモンも分かってくれるハズだ…。」

ミソラ「……。」

（きっと、エグザも…。）

すると、ミソラは深刻な顔をする。

ナルガモン「どうしたんだよミソラ？らしくねぇぞ？」

ミソラ「別に何でもないわよ！」

キャンドモン「なんならミソラさん、ボクチンが癒してあげますぅぅぅぅぅ？」

キャンドモンがミソラに飛び付くと、ミソラは即座にかかと落としをしてキャンドモンを地面に叩きつける。

キャンドモン「へぶしッ？」

ミソラ「結構よ…、このヘンタイロウソク…。」

キャンドモン「酷いですぅ～…。」

すると、リュウギ達はピタリと足を止めた。

リュウギ「行き止まりか…？」

リュウギ達は下を見ると、崖の上と谷底でかなりの高低差があった。

キャンドモン「あっひゃゃゃゃゃゃ？めっさ高ぇよこれ？落ちたらヤッベェよこれ？」

すると、リュウギは崖を調べる。

ミソラ「ちょっと、危ないわよリュウギ？」

リュウギ「この崖、なんか妙だ…。なんでここだけ、足跡が多い…。」

すると、レナモンも崖を調べる。

レナモン「確かに…。ここに足跡があるのは不自然だ…。」

リュウギ「ってことは…。」

すると、リュウギは崖へと歩き出した。

キャンドモン「きいいいいいいやややややややや？リュウギさんが自殺ううううううう？」

すると、何も無いハズなのに空中を歩いていた。

キャンドモン「…ってあれ？」

リュウギ「やっぱりな…。これは見えない橋だ…。」

ミソラ「あぁ？スレッド大陸にもあったあの見えない橋？」

ナルガモン「さすがだぜリュウギ♪」

リュウギ「よし、早くわたるぞ！」

一同「おう♪」

こうしてグレートキャニオンは平和になり、リュウギ達は、次なる新天地へと向かうのであった。

ＢＡＤ特戦隊よ、永遠に…。

書いてる自分も思わず感動しちゃいました…。

次回はなんとミソラが大パニック？

お楽しみに？

ＥＰ４７　～ミソラ大パニック？恐怖の怪談話…？～（前書き）

題名どおり、ミソラが大パニックになります？

ＥＰ４７スタート？

ＥＰ４７　～ミソラ大パニック？恐怖の怪談話…？～

～トロピカジャングル～

グレートキャニオンの見えない橋を渡ったリュウギ達。見えない橋を渡り終えると、辺りはすっかりと夜になっていた。

リュウギ達は一時休息のため、トロピカジャングルで野宿をするのであった。

ナルガモン「ジジイから聞いた話しなんだけど、このデジタルワールドのとあるしまにあるちいさな電話ボックスのお話だ…。」

一同「ゴクリ…。」

リュウギ達はゴクリと息を呑む。

ナルガモン「今宵の満月、辺りはすっかりと夜になっていた。そう、今日みたいな真っ暗闇の夜だ…。

その島に住むピヨモンは食料を探すため、１人森の中へと入っていった。

森の中に入って１０分が経つと、森の奥から小さな光りが見えてくる。

気になったピヨモンは、小さな光りに向かって走り出す。

その光りの正体は、一台の電話ボックスだった。

ピヨモンは首を傾げて呟く。「おかしいなぁ…。こんな所に電話ボックスなんてあったっけ？」と…。

ますます気になったピヨモンはゆっくりと電話ボックスの中に入る。

（ジリリリリリ！）

その時、電話が鳴り出したのだ。まるで、ピヨモンを迎えるように…。

ピヨモンは恐る恐る電話ボックスの受話器を取って、そっと耳を当てた。

「この電話に出たあなたへ、この島にある電話ボックスを探せ…。そうすれば、願いが叶う…。」

受話器から聞こえてくる謎の声を聞いたピヨモンは、願いが叶うという言葉に期待したのか、ピヨモンはこの島にある電話ボックスを探しに行く。

探して３０分が経ち、ピヨモンは走り疲れて休息する。

すると、ピヨモンは「さっきの電話、ただのイタズラだったのかなぁ？」と、常々疑い始める。

すると、森の奥から小さな光りが見えてくる。

ピヨモンは「もしかして？」と感じ、急いで小さな光りの方へと走り出した。

辿り着いた先は、なんとこの島にあるもう1つの電話ボックスだったのだ。

ピヨモンはこれで願いが叶うと嬉しくなり、ピョンピョンと飛び跳ねる。ピヨモンは急いで電話ボックスの中に入って受話器を取る。

（ツー…ツー…ツー…）

しかし、先程の謎の声が聞こえてこない。

ピヨモンは首を傾げ、電話ボックスを調べる。

すると、電話線が切断されていたのだ。

ピヨモンは残念そうに電話ボックスを出ようとしたその時だった。

（ジリリリリリ！）

電話線が切断されているハズなのに、突然電話が鳴り出したのだ。

ピヨモンは受話器を取って耳を当てた。

「おめでとう…。これで願いが叶う…。」

その言葉を聞いたピヨモンは、期待を抱きながら願い事を言う。すると、受話器から謎の声が返ってくる。

「違う…。お前の願いじゃない…。」

ピヨモンは「え?」と、頭上に?が浮かんでいた。言ってる事が全く理解できず、ピヨモンは謎の声にある事を聞いた。「それじゃ、誰の願いなの…?」と…。

しかし、返答しない…。

しばらくすると、受話器ではなく背後から謎の声が聞こえくる。

「それは勿論オレの願いだ…。その願いは…」

ピヨモンはゆっくりと振り向くと、謎のデジモンが巨大な鎌を振りかぶっていた。

ピヨモン「?」

「お前の魂だぁぁぁ

ミソラはありったけの声でツッコム。涙目になりながら…。

レナモン「ミソラ、まさか怪談が嫌いなのか…？」

リュウギ「あぁ、ミソラは昔から、幽霊とか怪談が嫌いなんだよ…。」

キャンドモン「へぇ～、ミソラさんでも苦手な所があるんですねぇ～♪でも、それはそれで可愛いと思いますよぉ♪」

すると、ミソラは思いっきりキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ぐえっ？」

ミソラ「アンタにだけ1番言われたくないわ…。」

リュウギ「ていうか、なんでいきなり怪談なんだよ…？」

ナルガモン「夜だから盛り上げないとな♪キャンプみたいに楽しいだろ？」

ミソラ「アンタ達はそうでも、私にとっては恐怖と絶望しかないわよッ？」

ミソラは涙目になりながらツッコム。

ナルガモン「よぉし、この調子で第2弾、いってみよー♪」

ミソラ「やるなぁぁぁ

ミソラはとうとう怒り爆発し、ナルガモンに回し蹴りをかました。

ナルガモン「ぶべらッ？」

リュウギ・レナモン「やれやれ…。」

リュウギとレナモンは小さくため息をつく。

ミソラ「今日は疲れたんだから、早く寝ましょ？」

ミソラはそう言って寝転がる。

リュウギ「そうだな…。明日はもっと忙しくなるからな…。寝よう。」

リュウギ達は、明日に備えて眠りにつくのであった。

ミソラ「……。」

「お前の魂だぁぁぁ

ミソラ「ねぇリュウギ…？起きてる…？」

ミソラは恐る恐るリュウギに話し掛ける。

リュウギ「ＺＺＺ…。」

リュウギはすっかりと眠っていた。

ミソラ「ウソ…。レナモン、起きてる？」

レナモン「ＺＺＺ…。」

レナモンもグッスリ眠っている。

ミソラ「どうしよ～う…、眠れないよ～。」

ナルガモン「う～ん…。」

ミソラ「ちょっと、アンタの訳の分からない怪談のせいで眠れなくなったじゃないの？どうしてくれるのよ？」

ナルガモン「ＺＺＺ…。」

ナルガモンは爆睡していた。すると、寝言を言う。

ナルガモン「ドゥルルルル…、ドゥルルルル、ドゥルルルルッルッルルルルル…♪」

ミソラ「ちょっと？なんで『世にも◯妙な物語』歌ってんのよ？どんな寝言？ていうかなんで知ってるのよ『世にも◯妙な物語』？」

ミソラは完全にパニック状態に陥ってしまう。

ミソラ「どうしたらいいのよ?このままじゃ満足に寝れないじゃないのよ～?誰か私を眠らせてぇ～?」

???「あのぅ…。」

すると、背後から誰かがミソラにそっと声を掛ける。

ミソラ「何よ?今眠れなくて困ってるんだから?」

ミソラは振り向くと、正体不明のデジモンが眼光鋭く光らせる。

???「た～す～け～て～く～だ～さ～い…。」

すると、ミソラは驚きを超えたのか、バッタリと倒れて気絶してしまった。

???「あれ?ちょっと…?」

それから、夜はすっかりと明けた。

気絶したミソラは意識を取り戻すと、段々と音楽が自然と耳の中に流れてくる。そう、あの曲が…。

ナルガモン・キャンドモン「ドゥルルルル…、ドゥルルルル、ドゥルルルルッルッルルルルル…♪」

ナルガモンとキャンドモンはリュウギのｉＰｏｄ　ｔｏｕｃｈで『

世にも◯妙な物語』のテーマ曲を流しながら歌っていた。ミソラの隣で…。

ナルガモン・キャンドモン「ドゥルルルル…、ドゥルルルルッルルルルル…♪ドゥルルルル…、ドゥルルルル、ドゥルルルルッルルル……」

すると、ミソラは思いっきりナルガモンを殴り飛ばした。

ナルガモン「ぐはっ?」

ミソラ「何してんのよ、アンタ達…?」

ミソラは今にも爆発しそうな表情で拳をパキパキと鳴らす。

キャンドモン「じょ、冗談ですってミソラさん?これはほんのアメリキャンジョークですから?」

ミソラ「バカぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ?」

(パシィーーーーーーン×2?)

すると、2発のビンタがトロピカジャングル内に響き渡った。

そして…。

リュウギ「ふぁ〜、良く寝た…。」

リュウギは大きなあくびをすると、ナルガモンとキャンドモンのボロボロ姿に気付く。

リュウギ「おい、なんでそんなにボロボロなんだよ…？何かあったのか？」

ナルガモン「いや、ちょっとな…。」

キャンドモン「襲撃されちゃいました…、はい…。」

リュウギ「襲撃…？まさか、イビルガか？」

ナルガモン・キャンドモン「いや、それ以上です…。」

ナルガモンとキャンドモンは同時にミソラをチラ見すると、ミソラはギロリと睨んできた。

ナルガモン・キャンドモン「怖い夢を見ました？はい？」

リュウギ「そ、そうか…。」

レナモン「でも、夢なのに身体がボロボロなのは不自然だ…。」

リュウギ「確かに…。」

ミソラ「夢の中で喧嘩してたんだよねぇ～？」

ナルガモン・キャンドモン「ごもっともです？」

リュウギ「そ、そうか…。」

レナモン「それならいいんだが…。」

リュウギとレナモンはなんとか納得したみたいだ。

ミソラ「さ、朝ご飯にしましょ♪」

そして…。

リュウギ「それで、夕べは良く眠れたのか？」

ミソラ「それがね、変な夢見たのよ…。」

ミソラは小さくため息をつきながらデジタケをたべる。

レナモン「それよりミソラ、デジタケ食べても平気なのか…？」

レナモンは小さくツッコムが、ミソラは全く気にしていなかった。

リュウギ「ところで、どんな夢をみたんだ…？」

ミソラ「それが、私に話しかけて来て、振り向いたら…」

？？？「た～す～け～て～く～だ～さ～い…。」

ミソラ「そうそう、こんなこんな感じで……え？」

リュウギ達は振り向くと、謎のデジモンがお茶を飲んでいた。

？？？「あ、どうもこんちわ～。」

すると、ミソラは完全にパニック状態に陥る。

ミソラ「イヤイヤイヤイヤイヤイヤ、イヤャャャャャャッ?なんでこんな所にいるのよぉぉぉぉぉぉぉ?」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「バクモン、成長期、聖獣型、ワクチン種、必殺技はナイトメアシンドローム。」

バクモン「はじめまして～、ボク、バクモンと申します～♪はい♪」

バクモンはお茶を飲みながら簡単に自己紹介をする。

リュウギ「ミソラ、まさかコイツに驚いて気絶したのか…?」

ミソラ「だって、あんな怪談の後に急に話し掛けられてきたら、だれだってビックリするでしょ?」

ナルガモン「ビビりすぎだっつうのミソラは…。」

すると、ミソラはナルガモンに思い切りゲンコツをかました。

ナルガモン「いっでぇぇぇ?」

ミソラ「誰のせいだと思ってんのよ…。」

バクモン「ちなみに、夕べのアレは夢じゃありませんよ～♪はい♪」

リュウギ「それで、俺達になんの用なんだ…?」

バクモン「はい♪実はボク、怪談の話を聞きにきました～♪はい♪」

ナルガモン「え？まさかオレの怪談話をか？」

バクモン「はい♪あなたの怪談話を聞いて思わず感動しちゃいました～♪はい♪」

ナルガモン「そ、そうか？スゲェだろ♪ナッハハハ♪」

ナルガモンは嬉しくなり、高らかに笑う。

レナモン「では、なぜミソラに助けを求めたのだ…？」

バクモン「ナルガモンが寝ちゃってつまんなかったからですぅ～♪はい♪起こして貰おうと頼んだら、気絶しちゃったんですよ～♪はい♪」

理由を聞いたリュウギ達は目を丸くする。すると、ミソラはリュウギに耳打ちをする。

ミソラ「ちょっとリュウギ、異常すぎるわよこの子…？そのために私に助けを求めたの…？」

（小声）

リュウギ「これはいわゆる、怪談マニアってヤツだな…。」

（小声）

バクモン「ではでは、こういう話なんてどうです？」

一同「？」

ミソラ「ちょっと…、嫌な予感しかしないのは私だけ…？」

バクモン「幸せなら手を叩こう♪って言う歌はご存知ですか？」

リュウギ「あぁ、幸運があるから手を叩くって有名な歌だろ？」

ミソラ「それがなにっていうのよ…？」

バクモン「友人から聞いた話なんですけど、とある島にどんなに努力しても上手くいかないパルモンがいました…。

そのパルモンは生まれつき身体が弱いからだ。そのお陰で、島のデジモン達から軽蔑されていました。

それでも、パルモンは自分の力で最後までやり遂げたいという目標を持っていました。

そんなある日、パルモンの友人であるフローラモンがパルモンにこう言いました。

フローラモン「今度、この島のマラソン大会があるんだけど参加してみないか？マラソン大会なら相手と競い合う競技じゃないし、自分はどこまでいけるかの競技だし、僕は丁度いいと思うよ？」

その言葉を聞いたパルモンは喜んで参加した。

マラソン大会当日、島のデジモン達がほとんど参加していた。そして、その中にパルモンも…。スタートのピストルが鳴ると、一斉にスタートした。

パルモンは自分のペースで走っていく。フローラモンは観覧席で必死に応援をする。

数時間後、島のデジモンは次々とゴールしていく。

しかし、肝心なパルモンがまだゴールしていない。

フローラモンは心配になる。途中で力尽きて倒れていないかと…。パルモンが生まれつき身体が弱い事をフローラモンは百の承知していた。

1時間後…。

パルモンは全く帰ってこない。島のデジモン達はほとんどゴールしていた。残りはパルモンだけだった。

フローラモンはますます心配になり、探しに行こうとしたその時、奥から人影が見えてきた。

なんと、足を引きずりながらゆっくりと走ってくるパルモンだったのだ。

フローラモン「がんばれパルモン?あともう少しだ?」

フローラモンは応援すると、周りにいる島のデジモン達が応援し始めたのだ。

その光景を目にしたパルモンは思わず涙が出た。足なんてもうどうなってもいい…。最後までやり遂げたるんだ…。そう決心したパル

モンはゆっくりとゴールに近付いていく。

フローラモン「そうだ！写真を撮ろう！」

ハッとしたフローラモンは急いでカメラの用意をする。

とうとう、ゴールまであと１０メートルだった。島のデジモンは感動のあまりに、拍手で迎える。まるで幸せなら手を叩くように。

フローラモン「がんばれ？パルモン？」

そして、ついにパルモンはゴールテープを切った。それと同時に、フローラモンはカメラのシャッターを切った。

（パシャッ？）

すると、ゴールテープを切ったハズのパルモンの姿がありませんでした。

フローラモン「え？パルモン？」

フローラモンは何度呼んでも、返事がない…。大会が終わってから探しに行ったのだがパルモンは何処にもいなかった。パルモンは原因不明の行方不明になったのだ…。

こうして島のマラソン大会は謎に包まれたまま幕を閉じた…。

それから数日後、フローラモンはある事を思い出した。

フローラモン「そうだ！あの写真を見れば何か分かるかもしれない

！」

フローラモンはそう言って、当時パルモンがゴールした時の写真を探す。

フローラモン「あった？」

写真を見つけたフローラモンは写真を見る。パッと見て、特に変わった所はない…。しかし、その写真にはとんでもない物が隠されていたのだ。

フローラモン「え？」

フローラモンはジッと写真を見つめる。そのとんでもない物とは、パルモンの周りにいる島のデジモン達だった。

一見、パルモンの姿を見て感動し、拍手で迎えてるように見えるが、よくよく見ると、周りの島のデジモンが手のひらではなく、その逆、いわゆる手の甲同士で拍手をしていたのだ。

幸せなら手を叩こうとは、幸運があるから手のひら同士で叩く。しかし、彼らの動作は幸運ではなく悪運を呼び寄せるため、手の甲同士で叩くのであった。

そう、彼らが呼び寄せた悪運でパルモンを消したのであった…。

ーーーーーーーーーーーーーー

一同「……ゴクリ。」

バクモン「以上です～♪はい♪」

リュウギ「なんて言うか、凄いリアルだな…。」

ナルガモン「寒気がきたぜ…。」

キャンドモン「危ねぇ、ボクチン危うく漏らす所でしたよ…。」

すると、レナモンはハッとする。

レナモン「ミソラは？」

すると、ミソラは陰で両耳を塞ぎながら1人で歌っていた。

ミソラ「えへへへへ…、幸せなら手をたたこう…♪（泣）」

一同「ミソラッ？（激汗）」

バクモン「楽しかったですぅ♪ありがとうございますぅ♪はい♪」

ミソラ「アンタはそうでも、私にとっては最高級の絶望よぉぉぉぉぉぉぉッ？」

ミソラはありったけの声でツッコム。

リュウギ「ミソラ、あくまでも作り話なんだからそうパニックになるなよ…。」

ミソラ「大体、何でアンタ達はちっとも怖くないのよ？」

ミソラは理由を聞くと、リュウギ達はそれぞれの答えを述べる。

リュウギ「そりゃ勿論、全然怖くないからだ。それに、例え幽霊だろうが、正々堂々、真っ向勝負するだけだ？」

ナルガモン「オレは逆に、おもしれぇから♪」

レナモン「私は霊などあまり興味はない…。だから怖くも何ともない…。」

バクモン「ボクはナルガモンと同じ意見ですぅ♪はい♪」

キャンドモン「ボクチンはミソラさんの怖い顔が見ればそれでじゅう……ひぎゃんッ？」

すると、ミソラは思いっきりキャンドモンを殴り飛ばした。

ミソラ「アンタだけ理由になってないわよ…。このヘンタイロウソク…。」

キャンドモン「すみましぇん…。（泣）」

リュウギ「そうだバクモン、この辺りに闇の柱を見なかったか？」

バクモン「闇の柱ですか？ボクにはさっぱりわかりません…。はい…。」

リュウギ「そうか…。ところで、なぜお前はイビルスに支配されいないんだ…？」

バクモン「それはですねぇ…」

すると突然、空が段々と雨雲に包まれていく。

レナモン「時期に雨になるな…。」

ミソラ「ウソ?早く雨宿りしなきゃ、私達ずぶ濡れになるわよ?」

バクモン「だったら、ボクの住む館に来ます?」

ナルガモン「館?こんなジャングルの中にあるのかよ?」

すると、雨粒がナルガモンの頭に落ちてくる。

リュウギ「四の五の言ってる場合じゃなさそうだな…。バクモン、案内してくれ!」

バクモン「こっちです!」

バクモンはフワフワと館の方へと向かい、リュウギ達は急いでバクモンの後に着いていく。

すると、雨はリュウギ達を待ってくれず容赦なくリュウギ達に降り注ぐ。

ナルガモン「ヤベッ?かなり降ってきたぞ?」

キャンドモン「ボクチンの炎がぁぁぁぁぁぁ?」

ミソラ「それはそれでいいんじゃないの…?」

（ボソ…）

キャンドモン「ミソラさん？冗談ですよねぇ？冗談って言ってくださいよ？」

すると、見なかったはフンと鼻を鳴らす。

レナモン（ミソラ、さっきの事まだ怒ってるな…。）

レナモンは小さくため息をつく。

リュウギ「バクモン、まだ着かないのか？」

すると、バクモンはピタッと止まる。

バクモン「ここです！はい♪」

館に辿り着くと、リュウギ達はおもわず目を丸くした。

一同「……え？」

その館はかなり古ぼけており、不気味を漂わせる洋館だった。

バクモン「こちらです♪はい♪」

すると、雷鳴が鳴り響く。まるでリュウギ達が来る事を分かっていたかのように…。

ミソラ「ウ、ウソ…。」

この光景を目にしたミソラは、段々と顔が引きつっていくのであった。

――To Be Continued…

ＥＰ４７　～ミソラ大パニック？恐怖の怪談話…？～（後書き）

次回もまたもや大パニックに？

ミソラ「またなの？」

やれやれ…。

次回もお楽しみに？

Ｅｐ４８　～エクセリオン大パニック？恐怖の館　闇貴族の館？～（前書き）

７月に入りました♪

かなり暑いですねぇ…。夏バテに御注意してください？

今回はなんと闇貴族の館？

リュウギ達はとんでもないパニックに陥ってしまう？

Ｅｐ４８スタート？

ＥＰ４８　～エクセリオン大パニック？恐怖の館　闇貴族の館？～

～トロピカジャングル～

突然の雷雨で雨宿りしようとバクモンに案内してもらうリュウギ達。

バクモン「ようこそ！闇貴族の館へ♪はい♪」

リュウギ達は闇貴族の館を見て思わず目を丸くした。

ミソラ「ちょっと？これって幽霊屋敷じゃないの？」

最初に言葉が飛んで来たのはやはりミソラだった。

バクモン「幽霊屋敷とは失礼な！ボクが住んでいた綺麗な館です♪はい♪」

ミソラ「何処がよッ？幽霊屋敷やしき以外何物でもないわよ？」

リュウギ（住んでいた…？）

ナルガモン「ドゥルルルル…、ドゥルルルル、ドゥルルルルッルッルルルルル…♪」

すると、ナルガモンは例のあの曲を歌うと、ミソラは思いっきりナルガモンを蹴り飛ばす。

ナルガモン「ぶべらッ？」

ミソラ「だからやめんかいッ？」

ナルガモン「すみましぇん…。」

リュウギ「さて、どうするか…？」

レナモン「ずぶ濡れになるよりかはマシだな…。入ろう…。」

レナモンの発言にミソラは涙目になり、急にレナモンに抱き着いた。

ミソラ「行かないでよレナモ～ン！私を1人にしないでよ～！」

レナモン「し、しかし…。」

レナモンは困ったそうな顔をする。

キャンドモン「だったらボクチンがミソラさんを護衛いたしまぁぁぁぁぁぁぁす？」

キャンドモンはもうスピードでミソラに急接近すると、ミソラは思いっきりキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ぐえっ？」

ミソラ「誰もアンタなんかに頼んだ覚えはないわよ…。」

キャンドモン「そんなぁ～（泣）」

リュウギ「心配するなミソラ…。何かあったら俺が何とかする…。」

ミソラ「ホントに…？」

リュウギ「あぁ、約束だ。」

ナルガモン「んじゃ、入ろうぜ♪」

リュウギ達は雨宿りしようと、闇貴族の館へと入って行くのであった。

～闇貴族の館　？玄関～

中に入ると、真っ暗で何も見えなかった。

リュウギ「真っ暗で何も見えないなぁ…。」

キャンドモン「だったらボクチンにお任せを？『ボンファイア？』」

キャンドモンは口から小さな火球を吐いて、館内の全てのロウソクに火を灯した。

すると、玄関があかるくなった。

ナルガモン「おぉ！たまにはやるじゃねぇか♪」

キャンドモン「余計なお世話です…。」

レナモンは周りを見渡して安全を確認する。

レナモン「ここなら少し休めそうだな…。」

ナルガモン「でもさぁ、なんか退屈じゃねぇ？」

リュウギ「確かにな…。よし、この館を調べよう！」

その言葉を聞いたミソラは首を横に振って激しく否定する。

ミソラ「それだけはイヤッ？」

リュウギ「大丈夫だ。何も出てきやしないさ…。」

ミソラ「だったら、私とレナモンはここにいるわ！」

ミソラはそう言ってレナモンの背中に隠れる。

レナモン「ミ、ミソラ…。」

レナモンは顔を赤らめてちいさくため息をつく。

リュウギ「しょうがないなぁ…。それじゃレナモン、ミソラを頼んだぞ。」

レナモン「わ、分かった…。」

ナルガモン「よっしゃ！探検だぜぃ♪」

リュウギ達は闇貴族の館を調べに二階に繋がる階段を上がっていく。

ミソラ「なるべく早くねぇ～！」

バクモン「まぁゆっくりしていってください♪はい♪」

ミソラ「ゆっくりできないわよ…。今にも何か出て来そうだし…。」

ミソラはキョロキョロしながら呟く。

レナモン「大丈夫だミソラ…。何かあったら、私がミソラを守るから…。」

ミソラ「レナモン…。」

すると、ミソラはレナモンをギュッと抱き締める。

レナモン「な?ミソラ?」

すると、レナモンは更に顔を赤らめる。

ミソラ「ごめん…。このままいさせて…。」

レナモン「わ、分かった…。」

～闇貴族の館　?二階～

リュウギはドアを開けると、部屋には巨大な本棚があり、そして地面にはたくさんの本が散らかっていた。

リュウギ「どうやら、ここは図書室みたいだな…。」

リュウギ達はゆっくりと部屋に入る。

ナルガモン「えらい散らかってんなぁこりゃ～。」

キャンドモン「誰もいなさそうですね…。」

リュウギは地面に落ちてある本を拾う。その本にはデジ文字が書いてあるため、リュウギには全く意味が解らない。

ナルガモン「なんて書いてるかわかるか?」

リュウギ「いや、よくわからないな…。」

リュウギは首を傾げながらパラパラとページをめくっていく。

一方、キャンドモンは本棚を調べる。

キャンドモン「分かりましたぞ…。これは本を取り出すと秘密の扉が現れるパターンですな?これだ!」

キャンドモンはそう言って本を取った。

その時、部屋の壁から数本の矢が飛んできてリュウギとナルガモンに襲い掛かる。

リュウギ・ナルガモン「どわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ?」

リュウギとナルガモンは慌てて飛んでくる矢を交わした。

にも関わらず、キャンドモンは次の本を取り出す。

キャンドモン「これじゃなさそうですな…。それじゃこれだ?」

すると、リュウギの足元から槍が出てきた。

リュウギ「のわッ？」

ナルガモン「どひゃッ？」

リュウギとナルガモンは素早く交わした。リュウギとナルガモンは危うく串刺しになる所だった。

キャンドモン「これか？」

何も気付かないキャンドモンは次の本を取り出す。

すると、天井から火炎放射器が現れてリュウギとナルガモンに襲い掛かる。

リュウギ・ナルガモン「んなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギとナルガモンは必死に逃げまくる。

キャンドモン「では、これだな！」

キャンドモンは次の本を取り出すと…。

（ガ～～～～～～～～～ンッ？）

リュウギ・ナルガモン「いだッ？

」

リュウギとナルガモンの頭上から巨体はタライが、落ちてきて頭に

直撃した。

タライの音に反応したのか、キャンドモンは振り向く。

キャンドモン「あれれ？どうしたんですか２人とも？」

リュウギ（気付いてねぇのかよ…。）

ナルガモン（後でブッ飛ばす…。）

リュウギとナルガモンは密かに殺意が芽生えるのであった。

一方、ミソラ達は…。

～闇貴族の館　？玄関～

「んなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

二階かは悲鳴が聞こえると、ミソラはビクッとする。

ミソラ「何か聞こえたわよ？」

レナモン「まさか、リュウギ達の身に何かあったのでは？」

バクモン「あぁ、大丈夫ですよ♪この館の秘密を守るため、たくさんの仕掛けがあるんですよ♪はい♪」

ミソラ「それって全然大丈夫じゃないじゃないのッ？」

レナモン「とにかく、一刻も早く助けに行かなければ…。」

ミソラとレナモンは急いで悲鳴の所へと向かう。

ミソラ「リュウギッ？」

ドアを開けると、ボロボロ姿のリュウギとナルガモンが一緒になってキャンドモンを袋叩きにしていた。

リュウギ・ナルガモン「ん？」

レナモン「な、何を…？」

リュウギ・ナルガモン「コイツのせいで酷い目にあったから、懲らしめてる。」

キャンドモン「ミソラさん、レナモン？助けてください？ヘルプミー？」

ミソラ「何だよくわからないけど、私も参戦していい？」

リュウギ・ナルガモン「全然問題なし？」

キャンドモン「えぇぇぇ

ナルガモン「つうかバクモン、あるならあるって早く言ってくれよな？」

バクモン「久しぶりの客なので、驚かせたいと思ってつい～、はい♪」

リュウギ「ついって…、お陰でこっちは死にかけたんだぞ…。」

リュウギは苦笑いしながらツッコム。

レナモン「ところで、さっき言っていた館の秘密ってなんだ？」

バクモン「この館の何処かに、秘密の部屋があるんですぅ♪はい♪」

ナルガモン「ひょっとしてお宝かッ？」

ミソラ「なんでそういう発想になるのよ…。」

ミソラは小さくツッコム。

キャンドモン「それで、秘密の部屋って何処にあるんですか？」

バクモン「実はボクにもさっぱり分からないです…。はい…。」

ナルガモン「よぉし！だったらみんなで宝探しと行こうぜ♪」

すると、ナルガモンは張り切って人差し指を真上に突き立てる。

ミソラ「だから、なんでそういう発想になるのよッ？」

リュウギ「でも、秘密の部屋って言うのが気になるな…。」

ミソラ「もう、リュウギまで？」

レナモン「それに、しばらく雨は止まないだろう…。私も賛成だ…。」

ミソラ「ちょっとレナモン？」

キャンドモン「ボクチンも賛成です？」

ミソラ「もう、分かったわよ…。」

ミソラは仕方なくリュウギ達の意見に賛成する。

ナルガモン「よぉし！宝探しにレッツ…」

（ギュルルルル～…）

すると、腹の虫が鳴る。

ナルガモン「その前に腹ごしらえだ！」

リュウギ「でも、この館に食べ物なんて…」

すると、キャンドモンが何か異変を感じる。

キャンドモン「匂いますよ？食べ物の匂いです？」

ナルガモン「マジでか？」

ナルガモンは匂いを嗅ぐと、食べ物の匂いがしてくる。

ナルガモン「うお？ホントだ？」

バクモン「え？ボクには匂いませんよ？」

リュウギ「……。」

キャンドモン「こっちです！」

リュウギ達は匂いを辿っていく。

～闇貴族の館　？食事の間～

食事の間に入ると、テーブルにたくさんの御馳走が、並べていた。

ナルガモン・キャンドモン「うぉほーーーーーーーー？」

ナルガモンとキャンドモンは目を輝かせながらヨダレが流れる。

レナモン「妙だ…。誰もいないハズなのに料理があるなんて、余りにも不自然すぎる…。」

ミソラ「きっと、これも罠だわ！みんな気を付け…」

ミソラは注意点しようとすると、ナルガモンとキャンドモンは先に御馳走を食べていた。

ナルガモン「うめぇーーーー？」

（ガツガツ…）

キャンドモン「美味すぎますーーーーー？」
（ガツガツ…）
ミソラは思わずズッコケた。
ミソラ「ちょっとーーーーー？なにやってんのよアンタ達？」
ナルガモン「なにって？メシ。」
ミソラ「そうじゃなくて？敵の罠かもしれないのよ？」
キャンドモン「こんな美味い食べ物を粗末にするなんて、勿体なすぎますよ！」
ナルガモン「ミソラも食べろよ♪うめぇぞ♪」
ミソラ「冗談じゃないわよ！私は食べないわ？」
レナモン「同じく私も…。」
リュウギ「俺も遠慮しとく。バクモンは？」
バクモン「ボクはそんなにお腹が空いてないです、はい♪」
すると、リュウギは眉を潜める。
リュウギ「……。」
ナルガモン「もーらい♪」

すると、ナルガモンはキャンドモンの食べ物を横取りして口にし入れる。

キャンドモン「あーーーー?ボクチンの食べ物が?返してくださいよ?」

ナルガモン「イヤなこった♪」

ナルガモンは逃げると、キャンドモンは追い掛ける。

すると…。

（カタン）

ナルガモン・キャンドモン「え…?」

すると、ナルガモンとキャンドモンの足元にある床がパカッと割れたのだ。

ナルガモン・キャンドモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ?」

リュウギ「ナルガモン?」

リュウギは助けに行こうとするが、床は閉ざされたため、間に合わなかった。

ミソラ「やっぱり罠だったんだわ!」

リュウギ「クソッ！バクモン、この落とし穴は何処に繋がってるんだ？」

バクモン「実はボクにも分かりません、はい…。」

ミソラ「まさか、これってあなたが仕掛けたの？」

バクモン「ち、違いますよ？ボクは本当に…」

ミソラ「計算違いだったわね！ナルガモンとヘンタイロウソクは騙せたけど、私達は騙されないわよ！」

レナモン「今までの行動によると、つじつまが合うな…。2人を何処へやった？」

バクモン「本当ですよ！信じてください！ボクは本当に…」

リュウギ「俺はバクモンを信じる…。」

一同「？」

リュウギの言葉に、ミソラとレナモンは驚く。

ミソラ「どうしてなのよリュウギ？」

リュウギ「百歩譲ってバクモンが俺達にこの食事の間に誘き寄せたとすれば、この館に入った時に予め匂いに気付いていたハズだ…。」

ミソラ「言われて見れば確かに…。」

リュウギ「つまり、他の誰かが罠を仕掛けているのかもしれない…。」

バクモン「リュウギさん…。ありがとう…。」

ミソラ「とにかく、早くナルガモン達を助けましょ！」

リュウギ「あぁ！」

一方、ナルガモンとキャンドモンは…。

落とし穴から落ちるナルガモンとキャンドモンはケツに強打する。

ナルガモン・キャンドモン「いってぇ…。」

？？？「ククク…、とんで火にいる夏の虫とは正にこの事だな…。」

ナルガモン「誰だテメェは？」

？？？「ククク…。オレはメタルファントモン…。ストラティクモン様に任されてこの闇貴族の館を支配する者だ…。」

ナルガモン「ストラティクモンだと？」

メタルファントモン「そして…。」

メタルファントモンの背後には闇の柱が建てられていた。

キャンドモン「闇の柱じゃん？なんでこんなところに？」

ナルガモン「それじゃ、バクモンはグルだったのか？」

メタルファントモン「バクモン？そんな者は知らん…。この闇貴族の館には既に誰もいない…。」

キャンドモン「うそん？」

メタルファントモン「お前らがここに来る事はすでに読んでいた…。まさか、あんな罠に騙されるとはなぁ…。バカにも程がある…。」

ナルガモン「んだとコルァァァァ？」

キャンドモン「ねぇ、キレてる場合じゃないですよ…。」

ナルガモンは周りを見渡すと、イビルスに支配されたバケモン達に囲まれていた。

ナルガモン「いつの間に？」

メタルファントモン「パートナーのいない今のお前は進化すらできん…。さぁ、くたばるがいい！」

メタルファントモンはそう言って放出するエネルギー状の鎌を振りかぶる。

キャンドモン「きぃぃぃぃぃぃやゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？ボクチン魂抜かれちゃうぅぅぅぅぅぅ？」

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

すると、落ちてきた落とし穴からリュウギが落ちてきたと同時にガンブレード、アルカナムを振り下ろして、鎌を弾き返す。

ナルガモン「リュウギ、バクモン？」

リュウギはＤ－アクセルでメタルファントモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「メタルファントモン、完全体、サイボーグ型、データ種、必殺技はソウルプレデター。

バケモン、成熟期、ゴースト型、ウィルス種、必殺技はヘルズハンド。」

リュウギ「やっぱり思った通りだったな…。」

メタルファントモン「くっ、エクセリオンめ…。」

リュウギ「行くぞ、ナルガモン？

ナルガモン「おう！」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。すると、ナルガモンのデータが上書きされ姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、超進化？」

『ドラグナモン？』

メタルファントモン「纏めて始末してやる！『ソウルプレデター？』」

メタルファントモンは魂に飢えているかの如く、膨大なエネルギーを放出して鎌を巨大化させて襲い掛かる。

ドラグナモン「『ヒドゥンセイバー？』」

ドラグナモンは両肘にある刃、ヒドゥンアサルトを構えてメタルファントモンの斬撃を防ぐ。

リュウギ「こっちだ？」

リュウギはアルカナムを振りかぶってメタルファントモンに切りに掛かる。

メタルファントモン「ククク…。」

すると、メタルファントモンは突然と姿を消した。

リュウギ「なに？」

ドラグナモン「何処行きやがった？」

メタルファントモン「喰らいな！『グレイブスクリーム？』」

すると、リュウギ達の頭上からメタルファントモンが現れたと同時に鎌を円状に振り回す。すると、放出したエネルギー状の鎌から異様な怪奇音を奏でる。

リュウギ「くっ、身体が？」

ドラグナモン「なんだ、これは？」

キャンドモン「耳が～？」

メタルファントモン「バケモン共、今の内にエクセリオンを消せ！」

バケモン達「キシャャャャャャ？」

バケモン達は一斉に闇の波動を放ち、リュウギ達に襲い掛かる。

一同「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

メタルファントモン「ヒャハハハハ？いいぞ、もっとやれ？」

リュウギ「くっ、あの鎌を何とかしないと…。」

メタルファントモン「バケモン共、エクセリオンにトドメを刺せ？」

？？？「『狐封札？』」

その時、遠くから数枚の霊札がメタルファントモン達に直撃して爆発する。

メタルファントモン「ぐはっ？」

バケモン達「ギャャャャャャャ？」

怪奇音が止まり、リュウギ達は解放された。

すると、別の入り口からタオモンとミソラが入ってくる。

ミソラ「みんな、大丈夫？」

リュウギ「ミソラ、タオモン！」

ドラグナモン「助かったぜ、タオモン！」

メタルファントモン「この野郎…、まだエクセリオンがいたのか…。『グレイブスクリーム？』」

リュウギ「させるか？」

リュウギはアルカナムのトリガーを引いて銃撃した。すると、メタルファントモンは攻撃をやめて鎌で弾丸を弾き返す。

メタルファントモン「チッ？バケモン共？」

バケモン達「キシャャャャャャ？」

ドラグナモン「させるかよ？『デッドリーアートルム？』」

ドラグナモンは背中に装着しているロケットの外側が開き、多数の小型ミサイルを発射させた。

多数の小型ミサイルはバケモン達に直撃した。

バケモン達「ギャャャャャャ？」

バケモン達は力尽きて倒れると、体内からイビルス達が現れる。

ミソラ「今よ、タオモン！」

メタルファントモン「させるか！『グレイブスクリーム？』」

メタルファントモンは鎌を円状に振り回す。すると、放出したエネルギー状の鎌から異様な怪奇音を奏でる。

一同「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ？』

リュウギ達は身動きが取れなくなる。

メタルファントモン「来い、イビルス共よ？」

すると、イビルス達はメタルファントモンの体内に入り込む。

メタルファントモン「うおぉぉぉぉぉぉぉ？」

リュウギ「しまった？」

すると、イビルス達を吸収したメタルファントモンの姿が変わっていく。

？？？「うおぉぉぉぉぉぉぉ？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ボルトモン、究極体、サイボーグ型、データ種、必殺技はトマホークシュタイナー。」

リュウギ「究極体だと？」

キャンドモン「うそぉぉぉぉぉぉぉん？ごっさヤベェじゃねぇかオイ？」

ボルトモン「もうオレは誰も負ける気しない？この手でお前らを葬り去ってやるわ？」

ドラグナモン「だから何だよ？究極体になったからって調子乗ってんじゃねぇよ？」

タオモン「私達は最後まで諦めない！絶対に？」

すると、リュウギとミソラのＤ－アクセルから光りが生じる。

リュウギ「そうだ…。例え究極体だろうが何だろうが絶対に背を向けねぇ！それが俺の流儀だ？」

ミソラ「そうよ！ここまで来て、引き返すつもりなんてないんだから？」

リュウギとミソラはＤ－アクセルを構えて、ありったけの声で叫ぶ。

リュウギ・ミソラ「ＥＸモード、発動？」

すると、ドラグナモンとタオモンの周りに激しい突風が舞う。

ボルトモン「なに？」

突風が去ると、ドラグナモンとタオモンの身体は聖なる光に包まれていた。

ドラグナモン「さて…、ＣＯＯＬに反撃と行くぜ？」

タオモン「あぁ？」

すると、ドラグナモンとタオモンは一瞬にして姿を消した。

ボルトモン「消えた？」

ドラグナモン・タオモン「こっちだ？」

ボルトモンは振り向くと、ドラグナモンはヒドゥンアサルトで切り刻み、タオモンは狐封札でボルトモンの身体に貼り付けて爆発させる。

ボルトモン「ぐはッ？」

ミソラ「押してるわ？」

ドラグナモン「もういっちょ？」

タオモン「喰らえ？」

ドラグナモンとタオモンはもう一度同じ技を繰り出そうとすると、ボルトモンは雄叫びを上げる。

ボルトモン「嘗めるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ボルトモンの身体から闇のオーラが溢れ出し、持ち前の怪力でドラグナモンとタオモンを地面に押さえ付けた。

ドラグナモン・タオモン「うわぁッ？」

ミソラ「タオモン、ドラグナモン？」

キャンドモン「ひぇぇぇぇぇぇ？なんてバカ力なんだＹＯ？」

リュウギ「くっ、何か手はないのか…？」

リュウギは作戦を考える。すると、ボルトモンは巨大な斧を振り回す。

ボルトモン「『トマホークシュタイナー？』」

ドラグナモン「くっ？」

ドラグナモンはヒドゥンアサルトで斧を受け止めて鍔競り合う。

ボルトモン「闇の力を侮るなよ…、雑魚どもが？」

ボルトモンは力でドラグナモンを押し飛ばした。

ドラグナモン「ぐはっ？」

（なんてバカ力なんだコイツ？）

ミソラ「なんでこんなに強いのよ？」

すると、リュウギはハッとして闇の柱を見る。

リュウギ「そうだ！あの闇の柱を壊せば…！ミソラ、行くぞ！」

ミソラ「分かったわ？」

リュウギとミソラは急いで闇の柱の所へと向かう。

ボルトモン「そうはさせん！『トマホーク…』」

ドラグナモン「うおぉぉぉぉぉぉぉ？」

ドラグナモンは勢いをつけて思いきり体当たりをした。

ボルトモン「ぐはッ？」

タオモン「お前の相手は、私達だ？『梵・筆・閃？』」

タオモンは巨大な筆で字を書いてボルトモンに飛ばした。そして呪文を唱えると、飛ばした文字が爆発する。

ボルトモン「クソが？」

一方、リュウギとミソラは闇の柱の前に立つ。

リュウギ「かなりデカイな…。ミソラ、デジサモンだ！」

ミソラ「えぇ？」

リュウギとミソラは地面に手を着け、ありったけの声で叫ぶ。

リュウギ・ミソラ「デジサモン、発動？」

すると、リュウギとミソラのD－アクセルから光りが生じ、地面からデジ文字の魔法陣が展開される。

リュウギ「来い、モノクロモン？」

ミソラ「出て来て、レオモン？」

すると、魔法陣からモノクロモンとレオモンが実体化される。

リュウギ「モノクロモン、闇の柱を壊すぞ？」

モノクロモン「分かった？」

ミソラ「レオモン、頼むわよ？」

レオモン「任せろ？」

モノクロモン「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

モノクロモンは闇の柱に向かって思いきり突進した。

レオモン「『獣王拳？』」

レオモンは拳を握り締め、獅子を宿ったエネルギー波を闇の柱にぶつけた。

すると、闇の柱にヒビが入る。

ミソラ「あともう少しよ？」

リュウギ「行け、モノクロモン？」

モノクロモン「喰らえ！『ヴォルケーノストライク？』」

モノクロモンは口から巨大な火炎弾を闇の柱にぶつけた。すると、闇の柱がグラついた。あともう一息だ。

リュウギ・レオモン「これで終わりだぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギはアルカナムを、そしてレオモンは自慢の短刀を取り出して同時に闇の柱を叩き付けた。

すると、闇の柱が崩れたのだ。

ミソラ「やったわ」

すると、ボルトモンの動きが止まる。

ボルトモン「しまった？」

タオモン「動きが止まった！チャンスだ！『狐封札！』」

タオモンは隙を読み、数枚の霊札を投げてボルトモンの身体に貼り付けて爆発させる。

ボルトモン「ぐはっ？」

ドラグナモン「喰らいやがれ？『デッドリーアートルム？』」

ドラグナモンは胸のハッチを開くと、超強力なビーム砲を放ち、ボ

ルトモンにぶつけた。

ボルトモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ボルトモンは力尽きて倒れると、体内からイビルガが現れる。

ドラグナモン「逃がすか？」

ドラグナモンはヒドゥンアサルトでイビルガを切り刻んだ。

イビルガ「エクセリオンがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

イビルガは跡形も無く消滅した。

リュウギ「よし！」

ドラグナモン「Ｊａｃｋ　ｐｏｔ？」

ドラグナモンとタオモンは全ての力を使い果たし、幼年期へと退化する。

リュウギ「お陰で助かった。ありがとな。」

モノクロモン「どういたしまして！」

ミソラ「ありがとう、レオモン！」

レオモン「容易い事だ…。また必要になったら呼んでくれ。」

モノクロモンとレオモンはデジサモンの効果が切れ、静かに消え去

った。

???「みなさ～ん！」

すると、バクモンがやってくる。

バクモン「ケガはありませんか？」

リュウギ「俺達は大丈夫だ。」

ナナモン「平気×2♪」

すると、ミソラとポコモンは深刻な顔をする。

ミソラ「バクモン、あなたを疑ってごめんなさい…。」

ポコモン「私もごめん…。」

バクモン「いえいえ。こうして館は救われたんですから♪はい♪」

キャンドモン「あれれ～？何ですかこれは？」

すると、キャンドモンは何か古びた箱を見つけた。

バクモン「あ？それは闇貴族の館代々伝わる物？」

ナナモン「ひょっとしてお宝か？ヒャッホーウ♪」

ナナモンは嬉しさの余りにピョンピョンと飛び跳ねる。

ミソラ「本当にお宝があったんだぁ…。」

リュウギ「ところでバクモン、一体何が入ってるんだ…？」

バクモン「それはですねぇ…」

ナナモンとキャンドモンは待ち切れず、古びた箱を開けた。

ナナモン・キャンドモン「……え？」

ナナモンとキャンドモンは思わず目を丸くする。その古びた箱の中には、一個の巻物だけだった。

ミソラ「何これ？巻物？」

リュウギ「これ、何の巻物なんだ？」

バクモン「その巻物は昔、先祖様が隠した怪談話満載の巻物なんですよ♪はい♪」

すると、リュウギ達は思いきりズッコケた。

ミソラ「な、なんなのよそれ～。」

リュウギ「怪談話満載って、どんなご先祖なんだよ…。」

ナナモン「なぁなぁ、この巻物使って、ミソラに毎日怪談話を聞かせようぜ♪」

キャンドモン「お？それ面白そうですね♪」

すると、ミソラはナナモンとキャンドモンに怒りの鉄拳を喰らわした。

ナナモン・キャンドモン「ぐえ?」

ミソラ「そんな事したら、許さないわよ…。」

ナナモン・キャンドモン「すみましぇん…(泣)」

ポコモン「やれやれ…。」

すると、バクモンの身体が消え掛かっている。

ミソラ「消え掛かってるわよバクモン?」

バクモン「みなさん、本当にありがとうございます♪はい♪」

リュウギ「これで、安心して逝けるんだな…?」

すると、ミソラ達は驚く。

ミソラ「え?それってどういうことなのよ?」

バクモン「実は言うと、ボクは既に死んでいるんです♪はい♪」

バクモンの言葉に、ミソラは叫ぶ。

ミソラ「うそぉぉぉぉぉぉぉ?つ、つつ、つまり…、ゆ、ゆゆゆ、幽霊なの?」

リュウギ「そういう事だ。」

バクモン「はい♪」

すると、ミソラはバッタリと倒れて気を失った。

キャンドモン「ミソラさ～ん？」

ナナモン「それにしてもリュウギ、なんで幽霊だって分かったんだ？」

リュウギ「この館に入る前、バクモンは住んでいたって言っていたし、料理の匂いがしたのに全く気づかなかった。それで気付いたんだ。」

ナナモン「なるほど…。」

ポコモン「でも、デジモンは本来、死後デジタマになるのになんで？」

バクモン「ボクはどうしても巻物が見つけたくなって…。死んでも諦めたくないって思ったらこんな風に…。はい…。」

リュウギ「諦めない心かぁ…。その諦めない心があったからこそ、報われたじゃないか…。」

バクモン「はい♪これもみなさんのお陰です♪本当にありがとうございました♪」

バクモンはそう言って頭をペコリと下げた。

リュウギ「じゃ、元気でな。」

バクモン「みなさんもお元気で♪はい♪」

バクモンはニコッと笑い、そのまま静かに消え去るのであった。

ナナモン「行っちゃったな…。」

リュウギ「さて、ひとまずこの館から出るぞ。」

リュウギ達は館の扉を開いて、館から出るのであった。

すると、闇の中からリュウギ達の戦いを観察していたデジモンがいた。

???「ふぅーん、なかなか楽しませてくれそうじゃん…?」

イビルガ「いかがなさいますか、絶望の魔獣　アンクスモン様?」

すると、アンクスモンはニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

アンクスモン「ここで仕留めちゃ、ちっとも面白くない…♪しばらく観察させて貰うよ…♪」

アンクスモンは不気味に笑いながらやみの中へと消えていった。

~トロピカジャングル~

闇貴族の館を出ると、外はすっかりと晴れていた。

ナナモン「お？晴れてる×2♪」

リュウギ「これで、残りの闇の柱はあと2本だな…。」

ポコモン「リュウギ、あれを見て？」

ポコモンはムゲンマウンテンの方に指を差す。すると、闇のオーラを纏っていたムゲンマウンテンがすっかりと消えていたのだ。

キャンドモン「あれ？まだ闇の柱は全部壊してないのに、なんで…？」

すると、リュウギはハッとする。

リュウギ「まさか、カイがやったのか…？」

ナナモン「よっしゃ♪だったら今すぐムゲンマウンテンに殴り込みだぜ♪」

リュウギ「待てよナナモン。お前らはまだ幼年期だ。少し休憩してからムゲンマウンテンに行こう。」

ポコモン「それに、まだミソラが気絶したままだし…。」

ミソラを見ると、泡を噴いていた。

一同「……。」

ナナモン「チェッ、分かったよ…。」

リュウギ達は決戦を備えてトロピカジャングルで一時休息を取るのであった。

――To Be Continued…

ＥＰ４８　～エクセリオン大パニック？恐怖の館　闇貴族の館？～（後書き）

次回は今から少し遡る話！

２本の闇の柱を壊したのは一体？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ４９　～リベンジ？恐竜王国　ダイノ古代境？～（前書き）

今回は前回から少し遡った話！

Ｅｐ４９スタート？

ＥＰ４９　～リベンジ？恐竜王国　ダイノ古代境？～

それはリュウギ達がまだグレートキャニオンのオーガトリデにいる頃、カイ達は…。

～ダイノ古代境～

おもちゃのまちにてリュウギ達に助けて貰った後、カイはダイノ古代境へと向かい、壊し損ねた闇の柱を壊しにいく。

カイ「……。」

ガオモン「借りができてしまいましたね…。」

ガオモンはカイに話し掛けると、ガオモンはフンと鼻を鳴らす。

カイ「すぐに返してやるさ…。それにしてもリュウギはコロシアム以来、更に強くなっていた…。」

ガオモン「カイも強くなっていますよ！私が保証します！」

カイ「ガオモン…。？」

闇の柱に辿り着くと、その周辺に闇のオーラが漂っていた。

ガオモン「最初の時よりも酷くなってる…？」

カイ「ストラティクモンの仕業か…。やってくれるな…。ガオモン、早く壊すぞ…。」

ガオモン「はい、全ては我が主のために…。」

すると、突然地面が揺れ始める。

カイ・ガオモン「？」

？？？「グオォォォォォォォォォォ？」

カイの前に恐竜型デジモン達が現れる。カイはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「トリケラモン、完全体、角竜型、データ種、必殺技はトライホーンアタック。

ダークティラノモン、成熟期、恐竜型、ウィルス種、必殺技はファイアーブラスト。」

カイ「邪魔だ…。ガオモン、完全体に進化だ！」

カイはＤ－アクセルをガオモンにかざした。すると、ガオモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ガオモン「ガオモン、超進化？」

『マッハガオガモン？』

カイ「行くぞ、マッハガオガモン！」

カイは右手を広げると、巨大手裏剣、ギルガメッシュを現れる。そ

して、カイはマッハガオガモンの背中に飛び乗る。

トリケラモン「グオォォォォォォォォォォ？」

トリケラモンは突進攻撃を仕掛ける。

マッハガオガモンは背中に背負うロケットエンジンを噴射させて上空へと舞い上がり、素早く交わす。

ダークティラノモン達「『ファイアーブラスト？』」

ダークテイラノモン達は口から灼熱の炎を吐く。マッハガオガモンは素早く交わし、咆哮を一気に放つ超音波を出す。

マッハガオガモン「『ハウリングキャノン？』」

ダークティラノモン達「グオォォォォォォォォォォ？」

カイはマッハガオガモンから飛び降りて、ギルガメッシュで次々とダークティラノモンを薙ぎ倒していく。

カイ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ダークティラノモン達「グオォォォォォォォォォォ？」

マッハガオガモン「『ガオガトルネード？』」

マッハガオガモンは最大推力で敵を包囲し超高速連打を放つ。

トリケラモン「『トライホーンアタック？』」

すると、トリケラモンは額の2本角と鼻先の角で敵に突進してマッハガオガモンを突き飛ばした。

マッハガオガモン「ぐは？」

カイ「マッハガオガモン？」

すると、カイはダークティラノモン達に囲まれてしまった。

カイ「くっ！β？」

カイは巨大手裏剣、ギルガメッシュから2つの刃へと分裂した。

カイ「纏めて掛かってこい…。」

すると、ダークティラノモン達は一斉に襲い掛かる。

カイ「はぁぁ？」

カイはギルガメッシュで次々とダークティラノモン達を切っていく。

ダークティラノモン達「『ファイアーブラスト？』」

ダークティラノモン達は一斉に灼熱の炎を吐く。

カイ「くっ？」

カイは素早く交わし、ギルガメッシュを地面に突き刺してデジサモンをしようとすると、トリケラモンが突進してくる。

カイ「しまった？」

カイはギルガメッシュをクロスにして攻撃を防ぐ。しかし、威力が強いため、カイは押し飛ばされてしまった。

カイ「ぐはっ？」

カイは岩山に激しく叩きつかれてしまう。

マッハガオガモン「くっ、カイ？」

ダークテイラノモン達「グオォォォォォォォォォォ？」

すると、ダークテイラノモン達は鋭い爪でマッハガオガモンを切り裂く。

マッハガオガモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

マッハガオガモンは力尽きて倒れてしまい、ガオモンへと退化した。

カイ「くっ、身体が思うように動かない…。」

カイはストラティクモンに操られたせいか、身体が思うように動く事ができなかった。

すると、トリケラモン達の矛先はカイに向けた。

カイ「くっ、ここで負ける訳には…。」

すると、ガオモンは叫ぶ。

ガオモン「お前達？」

すると、トリケラモン達はガオモンに注目する。

ガオモン「カイには手を出すな…。やるならオレをやれ…。」

カイ「よせ…、ガオモン…。」

ガオモン「カイ、私が囮になりますので、今のうちに逃げてください…。」

カイ「？」

ガオモンの言葉により、カイは過去の事を思い出す。

『いい加減にしてよあなた？』

『うるさい！俺の研究は完璧だ！誰にも邪魔させない！』

『やめてよお父さん、お母さん？』

『ダメだリエナ、こっちへ来るんだ？行っちゃダメだ、リエナァァァァ？』

ーーーーーーーーーーーーーー

カイ（同じだ…。このままいけば、ガオモンも…。）

「やめろ…。」

ガオモン「来い…。」

すると、トリケラモン達は一斉にガオモンに襲い掛かる。

カイ「やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉ?」

???「『サンダーオブキング?』」

その時、上空から雷がトリケラモン達の前に落ちてきて足止めをする。

トリケラモン達「?」

カイ・ガオモン「?」

すると、黒い影がガオモンの前に現れる。その正体は、ライアモンとコウジだった。

コウジ「ケガはないかい?」

ガオモン「お前は…?」

ライアモン「説明は後だ…。とにかくオレの背中に乗れ!」

コウジは急いでガオモンをライアモンの背中に乗せる。

ライアモン「しっかり捕まれよ!」

ライアモンは目にも止まらない早さで移動し、カイの所へと向かう。

コウジ「さぁ、乗って！」

カイ「……。」

カイは黙ったままライアモンの背中に乗る。

すると、トリケラモン達は一斉にライアモンに襲い掛かる。

コウジ「急いで、ライアモン！」

ライアモン「分かってるって！」

ライアモンは急いで、ダイノ古代境から離れた。

～ダイノ古代境時急域～

ここは、ダイノ古代境内で時間の流れが速い（2倍）エリア。化石が転がり地層が剥き出しで、周りとは一風変わった風景が広がる。

コウジ「ここまで来ればもう大丈夫だな…。ご苦労様、ライアモン。」

ライアモンはレオルモンへと退化した。

レオルモン「なんの×2♪ところでお前ら、ケガはないか？」

ガオモン「オレは大丈夫だ…。それより、カイは大丈夫ですか…？」

ガオモンは自分の身体がボロボロにも関わらず、カイの心配をする。

カイ「俺なら大丈夫だ…。」

ガオモン「すみません。私が不甲斐ないばかりに…。」

レオルモン「あのなぁ、人の心配するよりまず自分の心配したらどうなんだ？」

コウジ「今から手当てするから、ジッとしてて…。」

コウジは急いでガオモンの手当てをする。

カイ「お前達は何者だ…？」

コウジ「そういえば初めてだったね…。僕は池崎　コウジ。そして僕のパートナーのレオルモンだ。」

ガオモンの手当てをしながら簡単に自己紹介をするコウジ。

レオルモン「よろしくな♪」

カイ「なら…」

コウジ「なぜ君達を助けたのか…。だろ？理由は単純。君はエクセリオンだからね…。」

カイ「お前もエクセリオンなのか…？」

コウジ「生憎、僕はエクセリオンじゃない。強いて言えば、リュウギの父親の友人さ…。よし、終わったよ。」

ガオモンの手当を終え、ポンとガオモンの肩を叩く。

ガオモン「すまない…。」

カイ「お前、御縞　リュウギの仲間か…。」

コウジ「そうだけど、今は別行動させてもらっている。さて、次はカイ君だ。」

コウジは手当てをしようとすると、カイはそっぽを向く。

カイ「俺はいい…。」

コウジ「治療しないと、身体が持たないよ…？」

カイ「うるさい…。いいって言っているんだ…。」

すると、コウジは小さくため息をつく。

コウジ「カイ君、急に申し訳ない事を言うけど、足を引っ張ってるのは君じゃないのかい…？」

すると、カイは怒鳴り声を上げる。

カイ「うるさい！お前になにが分かる？」

ガオモン「カイ…。」

すると、カイは背を向けて小さく呟く。

カイ「大人なんて…、みんなクソだ…。」

カイはそのまま何処かへと去っていった。

レオルモン「ケッ、キザでイヤな野郎だぜ…。」

コウジ「あの様子だと、大人をかなり嫌っているみたいだね…。」

すると、ガオモンは深刻な顔をする。

コウジ「ガオモン、何か知ってるみたいだね…？」

ガオモン「カイは昔、オレを造った父親を尊敬し、素直で優しかった…。カイの父親はデジタル研究家で働いていたんだ…。」

レオルモン「ふ～ん…。」

ガオモン「カイはいつも、生まれつき身体が弱かったリエナといつも遊んでいた…。」

コウジ「リエナ…？」

ガオモン「カイの妹さ…。あの2人は本当に仲良しだった…。でも、あの事件後が起こる前に…。」

コウジ「あの事件…？」

ガオモン「ある日、カイが小学校から帰ってきた時だ…。」

ーーーーーーーーーーーーーー

幼い頃のカイ「ただいま！」

カイはいつものように学校から帰ってくる。

？？？「いい加減にしてよあなた？」

すると、リビングからカイの母親の声が聞こえてくる。

カイ「お母さん？」

カイはゆっくりとリビングに入ると、カイの両親が何か言い争っていた。妹のリエナはリビングの隅っこで怯えていた。

父親「うるさい！俺の研究は完璧だ！誰にも邪魔させない！」

母親「あなたいつもそればっかり！たまには私達の事も気にかけてよ！」

カイ「リエナ、こっちに来るんだ！」

カイはリエナを別の部屋連れて行く。

リエナ「お兄ちゃん、お父さんとお母さんが…。」

リエナは泣きながらカイに助けを求めていた。

カイ「大丈夫だよリエナ。俺が何とかするから！」

すると、リビングから物音が聞こえてくる。

母親「ちょっと、何するのよあなた？」

父親「お前達は黙って俺に従え…。俺の研究を邪魔するのなら、容赦しない…。」

父親の言葉にリエナは走り出す。

リエナ「やめてよお父さん、お母さん？」

カイ「ダメだリエナ、こっちへ来るんだ？行っちゃダメだ、リエナァァァァ？」

カイはリエナを捕まえようとするが、つまずいて転んでしまう。

カイ「うわっ？」

リエナはカイの事を構わず、そのままリビングへと向かった。

カイ「リエナ！」

カイは立ち上がり、急いでリビングへと向かった。

リビングに入ると、カイの両親は黙りになって床に座り込んでいた。

カイ（なんだ。治まったみたいだな…。）

カイはホッとする。しかし、２人の様子がおかしかった。

カイ「どうしたの？お父さん、お母さん？……？」

カイはとんでもないものを目にしてしまった。それは、リエナが血にまみれて床に倒れていた。

カイ「リエ…ナ…？」

カイの父親は激怒のあまりに、家にある包丁で妻を殺そうとしていた。しかし、そこでリエナが、２人の喧嘩を止めに入ると、偶然にも包丁はリエナの背中に突き刺さったのだ。

カイ「リエナ？リエナ？しっかりしろ？」

カイは何度も呼び掛けるが、リエナは返事をしない。

カイ「お母さん、救急車呼んでよ！」

母親「……。」

しかし、カイの母親はショックのあまりに放心状態に陥っていた。

カイ「お父さん？」

カイは父親に頼むが、父親の目はもはやいつもの優しい目ではなかった。

父親「ハハハ…。邪魔する奴が悪いんだ…。俺は悪くない…。俺は悪くないんだ…。」

カイ「クソッ？」

カイは血にまみれたリエナを背負い、急いで病院へと運んだ。

病院に着いて、リエナはすぐに治療室へと運ばれた。

すると…。

治療室から外科医が出てくる。

カイ「先生、リエナは？」

すると、外科医はうつむく。

外科医「非常に申し訳ないが、彼女はもう…。」

その言葉を聞いたカイは目の前が真っ白になり、悲しみに膝が折れる。

カイ「そん…な…。リエナ…。」

カイの目には涙が溢れ、やがて床に零れ落ちた。

カイ「うわぁぁぁ

レオルモン「それから、両親はどうなったんだよ？」

ガオモン「母親は何もかも失った影響でアイツと離婚して、別の人と再婚した。アイツの行方は未だに不明…。」

コウジ「どうしてデジタルワールドに？」

ガオモン「カイは、アイツが長年研究して出来たプログラムを消去するため、デジタルワールドに来たんだ…。」

レオルモン「カイの親父が造ったプログラム？」

すると、コウジはハッとする。

コウジ「まさか、アナログマンか？」

ガオモン「そうだ…。けど、アナログマンを造り出したのは、アイツの上司だが、突然の行方不明になった。それからアイツは上司の研究から引き継いぎ、未完成だったアナログマンを完成させた。しかし、アイツがなぜアナログマンという危険なプログラムを造ったのかは、オレやカイには分からない…。」

レオルモン「アナログマンを完成させたのはカイの親父だったのか…。」

コウジ「そして、彼はイビルスやダークスという闇の機関を結成させた…。アナログマンの目的は一体何なんだ…？」

すると、コウジは腕を組んで深刻な顔をする。

レオルモン「どうしたんだよコウジ？」

コウジ「スレイヤードラモンは今ダークスにいる…。もしかしたらアナログマンはリュウと何か関係があるかもしれない…。」

レオルモン「だったら、一刻も早く闇の柱を壊さねぇとな！」

コウジ「あぁ。こうしてる間にリュウギ君達は残りの柱を壊してるからね…。僕らも手助けしなきゃ…。」

すると、コウジは支度をする。

ガオモン「何処へ…？」

コウジ「闇の柱を壊す。そのためには、カイ君も協力して貰わないとね…。」

？？？「余計な真似をするな…。これは俺の戦いだ…。」

すると、カイが帰ってくる。

ガオモン「カイ…。」

コウジ「カイ君、もう一度言うけど、君だけで闇の柱を壊すのは無謀過ぎる…。だから、僕らも手助けさせて貰うよ。」

カイ「俺には必要ない！行くぞ、ガオモン！」

カイはそう言ってダイノ古代境へと向かった。

ガオモン「カ、カイ？」

ガオモンは慌ててカイの後を追う。

コウジ「……。」

レオルモン「どうすんだよ、コウジ？」

コウジ「1人で戦わす訳にはいかないだろ？彼は必要ないって言ったんだ。だったら僕らは僕らのやり方でやらせて貰う。リュウならきっとそう言うだろうね…。」

レオルモン「だろうな。さて、四聖獣の件はしばらく保留っつうわけで…。」

コウジ「あぁ、行くよ！」

～ダイノ古代境～

一方、カイとガオモンはリベンジをする。

カイ「行くぞ、マッハガオガモン？」

マッハガオガモン「はい？」

カイは右手を広げると、巨大手裏剣、ギルガメッシュが現れる。

マッハガオガモンは目にも止まらない早さで高速パンチを繰り出してダークティラノモン達を倒していく。

ダークティラノモン達「グオォォォォォォォォォォ？」

ダークティラノモン達は力尽きて倒れると、体内からイビルスが現れる。

カイ「逃がすか！」

カイはギルガメッシュを回転させてイビルス達に投げつける。しかし、トリケラモンの角でギルガメッシュを弾き返す。

カイ「くっ！Σ？」

カイは叫ぶと、巨大手裏剣から大剣へと変形した。

カイ「一気に片付けてやる！」

カイはギルガメッシュを地面に突き刺して叫ぶ。

カイ「デジサモン、発動？」

すると、地面からデジ文字が描かれた魔法陣が展開された。

カイ「来い、サジタリモン？」

すると、魔法陣からサジタリモンが、実体化された。

サジタリモン「呼んだか？」

カイ「あぁ、手を貸せ。」

サジタリモン「任せろ！『ジャッジメントアロー？』」

サジタリモンは光りの矢を放つ。そしてカイはギルガメッシュを振り上げるように振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放ち、イビルス達を次々と倒していく。

イビルス達「ギィィィィィィ？」

しかし、イビルスはまだ数体生き残っていた。

マッハガオガモン「まだ残っています！」

カイ「くっ？」

トリケラモン「グオォォォォォォォォ？」

トリケラモンは雄叫びを上げると、数体のイビルス達はトリケラモンの体内へと入っていく。

マッハガオガモン「なに？」

するとトリケラモンは闇に包まれ、やがて姿を変えた。

？？？「グオォォォォォォォォォ？」

カイはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ディノレクスモン、究極体、恐竜型、データ種、必殺技はオーガフレイム。」

カイ「究極体だと？」

マッハガオガモン「そんなバカな？」

ディノレクスモンは目にも止まらない早さでマッハガオガモン達に接近する。

マッハガオガモン・サジタリモン「早い？」

ディノレクスモン「グオォォォォォォォォォォォォ？」

ディノレクスモンは鋭い爪でマッハガオガモンとサジタリモンを切り裂いた。

マッハガオガモン・サジタリモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カイ「マッハガオガモン、サジタリモン？」

マッハガオガモン「くっ…、なんて早さなんだ…。」

サジタリモン「む、無念…。」

すると、デジサモンの効果が切れてしまい、静かに消え去った。

ディノレクスモンは唸り声を上げ、マッハガオガモンに向かって突進する。

カイ「くっ、ｙ？」

カイは叫ぶと、大剣から巨大手裏剣へと変形し、ディノレクスモンに投げ付けた。

しかし、ディノレクスモンの鱗は頑丈なため、弾き返されてしまった。

カイ「なに？」

マッハガオガモン「『ガオガトルネード？』」

マッハガオガモンは最大推力で敵を包囲し超高速連打を放つ。

ディノレクスモン「グオォォォォォォォォォォ？」

しかし、ディノレクスモンは攻撃を受けつつ、マッハガオガモンを突き飛ばした。

マッハガオガモン「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カイ（どうすればいい…？このままじゃ…？）

するとカイは、先程コウジに言われた言葉を思い出す。

コウジ『カイ君、急に申し訳ない事を言うけど、足を引っ張ってるのは君じゃないのかい…？』

カイは常々思っていた。コロシアムでリュウギに負けた事や、ストラティクモンに操られてしまった事、そして今も。自分が余りにも無力だったからこんな事になったのだと…。

そう思うと、自分の無力さに悔やみ、奥歯をグッと噛み締める。

カイ「俺は…、俺は本当に無力だ…。」

マッハガオガモン「それは違います…、カイ…。」

カイ「？」

マッハガオガモン「カイは決して無力じゃない…。カイはただ、自分の力を信じていないだけなんです…。例えどんな奴から言われようが、カイは最強のテイマーです…。カイはカイらしく、真っ直ぐ突き進んでください…。」

カイ「マッハガオガモン…。」

マッハガオガモン「例え道が乱れるような事があっても、私が全力で支えます…。何せ私は、カイのパートナーですからッ？」

？？？「その通りだ？」

すると、カイ達の前に黒い影が現れる。その黒い影の正体はバンチョーレオモンだった。バンチョーレオモンの肩にはコウジが乗っていた。

カイ「お前？」

マッハガオガモン「コウジ？」

コウジ「2人とも、ケガはないかい？」

バンチョーレオモン「後はオレに任せな…。」

カイ「勝手に決めるな！俺はお前達に助けを求めた覚えはない！引っ込んでろ！」

バンチョーレオモン「生憎、オレはお前らを助けようなんて何一つ思っていない。」

カイ「？」

コウジ「それに、君は僕らを必要としていない。だから、僕らは僕らなりのやり方でやらせて貰う。行くよ、バンチョーレオモン？」

バンチョーレオモン「おう？」

ディノレクスモン「グオォォォォォォォォォォォ？」

ディノレクスモンは鋭い爪でバンチョーレオモンに襲い掛かる。すると、バンチョーレオモンは両手で爪を受け止めた。

マッハガオガモン「？」

バンチョーレオモン「うおぉぉぉぉりゃゃゃゃゃゃゃ？」

バンチョーレオモンはありったけの力でディノレクスモンを投げ飛ばした。

ディノレクスモン「グオォォォォォォォォォォォ？」

カイ「なんて力なんだ…？」

バンチョーレオモン「どうした?もっと来いよ…。」

ディノレクスモン「『オーガフレイム!』」

ディノレクスモンマグマに似た半液体状の超高熱榴弾を口から放つ。

バンチョーレオモン「見せてやるよ…。正義の熱い拳を!」

バンチョーレオモンは拳をギュッと握り締めると、拳から灼熱の炎が宿る。

バンチョーレオモン「喰らいやがれ!『バーンバンチョーパンチ?』」

バンチョーレオモンは灼熱を宿った拳をオーガフレイムに殴ると、オーガフレイムは消滅した。

ディノレクスモン「?」

バンチョーレオモン「行くぜ?」

バンチョーレオモンは自慢の短刀、男魂を取り出して高く飛び上がる。

すると、マッハガオガモンは小さく呟く。

マッハガオガモン「思い出した…。」

カイ「何をだ…?」

マッハガオガモン「バンチョーレオモン…。かつて、七大魔王の１人、バルバモンがデジモンワールドに現れた。そこへ、バンチョーレオモンが現れてバルバモンを倒したという伝説のデジモン…。」

バンチョーレオモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

バンチョーレオモンは男魂でディノレクスモンを切り刻んだ。

ディノレクスモン「グオォォォォォォォォォォォォ？」

ディノレクスモンに致命傷を与える。しかし、ディノレクスモンはまだ立ち上がる。

コウジ「カイ君。確かに君は強い…。でも、なぜリュウギ君に負けたのか分かるかい…？リュウギ君にあって君にはないものだ…。」

カイ「アイツにあって、俺にはないもの…？」

コウジ「それは、仲間を信じる心さ…。」

カイ「仲間を…信じる…。」

バンチョーレオモン「そうだ…。マッハガオガモンはお前の力を信じてる…。だからお前もマッハガオガモンの力を信じてやるんだ。」

コウジ「勿論、僕らも君の力を信じてる…。」

すると、カイは立ち上がってギルガメッシュを拾う。

カイ「ここからは俺達の戦いだ…。力尽きるまで、最後までやり遂げてやる！マッハガオガモン！」

すると、カイのＤ－アクセルから聖なる光りが生じる。

マッハガオガモン「はい！」

カイ「俺達はエクセリオンだ…。俺達に乗り越えられない壁なんて、何もない？」

カイはＤ－アクセルをマッハガオガモンに翳した。

カイ「ＥＸモード、発動？』

マッハガオガモンの周りから激しい突風を巻き起こす。

ディノレクスモン「？」

突風が止むと、マッハガオガモンの身体には光りを纏っていた。

カイ「見せてやるぞ、俺達の力を。」

マッハガオガモン「全ては、我が主のために…。」

カイとマッハガオガモンは攻撃を仕掛ける。

ディノレクスモン「グオォォォォォォォォォ？」

ディノレクスモンは鋭い爪でマッハガオガモンに襲い掛かる。

マッハガオガモン「うおぉぉぉぉぉ？」

マッハガオガモンは握り拳を作り、ディノレクスモンの爪をへし折った。

バンチョーレオモン「やるじゃねぇか…。」

カイ「α？」

カイは叫ぶと、巨大手裏剣から大鎌へと変わった。

カイ「俺達は、ここで負ける訳にはいかない？」

カイは声を発すると同時にギルガメッシュを切り上げるように振ると、剣風によって生み出された衝撃波を一気に４つ放った。

すると、４つの衝撃波はディノレクスモンに直撃した。

ディノレクスモン「グオォォォォォォォォォォォ？」

マッハガオガモン「終わりだ？『ウィニングナックル？』」

マッハガオガモンは超打撃力を誇る拳の一撃でディノレクスモンにトドメを刺した。

ディノレクスモン「グオォォォォォォォォォォォ？」

ディノレクスモンは力尽きて倒れ、体内からイビルガが現れる。

イビルガ「ここは一旦逃げ…」

イビルガは逃げようとすると、カイは既にギルガメッシュを振りかぶっていた。

カイ「逃げても無駄だ…。」

カイはギルガメッシュでイビルガを切り刻んだ。

イビルガ「バカなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

イビルガは跡形もなく消滅した。

コウジ「やったな…。」

バンチョーレオモン「あいつらなら出来ると思っていたぜ…。」

そして…。

カイはトリケラモン達をリカバリーし、闇の柱を破壊する。

マッハガオガモン「『ウィニングナックル？』」

超打撃力を誇る拳の一撃で闇の柱を倒した。

カイ「終わったか…。」

マッハガオガモンは力を使い果たし、ワニャモンへと退化した。

ワニャモン「やりましたね♪」

カイ「あぁ…。」

コウジ「見せて貰ったよ、君達の絆…。」

コウジはそっとカイに声をかける。

カイ「勘違いするな…。俺はあくまでも、あんな奴らに負けたくなかっただけだ…。」

バンチョーレオモン「素直じゃねぇなぁ全く…。」

カイ「けど、アンタがいなかったら、俺は変わらなかった…。ありがとう…。」

カイは顔を赤らめながら小さく呟く。それを聞いたコウジは小さく笑う。

ワニャモン「カイ、残りの柱はあと何ヶ所なんでしょうか?」

コウジ「リュウギ君達は恐らく、5本目の場所に向かってるハズだ…。」

バンチョーレオモン「オレ達が壊してあと1本だな?だったらすぐに壊しに行くぞ!」

???「その必要はない…。」

カイ達は振り向くと、左目に傷を持った男、エグザがいた。

カイ「エグザ?」

エグザ「コロシアムの時よりもたくましくなったじゃねぇか…、カイ。」

カイはギルガメッシュを構えて戦う態勢に入る。

エグザ「悪いが、お前と力比べしてるヒマはない…。」

カイ「くっ…。」

コウジ「その必要はないってどういう意味だ？」

エグザ「残りの1本は俺が壊したからだ。」

一同「？」

カイ「それじゃ、もう時期にムゲンマウンテンは開かれるのか…？」

エグザ「そうだ…。だが、お前達の冒険はここまでだ…。」

ワニャモン「どういう事だ？」

エグザ「前にも言ったハズだ…。あまりファイル島を彷徨くな…。命が惜しければな…。ってな…。」

すると、カイはフンと鼻を鳴らす。

カイ「俺達の力を侮るな…。お前が何て言おうと、俺はムゲンマウンテンへいく！」

カイはそう言ってエグザを睨む。

エグザ「……。」

すると、エグザはフッと鼻で笑う。

エグザ「いいだろう…。だがこれだけは言っておく…。ムゲンマウンテンへ入ると、見てはいけない物を見てしまう事になる。」

コウジ「見てはいけない物だって…？」

エグザ「特にリュウギにとってはな…。」

コウジ「？」

エグザ「じゃあな…。」

エグザはそう言って振り向くと、コウジがエグザを呼び止める。

コウジ「待てエグザ！」

すると、エグザはピタリと足を止める。

コウジ「お前の目的は一体何なんだ…？なぜこの事を僕らに教えてくれるんだ…？」

すると、エグザは振り向かないまま答える。

エグザ「これ以上、お前達を巻き込みたくない…。ただそれだけだ…。」

コウジ「？」

エグザ「この事をあいつら（リュウギ達）に伝えておけ…。それでも来るなら、覚悟を決めてから来いってな…。」

エグザはそう言い残して姿を消した。

一同「……。」

カイ「ハッタリに過ぎん…。行くぞ、ワニャモン…。」

ワニャモン「はい、全ては我が主のために…。」

カイはそう言ってムゲンマウンテンの方へと向かう。しかし、コウジは全く動かない。

バンチョーレオモン「どうするんだ、コウジ？」

コウジ「……。」

コウジはエグザの言葉に戸惑っていた。見てはいけない物とは一体？コウジはただそればかり考えていた。すると、バンチョーレオモンがコウジの背中にポンと軽く叩く。

コウジ「バンチョーレオモン…。」

バンチョーレオモン「見てはいけない物がなんだ…？それを何度も乗り越えてきたから今のオレ達があるんだろ…？」

バンチョーレオモンの言葉に、コウジは吹っ切れた。

コウジ「そうだったね…。ありがとう、バンチョーレオモン。よし、行こう！」

コウジは決意し、カイと共にムゲンマウンテンへと向かうのであった。

――To Be Continued…

ＥＰ４９　～リベンジ？恐竜王国　ダイノ古代境？～（後書き）

なんと、最後の柱を壊したのはエグザ？

次回はエグザの物語？

お楽しみに？

Ｅｐ５０　～昆虫の領域　ビートランド？漆黒に包まれし謎の男～（前書き）

気がついたらＥｐ５０まで来ました…。

なんかあっと言う間ですね…。

そんな事より今回は、リュウギの強敵エグザの話？

Ｅｐ５０スタート？

ＥＰ５０　～昆虫の領域　ビートランド？漆黒に包まれし謎の男～

～ダイノ古代境～

一方、エグザは高い場所からカイ達の行動を監視していた。

エグザ「警告したのにそれでも行くのか…。どうなっても知らねぇぞ…。」

エグザは深刻な顔になる。すると、謎の人物の言葉がエグザの頭の中に飛び交う。

『お見事だ…。流石だよ、エグザ…。』

『邪魔だからさぁ、さっさと消えてくんねぇかなぁ。』

すると、エグザは小さく呟く。

エグザ「あの男は一体…？」

それは、数日前まで遡る…。

～ビートランド～

ここは、昆虫デジモンが生息する領域。そこへ、左目に傷を持った男、エグザが現れる。

エグザ「……。」

エグザは見上げると、ビートランドの中心に闇の柱が建てられていた。

エグザ「やっと見つけたぜ…。ん?」

すると、エグザの周りには大量の昆虫デジモン達に囲まれて威嚇されていた。

エグザはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「アトラーカブテリモン、完全体、昆虫型、ワクチン種、必殺技はホーンバスター。

オオクワモン、完全体、昆虫型、ウィルス種、必殺技はシザーアームズΩ。」

アトラーカブテリモン達・オオクワモン達「キシャャャャャ…。」

エグザ「かなりの数だな…。仕方ない…。」

すると、エグザは背中に背負っている大剣、セイクリッド・レインティアを取り出す。

エグザ「来いよ…。」

すると、一体のアトラーカブテリモンが先制攻撃を仕掛ける。

エグザはセイクリッド・レインティアを振り上げるように振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放ち、アトラーカブテリモン達を薙ぎ倒す。

オオクワモン「『シザーアームズΩ』」

オオクワモンは巨大なハサミでエグザに襲い掛かる。

エグザ「フッ…。」

エグザは小さく笑うと、セイクリッド・レインティアを地面に突き刺すと、2つに分裂して二刀流になる。

エグザはすぐに二刀流、セイクリッド・レインティアを抜き取ってオオクワモンの巨大なハサミを受け止める。

オオクワモン「?」

エグザ「どうした?もっと本気を出せよ?」

エグザは声を発すると同時にオオクワモンの巨大なハサミをへし折った。

オオクワモン「キシャャャャャャ?」

アトラーカブテリモン「『ホーンバスター』」

すると、背後からアトラーカブテリモンが巨大なツノでエグザに襲い掛かる。

エグザは二刀流を1つに合体させて低く構える。そして身体を回転させ、遠心力でアトラーカブテリモンの巨大なツノを弾き返した。

アトラーカブテリモン「キシャャャャャャ？」

エグザはセイクリッド・レインティアを肩に担いで挑発する。

エグザ「面倒だ…。全員で掛かって来な…。遊んでやる…。」

すると、アトラーカブテリモン達は一斉に襲い掛かる。

エグザ「そうこなくっちゃな…。」

（ニヤリ…）

エグザはセイクリッド・レインティアを背中に背負い、懐から2丁拳銃、ライト&ダークを取り出して引き金を引く。

弾丸は次々とアトラーカブテリモン達に直撃する。

アトラーカブテリモン達「キシャャャャャャ？」

エグザ「その程度か？」

エグザは高く飛び上がり、弾丸の雨を降らせる。

オオクワモン達「キシャャャャャャ？」

アトラーカブテリモン達は力尽きて倒れ、体内からイビルガ達が現れる。

イビルガA「なんて奴だ…？」

イビルガB「バケモノかあいつは？」

すると、エグザはライト&ダークを懐にしまい、セイクリッド・レインティアを構える。

エグザ「お前らに言われたくねぇんだよ…。はぁッ？」

エグザは剣風によって生み出された無数の衝撃波を放ち、イビルガ達を一匹残らず切り刻んだ。

イビルガ達「ギャャャャャャャャャャ？」

イビルガ達は跡形もなく消滅した。

エグザ「所詮、そんなものか…。」

エグザは小さくため息をつきながらセイクリッド・レインティアを背中に背負おうする。

（パチパチパチパチ…）

すると、何処からか拍手の音が聞こえてくる。エグザはピタリと手を止めた。

エグザ「？」

エグザは振り向くと、黒い影が岩に座って拍手をしていた。

？？？「見事だ…。流石はエグザだ…。」

エグザ「誰だ…？」

その姿は、顔全体に包帯を巻いており、そして左目は金色の瞳。漆黒のマントを羽織り、背中には大剣が背負っていた。

？？？「名乗る程でもねぇよ…。何せテメェはここで…」

その時、岩に座っていた謎の男は突然と姿を消した。

エグザ「……。」

エグザは振り向きもせず、懐からデジガン、ライトを取り出して後ろに構えた。

その時、謎の男はエグザの背後に回っていた。

？？？「ほぅ、なかなかやるじゃねぇか…？」

エグザ「直感だ…。で、俺をどうするつもりだ…？」

？？？「勿論…、消す？」

謎の男は背中に背負う大剣を取り出して振り下ろすと、エグザは素早くセイクリッド・レインティアを取り出して斬撃を防ぐ。すると、お互いに後方へと下がり態勢を立て直す。

エグザ「何のために俺を消す？恨みを買うような事はしてないぞ…？」

？？？「邪魔だからさぁ、さっさと消えてくんねぇかなぁ。」

エグザ「要するに、目障りってヤツか…。」

???「そーいうこと。つうわけで、ダークネス・ドラグーンの餌食になりな？」

謎の男は声を発すると同時に大剣、ダークネス・ドラグーンを振り上げるように振り、剣風によって生み出された闇の衝撃波を放つ。

エグザ「くっ！」

エグザはセイクリッド・レインティアを構えて闇の衝撃波を弾き返す。そして、懐から2丁拳銃、ライト&ダークを取り出して謎の男を狙い撃つ。

???「ククク…。」

謎の男は不気味に笑いながらダークネス・ドラグーンで全ての弾丸を弾き返す。

エグザ「お前は一体何者だ…？その包帯の裏はなんだ…？」

???「冥土の土産に教えてやるよ…。俺はアナログマンの手によって作られたプログラムだ…。」

エグザ「なに…？」

???「そしてこの包帯は、ただのファッションみたいなもんかな……なんてな。」

エグザ「笑えない冗談だな…。」

???「そうカッカすんなよ…。生憎、プログラムだから俺はまだ未完成…。アナログマンから特別に外出許可を貰って、今ここにいるって事。」

エグザ「だったらケガ人はケガ人らしく、お家で大人しくしてな！」

エグザはポケットからあるマガジンを取り出してライト&ダークに装着し、謎の男を狙い撃つ。

???「何度やっても同じ事だ！」

謎の男はダークネス・ドラグーンを構えると、エグザはフッと小さく笑う。

その時、弾丸が途中で爆発し、謎の男は光の閃光に包まれた。

???「なに？」

謎の男はよつやく視界を取り戻すと、目の前にもエグザがセイクリッド・レインティアを構えていた。

エグザ「その包帯に隠されたツラ、ゆっくりと拝ませて貰う？」

エグザはセイクリッド・レインティアを切り上げるように振り、謎の男の包帯を切った。

エグザ（やったか…。……？）

エグザは謎の男の顔を見て思わず驚愕した。包帯に隠された謎の男

の素顔は緑色のデジタル。正しくデータの塊だった。

＞ｉ２６８８２―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

？？？「おいおい…。せっかくのファッションが台無しじゃねぇかよ？」

謎の男は声を発すると同時にダークネス・ドラグーンでエグザを切りに掛かる。

エグザは素早くバック転し、態勢を立て直す。

謎の男は包帯を拾ってデータの部分だけ巻き付ける。

？？？「だから言ったろ？まだ未完成だって…。」

エグザ「……。」

？？？「さぁて、見せてやるよ…。ダークネス・ドラグーンのほんとうの力をよぅ…。」

謎の男はダークネス・ドラグーンを構えると、ダークネス・ドラグーンの刃背から目玉が開かれる。

エグザ「？」

？？？「死ね…。」

謎の男はダークネス・ドラグーンを振り下ろすと、刃身が突然と伸

びてエグザに襲い掛かる。

エグザ「？」

エグザは間一髪で交わすと、頬に掠り傷を負ってしまう。

すると、伸びたダークネス・ドラグーンは元に戻ると、謎の男は不気味に笑う。

？？？「いい反応だ…。そうでなきゃ面白くない…。」

謎の男はそう言って刃から流れるエグザの血を舐める。

？？？「これじゃ物たりねぇ…。お前の血をこのダークネス・ドラグーンにもっと浴びせてくれよ…。」

エグザ「とんでもない奴が現れたな…。だったら…」

すると、エグザはセイクリッド・レインティアを構える。

エグザ「ＥＸモード、発動？」

すると、エグザの周りに激しい突風が舞う。

？？？「ほぅ…。」

突風が止むと、エグザの身体には光りのオーラが纏っていた。

エグザ「アナログマンの手下なら、消すまでだ…。」

？？？「やれるもんならやってみな？」

謎の男はダークネス・ドラグーンを振り回すと、刃身が伸びてエグザに襲い掛かる。

すると、エグザは突然と姿を消した。

？？？「なるほど…、更にスピードを増したか…。」

エグザ「こっちだ…。」

すると、謎の男の頭上からエグザが現れ、セイクリッド・レインティアを振り下ろす。

？？？「くっ！」

謎の男は素早く交わして反撃態勢に入ると、エグザの姿は既になかった。

エグザ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

その時、背後からエグザが現れてセイクリッド・レインティアを振り下ろした。

？？？「……。」

（ニヤリ…）

その時、謎の男が微かに笑みを浮かんでいた事に気付いた。

エグザ「？」

なんと、エグザが切ったのはオオクワモンだった。謎の男は、ダークネス・ドラグーンでオオクワモンを引き寄せて自分の盾にしたのだ。

???「あぶね×2…。危うく切られる所だったぜ…。」

何も罪のないオオクワモンは跡形もなく消滅した。

エグザ「貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ?」

とうとう、エグザの怒りが爆発し、セイクリッド・レインティアを振り回す。

謎の男は素早くバック転して交わし、闇の柱に乗る。

???「どうだ?切った感触は…?」

エグザ「お前だけは…、お前だけは絶対に許さん…。」

すると、謎の男は高らかに嘲笑う。

???「おいおい、お互い様だろ…?昔、お前は何度もデジモンを葬り去ってきた…。そんなテメェにキレる資格があるのかぁ?」

エグザ「黙れ…。デジモンは皆、生きてるんだ…。」

???「戯言を…。デジモンなんて所詮、データの中で生きる生き物…。クズの塊に過ぎねぇんだよ?」

エグザ「くっ…。」

???「おっとそうだった。実はテメェに報告したい事があってさぁ…。」

すると、エグザはフンと鼻を鳴らす。

エグザ「そんな報告、必要ない…。」

???「あっそ…。お前にとっちゃ、結構大事な事なんだと思うんだけどなぁ…。」

（ニヤリ…）

すると、エグザは背後から殺気を感じて振り向くと、黒い影がエグザに襲い掛かる。

エグザ「くっ？」

エグザは素早く交わして態勢を立て直した。

エグザ（誰だ？）

エグザはデジガンを構えて黒い影の正体を見ると、思わず驚愕した。

エグザ「スレイヤー…ドラモン…？」

スレイヤードラモン「見つけたぞ、エグザ…。」

エグザ「なぜここに…？」

？？？「まだ分かんねぇのかぁ？スレイヤードラモンは、俺のパートナーなんだよ…。」

謎の男の言葉に、エグザは更に驚愕した。

エグザ「なに？」

スレイヤードラモン「そうさ…。俺はヴァヌムスのパートナーだ…。」

エグザ「ヴァヌムス…だと…？」

？？？「申し遅れたなぁ、俺の名はヴァヌムス…。よろしく…いや、あばよの方がいいかぁ？」

エグザ「スレイヤードラモン…、正気なのか？」

スレイヤードラモン「お前のせいでリュウはもういない…。だから俺はヴァヌムスのパートナーなったのだ！エグザ、貴様を復讐するためにな！」

ヴァヌムス「そういう事だ。コイツの大切な物を奪ったお前に、これ以上生かす訳にはいかねぇんだよ…。」

エグザ「違う…。」

ヴァヌムス「じゃあ何だ？大切な物を守れず、そして挙げ句の果てに大切な物を奪ったヤツが違うとでも言うのかぁ？」

エグザ「それは……。」

すると、エグザは2丁拳銃のデジガンを手放し、EXモードが解けた。

ヴァヌムス「そうだ。それが利口な判断だ…。ここで罪を償えば、全てが許されるんだよ？やれ、スレイヤードラモン。」

スレイヤードラモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

スレイヤードラモンは大剣、フラガラッハを振りかぶる。

エグザ「俺は……。」

エグザは逃げる素振りを見せず、覚悟を決めた。

だがその時。

『闇に惑わされちゃダメ…。生きるのよ…。』

エグザ「？」

謎の声にエグザはハッとして素早くフラガラッハを交わした。

エグザ「ハァ…ハァ…。」

（何だ…今の声は…？）

ヴァヌムス「おいおい、話が違うぞぉ…？ちゃんと罪を償わきゃダメだろうがぁ…？」

エグザ「確かにそうかもしれない…。だが、ここで罪を償えば一生

後悔するかもしれない…。そんな気がしたんだ…。」

スレイヤードラモン「何を戯言を…？」

エグザ「スレイヤードラモン、前からずっと言いたかったが、大切な物を守れない自分が許せず、恐くて言えなかった…。だがここで言わせて貰う？俺はリュウを殺していない？」

スレイヤードラモン「フッ、何を言うのかと思えば…」

エグザ「……そして、リュウはこのデジタルワールドの何処かで生きている？」

スレイヤードラモン「え？」

すると、スレイヤードラモンはピタリと手を止めた。

エグザ「これは偽りではない…。真実だ…。だからスレイヤードラモン、ヴァヌムスのパートナーになるのはやめるんだ…。」

すると、ヴァヌムスは高らかに嘲笑う。

ヴァヌムス「面白い事を言うなぁ…。惑わされるなスレイヤードラモン。こいつは自分の身を守る為に作った嘘だ…。」

スレイヤードラモン「……。」

エグザ「『もし逢えなくなったとしても、何もかも忘れる訳じゃない…。信じる心があれば、いつかきっと巡り逢える』」

スレイヤードラモン「？」

エグザ「忘れたのか…？」

スレイヤードラモンはエグザを見ると、リュウの面影が映る。

スレイヤードラモン「エグザ、お前…？」

すると、ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンでエグザに切りに掛かり、エグザは素早く交わした。

ヴァヌムス「お前はそれでエグザの罪を許すのかぁ？だったら、お前の見たあれは、ただの偽りとでも言うのか？」

すると、スレイヤードラモンはハッとした。

スレイヤードラモン「そうだ…。俺はこの目で見たんだ…。エグザはあの時、嘲笑っていた…。俺にとって、かけがえのない存在をエグザが消したんだ？」

すると、スレイヤードラモンの身体から憎しみが溢れ出し、雄叫びを上げる。

スレイヤードラモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

スレイヤードラモンは暴走し、フラガラッハを振り回す。

エグザ「ダメだスレイヤードラモン？闇に堕ちるな？」

スレイヤードラモン「うるさい！俺はもう騙されないぞ…。貴様がどう言おうが、俺の復讐は終わらないんだ？」

エグザ「くっ…？」

（とにかく、闇の柱を破壊するしかない…。）

エグザはセイクリッド・レインティアを地面に突き刺した。

エグザ「デジサモン、発動？」

すると、地面からデジ文字が書かれた魔法陣が展開される。

エグザ「来い、マルスモン？」

すると、魔法陣からマルスモンが実体化される。

マルスモン「スレイヤードラモン、エグザの気持ちがまだ分からないのか？」

スレイヤードラモン「黙れ…。邪魔をするならば、貴様も消す？」

スレイヤードラモンはフラガラッハでマルスモンに切りに掛かる。

すると、マルスモンは両手でフラガラッハを受け止めた。

マルスモン「エグザ、今のうちに闇の柱を？」

エグザ「任せろ？」

すると、エグザの前にヴァヌムスが立ちはだかる。

ヴァヌムス「俺を忘れちゃ困るぜ…。エグザ…。」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを振り回す。

エグザ「くっ？」

エグザはすぐにセイクリッド・レインティアを取り出して鍔競り合う。

ヴァヌムス「いつまで持つかな…？」

エグザ「くっ…！」

（どうすればいい…？何とかヴァヌムスを足止めするには…。）

すると、雨粒がエグザの肌に落ちた。そして、上空から雷鳴が聞こえてくる。

エグザ（じきに雷が来るか…。そうか、これだ？）

エグザはセイクリッド・レインティアを2つの刃へと分裂し、すぐに闇の柱へと向かった。

ヴァヌムス「逃げるつもりか？逃がすかよ！」

ヴァヌムスはすぐにエグザの後を追う。

エグザはそのまま闇の柱を駆け上り、闇の柱の頂点に到達すると、上空へと高く飛びあがる。

そしてヴァヌムスも高く飛んでエグザを追撃する。

エグザ（今だ？）

エグザは振り向き、片方の刃をヴァヌムスに投げ付けた。

ヴァヌムス「何をするのかと思えば…。」

ヴァヌムスは軽く交わした。

ヴァヌムス「くたばりな？」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを振り下ろすと、エグザはもう片方の刃で斬撃を防ぎ地面に着地する。

ヴァヌムス「結局、お前の行動は無駄だったようだな…？」

エグザ「いや、神は俺を見放していない…。」

（ニヤリ…）

その時、上空から雷雲に包まれ、やがて雷鳴が鳴り響く。

ヴァヌムス「？」

エグザ「ビンゴ…。」

すると、雷雲から雷が落とされる。

ヴァヌムス「何が神は俺を見放していないだぁ？雷が俺に直撃するとでも思ってるのかぁ？」

エグザ「俺の目的は、お前じゃねぇよ…。」

雷が落ちた先は、闇の柱だったのだ。

ヴァヌムス「なに？なぜ雷が闇の柱に…？」

ヴァヌムスの見た先は、闇の柱の頂点に先程投げ付けたエグザの刃が突き刺さっていた。

ヴァヌムス「？」

（奴の剣が避雷針代わりに？それじゃ、あの時ヤツが投げたのは？）

エグザ「お前を狙って投げたと見せかけて、闇の柱に投げたんだよ…。」

すると、闇の柱は粉々になって消滅し、刃は地面に突き刺さる。

エグザ「形成逆転だ…。」

エグザはポケットから閃光弾のマガジンを2丁拳銃、ライト&ダークに装着して地面に撃ち込んだ。

エグザ「マルスモン、退くぞ？」

すると、弾丸は爆発し、ヴァヌムスとスレイヤードラモンは閃光に包まれた。

ヴァヌムス「くっ？」

スレイヤードラモン「しまった？」

やがて、ヴァヌムスとスレイヤードラモンは視界を取り戻すと、エグザとマルスモンの姿はなかった。

ヴァヌムス「チッ、油断した…。」

スレイヤードラモン「ヴァヌムス、どうする？」

ヴァヌムス「まぁいい。特別に生かしといてやるよ…。こっちはいい物を手に入れたのだからな…。」

（ニヤリ…）

ヴァヌムスは不気味に笑い、手を広げると、闇の空間が開かれる。

ヴァヌムス「帰るぞ、スレイヤードラモン。」

スレイヤードラモン「あぁ…。」

ヴァヌムスとスレイヤードラモンは闇の中へと消え去った。

～迷わずの森～

エグザ「……。」

何とか逃げ切れたエグザは岩に座り、空を見上げる。

マルスモン「あともうすぐで、心が通じたのにな…。」

エグザ「ヴァヌムス…何者なんだ…？それに…」

マルスモン「他に何かあるのか？」

エグザは気になっていた。スレイヤードラモンに殺される寸前に、自分に手を差し伸べてくれたあの声を。

エグザ「生きる…か…。」

『今すぐファイル島から出て…。』

その時、あの時の声が聞こえてくる。

エグザ「？」

エグザは急に立ち上がる。

マルスモン「どうした、エグザ？」

エグザ「あの時の声だ…。聞こえなかったか…？」

マルスモン「いや、俺には全く…。」

どうやら、マルスモンには聞こえなかったのだ。すると、エグザは謎の声に問う。

エグザ「お前は一体誰だ…？なぜあの時、俺を助けた？」

『あなたに生きていて欲しかったから…。私はあなたの真実を知っている。』

エグザ「なに…？」

『時間がないわ…。今すぐこの島にいる人達を安全な場所へ避難させて…。』

エグザ「それはなぜだ…？」

『ムゲンマウンテンに入ると、あなた達は見てはいけない物を見てしまう…。リュウギ…、そしてあなたも…。だからこの島から離れて…。』

すると、エグザは静かに笑う。

エグザ「そいつはお断りだ…。何せ、アンタはこんな俺に手を差し伸べてくれた…。だから次は、俺がアンタに手を差し伸べてやる…。」

『どうしてそこまでして…？』

エグザ「それが俺のやり方だ…。」

『……分かったわ。』

エグザ「あいつらには一応伝えておく…。待ってな…。」

エグザはそう言ってセイクリッド・レインティアを背中に背負う。

『気を付けてね…。』

すると、謎の声は静かに消えていった。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

それから、エグザはミソラやコウジ達に会ってこの事を話し、現在に至るのであった。

エグザは高い場所から見渡すと、トロピカジャングルの中からリュウギ達がムゲンマウンテンの方へと向かっていた所を発見する。

エグザ「どうやら、あいつらも決断が決まったみたいだな…。」

すると、エグザは静かに笑う。

エグザ「エクセリオン集結ってか…。待ってろよ…。必ず助け出してやるからな…。」

エグザはそう言って、ファイル島の中心にある山、ムゲンマウンテンへと向かうのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ５０　～昆虫の領域　ビートランド？漆黒に包まれし謎の男～（後書き）

～アナログマン本拠地～

アナログマン「ついにムゲンマウンテンに侵入してくるか…。」

ストラティクモン「いかがなさいますか？」

アナログマン「放っておけ…。奴らはイビルガの電脳核を壊せやしない…。断言できる…。」

アナログマンはそう言って中指でメガネをずり上げる。

スレイヤードラモン「それはなぜですか…？」

アナログマン「君は知らなくていいのだよ…。世の中は知っていい事と悪い事が山ほどあるからね…。」

スレイヤードラモン「……？」

アナログマン「ヴァヌムス、準備しておけ…。」

アナログマンが呼ぶと、闇の中からヴァヌムスが現れる。しかし、彼の姿は少し変わっていた。

ヴァヌムス「お安い御用だ…。まぁ、あんたのお陰で身体が少しずつ出来てきたぜ…。」

アナログマン「諸君、しばらくここで待機しておけ…。」

一同「はっ？」

アナログマンはそう言ってヴァヌムスと共に闇の中へと消えていくのであった。

エグザを襲うヴァヌムスとは一体何者なのか…？

次回はついにムゲンマウンテンへ突入？

しかし、思いがけない展開に？そしてリュウギやエグザに囁く謎の声の正体が明らかに？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ５１　～決戦？ムゲンマウンテン？エクセリオン崩壊？～（前書き）

ついにムゲンマウンテンへ突入？

果たしてアナログマンの野望を打ち砕く事ができるのか？

Ｅｐ５１スタート？

ＥＰ５１　～決戦？ムゲンマウンテン？エクセリオン崩壊？～

～はじまりの街～

リュウギ達はムゲンマウンテンの入り口に立っていた。

リュウギ「ついにここまで来たな…。」

リュウギはムゲンマウンテンを見上げ、ゴクリと息を呑む。

ナルガモン「なに緊張してんだよリュウギ♪オレに任せとけって♪」

ナルガモンはそう言ってリュウギの背中をポンと軽く叩く。

リュウギ「ナルガモン…。」

ミソラ「そうよ。私達がついてるんだから！」

レナモン「みんなの言う通りだ…。」

リュウギ「そうだよな…。」

？？？「フン、ここまで来ておいて、今更ビビるのか…？」

リュウギ達は振り向くと、カイ達が現れる。

リュウギ「カイ？それにコウジさん？」

ミソラ「なんでここにいるのよ？」

コウジ「偶然、カイ君と会ったんだよ。」

レオルモン「オレ達も戦うぜ♪」

キャンドモン「これは心強いですねぇ♪」

ナルガモン「精々足引っ張るなよ、犬ッコロ♪」

ガオモン「犬ッコロって言うなッ？」

すると、不安な顔をしていたリュウギは段々と自信に満ち溢れていた。

コウジ「リュウギ君…。」

リュウギ「なんだ、コウジさん…？」

コウジは深刻な顔になり、落ち着いてリュウギに離す。

コウジ「落ち着いて聞くんだよ…。先程、エグザから君への伝言を頼まれた…。」

リュウギ「会ったのか？」

コウジ「あぁ。どうやら、最後の柱はエグザが壊したらしいんだ…。」

一同「？」

リュウギ「それで、伝言は…？
」

コウジ「ムゲンマウンテンに入ると、見てはいけない物を見てしまう…。それでも入るなら、それなりの覚悟を決めろ…。ってね…。」

ミソラ「？」

すると、ミソラはフリーズランドでエグザに助けて貰った時の言葉を思い出す。

エグザ『さっさとこの島から離れな…。これは忠告だ…。』

ミソラ（フリーズランドで言われた時と同じだ…？）

リュウギ「……。」

コウジ「どうするんだい…？」

すると、リュウギは握りこぶしを作り、自らの手に打ち込んだ。

リュウギ「ここまで来たんだ…。ここで背を向けたら、俺の流儀に反する！勿論、行くぜ！」

すると、ミソラは安心したのか、クスッと笑う。

ミソラ「だと思ったわ…。」

ナルガモン「それでこそリュウギだぜ♪」

そしてカイも小さく笑う。

カイ「フッ…。」

コウジ「決まりだね…。」

リュウギ「よし、行こう？」

リュウギ達は覚悟を決め、ムゲンマウンテンの中へと入っていった。

ミソラ「？」

すると、リュウギの身体が薄れている事に気付くミソラ。

レナモン「どうした、ミソラ？」

よくよく見ると、リュウギの身体にら何処も異常がなかった。

ミソラ「あ、いや、何でもないわ。」

ミソラは首を横に振る。

ミソラ（何か、胸騒ぎがするの私だけ…？）

リュウギ「どうしたんだミソラ！置いていくぞ！」

ミソラ「うん、今行くわ！」

（きっと、気のせいだわ…。リュウギに限ってあり得ないわ…。）

ミソラは気のせいだと確信し、ムゲンマウンテンの中へと入ってい

った。

すると、物陰からエグザがリュウギ達の行動を監視していた。

エグザ「……。」

～ムゲンマウンテン～

ムゲンマウンテンの中に入ると、外見とは裏腹に中は緑色のデジタルで出来た場所だった。まるで、別世界のデジタルに来たかのように。

リュウギ「なんだこれは…？」

ナルガモン「ムゲンマウンテンの中ってこんな風になってたんだなぁ…。」

ミソラ「不思議ね…。」

レナモン「しかし妙だ…。デジモンやイビルスの気配が全くない…。」

リュウギ達は辺りを見回すと、レナモンの言う通り、ひと気が全くない。

カイ「確かにな…。敵の本拠地なのに誰もいないなんて、明らかに不自然すぎる…。」？

キャンドモン「祭日で休みだったりしてぇ～♪」

レオルモン「んなわけねぇだろ…。」

レオルモンはすかさずツッコム。

???「ようこそ、ムゲンマウンテンへ！」

すると、リュウギ達の前に巨大なスクリーンが現れる。

一同「？」

ナルガモン「誰だテメェは？」

???「はじめまして、エクセリオンの諸君。私の名はデジタルワールドの支配者、アナログマンだ！」

リュウギ「お前がアナログマンか…。なぜこんな事をする！」

アナログマン「君達こそ、なぜ私の研究にイチイチ首突っ込んでくるのかね…？」

カイ「答えは単純…。俺はアンタのしている事が気に食わないだけだ！」

アナログマン「お前は確か、渡里教授の息子ではないか…。君のお父さんは素晴らしいよ…。」

一同「？」

リュウギ「どう言う事だ？」

コウジ「カイ君の父親は、アナログマンを造った張本人なんだ…。」

ミソラ「なんですって？」

すると、カイはフンと鼻を鳴らす。

カイ「あんな奴、父親の資格なんてない！お前のせいで、妹のリエナを失ったんだ！」

リュウギ「カイ…。」

（コロシアムで言ってリエナって、カイの妹だったんだ…。）

アナログマン「人聞きの悪い…。君の妹を殺したのは渡里教授ではないか…？」

カイ「黙れ…。あいつはお前を造るのに夢中になって乱心し、リエナを殺したんだ？全てはお前のせいだ！」

アナログマン「人間1人失ったからって犬みたいに吠えちゃって…。これだから人間はデジモンと同様、クズなんだよ。」

するとカイの怒りが爆発し、巨大手裏剣、ギルガメッシュをアナログマンに投げ付けた。

カイ「貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ？」

しかし、スクリーンが映像のため、アナログマンには当たらなかった。

カイ「くっ？」

アナログマン「残念だったね。これは立体映像だから当たらないんだよ♪」

ミソラ「アイツ、とんでもない最低ね…。」

ガオモン「許さない…。お前だけは絶対に？」

コウジ「アナログマン、今すぐお前を消去させて貰うよ？」

アナログマン「やれるものなら是非ともやって欲しいねぇ…。だがその前に…」

アナログマンは指パッチンをすると、リュウギとナルガモンの足元から穴が空いてリュウギとナルガモンは穴に落ちてしまう。

リュウギ・ナルガモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラ「リュウギ？」

レオルモン「ナルガモン？」

コウジ「何をしたんだ？」

アナログマン「あの2人には特別な場所に移動させて貰った…。彼が1番興味があるからね…。それじゃ、私はこれで失礼するよ…。」

アナログマンはそう言って姿を消した。

カイ「待て、アナログマン？」

カイは追いかけようとすると、闇の空間から大量のイビルガ達が現れる。

一同「？」

コウジ「囲まれたか…。」

ミソラ「早く助けに行かなきゃ？」

レオルモン「その前に、こいつらを片付けねぇと？」

コウジ「レオルモンの言うとおりだ。このままイビルガ達を放っておいたら、大変な事になる！」

カイ「チッ、行くぞガオモン！」

ガオモン「はい！」

ミソラとカイはＤ－アクセルを取り出し、コウジはデジドライブを取りだしてそれぞれのパートナーデジモンに翳した。

ミソラ・カイ・コウジ「進化だ？」

～ムゲンマウンテン　最上階～

？？？「ーーギ、リュウギ！」

リュウギ「う、う～ん…。」

リュウギは目を開け、ゆっくりと立ち上がる。

ナルガモン「やっと起きたか…。」

リュウギ「ここは一体…？」

リュウギは辺りを見回すと、真っ暗で何も見えなかった。

ナルガモン「オレにも分からねぇ…。何処なんだここは…？」

？？？「ようこそ、電脳核の間へ…。」

すると、リュウギ達の前にアナログマンが現れる。

ナルガモン「あ？テメェ？オレ達をどうするつもりだ…？」

アナログマン「どうしようと私の自由だ…。」

ナルガモン「んだとコラぁッ？」

リュウギ「電脳核の間って言わなかったか…？まさか、ここにイビルガを造る装置があるのか…？」

アナログマン「その通りさ…。」

ナルガモン「バカだなテメェ！オレ達をここに落っことすなんて、オレ達に『さぁ壊してください』みたいなもんじゃねぇか？」

すると、アナログマンは不気味に笑う。

ナルガモン「何が可笑しいんだよッ？」

すると、リュウギの表情が段々と険しくなっていく。

リュウギ「まさか……？」

アナログマン「ご名答…。流石だよ小関　リュウギ君…。」

リュウギ「なぜ俺の名前を…？」

アナログマン「さぁ、何故だろうねぇ？そんな事より、早く電脳核を壊してくれたまえ…。これは君にしか頼めないんだよ…。」

アナログマンは指パッチンをすると、辺りが一瞬にして明るくなる。

リュウギとナルガモンは思わず目を閉じた。

リュウギ・ナルガモン「うわッ？」

リュウギとナルガモンは目を開けると、思わず驚愕した。それは２０メートルをも超える巨大なクリスタルだったのだ。

リュウギ「これが、イビルガを造りだす電脳核…？」

ナルガモン「デッケェ…？」

アナログマン「もうこの装置は用済みなのでね…。もう必要ないんだよ…。だから、好きにすればいい…。」

ナルガモン「なんだ？ヤケに素直じゃねぇか？」

リュウギ（コイツ…、一体何がしたいんだ…？）

アナログマン「心配ない、罠なんて仕掛けていないさ…。さぁ、早く電脳核を壊してくれたまえ…。」

ナルガモン「リュウギ、早いトコ壊しちゃおうぜ♪」

リュウギ「あ、あぁ…。」

リュウギは頷いて右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

アナログマン「……。」

（ニヤリ…）

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギはアルカナムを振り下ろして電脳核に攻撃をする。

ナルガモン「喰らえ！『アートルムフレイム？』」

ナルガモンは口から黒炎弾を放って電脳核に攻撃する。

しかし、電脳核は全くビクともしない。

ナルガモン「クソ…、なんて頑丈なんだよ？」

リュウギ「よし…。」

リュウギはアルカナムを構えて高く飛び上がる。

ナルガモン「よし、それで一刀両断だぜ！」

リュウギ「これで決め…」

その時、何処からか聞き覚えのある声が聞こえてくる。

『リュウギ……。』

リュウギ「？」

リュウギは驚き、攻撃をやめて地面に着地する。

ナルガモン「どうしたんだよリュウギ？」

リュウギ「いや…、誰かが俺を呼んでいたんだ…。それもかなり近くから…。」

（アイスサンクチュアリの時と同じ声だ…。）

ナルガモン「はぁ？何も聞こえねぇぞ？」

リュウギ「気のせいか…。……？」

リュウギは電脳核を見て、思わず驚愕する。

ナルガモン「よし、だったらオレの技で…」

すると、リュウギは手を広げてナルガモンを止める。

ナルガモン「今度はなんだよ？」

リュウギ「電脳核の中に、誰かいる…。」

ナルガモン「？」

リュウギは顔をしかめて電脳核を見つめる。すると、電脳核の中に長髪の女性が眠っていた。

ナルガモン「人間？誰だよあれ…？」

その時、リュウギは思わずアルカナムを手放し、膝が地面に着く。

ナルガモン「どうしたんだよリュウギ？」

リュウギの身体が震えていた。すると、リュウギは唇を震わせる。

リュウギ「母…さん…。」

ナルガモン「？」

すると、リュウギは頭を抱え込み、今までの記憶が思い出していく。

置き手紙『私は大切な物を取り戻しに行きます…。心配なさらずにいつか必ず戻ります…。勝手な私を、どうか許してください…。

？　？　？　？母より』

イビルガ『ある電脳核の憎しみ、悲しみなどのマイナスパワーによって生み出されたウィルスなんだ…。本来のイビルガ達は、怒りによって生み出されたが、私は１０００体に１体に生まれる電脳核の悲しみによって生み出された希少種型ウィルスだ…。』

コウジ『エグザから君への伝言を頼まれた…。ムゲンマウンテンに入ると、見てはいけない物を見てしまう…。それでも入るなら、それなりの覚悟を決めろ…。ってね…。』

リュウギ『何年経っても、母さんは帰ってこなかった…。母さんはとんでもない嘘つきだ…。』

その電脳核の正体はかつて、突如行方不明になっていたリュウギの母親、シオリだったのだ。

リュウギ「そん…な…。母さんが…、なんで母さんがここに…？」

リュウギは何が何だか頭の中はゴチャゴチャになっていた。

アナログマン「どうした？遠慮する事はない。壊していいんだぞ？」

すると、リュウギは鋭い目でアナログマンを睨み付ける。

リュウギ「母さんが行方不明になったのは、お前の仕業だったのか？」

アナログマン「君の母親は素晴らしい人材だ…。大切な人を失ったお陰で、彼女から溢れ出す憎しみ、そして悲しみによってイビルガ達を生み出す！」

リュウギ「よくも母さんを利用したな…。」

アナログマン「おやおや、お前を捨てた母親に肩を持つのかい…？何ともお人好しなガキだ…。」

リュウギ「黙れぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？」

リュウギの怒りが爆発し、アルカナムでアナログマンに切りにかかる。

アナログマン「ククククク…。」

しかし、アナログマン自体が立体映像のため、アルカナムは当たらない。

アナログマン「残念…。これは私の分身だ…♪」

アナログマン「惜しかったなぁ…、本当は君が電脳核に入る予定だったのに…。」

リュウギ「どういう意味だ？」

アナログマン「お前に真実を教えてやろう…。母親は君を捨てたのではない…。お前を守るために、母親は電脳核になったのだ…。」

リュウギ「なん…だと…？」

リュウギは思わず言葉を失う。

アナログマン「真実を知って驚いたかい…？これを見るがいい…。」

すると、背後から巨大なスクリーンが現れる。そこには、リュウギの母親、シオリが映っていた。

リュウギ「母さん…？」

ーーーーーーーーーーーーーー

ストラティクモン『さぁ、リュウギをこちらに渡して貰おうか…？憎悪に満ち溢れた彼がいれば、とてもいい電脳核になる…。』

シオリ『リュウギには手を出さないで…。私にとってかけがえのない息子なんだから！』

ストラティクモン『ならば、力ずくでつれていくまでだ…。』

シオリ『だったら、私がその電脳核になるわ！』

ストラティクモン『その目、憎しみに溢れた目…。コイツならいい電脳核になるかもしれないな…。』

ストラティクモンは小さく呟く。

シオリ『けど、これだけは約束して！リュウギには手を出さないって？』

ストラティクモン『いいだろう…。大人しくついて来ればの話だがな…。』

シオリ『分かったわ…。』

ーーーーーーーーーーーーーー

リュウギ「そん…な…？嘘だ…？」

『嘘じゃない…。本当よ…。』

すると、シオリの声が聞こえてくる。

リュウギ「母さん…、嘘だと言ってくれよ…？」

『あなたを守るためには、こうするしかなかったの…。』

リュウギ「母さん……。」

『必ず戻るって言ったのに…。寂しい思いをさせてごめんなさい…。』

すると、電脳核の中にいるシオリの頬に涙が零れ落ちる。

ナルガモン「涙…？」

アナログマン「ククククク…。面白くて笑いが止まらないよ♪」

アナログマンはそう言って高らかに嘲笑う。

すると、リュウギの眼は憎しみの眼となっていた。

リュウギ「許さない…。お前だけは絶対に許さない？」

すると、リュウギの身体から闇のオーラが溢れ出す。

ナルガモン「これはコロシアムの時と同じだ？」

アナログマン「おぉ？なんて素晴らしい？闇の力がどんどんと溢れ出す？」

ナルガモン「ダメだリュウギ？ここで暴走したら…」

リュウギ「うるさい…。ここで奴を葬り去ってやる…。」

リュウギの憎しみは段々と闇へと変わっていく。アルカナムを構えると、刃先から闇の力が溢れ出す。

『ダメよ…、リュウギ…。逃げて…。』

リュウギ「ここで逃げたら、俺の流儀に反する…。」

アナログマン「ヴァヌムス、リュウギを捕まえろ？」

すると、リュウギの前に謎の男、ヴァヌムスが現れる。その姿は、エグザと戦った時の姿とは事なり、漆黒の黒髪が生えていた。

リュウギ「誰だ…？」

ヴァヌムス「ワリィが、ちょいと大人しくしててくんねぇかなぁ？」

ヴァヌムスは大剣、ダークネス・ドラグーンを取り出して構える。

リュウギ「邪魔をするな？」

リュウギはアルカナムを振り下ろすと、ヴァヌムスは斬撃を受け止めて鍔競り合う。

ヴァヌムス「闇の匂いが来るぜ…♪こいつは楽しめそうだなぁ？」

リュウギ「くっ？」

リュウギはチカラを入れるが、全くビクともしない。

ヴァヌムス「どうしたぁ？もっと本気出せよ…？それとも、テメェの本気はその程度なのかぁ？」

リュウギ「嘗めるなぁぁぁぁぁぁ？」

しかし、ヴァヌムスは身体を回転させてリュウギを蹴り飛ばす。

リュウギ「ぐはっ？」

ナルガモン「リュウギ？」

リュウギは起き上がろうとすると、ダークネス・ドラグーンがリュウギの頬を掠らせて地面に突き刺さる。

ヴァヌムス「俺に勝とうなんざ、百年早ぇんだよ…。」

リュウギ「くっ？」

ナルガモン「リュウギ？」

ナルガモンは助けに行こうとすると、ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンの柄を持つ。

ヴァヌムス「おっと、それ以上動くとコイツの首が飛ぶぜ…？」

ナルガモン「くっ？」

アナログマン「ヴァヌムス、殺してしまうとせっかくの電脳核が台無しになるぞ…？」

ヴァヌムス「心配すんな…。４分の３殺せば問題ないだろ…？」

ヴァヌムスはそう言ってニヤリと笑う。

リュウギ（コイツ…、本気だ…？）

すると、リュウギの憎しみは消え去り、やがて恐怖へと変わった。

ヴァヌムス「おいおい、すっかり怯えちゃったぞコイツ？マジで使えるのか？」

アナログマン「確かに…。怯えていては話にならない。好きにしなさい…。」

ヴァヌムス「りょーかい…♪」

ヴァヌムスはやがて戦場を好む修羅の眼となり、ダークネス・ドラグーンを地面から引き抜く。

ヴァヌムス「恨むなら、自分の無力さを恨みな…。」

リュウギ（殺される…？逃げないと殺される…？逃げろよ…。立って逃げるんだ俺…。）

リュウギは逃げようとするが、恐怖の余りに身体が言う事を聞かない。

ヴァヌムス「あばよ…。」

（ニヤリ…）

リュウギ（やられる？）

その時、銃声が響き渡る。

一同「？」

？？？「随分と雰囲気が変わったじゃねぇか、ヴァヌムス。」

すると、ヴァヌムスの前にエグザが現れる。

ナルガモン「テメェはエグザ？」

リュウギ「エグザ…？」

ヴァヌムス「ほぅ、正義のヒーロー参上ってヤツかぁ？」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを肩に担ぐ。

エグザ「コイツには手を出すな…。俺が相手になる…。」

エグザはそう言って背中からセイクリッド・レインティアを取り出す。

ヴァヌムス「いいだろう…。こんなビビリだけじゃ物足りねぇから

な…。丁度いいぜ…。」

ヴァヌムスはそう言ってダークネス・ドラグーンを構える。

エグザ「リュウギ、今のうちに逃げろ？」

すると、リュウギは立ち上がって怒鳴る。

リュウギ「誰がお前なんかの…」

すると、エグザはリュウギの倍で怒鳴り声を上げる。

エグザ「いいから早く行けッ？」

リュウギ「？」

エグザ「お前がいると足でまといだ…。だからさっさと失せろ…。」

アナログマン「そうはいかないよ…。来い、ダークスよ？」

すると、エグザの前にストラティクモン、スクロモン、アンクスモン、ギーゴモン、ヴルグモンが現れる。

エグザ「くっ…？」

アナログマン「ダークスよ、今すぐそいつらを消せ…。」

ダークス「はっ？」

ヴァヌムス「どうする？もう逃げ場はねぇぞ？」

エグザ「どうやらそのようだな…。」
（止むを得ない…。）
すると、エグザはセイクリッド・レインティアを地面に突き刺した。
エグザ「エクシードサモン、発動？」
すると、地面からデジ文字が描かれた巨大な魔法陣が現れる。
エグザ「エンジェモン、エクシード進化だ？」
すると、魔法陣からエンジェモンが実体化され、データが上書きされる。
エンジェモン「エンジェモン、エクシード進化？」
『セラフィモン？』
リュウギ「エクシード…サモン…？」
ナルガモン「なんだよ、エクシードサモンって？」
エグザ「セラフィモン、頼む。」
セラフィモン「任せろ！『ソムニウムゲート？』
セラフィモンは手を天に差し出すと、リュウギの前に巨大な門が現れる。

リュウギ・ナルガモン「？」

アナログマン「なに？」

セラフィモン「開？」

すると、巨大な門が開かれる。門の奥には何もない真っ白な世界だった。

ヴァヌムス「まさか、閉じ込める気か…？」

エグザ「ハズレだ…。」

すると、エグザはリュウギとナルガモンを門の中へと放り投げた。

リュウギ・ナルガモン「うわっ？」

エグザ「頼む、セラフィモン！」

セラフィモン「閉？」

すると、巨大な門はゆっくりと閉ざされていく。

リュウギ「待てよエグザ？」

エグザ「言ったハズだ…。お前がいると足でまといだってな…。」

ナルガモン「テメェはどうするんだよ？」

エグザ「人の心配するヒマがあるなら、テメェの無力さに心配しな

…。」

ナルガモン「？」

リュウギ「エグザ？」

門が閉ざされる寸前、エグザはリュウギの方を見て笑みを浮かべる。

エグザ「必ず這い上がって来い、リュウギ。」

すると、巨大な門は完全に閉ざされた。リュウギは慌てて門まで駆け寄り、門を何度も叩く。

リュウギ「開けろよエグザ？母さんがまだ…」

すると、リュウギは段々と力が抜けていく。そしてリュウギは大声で叫んだ。

リュウギ「クソ…。クソォォォ

ＥＰ５１　～決戦？ムゲンマウンテン？エクセリオン崩壊？～（後書き）

～キャラクター紹介　その８～

名前：ヴァヌムス（ラテン語で空虚という）

性別：男

パートナーデジモン：スレイヤードラモン（？）

解説：アナログマンの手によって作られたプログラム。全て謎だらけの男。包帯を隠しているのは、まだ完全なるプログラムが未完成のため隠している。（彼はファッションと言っている）なぜエグザを狙うのかは彼曰く、『邪魔』としか言ってないが、本当の目的は不明。戦闘能力はエグザと互角に戦い、そして暴走するリュウギをも恐怖へと追い込む程の実力を持つ。そして戦闘をかなり好む。

＞ｉ２６９６０―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

次回、リュウギとナルガモンはとんでもない場所へと流されてしまう？

～冒険？ファイル島篇～いよいよ大詰めです？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ５２　～リアルワールド帰還？絆を語りしヒヨコ売り男～（前書き）

エグザに巨大な門へと放り出されたリュウギとナルガモン！

果たしてリュウギとナルガモンは…？

Ｅｐ５２スタート！

EP52　～リアルワールド帰還？絆を語りしヒヨコ売り男～

リュウギとナナモンは目を開けると、とんでもない物を目にした。

リュウギ「……え？」

ナナモン「何だよ、ここ…？」

たくさんのビルが聳(そび)えており、リュウギの周りにはたくさんの人が歩いていた。

リュウギ「ここって…まさか…？」

ナナモン「デジタルワールドじゃねぇのかよ？」

リュウギは看板を見ると、こう書いてあった。

～東京都　新宿区～

リュウギ「俺達…、元の世界に帰って来れたのか…？」

ナナモン「えぇ？ここってリュウギの世界なのか？」

ナナモンはありったけの声で驚くと、周りの人達がリュウギに注目する。

ナナモン「な、なんだよ？テメェら…」

すると、リュウギは慌ててナナモンの口を塞ぐ。

ナナモン「フゴッ？フゴフゴ？」

リュウギ「シッ！取り敢えず別の所に行くぞ！」

リュウギはナナモンを抱き抱えて近くの公園へと向かった。

～新宿中央公園～

リュウギ「ハァ…ハァ…。ここまで来れば大丈夫だな…。」

ナナモン「何すんだよいきなり？」

リュウギ「ナナモン、ここはデジモンの住む世界じゃないんだ。だから喋っちゃダメだぞ。」

ナナモン「何でだよ？」

リュウギ「何でもだ？取り敢えず、俺の家まで行って見るか…。」

リュウギはナナモンを抱き抱えて、リュウギの家へと向かった。

～小関家～

リュウギの本当の家まで辿り着くリュウギ。それは、小さな一軒家だった。

リュウギ「懐かしいな…。」

ナナモン「スゲェなぁ？これってリュウギの家なのか？」

リュウギ「あぁ。入るぞ。」

リュウギはドアに手を当ててゆっくりと開ける。

家に入ると、中はもぬけの殻だった。

リュウギ「やっぱり…、誰もいないか…。」

リュウギはリビングに入る。すると、リュウギは懐かしく感じる。

リュウギ「何も変わっていないな…。」

ナナモン「なぁリュウギ、腹減った…。」

リュウギ「よし、待ってろ。」

リュウギは台所へと向かい、何かを作り始めた。

料理をして１０分が経ち、リュウギは手作りのチャーハンをテーブルに置く。

リュウギ「ほら、出来たぞ。」

ナナモン「うおほーーーー?美味そう?」

リュウギ「それじゃ…」

リュウギ・ナナモン「いただきます!」

リュウギとナナモンはスゴい勢いでチャーハンを平らげる。

リュウギ・ナナモン「はぁ～、食った×2♪」

ナナモン「リュウギって料理が、出来るんだな？」

リュウギ「あぁ。このチャーハンは、母さんに……教えて……」

すると、リュウギは段々と言葉を失い、やがて深刻な顔になる。

リュウギ「ナナモン、俺達ってなんでここにいるんだ…？」

ナナモン「確か…、エグザがオレ達を巨大な門に放り投げて…それから…」

すると、ナナモンも深刻な顔になる。

リュウギ「そうだ！ミソラ達も帰って来てるかもしれない…。」

リュウギはＤ－アクセルでミソラと連絡を取ってみる。しかし、ミソラからの応答はない。

リュウギ「なんで出ないんだよ…？」

ナナモン「リュウギ…、まさか、こっちの世界に帰ってきたのはオレ達だけなんじゃ…」

リュウギ「……。」

ナナモン「リュウギ、ここでのんびりしてるヒマはないぞ！今すぐ

デジタルワールドへ帰るぞ？」

しかし、リュウギは何も言わない。

リュウギ「俺みたいな無力が何ができるんだよ…？」

ナナモン「？」

リュウギ「お前も気付いてるハズだ…。俺達にあのヴァヌムスを倒せるのか…？」

ナナモン「だからってほっとけるかよ？こうしてる間に、お前の母さんやミソラ達が危ない目に合ってるかもしれねぇんだぞ？」

リュウギ「エグザに任せとけばいいんだよ…。俺はもう、誰も助けられないんだ…。」

完全に戦意喪失になったリュウギを見たナナモンは思い切りリュウギに体当たりした。

リュウギ「ナナモン…。」

ナナモン「そうやって尻尾巻いて逃げるのかよ…？いつものお前は何処行っちまったんだよ？」

リュウギ「だったら、お前だけ行けばいいだろ！」

ナナモン「上等だ？オレだけでも助けに行ってやる！」

ナナモンはそう言って家を出て行った。

リュウギ「……。」

（今更戻って、何になるんだよ…。）

リュウギはナナモンを追わず、ソファーに座る。すると、リュウギは左手首に装着しているＤ－アクセルを見つめる。

すると、デジタルワールドで起きた事を思い出す。

アナログマン『君の母親は素晴らしい人材だ…。大切な人を失ったお陰で、彼女から溢れ出す憎しみ、そして悲しみによってイビルガ達を生み出す！お前に真相を教えてやろう…。母親は君を捨てたのではない…。お前を守るために、母親は電脳核になったのだ…。』

ヴァヌムス『おいおい、すっかり怯えちゃったぞコイツ？マジで使えるのか？』

シオリ『必ず戻るって言ったのに…。寂しい思いをさせてごめんなさい…。』

ヴァヌムス『恨むなら、自分の無力さを恨みな…。』

ーーーーーーーーーーーーーー

リュウギ「これさえなければ…、こんな思いにならなくて済んだんだ…。何がエクセリオンだよ…。こんなもの！」

リュウギはＤ－アクセルを外して投げようとすると、ピタリと手を止めた。

リュウギ「もう終わった事なんだ…。コンビニでも行くか…。」

リュウギはＤ－アクセルをテーブルに置いて家を出た。

リュウギの眼はもういつもの真っ直ぐな眼ではなかった。

～東京都　新宿区～

リュウギは青い空を見上げながら道端を歩く。すると、リュウギは小さく呟く。

リュウギ「これでいいんだ…。これで…。」

???「どうした少年？浮かない顔してよぅ？」

リュウギはチラッと見ると、空き地の奥に中年男が座っていた。その姿は、頭にタオルを巻いており、赤いアゴ髭が生えており、口にタバコをくわえ、そして茶色いレンズのグラサンをかけていた。そして、中年男の足元に小さなダンボールが置いてあった。

リュウギ「アンタには関係ないだろ…。」

???「まぁそう言うなって…。友達と喧嘩でもしたのか？」

リュウギ「なんで分かるんだよ…？」

リュウギは気になり、中年男の方へと近寄る。

???「少年の眼を見れば分かるのさ…。それに、何かを逃げているかのようにな…。」

リュウギ「……。」

リュウギは黙りになる。

？？？「おや？図星かい…？」

リュウギ「だから何だよ…？俺はもう誰も助けることができないんだ…。」

（この人、一体何者なんだ…？）

？？？「そうかい…。ところで…」

すると、中年男は小さいダンボールの中に手を入れる。すると、リュウギは感付いて警戒する。

リュウギ「？」

（まさか、アナログマンの…）

すると、おじさんはダンボールから黄色くて小さなものを取り出した。

？？？「ヒヨコ、買うか…？」

すると、リュウギの目が丸くなる。

リュウギ「……はぁ？」

そして…。

？？？「ほらよ…。」

すると、中年男はジュースをリュウギに渡す。

リュウギ「ありがとう…。でも、いいのか？」

？？？「遠慮すんなよ少年…。これも何かの縁だからな…。」

中年男はそう言って缶コーヒーを飲みながら座る。

リュウギ「なぁ、アンタは一体何者なんだ…？」

すると、中年男はタバコを吸い、煙をフーッと吹く。

？？？「通りすがりのヒヨコ売りだ…。最近の社会は厳しいからな…。ところで少年、友達を追わなくていいのか？」

すると、リュウギは深刻な顔になる。

リュウギ「いいんだよ…。もう俺には関係ないから…。」

？？？「ほぅ…。とか言って本当は心配なんじゃねぇのか？」

すると、リュウギは立ち上がって否定する。

リュウギ「別に心配なんてしてない！俺は…」

？？？「俺は……なんだ？」

リュウギ「情けないんだ…。大切な物を守れない自分の姿が余りに

も…。」

???「それで自信喪失ってヤツか？バカバカしいにも程があるぜ少年？」

すると、リュウギは怒鳴る。

リュウギ「アンタに何が分かるんだよ？」

???「……。」

中年男は黙りのまま、缶コーヒーを飲む。

リュウギ「俺はもう、誰かを守る力なんてないんだ…。だからもうほっといてくれ…。」

???「おい少年、そう決め付けるのはまだ早すぎるんじゃねぇのか？人生という名の道はそんなに狭くねぇんだからよ…。」

リュウギ「余計なお世話だ…。」

???「昔、お前に似た奴がいたんだ…。」

すると、リュウギは首を傾げる。

リュウギ「俺に…？」

???「あぁ。そいつはバカでいつも適当で、ちっとも仕事しねぇロクでなしな奴だった…。」

リュウギ（何処が似てるんだよ…。）

リュウギは心の中でツッコム。

???「……けど、どんな状況に陥っても、敗北という名の泥まみれになっても、何度も這い上がれる根性は誰にも負けちゃいなかった…。仲間思いで良いヤツだった…。アイツは、ある物を守るために、魂に全てを賭けて戦っていたんだよ…。」

中年男はそう言ってタバコを吸って、フーッと煙を吹く。

リュウギ「ある物……？」

???「それは、仲間との絆だ…。」

リュウギ「絆…。」

???「なぁ少年…。余計な口を挟むかもしんねぇが、少年はそれで本当に良いのか？後悔しないって胸張って言えるのか…？俺は言えねぇと思うな…。」

リュウギは東京の空を見上げながらふと思った。『これで本当にいいのか？』と…。

すると、中年男はポンとリュウギの背中を叩く。

???「行けよ少年。大切な物を守れず泥まみれになったとしても、何度でも這い上がれ…。そしてお前の魂に全てを賭けてみな…。魂に命じていれば、きっと少年の力になる…。」

すると、別れ際に言われたエグザの言葉を思い出す。

エグザ『必ず這い上がって来い、リュウギ？』

リュウギ「……母さん、ミソラ。」

地面が激しく揺れ始める。

リュウギ「うわっ？」

すると、東京の空からデジモンが現れる。

リュウギ「デジモン？なんでここに？」

すると、突如現れたデジモンは南の方角へと向かった。

リュウギ「渋谷区に向かったぞ？なんで…？」

すると、中年男は缶コーヒーを一気に飲み干して、そっと地面に置く。

？？？「恐らく、他のデジモンに反応して向かったんだろうな…。」

すると、リュウギはハッとする。

リュウギ「まさか、ナナモン？」

リュウギは急いで自宅へと向かった。

すると、中年男は中指でグラサンをずりあげる。

???「……全く、アイツそのものだな…。」

中年男はふと、過去の事を思い出す。

ーーーーーーーーーーーーーー

リュウ「オレの息子のリュウギだ！」

リュウは自慢げにリュウギを紹介する。

リュウギ「……。」

幼いリュウギはリュウの後ろに隠れて恥ずかしがる。

???「へぇ～、結構似てるじゃねぇかよ？」

リュウ「だろ？将来が楽しみだろ？」

すると、中年男はそっとリュウギに話し掛ける。

???「気をつけろよリュウギ、父さんみたいなサボリ魔になっちゃダメだぞ？」

リュウ「んなッ？テメェ余計な事を言うなよ？」

???「冗談だ冗談♪」

中年男は高らかに笑うと、幼いリュウギは口を開く。

リュウギ「俺、父さんみたいに強くなりたい…。」

リュウ「リュウギ…？」

？？？「ほぅ、なんで強くなりたいんだ？」

すると、幼いリュウギは顔を赤らめる。

リュウギ「だって…、友達や、父さんや母さんを守りたいら…。」

すると、リュウはニヤッと笑い、幼いリュウギの頭を撫でる。

リュウ「へへっ…、分かってんじゃねぇか。お前なら守れるさ…。」

リュウギ「うん！」

？？？「こりゃ、将来が楽しみだな…。」

ーーーーーーーーーーーーーー

すると、中年男はフッと小さく笑う。

？？？「お前ならできるハズだ、リュウギ…。」

すると、中年男は頭をポリポリとかく。

？？？「さて、せっかくの客だったのに、一匹も売れなかったじゃねぇかよ…。」

中年男はブツブツと呟きながらポケットから携帯電話を取り出した。

？？？「俺だ。久しぶりだな？」

？？？『やぁ、元気そうだね♪』

中年男はグラサンを外すと、赤色の瞳が輝く。

？？？「早速だが、渋谷区にデジモンが現れた…。任せてもいいか…？」

？？？『残念だけど、俺は用事があるから行けないんだ…♪』

？？？「はぁ？だったらどうすりゃ…」

？？？『それなら、一真（かずま）に頼めばいいさ♪」

？？？「おいおい、あの能天気に任せて大丈夫なのかぁ？」

？？？「大丈夫さ…♪俺が保証する…♪」

？？？「…ったく、しょうがねぇなぁ…。」

ーーーーーーーーーーーーーー

～東京都　練馬区～

練馬区のとある小さな公園。

？？？「見上げた空は青くて～♪」

緑色の髪にアホ毛があり、藍色の瞳をした少年の耳にはヘッドホンをして音楽を聴いていた。

???「カ～ズマ～、肉まんちょうだ～い。」

すると、蛇のような姿をしたデジモンが腹の虫を鳴らしながらカズマと呼ばれる少年を呼ぶ。

カズマ「真っ直ぐ伸びた放物線～♪」

???「カズマ？カズマーーッ？」

すると、カズマは呼ばれている事に気付き、ヘッドホンを外す。

カズマ「何だよネレイスモン？」

ネレイスモンと呼ばれるカズマのパートナーデジモンは顔をしかめる。

ネレイスモン「今なんて言ったか聞いてた？」

カズマ「あぁ、この曲は昔好きだったソナーポケットの青…」

ネレイスモン「って、全然聞いてねぇじゃねぇかよ？」

ネレイスモンは尻尾でカズマの頬をビンタした。

ネレイスモン「肉まん頂戴って言ったんだよ！」

カズマ「ダメだネレイスモン。3時のおやつまで我慢しろ…。」

ネレイスモン「ガキじゃあるめぇし…。」

カズマ「焦っても時間は早くならねぇ。もっとのんびり行こうじゃねぇか♪」

カズマはそう言って肉まんを頬張る。

ネレイスモン「んな？オレの肉まんが？つうかのんびり云々、先に食ってんじゃねぇよ？」

ネレイスモンは肉まんを食べられて激怒する。

カズマ「甘いなネレイスモン！パートナーならオレの心を読みやがれってんだ！」

カズマはそう言ってる内に肉まんを完食した。

ネレイスモン「なにさり気無く完食してんだテメェッ？」

カズマ「それがオレのＳＴＹＬＥ（スタイル）☆」

カズマはビシッときめてドヤ顔をする。

ネレイスモン「やかましわッ？」

ネレイスモンは尻尾でカズマをビンタした。

カズマ「いだっ？」

（ピロピロピロ…♪）

すると、カズマのポケットから携帯電話が鳴る。

（ピッ♪）

？？？「いててて…、はいはーい。」

？？？『カズマ、緊急指令だ。』

なんと電話の相手は中年男だった。

カズマ「お？早速お出ましか♪デジタルゲートが閉ざされてからずっと退屈だったんだよなぁ…。んで、今回はどんな指令なんですかぁ、ヒヨコのおっちゃん？」

？？？『おい、その呼び方で呼ぶなっていつも言ってるだろうが…。』

カズマ「まぁまぁ、こういう時こそ、羽目を外すトコも大切なんですよ♪ヒヨコのおっさん♪」

？？？『どういう時だよ…。お前は毎日羽目外し過ぎだろうが…。しかも全然変わってねぇんだよ…。』

中年男は今にもキレそうな状態だった。

？？？『まぁいい、渋谷区でデジモンが現れた。大至急、渋谷区に向かってくれ。』

カズマ「大至急？そうはいきませんねぇ、オレは今練馬区にいるんですよ？それに、オレはのんびりと行きたいもんなので…。」

カズマはめんどくさそうに頭をポリポリとかく。

？？？『いいのか？そこに面白い奴が来るってのによぉ？』

中年男の言葉にカズマが、ピタリと止める。

カズマ「面白いって保証はあるんですかぁ？」

？？？『さぁな…。お前が渋谷区に着いた頃には、もう片付いてるかもしれねぇな…。それがイヤなら超特急で渋谷区に行け。』

カズマ「りょうかーい♪」

カズマは電話を切る。

ネレイスモン「任務か？」

カズマ「あぁ。すぐに渋谷に行くぞ。」

ネレイスモン「あいよ！」

ネレイスモンは身体をカズマの腕に巻き付く。そして、カズマは黄色のＤ－アクセルを構える。

カズマ「デジサモン、発動！」

すると、地面からデジ文字を描かれた魔方陣が現れる。

カズマ「出番だ、バードラモン？」

すると、魔方陣からバードラモンが実体化される。

カズマ「今すぐ渋谷に向かってくれ！」

ネレイスモン「おいおい、こんな所でデジサモンしても大丈夫なのか？」

カズマ「細かい事は気にすんなって！ほら、行くぞ！」

カズマはそう言ってバードラモンの足に掴まる。

バードラモン「しっかり捕まるのだぞ。」

バードラモンは翼を広げて、大空へと羽ばたき、渋谷区へと向かった。

カズマ「面白い奴かあ…。どんな奴か楽しみだぜ…♪」

（ニコッ）

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

EP52　～リアルワールド帰還？絆を語りしヒヨコ売り男～（後書き）

謎のエクセリオン、カズマとそのパートナーデジモン、ネレイスモンの登場？

ヒヨコ売りの中年男の正体は一体？

果たして、リュウギとナナモンはどうなるのか？

次回もお楽しみ？

Ｅｐ５３　～東京大騒動？謎のエクセリオン、カズマ登場？～（前書き）

今回は謎のエクセリオン、カズマの正体が明らかに？

そしてリュウギは間に合うのか？

Ｅｐ５３スタート？

ＥＰ５３　～東京大騒動？謎のエクセリオン、カズマ登場？～

～東京都　渋谷区～

一方、ナナモンは…。

ナナモン「なんだよ、リュウギのヤツ…。」

（ブツブツ…）

ナナモンはブツブツと呟きながら渋谷の街をさ迷う。

ナナモン「どうやってデジタルワールドへ行くんだろう…？」

ナナモンは考える。

ナナモン「ま、そのうち見つかるか♪」

すると、上空からデジモンの雄叫びが聞こえてくる。

？？？「ギシャャャャャャャャ？」

ナナモン「あれはエアドラモン？」

すると、突如現れたエアドラモンはナナモンに襲いかかる。

ナナモンは慌てて草陰に隠れる。

ナナモン「うわっ？」

すると、街の人達は慌てて逃げ出す。

ナナモン「なんだよ急に…。まさか、イビルスか…？」

すると、エアドラモンは
勢いよくナナモンに突進してくる。

ナナモン「この野郎！『アートルムファイア！』」

ナナモンは口から黒い炎を吐く。しかし、幼年期のため、火力はかなり弱い。

エアドラモンには全く効かず、巨大な口を開ける。

ナナモン「？」

ナナモンは思わず目を閉じたその時、黒い影がナナモンを抱き抱えて素早く交わした。

エアドラモンはそのまま上空へと飛び上がる。

？？？「無茶すんなよ、ナナモン…。」

ナナモンは目を開けると、思わず叫んだ。

ナナモン「リュウギ？」

リュウギ「怪我はないか…？」

すると、ナナモンはフンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。

ナナモン「今更戻ってきて、何の用だよ？」

リュウギ「決まってるさ…。」

すると、リュウギはナナモンを下ろした。

リュウギ「パートナーであるお前を助けにきた…。勿論、ミソラや母さんも…。」

ナナモン「リュウギ…。」

リュウギ「ナナモン、一緒に戦ってくれないか…？」

すると、ナナモンの目つきがキリッと変わった。

ナナモン「勿論だぜ、リュウギ？」

すると、リュウギのＤ－アクセルから光が生じる。

ナナモンのデータは上書きされ、やがて姿が変わる。

ナナモン「ナナモン、進化？」

『ナルガモン？』

ナルガモン「ＣＯＯＬに反撃と行こうぜ、リュウギ？」

リュウギ「あぁ？」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

エアドラモンは急降下し、リュウギ達に襲いかかる。

すると、リュウギとナルガモンは高く飛んで交わす。

ナルガモン「さっきはよくもやってくれたな？『アートルムフレイム？』」

ナルガモンは口から黒炎弾をエアドラモンにぶつけた。

エアドラモン「ギシャャャャャャャャ？」

リュウギ「まだだ？」

リュウギはアルカナムを振り下ろすと、剣風によって生み出された衝撃波を放ち、エアドラモンを地面に叩き付けた。

リュウギとナルガモンは地面に着地した後、すぐに態勢を立て直す。

リュウギ「ところで、なんでここにデジモンがいるんだよ…？」

ナルガモン「オレが知るかよ！」

エアドラモンはゆっくりと起き上がると、雄叫びを上げた。

エアドラモン「ギシャャャャャャャャ？」

すると、エアドラモンの身体から闇のオーラが溢れ出し、エアドラモンの身体を包んだ。

リュウギ・ナルガモン「？」

すると、エアドラモンは巨大なデジモンへと進化した。

？？？「グォォォォォォォォォォォ？」

リュウギはＤ－アクセルで巨大なデジモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「メガドラモン、完全体、邪竜型、ウィルス種、必殺技はジェノサイドアタック。」

ナルガモン「あの野郎、進化しやがった？」

リュウギ「暗黒進化…？ってことは、イビルガがいるのか？」

メガドラモン「グォォォォォォォォォォォ？」

メガドラモンは翼を広げ、リュウギ達に襲いかかる。

リュウギ・ナルガモン「くっ？」

リュウギとナルガモンは素早く交わした。

リュウギ「ナルガモン、完全体に進化だ？」

ナルガモン「おう？」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。

ナルガモン「ナルガモン、進化？」

（シーーーーーーーーン…）

ナルガモン「あり？」

リュウギ「なんで進化しないんだよ？」

ナルガモン「知らねぇよ？」

そうこうしている内に、メガドラモンは両手からミサイルを放つ。

メガドラモン「『ジェノサイドアタック！』」

リュウギとナルガモンは間一髪で交わす。しかし、爆風によって吹き飛ばされてしまった。

リュウギ・ナルガモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギとナルガモンは激しく壁に叩き付かれた。

ナルガモン「クソッ…、なんで進化しねぇんだ…？」

メガドラモン「『ジェノサイドアタック！』」

すると、メガドラモンは両手からミサイルを放つ。

リュウギ「くっ？」

？？？「『メテオウイング？』」

その時、上空から炎の羽根が降り注ぎミサイルに直撃し、爆発した。

リュウギ・ナルガモン「？」

すると、上空から黒い影が現れる。

？？？「とうちゃーくっと…。ご苦労だったな、バードラモン。後はオレ達に任せな。」

バードラモン「分かった。」

するとデジサモンの効果が切れ、バードラモンは静かに消え去った。

リュウギ「誰だ…？」

？？？「なんだ…。面白いヤツってリュウ兄の事だったのかぁ…。」

黒い影は振り向くと、リュウギは驚愕する。

リュウギ「カズマ？カズマなのか？」

すると、カズマの腕に巻き付くパートナーデジモン、ネレイスモンが首を傾げる。

ネレイスモン「なんだカズマ、知り合いなのか？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ネレイスモン、成長期、水棲型、データ種、必殺技

はアクアショット。」

リュウギ「デジモン？ってことはカズマ、まさかお前…？」

カズマ「そう、オレは…」

すると、爆煙からメガドラモンが現れ、両手でリュウギ達に襲いかかる。

メガドラモン「グォォォォォォォォォォォ？」

ナルガモン「リュウギ、来るぞ？」

リュウギ達は素早く交わした。

カズマ「そう慌てんなよ…。リュウ兄、今は忙しいから話は後にするよ。ってな訳で行くぞ、ネレイスモン。」

ネレイスモン「あいよ！」

カズマは黄色のＤ－アクセルをネレイスモンに翳した。

ネレイスモン「ネレイスモン、進化？」

（シーーーーーーーーン…）

ナルガモン「おい、進化…しねぇぞ…？」

すると、ネレイスモンはカズマに声を掛ける。

ネレイスモン「なぁカズマ、今は進化制御されてるから進化できねぇってこの間タツキに言われなかったか？」

カズマ「いけね、スッカリ忘れてた…。」

ネレイスモン「っておい…。」

カズマ「気にすんなってネレイスモン、それがオレのＳＴＹＬＥなんだから☆」

ネレイスモン「やかましわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ネレイスモンは尻尾でカズマをビンタした。

カズマ「いだっ？」

リュウギとナルガモンは思わず目を丸くする。

リュウギ「カ、カズマ…？」

ナルガモン「なんだあいつら…？」

すると、怒り狂ったメガドラモンは両手からミサイルを放つ。

メガドラモン「『ジェノサイドアタック？』」

カズマは素早く交わした。

カズマ「手が混んでるねぇ♪」

リュウギ「カズマ、ここは俺達に…」

カズマ「アレをやるか…。ネレイスモン、リュウ兄の所に行っといてくれ。」

ネレイスモン「ほどほどにしとけよ…。」

ネレイスモンはそう言ってカズマから離れ、リュウギの腕に巻き付く。

リュウギ「んな？」

ネレイスモン「オレの移動手段はこれだから、ちょいとお邪魔させて貰うよ♪」

ナルガモン「何をする気なんだアイツは？」

ネレイスモン「まぁ見てなって！カズマは少しボケが混じってるけど、ああ見えてケッコー強ぇから。」

すると、カズマは肩にぶら下げてる細長い袋を地面に下ろす。

リュウギ「カズマ…？」

すると、細長い袋から一本の日本刀を取り出して両手に持つ。

リュウギ・ナルガモン「？」

カズマ「来な…。」

すると、メガドラモンは勢いつけてカズマに襲いかかる。

すると、カズマは鞘から日本刀を抜き取り、目にも止まらない早さでメガドラモンを切り刻んだ。

メガドラモン「グォォォォォォォォォォ？」

カズマは日本刀を器用に振り回し、ゆっくりと鞘に納める。

ナルガモン「す、すげぇ…？」

リュウギ（カズマの動きが全く見えなかった…？何回切ったんだ…？）

すると、リュウギの腕に巻き付くネレイスモンが口を開く。

ネレイスモン「１４回切ったんだよ…。」

リュウギ「？」

ナルガモン「あの一瞬で１４回も切ったのか？」

ネレイスモン「そう♪」

リュウギ「凄い…。」

カズマ「よぉし、完了×２♪」

すると、メガドラモンの体内からイビルガが現れる。

リュウギ「やっぱりイビルガだったのか！」

カズマ「ネレイスモン？」

ネレイスモン「任せろ！『アクアショット？』

ネレイスモンは口から強力な水圧をイビルガにぶつけた。

イビルガ「くっ？」

イビルガは攻撃を受けつつ、逃げようとするその時、カズマが既に日本刀を構えていた。

カズマ「遅ぇ？」

カズマは日本刀でイビルガを切り刻んだ。

イビルガ「ギャャャャャャャャ？」

イビルガは跡形も無く消え去った。

カズマ「終了っと…。」

カズマは日本刀を肩に担ぐ。

リュウギ「カズマ、その刀は一体…？」

カズマ「これ？これは『双龍牙（そうりゅうが）』って言ってな、普通の日本刀とは少し違うんだよ…。」

よくよく見ると、双龍牙には2枚の刃が重なる変わった日本刀だったのだ。

リュウギ「ホントだな…。」

すると、リュウギの腕に巻き付くネレイスモンはカズマの腕に移動して腕に巻き付く。

ネレイスモン「やっぱこっちの方が落ち着くなぁ…。」

ナルガモン「リュウギ、なんでコイツの事知ってるんだ?」

リュウギ「紹介するよナルガモン。榊原(さかきばら)　カズマ。カズマとは俺が東京に居た時の幼馴染みだったんだ。」

ナルガモン「幼馴染み?お前って幼馴染み好きなんだなぁ?」

リュウギ「好きで悪かったな…。」

カズマ「改めて、久しぶりリュウ兄。元気そうで何よりだな♪」

リュウギ「あぁ。」

リュウギとカズマはお互いにガッチリと握手をする。

??「おっ、もう片付いたのか?」

すると、物陰からヒヨコ売りの中年男が現れる。

リュウギ「アンタはさっきの?」

カズマ「よっ、ヒヨコ売りのおっちゃん♪」

？？？「だからその名前はやめろっていってんだろうが…。」

リュウギ「知り合いなのか？」

カズマ「おう♪」

タツキ「どうやら、友達と仲良くなったみたいだなぁ少年。いや、小関　リュウギ。」

自分の本当の名を聞いてリュウギは驚く。

リュウギ「なんで俺の名前を？」

すると、中年男はグラサンを外す。

？？？「自己紹介がまだだったな…。俺は甲斐谷（かいたに）　竜貴（たつき）だ…。」

すると、リュウギは思わず叫ぶ。

リュウギ「タツキさん？」

ナルガモン「幼馴染みか？」

ネレイスモン「いや、違うだろ…。」

ネレイスモンはすかさずツッコム。

リュウギ「タツキさんは、父さんの友人なんだ。でも、なんでタツキさんがここに…？」

リュウギはナルガモンに説明した後、タツキに問う。

タツキ「俺も昔、リュウと一緒にデジタルワールドで冒険したんだよ。」

ナルガモン「？」

リュウギ「それじゃ、母さんやコウジさん、ショウさんも知ってるんだ…。」

タツキ「そうだ…。ところで、シオリは元気にしているか…？」

すると、リュウギは俯く。

リュウギ「実は……」

リュウギはタツキ達にこれまでの事を全て話した。

タツキ「そうか…。色々大変だったんだな…。」

タツキはタバコを口にくわえて火を着ける。

カズマ「それじゃ、リュウ兄の母親は、リュウ兄を守る為に神戸にいる親友に預けたのか…。」

リュウギ「あぁ…。それなのに俺は、母さんを嘘つき呼ばわりしていた…。それだけじゃない…。俺は大切な人を守れなかった…。そ

う思うと俺は、情けなくて…。」

リュウギは自分の無力さに悔しくなり、拳をギュッと握り締める。

ナルガモン「リュウギ…。」

すると、リュウギの目付きがキリッと変わる。

リュウギ「でも、タツキさんは教えてくれた…。どんなに泥まみれになっても、這い上がる諦めない気持ちを持てって…。だから俺は、みんなを助けに行く！」

タツキ「……。」

（いい眼だ…。流石はリュウの息子だな…。）

タツキは小さく笑い、タバコの煙を吹く。

ナルガモン「それでこそリュウギだぜ♪」

リュウギ「でも、どうやってデジタルワールドに帰るのかが問題だな…。」

タツキ「デジタルワールドにいる誰かが、デジタルゲートを封鎖し、進化制御システムもされている…。」

リュウギ（アナログマンの仕業か…。どうすれば…。）

リュウギは腕を組んで考え込む。

カズマ「それなら心配ないよリュウ兄、さっき親父と電話したら、

親父が何とかするってさ♪」

リュウギ「親父？」

（ピロピロピロ…♪）

すると、タツキの携帯電話から着信が鳴る。タツキは携帯電話を取り出して電話に出る。

？？？『タツキ、そっちは済んだかい♪』

タツキ「あぁ。思ったより予定は早かったな…。」

リュウギ「カズマ、お前の親父って何をしてるんだ…？実際に合った事ないからさ…。」

リュウギはそっとカズマに問う。

カズマ「オレの親父は榊原（さかきばら）志狼（しろう）。親父は昔、剣道界最強と呼ばれてたんだ。そんで親父はオレに剣道の全てを教えてくれたんだ。」

リュウギ「そうだったのか…。」

（あの目にも止まらない早さは、父親の剣道譲りだったんだ…。）

タツキ「おいシロウ。用事って、一体何をやっていたんだぁ？」

シロウ『鈴次（れいじ）に協力して貰って、デジタルゲートを開く準備をしていたのさ…♪』

タツキ「ホントか？」

シロウ『けど、タツキにとっては少し面倒な事になるよ…♪』

タツキ「面倒？どういう事だよ…？」

シロウ『デジタルゲートの奥に敵が待ち伏せしているんだよ…。既に、こっちの計画がバレバレだからね…♪』

タツキ「つまり、敵を倒しながらカズマをデジタルゲートを潜らせる…。進化はできねぇし、コイツは厄介だな…。」

シロウ『進化制御システムは解除した。けど、タイムリミットは僅か5分…。時間オーバーになってしまうと進化制御システムは再び作動され、そしてデジタルゲートは閉ざされる。』

タツキ「一か八かの賭けってヤツだな…。」

シロウ『時期にデジタルゲートが開かれるから、準備しておくんだよ♪それじゃ♪』

タツキ「って、ちょっと待てよ？」

タツキは止めようとするが、電話を切られてしまった。

（ブチッ、ツー…ツー…）

タツキ「マジかよ…。」

タツキは小さくため息をつき、携帯電話をしまう。

リュウギ「タツキさん…。」

タツキ「リュウギ、カズマ。よく聞くんだぞ…。」

タツキはシロウの話していた事を全てリュウギ達に話した。

ネレイスモン「5分か…。」

カズマ「コイツは面倒な事になったなぁ…。」

リュウギ「だから何だよ?ここで引き下がったら、俺の流儀に反する!何が何でもデジタルゲートを潜ってみせる!」

ナルガモン「リュウギの言う通りだぜ!」

ネレイスモン「リュウギって、カズマより逞しいな…。」

カズマ「オレはリュウ兄みたいにバンバン突き進むタイプじゃないから。オレはのんびりに、オレのＳＴＹＬＥで貫くだけの事さ☆」

カズマはどや顔をしながら親指をピシッと立てる。

ネレイスモン「あっそ…。」

ネレイスモンは呆れて小さくため息をつく。

すると、東京の上空が真っ暗闇に染まる。

タツキ「そろそろだな…。リュウギ、カズマ。遅れるなよ!」

リュウギ・カズマ「おう？」

――To Be Continued….

ＥＰ５３　～東京大騒動？謎のエクセリオン、カズマ登場？～（後書き）

～キャラクター紹介　その９～

名前：榊原（さかきばら）　一真（かずま）

性別：男

年齢：１５歳

パートナーデジモン：ネレイスモン

一人称：オレ

趣味：剣道、音楽鑑賞

口癖：それがオレのＳＴＹＬＥ☆

解説：かつて、リュウと共に冒険をしたシロウの息子。シロウとは違って能天気な性格なため、物事を深く考えず、かなりのマイペース。しかし、彼はシロウと同じく剣技になると右に出るものはない程の実力者であり、パートナーとのコンビネーションが良い。リュウギの事を『リュウ兄』と親しみを込めて呼んでいるが、彼が『その方が呼びやすい。』とただ気分で勝手にあだ名を付けている。

＞ｉ２７１２８―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

次回はついに『冒険？ファイル島篇？』完結？

リュウギとカズマは果たしてデジタルゲートを潜る事ができるのか？

Ｅｐ５４　～究極のカウントダウン？名将の魔人　ストラティクモンを討て？～

リュウの仲間の力でなんとかデジタルゲートを抉じ開けた？

しかしタイムリミットは僅か５分？

果たして間に合うのかリュウギとカズマ？

デジタルゲート封鎖のカウントダウンが始まる？

では、Ｅｐ５４スタート？

ＥＰ５４　～究極のカウントダウン？名将の魔人　ストラティクモンを討て？～

～東京都　渋谷区～

タツキ「そろそろだな…。さっきも説明した通り、タイムリミットは５分だからな…。気を抜いてるヒマないぞ！」

リュウギ「分かった！」

カズマ「りょうかーい！」

ナルガモン「ＣＯＯＬに突破してやるぜ？」

ネレイスモン「いつでもＯＫだ？」

すると、真っ暗闇に染まった空からイビルガ達が現れる。

リュウギ「行くぞ、ナルガモン！」

カズマ「行くぜ、ネレイスモン！」

ナルガモン・ネレイスモン「おう？」

リュウギとカズマはＤ－アクセルをナルガモンとネレイスモンに翳した。すると、ナルガモンとネレイスモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化？」

『ソニックドラモン？』

ネレイスモン「ネレイスモン、進化？」

『シードラモン？』

リュウギはＤ－アクセルでシードラモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「シードラモン、成熟期、水棲型、データ種、必殺技はアイスアロー。」

カズマ「リュウ兄、遅れるなよ！」

カズマは方にぶら下げてある袋から日本刀、双龍牙を鞘から抜き取る。

リュウギ「あぁ？」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

上空から現れたイビルガの大群は、一斉にリュウギ達に襲い掛かる。

リュウギ・カズマ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギとカズマは次々とイビルガを切っていく。

ソニックドラモン「喰らいやがれ？『アートルムバースト』」

シードラモン「『アイスアロー？』」

ソニックドラモンとシードラモンはそれぞれの必殺技でイビルガ達を倒していく。

タツキ「ほぅ、なかなかやるじゃねぇか…。」

タツキはタバコの煙をフーッと吹く。

カズマ「そらよ？」

カズマは器用に双龍牙を振り回しながらイビルガを切る。すると、背後から三体のイビルガが襲い掛かる。

リュウギ「カズマ、伏せろ！」

リュウギはガンブレードのトリガーを引いて銃撃し、三体のイビルガを撃ち落とす。

イビルガ達「ギャャャャャャャャ？」

カズマ「サンキュ、リュウ兄！」

リュウギ「遅れるなよって言っておきながら、遅れてるじゃねぇか…。」

カズマ「気にすんなって、それがオレのＳＴＹＬＥなんだからよ☆」

リュウギ「あのなぁ…。」

リュウギは苦笑いする。その間に、イビルガ達に囲まれてしまった。

リュウギとカズマは背中合わせになって戦う態勢に入る。

カズマ「リュウ兄、あと何分だ？」

リュウギ「４分だ。この数だと厳しいな…。」

カズマ「だったら…」

リュウギ「完全体だな！ソニックドラモン？」

カズマ「シードラモン？」

リュウギとカズマはＤ－アクセルをソニックドラモンとシードラモンに翳した。すると、ソニックドラモンとシードラモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ソニックドラモン「ソニックドラモン、超進化？」

『ドラグナモン？』

シードラモン「シードラモン、超進化？』

『メガシードラモン？』

リュウギはＤ－アクセルでメガシードラモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「メガシードラモン、完全体、水棲型、データ種、必殺技はサンダージャベリン。」

ドラグナモン「これで終わらせてやるよ？『デッドリーアートルム

？』」

メガシードラモン「喰らえ？『サンダージャベリン？』」

？ドラグナモンとメガシードラモンはそれぞれの必殺技でイビルガ達を次々と倒していく。

イビルガ達「ギャャャャャャャャ？」

リュウギ「一気に決めるぞ、カズマ！」

カズマ「了解！」

リュウギとカズマはそれぞれの武器を構えて振り上げるように振った。すると、剣風によって生み出された巨大な衝撃波を放ってイビルガ達を一刀両断にした。

イビルガ達「ギャャャャャャャャ？」

すると、イビルガ達を一体残らず倒したのであった。

タツキ「早く片付けたな…。」

タツキは小さく笑い、タバコの煙をフーッと吹く。

リュウギ・カズマ「よし！」

リュウギとカズマは同時にハイタッチをした。

ドラグナモン「メガシードラモン、なかなかやるじゃねぇか？」

メガシードラモン「お前もな！」

タツキ「リュウギ、カズマ！もう時間が無い！早くデジタルゲートに入れ！」

リュウギ「分かった！頼む、ドラグナモン！」

リュウギとカズマはドラグナモンの背中に乗り、メガシードラモンはネレイスモンへと退化し、カズマの腕に巻き付く。

ドラグナモン「しっかり捕まっとけよ？」

ドラグナモンは背中に装備しているロケットエンジンを噴射させ、デジタルゲートに向かって飛び立つ。

タツキ「余裕で間に合ったな…。」

しかしその時、真っ暗闇な空から黒い影が現れる。

？？？「そう簡単にデジタルゲートを潜れると思うなよ…？」

一同「？」

リュウギは黒い影の名前を叫ぶ。

リュウギ「お前はストラティクモン？」

ストラティクモン「ふん？」

ストラティクモンは片手でドラグナモンを殴り飛ばした。

ドラグナモン「ぐはっ？」

ドラグナモンは地面に激しく叩きつかれた。

タツキ「まだいやがったのか？」

ストラティクモン「惜しかったな、哀れなエクセリオン共よ…。」

カズマ「よぅストラティクモン。」

リュウギ「知ってるのかカズマ？」

カズマ「あぁ。あの野郎のせいで、オレはこの世界に放り出されたんだ…。」

ストラティクモン「そうだ。何せ、リュウギの次に1番厄介なのは貴様なのだからな…。」

カズマ「なるほど…。その片腕が無くなっちまったのは、リュウ兄にやられたんだな？」

ストラティクモン「ここで会ったが百年目…。貴様ら纏めて、あの世に送ってやろう…。見せてやる、名将の魔人　ストラティクモンの力を？」

ストラティクモンは手を天に差し出すと、真っ暗闇な空から巨大な刀が現れる。

リュウギ「刀？」

カズマ「最後の切り札ってヤツか…。」

ストラティクモンは刀を掴み取ると、威圧感が溢れ出す。

ドラグナモン「なんて威圧なんだ？」

ストラティクモン「開け、魔龍冥王牙？」

ストラティクモンは鞘から刀を抜き取ると、邪悪なる闇が溢れ出す。

リュウギ「魔龍冥王牙…？」

ネレイスモン「噂で聞いた事がある…。遥か昔、その刀を軽く振っただけで海を裂き、巨大な島をも吹き飛ばす恐ろしい妖刀。それをヤツが持っていたなんて…。」

すると、ストラティクモンの
失っていた右腕の代わりに魔龍冥王牙がストラティクモンの右腕となった。

ストラティクモン「さぁ、来るがいい…。」

ドラグナモン「嘗めんなよ？『デッドリーアートルム？』」

ドラグナモンは背中に装備しているロケットエンジンの中から大量の小型ミサイルを発射させる。

ストラティクモン「そんなもの、私には効かん？」

ストラティクモンは魔龍冥王牙を軽く振り下ろすと、全ての小型ミサイルを無力化にした。

ドラグナモン「なに？」

リュウギ「デッドリーアートルムが効いてない？」

ストラティクモン「くたばるがいい？」

ストラティクモンは魔龍冥王牙を振りかぶり、ドラグナモンに切りに掛かる。

ドラグナモン「くっ？」

ドラグナモンは両肘に装備しているヒドゥンセイバーをクロスにして魔龍冥王牙を受け止めた。

リュウギ「何をしてるんだドラグナモン？」

ドラグナモン「バカヤロ？ここで攻撃を交わしたら、この街ごと吹き飛ぶぞ？」

リュウギ「ドラグナモン…。」

ストラティクモン「バカめ…、だからといって自ら死を選んだというのか…。砕け散るがいい？」

ストラティクモンは力を振り絞ると、ヒドゥンセイバーを粉々に砕いた。

ドラグナモン「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カズマ・ネレイスモン「？」

リュウギ「ドラグナモン？」

ドラグナモンの全身に装備しているサイボーグは粉々に砕けてしまい、致命傷を負ってしまう。

ドラグナモン「く、くそ…。」

ストラティクモン「ほぅ、魔龍冥王牙の一撃でここまで堪えるとは、褒めでやろう…。だが…。」

すると、ストラティクモンは魔龍冥王牙を振り上げ、ドラグナモンにトドメを刺そうとする。

その時、リュウギはストラティクモンの前に立ちはだかり、アルカナムを構える。

リュウギ「俺が相手だ…。」

カズマ「リュウ兄？」

ドラグナモン「リュウ…ギ…。」

ストラティクモン「パートナーを庇うのか…？無力である貴様に何が出来るというのだ…？」

リュウギ「かもな…。でも、俺は何度泥まみれになっていようが、何度でも這い上がってやる…。俺は、ここで逃げる訳にはいかないんだ？」

ドラグナモン「ダメだリュウギ…。逃げろ…。」

リュウギ「ここで逃げたら、俺の流儀に反する…。お前を見捨てるなんて俺にはできねぇんだだよ？」

ストラティクモン「いい覚悟だ…。ならばパートナーと共にあの世に散れ？」

ストラティクモンは魔龍冥王牙を振り下ろした。

ドラグナモン「リュウギィィィィィィィィィィ？」

その時、上空から青い雷がストラティクモンに落ちて来る。

ストラティクモン「？」

ストラティクモンは素早く交わし、トドメを刺し損ねた。

カズマ（今だ？）

隙を読んだカズマは双龍牙を鞘から抜き取り、素早くストラティクモンの右腕に乗る。

ストラティクモン「？」

カズマ「それ以上好き勝手されちゃ困るぜ？」

カズマは双龍牙を魔龍冥王牙と一体感したストラティクモンの右腕に突き刺した。

ストラティクモン「くっ、嘗める……？」

ストラティクモンは反撃しようとすると、目の前にリュウギがアルカナムを構えていた。

リュウギ「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

リュウギはアルカナムを横一閃に振ると同時にトリガーを引いて斬撃の威力を増大させ、ストラティクモンの両目を切った。

ストラティクモン「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギ（やったか？）

ストラティクモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

すると、ストラティクモンは右腕に乗るカズマを振り落とし、左手でリュウギの首を掴む。

リュウギ「かはっ？」

カズマは素早く受け身を取り、態勢を立て直す。

カズマ「リュウ兄？」

ストラティクモン「両目をやれば勝利を確信したか…？甘い…。甘

すぎる！」

ストラティクモンはとっさに右目だけ交わしたため、視界を失っていなかった。

リュウギ「ク…ソ…。」

（あと少しだったのに…。）

ストラティクモン「これで貴様は終わりだ…。もう、貴様らに勝利はないのだ？」

ストラティクモンはそう言って、魔龍冥王牙を構える。

ストラティクモン「散れ…。」

（ズキッ？）

ストラティクモン「くっ？」

その時、先ほどカズマにやられた右腕が痛みストラティクモンは苦しみ出す。

？？？「そんな勝利宣言、誰も認めねぇよ…。」

その時タツキが現れ、ストラティクモンの懐に入る。

ストラティクモン「？」

タツキ「これを油断大敵ってヤツだ。」

すると、タツキは握り拳を作り、ありったけの力でストラティクモンの腹を殴った。

ストラティクモン「ぐはっ？」

ストラティクモンは怯んだのか、思わずリュウギの首を放してしまう。

タツキはすぐにリュウギを連れてストラティクモンから離れた。

リュウギ「ゲホッ、ゲホッ！」

タツキ「大丈夫か、リュウギ？」

リュウギ「ありがとう、タツキさん…。」

ストラティクモン「この…人間が…。」

タツキ「悪いが、形成逆転だ…。」

ストラティクモン「なに？」

タツキ「お前さんの背後を見れば分かる。」

（ニヤリ…）

ストラティクモンは振り向くと、全身にクロンデジゾイドを纏いし竜人型デジモンが巨大なエネルギーを作っていた。

ストラティクモン「？」

リュウギ「あれは…？」

リュウギはＤ－アクセルで竜人型デジモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ウォーグレイモンＸ抗体、究極体、竜人型、ワクチン種、必殺技はガイアフォースＺＥＲＯ。」

ドラグナモン「まさか、タツキのパートナー…？」

そして、ウォーグレイモンＸ抗体の背後にカズマとネレイスモンが戦う態勢に入っていた。

カズマ「ネレイスモン。この間の借り、１０倍にして返すぞ？」

ネレイスモン「おう？」

すると、ネレイスモンはカズマから離れて飛び上がる。

カズマ「究極体に進化だ？」

カズマはＤ－アクセルをネレイスモンに翳した。すると、ネレイスモンの身体に聖なる光が生じ、やがて姿が変わる。

ネレイスモン「ネレイスモン、ワープ進化？」

『プレシオモン？』

リュウギ「究極体？」

リュウギはＤ－アクセルでプレシオモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「プレシオモン、究極体、首長竜型、データ種、必殺技はソローブルー。」

ドラグナモン「アイツ、究極体に進化できるのか？」

タツキ「ウォーグレイモン？」

カズマ「プレシオモン？」

ウォーグレイモンＸ・プレシオモン「おう？」

ウォーグレイモンＸ「『ガイアフォースＺＥＲＯ！！』」

ウォーグレイモンＸは大地から集いし巨大なエネルギーを放った。

プレシオモン「『シェイキングパルス？』」

プレシオモンは口から強力な雷電流波を放ち、二つの必殺技はストラティクモンにぶつける。

ストラティクモン「くっ？」

ストラティクモンは魔龍冥王牙を盾にして攻撃を受け止める。

ストラティクモン「無駄だ？貴様らの攻撃では、この魔龍冥王牙は敗れない？」

リュウギ「くっ、どうすれば…。」

すると、ドラグナモンはゆっくりと立ち上がる。

ドラグナモン「ったく…、どいつもこいつも目立ちやがって…。オレはまだ戦えるぜ…。」

リュウギ「無茶だドラグナモン?身体がボロボロなんだぞ?」

ドラグナモン「オレの事心配するヒマがあるなら、オレを信じろ?」

リュウギ「?」

ドラグナモン「見せてやろうぜ、オレ達の絆を…。」

すると、リュウギはゆっくりと頷いた。

リュウギ「分かったよドラグナモン。俺はお前を信じる?」

すると、リュウギのD－アクセルから光が生じる。

リュウギ「EXモード、発動?」

ドラグナモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ?」

ドラグナモンは雄叫びを上げると、凄まじい突風が舞う。

タツキ「?」

カズマ「来たか、EXモード…。」

突風が去ると、ドラグナモンの身体には光のオーラに包まれていた。

リュウギ「行くぞ、ドラグナモン？」

ドラグナモン「ＣＯＯＬに反撃だぜ？『デッドリーアートルム？』」

ドラグナモンは背中に装備しているロケットエンジンの中から大量の小型ミサイルを発射させる。

すると、ストラティクモンは段々と押されて後方へと下がっていく。

タツキ「押してる！行けるぞ！」

ストラティクモン「まだだ？まだ私は……？」

ストラティクモンの目に映った先は、リュウギがアルカナムを振りかぶっていた。

リュウギ「俺はミソラと約束をしたんだ。必ず現実世界へ還してやるって…。だから俺はここで負ける訳には……」

すると、リュウギの身体から光のオーラが溢れ出す。

タツキ「？」
（あれは？）

リュウギ「いかないんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギはありったけの力でアルカナムを振り下ろすと、剣風によって生み出された巨大な衝撃波を放った。

ストラティクモン「なに？」

ガイアフォースＺＥＲＯ、シェイキングパルス、デッドリーアートルム、そしてキズナドライブ。全ての技が１つとなった。

ストラティクモン「こんなもの、魔龍冥王牙で……」

その時、魔龍冥王牙にヒビが入る。

ストラティクモン「バカな、魔龍冥王牙にヒビが？」

一同「いっけぇぇぇ

ナナモン「おう…。」

カズマ「ご苦労様、プカモン。」

プカモン「疲れたぜ…。」

タツキ「リュウギ、カズマ。急げ！もうデジタルゲートが閉じてしまうぞ？」

ウォーグレイモンX「早く乗れ！」

リュウギ「分かった！」

リュウギとカズマはウォーグレイモンX抗体の背中に乗る。

ウォーグレイモンX「しっかり捕まっとけよ！」

ウォーグレイモンX抗体はバーニアを噴射させ、猛スピードでデジタルゲートへと向かう。

タツキ「あと１０秒だ？」

カズマ「間に合ってくれ？」

リュウギ（この距離だと間に合わない！こうなったら一か八かの賭けだ？）

「ウォーグレイモン、俺達を投げ飛ばしてくれ？」

ウォーグレイモンX「分かった？」

タツキ「5…4…3…2…1…。」

ウォーグレイモンX「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

ウォーグレイモンX抗体はありったけの力でリュウギとカズマをデジタルゲートに向かって投げ飛ばした。

リュウギ・カズマ「間に合えぇぇぇぇぇぇ？」

すると、リュウギとカズマは間一髪でデジタルゲートをくぐり抜けたのだ。デジタルゲートは空の彼方へと静かに消え去った。

ウォーグレイモンX「間に合ったな…。」

タツキ「あぁ。ご苦労だったなウォーグレイモン。」

タツキは安心し、グラサンを外した。すると、真っ暗闇な空はいつの間にか消え去り、空は美しく青く澄んでいた。

タツキ「デジタルワールドは任せたぞ、救世主（エクセリオン）…。」

――To Be Continued…

ＥＰ５４　～究極のカウントダウン？名将の魔人　ストラティクモンを討て？～

～キャラクター紹介　その１０～

名前：甲斐谷（かいたに）　竜貴（たつき）

性別：男

パートナーデジモン：アグモン

一人称：俺

趣味：グラサンの手入れ、音楽鑑賞（ロック系）

解説：かつて、リュウ達と共に冒険をした１人。リュウギと出会った時に彼は既にリュウギだと気付いており、助言を与えてリュウギを勇気づけた。職業は無職であり、生活費のために空き地でヒヨコを売っている。暇な時間はいつもタバコを吸うかヒヨコと戯れるかのどちらかである。

＞ｉ２７２５５―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

～双龍牙～

＞ｉ２７１５２―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

次回からついに新章突入？

新章のタイトルは、何週間掛けて描いた新章の挿絵と共に発表します？

次回もお楽しみに？

ＥＰ５５　～帰還、デジタルワールド？新たなる冒険の始まり？～（前書き）

～？？？～

『ーーー目覚めよ、選ばれし救世主よ…。』

リュウギ「う、う～ん…。」

リュウギは起き上がり、辺りを見渡すと真っ暗で何も見えなかった。

リュウギ「ここは…？デジタルワールドか…？それとも、間に合わなかったのか…？」

？？？「ここはデジタルワールドと現実世界の境界だ…。心配ない、そなたは間に合った。」

リュウギ「アンタは一体…？」

？？？「私はそなたの敵ではなく味方でもない…。私はそなたとそなたのパートナーを試す者だ…。」

リュウギ「俺とナルガモンを…？」

？？？「そうだ…。救世主　リュウギよ、そなたはパートナーの事をよく理解し、助け合い、共に闘い、それによって絆は結ばれた…。そして今、そなたに試練を受ける資格を得た。」

リュウギ「試練…？ちょっと待ってくれよ？俺には何が何だか…」

？？？「強くなりたくば、デバイス島へ来い…。私はそこで待っている…。」

すると、謎の声は何処かへと消え去った。

リュウギ「おい、待てよ？」

すると、真っ暗に染まる世界が突然と光りだし、リュウギは光りの閃光に包まれた。

リュウギ「うわ？」

謎の声は一体…？

ついに新章突入？

では、第４章　～激戦？ｖｓ伝説の十闘士篇～スタート？

＞ｉ２７４６１―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

EP55　～帰還、デジタルワールド？新たなる冒険の始まり？～

？？？「ーーーリュウーー。」

すると、何処からか声が聞こえてくる。

リュウギ（誰か俺を呼んでいる…？まさか、ミソラ…？）

？？？「ーーーュウ兄？」

目を開けると、カズマの顔が薄っすらと見える。

カズマ「お、やっと目が覚めたか。」

リュウギ「カズマ…。ナルガモンは？」

リュウギはガバッと起き上がり、周りを見渡す。

カズマ「ナルガモンなら心配いらねぇ。隣でグッスリと眠ってるぞ。」

リュウギ「え？」

リュウギは横を見ると、ナルガモンはヨダレを垂らしながら爆睡していた。

ナルガモン「へへ、デジタケ……ムニャムニャ。」

リュウギ「どんな夢見てんだよ…。」

リュウギは起きて早々、ツッコム。

リュウギ「カズマ、ここは…？」

ネレイスモン「ここはデジタルワールドのサファール島だよ。オレ達は戻って来れたんだよ。」

リュウギ「そうか…。」

（あの夢は一体…？）

リュウギは顔をしかめて考える。

カズマ「どうしたんだリュウ兄？まだ傷が痛むのか？」

カズマが心配事すると、リュウギはハッとする。

リュウギ「いや、もう大丈夫だ。」

リュウギはゆっくりと立ち上がり、背すじを伸ばす。

リュウギ「デジタルワールドに戻って来れたなら、ミソラと連絡が出来るかもしれないな…。」

リュウギはすぐにＤ－アクセルでミソラと連絡を取る。

（ザーーーーーー）

リュウギ「繋がらない…。どうなってるんだ…？」

カズマ「リュウ兄、さっきから思ったんだけどさぁ？」

リュウギ「な、なんだよ…？」

カズマ「ミソラって誰なんだよ？」

すると、カズマの腕に巻き付くネレイスモンが口を開く。

ネレイスモン「ひょっとして彼女か…？」

すると突然、リュウギは顔を赤らめて否定する。

リュウギ「チ、チゲェよ？ミソラは別に彼女なんかじゃ…」

カズマ「でもさぁ、あの時『俺はミソラと約束をしたんだ。必ず現実世界へ還してやるって…。（リュウギの真似）』って言ってたじゃん？」

リュウギ「それ、俺の真似しているのか…？」

リュウギは苦笑いしながらツッコム。

ネレイスモン「どうなんだよリュウギ？」

リュウギ「アイツとは幼馴染みだ！ただそれだけの事だ！」

カズマ「いけませんねぇリュウ兄？他の奴は誤魔化せても、幼馴染みであるこのオレにはお見通しなんだぞぉ？」

カズマは嫌らしい目付きになり、肘でリュウギの肩にトントンと突

つく。

リュウギ「あ、あのなぁ…。」

すると、リュウギは段々と顔を赤らめる。

ネレイスモン「あ！赤くなってる？」

カズマ「やっぱり彼女だな？彼女だって言ってみんさい！ぜってぇ彼女だ！」

リュウギは顔を真っ赤にしながら怒鳴り声を上げる。

リュウギ「お前らなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

そして…。

朝食を取るリュウギ達。すると、ナルガモンはリュウギの様子がおかしいと気付く。

ナルガモン「どうしたんだよリュウギ？まだ傷が痛むのか？」

リュウギ「別に…。（怒）」

ナルガモン「？」

リュウギ「ところでカズマ、いつからエクセリオンになったんだ？」

カズマは腕を組んで考える。

カズマ「親父が剣道を教えてくれた時からかなぁ？ある日、突然空に吸い込まれて、気が付いたら、デジタルワールドにいたんだ。」

ネレイスモン「それから、オレはカズマと出会ったんだ！」

リュウギ「……。」

（俺とミソラが初めてデジタルワールドに来た時と同じだ…。）

すると、カズマはあっと思い出した。

カズマ「そういえば、初めてデジタルワールドに来る前、変な声が聞こえたようなぁ…。」

リュウギ「変な声…？何て言ってたんだ…？」

カズマ「確か……

『5人の選ばれし救世主を集いし闇を討て。さらば世界は救われん…。』

って言ってたぞ。」

リュウギ「俺はこうだった。

『選ばれし者達は勇者達の意志を受け継ぎ、新たなる勇者となる。』

ってな…。」

ナルガモン「そんな事言ってたのか？」

リュウギ「言ってる事がさっぱりだったから、言わなかったんだ…。」

カズマ「同じくオレも…。意味不明だったぜ。」

リュウギ「5人の救世主って事は、俺とカズマとミソラとカイ、そしてエグザ…。」

カズマ「リュウ兄、またミソラって言ったぞ…。」

（プッ…）

ネレイスモン「やっぱり好きなんだな…。」

（プッ…）

リュウギ「何処に食いついてんだよお前らはッ？」

リュウギはありったけの声でツッコム。リュウギは咳払いをして話を戻す。

リュウギ「もしかしたら、他の3人も謎の声を聞いてるかもしれない…。何か謎が隠されてるかもしれない…。」

カズマ「だったら、すぐにエクセリオンを探そうぜ！どんな奴か会ってみたいし！」

ネレイスモン「探すのもいいけど、どうやって探せばいいんだ？島1つずつ探すなんて面倒だぜ？」

リュウギ「確かにな…。」

ナルガモン「だったら片っ端から探すしかねぇだろ？」

ネレイスモン「おい、オレの話聞いてたか…？」

リュウギ「……。」

すると、リュウギは夢で謎の声の主の言葉を思い出す。

？？？『強くなりたくば、デバイス島に来い…。私はそこで待っている…。』

リュウギ「デバイス島…。」

一同「？」

リュウギ「デバイス島に行けば、何か分かるかもしれない…。」

カズマ「デバイス島って確か、親父達が冒険した島のような…。」

ナルガモン「ホントか？だったら行ってみようぜ！」

リュウギ「よし、そうと決まれば早速デバイス島に行こう？」

ネレイスモン「盛り上がってる所ワリィんだけど、１ついいか…？」

ネレイスモンは顔を真っ青にしながらカズマに声を掛ける。

カズマ「どうしたんだよネレイスモン？肉まんが欲しいのか…？」

ネレイスモン「周りを見ろ…。」

リュウギ達は辺りを見回すと、デジモンの大群に囲まれていた。

？？？「グォォォォォォォォォォォ？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「サイクロモン、成熟期、竜人型、ウィルス種、必殺技はハイパーヒート。」

リュウギ「囲まれたか？」

ナルガモン「リュウギ、ここはオレに…」

すると、カズマが割り込んでくる。

カズマ「こりゃ、丁度いいウォーミングアップになりそうだぜ…。」

カズマはやる気になり、肩にぶら下げてある袋から双龍牙を取り出す。

ナルガモン「おいテメェ！なに割り込んでんだよ？」

カズマ「こいつらはオレに任せて、お前らはイビルスの処理を頼んだぜ！行くぞネレイスモン！」

ネレイスモン「あいよ。」

カズマはそう言って双龍牙を鞘から抜き出して先制攻撃をする。

ナルガモン「イビルス処理って、テメェなぁ？」

カズマは全く聞く耳を持たず、次々とサイクロモン達を切って行く。

サイクロモン達「グォォォォォォォォォォォ？」

すると、背後から他のサイクロモンが襲い掛かる。

ネレイスモン「『アクアショット？』」

ネレイスモンは感付き、口から強力な水圧を放ってサイクロモンにぶつけた。

サイクロモン「グォォォォォォォォォォォ？」

カズマ「ナイス、ネレイスモン♪」

ネレイスモン「たまには後ろ気にしろよな？いつもオレに任せてんだから。」

カズマ「それがオレのＳＴＹＬＥなんだから、そう硬い事言うなって☆」

カズマは双龍牙をジャグリングのように振り回して次々と倒して行く。

すると、サイクロモン達の体内からイビルス達が現れる。

リュウギ「出て来たぞ、ナルガモン！」

リュウギは右手を広げて、ガンブレード、アルカナムを取り出す。

ナルガモン「クソッ、今回は特別だぞ！『ヒドゥンブレイド？』」

ナルガモンは両肘のブレイドでイビルス達を切り刻んで行く。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギとナルガモンはイビルス達を次々と倒して行く。

リュウギ・ナルガモン「ラストォォォォォォォォォ？」

リュウギとナルガモンは最後のイビルスを倒した。

ナルガモン「Ｊａｃｋ　ｐｏｔ？」

リュウギ「よし！」

戦闘を終えると、カズマは双龍牙を鞘に納めた。

ネレイスモン「上出来×２♪」

カズマ「イビルス処理班、御務めご苦労であります！」

カズマは冗談気に笑いながら敬礼する。

ナルガモン「テメェなぁ！爆弾処理班じゃねぇんだよオレ達は？」

カズマ「まぁまぁ、終わり良ければすべて良しってよくいうじゃな

いですかぃ…♪ジャックモン。」

ナルガモン「誰がジャックモンじゃッ?オレはナルガモンだ?」

ナルガモンはありったけの声でツッコム。

リュウギ「とにかく、サイクロモン達ををリカバリーするぞ。」

カズマ「りょうかーい♪」

そして…。

このサファール島にデジエクスフィールドが張られ、サファール島は平和となった。

サイクロモン「いやぁ、お陰で助かったよ。」

カズマ「なんの×2♪こんなの朝飯前だからさぁ♪」

ナルガモン「何が朝飯前だよ?このチャランポランが…。」

カズマ「チャランポランで結構。オレ、いざという時にきらめくから。」

ナルガモン「くぁぁぁぁぁぁ?ムカつくぅぅぅぅぅ?」

ナルガモンの怒りが爆発し、カズマに襲い掛かる。リュウギは慌ててナルガモンを取り押さえる。

リュウギ「落ち着けよナルガモン?」

ナルガモン「うがぁぁぁぁぁぁ？一発殴らせろぉぉぉぉぉ？」

カズマ「ところでサイクロモン、デバイス島に行きたいんだけど分かるか？」

サイクロモン「デバイス島？デバイス島なら、ここから北にあるぞ。」

カズマ「北か。サンキュー♪」

リュウギ「よし、すぐに北に行こう！」

ナルガモン「おい待ちやがれ？」

一同「？」

カズマ「どうしたんだよジャックモン？腹減ったのか？」

ナルガモン「だーかーら？オレはナルガモンだっつうのッ？つうかオレは腹減ってねぇ？」

リュウギ「で、どうしたんだよ？」

ナルガモン「人を雑用扱いさせたり、名前を間違えやがって、ますます気に食わねぇ？」

カズマ「しょうがねぇだろ？それがオレのＳＴＹＬＥなんだから？」

ナルガモン「ＳＴＹＬＥだろうが何だろうが知った凝っちゃねぇ？

おいチャランポラン、お前はまだやるべき事をやってない？」

カズマ・ネレイスモン「はぁ？」

カズマとネレイスモンは目を丸くする。

リュウギ（また始まったよ…。）

リュウギは呆れてため息をつく。

カズマ「なんだよ急に？んで、やるべき事ってなに？」

ナルガモン「テメェはまだ、ブレイブエクセリオン入部テストを受けてない？そんなテメェに、ブレイブエクセリオンの先頭を立つ資格なんてねぇんだよ！」

カズマ「マジでか？」

ネレイスモン「そんなのがあるのか？」

リュウギ「いや、ないない…。」

リュウギは小さくツッコム。

カズマ「じゃあ、どうすればブレイブエクセリオンの一員になれるんだ？」

ナルガモン「それは？」

カズマ「それは？」

ナルガモン「それは……」

ネレイスモン「それは…？」

ナルガモン「まず、ブレイブエクセリオンのリーダーであるリュウギを倒せ。」

リュウギ「はぁッ？」

（無責任にも程があるぞ？）

カズマ「な～るほど～、つまりリュウ兄を倒せばリーダーの座（＝主役）はオレが座るってなわけだな？」

リュウギ「なんだよその（＝主役）って？」

ナルガモン「リュウギを嘗めるなよ？リュウギはいざという時にヤベェ力が出るからな！」

ナルガモンは誇らし気にリュウギを自慢する。

リュウギ「おい、なに勝ち誇って自慢してんだよ…。お前はどうするんだよ？」

ナルガモン「実況☆」

リュウギ「お前なぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カズマ「まぁいいじゃないですかぃ…。あれから強くなったかどうか知りたいし…。それに…」

すると、カズマは双龍牙を鞘から抜き出す。

カズマ「まだ９９勝９９敗だからな…。」

リュウギ「どっちが先に１００勝になるか…。お前まだ覚えていやがったのか…。」

カズマ「せっかくだ。ここで決着つけようぜ、リュウ兄？」

ネレイスモンはカズマから離れてそこら辺にある木に身体を巻き付けた。

ネレイスモン「頑張れよカズマ～♪」

ナルガモン「どうするんだリュウギ？」

リュウギ「お前、こうなる事分かってわざと俺にけしかけたな…？」

ナルガモン「あれ？分かった？」

リュウギ「あ、あのなぁ…。」

リュウギは今にもキレそうな表情で眉をピクピクと動かす。

ナルガモン「んで、尻尾巻いて逃げるのか？」

リュウギ「逃げる？冗談じゃねぇ！相手に背を向けるなんて俺の流儀に反する？正々堂々、真っ向勝負だ？」

リュウギはそう言って、自らの拳を手の平に打つ。

カズマ「それでこそリュウ兄だぜ？」

リュウギは右手を広げ、ガンブレード、アルカナムを取り出して構える。

リュウギ「行くぜ、カズマ？」

リュウギとカズマの１００勝目をかけた激闘が始まるのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ５５　～帰還、デジタルワールド？新たなる冒険の始まり？～（後書き）

ナルガモン「次回は主役（？）をかけた闘いが始まる！果たしてどちらが勝つのか？」

リュウギ「おい、実況なんてしてないで戦えよ…。」

ナルガモン「次回も見逃すなよな？」

リュウギ「話し聞けよ…。」

Ｅｐ５６　～長年の決着？リュウギｖｓカズマ？～（前書き）

果たして１００勝目はどっちの手に？

Ｅｐ５６スタート？

ＥＰ５６　～長年の決着？リュウギｖｓカズマ？～

～サファール島～

何も変哲もない小さな孤島。そんな小さな孤島に２人のエクセリオンが激闘していた。

リュウギ・カズマ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギは力で押し返し、ガンブレード、アルカナムを振り下ろす。対するカズマは双龍牙を構えて反撃し、激しい打ち合いが始まる。お互いの刃と刃がぶつかりあい、激しく火花が散る。

ナルガモン「スゲェ…？」

ネレイスモン「５秒に１０回…いや、２０回打ち合ってるよ…。」

木に巻き付けて解説するネレイスモン。

ナルガモン「しっかし、よく見えるなぁお前？早すぎて何も見えねぇぞ？」

ネレイスモン「目には自信があるんでね♪それに、いつもカズマの戦いを見ていたから動きが大体見えるんだ。」

ナルガモン「ふーん…。」

リュウギとカズマの武器がぶつかり合った瞬間、２人の周りにとてつもない衝撃波が生じる。すると、リュウギとカズマはお互いに後

方へと下がる。

リュウギ・カズマ「ハァ…ハァ…。」

打ち合いが終わると、2人の額から汗が流れる。

リュウギ「やるな、カズマ。」

カズマ「リュウ兄、今回ばかりは手加減しませんぜ…。」

リュウギ「似合わん台詞だな…。」

カズマ「いっぺん言ってみたかったんだよねぇコレ…。行きますぜ！」

カズマは双龍牙を構えてリュウギに急接近する。

リュウギはアルカナムのトリガーを引いて銃撃する。

カズマ（銃剣か…。）

カズマは接近しつつ、双龍牙で弾丸を弾き返す。

リュウギ「早い？」

カズマ「飛ばすぜ！」

カズマは双龍牙を構えて乱れ突きをする。

リュウギは次々と交わして行く。しかし、双龍牙の刃がいくつも見

えて交わすだけでもやっとだ。

リュウギ（くっ、交わすだけで精一杯だ？）

カズマ「どうしたんですかぃリュウ兄？避けてばかりじゃ、勝てやせんよ！」

リュウギ「そうだよ…なッ？」

リュウギは声を発すると同時にアルカナムを振り上げるように振り、双龍牙を弾き返した。

リュウギ（よし！）

しかし、カズマは弾き返された双龍牙を掴み取り、柄でリュウギの腹に溝うちをした。

リュウギ「かはっ？」

カズマ「残念無念また来週？」

カズマは冗談混じりに言いながら双龍牙を振り下ろした。

リュウギ「くっ？」

リュウギは腹を押さえながら後方へと下がって態勢を立て直す。

カズマ「溝うちしたのに、よく交わせやしたね？」

リュウギ「それを喰らった時に昔の事を思い出してな…。俺が神戸

に引っ越しする前の事をな…。」

カズマ「そんな事あったなぁ…。」

それは、数年前まで遡る…。

～東京都　新宿区～

リュウギ「カズマ！」

幼いリュウギは榊原家へと上がり込む。榊原家はカズマの父、シロウが有名なため、立派な剣道場が建てられていた。

カズマ「来たかリュウ兄！」

リュウギ「おう！今日こそ決着を着けるぞ！」

～榊原家　道場～

リュウギ「９９勝９９敗。」

カズマ「そしてオレは９９勝９９敗。」

リュウギ「あと一勝すれば、１００勝だ！だから今日は勝たせて貰うぜ！」

リュウギはそう言って竹刀を構える。

カズマ「その台詞、そっくりそのまま返してやるぜリュウ兄！」

リュウギ「それじゃ…」

カズマ「いざ、尋常に…」

リュウギ・カズマ「勝負？」

リュウギとカズマは同時に攻めに入る。

竹刀の音が道場に響き渡る。

カズマ「はぁぁぁ？」

カズマは突き攻撃をする。

リュウギ「くっ？」

リュウギは受け流し、竹刀を振り上げるように振ってカズマの竹刀を弾き返した。

リュウギ「よし！」

カズマ「残念！」

カズマは弾き返された竹刀を掴み取り、柄でリュウギの腹に溝うちをした。

リュウギ「かはっ？」

カズマ「貰った？」

リュウギ「くっ？」

リュウギは踏ん張って竹刀で攻撃を防いだ。

リュウギとカズマはお互いに後方へと下がって態勢を立て直す。

カズマ「やるなリュウ兄。」

リュウギ「負けてたまるか…。ゴホッ…。」

カズマ「行くぜ？」

リュウギ「これで決める？」

リュウギとカズマは竹刀を構えて接近するその時だった。

？？？「そこまでだ。」

黒い影が竹刀で2人の頭にパシィーンと叩く。

リュウギ・カズマ「いだっ？」

リュウギとカズマは頭を抱えて痛がる。

？？？「ったく、何処へ行ったかと思えば、こんな所で遊んでいやがったか…。」

リュウギは見上げると、驚いて叫ぶ。

リュウギ「父さん？」

そう、2人の勝負を止めたのはリュウギの父、リュウだった。

カズマ「邪魔するなよチャランポラン親父！今いい所だったのに？」

すると、リュウはカズマにゲンコツを喰らわした。

カズマ「いってぇぇぇぇ？」

リュウ「誰がチャランポラン親父だコラァ？」

リュウギ「父さん、今はカズマと真剣勝負してるんだ！なんで止めたんだよ！」

リュウ「居残り授業サボっといて何が真剣勝負だぁ？」

リュウギ「ギクリ…。」

すると、リュウギはピタッと止まる。リュウギは学校の居残り授業をすっぽかしてカズマの家に来たのだ。

リュウギ「な、なんで知ってるの…？」

リュウ「お前の担任の先生と偶然会ったんだ…。つうわけでさっさと帰るぞ。」

リュウはそう言ってリュウギの手を引っ張る。

リュウギ「まってよ父さ～ん？最後まで剣道やらせてよ～？」

リュウ「何が剣道だ?あんなもんチャンバラごっこにしか見えねぇんだよ。ったく、今時のガキんちょにチャンバラごっこは流行らねぇっつうの…。」

リュウギ「でも、この勝負に１００勝目が…」

リュウ「だったらそんなチャンバラごっこより、もっと違うトコで決着つけるんだな。」

カズマ「お、おいリュウギ?」

リュウギ「カズマ、今日の勝負はお預けだ!次こそは決着つけるからな!」

リュウギは手を引っ張られながらカズマに言う。

カズマ「絶対だぞ!待ってるからな!」

ーーーーーーーーーーーーーー

約束を交わした2人は、それから決着がつかないまま今に至るのであった。

カズマ「あの日から、リュウ兄の親父は事故で亡くなり、リュウ兄は神戸に引っ越しした。」

リュウギ「父さんが言ってた違うトコって、これが言いたかったのかな…。」

（ニヤ…）

カズマ「チゲェねぇ…。あの時は正直、邪魔臭いチャランポランな親父だったけど、今は感謝してるぜ…。」
（ニヤ…）

リュウギ「カズマ…。」

カズマ「リュウ兄…。」

すると、リュウギとカズマはお互いに武器を構える。

リュウギ「１００勝目は…」

カズマ「オレが貰うぜ？」

リュウギとカズマはお互いに武器を振り上げるように振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放った。

２つの衝撃波がぶつかり合うと、とてつもない大爆発が生じる。

ナルガモン「スゲェ迫力だな？」

ネレイスモン「力はほぼ互角…。どっちが勝つんだ…？」

爆煙が去ると、リュウギとカズマはお互いの武器を地面に突き刺していた。

ナルガモン「あの構えは？」

リュウギ・カズマ「デジサモン、発動？」

すると、リュウギとカズマの
足元にはデジ文字が、描かれた魔法陣が現れる。

リュウギ「頼む、ナイトモン？」

カズマ「出番だぜ、ヴォルフモン？」

すると、魔法陣からナイトモンとヴォルフモンが現れる。

リュウギはＤ－アクセルでヴォルフモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ヴォルフモン、ハイブリッド体、戦士型、ヴァリアブル、必殺技はリヒト・ズィーガー。」

リュウギ「油断するなよ、ナイトモン。」

ナイトモン「承知した！」

カズマ「ちょいと協力して貰いますぜ、ヴォルフモン。」

ヴォルフモン「さっさと終わらせるぞ。」

ナイトモン「先手必勝？『ベルセルクソード？』」

ナイトモンは大剣、ベルセルクソードで先制攻撃をする。

ヴォルフモン「無駄だ？」

ヴォルフモンは光の剣、リヒト・シュベーアトを取り出してベルセルクソードを受け止める。

リュウギ「まだだ？」

ナイトモン「リュウギ殿？」

リュウギ「あぁ？」

リュウギはナイトモンの背中を踏み台にして高く飛び上がる。

リュウギ「喰らえ？」

宙に舞うリュウギはアルカナムのトリガーを引いてヴォルフモンを狙い撃つ。

ヴォルフモン「フッ…。」

すると、ヴォルフモンはリヒト・シュベーアトを繋げて身体を回転させ、光の竜巻を発生させて弾丸を弾き返す。

ナイトモン「なに？」

リュウギ「うわっ？」

すると、リュウギとナイトモンは竜巻に飛ばされてしまい、素早く受け身を取る。

カズマ「今度はこっちの番だ。ヴォルフモン？」

ヴォルフモン「遅れるなよ。」

ヴォルフモンはリヒト・シュベーアトを二刀流にして、接近する。

カズマ「はぁぁぁぁぁ？」

カズマは横一閃に双龍牙を振り回し、剣風によって生み出された無数の衝撃波を放つ。

ナイトモン「リュウギ殿、我輩の後ろへ！」

ナイトモンは巨大な盾を取り出して構え、リュウギはナイトモンの後ろへと隠れる。

ヴォルフモン「貰った。『リヒト・ズィーガー？』」

ヴォルフモンはリヒト・シュベーアトでナイトモンの盾を粉々に砕いた。

ナイトモン「？」

ナイトモンは素早くベルセルクソードで斬撃を受け止めて、力で押し返す。

ヴォルフモンは後方へと下がって態勢を立て直す。

カズマ「これで、盾は無くなったな。」

ナイトモンは拳をギュッと握って悔しがる。

ナイトモン「くっ、究極体の攻撃でも受け止める最強の盾を破るとは…。」

リュウギ「でもそれって、そうかもしれないんだろ…？」

ナイトモン「……そうだ。」

リュウギは軽くズッコケる。

カズマ「どうするんだリュウ兄？もうここからは攻撃を防ぐ事ができねぇぞ？」

リュウギ「くっ…。」

（確かにカズマの言う通りだ…。あのヴォルフモンは相当なパワーを持っている。どうすれば…？」

ナイトモン「リュウギ殿、我輩に作戦があります…。」

リュウギ「え？」

すると、ナイトモンはリュウギに作戦を伝える。

カズマ「何をコソコソしてるんだリュウ兄？降参の台詞でも考えてるんですかぃ？」

リュウギ「俺は絶対に降参なんてしない？絶対に勝つ？」」

ヴォルフモン「減らず口もそれまでだ。カズマ、ここは俺1人で充分だ。」

カズマ「はいはい、ご自由に。」

ヴォルフモンはリヒト・シュベーアトを構えて接近する。

ナイトモン「では、参る？」

ナイトモンはベルセルクソードを構えてヴォルフモンのリヒト・シュベーアトと激しく打ち合いが始まる。

ナイトモン「我輩の騎士道、見せてやる？」

ヴォルフモン「そんなもの、俺がねじ伏せてやる！」

ヴォルフモンはリヒト・シュベーアトでベルセルクソードを上空へと弾き返し、やがて地面に突き刺さる。

ヴォルフモン「貴様の騎士道、敗れたり…。」

ヴォルフモンはリヒト・シュベーアトを振り下ろす。

ナイトモン「我輩の騎士道は、まだ折れていない…。我輩の騎士道は…」

？？？「リターン？」

すると、ナイトモンは静かに消え去り、ヴォルフモンの斬撃が外れた。

ヴォルフモン「なに？」

すると、背後からリュウギが、アルカナムを構えて急接近する。

リュウギ「仲間を信じる事だッ？」

リュウギは声を発すると同時にアルカナムを横一閃に切った。

ヴォルフモンはとっさの判断でリヒト・シュベーアトを構えてアルカナムの斬撃を防いだ。

その時、リヒト・シュベーアトが折れてしまい、やがて地面に突き刺さる。

ネレイスモン「ヴォルフモンの剣をへし折りやがった…？」

ナルガモン「さすがリュウギだぜ？」

ヴォルフモン「なるほど…。リターン機能を利用して反撃のチャンスを待っていたのだな…。」

リュウギ「そうだ…。」

ヴォルフモン「完敗だ…。なかなか面白かったぞ…。」

すると、デジサモンの効果が切れてしまい、ヴォルフモンは静かに消え去った。

カズマ「驚いたなぁ。まさかヴォルフモンを倒しちゃうなんて…。ほんじゃま、そろそろ決着つけようぜ。」

リュウギ「あぁ？」

リュウギとカズマはそれぞれの武器を構えて睨み合う。すると、ネ

レイスモンは呟く。

ネレイスモン「これで決まるな…。」

ナルガモン「え？」

ネレイスモン「リュウギとカズマの体力はもう限界まで来てる。恐らく次の攻撃で決まる…。」

すると、リュウギとカズマは同時に動き出し、接近する。

カズマ「喰らえ！」

リュウギ「これで決める！」

リュウギとカズマの武器がぶつかり合った瞬間、２人の周りにとてつもない衝撃波が生じる。

カズマ「はぁぁぁ

上空へと舞う剣はやがて地面に突き刺さる。地面に突き刺さったのは、双龍牙だった。

カズマ「そん…な…？」

リュウギはアルカナムを地面に突き刺してニヤッと笑う。

リュウギ「１００勝目は…俺が貰った…。」

（ニヤッ）

カズマは尻餅着き、小さくため息をつきながら頭をポリポリとかく。

カズマ「こりゃ、一本取られちゃったぜ…。」

ナルガモン「リュウギが勝ったぜ？」

ナルガモンは嬉しくなり、リュウギに抱き付いた。

ナルガモン「やったなリュウギ！」

リュウギ「あぁ…。」

ネレイスモンはカズマの元へと駆け寄り、カズマの腕に巻き付く。

ネレイスモン「惜しくもやられたな、カズマ。」

カズマ「やっぱ、リュウ兄には敵わないや…。」

すると、リュウギは手を差し伸べた。

リュウギ「強くなったなカズマ。楽しかったぜ…。」

すると、カズマは静かに笑い、リュウギの手をガッチリと掴んで起き上がる。

カズマ「その台詞、そっくりそのまま返しやすよ…。」

こうして１００勝目はリュウギが勝ち取り、長年の決着に幕は下ろされたのであった。

そして……。

リュウギ・カズマ「疲れた～～～～～～～～…。」

リュウギとカズマはバッタリと倒れてダウンする。

ネレイスモン「お疲れさん、２人とも。」

ナルガモン「スゲェ面白かったぜ♪」

リュウギ「決着ついたのはいいものの…」

カズマ「なんでこうなったんだっけ…？」

戦いに夢中の余りに混乱してきっかけが分からず、２人の頭上には「？」がいくつも浮かんでいた。

ナルガモン「まぁいいじゃねぇかよ♪こうして長年の決着がついたんだからさ♪ナッハハハ♪」←きっかけを作ったヤツ

ネレイスモン「とにかく、一刻も早くデバイス島に行こう！」

リュウギ「そうだな…。北って言ってたな…。」

リュウギ達は森を抜けて海岸に出る。

リュウギ「ここからだとどれくらいだ…？」

カズマ「さぁな。時間掛かる事は確かだぜ…。」

ナルガモン「博士の船があれば一発なんだけどなぁ…。」

ネレイスモン「だったら、ここはオレの出番だな♪」

ネレイスモンはそう言って海に飛び込む。

カズマ「ネレイスモン、進化だ？」

カズマはＤ－アクセルをネレイスモンに翳した。すると、ネレイスモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ネレイスモン「ネレイスモン、進化？」

『シードラモン？』

シードラモン「さ、乗って！」

リュウギ達はシードラモンの背中に乗る。

ナルガモン「お、おい、沈まねぇだろうな?沈没しねぇだろうなオイ?」

シードラモン「するわけねぇだろ…。」

シードラモンは小さくツッコム。

リュウギ（そういえば、ナルガモンは泳げないんだったな…。）

カズマ「んじゃま、デバイス島に向かって出発♪」

リュウギ達を乗せたシードラモンはデバイス島に向かって海を渡るのであった。

――To Be Continued….

Ｅｐ５６　～長年の決着？リュウギｖｓカズマ？～（後書き）

決着がつき、デバイス島へと目指すリュウギとカズマ。

一方、ミソラ達はあれからどうなったのか…？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ５７　～次なる新天地？ミソラ、新たなる決意？～（前書き）

リュウギ達はデバイス島へと向かう一方、ミソラ達は…？

Ｅｐ５７スタート？

EP57　～次なる新天地？ミソラ、新たなる決意？～

リュウギ『心配すんなよミソラ。必ずお前を現実世界に還してやる。約束だ…。』

ミソラ「リュウ…ギ…？」

ミソラは目を開けると、最初に目に映ったのは美しい青空だった。

ミソラ「ここは……？」

？？？「ここはデジタルワールドのミナカ島だ。」

すると、レナモンが答える。

ミソラ「レナモン…。」

？？？「目が覚めたようだな…。」

ミソラ「リュウギ？」

ミソラは振り向くと、リュウギではなくカイだったのだ。

カイ「御縞　リュウギじゃなくて悪かったな…。」

ミソラ「あなたはカイ？どうしてここに？」

カイ「どうやらあの光りに包まれてから、俺達はここに放り出されたみたいだ…。」

ミソラ「光り…？」

レナモン「忘れたのか…？」

ガオモン「オレ達はムゲンマウンテンで、アナログマンの罠にはめられてイビルガ達を倒してた時の事だ。」

すると、ミソラはハッとする。

ミソラ「そうだ！あの時…」

それは、当時まで遡る…。

～ムゲンマウンテン～

マッハガオガモン「『ウイニングナックル？』」

タオモン「『狐封札？』」

バンチョーレオモン「『フラッシュバンチョーパンチ？』」

マッハガオガモン達はそれぞれの必殺技でイビルガ達を倒して行く。

イビルガ「死ねぇ？」

すると、一体のイビルガがミソラに襲い掛かる。

ミソラ「？」

カイ「はぁぁぁぁ？」

カイは大剣、ギルガメッシュでイビルガを真っ二つに切った。

イビルガ「ギャャャャャャャャャャ？」

カイ「大丈夫か…？」

ミソラ「あ、ありがとう…。」

キャンドモン「すっげぇヤベェよ？ぜんぜん数が減らねぇじゃんかYO？」

キャンドモンはいつも以上にパニクる。

コウジ「くっ、キリがない…。」

バンチョーレオモン「どうするんだコウジ？」

タオモン「このままでは、体力が減る一方だ…。」

マッハガオガモン「カイ、指示を？」

カイ「くっ…。」

その時、ミソラ達の足元から聖なる光りが生じる。

一同「？」

キャンドモン「なんじゃゃゃゃゃゃこりゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？」

ミソラ「まさか、アナログマンの罠？」

すると、イビルガ達は突然苦しみだす。

バンチョーレオモン「そうじゃなさそうだな…。」

コウジ「この光りは…？」

すると、光りが満ち溢れてミソラ達は光りの閃光に包まれたのであった。

ーーーーーーーーーーーーーーー

ミソラ「そうだったわ…。それからどうなったの…？」

レナモン「そう言えば、ミソラはあの時気絶していたな…。」

ガオモン「オレが説明します。それは、あの光りにつつまれた後の事だ…。」

ーーーーーーーーーーーーーーー

～？？？～

カイ「ここは一体…？」

カイは辺りを見回すと、真っ暗で何も見えなかった。

レナモン「ミソラ、しっかりしろ？」

すると、レナモンはミソラを呼ぶ。

カイ「気を失っているようだな…。しばらく寝かせてやれ…。」

ガオモン「しかしカイ、ここは一体何処なのでしょうか…？」

カイ「暗いのに、お前達が見える…。まさかアナログマンの…」

？？？「案ずるな…。これはアナログマンの罠ではない…。」

一同「？」

カイ「何処だ…？」

カイは右手を広げて、巨大化手裏剣、ギルガメッシュが現れる。

？？？「心配ない。私はそなた達の敵ではない…。」

カイ「だったら教えて貰おうか…。お前は一体何者なんだ…？」

？？？「私はそなた達、救世主　エクセリオンを選んだ者だ…。」

カイ「まぁいい。それで、俺達に何の用だ…？」

？？？「そなた達はデジタルワールドの救世主。デジタルワールドを闇に染めようとする黒幕を倒して欲しいのだ…。」

ガオモン「黒幕？黒幕はアナログマンではないのか…？」

???「アナログマンは彼が結成させた組織、ダークスに裏切られて消滅した。」

カイ「なんだと?」

レナモン「では、リュウギとナルガモンは?」

???「彼らはもうデジタルワールドにはいない…。だが心配ない。リュウギ達は必ずデジタルワールドに帰ってくる。」

レナモン「私達はどうすれば…?」

???「そなた達は今から、デジタルワールドを救う10個の鍵を集めて欲しい…。」

ガオモン「10個の鍵…?」

???「エンシェントストーンだ。」

カイ「エンシェントストーン…?」

???「10個のエンシェントストーンを手に入れるには、それぞれの島に眠る伝説のデジモン、『古代十闘士』から試練を受けて勝利し、エンシェントストーンを手にするのだ。」

レナモン「古代十闘士だって?」

カイ「なんだ、その古代十闘士というのは…?」

ガオモン「遥か昔、七大魔王の1人、傲慢　のルーチェモンがこの

地に現れ、デジタルワールドを支配しようと企んでいた。しかし、そこへ古代初めての究極体デジモン、十闘士が現れてルーチェモンの野望を打ち砕いた。そのデジモン達を古代十闘士と呼ばれた。」

???「そうだ…。今からそなた達に古代十闘士の試練を受けて貰うのだ。」

レナモン「私達が、古代十闘士を…?」

すると、カイはフンと鼻を鳴らす。

カイ「最強のテイマーになるには丁度良い。その試練、引き受けてやる…。」

???「よろしい…。それではエクセリオン達よ、健闘を祈るぞ…。」

すると、真っ暗に染まる世界が突然と光りだし、カイ達は光りの閃光に包まれた。

一同「?」

ーーーーーーーーーーーーーー

レナモン「……と言うわけだ。」

ミソラ「そんな事が…。そうだ、コウジさんは?」

レナモン「どうやら、あの光りのせいで離れ離れになったみたいだ…。」

ミソラ「そんな…。」

キャンドモン「ちょっと×2？ボクチンは？ボクチンの心配はないの？」

レナモン「居たのか…？」

ミソラ「なんでアンタがいるのよ…？」

キャンドモン「酷いですよ2人ともぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

すると、カイはフンと鼻を鳴らして歩き出す。

ミソラ「ちょっと、何処行くのよ？」

カイ「俺は古代十闘士を倒しに行く。行くぞ、ガオモン。」

ガオモン「はい。」

ミソラ「そんな、先にリュウギを探さなきゃ？」

カイ「だったらお前だけ探しに行け…。俺には関係のない事だ…。」

カイはそう言って森の中へと入る。

ミソラ「な、何よアイツ、嫌な感じ！」

ミソラは怒って膨れっ面になる。

レナモン「私達だけでもリュウギ達を探しに行こう。」

ミソラ「そうね！あんなヤツ放っといて行きましょ！」

ミソラは膨れっ面になりながらリュウギを探しに行く。

キャンドモン「ちょっと待ってくださいよ～？」

～ミナカ島～

森の中へと入って１０分が経つ。

ミソラ「何処行ったのかしらリュウギ…？」

レナモン「Ｄ－アクセルで連絡してみたか…？」

ミソラ「ダメだったわ…。」

ミソラは心配になってうつむく。

レナモン「心配ない。私がミソラを守る。」

キャンドモン「そうですよ！何かあったら、ボクチンがお護り致します？だからボクチンを抱き締めてぇぇぇぇぇぇ？」

すると、キャンドモンは猛スピードでミソラに接近する。

ミソラ「フンッ？」

ミソラはありったけの力でキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん？」

ミソラ「意味不明だし、誰も期待してないわよ…。」

キャンドモン「そ、そんな～…（泣）」

レナモン「？」

すると、レナモンは何か異変を感じる。

ミソラ「どうしたのレナモン…？」

レナモン「危ない？」

レナモンはミソラを押し退けると、紫色の物体が地面に落ちる。間一髪だった。

ミソラ「ありがとう、レナモン。」

その正体は、巨大なクモの姿をしたデジモンだった。

キャンドモン「出たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ドクグモン、成熟期、昆虫型、ウィルス種、必殺技はスティンガーボレーション。」

ミソラ「ディスティングハーツ？」

ミソラはドクグモンの体内を調べると、イビルスが潜んでいた。

ミソラ「レナモン、イビルスだわ！」

レナモン「分かった。ミソラ、下がってて！」

ドクグモン「『スティンガーボレーション？』」

ドクグモンは口から強力な毒の液を吐き出す。

レナモン「くっ！」

レナモンは素早く交わし、木の葉の手裏剣を放つ。

レナモン「『狐葉楔？』」

しかし素早く交わされ、クモの巣へと移動する。

ミソラ「な、なんなの？」

なんと、ミソラ達の周りにはたくさんのクモの巣が張られていた。

キャンドモン「ここってアイツのすみかだったのぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

すると、ドクグモンの大群が姿を現す。

レナモン「囲まれたか？」

ミソラ「レナモン、完全体に進…きゃ？」

その時、一体のドクグモンがクモの糸を吐いてミソラのＤ－アクセルを取り上げた。

ミソラ「Ｄ－アクセルが？」

レナモン「うぁぁぁぁぁぁぁ？」

その時、ドクグモンの大群はクモの糸を吐いてレナモンの動きを封じた。

ミソラ「レナモン？」

キャンドモン「こうなったらボクチンが！『ボンファ……』」

すると、一体のドクグモンがクモの糸を吐いてキャンドモンの口を封じた。

キャンドモン「フゴッ、フゴッ？」

ミソラ「アンタ、ホンットに使えないわね…。」

キャンドモン「フゴーーーーーーん？（うそーーーーーーん？）」

ドクグモン「キャャャャャャャャャャ？」

ドクグモンはミソラに襲い掛かる。

ミソラ「こうなったら…。」

ミソラは精神に集中させて低く構える。

ミソラ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラはありったけの力でドクグモンを殴り飛ばした。

ドクグモン「キャャャャャャャャャャ？」

キャンドモン「フゴッ？（スゴッ？）」

すると、もう一体のドクグモンがミソラに突進した。

ミソラ「きゃっ？」

ミソラはまともに喰らい、木に叩きつかれる。

レナモン「ミソラ？」

すると、ドクグモンの大群の矛先はミソラへと向ける。

レナモン「ミソラ、逃げるんだ？」

キャンドモン「フゴゴフゴゴゴゴゴゴゴゴーーーー？（早く逃げてくださーーーい？）」

ミソラ（目が…霞んで…。）

すると、ドクグモンの大群は容赦なくミソラに襲い掛かる。

レナモン「ミソラ？」

その時、ドクグモンの大群の前に何かが突き刺さる。

ドクグモン達「キシャ？」

ミソラ「誰……？」

？？？「全く、世話の焼けるエクセリオンだ…。」

ミソラの前にカイとガオモンが現れる。

レナモン「カイ？それにガオモン？」

ガオモン「騒がしいと思って来てみれば、やはり予想通りでしたね。」

カイ「こんな雑魚ども、さっさと方を付けるぞ。」

カイは地面に突き刺さる巨大手裏剣、ギルガメッシュを引き抜く。

ガオモン「全ては我が主のために…。」

すると、ドクグモンの大群の矛先はカイとガオモンに向けて一斉に襲い掛かる。

ガオモン「『ガオラッシュ？』」

ガオモンは素早く動き、高速連打パンチを放つ。

カイ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

そしてカイはギルガメッシュを回転させながら投げ付けた。

するとギルガメッシュはドクグモン達を切り刻むと同時にクモの糸を切った。

レナモン「礼を言う…。」

カイ「手を貸せ！β？」

カイは叫ぶと、ギルガメッシュは巨大手裏剣から2つの刃へと変形した。

レナモン「あぁ？」

ガオモン「『ローリングアッパー？』」

レナモン「『狐葉楔？』」

カイ「はぁぁぁぁぁぁぁ？」

カイ達は次々とドクグモン達を倒して行く。

ドクグモン達「キシャャャャャャャャャャャャ？」

ドクグモン達は全滅し、体内からイビルスが現れる。

カイ「逃がさん？Σ？」

カイは2つの刃を組み合わせて大剣へと変形した。

カイ「終わりだ？」

カイはギルガメッシュを横一閃に振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放って全てのイビルス達を切った。

イビルス達「ギィィィィィィィィ？」

イビルス達は跡形も無く消滅した。

ガオモン「やりましたね。」

カイ「フンッ、他愛もない…。」

カイはフンと鼻を鳴らし、ミソラの方へと近寄る。

カイ「また御縞　リュウギが助けに来るとでも思っていたのか…？」

すると、ミソラは頬を赤らめる。

ミソラ「そ、そんなんじゃないわよ…。そういうアンタこそ、なんでここに居るのよ…？」

すると、カイは手を差し伸べる。

カイ「勘違いするな。俺はただ偶然通りかかっただけだ。立てるか？」

ミソラ「あ、ありがとう…。」

ミソラはカイの手を掴んで立ち上がる。

カイ（この手…。なんだか懐かしい…。）

カイは懐かしく感じたのか思わずボンヤリする。

ミソラ「どうしたのよ…？」

カイ「いや、何でもない…。」

カイは慌ててミソラの手を離す。

ミソラ「？」

それから、イビルスに支配されたドクグモン達をリカバリーし、ミナカ島全体にデジエクスフィールドが張られ、ミナカ島は平和となった。

カイ「ガオモン、次の島に行くぞ。」

ガオモン「はい。」

カイはギルガメッシュを地面に突き刺して叫ぶ。

カイ「デジサモン、発動？」

すると、地面からデジ文字が描かれた魔法陣が表れる。

カイ「来い、サンダーバーモン？」

すると、魔法陣からサンダーバーモンが実体化される。

サンダーバーモン「呼んだか、カイ？」

カイ「次の島に行く。頼むぞ。」

カイはそう言ってサンダーバーモンの背中に飛び乗る。

ミソラ「待ってよ、カイ！」

カイ「？」

すると、ミソラがカイを呼び止める。

ミソラ「私も連れて行って！」

ミソラの意外な言葉に、レナモンとキャンドモンは驚愕する。

キャンドモン「フゴゴゴン？（ミソラさん？）」↑まだ解放されていなかった

レナモン「だがミソラ、リュウギ達はどうするのだ…？」

ミソラ「常々思っていたの…。私、みんなの足引っ張ってばっかりだって…。今の私じゃ、リュウギに会ったとしてもまたみんなの足を引っ張ってしまう…。」

レナモン「ミソラ…。」

ミソラ「私、強くなりたいの…。リュウギやレナモンのように、みんなを守りたい！だから私も連れて行って！」

カイ「……。」

ガオモン「どうします、カイ？」

すると、カイはフンと鼻を鳴らす。

カイ「好きにしろ…。」

ミソラ「ありがとう、カイ。」

ミソラは嬉しくなり頬笑むと、カイは頬を赤らめる。

カイ「は、早く乗れ。置いて行くぞ。」

ミソラ「さ、行きましょ！」

レナモン「あぁ。」

レナモンはミソラを抱っこしてサンダーバーモンの背中に飛び乗る。

カイ「だがこれだけは言っておく。ここから先は厳しい戦いになる…。その覚悟はできているか…？」

ミソラ「あら？意外と優しいのね？そんなに心配…？」

すると、カイは更に頬を赤らめる。

カイ「お、俺は別に…」

ミソラ「心配ないわ！覚悟ならもうできてるわ！」

ミソラは既に覚悟できている眼をしていた。それを目にしたカイは小さく笑う。

カイ（フッ、度胸のある女だ…。）

「サンダーバーモン、頼む。」

キャンドモン「フゴフゴゴーーーーー？（待ってくださーーーーい？）」

キャンドモンは慌ててサンダーバーモンのせなかに乗る。

サンダーバーモン「しっかり掴まれよ…。」

サンダーバーモンは翼を羽ばたかせて上空へと飛び立ち、次の島へと向かった。

ミソラ（リュウギ…。しばらく会えないけど待っててね…。私、みんなを守る為に強くなるから！）

ミソラは決意し、カイと共に行動するのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ５７　～次なる新天地？ミソラ、新たなる決意？～（後書き）

次回はリュウギ達を現実世界へ放り出したエグザの物語？

果たしてエグザの行方は…？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ５８　～漆黒を纏いし英雄降臨～（前書き）

今回はＥｐ５１のそれからの話！

ヴァヌムスの正体が明らかになる？

Ｅｐ５８スタート？

EP58　～漆黒を纏いし英雄降臨～

リュウギ「待てよエグザ？」

それは、ムゲンマウンテンにて、リュウギとナルガモンがセラフィモンの技、『ソムニウムゲート』に放り出された後まで遡る……。

エグザ「言ったハズだ…。お前がいると足でまといだってな…。人の心配するヒマがあるなら、テメェの無力さに心配しな…。」

リュウギ「エグザ？」

エグザ「必ず這い上がって来い、リュウギ…。」

エグザは小さく笑うと、ソムニウムゲートは完全に閉ざされた。

エグザ「御苦労だったなセラフィモン。後は俺に任せろ…。」

セラフィモン「しかしエグザ？お前1人だけでは…」

エグザ「リターン…。」

すると、エグザはリターン機能を使ってセラフィモンを戻した。

ヴァヌムス「んで、お前はこれからどうするつもりだ…？」

エグザ「まいったな…。ホントは俺があの門に入る予定だったのによ…。こりゃ計算外ってヤツだ…。」

エグザは小さくため息をつき、頭をポリポリとかく。

ストラティクモン「どうやら、ここがお前の墓場のようだな…。」

アンクスモン「殺すの惜しいよ？４分の３まで半殺しにしようぜ♪」

アンクスモンは冗談気に笑う。

ヴァヌムス「それ、俺のセリフ。」

スクロモン「４分の３だなんて勿体無いわ。やるならもっと徹底的にやらなくちゃ…。」

エグザ「お前、ドSだろ…？」

ヴァヌムス「まぁいいや。目障りだからここで消えて貰うぜ、エグザさんよ…♪」

ヴァヌムスは背中からダークネス・ドラグーンを取り出す。

アナログマン「ダークス共よ、さっさとエグザを始末しろ？」

ダークス「はっ？」

５体のダークスは一斉にエグザを襲いに掛かる。

エグザ「くっ？」

エグザは素早く背中からセイクリッド・レインティアを取り出して二刀流にし、素早く交わす。

ヴルグモン「死ね？『ヘルウイングショット？』

ヴルグモンは背中に生えてる黒い翼から無数の羽を発射する。

エグザ「くっ？」

エグザは二刀流、セイクリッド・レインティアを構え、身体を回転させる。すると、ヴルグモンの攻撃を無力化にする。

アンクスモン「何処見てんだよ…？」

すると、背後からアンクスモンが右手を広げていた。

エグザ「？」

アンクスモン「ヒャッハァァァ？」

アンクスモンは強力な闇の波動を放ち、エグザを地面に叩き付けた。

エグザ「くっ？」

エグザは大勢を立て直すと、巨大な手がエグザに襲い掛かる。

ギーゴモン「エグザ…倒す！」

エグザ「？」

ギーゴモンは巨大な拳を下ろすとエグザは間一髪で交わした。

エグザ（このままだとマズイな…。）

スクロモン「逃げちゃ……」

その時、背後からスクロモンが不気味な笑みを浮かべながら攻撃態勢に入っていた。

エグザ「？」

スクロモン「ダメよッ？『カオスネイル？』」

スクロモンは右腕の巨大な毒爪で、エグザを引き裂く。

エグザ「ぐはっ？」

エグザは右腕に掠り傷を負ってしまう。

ストラティクモン「まだだ…。」

すると、ストラティクモンは闇の波動を放とうと左手を広げる。

エグザ「クソッ？」

エグザは懐からデジガンを取り出してストラティクモンを狙い撃つ。

ストラティクモン「くっ？」

エグザ（何か打開策を…）

？？？「逃げようとしても無駄だ…。なぜならお前はここで…」

エグザは振り向くと、ダークスの1人、スレイヤードラモンが大剣、フラガラッハを振りかぶっていた。

スレイヤードラモン「俺の手によって葬り去られるからだ…。」

エグザ「?」

スレイヤードラモンは容赦なくフラガラッハを振り下ろし、煙が舞い上がる。

ヴァヌムス「おいおい、容赦ないねぇスレイヤードラモン。」

煙が去ると、エグザはボロボロの姿で立っていた。

エグザ「ハァ…ハァ…。」

ヴァヌムス「スゲェなお前!あんな攻撃をモロ喰らっても立てるなんてさぁ?どんだけタフなんだ…?」

エグザ「そいつは…どうも…。何せ俺は…しぶとさが取り柄なもんでな…。」

エグザは負傷した右腕はもう動かず、左手だけでセイクリッド・レインティアを拾う。

ヴァヌムス「なんでそこまでして立てるんだ?我慢大会なら断トツトップだなこりゃ…♪」

エグザ「スレイヤードラモン、今から言う事をしかとその胸に刻ん

どけよ…。」

スレイヤードラモン「？」

エグザ「なぜそこまでして立てるか教えてやる…。それはなぁ、大切な者を救いてぇからだ…。例え、この命が朽ち果ててもな…。」

スレイヤードラモン「なん…だと…？」

ヴァヌムス「何を言うかと思ったら、またくだらない友情ごっこか…。俺、そういうの嫌いなんだよなぁ～。」

エグザ「嫌いなら耳栓でもしてな…。俺は、例えお前に命を狙われようとしても、全力でお前を助ける…。」

スレイヤードラモン「何でだよ…？何でそこまでして俺に手を差し伸べようとする？リュウにせめて物の罪滅ぼしのつもりか？」

エグザ「……違う。俺は…」

すると、ヴァヌムスは高らかに笑う。

スレイヤードラモン「何が可笑しい…？」

ヴァヌムス「エグザ、以前スレイヤードラモンにこう言ったよな…？

『俺はリュウを殺していない。そして、リュウはこのデジタルワールドの何処かで生きている？』

ってなぁ？」

スレイヤードラモン「だがヴァヌムス、あれは俺を惑わす偽りに過ぎない！」

ヴァヌムス「スレイヤードラモン、こいつの言う通りリュウは死んじゃいない…。始めから嘘なんかついてねぇんだよ…。」

スレイヤードラモン「なに？」

すると、ヴァヌムスは頭に巻いてある包帯をほどき始める。

エグザ「ま、まさか……？」

ヴァヌムス「今まで黙っていたんだけど、そのリュウは今……」

ヴァヌムスは包帯をほどき、包帯に隠された素顔を見せた。

ヴァヌムス「ここにいる…。」

＞ｉ２８１５３―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

エグザ「？」

ダークス「？」

なんと、ヴァヌムスの正体はリュウだったのだ。

スレイヤードラモン「そんな…、リュウ…本当にリュウなのか…？」

スレイヤードラモンは驚愕の余りにフラガラッハを手放す。

リュウ「心配かけてすまなかったな、スレイヤードラモン…。」

リュウは優しく微笑む。

エグザ「そん…な…？」

リュウ「お陰様で俺は地獄の底から蘇ってきたぜ…。さぁて、テメェにやられた借り、ここで返させて貰うぜ…。行くぜ、スレイヤードラモン！」

リュウはそう言って、背中に背負う大剣、ダークネス・ドラグーンを取り出した。

スレイヤードラモン「あぁ…。」

スレイヤードラモンはフラガラッハを拾い、戦う態勢に入る。

すると、エグザは鋭い眼でリュウに睨みつく。

＞ｉ２８１５４―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

リュウ「そう恐ぇ顔するなよ…。仕留め損ねた余りに怒り爆発ってかぁ…？」

スレイヤードラモン「リュウには指一本触れさせないぞ、エグザ？」

エグザ「うおおお

おおおおおおおお？」

エグザは片手でセイクリッド・レインティアを横一閃に振ると、剣風によって生み出された巨大な衝撃波を放つ。

スクロモン「まだあんな力が残っていたのか？」

リュウ「関係ねぇさ。見せてやろうぜ…」

スレイヤードラモン「俺達の絆を？」

リュウとスレイヤードラモンは同時に剣を振り下ろすと、剣風によって生み出された闇の衝撃波を放った。

２つの衝撃波がぶつかり合うと、とてつもない爆発が生じる。

すると、爆煙からエグザが現れ、セイクリッド・レインティアを振り回す。

リュウは素早くダークネス・ドラグーンで次々と斬撃を受け止める。

エグザ「そんなもの、絆じゃない？ヴァヌムス、ここで貴様を葬り去ってやるッ？」

リュウ「おいおい、瞳孔が開いてるぜ？そんなにカッカしてるとアンタ、寿命が縮んじまうぜ？」

リュウは声を発すると同時に力で押し返した。

エグザ「くっ？」

スレイヤードラモン「消えろ？」

スレイヤードラモンはフラガラッハで薙ぎ払うように振ってセイクリッド・レインティアを上空へ弾き返した。

エグザ「？」

（しまっ…）

その時、リュウがエグザの懐に入ってダークネス・ドラグーンを構えていた。

リュウ「お前を仕留めれば、全て丸く収まるぜ…。」

（ニヤリ…）

リュウは不気味な笑みを浮かべながら、ダークネス・ドラグーンでエグザの腹を貫いた。

エグザ「かはっ？」

リュウはダークネス・ドラグーンを引き抜くと、エグザは力尽きて地面に倒れる。

アナログマン「よし、よくやったぞ？……？」

エグザ「ゴホッ、ゴホッ？」

すると、エグザは腹を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

リュウ「まだ立つのか…？大人しく死ねば、楽なのによ…。」

エグザ「言ったろ…？俺はまだ…死ぬ訳には…いかねぇってよ…。」

スレイヤードラモン「リュウ、早くそいつを？」

リュウ「言われなくてもそのつもりだ…。」

リュウはセイクリッド・ドラグーンの刃先をエグザに向けてトドメを刺そうとする。

エグザ（目が…霞んで…、ヤツが…）

エグザの意識が朦朧（もうろう）とする。リュウは躊躇いもなくダークネス・ドラグーンを振りかぶってニヤリと笑う。

リュウ「あばよ、俺の中の闇！」

『エグザ？』

その時、エグザの足元から聖なる光りが生じる。

一同「？」

エグザ（光…？暖かい…。）

エグザは光りの閃光に包まれ、やがて姿を消した。

スレイヤードラモン「消えた…？」

リュウ「チッ、やっぱそう簡単に上手い事いかねぇか…。」

リュウは小さくため息をつき、包帯を拾う。

スレイヤードラモン「リュウ、その包帯もう必要ないだろ…？」

リュウ「あん？これはファッションで気に入ってるからさ♪あと、この姿の時はヴァヌムスって呼べよ。いいな？」

スレイヤードラモン「わ、分かった…。」

リュウは顔に包帯を巻き、真剣な表情でスレイヤードラモンに耳打ちをする。

ヴァヌムス「スレイヤードラモン、後で話がある…。」

スレイヤードラモン「あ、あぁ。」

スレイヤードラモンはゆっくりと頷くと、ヴァヌムスは安心して背を向けてダークネス・ドラグーンを肩に担ぐ。

スクロモン「チッ、逃げ足の早い奴め…。」

ストラティクモン「あの光は、一体何だったのだ…？まさかエグザの仕業なのか…？」

アンクスモン「でも災難だねぇ♪あのエグザとかいう奴、これから先死ぬまで俺達に付け狙われるんだぜ♪」

ギーゴモン「他のエクセリオン…。いなくなった…。」

エグザだけでなく、ミソラ達も取り逃がしたらしい。

スクロモン「この手で始末したかったんだけど、ちょっと残念だわぁ。」

ヴァヌムス「ま、ここでアイツを殺しちゃ面白くねぇ…。ゲームはもっと楽しまなくちゃ…。そうだろアナログマン？」

アナログマン「何を言っている！ここでエグザを逃がしてしまうなんて不甲斐ない手下だ？さっさとエグザとエクセリオン共を始末しろ！これ以上、私の研究の邪魔をされちゃ困る！行け、ダークス共よ！」

アナログマンは命令するが、ダークスは全く動こうとしない。

アナログマン「な、何をしておる？さっさと追うのだ！」

スクロモン「いい加減にしてくださらない…？アンタの命令に従うの、もうカッタリイんだけど…？」

アナログマン「なに…？」

ヴァヌムス「分からねぇのか…？もうコイツらはお前の手下じゃねぇんだよ。」

アナログマン「？」

ストラティクモン「つまり、あの方を蘇らせる為に、貴様を利用させて貰った。」

ギーゴモン「利用…。アナログマン、利用…。」

アナログマン「バカな?私を誰だと思っているのだ?」

ヴルグモン「勿論、手駒さ…。」

すると、アナログマンは全ての力が抜けて膝が折れる。

スクロモン「ゴメンなさいねぇ♪けど、アタシ的にはいい手駒だったよ…♪これ、褒めてるのよ…?あーはっはっはっは♪」

スクロモンは高らかに嘲笑う。

アナログマン「そんな…。私の研究が…。私の研究は完璧だったのに、何故だ?」

アナログマンは頭を抱えて混乱し始める。

ヴァヌムス「理由は単純…。テメェの研究は、ただの無謀に過ぎねぇだけなんだよ…。さぁて、ボス気取りのアナログマンに引退セレモニーでもしますか…。」

ヴァヌムスはそう言って、背中に背負ってあるダークネス・ドラグーンを取り出す。

アナログマン「ま、待ってくれ?ならばお前達の為になる研究を続けさせてくれ?だから消さな…」

ヴァヌムス「研究の続きがやりてぇんなら、あの世でやってな…。」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンの刃先をアナログマンに向け、ニヤリと笑う。

ヴァヌムス「そいつが俺からの宿題だ…。」

（ニヤリ…）

すると、ダークネス・ドラグーンでアナログマンの胸を突き刺した。

アナログマン「がはっ？」

アナログマンの身体は段々とデータ化されていき、やがて跡形も無く消滅した。

ヴァヌムス「そうそう、一つ言い忘れてた…。テメェのやり方に気に食わなかったけど、俺を造ってくれてありがとなぁ…って聞いてねぇか？」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを背中に背負う。

ヴァヌムス「さぁて、これからどうすっかなぁ～？」

ヴルグモン「１つ聞かせて貰おうか、リュウ。」

ヴァヌムス「聞こえなかったかぁ？この姿の時はヴァヌムスと呼べって。まぁいい。１つだけだぞ？」

ヴルグモン「お前はかつて、デジタルワールドの危機を救った英雄。そして我々、闇の住人の最大なる敵。そんなお前がなぜここにいる？何が目的だ？」

ヴルグモンは警戒し、戦う態勢に入る。

ヴァヌムス「そう警戒すんなよ。俺はただ、エグザを始末さえすりゃそれで充分なんだよ。なんたって、あの野郎のせいで酷い目に合ったからな。ってな訳で、お前ら今から俺の部下な？」

アンクスモン「なにそれ意味不明だし？何でそんな上から目線なんだよテメェ？」

ギーゴモン「ギーゴモン、お前の言う事、聞かない。」

ヴルグモン「我々を誰だと思って言っているのだ？人間ごときが図に乗るなよ？」

スクロモン「やっぱりアンタ、ここで始末しなきゃダメみたいだね…。」

ストラティクモン「……。」

ストラティクモン以外のダークス達は頭に血が上り、ヴァヌムスに矛先を向ける。

スレイヤードラモン「リュ……ヴァヌムス、どうするつもりだ？」

ヴァヌムス「心配すんなスレイヤードラモン。俺1人で充分だ。」

アンクスモン「死にやがれ？」

アンクスモンが合図を送ると、ストラティクモン以外のダークス達は一斉にヴァヌムスに襲いかかる。

ヴァヌムス「ククク…。」

ヴァヌムスは背中に背負ってあるダークネス・ドラグーンを抜き取って地面に突き刺した。すると、地面から無数の闇の刃が勢いよく湧き出てきた。

一同「？」

無数の刃はアンクスモン達の身体をギリギリに掠らせると、アンクスモン達の動きが止まった。

ヴァヌムス「部下にしてやるって言ってんだよ。有り難いと思えよ？それとも、マジであの世に逝きたいか…？」

ヴァヌムスはギロリと睨むと、アンクスモン達は恐ろしさの余りに力が抜けた。

ヴァヌムス「最初からそうすりゃいいんだよ。理解できねぇバカ共だなぁ。」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを引き抜くと、地面から湧き出てきた無数の刃が一気に引っ込めた。

ストラティクモン「ヴァヌムス、その他のエクセリオンをどうするつもりだ…？」

ヴァヌムス「エクセリオンよりエグザだな…。さっさと片付けねぇと何をし出かすか分からねぇからな。」

スクロモン「だったら、エグザが動き回る出す前にエクセリオンのガキ共を始末すればいいんじゃないの？」

ヴァヌムス「頭悪りぃなぁ？エグザを先に仕留めれば後は楽勝ってヤツなんだよ。それぐらい解れ、オバさん。」

ヴァヌムスの言葉にスクロモンは怒り出し、右手の鋭い爪を構えたその時、ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンの刃先をスクロモンの首に突き付ける。

スクロモン「勘違いするんじゃないわよ？アタシはアンタの事許しちゃいないんだから。それだけは言っておくわ。」

ヴァヌムスの正体を知ったスクロモンはギロリとヴァヌムスに睨みつける。

ヴァヌムス「お～怖っ。そんなカッカしてると、シワが増えるぜ？それとも何か？そんなに妹のトコに行きてぇんなら、いつでもご招待してやるぜ…？」

スクロモン「チィッ？」

スクロモンは舌打ちをし、攻撃をやめる。

ヴァヌムス「それでよし♪」

ストラティクモン「ヴァヌムス、リュウギはどうするつもりだ？」

ヴァヌムス「リュウギの事なんてほっときな。それよりそいつのパートナーが厄介だ。そこでだ、ストラティクモン。現実世界に向か

ってリュウギのパートナーデジモンを排除してくんねぇか？」

ストラティクモン「なぜリュウギのパートナーなのだ？理由を知りたい…。」

ヴァヌムス「大人の事情ってヤツだ。深く追及してんじゃねぇよ。」

ストラティクモン「しかし、どうやって始末を…？」

ヴァヌムス「既に用意してるよ。」

ヴァヌムスは手を広げると、地面から一本の刀が現れる。

ストラティクモン「その刀は？なぜそれを？」

ヴァヌムス「そいつは秘密だ…。ストラティクモン、頼むぜ。」

ストラティクモン「御意…。」

ヴァヌムス「さぁて、行くぞスレイヤードラモン。」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを背中に背負い、何処かへと去って行った。

スレイヤードラモン「ま、待てよ？」

ヴァヌムスとスレイヤードラモンが去ると、アンクスモンは口を開く。

アンクスモン「ひゃ～、マジでビビったぜ…。」

ヴルグモン「何てヤツなんだ?あれでも人間なのか?」

スクロモン「ちょっとストラティクモン。何でアンタはボーッと見ていたのよ?」

スクロモンはギロリとストラティクモンに睨みつける。

ストラティクモン「我々全員で掛かっても敵わないと判断したからだ…。無論、ヴァヌムスに裏切る行為をすればあの方を裏切る事になる。それでいいのか?」

ヴルグモン「何か知っているようだな、ストラティクモン?」

スクロモン「話して貰おうかしら?」

ストラティクモン「……いいだろう。」

ーーーーーーーーーーーーーー

ヴァヌムスは誰もいないか確認する。

ヴァヌムス「ここならいいだろう…。」

ヴァヌムスは頭に巻き付けてある包帯をほどいた。

スレイヤードラモン「リュウ、話って一体なんだ?」

リュウ「スレイヤードラモン、俺とお前でこのデジタルワールドを変えたい。そのためにはお前の力が必要だ。分かるか?」

スレイヤードラモン「ど、どうしたんだよ急に？」

リュウ「久しぶりの再会でついな…。」

スレイヤードラモン「ところでリュウ、その髪の色なんだけど…。」

スレイヤードラモンは漆黒に染まった闇の色であるリュウの髪の色に気に掛かる。

リュウ「これか？これはアレだ。イメチェンってヤツだ。どうだカッコいいだろ？」

スレイヤードラモン「そ、そうかなぁ…。」

スレイヤードラモンは苦笑いする。

エグザ「とにもかくにも、あのエグザの野郎をぶっ飛ばさねぇとな。」

スレイヤードラモン「それならともかく、お前の息子はどうするんだよ？」

リュウ「その事なんだが、リュウギをデジタルワールドに戻ってこさせない方が一番手っ取り早いが、そうもいかねぇだろう。なんたってアイツは、俺の息子だからな…。」

スレイヤードラモン「……。」

リュウ「そこでだ。スレイヤードラモン、俺達のやるべき事はエグ

ザとリュウギのパートナーを抹殺する事だ。」

スレイヤードラモン「なぜリュウギのパートナーを?」

リュウ「聞いてなかったのかぁ?アイツは一番厄介なデータだ。俺にとって危険対象だ。」

スレイヤードラモン「リュウ…。」

リュウ「話はそれだけだ。お前にまた逢えて嬉しいぜ、これからもよろしくな…。」

リュウは笑顔を見せ、ゆっくりと手を差し出した。

スレイヤードラモン「あ、あぁ。」

スレイヤードラモンはギュッと握手をするのであった。

――Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

EP58　～漆黒を纏いし英雄降臨～（後書き）

？？？「ーーーし、何とか応急処置完了だな…。」

すると、遠くから聞き覚えのある声が聞こえてくる。

エグザ（誰…だ…？）

エグザはゆっくりと目を開けると、最初に目に映ったのは無数の星が散らばる美しい夜空だった。

？？？「おいコウジ、目が覚めたぞ！」

コウジを呼ぶのは、パートナーであるレオルモンだった。コウジは慌ててエグザの元へ駆け寄る。

コウジ「目が覚めたかい…？」

エグザ「コウジ…、それにレオルモン…。なぜお前らがここに…？確か、ムゲンマウンテンにいたハズじゃ…？」

コウジ「実は僕ら、イビルガと戦っていたら、急に光りに包まれたんだ。そして気がついたら、ここにいて…」

レオルモン「それと、隣にお前がボロボロの姿で倒れていたんだよ…。命拾いしたなぁ、もう少しで死ぬところだったんだぞ？」

エグザ「そうか…。ありがとよ…。」

エグザは起き上がると、激痛が走る。

エグザ「痛ッ？」

コウジ「まだ動いちゃダメだ？しばらく安静にしてなきゃ…。」

レオルモン「死にたいのかお前？」

エグザ「生憎、俺は急いでるんでね…。こんな所でのんびり寝てるヒマはねぇんだよ…。」

エグザは立ちくらみするとコウジはエグザの肩を持つ。

コウジ「君がそうだとしても、行かすわけにはないよ…。患者が完治するまで、最後まで見なきゃいけない義務があるからね…。」

コウジはそう言ってエグザをゆっくりと寝かせる。すると、エグザは小さく笑う。

エグザ「なぜ俺を助けたんだ…？お前の親友を奪ったヤツなんだぞ…？」

コウジ「確かにね…。でも僕はマルスモンの言葉を信じてみたいだけだ…。」

マルスモン『この男から、微かな光を感じる…。俺は過去の事は詳しくよく分からないが、これだけはハッキリと言わせて貰う。この男はデジタルワールドの救世主、エクセリオンだ…。』

（Ｅｐ２５より）

コウジ「君が本当にリュウを殺したなら、なぜ君はエクセリオンに選ばれたんだろうってね…。」

エグザ「俺はリュウを殺してない…。お前はそう信じているのか…？」

コウジ「僕はそう信じたい…。だって君は、コロシアムやファイル島で僕らを助けてくれたじゃないか…。それに…」

エグザ「？」

コウジ「アイツならきっとこうするだろうと思ったのさ…。何せ今まで、色んなヤツらに手を差し伸べて来たから…。」

エグザ「？」

すると、エグザは高らかに笑う。

レオルモン「なにが可笑しいんだよ？」

エグザ「いや、気にするな…。久しぶりに笑ったぜ…。」

コウジ「エグザ、隠された本当の真実を教えてくれ…。少しでも君の力になりたい…。」

エグザ「真実を話してやりてぇが、今はできない…。」

コウジ「どうしてだ？」

エグザ「俺の罪はまだ完全に消えちゃいない…。だからコウジ、そ

れまで待っててくれないか…？」

コウジ「……分かった。」

エグザ「お前らに真実を話す事は出来ないが、これだけは教えてやる…。」

エグザはコウジとレオルモンに、ムゲンマウンテンで起きた事を話した。

エグザ「ーーーと言う訳だ…。」

コウジとレオルモンはおどろきのあまりに唇を震わせる。

レオルモン「嘘だろ…？」

エグザ「嘘言ってどうするんだよ…？全て事実だ…。」

コウジ「イビルガを生み出したのは、シオリだなんて…？」

エグザ「シオリを救うには、１０個のエンシェントストーンが必要だ…。」

レオルモン「な、なんだよそのエンシェントストーンって？つうか何でシオリを助けるのにエンシェントストーンが必要なんだ？」

エグザ「神からの助言だ…。どうするんだコウジ…？」

コウジ「言ったハズだ…。僕は君を信じるって。彼女が救えるなら、僕は君に協力するよ。」

エグザ「決まりだな…。さて、後は島に移動する手段だな…。」

コウジ「それなら心配ないよ。」

エグザ「？」

その時、森の中から黒い影が現れる。

？？？「只今だギャ？」

コウジ「おかえり、博士。」

黒い影の正体はアグモン博士だった。アグモン博士はコウジのデジドライブに発信機を付けているため、デジシップで迎えに来たのであった。

博士「話は聞かせてもらっただギャ。コウジは認めても、ボクは絶対に認めないだギャ！」

コウジ「ダメだよ博士？」

エグザ「別に構わねぇよ。恨まれてるのは慣れてるからな…。ま、そこんとこヨロシクな…。」

博士「フン！」

博士はフンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。

コウジ「とにかく、今日はもう遅いしゆっくり休もうよ…。エグザ、

怪我が完治するまで、無理は禁物だよ。」

エグザ「分かった…。」

レオルモン「んじゃ、明日に備えて寝ようぜ！」

博士「だギャ！」

エグザは無数の星が散らばる美しい夜空を見つめる。

エグザ「……。」

（どうやら俺は、まだ神様に見放されてないようだな…。ありがとよ、チンロンモン…。）

エグザはフっと小さく笑い、明日に備えてゆっくり休むのであった。

次回はリュウギ達がデバイス島に上陸？

果たしてリュウギ達に待ち受けていた物とは？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ５９　～デバイス島上陸？受け継がれし秘密のペンダント～（前書き）

†デジモン　エグザ†で登場したデバイス島に上陸したリュウギ達？

懐かしのアイツが登場する？

Ｅｐ５９スタート？

EP59　～デバイス島上陸？受け継がれし秘密のペンダント～

一方、リュウギ達は…。

～デバイス島～

ここは、鉱山、雪山、ファイル島の二番目に広い島である。

カズマ「着いたぜデバイス島♪」

リュウギ達はついに、デバイス島に上陸したのだ。リュウギ達はシードラモンから飛び降りると、シードラモンはネレイスモンへと退化した。

ネレイスモン「ふぃ～、疲れた。」

ネレイスモンはカズマの腕に巻き付き、小さくため息をつく。

カズマ「お疲れさん♪」

ナルガモン「死ぬかと思った…。」

（ゼェ…ゼェ…）

ナルガモンは海が苦手なため、汗だくだった。

リュウギ「お前、何度も落ちかけたもんな…。」

ネレイスモン「情けないよまったく…。」

ナルガモン「うるせぇ？こっちはこの島に着くまで必死で戦ってたんだぞ？（泣）」

カズマ「まぁいいじゃん、島に着いた事だし♪な、ジャックモン♪」

ナルガモン「だからオレはナルガモンだっつうの？（怒）」

ナルガモンはありったけの声でツッコム。

リュウギ（ここに、あの声の主が居るのか…。）

カズマ「ところでリュウ兄、デバイス島まで来て何するつもりなんだよ…？」

リュウギ「あ、いや、俺の仲間が言ってた事を思い出してさ…。」（ホントは違うけど…）

カズマ「まさか、リュウ兄の彼女がここにいるのか？」

すると、リュウギは思いきりズッコケる。

リュウギ「だから彼女じゃないって？」

ネレイスモン「けど顔赤くなってるよ…？」

リュウギ「と、とにかく行くぞ！」

リュウギは顔を赤らめたまま森の中へと入る。

カズマ「待ってよリュウ兄～！」

～サイチ村～

森を抜けるとごく普通の小さな村があった。

リュウギ「村だ…。」

カズマ「誰もいやせんねぇ？」

その時、ネレイスモンは気配を感じる。

ネレイスモン「来る…。」

リュウギ「敵か！」

すると、小さな家から哺乳類型デジモンの大群が眼光を光らせる。

？？？「キシャャャャャャャ？」

カズマはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ガジモン、成長期、哺乳類型、ウィルス種、必殺技はパラライズブレス。」

カズマ「おっと、団体さんのお出ましかぁ？」

リュウギ「イビルスか…。」

すると、ガジモン達は一斉に襲い掛かる。

カズマ「さぁて、ハデに暴れるとしますかぁ！」

カズマは剣袋から双龍牙を取り出す。

ネレイスモン「暴れるのはいいけど、程々になぁ？」

カズマ「分かってる×2♪んじゃリュウ兄、イビルス処理班頼みますぜ！」

リュウギ「んな？」

ナルガモン「テメェまた？」

カズマは双龍牙と鞘で攻撃し、そしてネレイスモンは口から強力な水圧で、ガジモン達を倒して行く。

ネレイスモン「『アクアショット？』」

すると、ガジモン達の体内からイビルス達が現れる。

カズマ「今だリュウ兄、ジャックモン！」

リュウギとナルガモンは次々とイビルス達を倒して行く。

ナルガモン「だからジャックモンじゃねぇっつうの？」

リュウギ「エラそうに言うな！」

リュウギ・ナルガモン「ラスト？」

そしてリュウギとナルガモンは最後のイビルスを倒した。

リュウギ「よし！」

ナルガモン「Ｊａ…」

カズマ「Ｊａｃｋ　ｐｏｔ☆」

ナルガモン「んな？オレの決めゼリフを？」

カズマ「まぁまぁ、減るもんじゃあるめぇし♪」

ナルガモン「テメェなぁぁぁぁぁぁぁぁ？（怒）」

ナルガモンはカズマの胸ぐらを掴んで激しく揺らす。

ネレイスモン「落ち着けよナルガモン。それがコイツのＳＴＹＬＥなんだからさ～♪」

カズマ「あ？お前それオレのセリフだぞ？この海蛇野郎、人のセリフをよくも！」

ナルガモン「ってお前が言うなよコルァ？」

カズマ「それがオレのＳＴＹＬＥ☆」

ナルガモン・ネレイスモン「やかましわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ナルガモンとネレイスモンは同時にカズマを殴り飛ばした。

カズマ「ぐはっ？もう勘弁ならねぇ？」

３人は言い争いになって激しい喧嘩が始まった。

リュウギ「さてと、リカバリーでもするか…。」

リュウギは喧嘩する３人を放置してガジモン達をリカバリーする。

ガジモンＡ「う、う～ん…。」

ガジモンＢ「オレは一体…？」

リュウギ「おい、大丈夫か…？」

すると、ガジモン達は頭を下げる。

ガジモンＡ「助けてくれてありがとう、よろず屋さんよ♪」

ガジモンの言葉に、リュウギは首を傾げる。

リュウギ「よろず屋…？よろず屋ってなんだよ…？」

ガジモンＡ「あれ？アンタら頼まれたら何でもやるよろず屋、デジモン　ＪＥＴじゃねぇのか…？」

リュウギ「俺達は…」

カズマ「デジタルワールドの救世主、ブレイブエクセリオンだ？」

すると突然、カズマとネレイスモンは変なポーズを決める。

リュウギ「何やってんだよ…お前ら…。つうかいつの間に仲直りしたんだよ…。」

ガジモンB「そのセンスのないポーズ、やっぱりよろず屋じゃねぇか？」

すると、カズマとネレイスモンはズッコケる。

カズマ「だから、ブレイブエクセリオンだってばぁ～。」

ナルガモン「っていうか、よろず屋もポーズがあったのか？その連中の顔が見てみたいぜ…。」

すると、リュウギはガジモンに問う。

リュウギ「なぁ、お前達に聞きたい事があるんだけど…。」

ガジモンA「なんだ？」

リュウギ「デバイス島に来るのはじめてなんだ。少し道案内をしてくれないか？」

ガジモンB「それはできない相談だな！」

ナルガモン「助けたんだからそうケチケチすんなよな！」

ガジモンA「チゲェよ、困った事があればよろず屋に行けって事だよ。」

カズマ「あ、な～るへそ。」

ネレイスモン「だったら、よろず屋まで案内してくれよ！」

ガジモンA「おう、任せとけ！こっちだ！」

ガジモンはよろず屋まで道案内する。

～ロームス平野～

よろず屋へと向かうリュウギ達。すると、ナルガモンは口を開く。

ナルガモン「よろず屋ってどんな奴らなんだろうな？」

ネレイスモン「決めポーズのセンスねぇから、対した事ないんじゃないの…？」

カズマ「チゲェねぇ♪」

カズマはそう言って笑う。

リュウギ「笑ってるけど、お前らも入ってるんだぞ…。」

リュウギは小さくツッコム。

ガジモン「着いたぜ！」

森を抜けると、そこは古臭い一軒家が建っていた。看板には大きく『デジモン　ＪＥＴ』と書かれていた。

カズマ「うわぁ、かなりボロボロじゃねぇか…？」

リュウギ「ここに誰か居るのか？」

ガジモン「いるんじゃねぇの？」

ナルガモン「いるんじゃねぇのって、知らねぇのかよ？」

ガジモン「だって、変な奴らに支配されたのはかなり前の事だし…。」

ナルガモン「どうすんだよリュウギ…？」

リュウギ「取り敢えず、中へ入ってみよう…。」

リュウギ達はゆっくりとよろず屋の中へと入る。

～デジモン　ＪＥＴ～

中へと入ると、部屋中ホコリかぶっていた。

ナルガモン「こりゃ酷ぇなぁ…。」

カズマ「なんか、こういうのワクワクしねぇか？押入れからゾンビが出て来たりして…。」

ネレイスモン「んなわけねぇだろ…。」

リュウギ（ミソラがいたら、今頃気絶してるな…。）

そうこうしてる内に、リュウギ達はリビングに入る。やはりリビングには誰もいなかった。

ナルガモン「誰もいねぇな…。」

カズマ「チェッ、面白くねぇなぁ。」

カズマはつまんなそうな顔をする。

リュウギ「？」

すると、リュウギはある事に気付いたのか、机に近寄る。

カズマ「どうしたんですかぃリュウ兄？」

リュウギ「これ…。」

リュウギは机の上に置いてある写真立てを手に取る。その写真には、たくさん人間とそのパートナーデジモン達が笑顔が満ち溢れていた。

ナルガモン「誰だよコイツらは…？」

カズマ「どれどれ…？」

カズマは覗きこむ。すると突然、カズマはありったけの声で叫ぶ。

カズマ「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギ「ど、どうしたんだよカズマ？」

ナルガモン「ビックリするじゃねぇかよ急に？なんだよ一体？」

カズマ「この写真…、オレの親父が写ってる…？」

リュウギ「？」

ナルガモン「マジでか？」

写真の右側に、青髪に頭のてっぺんにアホ毛がついてる少年、シロウが写っていた。

リュウギ「…って事は…。」

リュウギはよく確かめると、写真の中心に金髪の少年と桃髪をした少女が仲良さそうに写っていた。リュウギは仲良さそうに写っている2人の名前を口にする。

リュウギ「父さんと、母さん…？」

ナルガモン「じゃあこのよろず屋は、リュウギの両親が住んでいたのか？」

ネレイスモン「みたいだな…。通りで誰もいないハズだ…。」

リュウギ「父さん…。」

（ガタンッ！）

その時、隣の部屋から物音が聞こえてくる。

ネレイスモン「カ、カズマ…、今何か物音したよ…？」

カズマ「オレも聞こえた…。」

ナルガモン「誰か居るのか…？」

リュウギ達は恐る恐る隣の部屋へと向かうと、押入れから物音が聞こえてくる。

（ガタンッ、ガタンッ！）

ネレイスモン「なぁカズマ、もしかして…」

カズマ「んなわけねぇじゃん？これはアレだよ、イビルスだって！あは、あははは…。」

カズマは冷や汗かきながら冗談気に笑う。

リュウギ「さっきの余裕は何処行ったんだよ…。」

リュウギはツッコンだ後、小さくため息をつく。その時だった。

？？？「だ～れ～が～…」

一同「…え？」

その時、押入れから黒い影が不気味な声を出しながら姿を現す。

？？？「イビルスじゃやややややややややや？」

ネレイスモン・ナルガモン「出たぁぁぁ

すると、ババモンはジッとリュウギを見つめる。

リュウギ「な、なんだよ…？」

ババモン「お主、誰かに似てるようなぁ…？」

ナルガモン「聞いて驚けよ！リュウギはなぁ、リュウの息子なんだぜ！」

ナルガモンは自慢気に言うと、ババモンは驚愕する。

ババモン「なに？お主がリュウの…？やはり来たのか…。」

リュウギ「やはり…？どういう意味だ…？」

ババモン「この前、リュウがこのよろず屋に来たのじゃよ…。」

リュウギ「父さんが？」

最初に驚いたのはリュウギだった。

ナルガモン「リュウギの親父、生きていたのか？」

ババモン「リュウは死んでなどおらぬ…。ちゃんと生きておる…。」

すると、リュウギは一気に力が抜けて膝が折れる。

ナルガモン「ど、どうしたんだよリュウギ？」

リュウギ「いや、安心したら力が抜けて…。良かった…。」

カズマ「それで、リュウギの親父は何処へ…？」

ババモン「それがのぅ、つい最近の事じゃ…」

それは、数日前まで遡る…。

～ババモンの家～

ババモンは当時、ババモンの家で避難をしていた。

ババモン「結界を張って正解じゃったわ…。じゃが、いつまで持つかのぅ…。」

その時だった。外が騒がしい事に気付くババモンわ、

ババモン「？」

ババモンは慌てて外に出ると、黒い影がよろず屋に入っていった。

ババモン「何奴じゃ…？」

ババモンはコッソリと黒い影の後を追う。

～デジモン　ＪＥＴ～

ババモンはリビングに入ると、黒い影が机の側で何かしていた。

ババモン「お、お主は？」

？？？「バッちゃ、いきなりでワリィが頼みがある。俺の息子がいつかここに訪れるかもしれねぇ…。だから息子に会ったら、コイツを渡しといてくれ…。」

ババモン「待て、待つのじゃ…？」

すると、よろず屋に窓が開かれたと同時に黒い影は姿を消した。

ババモン「そんな、まさか…？」

ーーーーーーーーーーーーーー

ババモン「あれから顔は見れず、すぐに何処かへと行ったのじゃ…。アレを置いてな…。」

リュウギ「アレ…？」

ババモンは机の引き出しを開けて、何かを取り出した。

ババモン「これを、お主に渡してくれと…。」

ババモンがリュウギに手渡したのは、ドラゴンの翼をS字状にモチーフしたシルバーペンダントであり、そのS字状の下の部分に丸いルビーがはめ込まれていた。

リュウギ「これを…？」

ババモン「そうじゃ。そのペンダントはリュウが少年の頃、肌身離さず持っていたペンダントじゃ…。」

リュウギはペンダントを見た後、先ほどの写真を見つめる。その写真にはリュウの首にあのペンダントがぶら下がっていた。

リュウギ「父さん…。」

リュウギはリュウのペンダントを首にぶら下げてた。ペンダントにはめこまれたルビーが美しく光る。

ババモン「お主を見ていると、あの頃のリュウを、思い出すわい…。」

リュウギ「ありがとう、ババモン…。」

その時、ペンダントが反応する。

一同「?」

すると、ペンダントにはめこまれたルビーから一直線の光りが生じる。光り何処かへと刺していた。

リュウギ「なんだ…?」

カズマ「あの光りの先に、ラ○ュタはある!」

ネレイスモン「って、違うだろ…。」

ネレイスモンはすかさずツッコム。

ババモン「まさか…?」

ババモンはよろず屋の窓を開けると、デバイス島の中心にある建物に刺していた。

リュウギ「あの建物に差してあいるぞ…？」

ババモン「あれはアムスタエル神殿じゃ…。あの神殿は選ばれた者にしか入れないという禁断の領域…。っという事は…」

すると、ババモンはハッとして急に走り出す。

ナルガモン「どうしたんだよ？」

ババモン「リュウギとやら、ワシに着いてこい！」

カズマ「おい、ちょっと待ってくれよ？」

よろず屋を出ると、イビルガ達が待ち伏せていた。

ネレイスモン「イビルガがこんなに…？」

カズマ「おいおい、一体どういう風の吹きまわしなんですかぃ…？」

ナルガモン「よし、ここはオレ達が…」

ババモン「待つのじゃ！お主らはここで戦ってはならぬ！」

リュウギ「どうしてだ…？」

ババモン「お主らには、これから試練を受けて貰わねばならぬ…。」

リュウギ「？」
（試練って、まさか？）
すると、リュウギは声の主に言われた事を思い出す。
？？？『救世主　リュウギよ、そなたはパートナーの事をよく理解し、助け合い、共に闘い、それによって絆は結ばれた…。そして今、そなたに試練を受ける資格を得た。』
リュウギ「ババモン、まさかあの建物の中に誰かが呼んでいるのか…？」
ババモン「そうじゃ…。リュウギ、そしてナルガモンよ。お主らは今からアムスタエル神殿へと向かい、神から与えられる試練を受けるのじゃ。だからここで無駄な体力を使ってはならぬぞ…。」
リュウギ「分かった。」
カズマ「だったら、こいつらはオレが何とかする。リュウ兄、早くそこへ行くんだ？」
すると、カズマは双龍牙を鞘から抜き出す。
リュウギ「カズマ、ネレイスモン？」
ネレイスモン「オレ達はリュウギとナルガモンに代わって、イビルガ処理班代理だ！ここは任せろ！」
リュウギはカズマとネレイスモンを見て、ゆっくりと頷く。

リュウギ「頼む…。」

ババモン「こっちじゃ！」

イビルガA「させるかよ？」

イビルガB「あのエクセリオンを食い止めろ？」

イビルガ達はリュウギに襲い掛かる。

ネレイスモン「『フィンエッジ？』」

ネレイスモンは背ビレから衝撃波を放ち、イビルガ達の行く手を阻む。

カズマ「無視されちゃ困るぜ…。通りたきゃ…」

ネレイスモン「オレ達を倒してから行きな？」

イビルガB「生意気な…。」

イビルガA「一気に掛かれ？」

イビルガ達は怒りの矛先をカズマ達に向けて一斉に襲い掛かる。

ネレイスモン「カズマ、派手に暴れちゃおうぜ！」

カズマ「言われなくてもそのつもりさ？ネレイスモン、究極体に進化だ？」

ネレイスモン「おう？」

カズマはＤ－アクセルをネレイスモンに翳した。すると、ネレイスモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ネレイスモン「ネレイスモン、ワープ進化？」

『プレシオモン？』

イビルガ達「？」

カズマ「さぁて、どっからでも掛かって来な？」

一方、リュウギ達は…。

リュウギ「これは…？」

ババモン「ここはアグモン博士の研究所じゃ…。」

ナルガモン「アイツの研究所？デッケェなぁ？」

ババモン「この研究所には秘密の地下通路がある…。その秘密の地下通路を通れば、アムスタエル神殿に辿り着けるハズじゃ…。」

イビルガ「いたぞ？」

すると、イビルガ達が後を追って来る。

ナルガモン「あの野郎！」

ナルガモンは戦う態勢に入ると、ババモンはナルガモンを止める。

ババモン「ここはワシ1人で充分じゃ！お主らは先に行け！」

リュウギ「でも…？」

ババモン「ワシを年寄り扱いするでない…。だから早く行くのじゃ…。」

イビルガC「1人で充分だぁ？」

イビルガD「ヌカしてじゃねぇぞババァ？」

すると、イビルガ達はババモンに襲い掛かる。

リュウギ「危ない、ババモ…」

ババモン「誰がババァじゃやややややややや？」

その時ババモンはありったけの力でイビルガを殴り飛ばした。

イビルガD「ひぎゃやややややややややんん？」

イビルガは星となって消えて行った。

リュウギ・ナルガモン「……え？」

リュウギとナルガモンは驚きのあまりに思わず目を丸くする。

ババモン「誰がババァじゃ…？その口、二度と聞かないようにして

やるわい…。」

ババモンはそう言って拳をパキパキと鳴らす。ババモンの背後から、大魔王的な守護霊が見える。

イビルガ達（こ、怖ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？（泣））

ナルガモン（ミソラよりおっかねぇ…。（汗））

リュウギ（あの様子だと、1人で大丈夫そうだな…。（汗））

ババモン「さぁ、早く行くのじゃ…。」

リュウギ「分かった。ここは頼んだぞババモン！」

～アグモン研究所～

ナルガモン「何処だ、秘密の地下通路は？」

必死で秘密の地下通路を探すナルガモン。

リュウギ「クソッ、早く見つけないと…。……？」

すると、リュウギは何かを感じる。

リュウギ「風…？」

リュウギはしゃがみ込んで床を調べる。

ナルガモン「なにやってんだよリュウギ？」

その時、リュウギは何かを感じる。

リュウギ「隙間風が来てる！ナルガモン、ここだ！」

ナルガモン「ホントか？」

リュウギはアルカナムを床に差し込み、テコの原理で床をこじ開けた。すると、床下には地下へと続く階段があった。

リュウギ「これが、アムスタエル神殿に続く秘密の地下通路…？」

ナルガモン「急ぐぞ！」

リュウギ「あぁ！」

リュウギとナルガモンは急いで地下へと続く階段を降りていくのであった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ….

EP59　～デバイス島上陸？受け継がれし秘密のペンダント～（後書き）

～おまけ～

＞i28294―1298＜

【イラスト：トリプルミーミング】

ヒマだったのでつい書いちゃいました…（笑）

少しでも楽しめたらいいと嬉しいです…。

次回はついに声の主の正体が明らかに？

果たしてリュウギ達が挑む試練とは一体？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ６０　～光の神獣　ホーリードラモン？四大竜の試練、再臨？～（前書き）

エグザで活躍したチンロンモンが登場？

そしてあの試練が始まる？

Ｅｐ６０スタート？

ＥＰ６０　～光の神獣　ホーリードラモン？四大竜の試練、再臨？～

～秘密の地下通路～

リュウギ達は試練を受けるため、アムスタエル神殿へと向かう。

ナルガモン「狭いし暗いし、本当に大丈夫なのかぁ…？」

するとリュウギは突然と足を止め、ナルガモンはリュウギにぶつかる。

ナルガモン「いだっ？どうしたんだよ急に…？」

リュウギ「明かりだ…。」

ナルガモン「マジでか？」

リュウギ「行こう？」

リュウギとナルガモンは明かりの方へと走り出した。

～アムスタエル神殿　地下～

狭い通路を抜けると、そこは巨大な大広間だった。

ナルガモン「広いなぁ～…。」

リュウギ「ここが、アムスタエル神殿…？」

ナルガモン「でも誰もいねぇぞ…？」

すると、リュウギの首にぶら下がっているリュウのペンダントが反応する。

リュウギ「父さんのペンダントが反応してる…。」

リュウギはペンダントの光りを辿って前に進む。

ナルガモン「何処まで続いてんだよ…？」

リュウギ「さぁな…。……？」

リュウギは足を止める。

ナルガモン「なんだこりゃ？石？」

ナルガモンより少し小さい石が置いてあった。リュウギはその場でしゃがんで石を調べる。

リュウギ「なんでここに石が…？」

ナルガモン「こんな広い場所のど真ん中に石あるなんて、変な所だなぁ？」

ナルガモンは怪し気な目で石をポンポンと叩く。

リュウギ「おいナルガモン、余り変な事するなよ？」

リュウギはナルガモンを止めようと石に手を置いた。その時だった。

石が反応して聖なる光りが生じる。

リュウギ・ナルガモン「うわっ？」

リュウギとナルガモンは光りの閃光に包まれて思わず目を閉じた。

やがて、リュウギは目を開けると真っ暗な世界だった。リュウギは隣をみると、ナルガモンが倒れていた。

リュウギ「ナルガモン…？ナルガモン！」

ナルガモン「んだよぅるせぇなぁ…。」

すると、ナルガモンはゆっくりと目を開けた。

ナルガモン「ありゃ？何処だよここは…？」

リュウギ「さぁな…。」

（ここ、何処かで…？）

？？？「ようこそ、試練の間へ…。」

すると、何処からか声が聞こえてくる。

ナルガモン「誰だ？」

リュウギ「この声は…。」

？？？「よく来たな、小関　リュウギ。そしてパートナーのナルガ

モン。」

リュウギ「なんで俺の名前を…？」

ナルガモン「おいテメェ、隠れてねぇで出てこいよ！」

？？？「よかろう…。」

すると、リュウギとナルガモンの前に巨大なデジモンが姿を現す。

リュウギ・ナルガモン「？」

？？？「我が名はチンロンモン…。そなたを選んだ者だ…。」

リュウギはＤ－アクセルでチンロンモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「チンロンモン、究極体、聖竜型、データ種、必殺技は蒼雷。」

リュウギ「チンロンモンって確か、デジタルワールドを守護する四聖獣の事か…？」

ナルガモン「マジでか？」

チンロンモン「そなた達をここへ呼んだのは他でもない…。そなた達は今から、更に強くなるために試練を受けて貰わなければならない…。」

すると、ナルガモンはフッと鼻で笑う。

ナルガモン「試練なんて必要ねぇよ！オレ達は今でも強ぇからな♪」

ナルガモンはそう言って高らかに笑う。

チンロンモン「ほぅ、ヴァヌムス相手に手も足も出なかったのにか…？」

ナルガモン「なに？」

リュウギ「なんでそれを…？」

チンロンモン「侮るでない…。私はそなた達の行動を全て知っている。」

ナルガモン「あれはただ…、オレが油断しただけで…」

チンロンモン「違う…。己の無力さに負けた…。それはそなたの油断ではない！恐怖に怯えていたのだ？」

ナルガモン「んだとコラァァァァ？」

ナルガモンは頭に血が上り、口から黒炎弾を放つ。

リュウギ「ナルガモン？」

その時、チンロンモンは蒼い稲妻を放ち、黒炎弾をかき消した。

ナルガモン「？」

リュウギ「蒼い稲妻…。まさか？」

それは現実世界にてストラティクモンと戦った時だ。リュウギ達が大ピンチの時に上空から蒼い稲妻がストラティクモンに落ちて逆転のチャンスが生まれた。その時と同じ蒼い稲妻だった。

リュウギ「まさか、アンタがストラティクモンを…？」

チンロンモン「いかにも…。あの時、私の攻撃がなければそなた達は完全にやられていた…。」

リュウギ「そうだったのか…。」

チンロンモン「これで理解したか…？そなた達は私の力を借りてストラティクモンに勝ったのだ…。決してそなた達の力で勝ったのではない！」

リュウギ「……。」

チンロンモン「違うとでもいうのか…、ナルガモン？」

ナルガモン「確かにテメェの言う通りだ…。あの時オレは、どうしたらいいか分からなかった…。頭がいっぱいっぱいになってよぅ…。」

リュウギ「ナルガモン…。」

ナルガモン「オレ、悔しいんだ…。リュウギがやられそうだったのに、オレは何もできなかったんだ…。」

リュウギ「……。」

リュウギとナルガモンは己の無力を感じたのか、うつむく。

チンロンモン「かつて、そなたの父親も同じだった…。」

リュウギ「父さんも…？」

チンロンモン「そなたの父親、リュウはとそのパートナー、ドラコモンは七大魔王の1人、暴食のベルゼブモンに立ち向かった。しかし、ベルゼブモンの圧倒敵な力でリュウは敗れて死に至り、ドラコモンは自我を失って暴走した。彼らは完全なる敗北を知ったのだ。」

リュウギ「それから、父さんはどうしたんだ…？」

チンロンモン「彼らの眼は死んでいなかった…。這い上がってでもベルゼブモンにリベンジしようとドラコモンと共に試練を受けた。そして試練を、乗り越えた。」

ナルガモン「……。」

チンロンモン「リュウギ、そしてナルガモンよ。ここからは究極の選択肢を与える。これから試練を受けて今より更なる強さを得るか？それとも、敗北という名の奈落の底に落ちて永遠に彷徨うのか？」

リュウギ「俺は…」

チンロンモン「ただし、曖昧な気持ちで試練を受けるというのならやめておけ…。この試練は生きるか死かどちらかだ…。試練を受けるというのなら、覚悟を決めろ…。」

リュウギ・ナルガモン「……。」

すると、リュウギとナルガモンは眼をキリッとする。彼らの眼は死んでいなかった。

リュウギ・ナルガモン「その試練、受けて立つ！」

チンロンモン「よかろう…。では今からそなた達に、四大竜の試練を受けて貰う。」

リュウギ「四大竜の試練…？」

チンロンモン「紹介しよう…。神龍のゴッドドラモン、神獣のホーリードラモン、邪竜のメギドラモン、そして聖獣のチンロンモンの四大竜だ。」

すると、リュウギ達の前に巨大なデジモン達が現れる。

？？？「この小僧が噂のリュウの息子か…。」

？？？「実に興味深いわ…。よろしくね。」

？？？「グォォォォォォォォォォ？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ホーリードラモン、究極体、聖竜型、ワクチン種、必殺技はホーリーフレイム。

ゴッドドラモン、究極体、聖竜型、ワクチン種、必殺技はゴッドフ

レイム。

メギドラモン、究極体、邪竜型、ウィルス種、必殺技はメギドフレイム。」

リュウギ「全員、究極体…？」

ナルガモン「なぁリュウギ、アレも四大竜なのか…？スッゲェ、オレの事ガン見してるんだけど…。」

四大竜の1人、メギドラモンは鋭い眼でナルガモンを睨んで、威嚇していた。

メギドラモン「グルルルルルルル…。」

リュウギ（何て威圧なんだ…。父さんはこの四大竜達を乗り越えたのか…？）

チンロンモン「どうした、怖じ気づいたか…？」

ナルガモン「バカ言ってんじゃねぇよ？オレはいずれ最強になるデジモンだ？ここで引き下がってたまるかっつうの？」

リュウギ「そうだ…。例え四大竜だろうが神だろうが、敵に背を向けるのは俺の流儀に反する？正々堂々、真っ向勝負だ？」

リュウギはそう言って右手を広げ、ガンブレード、アルカナムが現れる。

すると、チンロンモンはふと過去の事を思い出す。

リュウ『相手にとって不足はない！！』

ドラコモン『この試練を乗り越えないと、リュウは生き返れないんだ！！やってやる！！』

チンロンモン（流石は、リュウの息子だな…。）

「では、そなた達に四大竜のルールを教える。ルールは四大竜の角を触れば試練クリアだ…。そして特別に、デジサモンを使用してもよい。」

ナルガモン「なぁんだ、簡単じゃん♪」

チンロンモン「果たしてそうかな？では、第１の試練を行う。」

すると、四大竜の中で先に動いたのはホーリードラモンが動き出す。

リュウギ「アンタが相手か…。」

ホーリードラモン「御手柔らかにねリュウギ君、ナルガモン。」

チンロンモン「それでは第１の試練、始め？」

リュウギ（相手は空中…。だったら遠距離戦だ？）

リュウギはガンブレードのトリガーを引いてホーリードラモンを狙い撃つ。

ホーリードラモン「私には効きませんよ！『ホーリーフレイム？』」

ホーリードラモンは全ての正義の光エネルギーを放つ。

リュウギ「くっ？」

リュウギは横に飛び込んでホーリーフレイムを回避する。

ナルガモン「こっちだ？『アートルムフレイム？』」

ナルガモンは口から黒炎弾を放つ。しかし、ホーリードラモンは尻尾で軽く弾き変えした。

ホーリードラモン「その程度ですか…？」

ナルガモン「へっ！まだ本気の『ほ』の字も出しちゃいねぇぜ？」

リュウギ「ナルガモン、成熟期に進化だ！」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。すると、ナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、進化？」

『ソニックドラモン？』

ソニックドラモン「って、何で成熟期なんだよ？」

今更ツッコムソニックドラモン。

リュウギ「まだ第１の試練だ…。ここで無駄な体力を使っちゃダメだ。」

ホーリードラモン（積極的なリュウとは違い、少し冷静みたいですね…。）

ソニックドラモン「しょうがねぇ、ＣＯＯＬに反撃と行こうぜ？『アートルムバースト？』」

ソニックドラモンは息を吸い込み、口から漆黒に包まれた灼熱の炎を吐く。

ホーリードラモン「……。」

（それに比べてパートナーは積極的…。全く正反対ですね…。）？

ホーリードラモンはアートルムバーストを軽く交わした。

ソニックドラモン「なに？」

リュウギ「あんなに軽く…？」

ホーリードラモン「そんな事で四大竜の試練を越えるとでも…？やはりあなた達では到底無理です…。」

ソニックドラモン「んだとコラァ？」

ホーリードラモン「『アポカリプス？』

ホーリードラモンは身体を回転させると、上空から光の槍が降り注ぐ。

リュウギ・ソニックドラモン「？」

リュウギとソニックドラモンは
光の槍を、交わしていく。？

ソニックドラモン「クソ、どうするリュウギ？」

リュウギ「これじゃまともに近づけない…。何とかしないと…。」

全て交わすと、やがて光の槍は止む。

ホーリードラモン「なぜあなた達が弱いのか見抜いたわ…。」

リュウギ「何だって？」

ホーリードラモン「心が1つじゃないからよ…。だからあなた達は弱い…。」

ソニックドラモン「だったら見せてやるよ！リュウギ、EXモードだ？」

リュウギ「あぁ？EXモード、発動？」

しかし、何も起こらない。

ソニックドラモン「な、何でだよ…？」

ホーリードラモン「当然よ…。EXモードの原理はパートナーとの心が1つになってこそ発動できる奥義…。思い出してみなさい…、あなた達はどうやってここまで来たのか…。」

リュウギ「俺達が…」

ソニックドラモン「どうやってここまで来たのか…。」

リュウギとソニックドラモンは今までの戦いを振り返る。スレッド大陸、コロシアム、そしてファイル島。今までの戦いの中でピンチに陥った時にどうしていたのか…。

ソニックドラモン「そうだったな…。」

リュウギ「心を1つ…。俺達の心が1つになったからこそ乗り越えたんだったよな…。」

ホーリードラモン「そう…。戦う時は常に1人ではない…。共に戦う仲間がいるからこそ強くなるのよ…。」

リュウギ「それが、本当の強さ…。」

ホーリードラモン「見せてみなさい。あなた達の本当の力を…。」

すると、リュウギとソニックドラモンは戦う態勢に入る。

ソニックドラモン「行くぜリュウギ?」

リュウギ「あぁ?」

ホーリードラモン「『ホーリーフレイム?』」

ホーリードラモンは全ての正義の光エネルギーを放つ。

ソニックドラモン「リュウギ、乗れ？」

リュウギはソニックドラモンの肩に飛び乗り、素早く交わした。

ソニックドラモン「喰らえ？『アートルムバースト？』」

ソニックドラモンは大きく息を吸い込み、漆黒に包まれた灼熱の炎を吐く。

ホーリードラモン「無駄です？」

ホーリードラモンは素早く交わす。

リュウギ「今だ？」

すると、リュウギはソニックドラモンの手に乗る。

ソニックドラモン「いっけぇぇ？」

ソニックドラモンはホーリードラモンに目掛けて、ありったけの力でリュウギを投げ飛ばした。

リュウギは猛スピードでホーリードラモンの角に接近する。

ホーリードラモン「しまった？」

リュウギ（届け？）

リュウギは手を伸ばしたその時、ホーリードラモンは尻尾でリュウギを地面に叩きつけた。

リュウギ「ぐはっ？」

ソニックドラモン「リュウギ？」

ホーリードラモン（まさか、こんなに早く心を1つにするとは…。）

ソニックドラモン「リュウギ、しっかりしろ？」

すると、リュウギはゆっくりと立ち上がる。

リュウギ「俺は大丈夫だ…。それにしても、惜しかったな…。」

ホーリードラモン「さぁ、どうします？同じ手は通用しませんよ？」

リュウギ「そうだな…。」

ソニックドラモン「でも…、お陰で勝てそうな気がするぜ！」

ホーリードラモン「なに？」

すると、リュウギはありったけの声で叫んだ。

リュウギ「ＥＸモード、発動？」

すると、ソニックドラモンの周りに激しい突風が舞う。

ホーリードラモン「来ましたか…。」

突風が止むと、ソニックドラモンの身体には光りのオーラが纏う。

ソニックドラモン「行くぜ？『ヒドゥンスラッシュ？』」

ソニックドラモンは両肘のブレイドを振って光りの衝撃波を放つ。

ホーリードラモン「早い？」

ホーリードラモンは間一髪で交わすと、ソニックドラモンは次の攻撃態勢に入っていた。

ソニックドラモン「『アートルムバースト？』」

ソニックドラモンは息を吸い込み、漆黒に包まれた灼熱の炎を１０倍の力で吐く。

ホーリードラモン「くっ？」

ホーリードラモンはとっさに光りのバリアを張って身を守る。

ソニックドラモン「まだまだ？」

ソニックドラモンは更にパワーを上げる。

リュウギ「よし、今の内に！」

一方、ホーリードラモンは光りのバリアでアートルムバーストを防ぐ。

ホーリードラモン「ＥＸモードには限度がある…。攻撃が終わった瞬間に終わらせる？」

すると、アートルムバーストの威力が弱まってきた。

ホーリードラモン「よし！」

ホーリードラモンはバリアを解除して反撃しようとすると、とんでもないものを目にした。

リュウギ「はぁぁぁ

ホーリードラモンはゆっくりと地面に降りて、リュウギを降ろす。

リュウギ「俺は大事な事を忘れかけていた。勝てたのはアンタのお陰だ…。ありがとな、ホーリードラモン。」

ホーリードラモン「私はあなた達に少し助言をしたまでです…。心を1つにする。その心を忘れないでください。それから…」

ホーリードラモンは眼を閉じると、リュウギとソニックドラモンの身体が癒される。

ソニックドラモン「傷が？」

ホーリードラモン「楽しませてくれたお礼です。第2の試練、頑張ってください。」

ソニックドラモン「サンキューな！」

リュウギ「それから、ナイトモンもありがとな。」

ナイトモン「必要になれば、また我輩を呼んでください。いつでも駆けつけますぞ？」

ソニックドラモン「お、頼もしいな♪」

ナイトモン「……かもしれない。」

ナイトモンはそう言ってデジサモンの効果が切れて静かに消え去る。

リュウギ「って、どうなんだよ…。」

チンロンモン「見事だなリュウギ、そしてソニックドラモン。それでは次に、第2の試練を行う。」

ソニックドラモン「次はどいつだぁ？」

すると、次はゴッドドラモンが戦う態勢に入る。

ゴッドドラモン「オレが相手だ。小僧、ホーリードラモンのように甘くはないぞ。」

リュウギ「分かってるさ…。行くぞ。」

ソニックドラモン「おう？」

リュウギとソニックドラモンはキリッとした目付きで戦う態勢に入る。

チンロンモン「それでは、第2の試練、始め？」

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ６０　～光の神獣　ホーリードラモン？四大竜の試練、再臨？～（後書き）

見事、第１の試練突破？

次回はリュウギ＆ソニックドラモンＶＳゴッドドラモン？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ６１　～究極のチームプレー？龍を召喚せし神龍　ゴッドドラモン？～（前編）

第２の試練、開始？

相手は神龍のゴッドドラモン？

リュウギとソニックドラモンはどう戦うのか？

Ｅｐ６１スタート？

ＥＰ６１　～究極のチームプレー？龍を召喚せし神龍　ゴッドドラモン？～

～アムスタエル神殿　秘密地下室～

チンロンモン「では、第２の試練、始め？」

ゴッドドラモン「では…。」

すると、ゴッドドラモンは自らの拳と拳をぶつる。

ソニックドラモン「来るぞ、リュウギ？」

リュウギ（何をする気だ…？）

リュウギとソニックドラモンは戦う態勢に入って警戒する。

ゴッドドラモン「『召喚？』」

すると、右手の手甲から紅炎のアモンが召喚され、左手の手甲には蒼雷のウモンという小型龍デジモンが召喚された。

アモン「ひゃっほーう？久方ぶりの客人だぜ♪」

ウモン「御呼びですか、御主人様？」

リュウギ「デジモン…？」

ソニックドラモン「な、なんじゃこりゃ？」

アモン「お？コイツらが今回の相手か？」

ソニックドラモン「おいテメェ、３対２だなんて卑怯だと思わねぇのか？」

リュウギ「おい、そんな事言ったら俺達にもふりかかるからやめてくれ…。」

リュウギはすかさずツッコム。何せ先程、２対１。…いや、３対１でホーリードラモンと戦ったからだ。

ソニックドラモン「あ、あれは究極体だからしょうがねぇだろ？オレ（成熟期）＋ナイトモン（完全体）＋リュウギ（？）＝ホーリードラモンと同じ戦闘力だから釣り合うだろ？」

リュウギ「おい、何だよその計算は…？つうか俺のレベルはどの辺なんだよ…？」

すると、アモンは高らかに笑う。

アモン「面白ぇなお前ら♪オレ、そういうの好きだぜ♪」

ウモン「単なるバカです。根本的に…。」

ウモンは呆れてため息をつくと、ソニックドラモンは鋭い目付きで睨む。

ソニックドラモン「んだとコルァァァッ？」

リュウギ「敵の挑発に乗るな、ソニックドラモン！」

ウモン「あなたも、相手のペースに乗っちゃ駄目ですよ…。」

リュウギとウモンはお互いに説教をする。

ソニックドラモン・アモン「分かってるっつうの！」

ホーリードラモン「なんか、似てますね…。」

ホーリードラモンは苦笑いする。

アモン「よっしゃ！オレはあのデケェのやらせてくれ！」

ウモン「待ってください。あのデジモンは私がやります。」

アモン「はぁ？何でだよ？」

ウモン「理由はただ一つ。あなたはあのデジモンとよく似ている。恐らく、力は互角だと思いますよ…。」

アモン「んじゃ、オレはあのガキをやるのかぁ？」

ウモン「前の試練だって、あの人間にやられたじゃないですか…。」

アモン「そ、それは…。」

ウモン「聞く所によると、リュウギはあの人間の息子らしいですよ…。」

アモン「なぬ？ホントか？」

ウモン「嘘言ってどうするんですか…。」

ウモンは呆れた顔でツッコム。

アモン「だったら話は別だ！オレはあのガキをやるぜ！」

ウモン「決まりですね…。」

するとアモンはリュウギの方へ、そしてウモンはソニックドラモンへと二手に分かれた。

アモン「来いよ…。遊んでやるぜ♪」

リュウギ（コイツか…。）

ウモン「お手柔らかに…。」

ソニックドラモン「ケッ！オレは別にどっちだっていいけどな！」

すると、アモンはソニックドラモンの言葉に反応する。

アモン「んだとテメェ！このガキ片付けたら、滅多打ちにしてやるから覚悟してろよ！」

ソニックドラモン「その台詞、そっくりそのまま返してやるよバーカ！」

リュウギ・ウモン「おい、戦う相手はこっちだぞ。」

リュウギとウモンは同時にツッコム。

リュウギ「とにかく、先手必勝だ？」

リュウギはアルカナムでアモンを切りに掛かる。すると、アモンはギリギリに交わされた。

アモン「テメェ、人の喧嘩にいちいち首突っ込んでくんじゃねぇよ？」

リュウギ「お前の相手はだろうが？」

リュウギはありったけの声でツッコム。

アモン「まぁいい、さっさと片付けてやる！」

アモンの身体から灼熱の炎が、纏う。

リュウギ「炎？」

アモン「行くぜぇぇぇ？」

アモンは勢いをつけてリュウギに突進する。

リュウギ（早い？）

リュウギは間一髪で突進を、交わした。

アモン「喰らいな？」

アモンはすぐに切り替えて口から5つの火炎弾を放つ。

リュウギ「くっ？」

リュウギはアルカナムで防ぐ。しかし、耐えきれず飛ばされてしまう。

リュウギ「うわっ？」

一方、リュウギの声に反応するソニックドラモン。

ソニックドラモン「リュウギ？」

その時、ウモンがソニックドラモンの懐に入る。

ウモン「隙だらけですね…。はぁ？」

ウモンは身体から蒼い稲妻が生じ、ソニックドラモンに体当たりした。

ソニックドラモン「ぐはっ？」

ソニックドラモンは後方へと下がって態勢を立て直す。

ソニックドラモン「この野郎、不意打ちしやがって…。」

ウモン「余所見するあなたが悪いんですよ…。それより、人の心配より自分の心配したらどうなんです…？」

ソニックドラモン「うるせぇ？『ヒドゥンスラッシュ？』」

ソニックドラモンは両肘のブレイドを構えると漆黒の炎に包まれ、ウモンを切りに掛かる。

すると、ウモンは一瞬にして姿を消した。

ソニックドラモン「なに？」

ウモン「あなたの攻撃、無駄だらけですね…。はぁ？」

ウモンの身体から強力な電気を流した。

ソニックドラモン「うわぁぁぁぁぁぁ？」

ソニックドラモンは地面に手がつく。

リュウギ・ソニックドラモン「ハァ…ハァ…。」

アモン「おいおい、まさかこれで終わりだなんて言うじゃないだろうなぁ？」

ウモン「よく第1の試練したもんだ…。それとも、マグレですかね…。」

リュウギ（あの積極的な攻めとパワー…。）

ソニックドラモン（冷静な判断してやがって…。全く動きが読めねぇ…。これじゃまるで…）

リュウギ・ソニックドラモン（俺（オレ）のパートナーと戦ってるみたいだ

…。）

リュウギとソニックドラモンはギリッと歯を食いしばる。

アモン「テメェは結局、オレには勝てねぇんだよ？」

ウモン「では、そろそろ終わりにしましょうか…。」

すると、アモンとウモンはトドメを刺そうと態勢を立てる。

リュウギ「くっ…！」

（もし俺が、ソニックドラモンの立場だったら…。）

ソニックドラモン（もしオレが、リュウギだったら…。）

アモン「最後にお見舞いしてやるぜ？」

アモンの身体から灼熱の炎を纏い、リュウギに向かって突進する。

リュウギ（ソニックドラモンだったら…。）

すると、リュウギはアルカナムを地面に突き刺して低く構える。

アモン「バカが！諦めたか！」

一方、ソニックドラモンは低い態勢に入る。

ウモン「終わらせてやりますよ！」

ウモンの身体から蒼い稲妻が生じ、電光石火のごとくソニックドラ

モンに接近戦する。

ソニックドラモン（リュウギだったら…。）

すると、ソニックドラモンはゆっくりと両眼を閉じた。

ウモン「諦めたようですね！」

アモンとウモンは同時にリュウギとソニックドラモンにトドメを刺す。

アモン・ウモン「終わりだ？」

その時ソニックドラモンはウモンの動きを読んだのか、両眼を開いた。

そしてリュウギは片手でアモンの突進を受け止めた。

アモン・ウモン「？」

リュウギ・ソニックドラモン「こうする？」

リュウギはそう言ってありったけの力で掴んだアモンを地面に叩き付けた。

そしてソニックドラモンは目にも見えない早さで、両肘のブレイドでウモンを切り刻んだ。

アモン（何だと？）

ウモン（バカ…な？）

ゴッドドラモン「ほぅ…。」

アモンとウモンは力尽きて倒れた。

リュウギ・ソニックドラモン「ハァ…ハァ…。」

ゴッドドラモン（なるほど…。ソニックドラモンは積極性を抑えて冷静さを生み、そしてリュウギは冷静さを抑えて積極性を生んだか…。）

リュウギとソニックドラモンは息を荒くしながら目を見合わせる。

ソニックドラモン「リュウギ、お前が無茶するなんて珍しいな…？」

リュウギ「そういうお前こそ、冷静になるなんて珍しいな…。」

ソニックドラモン「これはアレだ。イメチェンだ。」

リュウギ「どんなイメチェンだよ…。」

リュウギは小さくツッコム。すると、アモンはゆっくりと立ち上がる。

アモン「クソ、まだ終わっちゃいねぇぜ！」

ゴッドドラモン「アモン。今回も奴らの方が一枚上手だ。後はオレがやる。」

ウモン「はい。御役に立てなくて申し訳ありません…。」

ウモンは静かに消え去った。

アモン「ケッ、わーったよ！」

アモンは素直に負けを認めて静かに消え去った。

ソニックドラモン「さて、次はテメェの番だぜ！」

ゴッドドラモン「実に面白い…。オレをガッカリさせるなよ…？」

ゴッドドラモンは戦う態勢に入ると、リュウギとソニックドラモンは警戒する。

リュウギ「ソニックドラモン、やれるか…？」

ソニックドラモン「無理って言うと思うか…？」

ソニックドラモンは即答すると、リュウギは静かに笑う。

リュウギ「そうだな…。行くぞ？」

リュウギはＤ－アクセルをソニックドラモンに翳した。

ソニックドラモン「ソニックドラモン、超進化？」

『ドラグナモン？』

ゴッドドラモン「では、行（ゆ）くぞ？『ゴッドフレイム？』」

ゴッドドラモンは聖なる気を炸裂させた炎がリュウギ達に襲い掛かる。

ドラグナモン「リュウギ、乗れ！」

リュウギはドラグナモンの肩に乗り、ドラグナモンは素早く交わした。

ゴッドドラモン「逃がさん！『ゴッドフレイム？』」

ゴッドドラモンは全く反撃の隙を与えない。

リュウギ「クソ、避けるだけでも精一杯だ…。」

ドラグナモン「どうすんだよリュウギ？」

リュウギ「考えてる！」

リュウギはどうすればいいのか考えている。

ドラグナモン「こうなったら、デッドリーアートルムでぶっ放してやる！」

リュウギ「ドラグナモン！ここで無闇に攻撃してもダメだ！」
（奴はそう簡単に引っかかるような奴じゃない…。父さんはあの時、どうやってゴッドドラモンを…？……？）

すると、リュウギはハッとする。

リュウギ
「ドラグナモン、デッドリーアートルムだ？」

ドラグナモン「でも？」

リュウギ「一か八かの賭けに出る！」

ドラグナモン「分かったぜ？『デッドリーアートルム？』」

ドラグナモンは背中に装備しているロケットエンジンを上空へと打ち上げた。すると、ロケットエンジンに仕込まれた大量の追尾型ミサイルを一斉に発射される。

リュウギ「今だ！」

リュウギはドラグナモンの肩から降り、アルカナムを地面に突き刺した。

リュウ「デジサモン、発動？」

一方、大量の追尾型ミサイルはゴッドドラモンに向かっていく。

ゴッドドラモン「こんなもの！『ゴッドフレイム？』」

ゴッドドラモンは聖なる気を炸裂させた炎を放ち、全てのミサイルを破壊する。すると、凄まじい爆煙が発生してゴッドドラモンは視界をリュウギ達を見失う。

ゴッドドラモン「お前達の行動は既に分かっている…。」

すると、リュウギが爆煙を切り開いてアルカナムを構える。

ゴッドドラモン「やはりな…。」

ゴッドドラモンは握り拳を作ってリュウギを殴り飛ばそうとしたその時、リュウギは一瞬にして姿を消した。

ゴッドドラモン「なに？」

リュウギ「こっちだ？」

すると背後から、リュウギが爆煙を切り開いて現れる。

ゴッドドラモン「嘗めるな？」

ゴッドドラモンは叩き落とそうとするが、またもや姿を消した。

ゴッドドラモン「小僧、一体何をしたんだ？」

ドラグナモン「喰らいやがれ！」

すると今度は爆煙の中からドラグナモンが現れる。

ゴッドドラモン「小細工な事を？『ゴッドフレイム？』」

ゴッドドラモンは聖なる気を炸裂させた炎を放ち、ドラグナモンにぶつけた。しかし、ドラグナモンはリュウギと同じく姿を消した。

ゴッドドラモン「？」

ドラグナモン「小細工だぁ？チゲェよ…。これはなぁ…」

その時、背後からドラグナモンが現れる。

ドラグナモン「立派なチームプレーだ？」

ドラグナモンはゴッドドラモンを取り押さえた。

ゴッドドラモン「なに？」

ドラグナモン「そうだろ、リュウギ？」

すると、リュウギはゴッドドラモンの頭の上に乗っていた。

ゴッドドラモン「小僧、いつの間にオレの…？一体何をした？」

リュウギ「ライラモンのお陰さ…。」

爆煙が消え去ると、ライラモンが嬉しそうに飛び跳ねていた。

ライラモン「やりましたねリュウギ様～？」

ゴッドドラモン「なんだと？」

リュウギ「ミサイルを破壊すると計算に入れて、その隙にデジサモンをしたんだ。それでライラモンの技『アン・ドゥ・ポラン』で花粉を爆煙内に撒き散らし、アンタを幻惑させていたんだ。幻惑に囚われている間に、俺はアンタの頭に乗ったのさ…。」

ゴッドドラモン「一か八かの賭けに出た…という事か？」

リュウギ「きっと父さんならこうするだろうと思ってな…。」

すると、ゴッドドラモンは高らかに笑う。

ゴッドドラモン「流石はリュウの息子だ…。完敗だ…。」

リュウギはゴッドドラモンの角をそっと触った。

チンロンモン「第2の試練、突破だ…。」

リュウギはゴッドドラモンの頭から飛び降りると、ライラモンはリュウギに抱き付いた。

ライラモン「リュウギ様～?私はできると信じてましたわ～?私とリュウギ様の愛の勝利ですわ～?」

リュウギ「バカッ?離れろよ?」

リュウギは引き離そうとするが、ちっとも離れてくれない。

ドラグナモン「リュウギ、リターンしたら?」

リュウギ「そうだった!リ…」

リュウギはリターン機能をすると、ライラモンは力が抜けて座り込む。

ライラモン「御代官様～、どうかお許しを～?」

リュウギ「やかましわッ?リターン?」

リターン機能をすると、ライラモンは静かに消えて行った。リュウギはホッと安心する。

リュウギ「ミソラがいたら、殺されてたな…。(汗)」

ドラグナモン「やったな、リュウギ!」

リュウギ「あぁ。」

チンロンモン「そなた達の作戦、見事だ…。ホーリードラモン、治療を。」

ホーリードラモンは両眼を閉じると、リュウギとドラグナモンの傷を癒した。

ホーリードラモン「第2の試練突破おめでとう。けど、油断大敵だよ。」

リュウギ「あぁ。」

ドラグナモン「分かってるって♪んで、次はどいつだ?チンロンモンか?」

チンロンモン「いや、次の第3の試練は…」

???「グォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ?」

すると、紅き竜が凄まじい咆哮を上げる。それは、邪竜のメギドラモンだった。

メギドラモン「グルルルル…。」

チンロンモン「第3の試練は邪竜のメギドラモンだ。」

すると、リュウギとドラグナモンは目を丸くしながら苦笑いする。

ドラグナモン「へ……？」

リュウギ「マジかよ…。」

ホーリードラモン（リュウ達と同じ反応だ…。）

チンロンモン「では、第3の試練、始め？」

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ６１　～究極のチームプレー?龍を召喚せし神龍　ゴッドドラモン?～（後

次回は第３の試練！

相手は邪竜のメギドラモン？

果たしてリュウギ達はどう戦うのか？

次回もお楽しみに？

ＥＰ６２　～最凶の邪竜　メギドラモン？エクシードサモン、発動？～（前書き）

～デジモン　ＪＥＴ～

一方、カズマとネレイスモンは突如現れたイビルガの大群と戦い、既に片付いていた。

カズマ「よし、片付いたぜ♪」

プレシオモンはネレイスモンへと退化し、カズマの左腕に巻き付く。

ネレイスモン「ふぃ～、疲れた…。」

カズマ「お疲れさん。」

ネレイスモン「リュウギとナルガモン、大丈夫かなぁ？」

カズマ「今頃、逃げてたりして…♪」

カズマは冗談気に笑う。

ネレイスモン「とにかく、帰ってくるまで待とうよ！」

カズマ「そうだな。」

第３の試練、相手は最凶と呼ばれた邪竜のメギドラモン！

果たしてどう戦うのか？

Ｅｐ６２スタート？

ＥＰ６２　～最凶の邪竜　メギドラモン？エクシードサモン、発動？～

～アムスタエル神殿　秘密の地下室～

リュウギ・ドラグナモン「どわぁぁぁ

ドラグナモンは逃げながらリュウギに問うと、リュウギはありったけの声でツッコム。

リュウギ「知るかッ?むしろ俺が知りてぇよッ?」

チンロンモン「因みに、リュウはメギドラモンを倒して角を触った…。」

リュウギ「なに?」

ドラグナモン「あんなヤベェのどうやって倒したんだよ?」

メギドラモン「グォォォォォォォォォォォォォォ?」

ドラグナモン「こうなったら!リュウギ、乗れ?」

リュウギ「わかった!」

リュウギはドラグナモンの肩に飛び乗る。ドラグナモンは背中に装備してるロケットエンジンを噴射させて上空へと飛び上がった。

ドラグナモン「喰らいやがれ?『デッドリーアートルム?』」

ドラグナモンはロケットエンジンから大量の追尾型ミサイルを発射させた。

メギドラモン「?」

すると、追尾型ミサイルはメギドラモンに直撃し、爆煙が舞い上がる。

メギドラモン「グォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ？」

リュウギ「当たった？」

ドラグナモン「へっ、ざまぁねぇな？」

爆煙が去ると、メギドラモンの身体には傷一つ付いていなかった。

リュウギ「なに？」

ドラグナモン「デッドリーアートルムが効いてねぇ…？」

メギドラモン「『ヘルハウリング？』」

メギドラモンは地獄の咆哮と言われる強力な衝撃波を放つ。

リュウギ・ドラグナモン「うわぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギとドラグナモン咆哮の衝撃波に飛ばされ、やがて地面に落ちる。

ドラグナモン「クソ…、バカデケェ声出しやがって…。」

ドラグナモンは立ち上がり両肘に装備する鋭い刃、ヒドゥンアサルトを構えてメギドラモンに接近する。

ドラグナモン「喰らいやがれ！『ヒドゥンセイバー？』」

すると、メギドラモンは巨大な口でヒドゥンアサルトを受け止めた。

ドラグナモン「なに？」

メギドラモン「グルルルル…。」

すると、メギドラモンはヒドゥンアサルトを噛み砕いた。

ドラグナモン「？」

メギドラモン「グォオオオオオオオオオオオオオオ？」

メギドラモンは握り拳を作り、豪快にドラグナモンを殴り飛ばした。

ドラグナモン「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギ「ドラグナモン？」

メギドラモン「グォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ？」

メギドラモンは凄まじい咆哮を上げる。

リュウギ（ドラグナモンの技が通用しない…。こうなったら、デジサモンで…）

リュウギはアルカナムを地面に突き刺し、デジサモンを発動しようとするが、ピタリと手が止まる。

リュウギ「……。」

（メギドラモンに対向できるデジモンがいない…。これじゃ、出したって同じじゃないか…。）

リュウギは悔しさの余りに歯をギリッと食いしばる。

ドラグナモン「まだだ…。」

すると、ドラグナモンはゆっくりと立ち上がる。

リュウギ「ドラグナモン？」

ドラグナモン「リュウギ…、オレ達は何のために戻ってきたんだよ…？ここで簡単に諦めていいのか…？」

リュウギ「ドラグナモン…。」

すると、リュウギは小さく笑い、デジサモンをやめてアルカナムを抜き取る。

リュウギ「当たり前だ？俺達は一刻も早く、試練を乗り越えなきゃならないんだ！」

すると、リュウギの身体から聖なる光りが生じる。

チンロンモン（あれは？）

ドラグナモン「よっしゃ？行くぜ？」

リュウギ「あぁ？」

リュウギとドラグナモンはメギドラモンに攻撃を仕掛ける。

メギドラモン「グォオオオオオオオオオオオオオオ？」

メギドラモンは咆哮を上げ、鋭い爪を立ててドラグナモンに襲い掛かる。

ドラグナモン「テメェの攻撃は既に…」

すると、ドラグナモンは回避してメギドラモンの腕を掴む。

メギドラモン「？」

すると、リュウギはドラグナモンの背中を踏み台にして高く飛び上がり、アルカナムを振りかぶる。

リュウギ「見切っている？」

リュウギはありったけの力をアルカナムに乗せて振り下ろすと、メギドラモンの頭に直撃する。

メギドラモン「？」

ドラグナモン（よし！）

リュウギ（やったか？）

すると、メギドラモンの怒りが爆発し、今までの倍以上の咆哮を上げた。

メギドラモン「グォオオオオオオオオオオオオオオ

リュウギ・ドラグナモン「？」

すると、メギドラモンは暴走してリュウギとドラグナモンを殴り飛ばした。

リュウギ・ドラグナモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ホーリードラモン「リュウギ君、ドラグナモン？」

ゴッドドラモン「とうとう暴走してしまったな…。リュウの息子とは言えども、残念だがここまでのようだな…。」

チンロンモン「それは違うぞ、ゴッドドラモン…。」

ゴッドドラモン「なに？」

チンロンモン「よく見てみろ…。」

リュウギとドラグナモンは力を振り絞って立ち上がると、２人の眼はまだ完全に戦意を失っていなかった。

リュウギ・ドラグナモン「ハァ…ハァ…。」

チンロンモン「彼らの眼は、まだ死んでなどおらぬ…。」

ドラグナモン「大丈夫か、リュウギ…？」

リュウギは横腹を押さえながら口を開く。

リュウギ「お陰様で、あばらを何本かやられたけどな…。ドラグナモンは…？」

ドラグナモンの身体は、既にボロボロだが、何もなかったかのように小さく笑う。

ドラグナモン「へへっ、こんなのヘッチャラだぜ…。」

この光景を目にしたゴッドドラモンは驚愕する。

ゴッドドラモン「刃が折れてもう丸腰だというのに、なんて無茶な奴らだ…？」

ドラグナモン「刃が折れたから何だってんだよ…。オレ達の心はまだ折れちゃいねぇ…。」

リュウギ「それに、俺達はここで負ける訳にはいかないんだ…。」

リュウギ・ドラグナモン「お前なんかに、俺達の絆を折られてたまるかよ？？」

その時、Ｄ－アクセルから聖なる光りが生じる。

リュウギ「？」

ドラグナモン「なんだ？」

？？？「リュウギの言う通りだ？」

するとD－アクセルから声が聞こえてくる。リュウギはD－アクセルの画面を見ると、画面にはブイモンが映っていた。

ブイモン「リュウギ、オレも一緒に戦わせてくれ！」

ブイモンの身体には光と赤が混じった優しい光のオーラを纏っていた。

リュウギ「ブイモン、どうしたんだよその光りは？」

ホーリードラモン「リュウギ君、その光りはただのデジサモンじゃない。それはエクシードサモンを発動させる事ができる合図よ！」

リュウギ「エクシード…サモン…？」

ドラグナモン「エクシードサモンって、エグザが発動してたアレか？」

ホーリードラモン「エクシードサモンは本来、デジサモンの強化版であり、最後の切り札でも言える。でも、このエクシードサモンを使うとかなりの力を使うため、体力が大幅に消耗するから注意して！」

リュウギ「最後の…切り札…。」

ブイモン「オレはリュウギ達の力になりたいんだ？だから頼む、オレも一緒に戦わせてくれ！」

リュウギ「ブイモン…。」

メギドラモン「グォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ？」

メギドラモンは凄まじい咆哮を上げながらリュウギに接近する。

ドラグナモン「来るぞリュウギ？」

すると、リュウギの目付きがギリッとする。

リュウギ「分かった。俺はお前に賭ける？」

リュウギはアルカナムを回転させ、地面に突き刺してありったけの声で叫ぶ。

リュウギ「エクシードサモン、発動？？」

すると、地面からデジ文字が描かれた巨大な魔法陣が現れる。

リュウギ「ブイモン、エクシード進化だ？」

すると巨大な魔法陣に赤い光りが生じる。ブイモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ブイモン「ブイモン、エクシード進化？」

『マグナモン？』

その姿は、黄金のクロンデジゾイドに包まれた聖騎士型デジモンだった。リュウギはＤ－アクセルでマグナモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「マグナモン、アーマー体、聖騎士型、ワクチン種、

必殺技はエクストリーム・ジハード。」

リュウギ「これが…エクシードサモンの力…？」

マグナモン「ドラグナモン、力を合わせて戦おう？」

ドラグナモン「おう？」

メギドラモン「『メギドフレイム？』

メギドラモンは全ての物を灰にする地獄の炎を吐く。

ドラグナモンとマグナモンは素早く交わし、メギドラモンに接近する。

ドラグナモン「喰らいやがれ？『ヒドゥンセイバー？』」

ドラグナモンはもう片方のヒドゥンアサルトでメギドラモンを切りに掛かる。すると、メギドラモンは巨大な口でヒドゥンアサルトを受け止めた。

ドラグナモン「貰った？」

攻撃を読んだドラグナモンはもう片方の鋭い爪でメギドラモンの顎にアッパーをかました。

メギドラモン「？」

マグナモン「まだだ？」

すると上空からマグナモンが現れ、両手を組んでメギドラモンの頭を打って地面に叩き付けた。

メギドラモン「グォォォォォォォォォォォォ？」

リュウギ「効いてる？」

すると、怒り狂ったメギドラモンは凄まじい咆哮を上げる。

メギドラモン「グォォォォォォォォォォォォ

マグナモンは唸り声を上げると、メギドラモンの爪をへし折った。

メギドラモン「？」

マグナモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

そして、マグナモンは握り拳を作ってメギドラモンの鼻先を殴り飛ばした。

メギドラモン「グォォォォォォォォォォォォォォォォ？」

メギドラモンは勢いよく地面に向かって仰向けに倒れる。

リュウギ「凄い…。」

ドラグナモン「すまねぇ、マグナモン。」

マグナモン「あぁ。ドラグナモン、今がチャンスだ！」

ドラグナモン「おう！行くぜ？」

ドラグナモンとマグナモンは必殺技の態勢に入る。

マグナモン「『エクストリーム・ジハード？』

マグナモンはパワーを極限まで出力して、全身からエネルギー波を放射する。

ドラグナモンは背中に装備するロケットエンジンから追尾型ミサイ

ルを大量に発射させる。そして胸のハッチを開けて、ビーム砲を放った。

ドラグナモン「終わりだ？『デッドリーアートルム？』」

２つの必殺技が１つとなってメギドラモンに直撃した。

メギドラモン「グォォォォォォォォォォォォォォォォォォ？」

メギドラモンは力尽きて、地面に倒れる。

リュウギ「今の内に！」

リュウギはメギドラモンの元へと駆け付けて、メギドラモンの角を触った。

チンロンモン「見事だ…。第３の試練、突破だ…。」

ドラグナモン「よっしゃ！メギドラモンを倒したぜ？」

リュウギ「ありがとな、マグナモン。」

マグナモン「必要になったら呼んでくれ。いつでも力になるよ！」

すると、エクシードサモンの効果が切れ、マグナモンは静かに消え去った。

リュウギ「うっ…。」

マグナモンが消え去ったとたん、リュウギはエクシードサモンを発

動したため、力を失い地面に手をつく。

ドラグナモン「リュウギ？」

リュウギ「力が…入らねぇ…。これが…エクシードサモンの効果か…。」

ホーリードラモン「そう…。それがエクシードサモンの短所よ…。待ってて、今から治療するから。」

ホーリードラモンは眼を閉じると、リュウギとドラグナモンの傷を癒した。

ドラグナモン「サンキュ！」

リュウギ「ありがとな…。」

（エグザはこうなる事を分かって俺達をあの門に放り投げたのか…？）

リュウギはふと、エグザの事を思う。すると、リュウギはチンロンモンに問う。

リュウギ「チンロンモン、エグザはあれからどうなったんだ…？」

チンロンモン「エグザはそなた達を現実世界に送った後、エグザはヴァヌムス率いるダークスと戦った。」

ドラグナモン「アイツ1人でか？」

チンロンモン「しかし、エクシードサモンを使ったためエグザは力

を失い、致命傷を負ってしまったのだ。」

すると、リュウギとドラグナモンは驚愕する。

ドラグナモン「？」

リュウギ「そんな…？」

チンロンモン「案ずるな…。何とか私の力でエグザを助けた。」

リュウギ「そうか…。」

チンロンモン「リュウギよ、デジタルワールドを救うにはそなた達エクセリオンが必要だ…。そなたはエグザと協力し合わなければならないのだ。」

リュウギ「でもアイツは父さんを殺した…。俺はまだアイツを許さない…。」

チンロンモン「本当にそう言えるのか…？」

リュウギ「どういう…事だ…？」

チンロンモン「知りたくば、第４の試練を突破する事だな…。」

すると、チンロンモンは戦う態勢に入る。

チンロンモン「最後は私が相手だ…。リュウギ、そしてドラグナモンよ、そなた達の力を見せてみろ？」

||To Be Continued....

Ｅｐ６２　～最凶の邪竜　メギドラモン？エクシードサモン、発動？～（後書き）

次回はリュウギ＆ドラグナモンｖｓチンロンモン？

では、今回活躍したエクシードサモンについて詳しい説明をします。

エクシードサモン（訳：極限を超えた進化）は単純に言えば、デジサモンの強化版であり究極の切り札でもあります。Ｅｐ３２で、リュウギがブイモンとコントラクトした時に起きた現象（いつものオーラではなく、光と赤が混じった優しい光のオーラのこと）。これが発生するとエクシードサモンを発動させることができます。エクシードサモンの効果は、特定のデジモンへと進化する事ができる。実際、Ｅｐ５１でエグザがセラフィモンをエクシードサモンした時、元々はエンジェモンであり、エクシードサモンによってセラフィモンに進化したのです。しかし、切り札とは言えどもエクシードサモンにはいくつものデメリットがあります。

1．エクシードサモンを発動させたエクセリオンは、かなりの力を使うため、エクシードサモンが解けた後、体力が大幅に消耗する。

2．エクシードサモンしたデジモンは日にちに関係なく、エクセリオンとパートナーデジモンの絆が最大に溜まった時に発動する事ができる。（絆を最大に溜めるのは非常に難しい）

以上の２つです。

強大な敵と対等に戦える唯一の鍵ですね…。

次回はついにドラグナモンが…？

お楽しみに？

Ｅｐ６３　～蒼き青龍　チンロンモン？究極なる絆の進化　エクシードモン？～

ついに第４の試練開始！

そしてついにドラグナモンが究極進化する？

Ｅｐ６５スタート？

ＥＰ６３　～蒼き青龍　チンロンモン？究極なる絆の進化　エクシードモン？～

～アムスタエル神殿　秘密の地下室～

チンロンモン「では、第４の試練を始める！」

リュウギ「あぁ？」

ドラグナモン「来やがれ？」

チンロンモン「『蒼雷？』」

チンロンモンは天から蒼い雷が降り注ぐ。

リュウギ・ドラグナモン「？」

リュウギとドラグナモンは間一髪で蒼雷を交わした。

ドラグナモン「あっぶねぇ…？」

リュウギ「あれじゃまともに近づけない…。どうすれば…。」

ドラグナモン「だったらオレに任せろ？『デッドリーアートルム？』」

ドラグナモンは背中に装着するロケットエンジンから追尾型ミサイルを大量に発射させる。

チンロンモン「無駄だ…。」

チンロンモンは雷を放つと、大量のミサイルを一気に消滅させた。

ドラグナモン「なに？」

チンロンモン「そなた達の力はこんなものか…？」

チンロンモンは次々と天から蒼い雷を降らせ、ドラグナモンは直撃する。

ドラグナモン「ぐはっ？」

リュウギ「ドラグナモン？このっ？」

リュウギはガンブレード、アルカナムのトリガーを引いてチンロンモンを狙い撃つ。

チンロンモン「そんなもの、私には効かん！」

チンロンモンは雷を放つと弾丸を全て消滅させた。

リュウギ「くっ？」

（流石はデジモンの神だな…。）

チンロンモン「どうした、もう終わりか？」

すると、ドラグナモンはゆっくりと立ち上がり、指をピシッとチンロンモンに向けた。

ドラグナモン「へっ！オレはまだ本気の『ほ』の字も出しちゃいね

ぇぜ？」

リュウギ「まだ始まったばかりだ…。勝負はまだまだこれからだ？」

ドラグナモン「リュウギ、ぜってぇにこの試練を乗り越えようぜ！」

リュウギ「あぁ？行くぞドラグナモン？」

リュウギはＤ－アクセルをドラグナモンに翳した。

リュウギ「ＥＸモード、発動？」

ドラグナモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

すると、ドラグナモンの身体の周りには激しい突風が舞う。

チンロンモン「……。」

突風が去ると、ドラグナモンの身体には光りのオーラに包まれていた。

リュウギ「俺達はここで負ける訳にはいかないんだ…。はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギは雄叫びを上げると、身体が聖なる光りのオーラに包まれる。

ホーリードラモン「まさか、リュウギ君もＥＸモードを？」

リュウギ「違う…。これは絆の力によって生まれた力、キズナドラ

イブだ…。」

ドラグナモン「リュウギ、ＣＯＯＬに反撃と行こうぜ？」

リュウギ「あぁ？」

究極の力を発揮した２人は、先制攻撃を仕掛けた。

チンロンモン「『蒼雷？』」

チンロンモンは天から蒼い雷を放つと、リュウギとドラグナモンは一瞬にして姿を消した。

ドラグナモン「こっちだぜ？」

チンロンモンの左右にリュウギとドラグナモンが現れて挟み撃ちをする。

リュウギ「これで決める？」

リュウギとドラグナモンはワザを繰り出そうとしたその時だった。

チンロンモン「フッ…。」

チンロンモンは微挟み撃ちされているにも関わらず、微かに笑みを浮かんでいたのだ。

リュウギ「？」

（笑っている？）

チンロンモン「『雷神之舞！！』」

チンロンモンは身体全体から雷撃のバリアを発生させて身を守る態勢に入った。

リュウギ・ドラグナモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギとドラグナモンは電撃のバリアに直撃し地面に落下する。素早く受け身をとる。

リュウギ・ドラグナモン「ハァ…ハァ…。」

リュウギ「まさか…、既に見切っていたのか…？」

チンロンモン「言ったハズだ。私はそなた達の戦いを見て来たと…。」

ドラグナモン「だったらこれでも喰らいやがれ？『デッドリーアートルム？』」

ドラグナモンはロケットエンジンから追尾型ミサイルを大量に発射させ、そして胸のハッチを開けて強力なビーム砲を放った。

チンロンモン「無駄だ…。『蒼雷？』」

チンロンモンは蒼い雷を放つと、ドラグナモンの技を消滅させた。

ドラグナモン「なに？」

リュウギ「ＥＸモードでも効かないなんて…？」

チンロンモンは小さくため息をつく。

チンロンモン「やはり、今のそなた達ではこの試練を乗り越える事はできないな…。」

ドラグナモン「んだとコラァ？」

リュウギ「どういう事だ…？」

チンロンモン「そなた達の絆はまだ完全ではないという事だ。」

リュウギ「俺達の絆が…完全じゃない…？」

チンロンモン「そなた達の絆の力はまだ極限に経ってしていないのだ…。」

ドラグナモン「だったらどうすりゃいいんだよ？」

チンロンモン「それは、己自身で見つける事だ…。では、続けるぞ！」

チンロンモンは天から蒼い雷を放つと、リュウギとドラグナモンは素早く交わした。

ドラグナモン「クソッ！どうすりゃいいんだよ？」

リュウギ（これでも俺達の絆が完全じゃない…。チンロンモンは一体俺達に何を伝えたかったんだ…？）

リュウギは考えていると、突然ドラグナモンが叫ぶ。

ドラグナモン「リュウギ、危ない？」

気が付くと、蒼い雷がリュウギに襲い掛かる。

リュウギ（しまっ…？）

リュウギは思わず目を閉じる。しかし身体に全く痛みを感じない。

リュウギは目を開けると、ドラグナモンが身体を張ってリュウギを守っていた。

リュウギ「ドラグナモン？」

ドラグナモン「…バカヤロが。余所見してんじゃねぇよ…。」

ドラグナモンは地面に手をつくとＥＸモードが解けてしまう。

リュウギ「ドラグナモン、しっかりしろ？」

ドラグナモン「へへッ…、こんなのどうって事ねぇよ…。それより…ＣＯＯＬに…反げ…くっ？」

ドラグナモンは立ち上がろうとする。しかしＥＸモードを発動したため体力がごく僅かしかなく、立ち上がるだけでも精一杯だった。

リュウギ「無茶だドラグナモン？後は俺に任せとけ！」

ドラグナモン「無理、無茶、無謀。そんなもんに逃げてどうするんだよ…？リュウギが戦ってるのにオレがこんな所で寝てられるかっ

ての…。」

リュウギ「ドラグナモン…。」

ドラグナモン「テメェが何て言おうと、オレはやるぜ…。なんたって、オレとお前はパートナーだからな…。」

ドラグナモンはそう言って小さく笑みを浮かべた。

ドラグナモン「チンロンモン！テメェが神だろうが仏だろうが関係ねぇ！全力でテメェを超える？」

チンロンモン「ほぅ、ではまたムゲンマウンテンと同じような過ちが起きたらどうするのだ…？」

その時、リュウギは目をキリッとさせて口を開く。

＞ｉ２９０６９―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

チンロンモン「？」

その時、チンロンモンの瞳にリュウギの背後からリュウの面影が微かに映る。

ドラグナモン「リュウギ…。」

リュウギはドラグナモンの方に向く。

リュウギ「ドラグナモン、俺はみんなを守ろうといつも1人で戦っ

ていた…。俺は大切な事を忘れていたんだ…。」

ドラグナモン「リュウギ、お前は1人じゃねぇ…。オレがいるじゃねぇか…。」

リュウギ「あぁ…。」

リュウギは頷き、そっと手を差し伸べた。

リュウギ「一緒に戦おう、ドラグナモン…。」

ドラグナモン「たりめぇだ!」

ドラグナモンは静かに笑い、リュウギの手に触れたその時、リュウギのD－アクセルに聖なる光りが生じる。

ホーリードラモン「D－アクセルが反応してるわ?」

トクン…トクン…

ドラグナモン（心臓の鼓動が聞こえてくる…。リュウギの心臓の鼓動か…?）

リュウギ（不思議だ…。ドラグナモンの心が読める…。）

チンロンモン「どうやら…、本当の絆が芽生えたようだな…。」

リュウギ「本当の…絆…?」

チンロンモン「見せて貰おう、そなた達の本当の絆の力を?」

チンロンモンは改めて戦う態勢に入る。

ドラグナモン「待たせたなチンロンモン？行くぞリュウギ？」

リュウギ「あぁ…。俺はもう1人じゃない…。俺達は2人で…」

リュウギ・ドラグナモン「1つだッ？？」

リュウギはD－アクセルをドラグナモンに翳した。すると、ドラグナモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ドラグナモン「ドラグナモン、究極進化ッ？」

『エクシードモン？』

リュウギはD－アクセルでエクシードモンのデータを読み取る。

D－アクセル「エクシードモン、究極体、竜人型、ワクチン種、必殺技は迅竜連牙斬（じんりゅうれんがざん）。」

＞i29059―1298＜

【デザイン：トリプルミーミング】

ホーリードラモン「ドラグナモンが究極体に進化したわ？」

リュウギ「エクシード…モン…。」

エクシードモン「さて、COOLに反撃と行こうぜリュウギ？」

リュウギは頷き、アルカナムを構えて戦う態勢に入る。

リュウギ「あぁ？」

チンロンモン「『蒼雷？』」

チンロンモンは蒼い雷を放つと、エクシードモンは逃げる素振りを見せず低く構える。

エクシードモン「下がってろリュウギ！」

リュウギ「エクシードモン…？」

エクシードモンは両肘の刃、黒夜叉（くろやしゃ）で蒼い雷を弾き返した。

エクシードモン「『迅竜連牙斬（じんりゅうれんがざん）？』」

リュウギ「凄い…。一発でチンロンモンの技を弾き返した…？」

エクシードモンの技に驚愕するリュウギ。すると、ゴッドドラモンが口を開く。

ゴッドドラモン「一発ではないぞ、小僧。」

リュウギ「え…？」

ホーリードラモン「エクシードモンが蒼雷を弾き返した瞬間、あなたは一発に見えたけど確かに１０発だったわ…。」

リュウギ「あの瞬間で１０発切っていたのか…？」

（なんてスピードなんだ…？）

チンロンモン「ほぅ…、私の蒼雷を弾き返すとはなぁ…。」

エクシードモン「今度はこっちの番だぜ！いくぞリュウギ！」

リュウギ「あぁ？」

リュウギはアルカナムを構え、剣風によって生み出された衝撃波を放った。

チンロンモン「無駄だ？」

チンロンモンは蒼い雷を放ち、衝撃波を弾き返した。

エクシードモン「リュウギ？」

リュウギはエクシードモンの肩に乗り、エクシードモンは高く飛び上がろうとする時、チンロンモンは蒼い雷を放つ。

チンロンモン「『蒼雷？』」

エクシードモン「テメェの攻撃は既に見切ってんだよ？」

エクシードモンは首に巻いてある黒いロングマフラーを自らの身体に巻き付けて蒼雷を防いだ。

チンロンモン「？」

エクシードモン「リュウギ？」

エクシードモンが合図を送ると、リュウギはエクシードモンの肩から高く飛び上がってチンロンモンに接近する。

チンロンモン「そうはさせん！『雷神之舞！！』」

チンロンモンは身体全体から雷撃を発生させ、身を守る態勢に入った。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギは躊躇いもなくアルカナムを横一閃に振った。しかし、電撃のバリアによってリュウギは打ち破ることができず電撃を喰らってしまう。

リュウギ「ぐはっ？」

チンロンモン「残念だったな…。」

リュウギは地面に向かって落ちていくその時、リュウギは微かに笑みを浮かべた。

チンロンモン「？」
（笑ってるだと？）

リュウギ「頼むぜ…エクシードモン？」

地上で待機していたエクシードモンは低く構えて集中していた。

エクシードモン「全て作戦通りだぜリュウギ…。後はオレにまかせ

ろ？」

エクシードモンは唸り声を上ると、雷迅のごとく予測不能な動きでチンロンモンに接近する。

チンロンモン（エクシードモンの姿が見えない？何処だ？）

エクシードモン「こっちだ？」

その時、チンロンモンの前にエクシードモンが現れた。

エクシードモン「喰らいやがれ？『天覇迅雷掌（てんはじんらいしょう）？」

エクシードモンは渾身の力を込めた一撃必殺を放つと、チンロンモンを守る電撃のバリアを打破った。

チンロンモン「なんだと？」

全ての力をぶつけたエクシードモンは華麗に地面に着地する。

リュウギ「エクシードモン？」

リュウギは急いでエクシードモンの元へと駆け寄る。

エクシードモン「リュウギ、大丈夫か…？」

リュウギ「あぁ。俺は大丈夫だ。それより…」

リュウギとエクシードモンはチンロンモンの方へ向くと、天覇迅雷掌で電撃のバリアを破られたチンロンモンは何も動じない。

リュウギ「くっ、やっぱりダメだったか…。」

チンロンモン「いや…、そなた達の勝ちだ…。」

リュウギ「……え？」

その時、チンロンモンの角にヒビが入り、やがて粉々に砕けた。

ホーリードラモン「チンロンモンの角が…？」

ゴッドドラモン「粉々に…？」

チンロンモン「天覇迅雷掌を受けた時、あの衝撃で角に直撃したのだ…。まさか、角が砕けられるとはな…。」

リュウギ「そ、それじゃあ…。」

チンロンモン「よって…、そなた達は四大竜の試練を乗り越えた…。」

ホーリードラモン「おめでとうリュウギ君、エクシードモン。」

リュウギとエクシードモンはお互いに顔を見合わせ、ハイタッチをした。

エクシードモン「よっしゃ？」

リュウギ「やったなエクシードモン？」

チンロンモン「リュウギ、そしてエクシードモン。そなた達は本当の絆を知ったことで更に強さを得た…。」

エクシードモン「あぁ。サンキューな！」

リュウギ「チンロンモン、聞きたい事があるんだ…。」

リュウギはチンロンモンに問おうとすると、チンロンモンは既に分かっていたかのように問いに答える。

チンロンモン「エグザの事だな…？」

リュウギ「あぁ…。数年前に見たアレは、嘘だって言うのか…？俺はこの眼でちゃんと見たんだぞ…？」

チンロンモン「確かに…。そなたの見たあの瞬間は偽りではない…。しかしあの出来事は隠された真実があるのだ…。」

リュウギ「隠された真実…？」

リュウギの頭上に「？」いくつも浮かんでいた。

チンロンモン「すまないが、これ以上そなたに教える事はできない…。」

エクシードモン「何でだよ？」

チンロンモン「エグザに言われたのだからな…。」

リュウギ「エグザが？」

チンロンモン「あぁ。私がエグザを助けた時、エグザは私にこう言ったのだ…。」

エグザ『いつかこの事をリュウギに打ち明けなければならない…。だからチンロンモン、俺の口から言わせてくれないか…？それが俺にとって唯一頭の罪滅ぼしだからな…。』

エクシードモン「アイツ…？」

リュウギは腕を組み、顔をしかめながら考える。

リュウギ（一体誰の事なんだ…？母さんの事か…？）

チンロンモン「話しはここまでだ…。そなた達にエクセリオンの使命を与える。」

エクシードモン「使命…？」

チンロンモン「デジタルワールドを巡り、伝説の十闘士の持つ１０個の『エンシェントストーン』を集めて貰う。」

リュウギ「伝説の十闘士…？」

ホーリードラモン「伝説の十闘士とは遥か昔、七大魔王の１人、傲慢　のルーチェモンがこの地に現れ、デジタルワールドを支配しようと企んでいた。しかし、そこへ古代初めての究極体デジモン、十闘士が現れてルーチェモンの野望を打ち砕いた。そのデジモン達を伝説の十闘士と呼ばれたんだよ。私達デジモンにとって、伝説の十闘士はデジタルワールドの英雄みたいな存在よ。」

エクシードモン「へぇ…、知らなかったぜ…。」

リュウギ「お前デジモンのクセに知っとけよ…。」

リュウギは小さくツッコム。

エクシードモン「それで、エンシェントストーンを集めたら何か起こるのか？」

チンロンモン「エンシェントストーンは闇の力を抑える強力な宝石だ。１０個のエンシェントストーンが集まればイビルガを生み出す装置、電脳核の起動を停止させる事が出来るのだ…。」

チンロンモンの言葉にリュウギはハッとする。

リュウギ「まさか、母さんを助けることができるのか？」

チンロンモン「そうだ…。」

エクシードモン「良かったじゃねぇかリュウギ！これでお前の母さんを助ける事ができるぜ！」

リュウギ「あぁ。」

チンロンモン「ただし……」

リュウギ「何かあるのか…？」

チンロンモンは何かを言おうとするが躊躇う。

チンロンモン「…いや、何でもない。それからリュウギよ。そなたに伝えねばならぬ事がある。」

エクシードモン「どうしたんだよ?」

チンロンモン「そなた達の宿敵、アナログマンはもうこの世にはおらぬ…。」

リュウギ・エクシードモン「?」

チンロンモンの言葉を聞いたリュウギとエクシードモンは驚愕する。

リュウギ「一体誰が…?まさかエグザか…?」

チンロンモン「エグザではない。アナログマンはダークスに裏切られて消滅されたのだ。」

エクシードモン「アナログマンが裏切られたのか?ラッキーじゃねぇか?」

リュウギは腕を組んで顔をしかめる。

リュウギ「でも、一体何のために…?」

ホーリードラモン「気を付けてリュウギ君。あなた達の本当の敵はアナログマンじゃないわ。かなりの強敵だわ…。」

リュウギは何も恐れず、拳を自らの手のひらに打ち込む。

リュウギ「強敵だろうが何だろうが、そこで背を向けたら俺の流儀に反する?正々堂々、立ち向かうまでだ?」

ゴッドドラモン「コイツは頼もしいな…。」

小さく笑うゴッドドラモン。

チンロンモン「リュウギ、そしてエクシードモンよ。そなた達の新たな絆でデジタルワールドを救ってくれ。」

エクシードモン「あぁ、任せときな?」

リュウギ「色々ありがとな、みんな。」

その時、四大竜達の身体に光りが生じる。

ホーリードラモン「頑張ってね、リュウギ君!」

ゴッドドラモン「貴様らの活躍、しかと見届けさせて貰うぞ…。」

それぞれ別れを告げるホーリードラモンとゴッドドラモン。しかし、チンロンモンは顔をしかめながらリュウギに告げる。

チンロンモン「リュウギ、1つ忠告しておく…。ヴァヌムスには決して近付いてはならない…。」

リュウギ「?」

エクシードモン「どういう事だよ…?」

チンロンモン「ヴァヌムスはそなた達にとって最凶の敵だからだ…。リュウギ、これは流儀で貫き通す問題ではない。それだけは覚えておくんだな…。」

チンロンモンはそう言っている内に段々と光りに包まれていく。

リュウギ「待てよチンロンモン?どういう意味なんだよ?チンロンモン?」

チンロンモン「エンシェントストーンの事は既に皆に伝えた。また逢おう…。」

四大竜の身体から光りに満ちあふれ、リュウギとエクシードモンは光りの閃光に包まれた。

リュウギ、エクシードモン「?」

ーーーーーーーーーーーーーー

~デジモン　JET~

???「ーーウ兄…。リュウ兄!」

リュウギはゆっくりと眼を開けると、カズマが心配な表情が目に映る。

リュウギ「……カズマ。」

カズマ「何やってんだよリュウ兄?こんな所で寝てたら風邪ひきやすよ?」

リュウギ「っておい…。」

リュウギは寝起き早々すかさずツッコム。

カズマ「冗談ですよ♪だから許してくだせぇ☆」

カズマは冗談気な表情でウィンクする。

リュウギ「なんか腹立つからやめろよ、それ…（怒）」

リュウギは眉をピクピクと動かしながら拳をグッと握り締める。すると、リュウギはナルガモンがいないことに気付く。

リュウギ「そういえばナルガモンは…？」

カズマ「あぁ、ジャックモンなら寝ているから代わりにネレイスモンが起こしてる。」

カズマは親指で指を差す先に、ネレイスモンが自らの身体でナルガモンの首に巻き付けてナルガモンを起こしていた。

ネレイスモン「おーい、起きろー！」

ナルガモン「うぅ……ぐる…じぃ…（苦）」

ナルガモンは苦しい表情だった。何せ首を絞められているのだから。

リュウギ「ってなにやってんだお前はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

そして…。

ナルガモン「死ぬかと…思った…（焦）」
（ゼェ…ゼェ…）

リュウギ「何してんだよお前は？俺のパートナーを永遠に眠らせるつもりか？」

ネレイスモン「それがオレのＳＴＹＬＥ☆……あ、ヤベ移っちゃった。」

リュウギ「やかましわッ？」

ネレイスモンはカズマの口癖が移ったのか、思わず口を塞ぐ。

リュウギはありったけの声でツッコム。

カズマ「まぁまぁ。人間誰でも失敗ありやすけど、それを乗り越えるたんびに強くなるんでさぁ☆」

ネレイスモン「おっ、カズマ今カッコいい事言ったなぁ？」

カズマ「いやぁ、何かピンと来た♪」

カズマは誇らし気な顔をしながら親指をピシッと立てる。

リュウギ「誇らし気に言うな？つうか人間じゃねぇから？デジモンだから？」

カズマ「んじゃ訂正して。……デジモン誰でも失敗ありやすけど、それを…」

リュウギ「いちいち訂正すなッ？しかも何なんだよ今の間はッ？」

リュウギはツッコミながらカズマを蹴り飛ばした。

カズマ「ぐはっ？」

ババモン「ホッホッホ…。ようやく目が覚めたようじゃな…。」

リビングからババモンが現れる。

リュウギ「ババモン…。」

ババモン「その様子じゃと、チンロンモンに会ったようじゃのぅ…。」

リュウギ「あぁ…。試練は何とか乗り越えたよ。」

カズマ「それでリュウ兄、今後はどうするんだよ…？」

リュウギ「このデジタルワールドの何処かにある『エンシェントストーン』を探さなきゃならない…。」

エンシェントストーンの言葉にババモンはビックリする。

ババモン「エンシェントストーンじゃと？」

ネレイスモン「何かを知ってるのか？」

ババモン「古代十闘士の持つ幻の宝石じゃよ…。それを手にするには『デジタルワールドの救世主』の資格があるかどうか試されるのじゃ…。」

リュウギ「カズマ、一刻も早くエンシェントストーンを集めよう！」

カズマ「リュウ兄の彼女はどうすんだよ？」

カズマの言葉にリュウギはズッコケ、顔を出し赤らめながら否定する。

リュウギ「たがら彼女じゃねぇって？」

カズマ「『一刻も早く、ミソラを助けないと…。俺が助けなきゃ誰が助けるんだ？それが俺の流儀だ？（リュウギの真似をしているつもり）』ってさっき言ってたじゃないですかぃ？」

リュウギ「さっきって、言ってねぇから？なに無理矢理人の真似して流儀語ってるんだよ？」

リュウギはありったけの声でツッコム。リュウギは一度咳払いをして話を無理矢理戻す。

リュウギ「他の皆はエンシェントストーンを探している…。だから俺達も早く探しに行くぞ！」

カズマ「りょうかーい！」

それからリュウギ達は次の島に備えて支度を済ませる。

ババモン「もう行くのか…？」

リュウギ「あぁ。世話になったよババモン。ところで、このデバイス島に残ってても大丈夫なのか…？」

カズマ「それなら心配及びませんぜリュウ兄。ここの周辺はさっきデジエクスフィールド張ったから。」

ババモン「じゃからワシなら心配いらぬよ。ホッホッホ…。」

リュウギ「そ、そうか…。」

ナルガモン「そんじゃ、次の島に向かって出発だぜ！」

ナルガモンは張り切って先頭に立つ。リュウギ達は苦笑いしながら後に続く。

リュウギ達を見送るババモンは、小さく呟く。

ババモン「お主ならきっと大丈夫じゃ…。頼んだぞ、救世主（エクセリオン）達よ…。」

リュウギ達はデバイス島をあとにし、エンシェントストーンを探す新たなる旅立ちが始まるのであった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ６３　～蒼き青龍　チンロンモン？究極なる絆の進化　エクシードモン？～

それから…。

～海岸～

ナルガモン「……。」

ナルガモンは身体をブルブルと震えており、一歩も動こうとしない。

リュウギ「ナルガモン…？」

カズマ「どうしたんだよジャックモン？『次の島に向かって出発だぜ！』ってさっき張り切ってたじゃないですかぃ？」

ナルガモン「わ、わわ、分かってるっての？」

ナルガモンは慌てた言い方をする。すると、ネレイスモンはナルガモンの考えてる事に感付いた。

ネレイスモン「ははーん。さてはビビってるな…？」

ナルガモン「うるせぇ？つうかオレはジャックモンじゃねぇし？」

リュウギ（ツッコムタイミングかなり遅れてるぞ…。こりゃ完全にビビってるな…。）

リュウギは呆れて深くため息をつく。その時、リュウギはふとチンロンモンと戦った時の事を思いだす。

リュウギ（そういえばチンロンモンの角、粉々に砕いたけど大丈夫だったのかなぁ…？）

カズマ「リュウ兄～、置いて行きやすぜぇ！」

カズマの声にリュウギはハッとし、カズマの元へと駆け付ける。ネレイスモンはシードラモンへと進化し、リュウギ達はシードラモンの背中に乗る。

シードラモン「しっかり捕まれよ！」

カズマ「りょうかーい♪」

ナルガモン「お、おう…（汗）」

リュウギ「頼むよ！」
（たぶん、大丈夫だろう…。）

～アムスタエル神殿～

ウモン「もう少し右ですよ…。」

アモン「こ、こうか…？」

一方、チンロンモン達はリュウギ達との戦いによって粉々に砕かれた角を修復していた。因みに修復方法は砕け散った角の欠片をかき集め、セロハンテープで貼り付けている。

ウモン「左に片寄っていますよ…。」

アモンのイライラＭＡＸは頂点に達し、ついに爆発した。

アモン「だぁぁぁぁぁぁぁ？無理だっつうの？つうかなんで修復するのにセロハンテープなんだよ？ホーリードラモンの治療で一発だろうが？」

ゴッドドラモン「ホーリードラモンは癒す力を使い果たしたのだ。我慢しろ…。」

アモン「ぐぬぬぅ……。」

ホーリードラモン「す、すみません…。」

ウモン「そもそも集中力が足りないから失敗するんですよ…。」

アモン「んだとコラァ？」

ウモン「大体あなたはそういう投げ出しになるから人間に負けるんですよ。」

アモン「んだよそれ？オレのせいだって言うのかぁ？」

ウモン「違うとでも…？」

アモン「そういうテメェこそ…」

口喧嘩が始まるアモンとウモン。ホーリードラモンは慌てて２人を静めさせようと必死になる。

ホーリードラモン「ねぇ、少しは落ち着こうよ…。治療してる最中なんだからさぁ…。」

一方、患者のチンロンモンは呆れて深くため息をつく。

チンロンモン「……。」

（今度からやり方変えようかなぁ…（ー＿ー；））

次回はついにエンシェントストーンを集める冒険が始まる？

次回もお楽しみ？

Ｅｐ６４　～謎に包まれし孤島、アトラン島？水の十闘士　エンシェントマーメイド～

今回はミソラとカイの物語…。

Ｅｐ６４スタート？

ＥＰ６４　～謎に包まれし孤島、アトラン島？水の十闘士　エンシェントマーメイ

一方、ミソラ達は…。

ミソラ「エンシェントストーン…。一体何処にあるんだろう…？」

エンシェントストーンを集めるため旅をするミソラ達は、サンダーバーモンに乗って島を探していた。

カイ「そう簡単に見つからないのは確かだ…。何せ、伝説の十闘士の持つ秘宝だからな…。」

カイの言葉にレナモンは納得する。

レナモン「カイの言う通りだ…。」

ミソラ「でもこんな広い世界の中でどうやって伝説の十闘士を探すのよ…？」

カイ「さぁな…。」

カイは首を傾げてＤ－アクセルを見つめる。その時、サンダーバーモンは口を開く。

サンダーバーモン「カイ…。」

カイ「どうやら効果が切れてきたな…。あの島に降りるぞ！」

サンダーバーモンは近くにある小さな孤島へと降りて行った。

～アトラン島～

アトラン島に上陸すると、ミソラ達は飛び降りる。

カイ「ご苦労、サンダーバーモン。」

サンダーバーモン「また必要になったら呼んでくれ。」

デジサモンの効果が切れてしまい、サンダーバーモンは静かに消え去った。

ミソラ達は辺りを見回すと、島の中心にヤシの木1本しかない淋しい孤島だった。

ミソラ「何もないわね…。」

レナモンは顔をしかめて腕を組む。

レナモン「しかし妙だ…。デジモンの気配が全くない…。」

キャンドモン「ま、まま、まさか無人…じゃなくて無デジ島ですかここ？」

キャンドモンは今にもパニックになりそうだ。それを聞いたミソラは小さくツッコム。

ミソラ「なによその無デジ島って…。」

カイはミソラに話しかける。

カイ「おい。D－アクセルにいるデジモンは何体いるんだ…？」

ミソラ「えーと…。マリンエンジェモンとワームモン、それからディグモンとレオモンよ。」

コントラクトしたデジモンを教えるミソラ。すると、カイは飽きれてため息をつく。

カイ「よくもまぁ、ここまで冒険したものだ…。」

カイの言葉にムッとくるミソラ。

ミソラ「わ、悪かったわね…。」

その時、カイの悪口によりキャンドモンの怒りが爆発した。

キャンドモン「おいテメェ？ボクチンのミソラさんに向かって何ぬかしとんじゃ、ワレェェェェ？コンクリートに埋めてネット海に沈めたろかコルァァァァ？」

レナモン「また始まった…。」

ミソラ「何が『ボクチンのミソラさん』よ…。ウザッ…。」

ミソラとレナモンは呆れてため息をつく。

キャンドモン「おい、聞いてんのかテメェ？」

キャンドモンはカイの胸ぐらを掴んだとたん、カイはギロリと睨む。

カイ「離せ。雑魚が…。」
（ギロッ）

キャンドモン「すいませんでしたぁぁぁぁぁぁ（泣）」

カイの威圧に圧倒されたのか、キャンドモンは土下座をした。

レナモン「……。」

ミソラ「情けなッ？」

キャンドモン「だって恐かったんだもん？ボクチン、リアルにオシッコちびるかと思ったん…（泣）」

キャンドモンは号泣しながらミソラに近づくと、ミソラは優しさの「や」の字もなくキャンドモンを蹴り飛ばした。

キャンドモン「ふぎっ？」

ミソラ「どさくさに紛れて近付くんじゃないわよ、このヘンタイロウソク！」

キャンドモン「酷いですよミソラさん…。」

レナモン「……。」

この光景を目にするレオモンは更に深くため息をつく。

ガオモン「とにかく、カイのデジサモンがチャージするまで、この

島で野宿だな。」

カイは舌打ちをし、その場で座り込む。

カイ「チッ…。仕方ない…。」

ミソラはカイの言葉に悔しさを抱き、膨れっ面になる。

ミソラ（なによ…。偉そうに…。）

その時、地面が激しく揺れ始める。

ミソラ「地面？」

レナモン「気を付けてミソラ。デジモンの気配がする？」

すると、海中からデジモンが現れた。

？？？「キシャャャャャャャャ？」

キャンドモン「で、出たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カイはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ゲソモン、成熟期、軟体型、ウィルス種、必殺技はデッドリーシェード。」

カイ「成熟期か…。来い、ギルガメッシュ？」

カイは右手を広げると、巨大手裏剣、ギルガメッシュが表れる。

ミソラ「ディスティングハーツ？」

ミソラはゲソモンの体内を調べると、イビルスが潜んでいた。

ミソラ「中にイビルスがいるわ！」

カイ「わかった。行くぞガオモン！」

ガオモン「はい！」

カイはＤ－アクセルをガオモンに翳した。するとガオモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ガオモン「ガオモン、進化？」

『ガオガモン？』

レナモン「ミソラ、頼む。」

ミソラ「えぇ！」

続いてミソラもＤ－アクセルをレナモンに翳した。するとレナモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

レナモン「レナモン、進化？」

『キュウビモン？』

ゲソモン「キシャャャャャャャ？」

ゲソモンは巨大な手を振り回してカイ達に襲い掛かる。

カイ「くっ！」

カイとミソラはそれぞれのパートナーデジモンの背中に乗って素早く交わした。

キュウビモン「『鬼火玉？』」

キュウビモンは尾の先に集めた炎をいっせいに放つ。

しかしゲソモンは素早く海に潜り、鬼火玉を交わされた。

ミソラ「交わされたわ？」

その時、海中からゲソモンの手が現れ、キュウビモンを捕まえて締め付ける。

キュウビモン「しまった？」

ミソラは振り落とされてしまい、キュウビモンは海中へと引きずり込まれてしまいそうになりピンチへと陥る。

ミソラ「キュウビモン？」

ガオガモン「『ガオガハウンド？』」

ガオガモンは強靭な歯でゲソモンの手に噛み付き、キュウビモンを助けようとする。

カイ「はぁぁぁぁぁぁ？」

そしてカイは巨大な手裏剣、ギルガメッシュを投げ付け、ゲソモンの手を切った。キュウビモンは解放された。

ゲソモン「キシャャャャャャャ？」

怒り狂ったゲソモンはもう片方の手でカイを捕まえて海に引きずり込む。

カイ「うわっ？」

ガオガモン「カイ？」

ガオガモンは助けに行こうとすると、ミソラとキュウビモンがいち早く海の中へと潜り込みカイを助けにいく。

～ネット海～

海に引きずり込まれてしまったカイは段々と息が苦しくなっていく。

カイ（クソッ…。このままだとやられる…。）

その時、ミソラとキュウビモンが追い掛けてくる。

カイ「？」

（あいつ？）

ミソラとキュウビモンはお互いに目を見合わせて頷くと、ミソラは

Ｄ－アクセルをキュウビモンに翳した。すると、キュウビモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

キュウビモン「キュウビモン、超進化？」

『タオモン？』

タオモン「『狐封札？』」

タオモンは札を投げ、ゲソモンの身体に貼り付ける。そして印を唱えて札を爆発させた。

ゲソモン「キシャャャャャャャャ？」

ゲソモンは怯み、カイは解放された。

ミソラ（今だわ！）

ミソラはカイを抱き、急いで海上へと向かった。

ゲソモン「キシャャャャャャャャ？」

ゲソモンは巨大な手でタオモンに襲い掛かると、タオモンは巨大な筆で文字を描いて飛ばし、印を唱えた。

タオモン「終わりだ！『梵・筆・閃？』」

文字は大爆発し、ゲソモンは力尽きて倒れる。その時、ゲソモンの体内からイビルスがあらわれる。

タオモン「逃がさん！『狐封札？』」

タオモンは札をイビルスに投げ付けて印を唱えた。すると、札は爆発してイビルスは消滅した。

イビルス「ギィィィィィィィィ？」

タオモン「これで大丈夫だな…。？」

その時タオモンはある物を目にして思わず驚愕した。

タオモン「なるほど…。こういう仕組みになっていたのか…。とにかく、ミソラ達の安全確保が先だ…。」

タオモンは急いで海上へと向かう。

～アトラン島～

海中からザバーンとミソラとカイが顔を出す。

ガオガモン「カイ？」

カイ「ゴホッ、ゴホッ！」

ミソラ「良かった。間に合ったようね…。」

ミソラは急いで陸に上がり、カイを寝かせる。そして、海中からタオモンが現れて地面に着地する。

タオモン「ミソラ、カイは大丈夫か…？」

ミソラ「気を失っているだけだから大丈夫よ。ありがとう、タオモン。」

ガオガモンはガオモンへと退化し、カイの元へと駆け寄る。

ミソラ「しばらく安静にしてなきゃね…。」

ガオモン「カイを助けてくれて感謝する。」

ガオモンは頭を下げると、ミソラは首を横に振る。

ミソラ「当然の事じゃない。仲間なんだから。」

ガオモン「仲間…。」

タオモン「同じエクセリオン同士…。助け合うのも当然の事だ…。」

ミソラ「そうよ！」

ガオモン「……。」

ガオモンはふと思った。これが仲間なのかと…。

キャンドモン「ミソラさん？良かったホントに！帰って来なかったらボクチンどうしようかと…。」

ヤシの木の陰からキャンドモンが現れる。

タオモン「キャンドモン、今まで何処に…？」

キャンドモン「ずっとヤシの木の裏で隠れてました！」

一同「……。」

ミソラ「ねぇ、今すぐボッコボコにしてもいい？」

ミソラは段々とイライラし、笑顔を保ちながら拳をパキパキと鳴らす。

キャンドモン「うえッ？ちょっと待ってくださいよミソラさん？ボクチンは別に……タオモンも何とか言ってよ？」

タオモン「私は別に構わない…。」↑怒ってる

キャンドモン「ちょっとおおおおおおおおおおおお？」

ミソラ「決まりね？」

キャンドモン「ほぎゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？」

そして…。

ゲソモンのリカバリーを終え、次の事について考える。

ミソラ「これからどうしようかしら…？こんな何もない島で野宿なんてちょっと嫌だわ…。ね、キャンドモン？」

ミソラは聞くと、得体のしれないデジモンが口を開く。

キャンドモン「ふぁい…、ごもっともでふ…。」

その得体の知れないデジモンの正体は、先程ボッコボコにされたキャンドモンだった。どうやら原型がとどめてないほどボッコボコにされたらしい。

ガオモン「うっ…。」

（恐ろしい人だ…。）

レナモン「いや、そうでもない。」

ミソラ「どういうこと？」

レナモン「この島には一見何も変哲もない島だが、秘密が隠されている…。」

ガオモン「こんな島に秘密があるのか…？」

レナモン「あぁ。この島の真下に伝説の都があるんだ。」

ミソラ・キャンドモン「伝説の都？」

ガオモン「噂で聞いた事がある…。ネット海の何処かに伝説の都アトランティスがあるって…。」

ミソラ「それじゃ、その伝説の都がこの真下に？」

レナモン「あぁ。間違いない…。」

ミソラ「いかに怪しいわね…。まさかそこにエンシェントストーン

があるんじゃ…？」

レナモン「恐らく…。」

ミソラ「行って見ましょうよ！」

ミソラはやる気になって立ち上がると、キャンドモンは慌ててミソラを止める。

キャンドモン「待ってくださいよミソラさん？ボクチンはどうするよ？まさか放置プレーですか？」

ミソラ「ガオモン、その間にカイの面倒を頼むわ！」

ガオモン「分かった。」

キャンドモン「無視ですかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

レナモンは腕を組んで顔を出ししかめる。

レナモン「問題はアトランティスまでどうやって行くかだな…。」

ミソラ「そうよね…。」

キャンドモン「それならご心配なく！隠れてる最中にこういうの見つけましたんですよ！」

キャンドモンが取り出したのは、葉っぱ全体に水色に澄む不思議な草だった。

ミソラ「なんなのよその雑草は？」

ガオモン「それは潜水草じゃないか？」

ミソラ「潜水草？」

レナモン「その草をくわえていれば、約1時間潜水できる草だ。」

ミソラ「凄いじゃない？これでアトランティスに行けるわね！」

キャンドモン「ですよね×2♪それじゃ、感謝の印にボクチンの胸に飛び込んできてちょうだい？」

キャンドモンは手を広げてミソラが飛んでくるのを待つ。

ミソラ「キャンドモン！」

ミソラはキャンドモンの元へと駆け付けると、キャンドモンの心臓はバクバク状態になっていた。

キャンドモン（ボクチンの手柄で、ミソラさんのハートをゲッ……）

「……え？」

キャンドモンは胸に飛び込んでくると期待を抱く。すると、ミソラはありったけの力でキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん？」

（うそーん？）

ミソラ「なんでそれをもっと早く言わないのよこのドスケベロウソ

クが？それがあったらカイは助かったのかもしれないのよ？」

キャンドモン「す、すみましぇん…（泣）」
（酷いですぅ～）

レナモン「これでアトランティスに行ける…。ありがとう、キャンドモン。」

レナモンがお礼を言うと、絶望の世界に落ち掛けたキャンドモンの心は一瞬にしてお花畑のような世界へと変わった。

キャンドモン「レナモン…（泣）」
（幼馴染み最高…。）

ミソラ「さぁ、早く調べに行きましょ！」

ミソラとレナモンはお互いに顔を見合わせて同時に頷き、潜水草を口にくわえて海の中へと飛び込む。

キャンドモン「気を付けてくださいねぇ～！」

ガオモン「何も起こらなければいいんだが…。」

こうしてガオモンとキャンドモンはミソラを見送るのであった。

～ネット海～

海中へと潜り、伝説の都　？アトランティスへと向かうミソラとレナモン。

ミソラ（ちっとも苦しくないわ。）

レナモン（アトランティスへの入り口はいったい何処だ…？）

レナモンは辺りを見回すと、入り口らしきものを見つけた。レナモンはミソラの肩にトントンと叩く。

ミソラ（入り口？）

レナモンはコクリと頷くと、ミソラとレナモンはアトランティスの入り口らしきものへと向かった。

～アトランティス　入り口～

ザバーン？

水面から顔を出すミソラとレナモン。ミソラは辺りを見回すと、古びた巨大な都市だった。

ミソラは潜水草を外してレナモンの方へ向く。

ミソラ「見た所、ここが伝説の都　アトランティスみたいね…。」

レナモン「あぁ…。しかし妙だ…。アトランティスは海底にある都。なぜ空気があるのだ…？」

ミソラ「言われてみればそうね…。でもどっちかといえばラッキーじゃない？水中だと戦い辛いでしょ？」

レナモン「そうなのかなぁ…（汗）」

レナモンは苦笑いする。

ミソラ「そうだよきっと！さ、早く中を調べましょ！」

ミソラとレナモン海面から上がると、ビショビショに濡れた服をギュッと絞って水を出す。

ミソラ「うわ～、ビショビショだわ～…。」

ミソラの姿を見たレナモンはハッと思い出し、ミソラに問う。

レナモン「前から思っていたんだが、ミソラ達はどうして服を着ているのだ…？」

ミソラは意外な質問をされて驚く。

ミソラ「ど、どうしたのよ急に？」

レナモン「いや…、ただ何となく…。」

ミソラ「そ、それは勿論…」

ミソラは顔を赤らめると、レナモンは首を傾げる。

レナモン「勿論…？」

ミソラ「オ、オシャレのためよ！これは女の子として当たり前の事よ。」

レナモン「そうなのか…？」

ミソラ「そ、そうよ！」

レナモンは腕を組んでうーんと考える。

レナモン「そうか…。ミソラ、私はオシャレしなくてもいいのだろうか…？」

ミソラ「オシャレになりたいの？」

すると、レナモンは頬を赤らめながらそっぽを向く。

レナモン「別にそういう意味ではない…。私はただミソラの気持ちを少し知りたいだけだ…。」

ミソラ（素直じゃないんだから…。）

「いいわよ！じゃあレナモン、どういう服を着てみたいの？」

レナモンの好みを問うミソラ。すると、レナモンは腕を組んで考える。

レナモン「私は……」

ミソラ「うんうん♪」

レナモン「宝塚歌劇団のような格好が好きだ…。」

レナモンの答えに、アトランティス全体に長い間沈黙河流れる。

ミソラ「……え？」

レナモン「冗談だミソラ。」

ミソラ「ビックリさせないでよもうっ?アンタが言うと冗談に聞こえないわ?」

レナモン「『たまには冗談も必要だ!』ってナルガモンに言われたからつい…。」

ミソラ「あのバカ…(怒)」

ミソラは段々と怒りがこみ上げ、拳をギュッと握り締める。

ミソラ「ところでレナモン、なんで宝塚歌劇団知ってるのよ…?」

レナモン「私は知らない…。『宝塚歌劇団って言えばミソラさんは納得してくれます!』って言われたからつい…。」

ミソラ「アンタ達いつの間に打ち合わせしてたのよ?あのヘンタイロウソク、戻ったらただじゃおかないッ?」

ミソラの怒りはＭＡＸに到達した。

レナモン「さ、先へ進もう…(汗)」

(あの2人に騙された…。)

~アトランティス　最深部~

奥へ進むと、そこは大広間になっていた。

ミソラ「広〜い！」

レナモン「おそらく、ここが最深部みたいだな…。」

ミソラは辺りを見回す。しかし、デジモンの気配が全くない。

ミソラ「誰も…いないわね。」

レナモン「いや、もう少し調べよう。もしかしたらエンシェントストーンの手がかりが掴めるかもしれない。」

ミソラ「そうね！」

その時、ミソラのＤ－アクセルから聖なる光りが生じる。

レナモン「？」

ミソラ「Ｄ－アクセルが反応してるわ？」

すると、大広間の奥にある玉座がＤ－アクセルに反応したのか、玉座から聖なる光りが生じる。

ミソラとレナモンは光りの閃光に包まれ、思わず目を閉じる。

？？？「よく来たな。デジタルワールドの救世主　エクセリオンよ…。」

ミソラ「誰？」

光が止み、ミソラとレナモンは目を開けた。２人の目の先は、人魚のような姿をしたデジモンだった。

？？？「ようこそ、伝説の都　アトランティスへ…。」

ミソラはＤ－アクセルでデータを読みとる。

Ｄ－アクセル「エンシェントマーメイモン、究極体、古代水棲獣人型、データ種、必殺技はクリスタルビロー。」

ミソラ「アンタが古代十闘士なの…？」

エンシェントマーメイモン「いかにも、わらわは伝説の水の十闘士、エンシェントマーメイモンなり！」

レナモン「？」

（なんて威圧なんだ…？これが伝説の十闘士なのか…？）

ミソラ「エンシェントマーメイモン、私達は…」

ミソラが何か言おうとすると、エンシェントマーメイモンは口を開く。

エンシェントマーメイモン「お主らがなぜここへ来たのかは既に知っている。エンシェントストーンの事だろう。」

ミソラ「え？なんで分かるの？」

エンシェントマーメイモン「見くびるな。わらわはお主らの行動をずっと見ていたのだからな…。」

レナモン「それなら話が早い。そのエンシェントストーンを私達に

譲ってくれないか…？」

エンシェントマーメイモンは小さく笑い、玉座に座る。

エンシェントマーメイモン「ただで譲るわけがなかろう…。しかし、エンシェントストーンがなければデジタルワールドは救われない。そこでだ。お主らが本当にデジタルワールドを救える実力があるか、わらわが試してやろう。」

エンシェントマーメイモンは槍の刃先をミソラに向ける。

ミソラ「いいわ。私達の力で乗り越えてみせるんだから！行くよ、レナモン！」

レナモン「あぁ。」

ミソラとレナモンはやる気になり、戦う態勢に入る。

エンシェントマーメイモン「楽しませてくれそうだな…。よかろう。」

エンシェントマーメイモンは手を広げると、大広間全体に水が溢れ出す。

ミソラ・レナモン「？」

ミソラとレナモンは水に呑み込まれてしまい、ミソラは段々と息苦しくなる。

レナモン（ミソラ？）

ミソラ「……あれ？」

すると、ミソラの様子がおかしい事に気付く。

ミソラ「息ができる…？レナモン、息ができるわ？」

レナモン「本当だ…。これは一体？」

エンシェントマーメイモン「驚いたか…？こうでなきゃわらわが不利だからな…。本来、水の中は動きが鈍るが、お主らは地上と同じ動きができるから安心しろ…。」

レナモン「そうか…。」

エンシェントマーメイモン「では、始めるとしようか…。」

エンシェントマーメイモンは
持ち味の足ヒレで自由に泳ぎ、戦う態勢に入る。

ミソラ「油断禁物だよ、レナモン。」

レナモン「分かっている…。」

ミソラとレナモンはエンシェントストーンを手に入れるため、伝説の十闘士との死闘が始まるのであった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ６４　～謎に包まれし孤島、アトラン島？水の十闘士　エンシェントマーメイモン～

次回はついにエンシェントマーメイモンとの対決？

果たして、ミソラ達に勝ち目はあるのか？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ６５　～迷わない心こそ力！金色の神人　サクヤモン？～（前書き）

伝説の都　アトランティスにてエンシェントマーメイモンと激闘を繰り広げるミソラとレナモン！

そして、ついにレナモンが究極体に？

Ｅｐ６５スタート？

ＥＰ６５　～迷わない心こそ力！金色の神人　サクヤモン？～

～アトランティス　玉座の間～

ミソラ「行くわよ、レナモン？」

レナモン「あぁ！」

ミソラはＤ－アクセルをレナモンに翳した。すると、レナモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

レナモン「レナモン、超進化？」

『タオモン？』

タオモン「『狐封札？』」

タオモンは数枚の札を投げつけて先制攻撃をする。

エンシェントマーメイモン「甘い？『クリスタルビロー？』」

エンシェントマーメイモンは水を超硬度に結晶化させマシンガンの様に打ち出して、全ての札を消滅させた。

タオモン「くっ…。」

（やはりダメか…。）

エンシェントマーメイモン「それで終いか？では、こちらの番だ？」

エンシェントマーメイモンは巨大な槍を構え、目にも止まらない早さでタオモンに接近する。

タオモン「早い？」

エンシェントマーメイモンは槍で乱れ突きを放つ。

タオモン「くっ？」

タオモンは次々と交わしていく。しかし、スピードが早すぎて交わすだけでも精一杯だった。

タオモン（遠距離戦に持ち込むか…。）

タオモンは後方へと下がり、エンシェントマーメイモンとの距離をおきながら札を投げ付けた。

エンシェントマーメイモン「無駄だと言っておるのがわからぬか！『クリスタルビロー？』」

エンシェントマーメイモンは水を超硬度に結晶化させマシンガンの様に打ち出して札を消滅させる。

タオモン「まだだ？『狐封札？』」

タオモンは次々と札を投げ付けていく。しかしエンシェントマーメイモンは次々と札を破壊していく。

エンシェントマーメイモン「何度やっても無駄だ！」

タオモン「それはどうかな…。」

エンシェントマーメイモンは辺りを見回すと、破壊し損ねた札がエンシェントマーメイモンの周辺に浮いていた。

エンシェントマーメイモン「しまった？」

エンシェントマーメイモンは慌てて水を超硬度に結晶化させマシンガンの様に札を破壊しようとすると、タオモンは片手を差し出して印を構える。

タオモン「遅い！」

タオモンは印を唱えると、エンシェントマーメイモンの周辺に浮かぶ札を爆発させた。

エンシェントマーメイモン「？」

ミソラ「その調子よタオモン？」

しかしその時だった。爆発によって溢れ出た泡の中からエンシェントマーメイモンが現れる。

タオモン「なに？」

エンシェントマーメイモン「甘いわね！はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

エンシェントマーメイモンは槍を構え、とてつもないスピードでタオモンに接近して突き刺そうとする。

タオモン「くっ？」

タオモンはとっさの判断で交わした。しかし槍は容赦なく右腕を掠らせ、タオモンは右腕に掠り傷を追ってしまう。

ミソラ「タオモン？」

タオモン「私は大丈夫だ…。それより…。」

ミソラ「一体どうすれば…？」

エンシェントマーメイモン「まだ終わりではないぞ！」

エンシェントマーメイモンは巨大な槍をタオモンに目掛けて投げ付けた。

タオモン「くっ？」

タオモンはミソラを抱きかかえて素早く交わした。

タオモン「ここにいると危ない…。ここでしばらく隠れていてくれ…。」

タオモンはそう言って岩陰の側にミソラを下ろしたその時、ミソラは突然叫ぶ。

ミソラ「タオモン、後ろ？」

タオモンは振り向くと、巨大な槍がタオモンに襲い掛かる。

タオモン「なに？」

タオモンは交わしきれず左肩に刺さり、その勢いで岩に突き刺さる。

タオモン「うわぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラ「タオモォォォォォォン？」

エンシェントマーメイモン「油断大敵じゃ…。わらわの槍は標的が刺さるまで追い続ける追尾型の槍じゃ…。」

タオモン「くっ…、油断したか…。」

ミソラ「タオモン、しっかりして？」

エンシェントマーメイモン「やはりその程度であったか…。それでデジタルワールドを救おうという考えが甘すぎるわ…。特にそこの人間！」

ミソラ「？」

ミソラはハッとしてエンシェントマーメイモンの方へと向く。

エンシェントマーメイモン「お主はいつもそうじゃ…。ただ見ているだけであっていつも仲間に守られている。」

エンシェントマーメイモンの言葉にミソラはうつむく。

ミソラ「わ、私はただ…。」

エンシェントマーメイモン「まだ分からぬのか？お主が仲間の足でまといにしかならないというのじゃ！」

ミソラはエンシェントマーメイモンの言葉によってショックを受け、膝が折れる。

ミソラ（やっぱりそうなのね…。私のせいで、みんなの足を引っ張っているんだ…。なにがデジタルワールドの救世主よ…。これじゃ私……）

ミソラは自分の無力さの余りに自然と涙がこぼれ落ちる。その時だった。

タオモン「それは…違う。」

ミソラはハッとしてタオモンの方へと向く。

タオモン「ミソラは決して足でまといではない…。私の大事なパートナーだ…。」

タオモンは自力で左肩に突き刺さる槍を引き抜き、ミソラの元へと駆け寄る。

ミソラ「タオモン…。」

タオモン「思い出してミソラ…。ミソラが私に言ってくれた事を…。」？

それは、ミソラとレナモンが初めて出会った日の事だった。

ミソラ『そんな事ないわレナモン…。私をを助けようとしたその心が、大きな力だよ！自分の力を信じなさい。あなたは決して足手まといじゃないから！私はそう信じてる…。』
（Ｅｐ０３より）

ーーーーーーーーーーーーーー

タオモン「私は今ここにいる…。その理由はミソラ、君が一緒に居てくれたからじゃないか…。それが私にとっての大きな力だ…。だから自分が無力だなんて思ってはいけない…。」

ミソラ「タオモン…。」

ミソラは涙を拭き、目付きが変わった。

エンシェントマーメイモン（人間の目付きが変わった…？）

ミソラ「ありがとう…、タオモン。私、もう迷わないわ！」

タオモン「ミソラは決して１人ではない。私がいつでも側にいる！」

その時、ミソラのＤ－アクセルから聖なる光りが生じる。

エンシェントマーメイモン「この輝きは…？」

ミソラとタオモンは聖なる光りに包まれる。

トクン…トクン…

ミソラ（心臓の鼓動が聞こえてくる…。ひょっとしてタオモンの心

臓の鼓動？）

タオモン（暖かい…。これがミソラの心のぬくもり…。）

ミソラ「行きましょ、タオモン。」

タオモン「あぁ！」

ミソラはＤ－アクセルをタオモンに翳した。すると、タオモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

タオモン「タオモン、究極進化ッ？」

『サクヤモン？』

エンシェントマーメイモン「究極体に進化したか…。」

ミソラはＤ－アクセルでサクヤモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「サクヤモン、究極体、神人型、データ種、必殺技は金剛界曼荼羅（こんごうかいまんだら）。」

ミソラ「サクヤ…モン…。」

サクヤモンは右手に持つ杖、金剛錫杖（こんごうしゃくじょう）を構えて戦う態勢に入る。

サクヤモン「私達はここで、負ける訳にはいかない！」

エンシェントマーメイモン「見せて貰うぞ、新たに目覚めたお主達の力を？」

エンシェントマーメイモンは巨大な槍を構え、勢いをつけてサクヤモンを突きに掛かる。

サクヤモン「くっ！」

サクヤモンは金剛錫杖を振り回し、巨大な槍を受け流す。

エンシェントマーメイモン「？」

サクヤモン「はぁぁぁぁぁ？」

受け流したサクヤモンは体を回転させ、薙ぎ払うように金剛錫杖を振り回した。

エンシェントマーメイモン「くっ？」

エンシェントマーメイモンはとっさの判断で巨大な槍を受け止め、素早く後方へと下がった。

エンシェントマーメイモン「少しは楽しませてくれるではないか…。サクヤモンとやら、わらわを失望させるでないぞ…。」

サクヤモン「言われなくてもそのつもりだ…。行くぞ！」

サクヤモンは金剛錫杖を円状に回転させた後、右手をバッと前に出して叫ぶ。

サクヤモン「『飯綱（いづな）？』」

サクヤモンは、腰に携えた４つの筒から４匹の管狐が現れる。４匹の管狐の額にはそれぞれ「火」「水」「風」「雷」と書かれていた。

サクヤモン「頼む！」

４匹の管狐は一斉にエンシェントマーメイモンを攻撃する。

エンシェントマーメイモン「くっ？厄介な技じゃ？『クリスタルビロー？』」

エンシェントマーメイモンは素早く逃げつつ、水を超硬度に結晶化させて４匹の管狐を狙い撃つ。

サクヤモン「無駄だ？」

４匹の管狐は素早く交わし、勢いをつけてエンシェントマーメイモンに体当たりする。

エンシェントマーメイモン「ぐはっ？」

サクヤモン「まだだ？」

サクヤモンは右手を前に差し出して印を唱える。すると、４匹の管狐はサクヤモンの印に従ってエンシェントマーメイモンに攻撃する。

エンシェントマーメイモン「なに？」

サクヤモン「炎？」

額に炎を持つ管狐は身体から炎を宿らせ、勢いをつけてエンシェン

トマーメイモンに体当たりする。

エンシェントマーメイモン「？」

サクヤモン「水？」

次に、額に水を持つ管狐は全身に水を纏い、勢いをつけてエンシェントマーメイモンに体当たりする。同じ属性とはいえ、威力は絶大だ。

サクヤモン「風？」

額に風を持つ管狐は鎌鼬（かまいたち）を放ってエンシェントマーメイモンを切り刻む。

エンシェントマーメイモン「かはっ？」

サクヤモン「雷？」

最後に、額に雷を持つ管狐は身体から雷を発生させ、エンシェントマーメイモンにぶつけた。

エンシェントマーメイモン「うわぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラ「凄い！押してるわ！」

４匹の管狐は筒へと戻っていった。

エンシェントマーメイモン「わらわを怒らせたようじゃな…。これで終いにしてやる？」

エンシェントマーメイモンは巨大な槍を天に突き出し、詠唱を唱える。

エンシェントマーメイモン「流道の水よ、この者共を沈めたまえ？『グレイト・メイルストローム？』」

ミソラとサクヤモンの周りに巨大な大渦巻きを発生させる。

ミソラ・サクヤモン「？」

エンシェントマーメイモン「この技は、わらわの最後の切り札じゃ。この技を耐えればお主達の力を認めてやる！行け！」

エンシェントマーメイモンは巨大な槍を薙ぎ払うように振ると、巨大な大渦巻きはミソラ達に襲い掛かる。

サクヤモン「ミソラ。私の後ろへ！」

ミソラ「分かったわ！」

ミソラは素早くサクヤモンの背中に隠れる。

サクヤモン「一か八かだ…。」

サクヤモンは金剛錫杖を回転させ、地面に打ち付ける。

サクヤモン「『金剛界曼荼羅（こんごうかいまんだら）？』」

サクヤモンの周りに巨大な結界を張る。すると、巨大な大渦巻きは

結界に直撃した。

ミソラ「サクヤモン…。」

ミソラは心配そうな表情でサクヤモンを見つめる。

サクヤモン「心配ない…。私なら大丈夫だ…。」

サクヤモンは小さく笑いを見せ、ミソラを安心させる。

エンシェントマーメイモン「そんな結界、わらわのグレイト・メイルストロームに耐えられるとでも思っておるのか？」

エンシェントマーメイモンは手を広げると、巨大な大渦巻きは更に威力を増して結界を攻撃する。

ピキッ！

その時、結界にヒビが入ってしまったのだ。

サクヤモン「くっ？」

（このままではマズイ…。なんとかしないとミソラが…）

サクヤモンは苦しい表情をミソラに見せようとせず心の中で耐える。

その時、ミソラがサクヤモンの手にそっと触れる。

サクヤモン「ミソラ？」

ミソラ「これでもまだ大丈夫って言えるの…？」

サクヤモン「いや、私は…」

ミソラ「無理に隠さなくていいわ…。あなたの心が読めるんだから…。」

サクヤモンは隠しきれず、素直に謝る。

サクヤモン「すまない…。」

ミソラ「私はあなたのパートナー。……でしょ？だから一緒に乗り越えましょう…。」

ミソラはサクヤモンを見つめて頷くと、サクヤモンはコクリと頷いた。

サクヤモン「分かった…。」

ミソラはゆっくりと目を閉じて念じると、結界は優しい光りに包まれた。

エンシェントマーメイモン「悪あがきを！潰れてしまうがいい！」

エンシェントマーメイモンは容赦なく結界を破ろうとする。

ミソラ「アンタなんかに潰させはしないわ！」

サクヤモン「これが私達の…」

ミソラ・サクヤモン「絆よ？」

その時、結界は聖なる輝きに満ち溢れ、エンシェントマーメイモンを包んだ。

エンシェントマーメイモン「そんなバカな？」

ーーーーーーーーーーーーーー

光りが止み、ミソラとサクヤモンはゆっくりと目を開けた。

ミソラ「生きてる…？」

エンシェントマーメイモン「わらわの技、見事耐え抜いたようじゃの…。お主達の勝ちじゃ。」

ミソラとサクヤモンは見上げると、エンシェントマーメイモンの身体が光っていた。

サクヤモン「エンシェントマーメイモン…。」

エンシェントマーメイモン「お主達の勝ちじゃ。水のエンシェントストーンを受けとるがいい。」

エンシェントマーメイモンは
目を閉じて念じると、上空から小さな光りが現れ、ミソラの元へと舞い降りる。

ミソラ「これがエンシェントストーン…？」

エンシェントマーメイモン「お主達の活躍、わらわは見守らせて貰うぞ…。」

エンシェントマーメイモンはそう言って静かに消え去った。

サクヤモンは全ての力を使い果たし、幼年期へと退化した。

ポコモン「やったねミソラ。」

ミソラ「うん！お疲れ様、ポコモン。」

ミソラは水のエンシェントストーンを見つめると、青く澄んでいてとても美しかった。

ミソラ「綺麗…。」

水のエンシェントストーンに見とれるミソラ。その時、ミソラのＤ－アクセルが反応し、水のエンシェントストーンは静かに消え去った。

ミソラ「あれ？水のエンシェントストーンが消えたわ？」

ミソラはせっかく手に入れたエンシェントストーンがなくなり、パニック状態に陥る。

ポコモン「たぶんだと思うけど、Ｄ－アクセルの中に入ったのでは？」

ミソラ「え？」

ミソラはすぐにＤ－アクセルで確認すると、Ｄ－アクセルの中にエンシェントストーンがあったことに気付く。

ミソラ「な～んだぁ…。脅かさないでよ～。」

ポコモン「ミソラ、早くアトラン島に戻りましょ！」

ミソラ「そうね、急ぎましょ！」

ミソラとポコモンはここへくる時に使用した潜水草を使ってアトランティスから出るのであった。

～アトラン島～

ザッパーン？

海面から顔を出すミソラとポコモン。

ミソラ「何とか辿りついたね！」

ポコモン「えぇ！」

ガオモン「ミソラ！レナモン！」

ミソラとポコモンは声の聞こえてくる方へと向くと、カイ達がミソラ達の帰りを待っていたのだ。

ミソラ「みんな！」

ミソラとポコモンはアトラン島に向かって泳ぎ、陸に上がる。

カイ「全く。何をやっていたんだ…。」

カイは腕を組んでフンと鼻を鳴らす。

ミソラ「心配かけてごめんね。」

カイ「お前が帰って来るの遅いから、アホが待ちくたびれてるぞ。」

ミソラ「……アホ？」

ミソラは首を傾げる。その時だった。

？？？「ミソラすわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん？ボクチン寂しかったよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん？」

そう、アホことキャンドモンである。キャンドモンは勢いをつけてミソラの胸に飛び込んだ。

ミソラは交わす素振りを見せず、キャンドモンの顔面をガッチリと掴んだ。

キャンドモン「……ふぇ？」

ミソラ「近寄るんじゃないわよこのドスケベロウソクがぁぁぁぁ？」

ミソラはありったけの力でキャンドモンを投げ飛ばした。

キャンドモン「ママァァァァァァァァァン？」

キャンドモンは勢いよくヤシの木に頭ゴッチんし、バッタリと倒れる。

ミソラ「ホンット、ウザいわね…。」

カイ・ガオモン（とんでもない女だ…（汗））

カイとガオモンはゴクリと息を飲み込む。

ミソラ「それよりみんな、私達伝説の十闘士と戦ったんだよ！」

カイ「なに？」

ミソラ「これよ！」

ミソラはＤ－アクセルの画面に映る水のエンシェントストーンをカイとガオモンに見せる。

ガオモン「本当だ？」

カイ（この女、タダ者じゃないな…。）

「伝説の十闘士は遺跡らしきものに潜んでいるという事だな？」

ミソラ「おそらくそうかもしれないわ。」

カイ「だったらこんな所でグズグズしてるヒマはない。出発するぞ。」

カイは右手を広げると、巨大手裏剣、ギルガメッシュが現れる。そしてギルガメッシュを地面に突き刺して叫ぶ。

カイ「デジサモン、発動！」

地面からデジ文字が描かれた魔法陣が現れる。

カイ「来い、サンダーバーモン！」

魔法陣からサンダーバーモンが実体化される。

サンダーバーモン「呼んだか、カイ？」

カイ「次の島に行くぞ。」

カイとガオモンはサンダーバーモンの背中に飛び乗る。

ポコモン「私達も行きましょ！」

ミソラ「うん。」

ポコモンはミソラの頭に乗り、ミソラは急いでサンダーバーモンの背中に乗る。

キャンドモン「ボクチンを置いて行かないで～～？」

キャンドモンは慌ててサンダーバーモンの尻尾を掴む。

サンダーバーモン「しっかり捕まるのだぞ。」

サンダーバーモンは翼を広げて上空へと飛翔し、次の島へと向かうのであった。

エンシェントマーメイモンとの激闘を繰り広げたミソラとポコモン

は絆の力を知り、大きく成長するのであった。

―To Be Continued.…

ＥＰ６５　～迷わない心こそ力！金色の神人　サクヤモン？～（後書き）

～おまけ～

『透けてます…。』

ミソラ達を乗せ、次の島へと向かい飛び立つサンダーバーモン。

ミソラ「またビショビショだわ～…。ゴメンねサンダーバーモン、冷たくない？」

ミソラは申し訳なさそうに謝ると、サンダーバーモンは平気そうな顔をしつつ頬を赤らめる。

サンダーバーモン「オレなら大丈夫だ…。気にしなくてもいい。」

ガオモン（なんで顔が赤いんだ…？……ん？）

先頭に座るカイが全く振り向かないことに気付くガオモン。

ガオモン「どうなさいましたか、カイ？」

カイ「い、いや何でもない…。」

カイは頬を赤らめながらそっぽを向く。

ガオモン「？」

ガオモンはチラッとミソラの方へ向くと、ビショビショに濡れたせ

いで服装が透けている事に気付く。

ガオモン（……あれ？何か見える…？）

その時、キャンドモンがひょっこりとガオモンの前に表れる。

ガオモン「うわっ？」

キャンドモン「フフフ…。お目が高いですねガオモン…。」

（ヒソヒソ…）

ガオモン「な、何がだ…？というよりかいつの間に尻尾からよじ登ってきたのだ？」

（ヒソヒソ…）

キャンドモンは嫌らしい目で不気味な笑みを浮かべる。

キャンドモン「そんな事よりガオモン、ミソラさんの服が透けている事に気付いておるだろう？あの透けている服の奥には究極と呼ばれる秘密が隠されているのだよ。」

（ヒソヒソ…）

ガオモン「なに、本当か？」

（ヒソヒソ…）

キャンドモン「Ｙｅｓ！その奥に潜んでいる究極と呼ばれる秘密を見れば、僕らは最強のパワーを得る事ができるんですよ！因みにこれは男の人しか分かりませんよ。」

（ヒソヒソ…）

ガオモン「なるほど…。しかし、なぜカイとサンダーバーモンはその究極と呼ばれる秘密を見ようとしないのだ?」
（ヒソヒソ…）

キャンドモン「ハイそこ重要!究極と呼ばれる秘密を見るにはある条件を満たさなければならないのです!まず1つ、純粋な心を持つ者である事!そしてもう1つ、その究極と呼ばれる秘密を見るには度胸と根性が必要。つまりあの出来損ない2人は度胸も根性もないし、純粋な心でもないのだ。そう!あの2人は恐れているのです!」
（ヒソヒソ…）

ガオモン「まさかあのカイが恐れている物があるなんて…。」
（ゴクリ…）

ガオモンは恐ろしさのあまりにゴクリと息を呑む。

キャンドモン「そこでだ。ボクチンと協力してミソラさんのボイ…じゃなくて究極と呼ばれる秘密を見ようではないか!」
（ヒソヒソ…）

何も知らないガオモンは激しく燃え上がる。

ガオモン「全ては我が主のために…。分かった。協力しよう。オレがカイを助けるよ!」
（ヒソヒソ…）

ガオモンは承諾すると、キャンドモンは一気にテンションが上がった。

キャンドモン「よっしゃゃゃ

?まずお前はミソラさんを押さえつけろ!そしてボクチンがミソラさんの服の前チャックを開ける!そして一気に突撃じゃゃゃ?」

その時、ミソラはありったけの力でキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ぶべらッ?」

ミソラ「何が究極と呼ばれる秘密よ…。明らかに協力するフリして世からぬことを考えていたでしょうがアンタ?ていうか何も関係のないガオモンを巻き込むなッ?」

ガオモン「協力するフリ?」

キャンドモン「誤解ですよミソラさん?これはあくまでミソラさんの事を考えて……ですよねカイさん?」

キャンドモンはカイを見つめて助けを求めるが、カイは巨大手裏剣、ギルガメッシュを構えていた。

カイ「度胸も根性もなくて悪かったな…。」↑聞こえていた

キャンドモン「って聞こえてたんかーーーーーい?」

カイ「覚悟は…」

ミソラ「出来てるんでしょうね…?」

カイとミソラは武器を構えて、ギロリとキャンドモンを睨む。

キャンドモン「いいいいいいいいいいいいやゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ

ややややや？」

ガオモン「いったい何が…？」

ガオモンの頭の上には「？」が幾つも浮かび、ちんぷんかんぷんだった。

レナモン「これだけは言っておくよガオモン。キャンドモンに近づかない方がいい。キャンドモンに関わるとあんな風になってしまうからな…。」

ガオモン「わ、分かった…。」

（結局、究極と呼ばれる秘密ったて一体？）

『究極と呼ばれる秘密』純粋なガオモンは結局何も分からないまま幕を閉じるのであった。

キャンドモン「お助けぇぇぇ

Ｅｐ６６　～火山島　ヴォルク島？土の十闘士　エンシェントボルケーモン？～

一方、四大竜の試練を終えたリュウギ達は、エンシェントストーンを探す冒険の幕が開かれる。

Ｅｐ６６スタート？

EP66　～火山島　ヴォルク島？土の十闘士　エンシェントボルケーモン？～

～ネット海～

リュウギ達を乗せるシードラモンはエンシェントストーンの手掛かりを探しに海を渡る。

カズマ「エンシェントストーン…。一体何処にあるんですかねぇ～。」

シードラモンの頭に乗るカズマは目を細めて辺りを見回す。

リュウギ「伝説の十闘士の持つ秘宝だ…。そう簡単に見つかるわけないだろ…。」

シードラモンの背中に乗るリュウギは小さくツッコム。

ナルガモン「んなこといいから早く次の島に降りねぇか？」

シードラモンの背中に乗るナルガモンは口を震わせる。

シードラモン「おいおい、どんだけビビってんだよナルガモン？情けないったらありゃしないぜ。」

シードラモンはフッと鼻で笑う。

ナルガモン「べ、別にビビってねぇよオレは！早く戦いたくてウズウズしてるだけだよこれは！」

身体をブルブルと震わせながら強がるナルガモン。

シードラモン「そんな無理に強がっちゃって…。震えてんの分かってんだよ。オレの身体にお前の振動が伝わってくるんだよ。」

カズマ「あはは!強がりだけは一人前なんだなジャックモン!」

冗談気に笑うカズマ。すると、ナルガモンはギロリとカズマを睨む。

ナルガモン「誰がジャックモンだコルァァァ!オレはナルガモンだっつう……」

シードラモン「おらよ。」

シードラモンはちょっと揺らすと、ナルガモンは慌ててシードラモンの身体にしがみつく。

ナルガモン「おわっ?テメェシードラモン!落とす気か?」

シードラモン「ごめーんね♪」

シードラモンは可愛げに謝る。

リュウギ「諦めろよナルガモン、海の上じゃこいつらの方が圧倒的に有利だぞ…。」

カズマ「そーいうこと!分かってるねぇリュウ兄♪」

ナルガモンはギリッと歯を食いしばり、フンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。

ナルガモン「……フンだ?言っとくけど、陸ならオレの方が最強だからな!」

カズマ・シードラモン「はいはい…。」

適当な返事をするカズマとシードラモン。すると、ナルガモンは怒鳴り出す。

ナルガモン「んだよそれ?オレをおちょくってるなテメェら?オレを怒らせたら……」

シードラモン「ほほいのほいっと!」

シードラモンはわざとグニャグニャに動くと、ナルガモンは慌ててシードラモンの身体にしがみつく。

ナルガモン「ひぃっ?」

シードラモン「オレを怒らせたら……なんだって?」

ナルガモンは手も足も出せず、ただシードラモンの身体にしがみつくしかなかった。

ナルガモン「このやろ~う(泣)」

カズマ「あはははは♪何だかんだ言って、ジャックモンって可愛いなぁ♪」

リュウギ「お前の負けだな…(汗)」

ナルガモン「ぢぐじょ～う…、覚えてろ～（泣）」

その時、カズマはおっ！と声を出して立ち上がる。

リュウギ「どうしたんだカズマ？」

カズマ「なんか怪しい島を見つけやしたぜリュウ兄。あれを見てくだせぇ！」

カズマは前方に指を差す。リュウギは目を細めて前方にある島を見つめる。

リュウギ「あれは…？」

その怪しげな島は、ゴツゴツとした岩で出来た島であり、その中心に火山のような巨大な山が聳えていた。

リュウギ「岩…？」

カズマ「よぉしシードラモン、あの島に上陸だ！」

シードラモン「分かった！」

シードラモンは猛スピードで怪しげな島へと向かった。

～ヴォルク島～

火山のような巨大な山が聳える島に上陸したリュウギ達。

リュウギ達はシードラモンから飛び降りると、シードラモンはネレイスモンへと退化してカズマの腕に巻き付く。

カズマ「お疲れさん、ネレイスモン。」

ネレイスモン「あいよ。」

リュウギ「変わった島だな…。」

ナルガモン「こんな所にエンシェントストーンがあるのかぁ？全くそんな気がしねぇんだけど…。」

その時、地面が激しく揺れ始める。

一同「？」

リュウギ「なんだ？」

？？？「ウォォォォォォォォ？」

岩陰から岩石の姿をしたデジモンの大群が現れる。

リュウギ「デジモン？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ゴツモン、成長期、鉱石型、データ種、必殺技はアングリーロック。」

ゴツモンの大群は一瞬にしてリュウギ達を囲んだ。

ネレイスモン「囲まれた？」

リュウギ「待てよ！俺達は別に怪しい者じゃ……」

ゴツモン達は聞く耳を持たず、一斉にリュウギ達に襲い掛かる。

ゴツモン達「ウォォォォォォォォ？」

一同「くっ？」

カズマ「リュウ兄、コイツらもしかしたらイビルスに操られてるかもしれねぇですぜぃ。」

リュウギ「かもしれないな…。ナルガモン行くぞ！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード、アルカナムが現れる。

ナルガモン「よっしゃ！ＣＯＯＬに暴れてやるぜ！」

カズマ「遅れるなよネレイスモン！」

カズマは双龍牙を鞘から抜き出して構える。

ネレイスモン「あいよ！」

ナルガモン「『アートルムフレイム！』」

ネレイスモン「『アクアショット！』」

ナルガモンとネレイスモンはそれぞれのワザでゴツモン達を倒して行く。

ゴツモン達「ウォォォォォォォォ？」

ゴツモン達は倒れると、体内からイビルスが姿を現す。

カズマ「逃がしやしませんぜ！」

リュウギ「これで決める！」

リュウギとカズマは目にも止まらない早さでイビルス達を次々と切り刻んでいった。

イビルス達「ギィィィィィィィィ？」

イビルス達は一匹残らず消滅した。

ナルガモン「対したことねぇな！」

ネレイスモン「楽勝♪」

リュウギ「カズマ、リカバリーするぞ！」

カズマ「りょうかーい。」

リュウギとカズマは急いでゴツモン達をリカバリーをする。

そして…。

ゴツモンA「いやぁ～、助かっただぁ…。」

ゴツモンB「ホンマ、ありがとな。」

リュウギ「無事で良かったよ。ところで、この島について教えてくれないか？」

ゴツモンB「ヴォルク島の事でっか？この島にはある伝説が隠されとるらしいねん。」

カズマ「伝説？」

ゴツモンA「このヴォルク島の中心にあるヴォルク山の最深部に行ってみたら分かるだぁ。」

ゴツモンB「せやけど、ヴォルク山はあらゆるデータを焼き尽くすマグマが溜まっちょる。わてらも迂闊に近く事はでけへんねん。それに…」

カズマ「なんでさぁ？」

ゴツモンA「ヴォルク山を守護するデジモンがひそんでいるんだじょ！」

リュウギ「守護するデジモンかぁ…。」

リュウギは腕を組んで考える。

カズマ「こりゃ益々怪しいですねぇリュウ兄…。」

リュウギ「もしかしたら、ヴォルク山の最深部にエンシェントストーンがあるかもしれない。行ってみよう。」

ナルガモン「でもよぅ、マグマはどうするんだよ？」

カズマ「ま、取り敢えず行ってみようじゃないですかぃ。ヴォルク山に向かってしゅっぱーつ♪」

～ヴォルク山～

山頂まで登るリュウギ達。ヴォルク山の山頂がすり鉢状にへコんでいた。

リュウギ「ここがそうか…。」

カズマ「どひゃ～、見ろよリュウ兄、あんな所に落ちたら一溜まりもありやせんぜぃ。」

リュウギ達はすり鉢状にへコんである山の中を覗き込むと、マグマがコポコポと泡立っていた。

一同「ゴクリ…。」

ネレイスモン「なぁカズマ、これに落ちたらどうなると思う…？」

カズマ「聞くまでもないでしょ。即死ですぜこりゃ…。」

リュウギ「でも、この下にエンシェントストーンがあるかもしれない。」

その時、ナルガモンは息を大きく吸い込んでマグマに向かって叫ぶ。

ナルガモン「守護するデジモン、隠れてねぇで出てこい！」

ネレイスモン「って、なに呼んでんだよ？」

ナルガモン「なにって、呼んだら来るかなぁって…。」

リュウギ「ランプの精じゃねぇんだから…。」

リュウギは小さくツッコム。しかしその時、マグマがはげしく沸騰する。

一同「？」

ナルガモン「なんだ×2？」

その時、マグマの中から巨大なデジモンが姿を現す。

？？？「グォォォォォォォォ？」

ネレイスモン「マジで出てきたぞオイ？」

カズマはＤ－アクセルで巨大なデジモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ヴォルクドラモン、完全体、竜型、データ種、必殺技はヴォルカニックフォーン」

リュウギ「コイツがヴォルク山を守護するデジモン…。」

ヴォルクドラモン「いかにも、我はヴォルク山を守護する者、ヴォルクドラモンなり。今すぐここから立ち去って貰おうか。」

カズマ「そうはいきやせんねぇ。なんたってオレ達はアンタに用があるんでさぁ。」

ヴォルクドラモン「なに？」

リュウギ「俺達はデジタルワールドの救世主　エクセリオンだ。ヴォルクドラモン、この島に伝説の十闘士はいるか？」

ヴォルクドラモン「貴様らが救世主であったか…。いかにも、このヴォルク山の最深部にエンシェントデジモンが眠っておられる。」

リュウギ「会わせてくれないか？デジタルワールドを救うためにはどうしてもエンシェントストーンが欲しいんだ。」

ヴォルクドラモンは黙りになり、リュウギ達を見つめる。すると、ようやく口を開く。

ヴォルクドラモン「よかろう…。ただし、条件がある。」

リュウギ「条件？」

ヴォルクドラモン「我と戦って貰う。」

カズマ「要するに、オレ達の力を試す事ですかぃ？」

ヴォルクドラモン「そうだ。それがヴォルク山を守護する義務だからな…。」

カズマ「面白そうだなぁ。やってやりやすぜぃ！」

カズマはやる気になり、双龍牙を鞘から抜き出す。

リュウギ「カズマ……。」

カズマ「リュウ兄、すまねぇがエンシェントデジモンは俺達に任せて、こいつはリュウ兄達に任せやすぜぃ。」

リュウギ「あぁ！」

ナルガモン「任せとけって！」

リュウギとナルガモンは戦う態勢に入る。すると、リュウギとナルガモンは何かおかしいと感じたのか、同時に首を傾げる。

リュウギ・ナルガモン「……へ？」

カズマ「そいじゃ、頼んま……」

リュウギ「っておい？なに勝手に決めてんだよ？」

ナルガモン「俺達が戦うみたいになってんじゃねぇかぁぁぁぁ？」

カズマはわざとらしくトボける。

カズマ「へ？違うんですかぃ？」

ナルガモン「チゲェよッ？バカかテメェは？」

リュウギ「そんな素振りされたら、お前が戦うとしか見えねぇぞ…。」

カズマ「やだなぁリュウ兄、これは戦う前の準備体操なんでさぁ。」

カズマはそう言って双龍牙をジャグリングして準備体操する。

リュウギ・ナルガモン「ウソつけッ?」

カズマ「とにかくオレが行くから、そこんとこヨロシク♪」

ナルガモン「バカ言ってんじゃねぇよ!オレとリュウギが行くからテメェらはここで一生サーカスやってろ!」

カズマ「サーカスじゃねぇ!これは立派な俺の特技なんでさぁ!」

ナルガモン「似たようなもんじゃねぇかコラぁ!」

ネレイスモン「似てねぇし!バイトの面接の特技でサーカスって書いたらソッコーバカにされるだろうが!」

カズマ「ジャグリングって書けば一番無難なんでさぁ!」

ナルガモン「いや、意味不明だし?テメェら何の話してんだよ?」

ナルガモン達は言い争いになり、とうとう喧嘩が始まった。

リュウギ「また始まった…。」

リュウギは飽きれて深くため息をつく。

ヴォルクドラモン「貴様ら、なにか勘違いしておらぬか？」

ヴォルクドラモンの言葉に喧嘩しているナルガモン達はピタッと止まる。

一同「……へ？」

ヴォルクドラモン「勝負とはつまり、賭けの事だ。」

リュウギ「賭けだって？」

ヴォルクドラモン「貴様らのどちらかがこのヴォルク山の最深部に入って貰い、エンシェントデジモンと戦って貰う。」

カズマ「なんだ…。進入許可っめヤツ？案外イイヤツじゃん？」

リュウギ「どっかのセコイ奴とは大違いだな…。」

リュウギはカズマに聞こえない程度にツッコム。

ヴォルクドラモン「ただし、制限時間は３０分。貴様らが勝てばヴォルク山は噴火せずに済み、エンシェントストーンは貴様らの物。しかし時間が過ぎてしまえば火山は噴火してしまい、ヴォルク山の最深部にいる者達はマグマの餌食となる。それが条件だ…。」

条件を聞いたカズマとネレイスモンは冷や汗をかく。

ネレイスモン「あ～ヤベッ、急に腹が……。」

ナルガモン「っておい？」

ナルガモンは思わず手の振りを付けてビシッとツッコム。

カズマ「オレ達、マグマアレルギーなんでさぁ…。」

リュウギ「ウソつけ…。つうか聞いたことねぇよマグマアレルギー…。」

カズマ「ま、これはオレの専門じゃないんでさぁ。だからリュウ兄、後は頼んますぜぃ。」

カズマは爽やかな顔をしてリュウギの肩にポンと手を置く。

リュウギ「爽やかな顔をすればいいと思ったら大間違いだぞ…。アンテナ引きちぎるぞ…（怒）」

リュウギは眉をピクピクと動かしながらツッコム。今にも爆発しそうだ。

ナルガモン「どうするんだよリュウギ～…？」

リュウギは腕を組んで考える。

リュウギ「こう見えてもカズマはかなりの無難男だからなぁ…。ちょうどいい薬かもしれない…。」

カズマ「ちょっと待ってくだせぇリュウ兄、オレのマグマアレルギーは永遠に治せねぇんでさぁ…。癌と同じなんでさぁ…。」

ナルガモン「やかましわ?癌とアレルギーを一緒にするバカがどこの世界にいるんだよ?」

ナルガモンはありったけの声でツッコムと、カズマは誇らし気になる。

カズマ「ここにいる?」

リュウギ「決まりだな…。カズマとネレイスモン、今回はお前らが行ってこい。」

カズマ「何でだよリュウ兄?バカリュウ兄ッ?」

（ブーブー）

ネレイスモン「オレ達をマグマの餌食にするつもりかこの薄情者ー?」

（ブーブー）

カズマとネレイスモンは頬を膨らませてブーイングする。

リュウギ「あのなぁ…、やる前から諦めてどうするんだよ…?」

カズマ「とにかくオレはぜったいに行かねぇからな!」

ネレイスモン「行かねぇからな!」

カズマとネレイスモンはふくれっ面になりそっぽを向く。

ヴォルクドラモン「マグマは既に引いてある。早くしないと時間の

無駄だぞ？」

リュウギ「そこまで言うなら…」

ナルガモン「しょーがねぇな…。」

リュウギとナルガモンはお互いに顔を見合わせ、同時にコクリと頷いた。すると、リュウギとナルガモンはカズマを持ち上げる。

カズマ「うえ？ちょっとリュウ兄？何してんの……？」

ネレイスモン「待て待て待て？これってまさか？」

リュウギ・ナルガモン「行ってこい！」

リュウギとナルガモンはせーのっと言ってカズマとネレイスモンをヴォルク山の底に落とした。

カズマ・ネレイスモン「どわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カズマは素早く態勢を立て直して地面に着地する。

カズマ「リュウ兄コノヤロォォォ？よくもやりやがったな？」

カズマは見上げてギロリとリュウギに睨みつく。

リュウギ「お前みたいな無難男、たまにはこうしてもらわないとな！」

ナルガモン「最近テメェらはいいとこ取りしてるからな！精々頑張れよ、無難男！」

カズマ「うるせぇ！誰が無難男だ！テメェら後で覚えてろぃ！」

リュウギ「時間が迫って来てるぞ！急げカズマ！」

カズマ「わーったよ！行きやーいいんだろ行きやー！」

カズマはペッと唾を吐いてヴォルク山の最深部へと向かって行った。

～ヴォルク山　最深部～

カズマ「あ～胸糞悪りぃ～。リュウ兄の野郎…。」

（ブツブツ…）

カズマはブツブツと文句を言いながら奥へと進む。

ネレイスモン「ブツブツ文句言ってもイライラしかしねぇぞカズマ。だったらさっさと終わらせようぜ！」

カズマ「しょうがね、お前の言うとおりさっさと終わらすとしますかぁ。」

カズマはうーんと背筋を伸ばしてリラックスしたその時、地面が激しく揺れ始める。

ネレイスモン「どわっ？なんだ×2？」

カズマ「どうやら、エンシェントデジモンのお出ましみたいだな！」

？？？「誰じゃゃゃゃ！俺様の部屋に勝手に入ってくる命知らずは？」

その時、カズマのＤ－アクセルから聖なる光りが生じる。

カズマ「？」

カズマとネレイスモンは光りの閃光に包まれ、思わず目を閉じる。

光が止み、カズマとネレイスモンは目を開けた。２人の目の先は、２０メートルをも超える巨大隕石のような姿をしたデジモンだった。

ネレイスモン「うひゃ～、デケェなぁ…。」

？？？「ガハハハ！貴様らか？俺様の部屋を無断に入室した奴はぁ？」

カズマはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「エンシェントボルケーモン、究極体、古代鉱物型、ウィルス種、必殺技はスーパーノヴァ。」

カズマ「無断入室って言われても、オレ達は知らねぇんでさぁ。」

ネレイスモン「だったらインターホンでも置いとけ！」

カズマとネレイスモンは全く動ずることなくツッコム。

エンシェントボルケーモン「俺様を誰だと思ってるんだテメェら？

俺様は伝説の土の十闘士、エンシェントボルケーモン様だ！」

カズマ「あっそ、オレ長い名前言うのめんどくさいからダルマンでいいですかぃ？」

カズマはそう言って小指で鼻の穴をほじる。

エンシェントボルケーモン「おいクソガキ、俺様を嘗めるのも大概にしろよ…？俺様を怒らせると……」

カズマ「顔が真っ赤になるとでも言うんですかぃ？それって正真正銘のダルマンじゃないですかぃ。」

ネレイスモン「プッ、それ言えてる。」

エンシェントボルケーモン「爆・発？（激怒）」

エンシェントボルケーモンの怒りは頂点に達し、背中にある火山が噴火する。

カズマ「あ、顔が真っ赤になってますぜぃ。本当にダルマンだな。」

にも関わらず挑発するカズマ。

ネレイスモン「ダルマンだダルマン♪」

エンシェントボルケーモン「もう勘弁ならねぇ！覚悟しやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？」

To Be Continued...

ＥＰ６６　～火山島　ヴォルク島？土の十闘士　エンシェントボルケーモン？～

次回はついにカズマ＆ネレイスモンｖｓエンシェントボルケーモン？

挑発して余裕ぶりを見せるカズマ達は果たして勝てるのか？

カズマ「そんな言い方はないでしょ、ダメミーさん。」

次回もお楽しみに？

ＥＰ６７　～火山噴火でパニック？最高のコンビネーション？～（前書き）

今回はカズマ＆ネレイスモンｖｓエンシェントボルケーモン？

果たしてどちらが勝つのか？

ＥＰ６７スタート？

EP67　～火山噴火でパニック？最高のコンビネーション？～

～ヴォルク山　最深部～

エンシェントボルケーモン「覚悟しやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？」

カズマの挑発により、エンシェントボルケーモンの怒りは爆発した。

カズマ「おっと、怒らせちまったな…。」

ネレイスモン「どうすんだよカズマ？」

カズマ「ま、成せばなるって事でさぁ。行きやすぜネレイスモン！」

カズマはエンシェントボルケーモンの怒りに全く動ずる事なく、Ｄ－アクセルをネレイスモンに翳した。するとネレイスモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

ネレイスモン「ネレイスモン、超進化？」

『メガシードラモン？』

カズマ「さて、おっ始めるようぜ！」

カズマはニヤッと笑いを見せながら、刀袋から二つの刃を持つ刀、双龍牙を取り出す。

メガシードラモン「喰らえ？『サンダージャベリン？』」

メガシードラモンは角先から強力な電撃を放つ。

エンシェントボルケーモン「そんなもの、俺様には通用しねぇんだよ？」

エンシェントボルケーモンは拳をギュッと握りしめてパンチすると、サンダージャベリンはかき消されてしまった。

メガシードラモン「サンダージャベリンが効いてない？」

エンシェントボルケーモン「死にさらせクソ野郎共がぁぁぁぁ？『アトミックボンバー？』」

エンシェントボルケーモンは背中の火山を大爆発させ、その推進力で超強烈なラリアットを繰り出してメガシードラモンを殴り飛ばした。

メガシードラモン「ぐはっ？」

メガシードラモンは勢いよく岩壁に叩き付かれてしまう。

カズマ「どうやら、タダのダルマンじゃありやせんねぇ…。」

（これがエンシェントデジモンの力かぁ…。）

エンシェントボルケーモン「次は貴様じゃゃゃゃゃゃ？『アトミックボンバー？』」

エンシェントボルケーモンは怒りの矛先をカズマに向け、同じ技を繰り出す。

カズマ「同じ技を何度も喰らう程……」

カズマは双龍牙を鞘に納めたまま態勢を低くする。

エンシェントボルケーモン「死にさらせぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？」

エンシェントボルケーモンはカズマに狙いを定めて、ありったけの力で殴りに掛かる。

カズマ「オレはバカじゃないんでさぁ…。」

カズマは一瞬にして姿を消してアトミックボンバーを交わした。

エンシェントボルケーモン「なに？何処だ？」

カズマ「何処見てるんですかぃ？」

エンシェントボルケーモンは振り向くと、カズマは双龍牙を鞘に納めた状態で宙に浮いていた。それはまるで瞬間移動したかのようだった。

エンシェントボルケーモン「な、なにをするつもりだ？」

カズマ「とっておきでさぁ…。」

カズマは双龍牙を鞘に納めたまま、カシャンと音を鳴らした。その時、エンシェントボルケーモンの身体中に無数の傷が生じる。

エンシェントボルケーモン「ぐはっ？」

カズマ「いつまで寝てるでぃ！アレをやりやすぜぇメガシードラモン！」

カズマは声を張り上げると、メガシードラモンはすぐに攻撃態勢に入る。

メガシードラモン「寝てねぇよ！アレだな！」

カズマはメガシードラモンの頭に飛び乗り、双龍牙を鞘から抜き出して低く構える。

メガシードラモン「行くぜ？」

メガシードラモンは角先から強力な電撃を放つ。

カズマ「行きやすぜぇ、秘技……」

カズマは双龍牙を横一閃に振ると、二つの刃先から剣風によって生み出された衝撃波を放った。すると二つの技が一つとなり、電撃を纏った強力な衝撃波となってエンシェントボルケーモンにぶつけた。

カズマ・メガシードラモン「『雷刃双波（らいじんそうは）？」

エンシェントボルケーモン「ぐぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

強力の余りにとてつもない大爆発が生じ、爆煙が舞い上がる。

メガシードラモン「やったか？」

カズマ「エンシェントデジモンの割には対した事ないんだな？」

その時、巨大な手が爆煙を切り開き、メガシードラモンの首を掴んで壁に激しく叩きつけた。

メガシードラモン「かはっ？」

カズマ「メガシードラモン？」

？？？「俺様をここまでコケにするとはなぁ…。貴様ら、死ぬ覚悟はできてるんだろうなぁ？」

爆煙が消え去ると、巨大な手の正体はエンシェントボルケーモンの手だった。

カズマ「その手を放しやがれ！」

カズマはエンシェントボルケーモンの手に飛び乗り、メガシードラモンの首を掴む左手を攻撃しようと双龍牙を構える。

エンシェントボルケーモン「無駄じゃ？」

エンシェントボルケーモンはメガシードラモンの首を掴んだまま、思いきりフルスイングしてカズマとメガシードラモンを投げ飛ばして岩壁に叩きつけた。

カズマ・メガシードラモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カズマとメガシードラモンはかなりのダメージを喰らってしまい、地面に向かって倒れる。

エンシェントボルケーモン「形成逆転じゃ…。大人しく降参するんだな！ガハハハハハ？」

エンシェントボルケーモンはそう言って高らかに笑う。

その時、エンシェントボルケーモンの言葉にカズマはピクッと動く。

カズマ「降参……だと？」

メガシードラモン「……あ。」

（マズイ…。）

エンシェントボルケーモン「ん？」

カズマ「今の言葉、聞き捨てならねぇなぁ…。」

カズマはゆっくりと立ち上がると先程の余裕の表情ではなく、今にも怒り爆発しそうな表情だった。

カズマ「死ぬ覚悟はできてるんだろうなテメェ？」

エンシェントボルケーモン「え？え、え？？」

（な、なんか雰囲気変わった？？）

メガシードラモン（始まっちゃった…。カズマは降参系の言葉を耳にするととんでもない事になる…。ま、その方が早くケリ着けるからいいか…。）

カズマ「行くぞメガシードラモン？ダルマンにたっぷりとお仕置き

してやる！」

メガシードラモン「あいよ！」

カズマはＤ－アクセルをメガシードラモンに翳した。するとメガシードラモンのデータが上書きされ、姿が変わる。

メガシードラモン「メガシードラモン、究極進化？」

『プレシオモン？』

エンシェントボルケーモン「究極体か。いよいよ本気モードってヤツだな？」

カズマ「本気モードだと？オレは既に怒り爆発モードだコノヤロォオオオォ？」

カズマは言葉を発すると同時に双龍牙を振り回した。すると剣風によって生み出された無数の衝撃波を放った。

エンシェントボルケーモン「そんなもの、俺様の手で握……」

プレシオモン「させるかよ！『シェイキングパルス？』」

プレシオモンは口から強力な超音波を放ち、エンシェントボルケーモンの動きを麻痺させる。

エンシェントボルケーモン「なに？ぐぉおおおおおおおおおお？」

動きを封じ込まれたエンシェントボルケーモンは無数の衝撃波を喰

らい、爆煙が舞い上がる。

エンシェントボルケーモン「図に乗るな小僧が?そっちがその気ならこの技でくたばるがいい?」

エンシェントボルケーモンは唸り声を上げると、地面が激しく揺れ始める。

エンシェントボルケーモン「くたばれ?『スーパーノ……』」

その時、白い物体が爆煙を切り開いてエンシェントボルケーモンにモロ直撃した。

エンシェントボルケーモン「がはっ?冷てッ?なんじゃこれは?」

カズマ「お前の技は大体予想つくんだよ。」

爆煙が消え去ると、エンシェントボルケーモンはとんでもない物を目にした。

カズマの背後には白い雪だるまのような姿をしたデジモンがいたのだ。

エンシェントボルケーモン「ユキダルモン?なぜここに?」

カズマ「アンタが視界を失ってる間、デジサモンさせて貰った。少し頭でも冷やしてな、ダルマン。」

カズマはそう言って双龍牙を鞘から抜き出し、ユキダルモンに合図を送る。

カズマ「頼むぜユキダルモン！」

ユキダルモン「おう？」

ユキダルモンは手を広げると、雪の結晶で出来たビームを放つ。

カズマ「秘技……」

カズマは双龍牙を縦一閃に振ると、二つの刃先から剣風によって生み出された衝撃波を放った。するとユキダルモンの技と衝撃波が一つとなり、氷気を纏った強力な衝撃波となってエンシェントボルケーモンにぶつけた。

カズマ「『氷牙波衝（ひょうがはしょう）？』」

エンシェントボルケーモン「バカな？この俺様がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

エンシェントボルケーモンの身体は段々と氷気に包まれ、やがて身体全体に凍り付いた。

カズマ「いっそ、散りな…。」

カズマは双龍牙を器用に振り回した後、ゆっくりと鞘に納めた。

その時、エンシェントボルケーモンは唸り声を上げると、全身に凍てつく氷を一気に剥がした。

ユキダルモン「なに？」

プレシオモン「マジかよ…。」

エンシェントボルケーモン「ガァーハッハッハッハッ?貴様ら、なかなか楽しませてくれたな!いいだろう、合格だ。」

エンシェントボルケーモンは高らかに笑うと、プレシオモンは首を傾げる。

プレシオモン「どういう事だよ?」

エンシェントボルケーモン「俺様相手にまさかここまでやれるとは思いもしなかったぜ。褒めてやろう。」

カズマ「試したって事か?」

エンシェントボルケーモン「そういう事だ。貴様らのこれからの活躍、俺様は楽しみにしているぞ。エンシェントストーンを受け取れ。」

エンシェントボルケーモンは手を差し出すと、手の平から小さな光が現れる。

プレシオモン「これがエンシェントストーンか?」

カズマ「だからなんだよ?アンタの事情なんざどうでもいいんだよ。」

エンシェントボルケーモン「……へ?」

(まだ怒ってるの…?)

プレシオモン「カズマの機嫌を治すには、アンタが降参すればいいんだよ。」

エンシェントボルケーモン「俺様がか？」

プレシオモン「いいのか？アンタが降参しないとカズマの機嫌は永遠と治らなくなるんだぞぉ？」

カズマ「どうなってもいいんでかい？」

エンシェントボルケーモン「いま普通に喋ったよな？さりげなく口調戻ってたよな？」

プレシオモン「とにかくさっさと負けを認めろよ！」

エンシェントボルケーモンはグッと怒りを堪えるが、仕方なく負けを認める。

エンシェントボルケーモン「ぐぬぬ…。……降参です。」

カズマ「分かりゃそれでいいんでさぁ。んじゃ、ありがたく頂きやすぜ。」

カズマの口調が戻った。ようやく機嫌を治したみたいだ。カズマは宙に浮く茶色いに輝くエンシェントストーンを掴み取る。

エンシェントボルケーモン「デジタルワールドの運命はお前ら次第だ。心配しなくとも俺様から勝ったんだ。俺様は信じてるぞ。」

プレシオモン「俺様に勝ったんだって言われてもなぁ。」

カズマ「ダルマンから勝っても嬉しくも何ともないんでさぁ。」

カズマはそう言って頭をポリポリとかく。

エンシェントボルケーモン（コイツら……。）

エンシェントボルケーモンはギリッと歯を食いしばって怒りを堪える。

カズマ「冗談でさぁ。デジタルワールドはオレ達に任せときな。」

エンシェントボルケーモン「では、デジタルワールドを頼んだぞ。」

エンシェントボルケーモンはそう言って静かに消え去った。

プレシオモンは全ての力を使い果たしてしまい、幼年期のプカモンへと退化した。

プカモン「んにゃ～、疲れた。」

プカモンはう～んと背筋を伸ばす。

カズマ「お疲れ。ユッキー（ユキダルモン）もお疲れさん。」

カズマは双龍牙を鞘に納めて刀袋に入れる。

ユキダルモン「またいつでも呼んでくれよ。」

デジサモンの効果が切れてしまい、ユキダルモンは静かに消え去った。

カズマ「さて、これで一件落着でさぁ♪戻りやすぜプカモン。」

カズマは刀袋を肩にぶら下げて歩き出す。

プカモン「待ってよカズマ～！」

プカモンは慌ててカズマの頭に乗る。

こうして、カズマは土のエンシェントストーンを手に入れ、リュウギの元へと戻るのであった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉ…プカモン「ところでカズマ。」

カズマ「なんだよプカモン。せっかくイイ所だったのにさぁ？」

プカモン「ヴォルクドラモンが言っていた制限時間がどうたらこうたらって言ってたよな？」

カズマ「そんな事かよ。確か３０分以内って言ってやしたぜ。ほら、ギリギリの３２分でセーフですぜぃ。」

カズマは自慢気にＤ－アクセルに表示された時計をプカモンに見せる。プカモンはピタッと止まった。

プカモン「それ、余裕のアウトじゃん…。」

カズマ「あ、ホントだ。」

ゴゴゴゴゴゴ……

その時、奥から不吉な騒音が聞こえてくる。プカモンはくちびるを震わせながらカズマに話し掛ける。

プカモン「なぁカズマ、この音ってまさか…。」

カズマ「そのまさかでさぁ…。」

その時、カズマの背後から真っ赤な泥のような物が大量に噴き出してくる。

カズマ・プカモン「マグマだぁぁぁ

プカモン「意味分かんねぇよ？」

そうしている間に、マグマとの距離が段々と縮まってくる。

プカモン「近づいてきてるって？カズマ、もっと走れぇぇぇぇ？」

カズマの頭に乗るプカモンはペチペチとカズマの頭を叩く。まるで競走馬のように。

カズマ「馬扱いしてんじゃねぇよ？ブッ飛ばされてぇのか？」

プカモン「あれ見ろ！出口が見えるぞ！」

カズマ「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

カズマは最後のチカラを振り絞って出口まで駆け付ける。

～ヴォルク山～

一方、カズマ達を待つリュウギとナルガモン。ナルガモンは心配そうな顔でリュウギに話し掛ける。

ナルガモン「なぁリュウギ、アイツら大丈夫かなぁ？」

リュウギ「大丈夫だ。俺はアイツらを信じる。」

（とは言っても、制限時間はとっくに過ぎてる。何も起こらなきゃいいんだが…。）

ナルガモンだけでなく、リュウギも心配していた。その時、地面が

激しく揺れ始める。

ナルガモン「なんだ×2？」

ヴォルクドラモン「そろそろヴォルク山は噴火するな…。」

リュウギ「なんだって？」

ナルガモン「それじゃアイツら、間に合わなかったのか？」

ヴォルクドラモン「これで貴様らの負……」

？？？「うぉーーーーーーーーーー？」

その時、ヴォルク山の中から声が聞こえてくる。

ナルガモン「今度は何だよ？」

リュウギはその声にハッとしてヴォルク山の中を覗き込む。

リュウギ「あれは？」

その声の正体はマグマから全力疾走で逃げるカズマとプカモンだった。

リュウギ「カズマ？」

ナルガモン「アイツら生きてたんだ？」

カズマ「うぉいスットコドッコイ？なに勝手に殺してんでぃ？」

プカモン「助けてくれぇぇぇぇ？」

リュウギ「掴まれ？」

リュウギは手を差し伸べると、カズマはかべを足場にして高く飛び上がり、リュウギの手を掴んだ。

リュウギ「ナルガモン、引きあげてくれ！」

ナルガモン「うおりゃゃゃゃゃゃゃゃ？」

ナルガモンはリュウギの身体を掴んで思いきり引っ張った。

カズマ・プカモン「どわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カズマとプカモンは勢いよく外に出て尻餅つく。するとマグマは思い切り上空へと噴火した。

カズマ「た、助かった～…。」

カズマは安心してホッとする。しかしプカモンの身体はブルブルと震えていた。

プカモン「……でもなさそうだよ。」

リュウギ達は見上げると、上空からマグマが落ちてくる事に気付き、リュウギ達はありったけの越えで叫ぶ。

一同「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ヴォルクドラモン「伏せろ？」

リュウギ達は言われた通りにその場で伏せた。

ヴォルクドラモン「グォォォォォォォォォォォ？」

ヴォルクドラモンは途轍もない咆哮を上げると、マグマはまるでヴォルクドラモンに怯えて逃げていくようにヴォルク山の中へと戻っていく。

ナルガモン「た、助かったぜ…。」

カズマ「死ぬかと思った…。リアルに死ぬかと思った…。」

（ゼェ…ゼェ…）

プカモン「生きてるの？オレ、生きてるの？」

リュウギ「なぜ俺達を助けてくれたんだ…？」

ヴォルクドラモン「答えは単純。貴様らはこの勝負に勝ったから助けたのだ。」

ナルガモン「どういう事だよ？」

ヴォルクドラモン「その者の右手に持っている物を見れば分かる。」

リュウギ「カズマの？」

カズマ「これの事ですかぃ？」

カズマの右手に持っていた物とは茶色に輝くエンシェントストーンだった。

ナルガモン「なんだよそれ?」

ヴォルクドラモン「それはエンシェントボルケーモンに認めてくれた証。つまり、貴様らの勝ちだ。」

ナルガモン「お前らエンシェントデジモンを倒したのか?」

カズマ「まぁな♪あんなダルマン、楽勝でさぁ♪」

リュウギ「ダルマン…?何の事だ?」

カズマ「いやこっちの話でぃ。」

リュウギ「そうか。残りのエンシェントストーンはあと9個だな。」

ヴォルクドラモン「次のエンシェントストーンを探すなら、ここから北西にある孤島を目指すがいい。」

リュウギ「分かった。色々世話になったな、ヴォルクドラモン。」

ヴォルクドラモン「武運を祈るぞ、エクセリオン達よ。」

ヴォルクドラモンはリュウギ達と別れを告げ、マグマの中へと入って行った。

ナルガモン「よっしゃ?次の島に向かって出発するぞ?」

カズマ「やる気たっぷりで申し訳ありやせんが……」

プカモン「オレはこの通りだからシードラモンに進化するのはムリ。」

ナルガモン「じゃあさ、デジサモンで呼び出すのは？」

カズマ「残念ながらさっきのエンシェントボルケーモンで使いやしたぜ。」

リュウギ「分かってるようだけど、俺のデジサモンは島に移動できるデジモンはいないからな。」

ナルガモン「んだよ、アシなかったらどうすんだよ？」

カズマ「なに言ってんですかい？アシならあるじゃないですかぃ。」

ナルガモン「ん？誰だよ？」

ナルガモンはキョロキョロと辺りを見回すと、周りから視線を感じる。

ナルガモン「え？まさかオレ？」

カズマ・プカモン「Ｙｅｓ！」

ナルガモン「冗談じゃねぇ？なんでオレが……」

猛反対するナルガモン。すると、カズマはナルガモンの近くに寄っ

て耳打ちをする。

カズマ「よく考えてみてくだせぇ。そうすれば海を渡る必要もないし死ぬ思いもしなくて済むんですぜぃ？」

ナルガモン「あ、な～るほど♪リュウギ、つうわけでオレを完全体にしてくれ！」

リュウギ「切り替え早ぇなオイ？プライドってもんはねぇのかよお前は？」

カズマ「そうカッカしないでくだせぇリュウ兄。」

プカモン「そうそう。困った時はお互い協力し合わないとね♪」

リュウギ「しょうがないなぁ…。じゃあ行くぞ。」

リュウギは一度咳払いをしてＤ－アクセルをナルガモンに翳した。ナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、超進化？」

『ドラグナモン？』

ドラグナモン「早く乗りな！」

リュウギ「あぁ！」

リュウギ達はドラグナモンの背中に飛び乗る。すると、ドラグナモンは低く構えてロケットエンジンの発射準備をする。

ドラグナモン「しっかり掴まっとけよ？」

カズマ「りょうかーい♪」

プカモン「いつでもＯＫだぜ！」

ドラグナモン「んじゃ、次の島に向かって出発だぜ？」

ドラグナモンはロケットエンジンを発射させると、勢いよく上空へと高く飛び上がった。

カズマ「高ぇーーーー？」

リュウギ「ドラグナモン、ここから北西の孤島に向ってくれ！」

ドラグナモン「任せときな！」

次のエンシェントストーンを手に入れるため北西にある孤島へと向かうのであった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ６７　～火山噴火でパニック？最高のコンビネーション？～（後書き）

次回はエグザの物語。

次なるエンシェントデジモンは一体…？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ６８　～叡智を持つ偉大なる賢者、鋼の十闘士　エンシェントワイズモン～

今回はエグザの物語。

果たして次のエンシェントデジモンは一体？

Ｅｐ６８スタート？

ＥＰ６８　～叡智を持つ偉大なる賢者、鋼の十闘士　エンシェントワイズモン～

～サンナ島～

レオルモン「ふぁ～、よく寝た。」

レオルモンは大きなアクビをする。

コウジ「おはよう、レオルモン。」

レオルモン「おう、おはよ。」

コウジは挨拶すると、レオルモンも挨拶をする。

レオルモン「あれ？エグザは？」

レオルモンは辺りを見回すとエグザの姿はなかった。

コウジ「僕にも分からない。」

博士「あんなヤツ、ほっとけばいいだギャ？」

アグモン博士はフンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。朝から機嫌悪いみたいだ。

その時、レオルモンは何か気配を感じとったのか、空を見上げる。

コウジ「どうしたんだレオルモン？」

レオルモン「上から何か来る…。」

コウジ達は空を見上げると、上空から黒い影が舞い降りてくる。

博士「こっちに近付いてくるだギャ？」

その黒い影の正体は、アクィラモンだった。

？？？「待たせたな。」

アクィラモンの背中にはエグザが乗っていた。

一同「エグザ？」

エグザはアクィラモンから飛び降りる。

エグザ「ご苦労、アクィラモン。」

アクィラモン「必要になったらいつでも呼んでくれ。」

エグザ「あぁ。リターン。」

エグザはリターン機能を使うと、アクィラモンは静かに消え去った。

レオルモン「今まで何処行ってたんだよ？」

エグザ「ま、ちょっとした大事な用だ…。」

エグザはそう言って背中を向ける。

コウジ「昨日の夜中に抜け出してまで外せない大事な用なのかい？」

コウジの言葉に、エグザはピタッと止まる。

レオルモン「そうなのか？」

エグザ「……。」

コウジ「今度は何を企んでいるんだい？」

エグザは黙りになる。そしてようやく口を開く。

エグザ「ダークスの連中が俺を付け狙っている。だから俺はお前らが寝ている間、しばらく身を隠させて貰ったのさ。」

博士「ウソだギャ？きっとリュウギ達を命を狙っているだギャ？そうに違いないだギャ？」

最初に言葉が飛んで来たのはアグモン博士だ。アグモン博士はエグザの言う事を全く信じようとしない。

レオルモン「博士…。」

コウジ「悪いだけど博士。僕はエグザを信じる。」

コウジの言葉にアグモン博士は驚愕する。

博士「コウジ？どうしてだギャ？アイツはリュウを殺したんだギャ？それなのに…」

コウジ「確かにそうかもしれない…。それでも僕はエグザを信じる。」

博士「コウジ…。」

エグザ「さて、エンシェントデジモンを探しに行くぞ…。イヤなら着いてこなくてもいいぞ。」

エグザは歩き出すと、コウジはエグザの後を着く。

レオルモンは歩き出そうとすると、アグモン博士は呼び止める。

博士「レオルモン、君はどう思うだギャ？」

レオルモン「確かにオレはエグザの行為は許せない。でも、コウジはエグザの事を信じている。なぜコウジはそこまでしてエグザを信じようとするのか、オレはそれを知りたいだけだ。」

レオルモンはそう言ってエグザの後を着く。

博士「もういいだギャ？見損なっただギャ？ボクだけでもショウやみんなを探しに行くだギャ？」

アグモン博士はフンと鼻を鳴らして、デジシップの方へと向かおうとしたその時、黒い影の大群がアグモン博士に襲い掛かる。

博士「だギャャャャャャャャャャ？」

コウジ「今の声ってまさか？」

レオルモン「博士の声だ？」

エグザ「チッ？」

エグザは舌打ちをした後、すぐに博士の元へと駆け付ける。

コウジ「エグザ？」

元の場所に戻ると、アグモン博士の周りにはイビルスの大群に囲まれていた。

博士「助けてだギャ～？」

その時イビルスの大群は一斉にアグモン博士に襲い掛かる。

博士「だギャャャャャャャャャャ？」

エグザは背中に背負っている大剣、セイクリッド・レインティアを取り出し、目にも止まらない早さでイビルス達を切り刻んだ。

イビルス達「ギィィィィィィィィ？」

博士「？」

エグザ「死にたくなかったら伏せてろ？」

アグモン博士は言われた通りに地面に伏せる。

イビルス達の怒りの矛先はエグザに向けて一斉に襲い掛かる。

エグザ「来な！」

エグザはセイクリッド・レインティアを地面に突き刺すと、２つに分裂しで二刀流になり、次々とイビルス達を切り刻んでいく。

エグザ「失せろ。」

エグザは低く構えて身体を回転させると、剣風によって生み出された竜巻を発生させ残り全てのイビルスを切り刻んだ。

イビルス達「ギィィィィィィィィ？」

エグザはセイクリッド・レインティアを一つにして背中に背負う。

エグザ「ったく、世話の焼ける野郎だ…。」

そこへ、コウジとレオルモンが慌ててアグモン博士の元へと駆け付ける。

コウジ「博士、大丈夫かい？」

博士「ボ、ボクは大丈夫だギャ…。それより…」

アグモン博士はエグザの方を見つめる。

博士「ど、どうしてボクを助けてくれたんだギャ…？」

アグモン博士は問うと、エグザは小さく呟く。

エグザ「……仲間だからだ。」

博士「……仲間？」

エグザ「か、勘違いするな。お前はコウジの仲間だからだ。それにお前がいなきゃだれが船を操作するんだよ？単独行動するバカな考えはやめときな。」

エグザはそう言って背を向けて歩き出す。

コウジ「エグザ…。」

博士「お、お前に言われたくないだギャ？」

アグモン博士はフンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。

レオルモン「でもよ博士、エグザはお前の声を聞いた途端、真っ先に助けに行ったんだぜ？」

博士「そんなハズないだギャ！ボクがいなきゃデジシップの操作できないから助けただギャ！」

助けて貰ったにも関わらず、まだエグザを疑うアグモン博士。すると、アグモン博士の傷を手当てするコウジは口を開く。

コウジ「本当にそう思うかい？」

博士「どういうことだギャ？」

コウジは立ち上がってエグザの後に着いて行く。

コウジ「それは自分の目で確かめるんだ。」

レオルモン「待てよコウジ！」

博士「……。」

アグモン博士は戸惑う。このままエグザの後に着いて行くのかと。しかしまた別行動をすればイビルスに襲われれのも一目瞭然。

博士「う～…。待ってだギャ～！」

博士はイビルスに襲われる事が怖くなり、エグザの後に着いて行くのであった。

深い森の中。エグザ達はエンシェントストーンを探すため森の中をうろつく。

コウジ「エグザ、この島にエンシェントストーンがあるという保証はあるのかい？」

エグザ「この島に間違いない。見ろ。」

エグザはＤ－アクセルをコウジに見せると、矢印は北の方へと差しながら強く反応していた。

コウジ「本当だ…。」

エグザ「もうすぐで着く。」

森を抜けると、そこは洞窟の入り口があった。

レオルモン「洞窟だ…。」

エグザはＤ－アクセルを確認中すると、矢印はこの洞窟に示していた。

エグザ「どうやら、ここみたいだな…。」

博士「な、なんか出てきそうで怖いだギャ…。」

（ゴクリ……）

ゴクリと息を呑み込むアグモン博士。するとエグザは何も躊躇いもなく洞窟の中へと入ろうとする。

コウジ「エグザ？」

エグザ「ここから先は俺１人で行く。お前らはここで待ってな。」

レオルモン「な、何言ってんだよ？オレ達も一緒に戦うぜ！」

レオルモンは自信満々に言うが、エグザは冷徹な態度をとる。

エグザ「お前らが居ると足で纏いにしかならねぇ。」

レオルモン「んな？なんだとコラァ？」

コウジ「理由はそれだけかい？」

エグザ「……それだけだ。じゃあな。」

エグザはそう言って洞窟の中へと入っていった。

レオルモン「ムカつく野郎だな！」

博士「だギャ？」

レオルモンとアグモン博士は歯をギリギリ鳴らしながら威嚇する。

コウジ「エグザ……。」

コウジはずっと気になっていた。昨夜、エグザが口にした言葉を。

エグザ『真実を話してやりてぇが、今はできない…。俺の罪はまだ完全に消えちゃいない…。だからコウジ、それまで待っててくれないか…？』

コウジ（こうして受け入れてもダメだというのか…？エグザ、君は一体…？）

～謎の洞窟～

水滴が水溜りに落ちてピチャン…ピチャン…と洞窟内に響き渡る。

エグザは黙々と洞窟の奥へと進んで行く。

エグザ「……。」

（残されたチャンスは一回…。チンロンモンに与えてくれたこのチャンス、無駄にする訳にはいかないんだ…。）

それは、ムゲンマウンテンでダークスに襲われて致命傷を追ってしまい、ヴァヌムスにトドメ刺される直前に光りに包まれた後の事だ

った…。

～？？？～

エグザ「うっ、うぅ…。」

エグザは目を開けて辺りを見回すと、何も見えない真っ暗な世界だった。エグザは既に分かり切った表情で小さくため息をついた後、小さく呟く。

エグザ「また助けられたな、チンロンモン…。」

その時、エグザの前に四聖獣の1人、チンロンモンが姿を現す。

チンロンモン「命拾いしたな、エグザ。」

エグザ「また俺は、大切な物を助ける事ができなかった。それに…」

チンロンモン「状況が更に悪化したな…。これをリュウギに知れたら命の保証はできないぞ…。」

エグザは俯き、チンロンモンに問う。

エグザ「チンロンモン、アンタに与えてくれたこの力でも結局スレイヤードラモンを助ける事ができなかった…。そして、アイツも…。」

エグザは拳をギュッと握り締めて、思いきり地面を叩き付けた。

チンロンモン「らしくないなエグザ…。しかしエグザ、そなたにはまだチャンスが残されている…。」

エグザ「残されてるかよ…。俺は何度もアイツに手を差し伸べてきた。しかしアイツは何一つ振り向きもしない…。結局俺は誰も助ける事はできないんだ…。」

チンロンモン「エグザ。そなたは何のためにここへ来たのか既に忘れたのか…？」

エグザ「……。」

チンロンモン「ダークスはそなたとリュウギの持つ例の物を狙っている。ダークスはそれを手にしてしまうと、デジタルワールドは地獄の闇へと朽ち果てる事になる…。」

エグザ「何か良い方法はないのか…？」

チンロンモン「一つだけ方法はある。デジタルワールドの何処かにある１０個のエンシェントストーンを集めるのだ。」

エグザ「エンシェントストーン…。」

チンロンモン「本来、ダークスは闇の世界から来た者。闇の礎によってダークスはこのデジタルワールドに依存しているのだ。」

エグザ「闇の礎だと…？」

チンロンモン「その闇の礎とは、そなたやリュウギが見たムゲンマウンテンの最上階にある電脳核だ。」

エグザ「？」

チンロンモン「しかし闇の礎には限度がある。つまりダークスはこれまで、ファイル島そしてその周辺にある島、スレッド大陸にて活動していた。」

エグザ「その闇の礎の機動停止させるには、１０個のエンシェントストーンを集めろっという事だな？」

チンロンモン「そうだ。そうすればダークスの活動は停止される。そして、電脳核に閉じ込められた彼女も救える…。」

エグザ「それが最後のチャンス…ってなワケだな…？」

チンロンモン「そうだ…。しかしエグザよ、アナログマンの造った電脳核を停止するとデジタルワールドを崩壊する機能が付いているのだ。」

エグザ「なに？それじゃアイツを救えたとしても…」

チンロンモン「デジタルワールドは崩壊する…。」

エグザ「あの野郎…、とんでもないもん造りやがって…。」

エグザは歯をギリッと食いしばって拳をギュッと握り締める。

チンロンモン「どうするのだ？彼女を救ってデジタルワールドを捨てるか…。それとも彼女を捨ててデジタルワールドを救うかの究極の選択だ。エグザ、答えはそなたに任せる。」

エグザ「……チゲェよチンロンモン、まだもう一つ答えがある…。」

チンロンモン「？」

エグザ「アイツを救い、そしてデジタルワールドも救う！」

チンロンモンはエグザの真っ直ぐな眼を見て安心する。

チンロンモン「……では、私はそなたの言葉を信じよう。健闘を祈るぞ、エグザ。」

エグザ「またな、チンロンモン。」

エグザは別れを告げると、静かに消え去った。

ーーーーーーーーーーーーーーー

エグザ「一刻も早く、エンシェントストーンを集めないとな…。」

エグザはチンロンモンに託された指名を胸に抱き、急いで奥へと進むのであった。

～謎の洞窟　玉座の間～

狭い通路を抜けると、そこは大広間だった。

エグザ「ここか…。ん？」

エグザは何か見つけたのか、目をほそめる。そこには城の偉い人が

座るような巨大な玉座だった。

エグザ「……。」

（玉座…？誰の玉座なんだ…？）

その時、何処からか声が聞こえてくる。

？？？「よく来たな…。始まりのエクセリオン、エグザよ。」

エグザ「誰だ…？」

エグザは背中に背負っている大剣、セイクリッド・レインティアの柄を握る。

？？？「そう慌てるでない…。我が名は伝説の鋼の十闘士　エンシェントワイズモン。お前がここに来る事は既に分かっていた。」

その時、エグザのＤ－アクセルが反応し、エグザは思わず目を閉じる。

エグザ「くっ？」

やがて光りが止むと、エグザはゆっくりと目を開けた途端、目の前に緑のマントに覆われたデジモンが姿を現す。

エグザはＤ－アクセルでエンシェントワイズモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「エンシェントワイズモン、究極体、古代突然変異型、ウィルス種、必殺技はラプラスの魔。」

エグザ「アンタがエンシェントデジモンか…。俺がここに来る事は既に分かっていたって言ってたよな…？なぜだ？」

エンシェントワイズモン「我はデジタルワールドの事なら何でも知っている。そして未来や過去、お前の心、あらゆる物を知っているからだ…。我は遥か未来を見通す賢者なのだ。」

エグザ「そうかい…。だったら俺がなぜここに来たのか、いちいち説明しなくても解るよな？」

エグザはそう言ってセイクリッド・レインティアを取り出して構える。

エンシェントワイズモン「無駄話は好きではない。では始めるぞ。」

エンシェントワイズモンはバサッと緑のマントを広げると、体内から鏡が現れる。

エグザ「鏡？」

エンシェントワイズモンの鏡にはエグザが映っていた。その時、鏡からエグザが実体化され、エグザの前に立つ。

エグザ（？）「……。」

エグザ「なんの真似だ？」

エンシェントワイズモン「お前は今迷っている…。心の何処かで微かにな…。違うか？」

エグザ「なるほどな…。要するに自分と向き合えって事か…。」

エグザはセイクリッド・レインティアを振り下ろすと、もう1人のエグザもセイクリッド・レインティアを取り出して斬撃を防ぐ。

エグザ（？）「……。」

もう1人のエグザは力で押し返すと、エグザはバク転して態勢を立て直す。

エグザ（？）「……。」

エグザ「おいおい、俺はそんな無口じゃねぇぞ？」

エンシェントワイズモン「もう1人のお前にうち勝てば、エンシェントストーンはお前に託そう。」

エグザ「いいのかそういう条件で？あとで後悔しても知らねぇからな。」

エンシェントワイズモン「お前こそ、たかがもう1人の自分だと侮っているとあとで後悔するぞ…。」

その時、もう1人のエグザはセイクリッド・レインティアを二刀流にし、剣風によって生み出された衝撃波を放つ。

エグザ（早い？）

エグザは素早く衝撃波を交わす。

エグザ（？）「……。」

表情何一つ変えないもう1人のエグザ。次に二刀流、セイクリッド・レインティアを同時に振り下ろして衝撃波を2つ放った後、二刀流を1つにして巨大な衝撃波を放つ。

エグザ「くっ？」

エグザはセイクリッド・レインティアを二刀流にして2つの衝撃波を弾き返した後、素早く身体を回転させて剣風によって生み出された竜巻を巻き起こし、もうひとつの衝撃波を弾き返した。

エンシェントワイズモン「ほぅ…。」

エグザ「ハァ…ハァ…。」

（なんて早さなんだ…？あの野郎、本当に俺なのか…？）

その時、もう1人のエグザは口を開く。

エグザ（？）「どうしたよもう1人の俺？息が上がってんぞ？」

エグザ「なんだ…。喋れるのかよ…。今までのムッツリは演技だったのかぁ？対した名男優だなぁ…。」

エグザ（？）「そいつはどうも…。」

エグザ「エンシェントワイズモン、いったい何を仕組んだんだ？」

エグザ（？）「残念だが、種も仕掛けもねぇよ。もちろんドーピン

グもしてねぇ。これが本来の俺（お前）の強さなんだよ。」

エグザ「なに？」

エンシェントワイズモン「そう、このエグザは何も恐れない強い心を持つエグザ。かつてのお前だ。」

エグザ「まるで今の俺が何かに恐れてるって言い方だな？」

エグザ（？）「正解だ。解ってんじゃねぇかよ。」

エグザ「ワリィが、俺は何も恐れてねぇ。お前らの思い違いだな。」

エグザ（？）「ってなんだよそれ？結局解ってねぇじゃねぇか。」

エンシェントワイズモン「果たしてそう思うかな？」

エグザ（？）「しょうがねぇよエンシェントワイズモン。素直に出さねぇのが俺の性格だからよぉ。」

エグザ「無駄話は好きじゃねぇって言わなかったか？悪いがさっさと終わらせてやる！」

エグザはセイクリッド・レインティアを構えて、ありったけの越えで叫ぶ。

エグザ「ＥＸモード、発動！」

しかし、何も起こらない。エグザは唇を震わせる。

エグザ「ＥＸモードが…発動できない…？」

エンシェントワイズモン「これで理解したか？お前は今、恐れる心、迷いの心、そして憎しみの心。その心がお前の身体を弱体化させている。それが今のお前なのだ…。」

エグザ（？）「お前に見せてやるよ。これが本来の俺（お前）の力だ！」

もう１人のエグザはセイクリッド・レインティアを構える。

エグザ（？）「ＥＸモード、発動？」

もう１人のエグザは叫ぶと、周りから激しい突風が舞い上がる。

エグザ「なに？」

突風が去ると、もう１人のエグザの身体から光りのオーラを纏っていた。

エグザ（？）「さぁ、第２ラウンドと行こうぜ…。」

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

ＥＰ６８　～叡智を持つ偉大なる賢者、鋼の十闘士　エンシェントワイズモン～

次回はエグザｖｓもう１人のエグザ？

果たしてエグザは、もう１人のエグザに勝つことができるのか？

次回もお楽しみ？

Ｅｐ６９　～エグザｖｓエグザ？エンシェントワイズモンの試練？～（前書き）

今回はエグザｖｓもう１人のエグザ？

果たして結末は？

そしてコウジ達の前にヤツが？

Ｅｐ６９スタート？

Ｅｐ６９　～エグザｖｓエグザ？エンシェントワイズモンの試練？～

～謎の洞窟　玉座の間～

エグザ（？）「さぁ、第２ラウンドと行こうぜ…。」

もう１人のエグザはニヤッと笑った途端、一瞬にして姿を消した。

エグザ「くっ？」

エグザは心に集中してもう１人のエグザの動きを読み取ろうとする。

その時、背後からもう１人のエグザがセイクリッド・レインティアを振りかぶっていた。

エグザ（？）「隙だらけだ…。」

エグザはセイクリッド・レインティアで背後から襲い掛かるもう１人のエグザの斬撃を受け止める。

エグザ（？）「なに？」

エグザ「読めてんだよ、テメェの動きはよぉ！」

エグザは力で押し返すと、もう１人のエグザはバク転して態勢を立て直す。

もう１人のエグザは地面に着地した途端、エグザは懐からデジガンを取り出してもう１人のエグザを狙い撃つ。

エグザ（？）「くっ！」

もう1人のエグザはセイクリッド・レインティアで次々と弾丸を弾き返していく。

エグザ（？）「それで一歩リードしたとでも思ってるのか？嘗められたものだ。」

エグザ「じゃあ牽制してみな。」

もう1人のエグザは一瞬にして姿を消した。

エグザ（いまだ？）

エグザは懐から閃光弾のマガジンをデジガンに装着して銃口を地面に向けたその時、背後からもう1人のエグザが現れる。

エグザ（？）「一足遅かったな！」

エグザ「ビンゴ…。」

（フッ…）

その時、地面から光りが満ち溢れ、もう1人のエグザは光りの閃光に包まれて視界を失う。

エグザ（？）「なに？」

（コイツ、予め地面に撃ち込んでいたのか？）

しばらくしてもう1人のエグザは目を開けると、エグザの姿はなか

った。

エグザ（？）「何処だ？」

エグザ「おいおい、次は何をするか想像できるだろ？」

もう1人のエグザはハッとして上を見上げると、両手に2丁拳銃、デジガンを持つエグザが構えていた。

エグザ「とっておきだ…。」

エグザは2丁拳銃、デジガンでもう1人のエグザにひたすら狙い撃つ。

エグザ（？）「くっ？」

もう1人のエグザはセイクリッド・レインティアを円状に回転させて弾丸を弾き返した。

エグザ（？）「それで勝ったつもりか？」

エグザ「テメェこそ、それで防いだつもりか？」

（ニヤッ…）

その時、もう1人のエグザの
持つセイクリッド・レインティアが氷結される。

エグザ（？）「なに？」

エグザ「テメェが見失っている間に、氷結弾に変えさせて貰った…。

形成逆転だ！」

宙に舞うエグザはデジガンをしまい、セイクリッド・ドラグーンを振りかぶった。

エグザ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

エグザはセイクリッド・ドラグーンでもう1人のエグザの持つセイクリッド・ドラグーンを切り刻んだ。すると、氷結化となったセイクリッド・ドラグーンは粉々に砕けた。

エグザは地面に着地した後、素早くデジガンを取り出してもう1人のエグザの頭に突き付ける。

エグザ（？）「なぜトドメを刺さん…？」

エグザ「テメェに言っておこうと思ってな…。エンシェントワイズモン、俺が今からいう事をしかとその汚ぇ鏡に刻んどきな。」

エンシェントワイズモン「？」

エグザ「恐れて何が悪りぃ？迷って何が悪りぃ？んなもん誰にでもあるんだよ。当然だ。デジモンも人間と同様、生きてるんだからな。」

エンシェントワイズモン「何が言いたいのだ？」

エグザ「テメェの言う恐れ、迷い、憎しみの心なんざ俺から言わせてもらえば高が知れてんだよ。その心に立ち向かう勇気、度胸ねぇヤツが本当の恐れなんじゃねぇのか？」

エンシェントワイズモン・エグザ（？）「……。」

エグザ「俺は例えどんな事があっても、心に決めた事は最後までやり通す！それが俺のやり方だ…。」

エンシェントワイズモン（真っ直ぐとした眼…。この眼は己の信念を貫き通し、そして何も恐れない強い心を持つ者の眼だ…。）

その時、もう1人のエグザは高らかに笑う。

エグザ（？）「ククク…、ハハハハハハ？」

エグザ「なんだ、その笑いは？」

エグザ（？）「それでこそ俺（お前）だ。このまま開き直らなかったら躊躇いもなくブッ飛ばしてたトコだったぜ。」

エグザ「そうかい。ま、お陰で大事なもんを忘れるトコだった。仕方なく礼を言ってやる。」

エグザ（？）「せいぜい闇に呑まれないよう、頑張れよ。」

もう1人のエグザは小さく笑うと、静かに消え去った。

エンシェントワイズモン「見事だ、エグザよ。まさかＥＸモードなしで自分自身に勝つとはなぁ…。」

エグザ「ほぅ、未来を見通す賢者なのに、予想外れかぁ？」

エンシェントワイズモン「いや、大体は予想していたさ。」

エグザ（胡散臭ぇ…。）

エンシェントワイズモン「合格だ、エグザ。手を差し出せ。」

エンシェントワイズモンは目を閉じて念じると、上空から小さな光りが現れ、エグザの元へと舞い降りる。

エグザは小さな光りに触れると、小さな光りはＤ－アクセルの中へと入っていった。

エグザ「これがエンシェントストーンか…。ところでエンシェントワイズモン、アイツが言っていた闇に呑まれるなって一体どういう意味だ？」

エンシェントワイズモン「お前とリュウギの中に眠るアル物の暴走だ。これまで、お前はどんな状況に陥っても、強い精神と強い心で何とか暴走を防いできた。それを対をなすリュウギは自分の心のコントロールができず暴走した。」

エグザ「それは俺のせいだ…。俺があの時こうしておけば、こんな事にはならなかった…。」

エグザは深刻な表情で左目の傷をそっと触る。

エンシェントワイズモン「エグザよ、これからの戦いはきっと厳しくなる。下手をすればお前も暴走し兼ねないぞ…。」

エグザ「わかってる…。エンシェントワイズモン、次のエンシェン

トストーンの場所を教えてくれないか？」

エンシェントワイズモン「スレッド大陸の近くにある孤島　スフィアム島に行け。そこへ行けば答えは見つかる。」

エンシェントワイズモンはそう言い残して静かに消え去った。

エグザ「そうか…。ありがとよ。」

エグザはコートをバサッと広げて背を向け、玉座の間から去って行った。

～サンナ島～

レオルモン「アイツ、遅ぇな…。」

コウジ「無事だといいんだが…。」

一方、洞窟の入り口でエグザの帰りを待つコウジとレオルモン。

博士「う～…。」

（ソワソワ…）

レオルモン「なにソワソワしてんだよ博士？」

アグモン博士が何故だかソワソワしている事に気付くレオルモンはアグモン博士に話し掛ける。

博士「な、なんでもないだギャ！ボクは別にあんなヤツの心配なんてしてないだギャ？」

慌ててエグザのことを否定するアグモン博士。するとレオルモンは小さくツッコム。

レオルモン「誰もそんなこと聞いてねぇよ…。もしかして心配してんじゃねぇのか？」

博士「そんな事、絶対にないだギャ？あんなヤツがもしケガしても、絶対に助けないだギャ？」

レオルモン「だから誰もそんな事、聞いてねぇっつうの！」

コウジ（やっぱり心配なんだね…。）

コウジはデジドライブを取り出して時間を確認する。

コウジ（エグザが洞窟に入って３０分か…。心配だな…。）

？？？「誰の心配してんだぁ？」

一同「？」

コウジ達は辺りを見回す。

博士「誰だギャ？」

レオルモン「コウジ、あれ？」

レオルモンは洞窟の岩の上に指を差す。コウジは見上げると、岩の上に黒い影が座っていた。

コウジ「誰だい？」

その姿は漆黒の黒髪で顔に包帯巻き付けた男、ヴァヌムスだった。

ヴァヌムス「はじめましてというよりか、久しぶりって言った方がいいな。おらよっと！」

ヴァヌムスは岩から飛び降りて華麗に着地する。

レオルモン「コウジ、下がってて！コイツ、闇の匂いがする！」

レオルモンはコウジの前に立って戦う態勢に入る。

ヴァヌムス「ほぅ、ネコのクセに鼻が効くんだな…。」

レオルモン「なんだとコラァ？」

レオルモンは歯をギリギリさせて威嚇する。

ヴァヌムス「んな事より、エグザの野郎の居場所を教えろ。」

コウジ「エグザの知り合いか？」

ヴァヌムス「まぁ、長～い因縁ってヤツだな。早く教えてくんねぇか？」

レオルモン「おいお前！名前も名乗らねぇで、急に出てきてエグザ居場所を教えろだと？嘗めるのも大概にしろよ！」

ヴァヌムス「はーいはい、ネコは檻で大人しくしてな。」

レオルモン（ブチッ…）

レオルモンはとうとう血管がブチ切れ、鋭い爪を立ててヴァヌムスに攻撃する。

レオルモン「もう勘弁ならねぇ？『レオクロー？』」

ヴァヌムス「……。」

その時、ヴァヌムスは一瞬にして姿を消した。

レオルモン「？」

（消えた？）

コウジ「レオルモン、上だ？」

その時、上空から現れてレオルモンを地面に押さえつける。

レオルモン「ぐはっ？」

コウジ「レオルモン？」

コウジは助けに行こうとすると、ヴァヌムスは背中に背負っている大剣、ダークネス・ドラグーンを取り出してレオルモンの首に突き付ける。

ヴァヌムス「おっと、それ以上抵抗するならコイツの命はねぇぜ。」

コウジ「くっ…？」

博士「卑怯だギャ！」

ヴァヌムス「卑怯？仕掛けたのはコイツなんだぜぇ？卑怯もクソもねぇだろ。」

コウジ「何が望みだ？」

ヴァヌムス「だ～か～ら～、俺はエグザに用があるんだよ。何度も言わせんじゃねぇよ。」

コウジ「エグザに会ってどうするつもりだ？」

ヴァヌムス「どうするかは俺の自由だ。ま、強いて言うならこの手で抹殺する事だな…。」

（ニヤリ…）

ヴァヌムスはそう言って不気味な笑みを浮かべる。

博士「抹殺だギャか？」

コウジ「なんだって？」

ヴァヌムス「んじゃ、逆に質問させて貰う。なんであんな野郎と一緒に行動してんだよ？」

レオルモン「な、なんで知ってんだよ？」

ヴァヌムス「テメェらの行動を少し監視させて貰ったんだよ。んで、

なんで一緒に行動してんだって聞いてんだよ？」

コウジ「そんなの、僕の自由だ…。僕らは、エグザの心を知りたいだけなんだ？」

ヴァヌムス「やっぱり甘ちゃんだなテメェらは…。コウジ、エグザなんてほっといて俺の所へ来い。」

ヴァヌムスはそう言って手を差し出してコウジを招く。

コウジ「……それは、できない。」

ヴァヌムス「なんでだ？お前の親友を奪ったヤツなんだぞ？」

コウジ「確かにそうかもしれない…。でも、エグザはそんな事するようなヤツじゃないと僕は思うんだ…。」

ヴァヌムス「要するにエグザはリュウを殺していない。そう言いたいのか？」

コウジ「……あぁ。だから僕はエグザの心を知りたい。もしそれが本当なら、きっと誰にも言えない理由があるかもしれない…。僕はそう信じたい…。」

レオルモン「コウ…ジ…。」

ヴァヌムス「お前なら解ってくれると信じてたが、やっぱりダメか…。ならしょうがねぇ…」

ヴァヌムスはそう言ってレオルモンの首に突き付けるダークネス・

ドラグーンを振り上げる。

ヴァヌムス「テメェの大切な物を奪うまでだ？」

レオルモン「？」

コウジ「やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

その時、洞窟の中から一発の銃声が鳴り響く。

ヴァヌムス「？」

ヴァヌムスは素早く交わし、素早く岩に乗る。

？？？「随分と好き放題するじゃねぇか、ヴァヌムス…。」

洞窟の中からエグザが姿を現す。エグザの片手にはデジガンを持っていた。

コウジ「エグザ？」

エグザ「お前らは下がってろ…。コイツは俺がやる！」

エグザはそう言って背中に背負っている大剣、セイクリッド，レインティアを取り出して構える。

ヴァヌムス「待ちくたびれたぜエグザ。死ぬ覚悟はできてん……ぐっ？」

その時、ヴァヌムスは突然胸を押さえて苦しみだす。

レオルモン「な、なんだ？」

エグザ「……。」

（やはりな…。チンロンモンの言った通りだ。）

エグザは隙を読んで、勢いつけてヴァヌムスに接近する。

エグザ「テメェの野望、ここで終わらせてやる？」

エグザはセイクリッド・レインティアを振りかぶった。

ヴァヌムス「チィッ？」

ヴァヌムスは危機を感じ、エグザの斬撃を素早く交わす。

エグザ「くっ！」

コウジ「アイツは？」

コウジ達はヴァヌムスを探すと、背後から笑い声が聞こえてくる。

ヴァヌムス「命拾いしたなぁ、エグザ…。だが今度会う時は、必ず殺してやるからな！」

ヴァヌムスはそう言って高らかに笑いながら闇の中へと去って行く。

エグザ「待ちやがれ……くっ？」

エグザは追いかけようとする。しかし、エンシェントワイズモンと

の戦闘で傷が痛み、その場で座り込む。

コウジ「エグザ？」

レオルモン「おい、大丈夫か？」

コウジとレオルモンは慌ててエグザの元へと駆け寄る。

コウジ「酷い傷だ…。今から応急処置するからジッとしてて！」

コウジは急いでエグザの傷を手当てする。

エグザ「くっ……。」

（あの野郎、何も関係ないコウジ達まで巻き込もうとするなんて…。）

エグザは歯をギリッとさせて怒りをグッと堪える。

コウジ「エグザ、さっきの男は一体…？」

コウジは恐る恐るエグザに問うと、エグザは黙りになる。

レオルモン「おい、黙ってねぇで何とか言えよ！」

すると、エグザはようやく口を開く。

エグザ「ヴァヌムス…。ヤツは正真正銘の闇の住人だ…。なぜヤツは突然苦しみだしたのかは、ヤツらダークスの行動に限界があるんだ…。ヤツらが基本行動する範囲はファイル島、もしくはその周辺にある島や大陸だけだ。」

レオルモン「そうだったのか…。」

エグザ「お前ら、これだけは言っておく。ヴァヌムスには一切近づくな。絶対にな！」

レオルモン「何をそんなに熱くなってんだよ？お前らってそんなに仲が悪いのか？」

レオルモンは冗談気に言うと、エグザは深刻な顔をして小さく呟く。

エグザ「そうだったら、最初からこんな事にはならなかっただろうな…。」

レオルモン「？」

レオルモンはなんの事か分からず、首を傾げる。

コウジ「エグザ、さっきはレオルモンを助けてくれてありがとう…。」

手当てしながらエグザにお礼を言うコウジ。すると、エグザは小さく笑いながらそっぽを向く。

エグザ「フッ、お前らだけじゃ心配だったからな…。気になって戻ってきたらこんなザマだ。」

博士「弱くて悪かっただギャな？」

最初に怒ったのはアグモン博士だった。

コウジ「ところで、エンシェントデジモンはいたのかい？」

エグザ「あぁ。ちゃんと打ち勝ったさ。」

エグザはＤ－アクセルをコウジ達に見せると、Ｄ－アクセルの画面には銀色に輝く宝石が輝いていた。

コウジ「これがエンシェントストーン？」

レオルモン「スゲェ…。」

博士「綺麗だギャ！」

それぞれ感想を述べるコウジ達。するとエグザはゆっくりと立ち上がる。

エグザ「次の目的地はスレッド大陸の近くにあるスフィアム島だ。さっさと船に戻るぞ…。」

エグザはそう言ってデジシップの方へと向かった。

博士「勝手に決めるなだギャーー！」

コウジ「……。」

（なぜ、ヴァヌムスは僕とエグザとの仲を引き裂こうとしていたんだろう…。）

コウジは先程ヴァヌムスに言われた事を気に掛けていた。

ヴァヌムス『強いて言うなら、この手で抹殺することだな…。コウジ、エグザなんかほっといて俺の所へ来い…。』

コウジ「……。」

レオルモン「……コウジ？コウジ！」

レオルモンが何回も呼んでいる事に気付き、コウジはハッとする。

レオルモン「なにボーッとしてんだよ？早くデジシップに戻るぞ！」

コウジ「あ、あぁ。」

不安気に返事をし、急いでエグザの後に着いて行くのであった。微かなる不安を抱きながら…。

しかし、その微かなる不安を抱いていたのはコウジだけではなかった。

エグザ「……。」

（コウジ…。俺は…。）

デジシップに向かうエグザは、足を止めて自分の手をジッと見つめる。

それは、洞窟の出口を探している時の事だった。

エグザ「急がねぇと、アイツらが心配だ…。何も起こらなきゃいいんだが…。」

洞窟の出口を見つけ、エグザは急いで出口へと駆け付ける。

その時、外からコウジの声が聞こえてくる。

コウジ「なんだって？」

エグザ「ん？」

エグザは陰から覗き込むと、ヴァヌムスが足でレオルモンを地面に押さえ付けていたのだ。

エグザ（ヴァヌムス？ここまで嗅ぎ付けて来やがったか！）

エグザはデジガンを懐から取り出して助けに行こうとしたその時、ヴァヌムスはコウジに問う。

ヴァヌムス「んじゃ、逆に質問させて貰う。なんであんな野郎と一緒に行動してんだよ？」

エグザ「？」

その時、エグザはピタッと足を止める。

レオルモン「な、なんで知ってんだよ？」

ヴァヌムス「テメェらの行動を少し監視させて貰ったんだよ。んで、なんで一緒に行動してんだって聞いてんだよ？」

コウジ「そんなの、僕の自由だ…。僕らは、エグザの心を知りたいだけなんだ？」

ヴァヌムス「やっぱり甘ちゃんだなテメェらは…。コウジ、エグザなんてほっといて俺の所へ来い。」

ヴァヌムスはそう言って手を差し出てコウジを招く。

エグザ（行くな、コウジ。）

コウジ「……それは、できない。」

ヴァヌムス「なんでだ？お前の親友を奪ったヤツなんだぞ？」

コウジ「確かにそうかもしれない…。でも、エグザはそんな事するようなヤツじゃないと僕は思うんだ…。」

ヴァヌムス「要するにエグザはリュウを殺していない。そう言いたいのか？」

コウジ「……あぁ。だから僕はエグザの心を知りたい。もしそれが本当なら、きっと誰にも言えない理由があるかもしれない…。僕はそう信じたい…。」

エグザ（コウジ……。）

ーーーーーーーーーーーーーー

エグザ（コウジ、俺はお前に打ち明けるべきなのか…。俺は…）

エグザは深刻な顔をしながら胸に手をあててギュッと拳を握る。やがて力が抜けてギュッと握っていた手をゆっくりと下ろす。

エグザ（バカだな俺は…。打ち明けたところで何も解決しない…。俺は許されない罪を犯したんだ…。）

エグザは吹っ切れたのか、青い空を見上げて小さく呟く。

エグザ「これは運命なんだ…。」

エグザは再び歩き始め、デジシップへと向うのであった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

Ｅｐ６９　～エグザｖｓエグザ？エンシェントワイズモンの試練？～（後書き）

次回はミソラ＆カイの物語？

次のエンシェントデジモンは一体？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ７０　～凍まじき吹雪島　アイシクル島？氷の十闘士　エンシェントメガニ

今回はミソラ＆カイの物語？

次のエンシェントデジモンは一体？

Ｅｐ７０スタート？

EP70　～凄まじき吹雪島　アイシクル島？氷の十闘士　エンシェントメガニウム～

一方、ミソラとカイは一つ目のエンシェントストーンを手に入れ、次なる島へと向かっていた。

ミソラ「次はどんなエンシェントデジモンなのかな…？」

レナモン「エンシェントマーメイモンの時は、間一髪だったな…。ミソラ、これからも厳しい戦いになるから気を引き締めて行こう…。」

ミソラ「分かってるわ！」

ミソラは自信満々な顔をして頷く。

キャンドモン「ボクチンもミソラさんを守るために、気を引き締めて行きます！」

ミソラ「いつも逃げてるクセに、よく言うわね…。」

キャンドモン「今回はマジです！本気と書いてマジです！」

ミソラ「あっそ…。」

ミソラは呆れた顔で小さくため息をつく。

カイ「……。」

一方、カイはＤ－アクセルでエンシェントストーンを探していた。

サンダーバーモン「カイ、状況はどうだ?」

カイ「反応が薄いな…。これじゃエンシェントストーン何処にあるか分からない…。」

その時、カイのＤ－アクセルから電子音が鳴る。カイはＤ－アクセルの画面を見ると、画面には『デジサモン、チャージ必要』と。

カイ「チッ、もうすぐで効果が切れるか…。サンダーバーモン、あの島に降りるぞ。」

サンダーバーモン「分かった。しっかり掴まれよ。」

サンダーバーモンは急降下し、とある島へと向かった。

～アイシクル島～

ここは島全体、雪に覆われた白銀の世界だった。そこへ、サンダーバーモンは地上へと舞い降り、カイ達を降ろす。

カイ「ご苦労、サンダーバーモン。」

サンダーバーモン「必要になったら、また呼んでくれ。」

デジサモンの効果が切れてしまい、サンダーバーモンは静かに消え去った。

ガオモン「ここは確か、アイシクル島。今は晴れているが、時には激しい吹雪が降るという有名な島だ。」

キャンドモン「吹雪ですか？」

ミソラ「また吹雪だなんて…。嫌だわ…。」

ミソラはファイル島にあるフリーズランドで散々な目にあったため、深くため息をつく。

レナモン「この島で一日野宿か…。ここで道草食ってる場合ではないというのに…。」

レナモンは腕を組んで悔やむと、カイは小さく呟く。

カイ「いや、そうでもなさそうだ…。」

ミソラ・レナモン「？」

キャンドモン「それはどういう事ですか？」

カイ「お前のＤ－アクセルで見てみろ。」

ミソラはＤ－アクセルの画面を見ると、強く反応していた。

ミソラ「Ｄ－アクセルが反応してるわ？」

カイ「そう、つまりこの島にエンシェントデジモンがいる…。」

ガオモン「やりましたね、カイ！」

カイ「そうと決まればグズグズしてるヒマはない。さっさと探しに

行くぞガオモン。」

カイはそう言って先頭に立って歩き出すと、ガオモンもカイの後に着いて行く。

ガオモン「はい。全ては我が主のために…。」

レナモン「行こう、ミソラ。」

ミソラ「え、えぇ…。」

ミソラは頷いて歩こうとする。しかし、ファイル島に起きた事によって足が全く動かない。

ミソラ「……。」

その時、レナモンはそっとミソラの肩にポンと手を置いてそっと囁く。

レナモン「心配ない。何か合ったら私がミソラを守る。」

ミソラ「レナモン…。」

やがて不安気な顔から笑顔に変わってコクリと頷く。

ミソラ「分かったわ。行きま……」

キャンドモン「そうですよ！何か合ったらボクチンが必ずお守り致します！それから『ありがとうキャンドモーン？』って言われてミソラさんにあ～んな事したり、こ～んな事したりしてボクチンとの

…」

ミソラ「ふんっ！」

ミソラは拳を握りしめてキャンドモンを思いきり殴り飛ばした。

キャンドモン「ぶべらっ？」

殴り飛ばされたキャンドモンは雪にズボッと顔面から突っ込む。

ミソラ「人がせっかくやる気になったのにアンタはホンットにＫＹね！それと喋ってる最中にイチイチ入って来ないでよ！ウザいから？」

キャンドモン「はい…すみましぇん…（泣）」

レナモン「と、とにかく出発しよう…。」

カイ・ガオモン「……。」

（やっぱりとんでもない女だ…。）

その光景を目にするカイとガオモンはゴクリと息を呑み込むのであった。

出発して１０分。雲行きが段々と怪しくなっていく。

ガオモン「カイ、もうすぐしたら凄まじい吹雪がくるかもしれませんよ…。」

カイ「分かってる。この辺りに吹雪を凌ぐ洞窟があればいいんだが

…。」

ミソラ「…あ。雪だ。」

カイ達は見上げると、白い結晶がゆっくりと舞い散る。

カイ「チッ、とにかく急ぐぞ！」

ミソラ「えぇ！」

それから２０分後…。

雪は次第に強くなり、容赦なくミソラ達に襲い掛かる。

カイ「くっ…。なんて吹雪だ！」

キャンドモン「ひょえぇぇぇぇぇ？寒いいいいいいい？」

ガオモン「みんな、離れてはいけないぞ！」

ミソラ「え、えぇ…。」

ミソラは立ち眩みすると、レナモンは慌ててミソラを支える。

レナモン「しっかりしろミソラ。あともうすぐだ。」

ミソラは虚ろな目でレナモンを見つめてゆっくりと頷く。

ミソラ「……うん。」

その時、ガオモンは何かを発見して思わず叫ぶ。

ガオモン「カイ！あそこに洞窟があります！」

カイ「よし…。彼処に避難するぞ！」

～アイシクル洞窟～

ガオモン「ここならもう安全ですね！」

カイ「あぁ。吹雪が止むまで待とう。あとは……」

カイはチラッとミソラを見つめる。

ミソラ「ハァ…ハァ…。」

レナモン「ミソラ、しっかりするんだ。」

ミソラ「……えぇ。私は大丈夫よ。」

その時、バサッと広げるような音が鳴ってミソラの身体を覆う。

ミソラ「？」

ミソラは見上げると、目が霞んで誰なのか全く見えなかった。

リュウギ『それでも着てな…。少しはマシになるだろう。』

ミソラ「リュウ…ギ…。」

しかしよくよく見ると、リュウギではなくカイだった。

カイ「フン、リュウギじゃなくて悪かったな…。」

ミソラはハッとして顔を赤らめる。

ミソラ「ご、ごめん…。カイは大丈夫なの？」

カイは上着を脱いだため、上半身はノースリーブの姿だった。

カイ「そんな状態なのに他人の心配か？バカな女だな…。」

ミソラ「わ、私は別に…。」

カイ「世話の焼ける女だ…。騒ぐと迷惑だからそこでジッとしてろ。」

ミソラ「う、うん…。」

その光景を目にしたキャンドモンは暴走する直前だった。

キャンドモン「だぁぁぁぁぁぁチキショォォォォォォ？おいテメェ？ミソラさんに向かって迷惑だとコルァ！だれに向かって口聞いとんじゃワレェェェェ？そこはＭｙポジションであるボクチンなんだよ？馴れ馴れしくしてんじゃねぇぞこのクソ野郎がぁぁぁぁ？」

その時、ガオモンの手にはめてあるボクシンググローブでキャンドモンに凄まじい右ストレートを喰らわした。

キャンドモン「ぐべらっ？」

ガオモン「お前こそ、カイに向かって偉そうな口聞くんじゃないぞ？」

キャンドモン「ふぁい…。すみましぇんでした…（泣）」

レナモン「う……（汗）」

それから１０分が経つが、吹雪はいとつも止む気配はない。

カイ（まったく止まないな…。）

ミソラ「……カイ。」

するとミソラはカイを呼ぶ。

カイ「調子はどうなんだ…？」

ミソラ「少しマシにはなったわ。ありがとう。」

ミソラはお礼を言うと、カイは頬を赤らめる。

カイ「お、俺は別に当然な事をしたまでだでだ…。」

ミソラ「ねぇ、どうしてカイはデジタルワールドに来たの？」

カイ「……強くなりたいからだ…。」

レナモン「強く？」

カイ「あの時、俺は何もできなかった。無力だったからリエナを救えなかった。」

ミソラ「そういえばムゲンマウンテンの時に言っていたわね…。まさかアナログマンがリエナちゃんを…？」

カイ「まぁ、それに近い物だ…。」

ミソラ「それじゃ、どうしてリュウギに戦いを挑んだの？」

カイ「あれか…。あの時はエグザに言われたんだ。」

エグザ『御縞　リュウギに会え…。そいつに会えば、お前の求めている物がすぐに見つかるハズだ…。』

レナモン「エグザがそんな事を…？」

カイ「始めは口先なヤツだと思っていた。だが、アイツと一緒にいると微かだが俺の求めている物が見えてくるんだ…。」

ミソラ「カイ…。」

カイ「エグザは俺に何をさせたかったのか…。その意味が段々と解ってきた…。」

レナモン「……。」

カイ「ところでお前はなぜデジタルワールドに来たんだ？」

ミソラ「え？私はリュウギと一緒に学校の屋上に来たら、空に吸い

込まれちゃって、それで目が覚めたらデジタルワールドに来てたのよ。」

すると、ミソラはあっ！と声を出す。

ミソラ「そうだわ！デジタルワールドに来る前、変な声を聞いたんだわ！」

カイ「変な声だと？」

ガオモン「何て言っていたんだ？」

ミソラ「確かあの時…

『極限を超える力を持つ電脳核（デジコア）がデジタルワールドを救う…。』

って言ってたわ！」

レナモン「極限を超える力を持つデジコア…。聞いたことないな…。」

すると、カイは腕を組んで深刻な顔をする。

カイ「……違う。」

ガオモン「どうかしたのですか？」

カイ「俺がデジタルワールドに来た時、妙な声を聞いたが同じではなかった。俺は…

『究極を秘めたる秘宝を集えば、邪悪な闇を封じる事ができる…。』

って言ってたな…。」

ミソラ「それって、どういう意味なのかな…？」

レナモン「私の推測だが、その声はきっとミソラ達に何か伝えたかったのだと思う…。」

ガオモン「デジタルワールドを救うかぁ…。きっとデジタルワールドを救うキーワードか何かだな…。」

カイ「俺達がその言葉を耳にしたって事は、リュウギやエグザにも聞いてるハズだ…。ガオモン、吹雪が止んだら急いでエンシェントストーンを探しに行くぞ！」

ガオモン「はい。全ては我が主のために…。」

その時、カイとミソラのＤ－アクセルが反応する。

カイ「？」

ミソラ「Ｄ－アクセルが反応してるわ？」

カイはＤ－アクセルを確認すると、白い物がレーダーに映っていた。

カイ「段々とこっちに近づいて来てる…。誰か来るぞ。」

ミソラ「まさか、イビルス？」

ガオモン「どうします、カイ？」

カイはチッと舌打ちをしたあと、洞窟を出て吹雪の中へと入って行く。

一同「カイ？」

カイ「お前らはここで休んでろ！行くぞガオモン！」

ガオモン「は、はい！」

カイはガオモンと共に吹雪の中へと入っていった。

ミソラ「待ってよカイ？」

ミソラは1人で助けに行こうとすると、レナモンはミソラの腕を掴んで止める。

レナモン「ダメだミソラ。ここで無理にカイ達を追い掛けたら迷子になる一方だ！ここはカイ達を信じよう。」

ミソラ「カイ……。」

～アイシクル島～

吹雪は一切止む事なく、容赦なくカイとガオモンに襲い掛かる。

ガオモン「くっ、ヤツは一体何処なんだ？」

その時、カイのＤ－アクセルが強く反応する。

カイ「近い…。？」

カイはとんでもない物を目にし、思わず足を止めた。続いてガオモンも思わず足を止める。

ガオモン「なんだ、アレは？」

それは巨大な山が聳え立つ。しかし、それはただの山ではなかった。

？？？「余所者はここから去って貰おうか…？」

ガオモン「山が喋った？」

カイ「違う…。コイツはまさか？」

吹雪が弱まると、巨大な山の正体が明らかになる。

ガオモン「デ、デジモン？」

その時、謎のデジモンはカイの手首にはめてあるＤ－アクセルに気付き、口を開く。

？？？「それはＤ－アクセル？お主、エクセリオンだな…？」

カイ「なに？」

？？？「そうか…。この気配はエクセリオンであったか…。これは申し訳ない事をしたのぅ。」

謎のデジモンは雄叫びを上げると、吹雪は謎のデジモンに怯えたのか、突然と吹雪が止んだ。

カイはＤ－アクセルで謎のデジモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「エンシェントメガテリウモン、究極体、古代獣型、データ種、必殺技はフリージングブリザード。」

カイ「お前がエンシェントデジモンか？」

エンシェントメガテリウモン「いかにも。ワシはこのアイシクル島の守り神であり、伝説の氷の十闘士　エンシェントメガテリウモンじゃ…。待っていたぞ、エクセリオンよ。」

ガオモン「なぜ吹雪で身を潜めていたんだ？」

エンシェントメガテリウモン「この島にイビルス達が襲い掛かって来ないよう、吹雪を呼び寄せて侵入不可させたのじゃ…。大変申し訳ない事をした…。」

カイ「まぁいい。それよりエンシェントメガテリウモン、俺はアンタに用がある。」

すると、エンシェントメガテリウモンはカイの心を読んだのか、先に口を開く。

エンシェントメガテリウモン「分かっておる。エンシェントストーンの事であろう…。ただしタダでお主に渡す訳にはいかぬ…。そこでじゃ。今からお主に試練を受けて貰う。」

カイ「試練だと…？」

エンシェントメガテリウモン「ここから北の方角にある『アイシクル氷山』に向かい、あるデジモンと戦って貰う。」

カイ「お前は戦わないつもりなのか？」

エンシェントメガテリウモン「ワシはこう見えてかなりの年じゃからな…。こんな年寄りより、アイシクル氷山にいるデジモンと戦った方がお主のためにもなるわい…。」

カイ「変わった守り神だな…。まぁいい。そいつに勝てば試練はクリアだな？」

エンシェントメガテリウモン「そうじゃ。しかし侮っていると痛い目にあうからのぅ…。」

エンシェントメガテリウモンはそう言うと、カイは小さく笑う。

カイ「フン、そんな奴ら一瞬で方を付けてやる。」

エンシェントメガテリウモン「では、健闘を祈るぞ…。」

エンシェントメガテリウモンはそう言ってゆっくりと歩き出して去って行った。すると、エンシェントメガテリウモンが去ったと同時に再び吹雪が降り始める。

ガオモン「北の方角か…。」

カイ「グズグズしてるヒマはない。急ぐぞガオモン。」

ガオモン「はい。全ては我が主のために…。」

カイとガオモンは凄まじい吹雪に打たれながら北の方角にあるアイシクル氷山へと向かうのであった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

ＥＰ７０　～凄まじき吹雪島　アイシクル島？氷の十闘士　エンシェントメガニ

†デジモン　エグザ†～Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ～にてエグザ＆エクシード人気キャラランキング受付中！

詳しい投票内容は†デジモン　エグザ†～Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ～で？

お待ちしております！

次回はアイシクル氷山へと向かうカイとガオモン？

そしてついに、ガオモンが究極体へと進化する？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ７１　～護たい心こそ力！月光の獣騎士　ミラージュガオガモン？～（前書

アイシクル氷山に辿り着いたカイとガオモン。

しかし、そこにはとんでもないデジモン達が待ち受けていた？

そしてついにガオモンが…？

Ｅｐ７１スタート？

EP71　～護たい心こそ力！月光の獣騎士　ミラージュガオガモン？～

～アイシクル氷山～

ここは、あちらこちらに巨大な雪の結晶が聳え立つアイシクル氷山。

カイ「ここがそうか…。」

ガオモン「この氷山に住むデジモンとは一体なんでしょうか…？」

カイ「さぁな。とにかく、さっさと終わらすぞ。……ん？」

その時、遠くから黒い物体が迫って来る事に気付く。

ガオモン「どうかしましたか？」

カイ「何か来る…。」

黒い物体は段々とカイ達に迫って来る。その正体は両手にトマホークを持ち、雪男のような姿をしたデジモンだった。

ガオモン「デジモン？」

カイはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ブリザーモン、ハイブリッド体、獣型、ヴァリアブル種、必殺技はアヴァランチステップ。」

ブリザーモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

カイ「どうやら、コイツがそうみたいだな…。ガオモン！」

ガオモン「はい！」

カイはＤ－アクセルをガオモンに翳した。すると、ガオモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ガオモン「ガオモン、超進化？」

『マッハガオガモン？』

カイは右手を広げると、巨大手裏剣、ギルガメッシュが現れる。

カイ「一瞬で方を付けるぞ！」

マッハガオガモン「はい！」

カイとマッハガオガモンはブリザーモンに接近して先制攻撃を仕掛ける。

マッハガオガモン「『ガオガトルネード？』」

マッハガオガモンは最大推力でブリザーモンを包囲し超高速連打を放つ。

ブリザーモンは素早く交わし、両手に持つトマホークでマッハガオガモンの腕を受け止める。

マッハガオガモン「なに？」

ブリザーモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

ブリザーモンはもう片方のトマホークでマッハガオガモンに切りに掛かる。

カイ「させるか？」

カイはギルガメッシュを回転させながら投げつけると、振り下ろされるトマホークを弾き返し、何とか斬撃を阻止した。

マッハガオガモン「今だ！『ウイニングナックル？』」

マッハガオガモンは超打撃力を誇る拳の一撃を放ち、ブリザーモンの腹に狙いを定めて思いきり殴り飛ばした。

ブリザーモン「ぐおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

ブリザーモンは巨大な氷の結晶に叩き付かれ、気絶する。

カイ「もうお終いか…。」

ブーメランのように戻ってくるギルガメッシュをカイは掴み取って肩に担ぐ。

マッハガオガモン「やりましたね。」

カイ「フン、こんなヤツを倒せば試練クリアだと？随分と嘗められたものだ…。」

マッハガオガモン「では、エンシェントメガテリウモンの所へ戻りましょう。」

カイ「あぁ。」

カイとマッハガオガモンは背を向けたその時、ブリザーモンはゆっくりと立ち上がり、途轍もない雄叫びを上げる。

ブリザーモン「うおおお

ブリザーモン達「うおぉぉぉ

その時、ブリザーモンはもう片方のトマホークを振り下ろす。

カイ「ここだ！」

隙を読んだカイはトマホークを受け流し、ブリザーモンの腕を足場にして高く飛び上がる。

ブリザーモンA「？」

カイ「α？」

宙に舞うカイは叫ぶと、巨大手裏剣から4つ刃が重なって小型鎌へと変形する。

カイ「喰らえ！」

カイはギルガメッシュを横一閃に振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放った。

ブリザーモンA「ぐおぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

ブリザーモンはまともに直撃し、地面に向かってバタリと倒れる。

カイは華麗に着地すると、今度は二体のブリザーモンがカイを挟み撃ちにして襲い掛かる。

ブリザーモンB・C「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

カイ「チッ…。」

（挟み撃ちだと厳しいな…。次は…）

ブリザーモンB・Cはトマホークを横に振ると同時に、カイは素早くしゃがみ込んで交わした。すると、お互いのトマホークとトマホークがぶつかり合い、ブリザーモンB・Cは驚愕する。

カイ「β？」

次に、ギルガメッシュは小型鎌から2つに分裂し、分裂した2つの刃を両手に持つ。

カイ「はぁぁぁぁぁ？」

カイは目にも止まらない早さでブリザーモンB・Cを切り刻んだ。

ブリザーモンB・C「ぐぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

油断したブリザーモンB・Cは力尽きて倒れる。

カイ「これで三体…。」

（ハァ…ハァ…）

～マッハガオガモン　side～

一方、マッハガオガモンは…。

ブリザーモンF「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

ブリザーモンはトマホークを振り下ろすと、マッハガオガモンは手の甲で受け止める。

マッハガオガモン「くっ！」

マッハガオガモンはもう片方の手でブリザーモンの顔面を掴んで気絶させるくらい地面に叩き付ける。

その時、もう一体のブリザーモンがマッハガオガモンの身体を押さえつける。

マッハガオガモン「しまった？」

更にもう一体のブリザーモンが無防備となったマッハガオガモンをサンドバックのように殴る。

マッハガオガモン「ぐっ…、嘗めるな？」

マッハガオガモンは背中に装備してるロケットエンジンを発射させて上空へと飛び上がる。

ブリザーモンG・H「？」

マッハガオガモン「喰らえ？『ガオガトルネード？』」

マッハガオガモンはブリザーモンの方に急降下し、最大推力で超高速連打を放った。

ブリザーモンG・H「ぐおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

ブリザーモンG・Hは力尽きて倒れる。

マッハガオガモン「これで三体か…。」

（ハァ…ハァ…）

カイとマッハガオガモンは背中合わせになって態勢を立て直す。その時、二体のブリザーモンが気絶から復帰して残るブリザーモンはあと6体となってカイ達を囲む。

カイ「…ったく、なんてタフな奴らなんだ…。」

マッハガオガモン「カイ、次の指示を！」

カイ「いま考えてる！」

怒鳴るように叫ぶカイ。その時、6体のブリザーモンは両手に持つトマホークをジャグリングのように操る。

カイ「何をする気だ…？」

その時、一体のブリザーモンはトマホークを投げ付けた。

カイ「来るぞ！避けろマッハガオガモン！」

マッハガオガモンは飛んできたトマホークを軽々と交わした。

マッハガオガモン「何処を狙っている！」

マッハガオガモンは余裕な表情を見せた途端、カイはありったけの声で叫ぶ。

カイ「後ろだ？」

その時、背後から別のトマホークが飛んできてマッハガオガモンの背中に直撃する。

マッハガオガモン「ぐはっ？」

カイ「マッハガオガモン」

カイは周りを見渡すと、周りにいるブリザーモンはただトマホークを投げつけてるのでなかった。それは、お互いにトマホークを投げ渡し合って攻撃しているのだ。

カイ（コイツら、なんてコンビネーションなんだ…？）

「マッハガオガモン、一旦空中で態勢を立て直すぞ！」

しかし、マッハガオガモンは飛ぼうとしない。

カイ「どうしたんだ？」

マッハガオガモン「申し訳ありません。さっきの攻撃でロケットエンジンがやられました…。」

そう、マッハガオガモンの背中に装備してるロケットエンジンは先程のブリザーモンが投げ付けたトマホークによって故障してしまったのだ。

カイ「なんだと？」

カイとマッハガオガモンは完全に逃げ場を失ってしまった。

カイ「クソ！どうすれば…」

カイは飛んでくるトマホークを次々と交わしていきながら考える。

マッハガオガモン（なんとかしないと、カイが危ない。）

その時、カイはいつもより動きが鈍くなり、息切れをする。

マッハガオガモン「カイ？」

（しまった？気温が非常に低いため、カイの動きが鈍くなってるんだ？）

カイ「くっ！Σ！」

カイは２つ刃を合体させて大剣へと変形してトマホークをはじき返す。

カイ「ここで負ける訳にはいか……くっ！」

カイは動く体力を失い、地面に手を着く。すると、六体のブリザーモンはカイに目掛けてトマホークを投げ付けた。

マッハガオガモン「カイ？」

カイ「……。」

（結局俺は、昔と変わらず誰も助けられないんだな…。存在価値なんて、俺には…）

カイは思わず目を閉じた。しかし痛みを感じない。カイは目を開けると、とんでもないものを目にした。

カイ「マッハ…ガオガモン…？」

それはマッハガオガモンはとっさでカイを庇ったのだ。ブリザーモンが投げ付けたトマホークは全てマッハガオガモンの身体に突き刺さっていた。

マッハガオガモン「無事ですか…カイ…？」

カイ「マッハガオガモン、お前……。」

マッハガオガモン「私はただ…、カイとの約束を守りたかっただけだから…。」

カイ「約束…。」

それは、カイがまだスレッド大陸に来たばかりの事だった。

カイ「……。」

カイは見上げて青空を眺める。

ガオモン「どうかしましたか？」

カイ「なぁガオモン、俺はただのうのうと生きていてもいいのだろうか？」

ガオモン「カイ…。」

カイ「あの時、俺は何もできなかった。たった1人の家族すら守れない。そんな俺に生きる価値はあるのだろうか？」

しばらく沈黙が続くと、ガオモンは口を開く。

ガオモン「そんな事はありません！私にとってカイは大事なパートナーです！」

カイ「こんな俺に生きる価値があるというのか？何も守れない俺に？」

ガオモン「勿論あります！少なくとも、私はそう信じたい！」

カイ「ガオモン…。」

すると、ガオモンはゆっくりと手を差し出す。

ガオモン「それまで、私はこの命に変えてもカイを御守りします！だからカイも生きる意味、そして生きる価値を見つけてください。」

ガオモンはそう言って笑顔をみせると、カイは小さく笑ってガオモンの手をギュッと握る。

カイ「あぁ。約束だ…。」

ーーーーーーーーーーーーーー

カイ「……。」

マッハガオガモン「カイが探し求めている物が見つかるまで…、私はここで負ける訳にはいかない…。約束を果たすまでに？」

その時、カイのＤ－アクセルから聖なる光りが生じる。

カイ「？」

カイとマッハガオガモンは聖なる光りに包まれる。

トクン…トクン…

カイ（心臓の鼓動か…？俺ではなくマッハガオガモン心臓の鼓動なのか？）

マッハガオガモン（カイの心臓の音が聞こえてくる…。まるでカイの心と私の心が１つになったみたいだ…。）

カイとマッハガオガモンはお互いに顔を見合せて、同時に頷く。

カイ「行くぞ、マッハガオガモン！」

マッハガオガモン「カイやみんなを護る力を私にッ？」

カイはＤ－アクセルをマッハガオガモンに翳した。すると、マッハガオガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

マッハガオガモン「マッハガオガモン、究極進化ッ？」

『ミラージュガオガモン？』

カイはＤ－アクセルでミラージュガオガモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ミラージュガオガモン、究極体、獣騎士型、データ

種、必殺技はフルムーンブラスター。」

カイ「これが、究極体…？」

光りが止むと、ミラージュガオガモンはバサッとマントを広げる。

ミラージュガオガモン「約束を護るため、私はここで負ける訳にはいかない？」

六体のブリザーモンの矛先はミラージュガオガモンに向け、トマホークを投げ付ける。

カイ「来るぞ！」

ミラージュガオガモン「私に任せてください！」

ミラージュガオガモンは両手をクロスさせて低く構える。

ミラージュガオガモン「『ゲイルクロー？』」

ミラージュガオガモンは疾風のごとく駆け抜け、飛んでくる全てのトマホークを弾き返した。

ブリザーモン達「？」

ミラージュガオガモン「これで終わらせる？」

ミラージュガオガモンは高々と上昇し、そして両手から放つ三日月型の衝撃波を放つ。

ミラージュガオガモン「『ダブルクレセントミラージュ？』」

六体のブリザーモンはまともに喰らい、力尽きて倒れた。

ミラージュガオガモン「護りたい心こそ、私の力なのだ！」

カイ「？」

（凄い…？）

驚きの余りに声がでなかったカイ。ミラージュガオガモンは全ての力を使い果たしたため、幼年期のワニャモンへと退化した。

ワニャモン「カイ、無事ですか？」

カイ「あぁ。それより…」

カイは気絶しているブリザーモンに近寄る。

ワニャモン「カイ、危ないですよ？」

カイ「コイツらはイビルスに操られていない。手当てをしてやらないとな。」

カイはＤ－アクセルでリカバリー機能を使って１０体のブリザーモンを手当てした。

そして…。

ブリザーモン達は頭をぺこりと下げてお礼を言う。

カイ「気にするな。お前らのお蔭で良い修行ができた。礼を言う。行くぞ、ワニャモン。」

ワニャモン「はい。」

ワニャモンはカイの方に乗ると、カイは背を向けてアイシクル氷山を去るのであった。

一方、ミソラは…。

～アイシクル島　海岸～

キャンドモン「あの2人、何処にもいませんねぇ～？」

ミソラ達はカイ達を探しに島中探し回っていた。

レナモン「吹雪が止んだのはいいが、帰って来ないなんて余りにも不自然すぎる。」

ミソラ「そうね。何も起こらなきゃいいんだけど…。」

ミソラは心配そうな表情をする。

その時、ミソラ達の前に巨大な影が現れる。

キャンドモン「な、なんじゃこりゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？」

レナモン「ミソラ、下がってて！」

レナモンはミソラの前に立って戦う態勢に入る。巨大な影の正体はエンシェントメガテリウモンだった。

ミソラ「デジモン？」

レナモン「このデジモンは、エンシェントメガテリウモン？」

ミソラ「え？つまり、このデジモンはエンシェントデジモン？」

エンシェントメガテリウモン「ほぅ、既にエンシェントストーンを手に入れたようじゃのぅ。」

ミソラ「なんでそれを？」

エンシェントメガテリウモン「ワシを誰だと思っておる？お主の考えてる事は全てお見通しじゃ。」

ミソラ「ねぇエンシェントメガテリウモン、カイとガオモンを見なかった？」

エンシェントメガテリウモン「心配するでない。エクセリオンならここにおる。」

エンシェントメガテリウモンの巨大な角にカイとワニャモンが乗っていたのだ。

カイ「心配かけて悪かったな…。」

ミソラ「カイ？」

カイとワニャモンは飛び降りて地面に着地する。

キャンドモン「どうしてエンシェントメガテリウモンの角の上に？」

ワニャモン「こっちに向かう途中、エンシェントメガテリウモンに会ったんだ。」

エンシェントメガテリウモン「厳しい試練を乗り越えたからのぅ。ワシがここまで送ってやったのじゃ。」

ミソラ「そうだったんだ…。それでエンシェントストーンは？」

ミソラは問うと、カイはフッと鼻で笑いながらＤ－アクセルを見せる。Ｄ－アクセルの画面には薄透明色のしたエンシェントストーンが映っていた。

ミソラ「やったのね。」

カイ「これでエンシェントストーンは2つ目だ。」

エンシェントメガテリウモン「次は南にあるエルドラ島へ行くのじゃ。」

ミソラ「分かったわ。カイ、デジサモンを頼むわ！」

ミソラは当然のようにカイに頼むと、カイは小さく舌打ちをする。

カイ「偉そうに…。」

カイは巨大手裏剣、ギルガメッシュを地面に突き刺してデジサモン

を発動しようとするが、何も起きない。

ミソラ「あれ？どうしたの？」

カイ「デジサモンがまだチャージされていない。残念だが、サンダーバーモンを呼び出す事はできない。」

レナモン「そうか…。」

キャンドモン「使えないですねぇ～。」

（ボソ…）

キャンドモンが愚痴をこぼすと、ワニャモンは思いきりキャンドモンに体当たりをした。

キャンドモン「ふぎゃ？」

ワニャモン「いま、カイに悪口言ったな？」

キャンドモン「冗談ですって？ボクチンが悪いから怒らないで？」

エンシェントメガテリウモン「しょうがないのぅ。ここはワシに任せておくのじゃ。」

カイ「何をするつもりだ？」

エンシェントメガテリウモン「まぁ見ておれ。『フリージングブリザード？』」

エンシェントメガテリウモンは途轍もない咆哮を上げると、上空か

ら絶対零度の超吹雪が降り出す。

ミソラ「また吹雪？」

レナモン「いや、違う。」

超吹雪は海岸に降り注ぐ。すると、海岸一直線に氷結化して氷の橋となった。

一同「？」

エンシェントメガテリウモン「これで、エルドラ島に辿り着けるハズじゃ。さぁ、進むがいいエクセリオンよ。」

カイ「実はとんでもないデジモンだったんだな、アンタ…。ま、礼を言う。」

ミソラ「ラッキー♪ありがとうエンシェントメガテリウモン！」

レナモン「さぁ、先へ急ごう！」

キャンドモン「ま、待ってくださいよ皆さーん？」

こうしてミソラ達は南の方角にある島、エルドラ島を目指して氷の橋を渡るのであった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

ＥＰ７１　～護たい心こそ力！月光の獣騎士　ミラージュガオガモン？～（後書き）

次回はリュウギ&カズマの物語！

次のエンシェントデジモンは一体…？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ７２　～風の孤島　ウィネル島？風の十闘士　エンシェントイリスモン？～

今回はリュウギとカズマの物語！

次のエンシェントデジモンは一体？

Ｅｐ７２スタート？

EP72　～風の孤島　ウィネル島？風の十闘士　エンシェントイリスモン？～

～ウィネル島～

一方、リュウギ達は1つ目のエンシェントストーンを手に入れ、ヴォルク島から北西にある孤島へと目指す。

リュウギ「ここがそうか…。」

一見、広大な森へと広がるごく普通の孤島。爽やかな風がリュウギ達を迎えるように吹く。

カズマ「風が気持ちいいなぁ～♪」

プカモン「本当だなぁ～♪」

カズマとプカモンは風に打たれながら思い切り深呼吸をする。

一方、アシの役を終えたドラグナモンはナルガモンへと退化した。

リュウギ「お疲れ様、ナルガモン。」

ナルガモン「ったく、呑気なヤツらだぜ…。あ～疲れた。」

ナルガモンは疲れて深くため息をつく。

リュウギ「ここにエンシェントストーンがあるなら早く見つけないとな…。行こう、みんな。」

リュウギは先頭に立って森の中へと入っていった。

カズマ「な?待ってくだせぇリュウ兄~!」

深い森の中、リュウギ達はエンシェントストーンの手掛かりを探す。

ナルガモン「誰もいねぇな…。」

カズマ「きっとこの島の住人は夏休みで何処かに遊びに行ってるんでさぁ。」

プカモン「んなわけねぇだろ!」

プカモンはすかさずツッコム。

リュウギ「デジモンの気配が全くしない…。この島にエンシェントデジモンがいるのか?」

不安になるリュウギ。その時、風がリュウギを否定するかのように激しく吹く。

リュウギ「わっ?」

リュウギは風に押されたのか、少しよろめく。

カズマ「どうしたんでさぁ?」

リュウギ「いま風が吹いてきたんだ。感じなかったか?」

一同「んにゃ。」

カズマ達は同時に首を横に振る。

リュウギ「おかしいなぁ…。」

リュウギは頭をポリポリとかきながら首を傾げる。

カズマ「夏休みだったら、エンシェントデジモンも夏休み気分でいねぇかもしれやせんぜ（笑）」

プカモン「しつけぇよ！」

カズマ「冗談でさぁ。にゃはははは♪」

カズマは冗談をかましたあとに笑うと、ツッコムように風が激しくカズマに吹く。

カズマ「おっと？」

カズマは少しよろめく。

プカモン「なにしてんだよカズマ？」

カズマ「いやぁ…、いま風にツッコまれた感じがしたんでさぁ…。」

ナルガモン「風がぁ？んなわけねぇだろ！風がツッコミするなんてありえねぇっての！」

その時、今度はナルガモンにツッコムように風が吹いてくる。

ナルガモン「うわっ？」

ナルガモンは少し宙に浮き、やがて尻餅つく。

ナルガモン「あだっ？」

リュウギ「ナルガモン？」

カズマ「リュウ兄、どうやら誰かが風を操って遊んでますぜ…。」

カズマは刀袋から双龍牙を取り出して戦う態勢に入る。

リュウギ「くっ！」

続いてリュウギもガンブレード、アルカナムを取り出して戦う態勢に入る。

ナルガモン「にゃろぉぉ！隠れてねぇで出てきやがれ！」

ナルガモンは歯をギリギリさせながら戦う態勢に入る。

その時、謎の声が森の中に響き渡る。

？？？「アンタ達がエクセリオン？その割には対した事ないわね。」

プカモン「誰だ？」

リュウギとカズマは背中合わせになって警戒する。

リュウギ「カズマ、油断するなよ。」

カズマ「言われなくても百の承知でさぁ…。」

？？？「何処見てんのよアンタ達？こっちよ。」

リュウギ・カズマ「ん？」

リュウギとカズマは同時に上を向くと、小さい妖精のようなデジモンが舞い降りてくる。

？？？「ようこそ、私の庭へ♪」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「エンシェントイリスモン、究極体、古代鳥人型、ワクチン種、必殺技はレインボーシンフォニー。」

リュウギ「エンシェントデジモン？」

エンシェントイリスモン「そうよ。私は伝説の十闘士の１人、風のエンシェントイリスモンよ。」

カズマ「スゴイ……」

エンシェントイリスモン「これで驚いてちゃ、アンタ達まだまね♪」

エンシェントイリスモンは自慢気になる。

カズマ「……小っさ。」

カズマの言葉によって、エンシェントイリスモンはピクッと反応する。

エンシェントイリスモン「小さい言うんじゃないわよ？」

エンシェントイリスモンは風を操ってカズマを思いきり木に叩き付けた。

カズマ「ぐはっ？」

プカモン「カズマ？」

リュウギ「今の風は？」

（そうか。さっきの風はコイツの仕業だったのか？）

エンシェントイリスモン「この姿は本来の私じゃないのよ！ただ動きやすいからわざと小さくしただけなのよ！分かった？」

カズマ「わ、分かりやした…。」

ナルガモン「ところで、なんでこの島にお前しかいないんだ？」

エンシェントイリスモン「だって、ここは私の庭だもん。それに、他のデジモンがいると邪魔だしね♪」

ナルガモン「邪魔？」

ナルガモンはイマイチ言っている事が分からず、首を傾げる。

リュウギ「エンシェントイリスモン、俺達はエンシェントストーン

を探しにこの島に来たんだ。」

エンシェントイリスモン「だと思ったよ。でも、タダで渡す程、私は甘くないわよ。」

カズマ「だったら話は早い。口で解らなかったら力ずくで……」

カズマはそう言って双龍牙の柄を握る。

エンシェントイリスモン「私とゲームして、勝ったらエンシェントストーンをアンタ達に譲ってあげるわ！」

エンシェントイリスモンの言葉にカズマはズッコケる。

カズマ「戦うんじゃねぇんですかぃ？」

エンシェントイリスモン「これが私のやり方なの！文句言うなら退場させるわよ！」

カズマ「テメェのＳＴＹＬＥなんざどうでもいいんでぃ。いいからこっちに渡しやがれ！」

カズマは歯をギリギリとさせながら双龍牙を鞘から抜き出そうとする。怒り爆発寸前だ。

プカモン「早まるなってカズマ？一旦落ち着けって！」

プカモンは全力でカズマを取り押さえる。

リュウギ（そのセリフ、そっくりそのまま返してやりたいよ…。ま

ぁ、それは置いといて…）

リュウギは心の中でツッコんだ後、一度咳払いをして話を戻す。

リュウギ「一体どんなゲームなんだ？」

エンシェントイリスモン「これよ。」

エンシェントイリスモンは手を広げると、ガラスで出来た小さなバラが現れる。

プカモン「なんだそりゃ？」

エンシェントイリスモン「これを身体の何処かに着けて私と戦って貰うわ。そしてどちらかのバラが割れたら負けとなる。ガラスのバラが割れた者はその場で退場。何でもありのサバイバルゲームよ。いいわね？」

エンシェントイリスモンはそう言って４つのガラスのバラをリュウギ達に渡す。

エンシェントイリスモン「私は胸につけさせて貰うわ。このバラを壊せばアンタ達の勝ち。そして私がアンタ達のバラを壊せばアンタ達の負け。潔く私の庭から去って貰うわ。」

リュウギ「面白い。例えどんな相手だろうが正々堂々、真っ向勝負だ！」

リュウギはそう言って、拳をギュッと握りしめる。やる気満々だ。

カズマ「さっさと終わらせてやりやすよ！」

エンシェントイリスモン「それじゃ3分後にスタートね！その間にバラを何処に着けるか考えと来なさいよ！」

エンシェントイリスモンはそう言って何処かへと飛んで行った。

カズマ「どうするんでさぁリュウ兄？」

リュウギ「エンシェントイリスモンは見ての通り、小さくてすばしっこい。何か作戦を考えないとな…。」

リュウギは腕を組んで作戦を考える。

カズマ「んな事より見てくだせぇ。ジャックモンは負ける気一切ないから、眼球にバラ着けるらしいですぜぃ。」

カズマはそう言って自分のバラをナルガモンの左目に着ける。

ナルガモン「ブッ飛ばされてぇのかテメェは…（怒）」

プカモン「グダグダ言ってても仕方ないよ！割れる時は割れるんだから！よし、オレはここで！」

プカモンはそう言ってナルガモンの右目にバラを着ける。

ナルガモン「だから何でオレだぁぁぁぁぁぁぁぁ？テメェらのバラだろうが？」

カズマ「何でもありって言ってたからこれもありかなぁ～ってつい

…。それぐらい分からないとお笑い務まりませんぜジャックモ～ン。」

プカモン「そうだよジャックモ～ン。」

カズマとプカモンは嫌らしい目でナルガモンを見つめる。

ナルガモン「誰も目指してねぇよ！黙っとけこのドSコンビ？つうかオレはジャックモンじゃねぇって何度も言ってんだろうがぁぁぁぁ？」

リュウギ「時間の無駄だからさっさと作戦を考えるぞ（怒）」

話しを無理矢理戻し、改めて作戦を考える。

リュウギ「この試練は俺達で力を合わせて乗り越えるんだ。じゃないとこの試練は乗り越えられない。分かったな？」

ナルガモン「おう！」

カズマ「りょうかーい。」

プカモン「ＯＫ！」

リュウギは左胸にバラを着ける。そしてナルガモンは右腕にバラを着ける。

プカモンは腹にバラを着け、そしてカズマは〇〇〇にバラを……

一同「マジメにやれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？」

リュウギ達は一斉にカズマを殴り飛ばしてツッコんだ。

カズマ「ぐほっ？」

ナルガモン「なにやってんだよテメェは？綺麗な物を世の中で最低な所に着けてんだよ？」

カズマ「ウケ狙いのつもりでさぁ…。それと…」

ナルガモン「それと何だよ？」

カズマ「……これはオレのＳＴＹＬＥなんでさぁ☆」

一同「やかましわぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギ達はもう一発お見舞いした。

カズマ「ふぎゃ？」

そして……。

カズマはなぜか知らないがデコにバラを着ける。そしてついにカウントダウンが始まる。

リュウギ「みんな、油断せずに行くぞ。」

一同「おう！」

リュウギ「３…２…１…スタート！」

ゲーム開始すると同時に、リュウギとナルガモンは北へ、そしてカズマとプカモンは南へと二手に分かれる。

～ウィネル島　北側～

ナルガモン「あの野郎、一体何処へ行きやがったんだ？」

リュウギ「油断するなよナルガモン。」

？？？「油断していると命取りになるんだからね。」

その時、リュウギ達の前にエンシェントイリスモンが現れる。

ナルガモン「早速お出ましか…。」

リュウギとナルガモンは戦う態勢に入る。

ナルガモン「俺より素早いヤツがいるとはますます気に食わねぇぜ。覚悟しやがれ！」

ナルガモンは迅速に動いてエンシェントイリスモンに先制攻撃を仕掛ける。

エンシェントイリスモンは一瞬にして姿を消した。

ナルガモン「消えた？」

その時、真上からエンシェントイリスモンが現れ、レイピアを構える。

エンシェントイリスモン「遅いわね！」

リュウギ「させるか！」

リュウギはガンブレード、アルカナムの引き金を引いてエンシェントイリスモンのバラを狙い撃つ。

エンシェントイリスモン「フフフ♪」

エンシェントイリスモンは余裕かましながら素早く弾丸を交わした。

ナルガモン「なんてすばしっこいヤツなんだよ？」

リュウギ「コイツはかなり手強いなぁ…。」

エンシェントイリスモン「もうお終いかしら？今度は私の番よ！『レインボーシンフォニー？』」

エンシェントイリスモンは七色に輝く超融解レーザーを放つ。

リュウギ・ナルガモン「んな？」

リュウギとナルガモンは素早く交わし、素早く態勢を立て直す。

ナルガモン「リュウギ、これじゃ歯が立たないぜ！」

リュウギ「それなら究極体に進化だ！」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。すると、ナルガモ

ンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、ワープ進化？」

『エクシードモン？』

エンシェントイリスモン「ふーん。」

エクシードモン「本当のスピードってヤツを見せてやるぜ？」

エクシードモンは目にも止まらない早さで動き回り、エンシェントイリスモンを攻撃する。

しかし、エンシェントイリスモンは余裕な顔をしながらヒラヒラと交わして行く。

エクシードモン「このっ？当たりやがれ！」

エンシェントイリスモン「あら？アンタのスピードはその程度かしら？」

エンシェントイリスモンはカチンとくる。

エンシェントイリスモンは交わしながら挑発すると、エクシードモン

エクシードモン「嘗めやがって！だったらこれでも喰らいやがれ！

『迅竜連牙斬？』」

エクシードモンは両肘の刃、黒夜叉で目にも止まらない早さでエンシェントイリスモンに攻撃する。

対するエンシェントイリスモンはレイピアで全ての攻撃を受け止める。

リュウギ「迅竜連牙斬が効いてない？」

エンシェントイリスモン「そのセリフ、そっくりそのまま返してあげるわ！」

エンシェントイリスモンはレイピアでエクシードモンの右腕に着けているバラを狙う。

エクシードモン「くっ？」

エクシードモンは間一髪で斬撃を交わした。

エクシードモン「あぶねぇ×2…。もうすぐで退場させられるトコだったぜ…。しょうがねぇ、テメェにとっておきを見せてやるよ。」

エクシードモンは低く構えて一点に集中させる。すると、右腕から途轍もない雷が生じる。

エンシェントイリスモン「なんなの、この途轍もない威圧は？」

リュウギ「アレをやるつもりだな…。」

（これで勝ちは決まった！）

エクシードモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

エクシードモンは唸り声を上ると、雷迅のごとく予測不能な動きでエンシェントイリスモンに接近する。

エンシェントイリスモン「早い？」
（逃げ切れない？）
エクシードモン「喰らいやがれ？『天覇迅ら……』」
必殺技を繰り出そうとしたその時だった。
パリンッ！
エクシードモン「……へ？」
リュウギ「おい、いまものすごい不吉な音したんだけど何の音だ…？」
エクシードモン「ま、まさか……。」
エクシードモンは恐る恐る右腕を見ると、右腕に着けていたバラが粉々に砕けていたのだ。どうやら、右腕から生じる途轍もない雷に負けてバラが粉々に砕けてしまったらしい…。
エクシードモン「うそぉぉぉぉぉぉぉぉぉん？」
エンシェントイリスモン「アンタ、バカね…。というわけで、アンタ退場ね。」
エクシードモン「そ、そんなぁ～…。」
エクシードモンは一気にテンション下がって幼年期のナナモンへと退化した。

リュウギ「あ、あともう少しだったのに…。」

リュウギはガックリと項垂れる。

エンシェントイリスモン「切り札はいなくなった事だし、これで形成逆転ね♪」

リュウギ「くっ！」

エンシェントイリスモン「さぁ、覚悟なさい！」

？？？「ちょっと待ってくだせぇぇぇぇぇぇぇぇ？」

江戸の口調が森に響き渡る。。その時、カズマとネレイスモンが上空から現れて、華麗に着地する。

リュウギ「カズマ、それにネレイスモン？」

カズマ「騒ぎが気になったから様子見に来たんでぃ。リュウ兄、オレ達が助太刀いたしやすぜ！」

エンシェントイリスモン「あら？今度はアンタ達が相手してくれるの？」

ネレイスモン「そうやって余裕ぶるのも今のうちだぞ！」

カズマ「行きやすぜネレイスモン、究極体に進化だ！」

ネレイスモン「あいよ！」

カズマはＤ－アクセルをネレイスモンに翳した。すると、ネレイスモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ネレイスモン「ネレイスモン、ワープ進化？」

『プレシオモン？』

エンシェントイリスモン「フフフ、楽しませて頂戴ね♪」

カズマ「その余裕ぶりされるとなんか気に食わねぇなぁ…。プレシオモン、一気に片付けやすぜ！」

プレシオモン「おう！」

カズマはプレシオモンの頭の上に乗り、双龍牙を鞘から抜き出して低く構える。

プレシオモン「喰らいやがれ？」

プレシオモンは口から強力な水を発射させる。

カズマ「行きやすぜ、秘技……」

カズマは双龍牙を横一閃に振ると、二つの刃先から剣風によって生み出された衝撃波を放った。すると二つの技が一つとなり、水を纏った強力な衝撃波となった。

カズマ・プレシオモン「『水散波斬（すいさんはざん）？』」

水散波斬はエンシェントイリスモンへと向かうと、エンシェントイリスモンは反撃態勢に入る。

エンシェントイリスモン「それでこの私に通用するとでも?』

カズマ「おっと。そう思って貰っちゃ困りやすぜ。」

（ニヤ…）

カズマは静かにほくそ笑むと、水散波斬が突然と弾け飛び、無数の水滴はカッターのようにエンシェントイリスモンに降り注ぐ。

エンシェントイリスモン「キャッ?」

リュウギ「凄い…?」

（カズマとプレシオモンの息が合ってる。これなら勝てるかもしれない！）

カズマ「さぁて、次行きやすぜ！」

カズマは次の攻撃に移ろうとしたその時だった。

エンシェントイリスモン「余り調子に乗らないでよね！『ストームゲイザー?』」

エンシェントイリスモンはレイピアを天に突き出すと、超巨大な暴風雨を絶え間なく発生させる。

カズマ「なに?」

プレシオモン「カズマ、リュウギ?」

プレシオモンはとっさに身体を張ってリュウギとカズマを守った。

その時、プレシオモンは軽々と風に飛ばされて木に激しく叩き付かれた。

プレシオモン「ぐはっ？」

暴風雨が止むと、リュウギとカズマはプレシオモンの背中から飛び降りる。

カズマ「プレシオモン、大丈夫か？」

リュウギ「カズマ、これはとんでもない事になったぞ…。」

プレシオモンの腹にはバラがなくなっていた。

カズマ「バラが…ない…？」

リュウギ「どうやら、あの技でバラが飛ばされたんだ…。」

プレシオモンは全ての力を使い果たし、幼年期のプカモンへと退化した。

カズマ「すまねぇ、プカモン…。後はゆっくり休んでてくれ…。」

プカモン「ワリィ、カズマ…。」

エンシェントイリスモン「さぁて、残るはアンタ達よ？どうするの？」

カズマ「どうするかって…？んなもんイチイチ効いてんじゃねぇよ…。」

リュウギ「ナナモンとプカモンは必死になって戦ってくれたんだ…。今度は……」

リュウギとカズマは目をキリッとさせて、剣の刃先をエンシェントイリスモンに向ける。

リュウギ・カズマ「俺達が相手だ？」

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…．

ＥＰ７２　～風の孤島　ウィネル島？風の十闘士　エンシェントイリスモン？～

ナルガモンとネレイスモンがまさかのリタイヤとなって大ピンチに？

果たして、リュウギとカズマに勝ち目はあるのか？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ７３　～まさかの仲間割れ？リュウギ＆カズマｖｓエンシェントイリスモン！

今回はリュウギ＆カズマｖｓエンシェントイリスモン！

しかし思いも寄らない事が…？

Ｅｐ７３スタート？

ＥＰ７３　～まさかの仲間割れ？リュウギ＆カズマｖｓエンシェントイリスモン～

～ウィネル島～

リュウギ・カズマ「俺達が相手だ？」

エンシェントイリスモン「人間相手じゃ話にならないね。アンタ達が私に勝てるとでも思ってるの？」

カズマ「人間だと思って嘗めてたら、後で痛い目に合いやすぜ…。」

リュウギ「敵に背を向けたら俺の流儀に反する。どんな相手だろうが逃げるつもりなんてない！」

リュウギとカズマはそれぞれの武器を構えて戦う態勢に入る。

プカモン「頑張れー！」

ナナモン「負けんじゃねぇぞ！」

エンシェントイリスモン「いいわ。さっさと終わらせてあげるわ！」

リュウギ「やれるもんなら…」

カズマ「やってみやがれってんでぃ？」

リュウギとカズマは同時にエンシェントイリスモンに接近する。

エンシェントイリスモン「『レインボーシンフォニー？』」

エンシェントイリスモンは七色に輝く超融解レーザーを放つ。

リュウギとカズマは二手に分かれてレインボーシンフォニーを交わす。

カズマは木を足場にして高く飛び上がって双龍牙を構える。

カズマ「喰らえ！」

カズマは双龍牙を鞘から抜き出して目にも止まらない早さで切る。

しかし、エンシェントイリスモンは軽々と交わされる。

リュウギ（今だ！）

一方、リュウギはアルカナムの引き金を引いて銃撃を行い、エンシェントイリスモンを狙い撃つ。

エンシェントイリスモン「無駄よ無駄！」

エンシェントイリスモンは軽々と弾丸を交わす。

リュウギ「くっ！」

（なんてすばしっこいヤツなんだ！）

カズマ「なにやってんでさぁリュウ兄！もう少し狙えってんだ！」

リュウギ「狙ってるっつうの！」

カズマ「当たってねぇと意味ねぇんでさぁ！」

リュウギ「お前に言われたくねぇよ！」

リュウギとカズマはなぜか言い争いになる。

エンシェントイリスモン「仲間割れは他所でやってくださらない？」

エンシェントイリスモンはレイピアを構えてリュウギに襲い掛かる。

リュウギ「くっ！」

リュウギは左胸に着けてるバラをかばって横に飛んで交わした。しかし、側に岩があった事に気付かず左腕を打ってしまう。

リュウギ「ぐっ？」

（しまった？）

ナナモン「リュウギ？」

カズマ「リュウ兄？」

カズマは慌ててリュウギの元へと駆け付ける。

リュウギ「くっ…。」

リュウギは左腕を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

カズマ「リュウ兄、左腕が…？」

よくよく見ると、リュウギの左腕が折れていたのだ。

エンシェントイリスモン「バラをかばう余りに左腕を折ったようね…。」

カズマ「反対に戻せば治るじゃないんですかぃ？」

カズマは冷静に言ってリュウギの左腕を調べる。

リュウギ「待て待て待て！何言ってるんだよ？冗談だろ？おい……」

その時だった。不吉な音が……

ボキッ！

リュウギ「なぁぁぁ

カズマ「のわぁぁぁ

リュウギ・カズマ「ん？」

リュウギとカズマは同時に前を見ると、エンシェントイリスモンは竜巻を発生させる。

エンシェントイリスモン「動けないならこっちの物！覚悟なさい！」

エンシェントイリスモンはレイピアを振り下ろすと、竜巻はリュウギ達に襲い掛かる。

リュウギ「カズマ、こんなトコで喧嘩してる場合じゃないぞ？」

カズマ「ふざけんな！って言いたいトコだけど、リュウ兄の言う通りでさぁ…。でもどうすりゃいいんですかい…？オレは脚、リュウ兄は腕が使えないんでさぁ。」

リュウギ「俺に考えがある。」

リュウギはしゃがみ込み、カズマを乗せて肩車したのだ。

カズマ「んな？なにしやがんでぃ？」

リュウギ「これでお前は両腕、俺は両脚が使える！」

カズマ「あ、な～るほど♪って言ってる内に竜巻が来やすぜ？」

カズマを肩車するリュウギは素早く竜巻を交わした。

エンシェントイリスモン「なに？」

プカモン「おぉ？」

ナナモン「スゲェ？」

リュウギ・カズマ「ハァ…ハァ…。」

エンシェントイリスモン「こんなもの、すぐに終わらせてあげるわ！『レインボーシンフォニー？』」

エンシェントイリスモンは七色に輝く超融解レーザーを放つ。

カズマ「来やすぜ！」

リュウギ「分かってる！」

リュウギは左に向かって走って間一髪で交わした。

リュウギ「カズマ、俺のアルカナムを使え！」

リュウギはそう言って右手に持つアルカナムをカズマに手渡した。

カズマ「了解！」

アルカナムを受け取ったカズマは双龍牙とアルカナムをクロス状に振った。すると、剣風によって生み出された衝撃波を放った。

エンシェントイリスモン「なに？」

エンシェントイリスモンは間一髪で衝撃波を交わした。

エンシェントイリスモン「危なかったわ…。まさかこんなにコンビネーションが良いなんて…。」

カズマ「まだまだ行きやすぜ！」

カズマはアルカナムと双龍牙を構えてクロス状に振ろうとしたその時、エンシェントイリスモンは目にも止まらない早さでカズマに接近する。

カズマ「なに？」

エンシェントイリスモン「同じ攻撃を食らうほど、私はバカじゃないわよ！」

エンシェントイリスモンはレイピアを構えて乱れ突きをする。

カズマ「リュウ兄！避けてくだせぇ！」

リュウギ「あぁ？」

下役を任されたリュウギはカズマを交わさせようとする。

しかし……。

リュウギは交わしてるつもりだが、カズマは交わし切れていなかった。

カズマ「ちゃんと避けてくだせぇ？デコにバラがあるんですから当たっちまうじゃないですかぃ？」

リュウギ「んなこと言われても知るか！」
（一体どうすれば…？ん？）
この状況を一気に逆転させる方法を考えるリュウギ。その時、足元に丸太が転がっていた事に気付く。
リュウギ「これは…。」
エンシェントイリスモン「これで終わりよ！」
エンシェントイリスモンはカズマのデコにあるバラに狙いを定めてレイピアを突き出した。
カズマ「ヤベッ？」
リュウギ「させるか！」
リュウギは足元に転がってる丸太を真上に蹴り上げると、レイピアは丸太に突き刺さった。
エンシェントイリスモン「なに？」
カズマ「ナイスだリュウ兄！」
エンシェントイリスモンは丸太に突き刺さったレイピアを必死で引き抜こうとするが、全く抜けない。
エンシェントイリスモン「くっ？抜けない？」

リュウギ「決めるぞ、カズマ！」

カズマ「おう！」

隙を読んだリュウギはエンシェントイリスモンに接近する。

エンシェントイリスモン「？」
（しまった？）

ナナモン「行け！リュウギ！」

プカモン「頑張れ、カズマ！」

リュウギ・カズマ「うおおお

えええええええええええええええ？」

エンシェントイリスモン「油断したわね！後はアンタのバラを壊せば私の勝……」

リュウギ「まだまだぁぁぁ

リュウギは苦笑いする。するとそこへ、エンシェントイリスモンがヒラヒラとリュウギに近寄ってくる。

エンシェントイリスモン「負けちゃったわ…。でも、なかなか楽しませて貰ったよ！」

リュウギ「あぁ。いい戦いだったよ。」

エンシェントイリスモン「私に勝ったから、約束通りエンシェントストーンはアンタに譲るわ。手を出して！」

エンシェントイリスモンは手を広げると小さな光りが現れる。

エンシェントイリスモン「はいこれ。エンシェントストーンよ！」

リュウギはエンシェントストーンを受け取ると、エンシェントストーンは黄緑色に輝いていた。

リュウギ「これがエンシェントストーンか…。」

ナナモン「スッゲェ綺麗だな！」

プカモン「さて、エンシェントストーンはこれで2個目だな！」

リュウギ「エンシェントイリスモン、次のエンシェントストーンは一体何処にあるか教えてくれないか？」

エンシェントイリスモン「それならこの島から東に向かうといいわ！すぐ近くだから迷わないと思うし！」

リュウギ「そうか。ありがとな！」

エンシェントイリスモン「それよりアンタ達、このままエンシェントデジモンと戦うつもりなの？その状態だとかなり大変だと思うわよ。」

リュウギ「確かにな…。でも、ここでボンヤリしてる場合じゃないんだ。俺は離れ離れになった仲間を早く助けに行かなきゃならないんだ。それとどうしても守らなきゃならない約束もしちまったしな…。」

リュウギはそう言って折れた左腕をそっと触れる。

エンシェントイリスモン「守らなきゃならない約束ねぇ…。気に入ったわ。着いて来なさい。」

エンシェントイリスモンはそう言って背中を向けてヒラヒラと飛んで行く。

リュウギ「お、おい！」

ナナモン「着いて来いって言われてもなぁ…。」

プカモン「きっと何かあるんじゃない？行ってみようぜ！」

リュウギ「あ、あぁ。」

リュウギは気絶しているカズマをおんぶしてエンシェントイリスモンの後に着いて行く。

～ウィネル島　泉の間～

森の奥へと進んで行くと、エンシェントイリスモンは突然ピタリと止まる。

エンシェントイリスモン「着いたわよ！さ、入って来て！」

リュウギ達は中に入ると、そこは美しい泉があった。太陽に照らされた泉はまるで宝石のように光っていた。

一同「おお～？」

エンシェントイリスモン「ここは私のお気に入りの泉よ！今回は特別に浸からせてあげるわ！有り難く思いなさいよ！」

ナナモン「ヒャッホーイ！」

ナナモンはテンションが上がる余りに、早速泉の中へと飛び込む。

リュウギ「お、おいナナモン？」

プカモン「入る前にちゃんと準備体操しないとダメだぞ！」

リュウギ「……ってそういう問題？」

リュウギは小さくツッコム。その時、ナナモンは泉から顔を出す。

ナナモン「プハッ！気持ちいいぜ～♪見ろよリュウギ！傷が消えたぞ！」

ナナモンの身体には先程の戦いで負った傷がなくなっていた。

リュウギ「これは？」

プカモン「スゲェェェェェ！」

プカモンの目がキラキラと輝き、思い切り泉に飛び込む。

リュウギ「エンシェントイリスモン、この泉は一体…？」

エンシェントイリスモン「この泉はね、特殊なワクチンで出来た不思議な泉なのよ。こうして傷付いたデジモンが入ると回復するのよ。」

リュウギ「そんなのがデジタルワールドにあるなんてな…。凄いな…。」

エンシェントイリスモン「もしかしたら、アンタの腕も治せるかもしれないわよ！」

リュウギ「すまないな…。」

エンシェントイリスモン「いいのよ。最近退屈してたからね。久々に楽しませてくれたお礼よ！さ、遠慮なく泉を使ってね！」

リュウギ「あぁ。」

リュウギはカズマを下ろし、カズマの左スネに泉を浸からせて回復させる。そしてリュウギはゆっくりと泉に浸かる。

リュウギ「凄い…。傷が段々となくなっていく…。」

エンシェントイリスモン「どう、気に入ってくれた?」

リュウギ「あぁ。ありがとな。」

リュウギは空を見上げると、空はすっかりと夕闇に染まっていた。

リュウギ「ナナモン、プカモン。今日はもう遅いからここで野宿しよう。」

ナナモン・プカモン「マジでか?」

ナナモンとプカモンは目をキラキラと輝かせていた。さぞかしこの泉が気に入ったのだろう。

リュウギ「というわけでエンシェントイリスモン、構わないか?」

エンシェントイリスモン「私は全然ＯＫよ!」

リュウギ「ありがとな。」

こうしてリュウギ達は2つ目のエンシェントストーンを手に入れ、次の島に備えてウィネル島で休息を取るのであった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

EP73　～まさかの仲間割れ？リュウギ＆カズマｖｓエンシェントイリスモン～

～ムゲンマウンテン　電脳核の間～

スクロモン「エクセリオンめ、５つ目のエンシェントストーンを手に入れたわ…。」

スクロモンは爪をかじりながら舌打ちをする。

ヴルグモン「仕方のない事だ。我々の範囲は限られてるのだから。」

アンクスモン「そうと知っておきながら無茶するねぇ、ヴァヌムス。」

アンクスモンはそう言ってヴァヌムスを見つめる。

ギーゴモン「ヴァヌムス……命拾い……。」

ヴァヌムス「久しぶりの親友に会いたくてついな…。ま、こうして生きてんだから結果オーライっつうわけで♪」

スレイヤードラモン「でもリ……ヴァヌムス、エグザはお前を狙ってるんだから余り無茶するなよ…。」

ヴァヌムス「わかってるって。んじゃ、俺は今から大事な用があるから。」

ヴァヌムスはそう言って背を向ける。

スクロモン「ちょっ…？アンタまた単独行動する気なの？」

ヴァヌムス「そーいうこと。あ、そうそう。お前ら勝手な行動はするなよ？なにせ、上からの御命令だからよ…。」

ヴァヌムスはそう言い残して闇の中へと消えて行った。

一同「……。」

スレイヤードラモン（リュウ……。今度は一体なにをするつもりなんだ…？）

スレイヤードラモンはせっかくリュウに会ったというのに、微かな不安を抱くのであった。

次回はエグザの物語！

次回もお楽しみに？

Ｅｐ７４　～運命をとは何か…。闇の十闘士　エンシェントスフィンクモン？～

今回はエグザの物語！

次はどんなエンシェントデジモンが立ちはだかるのか？

Ｅｐ７４スタート？

EP74　～運命をとは何か…。闇の十闘士　エンシェントスフィンクモン？～

～デジシップ～

一方、エグザ達は一つ目のエンシェントストーンを手に入れ、エンシェントワイズモンの助言によりスレッド大陸の近くにある孤島、スフィアム島へと向かっていた。

エグザ（良い眺めだな…。）

デジシップの窓から景色を眺めていたエグザ。すると、レオルモンはそっとエグザに声を掛ける。

レオルモン「エグザ、デジタルワールドに来たのはいつからなんだよ？」

エグザ「なぜそれを聞く？」

レオルモン「いや、懐かしそうに眺めてたからさぁ…。」

それを聞いたエグザは小さく笑い、背を向ける。

エグザ「懐かしそうに……かぁ。確かにそうかもしれねぇな…。」

レオルモン「は？」

エグザ「確かにお前の言う通りだ。だが、いつデジタルワールドに来たのかは教える事はできない…。以上だ。」

エグザはそう言って操縦室から退室した。

レオルモン「なに言ってんだ、アイツ？」

博士「ほっとけだギャ！ボクには関係ないだギャ！」

アグモン博士はフンと鼻を鳴らしながらデジシップの操縦をする。

一方、コウジは窓から景色をボーッと眺めていた。

コウジ「……。」

（ヴァヌムス…。彼は一体…？）

コウジはずっとヴァヌムスの事が気になっていた。なぜそこまでして自分を招き入れたのか？彼の本当の目的は一体何なのか？彼はなぜエグザを狙うのか？疑問が頭の中に飛び交う。

レオルモン「ーージ、コウジ！」

コウジ「……！」

コウジはレオルモンの声にハッとする。

コウジ「どうしたんだいレオルモン？」

レオルモン「それはこっちのセリフ！何回呼んでも反応しねぇからさぁ。」

コウジ「ごめん、ボーッとしててさ…。」

レオルモン「全く…。」

レオルモンは膨れっ面になる。すると、アグモン博士がコッソリとドアへと向かう事に気づく。

レオルモン「なにコソコソしてんだよ博士？」

博士「エグザの様子を見に行くんだギャ！静かにしてるだギャ！」

コウジ「それより博士！操縦は？」

博士「自動操縦装置つけてるから心配ないだギャ！」

アグモン博士はそう言ってコッソリとエグザの後を追う。

レオルモン「あいつの心配ないってのが…」

コウジ「余計心配なんだよね…。」

コウジとレオルモンはお互いに目を見合わせて苦笑いするのであった。

～デジシップ　倉庫～

デジシップ内をうろつくエグザ。すると、エグザは様々な物が置いてある倉庫に入る。

エグザ（ガラクタばっかだなぁ…。何か使えそうな物があるか探して見るか…。）

エグザは倉庫に入って調べると、ガタンとエグザの足が何かにぶつかった。

エグザ「ん？なんだこれは…？」

エグザはぶつかった物を調べると、以前リュウギとナルガモンが使っていたタイムマシンだったのだ。

エグザ「……。」

（こいつはまさか…。）

？？？「タイムマシンには触るなだギャ！」

エグザは振り向くと、アグモン博士はギロリと睨んでいた。

エグザ「タイムマシンっていうのか？俺はてっきりガラクタかと思ったぜ。」

博士「ガラクタじゃないだギャ！」

アグモン博士はそう言って歯をギリギリと鳴らしながら威嚇する。

エグザ「勝手に入って悪かったな…。」

エグザはアグモン博士の頭にポンと触ったあと、倉庫から退室した。

博士「フンだ！」

～スフィアム島～

スフィアム島に辿り着いたエグザ達。そこには小さな洞穴があった。

エグザ「ここがスフィアム島か…。」

コウジ「この先にエンシェントデジモンがいるのかい？」

エグザ「あぁ。ワリィがお前らは……」

レオルモン「またオレ達を除け者扱いか？」

エグザ「フッ、言わなくても分かってたようだな。んじゃ、よろしく頼むぜ。」

エグザは小さく笑い、洞穴の中へと入っていった。

コウジ「エグザ……。」

レオルモン・博士「気に食わねぇ？」

コウジは心配するが、一方レオルモンとアグモン博士は同時に鼻をフンと鳴らしてそっぽを向く。

～謎の洞穴～

洞穴に入ると、３m先しか見えない程の暗さだった。

エグザ「……。」

（随分と暗いなぁ…。）

黙々と奥へと進むエグザ。すると、道幅が段々と広くなっていく。

エグザ「？」

エグザは思わず足を止めた。目の前にはサンナ島の洞窟で見たのと同じ玉座が置かれていた。

エグザ「玉座……。ってことは……」

その時、何処からか声が聞こえてくる。

？？？「待っていたぞ、始まりのエクセリオンよ…。」

エグザの前に現れたのは、漆鎧を纏ったスフィンクスような姿をした巨大なデジモンだった。

エグザはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「エンシェントスフィンクモン、究極体、古代幻獣型、ウィルス種、必殺技はダークブラスト。」

エンシェントスフィンクモン「ほぅ、感じるぞ。お前の心に秘めている闇の力を…。」

エンシェントスフィンクモンはエグザに興味を抱くように呟く。

エグザ（なんだコイツは…？エンシェントワイズモンより凄まじい力を感じない…。コイツ、本当にエンシェントデジモンなのか…？）

エンシェントスフィンクモン「自己紹介がまだだったようだな。俺は伝説の十闘士の１人、闇の十闘士　エンシェントスフィンクモン

だ。」

エグザ「解りやすい自己紹介をどうも…。さっさと始めようぜ。こっちは色々と忙しいんでな…。」

エグザは背中に背負ってあるセイクリッド・レインティアを取り出して戦う態勢に入る。

エンシェントスフィンクモン「……。」

エグザ「来ねえんならこっちから行くぞ！」

エグザは声を発すると同時にセイクリッド・レインティアを振り下ろし、剣風によって生み出された衝撃波を放つ。

エンシェントスフィンクモン「フン！」

エンシェントスフィンクモンは手を薙ぎ払うように振ると、衝撃波を簡単に弾き返した。

エグザ「チッ…。だったらこれでどうだ？」

エグザは懐からデジガンを取り出してエンシェントスフィンクモンを狙い撃つ。

エンシェントスフィンクモン「無駄だ。」

エンシェントスフィンクモンは眼光を光らせると弾丸は消滅した。

エグザ「もう一発！」

エグザはデジガンの引き金を引いてもう一発放つ。その時、弾丸は途中で爆発し、エンシェントスフィンクモンは光りの閃光に包まれる。

エンシェントスフィンクモン「？」

エグザ「貰った！」

エグザはセイクリッド・レインティアを二刀流にし、X状に振ると剣風によって生み出された衝撃波を放つ。

すると、2つの衝撃波はX状になってエンシェントスフィンクモンに直撃して砂煙が舞う。

エグザ「……。」

砂煙が止むと、そこは何もなかったかのような感じでエンシェントスフィンクモンが立っていた。

すると、エグザは口を開く。

エグザ「なぜ本気を出さない？」

エンシェントスフィンクモン「ほぅ、なぜそう思うのだ？」

エグザ「あぁ。こんぐらいの衝撃波なら、お前の技でさっきみたいに余裕で消せるハズだ。けどお前は全く動ずることなく技を受け止めた。」

エンシェントスフィンクモン「何が言いたいのだ？」

エグザ「つまりお前はいま、俺を試してるって事だ。違うか？」

長い沈黙が流れる。すると、エンシェントスフィンクモンは静かに笑う。

エンシェントスフィンクモン「クククククク…。」

エグザ「なんだその笑いは？図星か？」

エンシェントスフィンクモン「正解だエグザ。何も恐れない強い心の持ち主だ。数々の戦いを乗り越えてきた理由が俺にも分かった。まさか、これ程の力があったとはな…。」

エグザ「そいつは光栄だな…。」

エンシェントスフィンクモン「実力は分かった。しかし、お前にエンシェントストーンを託す事はできん…。」

エグザ「なに？」

エンシェントスフィンクモン「エグザよ、お前はある物に恐れているんだよ…。」

エグザ「エンシェントワイズモンと同じ事言ってやがるな…。何度も言うようだが、俺は恐れてる物なんて何もない。」

エンシェントスフィンクモン「エグザよ、お前はなぜエンシェントワイズモンからここへ来るように命じられたのか、まだ気付かない

のか？」

エグザ「？」

エンシェントスフィンクモン「エンシェントワイズモンはお前の本当の恐れに気付いたから俺の元へと案内させたのだ。」

エグザ「じゃあ教えて貰いたいね。俺が本当の恐れているヤツをよお。」

エンシェントスフィンクモン「それは、運命（さだめ）だ。」

エグザ「運命（さだめ）……？」

エンシェントスフィンクモン「俺はお前の過去を知っている。こうなる事は既に分かっていたのだ。なにせ、これは運命なのだからな…。」

エグザ「だったら教えろ。俺は今後どうなるんだ…？」

エグザが問うとエンシェントスフィンクモンは黙り込む。

エグザ「どうなんだ…？」

しばらくすると、エンシェントスフィンクモンはようやく口を開く。

それは、思いも寄らない言葉だった。

エンシェントスフィンクモン「お前は死ぬ…。」

エンシェントスフィンクモンの言葉に、エグザは驚愕する。

エグザ「なん…だと…？」

エンシェントスフィンクモン「お前がどう足掻こうが、これは変えられぬ運命…。」

エグザ「……。」

しばらく黙りになるエグザ。するとその時だった。

エグザ「ククククク…。フハハハハハハハ？」

エグザは高らかに笑う。

エンシェントスフィンクモン「何が可笑しい？お前は死ぬのだぞ？」

エグザ「当然だ。俺は存在してはならねぇ者だ。ここまで生きてるのも、ほぼ奇跡に近ぇからな。」

エンシェントスフィンクモン「ほぅ、お前の死は既に自覚していたのか。」

エグザ「けど、俺はまだやらなきゃならねぇ事があるんだ。俺には時間がねぇんだ。」

エンシェントスフィンクモン「よかろう…。しかし、条件がある。」

エグザ「条件だと？」

エンシェントスフィンクモン「お前にとって運命とは何なのか？答

えが見つけたらここへ来い。そうすればエンシェントストーンはお前に託そう。」

エンシェントスフィンクモンはそう言って闇の中へと消えていった。

先程余裕な表情を見せるエグザは突然と真剣な表情へと変わった。

エグザ「運命…か…。」

～スフィアム島～

エグザの帰りを待つコウジ達。すると、レオルモンは突然叫ぶ。

レオルモン「あ、帰ってきた！」

洞穴の中からエグザが現れる。コウジ達はエグザの元へと駆け寄る。

コウジ「早かったね。それで、エンシェントストーンは手に入ったかい？」

エグザ「……悪りぃが、1人にさせてくれないか？」

コウジ「エグザ……？」

エグザは深刻な顔になり、1人でデジシップへと向かった。

レオルモン「なんだアイツ？」

博士「きっとエンシェントデジモンに負けたんだギャ！」

コウジ「エグザ……。」
（あんなエグザ、初めて見た…。）

～テジシップ～

エグザ「……。」

エグザは操縦席に座り込み、深く考え込む。

エグザ（妙だ…。エンシェントスフィンクモンはなぜ俺に考えさせる時間を与えてくれたんだ…？）

その時、先程エンシェントスフィンクモンの言葉を思い出す。

エンシェントスフィンクモン『何も恐れない強い心の持ち主だ。数々の戦いを乗り越えてきた理由が俺にも分かった。』

エグザ（数々の戦いを乗り越えてきた…。何も恐れない…。）

その時、エグザはハッとする。

エグザ「そうか…。そういう事だったのか…。」
（わざわざ時間を与えてくれた理由が分かったぜ…。）

エグザは立ち上がり、テジシップの倉庫へと向かった。

～テジシップ　倉庫～

エグザは倉庫に入り、ある物を探す。

エグザ「あったぜ。」

見つけたのは、先程足にぶつけたタイムマシンだった。

エグザ「探しに行くとするか。運命とやらを…。」

一方、コウジはエグザの事が気になり、テジシップの操縦室に入る。

コウジ「いない…。」

（一体何処に？）

コウジは操縦席に手を当てると、まだ温かみがあった。

コウジ「まだ温かい…。だとしたらそう遠くへは行ってないハズ…。」

コウジはそう確信し、操縦室を出た。

～テジシップ　倉庫～

倉庫のドアを開けた途端、最初に目に映ったのはエグザが地面に倒れていた。

コウジ「エグザ？」

コウジは慌ててエグザの元へと駆け寄る。

コウジ「エグザ、しっかりしろ！」

連呼するコウジ。よくよく見ると、エグザはただ眠っていた事に気

付く。

コウジ「なんだ…。」

コウジは安心してホッとする。すると、コウジはある物が目に映る。

コウジ「？」

コウジはタイムマシンの画面を見ると、こう書かれていた。

タイムマシン「年代、２０１４年　デジタルワールド」

と…。

コウジ「これは…？」

コウジはチラッとエグザを見る。ゴクリと息を呑み込むと、コウジはエグザの身体を調べ始める。

コウジ「きっと、エグザの秘密が分かるかもしれない…。」

その時だった。

ジャラ……

コウジ「ん？」

（何か入ってる？）

エグザのポケットから音が聞こえた。コウジはゆっくりとポケットから取り出すととんでもない物を目にした。

コウジ「こ、これは…？」
（なぜエグザがこれを…？）

コウジはゴクリと息を呑み込み、もう片方のポケットを調べると、
コウジの手が何かに当たった。

コウジ「こっちも何か入ってる。」

コウジは躊躇いながらもゆっくりと取り出した。それは何重に折り
たたまれた小さな紙だった。

コウジ「紙…？」

コウジは勇気を振り絞って紙をゆっくりと広げていった。

その紙を見た途端、コウジは驚きの余りに声を震わせる。

コウジ「そ、そんな…？」

コウジはゆっくりと手を出してエグザの左目にある傷に触れようと
したその時、コウジのデジドライブが鳴る。

コウジ「どうしたんだい急に？」

博士『大変だギャ！またヴァヌムスが現れただギャ！』

コウジ「なんだって？分かった。すぐそっちに行くよ。」

コウジはそう言ってデジドライブの通信を切る。

コウジ「ヴァヌムス、またエグザの命を狙いに来たんだ…。」

コウジは中指で眼鏡をずり上げる。すると、コウジは目をキリッとさせて倉庫を出る。

コウジ「……。」

コウジは一度エグザを見てから、急いでレオルモンの元へと向かうのであった。

ー To Be Continued・・・

EP74　～運命をとは何か…。闇の十闘士　エンシェントスフィンクモン？～

一方、エグザは…。

～２０１４年　荒れ地～

ここはザンバ村の近くにある荒れ地。エグザはとある人物とそのパートナーデジモンに会っていた。

リュウ「テメェ、一体何者なんだよ？」

当時２２歳のリュウは背中に背負うセイクリッド・ドラグーンの柄を掴んで戦う態勢に入る。

エグザ「名前か…。そんなものとうに捨てた…。」

リュウ「はぁ？何言ってやがんだよ…？」

エグザは小さく笑うと、背中に背負ってある大剣、セイクリッド・レインティアを取り出した。

リュウ・ドラコモン「！？」

エグザ「エグザの名はエグザ…。リュウ、ドラコモン…。お前らの力を見せて貰う…。」

（ニヤリ…）

エグザはニヤリと笑い、リュウとドラコモンに戦いを挑むのであった。

※ここで『†デジモン　エグザ02†～Ａｎｏｔｈｒ　Ｓｔｏｒｙ～』のＳｅｃｒｅｔ　Ｅｐ　～未来からの来訪者～へと繋がります。

次回はエグザの命を狙うヴァヌムスが現れる？

果たしてエグザはエンシェントストーンを手に入れることが出来るのか？

次回もお楽しみに？

EP75　～それぞれの決断？エグザは僕が守る？～（前書き）

～スフィアム島～

コウジはテジシップを出ると、レオルモンとアグモン博士はコウジの元へと駆け寄る。

レオルモン「コウジ！」

博士「ヤツが来るだギャ！」

？？？「酷ぇなぁ…。人をバケモノ扱いしやがってよぉ。」

一同「？」

コウジ達は振り向くと、デジシップの上にヴァヌムスが座っていた。

コウジ「ヴァヌムス…。」

ヴァヌムス「よう、コウジ…。」

ヴァヌムスは高く飛び上がり、コウジ達の前に着地する。

ヴァヌムス「探したんだぜ。」

コウジ「目的は僕じゃないだろ？」

ヴァヌムス「ありゃ？あっさりと見破られちゃったぜ…。」

ヴァヌムスは冗談気に笑いながら頭をポリポリとかく。

ヴァヌムス「ま、その方が話が早ぇ。さっさとエグザを出しな。」

ヴァヌムスは背中に背負ってある大剣、ダークネス・ドラグーンを取り出す。

コウジ「……。」

コウジは黙りになる。

レオルモン「コウジ…？」

ヴァヌムスはチラッとデジシップの方を見る。

ヴァヌムス「なるほど、そこにいるんだな？」

その時、コウジは両手を広げる。

一同「？」

コウジ「君がどれくらいエグザを恨んでいるのか知らないけど、エグザには指一本触れさせない？」

レオルモン「コ、コウジ？」

ヴァヌムス「テメェ、自分が何を言ってるのか分かって言ってんのか？」

コウジ「あぁ。」

博士「コウジ！どうしてそこまでしてエグザを守ろうとするんだギャ？」

コウジ「前まではそうだったかもしれない…。でもこれだけはハッキリ言わせて貰う！デジタルワールドはエグザを必要される救世主、エクセリオンだ？」

レオルモン「それがお前の答えなんだな、コウジ？」

コウジ「……あぁ。」

レオルモン「うしっ！コウジが選んだ道だ！オレも力を貸すぜ！」

レオルモンは目をキリッとさせて戦う態勢に入る。

ヴァヌムス「失望したぜ、コウジ…。そこまであんなヤツと一緒にいてぇなら、仲良くあの世に逝かせてやるよ？」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを構えてコウジ達に襲い掛かる。

レオルモン「コウジ！」

コウジ「頼むよ、レオルモン？」

コウジはデジドライブを取り出してレオルモンに翳した。すると、レオルモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

レオルモン「レオルモン、ワープ進化？」

『バンチョーレオモン？』

ヴァヌムス「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを振り下ろすと、バンチョーレオモンは短刀、男魂でダークネス・ドラグーンを弾き返す。

ヴァヌムス「くっ？」

バンチョーレオモン「コウジには指一本触れさせねぇ…。」

コウジ「エグザは僕が守る？」

バンチョーレオモンｖｓヴァヌムス？

エグザを守ることを決意したコウジ！

果たしてエグザは運命を見つける事ができるのか？

Ｅｐ７５スタート？

ＥＰ７５　～それぞれの決断？エグザは僕が守る？～

～２０１４年　荒れ地～

一方、エグザはＥＸモードを発動させて当時のリュウ達と激闘を繰り広げていた。

エグザ「俺はお前に聞きたい事があって此処に来たんだ…。」

リュウ「聞きたい事…？」

エグザ「もし、自分の大切な物が奪われた時、お前はどうする…？」

リュウ「な、なんだよ急に…？」

エグザ「どうなんだ…？」

リュウは腕を組んで考える。すると、リュウはエグザにこう答えた。

リュウ「そりゃ嫌だよ…。でも、それが運命だから仕方ないと思うぜ…。」

エグザ「運命には逆らえないって事か…。」

（やはりここに来てもダメだったか…。）

リュウ「でも、オレはそんな後ろ（過去）ばっか見てねぇで、真っ直ぐ前（未来）に突き進んで行くさ…。」

エグザ「！？」

すると、エグザは静かに笑う。

エグザ「そうか…。どうやら俺は、大切な事を忘れかけてたみたいだ…。礼を言う…。」

エグザはそう言って振り向いた。

エグザ（後ろばっか見てねぇで、真っ直ぐ前に突き進んでいく…か…。俺は今までずっと過去を見つめていたんだな…。俺はとんでもない大バカ野郎だぜ…。）

リュウ「何処行くんだ…？」

エグザ「お前の言う通り、真っ直ぐ前（未来）に突き進む…。」

リュウ「そうか…。ま、頑張れよ…。」

すると、エグザは振り向いてリュウに忠告する。

エグザ「忠告だ…。このまま行けば、お前は後悔する事になるぞ…。」

リュウ・ベビドモン「！？」

エグザ「だが、今のお前なら乗り越えられるかもな…。リュウ、ベビドモン…。お前達のその結ばれた絆、忘れるなよ…。」

（ありがとよリュウ…。俺はこの世界に来て本当に良かったぜ…。）

エグザはそう言うと、静かに消え去った。

～スフィアム島～

一方、こバンチョーレオモンは短刀、男魂を構えて目にも止まらない早さでヴァヌムスに接近する。

バンチョーレオモン「『獅子羅王漸(ししらおうざん)？』」

ヴァヌムス「ククククク♪」

ヴァヌムスは不気味な笑みを浮かべながらダークネス・ドラグーンを構えて男魂を受け止めて鍔競り合う。

バンチョーレオモン（なんて野郎だ？ちっともビクともしねぇ？）

ヴァヌムス「所詮、テメェはその程度にしかならねぇんだよ！」

ヴァヌムスは力で押し返すと、バンチョーレオモンは後方へと下がって態勢を立て直す。

ヴァヌムス「裏切り者は散りな…。」

ヴァヌムスは剣風によって生み出された闇の衝撃波を放った。

バンチョーレオモン「くっ？」

バンチョーレオモンは拳をギュッと握りしめて正義の熱い拳を放った。

バンチョーレオモン「『バーンバンチョーパンチ？』」

正義の熱い拳は闇の衝撃波とぶつかり合うと凄まじい爆発が発生して爆煙が舞い上がる。

バンチョーレオモン「くっ？」

（何処だ？）

爆煙が去ったその時、ヴァヌムスがダークネス・ドラグーンを振りかぶっていた。

コウジ「バンチョーレオモン！前だ！」

ヴァヌムス「遅ぇよ！」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを振り下ろすと、バンチョーレオモンはとっさに男魂でダークネス・ドラグーンを受け止めた。

ヴァヌムス「なかなか良い反応じゃねぇか？」

バンチョーレオモン「大体は予想していたさ…。」

ヴァヌムス「ふ～ん、んじゃこれも予想していたか？」

その時、ダークネス・ドラグーンの剣先が伸びてバンチョーレオモンの横腹を貫いた。

バンチョーレオモン「？」

コウジ「バンチョーレオモン？」

ヴァヌムス「残念でした♪おらよ！」

ヴァヌムスは勢いよくバンチョーレオモンの横腹を貫いたダークネス・ドラグーンを引き抜いた。

バンチョーレオモン「ぐぉぉぉぉぉ？」

バンチョーレオモンは横腹を押さえながら地面に膝が着く。

博士「なんてヤツだギャ…？」

ヴァヌムス「さぁて、そろそろトドメ刺しちゃおうかな？」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを構えると、剣先が伸びてバンチョーレオモンに襲い掛かる。

バンチョーレオモン「くっ？」

コウジ「逃げろ、バンチョーレオモン？」

コウジはバンチョーレオモンを助けようと走り出した。その時、ヴァヌムスはニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

ヴァヌムス「ククククク…♪」

バンチョーレオモンはヴァヌムスの思惑に感付いたのか、突然叫んだ。

バンチョーレオモン「ダメだコウジ？逃げるんだ？」

ヴァヌムス「気付いても遅ぇんだよ。」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンの軌道を変えた。そう、彼の本当の狙いはバンチョーレオモンではなく、パートナーのコウジだった。ダークネス・ドラグーンは容赦なくコウジに襲い掛かる。

コウジ「え……？」

博士「危ないだギャ？」

ヴァヌムス「あばよ…。」

バンチョーレオモン「コウジィィィィィィィィィィィィ？」

その時、黒い影がコウジを庇い、ダークネス・ドラグーンを受け止めた。

コウジ「？」

？？？「ギリギリセーフだな…。ったく、手間かけさせやがって…。」

コウジは思わず名前を叫ぶ。

コウジ「エグザ？」

ヴァヌムス「チィ…。」

エグザ「関係ねぇヤツまで手を出すとはなぁ…。よほど消されてぇみたいだな！」

エグザは声を発すると同時にダークネス・ドラグーンを弾き返した。

ヴァヌムス「わざわざそっちから出てきてくれとはなぁ…。正義の味方ヅラかぁ？今更どのツラ下げて俺の前に現れたんだ？」

ヴァヌムスはそう言ってダークネス・ドラグーンを肩に担ぐ。

エグザ「こっちはもう覚悟決めたのさぁ…。俺はもう迷わねぇ…。」

エグザはそう言ってセイクリッド・レインティアを取り出して構える。

ヴァヌムス「迷わねぇだぁ？存在しねぇクズがほざいてんじゃねぇぞッ？」

ヴァヌムスは凄まじい怒鳴り声を上げる。

エグザ「バンチョーレオモン、立てるか？」

バンチョーレオモン「あぁ。オレは余裕だ！」

エグザ「だったら心配ねぇな。行くぞ？」

エグザはセイクリッド・レインティアを地面に突き刺して高らかに叫ぶ。

エグザ「デジサモン、発動？」

すると足元からデジ文字が描かれた魔法陣が現れる。

エグザ「来い、マルスモン？」

エグザは呼ぶと、魔法陣からマルスモンが実体化された。

マルスモン「さぁて、久しぶりに暴れてやろうか…。」

マルスモンは自らの拳と拳をぶつけて気合いを入れる。

コウジ「バンチョーレオモン。」

コウジは目をキリッとさせてデジドライを取りだした。

バンチョーレオモン「あぁ。オレも本気モードと行こうか！はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

バンチョーレオモンは唸り声を上げると、コウジのデジドライブから聖なる輝きが満ち溢れる。

ヴァヌムス「なに？」

光りが止むと、バンチョーレオモンの身体に炎を纏っていた。

コウジ「これが僕らの絆、バンチョーレオモンＢＭ（バーストモード）だ！」

バンチョーレオモンＢＭとマルスモンは拳をギュッと握りしめ、ヴァヌムスに接近する。

ヴァヌムス「くっ！」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを振り回して、剣風によって生み出された3つの闇の衝撃波を放つ。

バンチョーレオモンBM「こんなもの？」

バンチョーレオモンBMは拳から炎を纏い、闇の衝撃波を次々と殴り消していく。

マルスモン「うおおおおおおおおおお？」

マルスモンは猛スピードでヴァヌムスを殴りに掛かる。

ヴァヌムス「しつけぇんだよ！」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンの刃先を伸ばしマルスモンの胸を狙う。

その時、マルスモンはダークネス・ドラグーンの刃先を受け止めた。

ヴァヌムス「なに？」

マルスモン「エグザ！」

マルスモンは叫ぶと、エグザは懐から2挺デジガン、ライトとダークを取りだしてヴァヌムスを狙い撃つ。

ヴァヌムス「くっ？」

弾丸はヴァヌムスの足元や手に直撃すると段々と氷結化していく。

そう、エグザは2丁デジガンに氷結弾を仕組んだのだ。

ヴァヌムス「しまった？」
（身体が動かねぇ？）

エグザ「決めてやりな…。」
（フッ…）

バンチョーレオモンＢＭ「うおぉぉぉ

ヴァヌムス「ハァ…ハァ…。」

一同「？」

コウジ「あれがヴァヌムスの正体…？」

エグザ「化けの皮が剥がれたってヤツだ…。」

ヴァヌムス「これで勝ったと……思うなよ……クズ共が……。」

エグザ「思っちゃ悪りぃかよ？」

エグザはセイクリッド・レインティアを取り出して、ゆっくりと構える。

エグザ「テメェの野望も、これで終ぇだ…。」

エグザはセイクリッド・レインティアを振り下ろすと、剣風によって生み出された衝撃波を放った。

その時、黒い影がヴァヌムスを助けて衝撃波を交わした。

ヴァヌムス「おいおい、単独行動は禁止って言わなかったか、ヴルグモン。」

エグザ「チッ、ダークスか。」

ヴルグモン「俺が助けていなかったらやられていたんだぞ？今日はそこまでだ。退くぞヴァヌムス。」

ヴァヌムス「なに？こいつらを見逃すの……くっ？」

ヴァヌムスは立ち上がろうとすると、傷が痛み座り込む。

ヴルグモン「その状態だと到底無理だな…。」

ヴァヌムス「チッ…。」

ヴァヌムスは舌打ちし、仕方なくヴルグモンの背中に乗る。

エグザ「待ちやがれ！」

エグザは懐から2丁デジガンを取り出してヴルグモンを狙い撃つ。

ヴルグモン「邪魔だ。『ヘルウイングショット？』」

ヴルグモンは背中に生えてる黒い翼から無数の羽を発射して弾丸を弾き返す。

ヴルグモン「命拾いしたなエグザ。しかし次合った時は容赦なく消してやる…。」

ヴルグモンはそう言って高く飛んで去っていった。

コウジ「くっ、逃がしたか！」

エグザは追おうとせず、2丁デジガンを懐にしまう。

エグザ「ご苦労だったな、マルスモン。」

マルスモン「あぁ。必要になればいつでも呼んでくれ。」

エグザ「あぁ。」

デジサモンの効果が切れてしまい、マルスモンは静かに消え去った。

戦闘を終えると、バンチョーレオモンＢＭはレオルモンへと退化した。

レオルモン「またお前に助けられちゃったな…。でも、コウジを助けてくれてありがとな！」

レオルモンはお礼を言うと、エグザは小さく笑い、洞穴へと向かった。

コウジ「待ってくれ、エグザ。」

コウジは呼び止めると、エグザはピタリと足を止める。すると、エグザは振り向かないままくちを開く。

エグザ「少し待ってろ。用が済んだら、お前らに大事な話しがあるからよ…。」

コウジ「え…？」

エグザはそう言って洞穴の中へと入っていった。

コウジ「エグザ……。」

～謎の洞穴　玉座の間～

洞穴に入り、奥へと進むエグザ。すると、闇の中からエンシェントスフィンクモンが現れる。

エンシェントスフィンクモン「見つけたか、運命とやらを…？」

エグザ「あぁ。」

エンシェントスフィンクモン「では聞かせて貰おうか？運命とは一体何なのかを…。」

エグザ「アンタの言うとおり、運命はどう足掻こうが変わりやしねぇよ…。でもなぁ、そこで諦めて運命に従うヤツは未来を失っちまう。俺はどうなったっていい…。この命が朽ち果ててもいい…。それでも俺は死に物狂いで未来を変えてやる…。」

エンシェントスフィンクモン「……。」

エグザ「運命に縛られるのはもう終ぇだ…。俺は俺のやり方で運命に立ち向かう。じゃねぇと、未来は切り開かねぇからな…。」

エンシェントスフィンクモン「お前の運命、しかと俺の心に届いた…。よかろう。お前にエンシェントストーンを託そう。」

エンシェントスフィンクモンは眼光を光らせると、小さな光りがエグザの元へと舞い降りてくる。

エグザ「エンシェントスフィンクモン…。」

エンシェントスフィンクモン「お前なら切り開けると信じているぞ…。では、さらばだ…。」

エンシェントスフィンクモンはそう言って闇の中へと消えていった。

エグザ「……。」

エグザはエンシェントストーンをＤ－アクセルに納め、背を向けて歩き出す。

～スフィアム島～

エグザは洞穴から出て来ると、コウジ達がエグザの帰りを待ってくれていた。

レオルモン「よっ！どうだったんだ？」

エグザ「この通りだ。」

エグザはＤ－アクセルの画面を見せると、闇を纏ったエンシェントストーンが映っていた。

レオルモン「やったな！」

エグザ「用が済んだ事だ。コウジ、レオルモン、博士。」

一同「？」

エグザ「今更だが、俺が今からいう事を信じてくれないか？」

レオルモン「なに水臭ぇ事言ってんだよ、エグザ。」

博士「何度も助けられたんだギャ…。信じてやるだギャ…。」

アグモン博士は照れ臭そうに言うと、レオルモンは嫌らしい目をしながらからかう。

レオルモン「なにが信じてやるだ?ホントはものすっごく信じたいクセに~。」

博士「ボ、ボクは別にそんな事ちっとも思ってないだギャ?」

レオルモン「ウソつけ~。」

エグザ「レオルモン、博士…。」

コウジ「エグザ……。」

コウジはそっと声を掛けると、エグザは不安気な顔をする。

エグザ「……。」

(やっぱりダメか…。なんたって、お前の大事なもんを奪っちまったんだからな…。)

コウジ「エグザはどんな事が起きても僕らを信じてくれたし助けてくれた…。だから僕らもエグザを信じるし、エグザの罪を全て受け入れるよ…。」

エグザ「コウジ…。」

コウジ「だって、僕らは仲間じゃないか…。」

コウジは優しく微笑みながら、そっと手を差し伸べた。エグザは小さく笑い、コウジの手をギュッと握り締めた。

エグザ「……分かった。」

エグザは決断し、目をキリッとさせる。

エグザ「お前らに真実を話す…。」

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

EP75　～それぞれの決断？エグザは僕が守る？～（後書き）

ついにエグザが真実を語る決断をした？

次回はミソラ達の物語？

次のエンシェントデジモンは一体？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ７６　～塔を背負う巨大亀　エルドラディモンを笑わせろ？～（前書き）

今回はちょっとした笑いありの話。

キャンドモンが熱唱？

ミソラが一発芸？

ガオモンがソフ〇バンクのお父さんに？

カイがシャイに？

Ｅｐ７６スタート？

Ｅｐ７６　～塔を背負う巨大亀　エルドラディモンを笑わせろ？～

一方、ミソラ達はエンシェントメガテリウモンの作った氷の橋を渡ってエルドラ島へと向かっていた。

ミソラ「見えたわ！あれがエルドラ島じゃない？」

レナモン「橋はあの島に繋がっているから間違いないな…。」

ミソラ「行きましょ！」

～エルドラ島～

エルドラ島に辿り着いたミソラ達。そこは広大な森へと広がり、島の中心に２０ｍ程の巨大な塔が聳え立っていた。

キャンドモン「うっひゃ～？大きい塔ですねぇ～？」

カイ「あそこにエンシェントデジモンがいるのか…。」

ミソラ「さ、急ぎましょ！」

エルドラ島の中心にある巨大な塔を目指して森の中へと入って行くのであった。

～エルドラ島　　森～

森へ入ると、そこは不気味な気配が漂っていた。

カイ「妙だ…。イビルスの気配が全くない…。」

ミソラ「何か気味悪いわね…。」

レナモン「大丈夫だ。何か合ったら私がミソラを守る…。」

ミソラ「あら、頼もしい事言うじゃない♪」

キャンドモン「レナモンだけじゃありませんよ！ボクチンもミソラさんを守ってあげますから？」

レナモン「ミソラ、離れて。」

キャンドモン「ちょっとぉぉぉぉぉぉぉぉ？なに警戒態勢に入ってるんですか？」

ミソラ「アンタが一番危険だから。」

レナモン（コクリ…）

キャンドモン「酷いですよ2人とも？カイさんも何とか言ってくださいよ～！」

カイ「近寄るな。スケベロウソク。」

キャンドモン「ガオモン…？」

キャンドモンはガオモンに助けを求めようとする。

カイ「ガオモン、こんなスケベロウソクに近づいたらロクな事には

ならないぞ。」

ガオモン「百の承知です。」

キャンドモン「ボクチン、ショック…。」

キャンドモンはガックリとうなだれる。

ミソラ「さ、あんなのほっといて先へ急ぎましょ！」

キャンドモン「うわ～ん、待ってくださいよ～（泣）」

塔の入り口に着くと、ミソラ達は巨大な塔を見上げる。

ガオモン「近くで見ると大きいな…。」

ミソラ「どうやって入れるのかな…？」

レナモン「彼処から入ろう。」

レオルモンは指を差すと、塔の前に階段があった。

キャンドモン「いかにも怪しい階段ですねぇ…。」

カイ「構うものか…。こんな所でグズグズしてる場合じゃないんだ。さっさと行くぞ。」

カイはフンと鼻を鳴らし、先頭に立って階段へと向かう。

その時、地面が激しく揺れ始める。

一同「？」

ミソラ「え？なになに？」

ガオモン「地震？」

キャンドモン「落ち着いてください皆さん！ここは机の下に隠れた方が一番無難です！って机ねぇじゃねぇかＹＯ？」

ミソラ「アンタが一番落ち着きなさいよ？」

次の瞬間、何処からか声が聞こえてくる。

？？？「誰じゃやややや？ワシの許可なく勝手に上がり込もうとしてるヤツはぁぁぁぁ？」

カイ「なんだ？」

その時、地面から巨大な物体が湧いてきたのだ。

一同「？」

レナモン「デジモン？」

キャンドモン「ギャャャャャャャャャ？出たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カイはＤ－アクセルで謎のデジモンのデータを読み取る。

D－アクセル「エルドラディモン、究極体、突然変異型、データ種、必殺技はゴールデンロード。」

エルドラディモン「お前らか？ワシの背中に乗ろうとした愚か者は？」

エルドラディモンはギロリとミソラ達を睨む。

キャンドモン「待ってくださいお代官様？勝手に上がり込もうとしたのはこの青髪の坊ちゃんです？痛みつけるならこの青髪坊ちゃんにしてください？おねげぇでございますぅぅぅ？」

カイ「おい…。」

ミソラ「怪しい者じゃないわ！私達はエクセリオンよ。」

エルドラディモン「ほぅ。お前らが救世主か。待っていたぞ。」

レナモン「エルドラディモン、あの塔には一体なにがあるのだ…？」

エルドラディモン「このエルドラ塔には、伝説の十闘士の1人、木の十闘士　エンシェントトロイヤモン様が眠っておられる…。だが…」

ガオモン「どうしたのだ…？」

エルドラディモン「エンシェントトロイヤモン様の様子がおかしいのだ…。」

ミソラ「おかしい？具体的にどんな風におかしいのよ？」

エルドラディモン「どうもワシの背中がいつもより痒いのだ。」

ミソラ「それ、スゴイわかりにくい…。」

ミソラは眉をピクピクと動かしながら小さくツッコム。

カイ「まぁいい。そのエンシェントトロイヤモンは俺達が何とかする。だから塔に入らせてくれないか？」

エルドラディモン「いいだろう。ただし条件がある。」

カイ「条件だと？」

エルドラディモン「ワシを笑わせたら入れてやる。」

次の瞬間、長い沈黙が流れる。

一同「……はい？」

エルドラディモン「最近、退屈じゃし笑ってないからなぁ…。だからワシを笑わせたら入れてやる。」

ミソラ「アンタ、言ってる事メチャクチャすぎよ…。」

レナモン「しかし、背に腹は変えられん…。」

ガオモン「でも、一体誰がエルドラディモンを笑わせるんだ…？」

？？？「フッフッフ…。ついにこの時が来ちゃいましたね…。」

ミソラ「誰？」

ミソラ達は振り向くと、ギターを持ったキャンドモンが現れる。

キャンドモン「ボクチンの名誉挽回の時が来ちゃいましたぁぁぁ

キャンドモンはギターを弾き、何処かで聞いた事あるような曲を鳴らす。

キャンドモン「なんでだろう～、なんでだろう、なんでだなんでだろう～♪」

ミソラ「なんでテ○&ト○？古すぎない？」

カイ「というよりか、なんで知ってるんだよ…。」

キャンドモン「†デジモン　エクシード†のなんでだろう～♪」

ジャジャジャジャーン♪

キャンドモン「リュウギはいつも『そいつが俺の流儀だ！』ってカッコつけるのなんでだろう～♪なんでだろう～♪

ガオモンは自分を犬だと認めないのはなんでだろう～♪なんでだろう～♪

ジャジャジャジャーン♪

カイさんはいつもヘアバンドしてるのなんでだろう～♪（広いデコを隠すためです♪）

ミソラさんの胸が一般女子高生よりデカいのなんでだろう～♪なんでだろう～♪

どうでもいい事だけれど～、この小説のタイトルがなんでラテン語…

†デジモン　エクシード†～Ｎｏｖｕｓ　Ｖｉｎｃｕｌｕｍ～

なんでだろう～、なんでだろう～♪

ジャジャジャジャーン♪

なんでだろう～、なんでだろう～♪、なんでだなんでだろう～♪（皆さんもご一緒に！）

なんでだろう～、なんでだろう～、なんでだ！なんでだ！なんでだなんでだろう～～～～♪

ジャン、ジャン、ジャーーーーーン♪」

キャンドモン「どうですか？ボクチンの考えたなんでだろう？爆笑でしょう♪」

レナモン「キャンドモン、後ろ…。」

キャンドモン「へ？」

キャンドモンは振り向くと、怒りのオーラを纏ったミソラ達が拳をパキパキと鳴らせる。

ミソラ「ふーん、私達をそんな風に見ていたんだぁ…？」

カイ「デタラメ抜かしやがって…。死ぬ覚悟はできてるんだろうな…？」

ガオモン「オレは犬じゃない…。」

キャンドモンは冷や汗かきながら冗談気に笑う。

キャンドモン「あははは～、ジョークですよ皆さ～ん。これはエルドラディモンを笑わすためにあるなんでだろうなんですから～。ほら見てください！エルドラディモンが腹抱えて笑って……」

エルドラディモン「……（ー_ー）……」

キャンドモン「ってＮＯリアクションかいいいいいいいい？」

一同「覚悟しろーーーー！」

ミソラ達は一斉にキャンドモンを袋叩きにする。

キャンドモン「ぎいいいいいいいいいやややややややややややや？」

レナモン「……（汗）」

（今のはキャンドモンが悪い…。）

そして……。

ミソラ「あんな古臭い芸じゃ笑えないのは当たり前よ！」

カイ「おい、それを言うとテ○＆ト○はダメみたいな事になるぞ…。」

ミソラ「テ○＆ト○はテ○＆ト○だからこそ面白いの！あんなヘン

タイロウソクが歌うとぶち壊しなのよ！」

カイ「それじゃ、お前が笑わせたらどうだ？」

ミソラ「へ？私が？」

ミソラは腕を組んで考える。しばらくすると、気合いを入れる。

ミソラ「よーし！私がやるわ！」

カイ（一切抵抗なし…？）

ガオモン（自信あるんですね…。）

ミソラ「ミソラ、一発芸やります！」

ミソラは目の前に木の板を６０枚を置く。

ミソラ「ふぅーーー…。」

ミソラは集中してゆっくりと拳を握り締める。

レナモン「ミ、ミソラ…？」

ミソラ「はぁッ？」

ミソラはありったけの力で６０枚の板を叩き割った。

一同「？」

（……え？）

カイ達は驚きのあまりに声が出なかった。

ミソラ「本当は瓦割り３０枚割りたかったけど…、木の板で勘弁してね？」

カイ「そういう問題じゃないだろ…。エルドラディモンが引いてるぞ…。」

エルドラディモンは目を丸くしながらブルブル震えていた。

ミソラ「あれ…？」

カイ「怯えさせるんじゃなく、笑わせるんだぞ…。」

ミソラ「失敗しちゃった…？」

キャンドモン「ミソラさんのその可愛子ブリ！いただきまぁぁぁぁす？」

キャンドモンは目を？させながらミソラに飛び付いた。

その時、ミソラはありったけの力でキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん？」

ミソラ「近寄るな、鬱陶しい…。」

キャンドモン「すみましぇん…。」

そして……。

ミソラ「どうしようかしら…。」

ミソラは腕を組んで考えると、チラッとガオモンを見つめる。

ガオモン「な、なんだその目は？」

カイ「ガオモン、やってみろ。」

ガオモンは顔を赤らめながらコクリと頷く。

ガオモン「や、やってみます…。」

ミソラ「だったらガオモンわ私に良い考えがあるわよ！」

ガオモン「？」

ミソラはガオモンとレナモン、キャンドモンを呼んで耳打ちをする。

ガオモン「そ、それでいいのか？」

ミソラ「大丈夫よ！」

ガオモン「わ、分かった。」

ガオモンは深呼吸をした後、顔を赤らめながら小さく呟く。

ガオモン「ものまねコント行きます…。ソフ○バンクのＣＭのカ○くん。」

レナモン「ねぇハワイ行きたくないか？」

ミソラ「どうしたの急に…？」

ガオモン「ハワイかぁ…。」

キャンドモン「ワイハ？」

ガオモン「言葉を逆さにするな！」

キャンドモン「すいません。」

ミソラ「いいなハワイ…。」

レナモン「久々に行こうよ。」

ミソラ「行ったことあるのか、ハワイに？」

ガオモン「波乗りにな…。」

ミソラ「お父さんがサーファー…？……プッ。」

ガオモン「何が可笑しい？」

ミソラ「ごめんごめん。」

レナモン「結構上手いのよ。あだ名だってあったんだぞ。」

ミソラ「なに？」

ガオモン「波座のシンドバット…。今でもみんないいただともだ。」

レナモン「まだ付き合ってるの？」

ガオモン「ブッ？」

ただともいっぱい　ソフ〇バンク

ミソラ「どう？」

カイ「おい、エルドラディモンがちんぷんかんぷんなってるぞ…。」

エルドラディモンは笑うどころか頭上には「？」がいくつも浮かんでいた。

カイはツッコムとミソラは長い沈黙となる。

カイ「ソフ〇バンク知ってるわけないだろ…。」

ミソラ「……ひょっとしてこれって逆効果？」

カイ「大分な…。」

ガオモン「ミソラ、大丈夫とか言っておきながら、全く笑わなかったぞ？というよりか結局何がしたかったのだ…？」

ミソラは恥ずかしさの余りに顔を赤らめる。

ミソラ「今のは取り消しね…。」

そして…。

ミソラ「ソフ○バンクネタもダメだったみたいだね…。残るは…」

ミソラはチラッとカイを見つめる。

カイ「んな？なんだその訴えるような目は？」

ミソラ「こうなったらカイ、あなたしかいないわ！」

カイは顔を赤らめながら激しく否定する。

カイ「な、なぜ俺がやらなきゃいけないんだ？大体レナモンがまだやってないだろうが！」

レナモン「う……？」

ミソラ「レナモンはシャイなんだからやめてあげようよ！」

レナモン「ホッ…」

レナモンは密かにホッとする。

キャンドモン「あ、密かにホッとしましたよ…。」

カイ「と、とにかく俺はネタなんてしないからな！」

カイは意地張ってフンと鼻を鳴らす。

ミソラ「ふーん…。デジタルワールドがピンチなのに、アンタは自分のプライドのためにデジタルワールドを見捨てるんだぁ…。」

カイ「？」
（ドキッ？）

ミソラ「いいわよ×2。デジタルワールドを救えないようじゃ、最強のテイマーになるなんて到底無理よ…。結局、口先だけってことね。」

ミソラは呆れて深ため息をつく。その時だった。

カイ「わ、分かった…。最強のテイマーになるためだ…。仕方なくやってやる。」

ガオモン「カイ？」

ミソラ（フフフ、まんまと口車に乗せられたわね♪）

ミソラの作戦が上手くいき、心の中でほくそ笑むのであった。

キャンドモン「う…。」
（恐るべしミソラさん…。）

カイは深く深呼吸をする。

一同（ゴクリ…）

カイは顔を赤らめながら小さく呟く。

カイ「ふ…ふふ…、ふとんがふっとんだ…。」

その時、ミソラ達は氷のように固まった。

一同「……は？」

小学生が言いそうなダジャレを言うカイ。その時、エルドラディモンに異変が起きる。

エルドラディモン「く、くくくく…」

レナモン「エルドラディモンが笑いを堪えてる！カイ、続けてダジャレを言うんだ！」

カイ「んなっ？なんでまた？」

ミソラ「最強のテイマーになるんでしょ？早く言いなさいよ！」

カイ「くっ！この焼肉はすごいやきにくい！」

エルドラディモン「プッ、くくく…」

カイ「ア、アルミ缶のうえにあるミカン？仲間が遭難しただと？そうなんです？その槍、誰かにやりな？」

ダジャレを連発するカイ。その時、エルドラディモンは堪えず、爆笑するのであった。

エルドラディモン「ダァーハッハッハッハッハッハ？」

ガオモン「笑ったぞ！やりましたねカイ！」

ミソラ「ていうかどんなツボしてんのよ？」

カイ「ハァ…ハァ…。」

（なぜ俺がこんな目に…）

そして…。

エルドラディモン「いやぁ～、久しぶりに笑わったわい…。お前、笑いの才能あるぞ！」

カイ「恥ずかしいからやめてくれ…。」

カイは顔を赤らめながらフンと鼻を鳴らす。

ミソラ「それじゃ、約束通りにエルドラ塔に入らせて貰うわね！」

エルドラディモン「あぁ。エンシェントトロイヤモン様を頼んだぞ。」

ミソラ「さ、行きましょ！」

ミソラ達は階段を登り、エルドラ塔へと入るのであった。

一方、今回活躍したカイは深くため息をつく。

カイ（あんなネタ、二度とするか…。）

||To Be Continued....

Ｅｐ７６　～塔を背負う巨大亀　エルドラディモンを笑わせろ？～（後書き）

次回はついにエルドラ塔へ突入！

エンシェントトロイヤモンが暴走する原因とは一体？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ７７　～伝説の木の十闘士　エンシェントトロイヤモンの暴走を食い止めろ～

ついにエルドラ塔の中へと入るミソラ達。

なんとエンシェントトロイヤモンを暴走させた黒影が…？

Ｅｐ７７スタート？

EP77　～伝説の木の十闘士　エンシェントトロイヤモンの暴走を食い止めろ！～

～エルドラ塔　入り口～

カイ「ここにエンシェントトロイヤモンがいるのか…。」

カイは腕を組みながら塔を見上げる。

ミソラ「ねぇレナモン、エンシェントトロイヤモンって一体どんなデジモンなの？」

レナモン「すまないが、私にも分からない。」

ガオモン「エンシェントトロイヤモンは木の十闘士のエンシェントデジモンだ。エンシェントトロイヤモンの受け継がれていくデジモンは植物型デジモンなんだ。どんな姿してるか分からないけど…。」

ミソラ「へぇ～。どんな姿してるんだろう…？」

ミソラは腕を組んで、エンシェントトロイヤモンの想像をする。

キャンドモン「それより皆さん、ボクチンの進化した姿を想像をしてみてくださいよ！」

キャンドモンは口を挟むと、ミソラ達は即答する。

カイ「想像するほどヒマじゃない。」

ガオモン「興味ない。」

レナモン「同じく…。」

ミソラ「ヌメモンとかじゃない？」

キャンドモン「ちょっと？余りにも酷すぎますよ皆さん？」

カイ「スケベなんかほっといて、さっさと中に入るぞ。」

ミソラ「賛成。」

ミソラ達はキャンドモンを於いて先にエルドラ塔へと入る。

キャンドモン「置いて行かないでくださいよ皆さ～ん？」

～エルドラ塔～

塔の中に入ると、大きな広場になっていた。

ミソラ「広～い？」

ミソラは驚きながら辺りを見回す。一方、カイは腕を組んで深刻な顔をする。

カイ「妙だ…。」

ガオモン「どうかしましたか？」

カイ「こんなに高い塔なのに、階段がないのは不自然すぎる…。」

ミソラ「言われてみればそうね…。」

キャンドモン「ちょっと皆さ～ん！」

キャンドモンはミソラ達を呼ぶ。しかし、ミソラ達は一向に振り向きもしない。

カイ「また何か想像させる気か？」

ミソラ「無視しよう。無視。」

キャンドモン「無視しないでくださいよ！こんな所に変な物がありますよー！」

ミソラ「それってアンタじゃないの？」

振り向かないままツッコムミソラ。

キャンドモン「違いますよ！馬のような木です！」

レナモン「馬？」

ミソラ「もぅ…、何なのよ？」

ミソラ達は振り向くと、１０メートルぐらいの高さを持つ馬のような姿をした木が置かれていた。

ガオモン「なんだこれは？」

カイ「どう見ても、馬の姿をした木だな…。」

キャンドモン「ねぇ？だから言ったでしょ？」

キャンドモンは自慢気に言うと、ミソラはキャンドモンに問う。

ミソラ「んで、それがどうしたって言うのよ？」

キャンドモン「いや、別に何でも…。」

カイはフンと鼻を鳴らすと、背を向けて辺りをうろつく。

カイ「時間の無駄だ。この広場に仕掛けがあるかもしれない。さっさと探すぞ。」

ミソラ「これ以上邪魔したら、承知しないからね！」

ミソラはそう言って広場内を調べる。

キャンドモン「最近、ボクチンに冷たいですねぇ…。」

キャンドモンは小さくため息をついたその時、背後から物音がする。

ガタンッ！

キャンドモン「ん？」

キャンドモンは振り向いて巨大な木を見ると、何もなかった。

キャンドモン「確か今もの音が聞こえたような…？まぁいいか。ボクチンも探そ……」

ガタガタンッ！カタカタカタカタ！

また背後から物音がした。キャンドモンは振り向くと、巨大な木は眼光を光らせてキャンドモンを睨む。

キャンドモンは額から段々と冷や汗が流れ、顔が真っ青になっていく。

キャンドモン「で、でで、出たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

キャンドモンは絶叫し、ミソラの元へと駆け付ける。

ミソラ「ちょっと…、これ以上邪魔したら承知しないって何度も言わせるんじゃ…」

キャンドモン「それよりミソラさん？後ろ見てください後ろ？」

ミソラは後ろを見ると、巨大な木は前足を高く上げる。

ミソラ「え？」

カイ「動いてる？まさかデジモンか？」

キャンドモン「ミソラさん？ヤバイですよアレ？動いてますよこっちガン見されてますよ？」

ミソラはＤ－アクセルで巨大な木のデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「エンシェントトロイヤモン、究極体、植物型、デー

タ種、必殺技はサプライズキャノン。」

カイ「なんだと?コイツがエンシェントトロイヤモンなのか?」

ミソラ「想像と全然違うぅぅぅぅ?」

その時、エンシェントトロイヤモンは口と胸部にある巨大砲から超質量の砲弾を撃ち出す。

エンシェントトロイヤモン「『サプライズキャノン!』」

一同「え?」

ミソラ達はとっさに交わた後すぐに受け身をとり、全力疾走で逃げ回る。

エンシェントトロイヤモンは容赦なくミソラ達を追い掛ける。

ミソラ「なんで急に攻撃してきたのよ?」

キャンドモン「知りませんよぉぉぉぉぉぉ?」

レナモン「まさか、イビルスが支配してるのでは?」

ミソラ「かもしれないわ!ディスティングハーツ?」

ミソラはディスティングハーツすると、エンシェントトロイヤモンの体内には数々のカラクリが動いていた。そこにはイビルスはいなかった。

ミソラ「いないわ。」

カイ「イビルスがいないなら、なぜ攻撃を…？」

ミソラ「待って！エンシェントトロイヤモンの体内に何かあるわ…。」

ミソラはよくよく調べると、エンシェントトロイヤモンのせなかの部分にある歯車が少しズレていたのだ。

ミソラ「あれだわ！あの歯車のせいでエンシェントトロイヤモンが暴走しているんだわ！」

カイ「背中か…。ガオモン！」

ガオモン「はい！」

カイはＤ－アクセルをガオモンに翳す。するとガオモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ガオモン「ガオモン、ワープ進化？」

『ミラージュガオガモン？』

レナモン「ガオモンが究極体に？」

ミソラ「私達も行くわよ、レナモン！」

レナモン「あぁ！」

続いてミソラもＤ－アクセルをレナモンに翳す。するとレナモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

レナモン「レナモン、ワープ進化？」

『サクヤモン？』

カイ（究極体に進化できたのか…。アイツら、少しは成長したな…。）

「遅れるなよ！」

カイは左手を広げると、巨大手裏剣　ギルガメッシュが現れて手に取り、ミラージュガオガモンの肩に飛び乗る。

サクヤモン「ミソラ！」

ミソラ「えぇ！」

サクヤモンはミソラを抱きかかえて高く飛び上がる。

キャンドモン「うえっ？ボクチンは？」

ミソラ「アンタはいつものように物陰に隠れてなさいよ！」

置き去りにされたキャンドモンは慌てて物陰に隠れた。

エンシェントトロイヤモン「『エペイオスギミック？』」

エンシェントトロイヤモンは体中のあらゆるギミックを発動させ一斉攻撃をする。

ミソラ「え?そんなのアリなの?」

カイ「交わすんだ!」

ミラージュガオガモンとサクヤモンは素早く交わしていく。

サクヤモン「迂闊に近づけないな…。」

ミラージュガオガモン「カイ、指示を!」

カイ「大体、ヤツの身体に忍び込んで歯車を破壊するのは不可能に近い…。こうなったら倒すしかない…。」

ミソラ「待ってカイ!私にいい考えがあるわ!」

カイ「なに?」

ミラージュガオガモン「どうすればいいんだ?」

ミソラ「カイとミラージュガオガモンはエンシェントトロイヤモンの気を引き寄せて!その間に私は隙を読んでエンシェントトロイヤモンの体内に入るわ!」

サクヤモン「無茶だミソラ?」

最初に言葉が飛んできたのはサクヤモンだった。

ミソラ「あら?私じゃ頼りない?」

サクヤモン「そ、それは…。」

カイ「俺も賛成だ。」

サクヤモン「なぜだカイ?」

カイ「コイツの能力があれば歯車の位置が分かる。それに、アイツなら1人で充分だ。」

ミソラ「それ、どういう意味よ?」

カイ「思った事を言ったまでだ。だが、決して無茶するなよ。」

ミソラ「任せて!」

サクヤモン「しかし…」

ミソラ「大丈夫!私を信じて!」

黙り込むサクヤモン。すると、サクヤモンはコクリと頷く。

サクヤモン「分かった…。」

カイ「作戦実行だ!行くぞミラージュガオガモン!」

ミラージュガオガモン「はい!」

ミラージュガオガモンは右へ。そしてサクヤモンは左へと二手に分かれた。

エンシェントトロイヤモンは矛先をサクヤモンに向けた。

ミラージュガオガモン「お前の相手はこっちだ！『ダブルクレセントミラージュ？』」

ミラージュガオガモンは両手から放つ三日月型の衝撃波を放ち、エンシェントトロイヤモンを誘う。

エンシェントトロイヤモンは怒りの矛先をミラージュガオガモンへと向けた。

サクヤモン「ミソラ、今がチャンスよ！」

ミソラ「頼むわ！」

サクヤモンはエンシェントトロイヤモン背中に乗り、ミソラを降ろす。

その時、エンシェントトロイヤモンはミソラに気付いたのか、突然暴れ出す。

ミソラ「気付かれたわ！サクヤモン、行って！」

サクヤモン「気を付けて…。」

サクヤモンは高く飛び上がり、エンシェントトロイヤモンから離れる。

ミソラ「えーと…、入り口は……きゃっ？」

エンシェントトロイヤモンは
激しく動き回り、ミソラを振り落とそうとする。

サクヤモン「ミソラ？」

ミソラ「くっ…、負けるものですか！」

激しく揺れながらも入り口を探すミソラ。すると、エンシェントトロイヤモンの首に入り口を発見した。

ミソラ「あれだわ！」

その時、エンシェントトロイヤモンの背中から大砲が現れる。

ミソラ「え？」

カイ「ボヤボヤするな！入り口まで走れ！」

カイの叫び声にハッとしたミソラは入り口まで全力で走る。

その時、大砲は発射され、砲丸はミソラに襲い掛かる。

キャンドモン「急いでくださいミソラさん？」

ミソラ「間に合えぇぇぇぇぇ？」

ミソラはとっさにスライディングすると、間一髪でエンシェントトロイヤモンの体内に潜入する事に成功した。

一同「ホッ…」

カイ達は安心してホッとする。

カイ「第一関門突破だな…。ミラージュガオガモン、後は俺達のやるべき事をやるぞ。」

ミラージュガオガモン「分かりました！」

サクヤモン「……。」

（ミソラ……）

～エンシェントトロイヤモン　体内～

潜入する事に成功したミソラは辺りを見渡すと、様々なカラクリが止まる事なく動いていた。

ミソラ「よし、ディスティングハーツ！」

ミソラは歯車の位置を探知すると、一部動いていない歯車を発見した。

ミソラ「あそこだわ！」

確認したミソラは急いで歯車の元へ駆け付けると、黒い影がミソラの前に立ちはだかる。

？？？「侵入者…、排除…。」

その正体は、紫色のスーツを着たパペット型デジモンだった。

ミソラ「デジモン？」

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ポキュパモン、成熟期、パペット型、ウィルス種、必殺技はマッドネスブローチ。」

ミソラ「アンタがエンシェントトロイヤモンを暴走させた犯人ね！」

ポキュパモン「スクロモン様の命令…。エクセリオンを排除する…。」

ミソラ「スクロモンですって？」

その時、ポキュパモンは刃物状の爪でミソラに襲い掛かる。

ポキュパモン「『スラップアンドリップ』」

ミソラ「？」

ミソラは素早く交わし、すぐに受け身を取る。

ミソラ「ダークスの仕業だったのね…。何とかアイツを倒さなきゃ！」

ミソラは拳をギュッと握り締めて、戦う体勢に入る。

ポキュパモン「エクセリオン…、消す！」

ポキュパモンは刃物状の爪を立てて、パペット型とは裏腹に目にも

止まらない早さでミソラに襲い掛かる。

ミソラ（早い？）

ミソラはとっさに横へ交わすと、横腹に掠り傷を負ってしまう。

ミソラ「うっ？」

ミソラは傷を押さえながら素早く受け身を取る。

ミソラ（避けてばかりじゃダメだわ…。とにかく攻める！）

ミソラは拳をギュッと握り締めて接近戦に持ち込む。

ポキュパモン「ムダだ…。」

ポキュパモンは爪で先制攻撃したその時だった。

ミソラ（見えた！）

ミソラはポキュパモンの攻撃を見切り、素早く交わした。

ポキュパモン「なに…？」

ミソラ「はぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラはありったけの力でポキュパモンを殴り飛ばした。

ポキュパモン「？」

ポキュパモンは壁に激突し、砂煙が舞う。

ミソラ「やったわ…。今の内に早く歯車を……」

？？？「いってぇなぁ…。人間ごときが嘗めた真似を…。」

その時、砂煙から黒い影が見えてくる。

ミソラ「しぶといわね！」

ミソラは戦う体勢を入る。しかし、砂煙から出てきたのはポキュパモンではなかった。

ミソラ「ポキュパモン…じゃない？」

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ワルもんざえモン、完全体、パペット型、ウィルス種、必殺技はハートブレイクアタック。」

ミソラ「一体どうなってるの？」

ワルもんざえモン「残念だったなぁ。これが俺様の本来の姿、ワルもんざえモン様だ！」

ミソラ「そんな…。」

ワルもんざえモン「もう謝っても許してやんねぇからなぁ、お嬢ちゃん。」

ワルもんざえモンは鋭い爪を立てながら不気味な笑みを浮かぶ。

～エルドラ塔～

一方、カイ達は…。

エンシェントトロイヤモンの暴走が更に激しくなり、身体に仕組まれた大砲でミラージュガオガモンを撃ち落とす。

ミラージュガオガモン「ぐはっ？」

サクヤモン「ミラージュガオガモン？」

カイ「くっ、状況が更に悪化していってるぞ…。何をやってるんだアイツは？」

サクヤモン「ミソラ…。」

（何か胸騒ぎがする…。ミソラ、無事でいてくれ！）

サクヤモンは心の中でミソラの無事を祈るのであった。

～エンシェントトロイヤモン　体内～

ワルもんざえモン「オラオラオラ？」

ワルもんざえモンは鋭い爪を立てて容赦なくミソラに襲い掛かる。

ワルもんざえモンの斬撃を交わしていくミソラ。しかし、徐々に体力が奪われてしまい、動きが鈍くなっていく。

ミソラ「ハァ…ハァ…」

ワルもんざえモン「その体力、いつまで持つかなぁ～？」

（ニヤリ…）

ミソラ（マズイわ…。このままだと私だけじゃなく、みんなも危ないわ…。こうなったら…）

ミソラはパシンッと両手を合わせて地面に手を着く。

ワルもんざえモン「なにをするつもりだ？」

ミソラ「デジサモン、発動！」

ミソラは叫ぶと、地面からデジ文字が描かれた魔法陣が現れる。

ミソラ「出てきて、レオモン！」

すると、魔法陣からレオモンが実体化される。

レオモン「任せろ！」

ワルもんざえモン「ハッハッハッハ？成熟期ごときがこの俺様に勝てるとでも思ってるのか？」

レオモン「笑っていられるのも今の内だぞ。『獣王拳？』」

レオモンは拳を前に突き出すと、獅子を纏った衝撃波を放つ。

ワルもんざえモン「効かねぇよ？」

ワルもんざえモンは鋭い爪で衝撃波を切り裂いた。

レオモン「まだだ？」

レオモンは腰に掛けてある短刀　獅子王丸を取り出して接近戦に持ち込む。

レオモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ワルもんざえモン「くっ？」

ワルもんざえモンは鋭い爪で短刀を受け止めて鍔競り合う。

ミソラ（やっぱりレオモンじゃ厳しいわ…。早く何とかしないと…）

ミソラはこの状況から一気に逆転するための作戦を考える。

ミソラ（こうなったら一か八かやるしかないわ！）

ワルもんざえモン「調子に乗るなよクソが！」

ワルもんざえモンは声を発すると同時にレオモンを力で押し返した。

レオモン「くっ！」

レオモンはバク転し、素早く受け身をとる。

レオモン「相手は完全体。やはり厳しいな…。」

ミソラ「私に良い手があるわ！」

レオモン「なに、ホントか？」

ミソラはレオモンに耳打ちをして作戦を伝える。

ワルもんざえモン「何をコソコソしてんだよテメェら！」

ワルもんざえモンは鋭い爪を立てて接近する。

ミソラ「……ってこと。いいわね？」

レオモン「それしか手はないな…。分かった！」

レオモンは両方の拳を集中させ、目にも止まらない早さで獅子を纏った衝撃波を無数放つ。

レオモン「『百獣拳？』」

ワルもんざえモン「なに？」

ワルもんざえモンはとっさに両手をクロスさせて身を守る体勢に入る。すると、幾つもの衝撃波がワルもんざえモンの足元に直撃し、砂煙が舞う。

ワルもんざえモン「くっ、前が見えねぇ？」

レオモン「今だミソラ？」

ミソラ「えぇ！」

ミソラはレオモンの腕に乗って低く構える。

レオモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

レオモンはありったけの力で腕に乗るミソラを前方に投げ飛ばした。

ワルもんざえモン「くっ！小賢しい真似しやがって！」

すると、砂煙が段々と薄くなっていく。

ワルもんざえモン「よし、砂煙が消えた瞬間、血祭りにしてやる…。」

ワルもんざえモンは鋭い爪を立てて砂煙が消え去るのを待とうとした次の瞬間、ミソラが砂煙を切り開いて猛スピードでワルもんざえモンに接近する。

ワルもんざえモン「んなッ？」

ミソラ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラはレオモンに投げ飛ばされ勢いを利用してワルもんざえモンの顔面に目掛けて凄まじい飛び蹴りを喰らわした。

ワルもんざえモン「ぬわにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ？」

ワルもんざえモンの顔面はめり込み、勢いよく飛ばされて壁を突き破った。そして果てしなく何処かへと飛んでいった。

ミソラは華麗に地面に着地した。

ミソラ「やったわ！」

レオモン「陽動作戦、見事だったな。」

ミソラ「これもレオモンのお陰よ！ありがと♪」

ミソラはお礼を言うと、レオモンは顔を赤らめる。

レオモン「こ、困った時はお互い様だ…。では、何か合ったらいつでも呼んでくれ。」

デジサモンの効果が切れてしまい、レオモンは静かに消え去った。

ミソラ「さて、早く歯車を直さなきゃね！」

～エルドラ塔～

エンシェントトロイヤモンに大苦戦するカイ達。エンシェントトロイヤモンは前足を上げてサクヤモンを踏み潰そうとしたその時、エンシェントトロイヤモンの動きが止まった。

ミラージュガオガモン「動きが止まった？」

カイ「成功したか…。全く、どんだけ待たせるんだアイツは…。」

カイは深くため息をついた後、小さく笑う。

サクヤモン「ミソラは？」

ミソラ「私はここよ！」

エンシェントトロイヤモンの背中にある入り口からミソラがひょっこりと顔を出す。

サクヤモン「良かった…。」

（ホッ…）

そして…。

エンシェントトロイヤモン「お陰で助かったよ…。礼を言う…。」

正気を取り戻したエンシェントトロイヤモンは礼を言う。

ミソラ「別に御礼させるような事はしてないよ！困った時はお互い様だしね。」

ワニャモン「よく言うよ…。」

カイ「こっちは後もう少しで死にかけたってのによ…。」

ミソラ「ごめんね…？」

ミソラは愛想笑いしながら舌をペロッと出して謝る。

ポコモン「でも、無事でよかったよ！」

ミソラ「よく頑張ったね、ポコモン♪」

エンシェントトロイヤモン「助けてくれた御礼だ…。エンシェントストーンを受けとるがいい。」

すると、小さな光りがミソラの元へと舞い降りてくる。

ミソラは小さな光りを手に取ると、緑色に輝くエンシェントストーンだった。

ミソラ「これで3つ目ね♪」

カイ「エンシェントトロイヤモン、次のエンシェントストーンの居場所を教えてくれないか？」

エンシェントトロイヤモン「ここから北西にあるデバイス島へ向かえ。そこに次のエンシェントデジモンが眠っている…。」

ミソラ「分かったわ。」

～エルドラ島～

エルドラ塔からすこし離れた小さな森。そこに、先程ミソラに殴り飛ばされたワルもんざえモンがうろついていた。

ワルもんざえモン「畜生…。あの女嘗(アマ)めた真似を…。」

？？？「あらあら、随分と痛みつけられたようね？」

その時、ワルもんざえモンの前にダークスの1人、スクロモンが現れる。

ワルもんざえモン「スクロモン様?お願いです!私にもう一度チャンスを与えてください!」

スクロモン「チャンスねぇ…。どうしよっかなぁ～?」

スクロモンは腕を組んで考える。

ワルもんざえモン「そ、そこを何とか?」

考えた結果、スクロモンはニヤリと笑いながらこう答えた。

スクロモン「いらないわ♪」

ワルもんざえモン「んなっ?」

その時、背後から黒い物が現れ、ワルもんざえモンの背中を貫いた。

ワルもんざえモン「そ、そんな…?スクロモン様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ?」

ワルもんざえモンは跡形もなく消滅した。

スクロモン「計画は順調かしら?」

???「順調でございます、スクロモン様。」

スクロモン「それじゃ、引き続き頼むわね?」

???「かしこまりました…。」

正体不明のデジモンはお辞儀した後、何処かへと去っていった。

スクロモン「ヴァヌムスはいま重傷で動けない状態…。あの方の配下になるチャンスよ…。うふふふ…♪」

スクロモンは不気味な笑いをしながら闇の中へと消えていった。

―To Be Continued・・・

EP77　～伝説の木の十闘士　エンシェントトロイヤモンの暴走を食い止めろ～

～エルドラ島～

ミソラ達はエンシェントトロイヤモンの助言を貰い、エルドラ塔を出る。

エルドラディモン「エンシェントトロイヤモンを助けて頂いて感謝する。」

ミソラ「気にしないでよ！」

エルドラディモン「武運を祈るぜ…。」

カイ「あぁ。さて、デバイス島に行くぞ。」

カイはギルガメッシュを取り出して地面に突き刺した。

カイ「デジサモン、発動！」

カイは叫ぶと、地面からデジ文字が描かれた魔法陣が現れる。

カイ「来い、サンダーバーモン？」

すると、魔法陣からサンダーバーモンが実体化される。

カイ「ここから北西にあるデバイス島まで頼む。」

カイはそう言ってサンダーバーモンの背中に乗る。

サンダーバーモン「分かった。」

ミソラ「さ、私達も乗りましょ！」

ミソラ達はサンダーバーモンの背中に乗ろうとすると、何処からか声が聞こえてくる。

？？？「みなさーーーーん？置いて行かないでくださいよ？」

ポコモン「キャンドモン？今まで何処に？」

キャンドモン「物陰に隠れてろって言われて隠れたのは良かったけど、気が付いたら誰もいなかったんですよ？」

ポコモン「あははは…。」

ポコモンは愛想笑いするしかなかった。

キャンドモン「酷いじゃないですか皆さん？またボクチンを置き去りにしようとしたでしょ？」

ミソラ「ここで暮らせば良かったのに。」

（チッ…）

キャンドモン「ちょっとミソラさん？その舌打ちはなんですか？」

カイ「そもそも、何で着いて来るんだ？」

キャンドモン「そ、それは……ミソラさんやポコモンを守るためで

す！そしてミソラさんに『ありがとうキャンドモ～ン？』って言われてあ～んなことしたりこ～んなことした……」

キャンドモンは誇らしげに言うと、ミソラはありったけの力でキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん？」

ミソラ「誇らしげに言うんじゃないわよ、このドスケベロウソク…。」

キャンドモン「すみましぇん…。」

カイ「時間の無駄だ。さっさとデバイス島に行くぞ。」

ミソラ「そうね。あんなドスケベロウソクなんかほっといて行きましょ。」

サンダーバーモンは翼を広げて高く飛び上がろうとする。

キャンドモン「うぇ？ちょっと待ってくださいよ？」

キャンドモンは慌ててサンダーバーモンの尻尾に掴まる。カイ達を乗せたサンダーバーモンは北西にあるデバイス島へと向かうのであった。

次回はリュウギとカズマ？

次のエンシェントデジモンは一体？

次回もお楽しみに？

EP78　～到着、インセク島？伝説の雷の十闘士　エンシェントビートモン～

～ウィネル島　泉の間～

一方、エンシェントイリスモンの試練を乗り越え、戦い（？）で負った傷を癒すため一時休息を取るリュウギ達。

そして夜が明けた…。

リュウギ「色々と世話になったな…。」

戦い（？）で負ったリュウギの右腕の骨は完全に治っていた。

エンシェントイリスモン「気にしないでよ！楽しませてくれたお礼だし♪」

カズマ「けっ！こっちは酷ぇ目に合ったんでぃ！楽しいことなんてあるかってんだぃ！」

カズマはフンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。因みに、カズマも右足のスネの骨は完全に治っていた。

ネレイスモン「まぁまぁ、終わり良ければすべて良しってよく言うじゃん！」

ナルガモン「ところで、次のエンシェントデジモンの居場所を教えてくれないか？」

エンシェントイリスモン「ここからなら、南東にあるインセク島に

行けばいいわ！」

リュウギ「よし、そうと決まれば出発しよう！」

リュウギは先頭に立ち、泉の間から出ようとしたその時だった。

エンシェントイリスモン「待ちなさいよ！」

エンシェントイリスモンがリュウギを呼び止める。

リュウギ「？」

エンシェントイリスモン「このウィネル島からインセク島は近いわ。だから私がアンタ達をインセク島まで送るわ。」

ナルガモン「マジでか？」

ネレイスモン「スッゲェ太っ腹じゃん♪」

リュウギ「悪いなぁ…。」

リュウギは申し訳なさそうな顔をしながら頭をポリポリとかく。

エンシェントイリスモン「いいの×2♪ちょっと待っててね！」

エンシェントイリスモンは黄金の翼で広大な空を神速で駈け巡り、インセク島までの虹の橋を掛ける。

一同「おぉ？」

エンシェントイリスモン「お待たせ！この橋を渡ればインセク島に着くわ！」

リュウギ「ありがとな、エンシェントイリスモン。」

エンシェントイリスモン「デジタルワールドはアンタ達に任せたわよ！さ、行った×2！」

リュウギ達は虹の橋を渡って南東にあるインセク島へと向かうのであった。

果たして、インセク島とはどんな島なのか？

Ｅｐ７８スタート？

EP78　～到着、インセク島？伝説の雷の十闘士　エンシェントビートモン～

～インセク島～

ここは、ウィネル島とは異なり、森ではなく何か潜んでそうな広大なジャングルだった。

リュウギ達は虹の橋から降りると、虹の橋は静かに消え去った。

リュウギ「ここがインセク島か…。」

ナルガモン「うっひゃ～、何か出てきそうでワクワクするぜ♪」

ナルガモンはやる気満々だった。すると、カズマが口を開く。

カズマ「なぁリュウ兄。」

リュウギ「なんだよカズ……うっ。」

リュウギは振り向くと、カズマの顔がいつもの余裕ヅラではなく険しい顔をしていた。

リュウギ「ど、どうしたんだよ怖い顔して…？」

カズマ「今度エンシェントデジモンが現れたら、オレ達がやりやすからリュウ兄とジャックモンは引っ込んでくだせぇ。」

ナルガモン「はぁ？何でだよ？つうかジャックモンじゃねぇって何度も言わせるなっつうの…。」

カズマ「だってオレ、エンシェントイリスモンの時にリュウ兄に肩車して貰ったときに、何であんな苦痛を味わなきゃならないんでさぁ？そんな事されたら、オレ完全なるお笑い担当じゃないですかぃ？」

リュウギ「俺に言われても知らねぇよ…。つうか何だよお笑い担当って…。」

ナルガモン「ま、お前は無難なことばっかり考えてるからな。たまには苦労を知れって読者から苦情が来てたぞ。」

カズマ「マジですかぃ？」

リュウギ「おい、本編と全く関係ない会話をするなよ…。」

カズマ「そこは流しといてくだせぇ。何せリュウ兄の親父さんもこんな風に本編と全く関係のない会話をして読者を盛り上げてたって親父
シロウ
が言ってやしたぜ。」

ネレイスモン「そうなんだ。なら仕方ないな。」

リュウギ「全然仕方なくねぇよ？」

リュウギはありったけの声でツッコンだ。これ以上言うと読者から苦情殺到になり兼ねないので無理矢理話しを戻した。

リュウギ「前回の戦いでカズマは余り活躍できなかったから、今回

は俺とナルガモン抜きで次のエンシェントデジモンと戦って活躍させてくれ。そう言いたいんだろ？」

カズマ「そうそう♪」

リュウギ「う～ん…。」

（まぁ振り返ってみれば、あの時カズマがアルカナムを持っていなかったらエンシェントイリスモンに負けていたし…。それ以前にあの出来事は爆笑シーンだし…。ここで却下したらうるさいしなぁ…。）

カズマが少し可哀想に思うリュウギ。そして考えた結果、リュウギは口を開く。

リュウギ「今回だけだからな？」

ナルガモン「んなっ？」

カズマ「マジですかぃリュウ兄？よっしゃ！」

カズマは嬉しさの余りにガッツポーズをする。

ナルガモン「正気かよリュウギ？」

リュウギ「ただし、条件がある。」

カズマ「条件？」

リュウギ「何が合っても、ヴォルク島みたいに人任せはナシだからな？」

カズマ「そんな事ですかぃ？しない×２したこともないでさぁ♪」

ナルガモン「よく言うぜ…。」

ナルガモンは小さくツッコム。

ネレイスモン「やったなカズマ♪」

カズマ「おうよ♪これで名誉挽回しやすぜ♪」

リュウギ「よし、そうと決まれば奥へ進もう！」

一同「おう？」

リュウギは先頭に立ってインセク島の深いジャングルへと入る。

～ビートジャングル～

ジャングルに入ると、まるでアマゾンのようなジャングルだった。

リュウギ「油断するなよ。何が潜んでいるか分からないからな。」

ナルガモン「おう！」

カズマ「フンフンフ～ン…♪」

警戒して歩くリュウギ達。にも関わらず後ろで鼻歌交じりに歩くカズマ。

ナルガモン「カズマのヤツ、緊張感全くゼロだな…。」

ネレイスモン「昔っからマイペースですからねぇウチのカズマは…。ホント困ってんのよぉ～。」

ナルガモン「何処のおかんだよ…。」

ナルガモンは小さくツッコム。

リュウギ「お前ら真面目にやれ…。」

リュウギは眉をピクピクと動かしながらツッコム。するとその時、リュウギとカズマのＤ－アクセルが反応する。

リュウギ・カズマ「？」

リュウギとカズマはすぐにＤ－アクセルを見ると、矢印が島の中心に差していた。

カズマ「リュウ兄、ひょっとしてコレ…。」

リュウギ「間違いない。この矢印の先に行けば、エンシェントデジモンに会える。」

カズマ「だったらここでボヤボヤしてる場合じゃないんでさぁ！早く行きやしょうぜ？」

カズマは矢印を辿って島の中心に行こうとしたその時、ジャングルがざわめき始める。

一同「？」

リュウギとカズマは背中合わせになり、戦う体勢に入る。

リュウギ「カズマ、ネレイスモン。お前らは先に行け。」

カズマ「んな？」

ネレイスモン「リュウギとナルガモンは？」

ナルガモン「そう慌てんなよ！片付けたらすぐに追いかけるからよ！」

リュウギ「それに、今回はお前らに任せたからな。」

ネレイスモン「リュウギ、ナルガモン…。」

カズマはフッと小さく笑った後、目をキリッとさせる。

カズマ「分かりやしたリュウ兄、ジャックモン…。」

ナルガモン「おい、シリアスな顔しながらジャックモンって言ってんじゃねぇよ。」

カズマ「そいじゃ、あとは頼んますぜ！」

リュウギ達に託し、カズマとネレイスモンは矢印を辿ってジャングルの奥へと進んだ。

リュウギ「任せろ！」

ナルガモン「さぁて、ＣＯＯＬに暴れようぜ？掛かって来やがれ！」

その時、黒い影の大群が姿を現す。

ナルガモン「団体さんのお出ましかよ。」

リュウギ「あれは…？」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ブレイドクワガーモン、成熟期、マシーン型、ウィルス種、必殺技はスパークブレイド。」

ブレイドクワガーモン達「ギギギギ…。」

ブレイドクワガーモンの大群は威嚇しながら鋭い刃をリュウギ達に向ける。

ナルガモン「リュウギ、コイツらイビルスに支配されてるかもしれねぇぞ…。」

リュウギ「かもしれないな…。それとも人の縄張りを勝手に入り込んで怒ってるかもしれない…。」

（くそっ、こんな時にミソラがいれば…。）

ナルガモン「どっちにしろ、力でねじ伏せるまでだ？行くぞリュウギ？」

リュウギ「あぁ？」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。すると、ナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、超進化？」

『ドラグナモン？』

リュウギ「来い、アルカナム？」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード　アルカナムが現れる。

ブレイドクワガーモン達「ギギギギ！」

リュウギとドラグナモンは戦う体勢に入ると、ブレイドクワガーモンの大群は一斉に襲いかかってくる。

リュウギ・ドラグナモン「はぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギとドラグナモンは唸り声を上げながら、襲いかかってくブレイドクワガーモンの持つ刃を弾き返していく。

ブレイドクワガーモン達「『エアーナイフ？』」

ブレイドクワガーモンの大群は鋭い刃から真空波を放つ。

リュウギ「ドラグナモン？」

ドラグナモン「おう？『デッドリーアートルム？』

ドラグナモンは背中に装備してるロケットエンジンから大量の小型ミサイルを発射させる。

大量の小型ミサイルは襲いかかって来る真空波に直撃にして無力化となる。

ドラグナモン「へっ！ざまぁみやがれ！」

しかし、ブレイドクワガーモン達は怯むことなく鋭い刃をリュウギ達に向けて襲いかかって来る。

リュウギ「早い？」

リュウギは素早く交わしながらアルカナムのトリガーを引いて銃撃し、襲いかかって来るブレイドクワガーモンを次々と弾き返す。

ドラグナモン「『ヒドゥンセイバー？』」

続いてドラグナモンは両肘にある刃、ヒドゥンアサルトでブレイドクワガーモンを次々と弾き返す。

弾き返されたブレイドクワガーモンはすぐに復帰して容赦なく襲いかかる。

ドラグナモン「くっ！これじゃ霧がねぇぞリュウギ？」

リュウギ「ブレイドクワガーモンはきっと、俺達に当たるまで狙うつもりだ！」

（このままじゃ体力を失う一方だ…。一体どうすれば…？）

リュウギは交わしながら作戦を考える。その時、自分の口にした言葉にハッとする。

リュウギ（当たるまで狙う…？これだ？）

「ドラグナモン、ブレイドクワガーモン達をおびき寄せといてくれ！」

ドラグナモン「んな？マジかよ？」

リュウギ「この現状を打開する作戦を考えた！俺に任せろ！」

ドラグナモンはリュウギのキリッとした目を見て、ゆっくりと頷く。

ドラグナモン「分かったぜ！なるべく早めに合図を送ってくれよ？」

ドラグナモンはそう言ってロケットエンジンをフルパワーにして上空へと高く飛び上がる。

ドラグナモン「テメェらの相手はオレだ？掛かって来やがれ？」

ドラグナモンは挑発すると、ブレイドクワガーモン達の矛先はドラグナモンに向けて一斉にドラグナモンを狙う。

ドラグナモン「来やがったか！」

（頼むぜリュウギ！）

ドラグナモンは敵をおびき寄せながらひたすら逃げる。

一方、リュウギはアルカナムを地面に突き刺して叫ぶ。

リュウギ「デジサモン、発動？」

すると、地面からデジ文字が描かれた魔法陣が現れる。

リュウギ（ホントは呼びたくないけど、背に腹は変えられねぇ！）

「頼む、ライラモン！」

魔法陣からライラモンが実体化される。

ライラモン「お久しぶりですねリュウギ様～？」

リュウギ「あ、あぁ…。」

ライラモン「早速ですが久しぶりの再会の記念にＫｉｓｓを！ん～～？」

ライラモンはそう言って唇を突き出してＫｉｓｓをしようとする。

リュウギ「やめんかい？今はそれどころじゃねぇっつうの？」

ライラモン「またまた～、リュウギ様は照れ屋なんですから～？きゃゃゃゃ？ごめんなさい、私ったらつい～？」

ライラモンは顔を赤らめながらモジモジする。

リュウギ（予想はしていたが、やっぱり呼ばなきゃよかった…。）

リュウギは眉をピクピクと動かしながらイライラを堪える。リュウギは一度咳払いをして本題に入ろうとする。

リュウギ「そ、それよりライラモン。俺に力を貸して欲しいんだ。」

リュウギの言葉に、ライラモンはハイテンションになる。

ライラモン「とうとう私がリュウギ様の力になれるのですね？きゃやゃゃゃ最高ですわ？いいわよ！リュウギ様が気が済むまでとことん私を痛みつけて頂戴！リュウギ様にやられるなら、私はなんだってするわ！」

リュウギ「チゲェよバカッ？なにドM発言してんだよ？つうかなんで勝手に俺をドS扱いしてんだよ？お前を痛みつけた所で何も解決しねぇんだよ？」

リュウギはありったけの声でツッコンだ。これ以上言うと霧が無いので、話しを無理矢理戻して訳を話す。

リュウギ「ーーというわけでこの現状を打開するにはお前の力を貸して欲しいんだ。」

ライラモン「リュウギ様のためよ！任せて！」

リュウギ「よし、行くぞ！」

リュウギはアルカナムを構えて、心を集中する。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギはもうスピードでジャングルにある木を次々と切っていく。

リュウギ「ライラモン！ツタで木をイカダ状にして壁を作るんだ！」

ライラモン「分かりましたわ！」

ライラモンは両手からツタを出して、切った木をイカダ状にして縛りつけて木の壁を作る

リュウギ「よし！ドラグナモン、こっちだ？」

リュウギは呼ぶと、ドラグナモンは猛スピードでリュウギの元へと飛んでくる。

リュウギ「今度は俺が行く！その間にドラグナモンは木の壁を立てて合図を送ってくれ！これはお前しか持ち上がらないからな！」

ドラグナモンはリュウギの考えてる事が分かり、すぐに木の壁の方へと向かう。

ドラグナモン「任せろ！」

（お前の作戦が読めたぜリュウギ！）

リュウギはそう言ってアルカナムのトリガーを引いて銃撃し、ブレイドクワガーモンを挑発する。

リュウギ「こっちだ、ブレイドクワガーモン！」

リュウギは逃げると、ブレイドクワガーモン達はドラグナモンからリュウギに矛先を向けて一斉に襲いかかる。

一方、ドラグナモンは完成した木の壁を持ち上げて、盾のように立てる。

ライラモン「ちょっと、リュウギ様は身体を張って囮になっているだからもっと急ぎなさいよね！」

ドラグナモン「うるせぇ！それぐらい分かってるっつうの？」

ドラグナモンは怒鳴りなったあと、リュウギに合図を送る。

ドラグナモン「ＯＫだリュウギ？」

リュウギ「よし！そのまま支えてくれ？」

リュウギはＵターンして、イカダに向かって走り出す。ブレイドクワガーモン達は何も考えずただリュウギを追い掛ける。

ライラモン「急いでくださいリュウギ様？」

リュウギは木の壁の手前まで来ると、ドラグナモンに合図を送る。

リュウギ「ドラグナモン、壁を立てた状態で少し浮かすんだ？」

ドラグナモン「おう？」

ドラグナモンは踏ん張って木の壁を立てた状態で１ｍ浮かした。

リュウギ（今だ？）

リュウギは勢いを付けてスライディングして木の壁の下へと滑り抜けた。

リュウギ「今だドラグナモン、木の壁を下ろせ？」

ドラグナモン「よっしゃ！」

ドラグナモンは浮かした木の壁を地面に付けた途端、標的を見失ったブレイドクワガーモン達は勢いよくイカダに突き刺さった。

リュウギ「よし！」

戦闘を終えたドラグナモンはナルガモンへと退化した。

ライラモン「やりましたわリュウギ様～？」

ライラモンは嬉しさの余りにリュウギを思い切り抱き締めた。

リュウギ「んな？バカッ？くっつくなって？」

ナルガモン「ミソラがいたら今頃殺されてたな…。」

ライラモン「リュウギ様～？」

リュウギ「だぁぁぁぁもう、リターン？」

リュウギは叫ぶと、ライラモンは強制的に消え去った。

ライラモン「あ？待ってくださいリュウギさ……」

リュウギ「あ～疲れた…。」

（ゼェ…ゼェ…）

ナルガモン「ま、お疲れさん。」

それから、ブレイドクワガーモン達はこれ以上暴れないように縄で縛り上げる。

ナルガモン「これでよしっと！」

リュウギ「どうやらコイツらは、イビルスに操られてなかったようだな…。」

ナルガモン「しっかし、なんで急に襲いかかってきたんだ？」

？？？「ブレイドクワガーモン達はこのインセク島の守り神を守るため。所謂ボディーガードみたいなものだよ。」

その時、森の奥からてんとう虫のような姿をしたデジモンが現れる。

リュウギ「お前は…？」

？？？「ボクはテントモン！このビートジャングルの住人さ！それより君達、エクセリオンでしょ？」

リュウギとナルガモンはビックリしてお互いに顔を見合わせる。

リュウギ「なぜ俺達がエクセリオンだって分かるんだ？」

テントモン「そのＤ－アクセルはデジタルワールドの救世主の証。守り神がそう言っていたんだ！」

ナルガモン「ん？ってことはオレ達ってそんなに有名になったって

こと？」

リュウギ「いや、違うだろ。」

リュウギはすかさずツッコム。

リュウギ「ところでテントモン、守り神って一体？」

テントモン「ボクらの守り神は、ボクら昆虫型デジモンの神、エンシェントビートモン様だよ！」

ナルガモン「おぉ？なんか強そう？」

ナルガモンは目をキラキラと輝かせながら興味津々になる。

テントモン「エンシェントビートモン様はあなた達エクセリオンの挑戦を待っています！良かったら大昆虫の祠
ほこら
まで案内しますよ！」

ナルガモン「え？でも今はカズマとネレイスモンが行ってるんじゃ…？なぁリュウギ？」

ナルガモンはリュウギに聞くと、リュウギは唇を震わせながら小さく呟く。

リュウギ「……マズいぞ。」

ナルガモン「はぁ？どうしたんだよリュウギ？腹でも壊したのか？」

リュウギ「テントモン、その大昆虫の祠まで案内してくれ？」

テントモン「わ、分かりました！こちらです！」

テントモンは羽根を広げて大昆虫の祠へと案内する。リュウギは慌ててテントモンの後を追い掛ける。

ナルガモン「お、おいリュウギ？どうしたんだよ一体？なにがマズいんだよ？」

ナルガモンは何がなんだかさっぱりだった。

リュウギ「とにかくカズマを止めるんだ！カズマは……」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

数時間前、ブレイドクワガーモンをリュウギ達に任せてエンシェントデジモンを探すカズマとネレイスモン。

ネレイスモン「なぁカズマ、まだ？」

カズマはＤ－アクセルで確認すると、反応が強くなっていた。

カズマ「あともう少しでさぁ…。ん？」

カズマはある物を見て思わず足を止めた。それは、大きな祠だった。

ネレイスモン「祠？なんでこんな所に？」

カズマ「どうやら、Ｄ－アクセルはこの祠に指してやすぜ…。」

ネレイスモン「つまり、この奥にエンシェントデジモンがいるってこと？」

カズマ「そーいうこと。行きやすぜ！」

カズマはニヤッと笑い、祠の中へと入っていった。

～大昆虫の祠～

祠の中へ入ると、真っ暗で何も見えなかった。

ネレイスモン「すごい暗いなぁ…。」

カズマ「……。」

カズマは黙々と奥へ進むと、謎の声が聞こえてくる。

？？？「待っていたぞ、救世主よ…。」

カズマ「ようゆくエンシェントデジモンのお出ましですかぃ…？」

カズマは刀袋から双龍牙を取り出して戦う体勢に入る。

？？？「ほぅ、我が誰なのかも知らずに戦う気満々だな…？我の身体はクロンデジゾイドに匹敵する硬度な外殻をもち、鎌状の両腕はあらゆる物を切断する。そしてあらゆる物を軽々と持ち上げるパワーを持つのだぞ？それでも我に挑むのか？」

カズマ「自慢大会なら他所でやってくだせぇ…。ゴチャゴチャ抜か

してねぇで、全部オレ達がねじ伏せてやるよ！」

？？？「いい度胸してるな小僧…。我の試練は本気と本気のぶつかり合い…。他の仲間からの参戦は禁ずる。」

ネレイスモン「オレ達だけでも倒してやるよ！だからさっさと試練を始めやがれ！」

？？？「よかろう……」

その時、辺りに火が灯されて急に明るくなる。

カズマ・ネレイスモン「？」

？？？「伝説の雷の十闘士　このエンシェントビートモンの力、ねじ伏せられるものならねじ伏せてみるがいいッ？」

エンシェントビートモンと名乗るエンシェントデジモンは５ｍをも超える巨大なデジモンだった。

カズマはＤ－アクセルでエンシェントビートモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「エンシェントビートモン、究極体、古代昆虫型、ワクチン種、必殺技はテラブラスター。」

ネレイスモン「相手にとって不足なしだぜ！行くぜカズ……」

カズマ「……りだ…。」

ネレイスモン「……へ？」

その時、カズマは双龍牙を手放し、突然バタリとうつ伏せに倒れた。

ネレイスモン「どわぁぁぁぁぁ？」

カズマの腕に巻きつくネレイスモンも一緒に倒れる。ネレイスモンは何がなんだかさっぱりだった。

エンシェントビートモン「？」

ネレイスモン「急にどうしたんだよカズマ？まさか腹壊したのか？」

カズマはうつ伏せのまま途切れ途切れに話す。

カズマ「ネレイスモン…。前からずっと…黙っていたんでぃ…この際、正直に言いやすぜぇ…。」

ネレイスモン「なんだよ？」

カズマ「オレ…虫は大の苦手なんでぃ…。」

カズマの意外な言葉に、ネレイスモンはありったけの声で叫ぶ。

ネレイスモン「えぇぇぇ

EP78　～到着、インセク島？伝説の雷の十闘士　エンシェントビートモン

なんとカズマの弱点は虫？

どうなるのかネレイスモン？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ７９　～大昆虫の脅威？灼熱の連携　蛇炎双波？～（前書き）

～ビートジャングル～

ナルガモン「虫が大の苦手だと？」

ナルガモンの声はジャングル中に響き渡る。

リュウギ「まさか、こんな展開になるとはなぁ…。」

テントモン「大丈夫ですよ！エンシェントビートモン様は、かなりのナルシストな方なんです！怒らせない限り安全です！」

リュウギ「怒らせない…」

ナルガモン「限り…」

リュウギとナルガモンはお互いに顔を見合わせる。カズマの事だ。きっと挑発して怒らせてるに違いない、と…。

ナルガモン「怒らせてるな…。１００％いや、２００％確実に…。」

リュウギ「ますますマズい事になったぞ…。」

テントモン「それは大変だよ？急がないと…」

その時、眼光を鋭く光らせた黒い影がリュウギ達を囲む。

ナルガモン「なんだ？」

黒い影の正体はカブトムシのような姿をしたデジモンと、クワガタムシのような姿をしたデジモンだった。

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「カブテリモン、成熟期、昆虫型、ワクチン種、必殺技はメガブラスター。

クワガーモン、成熟期、昆虫型、ウィルス種、必殺技はシザーアームズ。」

カブテリモン達は鋭く威嚇をする。

テントモン「なぜ防衛軍のカブテリモンとクワガーモンがここに？」

ナルガモン「どうやらコイツらは、イビルスに支配されているにチゲェねぇな。」

リュウギ「くっ、今はそれどころじゃないんだ！邪魔するな！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード　アルカナムを取り出して戦う体勢に入る。

ナルガモン「リュウギ、さっさと片付けようぜ！」

リュウギ「あぁ！」

（カズマ、無事でいてくれ！）

カズマ&ネレイスモンｖｓエンシェントビートモン？

いきなり大ピンチになるが、果たして勝ち目はあるのか？

Ｅｐ７９スタート？

EP79　～大昆虫の脅威？灼熱の連携　蛇炎双波？～

～大昆虫の祠～

一方、カズマ達は…。

ネレイスモン「なんだよそれ？聞いてねぇし？つうかなんで今まで黙ってたの？」

カズマ「うるへぇ？誰だって知られたくねぇ過去があるんでさぁ？あんなドデカイ虫、どうやって倒せばいいんでさぁ？」

ネレイスモン「知るかよ？つうかお前が言い出したんだろうがぁぁぁぁ？」

カズマ「とにかくオレは無理。ネレイスモン、後は任せた。」

ネレイスモン「またそうやって人任せモードかお前は？弱点を克服するいい機会じゃねぇかよ？ナポ○オン如く、『我輩の辞書に不可能はない！』みたいにカッコよくいけよ！」

カズマ「あんなドデカイのどうやって克服すりゃいいんでさぁ？ナポ○オンでも文句言うわ？きっと陰で『絶対無理だわあんなの…。我輩の辞書どころじゃねぇよ…。』って、言ってるよ絶対？」

ネレイスモン「やかましわこの無難男のロクでなし？」

ネレイスモンはそう言って尻尾でカズマをビンタする。

カズマ「ぐはっ？なにしやがんでぃこの海蛇野郎？」

カズマは御返しに片手でネレイスモンの口をつねる。

ネレイスモン「いだだだだ？やりやがったなコノヤロ？」

カズマとネレイスモンはとうとう仲間割れをする。その時、前方から殺気を感じる。

エンシェントビートモン「お前ら、嘗めとるのか？」

カズマ・ネレイスモン（ビクッ？）

エンシェントビートモン「やる気ないなら真っ二つにしてくれる？」

エンシェントビートモンは鋭い鎌で横一閃にしてカズマ達に切りにかかる。

カズマ・ネレイスモン「どわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

カズマはギリギリ交わすと、ペタンと尻餅つく。

カズマ「なんでぃありゃ？カブトムシじゃないの？なんで鎌あるの？あれじゃカマキリじゃないですかぃ？」

カズマはかなりテンパって頭の中が暴走する。

ネレイスモン「カズマ！喧嘩してる場合じゃないよコレ！協力してエンシェントビートモンを倒そう！」

カズマ「無理だ…。絶対無理だ…。」

ネレイスモン「なんでそんなに虫が嫌いなの？」

カズマ「想像してくだせぇ…。道路歩いてる時に踏むつもりもないのにバッタを踏んだ瞬間の音を……あ、ヤベッ、急に寒気が…。」

ネレイスモン「ねぇよそんなバカな想像？つうかどんだけドジなんだよそのバッタ？反射的に逃げるのにどんだけボーッとしてんだよそのバッタ？」

ネレイスモンはありったけの声でツッコム。

カズマ「漫画みたいにプチッ？じゃないんでさぁ。リアルにグジョッ（血）なんでさぁ…。」

ネレイスモン「そういう問題じゃねぇよ？つうかなんだよその（血）って？そこだけ敏感にならなくていいんだよ？」

カズマ「無理でさぁ…。それがオレのＳＴＹＬＥなんでさぁ…☆」

カズマはドヤ顔してるつもりだが、ネレイスモンは涙目になりながら顔引きつってるようにしか見えなかった。

ネレイスモン「おい、涙目になってるぞ…。」

（今までで１番カッコ悪い…。）

ネレイスモンは深くため息をつくと、カズマの腕から離れる。

ネレイスモン「しょうがねぇなぁ。カズマ、オレがなんとかするか

ら究極体に進化させてくれ。」

カズマ「わ、分かりやした…。」

カズマはＤ－アクセルをネレイスモンに翳した。すると、ネレイスモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ネレイスモン「ネレイスモン、ワープ進化？」

『プレシオモン？』

プレシオモン「オレが相手だ？来い、エンシェントビートモン！」

エンシェントビートモン「待ちくたびれたぞ。来い！」

プレシオモン「『シェイキングパルス？』」

プレシオモンは口から強力な超音波を放つ。

エンシェントビートモン「そんなもの、我には通用せん？」

エンシェントビートモンは両腕の鎌を薙ぎ払うように振ると、シェイキングパルスは弾き返されてしまった。

プレシオモン「シェイキングパルスが効いていない？」

カズマ「頑張れよプレシオモン！お前がやらなきゃ誰がやるんでさぁ？」

カズマはエンシェントビートモンと目を合わさないように両手で顔

を隠しながら叫ぶ。

プレシオモン「テメェは黙ってろッ？」

エンシェントビートモン「これでも喰らえ？『カラミティサンダー？』」

エンシェントビートモンは超災害をもたらす災厄の雷を放つ。

プレシオモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

プレシオモンは交わす事が出来ず、モロに直撃した。

カズマ「プレシオモン？」

プレシオモン「ハァ…ハァ…。」

（このままじゃやられる…。どうすりゃいいんだ…？）

エンシェントビートモン「どうした？お前らの力はその程度なのか？」

カズマ「そうだぞ！お前の限界はそこまでじゃないハズでぃ！」

カズマは視界に入らないように片手で目を隠しながら叫ぶ。

プレシオモン「アンテナ食い千切るぞッ？」

その時、プレシオモンはカズマの素振りを見てハッとする。

プレシオモン（これだ！）

「カズマ！目隠しをしながら戦うぞ！そうすればヤツの姿が見えないハズだ！」

カズマ「あ、にゃーるほど♪」

カズマは右手に巻いている包帯をほどき、両目を覆うようにして目隠しをする。

カズマ「よし！これで大丈……って見えねぇぇぇぇ？」

プレシオモン「当たり前だっつうのッ？オレの頭に乗れ！」

プレシオモンはカズマの襟をくわえて自分の頭に乗っける。

プレシオモン「オレが指示するから、サポート頼むぜ！」

カズマ「了解！」

エンシェントビートモン「嘗めた真似を…。この切れ味抜群の鎌を受けてみるがいい？」

エンシェントビートモンは両腕の鎌を横一閃に振ると、鎌風によって生み出された衝撃波を放つ。

プレシオモン「カズマ、前から衝撃波が来たぞ！」

カズマ「任せてくだせぇ？」

カズマは双龍牙を鞘から抜き出して横一閃に振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放った。

するとお互いの衝撃波がぶつかり合い、やがて消滅した。

エンシェントビートモン「なに？」

カズマ「どうなった？」

状況が見えないカズマはプレシオモンに問う。

プレシオモン「相打ちさ。でもカズマ、これなら勝てるかもしれないぞ！」

カズマ「フッ、こうなる事は分かってたんでさぁ…。名付けて、『虫嫌いなオレでも不可能はない大作戦！』だ！そう、あのナポ○オンのように？」

プレシオモン「ウソつけ…。明らかにこうなる事を予想してなかっただろ？」

プレシオモンは呆れた目をしながらツッコム。全くその通りだ。

エンシェントビートモン「なるほど…。少しは楽しませてくれそうだな…。だが我の身体に傷一つ付く事すらできないのだ？」

カズマ「んなもん、やって見なくちゃわかんねぇだろ！よし、いつものアレやりやすぜプレシオモン！」

プレシオモン「おう！」

プレシオモンは口から強力な水を発射させる。

カズマ「秘技……」

カズマは双龍牙を横一閃に振ると、二つの刃先から剣風によって生み出された衝撃波を放った。すると二つの技が一つとなり、水を纏った強力な衝撃波となった。

カズマ・プレシオモン「『水散波斬(すいさんはざん)？』」

水散波斬は途中で破裂し、無数の水滴はカッターの如くエンシェントビートモンを切り裂いた。

プレシオモン「やったか？」

エンシェントビートモン「フン、そんなもの痛くも痒くもないわ…。」

プレシオモン「くっ、やはりダメか…。」

プレシオモンは歯をギリッとさせながら舌打ちする。

カズマ「やはり効いてやせんでしたか…？」

プレシオモン「あぁ…。どうするカズマ？」

カズマ「ここまでくるとヤバいな…。しょうがねぇ、アイツを呼び出すしか手はないんでさぁ…。」

カズマの言葉にプレシオモンは驚く。

プレシオモン「え、正気かよカズマ？」

カズマ「本気と書いてマジでさぁ…。」

プレシオモン「でもさぁ、アレ持ってないとアイツ怒るぞ…？」

カズマ「大丈夫？」

プレシオモン「大丈夫…？」

カズマ「……たぶん。」

プレシオモン「たぶんかよッ？」

自信なさ気に言うカズマに対してプレシオモンはありったけの声でツッコム。

エンシェントビートモン「コソコソしおって、何の相談をしとるのだお前ら？」

カズマ「そうやって余裕ぶっているのも今のうちだぜ！行きやすぜプレシオモン！」

プレシオモン（オレ、し～らね…。）

カズマは双龍牙を振り回して地面に差し込もうとしたその時、不吉な音が聞こえてくる。

ブスリ！

プレシオモン「イッデェェェ

すると、地面からデジ文字の描かれた魔法陣が現れる。

カズマ「頼んますぜ、オロチモン？」

すると、魔法陣からオロチモンが実体化される。」

オロチモン「よぅ、しばらくだな坊主？」

カズマ「チィーッス、飲兵衛の旦那！」

カズマはニカッと笑いながらピースサインをする。

オロチモンはカズマの目隠しを見ると、頭の上から「？」が浮かび上がる。

オロチモン「ところで坊主、なんで目隠ししてんだよ？」

カズマ「ま、色々と訳ありでさぁ…。気にしないでくだせぇ。」

オロチモン「まぁいい、ワシを呼び出した以上、アレを持っちょるだろうな？」

オロチモンは問うと、カズマはビクッとする。

カズマ「も、勿論でさぁ！あるから呼び出したんでぃ！だから協力してもらいやすぜ飲兵衛の旦那。」

オロチモン「よかろう、ワシに任せときな！」

エンシェントビートモン（アレってなんだ…？）

カズマ「行きやすぜプレシオモン、飲兵衛の旦那！」

プレシオモン・オロチモン「おう？」

エンシェントビートモン「雑魚を増やした所で何なるというのだ？」

カズマ「飲兵衛の旦那を嘗めてたら、エラい事になりやすぜ？」

オロチモン「その通りじゃ！『酒ブレス？』」

オロチモンは口からアルコールを含んだ息を吹きかける。

エンシェントビートモン「なんだこの臭いは？」

酒の霧は祠内に充満する。

プレシオモン「うっ？」

プレシオモンは酒が苦手なため、両手で鼻を塞ぐ。

プレシオモン「臭ぇ～、こんな臭いのよく平気でいられるなぁカズマ？」

カズマ「こっそり飲んでるから平気なんでさぁ♪」

プレシオモン「お前まだ未成年（１５歳）だろうが…。」

カズマ「硬い事言うなって、チョコっとだけなんだからさぁ？たかがチューハイ1杯ぐらいでギャーギャー、ギャーギャーと……」

プレシオモン「思いっきり飲んでんじゃねぇかぁッ？」

プレシオモンはありったけの声でツッコム。

※お酒は二十歳になってから飲みましょう☆

エンシェントビートモン「くっ…。」

（臭くて身体が思い通りに…。）

すると、エンシェントビートモンの動きが鈍くなった事に気付くプレシオモン。

プレシオモン「エンシェントビートモンの動きが鈍くなったぞ！チャンス到来だカズマ！」

カズマ「んなこと分かってまさぁ？」

プレシオモン「カズマ、前だ？」

カズマ「了解？」

カズマは双龍牙を横一閃に振り、剣風によって生み出された衝撃波を放つ。

プレシオモン「『シェイキングパルス？』」

オロチモン「『アメノムラクモ？』」

プレシオモンは口から強力な超音波を放ち、続いてオロチモンも尻

尾の先が切れ味の鋭い刃から衝撃波を放ち、全ての技がエンシェントビートモンに直撃し、大爆発を巻き起こす。

エンシェントビートモン「ぐはっ？」

プレシオモン「よし、効いてるぞ？」

カズマ「これなら勝てやすぜ？」

エンシェントビートモン「面白い…。実に面白い！我の強靭な身体に傷をつけるとはなぁ！」

爆煙が去ると、エンシェントビートモンはまだ倒れていなかった。

オロチモン「やっぱり、そう簡単にいくわけなかろう…。」

カズマ「まだ倒れてないんですかぃ？」

プレシオモン「あぁ。さすがはエンシェントデジモンだな…。」

エンシェントビートモン「お前達の体力もほぼ限界に近い…。そこでだ。我とお前達の本気をぶつけてみないか？」

カズマ「なるほどね…。本気と本気をぶつかり合い、最後に立った者が勝者ってなわけですかぃ？」

エンシェントビートモン「お前達が勝てば、エンシェントストーンはお前達に託そう。ただし負ければ…」

プレシオモン「そんな必要ないぜ！オレ達は必ず勝つ！」

カズマ「そーいうこと♪さ、さっさと始めやしょうや…。」

カズマ達はそれぞれ必殺技を繰り出そうと低い体勢に入る。

エンシェントビートモン「我の技、受けてみよ！はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

エンシェントビートモンは唸り声を上げながらパワーを溜めると、地面が怯えるように揺れ始める。

プレシオモン（なんて威圧だ…？）

カズマ（けど、関係ねぇ？）

「プレシオモン、シェイキングパルスだ？」

プレシオモン「おう？『シェイキングパルス？』」

プレシオモンは口から強力な超音波を放つと、エンシェントビートモンはギガブラスターの千倍の超放電を放つ。

エンシェントビートモン「『テラブラスター？』」

お互いの技がぶつかり合うと、テラブラスターの威力が強力の余りにシェイキングパルスは段々と押されていく。

プレシオモン「くっ？」

カズマ「飲兵衛の旦那！」

カズマは合図を送ると、オロチモンは口からアルコールを含んだ息を吐く。

オロチモン「『酒ブレス？』」

酒ブレスが加わると、シェイキングパルスの技の威力が上がる。しかし押されていく一方だ。

エンシェントビートモン「無駄だ？いくら技を組み合わせたところで、我のテラブラスターをやぶる事はできん？」

カズマ「誰がこれで終わりって言いやしたかぃ？」

エンシェントビートモン「なに？」

カズマは双龍牙を鞘から抜き出して低く構える。

カズマ「オレ達の絆を嘗めてたらいきやせんぜ…。」

（ニヤッ…）

エンシェントビートモン（アイツ、何を？）

プレシオモン「前だカズマ？」

カズマ「了解！秘技……」

カズマは双龍牙の刃を地面に掠らせて火花を散らし、剣風によって生み出された2つの衝撃波を放つ。すると、火花はアルコールに含まれる酒ブレスに降りかかり、激しい炎へと変わった。

カズマ・オロチモン「『蛇炎双波(じゃえんそうは)？』」

威力が強大にパワーアップし、テラブラスターと対抗する。

カズマ・プレシオモン「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？」

その時、お互いの技がついに限界を超えてしまい、凄まじい大爆発を巻き起こした。

一同「うわっ？」

一方、リュウギ達は…。

リュウギ「何とかイビルス達を撃破したな…。」

イビルス達に支配されたインセク島の住人達を開放させ、急いで大昆虫の祠へと向かうのであった。

ナルガモン「ったく、手間かせさせやがって！」

その時、凄まじい爆発音がビートジャングルないに響き渡る。

ナルガモン「なんだ今のは？」

リュウギ「まさかカズマ達が？急ぐぞ！」

リュウギ達は胸騒ぎをしたのか、先程より早く走る。

テントモン「あそこです！」

リュウギ達は祠に入ると、祠の中は煙りで何も見えなかった。

ナルガモン「ケホッ、ケホッ?なんだこの煙りは?」

リュウギは袖で口を塞ぎながらカズマを探す。

リュウギ「カズマ、ネレイスモン?」

ナルガモン「いたら返事しろ?」

煙りが去ると、カズマ達とエンシェントビートモンはお互いに対峙していた。

リュウギ「カズマ?」

ナルガモン「なんで目隠ししてんだよアイツ?」

カズマ「ハァ…ハァ…。」

プレシオモン「引き分け…なのか…?」

すると、エンシェントビートモンは口を開く。

エンシェントビートモン「…いや、お前達の勝ちだ。」

一同「?」

カズマ「一体どういう…」

プレシオモン「あれは?」

プレシオモンが目にしたのは、エンシェントビートモンの下半身にあるアゴにヒビが入っていたのだ。

テントモン「エンシェントビートモン様の強靭なアゴにヒビが？」

エンシェントビートモン「お前達の絆、見せてもらった…。」

その時、カズマは嬉しさの余りに高く飛び上がる。

カズマ「よっしゃゃゃゃゃゃ？」

プレシオモンは全ての力を使い果たし、プカモンへと退化した。

プカモン「やったぜカズマ？」

プカモンは嬉しさの余りにカズマの顔面に抱き着く。

カズマ「フゴッ？フゴゴ？」

カズマはプカモンを引き剥がす。

リュウギ「あいつら…。」

ナルガモン「へへっ、なんだかんだ言って、やったじゃねぇかよ♪」

エンシェントビートモン「では約束通り、エンシェントストーンはお前に託そう…。」

すると、小さな光りがカズマの元へ舞い降りる。カズマは手を広げ

て小さな光りを掴むと、黄色に澄んだエンシェントストーンだった。

カズマ「これで3つ目だな♪」

エンシェントビートモン「では、デジタルワールドをよろしく頼んだぞ、救世主達よ！」

エンシェントビートモンはそう言って静かに消え去った。

プカモン「行っちゃったぞ、カズマ。」

カズマ「おっ！ようやく外せやすぜ…。」

カズマは目隠しを外す。

リュウギ「やったな、カズマ。」

カズマ「まぁ、こんなの朝飯前でさぁ♪」

プカモン・オロチモン（よく言うよ…。）

プカモンとオロチモンはこころの中で小さくツッコム。

カズマはオロチモンの方に向いてお礼を言う。

カズマ「ありがとよ、飲兵衛の旦那！」

オロチモン「お礼などどうだっていい！それより坊主、酒をよこさんか！」

そう、カズマやプカモンの言うアレとは、大好物である酒の事だった。

カズマは長い沈黙になる。

カズマ「え、え～と…。」

オロチモン「まさか……」

その時、カズマは指を差して大声で叫んだ。

カズマ「あっ？」

オロチモン「ん？」

オロチモンは指差した方向を見た途端、カズマはリターン機能を使う。

カズマ「リターン？」

オロチモン「んなっ？坊主テメェよくも騙し……？」

オロチモンは強制的にリターンされ、静かに消え去った。

カズマ「よしっ！完了☆」

プカモン「うわ～～……」

リュウギ「なんてタチの悪いヤツだ…。」

カズマ「まぁまぁ、終わり良ければすべて良しってよく言うじゃありやせんかぁ…。」

ナルガモン「どうなっても知らねぇからな…。つうかなんで目隠ししてんだよ?」

ナルガモンは問うと、カズマは
腕を組んで頷く。

カズマ「漢は色々と知られたくないもんがたくさんあるんでさぁ…。」

ナルガモン「虫を見ないために目隠してるのか?」

カズマ「そうそう……って、何で知ってんだよ?」

ナルガモン「リュウギから聞いた♪」

カズマ「リュウ兄ぃぃぃぃぃぃぃぃぃ?」

カズマはギロリとリュウギを睨んだ。

リュウギ「しょうがねぇだろ…。この島は昆虫だけの島だってさっき知ったばかりなんだからよ…。」

カズマ「え…?昆虫だけの島ってマジですかぃ…?」

テントモン「はい、そうです!」

ナルガモン「ウソついてどうすんだよ?マジだ!」

カズマはテントモンを見た途端、白目になって仰向けに倒れる。

リュウギ「おい、カズマ？」

ナルガモン「ありゃりゃ…、こいつホントに虫が嫌いなんだな…。」

テントモン「なんか、傷付きます…。」

テントモンはカズマのリアクションで少しショックだった。

そして…。

～インセク島～

リュウギ「世話人なったな、テントモン。」

テントモン「いえいえ、それより皆さんデジタルワールドの事、頼みますよ。」

ナルガモン「おう！任せとけ？」

プカモン「ところでリュウギ、次の島って確か…。」

リュウギ「デバイス島だ。また彼処に戻るとはな…。」

ナルガモン「なぁ、ひょっとしてまたオレが？」

プカモン「しかたねぇだろ？オレはこの様だし、カズマはのびたままだし…。」

ナルガモン「ったく、しょうがねぇなぁ…。リュウギ、頼むぜ！」

リュウギ「あぁ。」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳した。すると、ナルガモンのデータが上書きされ。やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、超進化？」

『ドラグナモン？』

ドラグナモン「さ、早く乗りな！」

プカモン「おう！」」

リュウギ達はドラグナモンの背中に乗ろうとすると、Ｄ－アクセルに通信が入る。

リュウギ「Ｄ－アクセルが鳴ってる…？通信は出来ないハズなのに、どうして…？）

リュウギは通信を取ると、慌ただしい声が聞こえてくる。

？？？『ーーーギ、リュウギ！』

リュウギは謎の声にハッとする。

リュウギ「ミソラ？ミソラなのか？」

ドラグナモン「ホントか？」

リュウギ「ミソラ、俺だ？返事しろ？」

ミソラ『良かった…。それよりリュウギ、今すぐデバイス島に来て！』

リュウギ「一体何が合ったんだ？」

ミソラ『エンシェントストーンがキャンドモンに奪われたのよ？』

ミソラの意外な言葉にリュウギ達は驚愕する。

リュウギ「キャンドモンが？分かった。今すぐそっちに向かう！」

リュウギはそう言って通信を切った。

プカモン「え、なに？どういう事だよ？」

プカモンは何がなんだかちんぷんかんぷんだった。

ドラグナモン「なんでキャンドモンがエンシェントストーンを奪ったんだよ？」

リュウギ「分からない…。一刻も早くデバイス島へ向かうぞ？」

リュウギは急いでドラグナモンの肩に乗る。

ドラグナモン「おう、しっかり掴まれよ？」

ドラグナモンは背中に装備しているロケットエンジンをフルパワーにし、急いでデバイス島へと向かうのであった。

リュウギ「間に合ってくれ！」

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

EP79　～大昆虫の脅威？灼熱の連携　蛇炎双波？～（後書き）

キャンドモンがエンシェントストーンを奪った？

キャンドモンの目的は一体？

次回はミソラ達の物語！

お楽しみに？

Ｅｐ８０　～奪われた秘宝？闇に潜む道化　パンプモン～（前書き）

～デバイス島～

その頃、ミソラ達はエンシェントストーンを奪ったキャンドモンを追っていた。

ミソラ「待ちなさいよスケベロウソク？」

しかし、キャンドモンとの距離が全く縮まらない。

カイ「くっ、なんて逃げ足の早いヤツなんだ？」

レナモン「……。」

（キャンドモン、なぜこんな事を…？）

なぜキャンドモンがこんな事を…？

Ｅｐ８０スタート？

EP80　～奪われた秘宝？闇に潜む道化　パンプモン～

それは、数時間前まで遡るーー

～デバイス島～

エンシェントトロイヤモンの助言によりデバイス島に辿り着いたミソラ達。

カイ「ご苦労、サンダーバーモン。」

サンダーバーモン「必要があればまた呼んでくれ。」

カイ「あぁ。」

カイはリターン機能を使うと、サンダーバーモンは静かに消え去った。

ガオモン「ここがデバイス島か…。」

レナモン「妙だ…。デジモンの気配が全くない…。」

ミソラ「言われてみれば確かにそうね…。」

カイ「こんな島にエンシェントデジモンがいるというのか…？疑わしいな…。」

ミソラは何か感じたのか、耳を澄ます。

レナモン「どうしたミソラ？」

ミソラ「向こうから声が聞こえてくるわ！行ってみましょ！」

ミソラは先頭に立ち、森の中へと入っていった。

カイ「行くぞ、ガオモン。」

ガオモン「はい！」

続くカイとガオモンもミソラの後を追いかける。

レナモンが歩き出そうとしたその時、キャンドモンが海の方へ向いてボーッとしていた事に気付く。

レナモン「キャンドモン…？」

キャンドモンはレナモンの声に気付く。

キャンドモン「あ、いえ、何でもありませんよ！待ってくださ～いミソラさ～ん！」

キャンドモンは冗談気に笑いながらミソラの後に続く。

レナモン「？」

レナモンはまぁいいかと流し、森の中へと入っていった。

～サイチ村～

森を抜けるとごく普通の小さな村があった。そこには小さなデジモン達が暮らしていた。

ミソラ「デジモンがこんなに？」

レナモン「賑やかだな…。」

その時、村の住人のガジモンがミソラ達に気付く。

ガジモン「おっ？やっと帰って来たかよろず屋さんよ！」

ガジモンの声に村の住人達は反応し、突然ミソラ達に迫る。

トコモン「よろず屋だーー！」

タネモン「お帰りなさーーい！」

ミソラ「え？ちょっと？」

キャンドモン「なんじゃこりゃゃゃゃゃゃ？」

カイ「何を勘違いしてるかしらないが、俺達はよろず屋じゃないぞ。」

その時、村の住人はピタリと止まった。

村の住人達「え？」

ガジモン「それじゃアレか？ブレイ…なんちゃかんちゃらってヤツか？」

ガオモン「ブレイ…なんちゃらかんちゃら…？」

ミソラ達は頭の上に「？」を浮かびながら首を傾げる。その時、レナモンはハッとする。

レナモン「まさか、ブレイブエクセリオンか？」

ガジモン「そうそう！それが言いたかったんだ♪」

その時、ミソラは突然ガジモンの胸ぐらを掴んで問い詰める。

ミソラ「リュウギ達がここに来たの？何処に行ったのよ？」

ガジモン「え、あの、その…」

ミソラ「勿体ぶらないで教えなさいよ～！」

ミソラは段々と熱くなり、ガジモンを激しく揺らす。

ガジモン「し、知らねぇよ？…つうか苦じい…。」

ミソラ「知らないってアンタねぇ！」

ミソラはついに起こりだし、気絶させるくらい激しく揺らす。

すると、カイはミソラの肩にポンと手を置く。

カイ「おい、放してやれ。」

ミソラ「え？」

ミソラは気が付くと、ガジモンの目が渦巻き状になって気絶していた。

ガジモン「うっ、うぅ…。」

ミソラ「……あ。」

そして…。

ミソラ「ごめんなさい…。私ったらつい…。」

ミソラは反省し、申し訳なさそうな顔をしながらて謝る。

ガジモン「……。」

レナモン「ところでガジモン、リュウギ達の事について詳しく教えて欲しい…。」

？？？「リュウの息子なら、ここにはおらぬぞ…。」

その時、森の奥からババモンが現れる。

カイ「誰だお前は…？」

ババモン「案ずるでない。ワシはリュウギの父、リュウの知り合いのババモンじゃ。お主らがエクセリオンだと見受けた。とりあえずよろしくのぅ。」

ミソラ「ババモン…？」

レナモン「リュウギがこの島にいないとはどういう事だ？」

ババモン「彼奴ならエンシェントストーンを探しに既に発ったぞ。」

ミソラ「リュウギ…。」

カイ「そうか…。ところでババモン、この島にエンシェントデジモンはいないか？」

ババモン「なんじゃと？はて、ワシには分からんのぅ…。」

カイ「なに？」

レナモン「だとすれば、なぜエンシェントトロイヤモンは私達をこの島に導いたのだ？」

ミソラ「そうね…。」

ミソラは腕を組んで考える。すると、ババモンは口を開く。

ババモン「これもなにかの縁じゃ。ワシの家に来るがいい。書籍で調べてみるわい。」

ミソラ「ありがとう、ババモン！」

ババモン「こっちじゃ。」

～デジモン　ＪＥＴ　入り口前～

ババモン「ここじゃ。」

ミソラ達はよろず屋を眺めると、看板に大きく『よろず屋　デジモン　ＪＥＴ』と書かれていた。

ミソラ「ひょっとして、みんなが言ってたよろず屋って…？」

ババモン「そうじゃ、ここが頼まれれば何でもやるよろず屋、デジモン　ＪＥＴじゃ。」

カイ（それにしてもボロいな…。）

キャンドモン「それにしてもボロいですねぇ～。」

キャンドモンはうっかり口を滑らすと、ババモンはありったけの力でキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ぶべらっ？」

一同「え？」

キャンドモンは勢いよく飛んでいき、木に激しくぶつかった。

ババモン「誰がボロいじゃ…？二度と喋らないようにしてやろか…？」

キャンドモン「ご、ごみぇんなしゃい（ごめんなさい）…。」

カイ（危なかった…。）

もし自分が言っていたらあんな風になっていた。カイは心の中で密かにホッとするのであった。

ババモン「入りなさい。」

～ババモンの家～

ババモン「では、そのエンシェントストーンを拝見させて貰おうかのぅ。」

ミソラ「いいわ。」

ミソラはＤ－アクセルから2つのエンシェントストーンを取り出してババモンに見せる。

ババモン「ほぅほぅ、これがエンシェントストーンか…。」

ババモンは顎をさわりながらエンシェントストーンを見つめる。

カイ「何か分かるか？」

ババモン「ちょいと待っておれ…。」

ババモンは書籍からエンシェントストーンについて探す。

ミソラ「それにしても、こんな小さな物を集めたら、どうなるのかしらね…？」

レナモン「私にも分からない…。」

ミソラ「う〜ん…。？」

すると、ミソラはカイが深刻な顔をしている事に気付く。

ミソラ「どうしたのカイ？」

カイ「キャンドモンの姿が見当たらない…。」

ミソラは辺りを見回すと、キャンドモンの姿がない事に気付く。

ガオモン「確かにそうですね…。」

ミソラ「どうせそこら辺でぶらついてるでしょ？ほっときましょ！」

カイ「それもそうだな…。」

レナモン「……。」

レナモンは少し胸騒ぎがしていた。この島に来てからキャンドモンの様子がおかしいと…。

その時、外から叫び声が聞こえてくる。

キャンドモン「ぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃやぁぁぁ

レナモン「あの声はキャンドモン？くっ！」

レナモンは真っ先にババモンの家を飛び出した。

ミソラ「待ってよレナモン？」

カイ「ったく、手間の掛かるヤツだ。行くぞガオモン。」

ガオモン「はい！」

カイ達もババモンの家を飛び出した。

ババモン「待つのじゃお主ら？」

ババモンはエンシェントストーンを机の上に置き、慌てて外へ出る。

～デジモン　ＪＥＴ　入り口前～

ミソラ「キャンドモンは？」

レナモン「彼処だ！」

すると、森の奥からキャンドモンが猛スピードで接近してくる。

キャンドモン「お助けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？」

モノクロモンとは異なる姿をしたデジモンがキャンドモンを追い掛ける。

？？？「グォォォォォォォォォォォォ？」

ミソラ「あれは？」

ミソラはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ヴァーミリモン、完全体、鎧竜型、データ種、必殺技はヴォルケーノストライクＳ。」

キャンドモン「ミソラさん、か弱いボクチンを受け止めてぇぇぇぇぇぇ？」

キャンドモンは勢いでミソラに向かって飛び込むと、頭上からミソラのかかとが落とされて地面にめり込む。

ミソラ「ホンット、アンタは世話の焼けるヘンタイロウソクね！」

キャンドモン「んなこと言われても…（泣）」

ババモン「それより、なぜヴァーミリモンがここにおるのじゃ？」

カイ「ミソラ！」

ミソラ「分かってるわ！ディスティングハーツ！」

ミソラはディスティングハーツをすると、ヴァーミリモンの体内にイビルガが潜んでいた。

ミソラ「イビルガだわ！レナモン、頼むわ！」

レナモン「あぁ！」

カイ「ガオモン！」

ガオモン「はい！

ミソラとカイはそれぞれのパートナーデジモンにＤ－アクセルを翳すと、データが上書きされ、やがて姿が変わる。

レナモン「レナモン、超進化？」

『タオモン？』

ガオモン「ガオモン、超進化？」

『マッハガオガモン？』

ヴァーミリモン「グォォォォォォォォォォォォ？」

途轍もない咆哮を上げながらミソラ達に襲い掛かるヴァーミリモン。

タオモン「ミソラ、下がってて！」

マッハガオガモン「カイには指一本触れさせん！」

タオモンは札を投げ付けて地面に設置させる。

タオモン「『狐封札？』」

印を唱えて札を爆発させると、爆煙が舞い上がり、ヴァーミリモンを足止めする。

ヴァーミリモン「？」

ヴァーミリモンは視界を失うと、マッハガオガモンが爆煙を切り開く。

マッハガオガモン「喰らえ？『ウイニングナックル？』」

マッハガオガモンは拳を握り締めてヴァーミリモンを殴って地面に叩き付けた。

ヴァーミリモン「グォォォォォォォォォォォォ？」

ヴァーミリモンは力尽きて倒れると、体内からイビルガが姿を現す。

イビルガ「くっ、なんて奴らだ？ここは逃げ……」

イビルガは危険を感じ、その場から逃げようとする。

するとカイは右手を広げると、巨大手裏剣　ギルガメッシュが現れる。

カイ「俺から逃げられるとでも思うなよ。」

カイはギルガメッシュを投げつけると、イビルガを真っ二つに両断した。

イビルガ「ギャャャャャャャ？」

イビルガは跡形もなく消滅した。

ミソラ「やったわ！」

カイ「他愛も無い…。」

カイはフンと鼻を鳴らしながら、ブーメランのように戻ってきたギルガメッシュを掴み取る。

戦闘を終えると、タオモンとマッハガオガモンはそれぞれ成長期へと退化した。

ババモン「お主ら、なかなかのもんじゃのぅ…。」

ミソラ「まぁね♪」

カイ「これぐらい当然の事だ…。」

ミソラ「そんな事よりキャンドモン、アンタはどんだけ人に迷惑かけたら気が済……」

ミソラは説教しようとキャンドモンの方へ向くと、キャンドモンの姿がなかった。

ミソラ「あれ？」

カイ「危険を察知して逃げたか…。」

ガオモン「そこだけは鋭いようですね…。」

レナモン「だといいんだが…。」
（一体何処へ…？）

ババモン「疲れたじゃろう？ワシの家でゆっくり休むとよい。エンシェントストーンについて調べにゃならないしのぅ。」

ミソラ「賛成♪」

レナモン「待ってミソラ、キャンドモンはどうするのだ？」

ミソラ「ほっときましょ！戻ってきたら戻ってきたで一発ゲンコツかますから！」

カイ「アイツの心配なんてしたらロクな事にはならないからな…。」

ガオモン「カイの言う通りです！」

レナモン「あははは…。」

レナモンはただ愛想笑いするしかなかった。

～ババモンの家～

ババモンの家に入った途端、机の上に置いてあったハズのエンシェントストーンが無くなっていた事に気付く。

ミソラ「あれ？エンシェントストーンがない？」

カイ「なに？」

ババモン「バカな？確かにここに置いてあったハズなんじゃが…？」

ミソラ達は慌てて机の周辺を探す。

レナモン「なぜエンシェントストーンが…？」

レナモンが腕を組んで考える。

レナモン「まさか？」

レナモンは何か感付いたのか、突然ババモンの家を飛び出す。

ミソラ「レナモン？」

レナモンは外を飛び出すと、２つのエンシェントストーンを持ったキャンドモンがビクッと驚く。

レナモン「やはり、お前だったのか。」

後にミソラ達が出てくると、ミソラ達は驚愕する。

ミソラ「キャンドモン？なんでアンタが…」

キャンドモン「くっ！」

キャンドモンは慌てて逃げ出し、森の奥へと入る。

レナモン「待つんだキャンドモン！」

レナモンはキャンドモンの後を追う。

カイ「追うぞ！」

ガオモン「はい！」

ミソラ「えぇ！」

ーーーーーーーーーーーーーー

そして、現在まで至るのであった。

レナモン（くっ、止むを得ない！）

「『狐葉楔？』」

レナモンは木の葉の手裏剣を放つと、見事キャンドモンに命中した。

キャンドモン「いでっ？」

キャンドモンは転けると、奪ったエンシェントストーンがコロコロと転がる。

キャンドモン「あわわ、エンシェントストーンが？」

キャンドモンはエンシェントストーンを追いかけようとすると、レナモンが立ち塞がる。

キャンドモン「ひぃ？」

レナモン「キャンドモン、どうしてこんな事を…？」

キャンドモン「う……。」

すると森の奥からミソラ達が走ってくる。

ミソラ「とうとう追い詰めたわよ！」

カイ「これは一体何の真似だ？」

キャンドモン「そ、それは…」

ガオモン「答えろキャンドモン！」

ガオモンは歯をギリッとさせながら威嚇する。

それとは裏腹に、レナモンは冷静になりながらもキャンドモンに問う。

レナモン「どうしても言えない理由があるのか、キャンドモン…？」

黙りだったキャンドモンは口を開く。

キャンドモン「ボ、ボクチンは…」

その時、何処からか闇の衝撃波が飛んで来てミソラ達に襲い掛かる。

一同「？」

ミソラ達は素早く交わすと、闇の衝撃波は地面に直撃して砂煙が舞う。

ミソラ「な、なんなの？」

？？？「なかなかの演技だったわよ、キャンドモン♪」

砂煙が去ると、ミソラ達が目にしたのはダークスの1人、スクロモンだった。

ミソラ「スクロモン？」

スクロモン「お久しぶりね？元気してたかしら？」

スクロモンはニッコリと笑いながら手を振る。

カイ「ストラティクモンの仲間か…。」

スクロモンは嫌らしい目でカイを睨む。

スクロモン「生意気なガキね。あんな出来損ないヤツと一緒にしてくださらない？」

レナモン「なぜお前がここに？」

スクロモン「なぜここにって、大事な手下が手柄たてたから迎えに来たのよ～♪」

ガオモン「手柄だと…？」

その時、レナモンはハッとする。

レナモン「まさか？」

スクロモン「ご名答♪キャンドモンは私の大事な手下なのよ♪アンタ達の行動を全て見張ってたってワケ♪お分かり？」

キャンドモン「……。」

ミソラ「嘘……だよね？」

ミソラは唇を震わせるながらキャンドモンに問う。

キャンドモン「嘘じゃありません…。ボクチンはスクロモン様の大事な手下です…。これでわかって頂けましたか？」

レナモン「ずっと、私達を騙していたというのか…？」

キャンドモン「……。」

スクロモン「頭の悪い連中ねぇ～。騙してなかったらこんな酷い事してないじゃないの～？あっはははははは？」

スクロモンは高らかに嘲笑う。

レナモン「キャンドモン…。」

スクロモン「あ～そうそう、この子はキャンドモンじゃないのよ。」

ガオモン「なに？」

スクロモン「キャンドモンは仮の姿。ちょうどいいわ。アンタ達に

この子のほんとうのすがたを見せてあげる♪」

スクロモンは手を広げると闇の波動が生じ、それをキャンドモンに当てると、キャンドモンの姿が変わっていく。

やがてキャンドモンの姿は頭に斧が刺さり、カボチャのような姿をしたデジモンだった。

カイはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「パンプモン、完全体、パペット型、データ種、必殺技はトリックオアトリート。」

ミソラ「あのキャンドモンが完全体に…？」

レナモン「そんな…？」

ミソラ達の愕然とした顔を見て高らかに嘲笑うスクロモン。

スクロモン「あっはははははは？その顔、たまんないわ～♪」

カイ「化けの皮が剥がれたってヤツか…。」

パンプモン「そっ！これがボクチンの本来の姿♪いやぁ～あんなへンタイロウソクに化けてたら肩が凝るわ～。」

パンプモンはパキパキと首の骨を鳴らす。

レナモン「キャンドモン、嘘だと言ってくれ…。」

パンプモン「ボクチンはもうキャンドモンじゃありません？闇に潜む道化、パンプモンです？『トリックオアトリート？』」

パンプモンは巨大なカボチャを空中に出現させてミソラ達に投げ付けた。

レナモン「危ない？」

レナモンはミソラを抱き抱えて素早く後方へと下がる。

カイ「くっ！」

カイ達も素早く交わすと、巨大なカボチャは地面に直撃して砂煙が舞う。

ミソラ「ケホッ、ケホッ！」

レナモン「キャンドモン！」

砂煙が去ると、スクロモンとパンプモンの姿はなかった。

カイ「チッ、逃げられたか…。」

ガオモン「まさか、こんな事になるとはな…。」

レナモンはミソラを地面にそっと降ろす。

レナモン「ミソラ、大丈……夫？」

その時、ミソラの目には涙が溢れていた。

ミソラ「仲間なのに…。どうして…。今まで一緒にいたのは、全部嘘だって言うの…？」

レナモン「ミソラ…。」

レナモンはギュッとミソラを抱き締めて慰める。

レナモン（キャンドモン、お前は本当に私達を裏切ったのか…？）

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

EP80　～奪われた秘宝？闇に潜む道化　パンプモン～（後書き）

キャンドモンがスパイ？

果たしてエンシェントストーンを取り戻す事ができるのか？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ８１　～ブレイブエクセリオン集結？暗黒の女神　スクロモンを討て？～

果たしてエンシェントストーンを取り戻す事ができるのか？

そしてリュウギ達は間に合うのか？

Ｅｐ８１スタート？

EP81　～ブレイブエクセリオン集結？暗黒の女神　スクロモンを討て？～

～ババモンの家～

会話なに一つ交わさないミソラ達。その訳は共に冒険した仲間、キャンドモンがダークスの手下であり裏切られたのだから。

ミソラ「……。」

カイ「……チッ。」

カイは舌打ちをした後、扉へと向かう。

ガオモン「カイ？」

レナモン「何処へ行くつもりだ…？」

カイ「ここに居ても仕方が無い。俺はスクロモンを追い掛ける。」

レナモン「まさか、キャンドモンを消すつもりなのか…？」

レナモンの言葉にミソラは反応する。

ミソラ「カイ、本気じゃないよね？」

カイ「……。」

カイは何も答えず、扉を開けた。

ミソラ「待ちなさいよカイ！キャンドモンは私達の……」

カイ「仲間とは言わせないぞ…。」

ミソラ「？」

カイ「分かってるのか？アイツは俺達を裏切り、デジタルワールドを救う鍵を奪ったんだぞ？なのにそいつをまだ仲間って言うのか？」

ミソラ「それは…。」

カイ「だったら御免だな。そんな傷の舐め合いしかできないのなら、俺はこの輪から抜けさせて貰う。」

レナモン「カイ…。」

カイ「何が強くなりたいだ？そんな甘い考えがあるから、お前は何1つ成長しないんだよ！」

ミソラ「？」

カイはそう言ってババモンの家を出た。

ガオモン「待ってくださいカイ！」

ガオモンは慌ててカイの後を追う。

ミソラ「……。」

レナモン「ミソラ……。」

ミソラはどうする事もできず、ただ顔を伏せるしかなかった。レナモンはそっとミソラの頭を撫でて慰める。

レナモン「ミソラ…。」

一方、カイは……。

ガオモン「カイ、少し言い過ぎなのでは…？」

カイ「いいんだ。あれぐらい言わないとアイツの為にもならないからな…。」

ガオモン「やはり、彼女の事を考えてるのですね？」

すると、カイは頬を赤らめてはげしく否定する。

カイ「べ、別にそうじゃない！俺はアイツを見ていると…」

すると、カイの表情が段々と深刻な表情になる。

ガオモン「リエナを思い出す…。だからほっとけないんですよね？」

カイ「……あぁ。」

ガオモン「ところでカイ、キャンドモンの事なんですけど…。」

カイ「気付いてたか。俺達を裏切った事は別として、まだ何か隠してる。」

ガオモン「やはり……。」

カイは腕を組み、顎を触りながら考える。

カイ（俺の考えが正しければ…。）

「ガオモン、奴らはそう遠くへは行ってないハズだ。探しに行くぞ。」

ガオモン「はい。すべては我が主の為に…。」

???「待って！」

カイ達は振り向くと、カイを呼び止めたのはミソラだった。

カイ「何の用だ？」

ミソラ「キャンドモンは確かに私達を裏切ったわ！でも、私達には言えない訳があるに違いないわ！」

ガオモン「ミソラさん…。」

カイ「もし、本当の裏切り者だったらどうするのだ？」

ミソラ「裏切り者とは言わせない！私はそう信じてるから…。」

すると、カイは背を向けてゆっくりと歩き出す。

カイ「好きにしろ…。」

カイの言葉にミソラは目をキリッとさせて返事をする。

ミソラ「分かったわ！」

～グラデ鉱山～

スクロモン「へぇ～、なかなか綺麗じゃないの？」

スクロモンはミソラから奪い取ったエンシェントストーンを眺めていた。

パンプモン「あのぅ、スクロモン様？」

スクロモン「なにか用かしら？」

パンプモン「目的は果たしたのですから、早くこの島から出ませんか？」

スクロモン「あら？私にはあの出来損ない人間どもには関わるなって聞こえるちゃうんだけど？」

スクロモンはギロリと睨むと、パンプモンは冷や汗をかく。

パンプモン「そ、そんなワケないじゃないですか？ボクチンが言いたいのは早くエンシェントストーンを持って帰って、あの方から褒美を貰おうってコトですよ！」

スクロモン「そうよねぇ♪これで私の楽しみが増えたわ♪」

パンプモン「はい♪もしスクロモン様があの方の配下に昇格したら、ボクチン御祝いしますよ♪」

スクロモン「あら嬉しいわ♪またまた楽しみが増えちゃったわ♪」

スクロモンが笑うと、パンプモンもつられて笑う。しかしその時、スクロモンは拳を握り締め、ありったけの力で岩山にパンチした。すると岩山は粉々に砕けた。

パンプモン「ひぃ？」

スクロモン「なんでしょうねこのムシャクシャする気持ち…？あの忌々しいガキどもを始末しなきゃ気が済まないわ…。」

パンプモン「ま、待ってくださいよスクロモン様～！ボクチンとのお約束を忘れたとは言わせませんよ～？エンシェントストーンを奪ってスクロモン様にお渡しするから、ミソラさん達には手を出さないって～？」

スクロモン「確かに約束したわねぇ…。」

パンプモン「でしょ？だから冷静になりましょう、ね？無理にストレス発散する必要なんてありませんからねぇ～、あは、あははは…。」

パンプモンはそう言って冗談気に笑う。

スクロモン「あっそ。じゃ抹殺しに行くわ♪」

パンプモン「な？話しが違うじゃないですか？」

スクロモン「あら失礼ね。約束はちゃんと果たしたじゃないの～。

まずアンタはこれ以上手を出すなって言う条件はなかった。よってアンタの条件はこれにてお終〜い♪お分かり頂けたかしら?」

パンプモン「まさかそれが狙いでボクチンを利用したのですか?卑怯者?」

スクロモン「大事なお友達を裏切ったアンタに言う権利あると思ってるの?ハッキリ言って、騙されるヤツが悪いのよ♪あっはははははは?」

スクロモンは高らかに嘲笑う。パンプモンは怒り爆発し、スクロモンを殴りに掛かる。

パンプモン「よくも…。よくもボクチンを利用したなぁぁぁぁぁぁぁぁ?」

スクロモン「はっ?」

スクロモンは右手を広げて闇の衝撃波を放つと、パンプモンは飛ばされて岩山に叩きつけられた。

パンプモン「ぐはっ?」

スクロモン「雑魚がイキってんじゃないわよ!まぁどのデジモンより役に立ったからこれだけは言うわ。最高の手駒だったわ?アーッハハハハハハ?」

パンプモン「くっ…。ミソラさん…、カイさん…。」

パンプモンは悔しさの余りに涙が溢れる。

スクロモン「アンタはもう用済みよ。という訳で、あの世に行きなッ？」

スクロモンの目付きが変わり、右腕の巨大な毒爪でパンプモンを襲う。

パンプモン「？」

パンプモンはもうダメだと思い目を閉じたその時だった。

黒い影がスクロモンの前に突き刺さる。

スクロモン「？」

スクロモンは素早く後方へと下がって体勢を立て直す。

スクロモン「誰だ？」

地面に刺さった黒い影の正体はカイの持つ巨大手裏剣　ギルガメッシュだった。

パンプモン「あれは？」

？？？「やはりそういう事だったか…。」

すると、ミソラ達が駆けつけて来る。

ミソラ「キャンドモン？」

タオモン「助けに来たぞ！」

マッハガオガモン「これ以上、お前の好きにはさせない？」

パンプモン「ミソラさん、それに皆さん…。」

カイ「お前の作戦は所詮、無駄にしかならなかったなスクロモン。」

カイはそう言ってギルガメッシュを抜き取り、刃先をスクロモンに向ける。

スクロモン「チィ…。忌々しいガキどもめ…。まぁいいわ。面倒だからここで纏めて消してあ・げ・る？『デリートペイン？』」

スクロモンはニヤリと不気味な笑みを浮かべた後、口から強力な猛毒の息を吐く。

タオモン「ミソラ、頼む！」

ミソラ「分かったわ！」

ミソラはＤ－アクセルをタオモンに翳すと、タオモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

タオモン「タオモン、究極進化？」

『サクヤモン？』

サクヤモン「みんな、わたしの後ろへ？」

ミソラ達は急いでサクヤモンの後ろへと移動する。するとサクヤモンは金剛錫杖(こんごうしゃくじょう)を地に打ち付けて高らかに叫ぶ。

サクヤモン「『金剛界曼荼羅(こんごうかいまんだら)？』」

すると、周りに邪気を払う浄化結界が張られ、デリートペインを弾き返す。

スクロモン「なに？」

カイ「マッハガオガモン、一気に攻めるぞ。」

マッハガオガモン「はい！」

カイはＤ－アクセルをマッハガオガモンに翳すと、マッハガオガモンのデータが上書きされ、
やがて姿が変わる。

マッハガオガモン「マッハガオガモン、究極進化？」

『ミラージュガオガモン？』

結界が解除されると、カイは右へ、そしてミラージュガオガモンは左へと分かれてスクロモンに接近する。

ミラージュガオガモン「『ゲイルクロー？』」

ミラージュガオガモンは疾風のごとく駆け抜け、鋭い爪でスクロモンに切りに掛かる。

スクロモン「くっ？」

スクロモンは左腕で斬撃を受け止めた。

カイ「こっちだ？」

右から接近するカイはスクロモンに狙い定めて、ギルガメッシュを投げ付けた。

スクロモン「意気がってんじゃないわよ？」

スクロモンは右腕の巨大な爪でギルガメッシュを弾き返した。

その時、カイは小さくほくそ笑んだ。

スクロモン「な？」

（笑ってる？）

カイ「β？」

カイは叫ぶと、弾き返されたギルガメッシュは2つの刃へと分裂して手に取ってスクロモンに接近する。

スクロモン「このっ？」

スクロモンは左手を広げて闇の波動を放とうとした時だった。

ミラージュガオガモン（ここだ？）

隙を読んだミラージュガオガモンは左腕を弾き返した。

スクロモン「しまっ……？」

カイ・ミラージュガオガモン「喰らえ？」

カイとミラージュガオガモンはそれぞれの武器を構えてスクロモンを挟み撃ちをしようとしたそのときだった。

スクロモン「はぁぁぁ

パンプモン「これ以上…、お前の好きにはさせません！」

スクロモン「お前みたいな弱っちいデジモンが何ができるわけ？」

パンプモン「確かにボクは弱っちいデジモンですよ…。でも、リュウギさんと一緒に旅してきて教えてくれたのです！例え弱くても、最後まで諦めない気持ちがあれば可能性が生まれるって！だからボクはミソラさん達を最後まで守ります？」

ミソラ「キャンドモン…。」

スクロモン「はぁ？可能性？私に手も足も出ないクセにほざいてんじゃないわよ！」

パンプモン「ボクらブレイブエクセリオンは、お前みたいなオバサンには絶対負けねぇんだよ？……あ。」

パンプモンはうっかり口を滑らせてしまったが既に遅かった。スクロモンの血管がブチ切れてしまった。

スクロモン「ブッ殺す…。」

スクロモンは両手を広げて今まで以上の巨大な闇の波動を放つ。

パンプモン「きぃぃぃぃぃぃやゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？死ぬ？マジで死ぬぅぅぅぅぅぅ？」

？？？「よく言ったぜ、キャンドモン？」

その時、上空から巨大な影がドスンと着地し、闇の波動をかき消した。

一同「？」

？？？「確かにお前の言うとおり、最後まで諦めない気持ちがあれば可能性が生まれる…。よくミソラ達を守ってくれたな…。」

ミソラは唇を震わせながら名前を叫ぶ。

ミソラ「リュウギ、ドラグナモン？」

ドラグナモン「へへっ、久しぶりだなお前ら！」

リュウギ「遅れてすまない、みんな。」

カイ「遅すぎる…。どれだけ待たせるんだ…。」

カイはそう言ってフンと鼻を鳴らす。

リュウギ「カイ？」

ドラグナモン「なんでテメェがここに？それと犬ッコロ……だよな？」

ミラージュガオガモン「オレは犬じゃないって何度言わせるんだ…。」

サクヤモン「リュウギ、無事で良かった…。」

リュウギ「レナモン、お前も究極体に進化したのか？」

サクヤモン「あぁ。」

？？？「いやぁ～、よく寝やしたぜ…。」

カズマは大きなアクビをした後、ドラグナモンの肩からヒョイっと飛び降りて着地する。

ドラグナモン「よく寝たってテメェ、気絶してたじゃねぇか？」

ネレイスモン「確かに言えてる。」

カズマ「気絶モードから睡眠モードに切り替えることができる！それがオレのＳＴＹＬＥなんでぃ☆」

カズマはドヤ顔しながら親指をピシッと立てる。

ドラグナモン・ネレイスモン「やかましわ…。」

ミソラ達はカズマを見た途端、キョトンとする。

一同「……誰？」

カズマ「おっと、自己紹介は後ですぜぃ。奴さん、ブチ切れてやすから…。」

リュウギ達はスクロモンの方に向くと、スクロモンの身体には怒りのオーラが溢れていた。

スクロモン「雑魚が増えた所で何ができるっていうのよ…？調子に乗ってんじゃねぇよ？」

リュウギ「お前はあの時ムゲンマウンテンにいた…？」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード　アルカナムが現れる。

スクロモン「まぁいいわ。ここで全員始末すれば、あの方から褒美が貰えるわ？この地モロとも葬り去ってくれるわ？」

スクロモンは唸り声を上げると、闇のオーラが激増しだした。

しかし、リュウギ達は全く動じることはなかった。

カイ「フン、奴が何しようが俺達には関係のない…。」

ミソラ「そうよ！私達はここで負ける訳にはいかないのよ？」

カズマ「ここは親父の大事な場所なんでさぁ…。簡単に消されてたまるかよ！」

リュウギ「ここで背を向けると俺の流儀に反する…。正々堂々、真っ向勝負するのが俺達ブレイブエクセリオンの流儀だ？」

リュウギとカズマはＤ－アクセルをそれぞれのパートナーデジモンに翳した。すると、データが上書きされ、やがて姿が変わる。

ネレイスモン「ネレイスモン、ワープ進化？」

『プレシオモン？』

ドラグナモン「ドラグナモン、究極進化？」

『エクシードモン？』

ミソラ「あの子もエクセリオン？」

カイ「これがナルガモンの究極体…。」

スクロモン「まとめてあの世にいけぇぇぇぇぇぇぇ？『エンプレス・デス・ブレイザー？』」

呪われた亡者デジモンの魂達を紫色の地獄の業火に変えそれを津波のように自由自在に操り、リュウギ達を襲う。

サクヤモン達はそれぞれの必殺技を放つ。

プレシオモン「『シェイキングパルス？』」

サクヤモン「『飯綱（いづな）？』」

ミラージュガオガモン「『フルムーンブラスター？』」

サクヤモン達の技がエンプレス・デス・ブレイザーとぶつかり合う。

スクロモン「亡者達よ、あの哀れなデータどもを呪い殺せ？」

スクロモンが叫ぶと、巨大な津波は段々と押して行く。

スクロモン「あっはははは？これでお前らは終いだッ？」

その時、巨大な津波から巨大な穴が開かれる。

スクロモン「？」

エクシードモン「誰が終いだって？」

巨大な穴にはエクシードモンが拳に集中させて低く構えていた。

スクロモン「なに？なぜ穴が開かれるのだ？」

リュウギ「みんなの技が1つになって導いてくれたんだ…。」

エクシードモン「哀れなデータとは言ってくれるじゃねぇか？だったら、その哀れなデータに負けたらお前はどうなるんだ？」

スクロモン「や、やめろ…？」

エクシードモンは唸り声を上ると、雷迅のごとく予測不能な動きで巨大な穴を通過し、スクロモンに接近する。

エクシードモン「オレ達の絆を喰らいやがれ？『天覇迅雷掌（てんはじんらいしょう）？」

エクシードモンは渾身の力を込めた一撃必殺を放つ。

スクロモン「チィッ？」

天覇迅雷掌はスクロモンに直撃し、大爆発が生じる。

スクロモン「ぎゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？」

エクシードモン「ハァ…ハァ…。」

リュウギ「やったか？」

爆煙が去ると、スクロモンの右腕が無くなっていた。

カイ「とっさに右腕で庇ったか…。」

スクロモンは左手で右腕を押さえ、ギロリとリュウギはを睨み付ける。

スクロモン「これで勝ったと思うなよ…。次会うときは、最期よ？あっはははは！」

スクロモンは高らかに笑ったその時、何者かがスクロモンの背後からブスリと刺す。

スクロモン「ゴフッ？」

一同「？」

？？？「次だぁ？んなもんねぇよ…。」

スクロモンを刺した正体は顔に包帯を巻いた男、ヴァヌムスだったのだ。

一同「？」

リュウギ「あいつは？」

カズマ「知合いですかぃ…？」

リュウギ「あいつはアナログマンが作り出した殺戮兵器（プログラム）なんだ…。」

スクロモン「ヴァヌ…ムス…。何の真似よ…？」

ヴァヌムス「勘違いするな…。こいつは姉妹の問題とかそういうくだらない事じゃねぇ…。ただ…」

ヴァヌムスはそっとスクロモンに耳打ちをする。

ヴァヌムス「あの方の命令に背いた…。それだけだ…。」

リュウギ（あの方…？）

スクロモン「ま、待ってくれ？」

ヴァヌムス「何焦ってんだよ？よく考えてみろよ？わざわざ俺が哀れな妹と合わせてやるって言ってんだよ。嬉しいだろう？」

ヴァヌムスはニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

スクロモン「や、やめろ…？消えたくな……？」

ヴァヌムス「あの世で仲良く暮らしてろ、オバサン♪」

その時、突き刺したダークネス・ドラグーンが伸びてスクロモンを包み込み、絞め殺した。

スクロモン「ギャャャャャャャャャャャャャャャャャャャャ？」

一同「？」

スクロモンが消え去ると、エンシェントストーンが地面に落ちる。

カイ「あいつ、自分の仲間を？」

ミソラ「酷い…。」

ヴァヌムス「さぁて、お仕事終了っと…。」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを背負い、背を向けて歩き出す。

リュウギ「待てよヴァヌムス？」

リュウギは呼び止めると、ヴァヌムスはピタリと足を止める。

リュウギ「なぜスクロモンを殺したんだ？仲間じゃないのか？」

ヴァヌムス「俺はただ、あの方の命令で動いてるだけだ。文句あるならソイツに言いな。」

リュウギ「じゃあ、なぜあの時みたいに俺達を襲わない？」

ヴァヌムス「さぁ、なんでだろうね？ククククク…♪」

ヴァヌムスは不気味に笑いながら闇の中へと消え去った。

リュウギ「待て？」

エクシードモン「クソッ、逃げられたか！」

エクシードモン達は全ての力を使い果たし、幼年期へと退化する。

リュウギ「……。」

（ヴァヌムス…。あいつは一体…？）

ミソラ「リュウギ…。」

リュウギはミソラの方へ向いた途端、ミソラは思い切ってリュウギに抱き着く。

リュウギ「んな？ちょっ、ミソラ？」

リュウギは顔を赤らめる。すると、ミソラは小さくむ呟く。

ミソラ「やっと会えた…。」

リュウギ「……心配かけて悪かった。」

リュウギは申し訳なさそうな顔をし、詫びにミソラをギュッと抱き締めた。

カズマ「ふ～ん…？にゃるほどねぇ～。」

リュウギ・ミソラ「？」

（ドキッ？）

カズマ「リュウ兄とミソ姉はそういう関係なんですかぃ…？将来が楽しみですなぁ～♪」

プカモン「お幸せに～♪」

カズマとプカモンは嫌らしい目をしてリュウギ達を見つめる。

リュウギ「んな？カズマお前？」

ミソラ「べ、別に私達はそんな関係じゃないわよ？」

その時、ミソラは慌ててリュウギを押しのけると、リュウギは勢いよく木にぶつかる。

リュウギ「どわっ？」

スクロモンが消滅したのか、パンプモンはキャンドモンへと退化した。

キャンドモン「あれれ？なんで退化したんでしょうか？」

ポコモン「恐らく、スクロモンの闇の力を失ったから退化したんだと思う。」

キャンドモン「そうですか…。」

キャンドモンは奪われたエンシェントストーンを拾い、ミソラに返す。

ミソラ「キャンドモン…。」

キャンドモン「皆さん、本当にすいませんでした…。なんてお詫びしたよろしいでしょうか…？」

リュウギ「気にするな…。お前はスクロモンに騙されたんだからな…。」

ポコモン「それに、エンシェントストーンを奪ってまで私達を守ろうとしたんだよね…？」

キャンドモン「リュウギさん、ポコモン…。ボクチンの罪を許してくれるのですか？」

ミソラ「でも、私達を騙してエンシェントストーンを奪ったからね…。それなりのケジメをつけないと！」

キャンドモン「ケジメ…ですか？」

ミソラはキャンドモンに近寄ると、キャンドモンはドキッとする。

キャンドモン（ミソラさん、ひょっとしてボクチンを抱き着くつもりですか…？）

ミソラ「はぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラはありったけの力でキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ひぎゃん？」

キャンドモンは岩山に激しく叩きつかれる。

キャンドモン「いきなりなにするんですかミソラさん？」

ミソラ「はい、次はポコモン！」

ポコモン「え、私？何をしたら…？」

ミソラ「皆一発ずつキャンドモンを殴ること！それがキャンドモンのケジメ！」

キャンドモン「うそぉぉぉぉぉぉん？」

ポコモン「わ、分かった…。」

ポコモンは思いきり体当たりをした。

キャンドモン「ぐべっ？」

次にカイは日頃の恨みを拳に乗せ、思いきりキャンドモンを殴り、続いてワニャモンは思い切り噛み付いた。

キャンドモン「いでででで？」

ミソラ「次はリュウギの番よ！」

リュウギ「お、俺はいいよ…。」

ミソラ「早く？」

ミソラは睨むと、リュウギは仕方なくキャンドモンをビンタした。

キャンドモン「ぐべら?」

ナナモン「うりゃー?」

ナナモンは何も躊躇いもなくキャンドモンに体当たりした。

キャンドモン「ぎょえ?」

プカモン「往復ビンタ!」

プカモンは両手でペチペチと往復ビンタした。

カズマ「キーーック!」

カズマは思いきりキャンドモンを蹴り飛ばした。

キャンドモン「ちょっとまたんかぃぃぃぃ?なんでボクチンが初対面の奴らにやられなきゃならないんだぁぁぁぁぁぁ?」

カズマ「なんでって、オレ達もブレイブエクセリオンの一員なんでさぁ。」

プカモン「そうそう。なんかオレ達もやらなきゃダメかなぁ~っていう空気が流れてたからさ~。」

キャンドモン「どんな空気?そんな空気ひとっつも流れてねぇじゃんかYO?」

ミソラ「みんな終わったようね？それじゃ、ババモンの家に戻りましょ！」

ミソラは先頭に立ち、ババモンの家へと向かうのであった。

キャンドモン「とほほ…（泣）」

キャンドモンは泣きべそかきながら項垂れる。しかし、彼の内心は少し嬉しかった。裏切ったのに仲間だと言ってくれたこと。キャンドモンはリュウギ達の背中を見て嬉しそうに笑う。

ナナモン「何やってんだよキャンドモン！置いてくぞ！」

キャンドモン「あ！待ってください皆さーーーん！」

こうして、真のブレイブエクセリオンが再結成されるのであった…。

ー－Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

2015

EP81　～ブレイブエクセリオン集結？暗黒の女神　スクロモンを討て？～

～おまけ～

『　ネーミング』

ミソラ「ところでリュウギ、あの子誰なの？っていうかさっき言ってたミソ姉ってなによ？」

カズマ「申し遅れやしたぁ。オレはリュウ兄の幼馴染みの榊原　カズマなんでさぁ。んでこいつはパートナーのネレイスモン。」

ネレイスモン「おっす！よろしくな♪」

カイ「見たところ、お前もエクセリオンみたいだな？」

カズマ「そそっ。んで、アンタは？」

リュウギ「同じクラスの渡里　カイ。それから足立　ミソラ。」

ミソラ「よろしくね。」

カズマ「ふ～ん、ヘアバンドにミソ姉か…。」

カイ「へ、ヘアバンド…？」

ミソラ「何よ、そのネーミングセンス？」

リュウギ「カズマは昔っからあだ名付けないと覚えない奴なんだ…。

2016

仲良くしてやってくれ…。」

ミソラ「そのあだ名、なんかイヤ…。」

カズマ「ミソ姉じゃ不満ですかぃ?そいじゃ、味噌姉って事で…。」

ミソラ「変わらないじゃないの?
その漢字やめなさい?」

ミソラはありったけの声でツッコム。

カイ「馬鹿馬鹿しい…。付き合ってられないな…。」

カイは深くため息つき、腕を組んで木にもたれる。

カズマ「まぁまぁそう硬くならないでくだせぇ。同じエクセリオンなんですから仲良くしやしょうや♪にゃっははは♪」

カズマは冗談気に笑いながらカイの肩にポンと手を置く。

カイ「フン…。」
(こいつ、シンドイ…。)

ガオモン「おいお前!我が主に向かってヘアバンドとはなんだ?訂正しろ!」

ガオモンはカイのネーミングが気に入らず、カズマに威嚇をする。

リュウギ「ってそっちかよ?」

カズマ「もしかしてヘアバンドのパートナーですかぃ？名前は……」

カズマパートナー腕を組んでネーミングをかんがえると、ナルガモンがボソッと告げ口をする。

ナルガモン「犬ッコロ。」

カズマ「うしっ、名前は犬ッコロで！」

ガオモン「貴様らぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ガオモンはワンワンと吠えながらナルガモンを追いかける。

ミソラ「なんていうか…。」

レナモン「カズマとやらが来た途端、賑やかになったな…。」

カズマ「そういえばミソ姉のパートナーがまだでしたねぇ…。」

カズマはチラッとレナモンを見るとレナモンはドキッとする。

レナモン「わ、私はネーミングなど必要ない？」

ミソラ（でも、ちょっと気になる…。）

カズマ「よし、お前は赤いキツネ！」

その時、周りは長い沈黙が流れる。

一同「……はぁ？」

カズマ「ほらアレだよ。マ○ちゃんの赤いキツネと緑のタヌキでさぁ♪オレはどっちかと言うと赤いキツネ派なんでさぁ。」

ネレイスモン「オレは緑のタヌキ派だな！」

ミソラ「赤い…キツネ…。」

レナモンをカップ麺と同じレベルだと言われて、ミソラはガクッと項垂れる。

レナモン「どうしたのだ、ミソラ？」

赤いキツネだと命名されたレナモンは頭の上にいくつもの「？」が浮かべながら首を傾げるのであった。

キャンドモン「あのぅ、ボクチンを忘れていませんか…？」

ミソラ「んなのとっくに決まってじゃない？」

カズマ「おっ？既に決まってるんですかぃ？」

一同「スケベロウソク。」

カズマ「よし、スケベロウソクに決定☆」

キャンドモン「酷いですよ皆さん？」

それからカズマは考え直し、ネーミング結果はこうなりました。

リュウギ↓リュウ兄

ナルガモン↓ジャックモン（決めゼリフのＪａｃｋ　ｐｏｄからきたため命名）

ミソラ↓ミソ姉

レナモン↓クールさん（クールな性格なため命名）

カイ↓カイ兄

ガオモン↓犬ッコロ（命名：ナルガモン）

キャンドモン↓スケベロウソク（説明する必要はないでしょう…）

ついにブレイブエクセリオン集結？

次回はついに最期のエンシェントデジモンに挑む！

次回もお楽しみに？

Ｅｐ８２　～究極の試練？エンシェントグレイモン＆エンシェントガルルモン？～

ついにエンシェントデジモン最終戦？

そしてあのデジモンが登場？

Ｅｐ８２スタート？

2021

EP82　～究極の試練？エンシェントグレイモン&エンシェントガルルモン～

～ババモンの家～

キャンドモンの件は解決され、ブレイブエクセリオンはババモンの家へと向かう。

ババモン「ほほ～う、よく無事で帰って来れたのぅ。」

リュウギ「あぁ。」

ナルガモン「ま、オレは最強と呼ばれたデジモンだからな！試練なんて楽勝楽勝×2♪ナッハハハハ♪」

ナルガモンはそう言って高らかに笑う。

レナモン「ナルガモンの笑い、久しぶりだな…。」

ミソラ「それはそれでいいけど、相変わらずね…。っていうか誰が呼んだのよ。」

ガオモン「なにを言う！オレが最強のデジモンであり、そしてカイが最強のテイマーだ！」

ナルガモン「はっ！コロシアムで思いっきり負けたクセによ！犬ッコロはそこらへんで負け犬の遠吠えでもしてな！」

ガオモン「誰が犬だ！」

ナルガモン「やんのかコラぁ！」

ナルガモンとガオモンは睨み合うと、火花が激しく散る。

カイ「やめろガオモン。みっともないぞ…。」

ガオモン「す、すいません…。」

ナルガモン「へっへーんだ！ざまぁみやがれ！」

ナルガモンはあっかんべーする。

ミソラ「アンタもよ！」

ミソラはありったけの力でナルガモンにゲンコツを喰らわした。

ナルガモン「いってぇぇぇぇぇ？」

リュウギ「あはははは…。」

（先が思いやられる…。）

リュウギは苦笑いするしかなかった。

リュウギ「ところでカイ、この島にエンシェントデジモンがいるのは本当か？」

カイ「あぁ。Ｄ－アクセルがそう証明してくれた。」

カイはＤ－アクセルを取り出すと、Ｄ－アクセルが反応していた。

リュウギ「本当だ…。」

カイ「ババモン、そっちは何か見つかったか？」

ババモン「探してみたんじゃが、何も手掛かりなしじゃ…。」

キャンドモン「どうすればいいんでしょう…？」

ミソラ「だったら、島中探し回ればいいんじゃない？」

？？？「島中探し回れっても時間の無駄だよ。」

その時、誰かがババモンの家に入ってくる。リュウギは名前を叫ぶ。

リュウギ「コウジさん、それにレオルモン？」

レオルモン「おっす！」

コウジ「やぁ、久しぶりだね。」

ミソラ「コウジさん、今まで何処に？」

レオルモン「お前らを探してたんだよ！そんで、博士の発明品でここまで導いてくれたのさ。」

ナルガモン「そうだったのか。博士は？」

コウジ「博士なら研究所さ。ところでリュウギ君。」

コウジはポケットからエグザが手に入れたエンシェントストーンを

取り出してリュウギに手渡す。

リュウギ「エンシェントストーン？なんでコウジさんが？」

コウジ「エグザが君に渡しといて欲しいって言われてね…。」

リュウギ「それで、あいつは何処に？」

レオルモン「悪りぃが、あの後エグザは突然と姿を消したんだ。」

レナモン「そうか…。」

コウジ「やぁカズマ君、久しぶりだね。」

カズマ「チィーっす！久しぶり。」

ミソラ「え、知合いなの？」

コウジ「かつて一緒に冒険してきた仲間、シロウの息子さ。」

カズマ「そういうこと。」

一方、リュウギは深刻な表情をする。

リュウギ（なぜエグザは俺にエンシェントストーンを…？）

カズマ「そんな顔しないでさぁ、せっかくエンシェントストーンを手に入れたんだぜ？すなおに喜びましょうやリュウ兄♪」

カズマは冗談気に笑いながらリュウギの肩にポンと手を置く。

リュウギ「あ、あぁ…。」

リュウギは手を広げてエンシェントイリスモンから貰ったエンシェントストーンを取り出す。

ミソラ達も手を広げてそれぞれの試練を乗り越えて手に入れたエンシェントストーンを取り出す。

ミソラ「これでエンシェントストーンは8個ね！」

レナモン「しかし、残りのエンシェントデジモンは何処に…？」

その時、8個のエンシェントストーンが輝き始める。

一同「？」

ババモン「おおっ？エンシェントストーンが？」

8個のエンシェントストーンはとある山へと差していた。

ババモン「あれはエゴッド光山？」

一同「エゴッド光山？」

コウジ「エゴッド光山はオファニモン、セラフィモン、ケルビモンの三大天使によって作られた山さ。」

ミソラ「そのエゴッド光山にエンシェントデジモンがいるの？」

ナルガモン「かもしれねぇな。そうと決まったら早速行こうぜ！」

コウジ「その間に僕らは研究所にいとくよ。」

ナルガモン「コウジ達は行かねぇのか？」

レオルモン「ちょっと大事な用事があってな。エンシェントデジモンはお前らに任せるぜ。」

リュウギ「分かった。」

コウジ「気を付けてね。」

カズマ「そいじゃ、エゴッド光山に向かってしゅっぱーつ♪」

リュウギ達は8個のエンシェントストーンを手にし、エゴッド光山へと向った。

レオルモン「行っちゃったな…。」

コウジ「あぁ…。」

ババモン「ところでお主ら、リュウギに何か隠し事しておるの？」

ババモンは問うと、コウジとレオルモンはドキッとする。

レオルモン「な、なんで分かるの…？」

ババモン「ワシを誰じゃと思っとるんじゃ？お主らの考えは全てお見通しじゃ。」

コウジとレオルモンはお互いに顔を出し見合わせ、ため息をつく。

コウジ「わかったよババモン。真実を言うよ…。リュウギ達をエゴッド光山に行くように指示したのはエグザさ。」

ババモン「なんじゃと?ではなぜエグザはリュウギにエンシェントストーンを…?」

コウジ「託したのさ…。デジタルワールドの運命を握る彼(リュウギ)にね…。」

ババモン「運命じゃと…?」

コウジ「これから話すよ…。」

コウジはエグザから聞いた真実の話しをババモンに説明するのであった。

～エゴッド光山～

エゴッド光山に辿り着いたブレイブエクセリオン。するとエゴッド光山が太陽の反射で光輝き始めた。まるでエゴッド光山がリュウギ達を迎えるように…。

ミソラ「綺麗…。」

カイ「ここにエンシェントデジモンがいるというのか?」

カズマ「いいねぇ～、なんかワクワクして来やしたぜ♪」

リュウギ「行くぞ…。」

リュウギは一呼吸したあと、エゴッド光山を登っていく。

～エゴッド光山　頂上～

エゴッド光山を登って1時間が経つと、ついに頂上へと辿り着いた。

リュウギ「ここが頂上みたいだな…。」

ナルガモン「ひぃ～、やっと着いたぜ～。」

ナルガモンは疲れてしまい、バッタリと倒れる。

キャンドモン「そうですか?楽勝だったじゃありませんか♪」

ナルガモン「テメェは浮いてるからな…。」

カズマ「頂上についたのはいいけど、何もありやせんぜ…?」

リュウギ達は辺りを探すがカズマの言うとおり何も無かった。

カイ「エンシェントストーンなら分かるかもしれないな…。リュウギ、エンシェントストーンを出してみろ。」

リュウギ「あ、あぁ。」

リュウギは8個のエンシェントストーンを取り出すと、突然と反応する。

ガオモン「反応した？」

すると、エンシェントストーンに反応したのか、地面が突然光り出し、地面が激しく揺れる。

一同「？」

キャンドモン「なに？なんですかこれは？」

レオルモンは感づき、突然と叫ぶ。

レナモン「みんな、光から離れるんだ！」

リュウギ達は急いで光から離れる。すると光は円状に結び付き、やがれ地面が割れる。

揺れが治まると、リュウギ達はわれた地面を覗く。

リュウギ「階段…？それに下へつづいてるぞ。」

レナモン「おそらく、この下にエンシェントデジモンがいるかもしれない…。」

ナルガモン「行こうぜ…。」

一同「あぁ。」

リュウギ達は覚悟を決め、謎の階段を降りていく。

～エゴッド洞窟　玉座の間～

階段を降りると、リュウギ達が見たものは巨大な玉座が2つ置かれていた。

カイ「玉座…？」

そのとき、8個のエンシェントストーンが激しく光ると、何処からか低い声が聞こえてくる。

？？？「ようやく来たか、選ばれし救世主達よ…。」

一同「？」

カイ「誰だ…？」

すると、先程とは別の声が聞こえてくる。

？？？「我々はこの時を待っていたぞ…。」

その時、リュウギ達の前に巨大なデジモンが二体姿を現す。

一同「？」

？？？「俺の名は光の十闘士　エンシェントガルルモン…。」

？？？「ようこそエゴッド洞窟　玉座の間へ…。我が名は炎の十闘士　エンシェントグレイモンなり…。」

リュウギはＤ－アクセルでデータを読み取る。

D－アクセル「エンシェントグレイモン、究極体、古代竜型、ワクチン種、必殺技はオメガバースト。

エンシェントガルルモン、究極体、古代獣型、データ種、必殺技はアブソリュート・ゼロ。」

カイ「なんだ、この途轍もない威圧感は…？」

ガオモン「今までのデジモンとは桁違いだ…？」

リュウギ「エンシェントグレイモン、エンシェントガルルモン！俺達はエンシェントストーンを貰いにここへ来た！」

エンシェントグレイモン「分かっておる…。今までよく闘ってきたな…。よって最後の試練をお主らに与える。」

エンシェントガルルモン「ここまで来た事だけは褒めてやろう…。だが、今までのエンシェントデジモンのように甘くはないぞ。俺達は最強のエンシェントデジモンだ。」

一同「……。」

（ゴクリ…）

エンシェントグレイモン「最後の試練は、我々の最強技とお主らの最強技をぶつけ合い、我々の技に勝てばお主らの勝利とする。」

ナルガモン「へ？それだけ…？」

ネレイスモン「なぁんだ楽勝じゃん♪」

カズマ「よっしゃ！だったらオレからやりやすぜ！」

リュウギ「お、おい待てよカズマ？」

カズマ「ネレイスモン、究極体に進化だ？」

カズマはＤ－アクセルをネレイスモンに翳した。するとネレイスモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ネレイスモン「ネレイスモン、ワープ進化？」

『プレシオモン？』

エンシェントグレイモン「さっそく来おったか…。」

エンシェントガルルモン「待て、俺が眼にもの見せてやる…。」

プレシオモン「喰らいやがれ？『シェイキングパルス？』」

プレシオモンは口から強力な超音波を放つ。

エンシェントガルルモンは2本の大剣を振ると、シェイキングパルスは弾き返されてしまう。

プレシオモン「んな？」

カズマ「シェイキングパルスが効いてない？だったら…」

カズマは刀袋から双龍牙を取り出してプレシオモンの頭に飛び乗る。

カズマ「プレシオモン、いつものアレだ！」

プレシオモン「ＯＫ？」

カズマは双龍牙を構えると、プレシオモンは口から強力な水を発射させる。

カズマ「秘技……」

カズマは双龍牙を横一閃に振ると、二つの刃先から剣風によって生み出された衝撃波を放った。すると二つの技が一つとなり、水を纏った強力な衝撃波となった。

カズマ・プレシオモン「『水散波斬（すいさんはざん）？』」

水散波斬は途中で破裂し、無数の水滴はカッターの如くエンシェントガルルモンを切り裂いた。

ミソラ「スゴい？」

レナモン「パートナーとのコンビネーション…。これがカズマとプレシオモンの力か…。」

プレシオモン「やったか？」

エンシェントガルルモン「その程度で俺を倒せると思っておるのか…？片腹痛いわ…。」

カズマ・プレシオモン「なに？」

エンシェントガルルモン「喰らえ…。『シャープネスクレイモア？』」

エンシェントガルルモンは2本の大剣で眩い輝きと共に一閃しプレシオモンを切り裂いた。

カズマ・プレシオモン「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギ「カズマ、プレシオモン？」

プレシオモンは力尽きて倒れてしまい、ネレイスモンへと退化した。

ミソラ「ちょっと、大丈夫？」

カズマ「大丈夫でぃ…。」

ネレイスモン「アイツ、とんでもなく強ぇ…。」

ガオモン「なんだ…、今の技は…？」

カイ「奴の攻撃が閃光のごとく見えなかった…。これがエンシェントガルルモンの力なのか…？」

エンシェントガルルモン「今のは少し加減をした。本気で俺達を倒すつもりで来ないと……死ぬぞ。」

エンシェントガルルモンはギロリと睨むと、途轍もない威圧を放つ。

キャンドモン「めっさ恐ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？」

リュウギ（アイツの眼は本気だ…。安易な気持ちで戦うと本当に死ぬ…。）

リュウギの額から汗が流れ落ち、ゴクリと息を飲み込む。

エンシェントグレイモン「どうした？ここまで来て今更怖じ気づいたか？」

一同「……。」

その時、誰かがフッと笑う。

ナルガモンだった。

ナルガモン「フッ、面白ぇ…。その試練を乗り越えたら俺達は最強なんだろ…？そんな上手い話、一生に一度っきりしかねぇぜ？」

エンシェントグレイモン「……。」

リュウギ「ナルガモン…。」

ナルガモン「ここで背を向けちゃ、オレ達の流儀に反するだろうが…？」

リュウギ「そうだったな…。例え相手が最強のエンシェントデジモンだろうがなんだろうが、正々堂々、真っ向勝負する！それが俺の流儀だ？」

リュウギはそう言って拳を自らの掌に叩きつける。

ナルガモン「その通りだぜリュウギ？」

一同「……。」

ミソラ「リュウギ、ナルガモン…。」

その光景を目にしたミソラ達は目をキリッと覚悟を決めた目になり、前へと踏み出す。

エンシェントガルルモン「引き下がるつもりはなさそうだな…。」

エンシェントグレイモン「よかろう…。我々の試練、乗り越えてみるがよい？」

リュウギ「行くぞ、みんな？」

一同「おう？」

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

ＥＰ８２　～究極の試練？エンシェントグレイモン＆エンシェントガルルモン？～

～エゴッド光山～

一方、エグザはエゴッド光山の山頂から景色を眺めていた。

エグザ「そろそろ試練が始まるな…。死ぬんじゃねぇぞ、リュウギ…。」

エグザは左目にある傷をそっと触ると、とある人物に言われた事を思い出す。

『俺の分まで、生きてくれ…。』

エグザはポケットからある物を取り出し、ジッと見つめる。

エグザ「悪りぃな…。やっぱお前の分まで生きられねぇや…。」

エグザはある物をポケットにしまい、ゆっくりと前へ歩き出すのであった。

次回はブレイブエクセリオンｖｓ最強のエンシェントデジモン？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ８３　～絆を一つに？究極のエターナルブレイブ？～（前書き）

最後の試練ついに決着？

ブレイブエクセリオンの力が一つに？

Ｅｐ８３スタート？

EP83　～絆を一つに？究極のエターナルブレイブ？～

～エゴッド洞窟　玉座の間～

リュウギ達はD－アクセルをそれぞれのパートナーデジモンに翳した。すると、それぞれのパートナーデジモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、ワープ進化？」

『エクシードモン？』

レナモン「レナモン、ワープ進化？」

『サクヤモン？』

ガオモン「ガオモン、ワープ進化？」

『ミラージュガオガモン？』

ネレイスモン「ネレイスモン、ワープ進化？」

『プレシオモン？』

リュウギ「みんな、一斉攻撃だ？」

リュウギが叫ぶと、エクシードモン達はそれぞれの必殺技を放つ。

エクシードモン「『雷迅爆砕衝（らいじんばくさいしょう）？』」

エクシードモンは拳を思い切り地面に殴ると、地面から迅雷が現れる。

サクヤモン「『飯綱(いづな)？』」

サクヤモンは腰に携えた４匹の管狐を放つ。

ミラージュガオガモン「『フルムーンブラスター？』」

ミラージュガオガモンは全身のエネルギーを溜めて、胸の口部から放つ。

プレシオモン「『シェイキングパルス？』」

プレシオモンは口から強力な超音波を放つ。

４つの技が一つとなった。

エンシェントグレイモン「行(ゆ)くぞ…。」

エンシェントグレイモンは強烈な閃光とともに周囲数キロにわたって超爆発を引き起こす。

エンシェントガルルモン「そんな技、この手で葬り去ってくれる！」

エンシェントガルルモンは絶対零度の超凍気と超光を放つ。

２つの技が一つとなった。

エンシェントグレイモン・エンシェントガルルモン「『エンシェント・カタストロフィ？』」

エンシェント・カタストロフィはエクシードモン達の技とぶつかり合うと、エクシードモン達の技はかき消されてしまう。

エクシードモン「なに？」

サクヤモン「あぶない？」

サクヤモンはとっさに金剛錫杖（こんごうしゃくじょう）を地に打ち付け、高らかに叫ぶ。

サクヤモン「『金剛界曼荼羅（こんごうかいまんだら）』？」

すると、周りに邪気を払う浄化結界を張られる。

エンシェント・カタストロフィが爆発すると、結界は呆気なくかき消されてしまい、リュウギ達は衝撃に吹っ飛ばされてしまう。

一同「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ？」

エンシェントグレイモン「……。」

エンシェントガルルモン「そんな技で俺達を超えるだと？笑わせるな！」

リュウギ達は結界のお陰でなんとか軽傷で済んだ。

ミソラ「助かったわ、サクヤモン…。」

サクヤモン「無事で良かった。」

カイ「クソッ、何て強さなんだ…。」

カズマ「ヤベェなぁ…。オレ達、とんでもない奴らに挑んでんだな…。」

余りの強さにあっとうされ、少々弱音を吐くミソラ達。ただ、2人を除いて…。

エクシードモン「へっ、こんなの痛くも痒くもねぇぜ…。なぁ、リュウギ？」

リュウギ「あぁ。ここで背を向ける訳にはいかない…。俺達はまだまだやれる…。」

リュウギとエクシードモンの眼はまだ死んでいなかった。

エンシェントガルルモン「なに…？」

エンシェントグレイモン「ほぅ…。」

エクシードモン「お前ら、嫌なら尻尾巻いて逃げてもいいんだぜ！オレ達だけでもこの試練を乗り越えてやるからよ？」

リュウギ「ここで諦めたら未来は失われちまう…。俺は約束を果たすまで、ここで諦める訳にはいかないんだッ？」

ミソラ「？」

その時、ミソラはあの時リュウギに言われた事を思い出す。

『心配すんなよミソラ。必ずお前を現実世界に還してやる。約束だ…。』

『約束は死んでも守る？それが俺の流儀だからな？』

ミソラ「リュウギ…。」

ミソラは眼をキリッとさせ、ゆっくりと立ち上がる。

リュウギ「ミソラ？」

ミソラ「アンタ達だけ乗り越えても、何も意味ないわ！」

サクヤモン「私も賛成だ…。ここで立ち止まっていては何も始まらない。」

エクシードモン「サクヤモン…。」

すると、カイ達も立ち上がる。

カイ「最強のテイマーになるためだ…。俺もここで負ける訳にはいかない！」

ミラージュガオガモン「それがカイの道…。カイとの約束を果たすため、私は戦う？」

カズマ「ここでのんびり寝てるヒマはないんでさぁ…。デジタルワールドは俺達に助けを求めているんでぃ…。」

プレシオモン「そういうこったぁ…。ここで脱落したら、オレ達に託してくれたデジモン達に合わせる顔がねぇな…。」

リュウギ「カイ、カズマ…。」

その時、リュウギ達のＤ－アクセルから聖なる光りが宿す。

一同「？」

エンシェントガルルモン「なんだ、この光りは？」

エンシェントグレイモン「……。」

（どうやら、リュウギ達の心に答えてくれたようだな…。）

リュウギ達はＤ－アクセルを見ると、画面に『ＥＸモード、可能』と書かれていた。

ミソラ「これは？」

カズマ「どうやら、神様はオレ達を見放さなかったみたいですぜぇ…。」

カイ「全てお前達に賭ける！」

リュウギ「行くぞ？」

リュウギ達はＤ－アクセルをそれぞれのパートナーデジモンに翳し、高らかに叫ぶ。

リュウギ・ミソラ・カイ・カズマ「ＥＸモード、発動？」

エクシードモン達は聖なる光りに包まれ、ピカッと光りの閃光が生じる。

光りが止むと、エクシードモン達の身体に聖なる光りに包まれていた。

エクシードモン「よっしゃゃゃゃ？行くぞお前ら？」

サクヤモン・ミラージュガオガモン・プレシオモン「おう？」

エンシェントガルルモン「フン、今度こそ灰にしてくれるわ…。行くぞ、エンシェントグレイモン？」

エンシェントグレイモン「分かった。」

エンシェントグレイモンは強烈な閃光とともに周囲数キロにわたって超爆発を引き起こし、エンシェントガルルモンは絶対零度の超凍気と超光を放つ。

２つの技が一つとなった。

エンシェントグレイモン・エンシェントガルルモン「『エンシェント・カタストロフィ？』」

エンシェント・カタストロフィはエクシードモン達に襲い掛かる。

エクシードモン「オレ達の絆を喰らいやがれ？」

エクシードモン達は唸り声を上げると、光りのオーラが激しく溢れ出る。

リュウギ・ミソラ・カイ・カズマ「いっけえええええええええええええええ？」

エクシードモン・サクヤモン・ミラージュガオガモン・プレシオモン「『エターナルブレイブッ？？』」

４つの凄まじい光りが１つとなり、やがて光を纏いし巨大な竜へと姿を変える。

エターナルブレイブとエンシェント・カタストロフィは激しくぶつかり合うと、凄まじい突風が生じる。

一同「うおおお

一同「？」

光りが止むと、リュウギ達はゆっくりと目を開けた。

リュウギ「やったのか…？」

リュウギ達は辺りを見回すと、ナルガモン達が倒れていた。どうやら、エクシードモン達は力を使い果たし、成長期へと退化してしまったのだ。

一同「？」

リュウギ達はそれぞれのパートナーデジモンへと駆け寄り、連呼する。

ミソラ「レナモン、しっかりして？」

カイ「ガオモン、ガオモン？」

カズマ「起きろ、ネレイスモン？」

リュウギ「ナルガモン、しっかりしろ！ナルガモン？」

ナルガモン「う、うぅ…。」

その時、ナルガモンはゆっくりと目を開けた。

ナルガモン「痛っつ～…。リュウギ、大丈夫か…？」

リュウギは安心してホッとする。

リュウギ「俺は大丈夫だ…。」

すると、それぞれのパートナーデジモンもゆっくりと目を開ける。

レナモン「無事で良かった…、ミソラ…。」

ミソラ「良かった、レナモン…。

ネレイスモン「あれ？オレは
確か…？」

カズマ「やっと起きやしたか…。」

ガオモン「カイ…、私は…。

カイ「何も言うな。よくやった…。」

ナルガモン「エンシェントグレイモンとエンシェントガルルモンは
どうなったんだ…？」

リュウギ「俺にも分からない…。」

？？？「我々ならこの通りだ…。」

一同「？」

リュウギ達は振り向くと、エンシェントガルルモンは2本の大剣で
身を守り、エンシェントグレイモンは巨大な翼でエターナルブレイ

ブを防いでいた。

ミソラ「そん…な…？」

カズマ「どんだけタフなんでぃ…。」

カイ「くっ…。」

リュウギ「エターナルブレイブが効いてない…？」

エンシェントグレイモン「フ、フフフ…。」

エンシェントガルルモン「フハハハハハハハ？」

その時、エンシェントグレイモンとエンシェントガルルモンは突然高らかに笑う。

一同「？」

エンシェントグレイモン「案ずるな…。最後の試練はお主らの勝ちだ…。」

リュウギ「え？どういう事だよ？」

リュウギ達の頭の上には「？」が幾つも浮かんでいた。何がなんだかさっぱりだった。

エンシェントガルルモン「これを見ろ。」

エンシェントガルルモンは2本の大剣を見せると、2本ともヒビが

入っていた。

そしてエンシェントグレイモンの両翼には傷だらけだった。

エンシェントグレイモン「お主らの絆、見せて貰ったぞ…。」

その時、リュウギ達は大喜びする。

一同「やったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

エンシェントガルルモン「まさか、俺達最強の技を超えるとはな…。少々侮っていたわ…。」

ナルガモン「見たか！オレ達の絆をよぉ？」

エンシェントグレイモン「よくここまで戦い抜いたな…。小関　リュウギよ、手を出せ。」

エンシェントグレイモンとエンシェントガルルモンは念じると、上空から2つの光りが現れ、ゆっくりとリュウギの元へと舞い降りる。

リュウギは手をゆっくりと差し出し、2つの光りを手に取ると、透明色に輝くエンシェントストーンと赤色に輝くエンシェントストーンだった。

リュウギ「ありがとなエンシェントグレイモン、エンシェントガルルモン。」

エンシェントグレイモン「我々の力ではデジタルワールドを救うことはできん…。だからお主らの結ばれた新たなる絆で、デジタルワ

ールドを救ってくれ…。」

リュウギ「あぁ。」

ナルガモン「おう、このオレに任せとけって？」

エンシェントガルルモン「たのんだぞ、救世主達よ…。」

エンシェントガルルモンはリュウギ達に託し、静かに消え去った。

エンシェントグレイモン「小関　リュウギ…。」

リュウギ「？」

エンシェントグレイモン「これだけは記憶しておいて欲しい…。お主はデジタルワールドの運命を握っている…。」

リュウギ「なぜそのことを俺に…？」

エンシェントグレイモン「お主の心の中にある物が眠っておるのだ…。」

リュウギ「俺の…？」

エンシェントグレイモン「その物を光が手にすると世界は光となり、闇が手にすると世界は闇へとなる。所謂、世界の破滅になり兼ねん…。」

ミソラ「世界の…破滅ですって…？」

リュウギ「俺の中に眠るある物って一体なんだよ…？」

エンシェントグレイモン「それは、デジタルワールドの英雄でありお主の父である小関　リュウがお前に託された物、ＥＸコアだ。」

リュウギ「ＥＸコアが俺の中に…？」

リュウギは胸にそっと手を当てる。

エンシェントグレイモン「そのＥＸコアは途轍もない力を発揮する事が出来る…。しかし、精神的なダメージを受けてしまうと逆に暴走する恐れがある…。思い出して見ろ…。」

リュウギは腕を組んで過去を振り返ってみると、リュウギはハッとする。

リュウギ「コロシアムの時だ？」

エンシェントグレイモン「そうだ…。あの時お主は、精神的なダメージによってＥＸコアが暴走したのだ…。」

レナモン「そうか…。だからあの時、リュウギの人格が変わったのか…。」

リュウギ（父さんはなぜ俺にこんな物を…？）

エンシェントグレイモン「リュウギよ、他にも暴走した記憶はないのか…？」

リュウギ「ない…。俺が暴走したのはコロシアムの時だけだ。」

エンシェントグレイモン（あの時の記憶は既になくなっておるようだな…。）

「そうか…。リュウギよ、これからの戦いは激しくなる…。もしかしたら、己自身が闇に呑み込まれる可能性も有り得る…。」

ナルガモン「今更なんだよ!リュウギが闇に呑み込まれたとしても、オレが全力で助ける?」

ミソラ「そうよ…。リュウギは一人じゃないんだからね。」

カイ「一度闇に呑み込まれた俺を助けてくれたんだ…。借りは返さないとな…。」

カズマ「何せ、リュウ兄とオレ達は絆で結ばれてるんでさぁ…。」

リュウギ「みんな…。」

エンシェントグレイモン「ならば安心だ…。デジタルワールドは頼んだぞ…。」

エンシェントグレイモンはリュウギ達に託し、静かに消え去った。

ネレイスモン「行っちゃったな…。」

すると、岩陰からひょっこりとキャンドモンが顔を出す。

キャンドモン「やっと終わりましたか～…。」

ミソラ「アンタ?台詞がないと思ったらそんな所にかくれてたの?」

キャンドモン「はい☆」

キャンドモンは誇らしげに返事をすると、ミソラは思いっきりキャンドモンを殴り飛ばした。

キャンドモン「ぶべらっ？」

ミソラ「誇らしげに言うんじゃないわよ？」

キャンドモン「すみましぇん…。」

カズマ・ネレイスモン「……え？」

その光景を目にしたカズマとネレイスモンは目を丸くする。

カイ「ま、俺達も最初はそういう反応だったな…。」

ガオモン「確かに…。」

リュウギ「あはははは…。」

リュウギは苦笑いする。

ナルガモン「ところでリュウギ、これからどうするんだ？」

リュウギ「一旦、洞窟をでようか…。行こう、みんな。」

～エゴッド光山　頂上～

洞窟を抜けると、空はすっかりと暗い夜になっていた。

リュウギ「もう夜か…。」

リュウギは夜空を見上げると、無数の星があちらこちらに散らばっていた。

すると、ナルガモンは大きなあくびをする。

ナルガモン「ふぁ～、疲れたからここで寝ようぜ。」

レナモン「私も賛成だ…。」

ミソラ「私も～…。」

ネレイスモン「オレも賛……ＺＺＺ」

キャンドモン「って早ッ？」

ガオモン「どうしますカイ？」

カイ「そうだな…。みんな疲れてるだろうからな…。」

リュウギ「それじゃ、ここで泊まるか…。」

リュウギ達は全ての試練を終え、エゴッド光山で休息を取るのであった。

||To Be Continued.....

ＥＰ８３　～絆を一つに？究極のエターナルブレイブ？～（後書き）

それからリュウギ達は激しかった戦いの疲れを癒すため、眠りについていた。ただ１人を除いて…。

リュウギ「……。」

リュウギはゆっくりと起き上がる。

リュウギ（眠れねぇな…。）

リュウギは立ち上がり、ミソラ達を起こさないように他所へ行く。

誰もいない静かな場所でリュウギはその場で寝転ぶ。

リュウギ「……。」

（これで母さんを救える…。そういえば…）

リュウギはふと思い出した。エンシェントストーンを探す前にチンロンモンの言葉を。

チンロンモン『エンシェントストーンは闇の力を抑える強力な宝石だ。１０個のエンシェントストーンが集まればイビルガを生み出す装置、電脳核の起動を停止させる事が出来るのだ…。ただし……いや、何でもない。』

リュウギ（あの時チンロンモンは何か隠していた…。一体何を…？）

？？？「眠れないの…？」

リュウギはガバッと起き上がると、ミソラだった。

リュウギ「ミソラ…。」

ミソラ「隣、座っていい？」

リュウギ「あぁ…。」

リュウギは頷くと、ミソラはリュウギの隣に座る。

ミソラ「エンシェントストーン、ようやく全部揃ったね。」

リュウギ「あぁ…。なぁ、ミソラ。」

ミソラ「なに？」

リュウギ「俺は一刻も早くムゲンマウンテンに行かなきゃならない。だからミソラ、カイ達を……」

ミソラ「イヤよ。」

リュウギ「んな？でもミソラ、お前らを巻き込む訳にはいかないんだ！」

ミソラ「あら、仲間を助けるのに理由なんているの？」

リュウギ「けど…。」

？？？「ミソラの言う通りだ…。」

すると、背後からレナモンが現れる。

リュウギ「レナモン？」

レナモン「これはリュウギ1人の責任ではない。仲間である私達も責任はある。」

リュウギは振り向くと、カイ達がいた。

リュウギ「みんな…？」

カズマ「なに1人でカッコつけてんでさぁリュウ兄…。水臭いじゃありやせんか。」

ネレイスモン「誰のお陰でここまで来れたんだよ？」

カイ「1人で行くなら、俺達の許可を得てから行くんだな…。」

ガオモン「オレ達がついてるじゃないか…。」

ナルガモン「1人で突っ走ってんじゃねぇよ。オレ達ブレイブエクセリオンは絆がモットーなんだろうが？」

リュウギ「そうだったな…。」

リュウギはゆっくりと立ち上がる。

リュウギ「みんな、改めてよろしくな…。」

一同「あぁ。」

すると、夜空はやがて暁へと変わり、暁光が彼らを照らす。リュウギ達は暁光を見つめる。

リュウギ（待っててくれ、母さん…。）

こうしてリュウギは新たな決意を胸に抱き、ムゲンマウンテン再決戦へと迎えるのであった。

＞ｉ３２４１５―１２９８＜

【挿し絵：トリプルミーミング】

次回はついに決戦？

お楽しみに？

Ｅｐ８４　～再誕されし光の英雄～（前書き）

ついにムゲンマウンテン再決戦？

果たしてデジタルワールドを救う事ができるのか？

Ｅｐ８４スタート？

ＥＰ８４　～再誕されし光の英雄～

～デジモン　ＪＥＴ～

休息を終えたリュウギ達はムゲンマウンテン再決戦へと準備に備える。

ババモン「もう行くのかい…？」

リュウ「あぁ。俺達は一日も早くデジタルワールドを救いたいんだ…。」

ミソラ「お世話になりました、ババモン。」

キャンドモン「あれれ？コウジさんとレオルモンは何処へ行ったんでしょうかねぇ？」

リュウギ達は辺りを見回すと、コウジとレオルモンの姿が見当たらなかった。

カズマ「そういや、見当たりやせんねぇ…。」

ババモン「コウジとレオルモンなら、大事な用があって先に発ったぞ。」

カイ「なに？」

ナルガモン「デジタルワールドはいまヤベェってのに、大事な用ってなんだよ？」

リュウギ「仕方ないさ…。俺達だけでも行こう。」

ババモン「そういえば、博士が研究所に来てくれって言っておったぞ。」

レナモン「博士が…？」

リュウギ「分かった。色々ありがとな…。」

ババモン「気を付けるのじゃぞ。」

ミソラ「行ってきます！」

リュウギ達はババモンと別れを告げ、デジモンＪＥＴを発つ。

ババモン（リュウギ達のこと、頼んだぞ…。）

～アグモン研究所　入り口前～

アグモン研究所に辿り着くと、ミソラ達は唖然とする。

その理由は…

カイ「これが研究所なのか？」

ミソラ「ものすっごくボロいね…。」

カズマ「これじゃゴミ屋敷じゃないですかい…？」

それぞれ感想を述べるミソラ達。すると、研究所の中からアグモン博士が出てくる。

博士「誰だギャ！ボロいゴミ屋敷って言ったヤツは？」

ナルガモン「聞こえてたのかよ。」

キャンドモン「鋭いですねぇ～。」

リュウギ「博士、久しぶりだな！」

博士「リュウギ？待ってただギャ！それと…誰だギャ？」

リュウギ「そういえば、カイとは初対面だったな。こっちはクラスメイトの渡里　カイ。それでパートナーのガオモン。」

カイ「フン…。」

ガオモン「よろしく。」

博士「よろしくだギャ♪」

リュウギ「それでこっちは…」

カズマ「紹介する必要はありやせんぜリュウ兄。オレ、ポンコツ君とは結構親しいんでぃ。」

リュウギ「そうなのか？」

カズマ「この双龍牙を造ってくれたのも、ポンコツ君なんでさぁ。」

博士「カズマ～、いい加減そのポンコツ君って呼ぶのやめて欲しいだギャ～…。」

ネレイスモン「本当の事なんだから仕方ねぇだろ?」

カズマ「そうそう、自分の悪い事は素直に受け止めないといけやせんぜ?」

リュウギ・ミソラ「確かに…。」

博士「分かっただギャ?好きにしろだギャ!」

アグモン博士は膨れっ面になってプイとそっぽを向く。

リュウギ「ところで博士、俺達に用があって呼び出したんだろ?」

リュウギは問うと、アグモン博士はハッとする。

博士「そうだったギャ!これからファイル島へ行くだギャか?」

リュウギ「あぁ。」

博士「それなら、デジシップでみんなをファイル島まで送るだギャ!」

カズマ「マジですかぃ?」

ナルガモン「ラッキー♪」

リュウギ「早速頼むよ博士。」

博士「了解だギャ！」

アグモン博士はポチッとリモコンのボタンを押すと、ガレージが開かれる。

一同「おぉ？」

ガレージが開かれると、前よりもパワーアップしたデジシップがあった。

ナルガモン・ネレイスモン「スッゲェェェェェェ？」

ナルガモンとネレイスモンは目を輝かせる。

ミソラ「前よりも大きくなってるわ？」

カズマ「うっひゃ～、デケェな～。」

博士「エンジンや機体の頑丈さ、飛行その他諸々パワーアップしただギャ！それと…」

キャンドモン「それと…？」

博士「いま流行りの低燃費だギャ！」

ミソラ「あっそ…。」

博士「さ、早く乗るだギャ！」

リュウギ達は早速、改良したデジシップに乗る。

～デジシップ～

リュウギ達は椅子に座ってシートベルトをする。

博士「準備はいいだギャか？」

ナルガモン「おう！いつでもいいぜ！」

リュウギ「大丈夫だ。」

博士「それじゃ、出発だギャ！」

アグモン博士はデジシップを操縦すると、デジシップは上空へと飛び上がりファイル島へと向かった。

～ムゲンマウンテン　電脳核の間～

ヴァヌムス「……。」

一方、ヴァヌムスは退屈しのぎにダークネス・ドラグーンを眺めていた。

？？？「リュウ？」

その時、スレイヤードラモンが慌ててヴァヌムスの元へと駆け寄る。

ヴァヌムス「どうしたんだよ急に？それと、この姿の時はヴァヌム

スって……」

その時、スレイヤードラモンはヴァヌムスの胸ぐらを掴む。

スレイヤードラモン「アンクスモンから聞いた。コウジ達を殺そうとしたのは本当か？」

ヴァヌムス「チッ、あのお喋り野郎め…。」

スレイヤードラモン「嘘だよな？嘘だって言ってくれよ！」

ヴァヌムス「嘘じゃねぇよ。マジだ…。」

スレイヤードラモン「なんでだよ…？お前ら親友じゃねぇのかよ？」

ヴァヌムス「俺の計画を邪魔したんだ。あんなヤツ、邪魔者以外なにものでもねぇよ…。」

スレイヤードラモン「そんな…？」

ヴァヌムス「んな事言ってるけど、お前はどうなんだぁ？マヤルコロシアムの時、お前はコウジに言ったよな？」

スレイヤードラモン『邪魔をするなら、例え仲間でも容赦しない？』

スレイヤードラモン「そ、それは…。」

スレイヤードラモンは黙りになると、ヴァヌムスは無理矢理スレイヤードラモンの手を放させる。

ヴァヌムス「放せよ…。俺は忙しいから…。」

ヴァヌムスはそう言って瀬を向けて歩きだすと、スレイヤードラモンは小さく呟く。

スレイヤードラモン「リュウ、変わっちゃったな…。」

ヴァヌムス「俺はあの頃とは違ぇんだよ…。人は月日が経つと、みんな変わっていくもんなんだよ…。でも安心しな。エグザを殺せば、全て元通りになるさ…。」

スレイヤードラモン「……。」

ヴァヌムス「エクセリオンがいつ現れるか分からねぇ…。それまで準備しとけよ…。」

ヴァヌムスはそう言って闇の中へと消え去った。

スレイヤードラモン「……。」

（なんでだ…？なんでこんなに心が痛いんだ…？）

スレイヤードラモンは自らの胸を掴んでギュッと締めるのであった。

～ファイル島　グレートキャニオン～

エグザ「……。」

一方、エグザは高い所から景色を眺めていた。

エグザ「この景色を見るのも、あと僅かだな…。」

エグザは小さく笑うと、突然眼をキリッとさせる。彼の瞳にはムゲンマウンテンが映っていた。

エグザ（待ってろよ、シオリ…。）

エグザはポケットに手を入れてある物をギュッと握り締める。

～ムゲンマウンテン　入り口～

一方、デジシップはファイル島に到着し、リュウギ達はムゲンマウンテンの入り口まで辿り着く。

レナモン「いよいよだな…。」

リュウギ「博士、お前は念のためにデジシップで待機していてくれ。」

博士「了解だギャ！気をつけて行くだギャ！」

リュウギ「あぁ。みんな、行くぞ…。」

一同「あぁ…。」

～ムゲンマウンテン～

ムゲンマウンテンに入ると、前とは変わらずデジタル空間だった。

ミソラ「前来た時と同じね…。」

カズマ「趣味の悪ぃもん作りやがって…。」

キャンドモン「まさか、また罠じゃないですよね？」

カイ「有り得るかもな…。」

キャンドモン「そんな～？」

その時、周りにヴルグモン、アンクスモン、ギーゴモン、スレイヤードラモンが現れ、リュウギ達を囲む。

一同「？」

キャンドモン「早速出たぁぁぁぁぁぁぁ？」

？？？「よく来たな、哀れなエクセリオン共…。」

すると、上空からヴァヌムスが姿を現す。

リュウギ「ヴァヌムス？」

ヴァヌムス「よぅ。何の性懲りも無くノコノコ現れるとはな…。」

アンクスモン「ホント。学習能力ねぇんじゃねぇの？」

アンクスモンは見下すような言い方をして高らかに嘲笑う。

ナルガモン「生憎、コソコソやるより堂々とやるほうがオレは好きなんだよ！テメェらと一緒にすんじゃねぇ！」

ヴァヌムス「まぁいいさ。とりあえず、あの方の邪魔をする奴は消えな。テメェら、リュウギ以外の者を始末しておけ。」

リュウギ「なに？」

ヴルグモン「言われなくてもそのつもりだ。」

ギーゴモン「エクセリオン……消す……。」

アンクスモン「たっぷり痛ぶってやるよ…♪」

ヴルグモン達は戦う体勢に入る。

ヴァヌムス「リュウギ。電脳核の間で待っている…。」

ヴァヌムスはそう言って消え去ると、地面からワープゾーンが現れる。

ナルガモン「リュウギ、行くぞ！」

リュウギ「でも…。」

リュウギは心配そうな顔でミソラ達を見つめる。

カイ「何を今更悩んでる？先に行け！」

カズマ「オレ達も後で追い掛けやすから！」

ミソラ「ここは私達にまかせて！」

リュウギ「お前ら…。くっ！」

リュウギはミソラ達を信じ、ワープゾーンへと走り出す。

リュウギ「行くぞナルガモン！」

ナルガモン「おう！」

リュウギとナルガモンはワープゾーンに入り、電脳核の間へと向かった。

ヴルグモン「何とも哀れだな…。」

アンクスモン「仲間の友情ってヤツ？面白ぇなお前ら♪」

スレイヤードラモン「……。」

カイ「フン、そうやって笑っていられるのも今の内だぞ？」

カズマ「それにオレ達はテメェらの思ってる友情とは少し違いやすぜぇ…。」

ミソラ「私達は絆で結ばれてるのよ？」

ミソラ達はＤ－アクセルをそれぞれのパートナーデジモンに翳した。

すると、データが上書きされ、やがて姿が変わる。

レナモン「レナモン、進化？」

『サクヤモン？』

ガオモン「ガオモン、進化？」

『ミラージュガオガモン？』

ネレイスモン「ネレイスモン、ワープ進化？」

『プレシオモン？』

サクヤモン「お前達は私達が倒す？」

プレシオモン「そしてリュウギ達の後を追う？」

ミラージュガオガモン「覚悟するんだな！」

～ムゲンマウンテン　電脳核の間～

電脳核の間までワープするリュウギとナルガモン。

ナルガモン「野郎！何処行ったんだ？」

リュウギ「出てこいヴァヌムス！」

すると、遠くから足音が聞こえてくる。

ヴァヌムス「そう慌てんなよ…。」

リュウギ「くっ！」

リュウギは右手を広げると、ガンブレード　アルカナムが現れる。

ヴァヌムスは姿を現すと、リュウギとナルガモンは戦う体勢に入る。

ヴァヌムス「時間はたっぷりあるんだ…。ゆっくりして行けよ…。」

リュウギ「悪いが、こっちは急いでいるんだ！」

ヴァヌムス「シオリを助けたくて必死だなぁ…。」

リュウギ「な、なぜ母さんの名前を…？」

ヴァヌムス「ったく…。どんだけ鈍いんだよお前は…。ここまで育てた覚えはねぇっつうの…。」

ヴァヌムスはゆっくりと頭に巻いてある包帯をほどき始める。

ナルガモン「何を訳の分からねぇ事言ってるんだよ？」

その時、リュウギは段々と表情が変わっていく。

リュウギ「ま、まさか…。」

ヴァヌムス「そうだ…。俺だよ…。」

ヴァヌムスの素顔を明かすと、リュウギは驚愕する。

リュウギ「父…さん…？」

ナルガモン「はぁ？」

リュウ「良かった…。親の顔忘れられてたら流石の俺もショックだぜ…？」

リュウギ「なんで父さんが…？父さんはあの日に確か…？」

リュウギは力が抜けてリュウに近寄る。

リュウ「確かに俺はあの時死んだ…。けど、アナログマンのお陰でこうして復活したってなワケ。」

リュウギ「それじゃ、なんであの時俺を殺そうと…」

リュウ「あれはほんの冗談だよ…。アナログマンはエクセリオンを嫌ってるからな。あぁしねぇと裏切り者扱いされるから、一芝居してやったってこと。」

リュウギ「そう…だったのか…。」

ナルガモン「でも、結局アナログマンを裏切ったんだろ？あの方がどうたらこうたらって…？」

リュウ「あのオッサン、ちょいと気が狂ってたから仕留めておいたんだ。あの方は……なんていうか……ゴッドみたいなもんかな？」

ナルガモン「ゴ、ゴッド…？」

ナルガモンは目を丸くしながら首を傾げる。

リュウギ「簡単に言えば神様から使命を貰ったって事？」

リュウ「まぁそういうトコ。それよりリュウギ。こっちこいよ。」

リュウギ「あ、あぁ…。」

リュウギはリュウの近くに寄ると、突然リュウがリュウギの頭を撫で始める。リュウギは顔を赤らめる。

リュウギ「な、なにすんだよ父さん？」

リュウ「俺がいない間、デカくなりやがってよぅ…。」

リュウギ「……。」

ナルガモン「照れんなよリュウギ！せっかく会えたんだからよ！」

リュウギは顔を赤らめながらリュウの手を叩き落とす。

リュウギ「それより父さん、ミソラ達が危ないんだ。早く助けにいかないと…」

リュウ「助けに行く必要なんてねぇよ…。」

リュウギ「え？」

その時、リュウは背中からセイクリッド・ドラグーンを取り出すと、刃が伸びてナルガモンを縛り付けた。

ナルガモン「がはっ？」

リュウギ「なにしてんだよ父さん？」

リュウ「コイツらはエクセリオンだ…。そんな奴ら見す見す逃す訳にはいかねぇだろ？」

リュウギ「待ってくれ父さん！ナルガモンやミソラ達は俺の大事な仲間なんだ？」

リュウ「生憎、俺もエクセリオンが嫌いなんだよ…。なにせエクセリオンはエグザとチンロンモンが選んだんだからな…。」

リュウギ「エグザが…？」

リュウ「かつて俺がデジタルワールドを救った英雄だってのによぅ…。まるで忘れられた感じで切なかったぜ…。」

リュウギ「父さん…。」

リュウ「ここでお前と会った時、俺の存在に気付かなかった…。俺をこんな風に追い込んだのはほとんどお前なんだよ…。」

リュウギ「ごめん、父さん…。」

その時、リュウの表情が突然と変わり、ナルガモンを解放した。

リュウ「ワリィ、冗談だ！」

リュウギ「……え？」

リュウ「息子を脅す親がどの世界にいるんだっつうの…。かと言って俺の怒りは治らねぇ…。」

リュウギ「父さん、俺に出来る事はないか…？出来れば父さんの力になりたい！」

リュウ「そうか…。なら、これはお前にしか出来ない事だ…。」

リュウは再びリュウギの頭を撫でる。

リュウギ「俺にしか…出来ない事…？」

その時、リュウは耳元で小さく囁く。

リュウ「お前の手で、仲間1人残らず消してこい…。」

リュウギ「？」

リュウ「そうすりゃ今までの事は水に流しといてやるよ♪」

リュウはニカッと笑うと、リュウギの身体が震え始める。

リュウギ「今のは冗談じゃないよな…、父さん…？」

リュウ「？」

リュウギ「お前…、一体誰なんだよ…？」

リュウ「なに言ってんだよリュウギ？正真正銘、俺はお前の父さん、リュウなん……」

その時、リュウギの目付きが変わり、怒鳴り声を上げる。

リュウギ「その名を二度と口にするなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギはアルカナムで切り上げると、リュウは素早く交わす。

リュウ「ほぅ、俺を切り捨てる方を選んだか…。」

リュウギ「ふざけるな…。父さんは仲間を売るような事は絶対に言わない…。よくも俺を騙したな…。」

すると、リュウの目付きが突然と変わった。

リュウ「騙される方が悪いんだよ…。まぁいい、猿芝居も飽きたから丁度いいや…。」

ナルガモン「テメェ、誰なんだよ！」

リュウは不気味に笑い、両手を広げる。

リュウ「改めて自己紹介するよ。俺はあの方の支配下でありダークスの大幹部、ヴァヌムス…。俺の目的は、お前の中に眠るＥＸコアさ…。」

ナルガモン「なに？」

ヴァヌムス「ＥＸコアを手にすれば、あの方を蘇らせる事ができるのさ！」

リュウギ「あの方って誰だよ…？」

ヴァヌムス「闇を支配する悪魔神、バロムモン様だ…。」

リュウギ「バロムモン…だと…？」

ヴァヌムス「ＥＸコアは途轍もない力を秘められている…。それを手にすればバロムモン様はデジタルワールドだけでなく、現実世界も支配できるのさ？」

ナルガモン「なんだと…？」

リュウギ「デジタルワールドだけじゃなく現実世界も？」

ヴァヌムス「どうだリュウギ？バロムモン様と一緒に世界を手に入れたくないか…？くだらねぇ友情ごっこなんかよりずっといいぜ？」

ナルガモン「んな事、絶対にさせるかよ？」

ナルガモンは両肘のブレイドでヴァヌムスに切りに掛かる。

ヴァヌムス「お前には聞いてねぇんだよ？」

ヴァヌムスは右手を広げて闇の波動を放つと、ナルガモンの動きが止まる。

ナルガモン「かはっ？身体が……動けねぇ……？」

リュウギ「ナルガモン？」

その時、ヴァヌムスリュウギの足を払うと、リュウギは仰向けに倒れる。

リュウギ「くっ？」

リュウギは立ち上がろうとすると、ダークネス・ドラグーンの刃先がリュウギを止まらせる。

リュウギ「？」

ヴァヌムス「究極の選択肢を与えよう。俺達と一緒に世界を手に入れるか？それともあの世行きか？１０秒以内だ…。９、８、…」

ヴァヌムスはワケもなくカウントを始める。

リュウギ「くっ…。」

（俺は……）

リュウギは悔しさの余りにギュッと拳を握りしめる。

ヴァヌムス「…３、２、１。」

リュウギ「……。」

（俺はまた、仲間誰一人守る事ができないのか…？）

ヴァヌムス「時間切れだ！あの世に行きやがれ？」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンをギュッと握りしめて、リュウギを突き刺そうとする。

ナルガモン「リュウギ？」

リュウギ「？」
（こんなとこで死ぬわけには…）
リュウギは思わず目を閉じたその時だった。
ガキィーーーーン？
リュウギ「……。」
リュウギは目を開けると、ダークネス・ドラグーンはリュウギの左頬を掠らせていた。そう、巨大な大剣でダークネス・ドラグーンの軌道を変えてリュウギを守っていたのだ。
リュウギ「これは…？」
ヴァヌムス「ちぃ？」
ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを抜き取り、素早く後方へと下がった。
ナルガモン「テ、テメェは…？」
？？？「大丈夫か？」
リュウギは立ち上がり、顔を見ると。その正体は左目に傷を持った男、エグザだったのだ。
リュウギ「エグザ…？」
エグザ「……。」

ヴァヌムス「やっと来たか…。」

エグザ「その様子だと、化けの皮が剥がれたようだな…？」

ヴァヌムス「お陰様でな…。もう正体がバレちまったから今から殺すトコだったんだ…。」

エグザ「残念だがそうはさせねぇ…。」

エグザはセイクリッド・レインティアを地面から抜き取って歩き出す。

エグザ「リュウギとシオリは俺が守る…。例えこの命が朽ち果てるまでな…。」

エグザはセイクリッド・レインティアを肩に担ぎ、オールバックした頭をクシャクシャにする。

リュウギ（なんで母さんの名前を…？）

ヴァヌムス「家族誰一人救えねぇクセになにほざいてんだよ？」

リュウギ（家族…？）

その時、リュウギの首にぶら下がっているペンダントが反応する。

リュウギ（父さんのペンダントが反応してる…？まさか…？）

ヴァヌムス「そこまでして英雄ぶりたいのか？エグザ、いや……小

関　リュウ？」

リュウギ・ナルガモン「？」

＞ｉ３２５１０―１２９８＜

【挿絵：トリプルミーミング】

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

ＥＰ８４　～再誕されし光の英雄～（後書き）

なんと、エグザの正体はリュウだった？

果たしてヴァヌムスの野望を阻止する事ができるのか？

お楽しみに？

EP85　～親子の絆～（前書き）

～ムゲンマウンテン～

一方、シオリ達は…。

サクヤモン「『飯綱？』」

ミラージュガオガモン「『フルムーンブラスター？』」

プレシオモン「『シェイキングパルス？』」

それぞれの必殺技を放つサクヤモン達。対するヴルグモン達も必殺技を放つ。

アンクスモン「『ペイン・オブ・ヘル？』」

ヴルグモン「『ダークソニックブレス？』」

ギーゴモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

ギーゴモンは口から途轍もない闇の波動を放つ。

お互いの技がぶつかり合うと凄まじい爆発が生じ、爆煙が舞い上がる。

ヴルグモン「何をしているスレイヤードラモン？お前も応戦しろ！」

スレイヤードラモン「あ、あぁ。」

スレイヤードラモンはフラガラッハを構えた途端、爆煙から黒い影がスレイヤードラモンを取り押さえる。

???「よぅ、説得しに来たぜスレイヤードラモン。」

スレイヤードラモンは黒い影を見て名前を叫ぶ。

スレイヤードラモン「くっ?お前はバンチョーレオモン、それにコウジ?なぜここに?」

バンチョーレオモンの肩にはコウジが乗っていた。

コウジ「コッソリと忍び込ませて貰ったのさ。それで、君を説得するチャンスを待っていたのさ。」

スレイヤードラモン「くっ、退け?」

バンチョーレオモン「言ったろ?お前を説得しに来たって。」

スレイヤードラモン「なんだと…?」

バンチョーレオモン「ヴァヌムスはオレ達を殺そうとした。これは嘘じゃねぇ…。」

スレイヤードラモン「知ってるさ…。でも…」

バンチョーレオモン「まだアイツをリュウと信じ込んでいるのか…?リュウはそんな事しないってお前が一番よく知ってるだろうが…?」

スレイヤードラモン「……。」

コウジ「君もつくづく思ってるハズだよ…。あれは本当にリュウなのか。ってね…。」

スレイヤードラモン「それは…。」

バンチョーレオモン「この際ハッキリ言わせてもらう。ヴァヌムスはリュウじゃねぇ。アイツは正真正銘の偽者だ。」

スレイヤードラモン「だったらリュウはあの時死んだのかよ?」

バンチョーレオモン「心配すんな。リュウはちゃんと生きてるぜ…。」

スレイヤードラモン「……え?」

コウジ「スレイヤードラモン、真実を知る覚悟はあるかい…?」

ついにヴァヌムスと対決?

果たしてスレイヤードラモンの心は…?

Ｅｐ８５スタート?

ＥＰ８５　～親子の絆～

～ムゲンマウンテン　電脳核の間～

リュウギ「エグザが……父さん……？」

リュウ「……。」

ナルガモン「なにがどうなってんだよ？」

リュウギ「それじゃ、俺があの時見たのは…？」

リュウ「説明は後だ。んな事より立てるか…？」

リュウは戦う体勢に入ると、リュウギは声を張り上げる。

リュウギ「父さん？」

リュウ「……。」

リュウギ「俺をずっと騙していたのか…？どうして無事だって早く言ってくれなかったんだよ？」

リュウ「言ったろ？俺の罪は完全に消えちゃいねぇって…。俺は家族誰一人守る事すら出来なかったんだからよぅ…。」

リュウギ「それってどういう…」

ヴァヌムス「頭の悪いヤツだなぁ？要するにあの時お前の見たリュ

ウは双子の兄、セツナがリュウに化けて身代わりになってたんだよ？」

リュウギ「セツナって…、セツナ叔父さんが…？」

リュウ「……。」

ヴァヌムス「あとスゲェ面白い事教えようか？あの時、お前はどうした？」

リュウギ「あの時俺は…。気を失った…。」

ヴァヌムス「チゲェよ…。お前はあの後ＥＸコアが暴走し、リュウ（エグザ）の左目に傷を付けたんだよ？」

リュウギ「……え？」

ヴァヌムス「クククク…♪」

リュウギ「俺が……父さんを……？」

リュウギの手の震えは治まる事なく、悲しみに膝が折れてしまう。

ナルガモン「リュウギ、しっかりしろ？」

リュウギ「そん…な…。」

リュウ「リュウギ？自分を見失うんじゃねぇ？」

リュウは叫ぶが、リュウギの震えが止まらなかった。

ヴァヌムス「悪りぃな。黙ってた方が辛い思いしなくて済んでたな？って遅かったか。ヒャハハハハハハハ？」

リュウギ「クソ…。クソォォォォォォォォォォォ？」

リュウギは唸り声を上げると、身体から闇のオーラが溢れ出す。

ヴァヌムス「そうだ！もっとだ？もっと怒れ？」

ナルガモン「リュウギ？」

リュウ「……。」

その時、リュウはリュウギの側に寄り、突然リュウギの頭をボカッと殴った。

リュウギ「いだっ？」

ナルガモン「んな？」

ヴァヌムス「あん…？」

リュウギ「？」

リュウギは頭を押さえながらキョトンとする。

リュウ「バカヤロが。そんなつまらねぇ事でイチイチ闇に呑み込まれてんじゃねぇよ…。」

リュウギ「父さん…。」

リュウ「過去に拘ってて何の意味があるんだ?後ろばっか見てねぇで前を見てな…。それでも…」

すると、リュウはリュウギの頭にポンと手を置く。

リュウ「俺の息子か…?」

リュウギ「?」

リュウ「左目がなんだ?俺はこの通り見えてるぜ。それとガキのクセにいちいち親の心配なんかしてんじゃねぇよ…。つうか余計なお世話だっつうの…。」

リュウギ「父さん…。」

その時、リュウギは眼をキリッとさせてやる気になる。

リュウギ「分かったよ、父さん!」

リュウ「そうこなくっちゃな♪」

ヴァヌムス「ケッ、ムカつくぜ…。さっさとくたばりな!」

??「くたばるのはお前の方だ?」

その時、上空から黒い影が現れ、大剣を振り下ろす。

ヴァヌムス「?」

ヴァヌムスは素早くバク転して交わす。

リュウギ「お前は？」

黒い影の正体は銀色の鎧を纏った竜騎士、スレイヤードラモンだった。

ナルガモン「スレイヤードラモン？」

リュウ「やっと来たか…。」

ヴァヌムス「スレイヤードラモン、どういうつもりだ？」

すると、スレイヤードラモンはフンと鼻を鳴らす。

スレイヤードラモン「最初から全部話を聞かせて貰った…。よくも俺を騙したな、ヴァヌムス！」

ヴァヌムス「なぜそれを…？」

スレイヤードラモン「全てコウジとバンチョーレオモンから聞いたのさ…。」

リュウギ「コウジさんが？」

ナルガモン「それじゃ、ミソラ達は…？」

スレイヤードラモン「心配ない。コウジ達が応戦してる。」

ヴァヌムス「チィッ…。」

スレイヤードラモン「リュウ…。お前はずっと俺に手を差し伸べてくれた…。それなのに俺は…。」

スレイヤードラモンは今までの事を悔やみうつむく。

リュウ「おいおい、さっきバカ息子に説教したばっかなのにまた説教させるつもりかぁ…？」

スレイヤードラモン「けど…。」

リュウ「ま、気付かなかったのもアレだしな…。罰としてしばらくキノコ生活な…。」

リュウはそう言ってピシッと人差し指を立ててニヤッと笑う。

スレイヤードラモン「リュウ…。」

リュウ「さぁて、役者も揃ったワケだし、ハデに暴れるとしますかぁ！」

リュウはそう言ってセイクリッド・レインティアを肩に担ぐ。

スレイヤードラモン「あぁ？」

リュウギ（これが父さんとスレイヤードラモンの絆…。スゴイ…。）

ナルガモン「なんか燃えて来たぜ？オレ達も行くぜリュウギ？」

リュウギ「あぁ？」

リュウギはＤ－アクセルをナルガモンに翳す。するとナルガモンのデータが上書きされ、やがて姿が変わる。

ナルガモン「ナルガモン、ワープ進化？」

『エクシードモン？』

スレイヤードラモン「遅れるなよ！」

エクシードモン「はっ？言われなくても分かってらぁ？」

リュウ「待たせたなペテン師野郎…。」

リュウギ「お前の野望もこれまで！ヴァヌムス？」

リュウとリュウギは剣の刃先をヴァヌムスに向ける。

ヴァヌムス「ククククク…。」

その時、ヴァヌムスは高らかに笑う。

リュウギ「何が可笑しい？」

リュウ「おいおい、追い詰められて頭がおかしくなっちまったのかぁ？」

ヴァヌムス「所詮、テメェらみたいなゴミにこの電脳核を止める事は出来ねぇ。この電脳核を止まればデジタルワールドは崩壊される

仕組みになっているんだよ？」

リュウギ・エクシードモン「なんだと？」

スレイヤードラモン「そんな…。それじゃシオリを助ける事は出来ないのか…？」

リュウ「なぁに、こっちには秘策があんだよ…。とっておきのな…。」

ヴァヌムス「なに？それはどういう事だ？」

すると、リュウは嫌らしい眼でニヤッと笑う。

リュウ「知りてぇか？教えてやんね♪」

ヴァヌムス「くっ、嘗めるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ヴァヌムスの怒りが爆発し、全身から闇のオーラが溢れ出す。途轍もない突風が吹く。

リュウギ「なんだ、この闇の力は？」

リュウ「おいおい、闇の臭いがプンプンしてやがるぜ…。」

突風が止むと、ヴァヌムスの姿が変わっていた。

＞ｉ３２６６０―１２９８＜

【挿絵：トリプルミーミング】

ヴァヌムス「どうだ？これが俺の本当の姿だ？ハーッハッハッハッハッハ？」

リュウ「ふーん、それがテメェの本当の姿か？ミイラよりそっちの方がお似合いだぜ…？」

ヴァヌムス「見くびるなよ人間が…。俺を怒らたこと、たっぷり後悔させてやる…。」

リュウ「テメェこそ、俺達の絆を見くびってると後悔するぜ？ま、土下座しながら泣き入れても特別に許してやんねぇけどな♪」

ヴァヌムス「人間がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ヴァヌムスは猛スピードでリュウギ達に接近する。

リュウギ「来るよ父さん！」

リュウ「おう？」

リュウはセイクリッド・レインティアを二刀流にして低く構える。

ヴァヌムス「死ねッ？」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを振り回すと、刃先が伸びて蛇のごとくリュウギ達に襲い掛かる。

スレイヤードラモン「させるか？」

スレイヤードラモンは大剣　フラガラッハでダークネス・ドラグー

ンの斬撃を受け止める。

ヴァヌムス「くっ？」

リュウ「喰らいな？」

リュウは二刀流　セイクリッド・レインティアを振ると、剣風によって生み出された衝撃波を2回放つ。

ヴァヌムスはとっさにダークネス・ドラグーンを縮ませて衝撃波を弾き返す。

その時、リュウギは高く飛び上がり、アルカナムを振りかぶる。

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギはありったけの力で振り下ろした。

ヴァヌムス「甘ぇよ？」

ヴァヌムスは両翼を盾にして斬撃を受け止めた。

リュウギ「まだだ？」

リュウギはトリガーを引くと、振動により斬撃の威力が増大して大爆発し、爆煙が舞い上がる。

ヴァヌムス「くっ、小賢しい？」

ヴァヌムスは両翼で風を起こして爆煙を吹き飛ばすと、ヴァヌムス

の瞳にはエクシードモンが映っていた。

エクシードモン「喰らいやがれ？」

エクシードモンは拳で思い切り地面に殴ると、地面から迅雷が溢れ出てくる。

エクシードモン「『雷迅爆砕衝？』」

雷迅は途轍もない早さでヴァヌムスに接近すると、ヴァヌムスは一瞬にして姿を消し、雷迅を交わした。

エクシードモン「なに？」

ヴァヌムス「遅ぇんだよ？」

エクシードモンの目の前にヴァヌムスが現れ、エクシードモンの腹を狙って闇の衝撃波を放つ。

エクシードモン「ぐぁぁぁぁぁぁぁ？」

エクシードモンは吹き飛ばされると、素早く受け身を取って体勢を立て直す。

リュウギ「大丈夫かエクシードモン？」

エクシードモン「へへ…、今のはちと効いたぜ…。」

スレイヤードラモン「素早いな…。どうするリュウ…？」

リュウ「そんなに素早けりゃ、封じりゃいいんだよ…。」

リュウギ「でも、どうやって…？」

リュウ「リュウギ、エクシードモン。お前らだけで奴の足止めをしてくれ。」

リュウギ「分かった。」

エクシードモン「行くぜリュウギ？」

リュウギとエクシードモンはヴァヌムスに接近し、接近戦に持ちこむ。

リュウ「スレイヤードラモン、久しぶりのアレやるぞ？」

リュウはセイクリッド・レインティアを背中に背負い、ポケットから氷結弾を取り出して真上に放り投げる。そして懐から2丁デジガン　ライト&ダークを取り出すと、落ちてくる氷結弾を2丁デジガンに装着させる。

スレイヤードラモン「あぁ？」

スレイヤードラモンは頷き、フラガラッハを前に差し出す。

ヴァヌムス「人間がさっさとくたばりやがれ！」

その頃、ヴァヌムスはそう言って手を広げると、闇の波動を放つ。

エクシードモン「リュウギ？」

エクシードモンは目で合図を送ると、リュウギはエクシードモンの肩を踏み台にして高く飛び上がる。エクシードモンはすぐに闇の波動を交わす。

リュウギ「喰らえ？」

リュウギはアルカナムのトリガーを引いて銃撃する。

ヴァヌムス「くっ？」

ヴァヌムスは両翼で弾丸を弾き返す。

エクシードモン「貰った？『迅竜連牙斬？』」

ヴァヌムスが弾丸に気を取っているその隙に、エクシードモンは両肘の刃、黒夜叉でヴァヌムスに切りに掛かる。

ヴァヌムス「チィッ？」

ヴァヌムスは高く飛び上がって斬撃を交わす。

エクシードモン「クソッ！」

ヴァヌムス「お前らが何を企んでいるのかは全てお見通しだッ？」

ヴァヌムスは両翼をバサッと広げると、両翼から凄まじい闇の波動を放つ。目的はリュウギではなくリュウだった。

リュウギ「父さん？」

リュウ（ニヤッ…）

リュウはポケットからあるマガジンを上に放り投げると、ライト&ダークに入ってある氷結弾を外す。すると、先程放り投げたマガジンをライト&ダークに装着させ、特定の場所に八ヶ所撃ち込む。

リュウ「ビンゴ♪」

リュウは指パッチンすると、先程撃ち込んだ八ヶ所から光が生じて結び付き、巨大な光りの正四面体がリュウとスレイヤードラモンを包囲してバリアを張る。

すると、凄まじい闇の波動は光のバリアによって護られ、無力化となった。

ヴァヌムス「なに？」

リュウ「おいおい、お見通しじゃなかったのかよ？」

ヴァヌムス「チィッ！」

リュウは嫌らしい目をしながらほくそ笑むと、ヴァヌムスはキリッと歯を食いしばる。

リュウ「リュウギ？俺の事いちいち気にしてんじゃねぇ？奴の足止めする事だけ集中してろ？」

リュウはそう言って、包囲弾から氷結弾へと変えてフラガラッハに撃ち込む。

リュウギ「わ、分かった？」

ヴァヌムス「させるかよ！」

ヴァヌムスはダークネス・ドラグーンを振り回すと、刃が伸びてバリアを破ろうとする。

エクシードモン「それはこっちの台詞だ？」

リュウギ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

リュウギとエクシードモンは死に物狂いでヴァヌムスを足止めをする。

一方、リュウは2丁デジガンを懐にしまう。

リュウ「リュウギ、エクシードモン？」

リュウが合図を送ると、リュウギとエクシードモンはヴァヌムスを地面に叩き付けた後、その場から離れる。

ヴァヌムス「クッ…？」

リュウ「一発かましてやりな、スレイヤードラモン。」

スレイヤードラモン「あぁ？」

スレイヤードラモンは氷結化となったフラガラッハを構え、回転体術によって加速させるとフラガラッハから氷の竜巻が発生し、ヴァ

ヌムスを包み込んだ。

ヴァヌムス「なに？」

リュウ・スレイヤードラモン「『天竜斬破　氷帝！！』」

すると、氷の竜巻に包みこまれたヴァヌムスは氷結化となり、氷の柱の中に閉じ込めた。

ヴァヌムス（くっ、こんな物すぐに…？）

リュウ「おっと、まだ終わっちゃいねぇぜ…。」

ヴァヌムス「？」

ヴァヌムスの瞳にはエクシードモンが映っていた。

エクシードモン「さっきの仕返しだ…。」

エクシードモンは拳を集中させると、拳から凄まじい雷が生じる。

ヴァヌムス（バ、バカな…？）

エクシードモン「俺達の絆を喰らいやがれ？」

すると、エクシードモンは雷迅のごとく予測不能な動きでヴァヌムスに接近し、渾身を込めた一撃必殺を放つ。

エクシードモン「『天覇迅雷掌？』」

ヴァヌムス「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

氷の柱は粉々に砕かれ、ヴァヌムスはバタリと地面に倒れる。

エクシードモンは華麗に着地し、決めポーズをする。

エクシードモン「Ｊａｃｋ　ｐｏｔ？」

リュウギ「ハァ…ハァ…。」

リュウ「やればできるじゃねぇかよ、リュウギ…。」

リュウはニヤッと笑い、ゆっくりと手を差し出して握手を求める。

リュウギ「父さん…。」

リュウギは小さく笑い、手に取ろうとしたその時だった。

グサリッ？

リュウギ「……え？」

なんと、ダークネス・ドラグーンの刃先がリュウの腹を貫いたのだ。

リュウギ「父さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

||To Be Continued.....

Ｅｐ８５　～親子の絆～（後書き）

次回はついに決着？

しかし思いも寄らない事が起きてしまう？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ８６　～英雄、光へと散る…。～（前書き）

ついにクライマックス？

果たしてデジタルワールドはどうなってしまうのか…？

Ｅｐ８６スタート？

EP86　～英雄、光へと散る…。～

～ムゲンマウンテン　電脳核の間～

リュウギ「父さぁぁぁ

リュウは口から大量に出血する。

スレイヤードラモン「やめろリュウ?もう喋るな?」

リュウギ「……。」

リュウ「リュウギ?」

その時、リュウギは一瞬にして姿を消した。

気が付くと、ヴァヌムスの前に現れ拳をギュッと握り締めていた。

ヴァヌムス「?」

リュウギの瞳は、もはや以前のようなキリッとした眼ではなく復讐に取り付かれた眼で瞳孔が開いていた。

リュウギ「ウオォォォォォォォォォォォ?」

リュウギはありったけの力でヴァヌムスを殴り飛ばした。

ヴァヌムス「ぐおっ?」

ヴァヌムスは素早く体勢を立て直そうとすると、リュウギは瞬間移動してヴァヌムスの足を掴んだ。

ヴァヌムス(こいつ、この間暴走したのと全く違う?どうなってやがんだ?)

リュウギはありったけの力でヴァヌムスの顔面を殴り、地面に叩き付けた。

リュウギはヴァヌムスの胸ぐらを掴み、ヴァヌムスの顔面を何発も殴る。

リュウギ「ウオォォォォォォォォォォォォ？」

スレイヤードラモン「スゲェ…。あのヴァヌムスが手も足も出ないなんて…。」

一方、リュウギを見て驚愕するスレイヤードラモン。すると、リュウは小さく潰れる。

リュウ「……めろ。」

スレイヤードラモン「？」

リュウ「今すぐリュウギを…やめさせろ。今度こそ…闇に呑まれちまう…。」

スレイヤードラモン「？」

エクシードモン「コロシアムみたいにか？」

リュウ「いや、下手するとそれ以上かもしれねぇ…。」

エクシードモン「？」

スレイヤードラモン「どうすれば？」

リュウ「俺に…任せろ…。」

リュウギ「ウオォォォォォォォォォォォォ？」

リュウギは掴んでたヴァヌムスの胸ぐらをそのまま壁に投げ飛ばした。そしてアルカナムを拾ってヴァヌムスに投げ付けた。

ヴァヌムスは壁に叩き付けられた後、先程投げ付けたアルカナムがヴァヌムスの胸に突き刺さる。

ヴァヌムス「かはっ？」

しかし彼の暴走は治まらなかった。リュウギはアルカナムを引き抜いてヴァヌムスを何度も斬りつける。

ヴァヌムス「ごほっ？」

（んだよコレ…？これじゃまるで、バケモノと戦ってるようなもんじゃねぇか…？）

リュウギはアルカナムを振りかぶってトドメを刺そうとした。

リュウギ「ウオォォォォォォォォォォォォ？」

リュウギはアルカナムを振り下ろしたその時だった。

ガキィーン？

リュウギ「？」

セイクリッド・レインティアとアルカナムは鍔競り合う。なんと、リュウギの斬撃を受け止めたのはリュウだったのだ。

ヴァヌムス「テメェ…、どういうつもりだ…？」

リュウ「勘違いしてんじゃ…ねぇ…。俺はただこの…バカ息子を闇から引きずり出す…だけだ…。」

リュウギ「邪魔をするな？」

リュウ「いい加減目を覚ましやがれ…、バカヤロォォォォォ？」

リュウはセイクリッド・レインティアを押し返すと、アルカナムの刃が折れてしまう。

リュウギ「？」

やがて折れたアルカナムの刃は地面に突き刺さる。

リュウ「いつまで駄々っ子みたいに騒いでんだよ…。んなことしたら…本当に大切なもんが失われちまうぞ…？」

リュウギ「父…さん…。」

正気にリュウギはそのまま気を失い、地面に倒れるとエクシードモンがリュウギを支える。

エクシードモン「リュウギ？」

リュウ「くっ？」

出血は止まることなく、リュウは腹を押さえる。

リュウ「ハァ…ハァ…。」

ヴァヌムス「これで勝ったと思うなよ…。俺にはバロムモン様がいる…。」

リュウ「思っちゃ悪いかよ…。」

リュウはセイクリッド・レインティアを真上に放り投げる。

ヴァヌムス「？」

その時、スレイヤードラモンがセイクリッド・レインティアを掴み取った。

ヴァヌムス「んな？」

リュウ「見せてやりな…、スレイヤードラモン…。」

スレイヤードラモンは光りに包まれ、黄金の鎧に両手にフラガラッハを持つ竜騎士、スレイヤードラモンＢＭ（ブレイブモード）へと姿を変える。

スレイヤードラモンＢＭ「これで終わりだ、ヴァヌムス？」

スレイヤードラモンＢＭは二刀流、フラガラッハで練った竜波動を下方から上方に向けて解き放ち、巨大な剣圧を放つ。

スレイヤードラモンＢＭ「『昇竜斬波　零式ッ！！！！』」

リュウ「悪魔神がなんだ…？んなもんバカ息子がぶっ倒してくれるよ…。」

リュウはそう言ってニヤッと笑った。

ヴァヌムスは昇竜斬波　零式の餌食となり、跡形もなく消滅した。

ヴァヌムス「ク、クソォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ？」

リュウ「ハァ…ハァ…。」

エクシードモン「やった…。」

エクシードモンは力を使い果たし、ナルガモンへと退化する。

リュウは立ちくらみし、シオリが眠るクリスタルへと近づく。

リュウ「一件…落着だな…。」

リュウは座り込み、クリスタルにもたれる。

リュウ「これでもう大丈夫だぜ、シオリ…。」

すると、スレイヤードラモンＢＭはドラコモンへと退化し、セイクリッド・レインティアはリュウの足元に突き刺さる。

ドラコモン「リュウーーー！」

ドラコモンは慌ててリュウの元へと駆け寄る。

ドラコモン「リュウ、しっかりしろ！」

リュウ「まいったな…。血の出し過ぎで目眩が…。」

リュウは虚ろな目でドラコモンを見つめる。

リュウ「ドラコモン…、リュウギのＤ－アクセルを持って来てくれ…。」

ドラコモン「わ、分かった…。」

ドラコモンはリュウギに左手首にはめてあるＤ－アクセルを外してリュウに持っていく。

ナルガモン「一体何をするつもりなんだよ…？」

リュウ「言ったろ…？こっちにはとっておきの秘策があるってよ…。」

リュウはリュウギのＤ－アクセルを手にし、１０個のエンシェントストーンを取り出す。

リュウ「こいつを…。」

すると、エンシェントストーンが輝き出すとクリスタルが反応する。

電脳核の活動を停止させたのだ。

ナルガモン「電脳核が止まった…？」

すると、クリスタルの中にいるシオリが出てくる。

ドラコモン「シオリ？」

その時、地面が激しく揺れ始める。ヴァヌムス曰く、電脳核が止まればデジタルワールドが崩壊される仕組みになっているとはこの事だった。

～ムゲンマウンテン～

その頃、ミソラ達は…。

ミソラ「え、地震？」

キャンドモン「あっひゃゃゃゃゃゃゃ！めちゃ揺れてるよコレ？崩れたら全員オダブツじゃねぇかこりゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？」

キャンドモンは暴走してしまい、早くもテンパる。

バンチョーレオモン「コウジ。」

コウジ「あぁ。どうやら上手くいったみたいだね…。」

コウジはそう言って中指で眼鏡をずり上げる。

ヴルグモン「ヴァヌムスめ、しくじったな…。」

ギーゴモン「ヴァヌムス……失敗……。」

ヴルグモン「ここは一旦退くぞ！」

アンクスモン「そう言うなよ。今からが面白いトコなんだぜ？」

ヴルグモン「あの方を怒らせるつもりか？さっさと退くぞ！」

ギーゴモン「分かった…。」

アンクスモン「チッ…。」

ヴルグモン達は危険を察知したのか闇の中へと消え去った。

カイ「待て？」

ミラージュガオガモン「カイ、我々も退きましょう！」

ミソラ「でも、リュウギとナルガモンがまだよ？」

カズマ「大丈夫でさぁミソ姉。あいつらはそう簡単にくたばる様なヤワな奴らじゃありやせんぜ。」

プレシオモン「そういうこった！」

バンチョーレオモン「ここで全滅するわけにはいかねぇだろ？」

コウジ「ここはリュウギ君達を信じよう！さ、早く！」

サクヤモン「行きましょ、ミソラ。」

ミソラ「……。」
（リュウギ…。）

ミソラはリュウギを信じ、ムゲンマウンテンから脱出をする。

～ムゲンマウンテン　電脳核の間～

リュウ「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

リュウは唸り声を上げると同時に身体から生じる光のオーラが溢れ出す。すると、地震はおさまった。

ナルガモン「止まった…。」

リュウ「これで…よしっと…。」

すると、リュウギはゆっくりと目を開ける。

リュウギ「う、う～ん…。」

リュウギの瞳にはリュウが映っていた。

リュウギ「父さん？」

リュウギは慌ててリュウの元へと駆け寄る。

リュウ「よぅリュウギ…。ちょうど良かったぜ…。」

リュウは虚ろな目をしながら小さく笑う。よく見ると、リュウの身体が段々と光りとなって消えていく。

リュウギ「大変だ…？早く手当てしないと？」

リュウ「もう…無理だ…。」

リュウギ「簡単に諦めちゃダメだ？俺が何とかするから？」

リュウ「リュウギ…。」

リュウギ「簡単に諦めるなって教えてくれたじゃないか？俺は最後まで流儀を貫き通すんだ？だから父さんを助け…」

リュウ「リュウギ？」

リュウは怒鳴り声をあげると、リュウギは思わず言葉を失う。

リュウギ「？」

リュウ「安心しな…。俺は死なねぇよ。少しの間眠るだけだ…。」

リュウギ「父さん…。」

リュウ「俺を誰だと思ってんだ…？泣く子も黙る…よろず屋のリュウさん…だぜ？」

ドラコモン「リュウ…。」

ドラコモンはグッと涙を堪える。

ナルガモン「エンシェントストーンを使ってなにしたんだよ…？」

リュウ「これでデジタルワールドは安全だ…。なぜなら、俺がこのデジタルワールドの電脳核になるからだ…。」

リュウギ「え……？」

ナルガモン「まさか、それが狙いで最初から…？」

リュウ「そうだ…。ま、罪を犯したんだから仕方ないってもんさ…。」

リュウギ「父さん…、俺の見たあれは一体…？ヴァヌムスの言っていた事って本当なのか…？」

リュウ「あぁ…。それはなぁ…」

それは、あの事件まで遡る…。

リュウ（エグザ）「ク、ククク…、フハハハハハハハハハ…？」

幼いリュウギは虚ろな目で見ると、金髪の男が倒れていた。その金髪の男はリュウの双子の兄、セツナだった。リュウギはそうとも知らず自分の父親が殺されたと思い込み、そのまま気を失ってしまう。

高らかに笑った後、リュウは突然と涙を流す。

リュウ（エグザ）「守れなかった…。家族誰一人も…。畜生…。チクショォォォォォォォ？」

それから彼はリュウという名前を捨て、エグザとなって1人で罪を背負い込むのであった。

ーーーーーーーーーーーーーーー

ドラコモン「そうだったのか…。そうとも知らずに俺は…。」

リュウギ「俺のせいで…。俺のせいで父さんは…。」

リュウギは悲しみに膝が折れ、段々と涙が溢れてくる。

リュウ「おいおい…、男のクセにメソメソ泣くんじゃねぇよ…。」

リュウギ「でも…。」

リュウ「心配すんな…。俺がこのデジタルワールドの…電脳核になって、お前らを見守ってやらぁ…。」

ドラコモン「リュウ……。」

リュウ「デジタルワールドはまだ平和になってねぇ…。ヴァヌムスを…操る黒幕、バロムモンを倒さなきゃなんねぇ…。リュウギ、そいつらはお前に…任せたぜ…。」

リュウギ「……。」

リュウはドラコモンの方へと向く。

リュウ「ドラコモン…。」

ドラコモン「……なに？」

リュウ「またお前と一緒に戦えて…嬉しかったぜ…。みんなにヨロシクな…。」

ドラコモン「リュウ…。」

リュウ「それとナルガモン…、バカ息子を…頼んだぜ…。」

ナルガモン「お、おう…。」

リュウは小さく笑うと、最後にリュウギの方へと向く。

リュウ「最後にリュウギ。母さんを頼んだぜ…。それと…」

リュウは手を差し伸べ、リュウギの頭を撫でる。

リュウ「俺の分まで生きろ…。御縞　リュウギではなく、小関　リュウギとしてな…。」

リュウギ「？」

その時、リュウの手が地面に着き、静かに息を引き取った…。

リュウギ「父…さん…。」

リュウの死により、リュウギ達は目の前が真っ白になる。

ドラコモン「バカヤロ…。」

ナルガモン「くっ…。」

リュウギ「父…さん…、うわぁぁぁ

ミソラ「リュウギ…。リュウギーーー？」

カイ「ったく、世話の焼ける奴だ…。」

ミソラ達はリュウギ達の元へと駆け寄る。

レナモン「無事で良かった、ナルガモン。」

ナルガモン「お、おう。まぁな。」

すると、ナルガモンのいつもの元気がない事に気付くネレイスモン。

ネレイスモン「どうしたんだよナルガモン？」

カズマ「あのミイラ君を倒したのが意外だったからビックリして声が出ねぇんですかい？」

ナルガモンはうつむきながら小さく呟く。

ナルガモン「そんなんじゃ…ねぇよ…。」

カズマ・ネレイスモン「？」

レナモン「ナルガモン…？」

一方、ドラコモンは…。

コウジ「お帰りドラコモン。」

ドラコモン「コウジ、レオルモン。ごめん…。」

レオルモン「なに言ってんだよ?仲間なのに助ける理由なんて必要ねぇだろ?」

ドラコモン「うん…。」

コウジ「ドラコモン、リュウは…?」

ドラコモンはうつむきながら小さく呟く。

ドラコモン「……スッゲェカッコ良かったよ…。」

コウジ「……そうか。」

レオルモン「リュウ…。」

そしてリュウギは…。

ミソラ「心配したんだよリュウギ?」

カイ「リュウギ、その人は…?」

リュウギ「……。」

リュウギはずっと黙りだった。

ガオモン「どうしたんだ?」

リュウギ「……っといてくれ…。」

ミソラ「リュウギ…？」

リュウギ「もう…、ほっといてくれ…。」

リュウギの冷たい言葉にミソラは唖然する。

ミソラ「どうしたのよ…リュウギ…？」

リュウギ「……。」

カイ「何があったんだ？言ってみろ！」

リュウギ「お前には関係ねぇよ…。」

カイ「なに…？」

リュウギはそう言ってシオリを背負ったまま歩き出す。

シオリ「ちょっとリュウギ？」

ナルガモン「待ってくれミソラ。１人にさせといてやれ…。」

ミソラ「一体何が合ったのか説明してよ！」

コウジ「それは僕が説明するよ。」

カイ「コウジさん…？」

コウジ「実は……」

コウジはこれまでの事を全てミソラ達に話すのであった。

～迷わずの森～

一方、リュウギはシオリ背負いながらただ歩き続ける。

リュウギ「……。」

その時、シオリはゆっくりと目を開けた。

シオリ「う、う～ん…。」

リュウギ「母さん？」

リュウギはシオリをゆっくりと地面に降ろした。

シオリ「私は……？」

リュウギ「母さん、やっと会えた…。」

シオリはリュウギを見つめると次の瞬間、とんでもない事を口にする。

シオリ「君は……誰……？」

リュウギ「？」

リュウギは頭の中が真っ白になり、膝が折れる。そう、彼女は電脳核に居すぎて記憶喪失になったのだ。

リュウギ「……そだ…。ウソだよな…？ウソだって言ってくれよ母さん？」

シオリ「私は…誰…？どうしてここにいるの……？」

リュウギの眼には涙が溢れ、ありったけの声で泣き叫ぶ。

リュウギ「畜生…。チクショォォォ

Ｅｐ８６　～英雄、光へと散る…。～（後書き）

リュウギ（俺はいままで何をやっていたんだ…？俺はなんでここにいるんだ…？父さんはデジタルワールドのために死んだ…。そして母さんは俺の知っている母さんはもういない…。これからどうすればいいんだよ…？結局俺は誰も助ける事ができないんだ…。）

次回はついに第４章完結…。

果たして全て失ったリュウギの行方は…？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ８７　～救世主達の新たなる決意～（前書き）

ついに第４章完結！

果たしてリュウギ達は…？

Ｅｐ８７スタート？

EP87　～救世主達の新たなる決意～

デジタルワールドに再び平和が訪れて数日後が経つ…。

～有野北高校～

ミソラ「……。」

ミソラは窓をジッと眺める。

???「おっはよ！」

すると、誰かがミソラの背中をポンと叩く。

ミソラ「？」

（まさか、リュ……）

ミソラはハッと振り向くと、同級生のアカネだった。

アカネ「ど、どうしたのよミソラ…？怖い顔して…？」

ミソラ「え、あ、いやなんでも無いわよ！」

アカネ「ふーん。あ、おはよ！」

アカネは他の友達とあいさつしにミソラの席から離れる。

ミソラ「……。」

カイ「リュウギだと思ったのか…？」

ミソラは振り向くと、カイがいた。

ミソラ「カイ…。うん…。」

キーンコーンカーンコーン♪

学校のチャイムが鳴ると、生徒達は急いで席につく。すると、担任の先生がドアを開けて入ってくる。

生徒「きりーつ！礼！ちゃくせーき！」

先生「えぇ、みんな知ってると思うが、クラスメイトの御縞　リュウギが家庭の事情で東京へ引っ越しをした。」

その時、クラス内はざわめく。すると、生徒達の声が聞こえてくる。

生徒Ａ「え…？御縞がかよ？」

生徒Ｂ「どうしたのかしら御縞くん？」

生徒Ｃ「噂によると行方不明だった御縞ん家の母さんが見つかったらしいぜ…。」

生徒Ｂ「そうなの？それで…？」

生徒Ｃ「さぁ…？」

先生「静かにしろ！ほんじゃ、授業始めるぞ。」

ミソラ・カイ「……。」

それからの事を知る者はミソラとカイだけだった…。

それは、数日前まで遡る…。

～はじまりの街～

これまで隠されていた話をコウジから全て聞くと、ミソラ達は驚愕する。

ミソラ「それじゃ、エグザがリュウギのお父さんで…？」

カイ「さっきの人がリュウギの母親だというのか…？」

コウジ「あぁ…。リュウ曰く、デジタルワールドはまだ完全に平和になっていない…。ヴァヌムスを操る黒幕を倒さなければならない…。奴らの居場所は恐らく闇の世界…。通称ダークエリアをね…。」

カズマ「だったら、今すぐダークエリアへ殴り込みに行けばいいんじゃないんですかぃ？」

コウジ「戦う気力を失った彼はどうするんだい…？彼の持つＥＸコアが黒幕を倒す鍵となるんだよ。」

カズマ「そ、それは…。」

コウジ「安心して。憎しみや悲しみで出来た電脳核を停止させたから、イビルスは出てこないし、ダークスもしばらくは襲って来ない

と思うよ。」

ナルガモン「ってことはつまり、しばらくは平和ってことか？」

レオルモン「まぁそういう事。それに、電脳核を停止させたことでデジタルゲートも開かれたからいつでもデジタルワールドに出入りできるぜ。」

コウジ「奴らはこれで終わらせやしない…。奴らが何か仕掛けてくるか分からないからそれなりの対策を立てないと…。」

コウジはそう言って中指で眼鏡をずり上げる。

レナモン「しかし、なぜエグザがこんな事を…？」

ドラコモン「ケリを着けたかったんだよ…。それと、自分の犯した罪を償うためにな…。」

ミソラ「そんな…。」

ネレイスモン「でも、母親がいるなら大丈夫だろ？あいつは1人じゃねぇって！」

カズマ「だと良いんですがね…。」

その時、リュウギの叫び声が聞こえてくる。

一同「？」

ミソラ「リュウギ？」

～迷わずの森～

ミソラ「リュウギーーー！どうしたの？」

ミソラ達は慌ててリュウギの元へと駆け寄ると、リュウギは悲しみに膝が折れて泣じゃくっていた。

リュウギ「クソ…。クソ…。」

カズマ「リュウ兄…。」

すると、シオリは泣きじゃくるリュウギに頭を撫でる。

シオリ「何が合ったか知らないけど、元気だして…。」

レオルモン「シオリ？目を覚ましたんだな？」

ドラコモン「シオリ？」

シオリはコウジ達を見て首を傾げる。

シオリ「君達は誰？この子のお友達…？」

レオルモン・ドラコモン「？」

コウジ「まさか…、記憶喪失？」

シオリ「？」

シオリが記憶喪失だと知ったのはこの時だった。

それから、リュウギとナルガモン、そしてミソラは地元の東京へと帰っていった。しかし、彼からの連絡は一切なかったのであった。

ーーーーーーーーーーーーーー

カイ「……。」

ミソラ「……。」

（リュウギ、今頃なにをしてるの…？）

2人はリュウギの事を考えているとあっという間に時間が過ぎていった。

キーンコーンカーンコーン♪

先生「今日はここまで。ほんじゃ、気を付けて帰れよ～。」

チャイムが鳴ると、生徒達は帰宅していく。しかし、ミソラとカイはまだ席についたまま黙り込んでいた。

ミソラ「……。」

カイ「……。」

先生「お前らもさっさと帰れよ。ほんで、帰る時に鍵閉めていけよ。」

担任の先生はそう言って教室から退室する。

すると、カイは突然と席から立つ。

ミソラ「……カイ?」

カイ「デジタルワールドはまだ平和じゃない…。コウジさんの言う黒幕を倒さないと本当の平和は見えない…。」

カイはそう言って教室のドアを開ける。

ミソラ「何処へ行くの?」

カイ「リュウギが今ここにいないからなんだ?俺には関係のないことだ。俺は俺のやるべき事をやる…。」

ミソラ「カイ…。」

カイ「じゃあな…。」

カイはそう言って教室から退室する。

ミソラ「……。」

(私の…やるべき事…。)

ミソラは窓からボーッと景色を眺めるしかなかった。

ミソラ「リュウギ…。」

~デジタルワールド　アイシクル氷山~

一方、カイはガオモンと共にアイシクル氷山に来ていた。

ガオモン「ここへ来るの、久しぶりですね…。」

カイ「あぁ…。ガオモン、俺は最強のテイマーになる。」

ガオモン「分かっています。私はカイとの約束を果たすまで強くなります！」

カイ「そうか…。ブリザーモン、しばらくの間だが、世話になるぞ！」

カイは叫ぶと、ブリザーモンの大群がゾロゾロとでて来る。

ブリザーモン「うおぉぉぉぉぉぉ？」

ブリザーモン達は両腕を上げて返事をすると、カイは小さく笑う。

カイ「よし、行くぞ！」

カイは右手を広げると、巨大手裏剣　ギルガメッシュが現れる。

ガオモン「はい。全ては我が主の為に？」

～教室～

辺りはすっかりと暗くなり、ミソラはまだ席について景色を眺めていた。

？？？「ミソラ。」

ミソラのＤ－アクセルからレナモンの声が聞こえてくる。

ミソラ「どうしたのレナモン？」

レナモン「デジモンの気配がする。」

ミソラ「まさか！？」

レナモン「それもかなり近い。学校の外にいる。」

ミソラ「分かったわ！」

ミソラは確信した。このデジモンの気配はナルガモンだと。そしてリュウギが帰ってきたんだと…。

～通学路～

学校を出て辺りを見回すミソラ。

ミソラ「リュウギ！何処なの？」

そのとき背後から低い声が聞こえる。

？？？「誰かお探しですか、お嬢さん？」

ミソラはバッと後ろへ振り向くと、頭にタオルを巻き、口にタバコを咥え、茶色いサングラスをかけた中年男が地べたに座っていた。

ミソラ「おじさん、聞きたいことがあるんだけど…」

？？？「小関　リュウギならいねぇぞ…。」

ミソラ「え！？」

ミソラは驚愕する。すると、Ｄ－アクセルの中にいるレナモンが口を開く。

レナモン「ミソラ、この人からデジモンの気配がする。」

ミソラ「あなた、何者なの…？」

？？？「名乗る程でもねぇよ…。んじゃま、取り合えず…」

中年男は小さいダンボールに手を入れると、ミソラは危険を察知したか警戒する。

ミソラ「！？」

（まさかこの人、コウジが言っていた黒幕…！？）

すると、中年男が取り出したのは黄色くて小さな生き物だった。

？？？「ヒヨコ、買うか？」

すると、ミソラは目を丸くする。

ミソラ「……はぁ？」

そう、中年男の正体はかつてリュウと共に旅をしたタツキだったのだ。

そして…。

ミソラ「へぇ～、それじゃタツキさんもリュウギのお父さんの仲間だったんだ…。」

タツキ「まぁな。」

ミソラ「それで、なんでここにいるの…？」

タツキ「コウジから話は聞いた…。お前さん、俺んトコで修行しないか？」

ミソラ「修行ってなんの？まさかヒヨコを育てるとか言わないでしょうね…？」

ミソラはそう言って少し引く。

タツキ「いや違うから…。」

タツキはすかさずツッコム。

タツキ「強くなりたいんなら、俺んトコで修行しないかって聞いてんだよ…？」

ミソラ「アンタ、私に教える程強いの…？」

タツキ「オッサンを甘く見ちゃ困るぜ？俺はこう見てもケッコー強いんだぜ？」

ミソラ「ふーん…。」

その時、ミソラは突然パンチ繰り出すとタツキはバシッとミソラの拳を受け止める。

ミソラ「!?」

（私のパンチを受け止めた!?）

タツキ「これでも信じねぇのか？」

タツキはそう言って手を放す。

ミソラ「……。」

タツキ「お前さん、その拳で誰かを守りたいって思わないか？」

ミソラ「私の…拳で…？」

タツキ「仲間、パートナー、そしてお前さんの大切な人。これはお前さんにしかできないことだ…。」

ミソラ「私にしか…できないこと…。」

タツキ「そっ。ま、俺に受け止められるようじゃ、誰も守ることすらできねぇな。」

ミソラ「……。」

タツキ「ま、やるかやらねぇかはお前さんに任せるよ…。」

タツキはそう言って背中を向けて歩き出す。その時、ミソラはタツキを呼び止める。

ミソラ「タツキさん！」

タツキはピタリと足を止めてゆっくりと振り向くと。

タツキ「どうやら、覚悟は決まったようだな…？」

レナモン「いいのか、ミソラ？」

ミソラ「えぇ。私は強くなる…。みんなを守る為に！」

レナモン「分かった…。私もミソラやみんなを守る為に強くなるよ…。」

タツキ「そうこなくっちゃな…。」

ミソラとレナモンは決意を胸にタツキの下で修行するのであった。

～東京都　小関家～

その頃リュウギはリュウの死、そしてシオリの記憶喪失により虚脱状態になっていた。リュウギは部屋にこもって、ベッドに寝転んでいた。

リュウギ「……。」

＞ｉ３２８９８―１２９８＜

【挿絵：トリプルミーミング】

彼の瞳はもう真っ直ぐとした瞳ではなく、絶望に陥った瞳をしていた。

リュウギ（俺はいままで何をやっていたんだ…？俺はなんでここにいるんだ…？父さんはデジタルワールドのために死んだ…。そして母さんは俺の知っている母さんはもういない…。これからどうすればいいんだよ…？結局俺は誰も助ける事ができないんだ…。）

？？？「いつまでショボくれてんだよ…？」

リュウギはノソリと起き上がると、ナルガモンがいた。

リュウギ「お前には関係ねぇだろ…。」

リュウギは冷たい態度を取る。

ナルガモン「またそうやって尻尾巻いて逃げるのか？」

ナルガモンはそう言って挑発すると、リュウギは何一つ表情変えず口を開く。

リュウギ「そうさ…。誰も助ける事すらできないただの負け犬さ…。」

その時、ナルガモンはリュウギの胸ぐらを掴む。

ナルガモン「このままでいいのかよ…？いつバロムモンが襲ってくるか分かんねぇんだぞ！？デジタルワールドはほっとくのかよ！？」

リュウギ「何もかも失った俺の気持ちが分かるのか？気休め言うんじゃねぇよ？」

リュウギは怒鳴り声を上げて、ナルガモンを押し飛ばした。

ナルガモン「いだっ？」

リュウギ「もうほっといてくれ…。所詮俺は、無力なんだよ…。」

リュウギはそう言ってベッドに寝転ぶ。

ナルガモン「んだよバカヤロ？リュウギなんてもう知るか？もうテメェの顔なんか二度と見たかねぇ？」

ナルガモンはそう言ってＤ－アクセルの中へと入った。

リュウギ「……。」

（デジタルワールドなんて、行かなきゃよかった…。）

その時、喧嘩していた事に気付いたのか、シオリが部屋に入ってくる。

シオリ「リュウギ君、どうしたの？」

リュウギ「何でもないよ…。出ていってくれ…。」

リュウギは冷たい返事をする。

シオリ「お友達と喧嘩したの…？」

リュウギ「いいから出ていけ？」

リュウギはガバッと起き上がると、シオリは手を差し伸べてリュウギの頭を優しく撫でる。

リュウギ「！？」

その時、リュウの言葉を思い出す。

『必ず這い上がって来い、リュウギ。』

『バカヤロが。そんなつまらねぇ事でイチイチ闇に呑み込まれてんじゃねぇよ…。過去に拘ってて何の意味があるんだ？後ろばっか見てねぇで前を見てな…。それでも俺の息子か…？』

『母さんを頼んだぜ…。』

ーーーーーーーーーーーーーー

リュウギ（父さんはどうして俺を…？）

「母さん…。」

シオリ「？」

リュウギ「父さんはある世界を救って死んだ…。俺を置いて…。どうして俺はここにいるんだ…？なんならいっその事、父さんの後を追いたい気分だ…。」

シオリ「……。」

何も答えないシオリ。するとリュウギは呆れて笑う。

リュウギ「はは…。何聞いてんだよ俺は…。分かるハズないよな…。」

その時、シオリは口を開く。

シオリ「それはきっと、あなたに生きていて欲しいからだと思うよ…。」

リュウギ「!?」

リュウギはミソラの答えに驚愕する。

リュウギ「母さん…?」

ミソラ「お父さんはきっとあなたに命を与えてくれたのだと私は思うわ…。だから死にたいとかそういう悲しい事は言わないで…。」

リュウギ「父さんが俺に命を与えてくれた…。」

リュウギは自らの手でヴァヌムスに負わされた左頬の傷を触る。

リュウギ（そうか…。そうだったのか…。あの時父さんが助けてくれなかったら俺はここにはいない。父さんは俺に全てを託したんだ。父さんは命懸けで俺やみんなを守ってくれた。このデジタルワールドを救うために…。デジタルワールドの未来を俺達に託したんだ…。）

シオリ「リュウギ君…？」

シオリは心配な顔でリュウギの顔を覗き込む。すると、リュウギはシオリを抱き締める。

シオリ「ど、どうしたの…？」

リュウギ「ありがとう、母さん…。」

リュウギはベッドから飛び降りてＤ－アクセルを左手首にはめて、突然家を飛び出していった。

シオリ「……よく分からないけど、元気になったようね。」

シオリはリュウギの背中を見て少し安心するのであった。

～榊原家～

その頃、カズマは屋根に寝転びながら青空を眺めていた。

ネレイスモン「リュウギ、今頃どうしてんだろうなぁ…。」

ネレイスモンはふぁ～とあくびをした後、肉まんを食べる。

カズマ「さぁな…。」

ネレイスモン「幼馴染みなんだから考えてる事分かるだろ？」

（モグモグ…）

カズマ「バーカ。幼馴染みっつっても限度があるんでぃ！」

ネレイスモン「限度っつうよりか知らねぇだけだろ？」
（モグモグ…）
カズマ「お、よく気づいたな？」
カズマはそう言ってノソリ起き上がる。
ネレイスモン「ダメだこりゃ。」
ネレイスモンは肉まんをごっくんと呑み込もうとした途端、カズマが叫ぶ。
カズマ「あ！」
ネレイスモン「ん！？ん～！？」
ネレイスモンは肉まんが喉に詰まり、胸をトントンと叩く。
ネレイスモン「ぷはぁ～、なんだよ急に！？」
カズマ「リュウ兄だ…。」
なんと、リュウギが慌てて榊原家に入っていったのをカズマが発見する。
ネレイスモン「ホントだ！？道場に何の用なんだろう？」
カズマ「さぁな…。一旦降りるぞ！」

～榊原家　道場～

？？？「フン！ハァッ！」

てっぺんにアホ毛がついた青髪の男は両手に竹刀を持って素振りをしていた。彼もリュウと共に旅をした仲間の1人、榊原　シロウだ。

シロウは素振りを終え、竹刀を袋にしまう。

シロウ「さぁて、今日は終了っと…♪」

その時、道場の扉が勢いよく開かれた。リュウギは息を切らしてシロウを見つめる。

リュウギ「いた…。」

（ハァ…ハァ…）

シロウ「あれ？君は確か…」

リュウギは道場の中へ入り、シロウの前に立つ。

リュウギ「リロード！」

リュウギは叫ぶと、Ｄ－アクセルからナルガモンが出てくる。

ナルガモン「んだよ急に呼び出しやがって！オレはテメェの顔なんか二度と見たかねぇって言っ…」

その時、リュウギは突然土下座をする。

ナルガモン「んな！？リュウギ！？」

シロウ「？」

リュウギ「シロウさん…。俺に…、俺に剣を教えてください？」

ナルガモン「リュ、リュウギ…？」

シロウ「話しはコウジから聞いたよ…。デジタルワールドで色々な事が合ったみたいだね…。そして君はたった一人の父親を失ってしまった…。」

リュウギ「くっ…。」

シロウ「それなのにどうしてここへ来たんだい…？いまさら剣を教えてもリュウは帰ってこないよ…♪」

リュウギ「俺はもう、誰も失いたくないんだ…。」

ナルガモン「リュウギ、お前…。」

シロウ「……。」

カズマとネレイスモンは陰でリュウギの会話を聞く。

カズマ「リュウ兄…。」

リュウギ「俺は誓う…。俺はみんなを守る為に強くなる…。いや、強くならなくちゃいけないんだ？」

シロウ「君の決意は分かったよ…♪でも、みんなを守る為ならそれ相応の覚悟が必要だよ…？君にその覚悟はあるのかい…？」

リュウギ「俺は……」

リュウギは最後にリュウに言われた言葉を思い出す。

『俺の分まで生きろ…。御縞　リュウギではなく、小関　リュウギとしてな…。』

リュウギ「俺は己の決めた道は決して背かない？それが俺の流儀だ？」

ナルガモン「リュウギ…。」

シロウは頷くと、ナルガモンの方へと向く。

シロウ「君はどうなんだい、パートナー君？」

ナルガモン「たりめぇだ？リュウギの決めた道だ？とことん付き合ってやらぁ？」

リュウギ「ナルガモン…。」

ナルガモン「へへ…♪」

ナルガモンはニヤッと笑う。

シロウ「分かった…♪それはさておき…。そこにいるのは分かってるぞ、カズマ♪」

カズマ・ネレイスモン「ドキッ！？」

すると、陰からカズマとネレイスモンが苦笑いしながら出てくる。

リュウギ「カズマ…！？」

カズマ「ど、ど～も～…。」

ネレイスモン「えへへ～…。」

シロウ「話は聞いたと思うから省略するけど、お前達も修行するからね♪」

ネレイスモン「げっ！？」

カズマ「なんでだよ親父！？」

シロウ「お前達はまだまだ強くなってもらわなくちゃね…♪」

カズマ「せ、せっかくなんだけど、オレは遠慮させていただきまさぁ…。」

ネレイスモン「同じくオレも…。」

カズマとネレイスモンは目をチラッチラッと泳がせながら断る。

シロウ「無難にやり過ごそうとしても無駄だよ…♪」

カズマ・ネレイスモン「そ、そんな～…。」

リュウギ「師匠(せんせい)よろしくお願いします！」

シロウ「ビシビシ鍛えるから覚悟しておくんだね♪」

リュウギ「はい！」

ナルガモン「おう！」

こうしてリュウギ達はシロウの下で長い修行をするのであった。もう誰にも失わせないために…。

リュウギ（強くなってみんなを守るんだ…。かつて父さんがそうしたように…。小関　リュウギとして強くなるんだ？）

彼の瞳は絶望に堕ちた瞳ではなく真っ直ぐとした瞳をしていた。こうして救世主達は新たなる道へと歩むのであった…。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

ＥＰ８７　～救世主達の新たなる決意～（後書き）

～ムゲンマウンテン　電脳核の間～

一方、ドラコモンは…。

ドラコモン「リュウ…。お前が目覚めるまで、俺はずっと待ってるからな…。なんたって、俺はリュウのパートナーだから…。」

ドラコモンはリュウが再び目覚めることを信じ、ずっと待ち続けるのであった…。

決意を胸にし、リュウギ達はそれぞれの道へ…。

＞ｉ３２８９９―１２９８＜

【挿絵：トリプルミーミング】

次回から新章？

～第５章　追憶の絆篇～

デジタルワールドを救うために自らの命を犠牲にしたリュウはあれから…。

そしてエグザ誕生の謎が明らかに…？

次回からの新章をお楽しみに？

EP88　～転生されし英雄？デジタルワールドの危機～（前書き）

「ーーここは…何処だ…？」

1人の男は辺りを見回すと真っ暗で何も見えない。

「俺、いままで何をしていたんだ…？」

男は腕を組んで思い出そうとする。その時だった。

『よく頑張ったな…。』

『えぇ…。元気な男の子よ…。』

何処からか会話が聞こえてくる。どうやら女の人が赤ん坊を産んだみたいだ。男は懐かしそうに聞く。

「なんだ？懐かしい…。」

すると、自分の声が聞こえてくる。

『男かぁ…。んなこったろうと思ったぜ♪』

『なにそれ？それじゃ、予感的中したんだから名前は決まってるんでしょうね…？』

『まずは意味だ！自分の流儀に背かねぇ真っ直ぐとした男になって欲しい！』

すると、女性はクスッと笑う。

『んな!?何が可笑しいんだよ!?』

『あなたらしいわ…。それで、名前は?勿体ぶらないでよ!』

『わーったよ。名前は…』

その時辺りが突然とピカッと光だし、男は思わず目をとじた。

「うわっ!?」

男は目を開けると、真っ暗になっていた。

「今のはいったい…?心に暖かい感じが…?」

男はそっと胸を手を当てた。微かだが手に暖かみを感じる。

その時、一時的に失っていた記憶が蘇ってくる。まるでビデオを早送りしたような感じで記憶が流れて行く。

???「そうだ…。俺はあの時、デジタルワールドを救おうとしたんだっけな…。」

???「ようやく目覚めたか?始まりのエクセリオン、小関　リュウよ。」

リュウを呼ぶ謎の声。リュウは暗い空を見上げながら謎の声に問う。

リュウ「ここは何処なんだよ?天国かぁ?それともあの世ってかぁ

？」

？？？「残念だがここは天国ではない…。かといってあの世でもない…。」

リュウ「だったら教えて貰いたいね…。ここは何処で、なんで俺はここに居て、そんでテメェは何者かをなぁ？」

？？？「いいだろう…。」

謎の声が正体を明かすと、それは８つ目に１２個のデジコアを持つ巨大な竜だった。

リュウ「ほぅ…。」

？？？「我が名は世界を司る皇帝、ファンロンモンなり…。」

リュウはＤ－アクセルでファンロンモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ファンロンモン、究極体、神獣型、データ種、必殺技は太極。」

リュウ「随分とゴッツイ身体してやがるなぁ…。」

ファンロンモン「フハハハ…。噂通り面白い男だな…。」

リュウ「皇帝様が俺を御存知とは光栄だな。んで、誰が噂流してんだよ？」

ファンロンモン「チンロンモンが世話になったな…。我は四聖獣の

頂点に立つデジモンだ…。」

リュウ「つまりチンロンモンらの保護者っつうわけか…。んで、俺に何の用なんだ？」

ファンロンモン「よくもまぁデジタルワールドを救う鍵（ＥＸコア）を派手にやってくれたな…？ＥＸコアを半分にして、半分は息子であるリュウギを…。そして残りはお前に…。」

リュウ「バレたか…。まさかチンロンモンから聞いたのか？」

ファンロンモン「まぁな…。しかし、それをすれば何を意にするか分かっておるのか…？」

リュウ「ま、その方が無難だと思ってよ。」

ファンロンモン「まぁ良い。そのお陰でお前はここに居るからな…。」

リュウ「まさかこれってＥＸコアがあるからここに居るって事なのか？」

リュウ「面倒な仕事はごめんだぜ…。」

ファンロンモン「そうだ…。リュウよ、お前に頼みたい事がある。」

ファンロンモン「エクセリオンとして別世界のデジタルワールドを救って欲しいのだ…。」

リュウ「別世界のデジタルワールドだと…？」

ファンロンモン「そうだ。この世界には表と裏の世界がある。表とはお前達人間とデジモンの暮らす世界。そして裏はデジモンだけが暮らす世界。恐らくバロムモンは別世界のデジタルワールドを支配しようとしている。お前が電脳核の活動を停止させたからな…。」

リュウ「やる事ねぇから暇つぶしに裏のデジタルワールドを支配するってかぁ？何かやらなきゃ気が済まねぇのか野郎は…。」

ファンロンモン「それだけではない。バロムモンはお前がＥＸコアを持っている事に気付いてる。恐らくバロムモンはお前のＥＸコアを狙うだろう…。別世界のデジタルワールドを支配しながらな…。」

リュウ「ちょうど良いや。俺を利用したあの野郎に一発ブン殴らねぇとなぁ。このままあの世に行ったら後悔しちまうし…。」

リュウはそう言って拳をパキパキと鳴らす。

ファンロンモン「引き受けてくれるのだな？」

リュウ「俺を誰だと思ってんだぁ？泣く子も黙るよろず屋のリュウさんだぜ？」

ファンロンモン「よかろう。ではこれを受け取れ。」

ファンロンモンの持つ１２個のデジコアが光りだすと、リュウの前に剣と２丁拳銃が現れる。

リュウ「これはセイクリッド・ドラグーンとデジガンじゃねぇか！？」

ファンロンモン「では、お前を別世界のデジタルワールドへ転生する…。」

リュウ「おう。頼むぜ。」

リュウはセイクリッド・ドラグーンを背中に背負い、2丁デジガンを懐にしまう。

ファンロンモン「では、健闘を祈るぞ…。」

12個のデジコアが光ると、リュウの身体が光だし、やがて静かに消える。

ファンロンモン「頼んだぞ、リュウ…。」

新章突入？

果たしてリュウはEXコアを死守し、別世界のデジタルワールドを救う事ができるのか？

～第5章　追憶の絆篇～スタート？

＞i330851298＜

【挿絵：トリプルミーミング】

EP88　～転生されし英雄？デジタルワールドの危機～

～別世界のデジタルワールド～

リュウ「う、う～ん…。」

リュウは目を開けると、最初に眼に映ったのは美しい青空が広がっていた。

リュウ「よっこらせっと…。」

リュウはノソリと起き上がり、辺りを見回す。それは広大な大自然へと広がっていた。

リュウ「ここが裏のデジタルワールドかぁ…？表と変わらねぇじゃねぇか…？」

リュウは立ち上がり、グッと背伸びをして深呼吸をする。

リュウ「はぁ～。さぁて、これからどうすっかな…？」

リュウは頭をポリポリとかきながらどうするか考える。すると、遠くから話し声が聞こえてくる。

？？？「出ていけよ！」

リュウ「ん？」

（誰かいるのか…？）

リュウは声を辿って森を抜けると、キノコのような姿をしたデジモン、マッシュモン達が紫色の毛が特徴の獣型デジモンをいじめていた。

リュウ（なんだ…？）

マッシュモンA「お前は選ばれてないんだろ？」

マッシュモンB「お前らみたいなオデコに変な石があるデジモンがここへ逃げ込んできたせいで、この世界がおかしくなったってアンドロモンが言ってたぞ！」

マッシュモンC「ここから出ていけ？」

マッシュモンA「出ていけ？」

？？？「……。」

？？？「うっ…。」

すると、マッシュモンはキノコを投げ付ける始めると、他のマッシュモン達も投げつけた。

獣型デジモンは攻撃を受けても、やり返そうとはしない。

マッシュモンA「このっ？」

その時、一発の銃声が鳴り響き、キノコを消滅させた。

マッシュモン達「！？」

？？？「……？」

リュウ「おいおい…、レベルの低いヤンキーごっこなんざ今時流行んねぇぞコラァ？」

銃弾でキノコを消したのは勿論リュウだった。リュウはデジガンを肩に担ぐ。

？？？「……誰？」

マッシュモンA「なんだよお前は？」

マッシュモンB「お前には関係ねぇだろ！」

リュウ「理由はどうあれ、集団で弱い者イジメとは見過ごせねぇなぁ…。」

マッシュモンC「うるさい！お前は引っ込んでろ！」

マッシュモンはキノコをリュウに投げ付けると、デジガンのトリガーを引いてキノコを撃ち落とした。そして、リュウは何も躊躇いもなく銃撃し、マッシュモンの頭をわざと掠らせる。

マッシュモンC「ひぃっ？」

リュウ「そんなにイジメてぇんなら俺が相手してやらぁ。本当のイジメとやらをテメェらに教えてやるよ…♪」

リュウは不気味な笑みを浮かべながら拳をパキパキと鳴らす。

リュウ「さぁて、Ｓの血が騒ぐぜぇ…♪炒めてハッシュドビーフにｉｎしてやろうかぁ？それとも切り刻んでキノコ汁にした方がよさそうかぁ？」

リュウの威圧によってマッシュモン達の背筋が凍り付き、一目散に逃げ出した。

マッシュモン達「覚えてろーーーー？」

リュウ「ケッ、いちいち覚えてられるかっつうの…。」

リュウはデジガンを懐にしまい、パンパンと手を叩く。

リュウ「さてと…」

リュウは振り向くと、獣型デジモンはビクッとする。

？？？「！？」

リュウ「おい、大じょ……」

その時獣型デジモンはリュウに怯えたのか、川に飛び込んで逃げ出す。

リュウ「って、おい！……ま、泳げるならいいか…。」

？？？「うっ…、うわ…。」

獣型デジモンは泳いでいるよりか、むしろ溺れていた。

リュウ「って思いっきり溺れてんじゃねぇか？ちぃ、しょうがねぇなぁ！」

リュウは舌打ちをしたあと、獣型デジモンを助けに川へ飛び込んだ。

～草原～

「ーーい、大丈夫かぁ？」

？？？「う、うぅ…。」

獣型デジモンは目を開けると、美しい夕方の空が広がっていた。

？？？「あれ…？俺は一体…？」

リュウ「やっと気が付いたか？ったく、世話の焼ける野郎だなぁ。お陰でこっちはずぶ濡れだっつうの…。」

獣型デジモンは起き上がると、隣にリュウが座っていた。

？？？「！？」

獣型デジモンは慌てて逃げ出し、木陰に隠れる。

リュウ「何ビビってんだよ？何もしねぇって。」

獣型デジモンは木陰からひょっこりと顔を出して警戒する。

？？？「だって、オジさん恐いから…。」

リュウ「あのなぁ、見た目で判断したら世の中やっていけねぇぞ？オジさん見た目はこうでも、心は結構デケェし優しいから。」

？？？「……。」

リュウ「あ、テメェ疑ってるな？」

？？？（コクリ…）

獣型デジモンはコクリと頷くとリュウはズッコケる。

リュウ「俺ってそこまで信用されてねぇのかぁ…？なんかビミョーに傷付く…。」

（ブツブツ…）

すると、獣型デジモンはリュウに問う。

？？？「オジさん、見ないデジモンだね…？」

リュウ「ん？お前、人間初めて見るのか…？」

？？？「人間…？」

リュウ「う～ん…、どう言ったらいいのやら…」

リュウは困った顔をしながら頭をポリポリとかく。

リュウ「じゃあこうしよう。今から自己紹介タイムだ。こっち来いよ。」

？？？「……。」

獣型デジモンは全く木陰から出てこようとしない。

リュウ「そう警戒しなくても誰も襲わねぇって。約束する。」

獣型デジモンはリュウの言葉を信じたのか、コッソリと出て来てリュウに近寄り、地べたに座る。

リュウ「はいよく出来ました。俺はリュウだ。お前は？」

？？？「お、俺はドルモン…。」

リュウ「よろしくなドルモン。」

リュウは手を差し伸べて握手を求めると、ドルモンは首を傾げる。

ドルモン「なに？」

リュウ「おいおい、握手したことねぇのかよ？友達いねぇのか？」

すると、ドルモンはうつむく。

ドルモン「うん…。俺、みんなに嫌われてるから友達いないんだ…。」

リュウ「そうか。だったら俺が初めての友達になってやらぁ。」

ドルモン「え？俺の事嫌いじゃないの…？」

リュウ「なんでだよ…？それとも、友達第一号が俺って不満かぁ？」

ドルモンは首を横に振る。

ドルモン「ううん、嬉しいよ…。」

リュウ「そうかい。んじゃ、友達の印として握手な。」

ドルモン「うん！」

ドルモンは元気良く返事をすると、リュウの手をギュッと握手をした。すると、リュウはドルモンと握手した時に違和感を感じる。

リュウ（冷たい…。そっか、ずっと1人だったんだな…。）

ドルモン「リュウってどこから来たの？」

リュウ「ん？言って分かるのか？ま、ずっと遠いトコから来たんだよ。」

ドルモン「……友達はいっぱいいるの？」

リュウ「あぁ…。もう数えきれねぇ程たくさんな…。」

ドルモン「スゴ～い。」

リュウ「さて、暗くなる頃だから宿探さねぇとな…。……ひ、ひっくしょん！」

リュウは思いきりくしゃみをする。

ドルモン「だ、大丈夫…？」

リュウ「誰のお陰だと思ってんだぁ？ひぃ～寒っ…。」

ドルモン「ごめんなさい…。」

リュウ「謝ればそれでよろしッ！ところで、どっか休める所ねぇか？」

ドルモンは首を横に振る。

リュウ「しゃーねぇ…。適当に探すか…。」

リュウは辺りを見回すと、岩山を発見する。

リュウギ「彼処か…。ん？」

リュウギは目を細めると、岩山の頂上に遺跡があることに気付く。

リュウ「遺跡…？ま、こんな所で野宿するよりマシか…。行くぞドル……ひ、ひっくしょん！」

リュウはまたくしゃみをすると、鼻水がタラ～んと出てくる。

リュウ「お～、はにゃみじゅ（鼻水）が出てる～。」

ドルモン「……あは、あははは♪」

その光景を目にしたドルモンは笑いだす。リュウは鼻水を拭き取り、ニヤッと笑う。

リュウ「へへッ…。さて、行くとしますか。」

ドルモン「うん。」

リュウとドルモンは岩山の遺跡を目指して歩き出すのであった。

～ロイヤルナイツ　本部～

ここはネットワークセキュリティの最高位、あるいわデジタルワールドを守護するデジモン達が集う場所…。

赤色をした竜騎士、デュークモンは口を開く。

デュークモン「プロジェクトアークを我々ロイヤルナイツの身の手で実行するなど可能だと思うか？」

すると、片手にグレイソード。もう片方はガルルキャノンを持つ聖騎士、オメガモンは答える。

オメガモン「可能かどうかの問題ではない。それがイグドラシルの決定事項だ。我々は確実に使命を遂行するまでだ。」

デュークモン「それでいいのか？」

オメガモン「なにが言いたい？」

デュークモン「我々は二重に過ちを犯そうとしているではないのか

？」

オメガモン「イグドラシルが間違っているとでも言うのか…？」

デュークモン「デジタル ハザード開始…。我が君イグドラシルが実行したXプログラム…。このデュークモンにはそれが…」

オメガモン「X抗体を持つデジモンなど、所詮異分子に過ぎない！異分子は速やかに排除するまでだ…。」

オメガモンはそういって背を向けて歩き出す。

デュークモン「彼らと我ら…。デジモンとして何が違うというのか…？」

～古びた遺跡～

岩山の頂上にある古びた遺跡にたどり着き、リュウとドルモンははぁ～とため息をつく。

ドルモン「着いた～…。」

リュウ「あ～あ、これでやっと寝れるぜ…。」

リュウは上着を脱いで地べたに寝転ぶ。

ドルモン「ねぇリュウ…？」

リュウ「なんだぁ？」

ドルモン「どうして俺を助けてくれたの…？」

リュウ「んだよそんな事か。何となくだ。」

ドルモン「何と…なく…？」

ドルモンは目を丸くして首を傾げる。

リュウ「冗談だよ。目の前で困ってる奴がいたから、ほっとけなかっただけだ…。」

ドルモン「……。ねぇリュウ？」

リュウ「今度はなんだ？」

ドルモン「どうして俺はここにいるんだろう…？どうして誰も俺を受け入れてくれないんだろう…？」

リュウ「人生誰にでも上手い事いかねぇ事だってあるんだよ。そうなってんだよ世の中…。」

ドルモン「そうなの…？」

リュウ「そっ。みんなに受け入れて貰おうなんて、そんな簡単に掴み取れねぇもんなんだぞ？ま、俺は鷲掴みにしたけどな♪」

ドルモン「本当に…？」

リュウ「あぁ。ま、掴み取るにはお前の心次第だけどな…。」

ドルモン「俺の…心次第…。」

ドルモンは自分の胸に手を当てる。

リュウ「さて、今日はここまでだ。俺は寝るからな。」

リュウはそう言って上着を布団代わりにして眠りにつく。

ドルモン「おやすみリュウ…。」

リュウ「あいよ。」

ドルモンは身体を丸くして眠りにつく。

こうしてリュウとドルモンは古びた遺跡で休息を取る。この時、彼らの冒険の始まりであり、運命の出会いでもある事を彼らは知る由も無かった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

ＥＰ８８　～転生されし英雄？デジタルワールドの危機～（後書き）

～キャラクター紹介　その１１～

名前：小関（おぜき）　竜（りゅう）

性別：男

パートナーデジモン：ドラコモン

一人称：俺

趣味：寝ること、からかう事

解説：前々作の主人公でありリュウギの父。性格は数年前とは全く変わらないが、目の前で困っている人がいるとついついほっとけない性分。戦闘力は非常に優れており、仲間との連携もずば抜けている。彼がなぜＥＸモードを発動させる事ができるのかは不明。双子の兄、セツナが自分の身代わりになって先に逝ってしまった事により、家族誰１人守れない己の無力さに自ら名前を捨て、始まりの救世主　エグザとなった。そしてリュウギ達を選び、色々な警告をして彼等を支えてきた。エンシェントスフィンクモン、そして過去の自分の助言により親友であるコウジ達に隠された過去を打ち明け、そしてデジタルワールドを救うため自らの命を捧げようと決意した。彼の死後、ファンロンモンの指名により別世界のデジタルワールドでドルモンと出会い、彼の新たな旅の幕が開かれる。彼にとって一番大切な物は家族、そして仲間との絆。

＞ｉ３３０８６―１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング】

別世界のデジタルワールドに転生されたリュウ。そしてドルモンと出会い、新たなる旅が始まる！

果たしてバロムモンの野望を打ち砕く事ができるのか…？

そして別世界のデジタルワールドを救うことができるのか…？

次回もお楽しみに？

EP89　～虐殺する白き聖騎士　オメガモン？～（前書き）

リュウは目を覚ますと、古びた遺跡ではなく広い都会のど真ん中にいた。

リュウ「あれ…？俺は確か古びた遺跡で寝てたような…？」

止まることない人混みの中、リュウはポツンと1人で立っていた。

その時、何処からか女性の悲鳴が聞こえてくる。

女性「キャーー！引ったくりよ！誰か捕まえて？」

なんと引ったくりが起きたのだ。犯人は女性のバッグを奪ってリュウの方へと走ってくる。

リュウ「しゃーねぇなぁ…。」

リュウは犯人を取り押さえようとした途端、犯人は抵抗の素振りを見せようとせずリュウにぶつかると思いきや、リュウの身体を通り抜けていった。

リュウ「なっ！？」

犯人「邪魔だ！どけ！」

犯人はその先にいる金髪の男に接近する。

『あん？』

その時、金髪の男は目にも止まらない早さで犯人を殴り飛ばした。

犯人「ぐはっ！？」

犯人はバタリと仰向けに倒れた。この光景を目にしたリュウはハッとする。

リュウ「思い出した！あの時だ！」

犯人は懐からナイフを取り出して金髪の男に襲い掛かる。

犯人「野郎？」

『ったく、こっちとらクソ上司にキレられて機嫌悪いってのによぉ…。これ以上…』

（ブツブツ…）

金髪の男は片手でナイフを持つ手を掴み、もう片方の手で犯人の顎を狙いを定めてアッパーでトドメを刺した。

『機嫌悪くさせんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？』

犯人「がはっ！？」

犯人はバタリと倒れて気絶した。

『ったく…。』

すると、女性は金髪の男へと駆け寄って頭を下げる。

女性「ありがとうございました！なんてお礼をすれば…。」

『ん？俺、何かやったか？』

金髪の男はケロッとした顔で頭をポリポリとかく。そう、金髪の男は当時のリュウだったのだ。

リュウ「そういや、デジタルワールドで鍛えた身体のお陰で例え相手がナイフを持っててもビビらなかったよなぁ…。」

リュウは腕を組んで頷き、感心する。すると、リュウは何か思い出す。

リュウ「そういえば、あの後何か起きたような…？」

『んじゃま、メアド交換っつうわけで…。』

当時のリュウはアドレス交換をしようと携帯電話を取り出そうとしたその時、突然携帯電話が光り出す。

『んな！？』

女性「え？なに？？」

『あ～悪ぃ！お礼はまた今度で！』

当時のリュウはそう言って走り去っえいった。

路地裏まで逃げ切った当時のリュウ。リュウは携帯電話を取り出し

て携帯電話を調べる。

『おいおい勘弁してくれよ～…。せっかくスマホにしたってのによぉ～。』

携帯電話の光りはやまない。すると、携帯電話は更に光り出す。

『おいいいいいいいいい！？俺のスマホォォォォォォォォォ！？』

？？？「目覚めよ…。光りの英雄よ…。」

携帯電話から謎の声が聞こえてくる。当時のリュウは頭の上に「？」が幾つも浮かび上がる。

『な、なんだよこれ…！？どうなってんだ…！？』

この光景を目にしたリュウはこの後どうなるか分かっていた。

？？？「時は満ちた…。デジタルワールドはそなたの助けを待っている…。」

『デジタル…ワールド…？』

（なんだ…？初めて聞いた感じがしない…。）

その時、携帯電話から聖なる光りが溢れ出し、当時のリュウは聖なる光りに吸い込まれていった。

『うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？』

リュウ「そうだ…。あの後俺は、光りの中へと消えた…。あの光り

のお陰で俺の人生は１８０度変わった…。そう…、全てはここからの始まりだったんだ…。」

今回はロイヤルナイツの守護者、オメガモン登場？

しかし思いもよらない事が…？

Ｅｐ８９スタート？

EP89　～虐殺する白き聖騎士　オメガモン？～

～古びた遺跡～

リュウはノソリと起き上がると、自分の手のひらをボンヤリと見つめる。

リュウ「夢、か…。なんなんだあの夢は…？」

すると、隣で寝てたドルモンが起きて大きなあくびをする。

ドルモン「ふぁ～、おはようリュウ。」

リュウ「……。」

リュウはボンヤリしているため、ドルモンの言葉に耳が入らなかった。

ドルモン「リュウ…？」

リュウ「ん？お、おう。」

リュウはゆっくりと立ち上がり、グッと背筋を伸ばす。

リュウ「はぁ～、よく寝た×2♪さてと、これからどうすっかなぁ～…。」

ドルモン「行くとこないの…？」

リュウ「う〜ん、どう説明したらいいのか…。」

リュウはまた頭をポリポリかくと、ある事をふと思い出す。

リュウ「そういえば、お前のそのデコについてるヤツ。なんだそりゃ…？」

ドルモン「え、これ？う〜んと…。」

リュウ「昨日のマッシュルーム共がそれを見て拒絶してたよな…？」

ドルモン「この石にはX抗体が含まれているんだ。X抗体を持つ俺はみんなに嫌われたり、X抗体を求めて狙われてたんだ…。」

リュウ「いわゆる弱肉強食の世界か…。随分と物騒な世界だな…。」

ドルモン「この世界には旧デジタルワールドと新デジタルワールドの2つの世界があるんだよ…。」

リュウ「そうなのか？俺の住む世界とは全く違いがあんのな…。」

（ブツブツ…）

ドルモン「え？」

リュウ「いや、こっちの話だ。」

ドルモン「俺はいつ生まれたのか、なぜここにいるのか、どうして生まれてきたのか分からない…。」

リュウ（だから昨日、俺に聞いてきたのか…。）

ドルモン「けど、リュウは教えてくれた！俺の心次第だって。だから俺、生まれた意味を知るよ！」

リュウ「そうかい…。ま、人生は物語のようなもんだ。重要なことはどんなに長いかということじゃねぇ。どんなに良いかということだ。記憶しとけよ。」

（少しはマシな顔になったじゃねぇか…。）

ドルモン「うん！」

リュウは安心したのか、小さく笑う。

その時、途轍もない爆発音が聞こえてくる。

リュウ・ドルモン「！？」

リュウとドルモンは慌てて遺跡の外に出ると、階段の側にデジモンが倒れていた。

ドルモン「誰…？」

リュウ「アイツは…！？」

リュウとドルモンは階段を降りて謎のデジモンの側に寄る。そのデジモンの姿はクロンデジゾイドを纏った竜人型デジモン、ウォーグレイモンX抗体だった。しかし、誰かにやられたのか、クロンデジゾイドはボロボロになっていた。

リュウ「ウォーグレイモン！？おい、大丈夫か！？」

ウォーグレイモンXは眼を開けると、ドルモンを見つめる。

ドルモン「……？」

ウォーグレイモンX「そうか…。君もX抗体を持っているんだな…。ここじゃ辛かったろう？」

ドルモンは悲しい顔をして首を横に振る。

ウォーグレイモンX「ところで、君は…？」

リュウ「俺か？俺はコイツの友達だ…。んな事より、そんなボロボロになって一体誰にやられたんだ？」

ウォーグレイモンX「もうじきにロイヤルナイツの一人、オメガモンがここへ来る。死にたくなかったらここから離れろ…。これは忠告じゃない。警告だ…。」

リュウ「……。」

（ロイヤルナイツのオメガモン…？）

ウォーグレイモンX「それと、君らを仲間と思って一つ頼みたい事があるんだが…。」

ドルモン「仲間…？」

リュウ「その頼みってのはなんだ？」

ウォーグレイモンX「あまり時間はない。俺は必ず戻る。戻ってく

るからその時までこの子の面倒を見て貰えないか…？」

ドルモン「え…？」

リュウ「この子…？」

すると、ウォーグレイモンXの懐からトコモンが出てくる。

ウォーグレイモンX「この子を守ってやってくれ…。」

トコモンはピョンピョンと飛び跳ね、ドルモンの尻尾に噛み付いた。

ドルモン「いだっ？」

ウォーグレイモンX「大丈夫…。君らならきっと出来る…。」

リュウ「ところで、なんでネットワークの守護神に襲われたんだ？何か盗んだのか？」

ウォーグレイモンX「『Xプログラム』が実行された。そのプログラムを計画したデジタルワールドのホストコンピュータ、『イグドラシル』は俺達X抗体の持つデジモンを殲滅させようとしている。」

リュウ「なんでそんな事する必要があんだよ…？」

ウォーグレイモンX「俺達X抗体を持つデジモンをイグドラシルは異分子と言われたんだ…。」

リュウ「……。」

ウォーグレイモンX「時間はない。引き受けてくれるか？」

ドルモン「分かった…。」

リュウ「あぁ…。任せろ。」

ウォーグレイモンX「ありがとう…。」

ウォーグレイモンXは立ち上がり、上空へと高く飛び上がり去って行った。

ドルモン「行っちゃった…。い、痛いよ…。」

ドルモンが怒ると、尻尾に噛み付くトコモンは口を放した。

リュウ「なんなんだアイツ…。初対面相手に無理矢理頼み事なんてよぅ…。」

リュウはめんどくさそうな顔をしながら頭をポリポリとかく。

ドルモン「え？どうして任せろって言ったの？」

リュウ「あんな眼されっと断れねぇだろうが。お前もそう思うだろ？」

ドルモン「う、うん。」

リュウ「今はアイツの警告を聞いてやろうぜ。ってなわけで行くぞドルモン。」

トコモン「あい♪」

トコモンは嬉しそうにピョンピョンと飛び跳ねると、今度はリュウの頭に噛み付いた。

トコモン「かぷっ！」

リュウ「いでっ！？なにしやがんだこのチビ！？離しやがれ！？」

リュウは噛み付くトコモンを無理矢理離そうとするがトコモンは口を離そうとしない。

トコモン「いや～や♪」

ドルモン「あはは…。」

ドルモンは苦笑いするしかなかった。すると、空から凄まじい飛行機のような音が聞こえてくる。

リュウ「なんだ…？」

その音の正体は先程ウォーグレイモンが言っていたロイヤルナイツの一人、オメガモンだった。オメガモンはこちらに気付かずそのまま通り過ぎて行った。

ドルモン「あれってロイヤルナイツのオメガモン…？」

リュウ「なるほどな…。つまりあのオメガモンはX抗体を持つデジモン達を排除するためあちこち回ってるのか…。イグドラシルの命令で…。」

ドルモン「だ、大丈夫かなぁ…。」

リュウ「人の心配より、自分の心配したらどうなんだ？」

ドルモン「でも…。」

リュウ「必ず戻るって言ったんだからアイツを信じろよ…。そのためには…」

ドルモン「そうだよね…。俺がこの子を守る！」

リュウ「俺達…だろ？」

ドルモン「そうだね！」

リュウ「こんなトコでのんびりしてられねぇな。早く他所へ行くぞ。」

ドルモン「うん！」

トコモン「あい♪」

リュウ「それとチビ助。いい加減俺の頭から離れろ。」

トコモン「あい♪」

トコモンは返事するが離れようとしない。

ドルモン「ちっとも分かってないみたいだね…。」

リュウは呆れてため息をつく。

リュウ「はいはい…。飽きるまで一生噛み付いてろ。さっさと行くぞ。」

リュウ達は身を隠しながら古びた遺跡を出るのであった。

ーーーーーーーーーーーーーーー

一方、ウォーグレイモンXは広大な海まで逃げ込む。

ウォーグレイモンX「『ポセイドンフォース?』」

ウォーグレイモンXは周囲の水を一点に集中させると、巨大な水のエネルギーを放つ。

オメガモン「……。」

オメガモンは避ける素振りを見せず、ガルルキャノンを放つと、ポセイドンフォースとぶつかり合う。

凄まじ水しぶきをあげると、ウォーグレイモンXの姿がなかった。

オメガモン「小賢しい…。」

その時、デュークモンから連絡が入り、モニターが映し出される。

デュークモン「すぐにイグドラシルに戻れ。緊急招集だ。」

オメガモン「……。」

オメガモンは止むを得ず、ウォーグレイモンXを放ってイグドラシルへと去って行った。

～ロイヤルナイツ本部～

12個のモニターにロイヤルナイツが映し出され、緊急招集が行われる。

オメガモン「オメガモン、来臨！」

デュークモン「では始めようか。金色のマグナモン…。」

モニターに映し出されるマグナモンは口を開く。

マグナモン「ウルドターミナル（過去世界）とスクルドターミナル（未来世界）。レジスタンス組織が結成された。この眼で確かめた。」

オメガモン「それらしい連中はベルサンディターミナル（現在世界）にもいる…。」

デュークモン「ベルサンディにまで…！？」

オメガモン「どうかしている…。」

マグナモン「確かにな。X抗体を持つデジモンとはいえ、私達ロイヤルナイツとまともにやりあって勝てるか…。」

オメガモン「どうかしているのはどちらかだ…。」

ロードナイトモン「異な事を…。」

マグナモン「オメガモン、何が言いたい？」

オメガモン「その取るに足らんレジスタンスごときに緊急招集とは…。」

デュークモン「しかし…！？」

オメガモン「我々の任務はあくまでもプロジェクトアークの実行にある。イグドラシルの決定は絶対だ。いささかも揺るがん！」

オメガモンはそう言って去って行った。

デュークモン「……。」

デュークモンは思った。本当にこれでいいのかと…。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一方、ウォーグレイモンXは何とかオメガモンから逃げ切り、とある滝へと避難する。そして、同じX抗体を持つデジモン　メタルガルルモンと、ロイヤルナイツの事について話し合っていた。

メタルガルルモンX「やっぱり無理か…。」

ウォーグレイモンX「ロイヤルナイツ…、流石に強い…。」

メタルガルルモンX「彼らは、本当に敵なんだろうか…？」

メタルガルルモンXの疑問に対してウォーグレイモンXは即答する。

ウォーグレイモンX「バカな。お前は今まで何を見てきたんだ…？」

メタルガルルモンX「ロイヤルナイツといえども、結局はイグドラシルの指示で動いているに過ぎない…。あの行動が彼らの意思とは思えない。思いたくはないのだ。」

ウォーグレイモンX「お前の言う通りだとしたら、なお悪い。ホストコンピュータの言うがままに同じデジモンを殺戮する。俺はそんなロイヤルナイツを憎悪する。ロイヤルナイツのデジモンとしての誇りは何処へ行った？」

メタルガルルモンX「それは…。それでも俺は、ロイヤルナイツを信じたい！イグドラシルが何をしようとしているか、答えを出すのはそれを知ってからでも遅くない。」

ーーーーーーーーーーーーーーー

日は夕焼けに染まり、リュウ達は古びた遺跡から離れ、とある山の麓に着いていた。

リュウ「ここまで来れば追ってこねぇだろ…。」

トコモンはピョンピョンと飛び跳ねると、躓いて転ぶ。ドルモンは慌ててトコモンの所へ駆け寄り、心配する。

ドルモン「大丈夫？」

トコモン「あい♪」

トコモンは起き上がり、返事をするとドルモンは安心してホッとする。

ドルモン「良かった…。俺なんかでも役に立つんだな…。」

リュウ「チビ助（トコモン）をしっかり見とけよ。それと、俺の頭に噛み付かねぇよう見張りもな。」

トコモン「がぁ～！」

トコモンは大きく口を開けて怒り出す。

ドルモン「なんか怒ってるよ？」

リュウ「なんで怒ってんの！？こっちが怒りてぇくらいだっつうの！」

トコモン「がぁ～！」

トコモンは高く飛んでリュウの頭に噛み付いた。

リュウ「いでででで！？このチビ助、髪の毛乱れるっつうの！？」

リュウは引き離そうとするが、全く離れない。その光景を目にするドルモンは笑う。

ドルモン「あはははは…♪」

その時、山の方から騒がしい事にドルモンは気付く。

ドルモン「!?」

リュウはトコモンを引き離すと、騒動に気付く。

リュウ「ったく…。ん、なんだぁ?」

リュウ達は草陰に隠れて山を見ると、たくさんのデジモン達が山から降りて来る。

ドルモン「どうしたんだろう…?」

すると、リュウは突然と顔をしかめる。

リュウ「様子がおかしい…。」

その時、遠くから巨大なエネルギー砲が放たれ、山モロともたくさんのデジモン達を呑み込んだ。凄まじい突風が舞う。

リュウ達は凄まじい突風により、思わず目を閉じて突風に耐える。

ドルモン「う、うぅ〜!?」

トコモン「きゅ〜!?」

リュウ「くっ、なんだ!?」

突風が去ると、上空から黒い影が舞い降りて来る。その正体はロイ

ヤルナイツの一人、オメガモンだった。

リュウ「オメガモン！？」

オメガモン「……。」

オメガモンは地面に着地すると、近くいるデジモンにゆっくりと近寄る。

そのデジモンは運良くエネルギー砲の餌食になっていなかった。しかし、岩の下敷きになって死にかけていた。

トリケラモンX「う、う…。」

オメガモンは死にかけたトリケラモンXを見つめる。すると、オメガモンは片方の足を上げてトリケラモンXを思い切り踏みトドメを刺した。

トリケラモンX「ぐお…！？」

トリケラモンXの自慢の角が折れ、静かに息を引き取った。

オメガモン「……。」

陰で見ていたドルモン達はオメガモンに怯えていた。一人を除いて…。

リュウ「お前らは此処にいろ…。」

リュウはそう言って立ち上がる。

ドルモン「……え？でも…」

リュウ「心配すんなって。俺、
こう見えても強ぇから。もしヤバかったらお前らだけでも逃げろ。」

リュウはそう言ってドルモン達を安心させ、草陰から出る。

ドルモン「リュウ！」

その時、オメガモンはドルモンの声に気付く。

オメガモン「……。」

オメガモンは猛スピードでリュウに接近し、地面に着地する。

オメガモン「人間がなぜここにいるのだ…？」

リュウ「テメェみたいなゲス野郎に答えるモンなんてねぇよ…。」

リュウは背中に背負ってる大剣、セイクリッド・ドラグーンを取り出す。

リュウ「なんで罪のねぇデジモン達を消していくんだ…？」

リュウは問うと、オメガモンはフン鼻を鳴らす。

オメガモン「フン、X抗体のデジモンなど所詮異分子…。これはイグドラシルから与えられた任務。私はその任務をこなすだけだ。」

リュウ「なんの感情も持たねぇ操り人形かテメェは…？イグドラシルをブッ飛ばしてぇところだが、その前にテメェからブッ飛ばしてやらぁ！」

リュウは目にも見えない早さでオメガモンに接近し、セイクリッド・ドラグーンを振り下ろした。

オメガモンはグレイソードを取り出してセイクリッド・ドラグーンの斬撃を弾き返す。リュウはバク転して体勢を立て直し、セイクリッド・ドラグーンを逆手に持つ。

リュウ「はぁぁぁぁぁぁ？」

リュウは切り上げるように振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放つ。

オメガモンは避ける素振りを見せず、そのまま接近すると衝撃波を弾き返した。

リュウ「！？」

オメガモン「人間ごときに私を倒せるとでも思ってるのか…？笑止！」

オメガモンは声を発すると同時にガルルキャノンでリュウを殴り飛ばした。リュウはとっさにセイクリッド・ドラグーンでガードする。

リュウ「くっ！？」

威力が強力な余りにリュウは吹っ飛ばされてしまう。その時、オメ

ガモンはガルルキャノンの砲口をリュウに向けた。

オメガモン「貴様もあの哀れなデジモン達のように散れ…。」

オメガモンはそう言ってガルルキャノンを発射させた。巨大なエネルギー砲はリュウに襲い掛かる。

リュウ「くっ！？」

リュウは素早く体勢を立て直し背後にある巨大な木を足場にして横に飛び、間一髪で巨大なエネルギー砲を回避した。

オメガモン「なに…！？」

リュウ「あぶねぇ×2。」

リュウはゆっくりと起き上がって汚れた尻をパンパンと叩く。

オメガモン「なぜそこまでして戦うのだ…？」

リュウ「俺ただ、テメェらのやり方が気に入らねぇだけだ…。」

オメガモン「ならば教えて貰おうか…。デジモン達が増えすぎてデジタルワールドは崩壊寸前…。もし貴様がイグドラシルの立場ならどうする…？」

リュウ「俺なら新しい居場所を作ってやるよ。イグドラシルならそれくらいできるだろ…？デジタルワールドが崩壊するからってわざわざ罪のねぇデジモン達を消す必要なんてねぇんじゃねぇか？」

オメガモン「新しい居場所だと…？くだらん。そんな事するなら価値の無いデータを排除していった方が手っ取り早い！」

その時、リュウはセイクリッド・ドラグーンの柄をギュッと握り締める。

リュウ「やっぱテメェ、この世界に生きる資格ねぇな…。」

オメガモン「余所者が戯れ言を…。」

リュウ「冥土の土産に見せてやらぁ…。俺の本気を…。」

リュウはセイクリッド・ドラグーンを地面に突き刺し、高らかに叫ぶ。

リュウ「ＥＸモード、発動？」

すると、リュウの周りから凄まじい突風が舞う。

ドルモン「リュウ…！？」

オメガモン「なんだその力は！？貴様、一体何者だ！？」

突風が止むと、リュウの身体から光のオーラを纏っていた。

リュウ「俺かぁ？俺は泣く子も黙るよろず屋のリュウだコノヤロォオオオオオオオオ？」

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

ＥＰ８９　～虐殺する白き聖騎士　オメガモン？～（後書き）

ついに怒り爆発！

リュウＶＳオメガモン？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ９０　～未来を守護する者～（前書き）

ＥＸモード発動！

エクセリオンのパートナーデジモンだけしか発動できないハズが、なぜリュウはＥＸモードを発動させる事ができるのか…？

今回、その謎が明らかに！

Ｅｐ９０スタート？

ＥＰ９０　～未来を守護する者～

リュウ「俺か？俺は泣く子も黙るよろず屋のリュウだコノヤロォォォォォォォォ？」

リュウは一瞬にして姿を消した。

オメガモン「何処だ！？」

リュウ「こっちだ。」

リュウはオメガモンの背後をとり、セイクリッド・ドラグーンを振り下ろした。

オメガモン「くっ！？」

オメガモンはとっさにグレイソードでガードをし、後方へと下がる。

オメガモン「……。」

（なんだこの力は…？さっきとはまるで別人…。）

リュウ「この力は、デジタルワールドの未来を守ろうと決意した時に手に入れた力さ…。そう、あの日からずっとな…。」

それは、数年前まで遡る…。

そう、リュウの携帯電話が突然光り出し、リュウが聖なる光りに吸い込まれていった後のことだ。

リュウ「あれ…？ここは…？」

リュウはゆっくりと起き上がって辺りを見回すと、真っ暗で何も見えない。

？？？「気が付いたか？」

リュウは振り向くと、四聖獣の一人、チンロンモンが現れる。

リュウ「！？」

チンロンモン「久しぶりだな、リュウよ…。」

リュウ「だ、誰だよお前は？一体何者でここは何処なんだよ？」

チンロンモン「これまでの記憶は眠りについていたのだから無理もない…。早速だがそなたの中に眠る記憶を目覚めさせて貰う…。」

すると四聖獣が現れ、リュウを囲む。

リュウ「な、なにしやがんだよ！？俺が何を…」

チンロンモン「案ずるな…。そなたの眠られた記憶を起こすだけだ。」

四聖獣は目を閉じて念じると、リュウの身体から光のオーラが生じる。すると、リュウは頭を抱えて苦しみ出す。

リュウ「な、なんだ…！？頭が…割れそう…。」

チンロンモン「目覚めよ、そなたがこれまでやったきた冒険、戦い、そして仲間との築き上げてきた絆を…。」

光のオーラが消えると、リュウはゆっくりと起き上がる。

リュウ「……。」

チンロンモン「記憶が目覚めたようだな、リュウ…。」

リュウ「よっ、久しぶりだなお前ら。それはそうともうちょい優しくしてくんねぇか？」

チンロンモン「すまないな。これしか術はなかったのでな。」

リュウ「そんで、俺に何か用か？」

チンロンモン「デジタルワールドを支配しようと企んでいる謎の組織がいるのだ…。そなたをここへ呼んだのは他でもない。そなたにある使命を与える。」

リュウ「使命…？」

チンロンモンは目を閉じて念じると、リュウの体内から小さな光の珠が出てくる。

リュウ「な、なんだこりゃ！？」

チンロンモン「それはＥＸコア。それを手にすると凄まじい無限パワーを得る事ができる電脳核だ…。」

リュウ「なんでそんなヤバい物が俺の中に…？」

チンロンモン「ＥＸコアを託したのはお前の父、ハルトだ…。そなたが数々の戦いを乗り越えて来たのはそのコアがあったからだ。」

リュウ「コアだけの力じゃねぇさ…。みんながいたから今の俺がいる…。ただそれだけだ…。」

チンロンモン「そうだな…。」

リュウ「んで、このコアをそのデジタルワールドを支配しようと企んでやがる野郎が狙ってるって訳か…。」

チンロンモン「光が持てば世界を救い、闇が持てば世界を滅ぼすと言われる…。リュウよ、デジタルワールドの運命はそなたが握っている。だからＥＸコアを死守してくれ。これはそなたにしか頼めないのだ…。」

リュウ「……。」

チンロンモン「引き受けてくれるか…？」

リュウは困った顔をしながら頭をポリポリとかく。

リュウ「事情は大体分かった。けど…」

チンロンモン「なにを迷っておるのだ…？」

リュウ「もう俺は昔の俺じゃねぇ。俺には帰るべき場所もあって待ってくれてる家族もいる…。無理とは言わねぇ。少しだけ時間をく

れねぇか？」

チンロンモン「いいだろう…。決断したらまたここへ戻って来てくれ…。」

リュウ「分かった。」

チンロンモン「待っておるぞ…。」

それから、リュウはチンロンモンに現実世界へ帰して貰う。リュウは自宅へと帰る途中だった。

リュウ「……。」

（なんで親父は俺にこんな物を…？）

リュウはピタリと足を止め、

見上げると美しい青空が広がっていた。

リュウ「デジタルワールドの運命は俺が握ってる、か…。」

（また戦いが始まるんだな…。俺だけで大丈夫だろうか…？）

？？？「あのぅ、リュウギ君のお父さんでしょうか？」

リュウは振り向くと、若い女性の人だった。

リュウ「あんたは確か、リュウギの担任の…」

？？？「早川です。ご無沙汰してます。」

早川はそう言って頭を下げると、リュウは慌てて頭を下げる。

リュウ「あ、どうも…。ところでウチのリュウギが何か…？」

早川「あのぅ、居残り授業なのにリュウギ君の姿が見当たらなくて…。」

リュウ「んな！？あの野郎逃げたな！？今度ばかりはただじゃおかねぇ…。」

リュウは歯をギリギリとさせて拳をギュッと握り締める。どうやら、居残り授業を抜け出したのは何回かあったらしい。

早川「はぁ…。」

リュウ「ここは俺に任せて、先生は帰っといてください。あのバカ息子にキツ～く叱っときますんで…。」

早川「わ、分かりました…。」

リュウはリュウギを探しに住宅街を歩き回る。

リュウ（あいつの事だ。きっと彼処だな。）

リュウが向かった場所はとある道場。窓から覗き込むと、案の定リュウギが竹刀を持って構えていた。

リュウ（あのバカ野郎…。やっぱここにいやがったか…。）

リュウギ「あと一勝すれば、１００勝だ！だから今日は勝たせて貰うぜ！」

カズマ「その台詞、そっくりそのまま返してやるぜリュウ兄！」

リュウギ「それじゃ…」

カズマ「いざ、尋常に…」

リュウギ・カズマ「勝負？」

リュウギとカズマは同時に攻めに入る。

竹刀の音が道場に響き渡る。

カズマ「はぁぁぁ？」

カズマは突き攻撃をする。

リュウギ「くっ？」

リュウギは受け流し、竹刀を振り上げるように振ってカズマの竹刀を弾き返した。

リュウギ「よし！」

カズマ「残念！」

カズマは弾き返された竹刀を掴み取り、柄でリュウギの腹に溝うちをした。

リュウギ「かはっ？」

カズマ「貰った？」

リュウギ「くっ？」

リュウギは踏ん張って竹刀で攻撃を防いだ。

リュウギとカズマはお互いに後方へと下がって態勢を立て直す。この光景を目にしたリュウは驚愕する。

リュウ（こいつら、なかなかの良い勝負じゃねぇか…？けど…）

リュウギとカズマは息を荒くさせながら竹刀を構える。

カズマ「やるなリュウ兄。」

リュウギ「負けてたまるか…。ゴホッ…。」

カズマ「行くぜ？」

リュウギ「これで決める？」

リュウギとカズマは竹刀を構えて接近するその時だった。

？？？「そこまでだ。」

黒い影が竹刀で2人の頭にパシィーンと叩く。

リュウギ・カズマ「いだっ？」

リュウギとカズマは頭を抱えて痛がる。

???「ったく、何処へ行ったかと思えば、こんな所で遊んでいやがったか…。」

リュウギは見上げると、驚いて叫ぶ。

リュウギ「父さん？」

そう、2人の勝負を止めたのは勿論、リュウだった。

カズマ「邪魔するなよチャランポラン親父！今いい所だったのに？」

すると、リュウはカズマにゲンコツを喰らわした。

カズマ「いっでぇぇぇぇ？」

リュウ「誰がチャランポラン親父だコラァ？」

リュウギ「父さん、今はカズマと真剣勝負してるんだ！なんで止めたんだよ！」

リュウ「居残り授業サボっといて何が真剣勝負だぁ？」

リュウギ「ギクリ…。」

その時、リュウギはギクリとする。

リュウギ「な、なんで知ってるの…？」

リュウ「お前の担任の先生と偶然会ったんだ…。つうわけでさっさと帰るぞ。」

リュウはそう言ってリュウギの手を引っ張る。

リュウギ「まってよ父さ～ん？最後まで剣道やらせてよ～？」

リュウ「何が剣道だ？あんなもんチャンバラごっこにしか見えねぇんだよ。ったく、今時のガキんちょにチャンバラごっこは流行らねぇっつうの…。」

リュウギ「でも、この勝負に１００勝目が…」

リュウ「だったらそんなチャンバラごっこより、もっと違うトコで決着つけるんだな。」

カズマ「お、おいリュウギ？」

リュウギ「カズマ、今日の勝負はお預けだ！次こそは決着つけるからな！」

リュウギは手を引っ張られながらカズマに言う。

カズマ「絶対だぞ！待ってるからな！」

帰り道、リュウは授業をサボったリュウギにこっぴどく叱った。

リュウ「ったく、もう少し真面目になったらどうなんだぁ？サボってばかりだと俺みたいな立派な大人にはなれねぇぞ？」

リュウギ「ごめんなさい…。」

リュウ「分かればそれでいいんだよ。」

リュウギ「うん…。それにしても父さん、カズマのお父さんに合わなくてもいいの？」

リュウ「いいんだよ別に…。」

（シロウの記憶は眠ったままだ…。会ったところで何もならねぇよ…。）

リュウギ「あ～あ、決着つけたかったなぁ…。」

リュウギはつまんなそうな顔をして空を見上げる。

リュウ「決着なんていつでも着けられるだろ？あんなチャンバラごっこで勝っても誰も喜ばねぇっつうの。」

リュウギ「チャンバラごっこじゃないよ！これは男と男の決闘だ！」

リュウ「男と男の決闘、ねぇ…。

？？？「ここにいたか、リュウ。」

その時、リュウの前に青髪をした男が現れる。リュウは名前を叫ぶ。

リュウ「シロウ！？」

リュウギ「あ！カズマのお父さんだ！」

シロウ「少し話しがあるんだけどいいかい？」

リュウ「分かった。リュウギ、お前は先に帰っててくれ。シロウと少し話するから。」

リュウギ「分かった！」

リュウギは先に家に帰ると、リュウとシロウは公園でゆっくりと話をする。

リュウ「なんだよ、話って？」

シロウ「先程、チンロンモンに呼び出されてね…。」

リュウ「な！？ってことはお前、記憶戻ったのか…！？」

シロウ「そっ♪今思えば、長い眠りだったね。」

リュウ「あぁ。お陰様でこんなオッサンになっちまったよ…。」

シロウ「話はチンロンモンから聞いた。それで、君はどうするんだい？」

リュウ「行きてぇけどよ…」

シロウ「何を迷っているんだい…？」

リュウ「下手を踏めば家族まで巻き込まれる…。そんな気がするんだ…。」

シロウ「君らしくないね。もしかして歳のせいかなぁ？」

リュウ「かもな…。」

シロウ「それじゃデジタルワールドをこのまま放っておくのかい…？」

リュウ「バカ言ってんじゃねぇよ…。デジタルワールドがあったら今の俺達がある…。このまま放置プレーするわけないだろ。」

シロウ「だったら、君の意志をリュウギに受け継けつがせばいい。」

リュウ「俺の意志を…？」

シロウ「記憶が目覚めた時に俺は決めたんだ。俺はカズマをデジタルワールドに連れて行くってね♪」

リュウ「アイツをか！？なんのために！？」

シロウ「デジタルワールドの未来を守るためにさ…♪だから俺の意志をカズマに受け継がせる。」

リュウ「デジタルワールドの未来……。」

シロウ「さっき、カズマとリュウギとの決闘を拝見させて貰った。あの2人ならきっとデジタルワールドを守ってくれると俺は思うけどな…。」

リュウ（意志を受け継がせる、か。親父は俺に意志を受け継がせるためにコアを託したのか…。）

「悪いシロウ…。用事思い出した！」

リュウはそう言って突然何処かへと走り去っていった。リュウの背中を見送るシロウはニコッと笑う。

シロウ「それでこそ君だよ、リュウ…。」

リュウはチンロンモンと会った路地裏まで来る。

リュウ「来たぜチンロンモン。」

すると、リュウの携帯電話が光り出し、突然と姿を消した。

リュウは目を開けると、路地裏ではなく真っ黒な世界だった。すると、チンロンモンは姿を現す。

チンロンモン「決意したのだな…。」

リュウ「あぁ。その依頼引き受けたぜ。だがその前に、お前の力でＥＸコアを引き出してくれないか？」

チンロンモン「いいだろう。」

チンロンモンは目を閉じて念じると、リュウの体内からＥＸコアを引き出す。

チンロンモン「何をするつもりだ？」

リュウ「こいつは無限パワーを秘めている。俺の計算が正しけりゃこうすんのさ。」

リュウはＥＸコアを地面に叩きつけると、ＥＸコアは真っ二つに割れた。

チンロンモン「!?」

リュウ「こいつは俺の中に。そして残りの半分は俺の息子に持たせる。その方が奴らに気付かれねぇだろ…。」

チンロンモン「ま、まさかコアを半分にするとは…。」

リュウ「俺の物なんだからどう使おうが俺の自由だ。それに、俺の意志を受け継いで欲しいんだ。かつて親父が俺にそうしたようにな。悪いか?」

すると、チンロンモンは高らかに笑う。

チンロンモン「フハハハハ!やはり相変わらずだなリュウ。しかしコアを半分にする選択を選ぶのか?精神的なダメージを受けてしまうと、コアが暴走してしまい己の人格を失う恐れがある…。そなたならともかく、息子はどこまで耐えられるというのだ?」

リュウ「心配ねぇよ。俺が助けりゃいいんだよ。それに…」

チンロンモン「……?」

リュウ「選ぶんじゃねぇ。もう選んだんだよ。」

チンロンモン「よかろう…。ではそなたを始まりの救世主とする。」

チンロンモンは目を閉じて念じると、リュウの左手首から聖なる光りが生じる。光りが止むと白い腕時計のようなものだった。

リュウ「なんだよこれ…？」

チンロンモン「それは救世主（エクセリオン）として認められた証、Ｄ－アクセル。デジドライブとは違い、契約（コントラクト）したデジモンを呼び出すことができる。そのためにはデジモンと契約をしなければならない。それからもう一つ…。」

すると、半分に割れたＥＸコアはリュウの体内に入り込み、残りの半分はリュウのＤ－アクセルの中へと入り込む。

チンロンモン「ＥＸコアの能力により、そなたはＥＸモードを発動させる事ができる。ＥＸモードを発動すると、極限を超えた能力を発揮することができる。これはデジモンだけにしかない能力だが、ＥＸコアを持つそなただけ発動できる力だ。」

リュウ「待てよ。リュウギにＥＸコアを持たせたらそのＥＸモードを発動する事ができるのか？」

チンロンモン「ＥＸモードを発動させるには幾多の経験が必要…。今の彼にＥＸモードを発動させるには不可能だ…。」

リュウ「なるほどな…。」

チンロンモン「今でも闇の住人達はそなたの持つＥＸコアを狙っている…。気をつけるのだぞ。」

リュウ「あぁ。明日、リュウギをデジタルワールドに連れて行く。

閉ざされたデジタルゲートを開けといてくれないか？」

チンロンモン「分かった。」

リュウ「頼むぜ…。」

リュウはチンロンモンと別れを告げ、現実世界へと帰っていった。

リュウギ（決めたぜ…。俺はこの力でデジタルワールドを救う…。そして俺の意志をリュウギに継がせるんだ…。デジタルワールドの未来のために…。）

リュウの戦いはこうして再び幕を開けるのであった。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

リュウ「オメガモン、テメェが何をしようと俺はテメェを倒す！」

リュウはセイクリッド・ドラグーンを下から振り上げると、剣風によって生み出された巨大な衝撃波を放つ。

オメガモン「小賢しい！」

オメガモンはグレイソードで衝撃波を弾き返した途端、リュウはセイクリッド・ドラグーンを背中に背負い、懐から2丁デジガンを取り出して高く飛び上がる。

リュウ「喰らいやがれ！」

リュウはデジガンの引き金を引いてオメガモンを狙い撃つと、オメ

ガモンは白いマントで銃撃を防ぐ。

リュウ「まだだ！」

リュウはポケットから爆裂弾を二丁デジガンに装着し、オメガモンを狙い撃つ。

弾丸の雨が降り注ぐと、オメガモンの周りに凄まじい爆撃が生じて爆煙が舞い上がる。

オメガモン「くっ！？」

リュウ「終わりだ？」

リュウは地面に着地したあと素早くデジガンをしまい、セイクリッド・ドラグーンを振りかぶる。

その時、オメガモンが爆煙を切り開き、リュウの前に現れる。

リュウ「なに！？」

オメガモン「その程度の力で私に勝てるとでも思ったか…？片腹痛い！」

オメガモンはガルルキャノンで薙ぎ払いリュウを殴り飛ばした。

リュウ「かはっ！？」

リュウは激しく木に叩き付けられ、セイクリッド・ドラグーンは地面に突き刺さる。

ドルモン「リュウ！？」

リュウ「ゲホッゲホッ…。クソ…」

EXモードが解けてしまい、リュウの身体を纏う光のオーラは消えてしまう。

オメガモン「他愛も無い。終わりだ…。」

オメガモンはガルルキャノンの砲口をリュウに向けてトドメを刺そうとしたその時だった。

ドルモン「『メタルキャノン？』」

ドルモンは口から鉄球を放ち、オメガモンに直撃する。

オメガモン「……。」

ドルモンとトコモンがリュウの前に立ち、戦う体勢に入る。

ドルモン「俺が相手だ！」

トコモン「あい！」

リュウ「バカ、お前ら出てくるんじゃねぇ！？」

オメガモン「余所者が余所者を庇うか…。なぜ人間を庇うのだ？」

ドルモン「友達って言ってくれたから…。だから俺、リュウに指一

本触れさせない！」

オメガモン「面白い…。」

オメガモンは急接近し、ドルモンに体当たりをした。

ドルモン「うわっ！？」

ドルモンは押し飛ばされて木に叩き付けられる。すると、トコモンは口を開けて威嚇し、オメガモンに体当たりする。

トコモン「がぁー！」

オメガモン「……。」

オメガモンは体当たりしてくるトコモンを軽く殴り飛ばした。

トコモン「きゅ！？」

ドルモン「このっ！」

トコモン「がぁー！」

ドルモンとトコモンは立ち上がり、オメガモンに体当たりした。しかし、オメガモンは表情なに一つ変えず、ただ殴り飛ばす。

ドルモンとトコモンはそれでも立ち上がり、何度も立ち向かう。

オメガモン（敵わないと分かっているハズなのに、どうしてこうも立ち向かって来る…？なぜだ…？）

リュウ「やめろお前ら！？くっ…！」
（身体が動かねぇ…。動け。頼むから動いてくれ…。このままだとアイツらが死んじまう！）

リュウはＥＸモードで力を使い果たしたため、立ち上がる力さえ残っておらず、ドルモン達がやられているのをただ黙って見ているだけしかなかった。

夕日が沈むと同時に、ドルモンとトコモンは力尽きて倒れてしまう。

リュウ「！？」

オメガモン「……。」

オメガモンはグレイソードを取り出し、ドルモン達に近付く。

リュウ「やめろ！やるなら俺をやりやがれ！」

オメガモン「心配ない。コイツらを消去したあと、次は貴様だ。」

その時、リュウはあの悲惨な事件を思い出す。リュウの身代わりとなって死んだセツナの事を…。

リュウ「やめろ…。」
（あの時みたいに目の前に誰かが死ぬなんて…。もう見たかねぇんだよ…。）

オメガモンはグレイソードを振り上げると、リュウはありったけの声で叫ぶ。

リュウ「やめろぉおおお

ＥＰ９０　～未来を守護する者～（後書き）

リュウ達の前に突如洗われたウォーグレイモンＸとメタルガルルモンＸ？

果たしてオメガモンを止めることができるのか！？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ９１　～生きたい心！ドルモン、怒りのＸ進化？～（前書き）

果たしてデジモン達の大量虐殺をするオメガモンを倒す事が出来るのか！？

Ｅｐ９１スタート？

EP91　～生きたい心！ドルモン、怒りのX進化？～

リュウ達の前に突如現れたウォーグレイモンXとメタルガルルモンX。

リュウ「お前は…！？」

ウォーグレイモンX「大丈夫か…？」

リュウ「あ、あぁ…。」

すると、ドルモンは虚ろな目でウォーグレイモンXを見つめ小さく口を動かす。

ドルモン「約束……守ったよ……。」

リュウ達のボロボロな姿を見てウォーグレイモンXはギロリとオメガモンを睨む。

ウォーグレイモンX「くっ！」

メタルガルルモンX「これが、ロイヤルナイツの正義か！？」

メタルガルルモンXはそう言って身体中に装備してある武器を構える。

オメガモン「イグドラシルの、新デジタルワールドの正義だ？」

オメガモンは高々と飛翔してメタルガルルモンXに接近する。

隙を読んだウォーグレイモンXはリュウに指示をする。

ウォーグレイモンX「よし、今のうちに俺達が戦ってる間、お前達は逃げろ！」

リュウ「逃げる…？冗談じゃねぇ…。」

リュウはフンと鼻で笑いながら、ゆっくりと立ち上がる。

リュウ「俺も混ぜてくれよ…。」

ウォーグレイモンX「お前の身体はもうボロボロだ…。無茶にも程がある。」

リュウ「ゴチャゴチャうるせぇんだよ…。アイツに一発ブン殴らねぇと気が済まねぇ性分でよぅ…。」

ウォーグレイモンX「だけど…。」

リュウ「デジタルワールド守りてぇのは俺も同じだ…。強力し合おうぜ…。」

（ニヤ…）

リュウの瞳を見て、ウォーグレイモンはゆっくりと頷いた。

ウォーグレイモンX「乗れ。だけど無茶するなよ。」

リュウ「余計なお世話だっつうの。」

リュウはセイクリッド・ドラグーンを背負い、ウォーグレイモンXの肩に乗る。

一方、メタルガルルモンは身体中に装備してある武器を一斉射撃させる。

メタルガルルモンX「『ガルルバースト?』」

追尾型の特性を持つ無数のミサイルはオメガモンを襲う。

オメガモンは表情何ひとつ変えず、軽々とミサイルを交わして行く。すると、オメガモンはガルルキャノンの砲口をメタルガルルモンXに向けて放つ。

メタルガルルモンX「くっ!」

メタルガルルモンXは間一髪で交わし、そのままオメガモンに接近する。

対するオメガモンもメタルガルルモンXに接近してぶつかり合う。

メタルガルルモンX「ぐはっ!?」

オメガモン「くっ!?」

地上に向かって落ちて行くオメガモン。すると、地上にはウォーグレイモンXとリュウが待ち構えていた。

リュウ「来るぞ!」

ウォーグレイモンX「あぁ？」

ウォーグレイモンXは鋭い爪を地面に差し込むと大地から強力なエネルギーが溢れ出し、やがて巨大なエネルギー球となってオメガモンに向けて放った。

ウォーグレイモンX「『ガイアフォース？』」

オメガモン「くっ！？」

オメガモンは間一髪でガイアフォースを交わしてそのまま急降下し、グレイソードを取り出してウォーグレイモンX達に襲い掛かる。

すると、リュウはセイクリッド・ドラグーンを肩に担いで低く構える。

リュウ「こんのおおおおおおおおおおお？」

リュウはありったけの力でグレイソードを弾き返してオメガモンを上空に上げた。

メタルガルルモンX「『コキュートスブレス？』」

その時、更に上空からメタルガルルモンXが現れ、口から絶対零度の冷気を吐出した。

オメガモン「くっ！？」

オメガモンはとっさにマントで冷気を防ぎ、後方へと下がって体勢を立て直す。

リュウを乗せたウォーグレイモンXとメタルガルルモンXは横に並び、オメガモンと対峙する。

ウォーグレイモンX「3人掛かりでもダメか…。」

メタルガルルモンX「強い…。」

リュウ「なぁに、三位一体となりゃ何とかなるさ…。」

メタルガルルモンX「ところで、君は一体？」

ウォーグレイモンX「心配ない。コイツは俺達の仲間だ。」

リュウ「そういうこと。」

オメガモン「やるもんだな。だが、終わりにしよう！」

オメガモンはそう言ってグレイソードを振りかぶる。

リュウ「させるかよ！」

ウォーグレイモンXはオメガモンの攻撃を阻止しようと猛スピードで接近し、メタルガルルモンXは身体中に装備してある武器を構えて遠距離からの攻撃をする。

その時だった。

ドルモン「この子がッ！？」

メタルガルルモンXは振り向くと、トコモンが死にかけていた。ドルモンは涙目になりながら叫ぶ。

ドルモン「この子が死んじゃう！？」

オメガモン「『グレイソード？』」

オメガモンは何も躊躇いもなくグレイソードを振り下ろすと、剣風によって生み出された巨大な衝撃波を放つ。

リュウ「避けろ！？」

リュウが叫ぶとウォーグレイモンXは交わした。しかし掠り傷を負ってしまい海に落っこちてしまう。

リュウ・ウォーグレイモンX「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

巨大な衝撃波はドルモンに襲い掛かる。

ドルモン「！？」

ドルモンは思わず目を閉じた。すると、巨大な衝撃波は島ごと葬り去った。

ドルモン「……。」

何も痛みを感じない。ドルモンはゆっくりと目を開けると、とんでもない物を目にした。

？？？「くっ…、かはっ！」

なんと、メタルガルルモンXが身体を張ってドルモンとトコモンを守っていたのだ。

ドルモン「あ、あ……。」

メタルガルルモンX「くっ、Xプログラムに感染したか…。心配するな。俺はもうじき死ぬ…。俺のX抗体をこの子にやろう。俺の分まで生きてくれ…。」

ドルモン「……。」

ドルモンは悲しみにグッと堪える。すると、メタルガルルモンXはX抗体を取り出してゆっくりと差し出す。

メタルガルルモンX「命は、そこにあるだけで美しい…。お前に託す…。」

X抗体が光り出すと、トコモンは光りに包まれる。メタルガルルモンは小さく笑みを浮かべたあと、力尽きてバタリと倒れた。

ドルモン「!?」

メタルガルルモンXは静かに息を引き取った。

ドルモン「う、うぅ…。」

ドルモンは悲しみに堪えきれず、ありったけの声で叫んだ。

ドルモン「うわぁぁぁ

あぁあぁあぁあ

リュウ「マジでか!?アイツ進化したのか!?」

リュウはD－アクセルでデータを読み取る。

D－アクセル「ドルガモン、成熟期、獣竜型、データ種、必殺技はパワーメタル。」

オメガモン「なぜだ?どうしてそうまでして戦う?」

するとドルガモンは口を開く。

ドルガモン「生きたいからだ!」

オメガモン「!?」

ドルガモン「俺は生きてていいんだ!ただ、命を繋ぐために生きてていいんだ!」

すると、トコモンは光りに包まれ、X抗体へと変わった。

トコモンX「あう♪」

トコモンXは元気になり、ドルガモンの背中に乗る。

リュウ「そういうこったぁ…。生きる道を選びそして真っ直ぐ突き進む。迷った時には仲間に支えて貰えりゃいい。人生ってそういうもんだ…。」

ドルガモン「リュウ!?」

リュウ「少しは成長したじゃねぇか、ドルガモン。」

ウォーグレイモンX「オメガモン、お前にこの気持ちが分かるか？」

すると、オメガモンは小さく呟く。

オメガモン「イグドラシルはそれを望まない…。」

リュウ「まだそんな事言ってんのかぁ？いつまで操り人形みたいな事してんじゃねぇよ！テメェに心ってもんがねぇのかよ？」

オメガモン「黙れ…。これはイグドラシルの命令だ。ここで背く訳にはいかない！」

オメガモンはそう言って猛スピードで接近する。

ウォーグレイモンX「来るぞ。」

リュウ「こりゃ一発どころか、１０発ブン殴らねぇと分かんねぇみたいだな！」

リュウはそう言って2丁デジガンを取り出して構える。

ドルガモン「くっ！」

ドルガモン達は戦う体勢に入る。

その時、上空から一本の槍が現れて地面に突き刺さった。まるでオメガモンを足止めをさはたかのように。

オメガモン「この槍!?」

?!?「貴様の負けだ、オメガモン。」

なんとその正体はオメガモンと同様ロイヤルナイツの一人、デュークモンだった。

リュウ「新手か…。」

デュークモン「戦うつもりはない…。お前達に聞いて欲しい事がある。」

リュウ「なに…?」

デュークモン「Xプログラムはなぜ実行されたのか…。その理由を知りたいか?」

一同「!?」

オメガモン「デュークモン、何を話すことがある!?」

ウォーグレイモンX「デジモンの急激な増加に危機感を感じたイグドラシルは、旧デジタルワールドを捨てる決定をした!」

デュークモン「隠すまでもないことだ…。そう、この世界に少数の選ばれたデジモンだけを移送して、他のデジモンは全て消去されるハズだった…。」

リュウ「酷ぇ…。」

ウォーグレイモンX「プロジェクトアーク。Xプログラムはそのために実行された。」

デュークモン「その名前も知っていたか…。」

ウォーグレイモンX「だが、俺達は生き残った。そしてこの世界に逃れてきた。選ばれたデジモンも、生き延びたデジモンも同じデジモンじゃないか！」

オメガモン「違う！お前たちは異分子だ！イグドラシルはそう決定した。」

リュウ「テメェ、まだそんな事言ってんか？コイツらが自由に生きてて何が悪いんだ？」

オメガモン「貴様のような人間の出る幕ではない。引っ込んでおれ…。」

デュークモン「オメガモン！現実を直視しろ！イグドラシルの決定はすでにそのレベルを超えている！」

ウォーグレイモンX「どういう事だ？」

デュークモン「イグドラシルはプロジェクトアークを第二段階に実行される。全デジモンを抹消するつもりだ。」

オメガモン「貴様、それは機密事項だぞ！？」

デュークモン「構うものか…。選ばれたデジモンも、君たちX抗体

を持つデジモンも全て消去する…。」

リュウ「マジかよ…。」

ウォーグレイモンX「そこまで徹底して…。」

デュークモン「我が君イグドラシルからの指令だ…。それを実行するのは我々ロイヤルナイツの役目…。しかし、このデュークモンには出来ぬ？」

一同「……。」

オメガモン「裏切るというのか…？」

デュークモン「自分の気持ちを裏切るまいとするが、イグドラシルを裏切ることになるかもしれない…。仕方あるまい。」

リュウ「デュークモン…。」

オメガモン「次に会う時は敵か？」

デュークモン「残念だな…。我が盟友オメガモン、一つだけこのデュークモンのわがままを聞いて貰えないだろうか？」

オメガモン「言ってみろ。」

デュークモン「彼らにも、次の機会を与えて欲しい…。」

一同「！？」

オメガモン「この痛み、決して忘れん…。」

オメガモンはそう言って高く飛び上がり天空へと去っていった。

地面に突き刺さった槍を手に取り、ドルガモン達を見つめる。

デュークモン「……。」

リュウ「おい、お前まさか…。」

デュークモン「人間よ…。この世界を救うには君の力も必要とされる…。忘れるでないぞ…。」

デュークモンはそう言い残して高く飛び上がり、オメガモンの後を追う。

リュウ「おい！待てよデュークモン！？」

天空へと消えたデュークモンはオメガモンとの死闘を繰り広げる。槍と剣が激しくぶつかり合う。その時、激しくぶつかり合う金属音は突然と消えた。なんと、オメガモンのグレイソードがデュークモンの胸を貫いていた。

オメガモン「貴様！？」

デュークモン「…こうする事でしか…確かめられぬ事がある…。手を煩わせた…。」

デュークモンは力尽きてしまい、静かに消え去った。

オメガモン「……くっ。」
（なぜだ。なぜそこまでして…。）

デュークモンを消去したオメガモンは途方に暮れる。

その頃、リュウとドルガモンはデュークモンがやられていた所を目にしていた。

リュウ・ドルガモン「!?」

ウォーグレイモンX「どうした?」

トコモンX「した?」

ドルガモン「デュークモンが…。」

リュウ「クソッタレが…。」

リュウは歯をギリッとさせ、自らの拳で地面を思い切り殴った。

ドルガモン「リュウ…。」

リュウ「俺はまた…、助ける事が出来なかった…。」

ドルガモン「……。」

ウォーグレイモンX「さぁ、行こう…。」

こうしてリュウ達はデュークモンによって助けられ、この荒れ果てた島から去っていった。

～ロイヤルナイツ本部～

オメガモン「……。」

マグナモン「浮かない顔だな…？」

オメガモン「マグナモン、お前は自分の戦いに迷いを持った事はないか…？」

マグナモン「ない。」

オメガモン「その自信の根拠は？」

マグナモン「この世界の秩序を守るという使命がある。そしてロイヤルナイツの誇りだ。」

すると、オメガモンは小さく笑う。

オメガモン「つまらぬ事を聞いた…。忘れてくれ…。」

オメガモンはそう言って何処かへと去っていった。

マグナモン「……。」

～古びた遺跡～

一方、リュウ達はウォーグレイモンXと別れ、古びた遺跡にて休息を取る。

ドルガモン・トコモンX「ＺＺＺ…。」

リュウ「ったく、あっちの世界といい、こっちの世界中といい…。俺ってつくづく運がねぇな…。」

リュウは深くため息つき、寝転がる。

リュウ「……。」

リュウは深刻な顔をしながら左目の傷を触る。

リュウ「結局俺は何も変わらねぇな…。あの時から何も…。」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーー数年前…。

ＥＸコアを半分にし、半分は自分。そして残りの半分は息子のリュウギに。デジタルワールドを守ろうと決意したリュウは夜中、リュウギの部屋に入る。

リュウギ「ＺＺＺ…。」

リュウ「……。」

リュウはＤ－アクセルを差し出すと、半分に割れたＥＸコアが現れる。

リュウ「デジタルワールドの未来をお前に託す…。」

リュウは小さく呟き、ＥＸコアをリュウギの体内に入れる。

リュウギ「う、う～ん…。」

すると、リュウギは目を覚ます。

リュウ「悪りぃ、起こしちまったな…。」

リュウギ「どうしたの父さん？」

リュウギは目を擦り付けながらリュウに問う。

リュウ「リュウギ、明日父さんがスゲェ所に連れていってやる…。」

リュウギ「なに、そのスゲェ所って…？」

リュウ「それは明日になってからのお楽しみだ…。」

（ニヤッ）

リュウはそう言ってニヤッと笑う。しかしリュウギは寝起きのため、何がなんだかさっぱりだった。

リュウ「お休み、リュウギ。」

リュウはそう言って部屋を退室した。

リュウギ「うん。お休み父さん。」

リュウはゆっくりとドアを閉めると、小さく笑いながらドアにもたれる。

リュウ（ドラコモン、びっくりするだろうな…。）

しかし、彼の思惑はそう上手くいかなかったのだ。そして彼だけではなく息子であるリュウギも…。

次の日…。

あの悲惨な事件が動き出したのはお昼の時だった。

昼食を終え、リュウはリュウギの帰りを待っていた。

シオリ「どうしたのよ貧乏揺すりなんかしちゃって？」

リュウ「リュウギの奴、遅ぇなぁ…。」

シオリ「学校で夕方に帰ってくるんだから我慢しなさいよ。」

リュウ「おいおいマジかよ…。」

シオリ「でも、夜に遊園地だなんて変じゃない？」

リュウ「特別な遊園地なんでな…。今度連れていってやるよ。」

シオリ「だったら今がいいなぁ…。」

リュウ「今度だ今度！今回はワケありでリュウギだけだ！」

シオリ「ケチ…。」

ピンポーン♪

その時、家のインターホンが鳴る。

シオリ「はいはーい！」

リュウ「ったく、誰なんだこんな時間に？ヒマ人は仕事に行ってろってんだ…。」←人の事言えない

シオリ「あれ、あなたは…？」

その時、玄関から男の声が聞こえてくる。

？？？「リュウはいるか！？」

リュウ「ん？」

リュウは気になり、玄関へと向かった。

リュウ「おう、俺ならここ……だ……。」

リュウは突然来た男を見て思わず言葉を失った。

？？？「ハァ…ハァ…、リュウ…。」

オールバックした金髪の男だった。なんとそれはリュウの双子の兄、小関　セツナだった。

リュウ「久しぶりだなセツナ！」

セツナ「今はそれどころじゃない…。リュウ、カオスの同志が現実世界に来る…。」

リュウ「!?」

シオリ「え…、どういう事…?カオスってなに…?」

リュウ「セツナ、ここで話すより向こうで話そう。」

リュウの表情が変わり、セツナを連れて家を出る。

シオリ「ま、待ってよあなた!?」

その時、シオリは突然と頭を抱えてしゃがみ込む。

シオリ「なんなのこの感覚は…?カオス。初めて聞いた気がしない…。」

リュウはセツナを連れてとある公園に来る。

リュウ「お前、いつの間に記憶が目覚めたんだ…?」

セツナ「ある日、黒いコートを着た男に言われてな…。その時に記憶が目覚めたんだ…。」

リュウ「セツナ、どういう事か説明してくれ…。カオスの同志ってなんだよ…?」

セツナ「かつて、俺達が倒した闇の支配者　カオス。だが、黒幕はカオスじゃないんだ…。」

リュウ「なんだと…！？」

セツナ「カオスの同志がデジタルゲートを通じ、こっちへ向かってくると黒コートの男に言われた…。目的は勿論、お前の持つＥＸコアだ…。」

リュウ「！？」

セツナ「ＥＸコアは闇が持つと世界は滅亡する…。つまりそれは黒幕を蘇らせるためだ…。」

リュウ「それじゃ、リュウギも…。」

セツナ「リュウギ…？まぁいい。ここは俺が囮になる。その間にお前は逃げろ。」

セツナの意外な言葉にリュウはセツナの胸ぐらを掴む。

リュウ「な、なに言ってんだよ！？お前を置いて逃げるわけねぇだろ！？」

セツナ「そうか…。兄の言う事が聞かないということか…。止むを得ないな…。」

その時、セツナはリュウの腹を峰打ちする。

リュウ「ぐふっ！？セツナ……テメェ……」

段々と意識が薄れ、やがてバタリと地面に倒れる。

セツナ「悪く思うなリュウ…。数年前に助けて貰った借り、ここできっちり返させて貰う…。」

セツナはそう言ってオールバックにした髪をクシャクシャにする。

セツナ「さてと…」

セツナは気絶したリュウを草陰に引きずり込み、衣装や髪型を変えてセツナはリュウの変装をする。

セツナ（リュウ）「これでいいか…。」

？？？「父さーん！」

セツナ（誰か来る！？）

セツナは慌てて草陰から出ると、リュウギと目が合う。

リュウギ「なにやってたの…？」

セツナ　（この子がリュウの息子か…。）

「べ、別に何でもない…。」

リュウギ「ふーん。それより早く連れていってよ！」

リュウギはニコッと笑いながらセツナの手をギュッと握る。

セツナ「え？一体何処に…？」

リュウギ「忘れたの？スゲェ所に連れていってやるって昨日言ってたじゃん！」

セツナは気付かれないように分かったフリをする。

セツナ「そ、そうだったな。悪かった。」

リュウギ「どうしちゃったんだよ父さん？なんか変だよ？」

セツナ「き、気のせいだ…。……！？」

その時、セツナは遠くから闇の気配を感じる。

セツナ　（クソッ、もう嗅ぎ付けてきたか…。この子も連れていかないと巻き込まれてしまう…。止むを得ない。）

「リュウギ！早くいくぞ！」

リュウギ「あ！待ってよ父さん！」

それからセツナはリュウに成りすましながらリュウギを連れていく。

リュウの使っていた車に乗って山の方へと逃げていくのであった。

リュウ「う、う～ん…。」

リュウは目を開けると、今宵の満月が目に映る。

リュウ「俺は一体…？」

リュウは起き上がると、普段着と違う服を着ていることに気付く。

リュウ「この服…。まさか！？」

リュウはハッとし、公園の便所に向かって鏡を見ると、自分の姿はセツナになっていた。

リュウ「あの野郎…。本気で囮になるつもりなのか…。クソッ！」

リュウは便所から飛び出し、辺りを見回す。

リュウ「もう夜だ…。まさかリュウギもセツナと一緒に…！？一体何処へ行ったんだ！？」

その時、リュウはハッとした。ＥＸコアなら分かるかもしれないと。

リュウは一か八かの賭けに出る。

リュウ（頼むＥＸコア…。俺をリュウギの所に導いてくれ…。）

その時、ＥＸコアは答えてくれた。北西の方角へ行けと…。

リュウ「北西か…。ありがとよ！」

リュウはＥＸコアを頼りに急いで北西の方角へと向かった。

その頃、セツナは車を運転しながら森の奥へと逃げ込み、車を止める。

セツナ（ここならもう大丈夫だ…。）

隣を見るとリュウギはグッスリと眠っていた。

リュウギ「ＺＺＺ…。」

セツナ「すまないな…。後でちゃんと家まで送り返してやるからな…。それまで我慢しててくれ…。」

セツナは小さく呟きながらリュウギの頭を撫でると、リュウギの胸から小さな光が生じる。この光景を目にしたセツナは思わずハッとする。

セツナ「！？」

（この光！？まさかこの子もＥＸコアを…）

？？？「見つけたぞ…。」

セツナ「！？」

セツナは慌てて車から飛び出ると、何者かが車を押し飛ばし、車は横転する。

セツナ「くっ！？」

（しまった！？）

リュウギは重傷を負い、車の外に放り出されていた。すると、謎の声は不気味に笑う。

？？？「この私から逃れられるとでも思ってたか…？かつて私の同志、カオスを倒したデジタルワールドの英雄が聞いて呆れる…。」

セツナ　（どうやら、気付かれてないようだな…。なんとかこの子を守らないと…。）

「あそこじゃ思う存分暴れられねぇからな…。相手してやるから来いよ…。」

ー数分後…。

リュウ「ハァ…ハァ…。」

EXコアを辿って深い森に入るリュウ。すると、森の奥から火事が起きている事に気付く。

リュウ「まさか…!?」

リュウは急いで森の奥へと走り出す。

リュウ「!?」

リュウが見た物は、セツナとリュウギが倒れていた。リュウは慌ててリュウギの元へと駆け寄る。

リュウ「リュウギ!?しっかりしろ、リュウギ!?」

リュウギ「……。」

リュウ（気を失ってるだけか…。）

セツナ「リュ……ウ……。」

リュウ「!?」

リュウは慌ててセツナの元へと駆け寄る。

リュウ「セツナ！？」

セツナ「安心しろ…。これでしばらくは奴らに追われないハズ…だ……。」

リュウ「安心してられるか！今すぐ助けるから！」

セツナ「もう…無理だ…。」

リュウ「うるせぇ！ここで諦めてんじゃねぇよ！だって…、お前は俺のたった一人の兄貴だから…。」

リュウは涙目になりながら怒鳴る。

セツナ「たった一人の…兄貴、か…。そんな風に言われたの、何年ぶりかな……。」

リュウ「バカ野郎…。なんでそんな事を…。」

セツナ「決まってる…。たった一人の弟を……助けたかったからだ…。」

リュウ「！？」

セツナは微かな笑みを見せ、リュウの手をギュッと握る。

セツナ「リュウ…、俺の分まで生きろ…。そしてデジタルワールドの未来を…、守ってく……れ……。」

セツナはそう言って静かに息を引き取った。セツナの手はゆっくりと地面に落ちる。

リュウ「セツ…ナ…。」

リュウは目の前が真っ白になり、ゆっくりと立ち上がる。すると、突然高らかに笑う。

リュウ「ク、ククク…、フハハハハハハハハハ…？」

リュウの高笑いによりリュウギは目を覚まし、悲惨な事件を目撃する。そしてリュウギだけでなくドラコモンも…。

リュウギ（父…さん…。）

やがてリュウギはショックにより再び気を失った。

高らかに笑った後、リュウは突然と涙を流す。

リュウ「守れなかった…。家族誰一人も…。畜生…。チクショォォォォォォォ？」

虚脱状態に陥ったリュウ。しばらくすると、リュウは涙を拭いてゆっくりと立ち上がる。

リュウ「こんな所で泣いてる場合じゃねぇ…。早くリュウギを病院に連れていかないとな…。……！？」

リュウは背後から殺気を感じる。リュウは振り向いた途端、何者かがリュウの左目を切った。

リュウは左目を押さえながら素早く後方へと下がり、戦う体勢に入る。左目から流れる血はポトリポトリと地面に落ちる。

リュウ「くっ…!?まさか追手か!?」

リュウの左目を切った者の正体は、なんとリュウギだったのだ。

リュウ「な!?リュウギ…!?」

リュウギ「……。」

リュウギの目は紅く染まり、眼光を鋭く光らせる。すると、リュウはハッとする。

リュウ「まさか、ＥＸコアの暴走か…!?」

リュウギ「よくも…、よくも父さんを殺したなぁぁぁぁぁぁ!」

リュウギは拳を握り締め、リュウに殴りに掛かる。リュウは必死に自分がリュウだと言い続ける。

リュウ「待てリュウギ!?俺が分からねぇのか!?」

リュウギ「うるさい!お前は父さんを殺した!だから俺はお前を絶対に許さないんだ?」

リュウ「くっ!」

（止むを得ねぇ!）

リュウは仕方なく、リュウギの腹に峰打ちした。

リュウギ「！？」

リュウギは力尽き、やがて気を失う。すると、暴走は静まった。

リュウ「なにやってんだよ、俺…。たった一人の兄貴や息子すら守れねぇなんてよぉ…。情けないったらありゃしないぜ…。」

すると、リュウは絶望的になってしまい、涙がこぼれ落ちる。

リュウ「何が英雄だよ…。結局俺一人じゃ何もできねぇじゃねぇかよ…。クソ…。クソォォォォォォォォォォッ！」

リュウは己の無力さに嘆き高らかに叫ぶ。彼の叫び声は森中に響き渡るのであった。

～小関家～

シオリ「……。」

リュウとリュウギの帰りを待つシオリ。すると、ドアが開いた音がする。

シオリ「！？」

シオリは慌てて玄関に向かうと、とんでもない物を目にする。

それは、リュウギを抱きかかえセツナの姿をしたリュウだった。リュウは左目の出血を防ぐため、左目部分に包帯を巻いていた。

シオリ「リュウギ!?それにあなたはセツナさん…!?」

リュウ「……。」

シオリ「一体何が合ったの!?夫は、リュウは何処に…!?」

リュウだと気付かずリュウに問い詰めるシオリ。それに対しリュウは自分がリュウだと言えばいい物の、とんでもない事を口にする。

リュウ「リュウはもういない…。」

シオリ「え!?」

リュウ「あいつは誰一人救えないただの腰抜けだ…。そう、たった一人の兄弟だけじゃなく、たった一人の息子すらもな…。」

シオリ「ど、どういう事なの…?」

リュウ「リュウからの伝言だ…。リュウギを誰にもの手の届かない安全な場所に避難させてやってくれ、と…。ここは危険だ…。」

リュウはそう言って抱きかかえたリュウギをシオリに手渡す。

シオリ「待ってよ、私には何が何だか分からないわ!リュウは…、私の大切な人は何処へ行ったのよ!?」

リュウ「……。」

リュウは虚ろな目でシオリに最後の言葉を交わす。

リュウ「リュウはもうここに戻ってくる事はない。これは絶対だ…。だからもう忘れるんだな…。」

リュウはそう言って家を出ていった。

シオリ「そん…な…。」

シオリは涙目になり、やがて泣き崩れる

何処にも行く宛てがなくただ歩き続けるリュウ。すると、リュウはゆっくりと夜空を見上げる。

リュウ「……。」

（ごめんなシオリ、リュウギ…。こんな俺に帰る場所なんて何処にもない…。そして俺はもうリュウじゃない…。俺は咎人だ…。）

すると、リュウの右目から自然と涙が流れていた。

リュウ「罪を背負った俺に、生きる資格なんてあるのだろうか…？教えてくれよ、相棒（ドラコモン）…。」

それからリュウは自らの名前を捨て、行く宛てもない道へと進むのであった。

ーーーーーーーーーーーーーー

リュウ「……。」

古びた遺跡の天井をジッと見つめるリュウ。あの頃に振り返ってみ

れば、自分はこうしてのうのうと生きていて良いのだろうかと薄々と感じていた。

リュウはポケットを探り、ある物を取り出す。

それは、リュウギに託したペンダントとは少し異なり、ルビーではなくサファイアがはめ込まれていた。

リュウ「今更悩んでもしゃーねぇよな…。俺は俺のやるべき事をやるんだ…。この腐った世界を助けるんだ…。」

リュウはペンダントを首に掛け、ゆっくりと眠りにつくのであった。

夜が明け、リュウは外の空気を吸おうと古びた遺跡を出る。

リュウ「ふぁ～、色々あり過ぎてなかなか眠れなかったぜ…。」

リュウは大きくあくびをした後、首の骨をゴキゴキと鳴らす。

リュウ「さぁて、これからどうすっかな…。」

リュウは腕を組んでこれからの事を考えようとしたその時だった。

背後から剣風によって生み出された衝撃波が飛んでくる。

リュウ「!?」

リュウは感付いてとっさに高く飛んで交わすと、岩山に直撃し、岩山は粉々に砕けた。

リュウは地面に着地すると、懐から2丁デジガンを取り出して構える。

リュウ（ロイヤルナイツか!?）

リュウは辺りを見回す。しかし誰もいないと思ったその時だった。

???「良い反応だ…。」

リュウ「!?」

リュウは振り向くと、黒いコートを着た男が古びた遺跡の門の上に座っていた。

リュウ（いつの間にあそこにいたんだ!?気配すら感じ取れなかったってのに…!?）

???「今の反応によって、貴様がリュウである事をお見受けした…。」

リュウ「おいおい、初対面相手に随分と変わった挨拶するじゃねぇか…よッ?」

リュウは言葉を発すると同時にデジガンの引き金を引いて謎の男を狙い撃つ。

すると謎の男は一瞬にして姿を消して弾丸を交わされた。

リュウ「チィッ!」

リュウは警戒しながら辺りを見回すと、謎の男はオブジェの上に乗っていた。

リュウ「この野郎…。」

？？？「ククククク…。」

謎の男は静かに笑い、高く飛び上がり、遺跡外れの森へと消えて行った。

リュウ「くっ、待ちやがれ！」

リュウはすぐさま謎の男を追いかけ遺跡外れの森へと入っていくのであった。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

ＥＰ９１　～生きたい心！ドルモン、怒りのＸ進化？～（後書き）

リュウの前に突如現れた黒いコートを着た謎の男…。

次回はリュウＶＳ黒コートの男？

お楽しみに？

Ｅｐ９２　～太陽と月を操る男～（前書き）

リュウの前に突如現れた黒コートの男！？

目的は一体？

Ｅｐ９２スタート？

ＥＰ９２　～太陽と月を操る男～

ここは古びた遺跡から少し離れた所にある森の中。

リュウ「待ちやがれ！」

リュウは突如現れた黒コートを着た男を追い掛けていた。

森を抜けると、そこには黒コートの男が待ち構えていた。

リュウ「やっと追い詰めたぜ…。」

（ハァ…ハァ…）

？？？「……。」

リュウ「テメェ、一体何者なんだぁ？まさかロイヤルナイツか…？」

？？？「……。」

リュウ「おい、何とか言え…。」

黒コートの男は何も言わず、ゆっくりと右手を差し出した。すると、右手から灼熱の炎が生じ、やがて剣が現れる。

リュウ「んな！？その剣！？」

黒コートの男の持つ剣は、かつてリュウの仲間が持っていた剣だった。リュウはその剣の名を口にする。

リュウ「紅炎剣・ソル…!?まさかお前、ヒナタ?佐久間　ヒナタなのか…?」

???「……。」

黒コートの男は紅炎剣・ソルを逆手に持ち、振り上げるように振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放つ。

リュウ「くっ!?」

リュウはとっさに背中に背負っている大剣、セイクリッド・ドラグーンを取り出して衝撃波を弾き返す。

???「残念だが、俺はそのヒナタという者ではない…。」

すると、黒コートの男は左手を広げると左手から凍てつく氷が生じ、やがて刀が現れる。その刀を見たリュウは驚愕する。

リュウ「んな!?そいつは月牙・ルナティック!?まさか月野　ケントか…!?」

???「はぁぁぁぁ!」

黒コートの男は左手に持つ月牙・ルナティックを横一閃に振った後、右手に持つ紅炎剣・ソルを縦一閃に振ると、炎と氷の衝撃波が一つとなり十字状の衝撃波となってリュウに襲いかかる。

リュウ「んな!?」

リュウはとっさに横に飛んで交わすと、十字状の衝撃波は背後にあ

る森を八つ裂きにした。

リュウ「おいおい…、どういう仕掛けになってんだよ…。テメェ、なんでその剣持ってんだよ?まさか継承者か?」

???「それも外れだ…。」

黒コートの男は2つの剣を構えて戦う体勢に入る。

???「貴様の力、拝見させて貰う…。構えろ、デジタルワールドの英雄よ…。」

リュウはダルそうな顔をしながら頭をポリポリとかく。

リュウ「ったく、どいつもこいつも…。俺、この世界に来てからホンット運ねぇぜ…。でも…」

リュウはセイクリッド・ドラグーンを背中に背負った後、懐から2丁デジガンを回転させながら取り出して構える。

リュウ「何か知ってそうなツラしてるな…?俺が勝ったら洗い浚い吐いて貰うぜ…。」

すると、黒コートの男は小さく笑う。

???「フン、オメガモンに苦戦した貴様ごときに、果たして俺に勝てるかな…?」

リュウ「ぬかせ?」

リュウは2丁デジガンで黒コートの男を狙い撃つ。

黒コートの男は両手に持つ剣で全ての弾丸を弾き返す。

リュウ「くっ！まだまだ！」

リュウはポケットから氷結弾を取り出してデジガンに装着し、黒コートの男の足元を狙い撃つ。

？？？「甘い…。」

黒コートの男は紅炎剣・ソルを逆手に持ち、真下に振ると地面から炎の壁が現れて氷結弾を弾き返す。

リュウ「んな！？」

？？？「まだだ…。」

黒コートの男は月牙・ルナティックを地面に突き刺すと、地面から無数の氷の刃が生えでてきて容赦なくリュウに襲い掛かる。

リュウ「くっ！」

リュウは高く飛び上がって交わし、ポケットから爆裂弾を氷結弾と入れ替えて地面に向かって撃ち込む。

すると、地面に撃ち込まれた弾丸は凄まじい爆発が生じ、地面から生えでてきた氷の刃は粉々に砕け、爆煙が舞い上がる。

リュウは着地したあと、デジガンを構えて警戒体勢に入る。

リュウ「どうだぁ？」

すると、黒コートの男は紅炎剣・ソルを薙ぎ払うように振ると、爆煙は一瞬にして消え去った。

リュウ「全くノーダメージかよ…。ターミネーターかテメェは？」

？？？「そろそろ終わりにしようか…。」

黒コートの男は月牙・ルナティックを構える。すると、月牙・ルナティックから凍てつく氷が宿す。

リュウ「！？」

（あの構えは！？）

？？？「唸れ、蒼き月の刃よ…。氷の魂を我に…。『ダイヤモンドダスト・ソウル。』」

黒コートの男の左眼には蒼色の瞳に染まっていた。

黒コートの男は凍てつく氷を纏った月牙・ルナティックを地面に突き刺さすと、地面から大量の氷の柱が次々と現れ、リュウに襲い掛かる。

リュウ「くっ！？」

リュウは氷の餌食となってしまい、氷気が舞い上がる。

？？？「所詮、その程度だったか…。」

黒コートの男はゆっくりと背を向けたその時だった。
氷の柱が砕かれて凄まじい氷気が舞い上がる。
リュウ「なに勝った気になってんだぁ？」
その時、リュウは氷気を切り開き、電光石火のごとく黒コートの男に接近してセイクリッド・ドラグーンを振り下ろした。
？？？「くっ！？」
黒コートの男はとっさに紅炎剣・ソルで斬撃を防ぎ、後方へと下がった。
リュウは地面に着地すると、セイクリッド・ドラグーンを肩に担ぐ。
リュウの身体には光のオーラが纏っていた。
？？？「なるほど…。とっさにＥＸモードを発動させたか…。」
リュウ「危うく凍死するところだったぜ…。というかもう死んでるけど…（小声）。さぁて、ここから本気でいかせて貰うぜ…。」
リュウはそう言ってセイクリッド・ドラグーンの刃先を黒コートの男に向けた。
？？？「残念だが、今日はここまでだ。」
リュウ「なに？」

？？？「あれを見ろ。」

リュウは上を向くと、金色の光が通り過ぎていった事に気付く。

リュウ「な、なんだよありゃ…？」

？？？「ロイヤルナイツの一人、金色のマグナモンだ。恐らく、ドルガモンを捕獲しにこの地に来たのだろう…。」

リュウ「なんだと！？捕獲ってなんの為に！？」

？？？「行け。このデジタルワールドを救うだけでは意味がない。貴様の使命は空白の席の主を護り、そしてこの世界を操る者を討て…。」

リュウ「な、なんだよその空白の席の主って…？」

？？？「本当の敵は影にあり…。また逢おう…。」

黒コートの男は何も答えず姿を消した。

リュウ「おい待てよテメ……ってもう行っちまいやがったか…。何なんだアイツは…？」

リュウはＥＸモードを解除し、セイクリッド・ドラグーンを背中に背負う。

リュウ「考えるのは後だ…。急がねぇとアイツらが危ねぇ。」

危機感を感じたリュウは急いで古びた遺跡へと向かった。

～古びた遺跡～

遺跡に着くと、ドルガモンはマグナモンに囚われてしまい上空へと消え去って行った。

リュウ「チィッ、一足遅かったか…。」

リュウは舌打ちをする。すると、草陰からトコモンXがひょっこりと出てくる。

リュウ「チビ助!?無事だったのか!?」

トコモンX「ひっく…、ひっく…。」

トコモンXは悲しげな顔をしながらリュウに飛び付く。

リュウ「悪ぃ…。とにかくウォーグレイモンの所へ行くぞ!」

リュウはトコモンXを肩に乗せ、急いでウォーグレイモンXのいる滝の方へと向かった。

～ロイヤルナイツ本部～

オメガモン「ドルガモンをイグドラシルに連れて来たその訳を問いたい。」

マグナモン「イグドラシルの意思だ。」

オメガモン「なに？」

マグナモン「あれは帰ってきたのだ。ドルガモン…いや、ドルモンは我らが世界で生まれたデジタル生命体ではない。イグドラシル自らが生み出した実験体なのだ。それが、イグドラシルからの御言葉だ。」

オメガモン「何のために…？」

マグナモン「さぁな。イグドラシルの真意までは分からん…。ロイヤルナイツとはいえ、所詮我らは手駒に過ぎんということか…。」

マグナモンはそう言ってその場から静かに去っていった。

オメガモン「……。」

（デュークモン…。お前の真意は何処にある…？確かめたい事とはなんだ…？そして、このイグドラシルの真意は…？）

オメガモンはマントをバサッと広げ、ゆっくりと歩き出す。

オメガモン「ここにはまだ、俺にはまだ知らない事がたくさんあるのだな…。」

ーーーーーーーーーーーーー

その頃、ウォーグレイモンXは…。

ウォーグレイモンX「あぁ。分かった…。」

滝の洞窟にて他の仲間との連絡を取り終えたところだった。

？？？「ウォーグレイモン！」

ウォーグレイモンX「！？」

誰かの呼び声によりウォーグレイモンXはハッとする。するとリュウとトコモンXが慌てて滝の洞窟に入ってくる。

リュウ「ハァ…ハァ…。」

ウォーグレイモンX「リュウ…。ドルガモンは？一緒じゃないのか？」

リュウの肩に乗るトコモンXは泣きながら話す。

トコモンX「ロイ…、ロイヤルナイツ…。」

ウォーグレイモンX「ロイヤルナイツがどうかしたのか？」

リュウ「悪い…。ドルガモンはロイヤルナイツの一人、マグナモンに連れ去られちまった…。」

ウォーグレイモンX「なんだって！？」

トコモンX「…ひっく、う～、うぇ～ん。」

トコモンXは自分のせいなのか、泣き出す。

ウォーグレイモンX「誰もお前を責めたりしない大丈夫だ…。なく

必要なんてないんだ…。」

リュウ「けどよぉ、これからどうするんだ…？」

ウォーグレイモンX「今、仲間と連絡を取り終えた所だ…。それまで待機だ…。」

リュウ「その方が妥当だな…。」

リュウは浮かない顔をしながら腕を組む。すると、ウォーグレイモンXは浮かない顔をするリュウに気付き声を掛ける。

ウォーグレイモンX「どうした？」

リュウ「あ、いや、何でもねぇ…。」

ウォーグレイモンX「そうか…。」

リュウ「……。」

（黒コートの男…。一体何者なんだ…？あの言い方すりゃ、この世界の住人じゃないのは確かだ…。それはそうとアイツの言っていた空白の席の主って一体何なんだよ…？なんでソルとルナティックを持っていたんだ…？）

リュウは必死に考えるが結局何も分からないまま、ただ仲間との連絡が着くまでしばらく待つのであった。

ーーーーーーーーーーーーーー

その頃、ドルガモンは異空間に閉じ込められていた。

ドルガモン「……。」

ドルガモンの身体が段々と薄れていきデータ化となり、そのデータが幾つも分裂されていく。

その時、ドルガモンの前に黒コートの男が現れる。

???「……。」

黒コートの男は手を広げると、光りが生じ、地面から巨大な穴が開かれる。すると、ドルガモンはその穴に落ちていった。

???「出遅れた穴は奴が埋めてくれるだろう…。頼んだぞ、デジタルワールドの英雄よ…。」

黒コートの男はそう言って静かに消え去った。

～ガラクタの山～

ここは、様々なガラクタが大量に棄てられていた。そこへ、二体のデジモンがガラクタをあさっていた。

???「ん…？」

魔法使いのような姿をした魔人型デジモン、ウィザーモンが何かを発見し、一緒に来たデジモンを呼ぶ。

ウィザーモン「おい！」

すると、ミイラの姿をしたデジモン、マミーモンが駆け寄る。

マミーモン「なんだ?」

ウィザーモンはガラクタを除けると、なんとドルガモンが倒れていたのだ。

ウィザーモン「見かけない顔だな…。」

マミーモン「放っておけ!どうせ分解しかけてる。」

ウィザーモン「見つけちまったもんはしょうがないだろ…。助かるかどうかはこいつの生きる力次第だが、放ってはおけない…。」

マミーモン「面倒を背負い込むのはご免だぜ…。基地に戻るぜ。」

マミーモンはそう言って基地へと戻って行った。

ウィザーモン「……。」

ウィザーモンは杖で魔法を使ってドルガモンを浮かし、基地へと連行するのであった。

~レジスタンス基地~

静かな洞窟の中、そこにはたくさんのデジモンが集まっていた。

マミーモン「そいつの正体が分かったぞ。」

ウィザーモン「ん?」

マミーモン「ウォーグレイモンから連絡があった。ロイヤルナイツに連れ去られたらしい仲間の情報だ。何もかもがコイツと一致する。」

ウィザーモン「連れ去られた？」

マミーモン「ウォーグレイモンはそう言っている…。」

ウィザーモンとマミーモンはお互いにドルガモンを見つめる。

マミーモン「どう思う？ここにいる事を知らせるべきだと思うか？」

ウィザーモン「ウォーグレイモンが探しているなら、そうすべきだ。」

マミーモン「しかしそりゃ、ロイヤルナイツにオレ達の居場所を知られる恐れがある。」

ウィザーモン「ウォーグレイモンも同じ危険を犯したんだ…。オレはウォーグレイモンのその判断を信じたい。」

マミーモン「ここにいる仲間全員を危険にさらす事になったとしてもかぁ？」

ウィザーモン「今がどんな時か忘れたのか？」

マミーモン「……。」

ウィザーモン「デジタルワールド中の仲間たちが危険にさらされて

いるんだ…。自分らの安全だけ考えてればいい時じゃない…。」

すると、マミーモンはウィザーモンの言葉に納得したか、ゆっくりと頷く。

マミーモン「……分かった。」

すると、レジスタンス組織の一人、シルフィーモンが口を開く。

シルフィーモン「では、ウォーグレイモンには私が知らせとくよ。」

ウィザーモン「……。」

ーーーーーーーーーーーーーーー

～異空間～

その頃、分解されたドルガモンのデータはやがて巨大なデジモンへと進化し、途轍もない咆哮を上げる。

？？？「グォォォォォォォォォォ？」

すると、巨大なデジモンは口から真っ赤に染まったデジタマを幾つも吐き出していく。

やがて、複数のデジタマが孵化すると真っ赤な身体をした獣竜型デジモンが生まれ、咆哮を上げる。

？？？「ギシャャャャャャャャ？」

謎の獣竜型デジモン達は翼を広げ、新デジタルワールドへと向かうのであった。

ーーーーーーーーーーーーーー

一方、リュウ達はレジスタンス組織から連絡が入り、その基地へと向かっていた。

トコモンX「……。」

ウォーグレイモンXの背中に乗るトコモンXは不安な顔をする。

ウォーグレイモンX「心配するな！あいつならきっと大丈夫だ。あいつがそう簡単に死んだりするものか！」

リュウ「そういうこった…。んな顔するヒマがあるならあいつを信じることだけ考えてな。」

トコモンX「あい！」

すると、上空がやけに騒がしいと気付き、リュウ達は立ち止まって空を見上げる。

ウォーグレイモンX「な、なんだあれは！？」

青空は段々と血のごとく真っ赤な空へと澄んでいく。

リュウ「異常現象じゃねぇ…。あれはデジモン…？」

よくよく見ると、先ほどの謎の獣竜型デジモン達の集団がとある場

所へと向かっていた。数え切れない程の数の余りに空が真っ赤に染まるように見えたのだ。

ウォーグレイモンX「あの方向は、まさかレジスタンスの基地に向かっているのか？」

リュウ「おいおい、なんかとんでもない事になりそうだぞこりゃ…。」

？？？「その通りだ…。」

一同「！？」

リュウ達は振り向くと、黒コートの男がいた。

リュウ「テメェは…！？」

リュウは背中に背負っている大剣、セイクリッド・ドラグーンを取り出す。

ウォーグレイモンX「知り合いか？」

リュウ「あぁ…。ちょいとイヤ～な奴でさ…。」

？？？「争ってるヒマはないのは貴様も気付いてるハズだ…。剣をしまえ。」

リュウ「だったら何しに俺の前に現れたんだぁ？ちゃっちゃと用件を言いな！」

？？？「あのデジモンはドルガモン…いや、ドルモンのデータから生み出されたデジモン…。」

ウォーグレイモンX「！？」

リュウ「あのカラスの群れみたいなデジモンはドルモンによって生み出されたってのか？」

？？？「あのデジモンはただのデジモンではない。さらなる進化を求めて実験されたデジモンの原型『プロトタイプデジモン』“ドルシリーズ”　の、実験当時の最終形態に酷似しているというアンデッド型デジモン　デクスドルグレモン。他のデジモンのデジコアを捕食し続けることで、死んだ状態でありながら活動し、進化するために膨大なデジコアを欲している。」

リュウ「要するに、ゾンビみたいなものか…。」

ウォーグレイモンX「それじゃ、ドルガモンがロイヤルナイツに連れ去られたのは…！？」

？？？「無論、イグドラシルの意思…。大量のデクスドルグレモンを使ってこの世界のデジモン達を喰らい尽くす…。それがプロジェクトアークの第二段階だ…。」

ウォーグレイモンX「そうだったのか…。」

リュウ「あの野郎…。」

？？？「デクスドルグレモン達は恐らくレジスタンス組織にいるデジモン達を喰らい尽くそうとしている。勿論、ドルガモンもな…。

早く行け。」

リュウ「おいテメェ、なんでそこまでして俺達に教えてくれるんだ？何が目的だ？」

？？？「俺はただ、己の正義を貫き通すまでのこと…。さらばだ…。」

黒コートの男はそう言って姿を消した。

リュウ「おい、待ちやがれ！？」

ウォーグレイモンX「リュウ、時間がない！乗れ！」

リュウ「チッ、分かった。」

リュウは舌打ちをしたあと、ウォーグレイモンXの背中乗る。

ウォーグレイモンX「急ぐぞしっかり捕まってろ！」

ウォーグレイモンXは背中に装備しているバーニアを噴射し、猛スピードでレジスタンスの基地へと向かうのであった。

ー｜To Be Continued・・・

ＥＰ９２　～太陽と月を操る男～（後書き）

一方、陰でリュウ達を見守る黒コートの男は…。

？？？「この世界を変えてくれる事を信じているぞ、デジタルワールドの英雄よ…。」

黒コートの男は小さく呟いたあと、手のひらをジッと見つめる。

？？？「そろそろ、この世界のために逝った彼等に使命を与えるとしようか…。」

黒コートの男はそう言って海の方へと向かうのであった。

～キャラクター紹介　その１２～

名前：？？？

性別：男

一人称：俺

説明：漆黒に包まれたコートを特徴とし、突如リュウの前に現れた謎の男。かつてリュウの仲間、ヒナタとケントの持つ聖剣、紅炎剣・ソルと月牙・ルナティックを操りリュウに挑んできた。その戦闘能力はリュウよりも遥かに上回り、聖剣の力を使いこなしリュウを苦しめた。そしてリュウに謎の言葉を残して去って行った。彼がなぜリュウを試したのか。目的は不明。

＞i33737—1298＜
【デザイン：トリプルミーミング】

黒コートの男は一体何者…？

果たしてリュウ達は間に合うのか！？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ９３　～デクスドルグレモンの襲来?ドルガモン叫びのＸ進化?～（前書き）

デクスドルグレモン来襲!?

果たしてリュウ達は間に合うのか!?

そしてついにドルガモンがＸ進化する!?

Ｅｐ９３スタート?

EP93　～デクスドルグレモンの襲来?ドルガモン叫びのX進化?～

黒コートの男と別れたあと、急いでレジスタンスの基地へと向かうリュウ達。

ウォーグレイモンX「この先に普段は使われていない隠された道がある。」

トコモンX「ある?」

リュウ「……。」

ウォーグレイモンX「どうしたリュウ?さっきから黙りだぞ?」

リュウ「あ、いや、さっきの奴の事が気になってよ…。」

ウォーグレイモンX「お前の気持ちは分からんまでもないが、今はレジスタンスのデジモン達を助ける事が先決だ。」

リュウ「言われなくても分かってらぁ。」

ウォーグレイモンX「分かってるならそれでいい。」

ウォーグレイモンXは猛スピードで森を抜けると、地面に着地する。

リュウ「着いたか?」

ウォーグレイモンX「あぁ。」

そこには巨大な崖があった。リュウ達はゆっくりと崖に近付いて見下ろすと、巨大な湖の周りにデクスドルグレモンの大群が集まっていた。

デクスドルグレモン達「キシャャャャャャャャャャャャ？」

トコモンX「いる～…。」

リュウ「おいおい、なんだよこの数？お祭りでも始まるのかぁ？」

ウォーグレイモンX「恐らく、レジスタンスのデジモン達を待ち伏せしているのだろう…。」

トコモンX「見て！」

トコモンXが叫ぶ、すると洞窟からレジスタンスのデジモン達が出てくる。デクスドルグレモンの大群が待ち伏せている事を知らずに。

その時、デクスドルグレモン達がレジスタンスのデジモン達に気付き始める。

ウォーグレイモンX「マズイ…。俺が呼ぶまでここを動くな。」

トコモンX「……。」

ウォーグレイモンX「返事は？」

トコモンX「……あい。」

ウォーグレイモンX「いい子だ。それとリュウもここに…」

リュウ「さぁて、久しぶりに暴れさせて貰うぜ…。」↑やる気満々

ウォーグレイモンX「んな!?ダメだ、この下は危険だぞ!だから…」

リュウ「チビ助とここで一緒に指加えて隠れてろってか?生憎俺は、そういうの一番大っ嫌いなんでね…。」

ウォーグレイモンX「しかし…。」

リュウ「信用ないのかぁ?自分の身ぐらい自分で守れるっつうの。」

ウォーグレイモンX「分かった…。けど、無茶はするなよ。」

リュウ「お前ほど無茶はしねぇよ。」

リュウはニヤッと笑うとウォーグレイモンXは小さく笑う。

ウォーグレイモンX「よし、行くぞ!」

リュウ「おう!」

リュウはウォーグレイモンXの背中に乗ると、ウォーグレイモンXは湖に向かってダイビングする。

リュウ「おらよっと!」

急降下中、リュウはウォーグレイモンXから飛び乗り、地面に着地する。そしてウォーグレイモンXはそのまま湖の中へと入っていっ

た。

デクスドルグレモン達「キシャャャャャャャャャャャャ？」

デクスドルグレモンの大群はリュウに気付き、咆哮を上げて威嚇をする。

リュウ「……。」

その時、リュウは懐からデジガンを取り出し、デジガンを空中に向けて発砲して挑発する。

リュウ「楽しそうだなぁ？俺も混ぜてくれよ…。」

デクスドルグレモン「キシャャャャャャャャャャャャ？」

その時、一体のデクスドルグレモンがリュウに襲い掛かると、リュウは高く飛びあがり背中に背負ってる大剣、セイクリッド・ドラグーンを取り出してデクスドルグレモンの翼を斬り落とした。

デクスドルグレモン「キシャャャャャャャャャャャャ！？」

リュウは地面に着地すると、リセイクリッド・ドラグーンを肩に担ぐ。

リュウ「どうしたぁ？歓迎してくれるのはコイツだけかぁ？もっと歓迎してくれてもいいんだぜ…？」

リュウはそう言って指をクイクイとさせて挑発すると、デクスドルグレモンの大群はリュウに矛先を向けて一斉に襲い掛かる。

デクスドルグレモン達「キシャャャャャャャャャャャャ！」

リュウ「そうこなくっちゃな！」

リュウは生き生きとした眼でセイクリッド・ドラグーンを振り回していき、次々と襲い掛かってくるデクスドルグレモン達を斬っていく。

デクスドルグレモン達「キシャャャャャャャャャャャャ！？」

リュウ「おらよ！」

リュウはセイクリッド・ドラグーンを回転させながら投げ付けてデクスドルグレモン達を切り刻んでいく。

やがて、セイクリッド・ドラグーンはブーメランのように戻ってきてリュウは掴み取って背中に背負う。

気付くと、デクスドルグレモン達に挟み撃ちにされていた。

デクスドルグレモン達「キシャャャャャャャャャャャャ！」

リュウ「挟み撃ちにしたつもりか？甘ぇよ！」

リュウは懐から2丁デジガンを取り出して腕をクロスし、両サイドから襲ってくるデクスドルグレモンを撃ち落とした。

デクスドルグレモン達「キシャャャャャャャャャャャャ！」

リュウ「せっかくの祭りだ。ドハデな花火をサービスしてやらぁ？」

リュウはポケットから爆裂弾を2丁デジガンに装着して空中に向けて連射し、次々とデクスドルグレモンをを撃ち落としていく。

デクスドルグレモンの大群は大爆発に紛れて次々と倒れていく。

しかしデクスドルグレモンの大群は怯む事なくリュウに襲い掛かる。

その時、湖から突然ウォーグレイモンXが現れる。

ウォーグレイモンX「うおりゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃゃ？」

ウォーグレイモンXは鋭い爪で次々とデクスドルグレモン達を薙ぎ倒していく。

ウォーグレイモンX「空中は俺に任せろ！だからリュウは地上を頼む！」

リュウ「あいよ！」

リュウは返事をして地上戦へ、そしてウォーグレイモンXは空中戦へと二手に別れた。

その時、リュウとウォーグレイモンXの勇姿を見たレジスタンスのデジモン達が戦う決意をする。

マッシュモンA「戦える者は前に出ろ！」

マッシュモンB「ウォーグレイモン達を援護するぞ！」

一方、レジスタンス組織の一人、ウィザーモンがドルガモンを連れて洞窟を抜け出す。ウィザーモンはデクスドルグレモン達を見て驚愕する。

ウィザーモン「ここにも！？」

ウィザーモンは止むを得ないと思い、魔法で宙に浮かすドルガモンをゆっくりと地面に下ろし、非難するデジモンにドルガモンを任せる。

ウィザーモン「コイツを頼む…。」

ウィザーモンは杖を振りかざすと、強力な雷撃を繰り出す。

ウィザーモン「『サンダークラウド？』」

その頃、トコモンXは崖の上から戦いを見ていた。すると、洞窟の入口でドルガモンを発見し、思わず声を張り上げる。

トコモンX「あ！モーン！いたー！」

その時、一体のデクスドルグレモンがトコモンXに気付き、高く飛び上がってトコモンXに接近する。

リュウ「あのバカ！？」

ウォーグレイモンX「トコモン！？」

ウォーグレイモンXは猛スピードでトコモンXを襲うデクスドルグ

レモンを追いかける。

ウォーグレイモンX「くっ！」

（間に会え！）

その時、背後からもう一体のデクスドルグレモンが現れてウォーグレイモンXの行く手を阻まれてしまう。

ウォーグレイモンX「くっ！？」

ウォーグレイモンXはもう一体のデクスドルグレモンを押さえつけて地面に叩きつける。その頃、デクスドルグレモンがトコモンXを食らいつこうとしていた。

ウォーグレイモンX「しまった！？」

トコモンX「！？」

その時だった。一発のミサイルがデクスドルグレモンに直撃して落下する。

デクスドルグレモン「キシャャャャャャャャャャャャャャ！？」

ウォーグレイモンX「！？」

ウォーグレイモンXは見下ろすと、洞窟の入口にレジスタンス組織のマミーモン、シルフィーモン、そして死んだはずのメタルガルルモンXがいた。

メタルガルルモンXは高く飛び上がり、ウォーグレイモンXの所へ

と向かう。

ウォーグレイモンX「生きていたのか！？」

メタルガルルモンX「心配かけてすまなかったな…。」

その時、二体のデクスドルグレモンが二体の背後から襲い掛かってくる。

ウォーグレイモンX・メタルガルルモンX「はぁぁぁぁぁぁ？」

二体は分かっていたのか、背後から襲い掛かってくるデクスドルグレモンを殴り飛ばした。

メタルガルルモンX「喰らえ？」

メタルガルルモンXは身体中に装備してる武器で一斉射撃し、デクスドルグレモン達を次々と撃ち落としていく。

一方、ウォーグレイモンXは周囲の水を一点に集中させると、巨大な水のエネルギーを放ち、デクスドルグレモン達蹴散らす。

ウォーグレイモンX「『ポセイドンフォース？』」

デクスドルグレモン達「キシャャャャャャャャャャャャ！？」

リュウ「喰らいな！」

リュウは氷結弾を装着させた2丁デジガンを乱射し、デクスドルグレモン達を次々と氷付けにする。

リュウ「おまけだ！」

リュウはセイクリッド・ドラグーンを横一閃に振ると、剣風によって生み出された衝撃波を放ち、氷付けにしたデクスドルグレモン達を切り刻んだ。

リュウ「くっ！しつけぇっつうの！」

レジスタンスの組織は必死になってデクスドルグレモン達と戦う。そんな中、トコモンXが崖を降りていきドルガモンの元へと駆け付ける。トコモンXはドルガモンの近くに寄ると、ドルガモンを起こす。

トコモンX「起っき！モン！起っきして！」

ドルガモン「…う、う～ん…。トコモン…？」

ドルガモンは虚ろな目でトコモンXを見ると、トコモンXは嬉しそうにピョンピョンと飛び跳ねる。

ドルガモン「うっ…。」

ドルガモンはゆっくりと起き上がり、周りを見渡すと驚愕する。

ドルガモン「！？」

ドルガモンの目にはレジスタンスのデジモン達やデクスドルグレモン達の亡骸が映っていた。

ドルガモン「なぜ…！？どうして…！？」

その時、哀しみの余りにドルガモンは高らかに叫んだ。

ドルガモン「やめろおおお

D－アクセル「ドルグレモン、完全体、獣竜型、データ種、必殺技はメタルメテオ。」

リュウ「ドル…グレモン…。!?」

その時、リュウは先程黒コートの男が口にした事を思い出す。

???『あのデジモンはドルガモン…いや、ドルモンのデータから生み出されたデジモン…。』

リュウ「なるほど…。そういう事だったのか…。」

その時、マミーモンは銃口をドルグレモンに向ける。

マミーモン「お前は何者だ!?お前なんか…、お前なんか助けるんじゃなかった!」

ドルグレモン「なんだと?」

マミーモンが銃撃すると、ドルグレモンは翼を広げて高く飛んで交わす。

ドルグレモンは湖の方へ飛んでいくととんでもない物を目にした。

ドルグレモン「え!?」

ドルグレモンが見た物とは、湖に自分の姿が映し出されていた。

ドルグレモン「お、俺は…」

～ロイヤルナイツ　本部～

その頃、オメガモンとマグナモンはモニターでドルグレモンを監視していた。

オメガモン「これが、実験体だという事の意味なのか…？」

ーーーーーーーーーーーーーー

ドルグレモンは湖の近くに寄り、湖から映し出される自分の姿を見つめる。

ドルグレモン「俺が…なぜ…？どうして、こんな…姿に…？」

リュウ「惑わされんじゃねぇ！」

ドルグレモン「！？」

リュウ「コイツらに似てんのは、お前やレジスタンスのデジモン達を惑わすためにイグドラシルが仕組んだ罠だ！」

ドルグレモン「だけどリュウ…。俺は…」

リュウ「俺に聞くな。テメェの心次第だろうが？」

ドルグレモン「俺の…心次第…。」

その時、ドルグレモンは目をキリッとさせて高く飛び上がる。

ドルグレモン「俺はッ？」

すると、ドルグレモンはデクスドルグレモンを薙ぎ倒していく。

トコモンX「！？」

トコモンXの目にはドルグレモンの背後にドルモンの面影が映る。

トコモンX「同じ…。」

すると、トコモンXは飛び降りてドルグレモンの背中に乗る。

ドルグレモン「！？」

トコモンX「モン♪」

ドルグレモンは自分だという事がトコモンXに気付いてくれたのか、優しく微笑んだ。

その光景を目にしたレジスタンス組織のデジモン達は驚愕する。

マミーモン「なんなんだアイツは…！？」

その時、ウォーグレイモンXが声を張り上げる。

ウォーグレイモンX「みんな冷静になれ！アイツが似た姿なのには、きっと訳があるんだ！心を一つにするんだ？」

その時、上空が騒がしくなる。リュウ達は空を見上げると、数え切れないほどのデクスドルグレモンの大群が現れる。

デクスドルグレモン達「キシャャャャャャャャャャャャ？」

ドルグレモン・トコモンX「！？」

ウォーグレイモンX「んな！？」

リュウ「おいおい、こりゃお祭りどころじゃねぇぞ…！？」

～ロイヤルナイツ　本部～

モニターでデクスドルグレモンの大量出現を目にするマグナモンは小さく呟く。

マグナモン「そういう事か…。

オメガモン「？」

マグナモン「イグドラシルは常に先を見ている。これは、ロイヤルナイツのプロジェクトアークの遂行に支障が出たという。言わば保険だ。」

オメガモン「支障が出たとみなされたのか…？」

マグナモン「デュークモンの例もある。」

オメガモン「承服し兼ねる！イグドラシルの接見を求める！」

オメガモンはそう言ってイグドラシルの所へと向かおうとする。

マグナモン「待て、オメガモン！？」

ーーーーーーーーーーーーーー

急激に増えたデクスドルグレモンの襲撃により、リュウ達は絶体絶命のピンチに陥る。

リュウ（ここで諦めてたまるかよ…。俺は誓ったんだ。同じ過ちを犯すわけにはいかねぇって？）

それは数年前、リュウという名前を棄てたあとまで遡る…。

～東京都　新宿区～

たった一人の兄弟を救えず、己の無力さに自らの名前を棄てた。

名を棄てた男「……。」

名を棄てた男は今宵の満月を見つめる。

名を棄てた男「全てを失った俺に、生きる道なんてあるのだろうか…？」

？？？「まだ終わりではない。ここで諦めていいのか、リュウよ…？」

その時、何処からか謎の声が聞こえてくる。

名を棄てた男「俺はもうリュウじゃねぇ…。リュウはもう死んだ…。」

？？？「ならば、新たなる自分となってデジタルワールドを守護しようと思わないか…？」

名を棄てた男「俺に何が出来るんだよ…。何も救えねぇ無力な俺に…？」

？？？「ならばここで屍になるのか…。いいのか？たった一人の兄から貰った命をここで無駄にするというのか…？」

名を棄てた男「セツナから…貰った命…だと？」

？？？「思い出してみろ。貴様の兄が口にした最後の言葉を…。」

名を棄てた男はセツナの言葉を思い出す。

セツナ『俺の分まで生きろ…。そしてデジタルワールドの未来を…、守ってく……れ……。』

名を棄てた男「セツナが俺にデジタルワールドの未来を託したというのか…？」

？？？「そうだ。貴様の兄はデジタルワールドの未来守るため、たった一人の弟である貴様に託したのだ。」

名を棄てた男「だったら…、だったらなんで俺の代わりにセツナが死ななきゃなんねぇんだよ…！？」

？？？「まだ分からないのか？これはお前にしかできないと確信したからだ…。そう、かつてデジタルワールドを救った時のように…。

」

名を棄てた男「！？」

名を棄てた男は考え込む。本当に自分は無力なのか、と…。そして、目をキリッとさせる。

名を棄てた男「分かった…。誰だか知らないが、俺をデジタルワールドに導いてくれないか…？」

？？？「よかろう…。」

その時、名を棄てた男のＤ－アクセルから聖なる光りが生じる。

名を棄てた男「！？」

名を棄てた男は光に包まれ、やがて静かに消えていった。

～？？？～

名を棄てた男はゆっくりと立ち上がって辺りを見回すと、暗くて何も見えなかった。

名を棄てた男「ここは何処だ…？」

すると、２つの英文字が名を棄てた男の元へと舞い降りてくる。

名を棄てた男「なんだ…？ＥとＡ？」

？？？「永遠（Ｅｔｅｒｎａｌ）なる絆の力を持つ貴様に警告者（

Ａｄｍｏｎｉｔｏｒ）となって選ばれし者達を支えて貰う…。」

すると、ＥとＡの間に聖なる光が生じる。光が止むとＸの文字が浮かび上がる。Ｅ…Ｘ…Ａ…。名を棄てた男はゆっくりと口を動かし読みあげる。

名を棄てた男「エグザ…。」

？？？「今から貴様の名は『始まりの救世主（エクセリオン）エグザ』と名付けよう…。」

すると、新しい名を得た男エグザのＤ－アクセルの画面がエクセリオンの刻印が印された。

エグザ「警告者とはどういう意味だ？」

？？？「デジタルワールドの警告者となって選ばれし者達を間違った道を歩ませないようにする…。それが貴様のやるべき…いや、やらなければならない使命だ。」

エグザ「その選ばれし者達を支えて何の意味があるんだ…？それでデジタルワールドの未来が守れるというのか？」

？？？「その通りだ…。心配するな。慌てなくてもいずれ分かる事だ…。貴様は必ず使命を果たさなければならないという運命だ…。断言しよう…。」

その時、エグザの前に大剣と２丁拳銃が現れる。

エグザ「これは！？セイクリッド・ドラグーンとデジガン！？」

???「その剣はセイクリッド・ドラグーンから転生されし聖剣、セイクリッド・レインティア。そして光と闇の2丁拳銃、ライトとダーク…。俺からの餞別だ。受け取れ。」

すると、謎の声が段々と消えていく。

エグザ「待てよ!?ドラコモンの行方を教えてくれないか!?」

???「行方など知らない…。デジタルワールドの何処かにいるハズだ…。」

エグザ「お前は一体、何者なんだよ…?」

???「俺はただ……デジタルワールドの平和を司る者だ……。」

謎の声はそう言って静かに消え去った。それと同時にエグザのDーアクセルから光が生じ、エグザは思わず目を閉じた。

エグザ「!?」

目を開けると、広大な森の中にいた。

エグザ「デジタルワールドか…。ドラコモンの行方が分からないのなら仕方ない。意地でも見つけだしてやる…。そして、同じ過ちを犯さないために使命を果たすんだ…。」

こうして、始まりの救世主　エグザが誕生されるのであった…。

ーーーーーーーーーーーーーー

リュウ「同じ過ちを犯さねぇために、俺はこんな所で諦めてたまるかよおおお

メタルガルルモンX「分かった！飛べる者は飛べない者に手を貸せ！一気に壁を飛び越えて森へ入る！」

マミーモン「おう！」

メタルガルルモンXはレジスタンス組織のデジモン達を誘導してこの場から離れる。

一方、ドルグレモンは心配させないようトコモンXに優しく言う。

ドルグレモン「俺は大丈夫だから、安全な場所へ。」

そこへウォーグレイモンXがドルグレモンの所へ駆け寄り、トコモンXを連れて行く。

トコモンX「モン！？」

ドルグレモン「俺もきっと行く。約束する。」

ウォーグレイモンX「あとは任せたぞ！」

ウォーグレイモンXはドルグレモンに任すと、高く飛び上がぅて崖を越えて森へと向かった。

ドルグレモン「リュウ、乗って！」

リュウ「あいよ！」

ドルグレモンはリュウを背中に乗ると、翼を広げてデュークモンX

の方へと向かう。

一方、デュークモンは聖槍、グラムを振りかざすと、聖なる力で増幅、長大化される。

デュークモンX「『ロイヤルセイバー?』」

デュークモンXは長大化したグラムを振り回し、デクスドルグレモン達を次々と薙ぎ倒していく。

デクスドルグレモン「ギシャャャャャャャャャャ!?」

ドルグレモン「無事だったんだね…。」

デュークモンX「心配をかけたな…。」

リュウ「あぁ、お陰様でな。それよりその姿…?」

デュークモンX「この姿は、黒コートの男のお陰でこの地に再び蘇る事ができたのだ…。」

リュウ「黒コートの男だと!?」

すると、背後からデクスドルグレモンが襲い掛かってくる。

リュウ「くっ、邪魔だっつうの!」

リュウはデジガンでデクスドルグレモンを撃ち落とした。

リュウ「一体どうなってんだよ…?それじゃ、メタルガルルモンX

も黒コートの男に？」

デュークモンX「恐らくな…。」

ドルグレモン「デュークモン。俺は…、俺は生きてて良かったのか…？俺が死んでいれば、こんな事にはならずに済んだんじゃ…？」

リュウ「ドルグレモン…。」

デュークモンX「このデュークモンも、その答えを知りたかった。」

ドルグレモン「俺は一体何者なんだ！？俺はなぜ、ここにいるんだ！？」

デュークモンX「全ての命は生きるためにある…。最初から存在を拒否された命など、この世の何処にもありはしない…。」

ドルグレモン「……。」

デュークモンX「ドルグレモン、イグドラシルへ行け！」

ドルグレモン「え！？」

デュークモンX「自分の正体を知りたいのであろう？」

ドルグレモンはゆっくりと頷く。すると、デュークモンXは聖なる盾、イージスを天に翳すと聖なる光が雲を突き抜け、イグドラシルへの道が開かれる。

デュークモンX「全ての答えはそこにある。イグドラシルで何が起

こるのか。正直それはこのデュークモンにも分からん…。だが、答えはそこにしかない！」

ドルグレモン「でも…！？」

リュウ「待てよ、お前はどうすんだよ！？」

デュークモンX「案ずるな…。ここはこのデュークモンだけで充分だ！そなたは我が君イグドラシルとまみえる必要がある。それが一度我が身を滅ぼしている。このデュークモンの答えだ。」

ドルグレモン「……。」

リュウ「行こうぜ、ドルグレモン。」

ドルグレモン「リュウ…。」

リュウ「こりゃ千載一遇のチャンスだ…。そこへ行けばお前の求めているもんが見つかるかもしれねぇ。決めるのはお前の心次第だ。」

ドルグレモン「……分かったよ。デュークモン。俺、行ってくる。」

デュークモンX「うむ。リュウよ、ドルグレモンを頼んだぞ。」

リュウ「おう、任せな。」

ドルグレモン「行くよ！」

ドルグレモンは確信し、デュークモンXによって開かれたイグドラシルへの道へと向かう。

その時、デクスドルグレモンの大群がドルグレモンの行く手を阻もうとしている。

デュークモンX「はぁぁぁぁぁ？」

デュークモンX長大化したグラムでデクスドルグレモンの大群を薙ぎ倒し、ドルグレモンを援護する。

リュウ「邪魔だ？」

ドルグレモンの背中に乗るリュウは2丁デジガンで襲い掛かってくるデクスドルグレモン達を撃ち落としていく。

リュウ「このまま突っ込め、ドルグレモン！」

ドルグレモン「うん！」

ドルグレモンは猛スピードでイグドラシルへの入り口に接近する。

ウォーグレイモンX、メタルガルルモンX、トコモンX、レジスタンス組織のデジモン達、そしてデュークモンXはイグドラシルに向かうリュウとドルグレモンを見送る。

リュウ・ドルグレモン「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？」

ドルグレモンは唸り声を上げながらイグドラシルへの入り口に突っ込む。やがてイグドラシルへ進入する事に成功したのであった。

||To Be Continued.....

ＥＰ９３　～デクスドルグレモンの襲来?ドルガモン叫びのＸ進化?～（後書き

ｌｌＦｌａｓｈｂａｃｋｌｌ

リュウの死を目撃したドラコモンはデジモンＪＥＴにて一人で泣きじゃくっていた。

ドラコモン「ひっく…、リュウ…。せっかく逢えたのに…ひっく…。」

たった一人のパートナーを失ったドラコモンはどうしたらいいのか分からず、ただ泣くしかなかった。その時、何処からか謎の声が聞こえてくる。

???「さぞかし辛かろう…。」

ドラコモン「誰だ!?」

???「心配ない。私はお前の味方だ。」

ドラコモン「だったらほっといてくれよ…。俺は…」

???「行く場所がないとでも言いたいのか?異な事を…。お前にはやらなければならない事がある…。」

ドラコモン「どういう意味だよ?」

???「復讐するんだ…。たった一人のパートナーを殺したあの男に…。」

ドラコモン「復…讐…。」

？？？「恐らく、パートナーを殺した男はお前を狙うだろう…。」

ドラコモン「そんな…！？」

？？？「だったら、その男より強くなる事だ…。そしてパートナーの敵討ちするのだ…。」

ドラコモン「……でも、どうしたらいいんだ？」

？？？「私の元へ来い。そうすればお前は強くなれるだろう…。あの男を倒せる程の強さをな…。」

ドラコモン「……分かった。」

？？？「いい返事だ…。」

すると、ドラコモンの前に闇の空間が開かれ、ドラコモンを迎える。

？？？「究極の選択肢だ。哀れに生きるか、強く生きるか…。２つに１つだ…。」

ドラコモン「やってやる…。リュウのために強くなる。リュウの敵を取るんだ？」

ドラコモンは決心し、闇の空間へと入るのであった。

しかしそれは、闇のデジモンの囁きである事をドラコモンは知る由

も無かった…。

こうしてドラコモンは、闇の竜騎士　スレイヤードラモンとなってエグザに復讐する事を誓うのであった。

次回、ついに終盤へ！

ロイヤルナイツ本部へと進入するリュウとドルグレモン！

次回もお楽しみに？

Ｅｐ９４　～生きる意味とは…。究極のＸ進化　アルファモン？～（前書き）

デュークモンＸによってイグドラシルの道が開かれ、イグドラシルへと進入するリュウとドルグレモン！

そしてついにドルグレモンが究極のＸ進化へと！？

Ｅｐ９４スタート？

EP94　～生きる意味とは…。究極のX進化　アルファモン？～

～ロイヤルナイツ　本部～

その頃、オメガモンはイグドラシルの真意を知るため、イグドラシルの所へと行こうとする。

マグナモン「無駄だ、オメガモン！イグドラシルが取り合うものか！」

マグナモンは止めようとするがオメガモンの足は止まる事なく進む。

オメガモン「取り合って貰わねば困る。イグドラシルへの忠誠を誓いをした。だが、だからと言って主の気ままを黙認することはできん！」

マグナモン「気ままとは？聞き捨てならんぞ？」

すると、オメガモンはピタリと足を止めて振り向く。

オメガモン「ならば、この混乱はなんだ！？」

マグナモン「それは……。」

その時、オメガモン達の前に聖なる光が生じる。やがて光が止むと、リュウとドルグレモンが姿を現す。

リュウ「よう…。」

マグナモン「なぜお前らがここにいる?ここは、お前らごときが来れる場所ではない。早々に立ち去れ?」

リュウ「立ち去れ?生憎、そういう訳にはいかないんでね…。」

ドルグレモン「デュークモンが、道を開いてくれたからだ。」

オメガモン「デュークモン?」

ドルグレモン「答えを見つけにきたんだ。イグドラシルに会いたい!」

マグナモン「話にならん!」

リュウ「口で言っても聞いてくれなさそうだな…。見た目だけじゃなく頭も固そうだなおい!」

すると、オメガモンは小さく笑う。

オメガモン「面白い…。」

マグナモン「バカな!?」

オメガモン「ロイヤルナイツですら接見に敵わないイグドラシルにコイツは会いたいと?しかも、この場所への道を開いたのは、我が盟友デュークモンだと…。」

リュウ「そんな親切に解釈しなくていいんだよ。答えはどっちなんだぁ?Ｙｅｓ?それともＮｏかぁ?」

オメガモン「イグドラシルに会いたいというなら、それ相応の受け応えをせねばなるまい…。私を倒せたなら、その願い叶えてやろう。」

オメガモンはそう言ってグレイソードを繰り出す。

リュウ「上等だ…。この間ぶっ飛ばし損ねたからな…。」

リュウはやる気になり、セイクリッド・ドラグーンを取り出す。しかし、ドルグレモンは躊躇っていた。

ドルグレモン「倒すなんてそんな…!?」

リュウ「ドルグレモン、何度言っても聞いてくれねぇ連中だ…。ならいっその事こっちの方が早いぜ。」

オメガモン「そういう事だ…。では、行くぞ!」

オメガモンは声を発すると同時に猛スピードでリュウ達に接近する。

リュウ「はぁぁぁぁぁぁぁ?」

リュウはセイクリッド・ドラグーンを構えてオメガモンに接近し、セイクリッド・ドラグーンを振り下ろす。

オメガモン「遅い!」

オメガモンはグレイソードでセイクリッド・ドラグーンを弾き返す。

リュウ「ぐはっ!?」

オメガモンはそのままドルグレモンに接近すると、ドルグレモンは慌てて上空へと飛んで逃げる。

オメガモン「逃がさん！」

オメガモンは剣風によって生み出された衝撃波を放ち、ドルグレモンを切り刻む。

ドルグレモン「ぐあっ！？」

ドルグレモンは地面に叩き付けられる。

マグナモン「なぜ、そうも熱くなる必要がある？コイツはイグドラシルが生んだ実験体とはいえ、たかが一体のデジタル生命ではないか？」

オメガモン「いや、俺とコイツの考えている事はたぶん一緒だ…。なら、どちらかがイグドラシルに接見し、その真意を問えればそれでよい…。デュークモンが道を開いたというのなら尚の事。」

リュウ「へへっ、どっかの頭の固いヤツとは大違いだな…。要するにどちらかが最後まで立ったヤツがイグドラシルに会う権利を得ることができる…。そう言いたいんだろ？」

オメガモン「その通り。お前らの本気を見せろ！」

ドルグレモン「待って…。時間がないんだ…。早くしないとデジタルワールドが…！？」

オメガモン「お前がイグドラシルに会って知りたい答えを見つけたならば、デジタルワールドは救われるのか？」

すると、オメガモンはガルルキャノンの砲口をドルグレモンに向けて発射する。

ドルグレモンは素早く横に交わそうとするが、風圧によって飛ばされる。

ドルグレモン「ぐはっ！？」

リュウ「！？」

オメガモン「思い上がるな？私とさえまともに向き合う事も出来ないお前が、イグドラシルに会った所で何になる？」

ドルグレモンはゆっくりと立ち上がろうとする。

ドルグレモン「イヤだ…。戦いたくない…。あなたとは戦う理由がない！」

オメガモン「そちらにはなくても、こっちにはある。」

リュウ「バカやろ？このままじゃやられちまうぞ！？それがテメェの本心なのか！？」

ドルグレモン「そうだ？」

リュウ「！？」

オメガモン「ならば聞こう、お前は何を賭けてここまでやって来た？」

ドルグレモン「存在の…全て？」

オメガモン「ならば戦え…。それだけの覚悟が、口先だけではない事を。賭けた存在の全てとやらで証明しろ！」

その時、オメガモンは目にも止まらない早さでドルグレモンのつばさを切り刻んだ。

リュウ「ドルグレモン！？」

オメガモンは容赦なくグレイソードでドルグレモンを切り刻んだ。

ドルグレモン「ぐぁぁぁぁぁ！？」

リュウ「クソッタレ！」

リュウはオメガモンの前に立ちはだかり、両手を広げる。

ドルグレモン「退いてくれ、リュウ…。」

リュウ「誰が退くかよ…。仲間が死にかけてるのに黙って指加えてられるかよ…。」

ドルグレモン「大丈夫だ…。俺を信じてくれ…。」

リュウ「けどよぉ…。」

ドルグレモン「頼む…。」

リュウ「くっ…、分かったよ…。」

ドルグレモンはゆっくりと立ち上がり、ゆっくり前に進む。

ドルグレモン「俺が戦うべき相手は、アンタじゃない！」

オメガモン「まだ言うか？ならばお前の相手とは！？」

ドルグレモン「それをイグドラシルに会って確かめたい！」

マグナモン「何を手こずっている！侵入者は排除するまでだ！必要なら手を貸すぞ！」

リュウ「そうはいかねぇよ…。コイツは己の信念で貫き通そうと必死になっている…。邪魔をするなら俺が相手だ…。」

マグナモン「くっ！？」

リュウ（ドルグレモン。俺はもうお前の信念にいちいち首を突っ込まねぇ。どれほどの信念で貫き通すか見守らせて貰うぞ。俺はお前の信念に賭ける！）

オメガモン「ロイヤルナイツは、デジタルワールドの秩序を守る。お前ごときがイグドラシルに会うのは、秩序に反する事だ！」

オメガモンはそう言ってグレイソードを振り上げた。

ドルグレモン「くっ…。」

すると、数々の言葉がドルグレモンの記憶に過る。

メタルガルルモンX『俺の分まで生きてくれ。命は、そこにあるだけで美しい…。』

デュークモンX『そなたは我が君イグドラシルとまみえる必要がある。それが一度我が身を滅ぼしている。このデュークモンの答えだ。』

リュウ『人生は物語のようなもんだ。重要なことはどんなに長いかということじゃねぇ。どんなに良いかということだ。記憶しとけよ？』

ーーーーーーーーーーーーーー

オメガモン「これまでだ…。」

オメガモンがグレイソードを振り下ろしたその時、ドルグレモンの身体から聖なる光が満ち溢れる。

オメガモン「!?」

リュウ「なんだ、あの光は!?」

ーーーーーーーーーーーーーー

その頃、デクスドルグレモン達を倒していくデュークモンXは…。

デュークモンX「!?」

デュークモンXは天空を見上げると、空が聖なる光りに満ち溢れていた。その聖なる光りを目にしたのはデュークモンXだけではなかった。

ウォーグレイモンX「なんだ…!?」

メタルガルルモンX「!?」

そして、黒コートの男も空の異変に目撃していた。

???「ついに蘇ったようだな…。空白の席の主よ…。」

～ロイヤルナイツ　本部～

光りが止むと、ドルグレモンの姿は変わっていた。その姿は、漆黒の鎧を纏い蒼いマントを羽織る聖騎士型デジモンだった。

リュウ「ドルグレ…モン…?」

オメガモン「お前は…」

マグナモン「まさか!?」

すると、聖騎士デジモンは口を開く。

???「俺の名はアルファモン…。」

マグナモン「そんな…バカな!?アルファモンとは、名のみ知られながら、決して存在することはないと言われた…。世は、空白の席

の主と言われ神話の中のロイヤルナイツ！」

リュウ（空白の席の主だと…！？）

アルファモン「しかし、俺はそこに存在する…。あなたのお陰で今、自分のなすべき事が分かった…。俺は、イグドラシルのこれ以上の介入を許さない…。」

オメガモン「デュークモンはその為に、お前を此処に？」

リュウ（そういう事だったのか…。）

オメガモン「……確かめよう。そなたの意を認め、私が立会人となろう。」

オメガモンはそう言って和解し、イグドラシルへと向かう。

アルファモン「リュウ…、俺からの頼みだ…。オメガモンと同じ立会人となってくれ。」

リュウ「断ると思うか…？」

アルファモン「そうだったな。感謝する…。」

リュウとアルファモンは決意し、オメガモンの後に着いていく。

その時、マグナモンが慌ててオメガモンの前に立ちはだかる。

マグナモン「ダメだ！ロイヤルナイツはデジタルワールドの秩序を守る！ついさっき、お前はそう言ったばかりだ！これが秩序か！？」

オメガモン「気付くのが遅過ぎたようだ…。デジタルワールドの秩序が崩壊しようとしている時、イグドラシルの秩序に拘っても仕方あるまい…。」

マグナモン「ロイヤルナイツにあるまじき行為を成した者を、そんな御面に甘んじてでも行くのか！？」

オメガモン「行く…。我が盟友デュークモンがそうしたように…。」

アルファモン「面倒なもんだなぁ…。仲間が大変なんだ…。デジモンがデジモンの危機を前にして、なんでこんな所でいい争わなきゃならないんだ？」

リュウ「秩序がなんだぁ？んなもんクソ喰らえだ…。そんなにアイツの秩序が大事ってんなら、テメェだけでやってな。俺達は俺達の秩序（やり方）で貫き通す…。」

リュウ達はそう言って前に進む。やがてマグナモンとすれ違い、光りの中へと消え去った。

マグナモン「違う…。危機だからこそ、秩序が必要なんだ…。」

～イグドラシル　入り口～

イグドラシルの入り口まで転送されたリュウ達。そこは、漆黒に包まれた場所だった。

リュウ「随分と趣味の悪い所だな…。」

アルファモン「リュウ、あれを…。」

リュウ達は見上げると、白い球体が上空に浮かんでいた。

リュウ「あそこにイグドラシルがいるのか…。」

その時、アルファモンが何か気配を感じる。

アルファモン「気をつけろ。何かいる！」

すると、リュウ達の前に漆黒の翼を持つ巨大なデジモンが現れる。

オメガモン「何者だ！？」

リュウはＤ－アクセルでデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「デクスドルゴラモン、究極体、アンデット型、ウィルス種、必殺技はメタルインパルス。」

アルファモン「こいつは…！？」

リュウ「なるほど、あのゾンビ共の親玉って事か…。」

デクスドルゴラモンは漆黒の翼を広げ、威嚇をする。

デクスドルゴラモン「グォオオオオオオオ！」

アルファモン「来るぞ！」

リュウ「分かってる！」

リュウ達は戦う体勢に入ると、デクスドルゴラモンは突然と襲い掛かってくる。

リュウ達は素早く横へと交わす。すると、オメガモンはガルルキャノンでデクスドルゴラモンの翼を狙い撃つ。

しかし、デクスドルゴラモンの翼には傷一つ付かない。

オメガモン「くっ！」

次に、グレイソードでデクスドルゴラモンの翼をぶった切るが、全く効いていない。

その時、デクスドルゴラモンは強靭な尻尾でオメガモンを薙ぎ払い、壁に叩き付けた。

オメガモン「ぐはっ！？」

リュウ「喰らいな？」

リュウは爆裂弾を装着した2丁デジガンでデクスドルゴラモンを狙い撃つ。

しかし、デクスドルゴラモンは無傷だった。

リュウ「おいおい、マジかよ…。」

デクスドルゴラモンは強靭な尻尾でリュウを叩き潰そうとする。

リュウ「ヤベッ!?」

リュウはとっさにセイクリッド・ドラグーンを取り出して尻尾を受け止める。

リュウ「ぐぅ!?なんつぅ力してやがる!?」

アルファモン「伏せろ!」

アルファモンは手を広げると、巨大な魔法陣が現れる。

アルファモン「『デジタライズ・オブ・ソウル?』」

すると、魔法陣から無数のビームが発射されデクスドルゴラモンを貫いた。

デクスドルゴラモン「ギシャャャャャャャャャャ!?」

デクスドルゴラモンは粉々となって消え失せた。

リュウ「おいおい…、瞬殺かよ…。」

アルファモン「立てるかリュウ、オメガモン?」

オメガモン「あぁ。」

リュウ「お、おう…。」

(これが空白の席の主の力か…。しかしなんで親玉がイグドラシルの入り口に…?)

アルファモン「どうしたんだリュウ？」

リュウ「いや、ちょっと考え事をしててな…。」

オメガモン「なんだ…？」

リュウ「くだらねぇ事だ。気にすんなよ。」

アルファモン「そうか…。なら行こう…。」

オメガモン「うむ。」

リュウ「あいよ。」

リュウはアルファモンの肩に乗り、アルファモンとオメガモンは白い球体の中へと入っていった。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

一方、デジタルワールドはデクスドルグレモンの増加により、崩壊の危機へと陥っていた。

デクスドルグレモン達「キシャャャャャャャャャャャャャャ？」

デクスドルグレモンの増加により自然が枯れ始め、それだけではなく大地や海までもデジタル化とされていく。

デジタルワールドが崩壊するのも時間の問題だ…。

～イグドラシル～

イグドラシル進入に成功したリュウ達。辺りには真っ白な世界でありその中心に宝玉のような物が置かれていた。

オメガモン「これが、イグドラシル…？」

リュウ「外はヤベェってのに、一人だけこの真っ白な世界にいるなんてよぉ、デジタルワールドの管理者が聞いて呆れるぜ…。」

アルファモン「イグドラシルに問いたい。あなたの真意は何処にあり、何を成そうとしているのか？」

オメガモン「私も知りたい。プロジェクトアークをなぜかくも強引な方法で押し進める必要があったのか？」

イグドラシル「……。」

リュウ「黙りかよ…。」

アルファモン「イグドラシル、沈黙を続けるならば相応の覚悟がある！」

オメガモン「どの道、ここを無事では出られまい…。」

リュウ・アルファモン「！？」

オメガモン「マグナモンがイグドラシル全域に警報を発した。私達は反逆者だ…。」

リュウ「上等だ…。この世界を救えるなら反逆者でも何にでもなっ

てやるよ…。」

イグドラシル「……。」

アルファモン「イグドラシルが沈黙すれば、問題は解決するのだろうか…？」

オメガモン「しないかもしれん…。」

リュウ「……。」

（なんで何も言わねぇんだよ…？何か理由でもあんのかぁ？）

アルファモン「だったら、俺たちがしている事はなんだ？」

オメガモン「確かな事が一つある。どっちにしても、このままではデジタルワールドは崩壊する…。」

リュウ「オメガモンの言う通りだ…。ここまで来たんだ。今更引き返しすわけにはいかねぇ…。デジタルワールドを放っておくわけにはいかねぇんだよ！」

アルファモン・オメガモン「うん…。」

リュウ達は戦う体勢に入り、イグドラシルに接近する。

その時、地面からデクスドルグレモン達の幻影が現れる。

デクスドルグレモン達「キシャャャャャャャャャャャャ？」

リュウ「くっ、ここにもいやがったか！？」

オメガモン「邪魔だ！」

オメガモンはグレイソードで薙ぎ払う。一方アルファモンは魔法陣を展開してビームを発射させる。

リュウ「今だオメガモン！」

オメガモン「うむ！」

オメガモンはグレイソードでイグドラシルに攻撃しようとした途端、地面から巨大な手が現れオメガモンは捕らわれてしまう。

オメガモン「くっ！？」

リュウ「あれはデクスモン！？」

アルファモン「今助ける！」

アルファモンは翼を広げ、オメガモンを助けに行く。

デクスモン「グォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ？」

デクスモンは口を開け、捕らえたオメガモンに狙いを定める。

オメガモン「くっ！？」

デクスモンはレーザーを放つと、アルファモンが身体を張ってオメガモンを守った。

リュウ「アルファモン！？」

アルファモン「くっ！」

オメガモンを守りきると、アルファモンは片手で魔法陣を描き始める。

アルファモン「『究極戦刃王竜剣？』」

アルファモンが叫ぶと、魔法陣が展開され、魔法陣から大剣を取り出す。

リュウ「あれは王竜剣！？」

アルファモン「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

アルファモンは王竜剣を振り下ろし、オメガモンを捕らえる右腕を切った。

デクスモン「ギシャャャャャャャャャャャャャャャ！？」

デクスモンは思わず手を放し、オメガモンは開放された。

アルファモン「くっ！？」

すると、アルファモンの右手に傷が付く。

アルファモン「なんだ…？ん！？」

デクスモンは巨大な手でアルファモンに襲い掛かる。

アルファモンは交わしていき、王竜剣を振りかぶってデクスモンを切りにかかる。

すると、デクスモンはとっさに翼で身を守った。

王竜剣はデクスモンの左片翼を一瞬にして両断した。

デクスモン「ギシャャャャャャャャャャャャャャャ！？」

その時、アルファモンの左片翼がデクスモンと同じように両断された。

アルファモン「うわっ！？」

オメガモン「！？」

リュウ「どうなってやがんだよ…！？」

デクスモン「グォォォォォォォォォォォォォォォォォォ？」

デクスモンは凄まじい咆哮を上げ、両手を地面に叩きつける。

リュウ「クソッ、どうすりゃいいんだよ！」

オメガモン「何か弱点はないのか…？」

アルファモン「……。」

アルファモンは感づいていた。デクスモンの右手と左片翼の傷がな

ぜアルファモンも同じ傷を負ってしまうのかという事を…。

アルファモン「そういう事か…。」

アルファモンは王竜剣を上空へと放り投げ、デクスモンの懐へと入る。

リュウ「んな!?何するつもりだ!?」

すると、王竜剣はブーメランのように戻ってくると、アルファモンの腹に突き刺ささり、その勢いでデクスモンの腹に突き刺さった。

デクスモン「グォォォォォォォォォォォォォォォォ?」

デクスモンは仰向けに倒れていくと、アルファモンとデクスモンの腹を貫いた王竜剣はそのまま宝玉に突き刺さった。

オメガモン「!?」

リュウ「アルファモン!?」

リュウとオメガモンは慌ててアルファモンの元へと駆け付ける。

オメガモン「なんて事を!?」

リュウ「バカやろ…。何でこんな事を…。」

アルファモン「コイツを倒すには、こうするしかなかった…。」

すると、アルファモンは胸からX抗体を取り出す。

アルファモン「これを、あなたに託したい…。」

オメガモン「いや、しかし…。」

アルファモン「コイツは俺の影だ…。」

オメガモン「……。」

アルファモン「もし仲間に出会っていなければ、今もこの姿ではなく、コイツと同じになっていたのかもしれない…。でも今は、このデジタルワールドの仲間、あなた達に出会えた事を誇りに思う…。命は受け継がれるものだから…。」

リュウ「アルファモン……。」

アルファモン「済まないな、リュウ。これが俺の物語だ…。終止符はお前に任せた…。」

リュウ「……。」

すると、アルファモンのX抗体はオメガモンに引き継がれ、やがてオメガモンXへと姿が変わった。

オメガモンX「!?」

アルファモン「ありがとう、リュウ…。」

リュウ「あぁ…。」

アルファモンは最後の言葉を交わすと、デクスモンと共に消滅した。

デクスモン「グォォォォォォォォォォォォォォォォォ！？」

アルファモンはやがてドルモンへと退化し、ゆっくりと地面に降りていく。

オメガモンX「！？」

オメガモンXは慌ててドルモンを抱きかかえ、ゆっくりと地面に降ろす。

ドルモン「……。」

リュウ「ドルモン、まさかお前こうなる事を分かって…。！？」

その時、リュウはハッとした。この間黒コートの男が口にしていた言葉を。そしてなぜ倒したハズのデクスモンがこのイグドラシルにいるのかを…。

？？？『行け。このデジタルワールドを救うだけでは意味がない。貴様の使命は空白の席の主を護り、そしてこの世界を操る者を討て…。本当の敵は影にあり…。』

リュウ「……。」

（世界を操る者の影…。そうか…。そうだったのか…。全てはその影のせいだったのか…。）

オメガモンX「イグドラシル！これがあなたの望みですか！？」

イグドラシル「……。」

先ほどの王竜剣が刺さったため、宝玉にはヒビが入っていた。

オメガモンX「私には分かりません…。分かりたくもないッ?」

リュウ「そいつに何度言っても無駄だぜ…。」

オメガモンX「なに?」

リュウ「ヤツはイグドラシルに成りすまし、ロイヤルナイツを操ってXプログラムを遂行させた。しかし俺が来た事によって危機感を感じ、プロジェクトアークの実行してデジモン達を新デジモンワールドに移送させると見せかけ、デクスドルグレモンを使って全てのデジモンを消し、このデジタルワールドを乗っ取る…。それがコイツの目的だったんだよ。」

オメガモンX「何が言いたい?」

リュウ「つまりアンタの前にいるのは、真っ赤な偽物なんだよ…。お前らロイヤルナイツは、最初からコイツに踊らされていたんだよ。」

オメガモンX「なんだと!?」

リュウ「そうなんだろ?偽物さんよぉ?」

イグドラシル「……。」

リュウ「また黙りかよ…?それとも図星かぁ…?」

その時、宝玉から不気味な声が聞こえてくる。

イグドラシル「ククック…。」

オメガモンX「!?」

その時、宝玉から闇が溢れ出しリュウ達を包み込んだ。

リュウ・オメガモンX「うわっ!?」

～???～

リュウ達は目わ開けると、深緑のマントが宙に浮いていた。

オメガモンX「何者だ!?」

リュウ（なんだこの威圧は…？久しぶりな感覚だぜ…。）

「まさか、アンタがバロムモンかぁ？」

???「残念…。私はバロムモン様の忠誠を誓う組織、『イモータル』の1人、幻魔の死神サタンファントモン…。」

サタンファントモンと名乗るデジモンは深緑色のマントを広げると、大鎌を持った死神の姿をしたデジモンだった。

リュウ「サタンファントモン…。」

リュウはD－アクセルでサタンファントモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「サタンファントモン、究極体、ゴースト型、ウィルス種、必殺技はミスティックロスト。」

＞ｉ３４１０７－１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング。能力・データ：支配者】

サタンファントモン「ようこそ、幻魔の間へ…。よく私の幻影を見破ったな…。褒めてやろう…。」

リュウ「そいつはどうも…。」

オメガモンＸ「貴様、よくも我々ロイヤルナイツを利用してくれたな！」

サタンファントモン「騙されるヤツが悪いのさ…。お陰でこの世界を手にする事ができたかと思えば…」

リュウ「俺がこの世界に参上して計画は丸潰れ…。残念だったな。」

サタンファントモン「私の計画はまだ尽きていない…。なぜだか分かるか？お前らを消せば計画が完璧になり、裏世界のデジタルワールドはバロムモン様の物になるからだ…。」

オメガモンＸ「戯れ言を…。イグドラシルに成りすました事、ここでたっぷりと後悔させてやるぞ、サタンファントモン？」

リュウ「死神は死神らしく尸〇界（ソ〇ル・ソサエティ）に帰りやがれ！」

リュウはそう言ってセイクリッド・ドラグーンを取り出し、そして

オメガモンXはグレイソードを取り出して二人の刃先をサタンファントモンに向けた。

サタンファントモン「ククククク…♪貴様らの魂、頂戴する！」

サタンファントモンは不気味に笑った後、巨大な鎌　ロスト・リッパーを取り出して構える。

リュウ「ったく、最初はテメェとイグドラシルをブン殴る予定だったのによぉ…。」

オメガモンX「全くだな。あの時、お前が私に言ってくれた言葉…。ようやく理解できた…。すまなかったな…。」

リュウ「イヤなこった…。俺の怒りがまだ治まってねぇから一発だけブン殴らせろ…。」

オメガモンX「んな!?謝っているのにその態度か!?」

リュウ「……と言いたいところだが、その前にあの野郎をブン殴ってからっつうわけで一時休戦な。」

オメガモンX「そうだな…。では、行くぞ！」

リュウ「言われなくてもそのつもりだ？」

リュウとオメガモンXはデジタルワールドの平和を守るため、この事件の黒幕、サタンファントモンに立ち向かう。

彼らの最終決戦は、こうして幕が開かれるのであった。

||To Be Continued....

Ｅｐ９４　～生きる意味とは…。究極のＸ進化　アルファモン？～（後書き）

ｌｌＦｌａｓｈｂａｃｋｌｌ

あれから、リュウが死んだと言われたシオリはリュウギを部屋に寝かせ１人で静かに泣いていた。

シオリ「……。」

？？？「浮かない顔だな？」

シオリ「誰！？」

すると、ダークスの１人ストラティクモンがシオリの前に現れる。

ストラティクモン「はじめまして。私の名はストラティクモン…。」

シオリ「……まさか、デジモン？」

ストラティクモン「なるほど。その様子からすると記憶が目覚めたようだな？」

シオリ「まさか、あなたがリュウを…？」

ストラティクモン「残念だが私ではない。あの男は闇の支配者、カオスを倒した男なのだからな…。カオスの同志がリュウを抹殺した…。」

シオリ「なら、何しにここへ来たのよ！？」

ストラティクモン「用があるのはお前ではない…。リュウの息子であるリュウギだ…。」

シオリ「え!?リュウギが何をしたって言うのよ?」

ストラティクモン「リュウギをデジタルワールドの電脳核になって貰う…。彼はリュウの死を目撃し、哀しみや憎しみを持ち出した。彼は素晴らしい器となるであろう。」

シオリ「なんですって!?」

ストラティクモン「さぁ、リュウギをこちらに渡して貰おうか…?憎悪に満ち溢れた彼がいれば、とてもいい電脳核になる…。」

シオリ「リュウギには手を出さないで…。私にとってかけがえのない息子なんだから!」

ストラティクモン「ならば、力ずくでつれていくまでだ…。」

シオリ「だったら、私がその電脳核になるわ!」

ストラティクモン「その目、憎しみに溢れた目…。コイツならいい電脳核になるかもしれないな…。」

ストラティクモンは小さく呟く。

シオリ「けど、これだけは約束して!リュウギには手を出さないって?」

ストラティクモン「いいだろう…。大人しくついて来ればの話だがな…。」

シオリ「分かったわ…。」

ストラティクモン「明日迎えに行く。逃げれば躊躇いもなく消してやる…。」

シオリ「逃げないわ…。息子を置いて逃げる親なんて親じゃないわ！」

ストラティクモン「クククク…。明日が楽しみだ…。」

ストラティクモンはそう言って闇の中へと消え去った。

シオリ「どうして…。どうしてリュウだけじゃなくリュウギまで狙うの…？」

シオリは途方に暮れるしかなかった。その時、先ほどセツナの姿をしたリュウに言われた事を思い出す。

セツナ（リュウ）『リュウからの伝言だ…。リュウギを誰にも手の届かない安全な場所に避難させてやってくれ、と…。ここは危険だ…。』

シオリ「……。」

（リュウはこの事を知って伝言を…？でもどうしてだろう…？リュウが死んだなんて未だに信じられない…。）

シオリは考え込む。しばらくすると、シオリは決心した。

シオリ「決めたわ…。とにかくリュウギを安全な場所に非難させなきゃ…。」

シオリは電話帳を取り出してとある人に電話する。

シオリ「もしもし御縞さん？」

電話した相手は神戸市に住む御縞家のお宅だった。

シオリ「親友としてお願いがあるの…。大至急東京に来て…。」

次の日…。

シオリの親友である御縞　美咲（みさき）は大至急東京にやって来てシオリに事情を聞く。

シオリ「私のたった一人の息子、リュウギをあなたに預けたいの…。」

ミサキはシオリからの意外な言葉に驚く。

ミサキ「正気なの！？でもどうして…？」

シオリ「夫が行方不明になったの…。だから私、夫を探しに行って来るわ。」

ミサキ「でも、今朝のニュースであなたの夫は死んだんじゃ…？」

シオリ「例えそうだとしても、私は信じたくない…。」

ミサキ「どうしてそこまで…？」

シオリ「決まってるわ…。家族の絆を守るためよ…。」

ミサキ「シオリ…。分かったわ…。」

シオリ「リュウギをよろしく頼むわ…。それとこれを…。」

シオリは手紙をミサキに手渡した。

ミサキ「これは？」

シオリ「リュウギに読ませてあげて…。これしかできないけど、なるべく早く帰るわ！」

ミサキ「見つかるわよ、きっと。」

シオリ「ありがとう、ミサキ…。」

ミサキは眠っているリュウギを連れて神戸へと帰っていった。

シオリ「……。」

（ごめんね、リュウギ…。あなたを助けるにはこうするしかなかったのよ…。）

その夜、ストラティクモンに捕らわれてしまい、シオリはデジタルワールドの電脳核となってしまうのであった…。

次回はついにリュウ&オメガモンXｖｓサタンファントモン！

果たしてサタンファントモンの野望を打ち砕く事が出来るのか！？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ９５　～最終決戦の幕開け！幻魔の死神　サタンファントモンの脅威？～

リュウ＆オメガモンＸｖｓサタンファントモン？

バロムモンの忠誠を誓う組織、イモータルの恐ろしさがここに！？

Ｅｐ９５スタート？

EP95　～最終決戦の幕開け！幻魔の死神　サタンファントモンの脅威？～

～幻魔の間～

リュウとオメガモンXは裏のデジタルワールドの黒幕、サタンファントモンとの死闘を繰り広げる。

リュウ「喰らいやがれ！」

リュウは2丁デジガンで連射し、サタンファントモンを狙い撃つ。

サタンファントモン「何処を狙っている？」

オメガモンX「こっちだ！」

すると、オメガモンXはサタンファントモンの背後に回ってガルルキャノンを構えて強力な冷気弾を放つ。

サタンファントモン「無駄だ…。」

サタンファントモンは巨大な鎌、ロスト・リッパーで冷気弾を真っ二つに切った。

オメガモンX「なに！？」

サタンファントモン「まずは貴様からだ…。『エルム・デスサイズ？』」

サタンファントモンはロスト・リッパーの先端にある宝玉が光出す

と、オメガモンXが突然と灼熱の炎に包まれる。

オメガモンX「くっ。なんだこれは!?うわぁぁぁぁぁぁぁ!?」

リュウ「オメガモン!?」

リュウはポケットから氷結弾を2丁のデジガンに装着させて炎に包まれたオメガモンXを狙い撃ち炎を消そうとする。しかし、炎は一つも消えない。

リュウ「クソッ、どうなってんだよ!?」

サタンファントモン「それはただの炎じゃない…。その炎は身体ではなく精神を焼き尽くす炎なのだ…。」

リュウ「なんだと!?」

サタンファントモン「見ろ。オメガモンはたくさんのデジモン達を虐殺したため、デジモン達からの憎しみがヤツの精神に襲い掛かる。」

オメガモンX「やめろ…。私はただ…、イグドラシルの命令で…」

サタンファントモン「例えそうだとしても、お前の手で殺したんだ…。怨まれるのも無理もない。フハハハハ!精神的に追い込められると、炎は段々と燃え盛るのだ!」

オメガモンX「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

オメガモンXは呻き声を上げると、炎が段々と燃え盛っていく。

リュウ「くっ、だったら…」

リュウはデジガンを懐にしまう。すると拳を握り締め、ありったけの力でオメガモンXを殴り飛ばした。

リュウ「おいしょぉぉぉ

てんじゃねぇっつうの…。」

リュウはそう言って小指で鼻の穴をほじる。

オメガモンX「貴様～…。」

リュウ「んな事より前見ろよ。前。」

オメガモンXは前を見ると、サタンファントモンがロスト・リッパーを構えていた。

オメガモンX「くっ!?」

リュウとオメガモンXは素早く交わした。

オメガモンX「貴様、後で覚えていろよ…。」

リュウ「悪ぃ、俺すぐ忘れるタイプだから…。」

オメガモンX「ぐぬぬ…。」

サタンファントモン「まさかエルム・デスサイズを破るとはな…。」

リュウ「残念だったな。俺、幻魔に襲われる程コイツとは違ってバカじゃねぇから…。」

オメガモンX「んな!?貴様いま侮辱したな!?」

リュウ「本当の事言ってんだからしょうがねぇだろ?現実をしっかり受け止めろ!騎士なんだろ?」

オメガモンX「ぐっ、なんだか調子狂うなぁ…。」

リュウ「でも、命懸けでコイツを助ける…。何せ、アイツから命を託されたんだからな…。」

オメガモンX「お前…。」

サタンファントモン「フハハハハ！命を託されただと？笑わせるな！あんなのただの自滅に過ぎないのだ！」

リュウ・オメガモンX「……。」

サタンファントモン「なにが空白の席の主だ？あんな物、所詮ただのクズのデータに過ぎないのだよ。所詮、ヤツは存在してはいけないデータなのだよ！」

その時、リュウとオメガモンXの目付きが変わり、それぞれの剣を構えてサタンファントモンに振り下ろした。

サタンファントモン「！？」

サタンファントモンはとっさにロスト・リッパーで斬撃を防ぎ、後方へと下がる。

サタンファントモン（くっ、何時の間に…！？）

リュウとオメガモンXは地面に着地すると、サタンファントモンを睨みつける。

オメガモンX「今の言葉、早々に取り消せ…。」

リュウ「アイツは俺達に大切な事を教えてくれた…。人の命を弄んだテメェみたいなクソ野郎と一緒にしてんじゃねぇよ…。」

リュウはそう言ってセイクリッド・ドラグーンを肩に担ぐ。

リュウ「オメガモン。コイツこそアンタの言う異分子じゃねぇのかぁ？お前よりもっとブッ飛ばしたくなってきたぜ…。」

オメガモンX「奇遇だな…。私もこの哀れな異分子を裁かなくては、他のデジモン達に示しがつかん…。」

リュウ「お前、S入ってるだろ？」

オメガモンX「貴様に言われたくない…。」

リュウ「チゲェねぇ。んじゃ、ドS同士コイツを痛ぶってやろうぜ！」

オメガモンX「承知した！」

リュウとオメガモンXは心を一つにし、反撃を開始する。

サタンファントモン「図に乗るなクズのデータ共がッ！」

サタンファントモンは深緑色のマントを広げると、闇の霧が溢れ出しリュウ達を包んだ。

リュウ「させるかよ！」

リュウはポイントから閃光弾をデジガンに装着し、闇の霧に向かって弾丸を放つ。

すると、弾丸は途中で爆発物し、光の閃光がサタンファントモンを照らした。

サタンファントモン「なんだ!?眩しい!?」

リュウ「オメガモン?」

オメガモンX「うむ!」

リュウとオメガモンXはそれぞれの剣を構え、それぞれの剣を振り降ろすように降ると、剣風によって生み出された衝撃波を放つ。

リュウ「喰らいやがれ!」

オメガモンX「『グレイソード?』」

2つの衝撃波はやがてひとつとなりサタンファントモンにぶつけた。

サタンファントモン「ぐはっ!?」

リュウ「やったか?」

オメガモンX「いや、まだだ…。」

その時、リュウとオメガモンXの背後にから気配を感じる。

リュウとオメガモンXは振り向くと、黒い影がリュウ達に襲いかかってくる。

リュウ，オメガモンX「!?」

リュウとオメガモンXは間一髪で交わした。

リュウ「くっ！」

オメガモンX「なんだ!?」

リュウとオメガモンXは黒い影の正体を見ると、自分の影である事に驚く。

オメガモンX「なに!?」

リュウ「ほぅ、そんな事も出来んのな…。」

すると、リュウの影が口を開く。

影「その通り…。」

次にオメガモンXの影が喋る。

影「貴様らの影を操るができる能力。『キラー・シェイド』だ。」

リュウ「なるほどな…。」

影「どうだ?自分の影に魂を奪われる気分は?」

リュウ「まだ奪ってもねぇクセに勝手な事ぬかしてんじゃねぇっつうの。」

オメガモンX「用は、貴様を倒せばいい…。」

影「果たして出来るかな…？」

リュウ「ほざいてな！」

リュウは懐からデジガンを取り出して影を狙い撃つと、影の左肩に直撃する。

リュウ「おいおい、呆気ねぇなおい？」

その時、リュウの左肩に傷を負いひざが地面に着く。

リュウ「ぐっ！？」

オメガモンX「リュウ！？これはアルファモンと同じ現象！？」

影「その通り…。」

影「影に与えたダメージは己自身に還ってしまうのさ…。」

リュウは左肩を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

リュウ「なるほど…。あのデクスモンはテメェの仕業だったのか…？」

影「さぁどうする？あの哀れなデータと同じ行動する事を勧めるぞ

？フハハハハハ！」

リュウ「チイッ…。」

オメガモンX「どうするリュウ！？」

リュウ「いま考えてる！」

（影の動きを封じるにはどうすりゃ…！？……待てよ？封じる？）

リュウは封じるという言葉に閃く。

リュウ「オメガモン、一か八かだ…。あの影共を引きつけといてくれないか…？（小声）」

オメガモンX「なに…？」

リュウ「合図を出したら俺の所へ来い。（小声）」

オメガモンX「承知した…。（小声）」

影「何をコソコソと話している？」

オメガモンX「貴様らの相手はこの私だけで充分だ！」

オメガモンXはグレイソードを取り出して相手を挑発する。

影「面白い…。先に貴様から魂を奪ってやる。」

リュウとオメガモンXの影はオメガモンXに矛先を向けて襲いかかってくる。

オメガモンX「こっちだ！」

オメガモンXは高く飛んで相手の注意を引く。

リュウ「うしっ、その隙に…」

リュウはポケットから包囲弾を2丁デジガンに装着させ、特定の場所を八ヶ所撃ち込んだ。

リュウ「オメガモン！こっちだ？」

オメガモンX「うむ！」

オメガモンXはUターンし、猛スピードでリュウに接近する。

影「スピードを上げた！？」

影「逃がすな！」

何も知らずにリュウとオメガモンXの影はオメガモンXを追いかける。

オメガモンXがリュウの元へと来ると、リュウは右手を前に差し出す。

リュウ「ビンゴ…。」

（ニヤリ…）

リュウは指パッチンをすると、八ヶ所に撃ち込んだ弾丸から光が生

じ、リュウとオメガモンXの影を包囲した。

影「なに!?」

リュウ「はい、お疲れ～。」

影「影を閉じ込めた所で何になる?この壁はいずれ消える。そうすれば貴様らを八つ裂きにしてやる!」

リュウ「バァーカ。コイツはテメェらを閉じ込めるためじゃねぇんだよ…。逃げられねぇためなんだよ…。」

リュウはそう言って2丁デジガンを影達に向ける。

影「なに!?」

リュウ「お前らの大好きな光だ♪」

（ニヤッ）

影「や、やめろ!?」

リュウは閃光弾を装着させた2丁デジガンを連射させた。すると、弾丸は途中で爆発し、影に光の閃光を浴びせた。

影「ギャャャャャャャャャャャャャャャャ!?」

陰は跡形もなく消え去り、やがてリュウとオメガモンXの影が元通りになる。

オメガモンX「影が元に…!?」

リュウ「どうしたぁ？テメェの力はこんなもんなんかぁ？」

すると、闇の中からサタンファントモンが現れる。

サタンファントモン「流石、同志　カオスを倒した英雄だけの事はあるな…。」

リュウ「あの野郎の知り合いだったのかぁ？道理でテメェの技が小賢しいと思ったぜ…。」

サタンファントモン「遊びはこれまでだ…。次は絶望を味わせてやろう…。」

リュウ「ほぅ、是非やって貰いたいもんだ…。」

サタンファントモン「ククククク…♪『ミスティック・ロスト？』」

サタンファントモンはロスト・リッパーを振り回し、空間を切り裂いた。

リュウ「おいおい、今度は何をするつもりなんだ？」

サタンファントモン「ククククク…♪」

切り裂いた空間から闇が溢れ出し、リュウ達を包み込んだ。リュウとオメガモンXは思わず目を閉じた。

リュウ・オメガモンX「くっ！？」

ーーーーーーーーーーーーーー

リュウ「う、う～ん…。」

リュウは目を開けると、見覚えのない森の中だった。

リュウ「あれ…？俺は確か…？」

その時、背後から物音がする。リュウはセイクリッド・ドラグーンの柄を握り、素早く振り向いた。

リュウ「んな！？お前は！？」

リュウが目にしたのは死んだハズのセツナが立っていた。

リュウ「セツナ…なのか…？」

セツナ「元気そうだな、リュウ…。」

リュウ「な、何でお前がここに！？お前は確か…」

セツナ「確かに俺はあの日死んだ…。けど、肉体は朽ち果てたが魂だけがこの森へと流された。」

リュウ「そうだったのか…。それじゃ俺の肉体も！？」

セツナ「恐らく、お前の肉体は幻魔の間に…。そして魂はサタンファントモンに引き抜かれてこの森に流されたのだろう…。」

リュウ「マジかよ…。」

セツナ「だが、お陰で俺は助かる道が開かれた…。」

リュウ「そうか…。だったら一緒にこんな気味悪い森から抜けようぜ。俺とお前なら抜け出せるハズだ。」

セツナ「いや…。森を抜けるのは俺一人だ…。」

リュウ「お前、何言って…」

その時、セツナは腰に掛けてある刀を鞘から抜き出してリュウを切りに掛かる。

リュウ「んな!?」

リュウはとっさにセイクリッド・ドラグーンを取り出して斬撃を受け止めて鍔競り合う。

リュウ「セツナ…テメェ、どういうつもりだ…!?」

セツナ「なぜなら、お前の肉体は俺が頂くからだ…。」

リュウ「テメェ…、正気か!?」

セツナ「俺は嘘が嫌いなのは知ってるだろ…?勿論本気だ!」

リュウ「おいおい…、この森に入って頭おかしくなっちまったのかお前は!?」

セツナ「黙れ…。兄を想う気持ちがあるなら、俺に肉体を譲れ…。」

リュウ「嫌だと…言ったら…？」

セツナ「弟だろうが容赦はしない…。死ね！」

セツナは力で押し返すと、リュウはバク転して体勢を立て直す。

リュウ「クソッ、なんでお前と戦わなくちゃならねぇんだよ！兄弟だろうがぁぁぁぁぁぁ！？」

セツナ「さぁな…。ただひとつ言える事は、お前はただの器に過ぎん…。」

リュウ「テメェ、それ本気で言ってるのかよ…？それじゃカオスと同じレベルじゃねぇかよ！？」

セツナ「確かにそうだな…。俺にもっと闇の力さえあればカオスを超えていたのかもしれないな…。」

リュウ「お前、誰かに操られているのか…？」

セツナ「戯言を…。」

リュウ「待ってろよセツナ…。一発ブン殴って目を覚まさせてやる…。」

セツナ「とっくに目は覚めてる…。そういうお前こそ目を覚ませよ…。本当の敵はおれである事をなッ？」

リュウ「テメェェェェェェェェェェ？」

リュウの怒りが爆発し、セイクリッド・ドラグーンでセツナを切りに掛かる。

セツナ「ククククク…♪」

セツナは片手間だけでセイクリッド・ドラグーンを受け止めた。

リュウ「!?」

セツナ「終わりだ。愚かな弟よ…。」

セツナは刀でリュウの腹をつらぬいた。

リュウ「がはっ!?」

セツナ「ククククク…。フハハハハハ!」

リュウは力尽きて地面に倒れてしまう。

リュウ「かはっ…。ク…ソ…。」

（俺は…ハナっから踊らされていたのか…？俺の今までやって来た事は…無意味だったの…か？）

セツナ「まだ、生きてるのか…？さっさと息の根を止めてやるよ…。」

セツナはそう言って刀の刃先をリュウに向ける。

リュウ「俺は…」

セツナ「死ねぇぇぇぇぇ？」

リュウ（俺はこんな所で死ぬわけにはいかねぇんだよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ？）

リュウは心の中で叫び、思わず目を閉じたその時だった。

ガキィーンッ？

その時、凄まじい金属音が森の中へと響き渡る。

セツナ「だ、誰だお前は！？」

リュウは目を開けると黒コートの男がいた。

リュウ「お、お前は！？」

黒コートの男は月牙・ルナティックで刀の軌道を変えてリュウを助けたのだ。

？？？「……。」

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

ＥＰ９５　～最終決戦の幕開け！幻魔の死神　サタンファントモンの脅威？～

次回はついにクライマックス？

果たしてリュウ達はサタンファントモンを討つ事ができるのか！？

次回もお楽しみに！

Ｅｐ９６　～終わりのない物語～（前書き）

ついに、～追憶の絆篇～完結！！

果たしてリュウはどうなるのか！？

サタンファントモンの野望を打ち砕くことができるのか！？

Ｅｐ９６スタート！！

ＥＰ９６　～終わりのない物語～

～幻魔の森～

リュウ「お、お前は…！？」

なんと、黒コートの男が現れリュウを助けたのだ。

？？？「……。」

セツナ「だ、誰だお前は！？」

？？？「立て。デジタルワールドの英雄よ。貴様の使命はまだ終わってなどいない…。」

セツナ「邪魔だ！」

セツナは刀で黒コートの男に突き刺そうとしたその時、黒コートの男は右手を広げて、紅炎剣・ソルが現れて刀を受け止める。

セツナ「くっ！？」

？？？「それはこちらの台詞だ…。偽者は消え失せろ…。」

リュウ「何…だと…！？」

？？？「はぁぁぁぁぁぁ？」

黒コートの男は月牙・ルナティックと紅炎剣・ソルを構え、目にも

止まらない早さでセツナを切り刻んだ。

セツナ「ぐはっ！？」

セツナは力尽きて地面に倒れ、跡形もなく消え去った。

リュウ「セツナ！？」

？？？「案ずるな…。この者は貴様を惑わす為の幻だ…。これはサタンファントモンの罠だ…。」

リュウ「そう…か…。」

？？？「その傷も幻覚によりヤツが貴様の脳に刺激をさせ、現実のように斬られたと思い込ませている…。」

リュウ「そうなのか…？」

リュウは立ち上がって傷口を見ると、出血が徐々に止まっていき痛みが無くなっていく。

リュウ「ほ、ホントだ…。痛みが何も感じねぇ…。」

？？？「さて、後はこの幻魔の森を抜け出すだけだ…。」

リュウ「ちょうど良かった…。アンタに聞きたい事があるんだ…。」

？？？「なんだ…？」

リュウ「アンタ、この世界の住人じゃねぇだろ？」

???「ほぅ、なぜだ…？」

リュウ「まず、ファンロンモンから与えられた使命は俺しか知らないハズなのにアンタはそれに付け加えて空白の席の主を護れと俺に使命を与えた…。それとＥＸモードやコアの事もアンタは知っていたからだ…。」

???「……。」

リュウ「そうそう、気になった事が３つあるんだ。デクスドルグレモンの襲撃時にデュークモンを復活させたのはアンタだろ…？ロイヤルナイツの本部を自由に出入りできるデュークモンを蘇らせ、俺とドルグレモンをイグドラシルへ導くようにと指示をした…。それから２つ目。お前があの時言っていた『空白の席の主』の事だ。最初からドルモンが空白の席の主だと知ってて俺に頼んだ事だ…。」

???「……。」

リュウ「最後に、アンタの持つソルとルナティックはデジタルワールドの平和をもたらすために生まれた聖霊ってかつてソルを操る仲間から聞いたのを憶えている…。人間だって限度がある。２つの剣を使いこなせるなんて不可能だ…。」

???「何が言いたいのだ…？」

リュウ「要するに。聖霊を操る力を持ち、デジモンを蘇らせる力を持つ。んな事は神や仏様しかできねぇよ…。そうだろ、イグドラシル？」

？？？「……。」

その時、黒コート男はゆっくりとフードを脱いで正体を明かした。

＞ｉ３４５４７―１２９８＜
【挿絵：トリプルミーミング】

？？？「いかにも…。俺はあらゆるデジタルワールドのホストコンピュータ、イグドラシルだ…。」

リュウ「驚いたぜ…。まさかアンタがデジタルワールドの神とはなぁ…。それで、なんで人間の姿してんの？」

イグドラシル「この姿の方が活動しやすいからな…。この姿は本来の姿ではない…。」

リュウ（本来の姿ってどんな姿してんだろ…？）

リュウはイグドラシルの本来の姿を想像しながら凝視する。すると、イグドラシルは口を開く。

イグドラシル「貴様の質問に答えよう。まずはデュークモンだ。彼は最初、世界の異変に抱き、ロイヤルナイツから離脱し先へ逝った…。彼は優秀な騎士であり理知的な持ち主だ…。だから俺は彼を復活させた…。」

リュウ「ま、どっかの石頭とは大違いだな…。んで、メタルガルルモンの復活は？」

イグドラシル「もし彼がいなければ、レジスタンス組織やデジモン

達は全滅していた…。ウォーグレイモンだけじゃ心配だからな…。」

リュウ「だからアイツを蘇らせた、か…。」

イグドラシル「次にドルモンの事だ…。ドルモンが空白の席の主である事を知って尚、貴様に任せた…。しかしサタンファントモンがイグドラシルに成りすましたせいで、ロイヤルナイツの一人マグナモンにドルモンを連れてくるよう命令させて連れ去られてしまった。」

リュウ「そんでドルモンを使ってデクスモンや大量のデクスドルグレモンを生み出したって事か…。」

イグドラシル「そうだ…。最後に、なぜ俺がソルとルナティックを持っているか…。それは、ソルとルナティックはデジタルワールドの平和をもたらす為に俺が創り出した聖霊だからだ…。」

リュウ「マジでか!?それじゃ、継承者を選んだのはテメェだったのか!?」

イグドラシル「ジンとユウナの事か…。いかにも、あの2人を選んだのは俺だ…。」

リュウ「色々と繋がりがあんのな…。」

イグドラシル「ここまでしっかりと理解したか…?」

リュウ「ま、まぁ一応…。」

リュウは不安そうな顔をしながら頬をポリポリとかく。

イグドラシル「話はここまでだ…。とにかくこの幻魔の森を抜けなければならない…。」

リュウ「抜けなければならないって、アンタはどうやって入って来たんだよ?入って来たんだから脱出する方法も考えてんだろ?」

イグドラシル「生憎、その方法は持ち合わせていない…。」

リュウ「っておい…。アンタ本当に神なのかぁ?神なら神らしくドカァーンってかませるだろ?」

イグドラシル「貴様、神を何だと思っているのだ…?」

真顔でツッコムイグドラシル。

リュウ「神以外何者でもねぇよ。」

イグドラシル「まぁ案ずるな…。成せばなる…。」

リュウ「おい、神にその言葉使っていいのかよ…?」

イグドラシル「……気にするな。」

リュウ「気にするっつうの!?つうかなに今の間はよぉ!?」

イグドラシル「仕方ない。もはやこの方法しかないな…。」

リュウ「なんだよ?あるならあるって言えよな。」

イグドラシル「デジタルワールドの英雄よ、俺の力を使え。ＥＸコアを持つ貴様なら出来るハズだ…。」

リュウ「つまり、俺のＥＸコアとアンタの力を一つにしてこの森から脱け出すって事か？」

イグドラシル「ただし、いまの貴様には限度がある…。この力を使うにはそれ相応の覚悟が必要だ…。俺の力を発揮できるのは、僅か一分だ…。」

リュウ「一分でケリ着けたらいいんだろ？上等だ…。」

イグドラシル「その言葉を待っていたぞ…。流石はデジタルワールドの英雄だな…。」

イグドラシルはそう言ってリュウに手を差し伸べた。

イグドラシル「俺の力、存分に使うが良い…。来い、デジタルワールドの英雄よ！」

リュウ「俺はもう英雄なんかじゃねぇよ…。元、英雄だ…。それに俺はそんな大層な名前じゃなく立派な名前があんだよ…。」

リュウはイグドラシルの手をガッチリと掴んだ。

リュウ「泣く子も黙るデジモン　ＪＥＴのリュウだ…。しかとその胸に刻んどきな！」

その時、リュウとイグドラシルの手から聖なる光が生じる。

リュウ「うわっ！？」

イグドラシル「ではリュウ、神の力を使いこなして見せよ…。」

聖なる光が満ち溢れ、やがてリュウとイグドラシルは光に呑み込まれていった。

～幻魔の間～

一方、オメガモンXは幻覚に呑み込まれたのか、地面に倒れて気絶していた。

サタンファントモン「もうじきオメガモンの魂は抜かれる…。さて、問題は奴だ…。」

サタンファントモンはチラッとリュウを見ると、リュウは地面に倒れて気絶していた。

サタンファントモン「じきに魂と共にEXコアも出てくる。そろそろだがな…。ん？」

その時、リュウの手がピクッと動く。

サタンファントモン「ククククク…。そろそろ堕ちるな…。」

リュウ「いや…。堕ちるのはテメェだ。サタンファントモンッ？」

リュウの身体は聖なる光に包まれる。

サタンファントモン「そ、そんなバカな！？」

リュウはゆっくりと立ち上がって両眼を開くと右眼には紅色、左眼には蒼色に澄んでいた。

サタンファントモン「い、今更戻ってきて何になる!?1人で何が出来るというのだ!?」

リュウ「1人じゃねぇよ…。俺の後ろにはみんなの絆が着いてんだよ?」

サタンファントモン「なに!?」

すると、リュウは人差し指を立てて前に突き出した。

リュウ「一分だ…。一分でテメェを地獄に送ってやらぁ…。」

サタンファントモン「一分だと…?フハハハハ!そんなのただのハッタリに過ぎん!イモータルの一員である私が貴様ごときに……」

その時、リュウはセイクリッド・ドラグーンを取り出し、目にも止まらない早さでサタンファントモンの頬を掠らせた。

サタンファントモン「!?」

リュウ「悪ぃなぁ…。アンタのくだらない自慢話に付き合う程、俺はヒマじゃねぇんだよ…。こっちとら時間がねぇんだ。さっさと掛かって来いよ…。」

リュウはセイクリッド・ドラグーンを肩に担いで挑発すると、サタンファントモンの怒りが爆発した。

サタンファントモン「気が変わった…。貴様の魂ごと切り刻んでやる！」

サタンファントモンは巨大な鎌、ロスト・リッパーでリュウに接近し、セイクリッド・ドラグーンを弾き返した。やがてセイクリッド・ドラグーンは数メートル離れた場所に突き刺さった。

サタンファントモン「フハハハハ！これでお前は丸腰だ！」

リュウ「フッ…。」

リュウは微かに笑う。

サタンファントモン「何が可笑しい？追い詰められて頭が可笑しくなったか？」

サタンファントモンは余裕な顔をする。

その時、リュウは両手を広げると左手から月牙・ルナティックが現れ、そして右手から紅炎剣・ソルが現れる。

サタンファントモン「んな！？」

リュウ「おいおいどうしたぁ？お得意の余裕ぶりは何処へ行ったんだぁ？」

リュウは月牙・ルナティックと紅炎剣・ソルを回転させた後、戦う体勢に入る。

＞i34549―1298＜
【挿絵：トリプルミーミング】

リュウ「さぁて、フィナーレと行こうぜ？」

リュウは目にも止まらない早さでサタンファントモンに接近する。

サタンファントモン「くっ！『エルム・デスサイズ？』」

サタンファントモンはロスト・リッパーの先端にある宝玉が光出すと、リュウの身体が突然と激しく炎に包まれた。

リュウ「……。」

サタンファントモン「炎に追い詰められて死ぬんだな？」

しかし、リュウには全く通用しなかった。リュウは月牙・ルナティックを地面に突き刺し、リュウの身体が凍り付かせた。
やがて氷が粉々に砕けると、リュウを襲う炎はなくなった。

サタンファントモン「「なんだと!？」

リュウ「ヌルすぎんだよテメェの炎は…。はぁぁぁッ？」

リュウは紅炎剣・ソルを逆手に持ち、振り上げるように振ると、剣風によって生み出された炎の衝撃波を放った。

サタンファントモン「くっ!？」
（早い!？）

サタンファントモンは避けきれず、深緑のマントで防御した。すると、リュウの姿がなかった事に気付く。

サタンファントモン「ど、何処だ!?」

リュウ「こっちだ、マヌケ。」

サタンファントモンは振り向くと同時に、リュウは紅炎剣・ソルを振りかぶっていた。

リュウ「これが本当の炎だコノヤロォォォォォォォォ?」

リュウはありったけの力で紅炎剣・ソルを振り下ろす。

サタンファントモンはとっさにロスト・リッパーで斬撃を受け止める。しかし、強力の余りに力負けし、やがて地面に激しく叩きつかれる。

サタンファントモン「ぐはっ!?」

リュウは地面に着地すると、月牙・ルナティックと紅炎剣・ソルをクロスに構える。

サタンファントモン「よくも…、よくも私をコケにしたな…。もういい…。この世界ごと葬り去ってくれるわッ?」

サタンファントモンはロスト・リッパーを振りかざすと、全長数十キロメートルの超巨大暗黒球が現れる。

その時、地面に倒れていたオメガモンXがピクッと動いた事にリュ

ウは気付く。

リュウ「……。」

サタンファントモン「フハハハハッ?怖じ気づいたか?切り札は最後に取っておく物なんだよッ?死ねッ?『パンデモニウム・ノア?』」

サタンファントモンはロスト・リッパーでパンデモニウム・ノアを投げるように振ると、パンデモニウム・ノアはリュウに襲い掛かる。

リュウ「言ったハズだ…。俺は1人じゃねぇ、俺の後ろにはみんなの絆が着いてるってよぉ?」

その時、リュウの背後からオメガモンXが高く飛び上がり、グレイソードを振りかぶる。

サタンファントモン「んな!?いつの間に!?」

リュウ「気付けよ、バーカ。」

オメガモンX「貴様の思い通りにはさせん!『オールデリート!』」

オメガモンXはグレイソードを振り下ろし、超巨大暗黒球を真っ二つに両断し消滅させた。

リュウ「切り札は最後に取っておくもんなんだよ…。」

サタンファントモン「バ、バカなッ!?こんな事が有り得ん!?」

リュウ「幻覚の使い過ぎで自分まで幻覚見ていたのか？いい加減、現実を見やがれってんだ。」

オメガモンX「貴様の野望もこれまでだ…。」

リュウ「さぁて、そろそろ一分だ…。覚悟はできてるかぁ？」

サタンファントモン「ひぃっ！？」

リュウは月牙・ルナティックを構えると月牙・ルナティックから凍てつく氷が宿す。

リュウ「唸れ、蒼き月の刃よ…。氷の魂を我に…。『ダイヤモンドダスト・ソウル？』」

リュウは凍てつく氷を纏った月牙・ルナティックを地面に突き刺すと、地面から大量の氷の柱が次々と現れ、サタンファントモンに襲い掛かる。

サタンファントモン「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

サタンファントモンを氷の中に閉じ込める。

サタンファントモン（み、身動きが取れない…！？）

リュウ「まだ終わりじゃねぇよ…。」

次に紅炎剣・ソルを構えて詠唱すると紅炎剣・ソルから灼熱の炎が宿す。

リュウ「唸れ、紅き太陽の刃よ…。炎の魂を我が力にッ！！」

サタンファントモン（ま、待ってくれ！？）

リュウ「神の鉄槌を喰らいやがれ？『ヴォルカニック・ソウル？』」

リュウは灼熱の炎を纏った紅炎剣・ソルを振り下ろした。すると、紅炎剣・ソルから剣風によって生み出される灼熱の炎を纏った巨大な衝撃波を放った。

サタンファントモン（バ、バロムモン様ぁぁぁ

オメガモンX「喜んでる場合ではない…。早くしないとデジタルワールドが危ない！」

リュウ「分かってるよ…。ほら、アンタの出番だぜ…。」

イグドラシル「あぁ…。オメガモン。リュウを頼む。」

オメガモンX「あ、あぁ…。」

イグドラシルはリュウをオメガモンXを任し、ゆっくりと前に歩く。

オメガモンX「何をするつもりなんだ…？」

リュウ「まぁ見てなって…。」

イグドラシルは手をそっと地面に置くと、闇に染まった地面が聖なる光へと変わった。

リュウ・オメガモンX「！？」

イグドラシル「朽ち果てた世界よ…。神の名を下にこの朽ち果てた世界から光りの世界へと転生せよッ！！」

やがて光が満ち溢れ、リュウとオメガモンXは光に呑み込まれていった。

ーーーーーーーーーーーーー

リュウは眼を開けて辺りを見回すと暗くて何も見えなかった。

リュウ「おいおい、何処なんだよここはぁ？」

すると、遠くから微かに会話が聞こえてくる。

リュウ「ん？」

その時、光がピカッと光るとリュウは思わず眼を閉じた。

リュウ「うわっ！？」

『名前は龍儀…。小関　リュウギだ！』

『リュウギ…。いい名前ね…。』

『な？ピッタリだろ？』

『えぇ。将来が楽しみね…。』

『別に何になっても文句言わねぇ…。ただ、最後まで己の流儀で貫き通す男になってくれたらそれで充分だ…。』

『そうね…。』

すると、リュウギと名付けた赤ん坊がニッコリと笑う。

『笑ってるわ…。』

『気に入ったんだよきっと…。これからもよろしくな、リュウギ…。』

父親はゆっくりと手を差し伸べると、リュウギは父親の指を掴んだ。

リュウ「リュウギ、シオリ…。」

この光景を目にしたリュウ。すると、リュウの頬に一筋の涙が零れ落ちる。

リュウ「はは…。いい歳して何泣いてんだよ、俺…。」

リュウは冗談気に笑いながらそでで涙を拭く。

？？？「帰りたいか…？」

リュウは振り向くと、イグドラシルが姿を現す。

リュウ「これ、まさかアンタの仕業か？」

イグドラシル「あぁ…。問題はこれから貴様をどうするかだ…。」

リュウ「思い出を見せてくれた所で悪いが俺は帰らねぇ…。俺はもう決めたんだ…。」

イグドラシル「ようやく貴様の息子と和解したのにか…？」

リュウ「それでもだ…。俺はたった1人の兄弟を救う事も出来なかった…。それは俺にとって大きな罪だ…。」

イグドラシル「だが、貴様は罪を償おうとするため、自分の名を棄ててまで永遠の警告者になったではないのか…？」

リュウ「!?」

イグドラシル「違うのか…?」

リュウ「なるほど…。俺にエグザという名前を与えてくれたのはアンタだったのか…。アンタの本当の目的はなんだ?なんで俺を裏のデジタルワールドを救う使命を与えた?」

イグドラシル「言ったハズだ。俺はあらゆるデジタルワールドを管理するホストコンピュータだと…。今、闇へと変わり果てた世界を正常にするために動いているのだ…。」

リュウ「裏のデジタルワールドはもう平和だろ?だったら、俺はもう用済みなんだからいい加減、俺をゆっくりと眠らせてくれよ…。」

イグドラシル「それは困る…。」

リュウ「なんでだよ…?」

イグドラシル「何故なら貴様は、世界を救う鍵を持っているからだ…。鍵を持っている限り、貴様をゆっくり眠らせる訳にはいかない…。」

リュウ「マジかよ…。」

イグドラシル「恐らく、バロムモンやその組織イモータルはどんな手段を使ってでも貴様とリュウギの持つEXコアを狙ってくるだろう…。貴様はいま電脳核の中にいるからどうする事も出来ん…。」

リュウ「狙われるのも時間の問題ってヤツか…。」

イグドラシル「そうだ…。ではまずは、ある人物と会って貰う。」

イグドラシルは指パッチンをすると世界がピカッと光り、リュウは思わず眼を閉じた。

眼を開けると、暁の光が海を反射し、宝石のように輝く。波の音が止まない黄昏の世界だった。

リュウ「ここは…？」

？？？「久しぶりだな、リュウ…。」

リュウは振り向くと、そこにはセツナがいた。

リュウ「セツナ！？まさか幻覚じゃねぇよな…？」

セツナ「なんの事だ？」

リュウ「あ、いや、こっちの話だ…。それよりここは一体…？」

セツナ「ここは黄昏の世界…。肉体を失い、魂だけ残った者が集う場所だ…。」

リュウ「魂だけが集う黄昏の世界…。」

セツナ「話はイグドラシルから聞いた…。リュウ。お前はまだこの世界に来る必要なんてない…。いや、来てはいけないんだ。」

リュウ「どういう事だよ？」

セツナ「お前に言ったハズだ…。デジタルワールドの未来を守ってくれと…。まだデジタルワールドは完全に平和じゃない。お前はそれでもやりきったとでも言えるのか？」

リュウ「それは……。」

すると、セツナはリュウの肩にポンと手を置く。

セツナ「お前はもう咎人じゃない…。お前はデジタルワールドの英雄、小関リュウだ…。」

リュウ「セツナ…。」

セツナ「お前に言ってやれるのはこれで最後だ…。リュウ、この魂が朽ち果てるまで、お前と一緒に未来を見てやる…。だからもう、罪に背負う必要はないし過去に縛られる必要もないんだ…。」

リュウ「！？」

その時、リュウの身体が徐々に消えて行くことに気付く。

セツナ「もう時間切れか…。」

リュウ「セツナ…。」

セツナ「？」

リュウ「いい兄貴持てて、ホントに良かったぜ…。」

セツナ「兄弟として当然の事さ…。じゃあな…。」

すると、セツナの頬に一筋の涙が零れ落ちる。

リュウ「あぁ…。」

リュウはセツナの手を掴み、全ての想いをぶつけるようにギュッと握りしめた。すると、リュウは静かに黄昏の世界から消え去った。

セツナ「いい兄貴、か…。俺もいい弟持てて良かったさ…。」

セツナは小さく笑みを浮かべ、落ちることのない夕陽を見つめるのであった。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

リュウは眼を開けると、そこは転生された裏世界のデジタルワールドだった。

リュウ「ここは…」

イグドラシル「兄弟との再会はどうだった…？」

するとリュウの前にイグドラシルが現れる。

リュウ「あぁ…。せっかくの再会なのに説教されちまったよ…。でも、お陰で目が覚めた…。」

イグドラシル「では、答えを聞こう…。」

リュウ「俺はずっと、未来は守るためにある物だと思ってた…。けど、この世界に来て色々な事を教えてくれた…。未来は守るためじゃない。切り開くためにあるものなんだって…。」

イグドラシル「迷いはもうなくなったようだな…。俺はその言葉を待っていたぞ…。」

リュウ「？」

イグドラシル「時は満ちた…。止まっていた貴様の未来はいま開かれた…。」

リュウ「なに？」

その時、イグドラシルの身体が突然と光りだす。

リュウ「イグドラシル！？うわ！？」

やがて、リュウは光りに包まれていった。

～裏世界のデジタルワールド～

一方、イグドラシルの手によって転生された裏世界のデジタルワールドは…。

デュークモンX「世界には、まだ見知らぬ物がたくさんあるものだな…。」

デュークモンXは見上げて青空を眺める。

オメガモンX「あの人間の事か…？」

デュークモンX「リュウとドルモン…。あの2人がいなければこの美しい世界を見ることができず、闇に呑み込まれていた…。感謝せねばな…。」

オメガモンX「騒々しいヤツだったが違いない…。あれから我々の前に姿を現さず、一体何処へ行ったのだ…？」

デュークモンX「アイツなりに、やらなければならない事があるのだろう…。騒々しいヤツだからな…。」

オメガモンX「そうだな…。ところでドルモンは…？

デュークモンX「心配ない…。アイツは自分の道を進んで生きている…。」

オメガモンX「全ての命は生きるためにある、か…。」

デュークモンX「これからのアイツが、楽しみだな…。」

デュークモンXとオメガモンXは高く飛び上がり、ロイヤルナイツの本部へと帰っていった。

その頃ドルモンは、トコモンXと再会を果たすため古びた遺跡へと向かっていた。

ドルモン「トコモン！」

トコモンX「あ！モーン！」

トコモンXは嬉しそうにピョンピョンと飛び跳ねてドルモンの元へと駆け付ける。

ドルモン「帰ったよ！」

トコモンX「よ♪よー♪」

ドルモン・トコモンX「あはははは♪」

ドルモンとトコモンXは再会を果たし、お互いに抱き合う。

ドルモン「リュウは？」

トコモンX「う～…。」

トコモンXは悲しそうな顔をしながら首を横に振る。

ドルモン「そうか…。」

ドルモンは残念そうな顔をしながらうつむく。すると、ドルモンはゆっくりと見上げる。

ドルモン「きっとまた逢えるさ…。俺達はリュウと絆で結ばれているから…。」

トコモンX「き・ず・な？」

ドルモン「うん。俺はそう信じてる…。」

ドルモンの瞳には青空が映っていた。すると、青空を眺めながら小さく呟く。

ドルモン「俺の物語はまだ始まったばかりなんだ…。そうだよね、リュウ？」

こうして裏世界のデジタルワールドは救われた。しかし、ドルモン達の物語は終わりではない。生きている限り、彼らの物語は終わらないのであった…。

ｌｌＴｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．．

EP96　～終わりのない物語～（後書き）

???「ーーーよ…。目覚めよ…。」

リュウ「う、う～ん…。」

リュウは眼を開け、ゆっくりと起き上がる。

???「平和のためによく戦ってくれたな、デジタルワールドの英雄よ…。」

リュウ「その声、ファンロンモンか？」

その時、リュウの前に四聖獣の主、ファンロンモンが現れる。

リュウ「裏世界はどうなったんだぁ…？」

ファンロンモン「心配ない。裏世界のデジタルワールドは平和となった…。」

リュウ「そうか…。」

リュウは安心したのか、微かに笑う。

ファンロンモン「何かやり残した事があったのか？」

リュウ「別にそんなんじゃねぇよ…。ところで、俺をここへ呼び出しといて一体何の用だ？」

ファンロンモン「お前を呼び出したのは我ではない…。」

リュウ「はぁ？」

？？？「俺だ…。」

その時、リュウの前にイグドラシルが現れる。

リュウ「どわっ！？脅かすなよテメェ！？マジでビビったじゃねぇかぁ！？」

イグドラシル「貴様をここへ呼び出したのは他ではない…。貴様が電脳核に入ってから、現実世界は約二年が経った…。」

リュウ「マジでか！？二年も経ったのかよ！？」

イグドラシル「デジタルワールドと現実世界は時間差が激しいのは貴様も知っているだろうが…？時を侮るな…。」

リュウ「マジかよ…。向こうの世界は大丈夫だろうか…？」

イグドラシル「先程も言ったように、バロムモンの狙いはＥＸコア。容赦なく貴様とリュウギに襲いかかるだろう…。そこでだ…」

リュウ「何か手はあるのか…？」

するとイグドラシルはリュウに近寄り、耳元で囁く。

リュウ「んな！？それ、マジで出来るのかよ…？」

イグドラシル「あぁ…。やるかどうかは貴様次第だ…。」

リュウ「なるほどな…。いいぜ、やってやるよ…。」

イグドラシル「よかろう…。ファンロンモン、頼む。」

ファンロンモン「うむ…。」

ファンロンモンの持つ12個のデジコアがリュウとイグドラシルを包み込む。

リュウ（どうやら、俺の物語もまだ終わっちゃいねぇみたいだな…。）

リュウはイグドラシルと共に光の中へと消え去るのであった。

～追憶の絆篇～　【完】

次回、ついに新章始動!!

それぞれの決意を胸に修業を経たリュウギ達は…。

次回からの新章をお楽しみに!!

ＥＰ９７　～動き出した時間！仲間との再会～（前書き）

～闇の世界　ダークエリア～

？？？「まさか、サタンファントモンがやられるなんてねぇ…。」

女性らしきデジモンはクスクスと嘲笑う。

？？？「相手が悪かったのだ…。何せ相手は神とデジタルワールドの英雄…。我に掛かれば片手で一捻りだ…。」

女性らしきデジモンとは別に、ドラゴンの姿をしたデジモンが言う。

すると、白銀の髪をした一人の青年が口を開く。

？？？「過ぎた事を拘った所で何になる、バハムーモン？俺達はバロムモン様を蘇らせることだけ考えてればいいのだ…。」

バハムーモンと呼ばれるデジモンはゆっくりと頷く。

バハムーモン「そんなもの百の承知だ…。」

するとそこへ、ダークスの一人、ヴルグモンが現れる。

ヴルグモン「バハムーモン様、デジタルワールドの英雄によって封印されたゲートがようやく開かれました…。」

バハムーモン「ご苦労…。直ちにダンケルハイドを開いて配下達を送り込め。始めは現実世界にいる標的からＥＸコアを奪い取れ…。」

ヴルグモン「バハムーモン様の意のままに…。」

ヴルグモンは御辞儀をした後、闇の中へと消え去った。

？？？「準備しろ、バハムーモン。俺達も行くぞ。」

青年は立ち上がると、女性らしきデジモンが手を広げて止める。

？？？「ねぇ、今回はアタシにやらせてくださらない？」

バハムーモン「なに？なぜだ？」

？？？「理由必要かしら？アタシはただ、アレを使ってじっくりと楽しみたいだけなの…。」

？？？「……。」

すると、白銀の青年はフンと鼻を鳴らす。

？？？「まぁいい。好きにしろ…。」

バハムーモン「しかし…！？」

？？？「お前は言っても聞かないからな…。」

？？？「あら、解ってるじゃないの…♪」

？？？「だが、うっかりして壊すなよ…。」

？？？「あら？アタシはあなた達みたいにすぐ壊すタイプじゃない

のよ…？アタシはじっくり楽しんだ後に、こ・わ・す・の…？それじゃあねぇ♪」

女性らしきデジモンはクスクスと笑いながら闇の中へと消え去った。

バハムーモン「いいのか…？」

？？？「今更焦って何になる…？それに、ゲートが封鎖されて二年の時を経た…。奴らがどんなに成長したか、じっくり拝見させて貰うよ…。」

白銀の青年はそう言って不気味に笑う。

？？？「夢は時間を裏切らない…。あなたの言葉がやっと理解したよ、先生…。」

ついに新章始動！！

長い修行を経たリュウギ達は…！？

そしてバロムモンの忠誠を誓う組織、イモータルの野望を阻止する事ができるのか！？

第６章　～エクセリオン再始動！！深海の女神篇～スタート！！

＞ｉ３４８０１―１２９８＜

【挿絵：トリプルミーミング】

EP97　～動き出した時間！仲間との再会～

リュウギ（強くなってみんなを守るんだ…。かつて父さんがそうしたように…。小関　リュウギとして強くなるんだ！！）

決意を胸にするリュウギ達。そしてついに、厳しい修行から約二年の時が流れた…。

～有野北高校～

落ち葉が舞い散る飽きの季節。生徒達は受験に備え、教室で猛勉強をしていた。

しかしそんな中、1人の少女だけが勉強をせず、窓から見える景色をボーッと眺めていた。

？？？「あれから二年、かぁ…。」

橙色の髪をした少女は小さくため息をつく。その時、背後からトンと背中を押された。

橙色の髪をした少女は振り向くと、クラスメイトのアカネだった。

アカネ「どうしたのよミソラ、ボーッとしちゃって？」

ミソラと呼ばれる少女は小さくため息をつく。

ミソラ「なんだアカネか…。別に何でもないわよ…。」

ミソラは冷たい態度を取ると、アカネは膨れっ面になる。

アカネ「なんだって何よー！それよりミソラ、今日転入生が来るみたいだよ！」

ミソラ「転入生？この時期に転入生っておかしくない？」

アカネ「たしかにそうなのよね～。みんな受験に備えて勉強の真っ最中なのにね～。ひょっとしてアレじゃない？思い出作りとか…。」

ミソラ「思い出作りのために転校？バッカみたい…。それってチャンポラン以外何者でもないじゃないの…。」

アカネ「確かに…。ボーッとしてないで、受験に備えて勉強しなさいよ～！」

ミソラ「んな！？余計なお世話よ！」

ミソラは怒るとアカネはキャ～と言って逃げていった。

ミソラ「全くもう…。」

その時、上の階から騒がしい事に気付く。

ミソラ「ん？二階から騒がしいわね…。どうしたのかしら？」

ミソラは上の階へと向かう。

ーーーーーーーーーーーーーーー

～二階～

不良の生徒が男子生徒の胸ぐらを掴んでギロリと睨む。

男子生徒「ひぃ！？」

？？？「おうおうおう？この轟様にぶつかるとは、いい度胸してんじゃねぇかテメェ？」

すると、男子生徒は言葉を詰まらせる。

男子生徒「だ、だだ、だって、ぶつかって来たのは、き、きき、君じゃないか…。」

轟「面白ぇ。ちょっと面貸せや…。屋上でたんまりと説教してやるよ…♪来い！」

男子生徒「ひぃ！？お助け！？」

男子生徒はたすけを求めるが、周りの生徒達は見て見ぬ振りをする。

轟「オラァ！こっち来い！」

轟は男子生徒を連れて屋上へと向かった。するとそこへ、ミソラが二階に上がって来た。

ミソラ「どうかしたの？」

女子生徒「轟が突然学校に来て、二年生を連れて屋上に…。」

ミソラ「あのバカ…。性懲りもなく出てきたわね…。」

ミソラは拳をギュッと握り締めると、右手首にはめてあるＤ－アクセルから声が聞こえてくる。

？？？「ダメだミソラ…。あまり人前で力を見せてはいけない…。」

ミソラ「確かにそうよレナモン…。でも、このまま放っておくわけにはいかないのよ！」

レナモン「……。」

ミソラは男子生徒を助けに屋上へと向かおうとすると、レナモンが叫ぶ。

レナモン「待ってミソラ！？」

ミソラ「今度はなによ？」

レナモン「屋上からデジモンの気配を感じる…。」

ミソラ「なんですって！？」

レナモン「それだけじゃない…。懐かしい…。」

ミソラ「懐かしい？よく分からないけど急ぎましょ！」

ミソラは急いで男子生徒を助けに屋上へと向かった。

その時、黒い影がミソラ達の会話を盗み聞きしていた。

？？？「懐かしい、か…。」

？？？「帰ってきたんだな…。」

？？？「あぁ…。オレ達も行きやすぜ。」

黒い影は急いで屋上へと向かった。

～屋上～

轟「オラァ！」

轟は男子生徒を殴り飛ばす。

男子生徒「うっ！？」

轟は男子生徒の胸ぐらを掴む。

轟「ぶつかったら誤るのが礼儀だろうがぁ？テメェ、常識ってもんがねぇのか？」

男子生徒「ご、ごめんなさい…。僕は受験があるんだ…。だから見逃してくれ…。」

轟「俺様に楯突いたから容赦しねぇ…。もうじきダチがここにくる。その時は覚悟するんだな…♪」

男子生徒「そ、そんな…！？」

轟「ひゃーひゃっひゃひゃっ…♪」

その時、背後から青年が轟の背中を蹴り押した。すると轟は勢いの余り、壁に顔面強打した。

轟「ぐえっ!?」

男子生徒「あ…。」

??「悪りぃ×2。ぶつかっちゃったかぁ？（棒口）」

轟は顔面を押さえながらゆっくりと起き上がる。

轟「な…、何しやがんだテメェ…?」

すると、青年は頭をポリポリとかきながら口を開く。

＞i34802―1298＜

【挿絵：トリプルミーミング】

轟「あぁん?見ない顔だな?ははーん分かったぞ。お前、噂の転入生だな?」

リュウギ「そうだけど何か?」

轟「ハッハッハ!!だったらしょうがねぇ。この学校は、この俺様が仕切ってんだよ!名付けて、天下の轟とは俺様の事だ。」

リュウギ「ふーん、そうなんだ。」

轟「分かったら土下座しろ。特別に見逃し…」

リュウギ「要するにアレか。お山の大将気取りの番長さんって奴かぁ？つうかさぁ、いまどきの時代にヤンキーごっこは流行んねぇと思うぞ…。」

轟「なぁに？」

轟はリュウギの言葉にイラっとし、ギロリと睨む。

男子生徒「ダメだよ君！？早く逃げないと殺されるよ！？」

リュウギ「それとそのなんだっけ？天下の轟ってベタじゃね？車３つのガキ大将の方がお似合いだと思うぞ。」

男子生徒（言ってはいけない事を言っちゃったよこの人ぉぉぉぉぉぉ！？）

轟「ブッ殺す…。覚悟しやがれこのガキがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

轟は拳をパキパキと鳴らした後、殴りに掛かる。

男子生徒「危ない！？」

リュウギ「……。」

その時、リュウギは軽く轟の攻撃を受け流した。

轟「んな！？」

男子生徒「え！？」

リュウギ「おい、こっちは鬼ごっこしてるんじゃねぇぞ…。さっさと来いよ…。」

轟「舐めやがって…。うおりゃやややややややや！！」

轟は懐からナックルダスターを取り出して拳に装着し、再びリュウギに襲いかかる。

リュウギは表情なに一つ変えず、ヒラリと横に交わして轟の足を払う。

リュウギ「チョイっと。」

轟「どわっ！？」

轟は勢いよく転けた。

リュウギ「ったく、そんな物騒なもん振り回してんじゃねぇよ…。」

轟「クソッタレが…。ちょこまかと逃げやがって…。逃げてねぇで素直に当たりやがれ？」

リュウギ「それ、どういう理屈なの…？」

リュウギは呆れた目でツッコム。

轟「死ねぇぇぇぇぇぇ！！」

轟はナックルダスターを装着した拳で再びリュウギに襲いかかる。

リュウギ「しゃーねぇ…。アンタが逃げるなって言うんなら…。」

リュウギは片手一本で轟の腹に強烈なパンチを喰らわした。

轟「ぐほっ!?」

轟は腹を押さえながらうずくまる。

リュウギ「いけね本気出しちまった…。悪りぃ…。」

その時、屋上のドアから数人の不良生徒が現れ、リュウギは不良達に包囲されてしまう。

リュウギ「ん?」

轟は腹を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

轟「ぐへへへ…、俺様を敵に…回したな…?今すぐ血祭りに上げてやるから覚悟しやがれ…。」

リュウギ「やってみろよ…。どんなヤツだろうが、俺は逃げも隠れもしねぇぜ…。」

（ニヤッ…）

リュウギは拳をパキパキと鳴らした後、地面に転がってる木の棒を拾って肩に担ぐ。

リュウギ「今すぐお休みタイムと行きたいところだが、ストレス発

散天下一武闘会も悪くねぇなぁ…。来いよ。」

轟「やっちまえ！」

轟が叫ぶと、子分達は一斉にリュウギに襲いかかる。リュウギはヒラリと交わして行きながら木の棒で殴り倒していく。

リュウギ「そういやぁ、今日のめ◯ましテレビの星占い12位だったなぁ…。明日からおはよう◯日の星占いにすっかぁ…。」

リュウギは全く関係ない事を考えながら、木の棒で次々と子分達を倒していく。

轟「んなっ！？」

男子生徒「す、凄い…！？」

すると、バットを持つ子分が容赦なくリュウギに襲いかかる。

リュウギは木の棒でガードするが、呆気なく折れてしまった。

子分「へへ…。」

リュウギ「あ～あ。折れちまったよ…。」

その時、二本の鉄のパイプがリュウギの前に転がって来る。

リュウギ「ん？」

（この鉄パイプ、何処から出て来たんだ？）

子分「なに余所見してんだよ！」

子分は容赦なくリュウギに襲いかかる。すると、リュウギは足で鉄のパイプを蹴り上げて自分の手に渡り、バットと鍔競り合う。

子分「なに！？」

リュウギ「バットはなぁ、人を殴るためにあるものじゃねぇんだよ…。そいつは…」

すると、リュウギは片足でもう一本の鉄パイプを蹴り上げてもう片方の手に渡り、二刀流になる。

リュウギ「ボールを打つためにあんだよぉぉぉぉぉぉ！！」

リュウギはもう片方の鉄パイプで子分を殴り飛ばした。

子分「ぐはっ！？」

子分Ａ「な、なんだアイツは！？」

子分Ｂ「バケモノか！？」

轟「怯むな！相手は一人だ！殺れ！！」

リュウギ「こっちとら東京からの夜行で疲れてんのによぉ…。」

リュウギは鉄パイプを起用に使いこなし、目にも止まらない早さで子分達を殴り飛ばした。

子分達「ぐはぁぁぁぁぁぁ！？」

リュウギ「ゆっくり眠らせてくれってんだよ…。」

轟「ぬわにぃ！？」

リュウギはそのまま轟に接近し、目にも止まらない早さで轟を殴り飛ばした。

轟「ぎょわぁぁぁぁぁぁぁ！？」

リュウギは鉄パイプを振り回した後肩に担つぐと、轟は力尽きて倒れる。

リュウギ「ゴロツキ共が俺に勝とうなんざ、百億万年早ぇんだよ…。出直して来な…。」

リュウギはパイプをポイと投げ捨てた後、男子生徒の所へと駆け寄る。

リュウギ「おい、大丈夫かぁ？」

男子生徒「あ、ありがとう…。」

リュウギ「急いで保健室に行くぞ…。」

男子生徒「う、うん。」

リュウギは男子生徒の肩を借りようとしたその時だった。

？？？「相変わらずの暴れるっぷりですなぁ～、リュウ兄♪」

リュウギは振り向くと、頭のてっぺんにアホ毛を持つ緑髪の青年、カズマがいた。

リュウギ「んな、カズマ！？」

カズマ「一年ぶりでさぁ、リュウ兄♪」

カズマはニタッと笑いながら手を振ると、突然リュウギがカズマの元へと駆け寄る。

リュウギ「テメェ、こんな所で何してんだよ…？」

リュウギは眉をピクピクと動かしながらカズマのアホ毛をガシッと掴む。

カズマ「ちょっとタンマタンマ！？早まらないでくだせぇリュウ兄？ど、どうしたんでさぁ…？」

リュウギ「どうしたもこうしたも、師匠（せんせい）の修行をすっぽかしてから一年の間、何やってんだって聞いてんだよ…？」

カズマは目を泳がせながら口を尖らせる。

カズマ「だ、だって～。超キツイんだも～ん…。」

リュウギ「その喋り方、腹立つからやめろ…。アンテナ引きちぎられてぇのかテメェは…。（怒）」

カズマ「待ってくだせぇ！？さっき助けたじゃありやせんか！？」

リュウギ「助けた？なるほど、あの鉄パイプはお前の仕業だったんか…。」

カズマ「そそっ！だからほら、おあいこと言う事で勘弁してくだせぇ～。」

リュウギ「ったく、しょうがねぇなぁ…。」

リュウギは仕方なく手を離した。

リュウギ「久しぶりに楽しめそうかと思ったけど、ストレス発散にもなりゃしねぇ…。」

カズマ「それはさておき、厄介もんがもうすぐここに来やすから逃げてくだせぇ。オレはコイツを保健室に連れて行きまさぁ…。」

リュウギ「厄介もん…？だれだよそれ？」

カズマ「そいじゃ、また後で！」

カズマは男子生徒を連れ、裏口から出て保健室へと向かった。

リュウギ「なんだアイツ？」

すると、リュウギのＤ－アクセルから声が聞こえてくる。

？？？「どうしたんだよ朝っぱらから…？」

リュウギ「悪りぃ、起こしちまったな、ナルガモン。」

ナルガモン「また喧嘩やったのかぁ？」

リュウギ「しょうがねぇだろ？向こうから喧嘩売って来たんだからよぉ…。」↑自分から仕掛けた

すると、入り口から足音が聞こえてくる。

リュウギ「ヤベッ、誰か来る！？」

ナルガモン「ヤベェぞリュウギ！？この事をもし誰かに知られたら、転校どころじゃねぇぞおい！？」

リュウ「厄介もんって先生の事か…。つうか一般生徒に知られてるしッ！？仕方ねぇここ一旦逃げるか！」

リュウは急いで裏口から逃げていった。するとそこへ、ミソラが屋上へと上がって来る。

ミソラ「ハァ…ハァ…。え？」

ミソラは辺りを見回すと、轟や子分達が倒れていた。

ミソラ「一体誰が…？レナモン、どう？」

ミソラは問うと、Ｄ－アクセルの中にいるレナモンは答える。

レナモン「ダメだ…。いつの間にか気配が消えている…。」

ミソラ「そう…。それより男子生徒の姿が見ないわ…。」

レナモン「おそらく、逃げ切ったのだろう…。」

？？？「一足遅かったか…。」

ミソラは振り向くと、ヘアバンドを巻いている青髪の青年、カイがいた。

ミソラ「カイ…。もしかしてあなたも…？」

カイ「あぁ。ガオモンが気配を感じたからここへ来た…。一体誰がこんな事を…？」

ミソラ「分からないわ…。」

カイ「逃がしたか…。しょうがない。ミソラ、そろそろチャイムが鳴る。早く教室へ戻るぞ…。」

ミソラ「えぇ…。このバカ共から聞きたいけど、完全に気絶しちゃってるから仕方ないわ…。」

ミソラとカイは急いでそれぞれの教室へと帰っていった。

～3年4組　教室～

キーンコーンカーンコーン…♪

山口「みんな、知っての通りこのクラスに新しい仲間が来る…。」

すると、教室内の生徒達はざわめく。

男子「一体どんなヤツなんだろ？（小声）」

女子「男子らしいよ？楽しみ～♪（小声）」

ミソラ「……。」

（一体誰が…？まさかバロムモンの手下じゃ…？）

そんな中、ミソラは一切興味なく、むしろ先ほどの事で頭がいっぱいだった。

山口「静かにしろ。んじゃ、入って。」

教室のドアをガラガラと開けた途端、生徒達は驚愕する。

一同「あ！？」

ミソラはチラッと見ると、思わず唖然とする。

ミソラ「え…？」

リュウギ「ど、どうも～…。」

リュウギは冷や汗をかきながら入ってくる。

山口「二年前、この学校にいた、小関　リュウギだ…。家庭の事情で再びこの学校に転入…というか戻ってきた、て言った方が正しいか…。みんな、仲良くしてやってくれ。」

ミソラ（なんで…！？なんでリュウギがここに…！？）

山口「ところで小関、なんでそんなに焦ってるんだ？」

リュウギ「え、あ、べ、別になんでもないッスよ！？あは、あははは～♪（焦）」

リュウギは先ほど屋上で喧嘩してた事をバレないように誤魔化す。
生徒達はざわめき始める。

男子A「おい、御縞ってあんなキャラだったっけ…？（小声）」

男子B「名前変わったからイメチェンとか…？（小声）」

女子「なんだか雰囲気変わったよね？（小声）」

リュウギ（よ、よし…。とりあえずバレてないな…。）

リュウギは心の中でホッと安心する。

山口「はいはい静かにしろ。小関、足立の隣の席空いてるからそこへ。」

リュウギ「は、はい。」

リュウギはミソラの隣に座ると、そっと声を掛ける。

リュウギ「よっ、久しぶりだな。（小声）」

ミソラ「久しぶりじゃないわよ…。ど、どうしたのよ急に…？（小

声）」

リュウギ「ま、色々と訳ありでな…。（小声）」

ミソラ「訳ありって何よ…。私、心配したんだから…。（小声）」

涙目になるミソラ。すると、リュウギはうつむく。

リュウギ「悪りぃな、心配かけちまって…。（小声）」

ミソラ「！？」

リュウギ「ま、詳しい事は後で話すよ…。だから泣くなよ。な？（小声）」

ミソラ「う、うん…。」

（リュウギ、見ない間に逞しくなったね…。）

山口「え～、隣のクラスにいた轟が、なぜか知らんがボロボロになってた…。」

その時、リュウギはビクッと反応し机がガタンと音を鳴らす。

少しざわめく教室が突然と静まり返った。

山口「ど、どうしたんだ小関…？」

リュウギ「え、あ、な、何でもないですぅ～！」

リュウギは笑って誤魔化すと、先生は無理矢理話を戻す。

山口「あっそ。ま、校内で暴力を振るったのは事実だからしばらく自宅謹慎になりました。それから…」

リュウギ（び、ビックリしたぜおい…。バレたかと思った…。（激汗））

リュウギはバレてないと心の中でホッと安心する。ただし、ミソラはそれを見抜いていた。

ミソラ（ふーん、そういうことねぇ…。）

ー昼休み。

キーンコーンカーンコーン…♪

山口「今日はここまでだ。気をつけて帰れよ。」

山口はそう言って教室から退室する。

アカネ「ねぇミソラ！お昼ご飯どうする？」

ミソラ「え？そうねぇ…。」

ミソラは腕を組んで考えると、ふとリュウギが教室から出て行く事に気が付く。

ミソラ（リュウギ…？）

アカネ「ねぇ聞いてるの？」

アカネの言葉にミソラはハッとする。

ミソラ「え?あ、ごめん。私、リュウギと一緒にご飯食べるわ。ごめんね！」

ミソラはカバンを持ってリュウギの後を追う。

～屋上～

リュウギ「はぁ～…、眠い…。」

リュウギは深くため息をついた後、購買で買ったコーヒー牛乳を飲む。

ナルガモン「おいおい、ため息ばっかしてると幸せが逃げていくぜリュウギ?」

ナルガモンは慰めると、袋から焼きそばパンを取り出して食べる。

リュウギ「んなもん朝っぱらから逃げてるっつうの…。なんで今日に限って12位なんだよ…?」

ナルガモン「まぁたまにはそういう時もあるさ…。」

リュウギ「いいよなぁお前。俺は必死で授業と戦ってるのに、お前はず～っとD－アクセルの中で寝やがってよぉ…。」

ナルガモン「ただ寝てるわけじゃねぇぜ?美容と健康のために寝てる！」

リュウギ「どっちも同じじゃねぇかぁ!?つうかテメェは寝過ぎなんだよ!?」

リュウギはありったけの声でツッコム。

ナルガモン「焼きそばパン美味ぇ♪」

ナルガモンは幸せそうな顔をしながら焼きそばパンを頬張る。

リュウギ「ったく、幸せもんだなぁお前…。ま、朝の事件の事はバレてねぇからこれでよし、だな…。」

リュウギは安心してホッとした後、コーヒー牛乳をグビグビと飲む。

??「ふーん、やっぱり轟をやったのはアンタだったんだぁ?」

リュウギ「ブフゥーッ!?」

リュウギは思わずコーヒー牛乳を吐き出した後、振り向くとミソラとレナモンがいた。

ナルガモン「ミソラ、それにレナモン!?」

レナモン「元気そうでなによりだな…。」

リュウギ「ゲホッ、ゲホッ!な、なんで知ってんだよ!?」

ミソラ「あんなにテンパってたら猿でも分かるわよ…。危うく転入拒否される所だったのよ?」

レナモン（コクリ…）

リュウギ「だってしょうがねぇだろ？仕掛けてきたのはあの野郎だし…。それに、俺はどんな相手だろうが逃げも隠れもしない。それが俺の…」

ミソラ「流儀だ！でしょ？」

リュウギ「そういうこと！だからミソラ、今回のはなかった事で頼む！」

リュウギは両手を合わせてお願いする。

ミソラ「もう、しょうがないわね…。」

リュウギ「ありがとな♪」

ミソラ「それよりリュウギ、お母さんは…？」

リュウギ「母さんはしばらく師匠の所で見てもらってる。記憶がまだ戻ってねぇからさ…。」

リュウギはそう言ってコーヒー牛乳を飲む。

ミソラ「そうなんだ…。」

リュウギ「ところでミソラ、改めて言うけど、二年前のとき勝手な事して悪かったな…。」

リュウギは深刻な顔して言うと、ミソラは顔を赤らめる。

ミソラ「べ、別に気にしてないわよ！あの時は突然で仕方なかったんだから…。」

リュウギ「でも、もう会えないって思っただろ…？」

リュウギは真剣な顔して質問すると、ミソラはうつむき、ゆっくりと頷く。

ミソラ「……うん。でも、私の隣にいるからもういいの…。」

ミソラはそう言ってリュウギの手をギュッと優しく握る。

リュウギ「ミソラ……。」

？？？「いやぁ～、お二人さん、あれから二年経ったのに随分と仲が良さそうですなぁ～。」

リュウギ・ミソラ「ドキッ！？」

リュウギとミソラは振り向くと、カズマとネレイスモンがいた。

ナルガモン「ネレイスモン！久しぶりだな♪」

ネレイスモン「よっ、ジャックモン♪」

ナルガモン「だからジャックモンじゃねぇっつうの！？」

リュウギ「カズマ、テメェ…。」

ミソラ「何の用よ…？」

リュウギとミソラは眉をピクピクとさせながら言う。

カズマ「まぁまぁ、せっかくの再会なんですから今日はパーッとしましょうや♪」

リュウギ「やかましわ…。そんなヒマがあるならさっさと東京に帰れ。師匠、かなり怒ってたぞ…。」

カズマ「オ、オレは帰りやせんよ…。」

ミソラ「どういう事なの？まさか親に何も言わず飛び出したの！？」

ナルガモン「そのまさかだ。」

リュウギ「しかも、俺一年間と一緒に修行したのに、途中から嫌になって逃げ出しやがった…。」

ミソラ・レナモン「……。」

リュウギ達は一斉にカズマを見つめ、一言ずつ言う。

リュウギ「無難男…。」

ナルガモン「投げ出し野郎…。」

ミソラ「最低…。」

レナモン（コクリ…）

カズマ「なにその冷たい眼差し!?酷くなぁい!?」

ネレイスモン「だからやめとけって言ったのに…。」

ネレイスモンは小さくため息ついた後、肉まんを頬張る。

ネレイスモン「おいひっ？」

カズマはリュウギ達のキツーイ言葉のナイフが胸に突き刺さったため、ガックリとうな垂れる。

リュウギ「ところでカイは?」

ミソラ「カイなら先に帰ったわ。」

リュウギ「帰った?アイツやけに帰るの早いな?」

レナモン「カイなりにやる事があるのさ…。」

リュウギ「?」

ナルガモン「残念だなぁ…。せっかく犬ッコロをからかってやろうと思ってたのによぉ…。」

ミソラ「からかうってアンタねぇ…。」

ナルガモン「冗談だって、ナッハハハハハ♪」

ナルガモンは高らかに笑うとその時、ナルガモン達は何か気配を感じる。

ナルガモン・レナモン・ネレイスモン「!?」

ミソラ「どうしたのレナモン?」

レナモン「闇の気配を感じる…。」

ミソラ「え…?」

ネレイスモン「しかもかなり近いぜ…。」

リュウギ「ナルガモン、方角は!?」

ナルガモン「あっちだ…。」

ナルガモンは北の方角へと指を差す。リュウギ達はおたがいに目を見合わせて頷く。

リュウギ「ついに動き出したか…。行くぞ!」

一同「あぁ?」

リュウギ達は急いで北の方角へと向かうのであった。

ー-To Be Continued・・・・

ＥＰ９７　～動き出した時間！仲間との再会～（後書き）

仲間との再会を果たしたと思いきや、突然のトラブルが！？

次回、リュウギ達の修行の成果が発揮される？

次回もお楽しみに？

Ｅｐ９８　～謎の敵現る！？見せろ修行の成果？～（前書き）

今回は謎の敵出現！？

厳しい修行に耐えた成果を見せろ？

Ｅｐ９８スタート？

EP98　～謎の敵現る！？見せろ修行の成果？～

～栗ノ木谷公園～

闇の気配を感じ、気配を辿っていくリュウギ達は学校の側にある公園へと辿り着く。

リュウギ「ここって公園じゃねぇか？」

ミソラ「レナモン、何か感じる？」

ミソラはＤ－アクセルの中にいるレナモンに聞く。

レナモン「間違いない。ここから気配を感じる。」

その時、リュウギは上を見上げると、思わす驚愕する。

リュウギ「おいおい、マジかよ…。」

ミソラ達もつられて上を見上げると、青空ではく紅と闇が混じったような空になっていた。

ミソラ「何なのよアレ？一体どうなってるの…？」

すると、カズマが何かを発見して指をさして叫ぶ。

カズマ「リュウ兄、アレを見てくだせぇ！？」

リュウギとミソラは前を見ると、闇の空間が現れる。

リュウギ・ミソラ「!?」

すると、闇の空間から漆黒に包まれた騎士型のデジモンが三体現れる。

カズマ「なんだアイツらは!?」

ミソラ「見た事ないデジモンだわ…。」

リュウギはＤ－アクセルでデータ読み取る。

Ｄ－アクセル「バロムナイトモン、完全体、騎士型、ウィルス種、必殺技はデビルスレイド。」

＞ｉ３５１１０－１２９８＜

【デザイン：トリプルミーミング、データ：支配者】

リュウギ「なるほどな…。つまりアイツらはバロムモンの手下か…。」

ミソラ「どうしてバロムモンの手下がここにいるのよ!?」

リュウギ「目的は一つしかねぇ…。俺の持つＥＸコアだ…。」

ミソラ「二年前、コウジさんが言ってたデジタルワールドを救う鍵のこと…？」

リュウギ「そーいうこと。」

カズマ「んな呑気なこと言ってる場合じゃありやせんよ…。こっち来やすよ！？」

三体のバロムナイトモンは剣を取り出して、刃先をリュウギ達に向けた。

リュウギ「行くぜみんな？」

ミソラ「えぇ？」

カズマ「了解でさぁ？」

リュウギ達はＤ－アクセルを取り出してそれぞれのパートナーデジモンを呼び出そうとしたその時、バロムナイトモン達の眼光を鋭く光らせた。

リュウギ・ミソラ・カズマ「リロード？」

しかし、Ｄ－アクセルは何も反応しない。

カズマ「あり？リロード！リロード？」

カズマは何度も叫ぶが、それてＤ－アクセルは何も反応しない。

ミソラ「え！？どうして出てこないの！？」

すると、Ｄ－アクセルの中にいるレナモンが口を開く。

レナモン「私にも分からない！？」

ナルガモン「おいどうなってんだよリュウギ！？」

リュウギ「知らねぇよ！？むしろこっちが知りてぇよ！？」

その時、三体のバロムナイトモンは容赦なくリュウギ達に襲い掛かる。

一同「くっ！」

リュウギ達は素早く横へと回避した。

リュウギ「クソ、こうなったら俺達だけでも倒すぞ！」

カズマ「それしかありやせんね…。」

カズマは肩にぶら下がってる刀袋から双龍牙を取り出す。

リュウギは右手をゆっくりと前に差し出すと、大剣　セイクリッド・レインティアが現れる。

ミソラ「その剣はエグザの！？」

リュウギ「あぁ…。コイツは父さんの形見だ…。行くぜ？」

リュウギはセイクリッド・レインティアを振り上げるように振ると，剣風によって生み出された衝撃波を放つ。

バロムナイトモンはとっさに剣で衝撃波を防ぐが、力負けして怯む。

ミソラ「凄い…。」

カズマ「見とれてる場合じゃありやせんぜミソ姉。来やすぜ！」

二体のバロムナイトモンは容赦なくミソラとカズマに襲い掛かってくる。

カズマ「秘技…、『双牙刃？』」

カズマは双龍牙を振り下ろすと、剣風によって生み出された二つの衝撃波を放つ。しかし攻撃を交わされてしまい、一体のバロムナイトモンがカズマに剣を振り下ろす。

カズマ「くっ！？」

カズマは双龍牙を横にして刃と刃がぶつかり合う。

カズマ（なんて早さなんでぃ！？）

カズマは力で押し返すと、バロムナイトモンはバク転して体勢を立て直す。

その時、もう一体のバロムナイトモンがミソラに襲い掛かる。

リュウギ「ミソラ！？」

リュウギは助けに行こうとするが、一体のバロムナイトモンがリュウギの行く手を阻む。

リュウギ「くっ、邪魔だ！」

その時ミソラは逃げる素振りを見せず、拳に集中させて低く構える。

ミソラ「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

ミソラはありったけの力でバロムナイトモンを殴り飛ばし、木に叩き付けた。

それを見たリュウギ達は唖然とする。

一同「……え？」

ミソラ「甘く見ないでよね！私も二年の間、タツキさんのところで修行して強くなったんだから！」

ミソラはそう言って拳ビシッと前に突き出した。するとＤ－アクセルの中にいるレナモンは腕を組んで頷く。

レナモン「うむ、修行の成果が出たようだな…。」

ナルガモン（おいおい、なんつぅ馬力してんだよ…。）

リュウギ（一体どんな修行してんだアイツ…。）

カズマ（あんなミソ姉、始めて見やした…。）

ネレイスモン（ミソラの前でバカな真似はやめよう…。もし逆らったら…）

リュウギ・ナルガモン・カズマ・ネレイスモン（殺される…。）

リュウギ達の背筋が凍り付き、ゴクリと息を呑み込んだ。

すると、ミソラに殴り倒されたバロムナイトモンはゆっくりと立ち上がる。そして残り二体のバロムナイトモンの所へと戻って体勢を立て直す。

リュウギ「クソッ、どんだけタフなんだよコイツら？」

カズマ「こりゃ、ちとヤバそうだな…。どうしやす？」

すると、リュウギはセイクリッド・レインティアを前に突き出した。

ミソラ「リュウギ…？」

リュウギ「俺はこの剣に誓った…。もう誰にも失わせないと…。そのためにこの二年間、厳しい修行に耐えて来たんだ…。」

すると、リュウギのＤ－アクセルの中にいるナルガモンが感づく。

ナルガモン「リュウギ、まさかアレをやるのか？」

カズマ・ミソラ「アレ？」

リュウギ「見せてやるよ…。俺の本気を！うぉぉぉぉぉぉぉ？」

リュウギは唸り声を上げると、体から光のオーラが溢れ出す。

ミソラ「この光？まさかキズナドライブ！？」

レナモン「いや、キズナドライブとは桁違いだ…。この光はまさか

！？」

リュウギ「ＥＸモード、発動？」

リュウギは高らかに叫ぶと、凄まじい光のオーラが溢れ出す。

ミソラ「どうしてリュウギがＥＸモードを！？」

カズマ「まさか、コアの力か！？」

光が止むと、リュウギの身体には聖なる光を纏っていた。

リュウギ「さぁて、行くぜ…。」

リュウギはセイクリッド・レインティアを地面に突き刺すと、二つに分裂となって二刀流となる。

三体のバロムナイトモンはリュウギに襲い掛かると、リュウギは一瞬にして姿を消した。

バロムナイトモン達「！？」

ミソラ「消えた！？」

リュウギ「こっちだ…。」

バロムナイトモン達は振り向くと、二刀流　セイクリッド・レインティアをクロスにして構えていた。

リュウギ「喰らいやがれぇぇぇぇ？」

リュウギは目にも止まらない早さでバロムナイトモン達をX状に斬った。

バロムナイトモン達「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

バロムナイトモン達はセイクリッド・レインティアの餌食となって跡形もなく消滅すると、闇に染まった空もやがて青空へと戻った。

ミソラ「やったわ！？」

レナモン「凄い…。」

リュウギは地面に着地すると、ＥＸモードは解除される。すると、Ｄ－アクセルの中にいるナルガモンがはしゃぐ。

ナルガモン「やったなリュウギ！Ｊａｃｋ　ｐｏｔだぜ？」

リュウギ「あぁ。」

リュウギはセイクリッド・レインティアを地面に突き刺すと、Ｄ－アクセルの中へと納めた。

カズマ「やるじゃないですかぃリュウ兄♪まさか、ＥＸモードを使いこなせるなんてな♪」

ミソラ「これがリュウギの力…。」

リュウギ「あぁ…。この力でみんなを守るんだ…。」

その時、リュウギ達のＤ－アクセルから突然とナルガモン達が出てくる。

ナルガモン「え？出れたぞ！？」

ネレイスモン「やっほー♪出れた出れた～♪」

レナモン「これは一体…？」

ミソラ「変ねぇ。もしかしてＤ－アクセルの故障かしら…？」

カズマ「チゲェねぇや…。」

すると、リュウギは腕を組んで考える。

リュウギ「……だとしたら、なんで学校の時は普通に出せたのに、バロムナイトモンが出てきた途端、いきなり故障したんだ？明らかに不自然過ぎないか？」

ミソラ「確かに…。」

レナモン「リュウギの言うとおりだ…。今までこんな事は一度もなかった…。」

カズマ「つまり、あのバロムナイトモンがオレ達にリロードさせないようにやったってことですかぃ？」

リュウギ「おそらくな…。」

ミソラ「どうしよう…。このままだと周りの人達にも危害を加えて

しまうわ…。」

リュウギ「奴らの狙いは俺だ…。俺がデジタルワールドに行けば済む話だ。」

ミソラ「リュウギ…。」

リュウギ「それに、父さんはまだあの場所で眠っている…。奴らがゲートを抉じ開けたのなら、父さんが危ない…。」

ミソラ「どういうこと?」

カズマ「リュウ兄の親父も、リュウ兄と同じコア持ってるんでさぁ…。」

ミソラ「そうだったんだ…。」

リュウギ「悪りぃな。せっかく会えたのによ…。ま、お前らを危険な目に合わせるわけにはいかねぇからよ。んじゃ、ここは任せるぜ。」

リュウギは背を向けて歩き出そうとすると、ミソラに腕を掴まれる。

リュウギ「ミソラ…?」

ミソラ「なに言ってるのよ?勿論、私たちも行くわよ。」

リュウギ「はぁ?なに言ってんだよ?」

ミソラ「アンタこそ何言ってるのよ!私達に助けを求めないで一人

で解決しようとするなんて無茶にも程があるわよ！」

リュウギ「……。」

カズマ「要するに、一人でカッコつけるなって事でさぁ…。」

レナモン「ミソラとカズマの言う通りだ。私達はデジタルワールドの救世主だ…。ここで留まったら救世主とは言えない…。」

ネレイスモン「それに、オレ達はチーム、ブレイブエクセリオンだろ？」

リュウギ「お前ら…。」

ナルガモン「何度言っても無駄みたいだな、リュウギ。」

ナルガモンは腕を組んでリュウギを見ると、リュウギは小さくため息をつく。

リュウギ「ま、大体は予想してたけどな…。でもこれだけは言っておくぜ。絶対に…」

ミソラ「無茶するな！でしょ？」

リュウギが言う前に先にセリフを言われる。すると、リュウギは小さく笑う。

リュウギ「解ってるならそれでよし。それじゃ……」

リュウギは目で合図をすると、ミソラ達は目をキリッとさせてゆっ

くりと頷く。

リュウギ「デジタルゲート、オープン？」

リュウギ達はＤ－アクセルをまえに突き出すと、光の空間が開かれる。

リュウギ「行くぜお前ら？」

一同「おう？」

リュウギ達は決意を胸にし、デジタルゲートを潜るのであった。

～デヴァイス島　デジモンＪＥＴ～

ここは頼まれれば何でもやるよろず屋、デジモンＪＥＴ。するとそこへ、よろず屋の前に光の空間が開かれ、リュウギ達が現れる。

リュウギ「ここって確か、デヴァイス島じゃねぇか…？」

リュウギは辺りを見回す。するとナルガモンが突然叫んだ。

ナルガモン「お前ら、服が変わってるぞ！？」

リュウギ達は自分の格好を見ると、服装が変わっていた。

リュウギ「ホントだ！？カッコいいじゃねぇか♪」

ミソラ「凄く動きやすいわ♪」

カズマ「前よりいいじゃないですかぃ♪」

リュウギ達は自分の格好を見てそれぞれ感想を言う。

???「ホッホッホ。久しぶりじゃなお主ら。」

リュウギ達は振り向くとババモンがいた。

リュウギ「ババモン!?」

ミソラ「久しぶりね、おばあちゃん♪」

カズマ「チィーッス♪」

ババモン「しばらく見ない間、逞しくなったのぅ。」

リュウギ「あぁ。ところでババモン、俺達がここへ来たのは…」

リュウギが話そうとすると、ババモンは分かっているかのように口を開く。

ババモン「分かっておる…。あの空を見るがよい…。」

リュウギ達は空を見上げると、現実世界と同じような空になっていた。

一同「!?」

レナモン「ババモン、これは一体?」

ババモン「イビルスがいなくなってから一ヶ月後…。平和だった美しい空からあのような闇の空へと変わり果てたのじゃ…。」

リュウギ「まさか、バロムモンの仕業か…？」

ババモン「そうじゃ…。悪魔の神　バロムモンの好む闇の空、ダンケルハイドじゃ…。なんとも悪夢じゃ…。」

ミソラ「どうして平和なデジタルワールドに突然ダンケルハイドが出てきたの…？」

ババモン「太古の昔にダンケルハイドがこの地に出現すると、世界が滅亡するという恐ろしい説があったのじゃ…。それがなぜだか解るか？」

一同「……。」

ミソラ達は首を傾げる。するとリュウギが口を開く。

リュウギ「バロムモンが好む空…。つまり、バロムモンが降臨されるってことか？」

ババモン「そうじゃ…。」

レナモン「しかし、バロムモンは封印されている…。降臨されるのは不可能では…？」

カズマ「そうだよな。リュウ兄の持つＥＸコアが奪われない限り、奴は降臨すらできやせんぜ？」

ババモン「説にはそう書いてあった…。お主らの言う通り、バロムモンが封印されているのは確かじゃ…。」

ミソラ「だったらどうして！？」

リュウギ「奴の事だ…。何らかの組織を作ってＥＸコアを奪ってこいって指示をしたに違いねぇ…。」

ババモン「その通り…。バロムモンの忠誠に誓う組織。その名も『イモータル』じゃ…。」

一同「イモータル？」

ミソラ「イモータルを日本語で訳すと『永久。または不滅』という意味ね…。」

リュウギ「なるほどな…。つまりこの気味の悪い空はそのイモータルの仕業って事か…。」

ナルガモン「それじゃさっきのヤツらもそうって事だな…。」

ババモン「さっきとは？まさか襲われたのか！？」

ミソラ「えぇ。現実世界に現れたわ…。」

ナルガモン「ま、リュウギがあっさりと倒しちまったけどな♪」

リュウギ「ババモン、ヤツらが現実世界に現れた原因を知らないか？」

ババモン「そうじゃのぅ…。すまないがワシには分からぬ…。」

リュウギ「そうか…。」

その時、リュウギのペンダントが反応する。

一同「!?」

リュウギ「父さんのペンダントが反応してる!?」

その時、何処からか声が聞こえてくる。

???『ようやく戻ってきたか、リュウギよ…。』

リュウギ「誰だ!?」

ミソラ「ど、どうしたのよ急に…?」

ナルガモン「誰かがオレ達を呼んでたんだよ。聞こえねぇのか?」

カズマ「何か聞こえやしたかネレイスモン?」

ネレイスモン「さぁ?」

どうやら謎の声はリュウギとナルガモンだけにしか聞こえなかった。

すると、再び謎の声が聞こえてくる。

???『そなたとナルガモンと共に神殿の地下室に来い。そなたに大事な話がある…。待っておるぞ…。』

謎の声はそう言い残すと、やがて聞こえなくなった。

ナルガモン「神殿？それってまさか…。」

リュウギ「間違いない…。今すぐ行くぞ！」

リュウギとナルガモンはお互いに目を見合わせて同時に頷くと、支度をする。

ミソラ「ちょ、ちょっと何処いくのよ！？」

リュウギ「悪りぃ、ちょいと御偉いさんからの呼び出しがあってな…。」

ナルガモン「ちょっくら行ってくる！」

リュウギとナルガモンはそう言ってよろず屋から飛び出した。

ミソラ「な、何よ御偉いさんって…？」

カズマ「さぁ？」

その時、レナモンは腕を組んで口を開く。

レナモン「気のせいだろうか…？リュウギ、あれから雰囲気変わったな…。」

カズマ「変わったと言うよりか、戻ったって言った方が正解ですぜクールさん。」

ミソラ「え？リュウギって元々あの性格だったの…？」

カズマ「そうですぜ。昔は色々とヤンチャしてやしたぜ♪居残り授業サボって二人でよく遊んでやしたよ。」

レナモンは腕を組んで考え込む。

レナモン「う～ん…。想像できん…。」

ネレイスモン「もぅごめんなさいねぇ～。ウチの子ったら何回言っても聞かへん子なのよ～。」

カズマ「それ何処のお母さんなんでさぁ？つうか何で関西弁をチョイスしたの？」

ネレイスモン「何とな～く。」

ミソラ「……。」

そんな中、ミソラは1人でボンヤリしていた。

ミソラ（それじゃリュウギはずっと堪えていたんだ…。あの時からずっと…。）

それは、リュウギが神戸に引越ししてきた時まで遡る…。

～兵庫県　神戸市～

真昼の空の下で、子供達は楽しそうに遊んでいた。

少女「ごめんねソラちゃん、3時からお母さんと買い物に行かなきゃ！またね～！」

少女が手を振った後、家へと帰っていった。橙色の髪をした少女ソラちゃんこと、ミソラは手を振って少女と別れる。

ミソラ（当時小学4年生）「うん！またね！」

ミソラはマンションに帰ろうと振り向くと、ミソラの瞳に少年がポツリと1人でベンチに座っていた。

？？？「……。」

少年はただボンヤリしていた。その時、ミソラが隣に座ってくる。

ミソラ「こんにちわ！」

？？？「……。」

少年は返事をしない。するとミソラはバシンッと少年の背中を叩いた。

？？？「いだっ！？何するんだよ！？」

ミソラ「あら、喋れるじゃない？」

？？？「うるさい…。ほっといてくれよ…。」

少年はフンと鼻を鳴らし、ゆっくりと立ち上がって歩く。その時、ミソラが少年の腕を掴む。

ミソラ「ちょっと待ちなさいよ！」

少年は鬱陶しそうな顔で振り向く。

？？？「なんだよ…？」

ミソラ「そっちは家じゃないよ？自転車置き場だよ？」

少年は辺りを見渡すとたくさんの自転車が置いていた。少年は頬を赤らめながら逆方向へと歩く。

？？？「ほ、ほっといてくれよ…。」

ミソラ「もしかして、迷ったの？」

（ボソッ）

ミソラがボソッと言うと、少年はピタリと足を止める。

？？？「……。」

ミソラ「やっぱりー！」

？？？「べ、別に迷ってないよ！？」

ミソラ「それじゃ何で黙ってたの…？」

？？？「う…。」

少年は言い返せない。すると、ミソラはひょっこりと顔を覗き込ま

れる。

ミソラ「もしかして、遠くから来たの？」

ミソラが問う。しばらくしてから少年はゆっくりと頷いた。

？？？「……う、うん。」

ミソラ「ふーん。何処から来たの？」

？？？「と、東京…。」

その時、ミソラは声を張り上げて驚く。

ミソラ「スゴーーイ？」

？？？「そんなに驚かなくても…。うるさい…。」

ミソラ「東京はすっごく広いってお父さんが言ってたよ！そんな遠くから来たんだ～？」

？？？「う、うん…。」

ミソラ「ふ～ん。でも東京の人達って意外と方向音痴なんだね～？」

？？？「よ、余計なお世話だよ！」

すると、ミソラがゆっくりと手を差し伸べた。

？？？「？」

ミソラ「ここの事教えてあげるから一緒に行こ！」

ミソラはニコッと笑顔を見せると少年は頬を赤らめた。

ミソラ「そういえば名前なんて言うの？」

少年は頬を赤らめながら答える。

？？？「お、小関　リュウギ…。」

ミソラ「私は足立　ミソラ！ヨロシクねリュウギ♪」

リュウギ「う、うん…。」

リュウギは不安気な顔をしながらミソラに手を引っ張られていく。

この時二人はそんな運命のすれ違いを知る由も無かった。

ーーーーーーーーーーーーーー

ミソラ「……。」

（私ったら、どうしてあの時気付いてあげなかったんだろう…。）

ミソラは当時のリュウギの心の辛さに気付かなかった自分に少し後悔していた。

レナモン「ーーラ？ミソラ？」

ミソラはレナモンの言葉にハッと気付く。

レナモン「大丈夫か…？」

ミソラ「え？あ、うん。大丈夫だよ…。」

ミソラは笑顔を見せてレナモンを安心させる。

カズマ「んな事言ってるけど、顔に何か書いてありやすぜ？」

ネレイスモン「『悩んでますよー！』って書いてるよー！」

カズマはネレイスモンと一緒にミソラをからかう。するとその時、ミソラは拳でリンゴを握り潰した。

ミソラ「え？私がどうかしたって？もう一回言ってくれる？」

ミソラは不気味な笑みを浮かべながら拳をパキパキと鳴らすと、カズマとネレイスモンは冷や汗をかく。

カズマ「な、何でもないでさぁ…。なぁ？」

ネレイスモン「そうそう。オレ達の思い込みだから気にしないで～。あは、あははは。」

ミソラ「気のせいならそれでよろし！」

レナモン「ミ、ミソラ…。（汗）」

ババモン（というよりかそのリンゴ、いつの間に持ってたのじゃ…？）

心の中でツッコムババモン。すると、外が何やら騒がしい事に気付く。

ババモン「ん？やけに外が騒がしいのぅ…？」

ミソラ「私、見てくるわ！」

カズマ「あ、待ってくだせぇミソ姉！」

ミソラ達は外に出ると、森の奥でイカのようなデジモンが暴れていた。

？？？「キシャャャャャャャ？」

ミソラ「え！？イカ！？」

ネレイスモン「あのデジモンはゲソモンだよ！」

カズマはＤ－アクセルでゲソモンのデータを読み取る。

Ｄ－アクセル「ゲソモン、成熟期、軟体型、ウィルス種、必殺技はデッドリーシェード。」

レナモン「妙だ…。深海に潜むゲソモンがなぜここに…？」

その時、ネレイスモンが突然と叫ぶ。

ネレイスモン「見て、ゲソモンの脚に誰かいるよ！？」

一同「!?」

よくよく見ると、ゲソモンの脚に少女が囚われていた事に気がつく。

ミソラ「え!?女の子!?」

ー To Be Continued・・・

ＥＰ９８　～謎の敵現る！？見せろ修行の成果？～（後書き）

～キャラクター紹介　その１３～

名前：小関（おぜき）　龍儀（りゅうぎ）

性別：男

パートナーデジモン：ナルガモン

一人称：俺

趣味：寝る事、散歩

解説：リュウの死によって己の無力さを知り、シロウの元で修行をする事を決意した。それから厳しい修行から二年の時を経た彼は当時以上の強さを得た。シロウの元で修行したのか、正義感強い性格から少し緩やかな性格になるに連れて、口調も少しリュウに似てきた。しかし自分の流儀を貫き通す真っ直ぐな心は変わっていない。武器はリュウ（エグザ）の形見であるセイクリッド・レインティアを使いこなし、当時できなかったＥＸモードを発動させる事ができる。デジタルワールドを救うため、彼の新たなる戦いの幕が開かれる。

＞ｉ３５１１１―１２９８＜

【挿絵：トリプルミーミング】

ゲソモンに囚われた謎の少女！？

そして闇の空、ダンケルハイドの原因とは一体！？

次回もお楽しみに？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7431r/

†デジモン エクシード†～Novus Vinculum～

2011年11月18日04時59分発行